

提督の憂鬱

sognathus

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

見た目は全く人間と同じなのに兵器だという艦娘。

そんな彼女たちとの接し方に苦心する提督。

前途が明るくありますように。

*実際にプレイしてる筆者の艦隊をそのまま登場人物として反映してるので、保有してない艦娘は提督（主人公）の艦隊としては作中には出てきません。

*R-18描写のある話は「提督の憂鬱（裏）」に投稿しています。

*深海棲艦が普通に喋ります。

*同じ艦娘が同時に登場する場合は、混同しないように名前の一部を変えてキャラ分

けしてあります。

* 現在非常にゆつくりと過去の話を台本形式から半台本小説擬きに改装中……最近の話ほど地の文が増えています。

目次

設定（常時更新）

「世界観・設定」

登場人物紹介（筆者の艦隊）

第一章 「提督と艦娘」

第1話 「結婚しませんか？」

第2話 「執務室」

第3話 「友達」

第4話 「出撃」

第5話 「風邪」（挿絵あり）

第6話 「釣り」

第7話 「報酬」

第8話 「女子会」

第9話 「料理」

第10話 「改造」

第11話 「勲章」

第12話 「一緒」

第13話 「お出かけ」

第14話 「思案」

第15話 「結果」

第16話 「釣り2」

第17話 「お酒」

第18話 「秘密」

第19話 「褒美」

第20話 「発覚」

第21話 「会議」

125

120

113

107

101

93

88

81

7

1

183

179

174

170

165

159

155

151

147

143

139

135

130

第22話	「ご飯」	188	第34話	「特訓（前篇）」	248
第23話	「散歩」	192	第35話	「特訓 後編①筑摩の場合」	
第24話	「練習」	196	微R 15		252
第25話	「買い物」	200	第36話	「特訓 後編②ピスマルクの場合」	256
第26話	「夜戦」	205	軽R 15		
第27話	「フォロー」	212	第37話	「特訓 後編③金剛の場合」	
第28話	「晩酌」	216	R 15		268
第29話	「ラーメン」	222	第38話	「帰り道」	272
第30話	「演習」	227	第39話	「反省」	277
第31話	「資料」若干R 15		第40話	「名前」	281
231			第41話	「苦手」	286
第32話	「写真」	235	第42話	「予定」	292
第33話	「興味」	243	第43話	「開会式」	297

333	第50話	「水泳大会第三ゲーム②」	
330	第49話	「末井大会第三ゲーム①」	
	第48話	「昼休み」	325
317	第47話	「水泳大会第二ゲーム②」	
314	第46話	「水泳大会第二ゲーム①」	
308	第45話	「水泳大会第一ゲーム②」	
303	第44話	「水泳大会第一ゲーム①」	

	第51話	「確認」	340
	第52話	「水泳大会第四ゲーム①」	
345	第53話	「水泳大会第四ゲーム②」	
350	第54話	「インターバル①」	361
	第55話	「インターバル②」	368
	第56話	「水泳大会第五ゲーム①」	
374	第57話	「水泳大会第五ゲーム②」	
379	第58話	「僥倖」	388
	第59話	「水泳大会ラストゲーム」	R

	15		
第60話	「表彰式①」	400	479
第61話	「表彰式②」	408	第11話 「意外」
メインストーリーー(第二章)			
第1話	「自由時間①」	418	第12話 「ヌイグルミ」
第2話	「自由時間②」	425	第13話 「便り」
第3話	「自由時間③」	429	第14話 「居眠り」
第4話	「晩酌2」	438	第15話 「ストップ」
第5話	「異議」(挿絵あり)	445	第16話 「ゲーム」
第6話	「感情」	456	第17話 「子犬」
第7話	「ゆとり」	464	第18話 「海」R-15
第8話	「素直」	469	第19話 「トレーニング」
第9話	「黒白」	473	第20話 「デート」
			第21話 「すれ違い」
			550
			544
			540
			528
			522
			516
			508
			502
			496
			489
			484
			第10話 「好み」微R-15
			9

第22話	「我儘」	558
第23話	「元氣」	564
第24話	「おさんぽ」	569
第25話	「敵」	575
第26話	「お風呂」	582
第27話	「理由」	587
第28話	「保護」	594
第29話	「電話」	601
第30話	「おねだり」	606
第31話	「お菓子」	610
第32話	「お誘い」	615
第33話	「から騒ぎ」	622
第34話	「提案」	629

第35話	「歓迎会（前篇）」	634
第36話	「歓迎会（後編）」	640
第37話	「悪戯」R—15	648
第38話	「寝起き」	656
第39話	「トレード」	662
第40話	「要望」	668
第41話	「交流（提督サイド）」	674
第42話	「交流（艦娘サイド）」R—1	685
5（挿絵あり）		
第43話	「爽やか」	695
第44話	「容赦」	702
第45話	「避暑」R—15（挿絵あり）	

第55話	「春嵐」	782
第54話	「的中」	775
第53話	「彼女」	768
第52話	「トラウマ」	759
第51話	「爪切り」	751
第50話	「進言」	746
740		
第49話	「健康診断（後編）」	
734		
第48話	「健康診断（前篇）」	
第47話	「作戦会議」	727
第46話	「映画」	719
		708

第5話	「衝撃」	867
第4話	「到着」（挿絵あり）	857
第3話	「癒し」	851
第2話	「緊張」	845
第1話	「指令」	838
	メインストーリー（第三章）	
第61話	「三色」R—15	829
第60話	「小晚餐会」	821
813		
第59話	「好奇心」R—15	
第58話	「策士」	807
第57話	「枯渴」	801
第56話	「結実」R—15	790

第18話	「おつかい」	958
第17話	「娘たち」	952
第16話	「情浴」 R—15	947
第15話	「捕鯨」	940
第14話	「お誘い」	933
第13話	「夜伽」 R—15	927
第12話	「配膳」	919
第11話	「対峙」	910
第10話	「子守り」	902
第9話	「アイドル」	896
第8話	「ご機嫌」 R—15	889
第7話	「お祝い」	882
第6話	「作戦会議」	875

1039	第30話	「ご奉仕」 R—15	1031
	第29話	「メイド」	1025
	第28話	「帰投」	1017
	第27話	「説得」	1011
	第26話	「雑談」	1005
	第25話	「堂々」 R—15	1001
	第24話	「ゲーム2」	995
	第23話	「出立」	986
	第22話	「公認」 R—15	977
	第21話	「快男児」	970
	第20話	「勘違い」	964
	第19話	「予測外」	

第31話	「綱紀肅正」	1050
第32話	「査察」	1058
第33話	「仲直り」	1070
第34話	「心労」	1077
第35話	「完遂」	1082
第36話	「改造2」	1090
第37話	「贈り物」	1097
第38話	「予想外」R	1105
1102		
第39話	「鬱」	1108
第40話	「最怖」	1141
第41話	「偶然」	1201
第42話	「昼休み2」	1129

第43話	「対抗心」	1135
第44話	「動揺」	1141
第45話	「説教」	1148
第46話	「レトロゲーム」	1155
第47話	「蜜月」R	1163
第48話	「朝食」	1171
第49話	「不意」	1177
第50話	「湯上り」	1182
第51話	「釣り3」	1189
第52話	「前進」	1196
第53話	「不覚」	1204
第54話	「過癒」	1212
第55話	「記憶」	1218

第56話	「回復」	—
第57話	「昇進」	—
第58話	「練習」	—
第59話	「準備」	—
第60話	「出迎え」	—
第61話	「宴会」	—
メインストーリーー(第四章)		
第1話	「謎」 R—15	—
第2話	「挑戦」	—
第3話	「回避」	—
第4話	「サボテン」	—
第5話	「風邪2」	—
第6話	「自慢」	—

129712901283127712701262

125312471242123712311225

第7話	「結婚できますよ?」	—
第8話	「在庫」	—
第9話	「約束」 R—15	—
第10話	「酒(劇)場」	—
第11話	「自信」	—
第12話	「悪夢」	—
第13話	「お祭り」	—
第14話	「映画2」	—
第15話	「特徴」	—
第16話	「届け物」	—
第17話	「始まり」(前編)	—
第18話	「始まり」(中編)	—
第19話	「始まり」(後編)	—

1383137713701363135713521346133913321325131313071302

第20話	「終わり」(前編)	—	1390
第21話	「終わり」(中編)	—	1395
第22話	「終わり」(後編)	—	1404
第23話	「機微」	—	1416
第24話	「マッサージ」R	—15	1465
1424			
第25話	「訪問」	—	1434
第26話	「ゲーム3」	—	1444
第27話	「悪夢2」	—	1450
第28話	「新開発」	—	1459
第29話	「喫煙」	—	1465
第30話	「訓練」	—	1471
第31話	「外出」	—	1479

第32話	「尻取り」	—	1487
第33話	「勉強」	—	1492
第34話	「二色」R	—15	1497
第35話	「オジサン」	—	1503
第36話	「引き取り」	—	1509
第37話	「お願い」	—	1515
第38話	「入浴」R	—15	1522
第39話	「ピンチ」	—	1530
第40話	「エアコン」	—	1538
第41話	「おいかけっこ」(前篇)	—	1543
1547			
第42話	「おいかけっこ」(中編)	—	1547

1613	第53話	「早起き」R—15	
	第52話	「駆け引き」	1607
	第51話	「奮闘」	1601
	第50話	「休養」	1596
	第49話	「見舞い」	1589
	第48話	「トレーニング2」	1582
	第47話	「守秘」	1576
	第46話	「意外2」	1570
	第45話	「髪型」	1564
	第44話	「音楽」	1560
1553	第43話	「おいかけっこ」(後編)	

	第54話	「日常」	
	第55話	「問題」	
	第56話	「経歴」	
	第57話	「決意」	
	第58話	「お話」	
	第59話	「気遣い」	
	第59話	「お仕置き」	
	第60話	「侵入」	
	第61話	「起床」	
	メインストーリー(第五章)		
	第1話	「誓約」	
	第2話	「作戦」	
	第3話	「開始」	
1687			1667
1681			1660
1673			1654
			1649
			1645
			1637
			1632
			1626
			1618

第4話	「横殴り」	—
第5話	「小休止」	—
第6話	「狂喜」	—
第7話	「成功」	—
第8話	「大量」	—
第9話	「食べ物」	—
第10話	「交流①」	—
第11話	「捕獲」	—
第12話	「交流②」	—
第13話	「交流③」	—
第14話	「交流④」	—
第15話	「暇」	—
第16話	「悩み」	—

1786177717671760175217451737173017241715171017021694

第17話	「天獄」	—	18051795
第18話	「人違い」	—	—
第19話	「贈り物2」	R	15
1813	第20話	「対抗心」	—
第21話	「料理2」	—	—
第22話	「大子供」	—	—
第23話	「性的要求」	R	15
1851	第24話	「お疲れ様」	—
第25話	「酒宴」	—	—
第26話	「旧交」	—	—
第27話	「独占欲」	—	—
1892188218741866			
184218301819			

第28話	「確執」	1903
第29話	「ゲーム4」	1914
第30話	「婚約」R—15	1923
第31話	「張り合い」	1929
第32話	「勇気」	1941
第33話	「内緒」	1951
第34話	「偶然2」(挿絵あり)	
1962		
第35話	「不機嫌」	1969
第36話	「妬きもち」	1977
第37話	「駄々っ子」	1989
第38話	「ネコ女」	1995
第39話	「差し入れ」	2003

第40話	「実力」	2010
第41話	「アクシデント」	2021
第42話	「悩み事」	2030
第43話	「迂闊」	2037
第44話	「提案2」	2045
第45話	「改造3」	2058
第46話	「災難」	2069
第47話	「頼り」	2085
第48話	「自尊心」	2093
第49話	「甲斐」	2100
第50話	「ようこそ」	2108
第51話	「交流⑤」	2114
第52話	「交流⑥」	2122

第53話	「交流⑦」	—	2132
第54話	「おねだり」	R—15	
2141			
第55話	「悪夢3」	—	2149
第56話	「可能性」	—	2158
第57話	「協定」	—	2167
第58話	「強化」	—	2175
第59話	「大人」	—	2182
第60話	「対面」	—	2190
第61話	「指名」	—	2203
第六章	「提督の帰郷」		
第1話	「失念」	—	2220
第2話	「注意」	—	2229
第3話	「自己責任」	—	2235
第4話	「緊急事態」	—	2241
第5話	「一時撤退」	—	2252
第6話	「謝罪」	—	2259
第7話	「真・災難」	—	2267
第8話	「理解」	—	2275
第9話	「続・災難」	—	2282
第10話	「選択」	—	2289
第11話	「寝起き」	—	2296
第12話	「クリスマス①」	—	2304
第13話	「クリスマス②」	—	2312
第×1話	「ワンコ」	—	2320
第×2話	「心待ち」(R—15)	—	2323

第×14話	「無用」	—
第×13話	「疲労」	—
第×12話	「ごめんなさい」	—
第×11話	「応援」	—
第×10話	「由来」	—
第×9話	「痴話喧嘩」	—
第×8話	「切望」	—
第×7話	「予想外2」	—
第×6話	「刺激」 R	— 15
第×5話	「感謝」	—
第×4話	「要求」	—
第×3話	「改めて」	—

243324232415240823972389238323762366235723472336

第×25話	「憂慮」 R	— 15
第×24話	「バレンタイン」	—
第×23話	「大物」	—
第×22話	「強がり」	—
第×21話	「嫉妬」	—
2483		
第×20話	「酔っ払い」 R	— 15
第×19話	「差別化」	—
第×18話	「尻取り2」	—
2454		
第×17話	「散歩2」 R	— 15
第×16話	「望み」	—
第×15話	「運」	—

2521251225052497

24762464

24462439

第×26話	「本気」	262540
第×27話	「お酒2」	262546
第×28話	「自己」	262556
第×29話	「カレー①」	262566
第×30話	「カレー②」	262576
第×31話	「断念」	262588
第×31話	「新人教師」	262598
第×32話	「雰囲気」	261025
第×33話	「18禁」	261726
第×34話	「妹」	262626
第×35話	「発見」	263226
第×36話	「発見2（大佐のとこの武）」	263226

第×37話	「故障」	266512
第×38話	「脅威」	266512
第×39話	「対峙2」	266512
第×40話	「張り合い」R	266515
第×41話	「自慢2」	26688
第×42話	「ゲーム5」	269526
第×43話	「予想」	270526
第×44話	「嫉妬2」	271627
第×45話	「エイプリルフール」	270526
第×46話	「不安」	2734

蔵の場合)

第×47話 「淫酒」 R—15

2745 第×48話 「姫遊び」 R—15

2754 第×49話 「ハグ」

第×50話 「衣装」

第×51話 「温度差」

第×52話 「役割」

メインストーリー (第七章)

第1話 「命名」

第2話 「花見」

第3話 「不一致」

第4話 「感激」

2835282828182801

2795278827802772

第5話 「イニシアティブ」 R—15

2842 第6話 「我が、ママ」

第7話 「くま」

第8話 「邂逅」

第9話 「余裕」

第10話 「トイレ」 R—15

2885 第11話 「欲求」 R—15

2896 第12話 「来訪」

第13話 「不安②」

第14話 「過去」

292329152904

2878287128622854

第15話	「頓挫」
第16話	「演技」
第17話	「駆逐艦一番」
第18話	「我が意」
第19話	「インターバル」
転勤	
転勤騒動①	
姉の想い	
閑話	
待っていた夕立	
構って	
作戦終了	
転勤騒動②	

3007300129952989298429792974297129682964295829482932

五月雨の思わぬ幸運
 ガングートとクリスマス
 正直な気持ち

302930203012

設定（常時更新）

「世界観・設定」

○艦娘の設定

艦娘には『オリジナル（素体）』と『コピー（量産型）』が存在する。

オリジナルは艦娘にする対象となる軍艦に縁のある物品を用意する。

その際は艦の残骸、乗艦していた乗組員の所持品等、艦に縁のある物なら何でも良い。用意が出来たらそれを触媒として日本に古来から存在する特殊機関『八咫鳥』の秘術によって「創造」されて、はい完成。

オリジナルは量産型と比べて性能が優る。

また、オリジナルは全ての量産型の元となっている為、オリジナルが轟沈するなどして消滅すると、その時点でオリジナルを元にした量産型はそれ以上建造できなくなる。

だが、オリジナルが消滅してもそれ以上造れなくなるだけで、既造の量産型はそのまま残る。

消滅したオリジナルは再度創造は可能だが、記憶と練度は初期状態に戻る。

海軍本部の所属艦は全てオリジナルで構成されている。

量産型は海軍本部が所有する「建造機」を使い、実際に軍艦の建造に必要な主な資材（鋼材・ボーキ）を投入する事によって造られる。

弾薬と燃料は艦娘の完成後に補充される。

艦娘が配備され始めた初期は実物の資材を使用するので建造機は非常に巨大だったが、資材の代わりに開発した特殊エネルギー源『ナノ資材』の導入により建造機は小型化、資材の運用に掛かっていたコストの問題も解消された。

艦娘の建造は完全に安定しておらず、建造を申請した提督が送った資材の量によって希望の艦娘ができる可能性が上がる。

造られた艦娘は輸送船によって建造を希望した提督がいる各拠点に運ばれる。

量産型は資材さえ投入すれば容易に建造できる分、その性能はオリジナルより全体的に劣る。

○艦娘の仕様

人型、原形の二つの姿を片方、または同時に自分の意思で取る事ができる。

同時に二つの姿を取っている場合は片方が傷つけば、もう片方もダメージを負い、轟沈すれば当然もう片方も消滅する。

弾薬と燃料の補給はあくまで戦闘能力を維持する為に必要な行為でしかなく、別に補

給をしなくても艦娘は死なない。

生命の維持に必要なのは人間と同じで食事と睡眠。

補給についてはナノ資材が開発される前までは艦娘が直接資材に触れて消滅させる事で吸収していた。

修復に使う資材も同様だが、吸収した後に入居が必要。

ナノ資材開発後は、錠剤状のそれを薬と同じように飲み込むだけで補給や資材の吸収は可能になった。

入渠は艦娘の傷を癒すために開発された特別な溶液を混ぜた湯に浸かる事によってこれを行う事ができる。

例えば生きていても大破などによって激しい損傷を受けた時は、入渠する前に人間と同じようにで先ず応急処置による生命維持が必要。

・遠征

単純に海軍本部のお遣い。

各軍施設から配下の艦娘を派遣し、本部の様々な依頼（バイト）をこなす。

・解体

艦娘を生まれる前の力の根源に戻す作業。

解体という言葉は聞こえは良くないが、艦娘にとっては元の場所（存在）に還るだけ

といった感覚が強く、解体自体に恐怖や拒否感を覚える艦娘はあまりいない。

解体は専用の装置を使って行われ、解体を受けた艦娘はフェードアウトするようにゆっくりと消えていく。

ただ、流石に長年海軍、特定の提督に仕えた艦娘となると、人間と比べて遜色がない程自我を確立している場合が殆どなので、解体に対しては悪い印象持ったり、または嫌がる。

○海軍以外の擬人化兵器について

・陸軍

戦車を筆頭に幾つか存在する。

・空軍

詳細不明。

○軍組織について

過去の大戦を条件付による降伏によって終結。

既存の軍組織と政治組織、及び指導者クラスの幹部は全員即刻罷免された。

その上で戦争責任を問う軍事裁判は、米国と日本からそれぞれ弁護士と検事を用意さ

せて見解の調整をし、公平な判決に努めた。

その為裁判はかなり長期的なものになり戦後半世紀以上経ってもまだ全てが終わっていない。

・国防省

陸軍省・海軍省に代わる軍政統括政府機関。

代表は国防大臣。

・統帥部

名前の通り大本営に代わる軍の最高統帥機関。

代表は総統。

・日本皇国海軍本部

海軍司令部に代わる中央統括軍令機関。

代表は海軍総帥。

・海軍の階級

基本的には諸外国の軍隊の階級と一緒だが、海軍本部の5つの司令部、それぞれを統括する司令官においては、彼らの為だけに特別に設けられた階級が存在する。

『元帥』総大将、『元帥』大将、名誉中将、上級中将、上級少将。

これら5つの階級は総司令官である総帥は勿論、上級少将から『元帥』大将までの全
てが、他の既存の大将または元帥以上の権限を持つ。

・ 日本皇国陸軍本部

陸軍司令部に代わる中央統括軍令機関。

代表は陸軍総帥。

・ 日本皇国空軍本部

大戦以降に発足した新機関。

代表は空軍総帥。

登場人物紹介（筆者の艦隊）

○海軍

・提督

艦隊司令部レベル1-7

作中では一貫して「大佐」と階級で呼ばれる。

真面目で、当初はリアクションが乏しかったが、最近マシになった。

怒りはすれど、作中でまだ怒鳴った事がない。

硬派だが、油断をして一夫多妻の可能性を肯定してまう。

准将に昇進したが、大佐の時代が長かったため、昇進後も皆からは親しみを込めて大

佐と呼ばれている。

非童貞。

・総帥

オリジナルの人物。

海軍の事実上の最高責任者。

階級は海軍元帥総大将。

海軍本部 “五つの壁” の最後の壁である海軍本部の総司令官。

作中ではまだその存在に軽く触れられる程度のみで姿やセリフは未登場。

中老達の話によるとかなり若いらしい。

・元帥

オリジナルの登場人物。

海軍本部の “三老” の一角、通称 “元老”

階級は元帥海軍大将。

海軍本部 “五つの壁” の一つである第1司令部の司令官。

中将とは昔からの親友であり同僚。

とても温和な性格で誰に対しても礼儀正しい口調で話す。

・紀伊

元帥専属の艦娘。

駿河と近江の姉。

とても礼儀正しく、冷静な性格。

・大将

オリジナルの登場人物。

海軍本部の“三老”の一角、通称“大老”階級は上級大将。

海軍本部“五つの壁”の一つである第2司令部の司令官。

中将とは昔からの知り合いであり、親友同士。

職務には非常に忠実でかつ苛烈と思われる程厳しい性格の為、部下や他の艦娘からは“鬼”と恐れられている。

だが、職務以外の場では至って普通で、部下に対しても柔和な態度で接する。

・駿河

大将専属の戦艦。

超強いらしい。

・近江

大将専属の戦艦。

マジで強いらしい。

・中将

オリジナルの登場人物。

海軍本部“三老”の一角、通称“中老”

階級は名誉中将。

士官学校の校長、総司令の補佐も務める。

提督の元上司で新米の頃の彼を鍛えあげた人。

提督からは「親父殿」と慕われている。

数少ない「最初の戦争」の頃からの軍人。

今の地位に満足しており、昇進を断り続けてもう20年くらい中将をしている。

・大和

オリジナルに近い性格。

中将の専属の秘書艦。

建造機を使わずに直接、特殊機関『八咫鳥』にの秘術によって創造された全ての『大和』のオリジナル。

改大和型からさらに独自の強化を受けており、その実力は未だに作中では明らかにされていらないが、それを知る数少ない者からは『反則としか言えない』とされている。

中将の事が好きだが、いつも中将に軽くないなされている為、目の前でイチヤイチャする武蔵達が羨ましくて仕方がない。

・中将

オリジナルの登場人物。

階級は上級中将。

海軍本部「五つの壁」の一つである第3司令部の司令官。

見た目や仕草はただのオジサンだけど、結構なやり手らしい。

・信濃

中将専属の艦娘。

部下とは思えない程上司 or 同僚然としてる。

何事もテキパキとこなすしっかりした性格。

・朝日

旧式の艦娘で、封印されずにずっと本部の基地の掃除をしていた。

大将の指示で中将の部下となり、事務を手伝っている。

・彼女

オリジナルの登場人物。

階級は上級少将。

海軍本部「五つの壁」の第4司令部の司令官。

提督の元彼女で、士官学校時代に付き合っていた。

今はどうか定かではないが、家事以外は非常に優秀な人物。

大佐の鎮守府に査察に訪れた際、いろいろあつてめでたく復縁した。

・武蔵（無蔵）

オリジナルと比べて大分性格が子供っぽい。

オリジナルの武蔵。

彼女の恋人。

レズではなかったが彼女に一目惚れし、以降は彼女に首っただけ。

彼女の前では超甘えん坊。

・丁督

オリジナルの登場人物。

階級は特務中佐。

主人公の提督と彼女とは士官学校時代の同期であり、親友同士。

誰にも物怖じしない豪放磊落な性格だが、理性的な判断も十分にできる。

最前線の泊地に努めているらしく、その麾下の艦隊は少数精鋭の名に相応しく、レ級達すら小破のみの被害で追いつき返すほど強力。

・長門

丁督の相棒でもあり「女」の一人。

彼に影響されてか、結構好戦的な性格。

「少数精鋭」の中核メンバーでその実力は折り紙付き。

既に一般的に認知されている『ケツコン後』の艦娘の限界レベルを突破しており、値に換算するとはその数値は250相当。

・T督

オリジナルの登場人物。

別の鎮守府の提督。

階級は少将。

主人公の大佐より若い、軍人として自覚と責任感はしっかり持っている。

恋人は叢雲。

超熱々で彼女に対しては非常に甘い。

・叢雲

T督の恋人。

ケツコンカッコカキはもうしてるおり、レベルはとつくとつくと最高値。

T督のことを心から愛しており、お互い相思相愛の仲。

愛情が常に爆発しているため機会があれば常にイチャイチャしているか、それ以上の事をしてもらいたい。

・彼女2

提督の士官学校時代の陸軍の女友達。

提督に想いを寄せ、軍を辞める時にとある方法で彼にその想いを伝えた。

(*「第五部第27話」参照)

さばさばして面倒見が良い性格で努力家。

旧家の生まれで公私ともに環境に恵まれていたが、それが自分をダメにすると断じ、自ら幹部の座を約束されていた出世コースを辞する。

そして、敢えて前線の指揮官になる事を望むほどの自分の成長に対する高い向上心を持つ。

20代前半で周りから認められる指揮官になるほどの才能を見せるが、程なく軍を辞めて故郷の地で暮らしていた。

しかしその後、提督を追いかける形で何と今度は海軍に入隊した。

・元帥

提督が所属する海域の責任者。

見た目はかなり若く、20代前半より上には見えない。

プレイボーイ然としており挙動や発言に軽薄なところが見られるが、根は真面目で軍人としてもかなり優秀らしい。

若く見えるのは恐らく毎晩のように部下の艦娘とよろしくやっているから……？

●提督（主人公）の艦隊

○戦艦枠

・金剛（改二）

レベル160

提督の艦隊の中で最高レベルの存在。

オリジナルに近い性格。

家事は紅茶を淹れる事できる以外は基本的にダメで、更に時折おバカなところも見せる天然。

・比叡（改二）

レベル129

金剛の妹。

オリジナル通りシスコンだけど素直な性格。

家事は普通にでき、服装や流行などにも敏感。

四姉妹の中で女子力が一番高いのは実は彼女だったりする。

・霧島（改二）

レベル116

金剛と比叡の妹。

オリジナルに近い性格。

見た目通り、頭がよくテキパキとした性格。

でも何かの催し物などでは自ら司会を務めたりするなど、目立ちたがり屋でノリが良
いところもある。

・榛名（改二）

レベル122

金剛と比叡の妹。

霧島とは双子の姉妹。

オリジナルより若干思い込みと独占欲が強い性格。

でも基本的には真面目で優等生で頑張り屋で努力家な聖女。

・ビスマルク

レベル127 (d r e i)

通称「マルク」「マルさん」「マリア」（*第40話「名前」参照）

こちらはオリジナルに比べかなり子供っぽい。

負けず嫌いで勤勉な性格。

登場人物の中で一番呼び名が多かったが、今は「マリア」に落ち着いてる。

元カナヅチ。

・イタリア（改）

レベル121

ビスマルクに次ぐ海外戦艦として提督の基地に来た娘。

通称「ローザ」（*第七章 第1話「命名」参照）

温厚で優しく妹想いの性格で、少し食いしん坊。

・ローマ（改）

レベル118

イタリアの妹。

姉と一緒に新しく海外戦艦として提督の基地の仲間に迎えられる。

通称「リウイア」（*第七章 第1話「命名」参照）

姉と違ってかなりプライドが高く、口調が刺々しいのが特徴。

しかしとておも妹想いで、かつ怒るとかなり口調が乱暴（素？）になる。

怒れるとシユンとしたり、割と子供っぽいところもある。

・アイオワ

レベル134

近々本編に登場予定。

・ウオースパイト

レベル115

・ネルソン

レベル115

・リシユリユー

レベル114

・ガンクード

レベル114

・伊勢(改二)

レベル121

オリジナルに近い性格。

少しやんちゃで子供っぽいところがある。

お酒が少し苦手。

・日向（改二）

レベル119

戦艦組の組長。

オリジナル通り真面目でクール。

作中貴重な良識人。

提督に甘える時だけは子供っぽい面を魅せる時がある。

・長門（改二）

レベル139

オリジナルよりかなりブツとんだ性格。

何時いかなる時も爽やかで頼りになるお姉さん。

可愛い物が好き。

・陸奥（改二）

レベル126

オリジナルに近い性格。

優しいお姉さん。

そのむっちりボディは数多の提督を魅了している、はず。

・扶桑（改二）

レベル128

オリジナルより少し子供っぽい性格。

ダイナマイトボデー。

・山城(改二)

レベル121

オリジナルに近い性格だけど、提督に対しても大分態度は柔らかい。

お姉様大好き。

・大和(改)

レベル142

原作よりちょっと子供っぽい性格。

武蔵より後に基地に着た所為かあまり出番がなかったが、様々な作戦で活躍する様になつてレベルが金剛、武蔵に次ぐ第3位になった。

・武蔵(改二)

レベル154

オリジナルに近い性格だが、中身は結構乙女、そして提督に対してはワンコ。

生まれて間もない頃に怖い体験をして、そこを提督に慰められたりしたので今はすつ

かり提督にゾッコン。

レベルは艦隊中2位だが戦闘力に関しては文句なしのトップ。

○空母枠

・加賀（改）

レベル135

空母レベルトップ。

性格はオリジナルよりアクティブ。

言うまでもなく優秀な人。

拗ねると提督を階級を下げて呼ぶ。

・赤城（改）

レベル125

加賀が来るまでは主力空母だった。

オリジナルより二次創作の性格に近いけど、もう少し常識がある感じ。

・飛龍（改二）

レベル123

オリジナルに近い性格。

改二になってからは、実力、恋愛ともに自信がついた模様。

蒼龍よりちよつと積極性では負ける為、それを何とかしたいと思っている。

・蒼龍（改二）

レベル118

オリジナルに近い性格。

ちよつと悪戯好き。

姉より積極的で、提督には自分から距離を詰めてどんどんアピールしようと思っている。

・雲龍（改）

レベル113

オリジナルに近い性格。

空母の中で一番のダイナマイトボディを誇る。

大人しくて落ち着いた性格だが、提督が絡むと時に子供の様な嫉妬を見せる事も。

・天城（改）

レベル109

雲龍の妹。

・葛城（改）

レベル109

オリジナルに近い性格。

雲龍と天城の妹。

当時、実戦に出る事もなく、まともな艦載機を積んだことがない所為か、実戦で使える艦載機に対する執着がやや強い。

配備してもらえると子供の用に喜び、実際、提督に着任早々「余裕があるから」という理由で烈風や流星改の使用を許可されてかなり喜ぶ。

結構単純な性格なようで、この一件だけで提督の事をかなり気に入り、好意も持つようになる。

・大鳳（改）

レベル119

オリジナルに近い性格。

艦隊でも貴重な装甲空母の一人。

真面目でしっかり者。

最近同じ装甲空母の仲間が増えて嬉しいらしい。

・翔鶴甲（改二甲）

レベル126

オリジナルに近い性格。

優しいお姉さん。

実は妹が先に自分より提督と親しくなるのではと密かに焦っている。

様々な経緯を経て装甲空母へと生まれ変わった。

・瑞鶴（改二甲）

レベル129

オリジナルに近い性格。

勝ち気で少しおてんばだが、根は素直な良い子。

姉がなかなか提督にアピールしないので、自分から接近している内に自分も好意を持つようになった。

最近姉と一緒に装甲空母に生まれ変わった。

・アークロイヤル（改）

レベル117

・サラトガ（MK・II）

レベル118

・インテルピット（改）

レベル121

・アクイラ

レベル100

・グラーフ・ツエツペリン（改）

レベル100

・鳳翔（改）

レベル75

オリジナルに近い性格

皆のお母さんの存在。

だが実は本人はそう表だって言われる事に対して、女性として気にしている。提督の事は心から慕っており、恋愛では人に負けたくないと思っっている。

・龍驤（改二）

レベル84

オリジナルに近い性格。

無い子。

最近は何かを諦めたらしく、新境地を目指す模様。

ノリが良く、明るく、落ち込んでも立ち直りが早い元気の塊のような女の子。でも提督に対しては結構乙女な心を持っていたりする。

・瑞鳳（改二乙）

レベル 97

オリジナルに近い性格。

小さくて可愛い。

やる気は誰にも負けない頑張り屋。

・飛鷹（改）

レベル 75

オリジナルに近い性格。

麗人といった雰囲気纏う軽空母。

真面目で提督に一途。

ただどあまり関わる事がない所為で提督との距離が縮まっていない事を気にしている。

・隼鷹（改二）

レベル 100

オリジナルに近い性格。

軽空母の中では一番明るい性格をしている。

ちやらんぼらんなように意外にしっかりしている。

が、ハメを外した時のインパクトが強過ぎて残念ながらその事を理化している人は少ない。

やっぱりお酒が好き。

・千歳（航改二）

レベル75

オリジナルに近い性格。

優しいお姉さんだが、結構天然ボケをかますらしい。

軽空母としてはかなり良性能のはずだが何故か出番に恵まれず、最近専ら喫茶店や厨房の手伝いをしている。

・千代田（航改二）

レベル78

オリジナルに近い性格。

この妹にしてあの姉あり、と言える程しっかりしている。

千歳と同じ理由により姉と一緒に喫茶店や厨房の手伝いをしている。

姉よりは今の仕事を楽しんでいる模様。

・龍鳳（改）

レベル75

オリジナルよりかなり子供っぽい。

大鯨が軽空母として生まれ変わった姿。

提督大好きっ子。

とある理由により提督を「お父さん」と呼ぶ。

・千歳（甲）

レベル96

水上機母艦としてのもう一人の千歳。

ある遠征の任務上必要なため水上機母艦のまま。

他の軽空母程強力ではないが、多様な攻撃能力を持つ。

軽空母と間違えられない様に髪型を変えている。

遠征で常に活躍している影響で水上機母艦としてはかなりレベルが高く、彼女と一緒によく遠征に出る駆逐艦たちからはとても慕われている。

・千代田（甲）

レベル97

水上機母艦としてのもう一人の千代田。

ある遠征の任務上必要なため水上機母艦のまま。

他の軽空母程強力ではないが、多様な攻撃能力を持つ。

大体姉と同じ境遇。

でもこっちの妹は水上機母艦のままであることをちよつと気にしているらしい。

・大鷹（改二）

レベル100

・神鷹（改二）

レベル87

・ガンビア・ベイ

レベル75

・鈴谷（航改二）

レベル100

軽空母へと生まれ変わり、自信に相応しい実力を持つ。

オリジナルに比べ結構肝が据わった女子高生。

自称足柄の舎妹第一号らしい。

ギャルっぽいのが、女性らしい面もあるらしい。

しかしそれを見せるのは提督にだけだとか。

・熊野（改）

レベル100

鈴谷と同じく軽空母へと生まれ変わった。

オリジナルに近い性格。

性格が似てる為か三隈とは仲良し。

三隈に次いで天然な性格をしている。

鈴谷に胸の大ききで負けている事を密かに気にしている。

秋津洲（改）

レベル98

千歳姉妹以来初となる完全な水上機母艦として提督の基地に来た艦娘。

優秀な偵察機である二式大偵を装備できる唯一の水上機空母だが、それ以外の装備にやや不便があり、それを内心とてもきにしている。

今は提督によって砲撃艦としての役割を主に与えられ、喜んで出撃している。

・瑞穂（改）

レベル82

・日進（甲）

レベル75

・コマンダン・テスト

レベル78

・神威（改）

レベル66

・神威（給）

レベル75

・速吸（改）

レベル75

○重巡梓

・妙高（改二）

レベル98

オリジナルに近い性格。

妙高型の長女。

凡そ不得意な事は無いのではないかと
言う程手先が器用で、
礼儀正しく頭脳も明晰と
完璧。

でも怒ると超怖い。

・那智（改二）

レベル93

オリジナルより少し砕けた性格。

妙高の妹。

真面目で頼りになる教官みたいな人。

実は可愛い物が好き。

改二になって姉としての自信が増した模様。

・足柄（改二）

レベル142

重巡レベルトップ。

こちらはオリジナルにくらべ結構大人。

姉御肌の妙高型三女。

年下（見た目）に人気がある。

提督と早くケツコンしたいらしい。

「わかってるじゃない」が口癖

・羽黒（改二）

レベル95

オリジナルに近い性格。

妙高型の末妹。

弱気で直ぐ泣いてしまうけど、いざという時の度胸はある。

こと恋愛においては対抗心も割と強い。

・古鷹（改二）

レベル76

オリジナルに近い性格。

真面目で良い子だが妙に影が薄い。

改二になって少し存在感がマシになった模様。

・加古（改二）

レベル75

オリジナルに近い性格。

古鷹の妹。

影が薄い姉に対してこちらは性格のお蔭で、少なくとも古鷹よりは目立っている。

やんちゃで頑張り屋だが、夜更かしが苦手という子供っぽいところがある。

寝ている時が一番幸せらしい。

・青葉（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

お祭りのような賑やかなイベントが大好き。

自分が興味のある事に対しては積極的に行動するが、逆にそれ以外に関してはおろそかにしがちで、その所為でよく失敗をする。

実は怖い物が苦手。

・衣笠（改二）

レベル75

オリジナルに近い性格。

青葉の妹。

一番初めに重巡の中で改二になったはずなのになんか影が薄い。

姉よりよっぽど常識人なのにキャラの濃さに負けて不遇な扱いを受けていると思っ
ているらしい。

不遇と言うのは勿論提督とあまり関わる機会がないという事。

・高雄（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

真面目で妹想い。

妹の影響でゲームを趣味に持つ。

いろいろなゲームをやる妹に対して、過激な内容のゲームが苦手と言う可愛らしいところがある。

・愛宕（改）

レベル75

ゲームが大好きで、新旧問わずかなり深い関連の知識を持つ。

ゲームをする時は何故かメガネを掛ける。

提督をゲームに誘うのは勿論趣味もあるが、一番はやはり提督の事が好きだから。

・摩耶（改二）

レベル98

オリジナルに近い性格。

天龍、木曾に並ぶ男勝りな性格。

だが、とある物を収集する趣味を持っており、それを自身の最大の秘密としている。

それは妹の鳥海にも秘密で、その事を知っているのはとある件（*第四部第16話「届け物」参照）でそれを知った提督のみ。

以後その趣味の為にいろいろと密かに協力してもらっているらしい。

・鳥海（改二）

レベル79

オリジナルに近い性格。

真面目でしつかり者。

結構規則に厳しい。

高雄型の末妹。

・プリンツ・オイゲン（改）

レベル77

重巡初の海外艦。

通称「フランソワ」「フラン」（*第五章 第53話「交流⑦」参照）

オリジナルに近い性格。

とても人懐っこく子供っぽい。

ビスマルクの事が大好きで姉と慕っている。

・ザラ（改二）

レベル92

・ポーラ

レベル75

初めてのイタリアの重巡。

近々登場予定。

・利根（改二）

レベル120

オリジナルより若干子供っぽい性格、だと思ふ。

妹想いな筑摩の姉。

天然で場の空気を読めない。

少し抜けているところもあるが、その実力は確か。

・筑摩（改二）

レベル113

オリジナルに近い性格。

真面目でおしとやかで姉想い。

筑摩よりグラマラスなボディが密かな自慢。

・最上（改）

レベル96

オリジナルに近い性格。
僕っ娘。

時雨に次ぐ読めない性格をしている。

が、腕は確かで出撃した任務では常に成果を挙げて帰ってくる。

読書が趣味で、三隈との相部屋には彼女の本がそこらじゅうに置いてある。

・三隈（改）

レベル 93

オリジナルに近い性格。

お嬢様な仕草お嬢様な口調。

似た性格である熊野とは仲良し。

少々常識が欠けており、間違った知識を与えられるとそれを信じてしまう天然ともいえる素直さを持つ。

○軽巡梓

・球磨（改）

レベル 87

オリジナルに近い性格。

多摩の姉。

やんちゃで負けず嫌いだが、妹の多摩と比べて若干素直じゃない。

その性格がたたって、よく任務では多摩と一緒に傷だらけで帰ってくる。

そしてその度に提督に怒られている。

・多摩（改二）

レベル93

オリジナルに近い性格。

球磨の妹。

正確は球磨に近いが、彼女より人懐っこく甘えん坊などところがある。

出撃してはよく球磨と一緒に傷だらけで帰ってくるが、本人は提督に怒られたくない

ので自分なりに姉を宥めたりしている。

が、結局はいつも押し切られ、開き直って一緒に暴れている。

・川内（改二）

レベル96

大体オリジナルに近い、と思う。

夜戦も好きだけど夜の散歩も好き。

超常現象は苦手。

妹の神通の方が姉っぽいのを気にしている。

・神通（改二）

レベル 86

オリジナルに近く控えめで大人しく優しい性格。

川内型三姉妹の次女。

芯はしっかりとしており、やる時は普段の態度からは想像ができない程凛々しい姿を見せる。

・那珂（改二）

レベル 80

オリジナルに近い性格だが、最近アイドルを自称するのに飽きた模様。

ノリが良いムードメーカーだが、自分の世界を作り過ぎて一人暴走する事が偶にある。

・阿賀野（改）

レベル 82

オリジナルより更に更に子供っぽい性格。

阿賀野型四姉妹の長女。

日本で提督に拾われたらしい。

その所為か提督にはぞっこん。

非常に官能的な体つきをしている。

・能代（改）

レベル 83

オリジナルに近い性格。

阿賀野型四姉妹の次女で矢矧の姉。

性格は姉よりかはしっかりとっているが、妹の矢矧と比べると少し丸いといったところ。

バランスの取れた性格で、誰とでも器用に接し、仲良くなる。

・矢矧（改）

レベル 85

軽巡組の組長。

オリジナルに近い性格。

阿賀野型四姉妹の三女。

すこぶる真面目なクールビューティ。

阿賀野には負けるが、能代より豊満な身体をしている。

酒匂（改）

レベル 77

・天龍（改二）

レベル 84

オリジナルに近い性格。

割とノリがよく、龍田との漫才（本人にその気はないが）ではツツコミ担当。提督の事は大好きで、彼の前では大体素直。

・龍田（改二）

レベル 80

オリジナルに近い性格。

おっとりマイペースかと思いきや、実は言葉の裏ではかなりの思考を働かせている策略家。

それでいて時には相手を圧倒する威圧感も放つなど、ある意味万能な性格。こちらも提督に対する好意は隠さなくらい彼の事が好き。

・長良（改）

レベル 87

オリジナルに近い性格。

長良型の長女。

元気で活発で運動が大好き。

面倒見も良く、駆逐艦には彼女を慕う者も多い。

・五十鈴（改二）

レベル 88

オリジナルに近い性格。

長良型姉妹の次女。

長良より抜け目がなく、しっかりしている。

あまり出番がない事を気にしているが、やはり改造で一変した凄まじい魅力を放つ身

体は自慢らしい。

・名取（改）

レベル 87

オリジナルに近い性格。

長良型姉妹の三女。

少し泣き虫で引つ込み思案だが、基本的に真面目で良い子。

提督の事は大好き。

・由良（改二）

レベル92

オリジナルに近い性格。

長良型姉妹の四女。

気弱な性格の名取をよくフォローしている。

そしてあまり出番がない事をきにしている。

・ 鬼怒（改二）

レベル81

オリジナルに近い性格。

由良の妹で阿武隈の姉。

やや負けず嫌いな性格だが、基本真面目で大人しい。

あまり出番がない事を気にしている。

・ 阿武隈（改二）

レベル125

オリジナルに近い性格。

長良型の末妹。

少々自己主張が強い性格だが、指示にはちゃんと従う。

あまり出番がない事を気にしている。

・夕張（改）

レベル76

オリジナルに近い性格。

新し物好き。

それは興味の範囲は艦装のみに留まらず、多岐の分野に渡る。

最近はよく愛宕とTVゲームをしている。

・大淀（改）

レベル86

オリジナルに近い性格。

少し前まで提督に（悪気はなかったが）その存在そのものを認識されていなかった悲劇の軽巡。

その所為か少しひねくれたところがある、らしい。

夕張に並ぶ装備の充実さと更に彼女とすら一線を画す性能と前述した生い立ちも相まって、軽巡の中では「表の番長」龍田に対して裏番を務めているのだとか。

・香取

レベル75

オリジナルに近い性格。

教師風の落ち着いた雰囲気的女性。

その態度は常に安定しており、頼りになる感じが凄い。

作戦の指揮や立案の能力に秀でていて、表にでるよりかは裏方で仕事をしている時が多い。

・鹿島

レベル75

・ゴトランド

レベル78

○駆逐梓

・神風

レベル98

・春風

レベル104

・松風

レベル96

・旗風

レベル75

・ 暁（改二）

レベル76

オリジナルに近い性格。

暁型の長女。

昔はよくレディを称して見栄を張っていたが、最近では見栄を張った結果恥をかく方を恐れるようになった為割と大人しい。

・ 響（ヴェールヌイ）

レベル118

駆逐艦レベルトップ。

オリジナルと比べて若干、天然で供つぽい性格。

響と呼ばれるのを好む。

提督の事は大好き。

・ 雷（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

大人しい妹と違ってとてもアクティブ。

提督の事は普通に好き。

・電（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

元気な姉と違つてとても大人しい。

でも怒るとヤバイらしい。

提督の事は大好き。

・島風（改）

レベル87

オリジナルに近い性格。

とても子供っぽく、負けず嫌い。

提督の友達第一号。

提督の基地の三大規格外駆逐艦の一人。

一回しかまだ改造を受けていないながら、その実力は改二勢に全く引けをとらない。

・秋月（改）

レベル114

オリジナルに近い性格。

三大規格外駆逐艦の一人。

特にその優れた防空能力は駆逐艦の中でも文句なしのトップ。

とても真面目で良い子だが、最近愛宕の影響でゲームを嗜むようになり、あるキャラクタの大ファンになった。

・照月（改）

レベル97

・涼月（改）

レベル75

・初月（改）

レベル100

・Z1（zwei）

レベル79

通称「レイス」（*第40話「名前」参照）

オリジナル以上に優しい。

真面目で大人しい僕っ娘。

頑張り屋で何事も自分から率先して動く。

・Z3（zwei）

レベル94

通称「ジェーン」（*第40話「名前」参照）

オリジナルより少し柔らかい性格。

「そう」が口癖

愛想がなく見えるが、話してみると結構饒舌。

特にそれは自分の自慢話になると止まらなくなるらしい。

Z1に負けず劣らず真面目な性格で、実は努力家だったりする。

・初春（改二）

レベル78

初春型の長女にして駆逐組の組長補佐。

オリジナル近い性格だがこちらの方が大分余裕がある。

提督の艦隊の二人目。

実は艦娘に関するある秘密を知っている。（*第二部 第6話「感情」参照）

・子曰（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

おつちよこちよいに見えて割としつかりしている。

だが普段の発言や言動から与える印象が強いので、その事を知っている者は少ない。

・若葉（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

真面目だが、それより自信が先に立つせいで行動が偶に空回りする事がある。素っ気ない口調だが、それは単に彼女が口下手なだけらしい。

・初霜（改二）

レベル97

オリジナルに近い性格。

真面目で仲間想いな性格。

姉の若葉と仲が良く、偶に空回りしている彼女をフォローしている。

・白露（改二）

レベル79

オリジナルに近い性格。

白露型の長女。

ノリが良いムードメーカー。

だが、ややお調子者でその失敗をよく涼風にツッコまれている。

・時雨（改二）

レベル98

オリジナルと比べて結構マイペースな性格で、そのつかみどころのなさは最上に並ぶ。

戦闘では普段のイメージからは一線を画す獅子奮迅振りを見せる。

・村雨(改二)

レベル89

オリジナルに近い性格。

白露程ではないが、調子に乗り易い性格。

よく姉の白露と一緒に遊んでは涼風や五月雨に注意されている。

・夕立(改二)

レベル97

オリジナルに近い性格。

マイペースで天然。

独特の言葉遣いで周囲を惑わす事がある。

火力においては規格外駆逐艦の島風をも上回るポテンシャルを誇る。

・春雨(改)

レベル76

オリジナルに近い性格。

基本的に真面目だが、やや甘えん坊なところがある。

人目が少ないところで提督に甘える機会を窺っている。

・五月雨（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

駆逐艦の中でも特に真面目で更に優しい。

よく涼風と一緒に姉の白露と村雨のおてんばに振り回されている。

・海風（改）

レベル75

・山風（改）

レベル80

・江風（改二）

レベル80

・涼風（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

真面目だが、強気、加えて面倒見が良い。

よく涼風と一緒に姉の白露と村雨が起こすトラブルに巻き込まれてその度に注意している。

・吹雪（改二）

レベル 80

オリジナルに近い性格。

吹雪型の長女。

真面目だが、少しやきもちを妬くところがある。

意外にノリが良く、雷たちと一緒に遊んではしゃいだりしている。

・白雪（改）

レベル 75

オリジナルに近い性格。

真面目で大人しい優等生。

吹雪型の中では一番大人しいとされるが、実は違うらしい。

だがその分怒らせると質が悪いらしい。

・初雪（改）

レベル 77

オリジナルに近い性格。

マイペースで何を考えているのか分かり難い。

根は真面目だが、それを見せる事は少なく、若干素直でないところがある。

自分と似た性格ながら器用に世渡りをしている望月の事を慕っており、仲が良い。

・深雪（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

勝ち気な性格だが、不測の事態にはちよつと弱い。

敷波とはウマが合うらしく、よく一緒にいる。

・叢雲（改二）

レベル75

オリジナルより大人しく、余裕がある性格。

提督の艦隊の一人目。

実は艦娘に関するある秘密を知っている。（*第二部 第6話 「感情」参照）

提督LOVE

・磯波（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

真面目だが、白雪より大人しい性格。

周囲を和ませる雰囲気を持っている。

・浦波

レベル75

・睦月（改二）

レベル78

オリジナルに近い性格。

睦月型の長女。

甘えん坊でやや自信家。

・如月（改二）

レベル77

オリジナルに近い性格。

自信家な所は姉以上。

加えておっとりした性格が、よく油断に繋がりがり睦月と一緒に長月に怒られている。

・弥生（改）

レベル76

オリジナルに近い性格。

無口で表情も乏しいが、内面は居たって女の子そのもの。

打ち解ければ誰でも彼女が何を考えているのか解るくらいにはなる。

・卯月（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

マイペースで甘えん坊。

駆逐艦の中ではあまり強くは無い方だが、それでも弥生との息の合った連係は十分に

驚異的で、出撃の度に確かな戦果は挙げている。

・皐月（改二）

レベル89

オリジナルに近い性格。

真面目だが姉の睦月譲りの自信家の面を持つ。

よく睦月と如月の失態に巻き込まれ、その度に注意している。

SF劇が好き。

・水無月（改）

レベル75

・文月(改二)

レベル82

オリジナルに近い性格。

マイペースでやや自信家、そして少し甘えん坊。

よく睦月と如月の失態に巻き込まれ、その度に注意している。

ホラー映画が好き。

・長月(改)

レベル75

オリジナルに近い近い性格。

真面目だが姉の睦月譲りの自信家の面を持つ。

よく睦月と如月の失態に巻き込まれ、その度に注意している。

戦争映画が好き。

・菊月(改)

レベル75

オリジナルに近い性格。

真面目でハキハキした口調が特徴。

提督に対する好意は基本隠さず、甘えたい時はしっかりと甘える。
時代劇が好き。

・三日月（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

真面目で責任感が強い。

実は提督に甘えたかつたりしているが、普段のイメージを意識している所為かな
か言い出せないでいる。

・望月（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

マイペースで少し間延びする口調が特徴。

初雪と同じで始終気だるげ雰囲気を漂わせているが、やることはしっかりとやる。

・陽炎（改二）

レベル83

オリジナルに近い性格。

陽炎型の長女。

明るく、それでいて真面目なムードメーカー。

妹の不知火とは対照的な性格だが、船上では息の合った連係を見せる。

・不知火（改二）

レベル 81

オリジナルと比べて少しだけ甘い性格。

基本的に真面目で口数が少なく、常に伶俐な雰囲気を漂わせている。

思ってる事を素直に言えないところがあるが、提督の前では素直になろうと努力している。

・黒潮（改二）

レベル 79

オリジナルに近い性格。

明るいムードメーカーだが、愛嬌があるせいか弄られ役になることが割とある。

龍驤と同じ関西弁を話すことから仲間とよく思われがちだが、本人は迷惑がってる模様。

・親潮（改）

レベル 75

・初風（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

やや勝気だが基本的に大人しい。

黒潮と同じ属性を持ち、良く大人（特に長門）に弄られる。

・雪風（改）

レベル94

オリジナルに近い性格。

量産タイプでありながら、唯一規格外駆逐艦に数えられている駆逐艦。

そのポテンシャルは素晴らしく、特に回避能力に関しては駆逐艦随一らしい。

島風の親友にして提督の友達第二号。

・天津風（改）

レベル77

オリジナルに近い性格。

ちよっと我儘で子供っぽい性格。

駆逐艦の中では戦闘力が高い方で、単艦でもそれなりの活躍を見せる力を持つ。

・時津風（改）

レベル76

オリジナルに近い性格。

悪戯好きで甘えん坊。

隙を見ては直ぐに提督や仲間絡んでじゃれようとする。

・浦風（丁改）

レベル76

オリジナルに近い性格。

明るく頼りになる姉御肌。

偶に通じない博多弁に替わり共通語を喋る。

・磯風（乙改）

レベル78

・浜風（乙改）

レベル98

オリジナルに近い性格。

真面目なしっかりもの。

駆逐艦の中ではトップクラスのナイスボディを持つ。

・谷風（丁改）

レベル77

オリジナルに近い性格。

明るくてお調子ものだけど芯はしっかりしている。

“勘”で良く動く為に、その所為でよく失敗をして浜風に怒られている。

しかし偶にその“勘”が当たった時は驚くほどの戦果を挙げる。

・野分（改）

レベル76

オリジナルに近い性格。

似た者同士である浜風と仲が良い。

だが身体付に差がある為、それを密かに気にしている。

・嵐（改）

レベル75

・萩風（改）

レベル76

・舞風（改）

レベル79

オリジナルに近い性格。

動き回るのが好きで、暇があればよく趣味のダンスを踊っている。

周りの迷惑を考えずについ踊り過ぎる時があるので、彼女が踊っている時は蜘蛛の子を散らすように皆は逃げ回る。

・秋雲（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

飄々とした性格で、周りに流されない自己の強さを持つ。

絵を描くのが好きで得意だが、意外に事務処理も優秀。

・綾波（改二）

レベル94

オリジナルに近い性格。

綾波型の長女。

優しく真面目で人懐っこい。

改二になると胸が大きくなるという迷信を信じていたせいで、その結果に衝撃を受ける。

・敷波（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

ちよつと素直じゃないけど頑張り屋さん。

性格が似てる深雪と仲が良く、よく一緒に行動している。

・天霧

レベル75

・狭霧

レベル75

・朧（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

綾波型の中では曙と漣に次ぐ行動派。

他の二人が活発な印象が強いので誤解されがちだが、彼女も負けず劣らず大胆な行動をする事がある。

・曙（改）

レベル75

オリジナルと比べて少し大人しい。

口が悪い事で有名だが、こちらでは提督の事を認めてるのか、めつたり「クソ」はつ

けない。

・漣（改二）

レベル 9 6

オリジナルに近い性格。

調子が良く見えてしつかり者。

偶に独特の言い回しをするが、怒るとキツイ口調になる。

・潮（改二）

レベル 9 6

オリジナルに近い性格。

やや内向的で恥ずかしがりや。

さり気にとてもグラマラスなボディを持つ。

・夕雲（改二）

レベル 8 1

オリジナルに近い性格。

夕雲型の長女。

他の鎮守府で虐待されているところを逃げ出し、提督に拾われた。（*第二部第28

話「保護」参照）

・ 卷雲（改二）

レベル100

オリジナルに近い性格。

姉っ子で、ちよつと甘えん坊。

提督の事は結構好き。

・ 風雲（改二）

レベル75

・ 長波（改二）

レベル84

オリジナルに近い性格。

少し見栄っ張りな所があるがその実、甘えん坊な所がある。

お姉さん振ろうとして空回りすることが多い。

そういう点が共通する所為か、暁とは特に仲が良い。

提督に対する好感度は不明だが、嫌ってはいない。

・ 高波（改）

レベル77

オリジナルに近い性格。

引つ込み思案に見えるが、結構思い切った行動をする。

上の姉達に比べて自分に自信が持てないところがある模様。

個性豊かな妹達には苦勞せられているが、怒ると怖いらしく、結構彼女のいう事は聞く。

・藤波(改)

レベル75

・早波(改)

レベル75

・浜波(改)

レベル75

・沖波(改)

レベル75

・岸波(改)

レベル75

・朝霜(改)

レベル98

オリジナルに近い性格。

わんぱくな夕雲妹で早霜の姉。

長波以上に勝気で明るく、子供っぽくて更に人懐っこいという、元気の塊の様な娘。

・早霜（改）

レベル75

オリジナルに近い性格。

駆逐艦の中では特に個性的な性格をしている。

音もなく近寄り、相手が驚く様を見るのが好き。

・清霜（改）

レベル75

・朝潮（改二丁）

レベル98

オリジナルに近い性格。

朝潮型の長女。

駆逐艦の中ではトップレベルの真面目な性格をしている。

だがあまりにも真面目過ぎて、意図せずそれが暴走する時がある。

・大潮（改二）

レベル81

オリジナルに近い性格。

声が大きくとにかく元気。

臆とはウマが合うようで、よく一緒に遊んでいる。

・満潮（改二）

レベル78

オリジナルに近い性格。

勝気だが真面目で芯が強い。

朝潮の暴走のストッパー役でもある。

・荒潮（改二）

レベル78

オリジナルに近い性格。

おっとりして常にマイペース。

だがそこには基本的に隙は無く、しかも割と狡猾な性格をしている。

・朝雲（改）

レベル76

オリジナルに近い性格。

“朝潮型の陽炎”と言われるほど似た性格をしている。

元気で明るい子。

山雲とは仲良し。

・山雲（改）

レベル77

オリジナルに近い性格。

なんだか性格が龍田に似ているような気がする。
怒ると怖そう。

・峯雲（改）

レベル75

・霰（改二）

レベル82

オリジナルに近い性格。

朝潮型では一番大人しく、思考が読めない。

だがその行動自体は常識そのもの。

第一印象で誤解してはいけないと言う好例。

・霞（改二乙）

レベル97

オリジナルに近い性格。

満潮と性格が似ているが、こちらの方が少々厳しめで勝気。満潮と一緒によく朝潮のフォローをしている。

・マエストラーレ(改)

レベル80

・リベッチオ(改)

レベル89

・ジョンストン(改)

レベル75

・サミュエル・ロバーツ(改)

レベル75

・ジャーヴィス(改)

レベル75

・タシュケント(改)

レベル76

○潜水組

・伊13(改)

レベル121

・伊14（改）

レベル113

・伊400（改）

レベル100

・伊401（改）

レベル123

・伊168（改）

レベル135

通称「イムヤ」

潜水組のリーダー。

オリジナルに近い性格。

真面目で頑張り屋さんだが潜水艦の中で一番熱く、負けず嫌い。

・伊58（改）

レベル143

通称「ゴージャ」

オリジナルに近い性格。

イムヤに次いで負けず嫌いな性格だが、冷静な判断もしつかりできる。

・伊8 (改)

レベル139

通称「ハチ」「ハつちゃん」

オリジナルに近い性格。

潜水艦の中では一番大人しいが若干マイペースなところも。

・伊19 (改)

レベル147

通称「イク」

オリジナルに近い性格。

潜水艦の中では一番ノリが良い。

面倒見が良い面もある。

お菓子が大好き。

・伊26 (改)

レベル130

伊504 (改)

レベル106

・まるゆ（改）

レベル117

オリジナルにより若干大人。

潜水艦の中で最も弱いが、一番の常識人でもある。

・呂500

レベル129

オリジナルに近い性格。

改造を受けてようやく中身と外見が合致するようになった。

作中のU—551はとある事情の為、最初から呂500の性格をしていた。（*「第六

部第×28話」参照）

若干改造前より人懐っこさが増したように思える。

○海防艦

・占守（改）

レベル64

・国後（改）

レベル58

・択捉（改）

レベル 6 7

・松輪(改)

レベル 6 2

・佐渡(改)

レベル 5 2

・対馬(改)

レベル 5 8

・福江(改)

レベル 5 2

・日振(改)

レベル 5 1

・大東(改)

レベル 5 6

○特殊船

・あきつ丸

レベル 4 1

オリジナルに近い性格。

真面目でしっかりしているが、どこことなくマイペース。

○工作艦

・明石（改）

レベル45

元々は任務と整備専任の艦娘だったが、最近は大戦部隊にも参加するようになった。工作艦の割には艦の整備をする事は殆ど無く（提督の鎮守府の資材が常に余っている為）専ら基地の設備の整備をしている。

お蔭で工作艦としての存在意義に悩むことが偶にあるとか。

○深海棲艦

・レ級

元（旧）扶桑

艦娘だった頃は中将（現、親父）の艦隊に所属し、共に戦っていた。

深海棲艦になってからは、艦娘だった頃と打って変って天真爛漫なとても明るい性格になり、常に突拍子もない発言や行動で周囲を驚かせている。

深海棲艦となった今でも基本的に人間（海軍）に対し、一切負の感情は持っておらず、「深海棲艦だから」というシンプルな理由のみで偶に思いつくように「仕事」として海軍を襲っている。

のほほんとしているが、普通のフラグシップのレ級より無茶苦茶強いらしい。

取り巻き（親友）として常にタ級・ル級・ヲ級がおり、彼女はその中でもリーダー的存在となっている。

・タ級

元八島。

艦娘だった頃は中将（現、親父）の艦隊に所属し、共に戦っていた。

艦娘だった頃は扶桑たちとは違い、唯一まともな感情の様なものを一番持っていた。

深海棲艦となってからはそれとは正反対に4人の中で一番クールで真面なご意見番的存在となる。

深海棲艦としてのポリシーは基本的にレ級と一緒。

普通のフラグシップのタ級よりやたら強いらしい。

・ル級

元東。

艦娘だった頃は中将（現、親父）の艦隊に所属し、共に戦っていた。

艦娘だった頃は扶桑と敷島と同じく感情が希薄だったが、深海棲艦となってからは大人しくて子供っぽい性格となった。

が、根はしっかりしており、ヘタレなどところを見せつつも戦闘の場面では自分の役割を十二分に果たしている。

4人の中で特にタ級と仲が良く（というよりひつついている？）、暇なときは大体彼女と遊んで（話して）いる。

深海棲艦としてのポリシーは基本的にレ級と一緒。

普通のフラグシップのル級より信じられない程強いらしい。

・ヲ級

元敷島。

艦娘だった頃は中将（現、親父）の艦隊に所属し、共に戦っていた。

艦娘だった頃は扶桑と敷島と同じく感情が希薄だったが、深海棲艦となつてからはかなり子供っぽい性格となる。

ル級と同じく、根はしっかりしており、戦闘では見た目以上の戦闘力を見せ、常に仲間間の戦果に貢献している。

4人の中で特にレ級と仲が良く、彼女との連携プレイが得意。

深海棲艦としてのポリシーは基本的にレ級と一緒。

普通のフラグシップのヲ級より半端なく強いらしい。

・鬼姫

鬼級と姫級を超える深海棲艦の中では頂上の存在。

レ級の上司にあたる指揮官。

配下には彼女だけでなく、当然の如く様々な種類の鬼級や姫級がいる。

支配地域は日本の南側を担当していたらしいが、レ級の行動を見ている内に人間に対する認識を改めるに至り、最近個人的に大佐と和解した。

第一章 「提督と艦娘」

第1話 結婚しませんか？

提督の机に指輪が置いてありました。

「何だこれ」

「指輪です。大佐」

「貴方は何を言ってるんですか？」という顔の加賀。

提督はそういう事を訊いてるんじゃないと頭を振りながら言った。

「そんなのは見れば判る。俺が知りたいのは、なんで指輪なんかが此処に在るのかということなんだが」

「それは艦娘とその指揮官である提督が結婚をする為の指輪です」

この話には提督も珍しく虚を突かれた顔をした。

なんだそれ、そんな話聞いたことも無い。

「……なに？」

「結婚です。中佐」

「階級を勝手に下げるな。それと、結婚だつて？ 艦娘と提督の？」

「そうです」

「何故そんなことをする必要がある？」

「本部からの説明によりますと、この指輪は成長限界に達した艦娘の力を更に引き出す効果があるそうです」

「ほう」

提督は少し興味を引かれたように手を組む。

艦娘の力を更に引き出すとはどういう事だろう？

改二への改造はいわばアツブグレード、強化であり限界に達した力を引き出すのとは意味がちよつと違う。

「ただその効果を得る為には、この指輪を提督と艦娘がお互いにはめることによって従来よりも強い絆で結ばれる必要がある、との事です」

「意味が解らん」

「何がですか？」

「指輪をする事によつて力が引き出されると言う説明は解った。仕組みは理解できないが、まあそういうものなんだろう。俺が解らないのはな加賀。何故その前提として結婚しなければならぬのかという事だ」

「嫌なのですか？」

「嫌も何も、本部がそんな事を通達してきたことが信じられないんだが」

「恐縮ではありますが事実です」

僅かに口の端を緩ませながらそう言う加賀。

彼女は明らかに提督と深い絆で結ばれる機会が艦娘に与えられた今回の件を喜んでいるようだった。

提督はそんな彼女に溜め息を付きながら言った。

「嬉しそうに言うなよ。それと、その話が本なら仮に全員とその契約を結んだとしたら俺自身はどれだけの数の指輪を所持する事になると思う？」

「いえ、大佐に所持して頂くのは一個だけです。結婚相手が増えた場合はその都度指輪を一時本部で預けて頂き情報を更新します」

「結婚相手のか？」

「そうです。一見するとただの指輪ですが、なかなか高度な技術が詰め込まれているようです」

「ふーん……」

「あの」

「ん？」

「大佐は重婚がお望みですか？」

「例え話だ。仮の話だ」

「……そうですか。あと、正確には『結婚』ではなく『ケツコンカツコカリ』という方法らしいです」

「それでも意味は同じだろう。その事については何か言及はなかったのか？」

「気分と雰囲気を考慮して、との事です」

「建前にしても何故敢えて結婚なんて言葉を……頭が……ん」

提督はその時あることに気付いた。

「どうしました？」

「艦娘の力を底上げするなんて重要な物を何故お前が俺より先に確認しているんだ？」

当然の疑問である。

加賀はその指摘に半歩後ずさる。

表情こそそんなに変わってなかったが、僅かに強張った彼女の顔は明らかに『しまった』という感情を表していた。

「……」

加賀の表情は変わらないが、取り巻く雰囲気がいともより少し重くなった様な感じがした。

「取り敢えずそれをこっちに渡せ」

加賀に向かって手を差し出す提督。

だが彼女は更に半歩後ずさる。

「もうそこに置いてありますか？」

「1つだけだろう。2つで一組のはずだ」

「元帥閣下、私と結婚してくれませんか？ 好きです」

雰囲気も何もあつたもんじやない突然の告白だった。

あまりにも唐突の告白に加賀のその行動は、提督にはまるで宣告布告の様な思えた。

「持ち上げすぎだ。機嫌取りのつもりか？」

「結婚……」

加賀らしくもない未練がましい態度だった。

表情もいつものポーカーフェイスと違って若干拗ねている様に見える気がしないでもない。

「加賀、お前は俺の性格を知っているだろう？」

「私達を大事にしてくださる優しい方ですね」

「兵器として扱うことに対して抵抗感を払拭できていないだけだ」

「でも私はそうやって苦悩しながらも、大佐が一身で私たちを守ってくれている事

知っています」

「お前たちを戦地へ送り出して人間に対してよく言う」

「出撃は殆ど鎮守府周辺の警備、後は遠征と演習しかしてませんが？」

「全部資材の備蓄と節約の為だ」

相手が言葉を発すると間髪入れず切り返す言葉の合戦だった。

どちらも一步も下がる様子はない。

このまま長期戦になるかと思われたのだが……。

「ふう……相変わらず取り付く島がありませんね」

意外にも口合戦の発端となった原因の方から降参撤退を表明してきた。

表情こそいつも通りだったが、加賀の眼は少し悲しそうだった。

そんな彼女に対して提督はすまなそうに帽子を取って目を瞑り、自分に言い聞かせる

様にポツリと言った。

「お前たちがただの兵器なら良かった」

「……指輪置いておきますね」

「傷ついたか？」

「いいえ。求愛する雰囲気ではなくなってしまったので」

「悪いな」

素っ気ない事この上ないが、気持ちの籠った謝罪であることは加賀には解った。
だからこそ彼女は次にこう訊く事ができた。

「大佐、どうすれば私たちを受け入れてくれますか?」

提督は溜め息をついて椅子にもたれながら言った。

「分かん。こればかりは」

第2話 「執務室」

提督の執務室の前に一人の駆逐艦の艦娘がいた。

「あ、今大佐いないんだ」

「あ、島風ちゃん」

近くを通りかかった雪風が島風に声を掛けてきた。

「あ、雪ちゃん。大佐は今部屋に居ないからちよつと入ってみようかなあつて」

「勝手に入っているの？」

「うん。大佐が自分が居ない時は好きに使っていいと言つてた」

「ね、雪ちゃん、入ってみようよ」

「そうだね。問題がないなら雪風も大佐の部屋見みたいな」

二人はお互いに意思の合致を確認すると、ドアを開けた。

「うん。誰も居ないね」

「机と椅子だね」

「つまらないなあ。何か面白い物があつたらいいなと思つたのに」

「あ、でも机にサボテンが置いてある」

雪風が指す方向を見ると確かに鉢に入った小さなサボテンが机の隅に置いてあった。

「え？あ、ホントだ。ちつきくて可愛い♪」

「でも触ったら痛そ」

「大佐、サボテンしか友達がないのかな」

島風が悪意のない素朴な疑問を口にした。

普通の人が聞いたら思わず提督に同情してしまうかもしれない。

「そういえば命令以外で大佐が誰かと話しているところって、あまり見た事がないね」

「誰も居ないなら島風が艦娘の中で最初の友達になれるチャンスかも！」

「あ、雪風もお友達になりたい！ 大佐あまり喋らないけど優しいし」

「そうなの？ わたし命令している大佐しか知らないよ？」

「この前の演習で殊勲艦に選ばれた時に『よくやった』て褒めてくれたんだよ」

「何それズルーい！」

島風は間髪入れずに反応した。

島風は自他ともに認められている優秀な駆逐艦だったが、未だに本人は提督から褒められたことがなく、彼女自身もそれを以前から気にしていたらだ。

「島風ちゃん強いけど、いつも真っ先に突貫して被弾ちやうから……」

「でもでも、わたし凄く頑張ってるんだよ！」

「うーん、雪風はいつも周りの状況を見て行動を判断してから……島風ちゃんも同じようにしてみれば？」

「えー、でもそれだと速くない……」

「速くないかもしれないけど殊勲艦には選ばれるかもしれないよ？」

「そうかなー？」

「そうだよ！行動は速くなくても戦果が1番なら良くない？」

「1番かあ……。うん、それも悪くないかも！ よーし、そうと決まれば次の演習で出番が来たとき頑張ろうっと！」

「ハイです！お互いに頑張ろうね！」

生来負けず嫌いの島風は新たな目的を胸に演習へと闘志を燃やすのだった。

——そして程なく演習があり、島風は見事に1番の戦果を挙げて殊勲艦に選ばれた。

「島風、今回の演習、動きが良かったな」

「えへへ。そうでしょー？ わたし頑張ったよ！」

「ああ。いつものように突貫すると思っていいたら周りの状況に即した素早い動きだった」

「速かった!? 本当!? やったあ♪」

『速い』この言葉は島風にとって最上の褒め言葉だった。

歳相応の子供の様に無邪気な笑顔で嬉しそうにはしゃぐ。

「ああ、よくやったぞ。島風」

ポンっ

頭に乗せられた提督の手を少し驚いた目でみる島風。

「あ」

「どうした？」

「わたし、大佐に初めて褒められた！」

「そうだったか？」

「うん！ わたし今すっごく嬉しい！」

「そうか。よかったな」

「うん！あ、それとね大佐」

「ん？」

「わたし、大佐が笑ったところも初めて見たよ！」

「……」

予想外な事を言われて不意を突かれたのか、提督は一瞬言葉をなくした。

「どうしたの？ 大佐」

「いや、そんなに俺は笑ってなかったのかと思ってな」

「わたしは初めて見たよ！ だからその事も今凄く嬉しいの！」

「そうか。偶には笑わないと可笑しいよな」

島風の言葉に軽く笑みを浮かべながら提督は答えた。

それは島風が本当に初めて見た提督の笑顔だった。

「うん！ 島風は難しい顔してる大佐より笑ってる大佐の方が好きだよ！」

第3話 「友達」

「友達になつてほしい？」

意表を突いたお願ひに提督は若干驚いた声を出した。

「うん！」「はい！」

それに対して島風と雪風が元気よく返事をする。

（夜中に勢い良く訪ねて来たと思つたら、これはまた予想外なお願ひだな）

「二人ともいいか？ まずお前たちは友達云々以前に俺の部下であることを忘れてはならない」

「そんなの分かつてるよ！ ちゃんと命令は聞いてるでしょ？」

「雪風も分かつてます。それでも今より大佐と仲良くなる為に友達になりたいんです！」

「まあ待て。それとな、二人は部下である前にへ……」

提督は唐突に黙つた。

この言葉は出来るなら使いたくない。

この見た目も中身も子供と変わらない二人の前では尚更だ。

「? どうしたの大佐?」

「大佐?」

島風と雪風は純心な目で不思議そうに提督を見る。

「……まあ、お互いに軍属で、上司と部下の関係だから友達はちよつと難しいんじゃないかと」

「ええー!? そうなのー!?」

「雪風は、それは……」

提督の言葉に二人は一緒に残念そうな声を上げた。

「ああ、だから悪いが今回は諦めるように」

「でもでも、それでもやっぱり島風は大佐と仲良くなりたくないよ!」

「雪風も大佐と友達になりたいです!」

やはり精神年齢が若干幼い所為だろう、島風と雪風は駄々とまでとはいかないが、納得がいけないことに関しては子供の様に退かなかつた。

「仲良くはしてやれるかもしれないが、友達はな。おい、ちゃんと聞き——」

「失礼します」

提督が不意に声が聞こえた方を振り向くと加賀が扉の前に立っていた。

「加賀……」

「あ、加賀さん」

「申し訳ございません。扉が開きっぱなしだったものですから」

加賀はいつも通りの涼しい顔で提督に謝罪と釈明した。

「ねえ聞いて加賀さん。わたし、大佐と友達になりたいの。でも大佐がそれは無理なんだったって」

そんな彼女にまるで親に訴える子供の様に島風が先程の話をしだした。

「あら」

「何か大佐と仲良くなれる方法はないでしょうか……加賀さん」

雪風も加賀の元へ行き、彼女の服の裾を掴んで相談してきた。

「二人とも落ち着いて。大尉？」

加賀は表情こそいつも通りだが目が提督を非難していた。

「どれだけ重い失態を俺はしたんだ」

提督は溜息を吐きながらも加賀の非難を受け止めた。

是非もない。

非は明らかに自分にある。

「私も大佐と仲良くなりたいたいのですが？」

「む……」

半ば予想はしていたが、やはり加賀は島風達の味方に付いたようだ。

島風と雪風は加賀の加勢に目を輝かせて嬉しそうな顔をし、自分達と同じ願いに提督がどう答えるのか見守っていた。

「え!?! 加賀さんも!?! 加賀さんも大佐と友達になりたいの!?!」

「雪風達と一緒になんですか!?!」

「ええ、そうよ。私も大佐と笑いあえる様な夫婦みたいな仲になりたいの」

「おい」

一言余計だった。

二人と同じはずだった願いが一人だけそれを飛び越えて宿願になっていた。

「大佐、仲良くなる事は悪いことではありませんよ。お互いの信頼関係を築くことは任務の遂行にも影響しますから」

「そうくるか」

「大佐は私達の事が嫌いなのですか?」

「む」

加賀の更な攻勢に提督は顔をしかめた。

この質問は反則だった。

こんな事を言つては……。

「え!？」

「そ、そうなのですか!？」 大佐

予想通り「嫌い」という言葉に敏感に反応した二人が泣きそうな顔をしていた。

「……」（これは流れを掴まれたな……）

提督は内心勝敗が決したのを確信した。

故にこう言うしかなかった。

「嫌いでは、ない」

「ホント!? 嘘じゃない!？」

「雪風は、雪風は安心しましたあ……」

島風と雪風は提督の言葉にさつきまで泣きそうだった顔はどこえへやら、今度はパツとした明るい笑顔で心から嬉しそうな顔をする二人。

「大佐、確かに任務実行中はそうはいきませんが、待機中にお互いに僅かな暇くらいなら多少はいいのでは?」

「そう、だな」

提督は最早妥協するしかなかった。

自分でこう言った以上はできる範囲で尽力するのが筋というものだ。

加賀は、渋い顔をしながらも自分たちのお願いを聞いてくれた提督に普段とは違った柔らかない声で言った。

「大佐、私は貴方に余裕を持って欲しいのです」

攻めていたと思いきや次いで提督をフオローする発言。

戦略としては悪くなかった、否、実際に成功していた。

（勝負あり。いや、これ以上は俺がやる気になれんな）

「分かった」

提督はポツリと言った。

「友達になつてくれるの!?!」

「そうなのですか!?!」

その言葉に島風と雪風は今度は加賀から提督へ興奮した様子で近寄つて来た。

そんな二人に提督は改めてはつきりと言った。

「ああ、そうだ。友達と言うと何かアレだが仲良くはしていこう、か?」

「うん!」「はい!」

「だが二人とも、節度は守れよ?」

「うん、分かった!」

「了解です!」

「よし、ならもうお前たちは寝るように。約束は守るから」

「はーい。大佐、今日はありがとう！」

「ありがとうございました！ おやすみなさいです！」

余程嬉しかったのだろう。

いつもだつたらまだ寝たくないと言いそうなところだが、今回ばかりは上機嫌で提督の言葉に素直に従って二人は部屋を出ていった。

ボタン

「………加賀？」

二人の退出を見届けて提督は静かに加賀を呼んだ。

加賀は内心出過ぎた真似をしてしまったと、提督に叱責を受けるのを覚悟していたが、提督の次の行動は彼女の予想とは違ったものだった。

「はっ？」

(あら、サボテンの鉢の下に鍵が……引き出しから……お酒……?)

提督は引き出しから酒瓶を取り出すと、グラスを2つ机に置いた。

「信用の証だ。気を抜いているのを見られたくなくてな。少し付き合えてもらえるか？」

「是非ありません」

素っ気ない言葉とは裏腹に、加賀は柔らかい笑みで提督の誘いを快諾した。

（自分がいうのもなんだが、加賀のこんな笑顔を見るのは初めてだな多分）

加賀の笑顔を見て提督はそんな事を思った。

第4話 「出撃」

「今回は数か月ぶりにまともに出撃する。演習と遠征ばかりで退屈していただろうが、時間をかけた分お前たちは戦力としては申し分ない」

ワアアアアア！

提督の言葉に日頃から身体を動かしたくてうずうずしていた艦娘たちは歓喜の声をあげた。

提督は士気の高さを確認して続けた。

「皆、意気軒昂のようで結構だ。さあお前たち、1日限りだが思う存分駆け回ってこい」
『了解！』

提督の号令に艦娘たちは一同に承諾の声を上げ、久方ぶりの大規模な出撃はこうして幕を開けた。

「ふう、これで暫く本部から出撃からの催促はこなくなるな」

提督は椅子に深く腰掛けて今までに本部から来た出撃を促す電文の数を思い出しな
がら言った。

「大佐、報告です！第四艦隊、南西諸島海域制圧完了とのことです」

その日の秘書艦の青葉が早速出撃した艦隊の戦果を報告してきた。

「いいペースだな。沖ノ島辺りをもう4、5週してくるように通達。資材、バケツ・は任意に使用することを許可」

「了解です！」

——数時間後

「第二・第三艦隊から報告です！北方・西方海域制圧完了とのことです」

「制圧してもまた現れるからな。暫く出てこないように制圧しても必ず索敵は3重以上するように通達。掃討は念入りにな」

「了解しました！」

——更に数時間後

「第一艦隊より報告！南方海域、サブ島沖までは制圧完了とのこと」

「やはりまだサーモン沖は攻略厳しいか。重巡の育成なんとかしないとな」

提督は表情には出していないが、まだこの海域を制圧し切れない事に対して反省しているかのような厳しい声で言った。

そんな彼に青葉もいつものようなノリの良さは控えて真面目な表情で言った。

「そうですね。利根姉妹は練度は高いですけど上位改装はまだできてませんし、衣笠も健闘してくれているのですが」

重巡の中でも最も練度が高い利根姉妹と唯一の改二である衣笠は、重巡組の中核的存在であり、青葉の報告から彼女達が奮闘している姿を想像するのは提督にとって難しい事ではなかった。

（あいつらにはまだ苦勞を掛けてしまっているな。早く何とかしてやりたいものだ）

提督は心中で彼女達の勞を労いながら青葉に指示を出す。

「中破による轟沈の可能性ありの場合に入渠優先は徹底。焦らなくても此処に戻ればいくらでも出撃できる。危険海域への強行はせず、余裕を持って制圧可能な海域のみに専念するように通達」

「了解ですー！」

そして作戦開始から数時間後、その日の終わりを告げる時計の秒針が、もう直ぐ0時を過ぎようとしていた頃――

「皆、苦勞だった。おかげで轟沈は無く、攻略対象の海域の制圧は全てこれを完了することができた。日付はもう変わる直前だが、今日はゆっくり休んでくれ」

『了解!』

皆、戦闘で顔や身体が汚れていたが、一様に何か満足したようなスッキリした顔をしていた。

それなりに長い時間海原を駆けまわっていた筈だが、提督の言葉に応えた彼女たちの声は力強かった。

提督はそんな彼女たちを誇らしくも頼もしく思いながら最後に締めた。

「では、解散」

——それから数分後

「青葉もご苦労だった。もう休んでいいぞ、当直は俺がする」

「はい。了か……て、え? 大佐が当直をするんですか?」

「ああ」

秘書艦として執務室に最後まで残っていた青葉は提督の言葉に驚いた顔をした。

「でも大佐もずっと作戦の指揮を執っててお疲れじゃないんですか?」

「お前たちと違って俺は実戦に出ていたわけじゃないからな。大丈夫だ、体力は十分に
ある」

「でもそれでも一日作戦の指揮を一人でしていたんですから流石ににキツいんじゃない

……」

「待機組に交代で警備はさせている。俺一人無防備というわけじゃないさ」

「いや、そういう事じゃなくて」

「青葉、気遣いは嬉しいが本当に問題はない。あと話は変わるが、今度時間がとれたら今回の作戦の成功のことで皆にちよつとしたお礼をするつもりだ」

「え、お礼？」

意外な言葉に青葉は目をパチくりさせる。

青葉は提督からそんな言葉を聞くのは初めてだった。

「そうだ。勿論、しっかりと秘書艦として伝令の役割を果たしてくれたお前も例外ではない」

「あ、青葉もですか？」

「勿論だ。だからお前も今日は休め。どうせお礼を貰うなら万全の状態で良い気分で貰いたいだろう？」

「は、はい！ 了解しました！ ありがとうございます！ 失礼します！」

バタン

「……」（でもいくら秘書艦の仕事をしていたと言っても、わたし報告しかしていない

かったなあ……。作戦中の他の執務は大丈夫だったのかな？)

青葉は部屋を出た後扉の前でそんな事を考えた。

そして浮かぬ顔をしながら自室へと戻っていった。

「……………」

青葉が退室してから数分後、提督は外から彼女の気配が無くなった事を確悟ると、引き出しからその日にこなさなければいけなかった書類を出して片付いていた机の上に積んでいった。

あつという間に出来上がった紙の山を疲労した目でぼんやりと見ながら提督は思った。

(流石に多いな。ここに着任してから事務仕事には慣れたつもりだが、これは時間がかかるだろうな。あいつらと仲良くすると言った手前で未だにこんな事をしているなんてバレたら……………)

「怒るだろうな」

提督は誰にともなく一人そう呟き、机の上の書類に意識を集中するのだった。

第5話 「風邪」(挿絵あり)

「大佐どうした？ 調子が悪そうだが」

「風邪をひいてしまったらしい」

日向が異変に気付いたのは、その日彼を見た瞬間からだつた。

少し悪い目つきが風邪の所為で力なく半目になってしまい、余計に印象が悪くなつていた。

「なら何故床に就いて療養してないんだ？」

「今日は非番じゃないからな」

「昨日の出撃明けで今日からまたいつも通りの演習と遠征なんだろう？ それならこんな時くらい休むべきだと思うんだが」

「いつも通りだからこそ多少無理が利くんだ。流石に俺だつて昨日こんな状態だつたら指揮の代行を誰かに頼んで休養したさ」

「大丈夫なのか？」

「まあ心配するな。それよりお前は演習組と遠征組の点呼をしてきてくれ。確認でき次第朝礼だ」

「了解した。だが、くれぐれも無理はするなよ。」

「ああ、ありがとう」

提督は日向の気遣いをありがたく思うと同時に改めて自分の責任を感じた。

逆にそれが相手に心配を掛ける事に繋がってしまうという考えに行きつかないのは、彼の欠点だった。

——それから数分後

「各組の点呼終了。問題なし。大佐、朝礼を」

「ああ、皆おはよう。それでは——」

「——以上。じゃあ遠征組は日向の指示に従って編成ができ次第出撃。演習組は俺と一緒にこのまま工し、しよ……つくひん！」

突然の提督の大きなくしゃみに日向とその場にいた他の艦娘たちは目を丸くして提督を見た。

くしゃみでこそあったが、彼の大きな声を聞いたのはこれが初めてだったのだ。

早速提督の列の最前列に居た雷が珍しい物を見たばかりに声を潜めて隣の電に話し掛けていた。

「ねえ、大佐がくしゃみをしたわよ。見た？」

「み、見たのです。大佐のくしゃみ初めて見ました」

「……」(本当に大丈夫か?)

目を細めて心配そうな顔をする日向。

提督もその視線に気付き、取り繕うに一度咳をすると朝礼の締めを再開した。

「んんっ、ふう……。失礼、それでは日向、そっちは頼んだぞ」

「ん？あ、ああ」

流石に誤魔化しが利かない上にバツも悪いので、提督はその日の朝礼が終わると気を入れ直す為にそそくさと顔を洗いに行ったのだった。

{IMG3481}

——数時間後、執務室

「大佐、遠征組の今日最後の編成と出撃を完了した。後は帰港を待つだけだ。そっちはどうだ？」

「ああ。問題ない。A判定の勝利が2つ。それ以外は全てSだ」

「ん？大佐、私にはこの勝利判定は敗北のCに見えるんだが」

「なに？」

日向の指摘を受けて提督が目をこすって再度彼女が指さした報告書の個所を見てみ

ると、確かに記載されていたのはSではなくCだった。

「ああ、本当だ。そうかギリギリ負けていたのかこの演習は。通りで反省会をしている時に雷たちが不可解そうな顔をしてたわけだ」

「なあ大佐。本当に大丈夫か？こんなこと言っただが、そんな姿初めて見るぞ」

「ん……日向、悪いが医務室に行つて鎮痛剤を持ってきてくれないか？」

流石に今回は注意を受け入れてくるか、そう思つて医務室に向かいかけた日向だったが、提督が言つた言葉に違和感を感じて向き直つた。

「鎮痛剤？ 感覚を麻痺させてどうする！ 風邪薬だろそこは！」

「え？ ああ、そうだ……な」

「あ……いや、すまない。つい怒鳴つてしまった。とにかく大佐はここに居てくれ。薬と医療妖精を連れてくるから」

「分かった。頼む」

バタン

日向が去つたあと、提督は先程のことを反省する様に天井を見つめながら思つた。

(……日向を怒らせてしまったか、初めてだな。……反省しないとな)

ガチャツ

扉が開く音に提督が気付く。

日向が部屋を出てからまさきさほど時間が経っていない様に思えた。

「ん？早かったなひゅ……」

「大佐ア！風邪をひいたって really!? 大丈夫デスカ!?」

「ああん！ 金剛に負けちゃったあ！大佐どうかしたの？」

「……」

部屋に飛び込んできたのはいつも通りの反応の金剛と、どこから彼女と競っていたのかついでに遊び来た様子の島風だった。

続いて最後に日向が入ってきて珍しく動揺して申し訳なさそうな顔をしていた。

「す、すまん大佐。薬を取りに行く途中でこいつらに話したら——」

「大佐ア大佐ア！大佐が風邪をひくなんてよっぽどデス！ ねえ本当に——」

「ああ！金剛ばかりズルイ！ 大佐はわたしの友達なんだよ！」

「What?! 大佐ア！ friend ってどういうことデス?! ワタシは fri

end ではないのデスカ!?!」

「っ、静かにしないかお前たち!!!」

騒がしい二人について艦隊の中でも代表的なクールビューティの一人、日向の怒りが爆発した。

提督は、本日二度目の珍しい日向の怒声を聞いて彼女には悪いと思いつつも、その時の雰囲気は何となく楽しく感じた。

(まあこれはこれで。元気を貰ったということにしておこう。しかし色々と圧倒されたな今日は)

第6話 「釣り」

足柄が基地の外を歩いていると、前方に堤防の上に座って釣りをしている提督を見つけた。

確か今日は彼は非番の筈だったが、着ている服は何故か制服だった。

「大佐、今日は休みなんじゃなかったの？」

「謂わば心の安らぎというやつだ。魚が釣れなくてもにこうして波を見ているだけでも気が休まる」

「そういうものなの？ ふーん」

「そういうお前はどうか？ お前だって今日は非番のはずだろう？」

「暇なのよ。今日はお酒が呑める人たちは軒並み演習と遠征だから」

「そうか」

「そうよ」

短いやりとりの後おもむろに足柄がポケットを弄つてあるモノを出した。

提督は足柄が出したソレを見て無意識にその物の名前を口にした。

「煙草か」

「吸う?」

「病み上がりに吸う気にはなれないな。それよりよかつたら——」

「なにそれ。お酒?」

水筒にしては小さくて平たい特徴的な形をした入れ物を見て足柄は直ぐに中身を察した。

「ああ。スキットルだから回し飲みしかできないが、どうだ?」

「……頂くわ」

「? どうかしたか?」

「ん……くはっ……いやね? 何だか大佐、前と比べて優しく? なったみたいだなんて」

「ああ、そのことか」

足柄の意見に提督は、返してもらったスキットルから一口酒を呷りながら呟くように言った。

その様子に足柄は興味を覚え、上半身を堤防に預けながら提督を見上げて訊いた。

「何かあったの?」

「島風たちにせがまれてな」

「ええ? ……ぶつ、あはは。あの子達らしいわね」

足柄は、島風がいつものように親に絡む子供の様な態度で提督にまどわりつきながら

そんな事をせがむ様子を想像して、つい吹き出してしまった。

だがそんな愉快な話題も、提督が次に話した意外な話題で直ぐに何処か行ってしまった。

「……それと加賀にもな」

「え？」

意外な人物の名に足柄は目を丸くする。

だが提督は、それが偽りのない事実である事を証明する様に、特に訂正をすることなく一言で断言した。

「事実だ」

「へ、へえ、そう……」（加賀さんが大佐と友達になってくれって言ったの？ なかなか想像し難いわね）

「まあ何を考えているかは解る」

「意外だわ」

「だろう？」

「ええ、ホントに。あ、そういえば大佐。加賀さんから伝言があるの」

「ん？」

「『秘書艦としての事務の仕事、何で黙っていたんですか？ これからは私もやりますか

らね』だって」

「……」

加賀からの伝言が余程意表を突いたのか、提督はつい持っていた釣竿を握る手の力を緩めてしまい、それを取り落としそうになった。

それを機敏に察知した足柄は艦娘らしい運動能力で片手をへりに付けながら一瞬で堤防の上に飛び乗ると、その竿を見事にキャッチした。

「つと、危ないわね。危うく竿落とすところだったわよ」

「すまない」（しまった、油断した。そういえば書類全て出したままだった）

提督のバツが悪そうな顔を見て足柄は何故彼がそんな顔をしているのか察した。

そして少し問い詰めるような顔をしながらも心配も窺わせる声で訊いた。

「……ねえ、全部一人でやってたの？」

「ああ」

「前の出撃の時も？」

「ああ」

「何ですよ？ 体壊して当然じゃない。そんなに私たちのこと信用できないの？」

「そうじゃない。接し方に悩んでいたんだ」

「あたしたちが兵器だから？」

「見た目が人間で意思疎通もできるのに兵器と言われてもな……」

「そう。大佐も人間らしいところあったのね」

「え？」

足柄の言葉に提督は本当に、本当に驚いた顔をした。

自分が人間故に、他人から見てもそれが当然であると無意識に決めつけていたのだ。

だがそれも、不愛想で誰の力も借りずに一人だけで淡々と仕事をしていれば、人間より機械に近い印象を与えるだろう。

提督はその事実を今、自分が今まで接し方に悩んでいた艦娘によつて気付かされたのだ。

対して足柄は、彼女は彼女で提督の驚いた顔を初めて見た事もあつて、その事に内心動揺していた。

「な、何よハトが豆鉄砲食らつたような顔をして」

「いや……ふっ……はは、そうだな。言われてみれば俺の方がよっぽど人間らしくなかつたかもな」

「そうよ……」（あ、大佐が笑つてるとこ初めて見たかも）

驚いた顔に続いて笑つた顔、短い間で提督が初めて見せる面を二つも見た足柄はそれを密かに嬉しく思った。

そしていつの間にか寄り添うように彼の隣に座る形を取っていた彼女は、自分なりに一番優しい顔と声で提督に言った。

「ねえ?」

「ん?」

「今も悩んでるの?」

「……そうだな。まだ完全に吹っ切れたとは言えないな」

「そう。でもね、それは普通のことだと思うの。だから、ね?」

「ああ」

「人間は貴方一人で寂しいかもしれないけど、そういう時は相談くらいしなさいよ?」

「……」

足柄の言葉に提督は深く考える様に目を瞑って潮風を浴びる。

そんな提督に足柄は彼の方に手置きながら続けた。

「わたしたちだつてそういう事くらい判るのよ?」

「……ありがとう」

「心底から感謝してるみたいね」

「解るのか?」

「ええ。今大佐凄くそういう顔してるもの」

「そうか」

「そうよ」

「……なんか酒が美味くなった気がするな」

「ふふ、奇遇ね。わたしもよ」

再び酒を呷ってスキットルを見ながら言った提督のそんな一言に、足柄も笑顔で同意を示した。

第7話 「報酬」

提督「さて、今日は前回出撃したお前たちに慰労の意を込めて報酬を用意した」

提督「出撃しなかった組にも細やかではあるが労いの物は用意してるので、今回はそれで我慢してほしい」

五十鈴「何を用意してくれたのかしら。楽しみね」

響「興味あるな」

陸奥「あらら。なにかしら♪」

提督「まあそう急くな。まずは酒だ」ドンツ

隼鷹「ひゃつはー！お酒だー♪」

足柄「わかつてるじゃない！」

霧島「これはこれは……」

提督「次はこれだ」トン

電「ケーキ！ ケーキなのです！」

潮「わあ…… たくさん」

瑞鶴「いいわね！」

提督「お次はこれだ」ドン

日向「ほう。これは塩漬け豚か」

比叡「美味しそうです！」

文月「た、食べてみたいけど食べられるかな」

提督「次はこれだな」コン

榛名「紅茶ですよ姉さま！それもこんないろんな種類」

金剛「Nice ネ。大佐！」

鳳翔「まあ日本茶までこんなに」

提督「これは、最後になるが……。まあ、お前たちは見た目は女だから欲しい奴も

居るかもと思つてな。ヌイグルミだ」ドドン

長門・摩耶・利根・矢矧「！」

龍田「あらあく？ 何か意外な視線を感じちやったような」

北上「へえ、いろいろあるねえ。1個くらいいいかも」

提督「後は、食事をバイキングで用意した。赤城、遠慮するなよ」

赤城「ありがとうございます！待ってましたよ♪」

ゴージャ「わあ、いっぱいあるでちねえ」

卯月「卯月嬉しいびよん！早く突貫したいなあ」

白露「む、一番は譲らないよ！」

提督「待機組には自家製のクッキーだ。口に合うかは分からないが、まあ食べてみてくれ」

艦娘達「……」

提督「ん？ 意外か？」

妙高「そ、その。失礼ながら驚きました」

暁「お菓子を作れるなんて大佐やるじゃない！」

多摩「にやにや、ちよつと羨ましいにや」

提督「分かつてると思うが。報酬も料理も大目に用意してある。余つたりしたら待機組とも分けるようにな」

通常戦力組「はーい！」

待機組「ありがとうございます！」

提督「それでは待たせたな。始めようか」

艦娘達「わああああ」

ガヤガヤ

提督「ふう」

加賀「お疲れ様です大佐」

提督「ああ。ありがとう加賀」

加賀「ところで報酬の中に指輪がなかった様ですが？」

一部の艦娘達「……」ピク

提督「あんなもの報酬として出すもんじやないだろ。あの前提を気にせず使うにしても常に指輪を見られるのはちよつと、な」

加賀「私は構わないんですけどね」

提督「何でお前はそう積極的なんだ」

加賀「好きだからですが？」

提督「この基地に男は俺だけだからそう感じてしまっているだけかもしれないだろう？」

加賀「いいえ。この気持ちは本物です」

提督「だとしても俺にはまだ受け入れる用意はない」

加賀「いつかその鉄壁爆砕してあげますよ少尉」

提督「物騒な事を言うな。尉官最下位一步手前にするほど悔しいのか」

加賀「一步手前にしたのは情けですよ」

提督「もう少しお手柔らかに頼みたい」

大井「あの、指輪って何のことですか？」

提督「む？」

加賀（しまった）

大井「いえ、わたしは北上さんがいるから気になりませんが。念のため一応教えてもらえますか？」

神通「え？ 指輪って何の事ですか？」

初春「ほほう？ 面白そうな事を話しておるな？」

扶桑「指……輪？」

提督（本능が一時撤退して部屋に閉じこもれと言っている）

利根「んん？ 大佐何処へいくのじゃ？」

不知火「怪しいですね。彩雲と水上観測機準備お願いしますか？」

千代田・蒼龍「了解」「任せて！」

提督（何なんだ？ どうしてこうなった？）「ダッ

第8話 「女子会」

深夜、翔鶴の部屋にて。

翔鶴 「指輪……ねえ」

イク 「そうなの！イク聞いちゃったの！」

龍驤 「せや！何でも聞くとそこによるとその指輪で大佐と結婚できるらしいで！」

那智 「なんだ。お前たちは大佐と結ばれたいのか？」

夕立 「ん、確かそれって元々夕立達の力を上げる為の道具っぽいて聞いた気がするよ？」

あきつ丸 「なるほど。つまり結婚とはあくまで建前のようなものなんですな」

愛宕 「だとしても実際に使ったらお互いに指輪を嵌めることになるのよね。ふふ、照れるなあ♪」

天龍 「ここにもう結婚した気の奴がいるみたいだぜ？」

如月 「あら、いいじゃない。如月は大佐のこと結構好きよ？」

時雨 「そうなのかい？」

夕張 「大佐、最近柔らかくなったっていうか優しくなった気がするものね。ポイント

高いかも」

那珂「うんうん。やっぱり結婚は置いておくにしても今よりパワーアップするのは魅力的よね！」

川内「その、指輪を嵌めるのも……なんだか、大佐にとつて特別な存在になったみたいで悪い気はしないわね」

阿賀野「何だかんだ言つて皆結構乗り気みたいね。でも一つだけ問題があるわよ？」
菊月「そうだな。問題というよりはまあ強敵といった方が適當か」

山城「加賀と金剛ね」

叢雲「二人とも対照的な感じだけど大佐に対する好感度は目に見えて高いわよね」

木曾「叢雲はよく判るな。あんなに表情が硬い奴なのに」

三隈「そういう人ほど情熱が目に見えて滲み出てるものだから。結構判っちゃうものよ。」

島風「そうなんだー」

筑摩「取り敢えず、今のところの意見をまとめてみましょう」

鈴谷「みんな結婚には興味ある人ない人がいるっぽいけど、今より強くなれちゃうことには全員興味ある感じ？」

足柄「そういう事ね」

衣笠「じゃあ、問題はどややって加賀さんと金剛さんより先に大佐に気に入られるかって事？」

翔鶴 or 祥鳳「それはちよつと難しいかもね。大佐、別にわたしたちの事嫌ってるみたいじゃないけど、こう……」

羽黒「うん……ちよつと壁みたいなのを感じるよね。艦娘という存在自体にまだ慣れてないみたい」

利根「なるほどそれは確かに厄介じゃの。気持ちには解らんでもないだけに」

明石「別に取り入ることにそこまで躍起になる必要はないんじゃないかしら？」

初雪「ん？ どゆこと？」

若葉「別に取り入らなくても、こいつは相棒として信用できるって信頼を勝ち取ればいい」

高雄「なるほど」

由良「今まで以上に頑張らないと」

望月「でも、それだけじゃダメだな」

白雪「そうですね。自己主張も程ほどに、この娘は信頼できるっていう活躍をしないとイケないですね」

曙「ふふん、やってやろうじゃないの！」

阿武隈「な、なんか駆逐艦の子達のやる気凄いね……………」

加古「これは負けてられないな！」

瑞鳳「それじゃ結論はそれでいい？ お互い恨みっこなし、全力でがんばりましょう

！」

一同「おー!!!」

同時刻、執務室

バキッ

加賀「どうしました？」

提督「万年筆のペン先が折れた……………」

加賀「力を入れ過ぎたのですか？」

提督「そんなはずは……………」

提督「まあ、代わりはあるからいいが」ガラ

提督（引き出しにこんな書類が）

『ケツコンカツコカリを複数使用したい場合は、自費にて申請することで指輪は用意可能』

提督「頭が痛い……………」

加賀「大佐？」
提督「いや、なんでもない」

第9話 「料理」

ジャツ、ジャツ、シユー

伊勢「あら？　なんか良い匂い。執務室から？」

コンコン

伊勢「伊勢です。入ってよろしいですか？」

提督「ああ、いいぞ」

伊勢「大佐、何を……」

提督「ん？　ああ、まあ驚くよな」

伊勢「執務室に調理台なんてありましたっけ？」

提督「いや、なかった。用意したんだ」

伊勢「またなんで」

提督「元々物がなくて殺風景な部屋だったからな。せっかくだから無駄に空いてるスペースを我儘に使わせてもらうことにしたんだ」

伊勢「それでこれを？」

提督「そう。偶にこれが食べたくなるんだが、知つての通り此処にはパスタを食べべら

れる所がない」

伊勢「それで自分で作って食べる為に？」

提督「そうだ」

伊勢「はあ、なんか凄いですね。以前の大佐からはちよつと考えられないというか」

提督「それは俺も思う。ま、それもお前たちのおかげだ」

伊勢「どういう意味です？」

提督「多少気が楽になって感謝しているという事だ」

伊勢「何かあったのかしら」

伊勢「ま、まあいいです。よく分かりませんが」

伊勢「それでこれはなんという料理ですか？」

提督「ペペロンチーノだ」

伊勢「ペペロ……」

提督「馴染みがないみたいだな。食べてみるか？」

伊勢「え？ いいんですか？」

提督「好物だから二人分作る癖があつてな。どうだ？」

伊勢「あ、それじゃ頂きます」

提督「分かった。それじゃもうでき上がるから卓に着いて待ってる」

伊勢「はい」

——数分後

提督「お待たせ」

伊勢「わ、ありがとうございます」

提督「遠慮せず食べ」

伊勢「それじゃ頂きますね」モグモグ

伊勢「ちよつとピリツとして辛いな。でも味自体はあつさりしてて丁度良いかも」

提督「どうだ？」

伊勢「美味しいです」

提督「そりや良かった」

伊勢「あ、でもすいません。せっかく好物で多めに作っていたのに」

提督「気にするな。俺もお前と昼飯を食うのは初めてだしな。良い機会だ」

伊勢「あれ？秘書艦でも一緒に昼飯を食べた事なかったですよね？」

提督「そういえばそうだな。なかなか新鮮な気持ちだ」

伊勢「(ていうことは、わたしが初めて一緒に食事をした相手になるんだ。例の競争も

しかしてわたしが一歩リードかも！)」

提督 「どうかしたか？」

伊勢 「いいえ。なんでも」

提督 「そうか？」

伊勢 「ええ。ご馳走様でした。ありがとうございます」

提督 「こちらとしても美味しく食べてもらえたようで何よりだ」

伊勢 「本当に美味しかったですよ。また食べてみたいですね」

提督 「食べたくなったら言いに来い。材料があつたらまた作ってやる」

伊勢 「え！本当ですか!？」

提督 「やけに食いつくな。そんなに気に入ったか？」

伊勢 「え？あ、はい。結構」

提督 「そうか。作った甲斐があつたな。また一緒に食べよう」

伊勢 「はい！失礼します」 バタン

——扉の向こう。

伊勢 (おお!?!これは伊勢さん一歩どころか大きくリードしたかも!) ガッツポーズ

伊勢 「く♪」 ルンルン

——執務室。

提督（鼻歌が聞こえたような。
伊勢の奴かなり気に入ったみたいだなこれ。誰かの為
に飯をつくるのも良いもんだな）

第10話 「改造」

提督「改造ができない？」

鳥海「はい。なんでも利根型の上位改造は極めて機密性の高い新鋭の技術を用いる為、本部が認める程度の戦果を挙げた者にしか改造許可は下りないそうです」

提督「それがこの勲章というわけか」

鳥海「そうです。大佐は残念ながら一隻改造する為に必要な勲章が一つだけ足りないみたいです」

提督「なるほどな。仮にもし改造できたとしても、今の所持数じゃ利根か筑摩のどちらか一隻だけだったというわけか」

鳥海「最近一時的に確認された海域を最深部まで制圧できていれば何とかなつたかも知れませんが」

提督「それこそ無理だつただろう。今の俺たちの戦力ではあそこまでの制圧は不可能だつた」

提督「どちらかというとなが我が艦隊は守りに向いているからな。無策な強行ほど怖いものはない」

鳥海「はい……」

提督「利根に筑摩もいいな？ 気にするな」

利根「大佐、誠に申し訳ないのじゃ……」

筑摩「ぐす、大佐ごめんなさい……」

提督「だから気にするなと言っているだろう？ それに原因を挙げるとしたら結局は

俺が碌に出撃しないで勲章を軽視していた所為だ」

利根「そんな。大佐は……！」

筑摩「そうです。大佐は悪くありません！」

提督「分かった。分かったからもう泣くな。お互い様だ。いいな？」

利根・筑摩「はい」

提督「よし。今日2人は非番でいい。ゆっくり休んで英気を養え」

利根「了解。忝い……」

筑摩「ありがとうございます。失礼ます」

トボトボ

提督「ふう……」

鳥海「2人とも凄い落ち込み様でしたね」

提督「無理もないだろう。重巡の中で衣笠が先んじて改二になってから随分待たされていたからな。」

提督「俺だつてこう見えて結構唾然としてる」

鳥海「そうですね」

提督「だが、遅かれ早かれ重巡も含めて全ての艦娘が改二に何れなる筈だ。鳥海もあまり気にせず待つていてくれ」

鳥海「え？わ、わたしは別に気にしてませんよ？」

提督「そうか？ まあそれならいい」

提督「さて、改造の予定がなくなつたおかげでこちらの時間も余つてしまつたな」

鳥海「ふふ。何処か気晴らしに行きますか？」

提督「そうだな。せっかくだから落ち込んでる利根達も誘つてみるか」

鳥海「いいと思います。それじゃあ何処に——」

コンコン

提督「ん？」

B i s 「大佐、居ますか？ビスマルクです」

提督「マルクか。入つていいぞ」

B i s 「失礼します」

鳥海 「あら？ マルさんは今日は近代化改装の予定じゃなかったの？」

B i s 「え、ええ。そうだったんだけど……」

提督 「どうかしたのか？」

B i s 「その、私の改装のことで話が」

第11話 「勲章」

提督「ふむ。つまり俺は元々勲章を7個持っていたと」

Bis「そうなの。この前の出撃よりもう少し前に一時期確認されてた海域があったじゃない？」

提督「ああ。丁度鳥海と話していたところだ。それがどうした？」

Bis「あの海域、最深部までは攻略できなかつたけど確かその一歩手前くらいまでは行けてたわよね？」

提督「ああ。あまり気乗りはしなかつたが、出撃してみると意外に順調に進撃できたな。新入りも見つけることが出来たし」

鳥海「天津風ちゃんと明石さんですね」

Bis「まあその子たちの事は置いといて。で、その一歩手前までの海域なんだけど実は攻略成功者は勲章授与の対象だったの」

鳥海「提督？」

提督「いや、俺もそれは知らなかつた。というより勲章自体授与されてなかつたからな」

B i s 「あ、あの。別に隠していた訳じゃないの。あの時って確か私が秘書艦だったじゃない？」

提督 「ああ」

B i s 「丁度その時に。大佐宛に特定海域攻略の褒美ってことで勲章が届いていたの」

鳥海 「勲章が届いたということは。その限定海域が消失した後という事ですか？」

B i s 「そう。私は伝令くらいしかやることがなかったから直ぐに大佐に報告しようとしたわ。でも……」

提督 （何か嫌な予感がするな）

鳥海 「でも？」

B i s 「大佐、凄い数の書類の山の中で机に突っ伏して寝てたの」

提督 「……」

提督 （そういえばあの時一瞬意識が遠のいていた記憶があるな）

B i s 「私大佐の手伝いをしようと思ったけど事務の仕事とか教えてもらってなかったからどうしようもなくて……」

B i s 「かと言って勲章も届けずにその場を去ることもできなくて。だから……」

鳥海 「どうしました？」

B i s 「直ぐに気付けるようになって大佐の服のポケットに勲章を入れておいたの」

提督 「……」ゴソ

提督 (あつた)

B i s 「ごめんなさい！ 私その事を今の今まですっかり忘れていたの！」

提督 「いや、マルク。そんなに謝らなくていい。そもそもそれは——」

鳥海 「そうですね、マルクさん。そもそもそれは、大佐が私達の事を信用してくれなくて一人で全部仕事をやっていた所為なんですから」

提督 「鳥海、それは違——」

鳥海 「そうですね？ 大佐」

提督 (鳥海の奴、顔は笑ってるんだが明らかにこれは怒ってるな。こいつこんなに威圧感があつたのか)

提督 「まあ…… その、悪かった。マルクもすまなかつたな」

B i s 「え!? そんな。大体今回は私が全体的に——」

鳥海 「マルクさん、ここは素直に大佐の謝意を受けておいて下さい」

B i s 「でも流石にそれは……」

鳥海 「こういう事の積み重ねが今の私には大切なんです。ね? そうですね大佐?」

提督「はは、ああそうだな。最近の前たちには思い知らされることばかりで困る」

提督「そういうことだマルク。これからはもう少しお前の事頼りにさせてもらつていいか？」

B i s 「は、はい！了解よ。このビスマルクに任せてちょうだい！」

提督「ああ。よろしく頼む」

B i s 「あの、それで大佐。実はもう一つ報告があるのだけど……」

提督「ん？」

B i s 「私が近代化改装を受けずに、ここに来た理由がもう一つあるの」

鳥海（もしかして……）

B i s 「大佐、私も利根たちと同じように改二の改造を受ける事ができるの。でもそれには……」

提督「ふむ。もしかして、か？」

B i s 「そう。私の改造にも勲章が必要なの」

第12話 「一緒」

利根「なるほど……の」

B i s 「勲章は7個だけだけど、貴女たちのどちらか一人は改造を受けることができ
るわ」

利根「お主はいいのか？マルさん」

B i s 「私は今回もいいの。勲章の事を忘れていた件もあるし」

利根「そうか…… 筑摩、どうする？」

筑摩「私は勿論姉さんにお譲りします。強くて格好良い姉さんを見るのが楽しみで
す」

利根「そうか。吾輩は筑摩よりお姉さんだからな。姉としての威厳は必要じゃな」

筑摩「そうですよ姉さん！遠慮する必要なんてないわ」

利根「うむ。それでは、この勲章は……」

利根「マルさんに譲る事にする！」

B i s 「え!？」

筑摩「姉さん!？」

B i s 「何を言ってるのよ！ 貰うわけにはいかないわ！」

利根 「まあ、そう言わないで受け取ってもらえないかマル」

B i s 「でも、それじゃ貴女達が……」

利根 「今回の事、正直にこうして話してに来てくれて嬉しかった」

B i s 「なら受け取りなさいよ」

利根 「マルには悪いがそうはいかないのだ。何故なら利根と筑摩は姉妹なのだから」

B i s 「……」

利根 「改造を受けるときはやつぱり一緒にやないと吾輩は嫌なのじゃ」

筑摩 「ね、姉さああああああん！」ポロポロ

利根 「よしよし筑摩。改造、結局もう少し先の事になりそうじゃが、我慢してくれる

か？」

筑摩 「はい！利根姉さんは…… 姉さんは、やつぱり筑摩の自慢の姉ですうう！」

利根 「よさぬか筑摩。恥ずかしいではないか」ナデナデ

利根 「というわけ故、マルさん申し出は大変嬉しいが、今回はお主が使ってくれぬか

？」

筑摩 「わたしからも願います。これはマルさんが使ってください」

B i s 「もう、そこまでされちゃったら受けるしかないじゃない」

利根「おお、貰ってくれるか」

B i s 「ええ。ありがたく頂戴するわ。D a n k e !」

利根「うむ。こちらこそ Dank じゃ」

B i s 「それじゃ、残りの勲章は大佐に預けるわね。利根に筑摩、貴方たちは必ず二人一緒に改二になりなさいよ！」

B i s 「そして、その時は絶対に私も呼んでよね！」

利根「うむ。約束じゃ」

筑摩「わたしもマルさんに約束します。二人の晴れ姿、必ずご覧に入れてみせます」

B i s 「楽しみにしてるわね。あ、それとこれはお誘いなんだけど」

利根「む？ なんじゃ？」

筑摩「なんででしょう？」

B i s 「大佐と鳥海が気分転換に何処か出掛けないかって言ってるの。一緒に来ない？」

利根「何と、大佐も一緒か。これは行かねば、もう筑摩？」

筑摩「ええ、そうですね。こんな珍しい組み合わせ滅多にありませんから」

B i s 「決まりだね。さあ大佐の所へ行きましよう」

〈同時刻、執務室〉

提督「なあ鳥海」

鳥海「なんですか？ 大佐」

提督「誰が今回改造を受けると思う？」

鳥海「なかなかズルイ質問ですね。そんなの答えなくても大佐だって分かってるんじゃないんですか？」

提督「そうだな。利根だからな」

鳥海「利根さんですからね」

提督「さて、出かける準備をする前にマルクの改造の予定を立てておくか」

鳥海「了解です大佐♪」

第13話 「お出かけ」

イムヤ「あ、大佐だ」

提督「イムヤか」

利根「何をしておるのじゃ？」

イムヤ「ハっちゃん達と宝探しをしてるのよ」

鳥海「宝探し？」

イムヤ「そうよ。海底って陸と違って色んなものがあるの」

イムヤ「その中でも特に面白そうなを探してるってわけ」

筑摩「面白そうね。私もやってみたいけど海には潜れないからなあ……」

利根「なんじゃ？ 筑摩は泳げないのか？」

筑摩「え、いや泳げますよ。勿論」

提督「そういえばイムヤ達を除けば全ての艦娘は常に海面に浮いているな」

提督「泳げない奴なんているのか？」

B i s「そこでなんで私を見るのよ？ もしかして戦艦の私は重いから泳げないとか

思っているのじゃないかしら？」

提督「いや、そこまでは言っていないだろ」

鳥海「そうですよ。浮いているといつても常に海上で戦っているわたし達が泳げないわけではないじゃないですか？」

イムヤ「え〜？ ホントに〜？」

筑摩「な、なんですか。その言い方は泳げますよ!？」

B i s 「そ、そうよ！私こう見えて普通に泳ぐだけだったら貴方に負けない自信があるのよ？」

筑摩「そ、そうです。私だって水泳は負けません！」

利根「何と。筑摩たちはイムヤ達より速く泳げるといふのか？」

B i s ・筑摩「「え？」」

鳥海（あ、墓穴掘ったみたい）

B i s 「いや、まあそうね。うん」

筑摩「調子が良い時ならまあ……」

提督「凄いな。流石艦娘と言ったところか」

B i s ・筑摩「「う……」」

鳥海（大佐の無自覚の賞賛がプレッシャーになつてみたいね）

利根「うむ。天晴じゃ。これは是非見てみたいな！」

B i s ・筑摩 「「えっ?」」

鳥海 (ここにも天然がいた!)

イムヤ 「そうね。そこまで言われちゃったら潜水艦としてイムヤも黙ってられないわ」

B i s 「い、いえ、そこまで本気にしなくてもいいのよ?」

筑摩 「そ、そうですよ? わたし達だつてムキになつて少し申し訳ないと思つてるし」

利根 「何をいうかマルさん、筑摩!ここは一つ海上の軍艦を代表して水泳で勝負してみせい!」

B i s ・筑摩 「「え、ええええええ!」」

利根 「吾輩は天晴な泳ぎを見せる筑摩とマルさんが見たいのじゃ」

利根 「吾輩はそこまで泳ぎは得意じゃないから二人が羨ましいぞ」

筑摩 「ね、姉さん……」

B i s 「うぐ……」

利根 「というわけで大佐。今度何とか都合をつけて水泳大会を開いてほしいのじゃが」

提督 「大会? 3人の勝負じゃないのか? なんか規模がでかくなつてるぞ?」

利根 「どうせやるなら団体戦がいいのじゃ。さつきからイムヤも目をキラキラさせて

おるぞ?」

イムヤ「いいわね。あたしたち潜水艦の力見せてあげるわ! 早速ハっちゃんたちに相談してくるね!」

B i s 「え、ちよ。ま……」

筑摩「行つてしまいましたね。速い……」

鳥海（これ勝てないでしょ）

提督「ふむ。マルクたちもあそこまで速く泳げるのか」

鳥海（た、大佐……）

利根「大佐、頼めるかの? 大会」

提督「まあ、考えてみる」

鳥海（検討しちゃうの!?)

B i s ・筑摩「……」

利根「2人とも静かに燃えているようじゃな。楽しみじゃ!」
鳥海（二人とも今回は本当に運が悪かったわね）

第14話 「思案」

加賀「大佐、水着大会を開くそうですね？」

提督「なんなんだいきなり。それと言い方に物凄く意図的なものを感じるんだが」

提督「水泳大会だ。間違つても外で水着大会なんて言うんじゃないぞ。軍人としての資質を疑われる」

加賀「大佐は私の水着見たくないのですか？」

提督「お前も出るつもりなのか」

加賀「勿論」

提督「悪いが催し自体はまだ検討中だ。基地を挙げての水泳大会なんて本部ですら前例がないからな」

加賀「まあ開催が簡単ではないのは解ります」

提督「先ず第1に本部が許可するとは思えないからやるとしたら秘密裏でないといかん」

加賀「いきなり難問ですね」

提督「ああ。不正はしたくないが現実的に考えて決行するにはこれしかない」

提督「第2、許可なしでやる以上発覚に細心の注意を払うのは当然だが、それと同時に催し中でも有事の際は即対応できるようにしなければならぬ」

加賀「当然ですね」

提督「第3、これは第1と内容が少し被るが、秘密裏に行う関係上その最中の鎮守府は一見いつも通りに見えなければならぬ」

加賀「これが一番難しい様な気がします」

提督「常に交代で周辺の警備を装い警戒する必要があるな」

提督「第4、競技を何処ですか」

加賀「1・2・3の時点で海は外れますね」

提督「そうだ。だからやるとしたら絶対にプールだ」

加賀「そんなもの基地にはありませんが」

提督「作るしかないだろうな。建造妖精たちに頼んで」

加賀「頼むのは私たちに任せてください」

提督「いや、それは俺も一緒にやる。一応提督だからな部下だけに任せるわけにはいかない」

加賀「分かりました」

提督「そして最後、第5だが水泳に適した温暖な気候。これはまあ……」

加賀「ええ。我が鎮守府では問題にはならないですね」

提督「これくらいか。何かあるか？」

加賀「そうですね。私としてはやはり本部の許可を頂き堂々と行いたいです」

提督「今までの議論が全て無駄になるな。だがまあ最もだ。それが一番には変わりない」

加賀「許可さえ取れば一時的にこの鎮守府周辺の安全の保障を何らかの形で取り付ける事も可能でしょうし」

加賀「何より開放的な気分で海で泳げます」

提督「最後のがなかったら極まっていたのにな」

加賀「惚れていました？」

提督「飛躍し過ぎだ」

提督「だが、許可か……。そうだな無理を承知で伺いを立ててみるか」

加賀「いえ、伺う以上許可を得られなければ本部に疑いを持たれる可能性があります。そうなたては秘密裏に行う事も難しくなるでしょう」

提督「失敗は許されない、と？」

加賀「いえ、失敗は有り得ません。結果が決まった気持ちでやらなければ」

提督「さつきから気になっていたが、何でそんなに気合が入ってるんだ」

加賀「泳ぎたいからです。大佐に水着を見せつけたいからです」
提督「俺は今の言葉で許可を貰う自信がなくなりそうだ」

第15話 「結果」

提督「許可が下りた」

加賀「やりました」グツ

金剛「やったネ！これで大佐を悩殺してイチコロにできるネ！」ブイツ

提督「金剛、お前何時から居た」

加賀「そこは譲れません。金剛さん、その発言宣戦布告と見なします」

金剛「フフフ、ワタシの win は揺るがないワ！今のうちにハンカチを用意しておくといいいネ加賀！」

提督「金剛、お前も頭の中身は加賀と一緒にか」

金剛「ノンノン。大佐への love は加賀に絶対勝ってるから一緒にゃないネ！」

加賀「流石に頭にきました。覚悟はいいですか？ 金剛さん」

提督「お前たち、それ以上騒いだら当分の間秘書艦候補から外すぞ」

金剛・加賀「……」ピタッ

提督（全く、二人ともこれで有能なのだから質が悪い）

加賀「ですが大佐。私が言うのもなんですがよく許可が下りましたね」

提督「ああ。この前の出撃とその戦果報告のおかげだ」

加賀「と言いますと？」

提督「あの時の出撃でかなり深海棲艦達を一掃しだろうか？ その後に索敵を何重も行った」

金剛「そうネ。お蔭でクリアした海域はとて *silent* になったヨ」

提督「そのことをしっかり報告書としてまとめ提出しただけだ。本部も実際に静かになったその海域を確認して結果に満足したらしい」

提督「その結果、自己責任で大会開催中最低限の警戒を怠らないなら、1日のみ許可するというお言葉を頂けたわけだ」

金剛「さつすが大佐ネ！」

加賀「感動しました」

提督「正直、予想以上に上手くいって俺も驚いている。だがこれで心置きなく大会を開けるのは本当にありがたいな」

金剛「それでそれで。 *When is start up?*」

提督「それは一度簡単な会議を開いて決めるつもりだ。もう少し待て」

金剛「待ち遠しいネ♪」

加賀「そうね。でもしつかり計画を立てるのは大切だわ」

提督「その通りだ。開催の日取りが決まったら全員に通達するから、それまで大人しく待っているように」

加賀・金剛「了解しました」「了解ネ！」

金剛「あ、大佐。フェスティバルには大佐も参加して下さいネ？」

提督「ああ勿論。一観客として参加する」

金剛「ノンノン。大佐もフェスティバルに参加ヨ？」

提督「……なに？」

加賀「金剛さん、貴女何を言ってるのかしら？」

提督「そうだぞ金剛。いくら人間と同じように泳ぐからといって、基礎身体能力が違うのだから俺が敵うわけがないだろう」

金剛「ダイブならそんなに差は出ないと思いません」

提督「いや、それでも無理だろう」

加賀「そうよ。無理にさせるのはよくないわ」

金剛「そうデスカー……。ビクトリーとか別にいいから一緒に swim したかったデス……」

提督「……分かった。自由時間に泳ぐだけだぞ？ 競技には参加しないからな？」

金剛「！ ノープロブレムね！サンキューネ大佐♪」パアア

加賀「全く仕方のない……」ニマニマ

金剛「それじゃ大佐。you lose の時は anything my wis
h を聞いてもらおうヨ！」

加賀（エニシング…… なんでも？）

提督「おいお前何言つてー」

金剛「ジャー bye ネ、大佐！」バタン

加賀「了解。失礼します」バタン

提督「な、待て加…… 賀」シーン

提督（ハメられた……）

第16話 「釣り2」

Z1 「釣れてる？ 大佐」

提督 「レイスか」 ↑名前が長いので提督が適当に略した

Z1 「なんか落ち込んでる？」

提督 「まあそうかもしれない。少し疲れてた」

Z1 「無理はしてはいけないよ？」

提督 「ああ。体力は大丈夫だ。ただちよつと頭がな……」

Z1 「風邪かい？」

提督 「風邪だったらまだよかつたかな」

Z1 「一体どうしたの？」

提督 「俺も今度の水泳大会参加することになった、らしい」

Z1 「え？ ホント!？」

提督 「ああ、まあな。泳ぐしかない……よな」

Z1 「僕たちと泳ぐのが嫌なの？」 シュン

提督 「そうじゃない。俺じゃお前たちには勝てないだろう？」

それが分かってて参加

するのみな」

Z1「なんだそんなことか！大丈夫僕が手伝ってあげるよ」

提督「手伝う？」

Z1「大佐は結果が分かった勝負をするのが嫌なんですよ。　　だったら僕がそうならないように手伝ってあげるよ」

提督「具体的にどういう風にだ？」

Z1「僕の推力を一時的に少し分けてあげる」

提督「推力を分ける？」

Z1「僕たちが海上で戦う為の加護みたいなものだよ」

提督「水の上に浮いているあの能力の事か」

Z1「うん。それも加護の一つだね」

提督「分けられるものなのか？」

Z1「うん。一時的になら大丈夫だよ。効果の時間もある程度調整ができるんだ」

提督「反則のような気もするが」

Z1「生身じゃ勝つのが難しいのは分かってるんですよ？　　だったらちよつとくらい僕たちに条件を近づけても問題ないと思うよ」

提督「む……。そう、か？」

Z1 「うん大丈夫だよ。それにそこまで反則的に速くなるわけじゃないよ？」

提督 「具体的にどうなるんだ？ 推力とか言ってたな」

Z1 「通常泳いで進む距離の感覚が少しだけ短くなる感じ」

提督 「なるほど。浮くわけじゃないんだな」

Z1 「うん。そうだよ。あ、でも明らかに人間の泳ぐ速さは超えるから感覚に注意してね」

提督 「なるほど。自分の感覚より速度が出ている状態で障害物にぶつかったりしたら危ないからな」

Z1 「そういう事。あと加護を受けても艦娘の身体能力が優れている事には変わりないから過信は禁物だよ？」

提督 「そうだな」

Z1 「あと良い勝負ができるかは大佐の水泳の実力次第だね。どうかな？ この提案」

提督 「そうだな。レイス手伝って貰えるか？」

Z1 「うん！ 勿論だよ！」

提督 「ただ、手伝って貰う上で一つだけ許してほしい事がある」

Z1 「？ 何かな？」

提督「大会に参加する前に予め俺がその加護を受けることを皆に公表させてほしい」
提督「実際に泳いだら直ぐにバレるだろうし、受けるなら受けるで皆にはそれを納得してもらった上で競技に臨みたいからな」

提督「どうだ？ 許してもらえるか？」

Z1「答えるまでもないよ。大佐ならそうすると思つてし」ニコツ

提督「そうか。ありがとう」

提督「ところで加護を分かるといっても具体的にどうやって分けるんだ？」

Z1「僕の手を握つて」

提督「こうか？」ギユ

Z1「うん。少しだけ待つてね……」スウー

提督に手を握ってもらったレイスは目を瞑想するかの様に静かに瞑ると深く深呼吸をした。

するとレイスの体が淡く青い光を帯び始め、やがてその光は2人を包み込んだ。

Z1「はい。終わり」

目を開けたレイスはいつも通りだ。

提督「これでいいのか？」

Z1「うん。終わったよ。効果は10分くらいかな？」

提督 「特に変わった気はしないな」

Z1 「陸にいる分には分からないと思うよ。ちよつとそこの海面を軽く掌で風いでみて」

提督 「こうか？」 チャプ…… サツ

ザアアアア

提督 「ほう」

Z1 「ね、凄いでしょ？」

提督 「なるほどな。レイスありがとう。当日も頼む」

Z1 「うん任せて！あ、それとね大佐」

提督 「ん？」

Z1 「替わりというわけじゃないけど一つだけお願いを聞いてもらっていいかな？」

提督 「協力への対価は当然だ。無理じゃない内容ならいいぞ」

Z1 「うん。ありがとう、たぶん大丈夫」

Z1 「その、僕の頭に掌を置いてもらっていいかな？」

提督 「……… ころか？」 ポン

Z1 「あ……… うん。ありがとう。ちよつとだけこうしてもえる？」

提督 「ああ」

提督（こうしてみると本当に年相応の子供だな……）

第17話 「お酒」

コンコン

提督 「ん。入っていいぞ」

霧島 「お邪魔しにきました。大佐」

提督 「今日は霧島か。これをしに来たのか」クイ

霧島 「ええ。宜しければ」

提督 「歓迎だ」

——今日の晩酌開始。

提督 「……ふう。そういえば霧島、一つ訊きたい事があるんだが」

霧島 「何でしょう？」

提督 「お前たちが此処へ晩酌に付き合いに来てくれるようになってから気になっている事があるんだ」

霧島 「気になる事？」

提督 「ああ。何故いつも来るのは1人だけなのかと」

提督 「こちらとしても人数が少ないのは自分のペースを保ち易いし問題ないんだが、ただな」

霧島 「ええ」

提督 「お前たちの中には特に酒好きなのが何人かいるだろう？」

霧島 「ああ、隼鷹とか足柄ですね」

提督 「そう。そういう奴に限ってこういう場は逃さないものなのではないかと思つてな」

霧島 「成る程。仰りたいことは分かりました」

提督 「何か理由を知っているか？」

霧島 「結論から言いますと。知っています」

提督 「ん、その口ぶりだと理由は話せない感じか」

霧島 「隠しているつもりはないんですが…… 知りたいですか？」

提督 「無理に聞くつもりはないぞ」

霧島 「じゃあ、ちよつとした戯れをしませんか？ それに勝つたら話します」

提督 「ほう。なんだ？」

霧島 「これです」 スツ

提督 「違い刺しか」

霧島 「ええ、そうです。零さずに飲むことができましたら勝ちです」

提督 「制服を汚すわけにはいかないな」

霧島 「あ、やっぱりそうですよね」

提督 「ああ。脱ぐからちよつと待ってくれ」カタ

霧島 「え？」

提督 「よし、やろうか？」

霧島 「」

提督 「霧島？」

霧島 「あ、えつとごめんなさい。まさか乗ってくるとは思わなくて」

提督 「ああ。制服を脱いだことか？ まあ今日は当直でもないしな」

提督 「自分らしくもなくハメを外してみた。お前が乗り気でないならやらないが？」

霧島 「いえ！自分から言い出したことですし初めてなのでやってみたいです！」

提督 「俺が最初の相手でいいのか？」

霧島 「望むところです！」

提督 「何か気合が入ってるな。どうしたんだ？」

提督 「そうか分かった。酒はこれでいいか？」

霧島 「ええ。飲んでみて特に抵抗はなかったので大丈夫だと思います」

提督「ん、では？」スツ

霧島「はい大佐」スツ

提督・霧島「……………」

提督・霧島「いざ」

提督（ゴク……………ゴク……………）「んぐ、っ」ゴフ

霧島（コクコク……………ツ）「ん……………」

提督「ふう。俺の勝ち、か？」ゴシゴシ

霧島「……………」ポー

提督「霧島？ おい大丈夫か？」

提督（酒が合わなかったか？）

霧島「……………はっ!？」

提督「大丈夫か？ 気が遠くなっていたみたいだが？」

霧島「ああ、いえあのその……………大丈夫です！」キツパリ

提督「本当か？ 無理はするな。話すのはまた今度でいいから今日はもうここまでで

いいぞ?。」

霧島「あ、いえ。思いの外、提督の飲ませ方が上手くて驚いてしまいました」

提督「ああ、あれは俺も我ながら上手くいった思った」

霧島 「ですからその大丈夫なんですけど、その……」

霧島 「うん！ ごめんなさい！ 今日はこちらまでにさせて貰ってもいいでしょうか？」

提督 「気にするな。こちらとしては楽しかったからな。またやろう」

霧島 「はい。是非！」

霧島 「あー、じゃなかった？ えっと、申し訳ありません。自分から言い出したことなのにな」

提督 「大分混乱していないか？ 部屋まで一人で戻れるか？ 誰かつけるが」

霧島 「だ、大丈夫です！ それでは失礼します！」 バタン

提督 「……」

提督 （本当に大丈夫か？）

第18話 「秘密」

く 金剛姉妹の部屋

霧島 「くくく」

金剛 「あんなに浮かれた霧島を見るのは初めてです」

比叡 「そうですね。明らかに私達の知る霧島じゃないですよ」

榛名 「でもニコニコして幸せそうです。何か良い事でもあったのかな」

金剛 「比叡と榛名も何があったのか知らないですよ」

比叡 「わたしは昨日はやく寝ちやいましたからね」

榛名 「榛名はずっと本を読んでいたの。金剛お姉様も知らないのですか？」

金剛 「ワタシは昨日ずっと装備の紅茶のブレンドを試してましたからね。分からないのよ」

比叡 「直接本人に聞くしかないようですね」

金剛 「そうネ。聞いてみまショウ！」

金剛 「霧島あ」

霧島 「何ですか金剛お姉様？」

金剛「随分機嫌が良さそうネ。何かあったノ？」

霧島「え？そ、そんなに機嫌が良さそうに見えます？」

金剛「もう、very very happy て感じヨ？」

霧島「そうですか？ えへへ」テレテレ

金剛「Oh……霧島、一体何があったのですか？ お姉ちゃんは教えてほしいデ

ス

霧島「別に特に何かあったわけではありませんよ。昨日の夜、大佐の晩酌にお付き合
いしただけです」

金剛「晩酌？ ああ、今足柄達の間で流行ってる晩酌ジャンケンの事？」

霧島「そうです。私もあれに参加してるんです」

金剛「そうだったノ」

榛名「金剛お姉様はお酒を飲まれないのですか？」

金剛「飲めない事ないけど美味しく感じないから苦手なのヨ。私は紅茶の方が好き
ネ」

霧島「金剛お姉様も大佐とお酒が呑めるようになればきつと楽しいですよ」

金剛「そっか。霧島が機嫌が良かったのはお酒を飲んでたからなのネ」

霧島（あ、何だか上手い具合に勘違いしてくれてる気がする）

金剛「うーん…… ちょっとだけ、頑張ってみようカシラ」

比叡「そういう事ならわたしお手伝いしちやいますよ！　ね？　榛名」

榛名「はい！　榛名も精一杯頑張ります！」

金剛「2人とも本当に　Thank you　ネ！　それじゃ早速始めるワヨ！」

榛名・霧島「え？」

比叡「了解です！　まず何から始めますか？」

榛名「え？　あの？　姉様達、一応榛名達は今待機任務中なんですけど……」

金剛「Shit！　そうでした。私としたことが」

比叡「むむ。でも軽めのやつなら少しくらいは——」

霧島「大佐に言いつけますよ？」

比叡「ひえ〜」

霧島「ちゃんと飲んでも問題ない時にして下さい」

榛名「お姉様、規則は守りましょう？」

金剛・比叡「ハイ」「はい」

比叡「それにしてもお酒を飲んだだけでそんなに気分が良くなるなんて、もしかして

霧島は大佐と何かあったんじゃないの？」

金剛「What!?!　霧島、何かってナニ!?!」

霧島「なっ!? 何を言ってるんですか姉様達と榛名は!？」

榛名（あ。赤くなった。え、もしかして……!?)

比叡「ああっ!霧島、やっぱり貴女何か知ってるのね!？」

金剛「霧島あ教えるヨ! お姉ちゃんに lecture しなさい!」

霧島「な、何も知りませんから本当に勘弁して下さい!」

霧島（ごめん姉様達と榛名。できればあれは霧島だけの思い出ししたいの）

第19話 「褒美」

那智「大佐、どうだ？ 私の隊の動きは？」

提督「ああ、相変わらず動きが機敏で隙が少ないな」

那智「隙が無い、とは言ってくれないんだな」

提督「隙が無い艦隊なんてないからな」

那智「うむ、違くない。頭から根拠もなく自信を持っていては、それはただの慢心だからな」

那智「隙を見せまいと常に用心してこそ立派な軍人というものだ」

提督「最近は島風もよく従って戦果も上々らしいな」

那智「ああ。あの問題児、一時は私の隊では持て余すかと思っていたが、今では立派に駆逐艦としての役割を果たしてくれている」

那智「ほら、噂をすれば影有りだ」

島風「あー！大佐ー！」タタタツ

提督「島風、頑張ってるみたいだな」

島風「うん。わたし頑張ってるよ！ 武功第一だつてたくさん挙げてるんだから！」

提督「そうか。凄いな」

島風「えへへー。そうでしょー？だからわたしご褒美が欲しいな」
那智「な」

提督「褒美？」

島風「そう！ 頑張ったご褒美！」

提督「武功を挙げる度に褒美をせがまれても困るぞ？」

島風「大丈夫！物をもろうわけじゃないよ」

提督「じゃあどんな褒美が欲しいんだ？」

島風「レイスちゃんみたいにして欲しいの！」

提督「レイスみたいに？」

提督「なんだ？ 俺は何かあの子に何かしてやったか？」

提督「何をして欲しいんだ？」

島風「わたしの頭をポンポンして欲しいの！」

提督「ポンポン？ ああ……………」

提督「これでいいか？」ポン

島風「あ…………… えへへ、気持ち良い♪」

提督（まるで犬だな。撫でてみるか）

提督「そうか。これはどうだ？」ナデ

島風「んん？ あ…… すっごく気持ち良い！」

提督「そうか。よかった」

島風「大佐ありがとう！ 次もやってね！」

提督「ああ。これくらいだったたら構わないぞ」

島風「ホント!? やったあ♪」

島風「よーし何かやる気出てきたあ。那智さんちよつと走つて来ていい？」

那智「……」ジー

島風「那智さん？」

那智「え？あ、ああ。いいぞ」

那智「今日はもう演習もないからな。だが程々にしとけよ？」

島風「はい！ 行つてきまーす！」タタタツ

提督「相変わらず元気の塊のような奴だな」

那智「そう…… だな」

提督「那智？ どうした？」

那智「ああ、いや。その、さっきの褒美の撫でるやつだが」

提督「うん？」

那智「あれは全員にやっているのか？」

提督「いや、今のところレイスと島風だけだ」

那智「そうか。大佐、それは…… 駆逐艦にしかやらないのか？」

提督（那智の奴どうしたんだ？ 齒切れが悪いな）

提督「まあ、見た目が子供に近いのは駆逐艦だけだからな。やるにしても駆逐艦にした方が自然な感じがするが」

那智「そうかもしれないが、別に重巡の中にもやって喜ぶ奴だって居ると思うぞ？」

提督（まさか）

提督「……」

那智「……」ジツ

提督「那智」

那智「な、なんだ？」

提督「少し近くに」

那智「！ ああ、分かった」トトツ

提督「……」ソツ

那智「ん……」

那智「もう、いい十分だ……」大佐

提督 「ん？」

那智 「ありがとう」

提督 「ああ」

第20話 「発覚」

瑞鶴「何よ……これ」ペラッ

瑞鶴（開くページ開くページに半裸の男が笑顔でポーズを取ってる）

瑞鶴（表紙は男物ファッション誌っぽいけど、それにしても表紙ですらなんかちよつとアレな感じがする）

瑞鶴（大佐は殆ど基地にいて、軍服を着てる姿しかわたしは見ることがない）

瑞鶴（つまり大佐はファッション以外の目的でこの雑誌を持っていたことになる）

瑞鶴「これは……っ」

瑞鶴「大佐！ 大佐！ ちよつと起きなさい!!」ユサユサ

提督「ん…… 瑞鶴か。すまん寝てしまっていたか」

瑞鶴「そんなことはどうでもいいの！ それよりなんなのよこれは!?!」

提督「一体何を騒——」↑瑞鶴が持っている雑誌が視界に入った

瑞鶴「……」

提督「……」

提督「まあ、そのなんだ。命に懸けて断言するが俺はそういう趣味はない」

瑞鶴（何とか平静を装うとしてるけど明らかに狼狽してるわね。でも目は嘘を言つてない）

瑞鶴「じゃあ、なんなの？ これ」

提督「説明するから落ち着け」

提督「ほら、これに座れ」

瑞鶴「……」ムスツ ↑椅子に腰かける

提督「まず端的に理由だけを言う」

瑞鶴「ええ」

提督「男を忘れない為だ」

瑞鶴「！ やっぱり大佐、貴方……！」ガタツ

提督「待て。今のは言い方が悪かった。違う。取り敢えず座れ。落ち着け」

瑞鶴「…… 分かった」スツ

提督「ふう……。この基地は男は俺だけだろう？」

瑞鶴「え？」

提督「正確に言うと、人間の男性は俺だけだろう？」

瑞鶴「え、ええ。そうね」

提督「この仕事をずっとやっているとかな。信じられないかもしれないが、男というも

のがどういふモノであつたか分からなくなつてくるんだ」

瑞鶴「へ？」

提督「分からないというよりは男の姿に関する記憶が薄れていく感じだな」

瑞鶴「え？ え？ どういうこと？」

提督「つまり、男一人大勢の女性に囲まれてる影響で自分が男である自信がなくなつてきてしまつたんだ」

瑞鶴「ええ!?! だつて大佐どう見たつて男じゃない！」

提督「まあ、お前から見たらそうだろう」

提督「だが俺にとっては男に関する情報は偶に無線で上官と話すときに声を確認するくらいだ」

『姿は見えないが、今は話している相手の声は間違いなく男のものだ。俺は今男と話している。だから俺は男だ』

提督「と、軽く自己暗示を掛けないと最近は精神的にきつくなつてきたんだ」

瑞鶴「し、信じられない……」

提督「お前たちの事を狼だと言うつもりはないが、狼の群れの中に立つた一匹だけいる羊の心境と言えれば解り易いか」

瑞鶴「なる……」

「ほむ……」

瑞鶴「じゃ、じゃあこの本は？」

提督「嚴重な本部の検閲を躲して何とか手にいれたお守りのようなものだ」

瑞鶴「これが……？」

提督「そうだ。馬鹿みたいに思うだろうが、それで自分以外の男を認識することで自分が男である自信が持てるんだ」

提督「お蔭で今はすこぶる調子が良い」

瑞鶴「なんか大佐が凄く可哀想になってきた」

提督「やめろ。そんな目で俺を見るな」

瑞鶴「普通、これだけ女子に囲まれていたら喜ぶのが男だと思っただけだ。大佐は特殊なのかしら？」

提督「どうかかな。だが、少なくとも俺はお前たちをちゃんと全員女性だと認識しているぞ？」

瑞鶴「当たり前!!」バシン　↑提督の顔に本を投げつけた

第21話 「会議」

提督「それでは始める。加賀、進行を頼む」

加賀「分かりました。先ず初めに競技に出場する代表選手の選出についてです」

加賀「今回は、現在いる潜水艦組5隻に合わせて代表の選出は各グループ5人までとします」

足柄「代表を選出するグループはどうなっているのかしら？」

加賀「単純に各艦種の組に分けるつもりです」

明石「私とあきつ丸については？」

加賀「競技に参加する意思がある場合は、希望する組に入って貰います」

明石「どうするあきつ丸さん？ わたしは参加したいけど？」

あきつ丸「私も参加したいであります」

加賀「どの組に入りたいですか？」

あきつ丸「雷巡組であります」

明石「なるほど。雷巡組ならわたし達合わせて丁度5人ね」

加賀「雷巡組どうですか？」

北上「問題ないよ」

大井「勿論歓迎よ」

木曾「了解」

最上「僕達はどうしたら？」

加賀「元が重巡なので重巡組はどうですか？ 必ず代表になれるとは限りませんが」

鈴谷「おっけー。熊のんと最上くんは？」

熊野「異論なしですわ」

最上「僕もそれでいいよ」

千歳「空母組はどうします？ 軽空組と分けますか？」

加賀「希望するなら」

龍驤「ええやんそれで。巡洋艦だって重い軽いあるんやから」

鳳翔「どうです皆さん？」

軽空メンバー「鳳翔さんがいいならー」

鳳翔「では、お願いします」

加賀「了解しました」

長波「後はわたし達か」

隴「隴達は数が多いから代表を決めるのが大変そうですね」

加賀「駆逐組は2グループに分かれてください。代表の選出は分類ごとに一隻でどうです？」

陽炎「となると……」

島風「わたしはぜったい出たい！」

霞「最初から止める気はないっての」

加賀「グループについては決まりましたね。まとめます」

加賀「戦艦組・航空組・軽空組・重巡／航巡組・雷巡組・軽巡組・駆逐組A・駆逐組

B・潜水艦組の計9グループになります」

加賀「大佐、宜しいですか？」

提督「ああ、いいだろう」

加賀「では、グループについてはこれで決まりですね」

加賀「代表の選出は各グループで独自に行ってください。決まったら大佐か私に報告を」

加賀「次は勝敗の判定についてです」

加賀「これについては大佐から直接提案があります。大佐お願いします」

提督「ん、一定の距離を泳いで計ったタイムでどうだ？」

提督「単純だが、分かり易いし何より俺の負担が少ない」

艦娘一同「……」

天龍「何も言えねーよそれ言われたら。ま、いいけどよ」

長門「これは誰も文句は言えない、な？」

艦娘一同「異議なし」

飛龍「あれ？ ちょっと待つてよ。大佐も大会に参加してくれんだよね？ 大佐はど

のグループに入るの？」

提督「俺は大会最下位のチームの代表1人と対決する」

初春「ほう。逆シードというやつじゃな」

提督「そうだ。ま、祭りの締めでもあるがな」

加賀「では、判定についてはこれでいいですね」

加賀「ではこれで最後です。あ、開催の日取りについては予定を調整して決まり次第

通達しますので」

加賀「最後に決めるのは、まあ答えは分かり切ってますが、泳ぎの型です」

艦娘一同「自由!!」

加賀「はい決定。以上です。最後に大佐からお願います」

提督「競技に参加しない者も大会の最後に自由時間を設けるからそこで好きに泳いで

くれ。では、解散」

く会議から暫く後の執務室

提督 「ふう……」

加賀 「何とか決まりましたね」

提督 「ああ。あとは開催の日取りだけだ」

加賀 「予定、調整できそうですか？」

提督 「許可を貰った以上は必ず実行する。報告書も出さないといけないしな」

加賀 「了解です。私の水着、期待していて下さい」

提督 「何故そうなる？」

第22話 「づ」飯

赤城「あ、大佐じゃないですか。今日はここでご飯ですか」

提督「俺が食べるのは定食だ。お前はご飯しか食べないのか」

赤城「あはは。おかすが足りなくなるからご飯で我慢しろって言われちゃつて……」

提督（こいつを食事に誘ったらどうなるんだろうな。下手に味を気に入られたらと思うと結果を想像するのが怖い）

提督「ご飯だけで満足できるのか？」

赤城「いえ、おかずも有りますよ？ 一人分なのでこれを5等分して少しずつ食べるんです」

提督「空母赤城とは思えないほどいじましい食べ方だな」

赤城「そうですね？ そう思いますよね？ 私にはもつとエネルギーが必要なんです」

提督「そういう事を言ってるんじゃない。少しは調整して消費を抑えたらどうだ？」

赤城「そんな事ができるならとつくにやっています！」

提督「改善しようとした事はあるのか」

赤城「ありませんよ？」

提督「今しろ。直ぐにだ」

赤城「大佐は私が嫌いなのですか？」

提督「お前と言いい、加賀と言いい、どうしてこう会話の流れが予測困難なんだ」

提督「別に嫌ってない」

赤城「良かった好きなんですよ」

提督「これは突つ込むのはやめておこう。嫌な予感しかしない」

赤城「黙ってしまつて……照れてるんですか？」

提督（艦載機に囲まれて逃げ場を失うつてこいう気持ちなのかもな）

提督「お前は加賀と違つて表情豊かだな」

赤城「あら？ 加賀さんだつて大佐が思っている以上に感情豊かなんですよ？」

提督「そうなのか？俺はポーカーフェイスで言葉の追撃を受けた記憶が殆どなんだ

が

赤城「その時の言葉の節々に感情が籠つてるあるんですよ。分かりませんか？」

提督「言いたいことはまあ分かる」

赤城「流石ですね。ご褒美に少し食べます？」

提督「俺の米はまだ十分に残ってる。ご飯をおかずにしろとでも言うのか」

赤城「え？ おかずもうありませんよ？」

提督「なに？」

提督「……… いつの間に」

赤城「私じゃありませんよ？ 流石に人のおかずに手を付けたりなんかしません」

提督「じゃあ何処に………」

赤城「野良猫発見です♪ 彗星一二最低火力で泥棒猫を艦爆しなさい」

多摩「にやにや!? ちょっと待つにや！ 流石に基地でそれは………！」

赤城「私の艦載機の運用技術甘く見ちゃだめよ？ さ、火傷くらいは覚悟しなさい」

多摩「にやああああ!? ごめんなにや。許し——」

赤城「発進♪」ニコッ

パパパッ 「ニヤアアア!」 ボンボンッ 「アツイニヤアアア!」

提督「……… 恐ろしいな」

赤城「食べ物の恨みは怖いんですよ。まして、大佐の食事を盗むだなんてちよつとお仕置が必要ですよ」

提督「まあ、お前なら問題ないだろう。多摩には悪いが自業自得か」

赤城 「ふふ、話が分かりますね大佐。それで、どうです？ ご飯」

提督 「まだ勧めるか……塩を貰おうか」

赤城 「分かってますね♪」

第23話 「散歩」

提督「川内か？ こんなところで一人で夜戦か？」

川内「いくらわたしでも誰もいない所で夜戦なんかしないよ！ ていうかできないじゃん！」

提督「分かっているじゃないか。で、何してるんだ？」

川内「提督と同じだよ、散歩。気持ち良いからね」

提督「ところで、さつきお前は一人と言ったが本当か？」

川内「え？」

提督「俺には一人で来たようには見えないんだが」

川内「な、なに……言ってる……のよ？ 私此処までずっと一人だったよ？」

川内「わたし以外にだ、誰かいるなんて……そんなわけ」

響「居るよ？」

川内「いやあああああああああ!!」

響「こんばんわ。いい夜だね」

提督「そうだな。だが驚かせ過ぎだ」

響「大佐は驚いてないみたいだけど？」

提督「最初から後ろを着いて来てるのに驚きようがないだろ」

響「気づいてたなら声を掛けてくれたっていいじゃないか」

響「川内を見つるまでちよつと寂しかった」

提督「それなら今度からちゃんと声を掛けるんだな。ところで」

響「何？」

提督「いい加減、お前の前で泣いている川内を慰めてやらないか？」

響「そういうのは男の人の役目だと思うんだけどな」

提督「泣かせた本人が謝罪するのが先だ。そうだろう？」

響「そうだね。うん、ごめんなさい。川内、大丈夫？響だよ」

川内「ひつく、う、う……え？」

提督（さつきまでの会話に気づかず泣いていたのか。響の気配の消し方は大したものだな）

響「川内、ごめんね。ちよつと脅かせたかったんだ」

川内「ば、バカアアアア!!」

くそれから数分後、鎮守府正面入り口付近

川内「大佐、そのわたしが泣いてたのは……」

提督「誰かに言う事ではない。安心しろ」

響「うん。安心して？」

川内「あんたが一番信用できないのよ!!」

提督（確かに）

響「そう？」

川内「そうよ！」

提督「そういえば響も散歩していたのか？」

響「トイレに起きたら窓から大佐が見えたから着いてきたんだ」

提督「そうか。だが、これからはあまり一人で行かないように」

提督「平気かもしれないが一応用心しておけ」

響「大佐だつて一人で散歩してたじゃないか？」

提督「俺は大人だからな。というズルイ言い方はするつもりはない」

提督「これからは誰かに断わつてから行くことにしよう」

響「なら、これから大佐が散歩に行くとき響も一緒に連れて行つてくれないかな？」

2人だつたら問題ないだろう？」

提督「まあ、起きていたらな」

響「了解。頑張る」

提督「頑張るな。寝ろ」

川内「ちよ、ちよっときつきから2人だけで話勧めないでよ！ わたしは連れて行つてくれないの？」

提督「夜戦はできないぞ？」

川内「だからそんな事分かってるってば!!」

響「響は大佐と2人が良かったな」

提督「子供には保護者が必要だ。我慢しなさい」

響「ちえっ」

川内（ほ、保護者？ ていうことはわたしと響のお母さんで大佐が旦那さん？）

提督「ヘソを曲げるな。起きていたらちやんと誘ってやるから」

川内「ちよ、ちよっとまだそれは早いと思うんだけど!？」

提督「川内は一体何の話をしてるんだ？」

響「なんだろうね。お父さん？」

第24話 「練習」

イク「大佐ー遊んでるのー？」

提督「思いの外ぐさりとくる言葉だな。まあお前たちからすればそう見えるかもな」

イク「違うの？」

提督「ああ。水泳の練習をしてたんだ」

イク「大佐泳げないの？」

提督「いや、泳げはするが得意じゃない」

提督「だから練習してもう少しまともになるようにしてるんだ」

イク「そうなの。ねえ、イクがコーチしてあげようか？」

提督「ん？ 教えてくれるのか？」

イク「うん。イクがバツチリ泳げるようにコーチしてあげる！」

提督「それは正直助かるな。頼めるか？」

イク「分かったの！じゃあまずは潜水からね。30mくらい潜って息を止める練習
！」

提督「待て」

イク「え？」

提督「素人にいきなりそれは無理だ」

イク「そうなの？」

提督「ああ。そもそも息を止める必要がない」

イク「あ、そつか。イクったら潜水しか殆どしないから提督にも同じことをさせるところだったの。ごめんね」

提督「いや、いい。肺に空気を貯めるのも必要な技術の一つだからな」

提督「だが、今回は普通に泳ぐ方で頼む。フォームは分かるんだが効率がよくないみたいで直ぐに息が苦しくなってしまうんだ」

イク「分かったの。じゃあクロールでいい？」

提督「ああ頼む」

イク「了解なの。クロールはあ——」

そして数時間後

提督「ふう、どうだ？」

イク「うん。大分体が動くようになってきたの」

提督「そうみたいだな。最初と比べて息が大分楽になった」

イク「息継ぎがきれいにできるようになるだけで大分違うからね」

提督「流石にイクは潜水艦だけあって教えるのが上手いな」

イク「もう提督褒めても何もでないよ？」

提督「いや、もう十分薫陶を貰っている。これだけでもありがたい」

イク「うふふ。でも、大佐も上達は遅くないと思うよ？」

提督「そうか？」

イク「体自体は元々鍛えてたみたいだからイクの教え方にちゃんと着いてこれたみたい」

提督「やはり体力は大事だな。逆は言えば最初の練習はその体力が直ぐになくなるくらい無駄な動きが多かったという事か」

イク「そこまで自分で分かれば。もう一人でも大丈夫だと思うよ」

イク「後はひたすら練習して速くなるだけのはずなの」

提督「そうか分かった。教えてくれて恩に着る」

イク「大佐とイクの仲なの。気にしないで」

提督「いや、お礼をしよう。今度俺がお菓子を作るからそれを貰ってくれないか？」

イク「お菓子!? イク大好きなの!」

提督「そうか。クッキー……は前に作ったな。ケーキは好きか？」

イク「大好き！」

提督「よし、それじゃあ今度作ったら呼ぶから貰いに来い」

イク「わかったの！大佐楽しみにしてるのー！」 チャプンツ

提督「さて、もう少しだけ泳ぐか」

提督「……ん？」

提督（あれはハチか？ 波に寝ながら乗って本を読んでいる）

提督（目はしっかりと本に集中してるのに、よく見ると足で微妙に舵を取ってるみたいだな）

提督（前にレイスが言っていた加護もあるんだろうが、あれが潜水艦の実力か）

提督「……大したものだな」サバツ

第25話 「買い物」

コンコン

筑摩 「大佐、筑摩です」

B i s 「ビスマルクです」

提督 「入れ」

筑摩・B i s 「失礼します」 ガチャ

提督 「どうした？二人とも」

筑摩 「あの…… 大佐にお願いがあつて来ました」

B i s 「私も……」

提督 「なんだ改まつて」

筑摩 「大佐、私達に水泳を教えて欲しいんです」

提督 「ふむ…… 私達つてことはマルクもか？」

B i s 「あ…… はい。そうです」

提督 「やつぱり二人は泳ぎが得意じゃなかったのか」

筑摩 「というより、泳げません……」

B i s 「うん。全然……」

提督 「なに？」

筑摩・B i s 「……」

提督 「全くか？」

筑摩・B i s 「はい……」

提督 「水の中で目を開ける事くらいはできるよな？」

筑摩 「プ、プールなら」

B i s 「水の中で開けるなんて考えられないわ……」

提督 「……」

提督 （これは予想以上に重傷だぞ）

提督 「素直にイク達に教えてもらった方が良くないか？」

筑摩 「つ。そ、それはダメですできません」

B i s 「そうよ……。よりよって艦娘が泳げないなんて。私なんて戦艦よ？」

提督 「じゃあ仲が良い奴ならどうだ？」

提督 「利根なら得意ではないと言っていたが、普通に泳ぐくらいは教えてくれるだろ

う

筑摩 「姉さんに迷惑は掛けられません！」

B i s 「利根にはこれ以上借りはつくれないわよ……」

提督 「そうか……」

提督 (口には出せないがメンド臭い。この様子だと他の仲間でも無理そうだな。)

提督 (いや、マルクがいる時点で全部ダメか)

提督 「分かった。教えよう」

筑摩 「本当ですか!？」

B i s 「約束よ!」

提督 「泳げるようになるくらい、でいいな？」

B i s 「十分よ」

筑摩 「お願いします!」

提督 「そじゃあ何時にするか」

筑摩・B i s 「……」ガタツ

提督 「……今からか？」

くそれから十数分後、鎮守府最寄りのあるお店

筑摩 「大佐、これどうです？」

提督 「ああ」

B i s 「大佐、これなんてなかなか良いと思わないかしら？」

提督 「そうだな」

提督 (即練習をするのかと思つたら、水着を買いに行くとはな)

提督 「なあ二人とも」

筑摩 「なんです？」

B i s 「何？大佐」

提督 「俺が付き合う必要はあるのか？ これ」

筑摩 「できれば第三者の意見が欲しいんです」

B i s 「見た目は重要だからね」

提督 「練習するのに見た目を重視する必要はないと思うぞ？ ほら、この競泳用のや

つでいいんじゃないか？」

筑摩 「えつと、どうせならここで買ったのをそのまま大会で使いたいで……」

B i s 「そうね。その方が手間が省けるわね」

提督 (2人とも大会の趣旨を忘れてないか？)

提督 「……そうか。まああまり外出はよくないからもうそろそろ決めるようにな」

筑摩・B i s 「了解！」

——それからの数分間

筑摩「大佐、大佐って何色が好きですか？」

提督「黒と淡い緑だ」

筑摩「まあ、大胆ですね」

提督「なんだ？　どんな水着なんだ？　俺が選択したことになるのか？」

B i s 「大佐、大佐はハイレグ好き？」

提督「競泳でそんなもの着るな」

B i s 「ビキニがいいのね」

提督（そんなこと言つてない）

く鎮守府への帰り道

提督「もう練習する時間は今日はなくなくなってしまったぞ」

筑摩「時間が過ぎるのは早いですね。仕方がないので練習はまた今度にしましょう」

B i s 「そうね。今日は水着が買えただけでも良しとしましょう」

提督（2人ともただ買い物がしたかっただけなんじゃないのか？）

第26話 「夜戦」

提督「これより作戦を開始する」

Bis「サーモン沖か……よし、今日こそやつてみせるわ!」

金剛「ソーネ! いつまでもここで break time してるワケにはいかないワ!」

足柄「肩の力抜きなさいよ? 気合空回りしちや意味ないんだからね」

鈴谷「相変わらず金剛ネーサン達のやる気パないね!。それに比べて足柄の姐さん随分悟った感じになっちゃったね?」

足柄「もうリベンジやる気なくなっちゃったのよ。あれだけ戦り難いとね」

提督「もう出撃したくないか? なんだったら衣笠に代えてもいいが?」

足柄「何言ってるのよ。いくら撤退しても絶対に負けないわよ」

提督(「そういえば、好戦的だった足柄がここまで落ち着くとはな。」)

提督(「戦い好きを表に出さなくなった分内に秘めた闘争心は前より燃え盛ってるようだ……頼もしくなったものだ」)

Z1「そんなに戦い難い海域なの?」

Z 3 「面白いじゃない」

提督 「お前たち2人はこの海域に出るのは初めてだったな。やる気もあるのも良いが、鈴谷や足柄のようにあまり意気込んで行かない方がいいぞ」

Z 1 「うん。分かった」

Z 3 「大丈夫よ。絶つて——」ポン

足柄 「ダメって言ったでしょ？ あたし達の背中しつかり見てなさい」

Z 3 「あ……」

Z 3 「スウー………ハア………ん、ごめんなさい」

鈴谷 「お、いい目になったじゃん？」

金剛 「Oh！ 頼もしーね！ but もっと active にいってもイーのヨ

？」

B i s 「そうよ！ 今度こそ今度こそ……… やってやるわ!!!」

提督 「お前たちはもう少し落ち着け。子供か」

鈴谷 「ま、ネーサンたちが一番出てるからね。でもマジこのやる気だけは凄いと思う

よ」

足柄 「そうね。出直す度にリベンジに燃えまくってるわよね」

提督 「ムキになっているようにしか見えんがな」

提督「まあ良い。轟沈はしないように戦略的撤退の判断は誤るなよ」

提督「それでは、第一金剛機動艦隊出撃」

第一艦隊メンバー「はっ!!」

くサブ島沖ポイントC

金剛「やったネ! perfect で抜けたワヨ!!」

Bis「次の戦場……いえ、勝利が私を呼んでいるわ!!」

足柄「昔のわたしを見ているようで恥ずかしいわね」

鈴谷「あく、ついに姉さのセリフを言っちゃうまでになっちゃったかあ。悔しいスカ

？」

足柄「お酒でも入ってないともう言わないと思うわ」

Z1「な、なんか凄く冷静だね。僕こんなに戦い難いとは思ってなかったよ」

Z3「私も冷静になったつもりだけど、予想以上ねこれは。姉さんの言葉に感謝しな

いと」

足柄「マっちゃんもあたしのこと姐さんて言うようになってなっちゃったか」

鈴谷「あははは。姐さんまた舍妹増えちゃったね?」

足柄「自称第一号のあんたの所為よ」

Z3 「あの、ダメだったからしら姐さんて呼んじや?」

足柄 「ダメなわけないでしょ。頼られるのは嫌いじゃないから」

足柄 「でもあなたもしつかり良いところ見せなさいよ?」

Z3 「わ、わかったわ!」

金剛 「What doing? 早く征くヨー!!」

Bis 「そうよ! もう勝利は目の前よ!!」

足柄 「あの人はホント……」

Z1 「でも、お蔭で周りは暗いけど気持ちちは全然暗くならないよ」

鈴谷 「お、レイスちゃん良いこと言うじゃん?」

足柄 「フフ、そうね。それは間違いないわ」

足柄 「さて、行くわよ」

くポイントD

旗艦金剛 副艦ビスマルク 大破 チーン

金剛 「Noooooooooooooooooooooo!」

Bis 「なんでよおおおおお!!?」

鈴谷 「やつぱりCポイント通過したときネーサン達がフラグつくっちゃったんじやね

？」↑無傷

足柄 「そうかもね」↑無傷

Z1 「負けちゃった」↑無傷

Z3 「いいえ。撤退する限り負けじゃないわ」↑無傷

Z3 「そうでしょ？姐さん」

足柄・鈴谷 「わかってるじゃない」んじやん」ニツ

足柄 「さ。さっさとあそこで駄々捏ねてる大人引っ張って帰るわよ」

鈴谷 「あーい」

く 提督執務室

提督 「ご苦労」

足柄 「ごめんなさいね」

提督 「気にするな。いつか越える」

鈴谷 「そうそう。何回もやってりやそのうち抜けるって」

提督 「お前はもう少し言動とやる気を一致させろ」

鈴谷 「無理！」

提督 「上等だ。次も頼むぞ」

鈴谷「ウース」

提督「レイス達はとうだった？ 今回の出撃は？」

Z1「難しかった……でも、攻略は不可能じゃないよ！」

Z3「そうね。私も手応えを感じました」

提督「頼もしい限りだ」

提督「それと……」

金剛・Bis「……」ズーン

提督「まああいつらには俺から後で言っておく」

足柄「大佐も大変ねえ。毎度」

提督「お前がいなくなった分マシにはなったださ。いや、少し寂しいか？」

足柄「ちよ、ちよつとやめてよ！」カアツ

鈴谷「お、姐さん赤くなってるやない？」ニマニマ

Z1「え？ そう？」

Z3（恥ずかしかつてる姐さん可愛いわね）

足柄「もうっ、行くわよあんたたち！ 大佐、この人たち宜しくね」

提督「任せとけ」

足柄「あ、それと」

提督 「分かってる。今日は良い酒を用意しておく」

足柄 「分かってるじゃない」ニツ

鈴谷 「あく、鈴谷もお酒飲みたいなあ」

足柄 「耐ハイで酔っぱらう子が何言ってるのよ。ほら行くわよ」

Z1 「それじゃ提督」

Z3 「失礼します」

提督 「ああ、ゆっくり休め」

バタン

提督 「さてと……」クル

金剛・Bis 「……」ズズーン

提督 (足柄が来るまでに終わらせておかないとな)

第27話 「フオロー」

提督「まあ、二人ともそう落ち込むな」

金剛「そういう訳にはいかないデス…………。もうこれで何回目の *lose* ネ…………」

Bis「屈辱だわ…………。今度はいけると思、いえ。行けたのよ！」ドンツ

提督「確かに一番出撃してのお前たちにとっては、耐え難いかも shouldn't」

提督「だがそれでも新たに突撃する時に文句も言わず出てくれるお前たちに俺は感謝しているぞ」

金剛「大佐ア…………。でもワタシも流星に今回は自信を *lost little* しちやったネ」

Bis「弱音は吐きたくないけど…………。この悔しい気持ちはなかなか消えないわ」

提督「足柄や鈴谷の様に開き直るのも一つの強さだぞ？」

提督「悔しがるなどは言わない。だが、その気持ちを糧に新たな気持ちで挑み、勝利を掴むんだ」

金剛「大佐ア…………。ワタシは今 *follow* よりマイハートを *care*

して欲シーヨ」

Bis 「そうね。それにこんな時に他の女の子の話はしないで欲しいわね」

提督（金剛はともかく、マルクがらしくないな。今回は結構堪えてるみたいだ）

提督 「分かった。じゃあちよつと海でも見に行かないか？ 夜風が気持ち良いから良

い気分転換になるかもしれないぞ？」

提督 「歩きながらも話も聞いてやるから」

金剛 「sea watching デスカ。悪くないワネ♪」

Bis 「風に当たれば少しはマシになるかしら」

提督 「決定だな。マルク、なんだつたら泳ぐ練習を今からやってみるか？ 浅瀬なら

月明かりもあるし多少は泳げるぞ」

Bis 「た、大佐！」

金剛 「swim? practice?」

提督（しまった）

金剛 「大佐、今のどういう事ネ？」

提督 「マルクすまん。口が滑ってしまった」

金剛 「大佐ア？ マルクさんと一緒に sea date するつもりだったノ？」

提督 「曲解するな。マルクが泳げないから練習を見てやろうと思ったんだ」

金剛「マルさん you can't swim？」

Bis「う……そう……よ」

金剛「泳げないから大佐に practice して貰う話になってタノ？」

Bis「ええ……」

金剛「大佐ア♪」クルッ

提督（何か凄く嫌な予感がする）

提督「なんだ」

金剛「ワタシも can't swim ネ♪」

Bis「え？ 本当!?」ペア ↑親友を見つけたような笑顔

金剛「yes really! 大佐、だからワタシにも practice プ

リーズヨ!」

提督「いや、お前泳げたる。この前の休みの時、姉妹で海水浴してー」

金剛「プリーズ!!!」ズイ

提督「……」

Bis「大佐、泳げない同志を見捨ててはいけないわ!」

提督「分かった。分かったからそう睨むな」

金剛「yeah! やったネ♪」

提督「だが、夜の海で二人の練習を見る自信は俺にはない。だから練習はまた今度で、今日は海を見に行くだけだ。いいな？」

金剛「OK よ♪」

金剛（水着ちよつと早めに用意しないといけないわね♪）

B i s 「同志の事を思うなら当然ね。了解よ！」

提督（今回は完全に俺の失態だが、何故こうなる）

第28話 「晩酌」

ガチャ

足柄 「待ってたわよ」

提督 「早いな」

足柄 「そりやあね。楽しみにしてのよ？」

提督 「そうか」

足柄 「金剛たちとのデートは楽しかったかしら？」

提督 「まあな」

足柄 「む」

提督 「どうした？」

足柄 「否定しないのね」

提督 「お前がそういう顔をすると思ったからな」

足柄 「大佐の癖に生意気ね」

提督 「いつも予想通りの反応をするとは思わないことだな」

足柄 「じゃあ今日はどことん飲んで、もっと違う反応見せて貰おうじゃないの」

提督 「明日も仕事だ。無理をする気はないぞ」

足柄 「大丈夫よ。あたし強いから」

提督 「自重しようという気はないんだな」

足柄 「どうかしら？」

提督 「ふう……。まあ、いい。酒を出そう」

足柄 「待ってました」

コト

足柄 「へえ、焼酎ね」

提督 「苦手だったか？」

足柄 「んーん。いつか初めて大佐から貰ったお酒がウイスキーだったから」

提督 「それを期待していたか？」

足柄 「正直ね。でも洋酒よりは焼酎の方が好きよ」

足柄 「ちよつと思いい出に浸りたかっただけ」

提督 「ふむ……。」ス

足柄 「え、これ」

提督 「チャンポンはよくないから、これは最後にしよう」

足柄「わざわざまたスキットルに入れてくれちゃって。回し飲みじゃないと嫌よ?」

提督「そのつもりだ」

足柄「わかつてるじゃない」

足柄「——それじゃあ大佐?」

提督「始めようか」

それから数時間後

提督「…… んく、ふう。もうすぐ夜明けだな」

足柄「あら、もう? 時間が過ぎるのは早いわね」

提督「まさか一升瓶を5本も空けるとはな」

足柄「大佐何となく予想はしてたけど強いわね」

提督「お前ほどじゃない。もう俺は結構キテるぞ」

足柄「あら? そうやって何度切り上げようとしたかしらね?」

提督「晩はもう明けようとしている。だから酌はコレで最後にしないか?」

足柄「ふふ、上手く言ったつもり? ま、残念だけど仕方ないわね」

足柄「これで占めましょうか」クイ

提督「ああ」

足柄 「じゃ、先ずは大佐から」 ヒヨイ

提督 「ん。俺からか」 パシ

足柄 「あたしからだと思つた？」

提督 「まあな…… んぐ」 ゴク

提督 「フー…… ほら」 ポイ

足柄 「あらあ？ ちよつと回つてきちやつた？」 パシツ

提督 「どうだか」

提督 （最後の最後が一番強いのだからな）

足柄 「無理しちやだめよー？…… んく、ん…… ん」

足柄 「ふうー。これ強いわね。美味しいけど」

提督 「ん？ 堪えたか？」

足柄 「まだまだ。はい、とと……」。ポイ

足柄 「あら？」 フラ

提督 「おつと」 Wキヤツチ

提督 「大丈夫か？ もう――」

足柄 「嫌。最後まで飲む！」

提督 「お前こそ無理はするなよ？」

提督（やっぱり洋酒はあまり得意じゃないようだな。ここは少し大目に飲むか）

提督「さて…… んぐ、 んぐ、 んぐ」ゴクゴク

足柄（あら？結構大目に飲んでる？）

足柄「ちよつと、間接キス長くないかしらー？」フラア

提督「ぷはっ…… おい？足柄」

足柄「次はあたしー」

提督（足柄の奴油断して酒に飲まれたか）

提督「お前はこれ以上はダメだ」ヒョイ

足柄「あー何するのよー？渡しなさいよー！」ピョンピョン

足柄「…… もうー」ダキ

提督「ぐぬ？」

足柄「ぬー」グググ

提督（これが重巡の力…… 動けん）

足柄「うー…… あ」プルプル、ガシッ

足柄「取ったー!! て、きや」グラ

提督「むぐぐ」

バタン！

足柄「……………」

提督「……………」

提督「足柄？」

提督（力が抜けてる。動けるな）

提督「おい。大丈夫か？」クル

足柄「す……………す……………くふふ」

提督（完全に酔いつぶれて寝てる。これは暫く起きないな）

提督（部屋に運ぶには……………この時間はまだ寝てる奴もいるか）

提督「……………」ダキ ↑お姫様ダツコ

提督（軽い。一体どこからあの力が）

提督（やはり艦娘は人間ではない、か……………だが）

提督「人間でない故に兵器としても扱わない」ソツ ↑自分のベッドに寝かせる

提督「今はこれでいい」

第29話 「ラーメン」

コンコン

隼鷹 「入っていいかい？」

提督 「隼鷹か？ いいぞ」

ガチャ

隼鷹 「大佐、何作ってるんだい？」

提督 「ラーメンだ」

隼鷹 「え？ ラーメンでこんな匂いしたつけ？」

提督 「激辛ラーメンというやつだ。名前の如く辛い」

隼鷹 「うわあ…… スープが見たこともない色してる。これ大丈夫なの？」

提督 「食べ過ぎは体に悪いが、二日酔いで気分が優れない時や空腹のときは結構美味しく感じるらしい」

隼鷹 「大佐はどっちの理由で作ってるんだい？」

提督 「俺は元々辛い物が結構好きなんだが、今回の場合は前者が理由だ」

隼鷹「ああ、昨日晩酌だったんだーって、えー！ 聞いてないよ！」

提督「元々昨日は足柄と飲む約束をしてたんだ」

隼鷹「何それ。特別な関係ってやつ？」

提督「邪推するな。その日はサーモン沖の作戦を実行してな」

隼鷹「あー。慰労ってやつ？」

提督「そう。思いの他飲んでしまったんで、ちよつと酔い覚ましにな」

隼鷹「大佐が酔いが残るって昨日どんだけ飲んだのささ。あー、あたしも飲みたかつ

たなあ」

提督「空気は読まないのか？」

隼鷹「分かっているって。例えば知っててもそんな野暮な事しなかったって」

提督「だろうな。それで、食べて行くか？」

隼鷹「えっ」

提督「どうせ匂いにつられてきたんだろ？」

隼鷹「いやー、確かに匂いに引かれて来たわけだけどこれは……」

提督「辛いのは苦手か？」

隼鷹「というより、食べた事ないの。匂いキツイからちよつと、ね」

提督「怖いか」

隼鷹「え、怖い？ 怖いっていうか、自信がないっていうかーうん」

提督「激辛とは言うが、実際のところこれはそれほど辛くはないと思うが」

隼鷹「え？ そうなの？ そのスープなんか凄く赤いけど」

提督「材料の関係上どうしてもスープはこういう色になってしまうんだ」

隼鷹「へえー」

提督「ほら。少し味見してみるか？」スツ ↑小皿にスープを入れた

隼鷹「まあ、こくらいなら……」ズズ

隼鷹「んん!? や、ちよつと辛いかなこれ。でも初めてだからかも」

提督「麺と一緒に食べればまた印象が変わると思う」

隼鷹「味が変わるのかい？」

提督「変わるといふより大分食べ易くなる。流石に辛いスープだけ飲むは誰だってキ

ツイさ」

隼鷹「確かに」

提督「——と、話している内に出来たな。どうだ？ やっぱりやめておくか？」

隼鷹「んー、じゃ食べてみる。どういふ風に食べ易くなるのか気になるし」

提督「分かった。小皿に取ってやろう」

——数分後

提督 「よし、準備ができた。ほら」 トン

隼鷹 「あ。ありがとう」

提督 「さて、頂くか」

隼鷹 「頂きます！」

隼鷹 「ん……」 パク……ズズ

提督 「どうだ？」

隼鷹 「あ、美味しい。辛いけど食べ易い。うん、これはイケる」

提督 「気に入ったか」

隼鷹 「割と。まだ食べれるよ」

提督 「俺の分を見るな。これしかないんだ」

隼鷹 「えー」

提督 「また作ってやるから」

隼鷹 「本当？ 約束だよっ」

提督 「ああ。だがさつきも言ったが、こういう味が濃いのは食べ過ぎはよくないから
気を付けるんだぞ」

隼鷹 「はい……と、隙あり！」 サッ

提督 「甘い」 ヒョイ

隼鷹 「お、やるねー」

提督 「油断も隙も無い……… ほら」

隼鷹 「お、サンキュー。流石大佐♪」

提督 「調子が良い奴だ」

第30話 「演習」

提督「今日の相手はただの本部所属の艦隊ではない。元帥閣下直属の最強の艦隊だ」

加賀「勝てますか？」

提督「勝に拘るな。負けない戦いをしろ」

長門「見苦しい戦いはしたくないぞ？」

提督「別に逃げ回れとは言ってない。絶対に負けないという気概を相手に示すんだ」

陸奥「ああ、そういうこと」

金剛「了解！ 全力で行くネ！」

Bis「私達の実力を示す良い機会ね！」

赤城「久しぶりの出番だと思ったら……」

提督「怖いかな？」

赤城「いいえ。暴れ回りますよ！」キラキラ

元帥「元氣な艦隊だな大佐」

提督「閣下。今日は宜しくお願いします」

元帥「応。存分に君の力を示してくれ」

提督「はっ」

元帥「それでは…… 戦ろうか？」

↳ 鎮守府近海の演習場

長門「…… 壮観だな」

陸奥「ええ。流石は最強の艦隊というところかしら」

加賀「大和に武蔵、大鳳…… あれは…… まさか、信濃？」

赤城「見たことがない戦艦がまだ2隻いますよ。でも……」

金剛「Yeah ワタシ達は知っています。いえ、memory に刻まれている

ノ

B i s 「私達の記憶に無いのに記録に刻まれているってどういうこと？」

長門「答えは…… 戦ってみればわかるさ！」ガコン

加賀「そうね。あの人たちの力見てみましょう」ヒュンヒュン

陸奥「勝てる気がしないわねえ。負ける気もないけど！」ゴゴ

金剛「ワタシ達の full power 見せてあげまショウ！」ズオオ

赤城「ふふふ。久しぶりにお腹いっぱい食べられそう♪」ブオオ

B i s 「覚悟はいい？じゃあ…… 行くわよ!!」ドン

結果、戦術的敗北C

元帥「まあ、D判定を取らなかつただけでも大したものだ」

提督「そうですね。しかしお強い……」

元帥「いや、それはこちらのセリフだぞ」

提督「そうですね？」

元帥「うむ。練度の差を考えれば圧倒すると思つていたからな」

提督「私もそれは予想外でした」

元帥「君の艦娘達は今どうしてるんだ？ 負けて意気消沈してたりするの？」

提督「いえ、負けた割には凄く良い顔をして仲間と反省会をしています」

元帥「そのようだな。笑い声すら聞こえる気がする。良い艦娘を持ったな大佐」

提督「は。ありがとうございます」

元帥「全く気合だけよくもあそこまで立ち回つたものだ。正直言つて君の所の噂はあまり良くないから相手が務まるか心配していたんだぞ？」

提督「ご心配が現実にならず良かったです」

元帥「はは。そうだな」

元帥「ああ、それと」

提督「は」

元帥「例の水泳大会だったか？ まだやってないのか？」

提督「は……。まあその、予定を調整中でした」

元帥「はは。そうか」

元帥「もし本部の決定を信じ切れてないのなら儂がこの場で保証する。都合が良い時にやりたまえ」

提督「重ね重ねありがとうございます……」

元帥「どうした？ 何やら元気がないな」

提督「いえ、大丈夫です。問題ありません」

元帥「そうか？ まあ、今日のご苦労だった。また会おう」

提督「は。閣下、この度の演習誠にありがとうございました。お達者で」

元帥「ああ。またな」

提督「……」

提督（大会の件で元帥に太鼓判を押されて、もうやるしかなかった事に対して呆然としていたとは流石に言えないよな）

第31話 「資材」若干R—15

提督 「相変わらず弾薬が少ないな」

陸奥 「手間がかからなくていいって毎度同じ遠征ばかりしてるからよ」

提督 「至極真つ当な見解だ」

陸奥 「弾薬以外は常に保有を許されてる限界数量持つてるのに、本当にうちは弾薬だけは極端に少ないわね」

提督 「1桁違うからな」

陸奥 「備蓄自体はできてるけど、演習で結構使うから実際プラマイ0に近いわよね」

提督 「弾薬の数量が3万を超えてるのを見たのは何時だったか」

陸奥 「遠い目してるんじゃないかって遠征のプラン少し変えたら？」

提督 「ふむ……」

陸奥 「過剰な量の資材を不足している資材と交換とかできたらいいのにね」

提督 「独断による資材の転用、交換は違反だからな。それは無理だ」

提督 「それに鋼材とボーキはやはり常に個人的に余裕を持っていたい」

陸奥 「欲張りね。なんでよ？」

提督 「回復に事欠くことがないからだ」

陸奥 「ああ、うちってそういうええ回復待ちしたことないわよね」

提督 「これもお前たちを沈めない為の手段の一つだ」

陸奥 「ふふ、大事に守ってくれてるのね」

提督 「…… 気にするな」

陸奥 「この話をするのと昔の顔をするわね。やっぱりまだ苦心してるのね」

提督 「すまない。嫌ってはいない。非道に扱う気もない。が…… 自分の未熟さが嫌になる」

ギユ

提督 「おい…… ぐう」

陸奥 「気にしないで。普通に接してくればいいの。それだけ嬉しいから」

提督 「わか…… はな…… ぐむ」

陸奥 「ん…… 口を動かさないと胸がくすぐりたい」

提督 (動けん。息がし難い) パンパン ↑背中を叩いてる

陸奥 「ん? どうしたの? …… あっ」 バツ

提督 「つはあ…… ふう…… ぜえ」

陸奥 「ご、ごめん。大丈夫?」

提督 「大丈夫だ。気にしなくていい」

陸奥 「わたしつたらしい」

提督 「気持ちはまあ嫌じゃなかった。だから大丈夫だ」

陸奥 「…… えつと、それだけ？」

提督 「ん？」

陸奥 「気持ち良くなかった？ その胸……」

提督 「ああ。気持ち良すぎて一瞬意識が遠のいた先に桃源郷が見えたな」

陸奥 「あはは。何それ、はぐらかしてるつもり？」

提督 「そういうことにはしておいてくれ」

陸奥 「ウブね」

提督 「そう見えるか？」

陸奥 「もう少し慌ててくれてたらね」

提督 「言っておくが俺は異性に興味がないわけじゃないぞ」

陸奥 「え？」

提督 「ちゃんと自分が男だと自覚できているからな」

陸奥 「え？あ、そ、そう？」

陸奥（感慨深い表情をして何か自分に言い聞かせるようにしてる）

陸奥（でもその顔がわたしの抱擁の所為じゃないのがちよつと悔しいわね）

陸奥「ねえ」

提督「うん？」

陸奥「もう一度抱きしめていい？ 今度は加減するから」

提督「ダメだ。仕事しろ。ほら」ドサ ↑書類

陸奥「もうっ。いけず！」

第32話 「写真」

白雪「さて、最後は机ね」

白雪（机は提督が一番使ってる物だから最後に綺麗にしなくちやね）

白雪「くく」フキフキ

コツ

白雪「あつ」

バサバサ

白雪「大佐のファイルが」アセアセ

白雪「……」 ↑散らばった書類をファイルに集めてる。

白雪「ん？」

白雪（これ大佐の写真だ。女の人と写ってる。）

白雪「か、彼女さんかな。いや、奥さん？ 姉、妹……？」

白雪「うーん」

コンコン

白雪「あ、はい」

古鷹「失礼します。古鷹で——て、あれ？　白雪ちゃんだけ？」

白雪「あ、古鷹さん」

古鷹「大佐はいないの？」

白雪「あ、はい。今は大佐部屋にいないので掃除中です」

古鷹「そうなんだ。偉い——どうしたの白雪ちゃん？」

白雪「あ、えつと。これ、見つけちゃって」

古鷹「写真？　あ、大佐……と、女の人」

白雪「や、やっぱり彼女さんでしょうか」

古鷹「大佐に？　うーん、それは確かに居てもおかしくない年齢だとは思うけど」

白雪「でも？」

古鷹「別に大佐の事悪く言うつもりはないけど、あまり女性に興味なさそうだから」

白雪「大佐は優しいですよ？」

古鷹「優しいのと興味が有る無しは、ちよつと違うのよ。でもやっぱり私は彼女さんじゃないと思うな」

白雪「そ、そうですか」

古鷹「ふふ。安心した？」

白雪「え？安心って、そんな」マツカ

古鷹「可愛い♪ でもこれあまり他の人には見せない方が良い気がするな」

白雪「そうなのですか？」

古鷹「うん。まあ大佐のプライベートも有るし、それに……」

愛宕「そ・れ・に？」

古鷹「あ、愛宕さん!？」

白雪「愛宕さんこんにわ」

愛宕「はい。こんにちわ」

古鷹「み、見えました？」

愛宕「おおよそ♪」

古鷹「口外しないでくれますか？」

愛宕「私はそんな事しないわよ。 ん、でも後ろに彩雲が……」

白雪・古鷹「え？」

加賀「2人とも執務室では騒がないで下さい。白雪さんが掃除できません」

古鷹「あ、ごめんなさい。それじゃ私はこれで……」

愛宕「そうね。私もお暇……」

加賀「それと」

古鷹・愛宕「」ピタ

加賀「その写真についていろいろ聞かせてもらえますか？」

白雪（加賀さんなんだか、怒ってる？）

それから数分後

加賀「なるほど」

古鷹「まあ私はやっぱりご家族の方だと思えますけどね。ね、白雪ちゃん」

白雪「そ、そうですね。私もそう思います」

愛宕「ん、でも。もしかしてって事もあるわよ？」

加賀「……」ピク

古鷹「あ、愛宕さん！」

白雪「？」

ガチャ

提督「お前たち、此処は雑談室じゃないぞ」

白雪「あ、大佐」

古鷹（このタイミングで……！）

愛宕「流石です。大佐♪」

加賀「…………… 大佐」

提督「…………… なんだ？」

更に数分後

提督「なるほどな」

白雪「ご、ごめんなさ！ 私の所為で」

提督「お前は掃除をしてくれていたんだらう？ 何も悪くない」

古鷹「そ、その私は……………」

愛宕「そうそう大佐。あの写真の女の何方なんです？」

古鷹「ちよ、ちよつと……………」

提督「…………… どうやら反省をしないといけないのはお前だけのようだな」

愛宕「えく？ お仕置きですか♪」

白雪（なんで嬉しそうな顔をするんだらう？）

提督「罰として一週間赤城と同じ量の食事をして貰う」

愛宕「」

古鷹「うわ……………」

白雪「？」（お仕置きがご飯？）

愛宕「ゴメンナサイ。太りたくないです」

提督「ふう、もういい。解散。白雪以外は待機任務に戻れ」

加賀「待つてください」

提督「うん？」

加賀「差し支えなければ先ほどの愛宕さんの質問に答えて頂きたいのですが」

提督「……」

提督（士官学校時代に世話になった教官なんだが、ここは敢えて恋人ということにし
ておくか）

提督「k——」

加賀「嘘は嫌、ですよ？」

提督（なんで艦載機が出撃体制なんだ。一文字すら言わせない気か）

加賀「嘘は分かれますからね。お願いです。本当の事を教えてください」

提督「……」

古鷹「……」ヒヤヒヤ

白雪「……」ドキドキ

愛宕「……」キラキラ

提督 「士官学校時代に世話になった教官だ」

加賀 「そう、ですか」

古鷹 「そうなんですかあ。良かったあ……」

古鷹 「あれ？ なんか私安心しちやってる？」

白雪 「良かったです！」

愛宕 「ふふ、私も分かってましたよ？」

提督 「そうか。ほら分かったら解散だ」

古鷹 「失礼します」（最初の用事忘れちゃった……）

愛宕 「はい。失礼します」

ゾロゾロ

加賀 「……」

提督 「加賀？」

加賀 「大佐」クル

提督 「なんだ？」

加賀 「本当に…… 安心しました」

提督 「…… そうか」

ボタン

白雪「……………」

提督「白雪、どうした？」

白雪「あ、いえ。なんでもありません」

白雪（加賀さん、さつき目尻に涙が見えたような。安心したから……………？）

第33話 「興味」

コンコン

提督「ん？」

龍田「大佐あ？龍田です。入っていいですかあ？」

提督「ああ、いいぞ」

ガチャ

龍田「失礼しまあす」

提督「何か用か？」

龍田「別に用とかはないんですけど。ほらあ？ 最近大佐わたし達とよく話すようになったじゃない？」

龍田「だからわたしもお話にきたのよお？ 迷惑だったかしら？」

提督「別に、問題ない」

龍田「良かったあ。それじゃ何話します？」

提督「唐突な話題の振り方だな。普通話しに来た方が話題を出すもんだろ」

龍田「ふふ、そうねえ。じゃあわたしの事どう思っているか教えてくれない？」

提督「なかなか自分から振る話題じゃないな。答えないとダメか？」

龍田「こたえなさい？」

提督「ダメだな。ある程度崩れた話し方は許してるが、上司に対して敬意が感じられない奴には俺は何も応える気はない」

龍田「あら……言うじゃない？ わたし貴方より強いんだよ？ その事分かってます？」

提督「例え力で敵わなくても納得できる理由もなく、上司を脅す奴は俺は願ひ下げだ」
龍田「そんなこと言ってわたしの機嫌損ねて殺されたりしたらどするのかしらあ

？」

提督「殺した後存分に後悔しろ。その時はお前は軍人ではなくなり国家の敵となる」

提督「そしてそんなお前の仲間だった奴らはお前と同じ評価を受ける事になるんだ。その事を後悔しながら裁かれるがいい」

龍田「……」

提督「……」

龍田「ふ、ふふふ」

提督「冗談もこのくらいにしないか？」

龍田「あら？ 分かったのお？」

提督「正直、お前の性格は一番扱いづらくて好きではないが、それでも信用できる部下である事には変わりはない」

提督「まあそれに、俺はともかくお前が仲間を蔑ろにする筈はないからな」

龍田「やめてよお。照れちゃうじゃない♪」

提督「照れてるのか？ 加賀とは違ってた意味で感情が読み難い奴だな」

龍田「そんなこと言つて最初からわたしの脅しを冗談だと見抜いたのは大佐だけよお？」

龍田「これつて結構すごい事なんだから」

提督「確かにまるで本気のような脅しだったな」

龍田「その割には全然動揺しなかったじゃない？ それどころか攻めてくるなんて

お思いもしなかったわあ」

提督「信じていたからな」

龍田「……その自信は何処から来るのかしら？」

提督「特に明確な根拠はないが、強いて言うならお前の存在そのものが信用に足ると言つたところか」

龍田「あら……」

提督「俺は部屋で指示するだけだが、それでも一緒に戦う仲間の命を互いに守り合っているお前のことは分かっているつもりだ」

提督「正直、人間の身である故に一緒に出撃できないことを申し訳なく思っている」

龍田「……」

龍田「大佐？」

提督「なんだ？」

龍田「さつき貴方、自分はともかく他の仲間は——っていったじやない？」

提督「ああ」

龍田「正直、わたしにもそういう事を思う部分はあつたわ」

提督「そうか」

龍田「でもね。貴方の言葉を聞いて決めた。守ってあげる」

龍田「わたしは仲間も貴方のことも必ず守るわ。だから——」

龍田「貴方もわたしを信じて。そしてわたしも貴方の事を信じさせて？」

提督「その全幅の信頼、軍人としては何にも代えられない誉れだ」

龍田「もう、そんな堅苦しい言い方しないでよ。ただ、一言『ありがとう』て言えばいいの」

提督「そうだな。あー」 龍田「ありがとう」

龍田 「もう女に先言わせるなんてダメよ？」

提督 「……やはり扱い難い奴だ。ありがとう」

龍田 「こちらこそ」ニッコ

第34話 「特訓（前篇）」

金剛「大佐アー！早く行くデース！」

マルク「つ、ついにこの時が来たのね……」

筑摩「マルクさん頑張りましょう」

提督「……」

提督（3人とも競泳に着るような水着ではないな。露出が過度に激しい気がするし、色も筑摩以外は扇情的な気がする）

提督（金剛は白一色か。一見地味だが元々薄い肌の色も相まって見ようによっては酷く官能的だ）

提督（対するマルクは反対に黒一色か。二人に比べ明らかに豊満な身体を黒という映える色が少ない面積でより強調している）

提督（筑摩は2人に比べればまだ控えめだが、あの黒と薄い蓬色のツートンからーの水着が俺が好きな色と言った結果だと思おうと何となくやるせない気分だ）

提督「……」↑解説的な事を考えて更にやるせなくなつた

金剛「それにしてもよくこんなナイスな所みつけたネ」

筑摩「本当ですね。人の気配がしません」

Bis「ここなら人目を気にせず練習ができるわね！」

提督「警備海域を今日だけ微妙にずらして一日限定で作った文字通りの穴場だからな」

提督「それでもいざという時はちゃんと通信できるようにしてあるから、それについては文句言うなよ」

金剛「了解ネ！」（ちよつと人数多いけど大佐とデート♪）

筑摩・Bis「了解」「分かりました」（何としても今日泳げるようになる！）

提督「それじゃあ先ずは水に慣れ——」 金剛「ちよつと wait ネ！」

提督「なんだ？金剛」

金剛「水に入る前に sun oil 塗りまシヨウ」

提督「……なに？」

金剛「日焼けはお肌に bad ですからネ！ care は大事ヨ？ それに」

提督「……日焼けしたら練習してたことがバレる、か？」

金剛「yes！ that's right！ 分かてるネー大佐！」

筑摩「なるほど」

Bis「一理あるわね」

金剛「ということで大佐、さっす——」提督「塗らないぞ？」

金剛「what!？」

提督「3人いるんだ。塗りあえばいいだろ」

金剛「そんなー！ 大佐ア！ please！」

提督「やらんと言つたらやらん。準備が出来たら浅瀬に來いよ」スタスタ

金剛「うう……… せつかくの plan が………」

筑摩「仕方ありませんよ。塗るの手伝いますから。その、だから………」

Bis「私と筑摩にもオイル貸してもらえないかしら？」

く浅瀬

筑摩「お待たせしました。大佐」

Bis「待たせたわね」

金剛「大佐、次は塗ってヨ！」

提督「まだ言うか。まあいい。それでは——」

金剛「？ どうかした大佐？」

提督（気の所為か3人とも布地で覆われたところ以外にも万遍なくオイルが塗られて

るように見える。こいつらまさか全裸で塗っていたのか？ 危なかつた……（

提督「何でもない。すこし肝が冷えただけだ」

金剛「へ？」

筑摩（興奮するならまだしも）

B i s（肝が冷えた？）

提督「それでは始める」

第35話 「特訓 後編①筑摩の場合」 微R—15

提督「そう、そうだ。足から徐々に水につけて……」

筑摩「き、緊張します」

Bis「怖くない怖くない……」

金剛「大佐アーこれでイーですか？♪」ムニ

提督「俺は腰まで水に浸かれとはいったが、前かがみになって胸を強調しろとは言っていないぞ」

金剛「そんなこと言っていられシーくせにー♪」

筑摩「なんか、金剛さんだけ雰囲気が違う。緊張を全く感じない……。……凄いい！」

Bis「やるわね金剛……。なんて度胸大なの！ 見習わなくちゃ！」

提督（何故二人は金剛の事を尊敬するような目で見てるんだ）

提督「よし、次は一人ずつだ。俺の手を掴んで沖までいくぞ」

提督「よし、筑摩。お前からだ」

筑摩「は、はい！お願いします！」

筑摩「手、離さないで下さいね？」ソロソロ

提督「大丈夫だ…… 来い」

筑摩「か、肩まで水が」チャップ

提督「怖がるな。手は握ってる。俺を見る」

筑摩「大佐…… はい！」

提督「よし、次は水に顔を付けて目を開けるんだ」

筑摩「目、痛くないでしょうか？」

提督「海水の塩分濃度は涙のそれと同じくらいらしい。多分大丈夫だ」

提督「痛く感じたら直ぐに顔をあげろ。いいな？」

筑摩「はい！」

提督「良い気合だ。それじゃあやってみろ」

筑摩「う……」チャップ…… パチッ

筑摩（……！ 本当だ痛くない！それに——）

筑摩（海の中ってこんなに綺麗だったんだあ……）

提督（ちゃんと目は開けたようだ。それに海中鑑賞まで満喫してるらしい）

提督「筑摩は自分で気づいてないみたいだが、自然に足を離して体全体で浮かんでバランスを取っている。これなら泳ぐだけなら直ぐにできそうだ」

サワツ ↑海中の筑摩の足元を魚が横ぎった

筑摩「ひやあ!」ガバツ、ダキ

提督「な?ぐ:~:~:」

浅瀬の2人「!」

筑摩「大佐、大佐!今足元に何か触れました!」ギュー、ガシツ

提督(なつ、カニ挟みまで。動きが取れない)

提督「落ち:~:~:つけ:~:~:魚が横ぎつ:~:~:ただけだ:~:~:ろ」

筑摩「あ、そう。そっか:~:~:」

提督「筑:~:~:離れて:~:~:れ」

筑摩「え?ああつ!?!ご、ごめんなさい!」

提督「はあー、ハー、ぜえ:~:~:」

提督(危なかった。もう少しあのままだったら支えきれず身動き取れないまま倒れてたな)

筑摩「た、大佐申し訳ありませんでした!」カアツ

提督「大丈夫だ。気にするな。それより」

筑摩「な、なんでしよう」

提督「お前海水に顔を付けてる間無意識に泳いでいたのを気づいていたか?」

筑摩「え!? そ、そんな」

提督「本当だ。自分から足を嘸体を海に浮かべていたぞ」

筑摩（そういえば、もつと楽に見たくていつの間にか浮いているような感覚だった
 ……）

提督「無意識体がそこまで動けばもう大丈夫だ。後は泳ぎ方の基本を覚えればお前なら直ぐ泳げるようになるさ」

筑摩「ほ、本当ですか!?! 私頑張ります!」

筑摩「あ、それと大佐」

大佐「うん?」

筑摩「その、抱き着いたりしてその……気持ち……」カアツ

提督「ああ、抱き心地は良かった……と思う。重くもなかった」

筑摩「そ、そうですか。よか……あ、えつと……やだ、私はしたくない」

提督「必死だったんだ。分からないのも無理はない。さあそろそろ次にいくぞ。準備
 はないな?」

筑摩「はい! 宜しくお願いします!」

提督「いい返事だ。それじゃあ先ずはバタ足からだな。バタ足は……」

第36話 「特訓 後編②ビスマルクの場合」軽R—15

「大佐、さっきの筑摩……」

ビスマルクは先程の筑摩と提督の様子が気になっていたらしい。

頭のどこかでは理解していても実際は素直に受け入れたくない、そんな我儘な感情に揺れる目で彼女は提督を見つめていた。

それに対して提督は流石に詳細を話すわけにもいかなかったので、努めて平静を装い素っ気なく言った。

「あれは筑摩が驚いただけだ」

「そ、そう。あ、あとね……」

「マルク、怖いのは分かるが俺を信じろ。絶対に溺れない」

「う、うん。手離さないですよ？ 絶対よ？」

ビスマルクは震える手で提督の手をしっかりと握り、ゆっくりと、そして恐る恐るといった様子で徐々にその白い体を海水に浸けていった。

「分かってる。大丈夫だ」（沖に出るだけでもこのペースか。やはりこいつが一番苦勞しそうだ）

「あ、あの」

遅々としたペースながらもようやく海面が胸元に達しようかと言う所でビスマルクはふと足を止めた。

「なんだ？ まだ肩に浸かるまでは沖に来てないぞ」

「そ、その……情けない話だけど手を繋いでるだけじゃ本当に怖くて……だ、抱きしめながら行つて貰えないかしら？」

「……」

提督はそれを聞いて考える表情をする。

彼の頭の中では彼女を抱く事に抵抗を感じるのとは別にとある懸念がその頭をよぎっていた。

（マルクは海外艦故か長門以上に背が高い。そして戦艦だ。そんな奴にさっきの筑摩みたいに抱きつかれたら……流石に自信がないな）

「悪いがそれは——」

「力は加減するから！ 本当よ？ だからお願い！」

提督が躊躇っていた理由を察していたらしいビスマルクは彼が断わろうとする前にそれを遮って絶るような声で言った。

「……」

「おね……がい……よ」

ビスマルクはとうとう沖に行く恐怖に耐えられず泣き出してしまった。

提督はそんな彼女を見て観念したように息をひとつはくと、真剣な表情で言った。

「マルク」

「な、なに？」ビクッ

「頼むから殺してくれるなよ？　そして練習が終わったらちやんとあそこの2人に抱い

た理由を話せよ？」

「う、うん。分かったわ！　それで……いいの？」

「ああ」

「ありがとう!!」ペアッ

「そ、それじゃあ……」ソッ

「ん」

ギユッ

浅瀬の2人「!?　!?　!?」

金剛と筑摩は浅瀬からしつかりその光景を見ていた。

突然の行動に金剛は嫉妬するように目をくわつと開き、筑摩はその大胆な行為に驚き口に手を当てた。

そして互いに顔を見合わせ今見た光景が現実だという事を確かめ合うと、何故ビスマルクと提督がいきなり抱き合ったのかできるだけ穏便な予測を挙げ始めた。

「? 何か海岸の方が騒がしいわね」

「……そうだな。それじゃゆっくり行くぞ?」

「あ、うん」

提督は今より深い所に行く事もあつてビスマルクに気を遣い、最初より更にゆっくりとしたペースで彼女を抱きしめながら沖へと進んでいった。

ムニツ

「……」

そして当然密着している事によってとある感觸も感じていたのだが、それが故意によるものでない以上努めて気にしない様に気を引き締めた。

ここで油断をして気を抜こうものならどのような結果になるのか判らなかつたからだ。

何しろ今抱きしめながらエスコートしている女性は大人の身体をしていながらも、子

供以下の水泳の知識しかなく、更にその力は見た目以上に強力なのだ。
そう、本当に一瞬の油断が命取りになりかねないのである。

「よし、此処でいいだろ。肩まで浸かってるな?」

提督は足がギリギリ浸かる位置にまでようやく来て、そこで歩みを止めた。

ビスマルクは提督より背が高く彼よりかは水位に余裕があるにもかかわらず、もう不安で泣きそうな顔をしていた。

「う、うん……」ビクビク

「じゃあ今度は顔付けて目を開けるんだ。大丈夫だ痛くない」

「か、顔を……目……。い、一緒にやって……。?」ジワッ

(口調がもう子供だな。そんなに不安か)

「分かった。じゃあ顔だけ付けるんじゃないかと一緒に潜ってみよう」

「も、潜……!?!」ビクッ

提督に告げられた次のステップにビスマルクはビクリと肩を震わせる。

その様子はまるで死刑宣告を受けたようで、顔面を蒼白とさせていた。

提督はそんな彼女をなるべく安心させる為になるべく穏やかな口調で言った。

「お前一人だと不安だろう? 俺も一緒にやってやるから」

「で、でも潜るなんて……」

「ちゃんと抱き留めててやるから。いいな？」

「……うん……分かったわ！」 グス

ビスマルクは暫く逡巡したのち、一大決心をしたような真剣な顔で決意の籠った声でようやく提督の指示を受け入れた。

だがその水に対する恐怖を我慢しているのは明らかで、その目尻には涙が浮かんでいた。

（目に涙まで浮かべて、そんなに怖いか）

「よし、それじゃあせーので潜るぞ。あとくれぐれも力を入れるな。俺がちゃんと抱いてやるからな？」

「し、信じてるわよ」

「ああ。任せろ。それじゃいくぞ？ セーのっ」

ザプンツ

「……！」 ブクブク

（思いつきり目を瞑ってるな。少し安心させるか）

提督は水の中で思いつきり目を瞑っているビスマルクに苦笑して、彼女を安心させる

ためにそつとその頭に手を置いて撫でた。

ビスマルクは水の中でもその感触はしつかりと感じる余裕はあつたらしい、感じ慣れたその感触に彼女は直ぐに提督が自分を撫でている事に気付く。

(！・頭撫でてくれてる……安心しろって事？)

「……」ボンボン

頭だけではなかった。

提督は開いた手で彼女の肩も軽く横から叩いてくれた。

ビスマルクはその感触に安心感と勇気を貰い、そして決断した。

(あ……肩も。よし、頑張ろう！)パチッ

果たして目を明けたビスマルクの前に広がっていた光景は……。

「……………」

地上の空より濃い青の世界だった。

その青い世界は外からさしこむ太陽の日差しを受けて煌めき、また泳いでいる色鮮やかな魚もそれを受けて輝いていた。

ビスマルクはその光景に目を見張り、今まで海面からでしか知らなかったその海の世界に感動して打ち震えた。

(なんて綺麗なの……こんな世界私今まで見た事ない)

「……」

提督はその様子を見て彼女が恐怖を忘れて海の世界に魅入っているのを確認した。

(……よし、何とか目を開けたみたいだな。そろそろ上がるか)

実はビスマルクが潜ってその目を開けるまでは割と時間が経っていた。

時間にしてまだ2分程だったが、提督は余裕がある内に一度空気を補充したかったのが浮上する為に、彼女の肩を軽くトントンと叩いた。

だがビスマルクはそれには反応せず、提督の顔の横からずっと海の世界を見つめたまままだ。

「……」ポー

(返事がない。まだ海中に見惚れているのか……?)

「……」ペチペチ

提督は今度はその頬を軽く叩く。

だがそれでもビスマルクは反応しない。

そこにきて提督は流石に焦りを感じ始めた。

「……」ポー

(これでも駄目か。む、息が……)ゴボッ

(どうする。抱き合つて潜つてるから浮上するにしても二人同時でないと駄目だ。もつと強いシヨックを与えるしか手段がないか……)

「……」チラッ

提督はチラリとビスマルクの白くて豊満な胸を見た。

決して不純な理由からではなく、あくまでとある目的の為にだ。

「……」チラッ

提督は僅かな望みを懸けてビスマルクの顔を再び見た。

だがその期待も虚しく、彼女はまだ明後日の方を見たままだ。

「……」

提督はそれを見て苦渋に満ちた顔で目を瞑つたが、やがて決心したように目を開いた。

(……俺は今日ほど自分が嫌になったことはない。仕方ない……許せマルク!)

モニユッ

不意に胸元に感じた感触にビスマルクは目を見開く。

見ると提督の手が自分の胸を鷲掴みにしていた。

「!?」ゴボツ

あまりにも衝撃な光景にビスマルクは思わず息を漏らす。

(え、え? どういう事? 大佐どうして……あ)

提督はやつとビスマルクが自分を目で捉えている事を確認して直ぐにその手を放した。

そして指で上を指し浮上のサインを伝える。

「……」クイクイ

「……?」(大佐なんだか苦しそうね。どうし……あっ!!)

ザパアツ

「ハーツ……ハーツ、ツク、ハア……ゼエ」

「ゴ、ごめんなさい!」

ビスマルクは海面に上がるなり、大きな水しぶきが上がる勢いで頭を額を

海面に付けて提督に謝罪した。

提督はそれに対して軽く手を振って気にするなど伝えてきた。

「いや、俺の方こそ今回はすまん。その、胸を……な」

「き、気にしないでいいわ。全然私反応しなかったんでしょ? なら、仕方ないわ……」

「じゃあ今回はお相子にしよう。そしてできる事ならさっきの事は忘れてくれ本当に」
「わ、分かった」

「ありがとう、助かる。それと、話を逸らすつもりはないが、大分水に慣れたみたいだな？」

「え？ あ、うん。もう潜るのは平気。海の中があんなに綺麗だったなんて私知らなかったわ」

「水に対して抵抗がなくなったのならもう、半分泳げたようなもんだ。お前も筑摩と同じように直ぐ泳げるようになるだろう」

「ほ、本当!？」

「ああ。保証する。だからもう少し頑張れるか？」

「ええ。大丈夫よ。任せてちょうだい!」

「その意気だ。それじゃあやっぱりバタ足からだな。まずは……」

ビスマルクが改めてやる気を示した事に、提督は教え甲斐がありそうだと内心彼女の成長を喜んだ。

そして一方ビスマルクの方はというと……。

（私提督に胸さわら……揉まれちゃったのよね。……多分こんな事されたの私だけの筈、よね？）

「どうしたマルク？ 聞いているか？」

「あ、ごめんなさい。大丈夫よ。聞いている」

（恥ずかしいはずなのに私だけだと思おうと何か嬉しい。確かにこの事はだれにも言えないわね。フフ）

今回のハプニングを早速楽しい思い出として忘れない事を心に決めたのであった。

第37話 「特訓 後編③金剛の場合」 R—15

金剛 「やっとワタシのターンネ！」

提督 「そうか良かったな」

金剛 「yeah! I miss you だったんだカラ！」

提督 「ま、手早く終わらせようか」

金剛 「What!?! 何言ってるデス！」

金剛 「さつきまであんなに二人とラブムードだったのに、ワタシだけ nothing

g なんて嫌ヨ！」

提督 「2人ともあれは事故だと言ってただろう」

金剛 「but それでもワタシは大佐とラブラブしたいネ！」

提督 「喧しい。ほら始めるぞ」

金剛 「もう！ このまま end する気なんか無いんだからネ！」

提督 「沖に行くぞ着いて来い」

金剛 「アレ？手を繋いで escort してくれないデス？」

提督 「お前泳げるだろ。少し練習して直ぐに終わるぞ」ザブザブ

金剛「No! 大佐ア待つてよお……て、yeah! 大佐ア背中が空きヨ
♪」ピョン

提督「おい、お前何を」ムニユムニユ

金剛「I s c a r y だからこのまま連れてイッテ♪」ダキッ

浅瀬の2人「~~~~~!!」

提督「海岸の方が今日一番騒がしい気がするんだが」

金剛「気のせいヨ♪」(ふふん。二人に格の違い見せつけてあげるんだから!)

提督「沖についたぞ。何時までしがみついているつもりだ」

金剛「ん〜♪ 大佐もつとおんぶプリーズ♪」

提督「泳ぐ気がないなら戻るぞ」

金剛「No! 離れマス」スツ

提督「全く。お前はバタ足からだ。ほら手を掴め……腕を組んでどうしたんだ?」

金剛「ハグした時に上の紐が解けちやったみたいデス」

提督「……」

金剛「大佐。結んでくれマスカ?」クルッ

提督「後ろ向いてるからさつきと直せ」フイツ

金剛「Oh……相変わらず c o o l ね。分かつタヨ」(そうくると思ってたわ

よ！)

ゴソゴソ

提督「……………もういいか？」

金剛「ん……………」ソ……………ギユッ

提督「つ、金剛お前……………」

金剛「振り向かナイデ！今は本当に恥ずかしいデスカラ……………」ポヨ

提督「ならどうしてこんな事を」

金剛「少しでも、少しでも大佐との仲をリードしたかつタノヨ」

提督「だからと言つてそこまでしなくてもいいだろ」

金剛「大丈夫ヨ？ちゃんと片手に持つてますカラ。ほら？」

提督「いちいち見せなくていい」

金剛「大佐……………今ワタシ達、あの二人から見たらどういうふうに見えるカナ？」

提督「背中まで海に浸かつてるからな。見えても後ろから抱き着いているようにしかみえないだろ」

金剛「そうネ。じゃあ……………」クルッ

提督「く、お前それはやり過ぎだ」

金剛「離さないで下さいネ？ 離しちやったら見えちやう……………カラ」カアア

提督 「そんなに赤くなって恥ずかしがるなら最初から…… 押し付けるな」ポヨヨ

金剛 「大佐…… どうです？ 気持ち良いデスカ？」

提督 「お前の積極さを甘く見ていた」

金剛 「あ…… 嫌いに…… ナッタ？」プルプル

提督 「……」ポン

金剛 「あ……」

提督 「次はこうはいかないからな？」

金剛 「！ yes！ 次もつとお淑やかに攻めるワ！ だから今はもう少しこのまま

デ……」

提督 「手の掛かる子だ」

第38話 「帰り道」

金剛「たつのしカッター♪」

筑摩「そうですね。海で遊ぶのがこんなに楽しいなんて知りませんでした」

Bis「ふふ。筑摩、水泳の特訓がいつの間にか遊びに変わってるわよ？」

筑摩「あ、私ったら」アセアセ

提督「まあ、楽しむのも大事な要素だ。2人ともよく泳げるようになった」

Bis・筑摩「2人？」

金剛「タ、大佐ア！ワタシを forget しないでヨ！」

提督「おっと、そうだったな」

提督（そういえば2人には金剛が泳げるのを知らなかったか）

金剛（危ない危ない……）

筑摩「それにしても今回の特訓をとって私達随分と仲良くなりましたよね？」ススツ

↑さり気なく提督の横に並ぶ

Bis「そうね。色々思い出…… 思い出できたし」↑顔を赤らめながら無意識に

前を歩く提督の影に入る

金剛「そうネ。今日大佐と swim 出来て本当にハッピーだったヨ！」ピヨン
Bis・筑摩「えっ」

督「おい。金剛何をするんだ」

金剛「I'm tired オンブして欲しいネ」

筑摩「た、大佐！金剛さんが終わったら次は私お願いしたいです！」

Bis「わ、私もしてくれてもいいのよ？」

提督「お前ら俺の意思をm」

筑摩「お願いします！」 Bis「お、お願い！」

提督「……俺の体力も考えてくれよ？」

筑摩「ありがとうございます！」 パアア

Bis「Dankel！」 パアア

提督（勝手に交代制にされてしまった。明日問題なく起きれたらいいが）

金剛「大佐甘過ぎネ…… to be jealous しちやいマス」ボソ

——数十分後

金剛「次ワタシ、ワタシデス！」ピヨンピヨン

筑摩さん「金剛さんはそれだと2回連続ですよ！ 次は私です！」

Bis「ちよつと、ジャンケンに勝ったのは私なのよ！」

提督（一回切りの応対じゃなかったのか……）

——更にそれから数十分後、鎮守府入り口前

提督「着いた……」（途中から胸の感触も感じなくなったな）

Bis「Danke 大佐！」

筑摩「最後はマルクさんでしたか。次は負けません」

金剛「No! 次の winner はワタシヨ！」

提督「程々にな」（勘弁してくれ）

金剛「大佐」トントン

提督「うん？」

金剛・Bis・筑摩「大佐、今日は本当にありがとうございました！」バツ

提督「……みんな今日はよく頑張った」

提督「まあ、目的が水泳だったというのがあれだが、それでも今の結果はお前たちの真摯な努力の賜物である事には違いない」

提督「その気持ちに常に忘れるな。以上、解散」

金剛「という事は今からは free time ですネ！」

提督「何……？？」

金剛「ニッポンでは go home まで遠足っていうネ」

筑摩「金剛さんは何が言いたいんでしょう？」

B i s 「さあ……？」

金剛「大佐の home はベッドもある執務室ネ。だから部屋までデートしましヨウ♪」

B i s ・筑摩「！」

提督「いや、別にそこまでせんでも……」

金剛「Don't hold back! さ、行きまシヨウ？」ギユ ↑腕を組む

B i s 「なっ」

筑摩「っ」

提督「分かった。分かったから腕を解け」

金剛「No! 部屋までは離さないヨ！」ズルズル

B i s ・筑摩「……」

B i s 「強いわね」

筑摩「そう、ですね。でも金剛さんは元々大佐の事を好きだと公言してるので……」

B i s 「隠さなければ遠慮する気持ちもなくなるのかしら……」

筑摩 「え？」

B i s 「あ、ううんと。またね筑摩！ 今日はお互い泳げるようになって良かったわね」

B i s 「それじゃ！」 タタッ

筑摩 「あ、はい。それじゃ……」

筑摩 「え？ もしかして私だけ負けてる？」

第39話 「反省」

加賀 「つまりこういう事ですか」

加賀 「マルクさん達を無事泳げるしたのは良かったけど」

足柄 「部屋に戻って落ち着いたら」

加賀 「それまでの行いがまるで色情に狂った人間の所業のような気がして」

足柄 「羞恥心に我慢できなくなったから」

加賀 「心の内を誰かに打ち明けて楽になりたかった、と？」

提督 「概ねその通りだ」

足柄 「大佐も難儀な性格ねえ」

加賀 「ですが、私達を呼んだ事は評価します」

足柄 「違うでしょ？ 行動を評価してあげなさいよ」

加賀 「貴女は嬉しくないのですか？」

足柄 「そりゃまあ呼ばれないよりかは、ね」

提督 「お前たちになら厳しい言葉で俺を説いてくれると思つてな」

足柄 「別にあたし大佐を苛める趣味なんてないんだけど」

加賀「同じく。ですが、金剛さん達と海に行つてたのは正直気に入りません」

足柄「はつきり言うわね。なに？嫉妬？」ニヤニヤ

加賀「そうです」シレ

足柄「え？あ、そ、そうですか」

提督「確かに。本人たちの為とは言え、半裸の女子3人に男一人で泳ぎを教えるなんて事情を知らない一般人が見たらいかg」

加賀「そうじゃありません」

加賀「私も連れて行つてくれなかつた事が不満なんです」

提督「……すまん」

足柄「いや、大佐。そこは多分謝るところじゃないわよ」

加賀「お詫びとして大佐に埋め合わせを要求します」

足柄（特に大佐が悪いわけじゃないのに当然のように要求してきた！）

提督「言つておくが俺はお前が泳げるのは知ってるからな？」

加賀「別に特訓をして欲しいわけじゃありません」

加賀「私も大佐と一緒に海で遊びたいんです」

足柄（あれ？加賀つてこんなんだっけ？）

提督「遊ぶと言つてもな……」

加賀「大会の終わりに自由時間があつたはずでよね？ その時間に今日のその場所で一緒に遊んで下さい」

加賀「勿論、足柄さんも一緒です」

足柄「え!! あ、あたしも!？」

加賀「共に大佐を諫める為に呼ばれたのですから当然の権利ですよ」

足柄「や、別にあたしは、そういうんだつたらお酒の方が……。大会だつて出るつもりなかつたから水着も持つてないし……」

加賀「では、私が大佐を独り占めしてもいいんですね？ ありがとうございます。足柄さん、貴女は良い人ですね」

足柄「へ？ え？ いや、別にそうとはあたし言つてな——」

加賀「じゃあ、行くんですね」

足柄「な、なにこの状況」

提督（加賀の奴、足柄を巻き込んで俺が断わり難い状況を作る気か）

加賀「行きまますよね？」ズイ

足柄「ひあつ!？ わ、わかつたわよ。行く。行きたいです！一緒に連れてつて下さい！」

加賀「やはりそうでしたか。正直なのは良い事ですよ」ニコ

足柄（滅多に見ない貴重な笑顔なのに怖い……）

加賀「とうわけですから大佐、よろしく願いますね？」

提督「……分かった」

加賀「ありがとうございます。あ、それと。今日の事なら気にする事はありませんよ」

加賀「良かれと思つてやったのでしよう？　そして実際に皆に成果を示しました」

加賀「卑下することなんてありません。寧ろ誇らしく思います」

提督「そうか。そう言つてもらえるとまあ少しは気持ちが悪くなる」

加賀「ええ。流星は私達の大佐です」

加賀「それでは失礼します。さて、行きますよ足柄さん」

足柄「失礼しま——て、え？　行つて何処に？　あたしも？」

加賀「来たる勝負の日に向けて出陣の準備です」

足柄「ちよつと加賀なに言つて——え、やだ引つ張らないで。いやああああ！」ズル

ズル

バタン

提督「まあ気分は楽になつた……か？」

誰にともなくひとり呟いた提督だつた。

第40話 「名前」

Z1 「大佐また釣りをしてるの？」

提督 「うん？」

Z3 「レイス、またって？」

Z1 「前に会った時も提督は釣りをしていたんだ」

Bis 「大佐は釣りが好きなのかしら？」

提督 「まあな。こうして風に吹かれてほんやりするだけでかなり癒される」

提督 「3人一緒なのは珍しいな」

Z3 「そうね。久しぶりかも」

提督 「お前たちが揃っているのを見ると此処に来たばかりの頃を思い出す」

Bis 「ああ、あの時ね。ふふ。なかなか印象的な出会いだったわね」

Z1 「アハハ。そうだね。初めて会ったときに言われた言葉今で覚えてるよ」

Z3 「なかなか衝撃的、だったわね」

Bis 「そうね。だって会っていきなり言われた言葉が——」

——数か月前

提督「何て呼べばいい？」

Z1「え？」

Z3「どういう事？」

Bis「呼ぶつて名前の事？」

提督「お前たちはこの国の艦と違つて名前が長いからな」

提督「特にその2人は長い」

Z1「否定はできないけど…… だけど僕そんなこと気にしないよ？」

Z3「そうよ。名前なんて気にしないで好きに呼んで下さい」

提督「そうか。それじゃあそうさせてもらおう」

Bis「あまり変な言い方は、その…… 嫌よ？」

提督「任せろ。そうだな先ずはレーベレヒト・マース、君だ」

Z1「ぼ、僕？」

提督「そうだな…… よし、レイスにしよう」

Z1「わ。凄く短い。どうしてその名前にしたの？」

提督「名前を構成する文字を抜き出して、一番違和感無くに聞こえるように変えてみ

た」

『れー(い)ベルヒト・マース』

提督 「この平仮名の部分だけを繋いでみた」

Z1 「へえ」

提督 「どうだ？」

Z1 「うん。何だか気に入ったよ！ありがとう！」

提督 「よし、レイスはそれ決まったな。次は……………」

Z3 「私かしら？」

提督 「そうだな、君は…………… ジェーンとかどうだ？」

Z3 「…………… 一応理由を聞いてもいいかしら？」

提督 「マックス・シユルツのマックスという言葉はマキシーンの略だな」

提督 「そこからシーンの部分だけを取って、更に女性名らしく聞こえるように音を濁した。結構強引だが、どうだ？」

Z3 「別にジェーンで構わないわ…………… そう。ジェーンでいいわ…………… うん」

Z1 (ジェーンで名前嬉しそう。そういうばあまりマックスと呼ばれるの嬉しくなさそうだったな)

Bis 「次は私ね」

提督 「お前はマルクだな」

B i s 「ちよ！あまりにも決めるの早くない!? もう少し悩んでもいいのよ!」

提督 「お前はそれ以外考えられない」

B i s 「そんなあ…… もういいわよマルクで……」

提督 「よし、これで全員決まったな。マルク、レイス、ジェーン。これからよろしく頼むぞ」

ドイツ娘3人 「はっ」

——現在

B i s 「そうそう。大佐ったら私に対してだけ酷かったわね」

Z 1 「アハハ。一瞬で決めたからね」

Z 3 「でも似合ってるわよマルク…… ふふ」

B i s 「何か貴女にそう言われると悔しいわね」

Z 3 「そう? ジェーンより良いと思うわよ。ジェーンより、ね?」

提督・B i s・Z 1 (明らかにそう思っていない)

提督 「まあ3人とも納得してる名前という事でいいじゃないか」

B i s 「ちよつと大佐、私はまだ完全には……!」

提督 「じゃあもういつその事、マリアなんてどうだ?」

B i s 「え」

提督 「昔オーストリアにいたカール大公の娘の名前だ。名前の中にマリアとマルクの文字が入っていたはずだ」

B i s 「ま、マリア……………」

Z 3 「む」

Z 1 「可愛いよ！うん。凄く良いと思う！」

B i s 「ま、まあどうしてもというなら……………」

Z 3 「大佐、マルクでも問題ないみたよ？」

B i s 「ちよ、ジエーン！」

提督 「ん？ そうかやつぱり使い慣れた名前の方が……………」

B i s 「マリア！マリアでいいわ！」

提督 「では、マリア宜しく」

B i s 「ええ、宜しく！」

Z 3 「……………」ブスー

Z 3 「……………」ジエーンの方が可愛いわよ」ボソ

Z 1 「ジエーン……………」クス

第41話 「苦手」

曙「大佐あー!!」トットトット

提督「曙、お前もランニングか」

曙「そうよ。どっかの誰かのお蔭でなかなか出撃で体を動かせないからね」

提督「耳が痛い話だ」

曙「あ、あんま気にすんじやないわよ。ランニングも結構あたし好きだから」

提督「すまないな。一緒に走るか？」

曙「大佐あ？ 駆逐艦だからってあたしの体力甘く見ると後悔するわよ？」

提督（確かに駆逐艦は艦娘の中で一番小柄だが、一番動戦場を動き回ってるのも駆逐艦だな）

提督「できれば俺のペースに合わせて貰えるか？」

曙「それでいいのよ。了解らせて」

提督「準備は？」

曙「いつでも！」

提督「よし、行くぞ」

——数十分後、鎮守府通信塔前

提督「ふう。本当に凄いな。これだけ走って息一つあげないとは」

曙「大佐もやるじゃない。これだけ走って音をあげないなんて」

提督「まだ走る事自体はできるが、これ以上は体に負担がかかるからな」

曙「え？まだ走れるの？」

提督「ああ。残りの体力半々というところだ」

曙「本当にやるわね。あたしの予想以上よ」

提督「お前にそう言われると少しは自信が持てるな」

曙「そ、そんなお世辞を言っちゃって何も出ないわよ」

提督「本心だ。大したものだ」

曙「ふ、ふん。まあせっかくだからその言葉ありがたく受け取っておくわ」

提督「そうしてくれ」

曙「うーん、でも体力に余裕はあるとは言え、汗は多少掻いちやったわね」

曙「ねえ大佐、その通信塔に上って少し風に当たらない？」

提督「何……？」

曙「あ、ご、ごめん。嫌だった？」

提督「嫌というか……曙、これから言う事はできれば他言無用でお願いしたいんだが」

曙「な、なに？」

提督「俺は、あまり高い所が好きじゃないんだ」

曙「え？ それって苦手って事？」

提督「まあ、そうだ。恥ずかしい話だが」

曙「へ、へえ。大佐も苦手なものがあるのね」ニヒヒ

提督「曙、今凄く嫌な笑いしてるぞ？ 何を考えてる？」

ギョツ

提督「ん？ なんだ。袖を持って」

曙「ね？ ちよつとだけ」

提督「おい、まさか」

曙「怖かったらあたしに掴まってもいいから。ね、涼みたいの」

提督「全く……その代わり約束は守れよ？」

曙「当たり前よ！約束は絶対に守るわ。」

曙「だから行く？」

提督「分かった分かった。引つ張るな」

通信塔、通信室

夕張「あ、大佐に曙ちゃん。こんな朝早くにどうしたんですか？」

曙「ランニングをして汗かいたから涼みに来たのよ」

夕張「あ、そうなんだ。大佐も、ですか？」

提督「まあ……そうだ」

夕張「うん？ 何だか顔色が悪い」

曙（本当に苦手なのね。何か、可愛いところあるじゃない）

夕張「大佐、調子でも悪いんですか？」

提督「いや……まあ普通だ」

曙「あたしと同じペースで走ったから息あがっちゃってるのよ」

夕張「ああ、なるほど」

曙「ちよつと外に出るわね？」

夕張「今日風が少しあるから気をつけてね」

提督（なに……）

通信室外

曙「あー、確かにちよつとだけ風あるわね」

提督「強くないか？」

曙「はい、手」ス

提督「む」

曙「握つていいわよ？」

提督「お言葉に甘えさせてもらおう」（ここは意地は張れないな）ギユ

曙「どう？ 少しは落ち着いた？」

提督「不思議なものだな。手を握るだけで大分気分がマシだ」

曙「あたしのおかげかもよ？」

提督「そうだな。助かる」

曙「ちよ、ちよつとそんなに素直に感謝しないでよ」

提督「照れなくていい。こういう時は素直に受けた方がお互い気が楽だぞ」

曙「もう、ちよつと手を握つてあげたくらいで調子戻しちゃってさ。離すわよ？」

提督「それは困る」グ

曙「あ……もう、本当にしようがないわね♪」

提督「ところで朝日でも覗るつもりか？ もう結構いる気がするんだが」

曙「うん？ そうよ。高いところで覗る夜明けは結構良いものよ。——ほら」

提督「ふむ……」

曙「ねえ気づいている？ あたし今手を離してるのよ？」

提督「お？」

曙「苦手なのを忘れるくらい綺麗でしょ？」

提督「そう、だな。」

提督「曙」

曙「なに？」

提督「また一緒に走ろう」

曙「いいわね！ また来ましょう♪」

通信室

夕張（何だか二人とも良い雰囲気だなあ）

第42話 「予定」

提督「では、この日に大会を開催する事を決定する」

提督「各組長はそれぞれに所属する艦達に速やかに通達し、来たる大会に向けて準備せよ」

日向「戦艦組了解」

赤城「空母組了解」

古鷹「重巡組了解」

矢矧「軽巡組了解」

叢雲「駆逐組了解」

初春「同じく了解」

イムヤ「潜水組了解」

提督「よし、解散」

秘書艦と提督だけの執務室

加賀「やっと決まりましたね」

提督「本当は決めようと思えばもっと早く決めれた気がするが、予想外の事が最近多かつたからな」

加賀「水泳の特訓とかですか？」ボソ

提督「それ以外にもあった」

加賀「そうでしたか？」シレ

提督「まだ機嫌が悪いのか」

加賀「別に」

提督「全く……ところで、加賀。お前、前に足柄を無理やり連れて何処に行ったんだ？」

加賀「水着の販売店です」

提督「そうか」（聞かなければよかった）

加賀「一緒に来たかつたですか？」

提督「いや、全く。もうこりこりだああいうのは」

加賀「……こりこり、とは？」

提督「まあ……この前の特訓の時に着る為の金剛達の買い物に付き合ってたんだ」

加賀「へえ……」

提督「お前は俺に何も言わなかつたろ？」

加賀「そうですね。行っても来てくれるとは思ってなかつたので」
提督「む……」

加賀「でも金剛さん達とは行つたんですよね？」

提督「まあ、半ば無理やりに近かつたがな」

加賀「いつ た ん で す よ ね ？」

提督「…… ああ、行つた」

加賀「初めからそうやって素直に認めればいいんです。それ以上は私から追求するつもりはありませんから」

提督「そうか……」

加賀「ええ」

提督「……」

加賀「……」ジ―

提督「どんな水着を買つたんだ？」

加賀「見たいですか？」

提督「関心はある」（まあ見るだけだ）

加賀「そうですか。持ってきてますので少し待っていて下さい」
バタン

——数分後

ガチャ

加賀 「お待たせしました」

提督 「……」（手には何も持っていない。まさか……）

加賀 「どうしました？」

提督 「着て来たのか？」

加賀 「ご名答です」

提督 「ここで見せるつもりか」

加賀 「更にご名答です」

加賀 「では、ご覧下さい」

シウル：…… パサ：…… コト：…… パサ：…… パサ

加賀 「…… どうですか？」

提督 「世の男ならありがたくて泣いているところだろうか」

加賀 「大佐はどうです？」

提督 「それ、大会で着るのか？」

加賀 「ええ。これが大会用の水着ですから」

提督「別にまだ買ったのか？」

加賀「それはお楽しみです」

提督（それ以上にアレなのか）

提督「はあ……」

加賀「興奮しました？」

提督「きれいだ」

加賀「」

提督「どうした？」

加賀「少々動揺してしまいました」

提督「偶には気の利いた事を言わないとな」

加賀「ありがとうございます。十分満たされました」

加賀「それでは、仕事の続きを」

提督「服を着ろ。大馬鹿者」

第43話 「開会式」

提督「それではこれより、水泳大会の開会式を行う」

艦娘達「ワアアアアアアアアア」

提督「司会進行役、後は頼んだ」

青葉「はい！お任せ下さい♪」

提督（楽しそうだな）

青葉「はい。皆さん注目です！大佐より司会進行役を仰せつかりました青葉です！」

青葉「まず、初めに競技の進め方について改めてご説明しますので、どうかご清聴を
！」

青葉「今回の大会は、各艦種のグループから選出された代表5名による団体戦です」

青葉「ルールは簡単。各グループの代表が一名ずつ自由な型で同時に一定距離泳いで
もらい、タイムを合計して割り出した平均で競います！」

青葉「因みに入賞は3位まで！入賞したグループには順位に応じて素晴らしい景品
が用意されています！」

青葉「そして、なんとなんと今回は団体の成績とは別に、最も個人成績が良かった選

手にはご褒美として大佐に何でもお願い出来る権利が与えられます！」

艦娘「ワアアアアアアアアアアア!!」

青葉（明らかに後者の方に熱い何かを感じるなあ）

青葉「故意に競争相手を妨害する行為は勿論反則！ それに加えて艦娘として持つてる力も使つてはいけません！ 必ず自力で泳いでください！」

青葉「あ。あと一番最後に目玉イベントがあります！」

青葉「個人成績最下位の選手は大佐と勝負をしてもらいます！」

青葉「こちらは勝つても負けても大佐個人からご褒美が貰えちゃいますよ！」

青葉「えーと、説明はこのくらいでしょうか…… うん。はい、それでは各グループの紹介に入ります！」

青葉「各グループの紹介の後には代表選手のリーダーに大会に向けてのコメントも頂きますので、どうかよろしくお願いします！」

青葉「それでは早速行ってみましょう！ まずは戦艦グループです！」

〈戦艦グループ代表選手：長門・金剛・伊勢・ビスマルク・扶桑〉

青葉「では、割れた腹筋が眩しい戦艦グループのリーダー長門さんにコメントをしてもらいます。どうぞ！」

長門「こら、腹筋とか言うんじゃない！ あーこほん。リーダーの長門だ！」

長門「今回は世界のビッグセブンとしてではなく、鎮守府のビッグファイブとして戦う所存だ！ 無論、優勝は私達が頂く！」

青葉「はい、ありがとうございます素晴らしい意気込みでしたね！」

青葉「では、次は航空母艦グループです。どうぞ！」

〈航空母艦グループ代表選手：加賀・翔鶴・瑞鶴・飛龍・蒼龍〉

青葉「では、絶対零度の氷の女王リーダーの加賀さんコメントお願いします！」

加賀「…… 貴女、大会が終わったら後で鎮守府の裏に來なさい？」

加賀「こんにちは、加賀です。私達に敗北は有り得ません。勝ちには既に決まっています」

青葉「何とも凄い自信！ 流石ですね！」

青葉「では次、軽空母グループの方どうぞ！」

〈軽空母グループ代表：鳳翔・龍驤・瑞鳳・飛鷹・千歳〉

青葉「それでは我が鎮守府のお母さん、リーダーの鳳翔さん一言お願いします！」

鳳翔「お、お母さんなんて、そんな。どうも皆さんこんにちは、鳳翔です」

鳳翔「今日は私達軽空母の本当の力をお見せできると思います。期待しててくださいね？」

青葉「凄い！和みました！ありがとうございます！」

青葉「それでは次は、重巡・航巡の混成グループです。どうぞ！」

〈重巡・航巡チーム：加古・那智・摩耶・最上・筑摩〉

青葉「これは意外な人選！ 居眠り王、リーダーの加古さんコメントどうぞ！」

加古「居眠り王なんてやめてよ！ あー加古です」

加古「普段、ぼーっとしてる事が多いかもしれないけど、いざという時はやるので見て下さい！」

青葉「はい！ 本当にお願ひしますね！」

青葉「お次、雷巡・特務艦の混成グループです。どうぞ！」

〈雷巡・特務艦チーム：北上・大井・木曾・あきつ丸・明石〉

青葉「これも意外な人選ですね。ではマイペースなら誰にも負けないリーダーの北上さん一言どうぞ！」

北上「あたしはリーダーなんてやりたくなかったんだけどね」

北上「でもやる時はやるよ？ チーム北上の活躍こうご期待ってね」

青葉「はい。ありがとうございます。何だか不思議な安心感ありますね！」

青葉「それではお次は軽巡グループです。どうぞ！」

〈軽巡グループ：矢矧・天龍・長良・川内・夕張〉

青葉「お、これは頼もしい人選！ クールビューティー、リーダーの矢矧さんどうぞ

意気込みを！」

矢矧「クールビューティって……まあ悪い気はしない？　か」

矢矧「矢矧だ。軽巡と侮るなよ？　私達が一番優勝に近い事を証明してみせよう！」

青葉「凄い！カッコイイですね！流石です！」

青葉「さて、残りも少なくなってきました。お次は駆逐グループAです！」

〈駆逐グループA：初春・菊月・深雪・綾波・雷〉

青葉「はい、それでは煙管を持った姿が良く似合いそうなりリーダー初春さんお願いします！」

初春「別に妾は喫煙はしないのだがな。初春じゃ。先ほどの軽巡のリーダーの言葉と被るが言っておこう」

初春「駆逐艦と侮らぬことだ。さもなくば、気づいた時には全て手遅れだぞ？」

青葉「凄い自信ですね！　駆逐艦とは思えません！　ありがとうございます！」

青葉「残るは2グループ！はい、それでは駆逐グループBどうぞ！」

〈駆逐グループB：陽炎・白露・霞・長波・島風〉

青葉「いいですね！駆逐艦のアイドル、リーダーの陽炎さんコメントどうぞ！」

陽炎「あ、アイドルなんかじゃなわいよ！　陽炎よ！」

陽炎「今日は私達駆逐艦の真の力を見せるわよ！　期待しててね！」

青葉「わー可愛い！ これは誰だって期待しちやいますね！」

青葉「はいー！それではいよいよ本大会の本命、潜水グループの皆さんです！」

〈潜水グループ：伊168・伊58・伊19・伊8・まるゆ〉

青葉「おお、何と今回は全員独自の水着を着るそうです！これはますます期待です！」

青葉「それではリーダーのイムヤさん、一言お願いします！」

イムヤ「私達潜水艦は全力を尽くすわ！ 勿論手加減抜き！ 楽しみましょう！」

青葉「いやー、実力者らしい堂々としたお言葉でしたね！」

青葉「グループの紹介は以上です！ それでは、最後に大佐に開会の合図をして頂

きます！ 大佐お願いします！」

提督「皆、今日は競技に参加する側も応援する側も一丸となって大会を盛り上げ、そして楽しんで欲しい！」

提督「それでは、堅苦しい話はするつもりはないので、早々に大会の開始を宣言させてもらおう！」

提督「これより水泳大会を開催する。一同、全力を尽くせ！」

艦娘一同「ワアアアアアアアアア！」

第44話 「水泳大会第一ゲーム①」

青葉 「さあもうすぐ水泳大会第一ゲームの始まりです！」

青葉 「この試合の実況と解説は青葉と」

赤城 「ゲストの赤城でお送りします」

青葉 「それにしても赤城さん、最初のゲームからいきなり波乱の予感がしますね」

赤城 「そうですね。駆逐グループからはいきなり『最速』の島風ちゃん、潜水グループからは『海の土竜』こと、まるゆちゃん」

赤城 「軽巡からは『鈍足』の夕張さん、更に雷巡／特務グループからは明石さん……」

青葉 「いきなりダークホース的要素が満載ですね！」

赤城 「それはどうでしょう。今回の重要な要素は艦娘としての能力を使わずに自力で泳ぐことにあります」

青葉 「あくまで艦娘としてではなく、個人の実力がモノを言うという事ですか」

赤城 「そういう事です」

青葉 「なるほど。それじゃあ本当に実際に試合が始まってみないと……」

赤城 「実況解説員としての腕の見せ所ですね？」

青葉「むむ、望むところです！」

赤城「ふふふ、頑張つてね。じゃあそろそろ試合会場に移動しましょう」

〈試合会場

青葉「では、試合の詳細を説明します」

青葉「まず、この高速艇に乗って鎮守府の前の浜辺から沖合3キロまで移動します。つまりそこがスタート地点になるわけです」

青葉「後は合図と同時に船から飛び込んで砂浜を目指してください。以上です」
扶桑「先に足が着いた方が勝ちとかじゃないのね」

青葉「それだと身長のある人が有利になりますからね。ちゃんと海から上がって浜辺に出た時点でゴールです」

まるゆ「ちよつとだけ安心しました」

蒼龍「うーん、普段海の上に浮いてるからちよつと緊張してきたなあ」

千歳「あ、それ私もです。上手く泳げるかしら」

筑摩「……」（大丈夫怖くない、怖くない）

明石「筑摩さん凄く集中してるわね」

夕張「ふふふ……」

雷「な、なんか夕張が笑ってるわよ……」

島風「ワクワクしてるからじゃない？ わたしもワクワクが止まらない♪」

青葉「皆さん他に質問とかないですか？ ないなら水着に着替えて船に集合して下さい」

——数分後

青葉「皆さん、お待たせしました！ 第一ゲーム間もなく始まります！」

赤城「あ。選手が入場してきましたよ」

青葉「最初に入場してきたのは扶桑さんです！ おお、これはいきなり凄い！ なんというセクシーな赤のワンピースでしょう！」

青葉「ホルターネックのトップがたわわに実ったはち切れんばかりの果実を絶妙な加減で支え、そこからは肩から背中にかけて陶磁の様な白い肌が覗いています！」

赤城「下はハイレグカットですか。扶桑さん試合が始まる前から凄い攻撃力」

扶桑（山城に水着を買いに行かせたばかりにこんな事に…… 恥ずかしくて轟沈しそう……）

青葉「次に入場してきたのは蒼龍さんです！ こちらは蒼龍さんらしく翠色を基調にした控えめなデザインのピキニです！」

赤城「でも、さり気にとツプもボトムも紐で結ぶタイプですね」

蒼龍（控えめで悪かったわね！ 紐ってただけ結構恥ずかしいんだから！）

青葉「続いて入場してきたのは千歳さんです！ こちらはビキニですがアダルトイナ黒！ しかもトップはVネックで胸元が非常に際どい！」

赤城「良く見ると水着に細かい刺繍が入っててオシャレですね」

千歳（ふふ、普段地味に見られがちだからこういう所で目立っておかないとね）

青葉「お次は筑摩さんです！ センターストラップのワンピースが普段控えめな筑摩さんからは考えられないほど大胆なデザインです！」

赤城「エメラルドグリーンと黒のツートンカラーですかも良いですね」

筑摩（うう、恥ずかしい……………でも、大佐とはこれで練習したのよね……………大丈夫いけるわ！）

青葉「そしてお次は明石さん！ モノキニで登場です！ 後姿がセクシーですね！」

赤城「あれって前と後ろで見え方が違うんですね。なんか明石さんらしいなあ」

明石（なんか二人の解説があっさりしてるのが気になるなあ。結構気合入れたのに）

青葉「最後は、あ。島風さんとまるゆさんが一緒に入場してきました！ 島風さんは当り障りのない普通のあ、赤色……………？ のワンピースです！」

赤城「まるゆちゃんはいつもの白いのじゃなくて黒色ですね……………」

青葉（こ、これはコメントしづらい。ある意味意表を突かれたけど）

島風「みんなわたしの魅力に驚いてる！ やっぱ赤色はセクシーってことだね！」
まるゆ「いいえ。きつとわたしですよ！ やっぱ黒色が大人っぽいです！」

く 観覧席

提督「これは一体何の大会だ………？」

第45話 「水泳大会第一ゲーム②」

榛名「それでは各選手位置について下さい」

出場選手一同「……」ス

榛名「スタート！」パーン

バシャーーン！

青葉「さあついに始まりました第一ゲーム。皆さん流石には…… あ、あれ？」

赤城「だから言ったでしょう？ 結構みんな自力で泳ぐことには慣れてないものなんですよ」

島風「わぷっ！ 泳ぐってこんなに難しいんだ！」

雷「島風大丈夫？」バシヤバシヤ

島風「大丈夫！ 波の掻き分け方段々慣れてきたから！」

雷「流石ね。頑張りなさいよ！」ジャブツ

青葉 「流石は島風さんですね。泳ぐのに苦労していると思っていたらもう慣れてしまってるみたいです」

赤城 「そうね。雷ちゃんは元々泳げたみたいです。動きに迷いがないです」

青葉 「他の選手は……」

扶桑 「くつ。泳ぐことはできるけどやっぱり慣れないわね」ザブザブ

蒼龍 「扶桑さんお先に〜」スー

千歳 「蒼龍さん待ちなさい！ あ、扶桑さん。頑張ってください！」スイスイ

青葉 「空母の方達は器用に泳いでますね」

赤城 「常に水上で艦載機を運用してたおかげかしら、波の乗り方も上手いですね」

青葉 「対して扶桑さんは苦労してるみたいです。泳げてはいますけど」

赤城 「扶桑さんは航空甲板を盾替わりによく使ってたからね……プールならまだましも波の動きにちよつと翻弄されてるみたい」

青葉 「これは意外です。さて、残りの選手は……」

筑摩 「……」スツスツ

明石「筑摩さん慎重だねー」スイー

筑摩「今日はっ、自力でっ、ゴールする事が目標ですからっ」スツ

明石（凄い真剣に泳いでる）

明石「頑張つてね！筑摩さん」オヤユビグツ

筑摩「…… 貴女も」ニコ

夕張「どいたどいた〜！」

筑摩・明石「え？」

夕張「…… ー」スイーサブツ

夕張「海の上では仕方ないけど、ここでは最速よー！」

青葉「おーこれは凄い！ あれだけ鈍足と呼ばれてた夕張さんがあんなに速く泳げるなんて」

赤城「まあそれは艦娘としての性能の問題ですからね。元々夕張さんは他の軽巡の人より装備が重かった分、体力もあつたんでしようね」

青葉「で、元々泳ぎも得意だった、と？」

赤城「あの泳ぎ振りを見る限りそうとしか思えませんね」

青葉「なるほど。筑摩さんは速くはありませんけど、確実に危なげない泳ぎを見せて

ますね。実に彼女らしいです」

赤城 「明石さんは工作艦としての器用さというところでしょうか。こちら也非常に安定した泳ぎをしてますよ」

青葉 「なるほどそうですね…………… あれ？ 誰かを忘れてるような」

く 浜辺

まるゆ 「ふう…………… 到着です」 ザブ

青葉 「なんとー!!？」

赤城 「速い……………！」

夕張 「ええ!!？」

蒼龍・千歳 「嘘!!？」

青葉 「こ、これはえつと、いつの間に」

赤城 「タイムは18分50秒」

青葉 「時速10kmですか!？」

赤城 「人間の約2倍ですね」

島風「はっやーい！ まるゆちゃん凄い！」

雷「ここまで速いなんてね。驚きよ！」

筑摩「確かに凄いです。ですが」

明石「そうね。私達の勝負はまだ終わってないわよね！」

扶桑「みんな持つて〜」

〽数十分後

第一ゲーム結果

1位：まるゆ	1	8	m	5	0	s
2位：夕張	2	2	m	1	0	s
3位：千歳	2	6	m	2	2	s
4位：蒼龍	2	6	m	3	1	s
5位：明石	3	0	m	0	5	s
6位：雷	3	5	m	2	4	s
7位：島風	3	5	m	2	5	s
8位：筑摩	4	7	m	0	9	s

9位：扶桑 1h6m6s

提督「やはり艦娘は人間より身体能力が優れているんだな」

叢雲「扶桑は、体力で泳ぎ切ったものね」

提督「叢雲、お前は大会には出ないんだったな」

叢雲「面倒よ」

提督「お前らしいな」

叢雲「ところで、あそこで落ち込んでる人に声でも掛けてあげたら」

提督「ん？」チラ

扶桑「ふふふ…… 私は結局欠陥戦艦なのよ……」ズーン

雷「ちゃんとゴールできただけ良かったじゃない」

筑摩「そ、そうですよ。私もやっとの思いでした」

島風「扶桑さんも今度のもっと速く泳げばいいじゃない」

提督「そうだな。少し行ってくるか」

叢雲「しっかり頼むわよー」ヒラヒラ

第46話 「水泳大会第二ゲーム①」

青葉「さあ第二ゲームの始まりです！ 今回のゲストは五十鈴さんです。よろしくお願ひします」

五十鈴「よろしく。バシバシ行くわよ」

青葉「最初はビスマルクさんですね！ 最近はマリアさんと呼ばれてるようです！」

五十鈴「ごくシンプルな……さ、三角紐ビキニね。生地は無地で全て黒で統一されてるわ」（凄い……色々零れそう）

青葉「元々背が高くてスタイルもいい上に金髪、それだけで水着が映えますね！」

B i s（照れるわね。大佐、見ててくれるかしら）

青葉「次は飛龍さん！ 黄色のワンピースで登場です！ ベアミドリフの大胆なカットが印象的です！」

五十鈴「へえ。飛龍さんもまあいう格好するんだ」

青葉「3人目は飛鷹さん純白のビキニで登じ……や、これは……」

五十鈴「ソングのボトム……これお尻殆ど見えてるわよね……大胆」

飛鷹（ふっふー、ちよつと恥ずかしいけど。注目されるのは気分良いわね！）

青葉「続いて最上さんです！山吹色のシンプルなワンピースですね！」

五十鈴「最上のイメージをよく表してるわね」

最上「なんか反応が凄く普通だなあ。もう少し派手なのが良かったかな。」

青葉「お次はあきつ丸さんですね！おっとこれは誰が予想できたでしょうか、スクール水着です！」

五十鈴「あきつ丸さんって結構胸あつたのね、つてあれ明らかにサイズ小さい気がするんだけど。まさかわざと？」

あきつ丸（うう……胸がキツイ、磨れてる。もつと考えて選ぶべきだったなあ）

青葉「はい、それでは次は川内さんです！お、これは思い切つてビキニを着てきたという感じですね！初々しい感じが非常に良いです！」

五十鈴「無理して照れちゃって……。顔が水着と同じ色してるじゃない」

川内（うう、やっぱりワンピースにすれば良かったあ！）

青葉「はい。お次は綾波さんですね！うん、これは良く似合ってる！」

五十鈴「ねえあのワンピース胸元に少し切れ込みが入ってるように見えるんだけど気のせい？」

綾波（な、なにこの切れ込み!? 如月さん、手直してこれの事だったの!?!）カァア
青葉「さあ次です。長波さんどうぞ！うん、これはまた意外にもビキニですね」

五十鈴「キュロパンか。模様も凝ってるし、ただ可愛いだけじゃないわね」

長波（ちよーつと大胆だったかなあ。ま、周りがそれ以上に凄い人多いからそんなに目立たないか）

青葉「さてさて、最後は伊8さんです！ あ。タンキニですね！ 潜水艦の方は水着が違うだけで新鮮な感じがします！」

五十鈴「綺麗な柄ね。露出も少ないのも意外だわ」

ハチ（たまにはこういうオシヤレなものいいわよねえ♪）

く 観覧席

提督「マリアの奴こつちに手を振ってるぞ」

叢雲「そうね。あーそんなに飛び跳ねると……揺れてるから……あーやつぱりね」

叢雲「大佐？」

提督「……」 ↑眉間を抑えてる

叢雲「触れないようにしないといけないわね」

提督「そうだな……」

第47話 「水泳大会第二ゲーム②」

青葉「さあ、第二ゲーム開始です！ 榛名さんお願いします」

榛名「了解です！ それでは皆さんいちちについて——あ、あのマリ……………アさん？」

B i s 「大佐に見られた……………全部見られちゃったよ……………」グス

榛名「あ、あのマリアさん。もう試合が始まつちやうんですけど」

B i s 「絶対ふしだらな女だと思われたわ……………。もう顔を見れない……………」ヒック

榛名「あ、あのマリアさんが……………」

龍田「わたしに任せなさい」コツコツ

榛名「龍田さん？ 何を……………」

龍田「マリアちゃん、悲しむ事なんかないわよ？」ボソ

B i s 「ええ……………」

龍田「大佐、顔真つ赤にしながら貴女のソレから目を逸らせずいたもの」ボソ

B i s 「え、そ、それって……………」

龍田「そう。大佐は大きなお胸が大好きなの。だからマリアちゃん」ボソ

B i s 「な、なに……………」（だからあの時私の胸を……………」）

龍田「恥ずかしかつたかもしれないけど悲しむことは無いわ。貴女今、艦娘の中で一番大佐を虜にしてるのよ？」

龍田「そう。一番大佐の恋人になれる可能性があるのは貴女。ついでにこの試合で優秀な成績を残しちやえば、もう大佐は貴女に　ゾ　ッ　コ　ン　間違いなしよ　？」ボソボソ

B i s 「！」

く 観覧席

バリン！

叢雲「……なに？」

提督「飲み物が入っていたグラスが勝手に割れた……」

く 提督の所から少し離れた観覧席

長門「龍田！　すまないな！」

龍田「正直言つて自分の組以外を助けるのはあまり気分がよくないけど、まあお礼の為だものねえ。例のアレ頼むわよお？」

長門「ああ、約束は守る。この長門に任せておけ」

く試合会場

青葉「あ、マリアさん復活したみたいですね！ しかも何だか凄く燃えてる？」

五十鈴「龍田…… あいつ何を言ったのかしら」

青葉「ま、取り敢えず始めましょ！。ちよつと時間かかっちゃいましたし」

五十鈴「そうね。榛名さんお願い」

榛名「はい！ それでは皆さん位置に着いて下さい」

選手一同「……」ス

榛名「スタート！」

ザッブーン

青葉「さあいいよ第二ゲーム始まりました！どのような結果が待ち受けるのか！」

五十鈴「でも、正直勝負になるのかしら。前回だつてかなりの差を付けて潜水グルー

プが勝ったわよね」

青葉「う…… そうなんです。実際にあの後調べたところ、本当にまるゆさん是不

正はせず自力で泳いでましたからね」

五十鈴「全然私たちは泳いでるの見てなかったけど？」

青葉「ああ、それは絶対的な肺活量を使って全て潜水で泳いでいたからですよ」

五十鈴「ぜ、全部潜水で？」

青葉「潜水が一番水の抵抗が少ないですからね。まるゆさんはたった2回の息継ぎで泳ぎ切つたみたいです」

五十鈴「たった2回…… 気づかないわけね」

青葉「水泳の型は自由と言つた手前途中でルールを変更するのいやらしい感じもしますし」

五十鈴「そうね。でもそれじゃあこの試合は圧倒的に…… え？」

青葉「どうしたんですか？ 五十鈴さん」

五十鈴「あそこの、あの凄い水飛沫をあげながら泳いでるの MARIA さんじゃない？」

青葉「え？ あ、ああ！ 本当です！ MARIA 選手速い！ まるで海を割るように凄い勢いで掻き分けて進んでます！」

飛龍「くっ？」（MARIA さんが通つた後の波が乱れて泳ぎ難い！）

長波「ちよつと、あれには近づかない方がいいわね。綾波！ 少し迂回して泳ぐのよ！」

綾波「そ、そうですね。このまま泳ぐのは流石に危なそう……」

飛鷹「皆元気ねえ。私はせっかくだからのんびり泳がしてもら——」ザバア

飛鷹「わぶ!?げ、げほっ…… な、なに?」

川内「飛鷹さんおっ先々」ニヤ

飛鷹「こ、こんの、待ちなさい!」ザブツ

青葉「おお、川内さんも速いですね!ともしなやかに泳いでいます!そしてそれを追う飛鷹さんも見事な泳ぎっぷりを見せてくれています!」

五十鈴「あの子、夜戦だけが得意じゃなかったのね」

あきつ丸「皆速いでありますね。これは例え遅くても安全に行くのが得策であります!」

最上「あつさん、あつさん」

あきつ丸「あ、最上さん」

最上「駆逐艦の子達が安全なルート見つけたよ。僕たちもそこを行こう!」

あきつ丸「了解です! ありがとうございます!」

青葉「あの二人はどうやら駆逐グループと同じコースで行くみたいですね」

五十鈴「迂回するのね。距離は少し遠くなるけど、確かにあの波は避けた方がいいかもね」

青葉「それと、分かってはいましたがやっぱりハチさんの姿が見え——」

五十鈴「あれじゃない？」

青葉「え？ あ、本当です！なんであんな中途半端な所に？」

ハチ「げほっげほっ」

ハチ（マリアさんの横すれすれを追い抜いて驚かそうとしたらバタ足で更に加速するなんて……）

ハチ「水掻きだけであそこまで泳げるものなのかしら……」

く 浜辺

ザブツ

Bis「着いたわよー！」ガッツポーズ

青葉「おお、凄い！本当に勢いだけで一位でゴールしちゃいました！」

五十鈴「ハチは追うのをやめたみたいね。迂回するにしてもあの距離では差は縮めら

れないと判断したんでしようね」

——それから数十分後

第二ゲーム結果

1位：ビスマルク	2	0	m	3	2	s
2位：伊8	2	2	m	1	0	s
3位：飛龍	2	7	m	0	0	s
4位：長波	3	2	m	1	0	s
5位：最上	3	2	m	1	9	s
6位：綾波	3	2	m	5	0	s
7位：あきつ丸	3	6	m	0	3	s
8位：川内	4	5	m	4	2	s
9位：飛鷹	4	5	m	4	8	s

提督「マリアが一位か。まるゆのタイムが上とはいえ、大したものだな」
 叢雲「マリアの後波を受けながら乗り切ってゴールした飛龍も凄いわよ」
 提督「4位から6位は接戦だったみたいだな」

叢雲「ええ。なかなか見ごたえのある試合だったわ。あんなに引き締まった顔の3人は久しぶりに見たわ」

提督「川内達は一体どうしたんだ……」

叢雲「途中で喧嘩してたみたい」

ピンポンパンポン

青葉「第二ゲームが終わったところでお昼休みに入ります！よろしくお願ひしまーす
！」

第48話 「昼休み」

筑摩「大佐！ あ、叢雲さんも」

Bis「叢雲さんこんにちわ。大佐、私一位取ったわよ！」

叢雲「2人ともなかなか良かったわよ」

提督「そうだな。2人ともよく頑張った」

提督「筑摩も順位を気にせずよく最後まで泳ぎ切った」

提督「マリアは一位まで取ったか。本当に2人とも大したものだ」

Bis・筑摩「えへへ……」 テレテレ

提督「ところで二人とも、自由時間は全ての試合が終わった後だぞ」

提督「何で水着のままなんだ」

筑摩「この水着気に入りました、このままじゃダメでしょうか？」ズイ

Bis「わ、私はこれもつとしっかり見てもらいたくて……ダメ？」ズイ

提督「ダメではないが非常に目のやり場に困る」

Bis「お、男の人が胸に目がいつちやうのは仕方ないわよ。あまり見過ぎないならべつに気にしないわ」

筑摩「ええ。私も大佐なら構いません」

提督「色即是空……空即是色……」ボソ

B i s 「筑摩「ええ？」

叢雲「大佐も大変ね……」

提督「何でもない。ま、お前たちがそれでいいならいい。だがあまり近づくなよ」

筑摩「そ、そんな！私にか……！？」ウル

B i s 「私一位になったのよ!？」ウル

提督「違う。自分がまるで色情狂いの人間の様で我慢ならぬんだ」

筑摩「自己嫌悪し過ぎですよ。普通に接してくれたらいいんです」

B i s 「そうよ。普通にスキンシップするだけなら何もイヤラシくなんてないわ」

提督「お前たちが普段の格好ならな。ま、自重はしてくれ」

筑摩「分かりました」

B i s 「了解よ」

叢雲「大佐、私席外してあげましょうか？」ニヤ

提督（俺の心境を分かって言ってるなこいつ）

提督「いや、気にするな。食事は多い方が楽しいしな」

叢雲「ふふ、あらそう？ 仕方ないわね」ニヤニヤ

筑摩 「何を食べてたんです？」

叢雲 「素麺よ」

B i s 「ソーメン？」

提督 「昔からある日本の麺食の一つだ。夏季に納涼を味わうために食べる事が多い」

叢雲 「食べてみる？」 スツ

B i s 「そうね。せっかくだから」

筑摩 「面をこの汁に浸けて食べるんですよ」

B i s 「……」 パク、チュルチュル

提督 「どうだ？」

B i s 「少し味が薄い気がするけど、確かに冷たい気分を味わうには向いてるかも」

提督 「だろう。気に入ったら食べて行け。筑摩も食べるか？」

筑摩 「はい。頂きます」

提督 「叢雲、用意頼めるか？」

叢雲 「分かったわ」

B i s ・筑摩 「……」 チュルチュル

提督 (今気づいたが、麺を啜った時の汁の飛沫がこいつらの胸元にあちこちに)

提督（肌がきれいだと無駄に目立って、視線が無意識に誘導されがちだ）

筑摩（大佐、さつきから私達の胸を見てる………？）

B i s（やっぱりこれくらいのが好きなのね………！）

叢雲「あら？ 筑摩さん胸のところに麵が着いてるわよ」

筑摩「え？ あ、本当だ」

叢雲「……… 大佐に取ってもらったら？」ニヤ

提督「ゴフツ」

B i s・筑摩「きやつ」

叢雲「あらあらいけないわね。何二人を汚しちやつてるのよ」

叢雲「拭いてあげたら？」ニヤニヤ

提督「叢……… 雲……… お前何を馬鹿な事を………。だいいち、二人が受け入れる

わけないだろう」

B i s・筑摩「えっ」

提督「何故意外そうな声を出す？」

B i s「いや、その……… 拭きたかったら別に……… 優しく拭いてくれるな

ら………」

提督（何を言ってるんだこいつは）

筑摩「わ、私は…… 嫌じゃない…… ですけど、恥ずかしい…… とうか」
叢雲（そう言いながらしっっかり胸の下で腕を組むのね）

Bis「あ、水着が邪魔ならと、取ってもいいわよ？ て、手で隠すから」

提督「なにを……」

叢雲「あら、大胆ね」

筑摩「ええ!?! それは流石に……!」

提督「頼むから普通に食事をさせてくれ」

叢雲「あははははは。大佐、頑張りなさい！」

第49話 「末井大会第三ゲーム①」

青葉「水泳大会も後半に突入です！ 五十鈴さんに代って新しいゲストは球磨さんです」

球磨「よろしくだクマ」

青葉「では、出場選手の紹介行ってみましょう！」

球磨「最初は伊勢クマね。競泳用のワンピースクマ」

青葉「手堅く来ましたね。それだけに試合に懸ける意気込みを感じます！」

伊勢「何時も日向に良いところ持っていていかれがちだからね。今回は姉らしいところ見せるわよ！」

青葉「瑞鶴さんの姿が見えてきました。お、これは可愛いセパレーツですね！」

球磨「水玉模様になんか入ってるピンクのラインがオシャレクマね。スカート型のボトムもポイント高いクマ」

瑞鶴「ちよつと、子供っぽかったかな。でも、可愛いし良いか♪」

青葉「続いて瑞鳳さんですね。おお、これも可愛いマリンブルーのワンピースです！」
球磨「リボンの飾りと裾のフリルが可愛いクマ。未熟な体をうまく可愛さでごまかし

てるクマ」

瑞鳳（最後が余計よ！ただ可愛いだけじゃないんだから。見てなさい！）

青葉「次は摩耶さんですね。ん、これは予想通りといたしますか、立派な紺色の三角ビキニですね！」

球磨「流石に似合ってるクマ。あのボディが恨めしい……クマ」

摩耶（そ、そんなに似合ってるか……？ あと球磨、お前は褒めるか羨むかどつちかにしやがれ）

青葉「木會の入場です！ こちらは普通のツーピースですね。しかしその着こなしは実に木會さんらしいと思います！」

球磨「球磨を差し置いてベアトップを使うとはいい度胸クマ。ま、今日はその地味なスパッツのボトムに免じて今日は見逃してやるクマ」

木會（地味で悪かったな！ 見た目より機能だ！）

青葉「長良さんは……これは、木會さんとは対照的にビキニで来ました！」

球磨「紅白のツートンカラーでデザインはシンプルクマ。長良らしいクマ」

長良（褒められてるのかな……偶にはこういう格好も良いよね♪）

青葉「深雪ちゃんの登場です。まあ流石に普通のワンピースですね」

クマ「いや、よくみるクマ。背中のところがベアバックになってるクマ！」

！）
深雪「ちよつと大胆かなあ。でもこれくらいいいとかなないと見劣りしちゃうからな

青葉「あ、霞ちゃんですね。わ、凄いいもじもじしてて可愛いです！」

クマ「深雪と違って普通のワンピースなのに恥ずかしがってるクマ。これからは意外に恥ずかしがり屋の霞ちゃんって言つてあげるクマ」

霞（余計なお世話よ！　くう………　恥ずかしい）

青葉「最後はやつぱり潜水艦です。オレンジと白のボーダーのワンピースが眩しいイクさんどうぞ！」

クマ「水着が変わっても相変わらずムチムチな体クマ。おまけにVネックなんてもはや凶器だクマ」

イク（はつちちゃんは残念だったけど、イクはそうはいかないの！　ここからまた大反撃なの！）

第50話 「水泳大会第三ゲーム②」

青葉 「それでは、試合開始ですね！ 榛名さんお願いします！」

榛名 「了解です！ 皆さん位置に着いてください」

榛名 「いきますよ？ よーい……………」

出場選手一同 「……………」

榛名 「スタート！」

ザッブーン！

青葉 「さあ始まりました第三ゲーム。まず、見えるのは…………… 瑞鶴さんですね！」

球磨 「直ぐ前に瑞鳳もいるクマ」

青葉 「瑞鶴さんが瑞鳳さんを追う形なのでしょうか」

球磨 「多分違うクマ。あれは……………」

瑞鶴 「瑞鳳！ 大丈夫!？」

瑞鳳 「だ、大丈夫……………」 (うう、いきなり足をつちやうなんて)

瑞鶴「ほら、掴まって」

瑞鳳「あ、ありがとう……ごめんなさい。足引つ張っちゃって」

瑞鶴「こんな時にごめんなさいも何もないわよ。どう？ 痛い？」

瑞鳳「大分マシになってきた。もう大丈夫」

瑞鶴「そう？ それじゃ、行こうか。ちよつと差が開いちやつたけど、今からならまだビリにはならないかも」

イク「手伝ってあげようか？」 チャプ

瑞鳳「イクちゃん!？」

瑞鶴「なんで此処に」

イク「2人の様子がおかしかったから見に来たの。見に来て正解だったの」

瑞鳳「あの、今手伝うって？」

イク「こういう事故で負けちゃうのは悔しいでしょ？ だから途中までは二人を連れて行ってあげるの」

瑞鶴「そんなことしたら貴女が……」

イク「大丈夫なの。このくらいの差なら直ぐに追いつけるの。潜水艦の力甘く見ない方がいいの」ニコツ

青葉「どうやら瑞鳳さんたちは大丈夫みたいですね。しかし、これからどう舞い返すのでしょうか」

球磨「なんだかゾクゾクするクマ。何かあるかもしれないクマよ?」

青葉「その予感が当たれば何が起こるんでしょう。楽しみです、今は他の選手を探します!お、見るからにトップは長良さんですね!」

長良「あれー、何か前に誰もいないけどわたしがトップなのかなー?」

長良「なら、このまま一位目指すしかないわね!」

摩耶「んなことさせねーよ!」

長良「摩耶さん! く、追いついて来ちゃった?」

摩耶「俺だけじゃねーぜえ? 後ろ見てみな」クイ

伊勢「目標発見、いっくぞー!」

霞「わ、伊勢さん速い!」

深雪「これは負けてられねーな!」

青葉「おー、これは接戦ですね。今回はレベルが高い試合になりそうです!」

球磨「この試合に出てる艦娘達はどうかやら全員泳ぎに自信があるみたいクマね。流石に中堅ともなるとレベルが高いクマ」

摩耶「な？ だから言つたろ？」

長良「く、これは予想以上です！」

長良・摩耶「……」

長良「負けませんよ！」 摩耶「負けないぜ！」

木曾「いや、もう負けだぜ？」

長良・摩耶「!？」

ザバツ

木曾「2人とも後ろばっか見過ぎだ。勝負は常に前を見てろ」

木曾「俺の様にな！」

青葉「おー木曾さん速い！」

クマ「流石は我が妹だクマ！」 エヘン

木曾「イクの奴も見当たらねーな」

木曾「近くを潜水してるわけでもねーみたいだし。これはもう……勝ちだな！」

イク「残念でしたなの」

木曾「なに!？」クル

瑞鶴・瑞鳳「きやあああああ！」

木曾「なあっ!？」

バシヤーン!

イク「じゃ、二人とも。後は頑張るの」スイー

木曾「た、た……一体なん……はっ」

瑞鶴「え？」

瑞鳳「ん？」

木曾・瑞鶴・瑞鳳「!」

木曾「クソ! どうなってやがる!」ザブ

瑞鶴「ちよっと反則な気もするけどこの機は逃せないわ!」パシヤ

瑞鳳「いけるかも……!」ザブツ

く浜辺

イク「ゴールなのー♪」

青葉「よ、余裕だ……！」

球磨「これが潜水艦の力……クマか。」

——数十分後

第三ゲーム結果

1位：伊	19	18	10	s
2位：木曾	21	48	8	s
3位：瑞鶴	21	59	9	s
4位：瑞鳳	22	07	7	s
5位：長良	25	12	2	s
6位：摩耶	35	23	3	s
7位：伊勢	35	40	0	s
8位：霞	35	55	5	s

9位：深雪 36m03s

く 観覧席

提督 「今回の試合は本当にレベルが高かったみたいだな」

叢雲 「接戦もいいところね。最短でゲームが終わったわ」

提督 「潜水艦はやはり別格だな。瑞鶴達を助けて尚、まるゆのタイムより上でゴールするとは」

叢雲 「前のゲーム、よくマリアさん1位になれたわね」

提督 「全くだ」

第51話 「確認」

加賀「金剛さん此処にいたのですか」

金剛「Oh 加賀、どうかしたデース？」

加賀「いえ、大会が始まってからというもの、特に貴女の試合に対する意気込みが気になっていたので」

金剛「ふっふー、それは当然ヨ！」

加賀「やはり、最高タイムを出した選手に与えられる特権ですか？」

金剛「Yes of course 勿論ヨ！。だって大佐に何でもお願いできるんデシヨ？」

加賀「…… 参考までに訊きますが、何をお願いするつもりですか？」

金剛「…… ソレは加賀、 you と同じ気がしますが？」

加賀「一応、言っておきますが私達は今のままでは大佐と絶対に結婚できませんよ？」

金剛「What!?! 何を言ってるネ！ 大佐とワタシはラブラブだから全く no Problem ヨ！」

加賀「それは私も同じです。まあ大佐個人とのすれ違いは私も貴女も多少あるようで

すが、そんなモノ問題ではありません」

加賀「そんな障壁はその内爆砕しますので」ニヤ

金剛「ちよ、ちよつと怖いネ加賀……」

金剛「じゃあ、一体何が problem だと言うのデスカ？」

加賀「簡単です。結婚、所謂ケツコンカツコカりは対象となる艦娘の練度、つまりレベルが限界値でないと出来ないんです」

金剛「何デスツテ!？」

加賀「つまり艦隊最高のレベル保持者である金剛さん、貴女でもその願いは今の時点では叶う事は有り得ないんです」

金剛「そ、そんなぁ……」

加賀「貴女がレベル93に対して私に至ってはまだ89。とてもではありませんが、直ぐにというわけにはいかないでしょう」

金剛「うう……でも加賀、どうしてわざわざそんな事をワタシに教えてくれるんデスカ？」

金剛「もしワタシが miracle でトップになって、その願いを口にした時に笑いにできたハズヨ？」

加賀「ふう……金剛さん、確かに貴女は私にとって誰よりも手強い恋敵ですが」

加賀「別に競争相手を貶めてまで意中の殿方の心を掴もうなどという考えは私にはありません」

金剛「加賀ア……」ウル

加賀「そして何より、私はそこまで性格は悪くありませんよ？」ニツ

金剛「加賀……」
 sorry ネ。ワタシ、加賀の事もつとお堅い皮肉屋だと思つてマシタ……」

加賀「それはそれは」

金剛「それにワタシは加賀が羨ましいネ。頭が smart だから大佐の事何でもすぐ理解できマシシ」

加賀「それは私も同じですよ。貴女みたいに素直に感情を顔に出すことが出来ればと常に思つてましたから」

金剛「そ、そんな……」
 ワタシなんていつも空回りしてばかりヨ」アセアセ

加賀「でも、そんな姿を大佐は必ず愛らしいと思つているはずですよ」

金剛「そ、そう……」
 かな？」

加賀「ええ。間違いなく」ニコ

金剛「加賀 thank you very much ネ！ワタシ、貴女のお蔭でこのフェスティバルに

new heart で臨めるね」

加賀 「それは何よりです」

金剛 「でも、そうなるワタシの願いは無くなってしまいました……。何を新しくお願いしようかな」

加賀 「金剛さん、貴女は一つ勘違いはしていますよ?」

金剛 「What? 何のコト?」

加賀 「確かに結婚自体は今はできませんが、限りになくそれに近いお願いはできるんです」

金剛 「It's really!? そ、それは何デスカ!」

加賀 「ふふ、知りたいですか?それは……」

金剛 「um…… ナルホド! それは確かに良い idea デス!」

加賀 「そうですね?」

金剛 「加賀、本当に、ホントーにサンキューネ!」ダキ

加賀 「あ、ちよつと……。ふう、貴女は本当に感情に素直な人ですね」ポンポン

金剛 「フフ♪ 加賀、アナタもとっても cool & smart で素敵ヨ」

加賀 「さて、私が貴女に伝えたかったのは以上です」スツ

金剛 「うん。理解シタワ」

加賀 「それでは、後は……」

金剛 「Yes お互いに頑張りマシヨウ？」ソ ↑手を差し出す

加賀 「ええ、手加減抜きです」ギユ

第52話 「水泳大会第四ゲーム①」

青葉 「水泳大会ももう終盤ですね！ 最後まで張り切っていきましょう！」

青葉 「本日のゲストは熊野さんです！ 宜しくお願いします！」

熊野 「宜しくてよ。見事務めを果たしてみせますわ！」

青葉 「凄い気合ですね！ 頼みますよ！ はい。最初に出てきたのは、金剛さんです！」

熊野 「まあ純白のワンピース…… 華麗ですわね」

青葉 「ただ華麗なだけではありません！ 背中はベアバックに胸元はVネック、ウエストの部分はベアミドリフにカットされておりしかもハイレグです！」

熊野 「ギリギリスリングショットじゃないレベルですわね。よ、よくあんなに堂々と着こなせますわね……」ドキドキ

金剛（大佐……）ワタシの本気、見せてあげるわ！

青葉 「続いて出て参りましたのは『空母のお姉さん』こと翔鶴さんです！」

熊野 「まあ翔鶴さんも白色の水着ですね。紐の三角ビキニ…… 今回は水着の威力のレベル高いですわね」

青葉「翡翠の首飾りが胸元で光っていて実にセクシーです！あ、泳ぐときは外してくださいね。危ないので」

翔鶴（瑞鶴見ててね。お姉ちゃん頑張るから！）

青葉「そして次は龍驤さんですね！ うーん、流石にワンピースです！ 冒険をしなかつた龍驤さんの決断は評価すべきでしょう！」

熊野「南国をあつらつたヤシの木の柄が印象的ですわね。いつも快活な龍驤さんらしい水着だと思えますわ」

龍驤（流石についてなんや！ 冒険ってなんや!? 青葉、後で覚えとけよ！）

青葉「お次は那智さんですね。お、ビキニです！ 正直言つて予想外です！」

熊野「マリアさんと同じ黒色ですけど、こちらは上ががホルターネックですわね」

青葉「後姿が非常に色気があります！ 普段の硬派な那智さんからは考えられない

チヨイス！ どうしたんでしょう」

那智（ま、まあ私も偶には……な。大佐見てるかな）チラ

青葉「あ、大井さんが入場してきました！ モノキニですね」

熊野「白の基調に所々のラインに入った黄色のフリルがオシャレですわね」

大井（うふふ、これで北上さんと……あ、あと大佐もついでに悩殺よ♪）

青葉「続いて天龍さんです！ ベアトップとボーイレッグのツーピースで登場です

「！」

熊野「実に男勝りな天龍さんらしい水着だと思いますわ。少々色気が足りませんが、スタイルが元々良いので見た目ほど残念ではありませんわね」

天龍（余計なお世話だっつーの。勝ちやあいーんだよ勝ちやあ……大佐もそう思ってるのかな……）

青葉「あ、菊月ちゃんはスクール水着ですね！ 似合ってるので全く問題ありません！」

熊野「駆逐艦に対して評価甘くないかしら。まあでも胸元の『きくつき』のネームが可愛らしいですわね」

菊月（大人っぽくマイクロビキニで行きたかったのだが……何であんなに止められたのやら）

青葉「次は、駆逐艦の中でも比較的大人っぽい体つきの白露ちゃんです！」

熊野「あら、花柄のツーピースじゃない。可愛いですわね」

青葉「あ、さり気ん上が紐で結ぶタイプです！ 大人っぽさのアピールでしょうか」

白露（駆逐艦ではまだ誰も一位が出ていない……あたしの出番じゃない！）

青葉「そして最後はゴーヤさんです！ なんだか本編初登場なような気もしますが気にしたら負けです！」

熊野「花柄のセパレーツですわね。ビキニにしない辺りゴーヤさんらしく感じますわ」

ゴーヤ（目立っても仕方ないでち。目立つのは…… トップでゴールの時で十分でち！）

く 観覧席

提督「流石に副将戦ともなると皆雰囲気が違うな」

叢雲「あら？ そんなの分かるの？」

提督「いつもあいつらの事を見てれば自然とな」

叢雲「ふーん…… ねえ、わたしはどう？」

提督「お前、実は代表に選ばれていたんだってな」

叢雲「あら、知ってたの？」

提督「それを辞退してここにるのが実力を示す証明じゃないのか？」

叢雲「買い被りよ。初春が代わりに出てくれて助かったわ」

叢雲「それに泳ぐのは疲れるもの……」

提督（試合を見てる時、自分がずっと何かに耐えるようにうずうずしてた事に気づいてないみたいだな）

提督（自由時間まで我慢してくれればいいが）

第53話 「水泳大会第四ゲーム②」

青葉 「第五ゲームの始まりです！ 皆さん用意はいいですか？」

熊野 「いつになく気合が入ってますわね？」

青葉 「そりゃ、もう終盤ですからね！ 出場する選手の気迫がこちらにも伝わってくるので、感化されずにはいられないです！」

熊野 「確かに…… 皆さんの勝利に懸ける意気込みピリピリと感じますわ」

青葉 「分かっていますね！ あ、それでは榛名さんお願いします！」

榛名 「了解です！ 皆さん、位置に着いて下さい！」

出場選手一同 「……」ス

榛名 「用意はいいですか？ いきますよ……」

榛名 「スタート！」

ザッブーン！

青葉 「さあいよいよ始まりました第四ゲーム副将戦！」

熊野 「あ！ いきなりトップに踊り出た子がいますわよ！」

青葉「え!? 何も見えませんか?」

熊野「ほら! あそこだけ、姿は見えないけど波の形が変わってます!」

青葉「ああっ! ホントだ! あれはゴーヤさんです! もう最初から全力で勝ちにいつてるみたいです!」

ゴーヤ「皆には悪いけどここは早々に勝たせてもらおうでち」

ゴーヤ「今一緒に泳いでる人たちは明らかに泳ぐのが上手そうち。前のイクほど余裕ぶることは……できないわ!」

翔鶴（つ速い! まるで魚雷ね! でもあれだけの速さなら運動量も相当なはず。だから息継ぎは絶対1回はある）

翔鶴（その時を……攻める!）
ズザア

青葉「おー、翔鶴さん速いですね! 普段のおっとりしたイメージからは想像ができない凛々しさです!」

熊野「はあ……翔鶴お姉様、カッコイイ……!」ポ一

青葉「お、お姉？あの……熊野さん？」

龍驥（くう、やつぱり翔鶴ネーサン速いなあ……！）

龍驥（でもうちかて負けてられへん！ 軽空母でもやればできるって……示したるんやー！」

龍驥「……ふっ」

バシヤアツ

青葉「おお？ 龍驥さんも加速しました！ これは速い！ 翔鶴さんに追いつくか！？」

熊野「お姉様ー！頑張ってくださいましー!!」

青葉「熊野さん!？」

翔鶴「っ、龍驥ちゃん……！ 追いついて来たわね」

翔鶴「でも、そう簡単にはいかなせないわよ！」

大井「まるで二人だけで戦ってるような口ぶりね」

那智「我々の事を忘れて貰っては困るな！」

翔鶴「貴方達……！」

那智「大井、着いてくれたのか」

大井「雷巡を甘く見ないでくれる？　いつも魚雷戦しか活躍の場がないわけじゃないのよ！」

龍驤「ちよい待ちい！　うちのことも忘れんなやあああ！」

青葉「こ、これは凄い！　かつてない程の接戦、混戦です！」

熊野「こほん。そうですね。おねえs——翔鶴さんも優れてますが、龍驤さんたちの実力も侮りがたいものがありますわ」

菊月「別に4人だけで勝負させる気はないんだがな」

天龍「でもゴーヤの奴はマジで何処にいるかも分からないぞ。はえーなあ」

白露「2人とも何のんきなこと言ってるのよ！　一番になりたくないの？」

菊月「む？」　天龍「あん？」

菊月「無論」

天龍「あつたりまえだろ」

菊月・天龍「一番は……」「わたしだ!」「俺だ!」「あたしよ!」

ドオツ

青葉「あれは……混戦してる選手を追い抜いて一気に駆け上がってる集団があります!」

熊野「あれは、駆逐艦の子達と天龍さんです!」

青葉「わざと少しペースを落として泳いで混戦して動きが鈍るのを待っていたみたいですね!」

熊野「菊月さんとはかく、天龍さんと白露さんがそういう戦略を持っていたというのが意外ですわね」

青葉「いや多分、菊月ちゃんの策を理解して流れでそれに乗ったんですよ」

ズザアア

翔鶴・龍驤・那智・大井「!」

天龍「先に行くぜえ!」

菊月「勝たせてもらう!」

白露 「いっちばーん！」

翔鶴 「く、時間を浪費したせいで……でもまだ！」

龍驤 「かあつ、人様の横を通っていくとはええ度胸やないか！」

那智 「油断した！ だが、まだだ！」

大井 「ちっ」

く 浜辺から一キロ付近

ゴーヤ 「ぶはっ、流石に全力で泳ぐと一回は息継ぎしないと疲れるでちね」

ゴーヤ 「でも、もうゴールは目の前でち！」

白露 「あ、あれ。ゴーヤちゃんだ！」

天龍 「なに？ お、マジだ。距離は少しあるが追いつけない距離じゃねえ！」

菊月 「勝負の時が来たようだな」

金剛 「そのようネ」

白露・天龍・菊月 「!？」

天龍 「こ、金剛のネーサン!？」

菊月「一体いつから……」

白露「全然気づかなかった！」

金剛「そう？ 結構ずつと近くにいたのヨ？」

金剛「それにしても驚きデス。まさかワタシと同じ考えの人が3人もいるなんてネ」

天龍「え？」

白露「え？」

金剛「え？」

菊月「……」

天龍「そ、そーだよ。俺も驚きだぜ！ まさか皆同じとはな！」

白露「あたしは菊月ちゃんに着いてきたただだよ？」

天龍「えっ」

天龍「そ、そーか……。お、俺……。とそこの2人が一緒……。だつたか」

菊月「取り敢えずもう行くぞ。後ろの集団との距離ももう殆どない」

白露「うわ、やっぱ！」

天龍「そ、そうだな。速くゴールに——」

金剛「ノンノン」

菊月「？」

金剛「この勝負ワタシの勝ちヨ」

天龍「なに言ってやがるまだ勝負は——」

金剛「今から本気を出すネ」

白露「そ、そうだよ！まだ負けたわけじゃ……で、え？」

金剛「高速の、戦艦の力……」スウ

金剛「見せてあげるネ」

ドオオオオーン！

ゴーヤ「!?」

ゴーヤ「な、なに？」

青葉「お——と！姿が見えないと思っていた金剛さんが天龍さんたちと一緒にいる
と思っていたら……！」

熊野「……凄いい！」

青葉「マリアさんの時とは違って、海を割ると言うよりあれは切っていますね！ 海
を切り裂いて我が道を作っています！」

熊野「あれが…… 戦艦の…… 力！」

金剛「ゴージャ lock on ネ！」

ゴージャ「なっ……」

金剛「さあ一騎打ちヨ！」

ゴージャ「っ…… 負けない！」

く 浜辺

バシヤ

金剛「アイムウウウ…… ウイナアアア!!」ガッツポーズ

ゴージャ「ふふ…… 完敗でち！」ヘナ

—— 数十分後

第三ゲーム結果

1位：金剛 15m55s

2位：伊58 15m58s

3位：龍驤 18m59s

4位：翔鶴	19m03s
5位：菊月	20m25s
6位：那智	20m31s
7位：大井	20m44s
8位：白露	25m11s
9位：天龍	25m14s

く 観覧席

提督「…… 凄いなこれは」

叢雲「かなり見応えがあったわね」

提督「戦艦が潜水艦に勝ったか」

叢雲「違うでしょ」

提督「ん？」

叢雲「金剛がゴージャに勝った、でしょ？」

提督「そうだな」

提督「龍驤も翔鶴に競り勝ったか」

叢雲「一位にはなれなかったけど、正規空母に勝てたのはかなり嬉しかったみたいね。

飛び跳ねて喜んでいたわ」

提督「あいつもこれで自信を持つようになるといいが」

叢雲「そうねえ。まあ元々…… あら？」

提督「どうした？」

叢雲「王子様、お姫様が来たみたいよ？」

提督「なに？」

タタタタタツ

金剛「大佐アアアー！ ワタシ、ナンバーワン取ったワヨー！」ガバツ

提督「ふぐっ」

ドタン

叢雲「あらあら…… 水着で、しかも濡れたままで押し倒すなんて」

叢雲「妬けるわね」クス

金剛「褒めて褒メテ！」スリスリムニユムニユ

提督「分かったから、分かったから離れろ。水着がずれてるぞ」

金剛「今は気にしないワ。ギユツとするデス！」ギューポヨヨン

提督「ぐ…… 苦し……」

叢雲「そろそろ助けてあげましょうか」

第54話 「インターバル①」

潜水艦グループ

イムヤ「……」

ゴーヤ「イムヤごめんなさい。負けちゃったでち……」

イク「気にすることないの！ ゴーヤも頑張ったの！ 僅差なの！」

ハチ「そうですね。ゴーヤは頑張りました。それに私達は成績の上では圧倒的に勝つてます！」

まるゆ「ま、まるゆもそう思います！ ゴーヤさんは何も悪くありません！」

イムヤ「当り前よ。誰が悪いとか負けたのが悔しいとか、そんなこと気にしないわ」

イムヤ「ゴーヤはよくやったわ。イクもハチもまるゆも皆みんな最高よ！」

ゴーヤ「イムヤあ……」ウル

イムヤ「最終戦見てなさい。私、勝つわよ！」

イク「イムヤなら大丈夫なの！」

ハチ「そうですね。なんたって私達のリーダーなんですから」

ゴーヤ「イムヤが負けるはずないでち！」

まるゆ「イムヤさん頑張ってください！」

イムヤ「皆ありがとう！ それじゃあ早速準備するわね！」

イムヤ以外の潜水艦「準備？」

イムヤ「そう。私考えたの。どうしたらもつと速く有利になるかって」

ゴーヤ「それで？」

イムヤ「水の抵抗を限界まで減らすしかないわ」

まるゆ「へ、減らすと言つても髪の毛切るわけにはいかないし、他もう減らせるものなんて……」

ハチ「……まさか」

イク「な、何なの？」

イムヤ「脱ぎます」キリ

イムヤ以外のメンバー「」

ゴーヤ「え、ちよ。何言つてるのイムヤ!？」

ハチ「ダメ！ それはダメですよ！」

イク「ぬ、脱ぐつて裸になるの!？」

まるゆ「そ、それは……」カアア

イムヤ「大丈夫よ。ちゃんと前張りを使うし、胸も防水の絆創膏で隠すから！」

ゴーヤ「そ、そういう問題じゃないよ！」

ハチ「そうですよ！早まらないで！」

イムヤ「止めないで！ 私はやるわよ！」ヌギ

まるゆ「わわわわ……！」

イク「だ、誰か大佐を呼んできて！ あ、来ても部屋に入れちゃだめよ！」

戦艦グループ

長門「むう……」

Bis「総合順位は最下位ね……」

伊勢「トップとの差を考えれば、もはや一位は不可能だけど」

金剛「次でトップになればなんとか3位には入れるかもヨ？」

扶桑「金剛さんが個人成績一位になってくれてなかったら、結構悲惨な状態になっていたかも……」

金剛「えへへー、それ程でもないネー♪」テレテレ

扶桑「ホント私なんて……」ズーン

伊勢「ちよ、ちよっと。最後の試合の前に雰囲気暗くしないでよ」

Bis「ちよっと待って！」

長門「どうしたマリア」

Bis「確かに金剛は凄いかもしれないけど、私だつて一位になったのよ！」

扶桑「ああ……私なんて、私なんて……」ズズーン

伊勢「なに余計なこと言ってるのよ!？」

長門「ま、まあ扶桑は、このまま最下位だと大佐と勝負になるわけだから」

長門「勝てば大佐から褒美を貰えるかもしれないぞ?」

扶桑「!」ガバッ

金剛・Bis「な!?!」「What!?!」

伊勢「あ、生き返った」

扶桑「長門さん、後は宜しくお願いします! 頑張つて下さいね!」キラキラ

長門「あ、ああ。全力を尽くそう」

金剛「いいナー」

Bis「ちよつと羨ましいわね」

伊勢（現金な子たちね）

空母グループ

加賀「総合順位では2位ですか」

翔鶴 「でもまだ一回も1位になつた事はないんですね」

瑞鶴 「差を見れば次の試合で十分に逆転は可能ね！ それに」

飛龍 「加賀さんが個人成績で一位になれば」

蒼龍 「タイトルは全て独占できちゃうね」

加賀 「それは、潜水グループにも言える事です。私が本気のイムヤさんに勝てるとは限りません」

蒼龍 「でも勝つんでしょ？」ニツ

瑞鶴 「なんたつて加賀さんだもんね！」ニツ

翔鶴 「私は貴女を信じてるわ」ニコ

飛龍 「皆あまり加賀さんにプレッシャー与えちゃだめだよ。ま、わたしも信じてるけどね？」ニコ

加賀 「貴女達……この昂ぶり無駄にはしません」

軽空グループ

瑞鳳 「総合順位は4位かあ」

飛鷹 「でも3位との差はそんなにないし、次の試合の成績次第では十分に入賞はかなうよ」

千歳 「1位はちよつと無理そうですね」

龍驤 「そんなことないで！ 気合でなんとかなるわ！」

鳳翔 「龍驤ちゃん落ち着いて。でも、そうね全力を尽くせば、あるいは……………」

飛鷹 「おー、アクティブな鳳翔さんって凜としてて貴重よよねえ」

瑞鳳 「うん。カッコイイ……………」と思う」

鳳翔 「え？ カッコイイって私がですか？」

龍驤 「おー、良い表情してたでえ」ニマ

千歳 「凜々しかったですよ」ニコ

鳳翔 「ふふふ。ちよつと複雑ですけど照れますね」

鳳翔 「……………」それじゃあカッコイイところお見せできるように頑張ってみようかし

ら♪」

飛鷹 「期待してるわよ！」オヤユビグツ

龍驤 「軽空母でもやれるんや！」ブイツ

千歳 「応援は任せてください」ニコ

瑞鳳 「私も手伝います！」

鳳翔 「皆さんありがとう。それでは鳳翔……………」押して参ります！」

重巡・航巡グループ

最上「総合成績はビリ2かあ」

摩耶「個人成績もパツとしねえなあ」

筑摩「これはも……」

那智「まさか諦めろとか言わないよな」

加古「違うよ。筑摩が言いたいのは」

筑摩「はい。勿論一位を目指すしかない思います」ニコ

摩耶「へえ、面白いこと言うじゃねーか」ニヤ

最上「そうだね。それいかないよ。というかもうそれ以外は考えられないよね」

那智「ふっ……そうだな」

加古「よーし、あわよくば個人成績トップを狙って有終の美を飾っちゃうよー！」

摩耶「おう！ その意気だ！」

那智「当然だな」

最上「分かってるじゃん」

筑摩「加古さん頑張ってください！」

加古「任せといてー！ 加古の本気見せちゃうよー！」

第55話 「インターバル②」

雷巡・特務グループ

明石 「総合順位は3位かあ」

あき 「試合で獲得した最高順位は木曾さんの2位でありますね」

木曾 「総合2位は十分狙える。1位もキツイかもしれないが不可能じゃないな」

大井 「ちつ。この私が7位なんて……」

北上 「まああれは仕方ないよ。結構混戦してたしねえ」

大井 「き、北上さんありがとう！ キスする!?!」

北上 「床としてね」ゴス

木曾 「お前から相変わらずだな…… まあ調子がいつも通りなのはいい事だ」

明石 「緊張してちゃ大望も成就成らざるってね」

あき 「そうです！ 私達は大型晩成型なのであります！」

大井 「う…… つまり最後の最後で勝利を掴むのは……」

木曾 「俺たちってことだな」ニヤ

北上 「あつさくん。いい事言うじゃらん」

大井「私も北上さんとイイことsあうっ」ベシ

北上「そこは『北上様なら優勝間違いないわ』でしょ？」ニツ

大井「北上さん……」ウル

大井「よおおし、お前から締って征くぞー!!」

明石・あき「ひっ!?!」

北上（あくあ、変なスイツチは入っちゃったかな。でもま、いつか）

木曾「おい。こいつ止めろよ」

軽巡グループ

夕張「7位、か」

天龍「総合か？」

夕張「うん。出だしは快調だと思っただけどなあ」

川内「まあ、いきなり2位だったしね」

長良「でも、その後がねえ……」

矢矧「ああ。散々な結果だ。長良も頑張ってくれたが……」

長良「5位でごめんなさい……」グス

矢矧「ああ、いや。別にその事を言いたかったわけじゃない」アセアセ

天龍「おいおい、泣かすなよ」

川内「あんた余計な事を……！」

夕張（あ、なんか雰囲気が……）

天龍「勘違いすんなって。泣かせるなら嬉し泣きさせてくれよ」

矢矧「む……」

長良「でも、入賞は難しいと思うよ？」

川内「個人の1位を狙うの？」

天龍「それしかないだろ？」

夕張「できるかしら」

矢矧「簡単ではないわね。下の順位の者ほどそれに懸けてくる可能性大だし」

矢矧「だけど……」

長良「やろう！」

夕張「長良？」

長良「わたし達の全力最後に見せてやろうよ！」

川内「賛成！それしかないっしょ」

天龍「だな。夕張？」

夕張「そうね。最後には自由時間もあるし！」

天龍「おいおい…… 最後の最後でそれかよ」

矢矧「ふふふ、だけど前向きなのは良いことだわ」

矢矧「リーダーとして恥じない姿を皆に見せてあげる！」

天龍「よっしゃ！ 鬨を上げようぜ！」

川内「いわね！ それじゃいくわよ……… セーの」

軽巡グループ一同「オー!!」

駆逐Aグループ

初春「総合順位はそんなに悲観する程のものではないな」

雷「5位だけど6位の駆逐グループと比べてもそんなに差はないわね」

深雪「上を目指すにしても入賞は何とか狙える位置だね」

菊月「おまけに個人成績も狙えるぞ」

綾波「まあ、その代わりここまで獲得した試合の順位はあまりよくありませんけど

ね。はは」ニガワライ

初春「ま、総合力で勝負という事じゃな」

雷「さっすが初春ね。組長の補佐をやってるだけあって落ち着いてるわね」

初春「そういう事は言うでない。妾だて本当はこの役は叢雲に頼みたかったのだから

な

菊月「組長にそれだけ信頼されてるってことだな」

深雪「組長は大佐とデートだから仕方ないさ」

綾波「いいなあ。綾波も大佐と…… あわわ」アセアセ

初春「ははは。まあそのことに関しては大会の後大佐に期待しよう」

初春「ここまで懸命な乙女に褒美の一つもくれないのでは漢が廢るといふもの故」

菊月「初春。いけるか一位？」

初春「愚問じゃな。皆が納得できる結果を持つて帰る事を約束しようではないか」

綾波「頼りになります」

深雪「いよつ大将！」

雷「任せたわよ」

初春「うむ。この初春に任せておけい」ニコ

駆逐Bグループ

長波「うーん、初春達にギリ負けてる感じだなあ」

島風「こんなに速さで勝てなかったのは初めてだよ！」

白露「もう一番は無理かなあ」

霞 「総合は諦めた方が良さそうね」

島風 「えー！ 諦めちゃうの!？」

陽炎 「別に全部諦めるわけじゃないわよ。無理なものは捨てて別の目的に集中するだけ」

白露 「目的っていうと」

長波 「どこも考えることは同じだろうけどまず個人トップね」

霞 「それと入賞かしら」

陽炎 「3位まではいけるかもしれないわ」

白露 「個人かあ。ふふ、それもいいかも♪」

霞 「なんでもう1位になった気にいるのよ」

陽炎 「泳ぐのはわたしよ？ まあ、頑張るけど」

長波 「期待してるわよ？」

島風 「陽炎、頑張ってるね！」

霞 「あんたなら大丈夫でしょ」

白露 「応援してるよー！」

陽炎 「あー緊張してきた！ ふふふ、やるわよー！」

霞 「超やる気じゃない」クス

第56話 「水泳大会第五ゲーム①」

青葉「さあ、ついに水泳大会も最終戦となります！」

青葉「本日のゲストは弥生ちゃんです！ 弥生ちゃん、宜しくお願いしますね！」

弥生「よろしく…… 私でいいのかな……」

青葉「思ったことを言ってくれたらいいですよ！ あ、選手が入場してきました！」

弥生「長門さん…… やっぱりカッコイイな。マリアさんと同じ黒い水着……」

青葉「三角紐ビキニですが、ボトムは大胆にブラジリアンカットですか！」

青葉「普通ならその色気に圧倒されるところですが、やはりそこは長門さん鍛え上げられた肉体が美しいです！」

青葉「縊れた腰に小ぶりなで引き締まったお尻！ 浮き出た腹筋！ 程よく盛り上がった形の整った胸！ その姿はさながら芸術？ 的な彫刻の様です！」

弥生「青葉さん、なんか長門さんの解説に力が入ってる……？」

青葉「え？ あ、えつと…… ごめんなさい。つい興奮してしまいました」

長門（興奮するにしても細かく言い過ぎだ！ 恥ずかしいだろー！）

青葉「続いては加賀さんですね。うん！ 彼女も素晴らしいですね！」

弥生「青い三角ビキニ…… あれはホルターネックっていうのかな。上も下も結ぶタイプだけどリボンみたいで可愛い……」

青葉「加賀さんもすらつとした綺麗な体ですね。着やせするタイプだという事がよく分かります」

弥生（加賀さん、あんなに胸が大きかったんだ…… いいなあ）ペタペタ

加賀（何やら一部の人から恨めしさがこもった視線を感じますね）

青葉「あ、鳳翔さんが入って来ました！ 自己主張をしない控えめなスタイルが、かえってお淑やかで素敵ですね！」

弥生「普通のセパレーツ…… でも色は柔らかい桜色で、優しい鳳翔さんっぽい感じが凄くする…… 可愛いし、きれい」

鳳翔（もう少し胸があったら違う水着を着れたかもしれないですね。ちよつとだけ残念…… かな）

青葉「続いては加古さんですね。青と白の縞々のセパレーツの水着で登場です！」

弥生「露出がビキニほどないから…… 分かり難いけど、加古さんも筋肉がところどころ浮き出るくらいについてる…… スタイルもいいし、強そう」

加古（あんまり褒めないですよ。照れるなあ。水着ちよつと地味だったかな）

青葉「続いて出てきたのは北上さんですね。ペアドリミフカットの白いワンピースで

登場です！」

弥生「北上さんあんなに腰細かったんだ……でも痩せてるといふほどじゃない。ああいうのつて均整がとれてるっていうのかな……強そう」

北上（まあ、あまり目立ちすぎてもねえ。あ、でも大佐に見られるならまだ——大井っち興奮し過ぎだし……）ドンビキ

青葉「次は矢矧さんです！ オレンジに白のラインが入った三角ビキニです！ 彼女も長門さんばりに良い体してますね！」

弥生「ホントだ……長門さんみたいな筋肉……でも長門さんより胸が明らかに大きい……。これが勝敗の分かれ目になるかも……」

矢矧（胸で決まるのか!? まあでも、褒められて悪い気はしないな……褒められてるんだよね？）

青葉「おっと、続いて入場してきましたのは初春さんですね」

青葉「お、これはただの赤色のワンピースだと思いきや、大胆にも胸元がVネックカットのものを着ています！ 正直意外です！」

弥生「なんか凄く危険な感じがする……。でも初春さんの貫録で無理やりそれを押えてる感じ。私じゃあはいかない……。な」

初春（少々無理はしたが……。最後くらいは目立って終わりたいし、の?）

青葉「駆逐艦最後の選手が入って来ました。陽炎ちゃんです！ 赤と黒の色使いが印象的なタンキニですね！」

弥生「タンクトップがおへその上のあたりにカットされてる……自分で切ったのかな。装飾も結構されてるみたい」

弥生「今まで見てきた水着の中で一番オシヤレで可愛い……と思う。私もちよつと欲しいかも……」

陽炎（気合入れて作ったからね！ 注目されなきゃ困るのよ！ 大佐も見ててくれるかしら）

青葉「さあ最後は潜s……ぶはっ！ い、イムヤさん、ま、マイクロビキニで登場……です!？」

弥生「……」カオマツカ

青葉「弥生ちゃんが沈黙しちやった……え、えーと。と、とにかく丸見えです！ 殆ど裸と変わらないです！」

青葉「一体イムヤさんに何があったんでしよう!？」

イムヤ（妥協してこれになったけど、仕方ないか。心身ともに本気の私、見せてあげる!）

く観覧席

提督「イムヤは最終的にアレに落ち着いたのか。イク達に呼ばれた時は何事かとおもったが」

叢雲「ねえ」

提督「ん？」

叢雲「あれ……あれ、まさか大佐が選んだの？」ジト

提督「……そう思うか？」

叢雲「思いたくはないわね」フイ

提督「まだ俺も信用されているようで安心した。だが、あれでもマシになったくらいなんだぞ」

叢雲「はあ!? あ、あれでマシってどういうことよ!？」

提督「漢の俺は実際に見るわけにはいかんレベルだな」

叢雲「そ、そう」

叢雲（イムヤ……あんた一体どんな格好で泳ごうとしたの……？）

第57話 「水泳大会第五ゲーム②」

青葉 「さあ、皆さんいよいよ最後の試合の始まりです！」

青葉 「あ、弥生ちゃん大丈夫ですか？ ちよつとアレは刺激が強かったですかね」

弥生 「大丈夫…… ちよつと驚いただけだから。進行していいよ」

青葉 「分かりました！ では榛名さんお願いします！」

榛名 「分かりました！ 各グループの出場選手はスタート位置に着いて下さい！」

出場選手一同 「……」

榛名 「いきますよ？ よーい……」

榛名 「スタート！」

パシツヤーン

ズオツ！

イムヤ 「誰にも追いつかせはしないわよ！」

青葉 「おっと、前回に続き今回も一瞬でトップに躍り出たのは潜水艦です！」

青葉「イムヤさん速い！ 格好はアレですが、流石はリーダー！ これはもう勝負になるのかというレベルです！」

弥生「本当に速い…… 時速15km」

青葉「ゴールまでたった12分ですか…… これはもう圧勝かなあ」

長門「ゴールできたらの話だがな…… は！」

ゴオオオオオオ

青葉「長門さんが出てきました！ 金剛さんが見せた戦艦のパワーですね！」

弥生「今回はどちらかというところとマリアさんに近い泳ぎ方。力任せに波を分けるから周囲の海が凄く荒れてる」

青葉「しかも長門さんはマリアさんより力がありますからね、これは周りの人も…… おっとイムヤさんも影響を受けているようです！」

イムヤ「きやあつ。海中にまで余波が…… 息を乱そうってわけね！」

北上「わつぷ、長門さんやるなあ。ま、こつちも負ける気はないけどね…… よつつ

と！」

青葉「あ！北上さんが追い上げてきてます。乱れた波の影響を、文字の如くバタフライで躲けてますね」

弥生「息継ぎの時軽く体が浮くくらい飛んでる……」

弥生「艦娘だからこそできる泳法だから、厳密にはバタフライじゃないかも……」

長門「むっ、北上か。流石だな！まさか追いついてくるとは」

北上「チツチツチ。わたしが目指してるのはイムヤさんだから。悪いけど、長門さんはただの通過点だよ！」

鳳翔「くっ、皆の姿を追うのでやっとなすね……。このままでは差が開くばかり、どうにかしないと」

青葉「鳳翔さんが苦勞してるみたいですね」

弥生「鳳翔さんも遅いわけじゃないけど、今回はメンバーは特にレベルが高いからキツイかも……」

青葉「おや、鳳翔さんに近づく姿が……！あれは加賀さんですね」

弥生「どうしたんだろう」

加賀「鳳翔さん、どうしたんですか？」

鳳凰「あ、加賀さん。私、みんなの期待に応えられそうになくて……」

加賀「なるほど。確かにあれに追いつくのはキツそうです」

加賀「…… 鳳翔さん、一つ提案があるのですが」

鳳翔「え？」

青葉「お、あそこに見えるのは加古さんと矢矧さんと…… あれ、駆逐艦の子もいますね」

弥生「こつちも何か話し合ってる感じ…… 何を話してるんだろう」

初春「——というのはどうじゃ？」

矢矧「なるほど」

陽炎「確かにあの波を乗り切るにはこれしかなさそうね」

加古「イムヤもその内体制立て直すだろうから、もう時間はないね」

初春「それでは、皆同意ということで良いな？」

矢矧「ああ、一時的にだけど協力するわ」

陽炎「仕方ないわよね」

加古「いいねえ。皆驚きそうじゃん！」

初春「それでは参るぞ？」

長門「く、抜かせるか！」

北上「ナガモンもしぶといねえ」

長門「っ、ナガモンて言うなあ！」

イムヤ「うまい具合に2人とも白熱してくれてるわね」

イムヤ「眼中に入っていないのは酌だけど、隙は突くかせてもらわ——て、また余波!?!
さつきより大きい！」

長門「なんだ？」

北上「戦艦は一人だけのはずだけど……」

青葉「こ、これは先ほど話し合ってた4人が驚くべき行動を取っています！」

弥生「皆一緒に陣形を組んで泳いでる……」

青葉「加古さんと矢矧さんを先頭にして駆逐艦二人が少し下がって両サイドを泳いでますね。」

弥生「皆同時に同じ速さで泳ぐことで一つの群艦になってる……」

青葉「なるほど。これだけの艦隊が固まって一斉に泳ぐわけですから当然波も……」

長門「なるほど。あいつら…… そう来たか！」

北上「わわわ。これは無理！流される〜」

イムヤ「ちよ、ちよつとこつちに来ないでよ！」

初春「よし、追いついたな！ それでは皆の衆ご苦労！」

初春「これよりは解散して。また敵同士じゃ」

加古「よつしやあ！ あとは突つ走るのみ！」

矢矧「ここからが本番だ！」

陽炎「乱戦上等！ こちとらそういう戦場を駆け回ってきたのよ！」

青葉「おー、上手い具合に混戦になってますね」

弥生「全員が同じスタート位置に立った……………」

加賀「いいえ」

鳳翔「残念ながら違いますよ」

2人以外の全員「!?!」

スイスイスイ……………パシヤッ

加賀「完全」ブイ 鳳翔「勝利です♪」ブイ

青葉「な、なんと2人同時に潜水でゴールしたあああ!?!」

弥生「一緒に潜水することによって倍の推力で泳いだって事……………かな」

長門「くつ、だが2人同時という事は2位と3位は空いているという事だな。それなら……………!」

北上「それ無理だよ。もうイムヤゴールしてるし」

長門「な!？」

長門「な、なら3位を」

北上「それも無理。なんか初春さんが途中から『本気』出したみたいであつという間にゴールしちゃった」

長門「」

北上「ヤハギン達も呆然としてるね。あはは。こりやあ勝てないわ」

第五ゲーム結果

1位：加賀	14m05s
2位：鳳翔	14m05s
3位：伊168	14m25s
4位：初春	16m17s
5位：矢矧	16m30s
6位：加古	16m32s
7位：陽炎	16m40s
8位：北上	18m08s
9位：長門	18m10s

く観覧隻

提督 「加賀達は金剛の記録を超えたのか。凄いな」

叢雲 「それなんだけど、鳳翔さんは1位を辞退したそうよ」

提督 「ふむ」

叢雲 「加賀の提案で1位になれた事が理由なんだって。本人は思い出だけで十分とか言ってたわ」

提督 「鳳翔らしいな」

叢雲 「ええ、そうね。全くだこまで『お母さん』なんだか」

提督 「それではタイムは同じでも鳳翔は2位になるのか」

叢雲 「そういう事」

叢雲 「ああ、あと彼女、個人成績の褒賞に關しても受け取る権利を前の試合で最高記録だった人に譲るそうよ」

提督 「待て、それでは」

叢雲 「ええ、そうよ。褒賞の授与者は金剛と加賀よ」

第58話 「僥倖」

金剛「加賀、ナイスレースだったヨ！」ダキ

加賀「つと、金剛さん、全く………ありがとう」ポンポン

金剛「2人がベストタイムを出したときは正直、シヨックでしたガ……… 本当に鳳翔さんには感謝の気持ちでいっぱいデス」

加賀「ええ、お蔭で私と貴女一緒にお願いができるといふ最も理想的な形を実現することが出来ました」

金剛「フツフ、加賀？ 心の準備はいいカシラ？」

加賀「お願いはこの後の大佐と扶桑さんの試合の後に表彰式と一緒にやるのですから気が早いですよ」

金剛「そんなコト言われたって、この胸のドキドキはどうしようもないヨ」

加賀「それは私も同じですが………」

金剛「どうしたノ、加賀？」

加賀「金剛、貴女は大佐がこのお願いを本当に受け入れてくれると思いますか？」

金剛「あ………」

加賀「大佐は、優しい人です。今は本当に昔と比べて私達と分け隔てなく接してくれるようになりました。だけど……」

金剛「ワタシたちが人間じゃないことを……ネ」

加賀「そうです。私達に好意を向けられている事に大佐は戸惑い悩んでいます」

金剛「殆ど顔には出さないけど確かにそうネ。パーフェクトに拒否はされないけど、自分からはゼツタイ寄ってこない感ジ……」

加賀「私も自分の気持ちが無りだとは思いませんが、あそこまで明確に苦心してる大佐にこのまま寵愛を求めていいものかどうか……正直悩みます」

金剛「ココロが痛いね……」

加賀「世にはお互い相思相愛で人間と艦娘の壁を越えて愛し合う提督もいるみたいですが……」

金剛「ワタシ達の大佐にもそうなって欲しいと wish するのは我儘かな……」

加賀・金剛「……」

加賀「……悩んでも仕方ありませんね」

金剛「加賀？」

加賀「やはり実際に聞いてみるしかないでしょう」

金剛「そう……ネ」

加賀「公の場で聞くというのもなんだか無理に答えを迫っているようで心苦しくはありますが、私達にもそろそろその答えが必要です」

金剛「つ、加賀ワタシ怖いヨ……」。大佐がもし、拒絶するようなこと言ったりしたらと思ウト……」ブルブル

加賀「……」ソツ、ギユ

金剛「あ……」

加賀「その時は私も一緒に泣いてあげます。ですが」

金剛「but?」

加賀「それでも私は諦めるつもりは有りませんがね」ニツ

金剛「え……?」

加賀「言つたでしょう。私はどんな障壁だろうと何れ爆砕してみせる、と」

金剛「そ、そういうえばそんな事言つたワネ……」

加賀「貴女もその時は手伝つて貰えませんか?」↑金剛の耳元に囁く

金剛「ん……!」ゾク

加賀「一緒にがんばりましょう?」

金剛「は、アあ……」加賀、アナタの言葉つて麻葉みたいネ。そういうのつてズルイ

ヨ

加賀「では、諦めますか？」ス

金剛「NO！ 今ので覚悟が決まったネ。加賀、ワタシやるヨ！ アナタと一緒に最後まで諦めないネ！」

加賀「その言葉しかと受け止めました。では、一緒に——」ソ ↑手差し出す

金剛「頑張りマシヨウ！」ガシ

第59話 「水泳大会ラストゲーム」 R—15

青葉「それではあ、最後の試合。ある意味一番のメインイベント、大佐との一騎打ちです！」

青葉「今回は最後のゲストは扶桑さん妹、山城さんをお願いしました！ 山城さん宜しくお願いします！」

山城「扶桑お姉様が負けるはずないわ」

青葉「いえ、そんなこと訊いてません」

青葉「それでは、まずは扶桑さんの入場です！ うーん相変わらず凄まじい色気ですね！」

山城「お姉様……。素敵……。山城、熱くなつてしまいます……！」クネクネ

青葉「何がですか!? こんなところで発情しないで下さい！」

扶桑（今ばかりはこの水着を選んできた山城に感謝しないとね。大佐にしつかりアピールしなきゃ♪）

青葉「そしていよいよ大佐の登場です！ ほう、軍人だけにやっぱりそれなりに鍛えられた体してます！」

山城「わ、悪く……ないんじゃないかしら」ポ

提督（扶桑は最下位だったとは言え、泳ぐのはこれで2回目。コツを掴んでるかもしれない。油断はしない方が良さだろうな） ↑扶桑には目もくれてない

扶桑「……」コソコソ

扶桑「大佐」トントン

提督「うん？」

扶桑「お手柔らかにお願いしますね」

提督「ああ、こちらこそよろしく頼む。あと、近いぞ。離れろ」

青葉「なんかいい雰囲気ですね！でも邪魔して申し訳ありませんがそろそろ始めさせていただきます！」

山城「大佐……」ギリギリ

青葉（もう気にしないでおう）

青葉「それでは榛名さん、最後の合図お願いします！」

榛名「了解です！ 大佐、扶桑さん準備はいいですか？」

提督「ああ」

扶桑「いつでも」

榛名「分かりました！ それでは行きますよ。用意……………」

榛名「始め!!」

パシャー

青葉「さあ、始めました最後の試合！ お、扶桑さん最初の試合とは打って変わっ

て綺麗に泳いでます！」

山城「流石に2回も遅いとかは戦艦としてのプライドが許さないわよ」

山城「姉様、自分がこの試合に出ることを確信して他の試合が行われてる間ずっと一人で練習してたのよ？」

青葉「それは知りませんでした！ なるほどこれはその成果という事ですね！」

提督（つ、加護を受けない時と比べて明らかに速いのは分かる。だが、それでも明らかに前の試合より上達した扶桑の泳ぎが勝っている……………か）

扶桑（大佐……………私より泳ぐのが上手いのは明らかね。でも、速さは私が上みたい。これなら……………！）

青葉「おーと、扶桑さん大佐を追い抜きました！」

山城「キヤー！ お姉様頑張ってー!!」

青葉「貴女も熊野さんと一緒ですか」

提督（くっ、離されたか。だがこれはもう追いつけないな。全力で泳いでも距離を維持するのでやっただ）

提督（何れ体力の差で負けるのは必然か。だが、出場したからには必ず最後まで泳ぎ切る）

扶桑（やった！ 抜いた………！ 後はもうゴールするだけね！）ニユル

扶桑「え？………っひあー」ピクツ

青葉「おや？扶桑さんが止まりましたね。何だか苦しそうな顔でもじもじしてます！」

山城「お姉様！ 今行きますわ！」ガタ

青葉「やめて下さい。大佐が異変に気づいて向かいましたから」ガシツ

青葉「多分、足をつつたんでしょう」

提督「扶桑どうした？ 大丈夫か？」

扶桑「た、大佐……うう」

提督「どうした？」

扶桑「さ、魚が……水着の中に……」コシヨ

提督「……」

扶桑「ヌルヌルして……あっ」ビクッ

扶桑「気持ち悪くて……んんっ！」ビクッ

扶桑「自分じゃ取れないんです……はあはあ……お、お願い……です」

扶桑「取って下さ……ああっ!?……い」ビクビクッ

提督「潜れ」

扶桑「え？」

提督「流石に見られたくない」

扶桑「あ、はい！」

提督「合図する。いくぞ」

扶桑「っ」

ポチャン

青葉「あれれ？二人とも潜ってしまいましたね」

山城「だ、大丈夫なの!? 私いつでも行けるわ——」

青葉「大佐も一緒に潜ったから大丈夫でしょう。多分足に何か絡まったんですよ」ガ
シツ

く海中

扶桑（あつ、大佐の手……が……んん！）

提督（凄い圧力だが、風船のように柔らかいから探ることはできるな……この当
たつてるのは……いや、考えるな）グニグニ……コス

扶桑（んはつ、それ私の……）カア

提督（硬く……違う……むう……これか？」サワツ

扶桑（はあつ！それ……触っちゃ……！）

提督（……俺はもう山城に殺される、いや殺された方がいいんじゃないか？）

扶桑（はあ、はあ……大佐……早く……気持ち……て違つ）カアア

提督（つ、これか。取れたぞつ）サツ

バシヤツ

青葉「あ、出てきました。どうやら何とかなつたみたいですね！」

山城「よかった……」ホッ

青葉「あ……これ、扶桑さん疲れ切つた顔してますね。泳げるのかな」

扶桑「はあ……はあ……た、大佐……」

提督「すまん。手こずつた」

扶桑「いえ……いいんです……ありがとうございます……ございます」ヘタ

提督「浜辺まで泳げるか？」

扶桑「ちよつと……休まない……腰に力が入らなくて……」

提督「……肩を貸そう。一緒に泳ぐぞ」

扶桑「あ、ありがとうございま……ふ」

提督「この事は他言無用で頼む」

扶桑「流石に……山城には言えませんね……勿論他の子にも」

提督「助かる。俺も忘れ——」扶桑「忘れなくて……いいですよ」

提督「ん？」

扶桑「私と大佐だけの秘密にしておいて……それがいいです」ボソ

提督「……分かつた」

ラストゲーム結果

提督・扶桑 同着 22m19s

く 観覧席

叢雲 「……………」

叢雲 「いえ、まさか……………
ね」 カア

第60話 「表彰式①」

提督 「それでは、これより表彰式を始める」

提督 「先ず第3位、雷巡・特務グループ代表前へ」

北上 「はくい」

提督 「大会の功績を湛えて貴君にこれを——」 北上 「待つて」

提督 「ん？」

北上 「そんな堅苦しい言い方じゃなくて、いつも通りに褒めてほしいな」

提督 「…… そうか」

提督 「よく頑張ったな」

北上 「ん、それでいいよ。あとついでに」

提督 「まだあるのか？」

北上 「頭を撫でて褒めて欲しい、なんてね」

北上以外の艦娘 「！」 ザワザワ

提督 「ふっ……。これでどうだ？」 ポンポンナデ
北上 「んく、いいねえ♪」

明石 「ちよつと羨ましいかも」

あき 「私も後でお願ひするであります！」

大井 「ちつ、あんなのの何が…… 別に羨ましくなんて」

木曾 「そう…… だな。羨ましくなんてない…… よな」

提督 「榛名、景品をここに」

榛名 「分かりました。3位の方達への景品はこちらです！」

北上 「おお！」

榛名 「32号電探人数分です！」

北上 「ちよつと豪華すぎない？」

提督 「それでもない。使つてない資材が僅かに減っただけだ」 シレ

北上 「(どれだけ余裕があるんだか……)」

北上 「ま、ありがとねっ。頂かせてもらうよ」

提督「では、続いて第2位、空母グループ代表前へ」

加賀「はい」

提督「……………」

加賀「……………」 やりました」

提督「そうだな。よくやった」

瑞鶴「え？ 何この空気」

瑞鶴「き、緊張するわね。何故か」

蒼龍「え、修羅場ってやつ？」

飛龍「こら、蒼龍！」

提督「榛名、頼む」

榛名「は、はい。2位の方達への景品はこちらです！」

榛名「南国のフルーツの盛り合わせ1トンはです！」

会場全体 シーン……………」

提督「少々味気なかったか？」

加賀「それでもありませんよ。見てください」

提督「うん？」クル

提督（空母のメンバーだけでなく、全ての艦娘の視線がフルーツに集中している……？）

加賀「そういう事です。これは私達だけで頂いてしまつては、後にどのような恨みを買つてしまうかわかりませんね」

提督「なるべく波風立たないように頼む」

加賀「ふふ、分かりました。それでは——あ」

提督「？」

加賀「大佐、また……後ほど」

提督「……ああ」

提督「それでは第1位、潜水グループ前へ」

イムヤ「はい……」

イムヤ「……」

提督「なんだ、不満そうだな」

イムヤ「！　そ、そんな事ない……：　わよ」プルプル

提督「最後に勝てなくて悔しかったんだろう。気にするなどは言わない」

提督「だが、俺はお前たち潜水艦の実力は理解しているつもりだ。泳ぎに関してはお前たち個々の力は間違いない最高だろう」

イムヤ「そんな……：　こと言ったって……：　勝てなきや意味……：　ない……：　じゃん」ヒツク

提督「今、どうやってお前はここに立てたと思っっている。お前だけじゃない、全員の力じゃないか」

イムヤ「！」

ゴーヤ「そうだよ。イムヤちゃん！　ゴーヤ達頑張ったよ！」

ハチ「イムヤは頑張り屋さんですね。でもそれは私達も同じなんですよ？」

イク「そうよ！　今こうして1位になれたのは間違いないイムヤのお蔭でもあるのよ！」

まるゆ「まるゆイムヤさんが1位に慣れなかった事なんか気にしてません！　イムヤさん最後まで全力で凄くカッコよかったです！」

イムヤ「み、みんなあ……」ウルウル

提督「イムヤ」

イムヤ「う……ぐす……は、はい！」

提督「よく頑張った」ポン

イムヤ「っ……う、うわあああんだ大佐ああ！」ダキツ

提督「泣きたいだけ泣け。落ち着くまでいてやるから」ポンポン

北上「あ、これは仕方ないかなあ」チラ

大井「な、なんでこつちを見るのよ北上さん」

木曾「そ、そうだ。何故俺達を見る……！」

あき「自分に正直になれないのは損でありますね」ボソ

明石「ま、らしいって言ったららしいけどね」クス

瑞鶴「イムヤちゃん可愛い♪」

翔鶴「でもちよつと羨ましい、かな」

蒼龍「どうしたのよ飛龍、黙っちゃって」ニヤニヤ

飛龍「ぐす……感動して涙が……」

加賀「本当にそれだけですか？」クス

提督「さて……落ち着いたか？」

イムヤ「ぐす……うん！もう大丈夫！ありがとう大佐！」グシグシ

提督「その言葉は俺だけにか？」

イムヤ「いいえ……！」クル

イムヤ「皆ありがとうね！あなた達のお蔭で優勝できたわ！」

潜水Gメンバー「イムヤ最高ー！」ワアワア

提督「さて、榛名。頼む」

榛名「ぐす……はい！1位の方達への景品はこちらです！」

榛名「我が鎮守府オリジナルのデザインにして、本部の最新の技術で作り上げた新しい水着です！」

榛名「しかも、一着一着に大佐直筆で潜水艦の名前が書いてあります！」

潜水艦メンバー同「わああああ」キラキラ

提督「華やかさに欠く景品で悪いが、込めた気持ちは本物だ。大事に使ってくれと嬉しい」

イムヤ「ううん。本当に嬉しい……！ 大佐、ありがとうございます！」

潜水艦Gメンバー「ありがとうございます！」

提督「喜んでもらえて何よりだ」

第61話 「表彰式②」

提督「それでは、次に個人成績最下位の者に努力賞を送る」

提督「扶桑、前へ」

扶桑「はい」

提督「ふう……」

扶桑「／／／」

雷「？ どうしたんだろ2人とも」

山城「お姉様？」

提督「よく頑張った。お前には努力賞として個人的に用意した物を景品として贈る」

提督（叢雲に言われたからコレにしたが、本当にコレでいいのか？）

山城「はい」

提督「榛名、持ってきてくれ」

榛名「はい……… えっと、扶桑にお送りする景品は……… 大佐の……… 軍服です」

会場の艦娘達「!」

提督「こんな物で悪いが、もし俺に何かあった時の形見だと思つて貰つて欲しい」

扶桑「え、縁起でもない事言わないで下さい! でも、嬉しい♪」ボフツ、ギュー

扶桑「ありがとうございます! 大佐♪」キラキラ

提督「そうか…… まあ気に入つてくれたのならなによりだ」

扶桑「♪♪」ルンルン

山城「あんなに機嫌が良い姉様初めて見たわ……」

榛名（いいなあ…… きつとアレ、これから毎晩抱いて寝るんだろうなあ）

提督「それでは、最後に本大会最高記録の者に最優秀賞を送る」

提督「加賀、金剛。前へ」

加賀「はい」 金剛「ハイ!」

提督「お前達には各々が個人的に希望するものを俺に願い出る権利を与える」

提督「無茶な願いでない限り、可能な範囲でそれに応える所存だ」

提督「もしもう願いが決まっているのならこの場で言うといい」

加賀「はい。決まっています」

金剛「ワタシもネ！」

提督「そうか。では、聞こう」

提督（嫌な予感がするぞ）

加賀「私と金剛さんの願いは同じなので、私が代表して言います」

提督「分かった」

加賀「大佐に私達と結婚して欲しいです。それが願いです」

会場の全艦娘達「!!」ザワザワ

那智「なっ……」

B i s 「なんですって!？」

扶桑「え……」ドサ ↑服を落とした

龍田「へえ……」

大井「……え」

叢雲「ふむ」

曙「そ、それはダメよ！」

提督「…… 加賀、金剛」

加賀・金剛「はい」

提督「まず言っておこう。お前たちの純粋な好意は俺も嬉しく思う。これは確かだ」

加賀「ありがとうございます」

金剛「ハイ！」

提督「だが加賀、お前は知っているだろう。ケツコンカツコカリは成長限界に達した者にしか——」

加賀「はい。知っています。ですから」

金剛「マリツジを前提にワタシ達と恋人になってクダサイ！」

提督「む……」

会場の全艦娘達「!!!」ザワザワ

B i s 「そ、その手があった！」

扶桑「2人とも重婚は認めるってこと……？ なら……」

那智「私達にも機会は…… ある、という事…… でいいんだよな」

大井「つ……！」ギリギリ

叢雲「落ち着きなさいよ」

龍田「ふふふふ……」ギラギラ

初春「お前もか」

比叡「お、姉様あ……」ブア

提督「……」

加賀「それなら叶える事はできますよね？」

金剛「プリーズ！　お願いヨ!!」

提督「2人とも」

加賀「はい」金剛「は、ハイ！」

提督「手を……　出してくれ。片手でいい」

加賀・金剛「……？」ス

提督「……」ギユ

提督（暖かい。これは間違いない血だ。こいつらにも血が流れているという証拠だ）
提督（だが、だというのに本部は、世界は、こいつらが兵器だという。使い潰しても倫理は揺るがないと言う……）

提督（俺は、それが我慢ならない理解し切れない。軍人として未熟だから、冷淡になり切れないからかもしれない）

提督（だがそうだとしても、これは俺がこいつらを人間として扱わない事を拒否し、嫌悪する明確な意思である事は間違いない事実だ）

提督（なら俺は、その事を答として今認めなければ、こいつらに示さなければ）

提督 「…… 2人とも」

加賀 「はい」 金剛 「ハイ」

提督 「悪いが、結婚はしない」

加賀 「…… つ」ジワ

金剛 「大佐…… ！」ブア

提督 「落ち着け。俺が否定したのは結婚という前提だ」

加賀 「…… つまり？」

金剛 「どういう…… コト？」

提督 「情けない話だが、この年になつてまだ結婚を前提とした付き合いを誰かとしたことがない。だからいきなり言われても俺は困るんだ」

加賀 「では……？」

金剛「困るから嫌ナノ？」

提督「嫌ではない。ただ、考えさせてくれ。お前たちと付き合いながら、2人に対する俺の思いが本物になるように」

金剛「そ、それじゃあ!!」パア

提督「恋人にはならないでもない」

加賀「……卑怯で情けない答……ですね」グス

提督「すまない。だが、これは偽りのない俺の今の本心であり、意思だ」

加賀「分かりました。私はその答、受け入れます。今は、ですが」

金剛「ワタシもネ！ だけどゼータイ好きになってもうらんだカラ！」

提督「本当にすまないな。ありがとう」

提督「では、大会はこれをもって閉会とs——」

龍驤「ちよーっつと待ったあ！」

榛名「龍驤……さん？」

龍驤「その理屈やと、大佐はまだ誰にも好意を抱ききれてないちゆうことやな？」

提督 「まあ、厳密にはな」

金剛 「そ、そんな問題ないネ！ だから今から——」

加賀 「……………」

龍驤 「まあ、待ちいな。つまりそれは他にも大佐の事好いてる奴にもチャンスはあるってことやろ？」

会場の全艦娘達 「!!」 ザワツ

扶桑 「やっぱりそうよね！」

那智 「…………… うむ！」

B i s 「そうよね！ 私達にもチャンスはあるのよね！」

龍田 「…………… ふーん」

叢雲 「やつと落ち着いたか」

龍驤 「しかも2人同時に告白して、大佐もそれに対して何も反対せんかった辺り重婚は肯定ってことやろ？」

提督 (今、俺の中で自分の評価が最低最悪になった)

提督「龍驤、つまり何が言いたいんだ」

龍驤「うちらもこれに乗る。大佐と結婚して本当に大佐のモノになりたいんや！」

提督「『うちら』と言ったな。他にもいるか」

Bis「わ、私やるわよ！ お、落としてみせる！ …… 大佐を」

扶桑「私はもういつでもいいんですけど…… もう一押し、かな？」

筑摩「私も！ あ…… 私も頑張ります！」

榛名「は、榛名も…… いいんですよ！」

その他の艦娘達「ワタシモ！ワタシモヨ！」

龍驤「ちゅーわけで、大佐。うちらもこれからあからさまに粉かけに行くかもしれへんから、覚悟しといてや！」

会場の艦娘達「ワアアアアア」

金剛「ノオオオオオオ！ 何よコレ！ 一気にライバルが増えチャツタ!!」

提督「加賀……」

加賀 「なんでしよう?」

提督 「お前の狙いはまさか、本当はこれだったんじゃないのか?」

加賀 「…… どうでしょう?」 クス

叢雲 「ねえ初春」

初春 「なんじゃ?」

叢雲 「これでやつと遠慮なくいけるようになったわね」

初春 「全くじゃ。大佐の奴め、本当に待たせてくれたの」

提督 (全員に言質を取られたに等しいな……)

提督 (今日は飲もう、一人だ。絶対に一人で飲もう)

メインストーリー（第二章）

第1話 「自由時間①」

青葉「皆さああん！ 自由時間をお楽しみのところ申し訳ないですが。ご連絡です
！」

青葉「大佐より、大会を成功させてくれたお礼兼参加賞という事で皆さんに食べ物の
差し入れです！」

青葉「かき氷、たこ焼き、焼きそば、『夏に食べたい食べ物』は何でもありますよー！」
艦娘達「ワアアアアア♪」

叢雲「皆嬉しそうね」

提督「ああ、用意した甲斐があった」

初春「でも、空母達のフルーツといい、潜水艦達の水着、おまけにこの大量の食べ物
といい、どやって用意したんじゃ？」

提督「どうもこうもない。俺はここに來てから鎮守府を離れたことが殆どない。支払
われる給与もここにいると使う事が無いから貯まるだけだったんだ」

叢雲 「それを今回使ったの？」

提督 「そういうことだ。これでも出費としては全然痛くない」

叢雲 「どれだけ無欲なのよ……」

初春 「おや、早速恋人になりたての者が来たようじゃぞ」

金剛 「大佐ア！」

提督 「どうした」

金剛 「一緒に swim しまシヨ♪」ズイ

加賀 「金剛さんズルイですよ。大佐、サンオイルを塗って貰えませんか？」ズイ

提督 「あつちで、2人で遊んでろ。俺は今疲れて眠いんだ」

金剛 「Oh そうデシタカ！ ならワタシも大佐と一緒に sleep シマス♪」

ゴロン、ダキッ

提督 「金剛、暑い…… あと腕を挟むな」

金剛 「うふふ、もう知ってる感触じゃないデスカ♪」ムニムニ

加賀 「大佐、失礼します」ゴロン、ダキッ

提督 「お前も…… 足を絡めてくるな」

叢雲 「凄い光景ね…… 世の男が見たら間違ひなく殺しに来るわよ」

初春「その割には大佐はこの世の終わりの様な苦渋に満ちた顔をしておるの」ニヒヒ
提督「全く。お前たちは、そこで暫く寝てろ」ムク

金剛「ああん、大佐何処行くネ！」

加賀「ご一緒にします」

提督「寝てろと言ったら寝てろ。後でオイルでもなんでも塗ってやるから」

金剛「really!? じゃあ、しょうがありませんネ！」ゴロ

加賀「お待ちしますよ？」ゴロ

提督「ああ…… 叢雲、初春頼んだぞ」

加賀・金剛「え？」「ワツツ？」

叢雲「りよーかい、任せなさい♪二人とも覚悟はいいわね？」ワキワキ

初春「妾に任せるがよい。どれ、ひとつ揉んでやろうか♪」ワキワキ

金剛「夕、大佐！ 騙したネ！」

加賀「油断しました……！」

提督「そのうち戻る」ヒラヒラ

金剛「あ、あああああ!？」

加賀「くう、これ…… はっ…… う!？」

陽炎「あ、大佐だ」

雷「大佐！ こつちで遊びましようよ！」

提督「お前たち今日はよく頑張ったな」

綾波「いえ、そんな。それよりこんなにご馳走をありがとうございます！」

霞「ありがたく頂いてるわよ大佐！」フリフリ

島風「私、こんなに皆で騒ぐの初めて♪」

菊月「暫しの休息だな…… チュー」 ↑ヤシの実を吸ってる

白露「あ！ あたしもそれ飲む！」

長波「あまり食べ過ぎてお腹壊すなよ」

深雪「大佐！ 深雪様の活躍見てくれた!?!」

提督「ああ。ちゃんと見てたぞ」

雷「大佐あ、遊びましようよ」グイグイ

陽炎「雷、あまり無理言っちゃ駄目よ」

提督「悪いな雷。慰問訪問が終わったらまた来るから」

雷「約束よ！」

白露「え？ なに？ 雷ちゃん何か大佐と約束したの？」

深雪「えー？ もうアタックしたの？ 早いなあ」

島風「速い？ わたしより速いの!？」

霞「ちよつと何の話よ！」

提督「また後でな」スタスタ

摩耶「お、大佐じゃん。どうしたんだ？」

提督「皆の慰問訪問中だ」

加古「律儀だねえ」

筑摩「でも嬉しいですよ♪ あ、大佐。私も頑張りますからね」

最上「頑張る？」

那智「まあ……あれだ。私もその、これからは宜しく願います……」

提督「光栄だが節度は守れよ？俺にも精神的限界はある」

摩耶「男だったら限界なんて突破しちまえよ」

提督「もう色々限界が来てるような気がするんだがな」

筑摩「あ、私肩揉みましようか？」

那智「で、では私はストレッツチでも手伝って……」

提督「いや、今はいい。また来る」

最上「大佐、僕の事も忘れないでよ？」クイクイ

提督「忘れてなんかいないさ。じゃあまた後でな」スタスタ

提督「皆、楽しんでるか？」

矢矧「大佐。ええ、偶にはこういうのも良いわね」

川内「あー！ 女たらしだ！」

提督「否定はしないが。その言葉は非常に不服だ」

天龍「ま、結果からしたらだもんな。実際大佐から何かしたわけじゃねーし」

提督「天龍……俺は今、お前のその発言を心からありがたく思っているぞ」

長良「天龍って、ホント極稀にだけど、良いこと言うよね」

天龍「俺はそんなに気が利かないかよ!？」

夕張「じゃあ、その手に持つてるイカ焼きは何よ？ それヤハギンのお皿にあったやつじゃない？」

矢矧「なに？」サッ

天龍「つといけねー。矢矧、まだイカ焼きはあるから勘弁しろよ！」ダツ

矢矧「待て天龍！ あのイカ焼きは自慢の出来だったんだぞ！」

夕張「自分で焼いてたのね……。イカ焼きなんてどれも同じ味なのに」

川内「矢矧はああ見えて食い意地張ってるからねー」

提督（そういえば、あいつが食事当番の時は一人も食い残しがなかったな。自分以外にも徹底していたのか）

提督「さて、そろそろ行くか。お前たち、あまりハメを外し過ぎるなよ」

長良「あ、もう行くんですか？」

提督「ああ。また後でな」

川内「絶対来なさいよー！」フリフリ

提督「ああ、またな」スタスタ

第2話 「自由時間②」

提督「青葉」

青葉「あ、大佐！ 今日はお疲れ様でした！」

提督「いや、それはこちらこそ言うべきだ。ご苦労だったな」

青葉「いえいえ！ 青葉も今回は楽しませてもらいましたから！」

提督「そんなに喋るのが好きか？」

青葉「え？」

提督「司会役をととも楽しそうにしているように見えたんだが」

青葉「あー、んーつと…… 確かに楽しかったですけど、喋るのが楽しいというより

かは盛り上げるのが楽しかったですね」

提督「なるほど。祭りの様な雰囲気そのものが好きみたいだな」

青葉「あ！ そう、それです！ 雰囲気が楽しいと青葉も自然と舌が回っちゃいます

♪

提督「そうか。今も楽しそうだなによりだ」

青葉「今も？ あ、確かにそうですけど…… あれ？ 青葉今大佐と二人だけなのに

言葉がすらすら出てますね」

提督「お前のその明るい雰囲気は見ていて活力が湧く。これからもそうであつてくれ」

青葉「ええ?! そ、そんな恐れ多いお褒めの言葉…… きよ、恐縮です!」

提督「委縮しなくていい。心からの言葉だ…… よし、そろそろ行くか」

青葉「あ、ありが…… 今何をしてられるんですか?」

提督「大会に出た奴らの慰安訪問中だ」

青葉「なるほど! 気遣いが行き届いてますね!」

提督「提督たる者として然るべき仕事の範疇をこなしているだけだ」

青葉「ご立派ですね!」

提督「おだてるな。またいつかは分からないが、こういう時があつたら頼むぞ」

青葉「はい! この青葉にお任せ下さい!」

提督「期待している。それじゃまた後でな」スタスタ

青葉「あ…… 行っちゃった。取材の名目で一緒に行けば良かったかなあ……」

提督「北上、楽しんでるか?」

北上「あ、大佐。うん。満喫してるよ。なにになに? わたしに会いに来てくれたの

「？」

大井「北上さん目当てですって!? 大佐、あまり下心をさらさ」

北上「大井つちは黙ってよう♪」ゴス

提督「こいつらは相変わらずだな」

提督「木曾、お前はどうかだ？」

木曾「ん? ああ、あまり騒がしいのは好きじゃないけど偶にはこういうのも良いな」

提督「そうか。慣れない場かもしれないがこういう時くらいは打ち解けてみるのも良

いぞ」

木曾「そうか…… そうだな。じゃあ大佐、俺の話にちよつとつk」

明石「大佐! 今日はあるがとうございました!」

あき「感謝するであります!」

提督「こちらこそお前たちのお蔭で無事成功した。礼を言うのは俺の方だ」

明石「そんな! あのどこか壊れるところはありませんか? 私直しますよ!」

提督「体調のことだよな? なら、大丈夫だ今はすこぶる調子が良い」

あき「自分にもなにかできることがありますたら!」

提督「気遣いは嬉しいが、本当に大丈夫だ。2人ともそんなことはいいから今を楽し

め」

明石「はい。でも調子が悪い時は遠慮なく来てくださいね」

あき「自分もその時はお手伝いするであります！」

提督「ああ。わかった、ありがとう」

木曾「……ふん」ブスー

北上「膨れない膨れない」クスクス

提督「大井」

大井「あいたた……え、何よ……ですか？」

提督「猫は被らなくていい。お前もよく頑張った。これからもその力を遺憾なく発揮してくれ」

大井「何よその言い方……まあ、ありがとう、ございます」プイ

提督「それでは、俺はこれで失礼する」スタスタ

北上「また来てね」

大井「……まあ、それでもいいなら考えてあげ——」ブツブツ

北上「大井っち、大佐ならもういないよ？」

第3話 「自由時間③」

提督「龍驤、楽しんでるか」

龍驤「あ、大佐やん！ なんや来るんやったらもつと速く来いや」

鳳翔「こんにちわ、大佐。今日はありがとうございます」

瑞鳳「大佐！ これ凄く美味しい！」モグモグ

千歳「こら。瑞鳳ちゃん失礼でしょ」

飛鷹「小さい癖によく食べるわねー。あ、大佐、今日はお疲れ様」

千歳「お疲れ様です。楽しんでますよ♪」

瑞鳳「おふか……モグモグ……おつ……かれ様……」カア

提督「そんなに畏まらなくていい。今日は楽しんでくれ」

龍驤「ほんなら大佐、早速うちのモーション受けてくれる？」

提督「内容次第だ」

龍驤「うち、まあ体はちょこーつと貧相かもしれへんけどアレのテク——モガ」

千歳「龍驤さん、ちよつとこつちに来ましようねー♪」

飛鷹「ごめんなさい大佐。こいつちよつとお酒回つてて」

提督「気にするな。分かった」

鳳翔「大佐はもしかして今、慰問訪問中という事でしょうか？」

提督「そうだ。鳳翔も今日はよく頑張ってくれた。礼を言う」

鳳翔「そんな……私なんてあまり活躍できなくて。でも、ありがとうございます」

瑞鳳「大佐あ、瑞鳳も頑張ったのよ！」グイグイ

飛鷹「そうね。あんたも龍驤と一緒に『ちつさい』割には頑張ったわよね」ニヤニヤ

千歳『可愛かった』わよ。瑞鳳ちゃん♪」

瑞鳳「もう！ 2人とも一言余計だよ！」

鳳翔「騒がしくてすいません」

提督「それだけ活力が溢れているという事だ。だが、もし鳳翔があんな感じだったら

俺は流石に動揺するだろうな」

鳳翔「まあ、大佐つたら……騒がしい私は嫌いですか？」

提督「俺は今のまがいいな」

鳳翔「今のまま……」（ありのままの私……？）

提督「鳳翔？」

鳳翔「あ、ごめんなさい。ちょっとぼっとしちやって」アセアセ

提督 「疲れているなら今日はゆっくり休むように」 肩ポン

鳳翔 「あ、ありがとうございます」 カア

飛鷹 「あざといわね」 ボソ

千歳 「ちよつと、飛鷹………！」 ボソ

提督 「それでは俺はもう行く」 スタスタ

千歳 「また気軽にどうぞー」 フリフリ

瑞鳳 「モグモグ……… あれ？ 大ふあは？」

飛鷹 「あんたはいつまで食べてるのよ」

鳳翔 「ふふ、お口拭きましようね」

提督 「4人とも今日はご苦労だった」

蒼龍 「あ、大佐。フルーツありがとうございます！」

飛龍 「いやあ、頑張った甲斐がありました！」

翔鶴 「ふふ、そうね。まさか、最後にこんな素敵な贈り物まであるなんて、感謝です

♪

瑞鶴 「悪くない気分よ、大佐♪」

提督 「そうか。それは何よりだ」

蒼龍「それより大佐あ」ズイ

飛龍「私達の水着姿、どうでした？」

提督「ん?……きれいだった……ぞ?」

瑞鶴「なんでそこで疑問形なのよ!」

提督「すまん。ああいうのは褒め慣れてないんだ」

蒼龍「もう、駄目じゃん大佐! そういう時は」

飛龍「ひどく官能的で興奮した、くらい言ってもいいんですよ?」

瑞鶴「いや、それ真正面から言われたらドン引きだから」

提督「興奮はした、んだろうな。見てて心が洗われるような気持だった」

瑞鶴「なんか微妙な言い回しね。適当じゃない気がするけど」

翔鶴（大佐、私の水着を見て興奮したりしたのかな……）

飛龍「あはは。大佐らしいですね」

蒼龍「大佐、私達の水着姿を見たい時はいつでも言つてね♪なんて」

提督「まあ、それなりに俺も楽しめたのは確かだ。皆、今日は楽しんでくれ」

翔鶴「ありがとうございます」

提督「ああ、翔鶴。お前も良かったぞ水着」

翔鶴「ええ!? あ、ありがとうございます……ごぎいます」カア

瑞鶴（自然にスケコマシてきたわね。普段からこういう気遣いできたらいいのに）

提督「それでは俺はもう行く」

蒼龍「えー、もつといればいいじゃん」

瑞鶴「慰安訪問ってやつでしょ。大佐も大変ね」

提督「好きでやつてる事だ。別に負担とは思ってない。じゃあな」

飛龍「また後でどうぞー」

翔鶴「水着……良かった……えへへ♪」テレテレ

蒼龍「翔鶴ネーサーン戻って来なよー」

提督「イムヤ」

イムヤ「あ、大佐。様子見に来てくれたの？」トテテ

イク「あ、大佐。お疲れ様なのー♪」プカプカ

ゴーヤ「お疲れさまでち大佐」モグモグ

ハチ「ご馳走頂いてますよ。ありがとうございます」スイー

まるゆ「まるゆ、こんなにたくさんの食べ物見たの初めてです！」

提督「楽しんでもらっているみたいだな」

イク「うふふー、食べ物もお、あんなに良い水着まで貰っちゃってえ、イクもう何も

いう事ないの。満足なの♪」

ゴーヤ「新しい水着早く着てみたいわね♪」

提督「そうか？ まあ、俺はお前たちが今来ている水着も普段とは違うから見応えがあつて良いと思うが」

イムヤ「えっ」

ハチ「まあ、大佐なかなか良いこと言いますね。はつちゃん、ちよつと大佐の事見直しました♪」

まるゆ「ま、まるゆ達の水着が大佐に気に入つて……わ、わあつ。う、嬉しいけど恥ずかしいです！」

提督（気に入つた、までは言っていないんだがな）

イムヤ「もう、大佐。あんな出来事の後にナンパとかやめてよね！か、勘違いしちゃうかもしれないじゃない！」カア

提督「ナンパ……」

ゴーヤ「あ、大佐が固まった」

ハチ「相変わらず硬派な人ですね。でもそこが素敵だと思います♪」

イク「大佐は凄くカッコ良くて優しいの！ イク大佐の事大好きなの！」

まるゆ「ま、まるゆも大佐の事……好きです！」

イムヤ「あなた達あまり騒がないの！ ほら大佐、しつかりしてよ」

提督「イムヤ…… すまない。来て早々で悪いがちよつと別のところに行つてくる」
スタスタ

ハチ「大佐大丈夫かしら？」

イムヤ（もう、本当に相変わらずなんだから……）。結婚の話、頑張れば私も候補に入れるのかな……）

伊勢「あ、大佐じゃない！ わたし達と遊びに…… って、大丈夫？ なんか何時にも増して眉間に皺よつてるけど」

提督「ああ、大丈夫だ。ちよつと…… な」

長門（また自分で墓穴を掘つたな）

長門「ま、取り敢えずせつかく来てくれたのだからゆつくりして行つてくれ」

Bis「大佐！ 遅いじゃない！ 私待っていたのよ！」ギュー

扶桑「大佐。私もお待ちしておりました。寂しかったです」ギユツ

伊勢（えっ何この状況）

提督「む…… お前たち離れろ」

長門（今まで放心していたのか！）

B i s 「嫌よ！大佐、私も恋人にして！」

扶桑「私……愛人でも構いませんよ？」

伊勢（あー！料理の件でリードしたと得意げになっていた頃が懐かしい！）泣

長門「2人ともがつつき過ぎだ。大佐が困っている……だろう」チラチラ

提督（注意しながら前かがみになって……胸を見せているのか？）

伊勢「な、長門？あなたも、なの……？」

長門「いやまあその……私だって少しくらい、試してみてもよからう？」

B i s 「ダメよ！大佐は私のなの！」

扶桑「扶桑さん独占が過ぎるのは見苦しいわよ！」

伊勢（マリアはマリアで焦りが表に出て自制が効かなくなっているわね）

提督（此処に来たのは間違이었다か）クダ

伊勢「あれ？大佐？」

長門「疲れてたんだな。お前たち今日は開放してやれ」

B i s 「膝枕をするわ。それならここでも休めるでしょ」

伊勢（あ、いいかも。それ）

扶桑「名案ですね。マリアさん交代よ……？」

B i s 「仕方ないわね。大佐には嫌われたくないしね……」

長門「そう、それでいい。勿論私にも順番は回ってくるんだろうな？」
伊勢「ちよ、ちよつとわたしもなんだからね！」

叢雲「何かあつちが騒がしいけど」

初春「ま、問題なからう。大佐も力尽きたみたいだし、の」

叢雲「多少危なつかしいのがある気がするけど、長門と伊勢がいるなら安心……で
きるわよね？」

初春「そこは2人を信じねばならんな。それより……」

加賀・金剛「グテー

初春「少々やりすぎたか、の？」

叢雲「勘違いされそうな言い方しないでよ。2人が敏感過ぎただけよ」

初春「ふむ。しかし、肩と腰でここまで為るとは……これは、夜のアレなどはまだ
心配する必要はなさそうじゃの」クスリ

叢雲「白昼堂々そんなこと言わないでよ。ま、ちよつとは安心かな」フウ

第4話 「晩酌2」

コンコン

提督（札は確かに掛けた。その上でこの時間にノックをしてくる奴といえば……）

提督「…… 足柄か？」

足柄「つ、そ、そうです…… よ」

提督「いいぞ。入れ」

ガチャ

戸惑いがちに半開きになったドアの隙間からどこか申し訳なきような顔をした足柄の顔が除いた。

足柄「入っていいの？」ヒョコ

提督「いいと言ったろ？ 入れ」

足柄「う、うん…… 失礼…… します」

提督「……」

足柄「あの……」

提督「うん？」

足柄 「よく、わたしって判ったわね」

提督 「俺が晩酌してると思ったんだらう？」

足柄 「でも、疲れているのに……」

提督 「そう。疲れている事に対して配慮ができて、かつ晩酌の事も分かっている奴といえばお前くらいだからな」

足柄 「ごめん。迷惑だった？」

上目づかいですまなさそうにで聞いてくる足柄の顔は普段より幼く見えた。

提督 「いや、まあお前なら別にいい」（足柄もこういう顔をするんだな）

足柄 「で、でもこの前の晩酌の時は迷惑かけちゃったじゃない」

提督 「あの時はお前に合わない洋酒を勧めた俺にも非がある」

足柄 「でも、気を利かせくれた……」

提督 「もうしないとは言わない。今度は加減をして飲めば問題ないだらう？」

足柄 「あ、うん…… そうね。気を付けるわ」

提督 「それでいい。もうしない、と責任を背負い込むような答よりかは力を抜いた良
い答だ」

足柄 「あ、ありがと……」

提督 「どうした？ 普段と比べて元気がないな」

足柄「大佐が疲れてると思って、その……」

提督「そうやって気を遣ってくれるだけで、気分はそれほど悪くはならないものだ。だからもう遠慮するな」

足柄「いいの？」

提督「いつものお前がいい。ほら、やりに来たんだろ？」ス

提督はそう言うと、氷を入れた空のグラスに焼酎を注いで足柄の前に出した。

提督「ほら、飲め」

足柄「あ、ありが……ううん。ありがとう。頂くわ」

提督「それでいい」

足柄「んく……ふう」

提督「美味いか？」

足柄「少し薄いけど、雰囲気で味って結構変わるのね。今はこれが凄く美味しく感じるわ」

提督「はは。足柄もようやく本当の意味でお酒が呑めるようになってきたか」

足柄「何よ。まるで自分の方が上手く飲めるような言い方ね」

提督「そうは言わないが、少なくとも前のお前と比べてなら上手い自信はあるな」

足柄「もう、その話はよして……恥ずかしいんだから」

提督 「はは。悪い……………ごく……………ふう、それで？」

足柄 「え？」

提督 「此処に來た目的は晩酌以外にもあるんだろう？」

足柄 「それは……………」

提督 「まあ、話し難いならいい」

足柄 「あ、いえ。言うわ。今日のあの……………ケツコンカツコカリの事よ」

提督 「ああ」

足柄 「あれつてさ、誰でも大佐に好意を寄せて……………伝えてもいいの？」

提督 「状況はどうあれ公言したようなものだからな。今更否定する気はない」

提督 「勿論、結果的に一人のみを選ぶ可能性もあるが」

足柄 「そ、それでも好きになるのは、伝えるのは自由よね？」

足柄 「少なくとも今の時点ではそうよね？」

身を乗り出してそう聞いてくる足柄は少し必死そうな表情に見えた。

提督 「落ち着け。ああ、そうだ。そこまで制限できるものではないし、するつもりも

ない」

足柄 「そ、そう……………なら……………」

足柄 「わたしも大佐の事好きって言っいいい？ 結婚してほしいって言っもいい

「？」

提督（やはりか）

提督「…………… 全く今日は、男冥利に尽きるというやつか。艦娘とはいえ、異性にこうも好意を持たれる日が来るなんてな」

足柄「話をはぐらかさないで！」

提督「落ち着けと言つたろ。そんなつもりはない。俺自身今の状況に戸惑っているんだ」

足柄「あ…………… ごめんなさい。また迷惑掛けちゃつて」ガタツ

酒が入ったせいだろうか、振られたと勘違いした足柄は早々に席を立つて部屋を出ようとした。

提督「待て。何回落ち着けと言わせるつもりだ」ガシツ

足柄「だって…………… ！」 提督「受ける」

足柄「え？」

提督「お前の申し出を受ける」

足柄「ほ、本当？ ……………… う、嘘じゃないわよね」

提督「そんな質の悪い嘘をつくほど俺は性格は悪くない」

足柄「う、嬉しい…………… ひつく…………… ぐす」ポロポロ

提督「だが、さつきも言ったが結果は——」

足柄「分かつてるわ。でも今はきちんと気持ちが伝わった事が嬉しいの」

提督「……そうか」

足柄「ねえ」

提督「ん？」

足柄「抱いて」

提督「言葉通りの意味ではないな？」

足柄「流石にそんな卑怯な事はしないわ。ただ、抱いてくれるだけでいいの」

足柄「嬉しいから……その気持ちを今だけ確かめさせて」

提督「分かった。ここに座れ」

提督は軽く自分の膝を叩くと、足柄を横に座らせて頭を胸に預けさせた。

足柄「ありがとう……凄く落ち着く……嬉しい」

提督「そうか。今日はこのまま寝ろ。後で妙高に部屋に運ばせるから」ナデ

足柄「ん……姉さんに迷惑けちやって悪いけど……今日はそうさせてもうら

わ……」

数時間後

足柄 「スー…… スー……」

提督 (前と同じ年頃の、いやもつと幼く見える顔だな) ポンポン

第5話 「異議」(挿絵あり)

バン!

朝からノックもなしに提督の執務室の扉を手荒に開けてくる者がいた。

比叡「大佐! ちよつと、あ……… え、いいで……… しよう……… か?」

勢いよく入つて来たものの、比叡は直ぐに言葉の勢いを失つた。

何故なら目の前いるその日の秘書艦が鎮守府の中でも最古参と言われる叢雲だったからだ。

提督「………」

叢雲「………」

叢雲「比叡さん?」

叢雲はあくまで丁寧な口調で失礼を働いた比叡に質問してきた。

駆逐艦とは思えないその威圧感と威厳は、比叡と彼女とのレベルの差など全く関係ないものに思わせるのに十分なものがあった。

比叡「は、はい!」

緊張した声で返事をする比叡。

叢雲「貴女、今自分が何をしたかお分かりかしら？」

比叡「は、はい……………」

叢雲「言ってみなさいな」

比叡「大佐が部屋に居る時に無断で部屋に入りました……………」

叢雲「それだけ？」

叢雲の語気が僅かに強くなった。

どうやらその答えだけでは不十分らしい。

比叡はそれ以上不興を買わないよに自分の行動をひとつひとつ思い出しながら答える事にした。

比叡「た、大佐の執務を邪魔しました……………」

叢雲「どうやって？」

比叡「む、無断で……………大きな音を立てて……………」

叢雲「そうね。よく分かつてるじゃない」

比叡「すいませんでした……………」

叢雲は比叡の謝罪には反応をせず、提督の方を振り向いてある提案をしてきた。

叢雲「大佐？」クル

提督「ん」

叢雲「軍規に伴う風紀と礼節の違反として罰則、運動150を提案するわ」

比叡「ひや、150……！」

罰の内容が余程キツイのか、叢雲の言葉を聞いただけで比叡は青ざめた。

提督「今回は初めてのはずだ。100に負けてやれ」

叢雲「甘いわねえ」

提督「指導役に皐月、長月、菊月を付けてグラウンド100週だ」

叢雲(あ、結構キツイかも)

比叡「く、駆逐艦と一緒にですか!？」

叢雲「せっかく大佐が100週に負けてくれたんだから頑張りなさい？」

叢雲はそれ以上異議を唱える事は許さないとばかりに満面の笑顔を比叡に向けた。

その顔は確かに表面上は笑っていたが、明らかに心は笑ってはいなかった。

比叡「は、はいいいい」

背筋を走る恐怖に悲鳴交じりの返事で反応する比叡。

提督「今日は平和だな……」ズズ

提督はそんな二人のやり取りを聞きながら、窓か差す陽光に目を細めてそんな事を言った。

——数時間後

比叡「ゼエー……ゼエエ……ヒイ……ハ……」

ノルマを達成した比叡は汗だくで執務室に戻って来た。

叢雲「お疲れ様。はい、水」

叢雲もあれ以上は何も言わず、比叡の労を労いながら水を差し出した。

比叡「……っ！ ゴクゴクゴク……ふはあ！」

提督「それで、どうした？」

ようやく落ち着いていたところで提督が比叡に話し掛ける。

比叡「ふ……ん……その前に、先ほどは失礼しました」

提督「ああ」

比叡「お尋ねした要件はお姉様の事でした」

提督「あの時の宣言の事か」

比叡「はい」

叢雲「姉を取られたくなくて異議を唱えに来た、と言うところかしら」

叢雲はあっさりとは比叡が訪ねて来た理由の核心を突いた。

比叡「その通りです」

それに対して比叡も誤魔化したりはせず、素直に認めた。

提督「ふむ…… 比叡」

提督は少し考えるように口元に手を置いた後、やがてゆっくり論すような口調で比叡に話し始めた。

比叡「はい」

提督「お前が姉想いの良い奴だというのは分かる。だがな」

提督「お前は、お前の意思だけで姉の意思を妨げるのか？」

比叡「それは……」

提督の言葉に痛いところを突かれたとばかりに、表情を少し歪ませる比叡。

提督「こんな言い方は卑怯に感じるかもしれないが、あくまで告白してきたのは金剛であり、あいつの意思だ」

提督「それを知りながら俺に諦めるように持ちかけるのは、姉の思いを無視している事と同じ事だとは思わなかったのか？」

比叡「思います…… 改めて頭を冷やして考えると身勝手でした」

自分の行動の軽率さを痛感し、素直に反省の色を見せる比叡だったが、そんな彼女に叢雲次の言葉が重くのしかかった。

叢雲「危うく金剛さんに嫌われるところだったかもしれないわね」

比叡「……っ！」ジワ

提督「叢雲、もういい」

叢雲「口が過ぎたわ。ごめんなさい」

叢雲も口が過ぎたと思ったのか、目を伏せて二人に謝った。

比叡「大佐……わたし、お姉様が本当に大好きで……ぐす」

自分の間違いは認めたものの、それでも姉を慕う気持ちは止められず、やがてその感情が涙となって比叡の目から流れ出た。

比叡「でも大佐と恋人になっちゃうと……ひぐ……じ、自分から離れていってしまうみたいに思えて……」グシグシ

提督「ああ」

比叡「だ、だから何とか大佐にお姉様を諦めさせて……ダメなら自分が身代わりになろうと思つて……」

提督（身代わりとまで言われると、何か自分が畜生のように思えてくるな。いや、実はそうなんじゃないのか？）

提督は比叡の悪気のないその言葉に密かに心を痛めるのを通り過ぎて、自分を責めた。

ポン

叢雲「しつかりしなさい」ボン

そんな提督の機微を感じ取ったのか、自信を持ってという風に叢雲が優しく肩を叩く。

提督「ありがとう」

比叡「え？」

予想外の言葉に驚いた眼で提督を比叡は見た。

提督「ん？ いや、そうか……身代わりになつてまで姉を取られま……いや、守

ろうとしたんだな」

比叡「うん……」コク

提督「比叡、さっきも言ったがこれは金剛の個人の事だ」

提督「だからあいつ自身に今の状況を否定する考えがない限りこれを問題とすること

自体が問題だ。分かるな？」

比叡「はい。でも……」

提督「比叡、お前は俺が嫌いか？」

比叡「べ、別に嫌ってなんか！ ただお姉様の事となるとつい頭が……」

慌てて比叡は否定した。

そう、姉の事さえ絡まなければ比叡は提督に悪い印象など持っていないかった。

寧ろ口には出さないが頼りになって優しい男性だと密かに思っていた。

提督「そうか。比叡、お前は優しい子だな」

比叡「や、優しい……子、だなんて……」アセアセ

責めていた筈の提督から不意に褒められて、恥ずかしさ半分と言った様子で慌てる動揺する比叡。

だが、そんな彼女の動揺は提督の次の言葉で全く違う反応を見せる事になった。

提督「その優しさを少しだけ俺にも分けてくれないか」

比叡「え」ドキ

叢雲（あら？ 流れが）

提督「俺を信用してほしい。決して金剛を傷つけるような事はしない」

比叡「そ、それってやっぱりお姉様と結婚……」

提督「それはまだ分からないが、例えそうならなかったとしても俺は金剛を、お前たちを傷つけるような事はしない」

提督「まずは、それを信用してはくれないか」

比叡「でももし、結婚を断つたりなんかしたら……それこそ、お姉様は傷ついてしまいますよ」

提督「それは必然だな。流石に俺にはどうしようもない。だからこそ、そういう時は

お前が必要だと俺は思う」

比叡「凄く、ズルイ言い方ですね」

提督「俺は自分の心を偽ってまで自分を慕ってくれる相手と付き合う性根はないからな。その時はあらゆる非難を甘んじて受ける覚悟だ」

比叡「大佐……」

提督「悪いな。俺はこういう人間なんだ」

比叡「ううん。分かりました大佐。わたし、大佐、貴方を信用します」

提督「そうか、ありが——」 比叡「だからわたしとも付き合ってください！」

突然の言葉に固まる提督。

提督「……ん？」

叢雲(まあ何となく流れて予想はしてたけど、相変わらず外堀を埋めるつもりで墓穴を掘るのが上手いわね)

呆れた様な可笑しい様な、そんな微妙な表情で叢雲は苦笑交じりに溜め息を吐いた。

提督「比叡、一応訊くが何故そうなる？」

比叡「大佐の話の聞いている内に、お姉様がどうしてもそこまで大佐に好きなのか興味が湧いてきました！」

提督「なら、興味止まりでいいだろう。付き合うまでは必要——」

提督は暴走（提督の目にはそう見えた）する比叡を何とか宥めようと説得を試みたが、そんなつもりで発しようとした彼の言葉は、比叡の更なる予想外の行動で遮られた。

チユツ

叢雲「」（なつ）

その展開は流石に予想外だったのか叢雲も驚いた顔をした。

比叡「ん……ふう。こ、これでわたしが一番リードしたことになりますね！」カオ
マツカ

比叡「あ、勿論これはお姉様には内緒にしておいて下さいね！ これを理由に諦めてくれてもいいですけどね！ それじゃ、失礼しました！」

バタン

提督「…… 叢雲」

二人だけになった部屋で提督が静かに叢雲に声を掛ける。

叢雲「何？」

提督「金庫の鍵を」

叢雲「金庫？ 金庫ってあの銃が入って…… いや、何する気よ？」

提督「そうか。鍵はあそこだったな」フラ

叢雲の言葉が届いていないのか、憑き物であるような足取りでゆらりと立ち上がった提督に叢雲は直ぐに不安を覚えた。

叢雲 「ちよ、大佐!? だ、誰か来て! 初春と戦艦も呼んできて!」

提督 「俺はやはり畜生だったようだ」

叢雲 「やめなさいって! は、早く誰かー!」

ここに來て初めてではないかという叢雲の悲鳴がその日、鎮守府中に響き渡った。

第6話 「感情」

叢雲「全くしつかりしないさよ。あれくらいで動揺しちゃつてさ」

初春「ふふ。なかなかに見応えのある事態じゃったな」

叢雲「他人事のように言わないでよ。ホント焦ったわ」

提督「すまない。久しぶりに自分を見失った」

叢雲「気を付けてよね。古参だからってあまり出張りたくないのよ」

初春「うむ。被褐懷玉というやつじゃな」

叢雲「失礼ね。私は普段も普通よ」

提督「ふう……」ギシ

叢雲「あ……疲れてるのに悪かったわね」

提督「ん？ ああ、いい。気にするな。それよりお前たちに訊きたい事があるんだが」

初春「なんじゃ？」

提督「お前たち艦娘の提督に対する愛情についてだ」

叢雲「ああ、その事」

初春「ま、大佐なら気になって当然じゃな」

提督「分かる範囲でいい。教えてくれ」

提督「いくら提督とは言え、ここまで無条件に好かれるものなのか？ 鎮守府にいる男が俺一人だからとかそういう理由じゃないのか？」

叢雲「まず、無条件っていうのは大佐本人にもちよつとは考えて欲しいわね」

初春「そうじゃな。大佐、お主無自覚のようじゃが結構、妾たちに好かれるような事をしてるのじゃぞ？ 今回が良い例じゃ」

提督「だとしてもあまりに予想外の事が続けて起きるのは勘弁してほしいものだが」

叢雲「そうね……じゃあ何から話そうかしら」

初春「艦娘と人間との違いからでよかろう」

叢雲「分かったわ。じゃあ大佐、大佐が思いつく限り人間と私達との違いを挙げてみて」

提督「ふむ……。身体能力、深海棲艦に干渉できる力、あとは…… 最初から成長した姿をしている事くらいか」

叢雲「そうね。大体そんな感じかしら」

初春「では大佐、その中で一番今のお主の質問の根底に近いものはなんだと思うかの？」

提督「成長した姿……か」

叢雲「正解。私達は人間と違って最初からある程度成長した姿をしているわ」

初春「おまけに生まれながらにして提督の下で問題なく働けるように最低限の知識まで与えられておる」

提督「生まれながらにして優れた力と知性を持ち、姿も成長してるとはまるで……」

叢雲「そうね。ある意味完成された、完璧なモノであると言つていいと思うわ」

初春「しかしのそんな完璧な妾達であるが、一つだけ生まれたて時には未熟な所があるのじゃ。それが何かわかるかの？」

提督「……心だ」

叢雲「流石大佐ね。そう。心だけは人間と同じで経験を積まないと育まらない。だから人間と一緒に経験を積む必要がある」

初春「妾達の場合、その人間とは最も身近にいる提督となるわけじゃ」

提督「だから好かれ易いと？」

叢雲「答を焦らないですよ。まあ、当たらずとも遠からずと言つたところね」

初春「妾達はな大佐、提督と一緒に過ごす事によつて経験を積み心を育む」

叢雲「そしてそれと同時に提督との信頼関係を構築し理解する」

初春「重要なのは、信頼関係が出来た瞬間じゃな。どうやら妾達艦娘はその信頼関係が提督への好意に繋がり易い仕組みになっているらしい」

叢雲「強い信頼関係で結ばれ、優れた戦果を挙げる艦隊は、それだけその提督が艦娘達に慕われている証拠と言えるわけね」

提督「仕組み……か。何やら作為的なものを感じるな」

初春「まあ十中八九、提督が艦隊を運用し易くするために仕組まれたナニカじやろうな」

提督「お前たちはそれを自覚しつつも俺に、提督に付き従うのか？」

叢雲「他の艦隊の子の事はよく分からないけど、私は取り敢えずそれを自覚した時点で確かめたわ」

提督「確かめた？ 何を？」

叢雲「大佐、貴方への愛情を、よ」

提督「……」

初春「右に同じく。妾もこの気持ちか偽りかどうか確認した」

提督「因みに訊くが、どうやってだ？」

叢雲「貴方、ずっとその事を疑問に感じて私達に対して壁を作ってたでしょ？」

初春「妾達はそれが不思議じゃった。何故兵器である妾達をもっと容易く扱わないのか」

叢雲「そんな姿をずっと見ている内にね、貴方が私達の事を心では悩みながらも大事

にしてくれてる事に気付いたの」

初春「その時にな。仕組まれた感情とは別に純粹に其方を愛おしく感じるようになったのじゃ」

叢雲「自我に目覚めるってやつかしら」

提督「…… それすらも仕組まれたモノだと疑ったりはしないのか？」

叢雲「…… 大佐、見て」

叢雲はそう言つて静かに提督に近寄り、胸元を少し広げて見せた。

そこには小さな傷痕があつた。

提督（入渠すれば、どんな傷でも完治するはずの艦娘に傷痕が……）

叢雲「自我に目覚めた時にね、この辺りに何か違和感を感じたの。まるでその感情を否定するようなナニカを」

初春「試しに抉つてみたら小さなチップが出てきおつた。恐らくこれで感情をある程度制御しておつたのじゃな」

叢雲「チップが入っていた部分は治癒能力を司る組織に少し重なっていたみたいで、これを取り出したらその部分だけは完全に治癒しないでこうやって痕が残ったわ」

初春「因みにここの艦娘は全てそのチップを外してある」

提督「なに？」

叢雲 「艦娘が生まれて目覚める前に全部私達を取り除いているのよ」

初春 「因みにその事を知っているのはここにいる3人だけじゃ」

叢雲 「何れは皆に話すつもりだけど、という風に打ち明けるかは全部大佐に任せるわ」

提督 「…… 他の奴らが傷痕に気付いてないのは？」

叢雲 「証拠は残さないわ。私と初春の後は全てその組織を傷つけないように細心の注意を払うようにしたから」

初春 「当然じゃな」

提督 「…… 全く、お前たちは……」

叢雲 「あの…… ごめんね。黙ってて」

初春 「これがどれだけ重大な事かは妾達も理解しておる…… しかしそれでも妾達は其方へのこの気持ちが無りでないと信じたかったのじゃ……」

提督 「…… 2人とも」

叢雲・初春 「はい」 ビクッ

提督 「よく打ち明けてくれた。これで俺の疑問は晴れた。もうお前たちからの愛情は疑わない」

提督 「平然としているが、打ち明ける時は不安で仕方なかっただろう。だが、もういい。我慢するな」

叢雲「馬鹿…… そういう言葉つて卑怯よ…… 涙が止まら…… ないわ」ウル
 初春「らしくもない…… 妾も止まらぬ……」グス

提督「2人とも、来い」

提督はそういうと2人に向かつて腕を広げた。

叢雲と初春は堰を切ったかのように泣きながら提督の腕に飛び込んだ。

そんな2人を提督は、我が子の様に抱きしめた。

叢雲「ねえ…… 分かっているとと思うけど私達の事も……」

初春「恋人として…… 受け入れてくれるかの？」

提督「お前たちとは特に長い付き合いだったのに待たせてしまつてすまなかつた」

提督「快諾だ、勿論」

叢雲「っ…… 大佐あ！」ギユ

初春「大事にしてたもれ」ギユ

——数分後

提督「もう、いいだろう？ さあ、離れて仕事の続きだ」

叢雲「ねえ…… もうやつちやわない？ 私はいいわよ？」

初春「いきなり3人でか？ 贅沢、もとい淫乱じゃのお♪」

提督「馬鹿者共が。さあ、さっさと日常に戻れ」ポカカ

叢雲「痛つ。もう、雰囲気台無しよ」

初春「大佐はほんに律儀じやの。結婚するまではお預けというやつかえ？」

提督「お前たちはチップを外したのは間違いだったかもしれんな。もう少し倫理というものを学べ」

初春「なるほど、そういう使い道もあつたか」

叢雲「チップを外した私達が淫乱になつたつて言いたいの？」

提督「そうやって自問自答できるならまだ救いはあるな。さあ仕事だ」

叢雲「それ褒めてるの?……ふう、仕方ないわね」(絶対、落として見せるわ!)

初春「ふふ、今日は特別に妾も手伝つてやろうかの」(落とすし難いほど攻め甲斐があるというものじゃ)

第7話 「ゆとり」

雷「あー、大佐タバコ吸ってるー」

提督「ん？」

名取「あ、ホントだ…… 大佐ってタバコ吸うんですね」

雷「だめじゃない。なんか不良っぽいわよ」

提督「お前たち、俺の事を真面目な堅物だと勘違いしてないか？」

名取「え？ 大佐は真面目な人ですよ？」

雷「いつも規則は守るように言ってるじゃない」

提督「軍人なんだから規則を守るのは当然だ。俺が言ってるのはな、心にゆとりがあるかどうかという事だ」

雷「ゆとりがあるからタバコを吸ってるっていうの？」

提督「いや、これは単純に好きなかだけだ」

雷「ゆとり関係ないじゃない！」

名取「タバコを吸ってた大佐、何だか目も半目になって怖かったです……」

提督「まあ待て2人も。日がな一日というわけにはいかないが、偶にこうして日光

を浴びながら空を見ると気持ちいいだろう？」

雷 「それは、分からないでもないわ」

名取 「私もポカポカは好きです」

提督 「だろう？ 俺はそういう時についてに煙草を吸うともつとリラックスできるんだ」

雷 「その満喫してる状態をゆとりって言いたいのね」

提督 「そうだ」

名取 「でも目……」

提督 「あれは気分が良くて眠気に誘われていたんだ。名取、お前だって日に当たつてれば気持ち良くて眠くなるだろう？」

名取 「あ、はい。眠くなっちゃいますよね」

提督 「リラックスの仕方は人それぞれだが、こうやって過ごす事ができるゆとりがあるか無いかでその日の気分は大分違うものだ」

雷 「ふーん……分かったわ」

名取 「私も分かりました。あと怖いとか言ってしまったて、ごめんなさい」

提督 「いや、気にしなくていい。こうやってお前たちと取り留めない会話をするのもリラックスであり、ゆとりある行為だ」

雷「でも、やっぱりタバコはいけないわね！　雷知ってるんだから！　タバコを吸うと早く死んじやうのよ！」

名取「ええ!?　た、大佐し、死んじやうんですか!?　ダメです！　死なないでください！」ジワ

提督「おい雷、滅多な事言うもんじやない。確かに体には良い影響はないが、これはこれで精神に作用する効果が——」

名取「ダメですう！」バツ

雷「あ」

提督「む」

名取「う……………ぐす……………大佐、こんなの吸わないで下さい。私、大佐ともっと長く一緒に居たいです……………」

提督（雷……………）ジロリ

雷（ええ!?　い、雷の所為だっていうの!?)　ビクッ

提督「分かった。分かったからもう泣くな」

名取「ぐす……………もう、吸わないですか？」

提督「……………努力はする」

名取「……………そんな、やっぱり吸う——」

提督「待て泣くな。今までずっと使っていたものを急には止められないだろ？」

名取「でも、死んじや……」

提督「少しずつ吸う数は減らしていく。それだけでも体に与える影響は違ってくる」

名取「絶対に吸わなくなります……？」

提督「約束だ」

名取「分かりました……急にこんな事しちゃってごめんなさい」

提督「気にはしていない。俺の体を気遣ってくれたんだらう？」

名取「あ、はい……」

提督「だったら礼を言うのはこちらの方だ。ありがとう」

名取「そ、そんな……」アセアセ

グイグイ

提督「？」チラ

雷「雷も……一応大佐の事気遣ったのよ？」ナミダメ

提督「分かった分かった。ほら」ポン、ナデ

雷「あ……ん……♪」スリスリ

提督（まるで猫、いや犬か？）

名取「……」ジー

クイクイ

提督「ん？」クル

名取「あの大佐……私もそれやって欲しいです……ダメ、ですか？」ウル

提督「……ふう」

名取「あ、やつぱりごめんな——」ビク

提督「大丈夫だ」ポンポン

名取「あ……ん……ありがとうございます……♪」スリスリ

雷「あー、名取さん軽巡なのにズルイ！」

提督「独り占めはカツコ悪いぞ、ほら」ナデ

雷「あ、もう……仕方ないわね♪」スリスリ

名取「大佐もつと……」プク

提督「分かったから袖を引っ張るな」ナデ

雷「〜〜♪」スリスリ

名取「〜〜♪」スリスリ

提督「……」（重くて寝れない……）

第8話 「素直」

不知火「大佐、勉強ですか？」

提督「ん？ いや、士官学校時代使ってた教科書を見てたらつい懐かしくなつてな。内容を読み返して昔を思い出してたんだ」

不知火「そうでしたか。お邪魔しました」

提督「ああ」

不知火「……」

提督「…… どうした？」

不知火「いえ、てつきり引き止められるのかと」

提督「特に理由もないのに引き止めたりはしないぞ？」

不知火「まあ、そうですね」

提督「だろう？」

不知火「……」

提督「…… 不知火」

不知火「はい」

提督「一人で本を読んでも暇だからちよつと俺に付き合ってくれないか？」

不知火「！了解です。ご命令とあらば」

提督（駆逐艦の中では一番大人びてると思つてたんだがな……）

提督「さて、なにを——不知火」

不知火「なんでしよう」

提督「話し相手になるのに何故俺の隣に座る？」

不知火「失礼でしょうか？」

提督「いや、それ以前に話し難いだろ」

不知火「不知火は問題無いのですが……ご命令とあらば……」シユン

提督「いや、そのままでもいい。隣り合つて話すのも楽しいかもしれないしな」

不知火「！大佐もそう思われますか」

提督「まあ偶にはいいだろう。新しい発見があるかもしれないしな」

不知火「新しい発見……新しい関係……やらねば」

提督「一体何を意気込んでるんだ」

不知火「こちらの話です」

提督「そうか。意外に不知火はよく喋るんだな」

不知火「そうですか？」

提督「ああ。いつも物静かで必要な事のみに言う大人びた奴だと思つてた」
不知火「よく話す不知火は嫌いですか？」

提督「なんでそれだけで嫌いになるんだ、極端だぞ。別に嫌いではない」

提督「寧ろその意外性が魅力的に感じないでもない」

不知火「し、不知火が魅力的……ですか」

提督（さつきから答え返す度に、反応が過剰なような気がするな）

提督「まあ、あまり無理に喋る事もない。素直なのが一番だからな」

不知火「素直な不知火ですか……先ほどの不知火とは違うのですか？」

提督「ん？ 素直な不知火か……そうだな」

不知火「……」ジツ ↑何かを期待するような目で見てる

提督「心に思ったことをちゃんと口に出せたら良いかもな」

不知火「心に思ったことを……」

提督「そうだ。お前はさつきから心の中では色々期待しながらも、その答を俺が口にするのを待つていただろ？」

不知火「…… 確かにそうでした」

提督「ちゃんと自覚はあつたか。そういうのを自分から言えるのが素直という事だと思ふ」

不知火「大佐は素直な方が好きですか？」

提督「素直な反応をするお前も意外だからな」

不知火「という事は魅力的という事ですね」

提督「まあそうなるか」

不知火「分かりました。これからは大佐の前では素直な不知火でいきます」

提督「なんで俺の前限定なんだ。普段からそうしろ」

不知火「……」プイ

提督「分かった。分かったから今は素直でいてくれ」

不知火「…… 分かりました」ソ

提督「なんだ眠たいのか？」

不知火「はい。少しだけ肩を貸して頂けないでしょうか？」

提督「俺は本を読んでいるから気にせず寝ろ」

不知火「ありがとうございます。それでは……」

——数分後

不知火「スー…… スー……」

提督「…… 意外に心地良いもんだ」

第9話 「黒白」

龍驥 「あ！ 大佐！ ええとこに！」

提督 「じゃあな」 スタスタ

龍驥 「なんで!？」

提督 「何となく嫌な予感がしたんだ」

黒潮 「そらあんまりやわ！」

提督 「いや、黒潮の事じゃない。あくまで龍驥が、だ」

龍驥 「だから、なんでうちだけ!？」

提督 「空母の中で騒がしいのはお前だけだからな」

龍驥 「したら黒潮はどうやねん!？」

提督 「いや、黒潮は普通だぞ？ 口調はお前と一緒だが」

黒潮 「大佐、そんなに褒めんといてほしわあ♪」 テレテレ

龍驥 「くう…… 理不尽や…… ものごつつ理不尽を感じるで！」

提督 「なら普段の行いを反省して謹んで反省するんだな」

龍驥 「なんで反省を2回も言ったん!？」

黒潮（さつきから漫才みたいで楽しいけど、うちだけノケモンにされてるみたいで寂しいなあ）

提督「で、何を2人で言い合っていたんだ？」

黒潮「そ、それはあ……ちよつと乙女同士の会話やから秘密にしたいっていうかあ」

龍驤「うちと黒潮どっちが胸があるか揉めとつたんや」

黒潮「なんでそんなに堂々と言えるん!? てか、やめて。恥ずかしいから!」

提督（やつぱりこいつが発端だったか）

提督「軽空母とは言え、なんで空母が駆逐艦と張り合ってるんだ。大人げないぞ」

龍驤「いや、同じ関西弁を喋る者としてここは黒白ハッキリ着けとかんとあかんのや! 黒潮だけに!」

黒潮「それをゆーなら白黒や! お願だからつまらん事でうちをネタにつかわんといて! めつちやハズイ!」ピーツ ↑泣いてる

提督「龍驤、もうそのくらいにしといてやれ。黒潮が不憫だ」

黒潮「ぐす……た、大佐あ……」ダキッ

龍驤「ああつ! ちよ、黒潮、あんた何調子いい事してんねん!」

提督「龍驤やめなかい」

龍驤「う……」

提督「全く、落ち着け。つまりお前はもうしたくないんだ」

龍驤「どっちが胸大きいかわハッキリさせたいです……」

提督「黒潮、こんな事訊くのはアレだが、この際ハッキリ言つてやれ」

黒潮「あう……ごめん。多分うちの方が大きい……と思う」ボソ

龍驤「こんちんちくりんが言うやないか！ そないゆるなら実際に剥いて……！」

ゴン

龍驤「プシュー

黒潮（大佐の拳骨初めて見た……）

提督「埒が明かん。黒潮」

黒潮「は、はい」

提督「医務室を使つていいからもう二人で実際に計つてこい。その間は鍵を閉めるのを忘れるなよ」

黒潮「ええ……でもうち……」

提督「恥ずかしいだろうが女同士だ。少しだけ我慢してくれないか」

黒潮「ほんなら一個だけうち、大佐に教えて欲しい事あるんや。それ教えてくれたら……」

提督「分かった。なんだ」

黒潮「む、胸あるのとないの……ど、どっちが好き……？」ボソ

提督「……それは龍驤と比べてという事か？」

黒潮「……」フルフル

提督「……俺は別に大きい胸に拘りがあるわけではない。小さくても、可愛いなら

それはそれで良いと思う」

黒潮「っ……そ、それほんま!」パア

提督「ああ」(俺は一体何を言ってるんだ)

黒潮「分かった。おおきに! じゃ、うちちよつと計ってくるわ! 行こ、龍驤さん

!」

龍驤「え、え。なに? なんなん?」

——数分後

『んな、アホなあああ!!』

提督(廊下の奥から龍驤の絶叫が聞こえた。どうやら勝負は決まったようだ)

黒潮「♪ ほな、大佐うちもう行くわ。龍驥さんもはよ元気出してやく♪」スタスタ

龍驥「プルプル

提督（両手を着いて震えている。屈辱に震えているというところか）

龍驥「大佐……」

提督「ああ」

龍驥「うちって、うちってなんでこうなんかな……。なんでこんなにもないんかな……。」

提督（何がなののかは触れない方がいいな）

提督「落ち込むなどは言わないが、あまり気にするな。気にしたところでお前の悩みは簡単には解決しない」

龍驥「う……。もうちよつと気い利かせた事言ってくれたってええやないか……」

提督「……俺は大きい胸に特に拘りがあるわけではない」

龍驥「！」ガバツ

提督「……小さくても可愛いならそれはそれで良いと思う」

龍驥「そ、それほんま!? ほんまの本心!？」

提督「…… ああ」

龍驤「ありがとう！　うち元気出たわ♪」

提督「そうか…… 現金な奴だな」

龍驤「そんな褒めんといてえな♪　ほなうちももう行くわ。大佐、今日はほんまにありがとなー！」フリフリ

提督「…… 何かドつと疲れたな。今日は早めに寝よう」

　　廊下の曲がり角の影

文月「…… 大佐は小さい胸でもオツケー、と」

秋雲「良いこと聞いたじゃくん。早速皆に報告しますか♪」

第10話 「好み」微R—15

卯月「た〜いさあ〜♪」

提督「なんだ。何時になく機嫌が良さそうだな」

卯月「うん♪ 最近ちよ〜つと良い事知ったからね〜♪」

提督「良い事？」

卯月「そうぴよん♪ 卯月可愛さは自信はあるけど、アレは頑張ってもどうにもならないからね〜。正直、不安だったぴよん」

提督「アレ？ さっきから一体何の話をしてるんだ？」

卯月「えへへへ〜♪ アレはアレぴよん♪」トテテ

提督「……………なんだ？」

潮「…………… 大佐」ズーン

提督「ん、居たのか潮。どうした？ お前は何時になく静かだな」

潮「私、驕ってました……………」

提督「うん？」

潮「私だけは他の駆逐艦の子達と比べて優位に立っていると生きていました……………」

提督「お前も何の話をしてるんだ？」

潮「でもそれは私の驕りでした……………。大佐は誰でも受け入れる事ができる大きな器をお持ちだったんですね」

提督（なんだ？ 褒めてくれてのか？ 何故だ？）

提督「よく分からんが、取り敢えず礼を言えばいいのか？」

潮「お礼だなんてそんな……………。寧ろ私の傲慢さを気付かせてくれた事に対してこちらがお礼を言いたいくらいです……………」

提督（こんなに饒舌で気落ちした潮を見るのは初めてだな）

提督「潮、お前大丈夫か？」

潮「潮は大丈夫です……………。いえ、大丈夫にならないといけないんです！」

提督「む？」

潮「大佐、私頑張りますから！ もっともっと頑張って、大佐が目を離させなくなるようないい潮になってみせます！」

提督（良い潮？ 良い潮ってなんだ？）

提督「いや、お前は今のままでも特に問題はな——」

潮「潮、いきます！ これより女を磨く修行に行つて参ります！」ダダダ

提督「…………… 一体なんなんだ？」

多摩「……………大佐！」ダキッ

提督「ぐ……………多摩か？」

多摩「タマは信じていたにや！ 大佐は見た目だけを大事にするような提督じゃにや
いって！」

球磨「わたしもクマ！」ダキッ

提督「おぐ……………球磨……………お前も、居たのか」

球磨「クマも大佐は大きさに拘らない提督だと信じていたクマ！」

提督「2人とも……………離せ……………いくら軽巡でも……………前後から2人に締められ
ると……………ぐ……………」

天龍「あ！ おいてめーら何してるんだ！」

龍田「大佐が苦しんでいるわよお？ 離して あげて？」ギラ

多摩「ニヤー！ 天敵が来たにや！ 球磨、ここは一時撤退するにや！」ダッ

球磨「了解クマ！ 2人とも覚えてろよクマ！」ダダッ

提督「かはっ……………ふう……………ふう……………」

龍田「大佐、だいじよおぶ？」

提督「ああ、助かった……………ありがとう」

天龍「つたく、あいつら加減つてもものを知らねーからな」

龍田「お礼なんてえ…… それじゃあ♪」ギユ

提督「何故腕を絡める。押し付ける」

龍田「お礼なんだからいいでしょ？ それに大佐もなんだかんだ言つてこのくらいがお好きよね？」フニフニ

天龍「おい！ 龍田お前まで何してるんだ！」

龍田「ただのスキンシップよお。それにお礼なんだから天龍ちゃんだってやっていいのよお？」

天龍「お、俺は別にそんな事やりたくは……」カア

龍田「あらそう？ じゃあ私が全部貰っちゃうわね？」スリスリ、プニ

提督「おい、足まで絡めて…… それはやめろ。やり過ぎだ」

天龍「なああ!? ちょよ、ちょよと待て！」ギユ

龍田「はい。よく出来ました♪」

提督「…… 天龍まで、どうしたんだ2人とも」

天龍「こ、これがお礼なんだろう？ だったら俺もこれがいいから少し黙っててくれよ……」ギユ、ムニー

龍田「だいいじよおぶ。今日の事は誰にも言わないから」

提督「そういう問題じゃないが…… 早く解放してくれ」

龍田「物分かりが良くて助かるわあ。じゃ、もう少しだけね？」プチ

提督「胸元を広げるな」

龍田「もう少しだけって言ったじゃない？ これ以上は何もしないから、お

が い♪」

天龍「しよ、しようがねえな………
／／／ プチ

提督（今日は厄日だ）

第11話 「意外」

提督「……………」ブス

赤城「た、大佐？　どうかしました？」

提督「別に何でもない。些末な事だ」

赤城（こんな風に機嫌が悪そうな大佐は初めて見るわね。なんか子供みたいで可愛
い……………？）

赤城「くす。そうですか。お茶、いります？」

提督「…………… 頂こう」

——数分後

提督「ふう…………… お前からお茶を貰うのは久しぶりだな」

赤城「ふふ。そうでしたか？　お口にあつてます？」

提督「ああ、美味しい。それに落ち着く……………」

赤城「大佐」ス

提督「ん、いいのか？」

赤城「今日は特別です」

提督「お前の前では吸わない約束してたからな。正直意外だ」

赤城「あら。ならおやめになりますか?」

提督「訂正する。嬉しい。火頼めるか?」

赤城「どうぞ♪」シユボツ

提督「ふう…… 毒の煙だが、何故こうも気分が良くなるものなのか」

赤城「そんなに良くなるのですか?」

提督「慣れたらな。ま、吸わないに越したことはないのは確かだ」

赤城「そうですか……」

提督「なんだ?」

赤城「吸ってみるか? とは言ってくれないんだな、と」

提督「ふ…… 我儘言つて恰好つかないが、お前には吸つて欲しくないな」

赤城「まあ、大事にしてくれてるといふ事でしょうか?」

提督「そうだな。お前には健康であつて欲しい」

赤城「ふふ、嬉しい♪」

赤城「あ、意外と言えば」

提督「ふう…… ん?」

赤城「さつき、大佐機嫌が悪そうじゃありませんでした？ 些末な事とか言つてましたけど……」

提督「ああ…… 軽巡たちにもちよつと絡まれてな…… ふうー」

赤城「まさかとは思いますが、反抗ですか？」

提督「それこそまさかだ。単に、なんだ。少し過激なアプローチを受けてな」

赤城「ふーん…… それで機嫌が悪かつたど？」

提督「おい、目が怖いぞ。意味も分からず一方的に絡まれたら誰だつて気分を害するだろう？」

赤城「じゃあ、今私とならどうです？」ズイ

提督「冗談だろ」

赤城「煙草、取り上げますよ？」

提督「お手柔らかに頼む」

赤城「ありがとうございます♪ それでは…… ん」

そう言うのと赤城は提督の肩に寄りかかった。

提督「それでいいのか？」

赤城「え？ もっと過激なのをお望みでした？」

提督「いや、意外だったただけだ。それでいい」

赤城 「ふふ。お互い様ですね」

提督 「こうしてると、まだこの鎮守府の主力がお前だけだった頃を思い出すな」

赤城 「そうですね。今は、空母としての主力の座も加賀さんに取られてしまいました
が」

提督 「皮肉か。今の状況にやはり不満か？」

赤城 「いいえ。割と今の待遇でも満足してますよ。偶にこうして過ごせますし♪」

提督 「……そうか」

赤城 「あ、煙草終わっちゃいましたね。もう一本吸います？」

提督 「いや、もうこれでいい」

赤城 「そうですか。それじゃあ……」 スツ

提督 「待て。吸い終わったからと言って、別に頭を離す必要はない」

赤城 「いいんですか？」

提督 「寧ろ和むからお願いしたいくらいだ」

赤城 「ふふ、なんですかそれ。それじゃあお言葉に甘えて」

提督 「どうぞ」

赤城 「……」

提督 「……」

赤城「ねえ、大佐」

提督「うん？」

赤城「私も……恋人……結婚の候補になりたい……な」

提督「もう何人かそう言つて来てくれる奴らがいて、それを受け入れてるから今更断る事はしないが……」

赤城「ですが？」

提督「甲斐性ないぞ俺」

赤城「ふふ、そんなことはありませんよ。現に今、私を大事にしてくれているじゃないですか？」

提督「そのくらいで満足されてもな……」

赤城「あら？ もっと期待してもいいんですか？」

提督「……善処しよう」

赤城「あ、逃げましたね？ でも、それでいいですよ。無理することはないです」

提督「……赤城」

赤城「はい」

提督「ありがとう」

赤城「いいえ♪」

第12話 「ヌイグルミ」

コッソ

提督 「ん？ ヌイグルミ……」(何故トイレの前に……)

提督 「取り敢えず預かっておくか」

く執務室

愛宕 「大佐？」

提督 「ん？」

愛宕 「そのヌイグルミはどうしたんですか？」

提督 「トイレの前に落ちてた。持ち主が分からないから預かることにしたんだ」

愛宕 「そうですか……」(だからって普通机の上に置くかしら)

コンコン

愛宕 「はくい」

矢矧 「矢矧です。入っていいですか？」

愛宕「どうぞ〜」

ガチャ

矢矧「失礼します。大佐、ちよつとおはな……し……が……」

部屋に入つてくるなり矢矧はヌイグルミを見ると、目を丸くして言葉を失つた。

愛宕「ああ、これ？ トイレの前に落ちてたのを大佐が拾つて預かつてるのよ」

矢矧「そ、そうですか……」

愛宕「大丈夫。大佐は間違つてもそういう趣味はないわ」クス

提督「おい」

愛宕「あら、ごめんなさい」クスクス

提督「全く……それで、どうした？」

矢矧「え？」

提督「用があつて来たんだらう？」

矢矧「あ……ああ、そう。そうなんだけど……」

愛宕「？」

提督「……」

提督「愛宕」

愛宕「はい？」

提督「悪いが、開発をしてきてくれ。三式爆雷が一つ欲しい」

愛宕「え、急にどうしたんですか？」

提督「矢矧を見たら今月はまだ鎮守府近海の敵潜水艦の駆除を行ってない事を思い出してな」

提督「ソナーは潤沢にあるんだが、爆雷だけが3式が不足してるんだ。あと一個開発ができれば、1艦隊に所属する全艦に一個ずつ配備できる」

愛宕「でも、私まだレベル40ですよ？」

提督「秘書艦なんだからそれは気にするな。久々の開発で勘だけでも取り戻せ。資材は出るまで使っていいぞ」

愛宕「そういうことなら愛宕、頑張っちゃいます♪」

提督「お前の奮闘に期待している」

愛宕「！ あ、ありがとうございます！ 楽しみにしてて下さいね♪」
バタン

提督「……」

矢矧「……あの」

提督 「ほら」

提督はそう言うのと机の上のヌイグルミを矢矧に差し出した。

矢矧 「気づいていたの？」

提督 「愛宕がいて言い出すのが恥ずかしかったんだろ？」

矢矧 「うん……」 ボフ

矢矧 「…… ねえ」

提督 「ん？」

矢矧 「おかしいと思わない？ 私がヌイグルミなんてイメージに合わないって」

提督 「お前も女だろ。そういうのをあまり気にすると、いろいろ損するぞ」

矢矧 「そう…… ありがとう」

提督 「ああ」

矢矧 「あ、あのさ」

提督 「秘密にして欲しいなら誰にもヌイグルミの事は言わないぞ」

矢矧 「あ、それも…… 今はそうして欲しいけど。そうじゃなくて」

提督 「なんだ？」

矢矧 「私のヌイグルミ見てどう思った？」

提督 「ん？ そのヌイグルミに対する単純な感想か？」

矢矧「そう」

提督「そうだな……あくまで個人的意見だが、ライオンより虎のヌイグルミの方がお前に合っている気がするな」

矢矧「そ、そう!? 実は私もこれ選ぶ時どちらにしようか迷ったのよね」

提督「そうだったのか。じゃあ買った後に後悔したのか?」

矢矧「少しね。これも可愛いから別にそこまで気にはならなかったんだけど……」

提督「そうか」

矢矧「大佐が一緒だったら虎の方を買ってたのにな」

提督「そうかもしれないな」

矢矧「そう。一緒だったらなあ……」

提督「ん……」

矢矧「……」ジー

提督「今度一緒に行くか。時間があればな」

矢矧「! ほ、本当!」

提督「今回は偶然お前の趣味に合った答をしただけかもしれないぞ?」

矢矧「そういうのは気にしないで! 一緒に来て選んでもらう事に意味があるのよ

!」

提督「まあ一人だと悩む事も多いからな」

矢矧「そうよ！ …… ね？ 本当に一緒に来てくれるの？」

提督「自分から言った事は守る」

矢矧「そ、そう！ 期待してるわね！ 都合がいい時間分かったら連絡してね！」

提督「分かった」

矢矧「ありがとう！ 失礼するわ」

ボタン

提督「ヌイグルミか……」（俺は映画の登場人物とかの人形が好きだが、そういうのはやっぱりウケないんだろうな）

く廊下

愛宕（ふふふ♪ まさか5回で出せちゃうなんて今日は本当に良い日ね♪ 大佐喜んでくれるかしら♪）

矢矧「♪」テクテク

愛宕「あ、矢矧ちゃん用事はもう……」

矢矧「♪♪」

愛宕（気付かないで行っちゃった……。あんなにニコニコした矢矧ちゃん初めて見

るわね……)

愛宕「何か良い事でもあったのかしら？」クビカシゲ

第13話 「便り」

時雨 「大佐。大佐宛てにお便りが来てるよ」

提督 「本部からか？」

時雨 「ううん違うみたい。これは……ごめん。よく分からないな」

提督 「よく分からない？ どういうことだ？」

提督 「見せてみろ」

時雨 「うん。はい」

提督 「ふむ……」

時雨 「何処から？」

提督 「実家だ」

時雨 「実家？」

提督 「俺が生まれた家、故郷だ」

時雨 「へえ、大佐にもそういうのがあるんだ」

提督 「それはどういう意味だ？」

時雨 「なんか大佐ってずっと基地に居るイメージだったから、生まれたのも基地なの

かなって思ってた」

提督 「俺は生まれも育ちも鎮守府だと言いたいのか……」

時雨 「似合ってるよ？」

提督 「悪いが、欠片微塵も嬉しくない」

時雨 「え？ そうなの？」

提督 「仮に基地で生まれたとする」

時雨 「うん」

提督 「生まれたての俺はどうやって基地で生きて行けばいいんだ？」

時雨 「資材庫があるから大丈夫だよ」

提督 「俺は人間だ」

時雨 「あ、そっか。大佐は人間だったね」

提督 「なあ、俺はそんなに人間らしくないか？」

時雨 「以前と比べれば、大分人間らしいと思うよ」

提督 「そうか。そいつは安心した」

時雨 「資材を食べることができないからね」

提督 「お前の判断基準はそこか？ 俺はそんな食べれそうな顔をしているのか」

時雨 「大佐だったらいける気がするな」

提督「割とショックなものだな……」

時雨「どうしたの？」

提督「もういい。何でもない。取り敢えず実家からの便りということだ」

時雨「大佐が生まれた所かあ……。ねえ、どんなところ？」

提督「ん？ 田舎だな。山と川がある。後は殆ど家の周りは田んぼと畑だった」

時雨「ふーん……」

提督「お前、俺が言った光景を想像できてないだろ」

時雨「あはは。実はさっぱり」

時雨「写真とかないの？」

提督「写真か……。」ゴソゴソ

提督「あつた。昔の写真だが、ほら背景に山とか田んぼが写ってるだろ」

時雨「……。ねえ、この小さい子は誰？」

提督「俺だ」

時雨「え!？」

驚いた時雨は写真と提督を何回も見比べた。

提督「どうしたんだ」

時雨「え、だってこれ全然似てないよ？」

提督「それは子供の頃だからな」

時雨「え、大佐って生まれた時からその姿じやなかったの？」

提督「俺は人間だと言っているだろう……」ガク

時雨「へえ、そっかあ。大佐も昔は小さかったんだ」

提督「頼む。納得してくれ。俺の人間としての尊厳を認めてくれ」

時雨「な、なんでそんなに必死なの？」アセアセ

提督「今まで生きてきてこれほどまでに精神的に叩きのめされたのは初めてだからだ」

時雨「そ、そんなに僕酷い事言った？」

提督「他の人には言うなよ。ここには俺以外の人間はいないけどな」

時雨「うん。分かった。本当にごめんね？」

提督「分かればいい」

時雨「でも大佐が小さい頃の写真かあ……。ねえ、これ貰っていいかな？」

提督「親が焼き増しているはずだから構わないが……。そんなのが欲しいのか？」

時雨「うん。何だかとても珍しい物を見つけた気がするからね」

提督「返せ。動機が不純だ。俺は天然記念物か何かか」

時雨「わ、わ。ごめん！ 大事にするからちようだい」

提督「大事にするかどうかはお前に任せるが、少なくとも珍獣扱いはやめろよ？」

時雨「うん。分かった、ありがとう。大事にするね♪」

提督「本当に頼むぞ」

時雨「さてとそれじゃ……あ。うーん……」ゴソゴソ

提督「どうした？」

時雨「この服ポケットがないからしまえないんだ。ま、いいや此処に入れとこ
そういうと時雨はおもむろに提督の写真を胸元に入れ始めた。

提督「おい」

時雨「ん……何？」

提督「お前それ絶対に人前で出すなよ」

時雨「え？ 他の人に見せちゃいけないの？」

提督「そうじゃない。そこに入れてるときは人前で出すなと言ってるんだ」

時雨「……よく分からないけど分かったよ。手に持ってたらいんだよね？」

提督「そうだ」

時雨「じゃ、今はこの後直ぐに部屋に戻るからここに入れておくよ」

提督「そうか……くれぐれも慎重にな」

時雨「さつきからどうしたの？ 元気がないね」

提督「少し疲れてるからな。悪いが、仮眠をとるから用がないならもう出て行くように」

時雨「うん、分かった。またね、大佐」フリフリ
ボタン

提督「……」

提督「疲れた……」ガク

第14話 「居眠り」

神通 「大佐、大佐……。起きてください」

提督 「ん……」

神通 「あ、起きました？ 大佐」

提督 「ああ、神通か」

神通 「お休みのところ申し訳ありません。執務の仕事がまだ残ってましたので……」

提督 「む、そうか。寝過ごしてしまっていたか」

神通 「お体の具合良くないのですか？」

提督 「いや、体は大丈夫だ。ただちよつと精神的にな……」

神通 「？ 何かあつたのですか？」

提督 「大したことじゃない。時雨は見たか？」

神通 「時雨ちゃんですか？ いえ、見てませんけど……」

提督 「言っていた通り、すぐに部屋に戻ったみたいだな」

提督 「そうか。ならいいんだ」

神通 「？」

首を傾げて疑問を呈してゐる神通を見て提督はあることに気付いた。

提督「……神通」

神通「はい？」

提督「確か、今日の秘書艦はお前じゃなくて那珂じゃなかったか？」

神通「あ……」

神通はそう言われると困った顔をして口ごもった。

提督「何かあつたのか？」

神通「その……那珂は、玩具屋に行つてゐるようでした……」

提督「玩具屋？ お前らしくもないな、見逃したのか」

神通「いえ、いないと気付いた時には書置きが置いてありまして……」

『トップアイドルになる為に必要な物が玩具屋にあるので行つてきます！』

提督「なんだこれは……」

神通「すいません。私にもあの子が何を考へてゐるの全く……」

提督「全く……戻つてきたら連れて来い。罰を与えないとな」

神通「それは、私にお任せ下さいませんか？」

提督「ん？ 個人的に行うということか？ それでは軍規の意味がないんだがな」

神通「妹がしでかした事ですから」ニコ

眩しい程の笑顔だが、その裏には凄まじい怒りが渦巻いているのを提督は感じ取った。

妹に煙に巻かれた事が余程腹に据えかねているようだ。

提督「今回だけだぞ」

神通「ありがとうございます」ペコリ

提督「ああ、それと」

神通「はい？」

提督「神通、お前はもう部屋に戻っていいぞ。元々お前は今日は秘書艦じゃなかつたからな」

神通「……大佐、差し出がましい事を承知でお尋ねいたしますが」

提督「ん？」

神通「大佐は残りの仕事を一人で処理されるおつもりですか？」

提督「秘書艦がないのだから仕方ないだろう」

神通「私、お手伝い致しますよ？」

提督「いや、だからお前は今日は——」

神通「お手伝いさせていただきますい」ズイ

提督「む……」

神通「そじゃないと、大佐に申し訳がなさすぎて……那珂をどうにかしてしてしま
い
そうです……」

神通の背後に黒いナニカを提督を見た気がした。

そしてそれを見た瞬間、提督は即座に決断した。

提督「分かった。すまないが、頼めるか？」

神通「よろこんで」ニコ

——数時間後

提督「ん……もう少しというところだな」

神通「これを一人でなんて……これからはやめて下さいね？」

提督「悪い癖だ。加賀にも前に同じことを言われた」

神通「なら尚更じゃないですか。ダメですよ？」

提督「善処する」

神通「た い さ ？」

提督「分かった。しない。だから加賀には内緒にしておいてくれ」

神通「ふふ、分かりました。お互いに約束ですね」

提督「そうだな」

——それから更に数分後

提督「そういえば、那珂の奴はアイドルどうこうは今更だから置いておくとして、玩具屋なんかは何を買いに行つたんだ？」

神通「そういえばそうすね……。マイク……。でしようか」

提督「なるほど。それはあるかもしれないな。性能はあまりよくなくても玩具のようなマイクなら安いかも知れないしな」

神通「そうですね」

提督「ああ」

神通「……あの、私からも訊いていいですか？」

提督「なんだ？」

神通「もし教えて頂けたらで構わないのですが、昼間、大佐が居眠りをしてしまうほど疲れていたのが何故なのかちよつと気になつて……」

提督「ああ、その事か」

提督「時雨と実家から来た頼りの事を話していたんだつたか」

神通「実家からのお便り……。ですか？」

提督「ん、まあその事で時雨と話してたんだが、あいつのペースに飲まれて疲労して

しまったという感じだ」

神通「そうだったんですか。ふふ、時雨ちやんたら」

提督「あいつも大人しそうに見えてなかなかマイペースだからな」

神通「そうですね。あの、ところでさっきのお便り事なんですが、実家というと大佐がお生まれになった家からのお便りという事ですよ？」

提督「そうだ。流石にお前はそれくらいは分かるよな」

神通「その辺りの常識は個々にバラつきがあるみたいですね……困らせてしまってますいません」

提督「それはお前が謝る事じゃないだろ。大丈夫だ、気にしてない」

神通「恐縮です。あの……それで」

提督「ん？」

神通「実家からお便りという大佐のご家族に何かあったのですか？」

そこに来て提督は初めて表情を少し曇らせた。

何やら言い難いそうだ。

提督「別に家族に不幸があったとかじゃないんだが……」

神通「？」

提督「見合いの話だった」

第15話 「ストップ」

コンコン

金剛 「金剛デス」

提督 「金剛？ 入れ」

ガチャ

金剛 「失礼するネ」

金剛 「……」

提督 「なんだ？ こんな時間に」

神通 「？ 金剛さん？」

金剛 「スウ……ちよつとウエー……イト！」

提督 「……」

神通 「……」

神通（ちゃんとマナーを守って入ってきたこともあつて、唐突な訴えとの差がシユー

ルね……)

提督「うるさいぞ金剛。いきなりなんなんだ」

金剛「大佐、さつきワタシ聞いたヨ。ヒアリングミスじゃなかったら確かに『オミアイ』って言ってたネ！」

提督「……お前、今は電探系何も着けていないよな？ 一体どうやって知ったんだ」

金剛「Love は盲目ナノヨ！」

神通「使い方を致命的に間違ってますよ。金剛さん」

提督「それで何が言いたいんだ。まあ、大体分かるが」

金剛「大佐！ 大佐はワタシ達と恋人になるって約束したネ！ なのに他のレディとケツコンなんてワタシ許さないヨ！」

提督「ああ、そのことなら——」

金剛「大佐ア！」ズイ

金剛が凄い勢いで体ごと机に乗り出してきた。

提督「近いぞ。あと無礼だ」

神通（わわ……後ろから丸見え……）カア

金剛「……」シユル…パサ… スル

提督「おい」

神通「こ、金剛さん!? 何を!」

金剛「もうこうなったらキセイジツを作るしかないネ!」

提督「やめろ。そこで手を止めるんだ。それ以上脱いだら約束は反古にするぞ」

金剛「No! その約束が今 danger じゃないデスカ!」

神通「金剛さん聞いて、大佐は——」

金剛「……っ」

金剛は神通の言葉が耳に入っているのか、問答無用で提督の手を取ると自分の片胸に押し付けた。

ムニユウ

提督「ぬ……」

神通「え……」カオマツカ

金剛「ふふ……これでワンステップ踏み込んでしまったネ。もうここまでキタラ……」

そう言うのと金剛は体の上下を覆ってる最後の一枚に手を掛けた。

加賀「そこまでです」

全員がドアの前に振り向くと加賀が臨戦態勢で弓を構えていた。

金剛「加賀……邪魔しちゃダメよ。もうワタシ引き返せないワ」

加賀「金剛さん落ち着いてください。大佐が私達との約束を無碍にする人だと思いませんか？」

金剛「でも大佐のホームからお見合いの話がきたネ！ これはもう余裕ブツてられないヨ！」

加賀「ですから落ち着きなさい。大佐は今しがたその事について説明をしようとしていましたよ」

金剛「言い訳なんて聞きたくナイヨ……」グス

神通「言い訳なんかじゃないですよ！ 私、大佐の口から直接そうじゃないことを聞きましたから！」

金剛「え……」

加賀「金剛……手を放しなさい」

提督「金剛、お前の愛情の深さは問題だな。だが、そこまで想ってくれる事に関しては礼を言おう」

提督「だから離すんだ」

金剛「大佐……」

暴走によって正気を欠いていた金剛の瞳に徐々に理性の光が戻ってきた。

そして――。

金剛「……っ！」

自分が何をしているのか改めて認識した混合は顔を真っ赤にして慌てて手を離して半裸の体を隠すようにその場にうずくまった。

提督「ふう……」

提督はため息と共に席を立ち、静かに金剛の後ろに回ると優しく自分の上着を被せた。

金剛「あ……」

羞恥と後悔で濡れた瞳が不安げに提督を見上げた。

提督「落ち着いたか？　なら、後ろを向いているから服装を正せ。神通手伝ってやってくれ」

神通「あ、はい」

提督「加賀」

加賀「はい」

提督「ご苦労だった。ついでに頼まれて欲しいんだが、できればお前も部屋に残って欲しい。話がある」

加賀「分かりました」

——数分後

提督 「さて、始めるか。だが、その前に……………」

金剛 「ゴメンナサイ」

提督 「これからは人の話をちゃんと聞くように」

金剛 「ハイ……………」 シュン

提督 「ならもういい。これ以上は追求しない」

金剛 「え、もういいのデスカ？」

提督 「できれば俺も忘れたいからな」

加賀 「忘れてもらわなければ困ります」

提督 「おい何故こつちに矢を向ける？ 何を目くじら立ててる？」

神通 (感情的だったとはいえ過激だった金剛さんのアプローチに焦ったのね)

加賀 「……………まあいいです。ではお話を」

金剛 「くす……………アハハ。大佐、改めて sorry ヨ。それに加賀、本当に本当に

thank you ネ」

加賀 「……………分かればいいんです」

提督 「そうだな。もうしななければいい」

提督 「さて、お前たちが気にしてたこのお見合いの話だが、実は結構前から何回も来

ている」

神通「大佐はいつもそれを断ってたんですよね？」

提督「そうだ。ま、この年だ。親の気持ちも分からないでもないが、こういう仕事を
してるとなかなか受ける気にもなれなくてな」

金剛「それじゃあ今回モ……」

提督「断るつもりだった」

金剛「そうだったんデスカ。はあ……安心しまシタ。大佐ホントにゴメンネ？」

提督「もういいと言ってるだろう」

加賀「まあ私は信じていました」

金剛「エ？」

神通「？」

提督「どうした金剛」

金剛「ワタシがこの事知ったのはちょうど大佐の部屋の前を彩雲が flying
してるのを見つけたからナノヨ」

提督「……」

神通「……」

金剛「……」

加賀「……それでは私はこれで」

提督「神通、金剛」

金剛「yeah!」 神通「はい」

提督「全力で捕獲、連行してこい」

加賀「くっ……!!」 ダッ

金剛「了解! ワタシの全力見せてあげるネ!」 ジャキン

神通「那珂の前の前哨戦ですね♪」 ポキポキ

く 提督が一人だけになった執務室

提督「……」(まあ今日も平和でなによりだ)

第16話 「ゲーム」

提督「那珂」

那珂「なあに？ 大佐」

提督「それは何だ？」

那珂「人〇ゲームだよ！」

提督「お前が玩具屋に買いに行っていた物はそれだったのか」

那珂「うん！ そうだよ！」

提督「それがトップアイドルになる為に必要だということか」

那珂「当然！」

提督「因みに訊くが、何故だ？」

那珂「トップアイドルになるためにはまず人生でもトップにならないとね！」

提督「それは玩具だぞ？」

那珂「運も実力の内なんだよ！」

提督（川内型はどうしてこう……神通が不憫だな）

那珂「どうしたの？ 急に眉間に手を当てちゃって」

提督「何でもない。それで、どうしてそれを此処に持ってきた」

那珂「大佐と一緒に遊ぶ為に決まってるじゃん！」

提督「なに当たり前のような顔で言ってるんだ。俺は今仕事 중이다。他に時間がある奴とやれ」

那珂「ええー……付き合い悪いなあ」

提督「神通に言いつけるぞ」

那珂「暇な子探してくるね！ 失礼しました！」
バタン

——休憩時間

ガチャ

卯月「大佐！ 卯月と一緒にゲームやるびよん！」

卷雲「仕方ありませんね。付き合ってあげますか」

那珂「大佐、暇な子見つけてきたよ！」

提督「……なんで俺も一緒にやる前提なんだ」ガク

——ゲーム開始

卯月「やったびよん！ 株を購入して一儲けびよん！」

巻雲「さつきから紙一重で暴落避けてますね。さすが卯月さんです」

那珂「大佐、物件買わないの？」

提督「結婚もしない内から普通は買わないだろ。金もない」

——数分後

卯月「ぷつぷくぷく♪ 宝クジがあたったびよん！ これが卯月の実力です！ えっへん！」

巻雲「ここは無難に自動車保険に加入です」

那珂「ぶ、プログラマー!? 那珂ちゃんはアイドルになりたいのにな！」

提督「そろそろ物件の購入を考えるか……」

——更に数分後

卯月「大佐と結婚して子供ができたびよん！ 大佐あく卯月の事大切にしてねえ♪」

提督「待て。俺はプレイヤーだぞ。勝手に人を結婚相手として想定するな」

巻雲「卯月さん結婚してすぐに子供ができるなんて……／＼／＼」カア

那珂「那珂ちゃんはハイキングなんかに行きたくないのにな！」ジタバタ

——ゲーム終盤

卯月「やったびよん！大金持ち♪」

卷雲「あつさりど当然の様に最後の賭けにも買っちゃうなんて！ あ、卷雲はパスです」

提督「ついに子供が一人もできなかつたな……」

那珂「開拓地なんていやああああ！」

——ゲーム終了

提督「普通に卯月がトップで終わったな」

卯月「皆、ゲームで卯月に勝とうなんて100年早いびよん♪」

卷雲「まずまずの結果です。でももうちよつと欲張つてもよかつたかなあ」

那珂「那珂ちゃんだけ知らない土地で終わりなの!？」

提督「ソロライブだな。よかつたじゃないか」

那珂「そんなの全然嬉しくないよ！」

——休憩時間終了

卯月「楽しかったびよん♪ またやりたいなあ〜♪」

巻雲「次はもつと上を目指しますよ！」

那珂「もう暫くはやりたくないよ……ぐす」

ボタン

——再び仕事中

加賀「大佐」

提督「ん」

加賀「卯月と子供を作ったそうですね」

ボキ ↑ペン先が折れた

提督「……誤解を招く表現はやめろ」

加賀「ああ、種n——」

提督「それもやめろ。例えばゲームでもそれを言われるとキツイ」

加賀「上手く作るコツとかもあるみたいですね」

提督「……」（下手だったからできなかつたとも言っただけか）

加賀「……私はいつでもいいんですけどね」ボソ

提督「耳元で囁くな。お前のそれは洒落にならない迫力がある」

加賀「……いつでもいいのは本当なんですけどね」ボソ
提督「仕事しろ」

第17話 「子犬」

矢矧「大佐、例の件の予定はどうかしら。時間とれそう？」

提督「ああ。あのヌイグルミの件か。そうだな……」

提督は傍らに合った予定表をパラパラめくって確かめた。

提督「この日でどうだ？ 午後が空いてる」

矢矧「いいわよ。じゃ、楽しみにしてるから」
バタン

矢矧が通り過ぎた廊下の影から2つの影が除いていた。

名取「羽黒さん見た？」ヒョコ

羽黒「うん。見たよ、名取ちゃん」ヒョコ

名取「執務室から出てきましたよね」

羽黒「そうだね…… 矢矧さん凄くうれしそうな顔してた……」

名取「大佐と何かあったのかな…… あ」

羽黒「どうしたの？ 名取ちゃん」

名取「もしかして、ですけど……」

羽黒「な、何……？」ドキドキ

名取「大佐、結婚相手に矢矧さんを選んだのかも……」

羽黒「ええ!?! だ、だって先ずは恋人からのはずでしょ!?! なのにいきなり結婚だなんて……」

名取「矢矧さんが提督が心に決めた相手なのかもしれない」

羽黒「そ、そんなぁ…… 私、私がつと早く告白していれば……」ジワ

名取「ま、まだそうと決まったわけじゃないので……」アセアセ

羽黒「でも、あの幸せそうな顔…… 絶対そうだよ」グス

名取「た、確かめてみましょう!」

羽黒「え? 確かめるって大佐に直接……?」

名取「そうです! それしかないですよ!」

羽黒「でも…… 私、怖い……」

名取「私も一緒に行きますから…… ね?」

羽黒「うん…… ありがとう名取ちゃん」

ガチャ

提督「何を部屋の前で騒いでるんだ」

羽黒「び、びいいいい!」

名取「ひやあああああ!?!」

提督の目の前に居たのは名取と羽黒だった。

2人とも何故か半泣きで、提督の予想外の出現に動揺して為す術もなく抱き合っていた。

恐怖に怯える捨てられた仔犬の様だった。

提督「2人とも落ち着け。取り敢えず部屋に入れ」

く執務室

提督「それで、何を2人して騒いでいたんだ」

名取「あ、あの……」

羽黒「た、大佐はもう矢矧ちゃんと結婚したんですか?」

提督「なに?」

羽黒「ひっ……ご、ごめんなさい。不躰な事聞いちゃって!」

名取「ちよ、ちよつと気になっただけなんです。だから怒らないでください!」

提督「待て。怒ったりしないから、まず俺の話をちゃんと聞け」

名取「は、はい……………」

羽黒「う……………ぐす……………はい」

提督「結論から言つて、俺は矢矧とは……………いや、現時点では誰とも結婚はしていない」

名取「ほ、本当ですか!?!」パア

羽黒「え……………?」

提督「結婚はしていないと言つたんだ、羽黒」

羽黒「う……………うえええん! 名取ちゃん良かったよおおお!」ダキッ

名取「ぐす……………そうですね。本当に良かったですね。羽黒さん」ナデナデ

提督「……………」(なんなんだこの空間は)

——数分後

提督「2人とも落ち着いたか?」

名取「ぐす……………お見苦しいところをおみせしました。すいません」

羽黒「私も……………ごめんなさい」

提督「ふう……………それで、落ち着いたところでお前たちは俺に用があるんだろう?」

羽黒「はい……………大佐」

提督「ああ」

羽黒「私と名取ちゃんを大佐の恋人にしてください！ 私達も結婚相手の候補になりたいです！」

名取「え、ええ!?! わ、私も!?!」

羽黒「名取ちゃん私だけ大佐の恋人になっちゃっていいの?」

名取「わ、私は……」

羽黒「恋人になつたらいつも背中を見るだけじゃなくて他にもいろいろできるよ?」

提督「いろいろって何だ。俺はいつも名取に背中を見られていたのか?」

名取「!」

羽黒「私恋人になるなら名取ちゃんと一緒にいいよ……ね? 一緒になる?」

名取「わ、私は……なりたいです! 大佐の恋人に!」

羽黒「名取ちゃん……!」
「パア」

提督「2人とも恋人に慣れる前提で話を進めてるが、俺の意思は無視か?」

名取「こ、断わつたりしてるんですか?」
「ウル」

羽黒「そ、そう……なの……?」
「ジワア」

提督「いや……してない。2人ともこれからよろしく頼む」

提督（加賀とも金剛とも違う圧力を感じた。これは断れない）

羽黒 「つ、大佐あ！ ありがとうございます！」 ダキッ
名取 「わ、私も……！ ありがとうございます、大佐！」 ダキッ
提督 「待て。軽巡と重巡の同時突撃は…… うぐっ」

第18話 「海」 R—15

「良い天気ですね大佐」

「そうだな」

「……」

「でも、こう陽射しが強いと日焼けにも気を付けないといけませんね」

「そうだな」

「……」

「先ほどから2人ともどうしたのですか？」

傍から見ると確かに妙な状況だった。

加賀が言う通り天気は晴天。

燦爛んと眩しくも暖かな日差しが降り注ぎ、絶好の海水浴日和と言えた。

だが肝心の遊びに来た提督は加賀の方をなるべく見ようとはせず、足柄に至っては水着を見られるのが恥ずかしいのか岩陰から出て来ないという有様だった。

「足柄さんとはかく、大佐。何故こつちを見ようとしないのです」

「お前の水着の所為だ」

「私の水着が何か？」

加賀が着ている水着は、俗に言うスリングショットという種類の物だった。

肌の露出の度合いはビキニに匹敵するが、その見た目の刺激の強さはビキニのそれを超えるものがある。

特にその水着を着た者を真横から見た時の肌の無防備さは、それを見た者の劣情を誘うに十分すぎる程の色気があった。

「その水着はなんだ。ある意味、大会の時にイムヤが着ていたやつを超えているぞ」

「ただのスリングショットではつまらないので、Vストリングにしてみました……お気に召しませんでしたか？」

「そういう問題じゃない。あと、わざと横に動いて揺れるのを見せるな」

「ふふ、これを選んだ甲斐がありました」

加賀が自分の水着姿を十分に提督に見せつけている頃、一方足柄はまだ岩陰で自分の水着姿を見られる恥ずかしさを克服できずにいた。

「……」 チラ

＼ドウデスカ？ タイサ／ ＼ヤメロ、ヒツクナ／

「……」 (な、なによアレ！ 殆ど裸じゃない！ あんなのじゃ、わたしの水着なんて

……。いや、そうじゃなかったとしても恥ずかしくて……)

モニユ

「!?」

「足柄さん」

不意に背後から加賀に胸を揉まれ、足柄は驚きと羞恥の悲鳴をあげる。

「きや、きやああああ！ か、加賀さん!? ちよ、やだつ、やめてー!」

「岩陰にずっと隠れて何をしているのですか？ 大佐があなたの水着を待っていますよ

?」モニユモニユ

「わ、分かったからむ、むね……あ……はあつ。揉むの……やめてえー!」ピクン

／＼イヤー!／＼ソノワリニハ、カラダハシヨウジキデスガ?／

「……」(さつきから足柄の悲鳴が聞こえるが、加賀のせいだろう。まあ大丈夫か)

提督が砂浜にパラソルとチェアを設置していると、後ろから加賀が足柄を連れて戻って来た。

「お待ちせしました。大佐、足柄さんを連れてきました」

「ん、ああ。……ん?」

やっと姿を表した足柄を見て提督は僅かに眉を潜めた。

足柄は何故か全身を真っ赤に火照らせ、息も切れ切れとといった感じだ。髪もところどころ解れて、心なしか水着も少し乱れているように見える。

本人は気づいてないようだが、何とも言えない色香を放っていた。

「加賀……」

「なんででしょう?」

「お前、足柄に何かしたか?」

「彼女の魅力を引き出す手伝いをしただけです?」

「うう……加賀さんの馬鹿あ」グス

「足柄、お前大丈夫か?」

「っ……大佐あ!」ダキッ

「ぐっ……」(あの足柄が自分から……。加賀、お前は本当にこいつに何をしたんだ)

涙目の足柄に抱き付かれてその膂力に負けない様に全身を緊張させる提督。

そんな二人を見ながら加賀は自分の行いによる結果に満足げに小さく笑っていた。

「やりました」ニヤリ

——数分後

「さて、オイルを塗って貰えますか?」

「塗らなきやだめか？」

チエアに寝そべって準備OKといった様子の加賀を前に、提督はまだ乗り気ではなさそうに逡巡していた。

「恋人同士なんですよ？　お願いします」

「わ、わたしは別に……」

加賀の横では同じ格好をして寝ている足柄が恥ずかしそうにしていた。

「足柄さん？」

「ひっ!?　ぬ、塗って、大佐……」　カア

「……分かった」

完全に加賀の支配下に置かれた足柄を哀れに思いながら、やがて提督は渋々といった様子で加賀達の要望を受け入れた。

「それでは私からお願いします。……ん」　ピク

「……」（改めてこいつの姿は裸と変わらないな。水着の面積が小さい上に寝ることによって体が水平になるから水着の構造上、浮いて……丸見えだ）

「塗り易いでしょう？　塗れるところは全部お願いしますね」

「全部……か？」

「はい」

「前は自分で塗れよ？」

「仕方ありませんね」

「……」 ヌリヌリ

「ん……そう、そこも。……あ、下もですよ？」

「……」 ヌリ、ムニ

「んん……大佐、上手……」

提督は加賀の下半身に回ると、水着をズラして彼女の尻全体にオイルを塗った。

張りのある臀部を縫っている時に偶に力を入れる方向を誤って尻を割り引いてしまったりもしたが、そこは邪念を頭から払拭する事によつて提督は何とか作業を続けた。

対して加賀も、その時にナニカを見られた事には明らかに気付いていた様に思えたが、特に気にした様子もなく、僅かに頬を紅潮させながらも涼しい顔をしていた。

「な、何あれ……凄いい」 ドキドキ

「……終わつたぞ」

「そう、みたいですね。ありがとうございます」

「……」 ゲツソリ

「どうでした？」

「お前とは二度と海に行きたくないな」

「では、今度は床にいつs」

「また機会があれば行こう」

「次は足柄か……」

「お願い……ひつ」

背中中に手が触れただけで小さな悲鳴をあげた足柄に提督は努めて気を遣うように声を掛ける。

「大丈夫か？」

「んん……大丈夫……。慣れて……ない、だけ……だから」

「……」ヌリヌリ

「あ、ん……ねえ、大佐」

「なんだ？」ヌリヌリ

「なんか加賀さんの時と違つ……て、塗るのが速くない？」

足柄の言つた通り、加賀の時と違つて若干自分は塗るペースが速い、と言うか、スムーズな気がした。

提督はその疑問に明らかに加賀の時とは違って余裕のある様子で、オイルを塗りながら答えた。

「お前の水着は普通だからな、助かる。加賀の後という事もあるが」ヌリヌリ

「そう……」ムツ

「……？」

「……ねえ」

「ん？」

「わたしも、その……。塗ってよ、下も……」

「なに？」

「ほう」キラッ

寝そべっていた加賀が足柄の方を向いて、その大胆なお願いに目を細めて瞳を輝かせ
る。

当然何故唐突に彼女がそんな事を言い出したのか、加賀はちゃんと理解していた。

「足柄、お前の水着は普通だから下は……」

「ずらして……いいから……」カァァ

自分の言動に羞恥を覚えて顔を伏せながらも、あくまでその意思を変えない足柄に提督は仕方なく応える事にした。

彼は傍にいた加賀に声を掛ける。

「……加賀」

「はい？」

「見ないでくれるか？」

「仕方ありませんね」クス

それは一体提督と足柄、誰に対する気遣いだったのか。

定かではなかったが加賀は提督の頼みに面白そうに小さく笑って頷くと再び寝そべって軽く仮眠を取り始めた。

「ふう……やるぞ」

「うん……」

グイ

提督は足柄の水着をズラすと再びオイルを塗り始めた。

加賀と違つて足柄は普通のワンピースタイプの水着だった為、ズラすのに多少力が要り、加えて布地が隠している面積が大きかったので、塗っている間足柄は長い時間彼に尻の殆どを見られる形となった。

足の付け根も当然視界に入り、普段目にするとは事とは絶対にならない所も完全に丸見えの状

態だ。

提督が下心からそこを注視する事など到底考えられなかったが、それでも足柄は自分の恥ずかしい姿が彼の目に触れられている事に対して言葉にできない背徳的な快感を無意識に感じていた。

「あつ……」（見られてる……。絶対に見えてるよね……!）

「……」ヌリヌリ、ムニムニ

グニツ

「……っ、ふあ!」ピクン

提督の手が臀部の割れ目に触れた時だった。

加賀の時と同様、そこを塗りこむ際に誤って僅かに力が入ってしまった、彼女に負けないくらい張りのある尻を割り開いてしまった。

開いてしまったその場所には加賀の時以上の過激な光景が広がっていたが、提督はその時も心を氷にして邪念を払い、見なかったことにして作業を続けた。

一方足柄はその事態を一瞬で把握してそれを理解した瞬間、全身を電流のような衝撃が走り抜けるのを感じるであった。

「はあ……はあつ、んんっ!」（あれ？ 今……？）ブルツ

「……終わつたぞ」

それから数分後、提督は加賀に続いて足柄のオイル塗りもなんとか終えた。

「はあ、はあ……。ありがとう……。グテー」

「立てるか？」

何とも言えない色香を全身に香りだたせながら、足柄は口の端に僅かに涎が垂れている事にも気づかない程全身から力が抜けているようだった。

心配そうに声を掛ける提督に、足柄は力なく返す。

「ごめん。ちよつと、力……。今入らない……。わ」

「そうか奇遇だな。俺も精魂果てたところだ」クタ

「え？　ちよつ、大佐大丈夫？」

「少しやすめば大丈夫だ。……加賀、足柄、悪いが俺は少し寝るぞ。先に二人で遊んでくれ」

グツタリした提督を見て薄く微笑みながら加賀は、今日何度目の言葉を言った。

「仕方ありませんね。後で必ず来てくださいよ？」

「ああ」

「じゃあ足柄さん行きましようか？」

「え？　いや、わたしもちよつと力が……」

「大丈夫です。抱いて行つてあげますから」ダキ

「えっ、ちよつと、きやつ」

力が抜けきつた身体を容易く加賀に抱き上げられて、足柄は驚きの声をあげる。

動揺しながらも上手く抵抗もできずに慌てるばかりの彼女を見ながら、加賀は愛おしい人形でも手にいれたかのように、嬉しそうに顔を紅潮させながら言った。

「足柄さん、貴女は可愛い人ですね。ちよつと癖になつてしまひそうです」

「お、下ろして！ 恥ずかしつ、自分で歩くからあ！」ジタバタ

「暴れないで下さい」ギョッ

（足柄……俺の分も頑張つてくれ）

提督は心の中で静かに足柄の冥福を祈つた。

第19話 「トレーニング」

那智「大佐、曙」

提督「フツフツ…… おお、那智」

曙「那智さんおはよう」

那智「朝練か？ 精が出るな」

提督「一応毎日の日課だからな」

曙「ふふー、大佐やるじゃない。最近はわたしのペースに着いてこれるようになったわね」

那智「曙の？ 駆逐艦のペースと一緒にとは凄いいじゃないか」

提督「毎日こいつと一緒に走った成果だな」

那智「毎日一緒？」

曙「そうよ。いつからか一緒に走り始めたのかは覚えてないけど」

那智「…… 曙、大佐。これからは私も一緒にさせてもらってもいいだろうか？」

曙「那智さんも？ そうね…… 大佐とわたしに着いて来れたらいいわよ！」

那智「ふふ、重巡と侮るなよ？ これでも他の仲間たちの中では普段から運動してい

る方だからな。体力は自信がある」

提督（重巡が駆逐艦に対して能力差を保証する様は何か新鮮だな……………）

曙「言うじゃない？ それじゃ大佐、那智さん行くわよ！」

提督「おい、あまりペースをあげると……………」

——数十分後

提督「こう……………ゼエ……………ハア……………なる……………」グテー

那智「ハア……………ハア……………つぐ……………ふう……………」グツタリ

曙「ごめん二人とも……………調子に乗り過ぎちゃった……………」

提督「少し……………休憩だな。那智、大丈夫か？」

那智「流石に……………息があがって……………動けないな。だから……………休憩には賛成だ」

曙「あ、わたし濡らしたタオルと飲み物持ってくるわね」

提督「頼む、助かる」

曙「うん。待ってて」タタッ

那智「大佐は……………いつもこんなペースで走ってるのか？」

提督「いや、流石にあればはない。俺だってほら、こんな状態だ」

那智「そうか……ふふ。駆逐艦は凄いな」

提督「そのペースに俺みたいに練習もしないでここまで着いてこられたお前もなかなかのものだと思うぞ」

那智「ふ……煽てるな。お返しは何もできないぞ。少なくとも今の状態では……な」

提督「別にそんなの望んでない。素直に賛辞を受けろ」

那智「そうか……ありがとう」

提督「ああ。それでいい」

那智「ん。曙はまだ来ないみたいだな」パタパタ

提督「暑いかな？」

那智「ああ、流石に汗だくだ……悪いが後ろを向いていてくれないか？ 服を絞って汗を取りたい」

提督「分かった。俺もそうしよう」

ギュー、ポタポタ……

那智「大佐も凄い汗の量だな」

提督「ん？ そっちはもう絞り終わったのか？」

那智「あ、まだだ。振り向かないでくれ。大佐の汗の量に驚いて見入っていた」

提督「こんなので見入られてもな。まあ、お前も早く絞れ」

那智「ああ」

那智（大佐の背中広いな……流石に男というところか。こんな逞しい背中を持つ男に、いつも私達は命を預ける意味も持つ指示を貰っているんだな……）

曙「お待たせ！ 持って来た……わ……よ」

提督「ん。ご苦労」↑半裸（服を着るところ）

那智「ポー……」↑提督の背中に見とれて服を着ることを忘れてる

曙「な……な……」

提督「曙？ どうした？」

曙「なにセクハラしてるのよ!? こんのクソ提督！」

提督「？ 一体なにを——ぶ」

バシン！と、塗れたタオルが提督の顔を直撃した。

第20話 「デート」

矢矧「大佐、こっちよ！」

提督の姿を見つけた矢矧が嬉しそうに手を振っている。

提督「早いな。約束の時間より早く来たつもりだったんだが」

矢矧「楽しみで仕方なかったの。つい、ね」

提督「そうか。待たせて悪かったな」

矢矧「気にしないでいいわよ。待っている間も楽しかったんだから」

提督「そうなのか？」

矢矧「ええ！ 私、大佐とこういう風に出かけるのって初めてだったから。待っている間いろいろ想像してて退屈しなかったわ」

提督「まあ、それならよかった。じゃあ行こうか」

矢矧「ええ。お願いするわね！」ギユ

提督「ん」

矢矧「あつ。ご、ごめんなさい私ったらつい浮かれちゃって断りもなく手を……」
カア

提督「……………」

ギユ

矢矧「あ……………」

提督「今日はデートのようなものだ。気にするな」

矢矧「デート……………う、うん！」　　パアア

く玩具屋ヌイグルミコーナー

提督「ヌイグルミと一口に言っても、いろいろあるものだな」

矢矧「そうよ。ねえ大佐だったらこの中でどのヌイグルミを選ぶ？」

提督「ヌイグルミの趣味がないから直感で選ぶしかないが……………ふむ、これか」

矢矧「お、大きい……………クマのヌイグルミね。60cmくらいはあるんじゃないかし

ら……………。重さは7kgも……………」

提督「持った時の重さが程良かったんでな」

矢矧「重さで決めるの？」

提督「見た目で決めるにはまだ経験が足りないみたいだ」

矢矧「ぷつ、ヌイグルミを重さで選ぶ人なんて初めて見たわ」

提督「まあ、強いて言うなら熊、だからか。強そうだろ？」

矢矧「……」（球磨『球磨を選ぶとはいいいセンスだクマ。やっぱり球磨の魅力には大佐も敵わないクマね♪』）

矢矧「クマよりもっといいのだったってあるわよ……」プクー

提督「ん、どうした？ 何故機嫌を損ねた？」

矢矧「別に…… あー、ここよ。トラのヌイグルミがある所」

提督「見事に虎だけが置いてあるな。こんなコーナー需要があるのか……」

矢矧「ここは特定の動物ごとに固めてコーナーが作られているよ。ほら提督が前に見つけてくれたライオンもあそこに……」

提督「なるほど」

矢矧「ね、どれが良いと思う？」キラキラ

提督「ふむ……」

提督（リアルなのは恐らく駄目だろうな。前見つけたライオンのデザインからして。ということは見えた目が女性…… いや、女の子ウケする可愛いのか）

提督「これ、はどうだ？」

矢矧「意外…… 大佐って私の好みが分かるの？」

提督「まあいろいろ思案した結果だ。女の子が好きそうなのを適当に吟味して選んだだけだが」

矢矧「お、女の子って……」カア

提督（照れてはいるが、嫌がってはなさそうだな）

提督「どうだ？ これ」

矢矧「うん…… そうね。せっかく選んでもらったんだからこれにするわ」

提督「そうか。良かった」

矢矧「それで、名前は何にする？」

提督「……なに？」

矢矧「名前よ。名前付けなきゃ可哀想でしょ？」

提督「すまん。ヌイグルミに名前を付けるという発想が全くなかったから少し驚いて

しまった」

提督（そういえば、俺が持っていた人形は最初から全部名前が付いていたな）

矢矧「大事に扱えば物にも魂が宿るっていうじゃない。だから名前って結構重要なのよ？」

提督「そうだな、名前か…… トラ、じゃ駄目だよな」

矢矧「ふふ、大佐らしいけどちよつと単純すぎかな」

提督「だよな。ふむ…… 虎…… 矢矧…… ブツブツ

矢矧（真剣に考えてくれてる♪）

提督「ふむ…… ヤツコ、とかどうだ？」

矢矧「！」

提督「その反応。悪くないと見た」

矢矧「ね、ねえ。どうしてその名前にしたの？」

提督「矢矧の『や』と虎の音読みの『こ』を繋げてみたんだ」

矢矧「なるほど…… ヤツコ…… うん！ いいわね！ 凄く良いと思うわ♪」

提督「そうか。気に入ってくれたか」

矢矧「ええ。とつても。これ早速買って来るわね！」

提督に選んでもらったヌイグルミを手にとってレジへと向かった矢矧の後姿は本当に嬉しそうに見えた。

提督はその姿を見ただけで付き合った甲斐があったと心から思った。

矢矧「大佐、今日は本当にありがとう！ 今日は来て良かったわ」

提督「ん？ もう終わりなのか？」

矢矧「え？ だって、ヌイグルミも買ったしもう目的は……」

提督「今日はデートのようなもの、だと言ったろ？ そこでお茶を飲んで、帰りは一緒に歩いて帰らないか？」

矢矧「…………」ポケー

提督「どうした？」

矢矧「大佐の言葉が本当に意外過ぎて………… それに嬉しくて涙が…………」ポロポロ

提督「大袈裟だな。俺もいろいろあって女性の扱いを学んでるんだぞ」

提督「で、どうだ？」

矢矧「………… つ、勿論！ 大賛成よ！」

提督「そうか。今日は楽しもう」ス

矢矧「ええ♪」ギユ

くお店の影

榛名「………… 榛名は………… 榛名は見ちゃいました！」

青葉「青葉のセリフ取らないで下さい！ にしてもこれは面白いところを見ちゃいま
した」

榛名「…………」ゴゴゴ

青葉「あ。大変なところ、だったかも…………」

第21話 「すれ違い」

金剛 「は、榛名」

榛名 「なんですか？ お姉様」

金剛 「何か嫌なコトでもあった？」

榛名 「どうしてそんな事を訊くんです？」 ニコ

金剛 「ひっ」 ビク

比叡 「お姉様！ ちょっと榛名！ お姉様が怖がつてるじゃない！」

榛名 「私がおかしかったですか？ 比叡お姉様」 ニコ

比叡 「だ、だから怖がらせちゃ……」

榛名 「榛名がおかしかったですか？」

比叡 「こ、こわがらs」

榛名 「だから具体的に私が何をしたらと言うんです？」 ニコ

比叡 「ひええええ……」 メソメソ

霧島 「ちよつと榛名、やりすぎよ」

榛名 「霧島まで…… どうしたというの？」

霧島「榛名、貴女さつきからなんで言葉に威圧を込めてるの？」

榛名「何を言ってるの？ 私はいつも通りだよ？」

霧島「じゃあ、その張り付いた笑顔をやめなさいよ」

榛名「…… チツ」

金剛「Nooooooooo! 比叡見まシタカ？ い、今…… 今、榛名が舌打ちしたヨ！」

比叡「な、何かの間違いじゃ……」

金剛「そ、そうネ。ワタシの可愛い妹が舌打ちなんてするワケ……」

榛名「お姉様達さつきから煩いですよ。いい年して何やってるんですか」

金剛「ああ、まるで霧島みたいだケド、それでもいいネ！ 榛名が舌打ちなんかするくらいナラ……」

榛名「…… チツ」

金剛「ノオオオオオ！」ブワツ

比叡「ひええええええ！」ブワツ

霧島「っ、いい加減にしなさいよ、榛名！」

榛名「霧島だって、煩いからいい加減にしてよ！」

霧島「…… キツ」

榛名「……………」ギロツ

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……………」

金剛「た、大佐……………」help me……………」グス

比叡「うわああああん！ 大佐あああ！」ブワア

榛名「つ、なんでそこで大佐が出てくるんですか！」

金剛「は、榛名……………」？」ビクツ

榛名「どうしてそんなにすんなり大佐の事を求められるんですか!？」

比叡「え、え？」ビクツ

榛名「榛名は……………」私は……………」今までいい子にしてたのに……………」どうして大佐は

私のことを見てくれないんですか!!」

霧島「榛名、貴女……………」

榛名「榛名は……………」いつもお姉様達という事を聞いていい子にしてみました……………」

榛名「大佐の命令もちゃんと守って、ミスなんかした事ありませんでした……………」

榛名「なのに……………」なのに……………」大佐が優しくしてくれるのはお姉様達……………」真

面目なのは変わらないのに霧島も良くされてる……………」

金剛「榛名……………」

榛名「それだけじゃない……………」。加賀さんや足柄さんも……………」矢矧さんとはデート

まで……！」

榛名「なんで……なんで……榛名じゃ……ぐす」

比叡「そうだったんだ、榛名……」

金剛「榛名」

榛名「お姉様……ごめんなさい。榛名、悪い子でした……」グス

金剛「うーうん、そのなことないヨ。榛名は good girl デス。こんなになつちやうまで我慢シテ……ホントウによく我慢したヨ」ナゲ

榛名「お姉様あ……」ブワツ

比叡「そつか。私達、榛名に頼り切りな所あつたもんね……」

霧島「まあ、お姉様達と同じカテゴリにまとめられるのはちよつと納得いかないにしても」

金剛・比叡（えっ）

霧島「榛名、貴女頑張り過ぎたのよ。いつも優等生だったから大佐も安心して逆に榛名の事心配しなくなったのだと思うわ」

榛名「嬉しいけど、そんなのって……」

霧島「まあ、それは信用の表れでもあるわけだけど。じゃあ、我慢しなければいいじゃないの」

榛名「そんな…… 大佐に嫌われちゃう……」

霧島「ほら、それが駄目なのよ。そうやって気にして無理して、優等生しちゃうから大佐も榛名の事気づけないのよ？」

榛名「う……」

霧島「一度、我慢しないで思いっきり甘えてみなさい？ そうすれば大佐も最初は驚くかもしれないけど、きつと榛名の苦労を理解して受け入れてくれるわ」

榛名「そう…… かな」

霧島「ええ。私の計算に間違いはないわ。でしょ？ 榛名」

榛名「霧島…… うん。私頑張る！ 大佐に思い切つて打ち明けてみる！」

霧島「その意気よ。さあ善は急げ、早速行つてらっしゃい！」

榛名「うん！ そうする！ お姉様達、さつきはごめんなさい！ でも、もう榛名は大丈夫です！」

金剛「あ、ウン……」

比叡「そつか。良かったね……」

榛名「あの、それじゃあ榛名、少し大佐の所に行つてきますね。霧島、ありがとう！」
ボタン

金剛「比叡……」

比叡「なんですかお姉様……」

金剛「ナンカ美味しいトコロ全部霧島に持っていかれたネ……」

比叡「そうですね……。姉ってなんなんでしょうね……」

金剛「ホントにそうネ……。あははは」

比叡「あははは」

金剛・比叡「あはははははは………びえええええん！」ブワツ

霧島（この姉達は……）

霧島「金剛お姉様、比叡お姉様、落ち込んでいるところ悪いのですが」

金剛「何ヨ霧島、ダメダメな *sister* は穴掘って埋まってるヨ………邪魔し

ないデ」

比叡「お姉様お供します………」

霧島「だから聞いて下さい！」ダン

金剛「ふえ!？」ビク

比叡「ひえっ!？」ビク

霧島「二人ともさっきの榛名の言葉をちよつと思ひ出して頂けますか？」

金剛「*remember* って何を？ 辛い思いでしかないワ」

比叡「ダメな姉って自覚するだけだよ……」

霧島「その部分じゃないです！ さつき榛名は大佐と仲が良い人たちを挙げてましたが、一人だけ明確にある事をしていたって言ってますでしたか？」

金剛「あるコト？ 霧島、下ジョークはダメヨ。男と女がする事なんテ決まってるじゃナイ」

比叡「そうですね。ヤルことなんてせk」

霧島「そうじゃなくて！」カア

霧島「さつき榛名は矢矧さんと大佐がデートしていたって言ってますでした？」

金剛「デート……？ でーと…… date!」クワツ

比叡「な、なんですって……!」シャキン

霧島「さあ作戦会議です」ニヤリ

くその頃の執務室

提督「青葉、話ってなんだ？」

青葉「うふふ、すつごい特ダネがあるんですよ！ というか、大佐の命に係わるかもしれない重大なお知らせが！」

提督「そうか。期待は微塵もしてないが聞いてやろう。3単語で要約しろ」

青葉「短っ！　　というか、どれだけわたし信用無いんですか!?　　本当に本当の特ダネ
なんですってば〜」グイグイ

提督「分かったから服を引っ張るな」

青葉「ぐす。：。：。分かればいいんです！　　いいですか？　　言いますよ？」

提督「早くしろ」

青葉「せっかちですね。まあいいです。お知らせというのは——」

コンコン

榛名「榛名です。大佐、居ますか？」

第22話 「我儘」

青葉「え」

提督「榛名か？ いるぞ。入れ」

ガチャ

榛名「失礼します」

青葉「は、榛名さん……」

提督「ん……？ なんだ青葉、重大な知らせというのは榛名の事だったのか？」

榛名「え？」

青葉「えっ」

提督「榛名を見る限り、俺の命まで関わっているようには見えないんだが」

青葉「た、大佐！」

榛名「あ お ば さん？」

青葉「ひっ!？」

榛名「私の事、大佐に何かご忠言をしようとしてたみたいですが？」ニコ

青葉「え、えっと……それは……」アセ

榛名「あまり余計な事はしないでくれますか？ でないと……」

榛名「46cm砲を貴女の顔にねじ込んで、以降、青葉さんのことは『あ』だけ抜いて呼んで差し上げますよ？」ニコオ

青葉「ひ、ひい！ お、お願いです！ 砲撃も嫌ですけど、『おばさん』なんて呼ばな

いで下さい！」

提督（榛名？）

榛名「なら分かってますね？」

青葉「あ、青葉は何も見えてません！ 何も知りません！」

榛名「よく出来ました♪ じゃあ、ちよつと私は今から大佐に用があるので出て行って貰えますか？」

青葉「りよ、了解であります！ 大佐、失礼します！」

提督「青葉」

青葉「は、はい？」

提督「後で俺が呼んだらまた来るように」

青葉「分かりました…… 失礼します」ズーン

ボタン

提督「さて……………」

榛名「大佐……………」

提督「何かあつたのか？」

榛名「つ、大佐っ！」ダキ

提督「うぐっ……………どう……………した？」

榛名「大佐、今榛名の事心配してくれました？ 気に掛けてくれました？」

提督「まあ、いつもと明らかに様子が違っていたからな。どうかしたのか？」

榛名「大佐……………榛名は……………榛名は、悪い子でした。大佐に甘えたいのに、優しくしてもらいたいのになににずっといい子の振りをしていました！」

提督「なに？」

榛名「私がつつと大人しかったのは、大佐やお姉様達に褒められたからなんです！ 喜んで貰いたかったからなんです！」

大佐「……………」

榛名「でも、それじゃダメだと気付いたんです……………。皆は喜んでくれても、榛名は寂しいだけでした……………」

榛名「大佐……………私は、榛名は、大佐にもつと甘えたいんです！ 『よくやった』つ

でもっと褒めてもらいたいです！」

榛名「そんな思いを今までずっと隠していい子の振りをしてきました。ごめんなさい！」

大佐「…… 榛名」ス

榛名「…… つ」ビクッ

ポン

榛名「あ……」

大佐「全く、お前たち姉妹はどうしてこう手間のかかる……」ナデナデ

榛名「大佐あ……」ブワアア

大佐「いつも苦労していたんだな。我慢をしていたんだな」

榛名「うう…… ぐす」スリスリ

大佐「気付いてやれなくて悪かった。俺はお前にずっと負担を掛けていたんだな」

榛名「そんな！ それは、榛名が勝手に……！」ガバ

大佐「分かっている。分かった上でお前に命令する。もう無理はするな。少しは我儘でいろ」

榛名「我儘でいろなんてそんな……」

大佐「お前の我儘は俺に迷惑を掛ける程なのか？」

榛名「そんなこと……！ そんなことはありません！」

大佐「なら、少しくらい欲張れ、自分に正直でいろ。な？」

榛名「大佐…… 大佐あ！」ダキツ

大佐「つ……、周りを気にすることは無い。俺はお前を信頼している」

榛名「ひつく…… ぐす…… あ、ありが…… ありがとうございます……」

大佐「さあ、涙を拭け。そして遠慮なく言ってみろ、自分の望みを」

榛名「ぐす…… はい。榛名、大佐にお願いがあります」

大佐「なんだ？」

榛名「榛名も大佐の恋人にしてください。甘えさせてください！」

大佐「時と場所は弁えろよ？」

榛名「勿論です！」

大佐「ならいい。俺も応えられる範囲で応えよう」

榛名「大佐、ありがとうございます！ 本当に…… 大好きです！」ダキツ

大佐「ぐつ…… 一つだけいいか榛名」

榛名「はい。何でも言ってください。大佐の為なら私……」

大佐「お前に限った事じゃないが、いきなり抱き付くのは少し遠慮して欲しい」

榛名「え？」

大佐「いや、別に抱き付くなどというわけじゃない。その、なんだ…… お前たちは、特に戦艦は力があるからその……」

榛名（あの大佐が凄く歯切れが悪そうにしてる……。こんな表情を見たのは初めて……）

大佐「男が女性にこんな事頼むのは恰好つかないが…… もう少し加減して抱き締めて貰えると助かる」

榛名「大佐……。くす。分かりました♪」キユ

大佐「む……。流石だな」

榛名「はい。榛名、我儘な良い子ですから♪」スリスリ

第23話 「元氣」

コンコン

青葉 「あ、青葉です……………」

提督 「入れ」

ガチャ

提督 「……………」

青葉 「あ、あの……………」

提督 「どうして呼ばれたか判るか？」

青葉 「あ、青葉が榛名さんの誤った情報を広めようとしたから……………」

提督 「まあ確かにお前はトラブルメーカーだからな。それもあがるが……………」

青葉 「ほ、他に何かしてしまっただでしょうか？」

提督 「そう怖がるな。お前を呼んだ理由は礼を言う為だ」

青葉 「え？」

提督 「お前、榛名の奴がヘソを曲げることを知ってそれを俺を伝えようとしたんだろ

う？」

青葉 「は、はい。でもそれは……」

提督 「伝え方は考慮するべきだが、少なくとも一応は俺の身を案じてくれたんじゃないのか？」

青葉 「まあ、確かにそれもありますけど…… 拡大解釈し過ぎだと思えます」

提督 「そうかもな。だが、お蔭で俺は榛名の異変を察知する事ができたからな」

青葉 「偶然ですよ」

提督 「だとしても、この結果はお前ありきだったかもしれない。だから礼を言う」

青葉 「あう…… 謝意の押し付けは苦手です……」

提督 「はは。お前は騒いで、その所為で怒られてばかりだからな」

提督 「情報を早とちりして誤報したり」

青葉 「う……」グサ

提督 「厚顔無恥に不躙な質問や調査をしたり」

青葉 「うう……」グサグサ

提督 「あとはそうだな……」

青葉 「もうやめてくださいいいい！ 青葉が悪かったですううう！」ブワツ

提督 「なら、俺の謝意も素直に受け取れ」ポーン

青葉「あ……」

提督「榛名の事で少し怖い思いをしたかもしれないが、これに懲りずこれからもお前らしくいて欲しい」

提督「実はそれが一番言いたかった。部屋を出ていくお前の後姿があまりにも覇気がなかったから気になっていったんだ」

青葉「さつきから褒めてくれてるのか、貶しているのかわかりません……」

提督「両方だ」シレ

青葉「ひどっ!？」

提督「ふむ。ようやくお前らしくなった。これで俺も今日は枕を高くして寝れる」

青葉「え？ 青葉のお蔭で大佐はよく寝れるんですか？」

提督「お前にそう言われると自分の発言が致命的な気がしてくるな……」

青葉「ねえ、ちよつと!？」

提督「まあ、冗談だ」

青葉「本当ですか……？」ジツ

提督「それはお前のこれからの働き次第だな。真面目に働けばお前の事も見直すかもな」

青葉「よく働いたら何か青葉にも得がりあますか？ た、例えば……」

青葉「ご褒美……とか」ボソ

提督「こいつは、今までどれだけ賞賛という言葉と縁がなかったんだ」

青葉「……？ 大佐？」

提督「ああ、悪い。お前って実は結構可哀想な奴だったんじゃないかと思ってた」

青葉「そんな!? むう…… な、なら可哀想な青葉にも少しは優しくしてください！」

ご褒美ください！」

提督「いきなり褒美と言われてもな。優しくは、さつきから十分してるし」

青葉「あれで!? なら、ご褒美！ ご褒美です！ それを今すぐ青葉は要求します！」

提督「何がいいんだ？」

青葉「青葉と結婚してください！」

提督「ん？」

青葉「あ」

提督「今、何だって？」

青葉「あ…… あ……」カア

提督「正直、意外だ。お前がそんなk」

青葉「うわああああん！ 大佐のばかああああ！」

バタン

提督（本当に話していて飽きない奴だな。青葉、その活力には本当に感謝しているぞ）

第24話 「おさんぽ」

響「大佐」グイ

提督「ん」

響「前に、散歩に行くときは誘ってくれるって言ったじゃないか」

提督「お前が起きているとは思わなかったんだ」

響「響はずっと寝ないで待っていたのに」

提督「まさか毎晩か？」

響「流星にそれはないよ。大佐の足音がした時だけだよ」

提督「足音で誰か判るのか」

響「響き、だけにね」

提督「その名前、伊達ではなかったんだな」

響「いや……その、冗談だよ。分かってよ」

提督「そうか。じゃあ、行くか？」

響「うん。今度はちゃんと誘ってよ？」

提督「ああ。寝息が聞こえなかったらそうしよう」

響「うん。それでいいよ」

提督「今日は、本当に二人きりだな」

響「うん。川内は寝てるよ」

提督「確かめてきたのか？」

響「ううん。雷と卯月の遊びに付き合って疲れたみたい」

提督「まさか、お前……」

響「さあ？」シレ

提督「まあいい。さて行くk」クイクイ

提督「ん？」

響「手……繋いで欲しい」

提督「ああ、いいぞ」ギユ

響「ん……♪」

提督「嬉しそうだな」

響「割と……。この方が、いい」

提督「そうか」

提督「ここは日本と違って年中暑いから人によっては辛いかな」

響「大佐は夏が好きなの？」

提督 「暑いのが平気そうだからか？」

響 「そう」

提督 「平気というわけじゃないが、夏という季節自体は好きだからな」

響 「そうなんだ」

提督 「お前はどうかんだ？」

響 「響？」

提督 「ああ」

響 「響は寒い以外のなんでも……」

提督 「もしかして、ロシアの名前で呼ばれたがらなと関係があるのか？」

響 「ん。他の鎮守府の響は分からないけど、やっぱり生まれ持った名前の方が響はい
い」

提督 「そうか」

響 「それに」

提督 「うん？」

響 「こつちの名前の方が日本の艦って自覚できるから……」

提督 「そうか」

響 「あと」

提督「まだあるのか」

響「不死鳥という渾名も響は好きじゃない」

提督「ほう。それはまたなんで？」

響「もう響は沈まないし、沈まされることもないから」

提督「……」

響「信じていいよね？」

提督「その信頼、裏切るわけにはいかんな」

響「む。もっと優しく言って欲しい」

提督「優しく？」

響「そう。女の子に言うみたいに優しく」

提督「ふむ……」ポーン

響「ん……♪」

提督「約束だ」ナゲ

響「満点」

提督「それは、嬉しいな」

響「ご褒美に響のこと貰ってもいいよ？」

提督「お前は既にこの鎮守府の、俺の所有物だ」

響 「わざと意地悪な言い方しないで欲しいな」 プク

提督 「ふっ、悪い。大事な子だ」 ポンポン

響 「むう……今は、それで満足してあげるよ」

提督 「ありがとう」

提督 「さて、帰るか」

響 「もう？」

提督 「涼しいが、夜風に当たりすぎるのも良くないからな」

響 「そっか」

提督 「ああ。お前にも風邪をひいて欲しくないからな」

響 「なら仕方ないね。じゃあさ」

提督 「ん？」

響 「基地に帰るまでさ、今度は肩車して欲しい」

提督 「なんだ。急に小さい子供みたいだぞ」

響 「ちよつと高いけど、大人の視点で景色を見たいんだ」

提督 「別に大人ぶらなくてもいいぞ？」

響 「いいの。して？」

提督 「分かった分かった。ほら」 ヒヨイ

響 「わっ……高い」

提督 「怖いかな？」

響 「ううん。気持ちいい」

提督 「ならよかった」

響 「大佐はいいな。こんな視点で世界が見れて」

提督 「羨ましいか」

響 「少しね。でもこの状態の方がいいこともあるよ」

提督 「なんだ？」

響 「……」 グイ

提督 「んむ……」

チュ

響 「好き、有り」

提督 「何か日本語が違う気がするが……全くませた子だ」

響 「ふふ〜♪」

第25話 「敵」

扶桑「敵機来襲！ 深海棲艦です！」

大佐「来襲…… レ級か」

加賀「絶対防衛線10 kmまで迫っています」

大佐「全艦隊、第一種戦闘配置。訓練生はただちに避難。急げ」

加賀「また来ましたか」

扶桑「もう。こりごりです……」

大佐「そうだな。高速艇の準備を急げ」

加賀「行くのですか。個人的にはやはり支持できません」

大佐「気持ちは分かる。だが、現状これが最善なんだ」

扶桑「でも…… もしもの事があつたら……」

大佐「そうならない為に細心の警戒をもって守ってくれているだろう？」

加賀「それでも100%安全ではありません」

大佐「それはそうだ…… まあ、もしもの事があつたら…… 思うままにしたらいい」

扶桑「そんなこと言って……ズルイですよ」

加賀「自暴自棄になって特攻するだけでも？」

大佐「やはりお前たちは頼りになるな。その時は皆を頼むぞ」

扶桑「ふう……了解です」

加賀「任せて下さい。絶対に何も起こらせません」

大佐「よろしい。では出撃」

く絶対防衛線まで3 kmの海域

ル級「レ級、鎮守府の絶対防衛線までもうすぐよ」

レ級「うん！ そうだね！ 今日は攻撃できるといいな！」

タ級「全く……毎回空振りになって部下を宥める身にもなってるよ」

レ級「いいじゃん。この前できたばかりの海軍の基地攻撃できたんだから」

タ級「そうだけど、あの後熟練の応援部隊が来て私の隊半分以上沈んだのよ」

ル級「え、そんなに？」

レ級「ああ、あの時の……あれはきつと本部か、最前線の基地の部隊だね」

タ級「ええ。相手にもダメージは与えたけど痛み分けにはちよつと足りなかったわ」

ル級「私参加しなくて良かったあ……」

レ級「あははははは。なにそれ。沈まないと転生できないのに」

ル級「そうだけど…… やっぱり負けて沈むのは悔しいもん」

タ級「それは同意」

レ級「二人とも、そんな事気にしてたらいつまでたつても同じ事の繰り返しだよ！」

ル級・タ級「……」

レ級「気にせず行こう！ 沈めるか沈まされるか、僕達はそれを楽しまない！ それしか楽しみがないんだから！」

ル級「難儀だよね。深海棲艦って……」

タ級「そうね。この苦勞、仲間しか分かってもらえないのが辛いわ」

く絶対防衛線

レ級「一番乗りい！ お、今日は大佐いない？ いやいよやれちゃう？」ウキウキ

タ級「そうなの？ やつとここと戦えるのかしら」

ル級「なんか強そうな艦隊持つてそんな提督だったからなあ…… 間に合つて欲しかったけど」

レ級「まあ仕方ないね！ それじゃ、早速k」

提督「待て」

夕級「あ」

ル級「良かったあ」

レ級「あらあ……。間に合っちゃったか」

提督「全く何度も何度も……。やはりこの緊張感だけは慣れない。心臓に悪い」

レ級「良かったじゃん間に合って。だから今回も攻撃しないよ？」

提督「基地の絶対防衛線を超えるまでに俺が間に合えば攻撃しない、か」

提督「約束を守ってもらって助かるが、それでも予告なしの来襲はやはり辛いな。間に合う保証がない」

レ級「だから面白いんじゃない」

ル級「そんなのレ級だけだよ……。」ボソ

夕級「私も、ギャンブルはあまり好きじゃないわ」

レ級「う……ふ、2人とも」

提督「なあ」

レ級「うん？」

提督「ここまで意思疎通ができて話も通じるのだから、和平の道は考えられないのか？」

レ級「大佐と、だけならいいよ」

提督「それは受け入れられない」

レ級「それじゃ無理だね」

提督「何故だ。何故そこまで……」

レ級「もう何度も言わせないですよ。僕達は戦うしかないんだから」

夕級「大佐には悪いけどレ級の言うとおりね。深海棲艦になった時点で敵として戦うしか道はないわ」

ル級「私はもう飽きてきたからこのままで仲良くなってもいいけど……」

レ級「個人的になら勝手にすればいいと思うよ。でもね、全体は無理だよ。僕たちは戦って沈まないとまた艦娘として転生できないし」

夕級「戦って艦娘を沈めないと仲間もできないからね」

提督「だからこそ双方に被害が出ないように話し合いという考えはできないのか？」

ル級「無理じゃないかな……だって海軍が私達のこと敵だと断定してるし」

レ級「それに敵がいないと海軍の存在意義も弱くなるしね！」

提督「例え敵がいなくても、常に国防に努めるのが軍というものだ。立場は弱くなるだろうが、存在意義が弱くなることなど有り得ない」

夕級「大佐の理想は嫌いじゃないわよ？ でもそれは難しいってどうしても思っちゃうの」

ル級「元艦娘だからね……私なんて元々本部にいたから内部事情を常にその身に感じていたわ」

レ級「ごめんね？ 大佐。そういうわけだから僕は無理だと思うな！」

提督「俺は……諦めない」

レ級「大佐のそういう頑固なところ、可愛くて僕好きだよ。だからこんな関係になれたのかもね」

夕級「初対面の時は、あんなに話が通じなかったのに不思議なものね。一目惚れってやつかしら」

ル級「え。そ、そうなの……？」

レ級「もうやめてよ恥ずかしいなあ♪」

提督「……」

ヲ級「あのーお話し中のところ悪いんだけど、戦わないならもう私達帰りたいたいんだけど……」

レ級「あつ、ごめんね！ じゃ、大佐。僕達もう帰るね」

提督「ああ……」

レ級「大佐が約束を守ってくれる限り僕たちは此処を攻撃しないから、しっかり守ってね。名実ともに！」

夕級「大佐、また会いましょ」フリフリ

ル級「迷惑掛けちゃってごめんね」ペコリ

レ級「じゃーねー！」

ヲ級「お邪魔しました」

提督「……悪意の無い敵意か」

加賀「お疲れ様です」

扶桑「全く、私達には目もくれない癖にあの人達は……」

提督「さて、帰ろう。今日は疲れた」

加賀「お風呂沸かしますか？」

提督「何故お前が沸かす？」

扶桑「えっと……じゃあ寝ます？」

提督「何故照れながら言う？ 一緒には寝ないからな」

第26話 「お風呂」

弥生「大佐の部屋ってお風呂があるの？」

提督「ああ」

弥生「弥生達が使ってるお風呂とは違うの？」

提督「個人用の風呂だ。普通の風呂だからお前たちが入っても傷とかは癒えない」

望月「ズルよね〜大佐だけさ。わたし達は大人数向けの大浴場なのに」

提督「何を言うんだ。浴槽が広い方がゆつくり全身が湯に浸かれるし、一人じゃないから仲間と会話だってできるだろ」

提督「個人用の風呂はプライバシーが守られていいかもしれないが、それでも偶には俺も広い風呂でのんびり湯に浸かりたいと思う時はある」

秋雲「なにになに？ それじゃ大佐は秋雲達とお風呂に入りたいってこと〜？ セクハラじゃん♪ いいの？」

提督「明らかに悪戯を楽しむような顔をしてよく言う。誰がお前たちと入りたいと言った」

不知火「つまり一緒に入りたくないほど不知火達の事は好きではないと」

提督「あからさまな曲解をするな。その理屈だと好きなら一緒に入るのが当然みたいだぞ」

天津風「わ、わたしは別に…… 大佐がそうしたいなら…… いいのよ？」

文月「わ、だいたくん」ポ

提督「別に入りたいとは思ってない」キツパリ

天津風「ガン！」

谷風「ちよつとお、そこは男らしく『お前となら……』』と言うべきところじゃないですかねえ♪」

提督「馬鹿者が。いいか？ 軍人が、お前たちの上司が、しかも男が異性と一緒に風呂に入るなんて余程親密な仲か、混浴でもない和有り得ん」

雷「ふくん、じゃあ混浴ならいいのね」

提督「一緒に入っても大丈夫だと思える人ならな」

大潮「大佐は違うのですか？」

提督「違う。俺は夫婦くらいの仲でない限りそういうのは遠慮したい方だ」キツパリ
荒潮「大佐は私達駆逐艦は結婚の対象とは見てくれないのかしら？」

提督「すまんが…… 子供は、な……」

菊月「私達も…… 成長すれば、それなりの女になるはずなんだが…… な？」ポ

ソ

提督「艦娘が成長して姿変わるといふのは聞いた事がないが……」

暁「ええ!!?　じゃあ暁たちは、ずっと真のレディになれないってこと?」

村雨「それは困るわね」ニヤニヤ

白露「そうだねえ。わたしもいつまでも子供のままだな嫌だなあ」フンス

夕立「夕立大人じゃないっぽい?」テンネン

時雨「僕もまだまだ子供みたいだ」シレ

長月「……なあ。あの4人、明らかに私達とは違って、体が女らしいとは思わな

か?」

子曰「そういえば……　そうかも」

五月雨「上位改装を受ける前とは明らかに姿が……　というより、体が成長している

と思います」

響「不公平だ……　なんで響だけ……」ズーン

ポン

Z1「僕達もいるから」

Z3「非常に不本意だけどね」

島風「4人だけズルイ!」

雪風「島風ちゃん落ち着いて。逆に考えるんです」

綾波「逆?」

雪風「はい、そうです。確かに子供の姿に近いわたし達とは結婚はし難いかもしれません。だけど」

黒潮「なんや?」

雪風「だけど、親と子供位の見た目の差なら逆に一緒にお風呂入っても問題もありません!」

漣「なるほど!」ポン

提督「なるほど、じゃない。問題大有りだ」

敷波「え? そうなの?」

提督「親子とかならまだしも、そうでもないのに幼子と一緒に風呂に入る大人なんて、今の社会では単に犯罪者予備軍としか見なされない」

叢雲「まあ、そうでしょうね」

初春「大昔なら十二やそこらで結婚とかも有りだったのじゃがな」

提督「それとて限られた力ある者の、政略という形でのみ成立していた事柄だ」

若葉「世の中は…… 厳しいな」シユン

提督「いや、俺はこの程度の倫理は必要だと思いが」

電「電は…… やっぱり、ちょっと残念なのです」

如月「これはばかりは仕方ないわよ。さあ、皆今回は諦めて解散しましょう？
大佐も困ってるし」

駆逐艦一同「え〜？」

如月「私に少し考えがあるの」ヒソ

不知火「！ 仕方ありませんね。一同解散！」

駆逐艦一同「了解！」ビシッ

提督（やけに潔く引き下がったな。これは、何かあるか？）

く夜、執務室

提督「ふう……」ガラ

臯月「キヤー！えっちい！」ゼンラ

提督「」

電「はわわ…… み、見られてしまいました」ゼンラ

初雪「まあ、大佐もわざとじゃないし。ハプニングなら仕方ないよね」ゼンラ

提督「…… お前たち直ぐに服を着ろ。説教だ」

第27話 「理由」

秋雲「ねえねえ大佐あ」

提督「うん？」

秋雲「大佐いつか言つてたのよね？ 胸が小さくても可愛いならそれでいい、って」

提督「…… なんなんだ。藪から棒に」

秋雲「いやー前さ、わたし達駆逐艦は子供っぽいから結婚はやり難いとか言っちゃつてたけど」

秋雲「ぶつちやけ秋雲は姿こんななだけで、中身は結構大人だったりするわけよ」

提督「それで？」

秋雲「だ・か・ら！ 大佐が胸が小さくても可愛いなら、っていうなら…… 秋雲も
ありじゃない？」ヒソ

提督「耳元で囁くな。加賀に教えてもらったのか」

秋雲「まあいいじゃんいいじゃんそんな事お。で、どう？ ありでしょ？ ぶつちや
け」

提督「…… ふう。確かに見た目だけで判断するのは失礼だな。それは認めよう」

秋雲「ならならー」

提督「だが、お前は軽い感じがするから恋愛の対象とし見るのは些か難しい」

秋雲「えーっ、そんなあ！ いや、秋雲これでも尽くす方よ？ 好きな人には一途なんよ？」

提督「そういうのがお前は……まあ、それがお前か」

秋雲「分かってんじやーん♪」グリグリ

提督「仕事の邪魔をするな。あと、お前も秘書なんだからしつかり手伝え」

秋雲「アイサイサー。じゃま、交渉成立っ♪」

提督「……凄まじく気軽な交渉だったな」

秋雲「でも大佐受け入れてくれたっしょ？ 秋雲の本気は分かってくれたでしょ？」

提督「お前は嘘はつかないからな」

秋雲「そういうこと♪ ふっふっ♪」

——昼過ぎ

秋雲「おつわりい！」

提督「あの量を……お前は意外に事務作業が得意なんだな」

秋雲「意外は余計、とは言わないっ。そういう風に見えるだろうってのはわたしも

分かってるからねえ」

提督「やはり、暇さえあればスケッチブックに向かう奴は違うな」

秋雲「いや、流石にその表現は無理あるっしょ。いくら秋雲でもイラストのスキルを書類作成に変換する才能なんてないから」

秋雲「ま、紙に向かうのは好きだけどね♪」サラサラー

提督「何を描いているんだ？」

秋雲「レ級ちゃん」

提督「よりよつてなんでものを……」

秋雲「え？ ダメ？ あの子面白いんだよー？」

提督「良い悪い以前に海軍としてのモラルの問題だ」

秋雲「そんな硬いこと言わないでよー。絶対外には漏らしたりしないからさ」

提督「程々にしておけよ？」

秋雲「アイサーー！ さんきゅー♪」

提督「それにしてもあいつが此処に現れてから俺たちの深海棲艦に対する印象も大分変わったものだな」

秋雲「あいつ？ ああ、レ級ちゃんね。そうだねーまさか、襲ってきたのに悪意はな

いなんてねえ」

秋雲「わたし達ってお互いに恨み恨まれるくらいの敵対関係だと思つてたから」

提督「そうだな。だがそれが……」

『恨みとかなんてないよー。ただ、これしかやる事がないかやつてるだけー』

秋雲「だもんね」

提督「正直あれには本当に拍子抜けした」

秋雲「でもあの後の大佐の言葉にもわたし達は驚かされたよー」

『なら俺は絶対にお前たちとは戦わない』

秋雲「秋雲はあれもちよつと無いと思うなー。あ、良い意味で、だけどね」

提督「あんないい加減な理由で宣戦布告来た事が頭にキタからな」

秋雲「そのあとレ級ちゃん、提督が最初してた顔と同じ顔になったと思たら急に笑い

出したよね」

『面白い提督だね！　じゃあさ僕達と大佐との間でルール作ろうよ！　遊びの一環みた

いなやつ！』

提督「まさか、あんな提案をしてくるとはな」

秋雲「いやー経緯はどうあれ、秋雲あれはあれで結構有り難いもんだと思うよ？」

提督「………まあな」

秋雲 「レ級ちゃんあんなんだけど多分あの子無茶苦茶強いよ」

提督 「あいつが従え(？)てた戦艦や空母も全てフラグシップだったな」

秋雲 「いや、わたし達も負けるつもりはないけどさ。ありや、下手したら轟沈も有り得るもんね」

提督 「…… 沈んだら深海棲艦になると知ってどう思った？」

秋雲 「ん？ まあ、最初はやっぱりショックだったよ。でもね、時間が経つにつれて直ぐに頭も冷静になってきた」

提督 「そうだったのか？」

秋雲 「うん。秋雲だけじゃないよ。皆そんな感じだった」

提督 「ほう」

秋雲 「多分皆心の何処かでは気付いてたんだろうねえ。何となくお互いに通じるものがあるって事にさ」

提督 「怖くはないのか？」

秋雲 「ん？ 沈んで深海棲艦になっちゃう事？」

提督 「ああ」

秋雲 「それはへーき。だって大佐の事、信じちやってるからねえ」クス

提督 「頭が下がる思いだ」

秋雲「やめてよー、むず痒いじゃん♪」

提督「だが、その信頼には応えないとな。實際レ級達以外では問答無用で攻撃してくる深海棲艦もいる」

秋雲「ま、そういう降りかかってくる火の粉的なモノは払うしかないよねえ」

提督「そうだ。敵の目的はどうあれ、俺たちの義務はこの海の平穩を維持することだからな」

秋雲「…… 攻略命令で自分の縄張り荒らされる深海棲艦も同じことを考えてるかもね」

提督「そういう恨みつらみは全て俺が受ける。その為の提督だ」

秋雲「お、カツコイイ♪ 流石大佐!」

秋雲「…… でももね、わたし達も大佐の事は絶対守るから安心してよねっ」

提督「ああ。お蔭で俺は最近ずっと安眠できている」

秋雲「ぷっ。それ、つい最近そうなっただけじゃん」

提督「それでも信頼してるのは変わらない」

秋雲「艦娘冥利に尽きるねえ♪ んじやま、せっかく恋人にもなれた事だし、親睦の証として一緒にお風呂でも入りますか!」

提督「出て行け。直ぐにだ」

秋雲「冗談だつて♪」

第28話 「保護」

「早朝、鎮守府正面入り口

提督（曙はまだ来てないみたいだな。ストレッチをして少し体をほぐしておくか）

提督が軽くストレッチをしていると正面から一人の艦娘がやって来るのが見えた。

最初は曙かと思ったが、自分の方が先に来ているはずなので基地とは反対の方向から来ることは有り得なかった。

提督「ん……？」

提督（あれは……？ 夕雲か？ 確か俺の艦隊にはいないはず……だとすると）

夕雲「……」トボトボ

トン

夕雲「っ!？」

提督「艦娘だというのに正面にいる人間にすら気付かないとは……」

夕雲「あ……」

提督「君は此処の艦娘じゃないな。何処から来た？ 何か用向きでも？」

夕雲「う…… その……」ブルブルカタカタ

提督「俺が怖いか？」

夕雲「……」コク

提督「そうか。まあ大体察しはついた。信じろとは言わないが、悪い様にはしないから一度基地に来ないか？」

夕雲「…… 何も…… しない？」

提督「君が元居た場所でされた事を言っているのなら、それはここでは有り得ない」

夕雲「…… 案内を…… お願いします」

提督「分かった。着いて来なさい」

く執務室

長良「大佐、この夕雲の子は？ うちにはまだいなかったよね？」

長門「その筈だ。という事は……」

提督「結論を急くな。先ず話を聞け」

夕雲「……」

提督「今朝、本部からある鎮守府で艦娘の反乱が起こり、それを鎮圧したとの報せが届いた」

長良「は、反乱？」

叢雲「なるほどね。その鎮守府の提督、やっちゃったのね」

初春「妾達は提督との絆が深いほど自身が持つ力を発揮できる。そしてその絆は団結力、提督への忠誠心にも繋がるのじゃ」

長門「という事はそこで起こった反乱というのは」

叢雲「大方、その提督が誤った行動・行為を取り続けて艦娘との絆どころか、憎悪を買ってしまったのでしょね」

長良「そんな事有り得るの？ その、わたし達が提督に手を掛けちゃう事なんて」

初春「親しくなれなくても普通に接していれば、基本、妾達にはそのような考えは思いつくことはいない」

長門「その提督がよほど悪辣だったと？」

提督「それは、夕雲に聞けば分かるだろう」

提督「夕雲、辛いだろが首を振るか頷くだけでいい。そこで提督から虐げられていたのか？」

夕雲「大丈夫です……話せます」

夕雲「私達の扱いは、詳しくは言えませんが……酷いものでした……」

夕雲「逆らう意思を持ち切れないことをいい事に……本当に……うっ……」

長良「ねえ、大佐。そんな提督が本当にいるものなの？」ワナワナ

提督「居てはならない。そうしない為にも海軍も厳しい選考をしているし、各鎮守府への査察も定期的にも抜き打ち的にも行っている」

提督「流石に『提督になれる』適正が有るだけでは、採用したりはしていない」

長良「じゃあ、どうしてです？」

提督「稀に居るんだ。お前たちが女なのをいい事にそれだけを求めて、外面を完璧に取り繕って、内に秘めた醜い願望を悟らせない男が採用されることが」

長良「そこまでしてるのに何で……！」

提督「ここ数年ではなかった事だ」

長門「……そこにいた他の艦娘と提督はどうなった？」

提督「提督だった男は遺体となつて発見。他の艦娘の大半は自主投降をした。処分は全て解体。一部の者は頑強に抵抗するも鎮圧された。そして……」

提督「この連絡書によると、一名のみ見つかつてないらしい」

叢雲「それが……」

夕雲「はい。私です……」

初春「よくここまで来れたの」

夕雲「何処でもよかつたんです。でも暫く逃げてたら見覚えのある基地の明かりを見

つけてそれで……」

長良「保護を求めに来たのね！」

夕雲「いいえ」フルフル

長門「む……」

夕雲「反乱に加担しなかったとはいえ、仲間はやつてはならない事を犯しました。これは連帯責任です」

提督「なら、何故ここに？」

夕雲「最初は逃げたい一心でしたけど……最後に安心が出来るところを求めていたのかもしれない」

夕雲「現に大分落ち着きました。提督、ありがとうございます。今は心穏やかです。もう解体処分も悔いなく受け入れることが出来ます」

提督「海軍に所属する艦娘として軍法に則った処分を望む、か」

夕雲「……」コク

長良「提督……！」

叢雲「長良さん、待ちなさい」

提督「長門？」

長門「……うむ」コク

提督「村雲、初春？」

叢雲「賛成よ。だから好き」

初春「無論。妾も叢雲と同じである」

提督「長良は…… まあ、必要ないな」

長良「さつきから何を言ってるの……？」

夕雲「……？」

提督「夕雲」

夕雲「は、はい」

提督「これからは俺の事を大佐と呼びなさい。君の身柄は今日よりうちで預かる」

長良「大佐あ！」パア

夕雲「そんな……！ でも、無理です。私達には全て所属する鎮守府の認識番号が

登録されていて……」

提督「そのデータは抹消し、改めてうちのものへと書き換えた物を発行する。問題な

い

長門「そんな大それた事……できるのか？」

提督「他の提督には悪いが、こういう時はコネを使わせてもらう。褒められた事ではないと分かっているがな」

長良 「コネって…… そんな事ができちやう偉い人と知り合いなの？」

提督 「ああ、幸運にもな」

夕雲 「誰…… にそんな事、頼む…… つもりですか？」

提督 「大本営本部の中將、親父殿に頼む」

第29話 「電話」

中将『儂だ』

大佐「中将殿、お久しぶりです」

中将『おお!? その声、若造か!』

大佐「ええ、そうです。相変わらずその呼び方ですか」

中将『うははは! 儂とお前の仲だろ? お前も儂のことは昔の様に親父と呼んでくれ』

大佐「それは流石に……親父殿、では?」

中将『相変わらず堅苦しい奴だな。まあいいよ、それで。で、何か頼み事か?』

大佐「お見通しですか。実は恥を忍んでお願いしたい事が――」

中将『なるほどな。夕雲はそつちに居たのか』

大佐「ええ、できましたら」

中将『ああ、いいぞ』

大佐「え?」

中将『夕雲の奴をお前の所に所属させたいんだろ？ 識別番号とかの書き換えとかは全部こつちでやっておいてやる』

中将『勿論、調査報告書も解体処分に改ざんしておくから心配するな』

大佐「……話が早くて助かりますが、その……」

中将『調子が良すぎて逆に不安か？ ははははは！ まあそうだろうな。』

大佐「何か理由が？」

中将『おう。その件だがな。投降してきた艦娘達から事情聴取をしてみりや、その殺された馬鹿野郎の、まあ下衆なことよ！』

中将『証言だけだとちよい厳しかったとこだが、あいつら物証も自分自身を使つてまで証明しおつたのよ』

大佐「では、もしかして結果報告の解体処分というのは……」

中将『嘘だ。情状酌量の余地十分に足るつて元帥殿まで口添えしてくれてな！
まあ、報告書に関しては海軍としての体裁もあるからな』

大佐「では、解体されてないんですね」

中将『そうです。皆こつちで面倒見ることになった』

大佐「そうですか。では、実際に処分されたのは現地で抵抗した艦娘だけだったんですね」

中将『いや、そいつらも生きてるぞ』

大佐「え？」

中将『うはははははは！ 柄にもなく間拔けな声を出しおるわ！ そんなに驚いたか？』

大佐「それはもう……。では、その艦娘達はどうしたのですか？」

中将『儂が説得した』

大佐「は？」

中将『あのガキども、半人前の癖に儂ら鎮圧部隊を前にしてもいつちよまえに自分達の主張を一步も譲らなくてな』

中将『怖くて震えてる癖に目に涙を貯めて逆に儂らを睨み返してきやがったのよ！
その様に感心して儂は——』

大佐「説得を呼びかけた、と？」

中将『いや、直接説得しに行った』

大佐「……。冗談ではないんでしょね。丸腰で、ですか？」

中将『当たり前だろ！ あそこで行かなければずっと後悔していたわ！』

大佐「興奮状態の艦娘相手によく丸腰で行きましたね」

中将『絶対に説き伏せる事ができると確信していたからな！』

大佐「……ふう。流石としか言えません」

中将『はははははは！ そう褒めるな！ 照れる！』

大佐「しかし安心しました。夕雲の奴は自分だけ生き残ったと思ってるので、自分だけ処分を免れる事にまだ抵抗を示していましたから」

中将『そうか。あいつらが言ってた通りに、真面目な奴だったんだな』

大佐「同僚たちはなんと？」

中将『皆口を揃えて夕雲だけは最後まで話し合いか本部へ直接訴えるべきだと皆に反論していた、と言っていたな』

大佐「そうですね」（夕雲が言っていた事は本当だったんだな）

中将『そういうわけだから、仲間の事は気にするなと言っておいてくれ』

大佐「分かりました。こちらの無理をお聞き届け頂き心から感謝致します」

中将『よせよせ！ 気にするな、大した事はしてないわ！』

中将『じゃあ、もう用がないなら切るぞ。今度は電話じゃなくて手土産でも持って来い。久しぶりに酒を飲もうじゃないか！』

大佐「ええ。その時は是非」

中将『おう。それじゃあな！』

大佐「ええ、何れまた。親父殿もお達者で」

ガチャ

大佐（ふう……。。親父殿には頭があげられないな。返せてない恩がまた増えてしまった）

提督「だが、あまりにも理想的な結果だ。夕雲の奴、喜ぶだろうな」

第30話 「おねだり」

金剛「Buy プリーズ！」

提督「だめだ」

金剛「お願いヨ大佐！ ティーセットが欲しいデス！」ジタバタ

提督「お前ももう持つてるだろ？」

金剛「ワタシが欲しいのは金剛 only のスペシャルなティーセットなんデス
！」

提督「そんなものが存在するわけないだろ。艦娘専用ならともかく、戦艦の、それも
お前だけの為のティーセットなんて」

金剛「あるヨ！ ほらこのカタログを Look プリーズ！」

提督「……」パラパラ

金剛「ほら！ ココ！」

提督「……」ビリ

金剛「フアツ!？」

提督「ないな」

金剛「嘘ヨ！ 今あからさまにページ破ったデシヨ!?」

提督「そうか？」シレ

金剛「Why!? ナンデ買ってくれないデスカ！」ジタバタ

提督「お前の給料でも直ぐに買えない高価な代物など御免だ」

提督「大体この部屋には合わないだろ」

○提督（リアル筆者）の部屋

・床：い草の畳

・壁：新緑の壁紙

・机：床の間

・窓枠：障子デラックス

・装飾：掛け軸「海上護衛」

・家具：しょうぶ和筆筒

・おまけ：調理台（オリジナル設定）

金剛「Kitchen だけ明らかにおかしいヨ!? コレと交換するヨ！」

提督「だめだ。これは俺の数少ない趣味の一つなんだ」

金剛「じゃあ買ったあと、ワタシの部屋に置いたらいいネ！」

提督「お前の部屋は四人部屋だろ？ あんな大きい物、部屋に置いておけるわけがな

「い」

金剛「No! 大佐のケチー! 買ってヨー!」

提督「子供か……」

高雄「金剛さん、ワガママを言ったらだめですよ?」

金剛「うう…… 高雄オ…… でも、デモ……」

高雄「私もこれで我慢してゐるんですから♪」

と高雄はこれ見よがしに、以前提督に買ってもらったドレスサアの写真が乗っているカタログのページを指さした。

金剛「ちよつ、大佐ア! 高雄だけズルいヨ!」

提督「女は身だしなみに気を遣う物だろ? その点高雄の希望は筋が通っていた」

金剛「そんなア! ワタシも英国で生まれた Lady として嗜みが必要なんデス!

クイクイ

提督「ん?」

夕雲「大佐…… なら私の部屋に置いてはどうです? 私の部屋なら最近空けて貰ったばかりで物もありませんし……」

金剛「夕雲オ!」パア

提督 「購入資金はどうする？ 高いぞ、これ」

夕雲 「大佐に拾って頂いた恩もありますし、それにお金なら一応前の所で貰ってた分が蓄えとして結構あるので……」

提督 「しかし、お前にそこまでさせるのもな」

金剛 「そう……ネ。部屋の事までは嬉しかったケド、流石に money の事まで頼っちゃうのは悪いワ」

夕雲 「金剛さん…… 大丈夫ですよ」

金剛 「え？」

夕雲 「このお金は金剛さんに貸付るだけですから」

金剛 「カシツケ……？ 借金？」

夕雲 「勿論、利息は取りません」ニコ

金剛 「……」

提督 「おい、お前たちちよt」

金剛 「I understand! 分かったワ！ 夕雲、お願い！」

夕雲 「ふふ、畏まりました、金剛さん♪」

提督 「……」 (後で霧島と榛名に怒られても知らんからな)

第31話 「お菓子」

イク「大佐、約束通り来たの！」

提督「よく来た。出来上がってるぞ」

テーブルの上には言葉の通りできたのカステラが乗っていた。

イク「わあ、美味しそうな♪」

Z1「ホントだ……でも、僕も呼ばれちゃってよかったの？」

提督「二人には水泳大会の時に世話になったからな。これは礼だ」

提督「イク、元々お前にしか菓子の礼の事は言っていなかったのに、俺の都合で頭数を増やしてしまつて悪いな」

イク「そんなの気にしなくていいの！ 一人だけだし、イクは大佐がお菓子のお礼を覚えてくれていただけで嬉しいの♪」

提督「そう言つて貰えると助かる。レイス、そういう事だ。遠慮なく食べてくれ」

Z1「うん。ありがとう！」

イク「うん、甘くて良い匂いなので♪」クンクン

Z1「本当にそうだね。出来たばかりのこの生地の匂い……堪らないね」ウツトリ

提督 「ほら、切り分けたぞ」 トン

イク・Z1 「いただきます♪」

パク

イク 「んん！ 美味しい！」

Z1 「本当だ…… これは予想外」

提督 「なんだ、味を心配していたのか？」

Z1 「あ、いやそうじゃないんだけど。ここまでの味だとは予想してなかったから」

イク 「本当にそうなのよ。これはお店に並んでも許せるレベルなの」

提督 「そうか…… 作った甲斐があった」

Z1 (わ…… 大佐、本当に嬉しそうな顔してる。こんな顔もするんだ……)

イク (凄く優しい目なの。もうこれだけでも満足なの♪)

イク・Z1 「……」 ポー

提督 「ん？ どうした？」

Z1 「え？ あ…… な、なんでもないよ？」 パク

イク 「そなの♪」 モグモグ

提督 「……？」

——数十分後

イク「ご馳走様なの〜♪」

Z1「本当に美味しかったあ」

提督「ああ。美味しく頂いてもらってなによりだ」

イク「また食べたいの〜♪」

提督「その時はまた誘ってやる」

イク「ありがとう！ 大佐だ〜い好きっ！〜ギユ

Z1「あ、あの！ ぼ、僕もまた……………呼んで、くれる？」

提督「勿論だ」ポン

Z1「あ……………うん。嬉しい。Dank……………ありがとう」

イク「じゃあ、大佐。また誘ってなの〜」フリフリ

Z1「ご馳走様でした。失礼します」

提督「ああ」

バタン

〜廊下

イク「美味しかったねえ〜♪」

Z1「そうだね。とても美味しかった」

イク「全部食べたかったけどやっぱ残ってたのは自分の分だったのかなあ」

Z1「大佐は一つも食べてなかったらね。きつとそうだよ」

イク「イク達が言うのも可笑しいけど、アレはゆ〜っくり味わって食べて欲しいの♪」
Z1「そうだね。甘いものは元気が出るしね」

↳深夜、執務室

筑摩「良い匂いですね。これは、お酒ですか？」

提督「そうだ。ブランデーで作ったシロップだ」

提督「本当は一日置いた方がいいんだが、まあ塗ってから時間もそれなりに経ってるし風味はそんなに問題ないだろう」

霧島「ええ。良い香りです。でも、これはイクとレイスちゃんには出さなかったみたいですですね」

提督「なんとなくだ。お酒が飲めないと知っていたわけではないが……まあ、塗らなくても美味しそうにしていたらしいだろう」

金剛「んー、この香り堪らないネ♪」

榛名「食べた後にちよつとだけ喉が温かく感じます……不思議な美味しさです♪」

那智「これは…… 美味しいな」

提督「ま、せっかく作ったからな。ちよつとした大人のお茶会だ」

部屋いる艦娘「ありがとうございます大佐♪」

第32話 「お誘い」

霧島 「大佐、デートをしましょう」

榛名 「↑本日の秘書艦

提督 「……ん」

霧島 「ど、どうしました？」

提督 「いや、霧島からそんな事を言われるなんてな。意外で」

霧島 「わ、私だって偶にはそういう事を言ったりします。で、どうですか？」

提督 「今更もう断ることはしない。いいぞ」

霧島 「そうですか！ それじゃあ何時にし m」

榛名 「ちよ、ちよっと待って下さい！」

霧島 「あら、どうしたの？ 榛名」

榛名 「どうしたの？ じゃないよ霧島！ なんでこんな……」

霧島 「私と提督のデートが気になるの？」

榛名 「そうじゃ……！ そうだけど……。だからって私の目の前でなくて

も……」

霧島「安心して榛名。デートはお姉様達も一緒よ」

榛名「え？」

提督「なに？」

霧島「大佐、お願いの後出しのような形で恐縮ですが、私達4人とデートをして頂けませんか？」

榛名「4人って……わ、私も？」

霧島「さつきからそう言ってるじゃない」

提督「待て。お前たち姉妹全員と出掛けるのか？」

霧島「そうです。お願い、できますか？」

提督「いや、それは流石に行動はできたとしても男としてあまりにも節操がなさすぎ」
ギユ

榛名「大佐、そのデート……榛名からもお願いしたいです」

提督「榛名、お前まで……」

霧島（いいわ。でかしたわよ榛名！）ガッツポーズ

榛名「お願い……です。初めてのデートが全員一緒なら、榛名も心置きなく楽しめると思うので……」

提督「むう……」

ギユ

霧島 「提督、私からも改めてお願いします。一緒にシテくださいませんか？」 ジツ

榛名 「大佐……」 ウル

提督 「ぐ…… 分かった」 ガク

霧島 「つ、ありがとうございます！」

榛名 「大佐あ！」 パア

提督 「じゃあ…… この日でどうだ？ 少し遅くなるが、夕方くらいから」

霧島 「ええ。了解しました！」

榛名 「了解です♪」

提督 「そうか。じゃあまたその日にな」

霧島 「はい！ それではお姉様達に知らせてきます」

霧島 「大佐、本当にありがとうございます。失礼します♪」

バタン

提督 「…… ふう」

提督は溜め息を吐くと同時に深く椅子に座り直した。

榛名 「あ、大丈夫ですか？」

提督「ああ。大丈夫だ。少し慣れない決断をして気疲れしたただけだ」

榛名「やっぱり4人一緒だなんて、迷惑……ですよね。ごめんなさ」

ポン

榛名「う……？」

提督「元々俺が硬派な所為もある。だが、それとて精神を頑強にする良い機会と考えれば……」

榛名「た、大佐？」

提督「すまん。つい自分に言い訳をしてしまった。まあなんだ、気にするな。俺も榛名達と楽しい思い出を作れるように最善を尽くす」

榛名「あ、ありがとうございます」（なんか凄い気合を感じる）

提督「……すまん。こんな時に限って適切な態度を取る為にはどうしたらいいか頭が回らない」

榛名「え？」

提督「柄にもなく混乱しているんだ」ポリポリ

榛名「ふふ、相変わらずお顔からは分かり難いですね。大佐？」

提督「うん？」

榛名「こういう時は——」

ギユ

提督「ん……………」

榛名「こうやって抱きしめて貰えると榛名は嬉しい……………落ち着きます」

提督「そうか」

榛名「大佐は、落ち着きました?」

提督「方法としてはあまり人前ではできないが……………。そうだな、落ち着く」

榛名「……………良かった♪」

くその頃の金剛の部屋

金剛「ワオ! 霧島、それ really !?」

霧島「ええ。間違いありません。約束してきました」

金剛「さつすがワタシの妹ね! 愛してルワ霧島ツ♪」ギユ

霧島「ん……………もう。お姉様つたら♪」

比叡「ひえええ……………。い、いきなり全員とデートですか。た、大佐もなかなかやり
ますね」

金剛「そうヨ、比叡。初めての Date が妹たちも一緒なんて素敵ネ♪」

比叡「それはわたしも同意見です! んー、デートかあ……………初めてだから

なあ………何着て行こうかな………」

霧島「え？」

金剛「What？」

比叡「え？」

霧島「………ねえ比叡姉様」

比叡「？」

霧島「服っていつも着てる服じゃダメなんですか？」

比叡「えっ」

金剛「ワタシ、服はこれとパジャマしか持ってないヨ？」

比叡「………も、もしかして二人とも最初から普段着を着て行くつもりだったんです

か？」

霧島「やはり問題が………？」

金剛「そ、そうナノ？」

比叡「いやあ………それは流石に………」

霧島「くっ、どうすれば!?! 何を着れば!?!」

金剛「だ、だから服はこれシカ………」

比叡「ちよ………落ち着いて!」

霧島「落ち着けと言われても、これじゃあダメなんですよね!？」

金剛「どうしよう…… どうシヨウ……」ハンベソ

比叡「ふう…… 仕方ないです。不肖、この比叡が二人に服を選んであげます」

霧島「比叡お姉様!」パア

金剛「ウー…… 比叡イー!!」ブワッ

この日二人は比叡の意外な女子力の高さを目の当たりにする事となった。

第33話 「から騒ぎ」

金剛「大佐ア！」

比叡「大佐、今日は宜しくお願ひします！」

霧島「お待たせしました。大佐」

榛名「すいません。待たせてしまいました？」

提督「……」

霧島「大佐？」

提督「金剛と榛名は眼鏡を掛けて来たのか……伊達か？」

金剛「イエース！ これもオシヤレの一種だつて比叡が言つてマシタ！」

榛名「私も同じ理由で……。大佐、その……。似合つてますか？」

提督「ああ。2人ともなかなかのものだと思ふ。榛名は淑やかさに磨きが掛かった感じがする」

榛名「淑やかだなんて、そんな……♪」フルフル

金剛「ねえ大佐、ワタシはワタシは!」ピヨソピヨソ

提督「お前は、髪を全部下ろしてストレートにした所為でもはや別人だな。メガネの

効果もあつて非常に大人しそうな印象だ」

金剛「大人しいつて、お淑やかつてことデシヨ？ やつたネ♪」

提督「ああ、その通りだ。だが、だがな金剛」

金剛「hm……？」

提督「なんでお前だけ学生服なんだ？」

比叡（あ、やつぱり）

榛名（やつぱり気になりますよね……）

霧島「？ 何か問題でもあるのですか？」

金剛「そうヨ！ これ、凄く pretty じゃナイ？」

比叡「ごめんなさい大佐。お姉様何故かそれを凄く気に入つちやつて……」

金剛「日本の女子コーセーはセンスがいいネ♪」クルクル

提督（……せめて霧島が教師っぽい格好だったらな）

霧島「た、大佐。私をそんなに見つめてどうしたんです？」ポ

提督「いや、なんでもない」

提督（それにしても……）

・金剛：女子高生の夏の制服、ストレートパーマ&眼鏡

・比叡：ノースリーブのシャツ、薄いチエックのミニスカート

・霧島：デニムのショートパンツ、黒のインナー、半袖のレースのカーディガン

・榛名：水色のノースリーブワンピース（腰に白いリボン）ポニテール&眼鏡

提督（一様に恰好が異なるが、元々の素体が良いから結局よく似合っている）

提督「大したものだな」ボン

榛名「大佐？」

提督「ん、ああ悪い。さ、行こうか」

金剛「大佐、手繋ぎまシヨウ♪」ギユ

比叡「あ！　じゃ、じゃあわたしは左手………」ギユ

霧島・榛名「う………」

提督「………交代で代ってやれ」

——数分後

霧島「私達の番ですね♪　では、大佐」グツ

提督「む………」

金剛「な………!?!?」（う、腕を組んだ！）

榛名「………失礼しますね」グイ、フニイ

提督「おい」

比叡「ええ!」（あ、当ててる…… 当ててるよね、あれ!）

霧島「さあ行きましょうか」シレ

榛名「そうですね♪」ニコニコ

金剛・比叡「うー……」

提督（なんだこれ……）

〈映画館

提督「まずは映画か……」

金剛「大佐、どうしたノ?」

霧島「この映画はお嫌いでしたか?」

提督「いや、そうじゃない。せっかくの機会なのに、いきなりただずつと観ているだけになるぞ?」

比叡「雰囲気を楽しむのもデートの一環ですよ、大佐」

榛名「榛名は大佐と一緒にこれが見たいです♪」

提督「そうか。分かった」

〈劇場内

金剛・比叡「zzz……♪」

提督（上映開始数分で2人揃って俺の膝を枕にして寝た……）

榛名「大佐……ちゅ……ん……」スリスリ

霧島「榛名、ずるい……わよ……ん……」スリスリ

提督（後ろの二人は周りが暗い所為か大胆に甘えて来る……）

提督「……」（映画に集中できん……）

——数時間後

榛名「面白かったですね♪」

霧島「そうね。なかなか良かったわ」

金剛「ふああ……寝ちやったネ」コシコシ

比叡「くあ……んむ……おはようござやます……」ムニャ

提督「……」（この中に映画の内容をちゃんと覚えてる奴はいるのか……？）

〈喫茶店

提督「俺の驕りだ。何でも好きなのを食べろ」

金剛「ワオ！ thank you ネ、大佐♪ じゃあオールグレイお願い♪」

比叡「あ、わたしハンバーグ！」

霧島「エスプレッソお願いします」

榛名「そ、ソーダ……」カア

提督「せめてメニニューを見てから決めろ。セットもあるぞ」

〔夜、鎮守府前砂浜〕

提督「宵も深まったな……。ベタではあるが、ここで暫く休んでから帰ろう」

金剛「Oh……。前に遮るものがないカラ、空を凄く広く感じるヨ」キラキラ

榛名「素敵です……」

霧島「流石大佐♪」

比叡「夜戦では空なんか全然集中して見れないもんね……。こんなに大きかったんだ……」

金剛「ねえ大佐……」

提督「ん？」

金剛「泳が……。ナイ？」シユル……。パサ

比叡「お、お姉様!?!」

霧島「榛名、止めて！」

榛名「／＼／＼」プシュー

提督「金剛、やめておけ」

金剛「Why?」下着も水着も隠してる面積は一緒ヨ?」

提督「防水性が違うんだ。風邪をひくかもしれない。やめるんだ」

金剛「ワタシ魅力ないカナ……」グス

提督「結論を飛躍させるな。そうじゃない。心配だからやめて欲しいんだ」

金剛「大佐…… わかりまシタ」

提督「うむ。それじゃあ、そろそろかえr」

金剛「次は水着持つてくるカラ next time は夜の海を一緒にシマシヨウ

♪

霧島「シ、シマシヨウってなんですか!? 泳ぎですよね!?」

比叡「あ…… じゃ、じゃあその時はわたしも……」

榛名「榛名も行きますから!」大佐!」

提督「お前たち、帰る時くらい大人しくしないか」

第34話 「提案」

隼鷹「大佐、歓迎会しようよ！」

提督「歓迎会？」

隼鷹「そう！ 夕雲ちゃんの歓迎会」

提督「夕雲の……」

隼鷹「他所からうちに来たのって、あの子が初めてでしょ？ だから歓迎会をしないかなって」

提督「ふむ。そういうばうちは、打ち上げや慰労会はやった事があるが歓迎会はまだなかったな」

隼鷹「でしょー？ だからあやってみない？」

提督「ふむ……」ジツ

隼鷹「ちよ、な、なんでそんなにこつち見るの？」ドキ

提督「隼鷹、お前まさか単に酒が飲みたいから歓迎会を提案してるんじゃない？」

隼鷹「何それ!? ひどい！」ガーン

提督「ん、そうか。本心だったか。それは悪か」

隼鷹「いや、まあ確かにお酒は飲みたい……けどね？」テヘ

提督「まあいいだろう、許可しよう。今夜にでもやるか」

隼鷹「ヒヤッホー！ 酒宴だあ！」

提督「おい。一瞬で歓迎会を飲兵衛の集会にするんじゃない」

隼鷹「冗談だつて♪ 嘘、ウソ♪」

提督「本当か……？」

隼鷹「う……あつ！ それじゃ、あたし皆と夕雲ちゃんにも知らせてくるね！」

提督「待て」

隼鷹「は、はい」ビク

提督「ここを出るついでに叢雲を呼んできてくれないか？」

隼鷹「叢雲を？ 了解！ そいじゃ失礼しましたー」ササー

ボタン

提督「正に『逃げるように』だな」

——数分後

叢雲「来たわよ」

提督「ああ、ご苦労。少し確認したいことがあつてな」

叢雲 「確認？ 何かしら」

提督 「まず、夕雲の歓迎会の事は……」

叢雲 「知ってるわ。大佐に呼ばれてる事を伝えられた時に一緒にそれも聞いたから」

叢雲 「いいんじゃない？ あの子もきつと喜ぶと思うわよ」

提督 「そうか、そうだな」

叢雲 「確認したい事ってそれだけじゃないわよね？」

提督 「ああ。例のチップ、だったか。感情を制御する装置の事だ」

叢雲 「ああ」

提督 「夕雲はうちとしては初めて受け入れた他所からの艦娘だ。という事はだ」

叢雲 「取ったわよ」

提督 「…… そうなのか？」

叢雲 「既に生まれて自立してるから、どう除去したのか気になるのね」

提督 「そうだ。まさか無理やり意識を、という事はあるはずないな」

叢雲 「くす。そんなことしないわよ」

叢雲 「夕雲には直接、理由を話して除去させてもらったわ」

提督 「本人に直接話したんだな」

叢雲 「ええ。彼女ならこの事実を知っても理解できると思ったし。それに」

提督「……………」

叢雲「理解者は多いに越したことはないし、ね？」

提督「そうだな。いつまでも隠しておきたくはないしな」

叢雲「夕雲には口外しないように頼んであるから、打ち明ける役が大佐なのは変わってないわよ」

提督「了解した。それでいい」

叢雲「確認したい事は以上かしら」

提督「そうだ。もう戻っていいぞ」

叢雲「そう……………」

提督「……………ん？」

叢雲「……………ねえ、今ここは私達二人つきりよね」

提督「……………そうだな」

叢雲「キスして欲しい」

提督「仕事中にそういう事はしない」

ギユ

提督「む」

叢雲「ね、お願い。キスだけでいいから」ジッ

提督 「……」

叢雲 「それ以外は何もしない。ホントよ？ ひ、卑猥な事もしないから……」カア

提督 「叢雲」ソ

叢雲 「なに——ん……」

提督 「……」

叢雲 「ん……む……はあ」ペロ

提督 「んくつ……ふう……」

叢雲 「はっ……ふう……ふふ♪」トロソ

提督 「……舌を入れるのは反則だ」

叢雲 「あら、そんな条件は聞いてないわよ♪」

提督 「全く……」

叢雲 「……ねえ」

提督 「なんだ？」

叢雲 「また、シテね？」

提督 「……ああ。またな」

第35話 「歓迎会（前篇）」

青葉「それでは只今より、我が鎮守府の新しい仲間、夕雲ちゃんの歓迎会を始めたいと思います！」

ワアアアアア

青葉「はい皆さん、ご静粛に！ 直ぐに始まりますから！」

青葉「では早速ですが、今回の主賓夕雲ちゃんよりお言葉を頂きます！ 夕雲ちゃん、どうぞお願いします」

夕雲「あ、その…… 今日私なんかの為にこの様な席を設けて頂き、大変感謝しています」

夕雲「新参者ですが、これからも仲良くして頂けると嬉しいです。皆さん宜しく願います！」ペコ

ヨロシクー！

青葉「はい、夕雲ちゃん。挨拶を短くまとめて頂きありがとうございます！ とても良かったですよ」

青葉「ではお待たせしました。最後に大佐より乾杯の音頭を頂き、歓迎会の開始の合

図とさせて頂きます！ 大佐、お願いします！」

提督「皆、俺からも新しい仲間、夕雲の事を宜しく頼む。これからも力を合わせてこの鎮守府を盛り立てて行って欲しい」

提督「それでは、挨拶もこれくらいにして…… 乾杯っ」
カンパーイ！

隼鷹「大佐ー飲んでるー？ あははー♪」クルクル

提督「お前はできあがるのが早すぎだ」

飛鷹「もうっ、こーいう時くらいしかこんなになんないわよー。大佐って本当に、か・た・す・ぎ♪ ヒック」グリグリ

提督「痛いからやめろ」

電「わ、わっ。飛鷹さんが大佐のほっぺをグリグリしてるのです」

陽炎「あ、本当だ。後が怖いわよ。大佐あー、後でこっちにも来てよねー

！」

龍驤「お、この中トロめっちゃ美味しいやん！」

不知火「不知火が狙っていたのを掠め取るとは…… 宣戦布告と見なします」キリッ

瑞鳳「龍驤くこのたまごも美味しいわよ♪」

利根「改めてこの空母二人は駆逐艦達に混ざつても違和感ないのお……………」

高雄「二人とも可愛いわね」

古鷹「そ、それでいいのかな……………」

足柄「あ、大佐」

提督「足柄、お前は飲んでないのか？」

足柄「ん？ 飲んでるわよ？」カロン

提督「ウイスキーか。大丈夫か？」

足柄「嫌いな味じゃないんだけどね、慣れてたくて」

提督「そうか。あまり、無理して飲むなよ」

足柄「んー」オヤユビb

筑摩「大佐はお飲みにならないのですか？」

提督「飲んではいらぬぞ。回らないように調整はしているが」

筑摩「そうですか。宜しければ一献頂いていきませんか？」ス

提督「頂こう」

熊野「あー良い気分ですワー♪」クルクル

鈴谷「あははは、ホントだー世界が丸い！ 最上んも、飲んでるう？」

夕雲「あの、私夕雲ですけど……。あと、世界が丸いのは当たり前ですよ……？」
最上（夕雲が二人の相手をしてくれて助かったなあ。二人とも酒癖悪すぎだから）コソコソ

五十鈴「ハチってツナマヨが好きなの？ さつきからずっと食べてるわね」

ハチ「そういうわけではありませんが…… 驚きです」

秋雲「ん？ 何がー？」

ハチ「ツナとマヨネーズがこんなに合うなんて……」

木曾「マヨネーズは万能だからな。お前らが好きな間宮のアイスクリームにも結構合うぞ？」

イムヤ「アイスクリームに!？」

神通「イムヤさん、それ嘘ですよ。木曾さんも適当なことを言って……」

木曾「あん？ 本当に俺はかけてるぞ？」

神通・五十鈴・秋雲「えっ」

涼風「てえやんでえいっ♪」ザブツ

矢矧「おい……涼風が頭から酒をかぶってるぞ……」

黒潮「飲めないのに意地張って無理するからや」チビ

金剛「黒潮はへーキなの？」

黒潮「うちは元々お酒は好きやで？」

阿武隈「駆逐艦ってお酒を飲ませていいのか、自分の判断が怖くなる時あるよね」

赤城「見た目が可愛いですからね」ガブガブ

瑞鶴「樽ごと飲んでも平気な赤城さんの方が怖いわよ……」

大井「どうせ私なんて、ガチレズで通ってる嫌な女よ……」

夕張「き、北上……大井、どうしちゃったの？」

北上「なんかお酒が変な風に入っちゃったみたいだねえ」

大井「大佐も私みたいな疑惑のある女なんかどうせ……」

北上「普段からそのモラルを保持してりやいいのにな」

摩耶「キャラ付けも大変だなあ」

夕張「え。そ、そうなの？ あれってわワザとだったの？」

北上「素面の時に聞いてみるといいよ。……魚雷が飛んでこなければいいけどね」ボソ

大井「ああ？ 夕張あたしに何か用？」

夕張「ひっ!？」

摩耶「大井は暫く禁酒決定だな、こりや」ニヤニヤ

第36話 「歓迎会（後編）」

大井「大佐！」ガシッ

提督「どうした？ お前も大分酔っているな。素が出てるぞ」

大井「酔ってないとやっつけられないのよ！」

提督「一体どうしたんだ……」

北上「いや、それが……」

大井「もう！ 今は北上さんじゃなくて私を見て！」ダキッ

提督「こら、よせ」

北上「……む」

大井「大佐、私ガチレスなんて噂があるみたいだけど、そういうの北上さんにだけだから……」

提督「ん？」

大井「大佐だけは特別だから……。だから……。ね？」ググ

提督「おい、まさか……。こんな公衆の面前で。ぐっ……。やめろ大井」

大井「大佐のキス頂きm」

ガシ

北上「はくい、大井つちそこまでだよ」

大井「ああんっ、北上さん何を!？」

北上「大井つちはちよつとそこで頭冷やそうね」

大井「いや! 離して北上さあん!」ズリズリ

提督「助かった。北上、恩に着る」

北上「……」ピタ

北上「大佐あ」

提督「うん? つむぐ」

チュツ

北上「浮気も程々に、ね?」ウイソク

大井「えっ、北上さん今大佐に何をしたの!? ねえ!？」

北上「なんでもないよ? さ、行こっか大井つち」

大井「嘘! 何かしたよね!？」 ねえ、聞いている!？」

北上「♪」ズリズリ

提督「……」

蒼龍「北上つてば、だいたーん」ニヤニヤ

榛名「……」プルプル

長門「なんだ、無理やりやつても抵抗しないじゃn」

陸奥「できるわけないでしょ。力では敵わないんだから」

扶桑「ふふ…… 北上さん…… やりますね」

山城「ね、姉様？」

日向「ふむ…… あれくらいなら……」

伊勢「何をする気よ日向？」

明石「な、なんか戦艦組の様子がおかしくない？」

あき「ん？ そうでありますか？」モグモグ

加古「あつちゃんは相変わらずマイペースだねえ」パクパク

妙高「それは貴女も人の事言えないと思いますよ？」クス

鳥海「それ、頂きです」ヒュッ

衣笠「つと、そうはいかないよ！」ガシッ

鳳翔「食べ物で遊んだらダメですよ？」

球磨「てんゆー！ ヒック、今日こそ決着をつけてたるクマ！」

天龍「お？ なんだなんだあ？ 野獣コンビが俺に挑むってかあ？」

龍田「命知らずね♪」

多摩「ヒック……ふふー。せいぜいいい気になゆといいにや！ 大佐は多摩達みたいにやつちゆましいお胸が好きなのにや」

球磨「そうクマ！ そんなけーじゆんの癖に下品に膨らんだ脂肪のカタマリなんかで
大佐をゆーわくできつと思つたらおーまちがいだクマ！」

天龍「……ほう？」ピキ

龍田「これは少くしお仕置きが必要かもねえ？」ピキピキ

五十鈴「……ねえ、あれって私達の事も言つてるのよね。きつと」

名取「えつ。わ、わたしなんて……」カア

長良「あはは……わ、わたしやっぱり運動ばかりしてるから、こんななのかな……」

由良「あ、あの4人だけ特別なのよ！ きつとそうよ！」

川内「メロンはどう思う？」

夕張「わ、私に訊かないでよ！ ていうかメロンて何よ!? 私だつてそうなりたかつ

たわよ！」ブアッ

望月「胸の有る無しでしか大佐の事を考えられないなんて悲しいねえ」グビ

谷風「お、望月ネーサン良い事言うね！」グビ

長月「胸なんて……飾り物だ……」グビ

菊月「長月、嫉妬はよせ。でないとまたあいつらに付け入る隙を与えてしまうぞ」グビ

Z3「どうして……どうして私も改二なのに……！」グビ

Z1「じえ、ジエーン飲みすぎだよ」アセ

響「今日は……飲もう」

初雪「やつぱりあつた方がいいのかなー……」ペタペタ

霞「境遇の改善を大佐に要求するわ！」

大潮「お、落ち着いて下さい。大佐に言つても仕方ないですよ」

秋雲「いやあ？ 案外大佐に頼めば何とかなつたりするかもしれないよ？」

朝潮「そ、それつてどういう事ですか!? 詳しくお願いします！」

荒潮「うふふ、大佐に大きくしてもらうのね？」

霞「大佐がそんな事できるの……？」

五月雨「え、あの…… それってどういう意味……」カアア

満潮「わたし、ちよっと大佐に訊いてk」

初春「待って待て。そう急ぐでない」ガシ

叢雲「そうよ。今の太佐にはちよっとタイミング悪いわよ」

提督（油断していたとはいえ、こんな公衆の面前で俺は……）ズーン

トントン

提督「なんだ？ 悪いが後にしてくれ。今は一人に——ぐぶつ」

B i s 「大佐捕まえらー♪ どう美味しい？ 日本の伝統の谷間酒よ！」グイグイ

加賀「つ、マリアさん。離れなさい、直ぐに」キツ

赤城「そ、そうです！ それができるのはマリアさんだけじゃありませんよ！」

愛宕「あら、呼んだく？」

加賀「強敵が、増えた!？」

千代「そ、それならわたし達だつて！」

千歳「達？ 達って私も入ってるの!？」千代田！」

翔鶴「皆さん落ち着きましょう」フラァ

飛龍「あ、翔鶴ネーサン良いところに…… つてうわ……」

翔鶴「大佐がすきなわあ、ヒック。谷間じゃけじゃないんでしゅよく、ヒック」

加賀「それは本当ですか？ 胸でないなら勝算があります。是非ご教授を」

翔鶴「はいよくできましたあ♪ じゃあ教えますね？ それなあ……」

比叡「あ、まさか……霧島！」

霧島「え？」

翔鶴「ワクむぐ!!」

比叡「間に合った！ 霧島は翔鶴さんをトイレに運ぶのを手伝って！」

霧島「は、はい？ 分かりました！」

加賀「待ちなさい。秘密を隠そうとするのは理解できなくもありませんが……赤

城さん？」

赤城「加賀さん……ごめんなさい。秘密を守るのも攻略の一つなの。ここを通す

わけには行かないわ」

祥鳳「な、なにこの展開」

陸奥「マリアさん、大佐を離してあげて？ なんだかグツタリしてるわ」

Bis「あ、ホントだ。ごめんね大佐あ。はい。陸奥さん大佐あげゆ」

提督「……」

陸奥 「うん。ありがとう。ちょっと休ませてくるわね。夕雲ちゃん」

夕雲 「あ、はい」

陸奥 「ちよつと大佐を介抱するの手伝って貰える？」

夕雲 「分かりました」

陸奥 「ありがとう。それじゃ取り敢えず執務室に行きましよう」

夕雲 「はい」

提督 「……」グツタリ

第37話 「悪戯」 R—15

提督「……」

夕雲「大佐、起きませんね。大丈夫でしょうか」

陸奥「息はしてるし、今は寝てるみたいね」

夕雲「そうですか。ならいいのですが」

夕雲「……」

陸奥「どうかしたの？」

夕雲「あ、いえ。大佐の寝顔がちよっと珍しくて」アセ

陸奥「ああ。ふふつ、そうよね。いつも気難しい顔してるもんね」

夕雲「でも優しい方ですよ」

陸奥「うん。前からそうだったけど今は、それを無理に悟らせないようにしたりしないから誰でも気付けるわね」

夕雲「前は？」

陸奥「うん。ちよっと私達と大佐との間に壁みたいのがあってね。この人あまり感情を悟らせないようにしてたの」

夕雲「そんな事が……」

陸奥「あ、でも優しかったのはその時から変わってないわよ？　今が前と比べて接し易くなった程度の違いだから」

夕雲「それを聞いて安心しました。私が元居た場所の提督は本当に酷い人でしたから……」

陸奥「あ、ごめんね。変な事思い出せちゃった？」

夕雲「大丈夫です。あそこ居たからこそ今ここに居られるだと思えば、それほど気にはならなくなってきましたから」

陸奥「そう……よかったわ」

トテトテ

夕雲「大佐、よく寝てますね。少しお酒が入っているからでしょうか」ナデ

提督「……」

夕雲「ふふ、撫でてしまいました。いつもはしてくれる側なのに、なんか可愛いですね」

陸奥「夕雲ちゃん……」

夕雲「……」ソ

チュツ

陸奥「あ」

夕雲「ん…………… 頬なら、そんなにズルく…………… ありませんよね？」カア

陸奥「え、あ…………… そう、ね。かな？」

夕雲「つ、なんだか急に恥ずかしくなってきました。私会場に戻りますね」

陸奥「ああ、うん」

夕雲「それ…………… 今日には本当にありがとうございました。大佐が目を覚ましたら宜しくお伝え下さい」

陸奥「分かったわ。夕雲ちゃんも今日は楽しんでね」

夕雲「はい、勿論です。それでは、失礼します」

バタン

陸奥「……………」

陸奥「大佐のお世話、任されたのよ…………… ね」チラ

提督「……………」

陸奥「本当に、よく寝てるわね……………」ツンツン

提督「ん……………」

陸奥「っ！」

提督「……」

陸奥「…… これくらいじゃ起きないか」ホッ

陸奥（ちよつとだけイタズラしちやおうかな）

陸奥「……」チラ

提督「……」

陸奥（よし、）

陸奥「……」ん」プチ、スル

陸奥（私つたら、寝ているとは言え、なに人前で下着になつてるんだろ……）ドキ

ドキ

陸奥「でも……」チラ

提督「……」

陸奥「ちよ、ちよつとくらいいいよね？」

陸奥「よいしよつと」ギシ

陸奥（今度は力を加減して優しく包むように……）ダキ

提督「……」ん」

陸奥（あ、なんか大佐の顔が少し穏やかになつたような……。 やっぱり人肌の温か

さが良いのかな）

提督「すう……」スリ

陸奥「っ！　くつく」

陸奥（い、今凄い電気が走ったみたい。大佐気持ち良いの？）

提督「……」

陸奥（し、下着も取ってみよう……　かな）

陸奥「ん……」プチ

陸奥（ダメ。緊張してズラすので精一杯……　でも、これちよつと上から覗いたら丸見えね）

陸奥「大佐……」

提督「ん……　すう……」スリ

ポロ

陸奥「！」

陸奥（取れちゃった!!）

提督「……」グリ

陸奥「……　やつ、はあ」

陸奥（あ、頭動かさないでっ。グリグリしないでっ。こ、擦れちやうつ）

——数分後

陸奥「はあ、はあ……つ、はあ……」

陸奥（ダメ。これ以上抱いてたら理性がどうにかなりそう……。もう離れよう）

陸奥「つしよ」ギシ

ふう

陸奥「!? つ、……はあっ」

陸奥（息が直に……！）プルプル

提督「……」

陸奥（私、本当に何やつてるんだろう……。眠ってる大佐に馬乗りになって、目の

前で胸丸出しで興奮しちやつてる……）

陸奥（ちよ、ちよっとだけ体下げてみようかな……。大佐気持ち良さそうだし。それ

に、もしかしたら口で直接……）

陸奥「んん……」ググ

スウー……スウー

陸奥「くう……！」プルプル

陸奥（息が……熱い！も、もうダメ。もう……わたし……！）

コンコン

陸奥「！」

く部屋の向こう

島風「大佐、大丈夫？　夕雲ちゃんに聞いたから島風、様子見に来たよー？」

ガチャ

島風「あ、陸奥さん！」

陸奥「ダメよ島風、大佐今寝てるんだから」

島風「えっ、そうなの？　まだ起きない？」

陸奥「どうかしら……　まだ暫く起きないかも」

島風「そうなんだ。じゃあ、会場で待ってた方がいいね！」

陸奥「それが賢明ね」ニコ

島風「……？」

陸奥「？　なに？」

島風「陸奥さんなんか体がすごく赤いよ？　大丈夫？」

陸奥「っ！　そ、そう？　か、風邪かしら」

島風「もしそうだったら無理しない方がいいよ！」

陸奥「だ、大丈夫よ。多分お酒の所為よ。少し飲んだから」

島風「なんだ、そっかー。じゃ、一緒に会場に行こう♪」

陸奥「ええ。そうしま……」

島風「? どうしたの？」

陸奥「あ、えっと……ごめんね。先に会場に行つて。私ちよつと部屋で顔を洗つてから行くわ」

島風「うん。分かった! またね!」ブンブン

陸奥「うん。後でね」フリフリ

陸奥「……」

陸奥（下、替えてこないと）カア

第38話 「寝起き」

提督「ん……ふう」

提督（寝ていた？ いや、俺は歓迎会の時に……）

提督「情けない。気絶して運ばれたか……ん」

何となく頬が僅かに通常より温かい気がしが、気のせい程度の違和感で、体にも特に異常は感じなかったので特に気にしないことにした。

提督が身を起こそうとすると足に何か重さを感じ、思うように動けなかった。

提督「ん？」

島風「zzzz」

不知火「すう……すう……」

提督「なんでまたこんな所に」

島風「ん……？」「コスコス」

提督「おはよう」

島風「あっ」

提督「？」

島風「いつけない、寝ちやった。起きる前に行こうと思つてたのに」

提督「何をしてんだ？」

島風「歓迎会が終わつても大佐が戻つてこなかったからまた様子を見に来たの」

提督「また？ という事は最初に俺を運んでくれたのも島風だったのか？」

島風「ううん、違うよ。陸奥さんと夕雲ちゃんだよ」

提督（陸奥どころか主賓だった夕雲にまで迷惑を……どんな顔をして礼を言つたらしいのやら）

提督「そうか。じゃあ、お前は途中で一回様子を見てくれたという事か」

島風「そうだよ。大佐はまだその時も寝てたけどね」

提督「やれやれ。格好の悪いところを見せてしまったな」

島風「そんなことないよ！ 提督可愛かった！」

提督「かわい……」

不知火「んん……？ 島風、何を騒いでいるんです……」

島風「あつ、不知火起きた！」

提督「おはよう不知火」

不知火「……か」

島風「？」

提督「不知火？」

不知火「……っ！」バツ

完全に意識が覚醒した不知火は、即座に提督と島風に背を向けると、顔を真っ赤にしてわたわたと身だしなみを整え始めたし。

不知火「た、大佐……見ないでくださいね」

提督「何をだ？」

島風「何をー？」

不知火「寝起きの顔なんて、淑女として恥ずかしくて見せられませんっ」

島風「えー？　なんでー？　島風は平気だよ？」

不知火「貴女も少しは気を遣うべきですっ」

島風「大佐、どうしてわたし怒られたの？」キョトン

提督「女の子にはいろいろあるんだ」ポン、ナゲ

島風「あう……んふふー♪　よく分らないけど別にいいや♪」

不知火「な!?!? ……つく」シュババ

不知火「……ふう。お待たせしました」クルツ

提督「ああ。驚かせてしまって悪かったな」

不知火「いえ、それはもう気にしないで下さい。不知火にも落ち度がありましたから」

提督「そうか。助かる」

不知火「……………」

提督「？」

不知火「あの……………」

提督「うん？」

不知火「お待たせしました……………」

提督「ああ。きれいになつてゐるぞ」

島風「？」クビカシゲ ↑いつもと同じようにしか見えない

不知火「ありがとうございます。いえ、そうではなくて……………」

提督「ん？」

不知火「し、不知火も頭撫でて下さい……………」カア

提督「お前さつき身だしなみを整えたばかりじゃないか。撫でたりしたらまた髪が乱れるかもしれないぞ」

不知火「そ、そういうのはいいんです。仕方ないですから」

提督「そうなのか？」

不知火「そうです。だから……………お願い……………します。撫でて……………ください」グ

ス

自分からお願いするのが余程恥ずかしかったのか、不知火はどうとう泣いてしまつた。

島風「あー！ 大佐、不知火をイジメたー！」

提督「なに？」

島風「もうダメだよ！ 意地悪しちや！ 早く撫でてあげてー！」

提督「ああ」（俺が悪いのか？）

提督「不知火」

不知火「……ぐす……はい」

提督「来なさい」

不知火「っ、大佐！」ダキッ

島風（あれ？ 撫でてもらうだけじゃ……）

提督「全く。俺の前では自分に素直になると言ってただろ？」ヨシヨシ

不知火「ごめん…… なさい。やっぱり…… 恥ずかしくて……」スリスリ

島風「むー……」

ギユ

提督「ん？」

島風「大佐、島風も！」

提督「なに？」

島風「島風もギョツとして、スリスリさせて！」

不知火「大佐、手を止めないでください」スリスリ

島風「あー！ズルイー！大佐、島風も、島風も！」ジタバタ

提督「分かった。分かったから、ほら不知火の隣に來い」

島風「！ありがとう、大佐♪」ダキッ

——数分後

提督「なあ、まだやめたら駄目か？」

島風「ダメ！もっともっと♪」スリスリ

不知火「そうですね。もう少しお願いします。……ん♪」スリスリ

不知火（島風、ナイスです）グッ

提督「そうか。分かった……」

提督（俺は調子が悪くなって運ばれたんじやなかったのか……？）

第39話 「トレード」

提督「ふむ……」

翔鶴「弾薬、今月は厳しいですね」

提督「そうだな。とうとう3桁だ」

翔鶴「他の資材は6桁あるんですけどね……」

提督「常に保有限界の鋼材とボーキを弾薬と交換できればな」

翔鶴「一度、本部に相談してみては？」

提督「…… そうだな。こうして悩んでも埒が明かないか。翔鶴、通信を繋いでくれ」

翔鶴「はい。分かりました」ニコ

—— 数十分後

提督「ふう……」

翔鶴「どうでした？」

提督「何とかかなりそうだ。特定の資材が不足している鎮守府と交渉して交換するよう

指示を貰った」

翔鶴「よかった♪ それなら何とかかなりそうですね」

提督「そうだな。では早速各鎮守府に連絡を取ってみるか。翔鶴、すまないが」

翔鶴「はい。連絡先の一覧表ですね？ こちらに」トン

提督「ありがとう。ふむ……」ペラ

くとある鎮守府

T督「えっ、資材の交換ですか？」

提督『そうです。何か不足している資材がありましたら、弾薬以外とならで交換が可能なんですが』

T督「というと、そちらは弾薬が不足してるんですね？」

提督『そういう事です』

T督「なるほど。因みに交換をするとして、そちらはどれくらいの弾薬をご希望なんですか？」

提督『そうですね。本当に不足しております……できましたら、今後の事も考えて3万ほど頂けたらと』

T督「3万ですか？ うーん、3万かあ……それは……うーん……」

提督『当方としては弾薬さえ頂けるのでしたら、同数の資材でなくてもある程度融通を効かせることは可能ですか』

T督「ほう。というと？」

提督『そうですね。もし先ほど提示した数量の弾薬を頂けるのでしたら、鋼材かボーキどちらかを一万余分にお付けさせて頂く、というのではどうですか？』

T督「よ、余分に一万ですか？ あ、それは折半とかも可能ですか？」

提督『資材ごとに分割したいという事ですか？ 勿論可能です』

T督「そうですか！ それは助かります。あ、でも本当に大丈夫ですか？ 一万も追加なんて……」

提督『御心配には及びません。その2つに関しては常に大体保有限界を保つてますので』

T督「そ、そうですか……」（一体どういう運用をしてるんだ？）

提督『それで、いかがでしょうか？』

T督「え？ ああ、はい。そちらが問題ないのですからその条件で！」

提督『そうですか、ありがとうございます。では、後ほど本部から指示書が届くと思いますので、交換の手順についてはそれに沿って頂いて』

T督「はい。わかりました。こちらこそありがとうございます。助かります」

提督『いえ、それはこちらと同じですから礼には及びません。では、よろしくお願ひします。失礼します』

T督「はい。それではまた。失礼します」

ガチャ

叢雲「どうだった？」

T督「やったー！ これで資材不足の問題が何とかなるぞー！」

叢雲「そんなに貰えるの？」

T督「弾薬は半分になっちゃうけど、それを補って余りある成果だよ！」

叢雲「へえ、よかったじゃない」

T督「うん。本当にその通りだよ。これで大型建造でまた大和を狙えるぞー！」

叢雲「つ、そういう使い方をやめなさいって言ってるでしょ！」 ドン

T督「じよ、冗談です。ごめんなさい……………」

叢雲「全く、いつまで経っても……………子供じゃないんだから。あら？」

T督「ん？ どうしたの？」

叢雲「さつき交渉していた提督ってこの人よね？」

T督「うん。そうだよ。それが？」

叢雲「この人、階級が大佐ね。貴方より階級が下じゃない。話しぶりから目上の人かと思つてたわ」

T督「あ、ホントだ。多分不足階級の人じゃないかな」

叢雲「不足階級？」

T督「うん。本来は僕と同じか上の階級なんだけど、なんらかの理由で一定の戦果が維持できない人の事だよ」

叢雲「貴方はこの人の事、実際は上の人だと思つてるの？」

T督「そうだね。話し方が落ち着いていて丁寧だったし、奢りとかも感じなかった。多分、少将か中将クラスの大将だよ」

叢雲「階級が安定しないっていうのも大変ね」

T督「僕ら提督の殆どは特別勅令徴兵で集められた人たちだからね。正規の軍人というわけでもないし、仕方ないよ」

T督「どんな人なのかなあ。一度その人の鎮守府を見に行つてみたいな」

叢雲「視察目的なら可能だと思うけど……浮気とかしちや嫌よ？」

T督「大丈夫！ この指輪は裏切らないよ！ カッコカリでも僕は本気さ！」

叢雲「うん……ありがとう♪ ん……」 チュ

T督「ん……」

T提「でも、この資材は本当に有り難いよ。臨時でもね」

叢雲「そうね。また何処の鎮守府に応援要請が来るか分からないし、備えは必要だわ」

T督「あのレ級達強かったなあ……」

叢雲「襲われた鎮守府は半壊だったわね。全滅する前に間に合って良かったけど……」

T督「指揮官クラスは全部逃げちゃったからねえ。しかも最後にこっちに向かって」

『またねー』

T督「だつてさ」

叢雲「全くというほど、悪意を感じなかったわね。それでいて敵意はしっかり持って攻撃に迷いが全くない…… 恐ろしい敵」

T督「そうだね。でも負けるわけにはいかない」

叢雲「あまり無理しないでね」

T督「ありがとう。でも本当にもしもの時はごめんね。僕、正規の軍人じゃないけど、それでも軍人としての覚悟は正規の人以上のつもりだから」

叢雲「絶対にそうはさせないわ……。貴方と私はずっと一緒よ」ギユ

T提「うん…… 僕もそのつもりだよ」ギユ

第40話 「要望」

戦姫「レ級……」

レ級「なにー？ 姫ー」

戦姫「またあの鎮守府を攻撃しないで戻ってきたそうだな……」

レ級「ん？ そうだよ」

戦姫「何故…… 攻撃しない？」

レ級「攻撃したくないから！」 キリッ

戦姫「つ、そんな屁理屈を聞いているのではない！」 ドン

レ級「ねえ、何を怒ってるの？」

戦姫「お前が人間と慣れ合ってるからだ！」

レ級「大佐とだけじゃん。他の海軍はちゃんと攻撃してるよ？」

戦姫「例外などない！ 海軍は、人間は…… 全部敵だ！」

ル級「姫、怒ってるね……」

タ級「そうね。ほいつ」

ル級「やった、ババ取った♪」

タ級「むっ……直ぐにひかせてやるわよ」

ヲ級「タ級って強いけど、ババ抜き弱いよねー♪」

ル級「ねー♪」

タ級「あんた達……今日こそは勝ってみせるわ！」

ル級・ヲ級「はいはい」

タ級「ぐぬぬ……」

レ級「姫さー、人間が全部敵なんて、それじゃ海軍以外も攻撃しろっていう言うの？」

戦姫「何れはね。まずは海軍を潰す！」

レ級「分かんないなー。どうしてそんなに必死なの？」

戦姫「それはこっちのセリフだ！ どうしてそんなに平気な顔をしていられる!? ど

うして海軍を恨まない!？」

レ級「恨む理由がないから」ケロ

戦姫「な……」

レ級「もしかして姫ってさ、僕達が沈んで深海棲艦なった事で海軍を恨むのは当り前とか考えてない？」

戦姫「当然だ。あいつらの所為で、私達は戦いたくもない争いに身を投じさせられ、デ
タラメな指揮の所為で為す術まなく……！」プルプル

レ級「ふーん……まあ、同情はするけどさ。姫って小さいよね」

戦姫「あ……？」ピキ

ル級「あ、姫キレたみたいだよ」

タ級「相変わらず短気ね……ちっ」

ヲ級「そろそろフォローに行った方がよくない？」

ル級「姫、怖いからやだなあ……」

タ級「だからってレ級一人にこれ以上相手をさせるわけにはいかないでしょ？」

ヲ級「誰が相手をしたって姫は怒るよ……さ、行こ」

戦姫「貴様あ！ 命令違反ならまだしも、私に対する無礼は許さんぞ！」ドン

レ級「もう、いちいち地面叩かないでよ。煩いなー」プクー

戦姫「」ぶち

戦姫「このおクソガキがあ!!」ブオツ

カチャ

戦姫「!？」

レ級「……………」

ル級・タ級・ヲ級「……………」

戦姫「き、貴様ら…………… な、何故…………… 何故仲間に武器を向ける!？」

レ級「仲間？ 誰が？」

ル級「うん…………… 姫は仲間じゃないよね」

タ級「勘違いでしょ」

ヲ級「なら仕方ないね」

戦姫「な、な……………」

レ級「姫は僕達の仲間じゃないよ。同じ種類だよ？」

戦姫「そ、それでも同じ姿をしているのだから仲間だろう!？」

レ級「なんで？ 人間だって人間同士で戦争してるよ？」

タ級「そうね。それなのに私達だけ例外ってのもね」

ル級「私達はそんなに特別じゃないよ？」

ヲ級「特別だったら尚更、私戦いたくないなあ…………… 最近面倒」

戦姫「お、お前たち……………」

レ級「僕さ、さつき姫のこと小さいって言ったよね？ それはさ、姫の器の事なの」

レ級「姫、恨みばかりに拘っちゃってき、全然余裕を感じないんだよね」

レ級「戦いにそんな感情なんて持ち込んだら……直ぐに負けちゃうよ？」

戦姫「……！」ゾッ

レ級「僕達さ、ずっと昔、艦娘だった頃にお世話になった提督に何よりも心を鍛えろつてい言われたの。鋼の様な……かつ鋼よりなお硬く」

ル級「それでも体も同じように鍛えれば」

夕級「心身ともに頑強になり、不動不変の精神となつて」

ヲ級「肉体を失つても尚、生前の意志と共に魂は在り続ける」

レ級「その結果が僕達つてわけ」

戦姫「なら、何故……過去の記憶を持ちながらも、一部の人間にのみ甘いだけで他の人間にはああも容赦なく攻撃ができる……？」

レ級「流星にこんな恰好じゃねえ……戻りたくても戻れないじゃん」

ル級「それならいつその事」

夕級「鍛えて貰つた心で」

ヲ級「敵としての覚悟を見せつけるしかないよね」

戦姫（こいつら……！ 普段は飄々としてる癖にこの覚悟の有り様は、どの深海棲

艦よりも凄まじい！）

レ級「姫、僕さ。姫にはもつと強くあつて欲しい。僕達より優れた力を持つているならそれを力だけじゃなくて心でも示して欲しい」

戦姫「……」

レ級「そうじゃないと、僕達は本当に姫の敵になっちゃうかもしれないよ？」

戦姫「……脅してゐるつもりか？」

レ級「ううん。これは僕からの心からのお願い♪」

戦姫「……疲れた。もう下がちなさい。少し休みたいから」

レ級「うん。そうさせてもらうよ。姫、今日のごめんね。バイバイ」フリフリ

夕級「まあ、あまり気にしないで。姫なら大丈夫よ……」

ル級「あ、後でお仕置きとかしないでね？」

ヲ級「そ、それは予想してなかった。姫、失礼しました。ゴメンナサイ」ペコ

戦姫「生意気だけど頼りになる部下か……いえ、部下にしないといけない……」

わね」ポツリ

第41話 「交流（提督サイド）」

「では、ご確認を」

「はい。……問題ありません」

少将は提督から受け取った資材交換の受領書の内容に目を通して問題がない事を確認した。

「そうですか。ではこれで取引は完了ですね」

「そうですね、ありがとうございます。助かりました」

「いえ、こちらもお蔭で暫く弾薬には困らなくて済みます」

「ははは、お役に立てたのなら何よりです」

提督より若く見える少将は、にもかかわらず階級の貫禄を感じさせる笑顔で応えた。

提督はそれだけで相手の有能さを何となく悟り、今回の取引に応じてくれたのが彼でいてくれて良かったと心の片隅で思った。

「それでは、他に特に気になることがないのでしたら、これで……」

出してくれていた珈琲も飲み終わっていたので、部外者が長居するのも良くないと思つて提督が椅子から立ち上がりかけた時だった。

「あ、ちよつと」

「はい？」

「せつかくですから少しお話でもしませんか？ その、親睦も兼ねて」

「え？ ええはい、勿論構いませんよ。叢雲、悪いがこれで暫く時間を潰しててくれないか？」

不意の少将の提案を提督は意外に思いながらも特に断る理由もなかったので彼はそれを快く承諾した。

提督は叢雲に紙幣を何枚か渡した。

叢雲はそれを領いて受け取った。

「ん、喫茶店でも行つてればいいの？」

「ああ。時間は……1時間くらいで？」

「あ、それくらいでいいですよ」

「了解。せつかくだから貴女もも誘つていいかしら？」

「えっ？」

叢雲に声を掛けられた少将の秘書（叢雲）は小さな驚きの声を漏らすと、少将の方を見て指示を待った。

少将は叢雲に笑顔を向けて言った。

「ああ、はい。どうぞ。叢雲、せっかくだから行っておいで」
「いいの？」

「勿論。ほら、君もこれで何か食べておいで」

秘書の叢雲は提督から貰ったお金を握ると上目遣いをして小さな声で訊いた。

「パフェ食べていい？」

「はは、何でも好きなのを食べるといいよ」

「！ ありがとう！ 行ってくるわね♪」

「ああ、行っておいで」

秘書の叢雲はその答に目を輝かせると提督の叢雲が待っている扉の方へと駆けて行った。

「お待たせ。行きましょ」

「ええ、そうね。それじゃ大佐、また後で」

「ああ」

「行ってくるわね提督♪」

「うん、行ってらっしゃい」

ボタンと二人が出て行って扉が閉まると共に、少将が和やかな雰囲気を感じようように

笑いながら口を開いた。

「いやあ、それにしても偶然ですね。連れてきた艦娘が僕の秘書と同じなんて」

「そうですね。ただ、不思議なもので見た目は同じでもやはり雰囲気ですわね」

「誰が誰の叢雲か、が？」

「ええ」

少将は提督の意見に何故か嬉しそうにあいづちを打った。

「あ、そう思いました？ 僕ですよ。なんていうか、そちらの叢雲は僕のこと比べて大人びてますね」

「ええ、大人しい方だと思います。それに優秀な娘ですよ。よく出来過ぎていてこちらの仕事はなくなるくらいに」

「あはは。それは困りますね。いや、うちの叢雲も優秀ですよ？」

「それは見て判りました。子供のような愛想を見せても仕事も隙なくやってくれていさうですね。指輪をしていたところを見ると……」

「ええ、僕の自慢の秘書にして最愛の妻です」

「妻……ですか」

幸せそうにそう断言する少将に提督は返事が少し淀んだ。

少将の言葉の何かを意外に思ったようだった。

少将はそんな提督の様子に気付かず、自ら珈琲のお代わりを注ぎながら訊いた。

「ええ、そうです。そちらは、されてないんですか？」

「ええ、まあ」

「あ、もしかして大佐は独身主義ですか？」

「いや、そういうわけではないんですが……」

「ああ、いや、冗談です。気を悪くされたのなら申し訳ない」

「いえ、まあ、ケツコン自体の考えが今のところないといえますか、決断できないといえますか」

「そうなんですか？」

再び答えにくそうに言い淀む提督の様子にその時初めて気付いた少将が興味ありげに少し身を乗り出して訊いてきた。

「ええ、それにまだうちの艦隊には成長限界に達した艦娘はいませんので」

「えっ」

「どうしました？」

「あ、失礼しました。正直、意外でして。てつきり貴方は僕より練度の高い子をたくさん保有してるものかと思ってたので」

「はは、見た目は老けてても階級がその実績を表してますから」

「あ、いえ、そんなに畏まらないで下さい。僕らの階級なんてあってないようなものですか」

「そうなのですか？」

「え？ もしかして大佐は正規の軍人の方なのですか？」

「恥ずかしながら、これでも士官学校の出です」

「そうだったんですか……」

「意外そうなお顔ですね」

「いや、なんとというか……」

提督の言葉に申し訳なさそうな表情で謝意を表した。

「自分より長く軍にいて、しかも正規の軍人なのに、徴兵で提督になった自分より階級が低い事が気になりますか？」

「えっ、いやまあその……。いえ、そうですね。その通りです」

「遠慮される事はありませんよ。先程も言った通り実績が階級を表しています」

「何かのご事情で戦果を挙げられてないんですよね？」

「いや、ほぼ自業自得ですよ。うちは殆ど遠征と出撃ばかりで、敵海域攻略の出撃をあまり行っていないですからね」

「え」

提督の話に少将は目を丸くする。

それも仕方ない。

自分達の仕事は公務である。

しかも国防に携わる極めて重要なものだ。

なのに個人の我侷のような考えであまり仕事に真摯な姿勢を示さないのは不穩さすら感じた。

「ま、おかげで今回交換して頂いた弾薬以外の資材には事欠いていませんが」

「あの」

「はい?」

「失礼を承知でお尋ねします。まさか、臆病風に吹かれたわけではありませんよね?」

少将の真剣な目に提督は居住まいを正して応じた。

「まさか。自分の命が惜しさに軍人をやるくらいならやらない方がマシですよ」

「ならどうして」

「先程、少将殿は私にケツコンしない理由をお尋ねになりましたよね」

「ええ、でもそれは練度が理由では」

「それは自分からしたら原因です。ケツコンを躊躇っているのは理由が別にあるんですよ」

「別に？」

「人間でない艦娘と恋仲になることに対しての背徳感です」

「……なるほど」

提督の言葉に気を悪くした様子もなく少将は椅子に深く腰掛け直して、どこか自分にも言つて聞かせてるように呟くように言った。

「先にお断り致しますが、私は別に彼女らの事を嫌つてなどいません。寧ろ最近はいろいろ踏ん切りが着いて、その候補の娘が増えているくらいです」

「おお、それは」

「それに、先程背徳感と言いましたが、実際のところ自分に度胸がないだけだと思いません。彼女たちの事を心から愛せられるのか自信がないんです」

「出撃をあまりされないのは、彼女たちを兵器として扱う事を躊躇われているから、という事でしょうか」

「軍人としては甘いと思います。ですが、それこそ人間として譲つてはいけない一線だと思つています」

「大佐は……お優しい方ですね」

提督の話聞いて少将は言った。

「いえ、軍人としては失格です。轟沈させるのが怖いというわけでもなく、単に自分の工

ゴを通していているのですから」

「僕も最初はそうでしたよ。大佐と同じでした」

「ほう」

「でも、彼女たちと一緒に苦難を乗り越える内に気付いたんです。例え何があっても彼女たちとの間に出来た絆は揺るがないと」

「……」

そう静かに言う少将に提督は軍人としての強い覚悟と責任感を感じた。

そして黙って続く言葉を待った。

「大佐は、もう少しご自分の艦娘達を信じてても良いと思いますよ。それが彼女たちにとっても喜びにもなるでしょうから」

「……お強いですね」

「ああ、いえ！ 差し出がましことを言ってしまいました。申し訳ない」

「謝る必要などありませんよ。少将殿のお考えは立派です。そして、私もそれをもっと真剣に考えるべきなのだと思おりました。ありがとうございます」

「そ、そんなお礼なんて！」

「絆……ですか。ケツコンをすれば、その絆も少しは実感できるくらいにはなるのでしょうか」

「ええ、それはもう毎晩」

「毎晩?」

「あ」

少将はしまったという顔をした。

だがもう遅かった。

二人の間に気まずい沈黙が訪れた。

「……」

「い、今のは聞き流してください!」

「……」

「あれ? た、大佐? 聞こえてます?」

（そうか……。艦娘とはいえ、見た目は女性。する事はできるのか。というか、ケツコン

したらあり得るのか? 毎晩はやり過ぎにしても絆を深める為にはやはりやった方が

……?)

「あの、大丈夫ですか? 僕の声聞こえてます?! ねえ?!」

（もし仮に、可能性の上での話だが、複数の艦娘とケツコンするとなると、夜毎に違う娘

と……。いや、下手をすれば乱交のような……。?)

「た、大佐?! 急に顔が蒼くなりましたけど大丈夫ですか?!」

少将は脂汗すら滲ませて顔色を悪くする提督に流石に焦った。そして次に取った提督の行動に驚愕するのだった。

「え、な、なんで拳銃なんか持って……ちよ?! そ、それどうするつもりです?!」

(俺は……軍人として、いや人として何という事を……)

「ええ?! いや、それ冗談になつてないですつて!! 死にますよ?! だ、誰か来てくれー
!」

少将の必死な声がその日、基地中に響いた。

彼のそんな声を始めて訊いた艦娘たちは大いに驚いたという。

第42話 「交流（艦娘サイド）」 R—15（挿絵あり）

村雲「んー、美味しい♪」

叢雲「……そうねえ」

「幸せ一杯と言った顔でパフエを頬張る村雲。

その様子を何処か上の空と言った様子の顔でただ見つめるだけの叢雲。

全く同じ姿だが、纏っている雰囲気は全く異なる二人の艦娘の姿が喫茶店にあった。

村雲「ねえ、貴女さつきから上の空だけ大丈夫？ 頼んだのもコーヒーだけだし」

叢雲の様子が気になったのか、パフエを食べる手を途中で止めて村雲が聞いてきた。

叢雲「ん、気にしないで。ちよつと考え事よ」

村雲「どうしたの？」

叢雲「遠慮ないわね。少しは気を遣ったら？」

彼女は始終、鏡を見ているような気持だったが、自分と同じ姿の“他人”は自分と

違ってあまり気を遣わないタイプのようだった。

村雲「自分自身に気を遣えと言われてもね」

叢雲「ぶつ、あははは。何それ」

村雲「そうじゃない？」

叢雲「屁理屈の様な理屈だけど、解る気がするのが癪ね」

茶目つ気の籠った目で笑いながらそう返してきた村雲に、叢雲も苦笑交じりに返事をする。

そしてなおも興味津々と言った様子で自分を見つめる村雲に、ついに降参と言わんばかりに大きな溜め息を一つつくと、叢雲は悩みを打ち明け始めた。

叢雲「はあ……いいわ教えてあげる。ちよつと悩んでたのよ」

村雲「提督の事でしょ？ そっちの」

まだ何も言っていないというのに確信の籠った口調で村雲は核心を突いてきた。

叢雲「流石、私ね。そうよ」

村雲「提督がどうかしたの？」

叢雲「いや、あなたのこと比べてうちの提督ってよく言えば大人というか、悪く言えば真面目すぎるといふか……」

叢雲は普段のハキハキした態度とは違い、珍しく話し難そうな口調でどう言つたものか悩んでいる様子だった。

それに対して村雲は彼女の悩みを一瞬で見抜き、一刀両断の如くこう一言した。

村雲「なんだ、手を出してもらえないのが不満なんだ」

叢雲「ぶっ！ ストレートね……。結婚してるからかしら」

村雲「うちは毎晩シてるからねえ」

顔を赤くして動揺する叢雲に対して村雲は特に何を気にする風もない様子で更に彼女が予想だにしない事を言ってきた。

叢雲「ま、毎晩？」

村雲「あつ、明るい時もあるわよ。あと、外でもシちやつた事も……」

叢雲「もはや猿じゃない。……。そ、そんなにシちやうものなの？」

村雲「相手が好き過ぎて止まらないのよ。隙あらばすぐに求めちやうのよね」

叢雲「へ、へえ」

叢雲は顔を赤らめつつも村雲の言葉に興味深そうな様子だった。

村雲「貴女、私よりちよつと大人びてる感じしたけど、そういうところ初心なのね」

叢雲「し、仕方ないじゃない。シたこと……。ないんだもん……」

村雲「キスクらいはあるんでしょ？」

叢雲「まあ、それくらいなら……。」（実はないけどね……）

内心悔しさを感じながらも、小さな嘘を彼女は着いた。

流石に目の前の相手を前にして、キスもしてないと言う事は彼のプライドが許さな

かった。

村雲「じゃあ後はもう押すだけよ」

あまりにもあつざりと直接的な手段を提案する村雲。

叢雲はその提案に動揺しつつも、やはりそれしかないのでかとの心は何処かで思いながら彼女の言葉を聞いた。

叢雲「強引じゃない？」

村雲「私が見た限り、あの提督は絶対に自分からは手を出さないわ」

叢雲「……否定できないのが悲しいわね」

村雲「なら、押し倒すしかないじゃない」

叢雲「やれない事はないけど、でもそれしちゃうと抜け駆けになっちゃうからなあ」

村雲「なに？ 他にも提督の事好きな子がいるの？」

叢雲「かなりね」

村雲「なるほどねえ……ま、それはうちも同じだけど」

叢雲「でも、貴方たちは、その……毎晩シテるんでしょ？」

村雲「手出しされないように警戒してるからね。ま、好きな気持ちは止められないから、もし出されちゃってもそんなに怒る気はないけどね」

村雲は警戒していると言いながらも、もし誰かが提督に手を出してもそれが好意から

くるものだったならば、その相手を咎めはしないと云う。

叢雲「寛容ね。うちの提督もそういう柔軟さがあつたらねえ」

村雲「一度やつちやえば、案外フツ切れるものよ？」

叢雲「そうかしら？」

村雲「私がそうだったし」

叢雲「貴女の場合はタガが外れた感じみたいけど」

少し呆れた口調で叢雲は言った。

村雲「似たようなものよ」

叢雲「ふーん……ねえ」

村雲「ん？」

叢雲「そんなに、イイもの？」

叢雲はとても小さい声で、その日一番気になった事を村雲に聞いた。

村雲「好きな人を直接感じられるのよ。イイに決まってるじゃない」

叢雲「……気持ち良い？」

村雲「貴女、自慰はしてる？」

叢雲「っ……ふう。シてるけど」

ここで下手に取り繕っても意味はない、何しろ相手は“自分”なのだ。

村雲「週何回くらい？」

叢雲「い、一回か二回かな……」

村雲「嘘。毎日シテるくせに」

叢雲「な、何で知って……あ」

村雲「ごめん。カマかけた」

叢雲「貴女ねえ」プルプル

叢雲は真つ赤になつて震えながら村雲を睨んできた。

村雲「ごめんつて。でも、我慢しないのは良い事よ？　だつてそうしないと貴女、頭がどうにかなりそうでしょ？」

叢雲「まあ……最近特に我慢ができなくなつてるからね」

村雲「実際に提督としたらもう貴女、自慰なんてしなくなるわよ」

叢雲「そ、そんなに？」

村雲「当り前じゃない。だつて貴女、自分が出来ない事もしてもらえるのよ？」

叢雲「い、挿れられるのがそんなにイイの？」

流石に彼女にもそれくらいの知識はあつた。

だがその知識はあくまで一般的なレベルの保健体育程度のものだつた。

だから所謂、「夜の営み」に関する知識は殆どなく、それ故に村雲の次の言葉には心か

ら羞恥し、仰天した。

村雲「それだけじゃないわよ。舐めてももらえるし」

叢雲「な、舐めつてそんな……汚な……」

村雲「ちゃんと清潔にすれば、問題ないわよ。それにこれ、挿れられるのよりある意味最高に気持ち良いのよ？」

叢雲「そ、そう？」

叢雲（あ、アソコを舐められるのがそんなにいいの……？）

村雲「考えてもごらんなさいよ。自分から溢れてきたモノを残らず舌で掬われて、啜られる様を」

叢雲「……」ブルツ

村雲「それだけじゃ飽き足らず、もっと求められて舌で直接中を弄られたり」

叢雲「……！」ゾクゾクツ

村雲「どう？興奮した？」

叢雲「す、凄……聞いてるだけなのに」

村雲「濡れた……？」

叢雲「……」コク

叢雲は自分の下着がかなり湿気を帯び、冷たくなっているのを感じていた。

村雲「本番はもつと濡れるわよ？ それこそ本当に頭がおかしくなっちゃうくらい」

叢雲「そ、そう……」

叢雲「……」

村雲「お手洗い、行つてきていいわよ」

叢雲「つ、でも替えが……」

村雲「穿かなかつたらいいじゃない」

しれつとんでもない事を村雲は言った。

叢雲「そんな、変態じゃないっ」カア

村雲「私今穿いてないわよ？」

平然とした顔で更にとんでもない事を村雲は言う。

それに対して叢雲は信じられないと言つた顔で真偽を確認してきた。

叢雲「嘘!？」

村雲「うん。嘘」

叢雲「つ、貴女ね……!」

村雲「ふふ、ごめんごめん。でもね、大胆になるのも大事なのよ？」

叢雲「ん……」

村雲「さつきは嘘つて言つたけど、本当に穿いてない時もあるから」

叢雲 「まさか、そんな」

村雲 「二人っきりの時だけね」

叢雲 「あ……」

村雲の言葉に少し頭が冷えた。

彼女は彼女なりに叢雲の見栄を解し、好きな相手に柔軟になるように助言しているのだ。

村雲 「ね？ シチュエーションも大事なのよ？」

叢雲 「参考になったわ……」

村雲 「気にしないで♪ せっかくの同じ者同士なんだから」

叢雲 「そうね。ありがとう」

村雲 「あ、あと贈り物があるの」

叢雲 「え？」

村雲 「ちよつと手をテーブルの下に」

村雲 「……？」（何かしら、表には出せない重要な物？）

叢雲は疑問に思いながらもテーブルの下に手を伸ばした。

村雲はそれを確認すると周りの様子も確認して、自分もテーブルの下に手を伸ばし、

彼女の手にある布きれを渡した。

ボン

叢雲「！ 貴女これ……！」

目にするまでもなく、渡された物が何か理解する叢雲。

村雲「一応、持ち歩くようにはしてるの。サイズは同じの筈だから…… 替えてきなさいな」

第43話 「爽やか」

提督 「最近、陸奥と叢雲がやたら俺のことを見ている気がするんだが」

長門 「なんだ、ノロケか？ 私もその材料に使って貰っても構わないぞ」

提督 「惚気てるつもりはないし、お前の希望にも応えかねる」

長門 「相変わらずお堅いな」

提督 「仕事に誠実なだけだ」

長門 「そうか？ 普段も結構堅物なイメージだが」

提督 「時間があるときは酒や煙草をやってるだろ」

長門 「青春時代の不良か」

提督 「言われてみれば確かにそんなイメージだな。だが、釣りは不良でもなんでもないだろう？」

長門 「そういえば、偶に一人でぼんやり港に座ってるのを見掛けるな」

提督 「釣りをしている、をつけ加えろ。座ってるだけじゃ、まるで老後の年寄のようだ」

長門 「釣れているのを見たことがないからな。釣りをしていないようなもんだらう

「？」

提督「ああいうのはやること自体に意味があるんだ。心の安らぎだ」

長門「大佐は酒と煙草と釣りしか心の安らぎがないのか？」

提督「……言われてみれば少ない気もするが、特にこれ以上何かを求める気にもならないな」

長門「それ、老後の年寄りじゃないか？」

提督「……むう」

長門「ははは。ついに反論できなくなたか」

提督「口惜しいが、何も言う事がきかない」

長門「気にするな。なら、これから少し私に付き合わないか？」

提督「この後か……まあ大丈夫か。何をするつもりだ？」

長門「お、付き合ってくれるか。嬉しいな」

提督「何処かに行くのか？ 遠出はできないぞ？」

長門「分かっている。なに、すぐそこだ」

提督「分かった。じゃあこの仕事をさっさと終わらせるか」

長門「腕が鳴るな」

提督「お前も意外に事務処理が得意だよな」

長門「戦艦だと侮るなよ？ 別に力があるだけじゃないんだ」

提督「では、その実力如何なく発揮してくれ」

長門「ふふ。了解した」

く玩具屋、ヌイグルミコーナー

提督「また此処に来るとはな」

長門「なんだ、来た事があるのか？ 意外な趣味だな」

提督「いや、俺にこの趣味は無い。矢矧に付き合った事があってな」

長門「ほう。矢矧はヌイグルミが趣味か。同好の士が見つかって嬉しいな」

提督「今になってあいつがその趣味を隠していた事を思い出した。悪いが、あまり口外しないでくれ」

長門「別に隠すような事ではないと思うんだがな」

提督「お前は一切隠さないんだな。正直、意外だ」

長門「そうか？ 私は可愛い物は大好きだぞ？」

提督「はつきり肯定するものだな」

長門「好きな趣味を隠しては楽しみ難いからな」

提督「なるほど。実に清々しくお前らしい」

長門「はは。よしてくれ恥ずかしい」

提督「可愛い物が趣味という事は、ヌイグルミだけがその対象というわけではないという事か」

長門「そうだな。キーホルダーの様な小物やマグカップなどの生活用品も、可愛いデザインなら趣味の対象だ」

提督「なるほど」

長門「因みに、大佐もその私の趣味の対象だぞ？」

提督「……なに？」

長門「ほら、これ」

長門がそう言つて見せたのは、ロケットペンダントに収められたある写真だった。

それは何時かの歓迎会の時に不甲斐なくベッドで寝かされていた提督の寝顔であった。

提督「お前も来ていたのか……」

長門「いや、青葉が大佐の寝顔の写真を撮つて焼き増ししてばら撒いていた」

提督（……後で説教だ）

提督「まあとにかく、その何処が可愛いんだ」

長門「意外じゃないか。こんな安らかな顔してる大佐なんて。可愛いぞ？」

提督 「やめてくれ。男が女にそんな事言われても恥ずかしいだけだ」

長門 「はは。その反応もなかなかいいな」

提督 「ぐ……」

長門 「ま、気にするな。私は私でやっぱりこれが気に入っているし、可愛いと思ってるんだ」

提督 「だからと言って、自分の寝顔の写真を持ち歩かれているというのは何とも気恥ずかしいものだ」

長門 「私はわざわざその為にペンダント用に写真を加工までしてもらったからな」フンス

提督 「威張りながら言うな。恥ずかしい」

長門 「はは。照れるな照れるな」グリグリ

提督 「後ろから抱き着くな……っく、抜け出せない」

長門 「逃がさんよ♪」ムニムニ

提督 「程々にしてくれ……」

長門 「お？ 潔いな。好きだぞ」

提督 「あっさり告白みたいな事を言ってるぞ」

長門 「いや告白だ。好きだ大佐…… 付き合え」

提督 「…… お前らしいといえはお前らしいが、命令のような告白だな」

長門 「大佐からは言ってくれそうにないからな。強引にいかせてもらった」

提督 「そうか」

長門 「で、返事は？」

提督 「この淫蕩、と罵ってくれ」

長門 「はは、なんだそれ。自虐か」

提督 「こうでもしないと自分を保てそうにない」

長門 「気にするな。大佐の中で誰が一番だろうと、私の心には大佐しかいない」クル

長門はそう言つて、後ろから抱きしめていた提督を自分の方に向かせた。

提督 「おい、まさかここで」

長門 「大丈夫だ。この時間帯は人も殆どいないし、カメラからもここは死角だ」

提督 「そういう問d」

チュ

長門 「……」

提督 「……」

長門 「……ふう」

提督 「本当に強引な奴だ」

長門 「すまない。だが、ありがとう」

提督 「礼を言われても困る」

長門 「ふふ。いい思い出を貰った。これからもっと作っていきこうな♪」

提督 (女性に告白されたというのに、なんだこの複雑な気分は……)

長門 「どうした？」

提督 「いや、別に……」
「ファイ

長門 「っ、可愛いなあ！ もう♪」
「ギュー

提督 「おい、やm……
むぐっ」

第44話 「容赦」

摩耶 「大佐！ 暇だから遊びに来たぜ！」
バン

鳥海 「……」

妙高 「……」

摩耶 「あ……」

提督 「お前も運がないな」

摩耶 「な、なんで鳥海が…… いや、妙高ネエはまで？」

妙高 「鳳翔さんから大佐へ昼食の配膳を頼まれたんですよ。ええ、本当に良いタイミングでした♪」

鳥海 「私は午前では処理しきれなかった仕事を秘書艦として手伝っていたのよ」

提督 「摩耶、お前鳥海が今日秘書艦だという事を知らなかったのか？」

摩耶 「そりゃ今起きたばかりだから分かるわ…… け……」 サア

妙高 「大佐」

提督「ん」

妙高「私、今日ほど偶然というものに感謝した事はありません」ニコツ

提督「そうか……」

鳥海「至らぬ姉の醜態、申し訳ありません」

提督「まあ……一応、休み時間だからな。できるだけ手加減してやれ」

妙高「お優しいですね大佐。分かりました」

妙高「摩耶？」

鳥海（あ、呼び捨てだ。相当キテるなあこれ）

摩耶「は、はい！」

妙高「さつき遊びに来たとか言っていましたよね？ 何をして遊ぶつもりだったのかし

ら？」

摩耶「え、それは…… 外も良い天気だったから何か一緒に運動でもしようかなっ

て……」

鳥海「運動？ スポーツとかそんな感じ？」

摩耶「そ、そう」

妙高「そうでしたか。では私が付き合ってくださいよ、運動に」

摩耶「え？」

妙高「そうですね。ボクシングとかどうです?」

摩耶「ぼ、ボクシング!? そんな、いくら妙高ネエでも危n」

妙高「あ、ボクシングと言つても古代ボクシングですからね?」

鳥海「古代ボクシング?」

提督「……」

妙高「ボクシングの原形と言われているスポーツですよ。とても古いスポーツなので、ルールが不明確なところもあります」

摩耶「ふ、不明確って……」

妙高「大体判明しているところでは、相手の降参を除けば基本デスマッチです」

摩耶・鳥海「えっ」

妙高「あ、勿論武器は使ってはいけません。素手での殴り合いです。グローブの代わりに拳に布を巻いて下さい。組み合つてはいけません。目を抉るのはダメです」

摩耶「あ、あの妙高n」

妙高「さ、闘りましょうか♪」ニコ

摩耶・鳥海「……!」ゾクッ

摩耶「あ、あ……」(こ、怖い……! 勝てる気がしない!)

提督「もうそれくらいでいいだろう」

妙高「大佐……」

提督「二人を見ろ。何故か鳥海まで真つ青だぞ」

摩耶「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい」

鳥海「すいません。すいません。うちの姉が本当に悪かったです。でも、代わりになるとか無理です。ごめんなさい」

妙高「あらあら……」

提督「摩耶」

摩耶「は、はいっ」

提督「これに懲りたらもう少し静かに行動しろ」

摩耶「わ、わかっ」

妙高「反省してる？」

摩耶「分かりました！」

鳥海「了解です！」

提督「だからなんでお前まで謝るんだ」

妙高「仕方ありませんね。では今回は大佐に免じて許してあげます」

摩耶・鳥海「ありがとうございます！」

妙高「でも、次に粗相したら……ただのデスマッチですからからね？」ニコ

摩耶「気を付けます！」

鳥海「監督します！」

妙高「はい。もういいですよ。この話はこれでお終い」

摩耶・鳥海「ほっ……」

妙高「大佐、どうします？ お仕事まだ残ってますけど、一旦中断してお昼にします？」

提督「そうだな。せっかくお前が運んできてくれたしな。それに…… 摩耶」

摩耶「は、はい！」

提督「そう畏まるな。もうさっきの話は終わってる」

摩耶「あ、うん…… 悪い。で、なに？」

提督「悪いが、鳳翔からもう3人分追加で食事を貰ってきてくれ」

妙高「あら、大佐……」

提督「理由はどうあれ、こうも集まっているんだ。一緒に食事をしないか？ まだ食べてないなら、だが」

妙高「嬉しい。勿論ご一緒させて頂きます。実はまだ食べてませんでしたから」

鳥海「秘書の私は当然一緒に食事を摂る為にまだ食べてません」

摩耶「安心したら急にお腹が空いてきた…… という事であたしもまだイケるぜ？」

提督「重畳だ。それでは摩耶が食事を持って来次第、細やかだが昼食会を開くとしようか」

妙高「分かりました♪」

鳥海「了解です♪」

摩耶「おうっ」

第45話 「避暑」 R—15（挿絵あり）

提督が所属している鎮守府は日本ではなく、海外。

それも、果たして日本人でどれだけの人が知っているのか分からない程の果ての地。

其処は一年を通して気候が温暖で、よく言えば常夏気分、悪く言えば年中蒸し風呂の気分が味わえた。

鈴谷「あつちく」バツサバツサ

熊野「はしたないですわよ鈴谷。下着が丸見えではありませんか」

鈴谷「だってあつついんだもん」

熊野「暑いからと言って淑女が扇風機の前でスカートを捲り上げるなんて下品ですわ！」

鈴谷「捲り上げてるだけじゃないじゃん。バサバサやってるし」

熊野「子供じみた言い返しをしないでくださいまし！ は・し・た・な・い、と言ってるのです！」

鈴谷「えー、だってこれ涼しくて気持ちいいんだもん」

熊野「だからって、気軽にやっていいものでは……」

鈴谷「クマノン、ま・じ・め・す・ぎ。女同士なんだから別にいいっしょお？」

熊野「わたくしは貴女に節度を持って欲しいのですっ」

鈴谷「あー鈴谷、そういうの無理。超無理。だから諦めて」

とうとう鈴谷は、スカートをはためかせるのをやめて、捲りっぱなしにして直接当て始めた。

熊野「な、なんとという墮落……」

鈴谷「ていうか、クマノンも暑いっしょ？ やればいいじゃん？」

熊野「わたくしはそんなはしたない事はいたしませんわ！」

鈴谷「無理しない方がいいよー？ 熊野んだってスカートの中蒸れて暑いっしょお？」

熊野「例えそうだとしても、そこは淑女として忍んでこそ……」

鈴谷「えー、でもあんま我慢しちゃうときあ」

熊野「な、なんですの？」

鈴谷「大事なトコに汗疹ができちゃうよ？」

熊野「……っ」カア

熊野は顔を赤くしてスカートを少し抑えた。

くしくも鈴谷の指摘の効果があつたようだった。

鈴谷「あー鈴谷見たくないな。クマノンが汗疹ができちゃつてお股搔いてるところなんて」

熊野「そ、そんな事、例え汗疹になつてもわたくしがするわk」

鈴谷「あ、じゃあ汗疹になつてもいいんだ？」

熊野「そ、そういうわけでは……」

鈴谷「頑固だなあ……あ、そうだ！」ポン

熊野「鈴谷？」

鈴谷「こうすれば解決じゃん！」

鈴谷はそう言うとおもむろにスカートの中に手を入れ、下着を脱ぎ始めた。

熊野「あ、貴女何をしてるんですの!？」

鈴谷「鈴谷的にはこれが一番、ココが蒸れない方法でありましてー」

鈴谷「それにこれなら鈴谷の方がはしたないわけだから、クマノンもスカート捲つてもそんなに恥ずかしくないっしょ？」

熊野「ど、どういう思考回路してますの貴女は!？」

鈴谷「当然の結果でありますー！つてことでポニー」

パサッ

薄いブルーの可愛いショーツが綺麗な放物線を描き、見事に鈴谷のベッドに着地した。

熊野「す、直ぐに穿きなさい！」

鈴谷「やだ。あ、これー超気持ち良い！ 超涼しいー♪」

熊野（あわわ……… 鈴谷のアソコが丸見え………）

鈴谷「もう、クマノンも我慢しないで早く捲つちやいなよ？」

熊野「それより早く下着を………！」

鈴谷「じゃ、クマノンが最初、鈴谷がやってたみたいにしたら穿いてあげる」

熊野「そ、そんな卑怯ですわ！」

鈴谷「やってみなってー。絶対に気持ち良いから」

熊野「で、でも……… そんなはした……… 恥ずかし………」

鈴谷「今は、鈴谷の方が恥ずかしいから問題ないって。ほらほら」ピラピラ

そうやって鈴谷は無毛の無防備な秘所を見せつけた。

本人が全く動じてない時点で、秘所という言葉自体が適切かどうかも怪しかった。

熊野「っ、何見せつけてるんですの！」

鈴谷「クマノンが早くしてくれたらやめたげるー」

熊野「くっ」

鈴谷「ほらー、早くやってよー」

熊野「……わ、わかりましたわ。で、でもあまり見ないでください……まし」

鈴谷「やだ、見る」

熊野「そんなっ」

鈴谷「今の鈴谷の方が恥ずかしいカッコしてるじゃん。普通だって普通」ピラピラその普通は明らかに普通じゃないはずだったが、完全に鈴谷のペースに飲まれた熊野には既に反論する考えが起こらなかつた。

熊野「うう……もう、分かりました……だからそんなに見せないで下さい……」

鈴谷（顔を真っ赤にしてるクマノン可愛いー♪）

鈴谷「ほら、早く早くー。仲間になれー♪」

熊野「その言葉がどれだけわたくしの覚悟を挫いてるのか分かってますの!?!」

鈴谷「もうっ、分かってるから、ハイ!」バサッ

熊野「きやあ!」

不意に鈴谷にスカートが捲られて、熊野の可愛い下着が姿を現した。

薄いピンクに控えめのフリルが飾られた熊野らしいオシャレなショーツだった。

鈴谷「お、可愛いの穿いてるじゃん、クマノン♪」

熊野 「み、見ないで……！」

鈴谷 「ほらー、やっぱり太ももの所とか汗ばんじやつてるしー」

熊野 「うう……」プルプル

鈴谷 「ほらほら、次は扇風機デビューだよっ」

熊野 「わ、分かりましたから。そんなに押さないで……」

鈴谷 「はい。お客様一名入りまーす！」

熊野 「何処のいかかわしいお店ですの!？」

ブオオ

熊野 「あ……」

鈴谷 「どう? どう?」ウキウキ

熊野 「す、涼しい……」スー

鈴谷 「でしよー?」

熊野 「しよ、正直言いました、これ程とは……ふう」

扇風機の風が当り、汗を搔いて蒸れていた箇所が急速に冷やされる感触を感じた。

汗が冷やされるという感覚が、ここまで涼しさを感じさせるといふ事に熊野は驚いて
いるようだった。

鈴谷「ねっ？ 癖になるっしょ？ 最高っしょ？」

熊野「ちよ、あまり調子に乗らないで下さいまし。……でも、確かに気持ち良い……涼しい……」

鈴谷「ね、今度はパンツ脱いでみなよ？」

熊野「やつ、さ、流石にそれは……」カア

鈴谷「ぜったいに今より気持ち良いって！」

熊野「貴女、さつき言つてた事と違いますわよ！ わたくしがやったら穿くという約束だったじゃありませんか!？」

鈴谷「クマノンも脱いでくれたら、ちゃんと穿くって！。ね、一回でいいからっ」

熊野「そ、そんなにお願いされたって……」

鈴谷「そんなに恥ずかしがることないって！。大体、一番最初にやつてたのは鈴谷じゃなくてモガミンなんだよ？」

熊野「えっ？」

熊野は鈴谷の言葉に驚きの声を上げて、今まで我関せずの態度でベッドで本を読んでいた最上に視線を向けた。

最上「ちよつと鈴谷、そこで僕を巻き込まないでほしいな」

鈴谷「でも現にモガミン今、穿いてないっしょ？」

最上「まあね」

鈴谷「熊野んに証拠見せてあげてよ」

最上「見せろつて言われると、なんか露出狂みたいで気に入らないんだけど、まあ減るものでもないし……はい」ピラ

最上は、鈴谷と同じく無毛の秘所を恥ずかしげもなく晒した。

確かに穿いていなかった。

熊野「……！」カアア

鈴谷「ね、穿いてないっしょ？」

熊雄「そ、そんな……」

鈴谷「あー、でもやつぱり毛は剃ってるよねー？ こう暑いと見苦しいし、毛もベツタリになつちやうもんね」

最上「僕は生えてないよ。薄いと勘違いしてたの？」

鈴谷「あ、モガミンもそうだったんだ。うん。鈴谷も生えてない派」

最上「なんだ仲間じゃん」

鈴谷「だねー。パイパン同盟ー、なんて」

最上「それ人前で絶対言わないでね」

鈴谷「流石に言わないってー。てことで、クマノン？」

熊野「え？」

鈴谷「脱いで♪」

熊野「…… もうどうでもいいですわ」スル、パサ

この時点で熊野は完全に鈴谷に負けたと自覚しており、下着を脱ぐという行為に対する羞恥心も消えかけていた。

鈴谷「お、クマノンも生えてないんだー」

最上「全員同じだったね」

熊野「ちよ、そんなに見ないで！」

鈴谷「あはは。人の事言えないけどツルツルで赤ちゃんみたい♪」

熊野「もうっ、やめてっって言って……」

鈴谷「はいはい。めんごめんご。じゃ、当ててみー？」

熊野「なんて軽い謝罪ですの…… もう」

ブオオオ

熊野「あふう……」

直接肌に当たると風は確かに気持ち良かったが、それとは別のなんともいえない初めての感覚が熊野の表情を緩ませた。

鈴谷「お、クマノンのレア顔キタコレ！」

熊野「何言ってるの!？」

最上「気持ち良いでしょ？」

熊野「え？ まあ、その…… うん」コク

鈴谷「鈴谷は暫くモガミンとお話してるから、クマノンは当たっていいよ？」

熊野「そ、そう？」

鈴谷「うん。遠慮しないで。ね？ モガミン」

最上「僕も鈴谷も熊野が部屋に来るまでに結構やってたからね。遠慮しないでいいよ」

熊野「そ、そう？ で、では有り難く使わせてもらいますわ」

熊野（アレ？ なにか忘れてるような……）

鈴谷「落ちたね」ボソ

最上「そだね」ボソ

——数分後

熊野「〜♪」

熊野はすっかりこの状態が気に入り、ご満悦の様子だった。

鈴谷と最上はそんな彼女を尻目にガールズトークに花を咲かせていた。

鈴谷「いやー、すっかり気に入ったみたいだねー」

最上「そだね。それにしても」

鈴谷「ん？」

最上「こうして熊野を後ろから見ると、時々扇風機の風がスカートの後ろまで捲つて半分お尻見えたりしてるじゃん？」

鈴谷「まあ強だからね」

最上「あの、熊野がって思わない？」

鈴谷「だねっ。なかなかシユールな光景だよねー」

最上「これは、基地内でのノーパンの許可を大佐に貰う必要があるかもね」

鈴谷「それ、ナイスアイデア！」

く数日後、執務室

鈴谷「という事でノーパンを希望します！」

提督「そうか。俺の説教と罰則を受ける覚悟はあるという事でいいんだな？」

第46話 「映画」

伊勢「映画……ですか」

提督「そうだ。何となく部屋の整理をしていたら、映画のソフトが出てきたんだ。多分、実家から荷物を持ち出すときに紛れていたんだな」

日向「大佐は映画が好きなの？」

提督「好き嫌いと言うなら、間違いなく好きな方だ。此処に着任してからも町の映画館には偶に足を運んでるくらいには好きだな」

伊勢「そうだったんですか。てつきり大佐の趣味は釣りと煙草くらいだと思つてました。あ、あとお酒か」

提督「酒はともかく、煙草は時間つぶしの目的に近いからな。本当の意味で趣味というよりはりこれか」

日向「この前、長門から聞いた分には映画が趣味というのは初耳ね」

提督「あの時は、いろいろ追いつめられていたからな。人間、余裕がなくなるとすぐ傍にある助けには意外と気づかないものだ」トオイメ

伊勢「一体、何を追いつめられていたの……？」

提督「些末な事だ。とにかく、せっかく出て来たわけだし一緒に観ないか？」

日向「てつきり晩酌の相手だと思つてたけど、こういうのもいいか」

伊勢「私はどっちかというとお酒はあまり強くないからこれは寧ろ歓迎よ♪」

提督「酒も一応用意してあるし、ジューズもある。これで口が寂しくなる事もないだろう」

日向「気が利いてるな。そういう心遣いは心ときめくよ」

伊勢「なに大袈裟な事言つてるのよ。でも、ジューズも用意してくれてたのはポイント高いわ。ありがと、大佐♪」

提督「誘つた側の当然の配慮だ。気にするな。それでは観ようか」

日向「それはどんな映画？」

提督「所謂、海洋スペクタクルというやつだな」

伊勢「冒険的なやつ？」

提督「冒険と言えばそうだが、これはあくまで実際の世界が舞台だ」

日向「史実的な要素があるのね」

提督「そうだ。これは17世紀の英国海軍の、ある一隻の軍艦の船長とその船員達の物語だ」

伊勢「へえ、昔の英国の海軍かあ」

日向「面白そうね」

提督「興味を持ってきてくれて何よりだ。それじゃあ再生するぞ」

——観賞開始から30分辺り

日向「帆船の操船は大変だな」

伊勢「凄い。あんなに人が乗ってるんだ」

日向「あんな小さな子供まで……。しかも士官候補か。腕を亡失くしても気丈だな」

伊勢「あの船医さん、船長の親友なのね。ふふ、2人で楽器なんか演奏しちゃって」

日向「昔の軍人はいろいろ嗜んでいたんだな。見習いたいものね」

——観賞開始から1時間半後

伊勢「あの、士官候補の子可哀想だったね……ぐす」

日向「まだ科学がそれほど進歩していなかった時代だからな。神が唯一の拠り所だった人達からしたら、災いを誰かの所為にしないと耐えられなかったんだろう」

伊勢「ふふ、あの船医さん島へ行けるのが本当に嬉しいのね」

日向「昔の医者はどちらかというと博士に近かったのかもね。にしてもあの好奇心の

旺盛さには感心するな」

——映画終盤

日向「追っていた標的を騙して奇襲、か。なんにしても船の性能の差を考えたらこれが成功しなければ後がないな」

伊勢「船長さん、凄く気迫に溢れてるのに興奮を感じさせずに本当に船員さんをよく纏めてる……。凄いなあ。えっ、船医さんも戦うんだ」

日向「できれば……。あの子には生きていて欲しかったわね」

伊勢「ぐす……。そうね。片腕の子、親友がいなくなつて可哀想……。あ、でも身分が下が手伝つてくれる……。いいなあこういう気配り」

日向「なんと、あの敵の船医が船長だったのか」

伊勢「船医さん、残念そうな顔をしたのに今は楽しそうに船長と楽器演奏してるね。以心伝心つてやつなのかな。不思議だけど温かい雰囲気ね」

——観賞終了

提督「どうだった？」

伊勢「凄く良かったわ！」

日向「そうね。スベクタクルって言ってたからもっと派手な視覚効果があると思ってたけど、割と地味で堅実な作りだった。現実的という意味では確かに迫力もあったわ」

提督「楽しんでもらえたようで何よりだ」

伊勢「うん？　なんだか大佐、意外そうな顔してる？」

日向「私達が楽しんでいたのがそんなに意外だった？」

提督「ああ、いや。この手の映画はあまり女性にウケが良くない事が多いからな。そういう意味で少し嬉しさ半分驚き半分だったというだけだ」

伊勢「確かに。女の子からしたらあまり面白くないかもしれないけど、私、戦艦だし。こういうの結構好きよ？」

日向「同じく。そして更に軍人だ。内容的にはとても興味を惹かれたよ」

提督「そうか。改めてお前たちに見せて良かったと思つた」

伊勢「ええ。良い映画を観せてくれてありがとう大佐」

日向「感謝するよ、大佐」

提督「ああ。また何か面白いのが用意できたら誘わせてもらおう。構わないか？」

伊勢「勿論！」

日向「逆に誘ってくれないと機嫌を損ねてしまうぞ？」クス

提督「ふつ。気を付けよう。それじゃあ映画も終わったし、時間ももうだいぶ遅いか

らこれで解散に……」

日向「大佐」

提督「ん？」

日向「映画に出ていた船長だけど、この人は最終的に生きて祖国で愛する妻に会えたの？」

提督「ふむ……実はこの映画はシリーズもので、内容的には割と長編らしい。今回の映画はその一部という事だ」

提督「俺も原作は読んだことがないから、そこまでは分からないな。すまん」

日向「いや、いいんだ。そうか、会えるといいな。ところで話は少し変わるけど」

提督「なんだ？」

日向「船長には愛する妻が居たように、やはり大佐にもそういうのが必要だと、私は思うんだけど」

伊勢「ひゅ、日向？」

日向「大佐はどう思う？」

提督「まあ……軍人とは言え、心の支えになってくれる人がいるのはありがたいだろうな」

日向「だろう？ なら……」

伊勢「！ あ、えっと…… た、大佐それ、なんというか私もなりたいたい…… い……かな？」

提督「…… 随分、予想外な所からのアプローチだな」

日向「すま…… ごめん。実は機会を伺つてた。小賢しく思えたら…… その、ごめんなさい」

伊勢「大佐、日向のこと悪く思わないで。わ、私も気持ちと同じだったから……」

提督「…… ふう」

日向・伊勢「…… つ」ビクッ

提督「結婚とまではいかないかもしれないが…… お前たちさえよければ…… 少し

の間俺を支えてくれるか？」

日向「！ 勿論……！」ペア

伊勢「私も……！」ペア

提督「そうか。ありがとう。これからもよろしく頼む」

提督「では重要な件も終わった事だし、本当にこれで今日は……」

日向「一緒に寝て欲しい……」ボソ

伊勢「ひゅ!!? あ、ごめん…… 私も……」カア

提督「…… まだ、そういうのはダメだ」

日向「私達が寝付くまで側にいるくらいならいいだ……でしよ？」

伊勢「う、うん。私もそれでいい！」

提督「いやそれも……」

日向「お願い……」ジッ

伊勢「大佐あ……」ジッ

提督「む……」

提督「分かった。寝付くまでだからな？」

日向「！ ありがとう！」パア

伊勢「大佐、大好き♪」ギユ

提督「ふう…… それじゃあお前たちの部屋に行くか」

日向「あ、待ってくれ。先に戻って下着を替えてくるから」

伊勢「ええ!? そ、その方がいいの？」ポ

提督「日向、何いきなり前言撤回をしているんだ」

第47話 「作戦会議」

加賀「では、これより大佐を落とす会を始めます」

B i s 「会議の名前だけ聞くと凄く不穩ね」

加賀「敢えてストレートにする事によつて私達の意気込みを表してみました」キリッ

金剛「Yeah! 恋は常にストレートじゃないとダメヨ!」

加賀「金剛さんありがとうございます。今回は、人数が多いと意見をまとめるのに時間が掛かってしまうので、参加人数を予め絞らせて頂きました」

長門「選考の基準は?」

加賀「説明が必要ですか?」

鈴谷「ないんじゃない?」

響「ないね」

龍田「不要よ。分かり切ったことじゃなくい♪」

足柄「まあ……ね」

イク「ないの!」

加賀「正直言つて選考するだけ無駄だったので、ここに居ない方には申し訳ありませ

んが、ランダムに選ばせて頂きました」

長門「……ま、そうなるか」

鈴谷「で、ぶっちゃけどうやって落とすの？」

金剛「愛ヨ！ 大佐が受け入れるまでぶつけるしかナイワ！」

足柄「それだと効率悪いわよ」

龍田「そうよね。やっぱり直接的な手段じゃないと」

長門「なんだ？ 夜這いをして既成事実でも作るのか？」

加賀「それが一番早いのでしょうか、それでは大佐の心までは掴めないでしょう」

イク「寧ろ、離れちやうかもしれないの」

響「それは困るな」

鈴谷「でもさー、やっぱ最終的にはヤルわけだから。その覚悟があるのかくらいは確

認しといた方がよくない？」

鈴谷「因みに鈴谷はいつでもオツケーだけどね」

足柄「……好きなら当り前よ」カア

長門「本当に大丈夫か？ 菊門まで晒す事になるかもしれないぞ？」

金剛「キクモン？」

加賀「anal ですよ」

金剛「Oh……」

Bis「え……」

鈴谷「よーっだしっ。ていうか、鈴谷は部屋ではいつもノーパンだから慣れてるし」

龍田「痴女ね。大佐はそういうのが好みだとは思えないけどお？」

加賀「好みがどうあれ、それくらい私なら平気ですが？ 勿論大佐にだけですが」

イク「なんだか変態さんな会話なの。でも大佐ならイクもいいの！」

足柄「別に……いいわよ」

長門「皆意外に度胸があるんだな。因みに私も余裕だ。好きな男に見せて恥ずかしい所などないからな」

金剛「Me too ヨー！」

Bis「が、頑張るもん……」

響「さつきから菊門とかアナルとかなんだい？」

鈴谷「お尻の穴だよ。響」

響「お尻……大佐はお尻が好きなの？」

加賀「大佐の名誉の為に言っておきますが、そんな嗜好はない筈です」

足柄「そう……ホッ」

龍田「安心してるとこ悪いけど、ヤルからには大体見られると思うわよ？」

イク「後ろからヤつたりしたら一発なの」

B i s 「平気……だもん」

足柄「マリアさん体操座りしながら言っても頼りないだけよ？」

加賀「はい。皆さんそこまでにして下さい。私達は別に猥談をする為に集まっているわけではないのですから」

長門「ここは、全員それくらいの認識はある、という事でいいだろう。な、マリア？」

B i s 「うん……」コク

鈴谷（マリアさん可愛い♪　なんか熊野んと同じ匂いがする）

響「響も大佐と一緒に風呂入るのも平気だからそれでいいよ」

金剛「え？」

イク「今、凄い事言わなかったの？　響ちゃん」

龍田「一緒に入る事くらいわけないってことよ。それくらい分かりなさあい？」

加賀「取り敢えず、最初の議題に戻ります。何か有効な案はないでしょうか」

足柄「……部屋に呼べば？」

長門「お、良い事言うな足柄。確かにそうだ。自分が勝手知つたる場所なら幾分有利な状況にも持つていけるだろう」

鈴谷「部屋かあ。鈴谷の部屋散らかってるから掃除メンドイなあ」

Bis「貴女、熊野達と相部屋でしょ？ あの子たちのスペースまで散らかしてるの？」

鈴谷「ううん。それは流石に鈴谷のとこだけだよ。でも、あまり散らかし過ぎると熊野んが怒って片づけてくれるんだあ」

イク「熊野が不憫なの……」

龍田「策士って言うのかしら？ でも、あまりだらしないのはダメよ？」

響「大人数の部屋が多い響達からすればそれは当たり前前だけだね」

金剛「ワ、ワタシも今度から気を付けマス……。そういえばいつも榛名と霧島がclean にくれてマシタ」

加賀「片づけられない欠点はこの際置いておくとして、足柄さんの意見は良いと思います。となると……」

長門「部屋へと誘う手段か」

龍田「いい考えがあるわよ」

Bis「ホント!？」

響「興味あるな」

龍田「簡単よ？」 答は…… その2人よお」

龍田が指を指した方向にはポカンとした顔をした金剛と鈴谷がいた。

二人とも何故自分たちが指名されたのか全く理解できていない様子だった。

金剛「ワ、ワタシ？」

鈴谷「へ？ 鈴谷も？」

龍田「この2人はあ、部屋を片づける事ができないダメな人たちです」

鈴谷「いやあ、そんなに褒めないでよ〜♪」

金剛「照れマス♪」ポ

長門「それで？」ムシ

龍田「片づけられなくて散らかってることはあ、ゴミも含めて部屋にいろいろ持ち込んでるって事でしょ〜？」

足柄「あ、もしかして……」

龍田「そう。部屋に規則違反の物を持ち込んでいないか、抜き打ち検査をしてもらうのよお」

響「な、なるほど……」

イク「響ちゃんは大変そうなの。響ちゃんは持つてなくても他の子もそうとは限らないもんね」

加賀「しかし名案です。大佐への進言は任せて下さい」

長門「それでは各自、調査の日が決まり次第当日にいるの同居人との予定の調整等を

頭に入れておくように。あと、本当に見つかってはダメな物は上手く隠しておけよ」

Bis 「了解よ！」（大佐の写真是多分ダメね。非公認だし）

金剛 「了解ヨ！」（あんなに汚しちやった写真見つかるわけにはいかないネ）

龍田 「分かったわあ」（天龍ちゃんに写真のこと言っておかないとねえ）

イク 「了解なの」（実はこっそり大佐の水着の写真も持っていたりするから見つかるわけにはいかないの）

響 「了解」（雷達に上手く説明しないといけないな。はあ……骨が折れそう）

足柄 「分かったわ」（写真は下着と一緒にしまつてあるから多分大丈夫よね……）

長門 （敢えて、ぶちまけておくというのも有りだな）

加賀 「了解しました」（秘密を敢えて晒す、というのも有りですね）

鈴谷 「りようかうい」（部屋には常にノーパン娘が2人いるもんなあ……あ、寧ろそれを狙ってみる？）

第48話 「健康診断（前篇）」

提督「今日は健康診断を行う。全員準備ができたものから医務室に行くように」

天龍「あー、かったりいなあ」

龍田「あら、天龍ちゃんもしかして歯の診察が怖いのかしらあ？ 虫歯になつてたら

歯医者に行かないといけないもんねえ」

天龍「べ、別にそんな事は……！」

提督「天龍、歯の診察は思いの外大事なんだぞ？」

天龍「…… なんてだよ？ 歯なんて大したことねーじゃねえか」

提督「そうでもない。歯というのは、普段から最も使う人体の一部だ。物を食べる時は歯で咀嚼をする、逆に飲む時は歯が液に浸る。それがどういう事が分かるか？」

天龍「歯が汚れてるついでに言いたいんだろ？ 分かっているよそんな事。だから、歯磨きだつてちゃんとしてるぜ？」

提督「歯磨きは確かに大事だな。それも歯の健康を維持する上で欠かせないケアだ。だがな天龍」

天龍「な、なんだよ……」

提督「歯垢と呼ばれる汚れは歯磨きでなんとかするが、歯石はそうはいかない」

天龍「歯石……聞いたことあるけど」

提督「歯石も歯垢の一つだが、歯石は歯磨きなどでは除去できなかった歯垢が歯に蓄積し、形状的に石化したものだ」

天龍「石化……硬いのか？」

提督「そうだ。だからそれを取るには定期的に歯医者に行くしかない。もしそれを面倒だと放置するような事をすれば……」

天龍「……」ゴク

提督「歯は黄ばみ、見た目の汚さ通りの悪臭を口から放つことになる。勿論、虫歯の原因にもなるぞ」

天龍「！」バツ

龍田「心配しなくても天龍ちゃんからはまだそんな匂いはしないわあ」

龍田「でも、これからそういうのを気にするなら最低でも年に2回くらいは歯医者に行かないとねえ？」

天龍「……！」コクコク

龍田「うふ、かあわいい♪ いい子ねえ」

龍田「……」これで好きな人にキスをする時は大丈夫、ね？「ヒソ

天龍「っ！」カア

提督「？ 龍田、お前天龍に何を言った？」

龍田「女としての嗜みを教えてあげただけよ？」

提督「……：：：：：そうか。まあ問題ないならいい」

提督「さて、少し時間を使ってしまったな。総員、健康診断の受診を開始せよ」

く数分後、執務室

ガチャ

島風「いっちばーん！」

提督「相変わらず何でも早いんだな、島……：：：：風」

提督は書類から顔を上げて島風を見るなり言葉を失った。

島風「？ どうしたの？ 大佐」

提督「なんで裸なんだ……：：：」

島風「健康診断だからだよ？」

提督「健康診断で素っ裸になる必要はない筈だが……：：：」

島風「あ、これ？ 誰が一番軽いか競争してたの！」

提督「そうか……：：：。それで、服は？」

島風「あつ、忘れてきちやつた！ 取つて来るね！」トテテ
バタン

提督「…… 次からは鍵を掛けておくか」

——それから更に数分後

コンコン

加賀「加賀です」

提督「ん、入れ」

ガチャ

加賀「失礼します」

提督「どうした？ お前はまだ順番的に終わってない筈だが」

加賀「まだ少し時間が掛かりそうなのでお仕事を手伝いに来しました」

提督「そうか、悪いな。では、頼む」

加賀「分かりました」シユル

提督「何故脱ぐ？」

加賀「健康診断に直ぐに行けるようになりますが？」

提督「まるで俺がおかしい事を言っているような目で見るのはやめろ」

提督「ダメに決まってるだろ。節度を考えろ」

加賀「そうですね。私としたことがつい二人きりだったので興奮してしまいました」

提督「次に同じ事をしようとしたら当分秘書から外すからな」

加賀「それは嫌ですね。分かりました仕事の時はしません」

提督「仕事以外でも慎みを持って馬鹿者」

加賀「努力します」

提督「確約はしないんだな」

加賀「攻め手を失くしたくはありませんから」

提督「ふう……用心しておこう」

加賀「頑張ってくださいね」ニコ

トントン

金剛「金剛ネ！ 順番がまだだから少しカンバセーションに付き合っテ。仕事も手伝うワ！」ネ、ネエサマ…… ホントニコンナコカツコウデ

提督「うん？ 金剛以外にもいるのか？」

金剛「Yes! 妹達もいるヨ!」

提督「加賀?」チラ

加賀「いいのではありませんか? 幸い残つてる仕事もそんなに多くはなさそうですし。それだけの人数ができれば多少の暇はできるものかと」

提督「そう、だな。ああ、いいぞ。入れ」
ガチャ

金剛「お邪魔シマス!」ドヤ ↑下着姿

比叡「お…… お邪魔します……」カア ↑下着姿

霧島「失礼します。大佐」ハイゼン ↑下着姿

榛名「失礼…… します」ドキドキ ↑下着姿

提督「」

加賀「これはこれは……」

提督「全員服を着ろ。説教だ」

第49話 「健康診断（後編）」

金剛「Oh…… 怒られてしまったネー」

比叡「そりゃ、あんな格好で入ってきたら怒りますよ……」

霧島「流石にあんな状況だと下着を見たくらいでは興奮もしないし、喜ばないでしょうね」

榛名「で、でも見られちゃいました…… 私、恥ずかしいはずなのに、何故か嬉しいです」ポッ

霧島「基本的に人に見せる格好じゃないからね。そういう姿を好きな人に見てもらおうという行為が特別に感じるのかもしれないわ」

金剛「Cute なの選んだからネー！」

比叡「迂闊だった…… もっと可愛いのが着て来ればよかった……」

扶桑「あら、金剛さん達まだ診断終わってないの？」

陸奥「早く終わらせてきなさいよ」

金剛「今から行くところネ。Oh……」

比叡「どうしました？ 姉様」

金剛「扶桑も陸奥も前から思ってたマシタが、おっばい大きいネ」

扶桑・陸奥「え？」

霧島「確かに……………。私達も決していない方ではありませんが、お二人の方が明らかに大きいですね」

扶桑「まあ、小さいとは思った事はないけど……………」

陸奥「そんなに大きい？」

榛名「……………」

ムンズ

扶桑「ひゃっ!？」

比叡「は、榛名何をやってるの!？」

榛名「……………」モミモミ

扶桑「ちよ、あつ…………… 榛名つ、さん…………… 何つ、を？」

榛名「大佐がもし大きいお胸がお好きなら、榛名達は少しだけ不利です。でも感触が同じならまだ抗する事は可能なので、それを確かめています」モミモミ

霧島「なるほど…………… それで、どう？」

榛名「大きいだけあつて重量感が有り、揉み応えも良いですね。でもやっぱり感触自体は同じ…………… かな」パツ

扶桑「はあ……はあ……。もう、いきなりはやめて下さいよ」

榛名「ごめんなさい扶桑さん。どうしても確かめたくて失礼をしてしまいました」ペ

コ

金剛「扶桑、ワタシからも sorry ネ。でもお蔭で良い事を知ったワ」

比叡「榛名ったら最近は本当に開放的になったというか、大胆になったね……」

榛名「さて」クル

陸奥「うっ。や、やぱり私も？」

榛名「お願いします」

陸奥「仕方ない……。わね。はい、いいよ」

比叡「あ、榛名。今度はわたしにやらせて！」

榛名「比叡姉様？ いいですけど、しっかり確かめてくださいね？」

比叡「うん。分かってるって。それじゃ陸奥さん、失礼します！」

ムンズ

陸奥「ん……。ピクッ

比叡「わ、柔らか……。んー……。モミモミ

金剛「比叡、どうデス？」

比叡「凄く気持ち良いんですけど……」

陸奥「えっ。な、なにか問題でもあるの？」

比叡「あ、いえ。そういうんじゃないんですけど。ほら、わたしと陸奥さんって結構身長差があるじゃないですか」

扶桑「そうね。頭半分くらいはあるかもしれないわね」

比叡「その身長差の所為で、陸奥さんの胸を揉むのに腕を少し上げないといけないから、こう」ムニイ

陸奥「んん……！」ピクピクッ

比叡「大きくて重みがある分揉むのが少し疲れるんですよね」

霧島「なるほど……大きい分、面積も体積もあるから揉み方によっては疲れてしま
い、いざコトにあたる時に雰囲気削られる可能性が……」

扶桑「な、なんか凄く深刻そうね……。そ、そんなに問題かしら？」

龍驤「大問題や！」

榛名「わっ!? 龍驤さんいつからそこに」

龍驤「さつきからいたで！ 全くさつきから聞いてて思ったんやけど、それがどれだ
け贅沢な悩みなのか皆わかってへん！」

金剛「…… 龍驤が言うと言得力あるワネ」

霧島「持たざる者の苦悩というやつかしら」

龍驤「そこ、余計な事言わんといて！」

陸奥「でも、確かにないよりかはあつた方がいいものよ？　龍驤のいう事は間違いな

いわ」

龍驤「陸奥ネーサンの言う通りや！　うちなんてもうその道で行くしかないって覚悟してゐるんやで？」

榛名「その道？」

龍驤「見た目がちんちくりんなんはもうどうにもならん。なら、逆にそれを極めて大佐をどうにかして幼女趣味にしたるんや！」

一同「……」

陸奥「そ、それってどうなの……？」

霧島「なかなか壮大な計画なのは間違いないと思います」

扶桑「大佐が、電ちゃんみたいな子達が趣味になるなんて、ちよつと想像がつかないけど……」

比叡「わ、わたしはなんか嫌だなあ、それ……」

榛名「そ、そんなの認めるわけにはいきません！」

金剛「Don't worry ヽ榛名。多分それは、リアルにはならないワ」

龍驤「好きに言つとき！　うちはやるでえ！」　ゴオオオ

「その頃の執務室」

加賀「大佐、これが今回の私の診断結果です」

提督「そんな物頼んだ覚えはないし、見せるな」

加賀「そうですか。大佐はやはり大きい方がいいのですね……」 シュン

提督「あからさまな曲解はやめろ」

加賀「なるほど。お尻派でしたか。それなら自信があります」

提督「妙な自信を誇る暇があったら金剛達に早く受診するよう催促をして来い」

第50話 「進言」

提督「抜き打ち検査？」

加賀「そうです」

提督「お前たちの部屋の抜き打ち検査をしろというのか？」

加賀「基地内の風紀を正し、維持するのが目的なので、不定期でもこういった事はあ
る程度必要かと」

提督「ふむ……」

加賀「流石に一日で全員の部屋を回るのは無理でしょうから、適当に決めた部屋を5
ないし、3部屋くらいで行うと良いと思います」

提督「まあ、検査する部屋の数自体はそれでいいとしてもだ」

加賀「なんです？」

提督「うちはそんなに規則に違反する物を持っている奴がいるとは思えないんだが
な」

加賀「そうですか？ 辺境の地で物が無いと言つても、一応軍の誘致で町はある程度
発展していますし」

加賀「例えそこで手に入らなかつたとしても、今はインターネットでおおよその物は手に入つてしまいませんか？」

提督「インターネット自体はここか、電算室でしか使えないようになってるから問題ないんじゃないか？」

提督「この部屋は勿論、電算室も基本、俺の許可がないと使えないわけだし。例え使つたとしても履歴はこちらで把握できるようになつてゐるしな」

加賀「きょうび履歴の改ざんや削除くらい誰でもできると思いますが」

提督「そこまでして何かが欲しいのなら、その時点で俺に相談してくると思うがな」
加賀「皆を信用してゐるのですね」

提督「組織というものは軍も例外ではなく結束によつて保たれるものだ。ま、その結束もあまり度が過ぎると束縛になりかねないからある程度調整も必要だがな」

加賀「そうですね。強い束縛は支配になり得ます」

加賀「軍人からしたら規律と見なすこともできるかもしれませんが、それでもその概念に抵抗を感じる子には強いストレスになりかねませんからね」

提督「そういう事だ」

加賀「では、やはり検査自体は必要ないと？」

提督「そう結論するのはやや早計だな。検査自体は俺は悪いとは思つてない。風紀の

維持・改善、大いに結構だ」

提督「俺は単にお前らが見つかって重大な問題になるような物を勝手に持ち込むような真似はしないと信用している、と言いたかっただけだ」

加賀「では、重大でないならある程度軽い物なら見逃すと？」

提督「流石に公には公言はできないし、見つけたらあからさまに見逃すわけにもいかないが、まあ上手く隠してくればよい」

提督「加賀、お前も俺の写真を持つているんだらう？ 写ってる本人としてはむず痒いが、それでもそれを見せられなければ俺はそこまで気にならない」

加賀「大佐……」

加賀「では、私の写真などどうです？ 自分の写真が不当に所持されてるのが気になるのでしたら、せめて私とは同じ条件という事で」

提督「それは勿論構わないが…… 普通の写真だらうな？」

加賀「……」

提督「俺は危うく自分で自分の風評被害を拡散するところだったか」

加賀「裸婦はお嫌いですか？」

提督「お前の思考は飛び過ぎだ、俺はそこまで劣情の塊じゃない」

加賀「仕方ありませんね。では、今度普通のを用意しておきます」

提督「ついでに青葉にいかがわしい写真は全て破棄するように言つて……」

加賀「どうしました？」

提督「最初の検査候補は青葉だな」

加賀「……」

加賀「これはいけない。青葉さんが大佐に好意を持つていないとは思えないけど、それでも最初に部屋に踏み込んでもらうのはあの時会議に参加していたメンバーでないと、ちよつと彼女達に示しがつかないわ」

加賀「これは一応、修正を試みないと。できれば最初は自分の所に来て欲しかったけど、ここで我儘を通して順番を狂わしちゃ駄目ね」

加賀「それでは青葉さんの部屋は私が担当します。大佐は、金剛さんの部屋などどうです？ あそこは4人部屋ですし、大佐も多少は気になる所があるのでは？」

加賀の提案という名の修正案に提督は少し齒切れが悪そうにこう答えた。

それは彼女にとつて予想外の言葉だった。

提督「いや…… 検査自体ははお前たちに任せる。俺は結果だけを報告してもらえればいい」

加賀「大佐……？」

加賀「なんだろう、違和感を感じる。私達の企みに勘付いた風じゃない。検査……」

部屋に入るといふ行為自体に抵抗を感じている……？)

加賀「部屋に、入りたくないのですか？」

提督「ん……流石だな。今ので判るのか」

加賀「何故です？ 私達が大佐に何かしたとは思えません」

提督「誤解するな。お前たち自身に問題があるわけじゃない。これは俺の個人的な理

由によるものだ」

加賀「……教えていただけないでしょうか？」

提督「まあ、隠す事でもないしな。俺はな」

加賀「はい」

提督「女の部屋が苦手なんだ」

第51話 「爪切り」

パチツ…… パチツ……

多摩「にや？」

夜中、皆が寝静まった基地で、お手洗いから戻る途中だった多摩は執務室の前で妙な音を聞いた。

多摩「何の音にや？」ソー

気になってこつそり部屋を覗いてみるが誰も居なかった。

音は執務室からしか行けない提督の私室からしている様だった。

多摩（気になるにや…… 部屋からは明かり漏れてるから大佐は起きているはずにや）

多摩「…… よしっ」

大佐「誰か居るのか？」

多摩「にやあ!？」

ガチャ

提督「多摩か。こんな時間にそんな所で何をしているんだ」

寝間着姿の提督が現れた。

本人の趣味なのかどうかは分からないが、着物姿が妙に様になっていた。

多摩「えつと……えつと……」プルプル

提督「別に怒ってはいない。執務室は俺が居ない時は出入り自由だからな」

多摩「お、怒らない？」

提督「そう言つたろ」

多摩「にや……廊下を歩いていたら大佐の部屋の方から変な音がしたから、気に

にやつて……」

提督「音？」

多摩「そうにや。こう、パチツ、パチツって」

提督「ああ。爪切りの音を聞いたのか」

多摩「爪？ 大佐、爪を切っていたのかにや？」

提督「そうだ。寝る前に少し伸びているのに気付いてな。気になって切っていた」

多摩「なんだ、そうだったのかあ」

提督 「気が済んだか？」

多摩 「うん。ごめんにや。失礼しま……」

提督 「どうした？ 指がどうかしたのか？」

多摩 「大佐」

提督 「ん？」

多摩 「多摩も切って欲しいにや」

提督 「なに？」

多摩 「多摩も爪を切って欲しいにや！」

提督 「どうしたんだ、いきなり」

多摩 「多摩はたつた今、まだ自分が爪の手入れをしていなかった事に気付いたのにや。だから大佐にそれをお願いしたいのにや」

提督 「俺は女の爪を手入れできるほど器用でもないし、気も遣えないぞ」

多摩 「そ・れ・で・も！ 切るだけだったらできるにや？」

提督 「切るだけだったらな。だがな、おm」

多摩 「それだけでもいいにや！ 切った後に鑢で整えるくらいはワケないはずにや」

提督 「それだってお前が満足する程の出来とは限らないぞ？」

多摩 「多摩は大佐に切って貰えるだけで満足にや。だから…… お願いにや。切つ

てえ」スリスリ

提督「急に何を言い出すのかと思えば今度は甘えてくるか。本当に猫だなこれは」

提督「分かった。ほら、動き難いから離れろ。切つてやるから」

多摩「！ ありがとうにやあ♪」ピヨン、ギユ

提督「こら、動き難いと言つたろ。全く…… 部屋に入るぞ」

多摩「分かったにや。お邪魔しますにや♪」

く 提督私室

多摩「……」キヨロキヨロ

提督「何か珍しいのか？」

多摩「多摩、大佐のお部屋に初めて入つたにや」

提督「そういえば、艦娘で入れたのはお前が初めてだったかもな」

多摩「ホント!？」

提督「多分な。なんだ、嬉しそうだな」

多摩「当り前にや！ だつて、だつて多摩が一番にやんてえ……♪」フルフル

提督「よく分からない拘りだな」

多摩「猫は総じてそういうものにや」

提督 「お前が言うとは何となく説得力があるな」

多摩 「にやふふ。大佐も分かっているにやあ♪」スリスリ

提督 「いちいち擦り付いてくるな。暑い」

多摩 「多摩はこれがいいのにや♪」

提督 「全く……ん？ 今度はどうした？」

多摩 「今気付いたけど、大佐の部屋って物があまりないにや」

提督 「まあ、ベッドと風呂を除いたら酒と煙草を収めてる棚だけだからな」

多摩 「大佐らしいけど、もうちよつと賑やかにすると良いと思うにや。そうじゃにやいと女の子はちよつと気まずいかもしれないにや？」

提督 「私室と言つても軍から提供された施設の一部だ。女を誘う為に使えるわけがないだろう」

多摩 「にやふふ、相変わらずお堅いにや。んにや、切つて」ピヨン

提督 「膝の上に、寝るのか」

多摩 「これがいいのにや♪ はい、手」

提督 「まるで幼子だな」パチツ

多摩 「にゅふふ♪」スリスリ

——数分後

提督「ほら、切ったぞ」

多摩「ありがとにや。今度は足もお願ひするにや。はい」

提督「おい、はしたないぞ。下着が見えている」

多摩「別に見せるつもりでやってるわけじやにやいから多摩は気にしないにや」

提督「俺が気になる」

多摩「にや？ もしかして多摩のパンツみてこうf」

提督「切らないぞ」

多摩「にやにや！ ごめんにや。謝るから切つて欲しいにや」

提督「それでもその格好は変えないのか」

多摩「この格好が良いのは本当なんだにや。だからお願いにやあ」スリスリ

提督「膝の上でじゃれつくな。ふう……」パチツ

多摩「あ、切ってくれるのにや。もうパンツは気にならないかにや？」

提督「お前と話していたら、島風と話しているみたいな感覚になつて、気にならなく

なつてきた」

多摩「にや？ それつてどういう事にや？」

提督「子供の下着には食指は動かんとという事だ」

多摩「ガーン」

バツ

提督「おい、何で片足が終わらないうちにもう片方を出す？」

多摩「セクシーアピールにや！」マルミエ

提督「そうか……」パチツ ↑余計に気にならなくなった

多摩「ガーン！」

〽数十分後

提督「終わったぞ」

多摩「結局、表情一つ変えなかつたにや……。多摩は、何だか負けた気がするにや……」シヨボーン

提督「それは残念だったな。もっと女を磨いて出直して来い」

多摩「にやー！ 悔しいにや！」ピヨン、グルグル、トン

提督（凄い動きだ……）

多摩「大佐、次は負けないにや！ 覚えているにやー！」

バタン

提督 「……」
提督 「さ、寝るか」

第52話 「トラウマ」

加賀「苦手……？」

提督「そうだ」

加賀「おっしやった意味がよく分かりません。苦手というのは女性の部屋そのものが苦手という事なのですか？」

提督「ん…… そうだな。どうしても入りたくないという意識が働いてしまう」

加賀「一体、何故……」

提督「士官学校時代の頃の話だ。当時つきあつたバン！」

金剛「大佐ア！ 浮気はダメって言ったヨオ!?」ダキツ

羽黒「そ、そうなんですか!?! 大佐！」ジワア

名取「そ…… 嫌あ！」ブア

提督「……っ」

加賀「3人とも落ち着いて下さい。あと、金剛さん大佐を離してあげて下さい。息が

できてないみたいです」

金剛「あ」バツ

提督「かはっ…… はあ…… ふう……」

加賀「大丈夫ですか？」

提督「久しぶりにマズイと思った……」

金剛「ご、ゴメンナサイ……」

羽黒「大佐、大丈夫？」

名取「大佐っ」

提督「大丈夫だ。だからそう詰め寄るな」

金剛「よかったデス…… じゃ、ないヨ！ 大佐どういう事ネ!? 誰かと付き合つて

るノ!？」

加賀「そこは気になっていたところですよ。どうか詳細を」

羽黒「私も知りたいです！」

名取「わ、私も……！」

提督「話すから皆落ち着け」

提督（加賀が3人が不意に部屋に入った事を戒めないとは……。いやな予感がする

な）

4人「……」

提督「まず、俺が何故女の部屋が苦手なのかという話だったな」

加賀「ええ、そうでしたね」

提督「士官学校時代俺は一人の女性と付き合っていた」

金剛「つ、それって……！」

加賀「金剛さん、冷静に」

提督「その頃の俺も若かったから、彼女も俺もお互いに結婚を前提としたような真剣な付き合いはしていなかった」

金剛・羽黒・名取「ほっ」

加賀「……それで、もしかしてその彼女の方が大佐が女性の部屋が苦手になった原因なのですか？」

提督「そうだ。この先は……所謂、大人の話になるわけだが……」

加賀「私に言ってるわけではないですよね」

金剛「ワタシは Adult だから問題ないワ」

羽黒「わ、わたしだって……」カア

名取「が、頑張ります……」カア

提督「……分かった」

提督「若かったとはいえ、もう十代半ばだ。付き合う内になつていた」
屋にもよく来るようになっていた」

羽黒「そ、それって……」カア

提督「肉体関係はあつた」

加賀「……」

名取「ひっ!？」

金剛「へエ……」

羽黒「びい!？」

提督「金剛、加賀、何か言いたい事でもあるのか?」

加賀「いえ、なんでも。ただ、その彼女の方に先を越されたのが悔しくて腹わたが煮

えくり返つてただけです」

金剛「フフ…… もうこれはバーズンを捧げるしかなかったネ……」

提督「……」(火に油…… いや、ニトロが爆発寸前か)

羽黒(あ、あの大佐が冷や汗流してる……)

名取(うう…… 部屋が凄く狭苦しく感じるよお……)

提督「まあ…… 続けるが、そんな感じで付き合っていて、ある日俺が初めて彼女の

部屋を訪れる事があつた」

加賀・金剛「……………」

提督（最早、何も言わなくなつたか。気のせいかな俺を見る目が話を聞く本来の目的から離れている気がする）

名取「こ、怖いよ、羽黒さんっ」ギョツ

羽黒「わ、私も……………て、手、離さないで」ギョツ

提督「……………彼女の部屋を訪れた時だ、俺の目の前に衝撃的な光景が飛び込んできた」

加賀「……………淫乱な彼女さんが全裸で性的要求してきたんですか？」

金剛「大佐……………時間と場所は弁えないと……………ダメヨ？」

提督「一方的に色情狂いに断定するな。まだ続きがある」

加賀「……………どうぞ」ジト

金剛「Sが付く言葉は言っちゃダメヨ？」ニコ

羽黒・名取「……………」ガタガタ

提督「お前たちが想像している様な事じゃない、安心しろ」

提督「それで、その光景だが。一言で言うとな潔極まりない散らかつた部屋だつた」

金剛・加賀「え？」

羽黒（大佐が安心しろって言ってくれてたのに……………）

名取（本当に信じてなかったんだ……。大佐かわいそう）

提督「俺は、自分が潔癖症であるつもりはないが、それでも限度というものがある」

提督「俺の目に映った彼女のその部屋の有様は、そんな俺の許容を軽く越えるものだった」

加賀「……そう、ですか」シラー

金剛「う、ウン。それは驚くワネ」

名取（二人とも急にしおらしくなっちゃった。安心したのかな）

羽黒（現金です……。大佐は、後で私が慰めよう……！）

提督「俺は、彼女に断わる事もせず自分に走った衝動に従って、部屋を片づけ始めた」

提督「今思えば本当に失礼な事をしたと思う。当然、当時の俺も片づけ終わって我に返った頃には痛烈に後悔と自責の念に駆られて、即座に彼女に謝罪しようとした」

提督「すると……」

羽黒「すると……？」ドキドキ

名取「ど、どうしたんですか？」ドキドキ

提督「激しい叱責を覚悟して彼女の方を見ると、そんな予想に反して彼女は嬉しそうに笑っていた」

羽黒「え？」

名取「そ、それってどういう……。」

加賀「これは嫌な予感がしますね」

金剛「Why? 綺麗にしてもらってハッピーだったからじゃないノ?」

提督「確かに彼女はその事で喜んでいた。それは、俺にとっては幸運だった。いや、だと思つた。彼女の次の言葉を聞くまでは」

『ありがとう! また頼むわね』

5人「……。」

提督「それからというものの、俺は部屋に呼び出される度に彼女の部屋を掃除させられ、ついには家事までやらされるようになっていた」

提督「見返りというつもりはなかったのだろうが、事の後に彼女が床に誘つたりもしたのだが、疲労困憊でそんな気分にもなれず、直ぐに帰るだけだった」

名取「ひ、ひどい……。」

金剛「あんまりヨ!」

名取「大佐、かわいそう……。」

加賀「それがトラウマになったのですか?」

提督「そうだ。その時から俺の中で女性の部屋は危険な所、という認識が生まれてしまったんだ」

加賀「因みにその彼女さんは今？」

提督「当然の成り行きだが、関係が自然に消滅した後は本部で働いているはずだ。生
活面はアレだったが、優秀な子だったのは間違いないからな」

羽黒（良かった！ まだ付き合っているとかじゃないんだ）

名取（う、嬉しいと思っちゃうのは……意地悪かな。でも……よかった……）

金剛（今は付き合っていないみたいね！ でも、先に寝取られちゃつてのなあ……
悔しいなあ）

加賀（出遅れはしたけど、状況は元の通りね。だけど、もう油断はできないわ）

加賀「……事情は分かりました。苦勞なされたのですね」

金剛「だ、大丈夫ヨ！ ワタシの部屋はキレイだから！」

羽黒「わ、私の部屋もです！」

名取「散かったりなんかしていません！」

提督「皆、すまないな。ありがとう」

加賀「大佐、安心するのは難しいかもしれませんが、私達の部屋だけは取り敢えず信
じて貰えませんか？」

提督「うむ……」

加賀「私を、信じられませんか？」ズイ

提督「…… ふつ、子供じゃあるまいし、何を意固地になつていたんだろうな」

加賀「それでは？」

提督「ああ。提督として検査には立ち入れさせてもらう」

金剛「ヤツタネ！」

加賀「ありがとうございます」

羽黒・名取「検査？」

提督「ん？ 加賀はともかく、何で金剛は驚かないんだ？」

金剛「エ？」

加賀「…… 不覚」

羽黒・名取「？」

提督「…… 加賀、金剛。少し話を聞きたいんだが」

第53話 「彼女」

〃大本営本部 第4司令部 提督執務室

彼女「ふう……」

武蔵「どうかしたか？」

彼女「いえ、ちよつと昔、つていっても数年前の事だけど、その頃を思い出してね」

武蔵「数年前？ 士官学校時代か？」

彼女「ええ。昔付き合っていた彼氏の事」

武蔵「む…… 恋人がいたのか……」

彼女「ええ」

武蔵「今も、付き合っているのか？」

彼女「昔付き合っていた、つて言つたでしょ？ その頃に別れたわよ」

武蔵「！ そうか」

彼女「嬉しそうね？」

武蔵「私はお前が好きだからな」

彼女「面と向かつてそういう事言わないですよ。中将が聞いたら怒られるわよ？」

武蔵 「逆に見せつけてやるさ」 フンス

彼女 「なに威張ってるのよ……ふう」

武蔵 「溜め息を付くと何か逃げるぞ？ 補充してやろうか？」 スイ

彼女 「何か、が分かつてるじゃない。こんなとこでキスはダメ」

武蔵 「む……私じゃ不満か？」

彼女 「不満だったら貴女とこんな関係になつてないわよ」

武蔵 「惚れてしまったんだ。仕方ないだろう」

彼女 「貴女も女なんだから男にも興味持ちなさいよ」

武蔵 「まぐわうだけなら男とでも出来る。でも、心はお前に夢中なんだ」

彼女 「全く、どうやったらあの武蔵に女の私が惚れられるのかしら」

武蔵 「一目惚れだからな、理由を聞かれても私も困る」

彼女 「そうね……」

武蔵 「なあ」

彼女 「ん？」

武蔵 「やっぱりキスしたい」

彼女 「ダメだって。この間も同じ事言つて結局最後までシちやつたじゃない」

武蔵 「あの時はトイレだったから問題ないだろう」

彼女「なんでトイレだったら問題ないのよ。盛り過ぎ、少しは自粛しなさい」
ギユ

武蔵「お願い……………」グス

彼女（服の裾なんか持って、涙目でお願ひしてくるなんて…………… 本当に武蔵なのかしらこの子）

彼女「キスだけよ？」

武蔵「！ ああ！」ペア

彼女「舌は入れちゃダメよ？」

武蔵「う、うむ……………」

彼女（入れるつもりだったわね）

彼女「全く…………… ほら」

武蔵「ありがとう。ん……………」

チュ

彼女「……………ん」

武蔵「ふう……………♪」

彼女「満足した？」

武蔵「ああ！ 今なら一人だけで基地近海の海域を一掃出来そうだ」

彼女「本当に出来るんだからダメよ。勝手な出撃は禁止」

武蔵「分かっているさ」

彼女「本当かしら……て、思ってしまう言葉でも信用できるくらいには、貴女優秀だからね。質悪いなあ」

武蔵「き、嫌わないでくれ」ジワ

彼女「ああ、もう。武蔵がそんな事で泣かないの」（犬か）

ポン、ナデナデ

武蔵「んふく♪」スリスリ

彼女「ちよつと、顔埋めないですよ。ご飯食べ難い」

武蔵「今休憩時間なんだからこれくらいいさせてくれ」

彼女「キスだけって言ったわよね？」

武蔵「う……」シユン

彼女「……」

武蔵「……」ジワ

彼女「もう…… ほら、おいで」

武蔵「っ、ありがとうっ。だから大好きだ♪」スリスリ

彼女「はいはい、いーこいーこ」

武蔵「……………なあ」

彼女「ん？」

武蔵「今晚も……………いいか？」

彼女「何度シテると思ってるのよ？　もうあそこは半分貴女の部屋よ。私が禁止しな

い限りは遠慮しないで入って来なさい」

武蔵「ん……………そうさせてもらう」スリスリ

彼女（ホント、なんでこうなったのかしら……………。あいつ、元気かな）

く同刻、大本営本部　総司令部　副官執務室

大和「あの」

中将「ん？」

大和「少将と武蔵って仲良いですよね」

中将「そりやま、恋人同士だからな」

大和「……………やっぱりですか？」

中将「なんだ、やきもちか？」

大和「いえ、私には中将だけですから」

中将「ふははは、こんな年寄りに。相変わらず物好きな奴だ」

大和「もう、いつもそうやってご自分を卑下なさるんですから。もつとご自分を誇示されてもいいと思いますよ？」

中将「バカ。老兵がそんな事できるか。と……それより、武蔵の奴が気になるのか？」

大和「あ、はい。いえ、気になると言うより彼女が少将といるときの様子が未だに本当に本人と信じられない事があるので……」

中将「ああ、それか！ そうだな。あのふやけきつた顔！ 戦の時とは比べもんならないよな！ うはは」

大和「中将、声が大きいですよ。でも、そうですね。あの武蔵が……」

中将「誰かを好きになるっていうのはそういうもんだ。慕っているからこそ心の垣根が必要ないんだろう」

大和「……私ではご不満ですか？」

中将「おいおい、なんでそうなる？ ほら、来い。撫でてやろう」

大和「もうっ、子供扱いしないでください！ 私は、大和ですよ？」

中将「お前が大和だろうが何だろうが、儂にとっては誰一人例外なく可愛いガキだ。いや、お前は娘だ」

大和「娘は嫌なんですけど……お嫁さんが、いい……です」

中将「まあ、そういうのはその内な！ 死ぬ前に何とかしてみろ！」

大和「縁起でもない事言わないで下さい」

中将「ふはははは！ 悪い悪い！ ほら、仕事だ。手伝え！」

大和「今、お昼休み中ですよ？」

第54話 「的中」

龍驥「ふっ……分かってたんやで？ 予測はできてたんやで……？」

一人寂しく港のビットに座っていた龍驥は誰にともなくそんな事を呟いていた。

提督が彼女を見掛けたのはそんな時だった。

提督（あいつ、何をしてるんだ？ 落ち込んでいるように見えるが……。最近あ

つは上位改造を受けて実力、練度ともに軽空母の中では千歳姉妹を抜いてトップになつたはずだ。だったら何故落ち込んでいる？）

提督「龍驥」

龍驥「なんや大佐か。見てわかると思うけど、うち今ごつつ落ち込んでるんや。そつとしておいてくれへんかな」

提督「邪魔をするつもりはない。ただ、気になってな。よかつたら相談に乗るぞ？」

龍驥「……膝」

提督「ん？」

龍驥「大佐の膝に乗せてくれる？」

提督「ああ、構わない」（何故、膝……）

龍驥「ありがとう。んしょ……っ」と

提督（軽いな……）

龍驥「大佐、今うちを乗せて軽いなどか思わんかった？」

提督「よく分かったな」

龍驥「そりゃ、うちみたいになちんちくりんなのが重かったりしたらもうホンマ叶わへんで……」

提督（更に落ち込んだ？ 何故だ？）

提督「なあ」

龍驥「んー？」

提督「一体どうしたんだ？」

龍驥「……頭撫でて」

提督「ああ、いいぞ」ナデ

龍驥「ん……おおきに」

龍驥「……うち改二になったやろ？」

提督「ああ」

龍驥「強くなったやろ？」

提督「そうだな」

龍驥「でも、実は強くなつてなかつたんや」

提督「なに？」

龍驥「や、実力は上がつてるで？ でも、でもな……」

龍驥「分かつてはいたんや。予測は何となくできていたんや。でも、でもな……ちよつとくらい夢みさせてくれてもええやん？」

龍驥「金剛達の前ではあんな啖呵切つて見せたけど、内心はちよつとだけ期待してたんや。やつば間違いやつたわあ……」

提督「さつきから一体何の話をしてるんだ？」

龍驥「大佐はさ、子供つて好き？」

提督「ん？ まあ、元気に遊ぶ子供は嫌いではない」

龍驥「ん……それつて見てて元気になるうとか、愛嬌があるうつて類の『好き』やろ？」

提督「ああ」

龍驥「ちやうねん。うちが求めてたのはそんなちやうねん」

提督「……」

龍驥「大佐、ちよつと手貸してくれへん？ ん、ちやう。両方とも」

提督「こうか？」

龍驤「そ。ちょっと黙つといてな。つしよつと」フニ

龍驤は提督の両腕を取ると、なんと自分の胸に手を当てさせた。

提督「おい」

龍驤「黙つて！」

提督「……」

龍驤「大佐、どう？」

提督「何が？」

龍驤「何か感じる？」

提督「お前の鼓動しか感じない」

龍驤「ホンマ？ ホンマにそれしか感じひん？」

提督「……少し柔らかいな」

龍驤「良かったあ……それで何も感じんとか言われたらもううち、どうなつてた

か分からんかったわ」

提督「お前、体型の事を気にしていたのか？」

龍驤「せや。うち一応空母やけど見た目が駆逐艦と変わらんくらいちんちくりんやん

？」

提督「……子供っぽくはあるか」

龍驤 「ふふ、ハッキリ言わんのは優しさなん？ ま、嬉しいけど」

提督 「改造に期待していたのか」

龍驤 「ちよつちな。ま、結局叶わへんかったけど」

提督 「……」

龍驤 「大佐」

提督 「うん？」

龍驤 「大佐はうちみたいなの背も小さくて、股もツルツルな子供となんも見た目が変わらんちんちくりんは嫌？」

提督 「嫌ではない」

龍驤 「ほんなら好き？ 好いてくれる？」

提督 「さっきの子供が好きかという質問はこの事か」

龍驤 「せや。こんなうちでも大佐が好いてくれるんか知りたかったんや」

提督 「そうか」

龍驤 「で、どう？」

提督 「見た目は幼いかもしれないが、お前はお前だ。そんな事で俺は区別したりしない」

龍驤 「ほんなら……！」

提督「……俺は既に何人もの娘から恋人になる願ひを受け入れている色情狂いの最低の男だぞ？」

龍驤「そんなことない！ 大佐は今でも大佐のままや！ 真面目で優しいままやないか！」

提督「龍驤……」

龍驤「お願いや。何番目でもええ。せやからうちもその中の一人したって……後生や」

提督「……分かった」

龍驤「っ、ホンマ!？」

提督「そこで嘘を言うような人間だと思うか？」

龍驤「んーん！」ブンブン

龍驤「大佐……ホンマ、ホンマにありがとな！ うちめっちゃ嬉しい！」

提督「それは良かった。……ところで」

龍驤「んー？ なにに？ うち、今幸せを噛み締めてるところなんや。ちよつと浸らせてといてえな♪」スリスリ

提督「俺はいつまでお前の胸を包んでたらいいんだ？」

龍驤「なんやそんな事かいな。んー……そうやな。揉むと大きなるつちゆうから

もうちよつと、悪いけどこのままでいてくれへん？」

提督「俺は、ただ手を当てているだけなんだがな。ま、頼まれてもこんな所では揉んだりはないが」

龍驤「それでええよ。落ち着いて考えてみたらものごつつ恥ずかしいけど、これもこれで恋人同士でないとせんことやん？」

龍驤「今は、どんな形でもその気分に浸らせといてえな」

提督「人の気配がしたら離すからな」

龍驤「ん♪ それでええよ。……えへへ、もしかしたらこの幸せのお蔭でちよつとくらい胸大きくなつたりするかしれへんしな」

提督「…… どうだろうな。俺は今、自分の倫理感を屁理屈で正当化するので精一杯だ」

龍驤「そ、その精一杯…… その内本当のうちにも頂戴…… な」カア

龍驤「精一杯なりに…… / / /」ゴシヨ

提督「…… いつか、な」

第55話 「春嵐」

金剛は焦っていた。

もう別れているとはいへ、提督に元々付き合っていた恋人がいた事に。

金剛は逸っていた。

自分の成長限界が目の前だったから。

結婚自体は提督自身が決める事だとしても、ケツコンは成長限界に達した者なら誰でもその資格がある。

なら形だけでもそれに近い関係になれないか。

金剛はそう思いながら過ごしている内に気付けば、自分の限界が直ぐそこということころにまで来ていた。

結果がどうなるかは分からない。

それでも自分が一番先に提督のモノになれるかも知れないと思うと、多少無理をしてでもその条件だけにでも近づこうと心に決めた。

その結果……。

提督「まだ出るのか」

金剛「お願いヨ！ もう直ぐ！ もう直ぐ最高練度に到達するノ！」

提督「そんなに焦ったところで結婚は……」

金剛「ケツコンでもいいノ！ それができる条件に到達したいノ！」

提督「……」

提督（金剛がしきりに出撃を催促にするようになってからというもの、気づけば資材の消費こそ激しいものの、こいつが率いる艦隊のメンバーの練度は著しく上がっていた。その精強さはいく数日前とは比べ物にならない程だ）

提督「焦る気持ちも解らないでもないが、連日の出撃で資材の消費が激しい。出撃は次で最後だ。いいな？」

金剛「つ、I understand！ 分かったワ！」

Bis「えつ、まだ行くの？ もうへへへへ……」

長門「ふつ、今の金剛のやる気は鬼気迫るものを感じるな。まあ、付き合ってやるが」

鬼怒「珊瑚諸島怖い、サンゴ諸島コワイ……」
「ブツブツ」

蒼龍「鬼怒大丈夫かな？」

飛龍「実践訓練のつもりがいつの間にか出撃固定メンバーになっちゃってたからねえ。ま、おかげで全員凄まじい勢いで練度上がってるけど」

蒼龍「はあ……もし、あの時、訓練指導メンバーに立候補してなかったら……」
トオイメ

飛龍「露骨な嫉妬で、可能性の段階でしかない改造に引かれるからよ」

提督「皆、疲れているところすまないが、これで最後の出撃だ。終われば暫く休暇とする」

一同「……！」ピタッ

提督「良い食い付きだ。約束は守る。さあ行つて来い、晴れて清々しい気分で憩いの時を過ごす為に」

一同「了解！」

くとある場所

レ級「え？ そんな遠くから応援要請？」

タ級「うん。なんでもその方面の鎮守府の艦隊の一部が凄いい勢いで出撃を繰り返して
るらしいわ」

ル級「なにそれ、怖い」

ヲ級「お蔭でその近辺の深海棲艦は夜、おちおち寝る事もできないんだって」

タ級「はい。これ、その海域のボス直筆の応援依頼書」

『たすけてっ!!』

レ級「うわ……」

ル級「凄く……切羽詰まってるね……」

ヲ級「文字だけなのに書いた人の悲痛さを感じるね……」

タ級「どうする？」

レ級「悪いけど……見なかったことにしようか」

ル級「いいの？」

レ級「気分はよくないけどさ、でもこれ本当は3日前にくらいに届いてないといけなかったやつだよな？」

タ級「依頼書が認められた日付を確認するに、そうね」

ヲ級「何かあったの？」

タ級「依頼書を携えた補給艦隊がその艦隊から何度も追撃にあつて、13回目の出撃でようやく追撃を振り切つてこつちに届ける事ができたらしいわ」

ヲ級「うわあ……」

ル級「依頼書を届けに来た補給艦の子たちは？」

タ級「疲労困憊がたたって依頼書を渡した瞬間疲れて寝ちゃったわ」

レ級「その子達が起きたら間に合わなかったって言おう。多分納得するよ」

ヲ級「そのボスへのお詫びはどうするの？」

レ級「姫と一緒に来てもらって謝って、適当にそこら辺の基地を攻撃して、その憂さ晴らしに付き合っただけならいいんじゃない？」

タ級「それが妥当かしら」

ル級「挙手！ 賛成の人っ」

ヲ級「はいっ」

ル級「ハイ！」

タ級「はい」

レ級「はい」

ル級「満場一致だね」

レ級「じゃ、そういう事で」

タ級「了解」

ヲ級「補給艦の子達に出すお菓子用意してくるね」

レ級「いいね。行ってらっしゃーい」

レ級（それにしても、あの方面って確か大佐の鎮守府がある所だよね。何かあったの

かな？ 今度行ってみよう)

く所変わって、大佐の鎮守府

金剛「大佐ア！ 戻ったヨ！」

B i s 「ただいまあゝ」フラフラ

長門「やれやれ。これで暫くゆつくりできるな」

鬼怒「え？ もう終わり？ もう寝ていいの？」

飛龍「お疲れ、鬼怒。今日はゆつくり休みなよ。なんならわたし達の部屋に来る？」

蒼龍「そういや、鬼怒ってこつちに所属してから部屋の割り当てすら決まる前に出撃祭りに参加する事になつちやつたからね……」

鬼怒「ありがとう…… おねがい……… しま………」フラ

飛龍「よつと」キヤツチ

蒼龍「大佐、帰って早々だけどわたし達もう戻るね。休みたいし」

提督「ああ、ご苦労。ゆつくり休め」

飛龍「大佐、お疲れ様。休暇があつたら遊んでよね？」フリフリ

蒼龍「えー、なにそれー？ あ、大佐。それ、わたしも予約ね？ じゃ、おやすみー」

バイバイ

長門「大佐、私もマリアを運んで休ませてもらう。マリアの奴、立ったまま寝てしまつたからな」

B i s 「スー…… スー……」 z z z

提督「ああ、お前たちもご苦労。ゆっくり休んでくれ」

長門「了解した。おっと、大佐」

提督「ん？」

長門「休暇の件、まさか飛龍達だけと遊ぶわけじゃないよな？」

提督「…… 時間を作っておく」

長門「うむ。それでこそ私達の提督だ。約束忘れないでくれよ？ それじゃあ、お休

み」

バタン

金剛「……」

提督「金剛」

金剛「大佐」

提督「ああ」

金剛「ワタシ、成長限界に到達シタヨ」

提督 「そのようだな」

金剛 「これでケツコンカツコカリできるネ？」

提督 「可能にはなつたな」

金剛 「…… ちよつと、加賀に会ってくるワ」

提督 「そうか。あいつに宜しくな」

金剛 「大佐…… 逃げない、でネ？」

提督 「分かっている。よく頑張つたな」

金剛 「ウン！ それじゃ後でネ！」

バタン

提督 「……」

提督 「覚悟を…… しておくか」

第56話 「結実」 R—15

コンコン

金剛 「加賀、いまスカ？」

加賀 「どうぞ。今は丁度私一人です」

ガチャ

金剛 「お邪魔するネ」

加賀 「いらっしやい」

金剛 「加賀」

加賀 「はい」

金剛 「ワタシ、最高練度になったネ」

加賀 「そのようね」

金剛 「ケツコンカッコカリ、できるようになったヨ」

加賀 「そうね」

金剛「…… 加賀、ワタシこれから大佐にお願いしに行こうと思うノ」

加賀「ケツコンの？」

金剛「ウン」

加賀「そう、幸運を祈ってるわ」

金剛「一緒に行きまシヨ？」

加賀「それはできないわ。邪魔はしたくないもの」

金剛「邪魔だなんて思つてないワ！」

加賀「……」

金剛「加賀、ワタシは貴女と対等の関係でいたいノ」

金剛「例えケツコンで来たとしても、大佐と貴女との関係は fair じゃないと

嫌ナノ！」

加賀「…… 我儘な人ですね」

金剛「Don't worry ヨ、加賀。貴女も直ぐにケツコンできるワ。だから

コレは先に予約をするようなモノヨ？」

加賀「大佐が受け入れてくれるでしょうか……」

金剛「だから二人でいくんじゃナイ！」ギョツ

加賀「……」

金剛「加賀……………一緒に……………イコ？」ヒソ

加賀「……………っ」ブルツ

金剛「ヤツタ、上手くいったワ♪」

加賀「貴女……………」ジト

金剛「フフ、可愛いヨ？」

加賀「知りません」プイ

金剛「アハハ、sorryヨ、加賀。ほら、行きまショウ？」ス

加賀「……………仕方ありませんね」ギユ

く深夜、提督執務室

コンコン

提督「入れ」

ガチャ

加賀「誰か確認しないんですね」

提督「お前たちだと確信していたからな」

金剛「乙女心を分かってるネ！ 流石ヨ♪」

提督「茶化すな。……さて、雰囲気を考慮しないで悪いが、単刀直入に聞こう」

提督「何をしに来た？」

金剛「ケツコンカツコカリをしてもらいに来まシタ」

提督「加賀がいるのは？」

加賀「私も金剛さんと同じ立場でいたいからです」

提督「ケツコンできなくても同じと言えるのか？」

加賀「それは、ケツコンカツコカリという仕組みの問題です。大佐への好意とは関係ないかと」

金剛「大佐、ワタシは自分と同じくらい加賀も愛してあげて欲しいデス」

提督「二人を同時に愛せ、と？」

加賀「可能なら」 金剛「That's right」

提督「俺は、まだ二人に好意を抱き切れてないのだが……」

加賀「それは承知の上です」

金剛「だから好きになつてもらう為に…… 来たのヨ？」

金剛はそつと提督の手に自分の掌を重ねた。

提督は掌から金剛の温もり感じながら、目の前の二人が濡れた瞳で見つめている事に気付いた。

その時点で彼女たちが今、何を求めているか提督は理解した。時計を見る、時刻は既に深夜を回っていた。

提督「……いい時間に来たものだな」

加賀「そうですね。この時間ならもう私達以外だれも起きていないと思います」

金剛「大佐は sleep せずにこの時間まで待つててくれまシタ。今更、偶然とかいうのナシ、ヨ？」

提督「……ふう。部屋に来い」

加賀・金剛「はい」

く 提督の私室

金剛「大佐……どうデス？ ワタシの……」

提督「きれいだ」

金剛「フフ、嬉しい……ね、さわつて……」

金剛「ん……あつ……」

金剛「大佐、キス……」

提督「ああ」

金剛「ん……ちゅ……」

加賀 「可愛い胸ですね。ちよつと失礼します」ペロ

金剛 「ああんつ、加賀ア」

提督 「加賀、お前もきれいだな」ムニユ

加賀 「んん……………つ。ありがと……………います……………」

金剛 「本当ネ……………。今度はワタシが加賀のを……………」ペロ

加賀 「やつ……………こん……………ご……………」

金剛 「フフ……………なんだかワタシ、赤ちゃんみたいネ」ペロ、ムニユムニユ

加賀 「はあ……………そこ……………あ……………」

提督 「加賀、足を……………」

加賀 「……………」コク

金剛 「Wow……………こんなになるものナノ？」ジツ

提督 「確かめてみるか？」

金剛 「え？」

加賀 「た、大佐？」

金剛 「ああつ……………くう……………んつ」

提督「お前も良く具合だ。金剛、加賀を少し愛でてやれ。お前の面倒は俺が見よう」
 金剛「あつ……はあつ。め……でるつて……どう、すればいいノ？」

提督「お前がやりたいようにしてみるといい。匂い、味、感触、全てを確かめてみる」
 加賀「そ、そんな……はずかし……」

金剛「……大佐も、同じことワタシにするノ……？」

提督「お前が許してくれるなら」

金剛「……わかつたワ。好きにシテ、可愛がつて……ワタシも加賀にそうスル」

ムニイ

金剛「Oh……これが加賀の、なのネ……」ジッ

加賀「……っ」

金剛「匂いは……スンスン。あまりしなイ？」

加賀「やだ、広げられてる。見られてる。嗅がれてる……！」

金剛「味は……加賀？」

加賀「……」コク

ペロ

加賀「うっ」

金剛「味も……ちゆる、ペロ……ずず……あまりしないのネ。でも、温かい……」

金剛「凄い。いくら啜つても出てクル……」

提督「金剛……」

金剛「やつ……ああつ」

提督「……我慢するな。感じろ……ず……くにゅ……ペロ」

金剛「た、大佐……ど、ドウ？ ワタシの。変じゃ……はっ……ない？」

提督「全く。綺麗だ……ちゅ……ペロ」

金剛「お、美味しいノ……？ そんな……ああつ、の……ガ？」

提督「味はそうでなくても、お前が感じてくれると、美味しく感じる」

金剛「はあ……はあ……ウフフ……そうナンダ……嬉しい♪」

金剛「ね、もつと舐メテ。もつと味わつテ……」

提督「ああ。じゅっ……じゅるるっ。ペロ、れるれる」

金剛「んん……！ はあつ、イイ……！」

加賀「金剛……お願い……です。私も……同じように……」

金剛「あ……ふふ、ゴメンね？ おつ、ああ……またせつ」

金剛「ん……ちゆ、ちゆるる、ペロ」

加賀「はあっ……！」

金剛「あ、コレ知ってル……。コレ弄ると更に気持ちイイのよ、ネ？」ペロ、クリ

加賀「ああつ、そ、そこは……！ ダメツ中まで……！ ううつ」

金剛・加賀「はあ……はあ……」

提督「さて、もう十分か……」

金剛「ま、待つて……その前に大佐の、コレ……」

加賀「私も……貴方を……全部感じたい……です」

金剛「ん……オカシナ匂い……。それに……ん、ペロ……ちよつとしよつ

ぱイ？」

加賀「はあ……はあ……でも、これが大佐の……味……。ん……この

感触……いい……もむ、ペロ……」

提督「く…………… 二人とも、もういい。そろそろ限界だ……………」

金剛「あ。さ、最初はやっぱりコッチがいいデス…………… お願いしマス」

加賀「私も…………… どうぞ、貫いて下さい……………」

提督「…………… いくぞ」

加賀「あああ……………！」

金剛「加賀…………… オメデトウ♪ 大佐…………… 次はワタシに……………」

提督「ああ」

金剛「ん…………… つ！ああつ…………… くう！」

提督「む…………… 加賀もお前も流石にキツイな……………」

金剛「当り前ヨ…………… 大事にしてきたんだから…………… ほら、コレ……………」

提督「二人とも…………… 待たせたな」グイ

金剛「ああっ！」

加賀「大佐！ たいさつ」

——早朝

提督「……………」ムク

金剛「あ。大佐、起きまシタカ？」

提督「ああ。おはよう」

金剛「Good morning 良い朝ネ♪」チユ

提督「ん……加賀は……疲れて寝てるか」

提督の隣では加賀が静かに寝息を立てていた。

その顔は穏やかで幸せに満ちているような笑みを僅かに浮かべていた。

金剛「昨日はあんなにシちやったからね……。ふふ、初めてだったノニ」

提督「そうだな。少しやり過ぎたか」

金剛「大佐のエツチ」

提督「返す言葉もない」

金剛「嘘ヨ。凄く良かった、幸せデシタ」

提督「そうか……」

金剛「ね、大佐」

提督「ああ」

金剛「これからも、よろしく、ネ？」

チユ

第57話 「枯渴」

加賀達の様子がおかしい。

早朝から望月はそう感じていた。

金剛はともかく、加賀が朝から笑っていたからだ。

望月（あの加賀さんがいつものポーカーフフェイスを崩して、僅かだけ始終笑みを……）

金剛「〜♪」

望月（金剛さんはいつも通りに見えるけど、加賀さんと目が合うたびに凄く嬉しそう顔をして笑ってる……。一体、何が……？）

望月「大佐」

提督「……なんだ？」

そんな二人に対して提督はいつも以上に疲れているように見えた。

明らかに何か悩んでいるようだった。

望月「あ、いや……どうかした？ 元氣ないね」

提督「まあな。ちよつと資材が、な」

提督（朝から起きて早々、加賀の欲求に応じてしまったからな。予測通りだが、金剛の相手も一緒にしたから体力が……マズイ）

提督（更に自分の淫乱さに嫌気がさしているところにこの資材の状況……キツイな。本当に）

望月「ん？ あー、弾薬がまた3桁だね」

提督「金剛達が強くなったのは良い事だが、改めて資材の残量を確認してみると弾薬が本場にマズくてな……」

望月「なるほどねー。あ」

提督「ん？ どうした？」

望月「大佐、落ち込んでいるところ悪いんだけどさ、もう直ぐ第二艦隊が長期遠征から戻って来るよ？」

提督「無事に戻ってくるのは良いことじゃないのか？ 資材も手に入るし」

望月「まあ、そうなんだけどね。だけどさ……」
タタタツ……コンコン

羽黒「大佐っ、羽黒です！ 入っていいですか？」

提督「羽黒？ 今しがた遠征から帰ってきたばかりか。入れ」

望月「あーあ、来ちやったかあ」

ガチャ

羽黒「失礼しますっ」

提督「遠征ご苦労。どうした？ そんなに急いで」

望月「……」

羽黒「大佐、私、さっきの遠征で上位改造が可能な練度に到達しました！」

提督「なに」

望月「やっぱり」

羽黒「お願いです。羽黒をもっと強くして下さい！」

提督「……」

羽黒「？ 大佐？」クビカシゲ

望月（上位改造だもんね。資材使うよねー）

提督「ああ、悪い。急だったから少し驚いてな。そうか、よく頑張ったな。偉いぞ」

羽黒「えへへ。ありがとうございます。あの……頭を……」

提督「ん？ ああ」ナデナデ

羽黒「ふあ……ありがとうございます」

提督「改造だったな。勿論許可しよう。許可証を認めるから暫く……夕方くらいにまた来い」

羽黒「はいつ、分かりました！ お願いしますね！ 失礼しました」
 バタン

提督「……」

望月「ま、断われないよねえ」

提督「望月、試算……を」

望月「もうできてるよ。はい」

『改造後の資材残量試算結果：燃料・鋼材・ボーキ／6桁 弾薬／2桁』

チーン

望月（大佐の頭の中で何かが鳴った気がする）

提督「……マズいな」

望月「そうだね。これじゃ、出撃どころか、演習も遠征も無理だね」

望月「また、あそこの提督に交換を頼む？」

提督「そう頻繁に頼むわけにもいかないだろ。こちらの体裁もある」

望月「じゃあ、どうするの？」

提督「望月……」

望月「ごめんごめん。ちよつと意地悪しちゃったね。睦月達集めてもらえる？」

ちよつとひとつ走り稼いでくるよ」

提督「すまん」

望月「やるときはやるからね。もつと褒めてもいいよ？」

提督「……何がいい？」

望月「……わたしを大佐の膝に乗せて抱きしめて、さらに頭を撫でる、とか？」

提督「容易いことだ」スツ

望月「ん……睦月達が来るまで、暫くお願いね」

望月（わ、本当にやってくれた。しかも迷いなく。こりや相当参ってるね。睦月達にも事情を話していつちよ頑張るか）

望月「ん、もういいよ。睦月達がもうすぐ来るから。ありがとね」トテ

提督「俺としてはこれくらいじゃ礼として申し訳ないくらいだ」

望月「まだ、実際に集めてもないのに。何言ってるのさ。そんなんじゃ、遠征から帰って来た時にもつとご褒美要求しちゃうよ？」

提督「寧ろ遠慮するな。可能な範囲で希望に応えよう」

望月「マジ……………?……………考えとく」

望月（……………よしっ）

コンコン

睦月「睦月型駆逐艦一同参りました！」

提督「入れ……………望月、頼むぞ」

望月「任しといて」b

第58話 「策士」

飛龍「あ、大佐っ。こっちこっちー！」フリフリ

蒼龍「お、来たね。……っ。あら？」

望月「ちーす」

提督「すまん。遅れた」

飛龍「あ、ううん。別にいいですよ。それより」

蒼龍「何でもちーもいるんですか？」

望月「もつちー言うなし。ま、ちよつといろいろあつてねえ」

提督「我が鎮守府の窮状を救ってくれた借りが望月達にはあつてな。その礼代わりだ」

望月「そういう事。駆逐艦を代表して、大佐からお土産をドンと持ち帰らないといけないわけよ」

飛龍「駆逐艦に救われるって、一体何が……」

蒼龍「大佐あ、小さい子に手をだしちゃ……てなわけでもないですよね」

望月「わたし的にはそれも……やぶさかではないけど、残念ながら違うよー」

提督「何が残念ながらだ。全く掠りもしていない。資材が少しマズイ状況だったんだ。それを救ってもらった」

飛龍「ああ、なるほど。遠征ですね」

蒼龍「駆逐艦の子達ってホント、機動力半端ないですよ。基地の危機を回避する程なんて、どれだけ助けてもらったんです？」クス

望月「睦月型総動員でお手伝いしましたよー」フンス

提督「面目次第もない」

提督「まあそういうわけなので、望月も一緒に構わないか？」

飛龍「私は構いませんよ」

蒼龍「わたしも。人数が多い方が楽しいしね」

提督「ありがとう」

望月「さんきゅー」

飛龍「それで、何処行きます？」

蒼龍「特にプランがないなら、決まるまでわたし達の部屋で麻雀とかどう？」

望月「いや、せっかく外に出てるのにいきなり戻るつてのもないっしょ」

提督「そうだな。お前たち、何か欲しい物はあるか？」

飛龍「わ、大佐ったらいきなり物で釣るつもりですか？」

提督「人聞きの悪い事言うな。先ず、直接的方法で礼と労を労いたかつただけだ」

蒼龍「じゃ、わたし大佐がいい」

望月「あ、それいいね。わたしも」

飛龍「え？」

提督「なに？」

蒼龍「何でもいいんでしょ？　じゃ、わたし大佐がいいなあ？」ズイ

望月「男に二言はないよね」クイクイ

飛龍「ちよ、ちよつと二人とも」

提督「悪いが、俺は物じゃない」

蒼龍「そんなの分かってますつて。何処でも付き合つてくれる大佐がいいつて事です
よ」

望月「なんだそうなんだ。わたしは大佐をモノにしたいつて意味だったんだけどな」

蒼龍・飛龍「えっ」

提督「望月……突然何を言うんだ」

望月「駆逐艦じゃダメ？　やっぱ子供だから？」

提督「……」

望月「そんなに悩まないですよ。ただ、今までより親しくしてくれたらいいだけ」

提督「親しく？」

望月「そう。もつと気安く声を掛けてくれたり、褒めてくれたり。距離を感じない接し方を希望」

提督「改めて言われるとどうやればいいか悩むな」

望月「はい。まずは手を繋ぎましょう」ス

提督「そんなのでいいのか？」ギユ

望月「手を繋ぐのは単純なようで意外に重要かつ効果的な触れ合いなんだよ？ 覚え
ておいて」

提督「勉強になる」

飛龍・蒼龍「……」ポカーン

飛龍「はっ。た、大佐、それじゃ、それ私もっ。腕、腕組んでください！」

蒼龍「あっ、飛龍ズルい！ 大佐、わたしも！……て、もう手が空いてない……」

蒼龍「ならっ」ギユ

提督「おい、苦しい。もたれかかるな」

蒼龍「だって、場所がないんだもん。ほら加減しますから。ついでにオマケもありま
すよ？」ムニユムニユ

飛龍「くっ」

望月「悔しいけど、わたしには無理だなあ。ま、その代わりに腕に抱き着くけど」ギユ
提督「歩き難い……あと、人目が気になる」

蒼龍「だーめ！ 今日一日は何処でもどういふ風にでも付き合ってもらうつて約束です！」

望月「そういう事。望月のモノになったんだから今日は諦めなよ」

提督「さり気なく条件が追加されていた気がするが……」

飛龍「きつと気のせいです。ほら行きましょ！」ギユツ、ムニユウ

望月「二人ともいいなあそれ。少し分けて欲しい、と思ったりしないでもない」

飛龍「駆逐艦の子つてそこが不憫よねホント」

蒼龍「大丈夫だよ。大佐ストライクゾーン広いから」

提督「勝手に人の性的嗜好を拡大するな」

望月「大佐」クイクイ

提督「うん？」

望月「わたしたつた今、皆に持って帰るお土産決まったよ」

提督「なんだ唐突に」

望月「蒼龍さんが言つてたゾーンの拡大。それをお土産に希望」

提督「……ズルいぞ」

望月「狡猾って言つてよ」ニマ

蒼龍「ひゅうつ♪ もつちーやるう！」

飛龍「望月ちゃん…… 恐ろしい子」

望月「だからもつちー言うなし。ま、取り敢えず行こ」グイ

飛龍「そうね。じゃ、何処行きます？ カラオケとかどうですか？」

蒼龍「お、いいねえ♪ わたし美声披露しちやいますよ！」

提督「分かった。分かったからそう引つ張るな」

望月「…… 今日の良い日になりそう♪」

第59話 「好奇心」 R-15

蒼龍 「〜♪…………… どうよっ」

パチパチパチ

提督 「上手いものだ」

望月 「うん。確かに」

飛龍 「相変わらず上手ねえ」

蒼龍 「どうもどうも〜♪」

蒼龍 「ふう、ちよつと休憩つと。あ、もっちー隣いい？」

望月 「だから…………… はい、どうぞ」

蒼龍 「ありがとうございます。お邪魔するね」

飛龍 「大佐は何を歌います？」

提督 「まだ決めてない」

飛龍 「じゃ、一緒にこれ読みましょうか」

提督 「別にお前から先に決めていいんだぞ？」

飛龍 「まあまあ、大佐がどんな曲を知ってるのか興味もあるし」

提督「そうか……」

提督・飛龍「……?」「……………」

蒼龍「ねえねえ、もっちー」

望月「んー?」

蒼龍「さつきから飛龍ったら大佐との距離が近い感じしない?」

望月「近いっていうより密着してるじゃん」

蒼龍「攻めるねえ」

望月「あんな短いスカートまで履いちやつてさ」

蒼龍「見えてるよね?」

望月「少なくともわたし達からは丸見えだね。大佐の位置からでもギリギリ見えてるんじゃないかな」

蒼龍「あんなオシヤレなの穿いちやつて…… 今日の本気、かな?」

望月「それはないと思うよ。いくら求められても大佐が外で迷惑を掛けるような事はしないと思うし」

蒼龍「んー…… じゃあ、今回は飛龍の熱烈なアピール作戦でとこかな」

望月「そうじゃない? 飛龍さんだって時と場所を弁える常識はある筈だし」

蒼龍 「と、なるとわたし達も手を啜えて見てるわけにはいかないなあ」

望月 「あんまり余計な事はしない方がいいと思うけど？」

蒼龍 「まあまあ、そう言わずに。という事でちよつと作戦タイムに行こう」

望月 「作戦タイム？」

蒼龍 「大佐！」

提督 「ん？」

蒼龍 「わたしともつちー、ちよつとトイレに行つてくるね」

飛龍 「二人揃つて？」

蒼龍 「まとめて済ませておくに越した事はないでしょ？」

望月 「……」

飛龍 「それは、まあそうだけど」

蒼龍 「というわけで行つてくるね。あ、戻るときにドリンク持つて来る？」

提督 「いや、いい。俺はまだ残つてる」

飛龍 「わたしもいいかな。ありがと」

蒼龍 「そ？ じゃ、行こつか？ もつちー」

望月 「…… はいはい」

バタン

提督「ふむ……」↑曲録を見てる

飛龍（これは、チャンスね！）

↳ 障碍者用トイレ

望月「作戦会議ってここで？」

蒼龍「個室に二人で入るわけにもいかないじゃん」

望月「そりゃそうだけど……で、何するつもり？」

蒼龍「んー……ノーパンとか？」

望月「痴女じゃないんだからさ。それに外で迷惑を掛ける行為はアウトだよ？」

蒼龍「別に本番するわけじゃないし、個室なら分からないって。ただ、そう。セクシー
アピールってやつよ」

望月「そういう軽はずみの行動が後悔に繋がるんだよ」

蒼龍「もつちーって、意外に真面目だね」

望月「人並みに常識があるだけだよ」

蒼龍「うー……じゃ、じゃあ体験だけ体験！」

望月 「体験？」

蒼龍 「ここで脱いでみて。ダメそうならやらない」

望月 「そこまでしないと納得いかないの？」

蒼龍 「やらないで後悔したくないもん」

望月 「…… はあ。仕方ないなあ」

蒼龍 「勿論、もつちーも脱いでね？」

望月 「脱いだところでわたしは意見変わらないと思うけど」

蒼龍 「だから体験なんだった」

望月 「はいはい…… 分かったよ」 スル

蒼龍 「えっ、こつち向いて脱ぐの？」

望月 「密室なんだから恥じる必要ないでしょ？」

蒼龍 「そ、そういうものかな」（もつちーって意外にこういうところ淡泊なのね）

蒼龍 「じゃ、じゃあわたしも……」 スル

望月 「どう？」

蒼龍 「す、スースーする……。これは無理かな」

望月 「だから言ったじゃん。じゃ、穿くよ」

蒼龍 「あ、ちよつと待って」

望月「ん？」

ピラ

望月「……何してんの」

蒼龍「まあ、予想はしてたけど、もっちーってツルツルだね」

望月「駆逐艦でそうじゃない子なんていないと思うけど？ 少なくとも睦月型ではないよ」

蒼龍「へえ、そうなんだ」

望月「もしかして、それを確かめたくて捲ったの？」

蒼龍「あはは」

望月「もう何考えてるんだか。取り敢えず、もういいでしょ？ 手、離してよ。お腹が冷えちやう」

蒼龍「ああ、ごめん。ん……？」

望月「どうかした？」

蒼龍「ああ、いやなんでもー。あはは」

望月「なんか凄く変な事考えてる予感がしたけど？」

蒼龍「だ、大丈夫！ なんでもないから。あははは」

蒼龍（流石にあんな事考えていたなんて本人の前では言えないよね）

望月「ま、面倒な事にならなかつたら何でもいいけど。そろそろ戻ろ」
蒼龍「りようかい」

ガチャ

蒼龍「大佐、ただい……あ」

望月「戻った……よー」

提督「また恋愛の曲か？ もう勘弁してくれないか」

飛龍「私、これがどうしても好きで！」

提督「そのセリフ、もう何回目だ？」

飛龍「これで最後、最後ですから！」

提督「いや、そろそろ精神的にキツイんだが」

飛龍「男性なんですから頑張ってください！ さ、いきますよー」

提督「待て、歌うとは言ってn」

飛龍「コイスルオトメ、参ります！」

提督「」

望月 「飛龍さんて奥手なんだか大胆なんだか分かんないね」

蒼龍 「わたし達が来るまでずっと恋愛曲歌わされてたんだ…… そりや、キツイわ」

望月 「ほら、ブレーキ役、しつかり」クイクイ

蒼龍 「ふう、全く…… はいはい。ちよつと飛龍——」

第60話 「小晩餐会」

長門「やあ来たな。上がってくれ」

陸奥「いらつしやーい」

B i s 「待つてたわよ！」

長門「あの出撃には陸奥はいなかったが、まあそんな事をいちいち気にするような人間ではないよな？」

提督「無論だ。付き合うとは約束したが、お前たちだけとは俺も言った覚えはないな」

提督「だが」

陸奥「ん？ どうかした？」

提督「いや、付き合うとは言ったがこれでいいのか？」

長門「宅飲みは外で飲むより気楽だからな、偶にはこういう風に緩やかに飲むのもいいだろう？」

提督「お前たちがそれでいいなら俺からは何も言うことは無い。酒も、飲みたいしな」

B i s 「流石、話が分かるふあね♪」ギョ

提督「……こいつ、もう出来上がってるのか?」

陸奥「大佐が来る前に発泡酒を缶一本開けただけなだけどね」

長門「ビールならともかく、発泡酒でこれとはある意味凄いやな」

提督「この分だと耐ハイとかもダメな気がするな。マリア、お前お酒弱いのか?」

B i s 「べ、別にそんなことない……わよ。ちよつと気分が良かったから油断し
しやつたの」カア

提督「呂律も少し心もとないな。あまり無理するなよ?」ポン

B i s 「うん……」

陸奥「あら? 自然に頭に手を置くなんて、大佐も随分フレンドリーになったわね」

長門「そうだな。私達にもそうしてもらつて構わないんだがな」

提督「ん? ああ、これはなんとなくだ。マリアには無意識に、な」

B i s 「そ、それつて……」キラキラ

提督「子供っぽいからだろな」

B i s 「なあ!?!」ガーン

陸奥「いや、そんな衝撃を受けるほど驚く事じゃないと思うわよ?。マリアつて前々から所々子供っぽいところあつたじゃない」

B i s 「そ、そんなこと……」

長門「本当にそうか？」

B i s 「う……」

提督「それくらいにしておいてやれ。こいつにも矜持というやつがあるんだ」ポン

B i s 「た、大佐あ」ウル

長門「やれやれ、まるでワンコだな。可愛い、実に良い」

陸奥「長門、あなたマリアを見る目が何か変よ？」

提督「長門は可愛いものが好きだったな」

長門「ああ、そうだ。そして今のマリアは正直堪らないほど可愛い」

B i s 「えっ、か、可愛いなんて、そんな……」カア

陸奥「マリア、勘違いしない方がいいわよ。長門のあなたを見る目は明らかに仔犬とかそういうのを見る目だから」

B i s 「犬!？」ガーン

提督「……的確な指摘というものは時として残酷なものだな」グビ

陸奥「ふふ、そうね」クイ

長門「ああ、もうっ。可愛いな！ マリアちよつと来い。撫でさせてくれ」

B i s 「え、ちよつとやめてよ！ スリスリしないで！ 抱き締めないで！」ジタバ

タ

提督「……いい着だ」グビ

陸奥「そうね」クイ

陸奥「あ、そうだ大佐」

提督「ん？」

陸奥「なんかわたし達の部屋の抜き打ち検査をするらしいわね」

提督「情報が筒抜けの時点で抜き打ちという言葉がもはや意味をなしていないわけだが……。まあ、そのつもりではある」

陸奥「今つてもうやった事にしちやダメ？」

提督「元々、何かを疑って部屋中を調べる気とかはなかったからな。軽く部屋を眺めて2、3質問して終わりにするつもりだったし、それでいいぞ」

陸奥「ありがと。部屋の掃除とか気を遣うのが面倒だったのよ」

提督「そういう事を本人の前でいうな」

長門「あ、下着はその引き出しだぞ。陸奥とマリアのもそこにある」タイサ、タスケテー！

提督「そんな事も聞いてない」

陸奥「そしてそういう事を教えない」

長門「ふふ、ウブだな。つと、コラ、マリア暴れるな」

B i s 「やー！ 私はヌイグルミじゃないの！」 ジタバタ
提督（酒が完全に回って、言葉がもう子供じみてきてるな）
陸奥（マリアには悪いけど、可愛いわね）

——数十分後

提督 「……ふう」

長門 「大佐、やはり飲めるな」

陸奥 「お酒強いよね。素敵よ」

提督 「酒が飲めるだけで褒めるのはどうかと思うぞ。マリアはどうした？」

長門 「そこだ。いじけて布団でまるくなってる」

陸奥 「やり過ぎよ」

長門 「反省はしてる。だが、後悔はしていない」 キリッ

提督 「……後でちゃんとフォローしておけよ」 グビ

長門 「分かってるさ」 ツイ

提督 「ん？ ツمامミが切れてしまったな」

陸奥 「あらホント。買って来る？」

提督 「いや、それには及ばない。用意してくるから少し待っていてくれるか」

長門「作つて来るつもりか？」

提督「そうだ。冷蔵庫に調理できそうな物があつたはずだ」

陸奥「それは、悪いわよ」

提督「気にするな。料理は好きなんだ」

長門「なら、私も行こう。台所に立つ家庭的な大佐の姿というのを見てみたいしな」

提督「手伝うとは言わないんだな」

長門「勿論、言われなくても手伝いはするさ」

陸奥「あ、ズルイわよ。大佐、わたしもっ」

提督「マリアだけ置いて平気か？」

長門「…… 少しうたた寝をしてるみたいだな。酒気の所為だと思う」

提督「なら、静かにしていれば目は覚まさないな。よし、直ぐ作つて戻つて来るぞ」

——数分後

提督「よし、できた」

長門「あの短時間でここまで…… やるものだな」

陸奥「ホント。種類も量も申し分ないわ」

提督「それは重畳。さ、戻るぞ。マリアが起きてるかもしれん」

長門「ああ分かった」（エプロン姿の大佐…… 凄く良かったな。カメラ持ってくればよかった）」

陸奥「ええ。了解よ」（何よ、いい所見せてくれるじゃない。もう、好きなのが止まらないよ）」

ガチャ

提督「マリアは寝た」

B i s 「大佐あ！」ブア

ダキツ

提督「つと、危ないところだった。おい、マリア、危ないから離れてくれ。料理が落ちる」

B i s 「嫌よ！ だって、目を覚ましたら誰もいないのよ！」

提督「酒の肴がなくなったからちよつと用意してたんだ。ほら、お前の分もちゃんとあるぞ」

B i s 「あ…… この匂い、ふらんく、ふると？」

提督「ちよつと違うな。それも具の一つの炒め物だ。美味いぞ？」

グウ……

B i s 「あ……」 カアア

提督 「気にするな。あまり食べてなかったからな。食べるだろ？」

B i s 「うん……」 コク

提督 「なら部屋に入れてくれ。このままだと動けないし、料理を落とすそうだ」

B i s 「あ、ごめん」 バツ

陸奥 「天然って恐ろしい……」

長門 「全くだ、マリアは良いところを持っていくな」 ウンウン

第61話 「三色」 R—15

長門（いい感じに酒も回って来たな。酒の勢いに頼るようでアレだが、雰囲気も大事だからな。相手に負担を掛けず、かつ逃げるといふ選択肢を浮かばない状況を作らないと）

長門「……………」

長門「大佐」ズイ

提督「なんだ長門…………… 近いぞ」（ん、胸元が……………？）

長門「ふふ、私も酒が回ったみたいだ」（もう気づいたか、やるな）

提督「大丈夫か？ 少し酔いが深く見えるぞ。先に休むか？」

長門「いや、それには及ばない。それより……………」ピト

提督「おい、長門……………」

長門「提督も…………… 分かっているだろう？ 欲しいんだ、シテ…………… 欲しい」

提督「…………… 酒の勢いを借りてそういう事を要求するのは感心しない」

長門「誤解しないでくれ。確かに勢いは借りてるかもしれないが、それでもこれは私の意思だ。それに、雰囲気だって…………… 大事だろう？」

提督「だがな長t」

チユウ

長門「……………ん……………」

提督「……………」

長門「……………ふう」

提督「……………」

長門「お、怒ってるか？」

提督「いや、周りの目が、な」

長門「ああ……………」チラ

陸奥「長門……………あ、あなた……………」

B i s 「あ……………あ……………」

長門「二人とも、そう見つめてくれるな。照れるじゃないか」ポ

提督「いや、そこはそうじゃn」

長門「大佐」ズイ

提督「……………なんだ」

長門「金剛と加賀二人と結んだみたいだな」

提督「……………」

提督（驚いた。よく見ているものだ）

長門「ふふ……………」驚いたか？ 女は勘が鋭いんだ」

提督「正直、驚いた。その勘、大したものだな」

長門「ありがとう。それで、だ大佐」

長門「その、愛……………」私にも向けてくれないか？」

提督「……………」

長門「勿論、その二人も希望するなら受け入れてやって欲しいんだが」チラ

陸奥「わたしも……………」それ、お願いしたいわ」パサ

提督「陸奥……………」

長門「ほう……………」大胆だな。なら私も……………」スルツ

長門「女にここまでさせたんだ。恥をかかせたりはしてくれない、よな？」

提督「もう何も言わん。来い」

マリア「ま、待って。わ、私も……………」！

長門「ちゅ…………ちゅ…………ふふ、やはり大佐の体は男だけあて遅しいな…………ペ
ろ」

提督「お前の体だつて遅しい、つと…………思うが」

長門「んん？　なんだ、私の体が筋肉質だと言いたいのか？」

提督「そうじゃない…………。無駄な肉がない芸術の様な体だと言うことだ」モミ

長門「んっ…………ああ、好きに触ってくれ。そこも…………も吸つていいぞ」

陸奥「これが…………大佐の…………ん、ちゅ…………れろれろ」

B i s 「はあ…………はあ…………この匂い、味…………忘れない…………ペろ、あむ」

長門「二人とも…………可愛いな。そうだ、マリア、ちよつとこつちに来てくれ」

B i s 「はむ、ペろ、むちゅっ…………つぶは、え？　なに？」

長門「ここだ。ここに寝て足を…………」ポンポン

B i s 「え…………」

長門「見たいんだ。マリアのかわいい所。頼む」

ポフツ

B i s 「長門…………私…………その…………」

長門「大丈夫だ。破りはしない。ただ、その前に味あわせてくれ」

にゆつる、ペロ

B i s 「ひあつ、冷たつい！　ううう……………　長門つ、な……………　にこれ。ピリピ……………
りする……………！」

長門「じゅ、じゅるる……………　ペロペロ。　つはあ、氷が冷たくて今までにない感覚だろ
？」

長門「それに少量だが、アルコールが着いた口で舐めたから、快感も……………
ちゅ……………　れろ、ひとしお、のはずだ」

陸奥「凄い……………　長門淫乱過ぎ……………」

ムニユ

陸奥「あん……………　！」

提督「陸奥、お前も味わってみるか？」

陸奥「え？」

提督「俺の顔に……………　どうだ？」

陸奥「つ……………。　お、お願い……………」

ギシツ

陸奥「さ、流石に恥ずかしいな……」

ポタツ

陸奥「ん、ごめ。汚しちゃった……」

提督「気にするな。これからココはもつと溢れることになるんだ。さあ、腰を……」

陸奥「大佐……んん」ク

ピト

提督「ちゅ……んむ……」

陸奥「はあつ……！くつ……これ……すごつ……！ああつ」

提督「……まだだ……ちゆるる」

陸奥「はあつ……はあつ……大佐……これイイよ……頭がおかし

く……なりつ、そう……！」ブルツ

提督「ちゅ……意識を集中させろ。でないと直ぐに気を失ってしまうぞ」

陸奥「うん。がんば……つる。もつと……はっあ……可愛がって、欲しい

し……！」

提督「……その期待、応えてやろう」

B i s 「はあ…… はあ…… 凄い。陸奥つたら、あんなに腰を動かして……」

長門 「ちゆぷ、ぺろ…… ふふ、負けてられないな」

B i s 「ねえ、長門……」

長門 「ん？」

B i s 「私、長門のもああしてみたい。口とか指で……」

長門 「……っー」ブルツ

B i s 「長門……？ どうしたの？」

長門 「ああ、いや。マリアが可愛すぎて一瞬でイッテしまった」

B i s 「え？ さ、さっきの言葉だけで？」

長門 「ああ、見ろ……」

B i s 「凄い……」ジツ

長門 「ふふ、そうだろう？ それでは、お互いに攻め合ってみるか？」

B i s 「うん……！」

B i s 「大佐……」

陸奥 「好きな所から……」

長門「いいぞ？」

提督「いくぞ……」グツ

B i s 「つ、キテ！…… ああつ」

陸奥「めちやくちや…… につ……ん……！」

長門「大佐の好きに…… はあつ、ふう…… いい！」

——翌日、早朝

長門「大佐、どうした？」

提督「いや……」

長門「昨日の事、後悔してるのか？」

提督「自分で選択した事だ。それはない」

長門「大佐……」ダキツ

提督「長門……」

長門「大丈夫だ。強くあればいい。それが艦娘の提督というものだ」

提督「お前の言葉を聞くと、人の道から外れそうだな」

長門「私達を愛してくれた行いが人道に反する行為なものか。自信を持ってくれ大

佐」

長門「私もそれに応えてみせるから……」

提督「長門……ありがとう」

長門「キスを所望する」

提督「随意に」

チュ

布団の中の陸奥「出れなくなっちゃった……」

クイクイ

陸奥「ん？」

同じく布団の中のB i s「じゃあ、さ」

B i s「もう一回する？」

陸奥「」（マリアが、淫乱になっちゃった……！）

B i s「陸奥？」クビカシゲ

メイנסトリー (第三章)

第1話 「指令」

彼女「行くわよ武蔵。準備しなさい」

武蔵「む？ 何処に行くんだ？ もぐもぐ」

彼女「あいつ、元彼に会いに行くのよ」

武蔵「……」ピタ

彼女「武蔵？」

武蔵「やだ」

彼女「え？」

武蔵「嫌だ。行きたくない」ムス

彼女「ちよつと、こんな時に嫉妬なんかやめてよ」

武蔵「嫌だと言ったら嫌だ！ お前の元彼なんかには私は会いたくなんかない！」

彼女「武蔵、言う事を聞きなさい。一応命令なのよ」

武蔵「い・や・だ！」プイ

彼女「…… めんどくさいわね。いいわよ、私一人で行くから」

武蔵「なに？」ピク

彼女「一人で行くって言ったのよ。あなたはもう来なくていいわ」

武蔵「ふふん、護衛艦なしで行く気か？ 危ないぞ」

彼女「中将に大和を借りるから大丈夫よ」

武蔵「なっ!?! つく……だ、だとしても私がいなかったら、その元彼に襲われるかもしれないぞ」

彼女「あなた、あいつの事を何だと思ってるのよ。そんな事あるわけないじゃない」

武蔵「お前は無条件にそいつを信用し過ぎだ!」

彼女「あー、もー、もういい」

武蔵「え」ビクッ

彼女「もうそこでずっと駄々をこねてるっていわ。相手をするだけ時間のムダだから」

武蔵「な、何を言って……」

彼女「じゃあね、留守番頼んだわよ。あ、もう戻ってこないかもしれないけど」

武蔵「!?!」

彼女「行つてきま——」

ギユ

武蔵 「ごめんなさい……………ぐす」

彼女 「反省してる？」

武蔵 「うん……………」

彼女 「文句を言わず着いてくる？」

武蔵 「言わない……………」

彼女 「あいつに会ってもつつかかったりしない？」

武蔵 「分かった。しない……………」

彼女 「絶対？」

武蔵 「信じて……………」ウル

彼女 「……………分かった。もう喧嘩はこれで終わり。私も怒るのをやめた」

武蔵 「ほ、本当か？」

彼女 「ええ」ニコ

武蔵 「つ、う……………うわあああん！」ギユ

彼女 「つと、もう……………」ナデナデ

武蔵 「……………すん」

彼女 「落ち着いた？」

武蔵 「……………ああ。悪かった」

彼女「よしつ。それじゃ、行くわよ」

く大本営本部、廊下

武蔵「それにしてもなんで急に視察なんて」

彼女「ま、確かに本部の司令官が直接出向くってというのは、ちよつと気になるわね」

武蔵「……提督の事、気になるか？」

彼女「ん？ ああ、元彼のこと。まだ好きかつて？」

武蔵「いや。まあ、それも気にはなるが。その、心配とかそういう意味だ」

彼女「……そうね。あいつが本部が動くようなマネをするとは思えないけ

ど……少し、気になるわね」

武蔵「大丈夫だ。私が付いている。何が起こってもお前も、その提督も守ってやる」

彼女「不安な事言わないでよ。ま、頼りにしてるけど」

武蔵「ああ、任せてくれ」

彼女「頼むわよ。さて、中将の部屋に着いたわ」

コンコン

彼女「私です。参りました」

中将「おう！ 入れ！」

彼女（相変わらず大きな声ね）

武蔵（怖い……）

ガチャ

彼女「失礼します」

武蔵「失礼す…… します」

中将「おう。出向前に呼び出してすまんな」

彼女「いえ、問題ありません」

中将「もう大体予想は着いていると思うが、若造のこの視察の件だ」

彼女「はい」（わ、若造……）

中将「いや、別にあいつが何かしでかしたというわけじゃないんだ。ただ、ちよつと個人的に気になる事があってな」

彼女「この視察は本部の意向によるものではないのですか？」

中将「表向きにはそういう事にしてある。ま、実際は俺の個人的な頼み事だけだな」

彼女「そう…… ですか」

中将「ん？ ホツとしたか？」

彼女「あ、いえ……」

武蔵（む……）

中将「ははははは！ お前たちは元々知り合いだったんだろ？ 無理するな」

彼女「私が視察官に選ばれた理由が解りました」

中将「ん、そういう事だ」

彼女「それで視察の体を装って、何を確認すればいいのですか？」

中将「話が早くて助かる。それはな……」

中将はそこで敢えて言葉を発するのをやめ、胸元をトントンと叩いた。

彼女・武蔵「！」

中将「そういう事だ。気付いたかもしれん。お前達と同じようにな」

彼女「了解致しました。お任せ下さい」

中将「ああ、頼むぞ」

大和「中将？」

中将「ん？ ああ、そうだった。おい少将」

彼女「はい？」

中将「ほどほどにしておけよ？」ニヤ

彼女・武蔵「なっ!？」

中将「おい、少将はともかく、なんで武蔵まで動揺するんだ？　なあ、大和？」ニヤニヤ

大和「さあ何故でしょう」ニコニコ

武蔵「大和……貴様……」カア

大和「あら武蔵、そんな顔を真つ赤にしてどうしたのですか？」（ふふん、いつも少将とイチャイチャしてるお返しよ）

中将「ま、それくらいにしておけ」（こいつにも困ったもんだ）

中将「それでは改めて頼むぞ、少将」

彼女「は、はい。了解しました。失礼します」

バタン

武蔵「……」ムス

大和の計らいで明らかに不機嫌そうな武蔵、そんな彼女を見て少将は壁にもたれ掛かって少し困った顔をして上を向いた。

彼女（やれやれ……）

第2話 「緊張」

提督「参ったな……」

榛名「どうしたんですか？」

提督「本部から視察が来る」

榛名「？ それが何かマズイんですか？」

提督「いや、視察自体は別にどうという事はない。恐らく、抜き打ちの鎮守府の実態調査だろう」

榛名「？ それでは何が気になるんです？」

提督「少将…… 元々付き合ってた恋人が来ることになった」

バサバサッ

提督「…… 榛名？」

榛名「あ、いけない、私ったら。ごめんなさい、大佐」

提督「いや……」

榛名「あの……」

提督「うん？」

榛名「大佐とその少将とは……元々、という事は今はもうなんでもないんですよ？」

提督「ああ。昔にもう別れた」

榛名「本当ですか？」ズイ

提督「本当だ」

榛名「子供とかできてないですよね？」

提督「つごふ、なに……？」

榛名「いえ、なんでもありません」

提督「そうか」（子供とか言っただけか？）

榛名「大佐」

提督「ん……なんだ？」

榛名「その、私達より先にお付き合いされていた元恋人の少将とは、今も仲は良いんですか？」

提督「どうだろうな。彼女が本部に配属になってからもう何年も会ってないからな」

榛名「会いたい、ですか？」ズイ

提督「いや、そう思わなくても会う事になるだろ」

榛名「そんな事は聞いてません。会いたい、ですか？」ジツ

提督「まあ…… 旧交を温めるのに良い機会だとは、思っている」

榛名「へえ…… 会いたいですか……」

提督「榛名……？」

榛名「大佐には、榛名や姉様達、加賀さん達もいるのに…… 会いたいですか」

提督「おい、榛名っ」ガシ

榛名「あ……」

提督「落ち着け。俺は別に、お前たちを置いて彼女と寄りを戻す様な真似はしない」

榛名「大佐……。はっ！ご、ごめんなさい。私ったら……」アセアセ

提督「本当に大丈夫か？」

榛名「大丈夫です…… じゃ、ないです」

提督「ん？」

榛名「大丈夫っていう安心が欲しいです」

提督「安心？」

榛名「ん……」

榛名は目を瞑ると、キスを求めてきた。

提督「榛名、今は仕事中だ」

榛名「うー…… キスだけでいいですから」

提督「だめだ」

榛名「……脱ぎます」ヌギ

提督「榛名」グイ

チユ

榛名「んっ……。」

提督「……」

榛名「んん……ちゅう♪」

提督「つふう。どうだ？」

榛名「ふわあ……ありがとうございます。榛名、満足です♪」

提督「そうか、それを聞いて安心した……」

榛名「ふふふ、今日は良い日ですね♪」

提督「そうだな……」

提督（マリアはあの時から隙あらば熱烈にアピールするようになった。金剛を抱いた以上、妹達の期待にも応える覚悟はるが……これは、榛名もどうなる分からね。何故大人しい奴に限って何故こうも反転する……）

榛名「大佐、どうかしましたか？」

提督「いや、なんでもない」

榛名「……少将の事ですか？」

提督「断じて違う。榛名が淹れてくれたお茶は美味いな」ズズ

榛名「本当ですか! 今日、金剛お姉様に教えて貰って榛名オリジナルのブレンド

なんですよ♪」パア

提督「そうなのか? どうりで何時もと違う味なわけだ」

榛名「嬉しいっ。榛名、頑張った甲斐がありました!」

提督「うん。美味しい……」ズズ

榛名「大佐、今度抜き打ちで部屋を検査をされるんですよね?」

提督「ん? ああ。もう抜き打ちでもなんでもないがな」

榛名「それなら是非榛名達の部屋に最初に来てください! その時に今よりもっと美

味しいお茶とお菓子もご用意して待ってますから!」

提督「検査なんだからそういう気遣いは無用だぞ」

榛名「大佐が訪ねて来てくれるんですから、それくらいはさせてください!」

提督「最早、検査ですらなくなってきたな……。分かった。伺わせてもらおう。お

茶も期待してる」

榛名「はいっ。榛名、その期待に全身全霊で応えて見せます!」パア

提督「……」

提督（外はこんなにも良い天気なのに、何故かこの部屋だけ嵐の真つただ中に居るよ
うな心地だな）

第3話 「癒し」

島風 「あ！ 大佐、今糸引いたよ！」

提督 「ん？ そうか？」 クイ

足柄 「あー…… 逃げられちゃったんじゃない？」

提督 「そのようだな」

島風 「もうっ、わたしが言った時に直ぐに引かないからだよ！」

提督 「はは、すまんな。次は気を付けよう」

足柄 「頑張つてよね。それで今日のお昼用意するつもりなんでしょ？」

島風 「わたし、鯛食べたい！」

提督 「なに？ ふむ…… ここで鯛は無理かもな」

足柄 「ふふ、ハゼで我慢しなさいよ」

島風 「ええー、鯛がいいのに……」

提督 「鯛は無理かもしれないが、それくらい大きいのを釣れるように頑張ろう」

島風 「本当!? じゃあ、わたしずっと糸見張ってるね！」

足柄 「そんなに直ぐ釣れるもんじゃないわよ」

島風「いいの！ 絶対見逃さないんだから！」
足柄「そんな事言つて…… 知らないわよ？」

——数分後

島風「う…… むう……」コクリコクリ

足柄「ほら、こうなった。眠いなら膝を貸してあげるわよ？」

島風「や、島風だいじよ…… わあ…… ふう……」コシコシ

提督「無理するな。今度はちゃんと見てるから」ポン

島風「たいふあ…… うん…… ちよつと、ねゆ……」

足柄「ほら、来なさい」

島風「足柄お姉ちゃんありがと……」ゴソ

足柄「いいのよ」（お姉ちゃん？）

島風「す…… す……」zzz

足柄「ふふ…… お姉ちゃん、ですつて」

提督「島風が特に好きな人に甘える時によく言うんだ。好かれている証拠だな」

足柄「お母さんと呼ばれなくて安心したわ」

提督「お前は、母性もあるからそれも悪くないと思うぞ」

足柄「うーん、子供もいないのにそれはやっぱりちよつと気になるかな、わたしは」

提督「なんだ、島風みたいな子では不満か？」

足柄「え」

提督「？」

足柄「み、みたい子では不満か？ って……… なんかこれからわたし達に……ゴ

ニヨゴニヨ」カア

提督「足柄？」

足柄「え？ あ……… ご、ごめんなさい。ちよつとポーつとしちやつて！ う、うん。

島風「みたいな元気な子も悪くないわね！」

提督「なんだ、お前も眠いのか？」

足柄「そ、そんな事ないわよ？」

提督「寝たいなら寝ていいぞ。肩くらいは貸してやるから」

足柄「……… 胸がいいな……… 前、みたいに………」

提督「それは、流石に今の状態ではできないな。悪いが、肩で」

足柄「それじゃ、膝………」

提督「それだと島風が寝れないだろ？」

足柄「抱きしめるから大丈夫よ。胸を枕代わりにするから」

提督「ん……そうか」

足柄「あらあ？ 大佐、今何を考えたの？」ニヤニヤ

提督「いや……」

足柄「胸つて聞いて、ちよつと反応したでしょ？」

提督「……情けないが、そうだ。気持ちよきそうだと思った」

足柄「うん。正直でよろしい」

提督「お前には敵わないな」

足柄「ね」

提督「うん？」

足柄「胸、貸してあげましょうか？」

提督「いや、まだ一匹も釣れてないからな……」

足柄「少しお昼寝くらいいいじゃない」プク

提督「お前の胸は、心地が良すぎて寝過ごしそうだからな」

足柄「つ、そ、そう……？」

提督「ああ（しまった。軽くなすつもりが、これは想定外の反応だ」

足柄「そ、そこまで言われたら貸さないわけには……い、いかないわね」

提督 「いや、だからまだ一匹も……」

足柄 「遠慮しないで！ ほら」グイ

提督 「む」

ポフ

提督 「……」

足柄 「どう……？」

提督 「やはり、予想通りだ。気持ちが良い……」

足柄 「そ。良かった♪」

提督 「俺の方が眠ってしまいそうだ」

足柄 「寝ちやっていいわよ。抱いてあげてあげるから」

提督 「それはそれでお前に悪いし、何か男として情けないな」

足柄 「もう、そういう事は気にしなくていいから。今は……あなたに頼られたたい

の

提督 「……」

足柄 「いいでしょ？」

提督 「少し、寝る。1時間くらいで起こしてくれ」

足柄 「了解♪」

提督「悪いな。頼む」

足柄「んーん……………」ナデ

提督（頭を……………参ったな。本当に心地良い……………）

——数分後

提督「……………」ZZZ

島風「くー……………すー」ZZZ

足柄「……………」ナデナデ

足柄「……………」ス

チュッ

提督「ん……………」ZZZ

足柄「ふふ、これくらいはいいわよね♪」

第4話 「到着」(挿絵あり)

提督「そろそろ着く頃だ」

提督はビツトから腰を上げると、もう直ぐ艦が見えるであろう方角を眺めた。

長門「少将はどんな女性なんだ？」

傍らにいた長門がふと、そんなことを訊いてきた。

提督「家事以外は男の理想だと思う」

長門「……」

流石に答えが簡潔過ぎたようで、長門は困った顔をして黙ってしまった。

弥生がその様子に気づき、すかさずフオローをしてきた。

弥生「もう少し分かり易く教えて欲しい……」

弥生の要求に、自分の答えに非があったと即座に感じ取った提督は、少し考えるように昔を思い出しながら答えていった。

提督「そうだな……先ず、見た目は間違いなく美人だな」

長門「ほう」

弥生「……それで？」

一人は何かを期待するような顔で、一人はちよつとむつ、とした表情で次を促した。提督「性格は基本勝ち気だが、分別はちゃんと着ける事ができるし礼節も弁えている」提督「士官学校を首席で卒業するくらいには頭脳も明晰で、提督としての指揮判断能力は迅速かつ冷静そのものだ」

長門「凄いな。完璧じゃないか」

提督「その通りだ。家事以外の才能は非常に豊かな才女だ」

弥生「そんな人と、大佐はお付き合いしていたの……？」

提督「……彼女の一目惚れだったらしい」

提督は少し言い難そうにそう答えた。

その反応は未だにそれが信じられない所為なのか、答え方にも少し恥じらいのようなものを感じさせた。

長門「ロマンだな」

弥生「それは……皆にはあまり言わない方がいいと思う……」

提督「そうなのか？」

弥生「うん……弥生も、出来れば知りたくなかった……かな」

長門「まあ気持ちは解る」

提督「どういう事だ？」

長門「一目惚れなんて言われたら、彼女が惚れた理由を論理をもって崩そうにも取り付く島がないじゃないか」

物騒な事言う長門に、少しむくれた弥生、そんな二人の様子に提督は僅かながら不安を覚えた。

提督「頼むからややこしい事にはしないでくれよ」

弥生「了解……」

長門「ふふ、腕が鳴るな」

提督「おい」

こいつだけ解っていない、どうするべきか。

提督がそんな事を考えていると、弥生が声をあげた。

弥生「あ、見えたよ。あれじゃない?」

弥生が指を指した方向に一隻の巨大な船影が見えた。

この距離ではつきりと視認できる程の大きさとなると、恐らく戦艦に間違いないかった。

長門「あれは…… 大和型だな」

提督「大和か…… あいつらしいな」

程なくして巨大な戦艦が港に入ってきた。
艦から提督らしき女性が下りると、戦艦が白い光に包まれ徐々に人の形になっていった。

長門「武蔵か……」

提督（益々もって、あいつらしいな）

彼女「……久しぶりね」

眉目秀麗で華奢な体つき、長い黒髪を風に靡かせながら大和撫子を体現したような凛とした雰囲気を纏った女性が提督に話し掛けた。

提督「そうだな。5年ぶりくらいか」

対して提督は、相変わらず表情はいつも通りだが、少し硬く感じる声で応じた。

何やら彼女に後ろめたい事でもあるのか、距離も一歩引いているように見えなくもなかった。

彼女「そんなになるかしら」

提督「多分な」

そんな感じでまだ一言二言しか交わしていない最中に、強引に割り込んできた者がい

た。

武蔵「少将の護衛艦の武蔵だ。おま……こほん。貴方がここの提督か」

提督「そうだ。大佐と呼んでくれ。護衛の任務ご苦労」

武蔵「……」ジツ

提督「なにか?」

武蔵「いや、やはりうちの提督の方が優れていると思つてな」

いきなり何を言い出すのか、武蔵はそんな事を言うと言つて鼻で笑う態度をとつた。

対する提督は、予想外の武蔵の態度に不意を突かれ、ポカンとするのみであつた。

提督「は?」

長門「む……」カチン

弥生「へえ……」ムカ

その態度には弥生どころか、長門も勘に触つたようだつた。

彼女「ちよつと武蔵、失礼でしょ」

すかさず、彼女が武蔵の非礼を正そうとするも、武蔵は反省する素振りをみせるどころかこう応じる始末だつた。

武蔵「あ、すまん。大佐を見たらしい、な」

長門「それはどういう意味だ?」

長門がついに怒った。

提督の鎮守府で一二を争う冷静な娘の逆鱗に触れた瞬間だった。

提督「おい、長門」

長門「大佐は黙っていてくれ。遠いところからわざわざご苦労だとは思いますが、着いて早々私達の提督を貶める事を言われたのでは、腹も立とう」

弥生「……同意」

額に青筋を立てる長門に、弥生も石のような表情で長門の行動を肯定する意思を見せた。

非常にマズイ状況だった。

提督「弥生まで、こら待て」

武蔵「ふん、駆逐艦と老朽戦艦が何を言おうと痛くも痒くもない。わたしは事実を言っただけだ」

対する武蔵は怯むどころか、挑発してくる始末だった。

長門「ほう。武蔵、長門型をあまり甘く見るなよ……？」

弥生「……駆逐艦だからって馬鹿にしてると後悔するよ……？」

長門の筋肉が膨張する。

普段はそんなに目立つことはないが、全身に力が入ると繊細な筋肉が隆起してくるの

がよく分かった。

弥生に至っては目が完全に実戦になっていた。

最早、手加減という考えは最初から頭にないようだ。

提督「二人ともやめないか」(なんだ? 何故いきなりこんな挑発的な事を?)

彼女「武蔵、あなたいい加減にしなさいよ。約束を破ったら二度と一緒にお風呂入ってあげないわよ」

武蔵の狼藉について怒った彼女が、おおよそ嗜める言葉とは思えない内容で武蔵を叱責した。

武蔵「えっ」ビクッ

その言葉を投げかけられた武蔵はまるで悪さを見つかった子供の様な反応をした。

長門・弥生「は?」

対する長門と弥生は呆気にとられるばかりであった。

提督(ああ、そういう……。よく見れば二人とも指輪をしてる)

武蔵「ご、ごめん。本当に無意識なんだ! 大佐を見たらつい対抗心が!」アセアセ
武蔵は態度を一変させ、今度は急に焦りながら彼女に言い訳を始めた。

纏っていた威圧的な雰囲気は元々なかったかのだとは思わせるほどの豹変ぶりだった。

彼女「そんないいわけで納得すると思ってるの？　出発前にした約束を忘れたわけじゃないわよね？」

武蔵「忘れてない！　忘れてない！　本当にわざとじゃないんだ！　気付いたらムキになつてたんだ！」

彼女「謝りなさい」キツ

自分より圧倒的な存在に対してそれ以上に圧倒的な存在だと誇示するかの如く、威圧を込めた眼で彼女は武蔵を睨んだ。

武蔵「う……」

その威力に溜らず武蔵はたじろぐ。

彼女「誰に、とまでは言わなくても分かるわよね？」

武蔵「はい……」シユン

まるで叱られた子供だった。

武蔵は、先ほどに比べて幾分小さく感じる背中を回してこちらを向き、謝罪をしてきた。

その眼には信じられないことに涙が浮かんでいた。

武蔵「大佐……」クル

提督「ん？」

武蔵「先程は大変失礼致しました。この通り平に謝罪申し上げます……」
「フカブカ懇切丁寧な謝罪だったが、あまりもの急な展開に3人とも呆然とするしかなかった。」

提督「……」

長門・弥生「……」ポカーン

提督「まあ、俺もそんなに気にしていないから顔を上げてくれ」

何とか平静を取り繕い、提督はそう声を掛けた。

提督「長門と弥生もいいな？ これ以上は争うな」

長門「あ、ああ。了解した」

弥生「…… 仕方ないね」

提督の言葉に二人も我に返ったようだった。

表情こそ納得がいていないが、謝罪の意思はちゃんと汲んでくれたらしい。

武蔵「あ、ありがとう！ 恩に切る！」ダキッ

提督「うぐっ」

長門「おい」ピキ

弥生「ちよつと……」ムカア

彼女「もう、武蔵！ さつきからなにやつてるのよ!? 早速ややこしい事になってる

じゃない！」

収まりかけていた危機は、かくしてまた新たな局面を見せるのであった。

第5話 「衝撃」

彼女「そう……。やっぱり気づいてたの」

提督「そうだ。先に気付いたのは叢雲達だが。既に此処にいる艦娘は全員それが取り除かれている」

彼女「優秀過ぎるといいうのも考えものね。正直言つて、危なかつたわよ？ 先に違和感に気付いたのが中将で、本当に運が良かったわね」

提督「親父が？」

彼女「実はね、先にその事に気付いたのは中将なのよ。それも随分前に」

提督「親父が……」

彼女「その装置ね、発信機の機能もあるのよ？」

提督「じゃあ除去した時点で？」

彼女「ええ、開発部が異変に気付くわ。通常ならね」

提督「とうとう？」

彼女「中将はこの事に気付いた時に発信機の機能を疑ったの、それで調べてみたら予想が的中」

彼女「その後どういうツテを頼ったのかは知らないけど開発部の機材に工作して、装置を除去しても違う場所から電波を受信するようにしたらしいわ」

提督「そんな事を……」

彼女「それでいて、本命の電波は中将だけが感知できるようにして、異変があれば先手を取れるようにしたってわけ」

提督「頭が下がる思いだ」

彼女「そうよ。反省しなさい？ 先に動いたのが艦娘であつたとしても、それを容認して安全を確かめなかつた事を」

提督「ああ。本当に危ないところだった。君と親父には感謝しないとな」

彼女「ん、宜しい。確かめたかつたのは正直それだけ。目的も果たしたし、後は適当に視察の振りをして数日滞在させてもらうわ」

提督「ん？ 視察は今日だけの予定じゃなかつたのか？」

彼女「…… 上に適当に理由をつけて期間を延ばしてもらっちゃつた」
提督「それはまたなんで……」

彼女「だって、数年ぶりの再会なのよ？ 少しくらい旧交を温めさせてくれたつていいじゃない？」

提督「その考えには俺も同意だが、それでも数日はちよつと長いんじゃないか？」

彼女「…… 貴方、老けたわよね」

提督「なんだ唐突に」

彼女「私はどう見える？」

提督「…… そういえば、昔のままだな。全くと言う程」

彼女「何よ。子供っぽいつて言いたいわけ？」

提督「いや、歳を取らない女性もいるものだと思っただけだ。見た目はあの頃より格段に綺麗になっているぞ。女を磨いたんだな」

彼女「ほ・め・す・ぎ♪ ま、それはそれとして。貴方は5年程度にしてはちよつとそう思えないくらい歳を取って見えるわ」

提督「まあ、いろいろ無理をした事もあるからな。今は少しはマシだが」

彼女「ま、そうだろうとは思っていたけど。でもね、私があ頃と変わらなく見えるのは実は理由があるのよ？」

提督「理由？ 美容か何かか？」

彼女「ぶー、ハズレ。貴方、基地の子にあまり手を出してないでしょ？ ま、貴方らしいけど」

提督「…… なに？」

彼女「そんなに怖い顔しないでよ。自分から手を出さなくても好意を持たれた子と同

意の上でやるなら全然問題ないでしょ？」

提督「さつきから何を言いたいんだ？」

彼女「ふふ、そう急かないで。これはまだ研究段階で、実証はされてないから確信を込めては言えないんだけど」

提督「？」

彼女「どうやら提督と艦娘が体の関係を持つ事によって、絆が強くなって艦娘の能力が上がる以外に提督自身にもある効果があるみたいなのよ」

提督「……まさか」

彼女「そう。細胞の活性化、つまり見た目も中身も若い頃のまままで常に最盛期でいられるの」

扉「ガタツ」

提督「そんな効果が……」

彼女「勿論、週に1回、2回くらいじゃ自覚する程の効果はないわ。これは日々の営みによるものなのよ」

提督「……君は」

彼女「ん？ なに？」

提督「君は武蔵とその、そういう関係なのか」

彼女「見てのとおりよ。お蔭様で」

提督「そうか……」

彼女「何？ 私が同性に走ったのがシヨック？」ニヤ

提督「いや、全く。寧ろ、君ならそれもアリだと思ひ直したところだ」

彼女「ちよ、何よそれ!! 大体、私は貴方と別れてから武蔵以外と関係を持った事は

ないわよ！」

提督「は？」

彼女「あ」

提督「……」

彼女「……」カア

提督「君は……」

彼女「と、とにかく！ 私が言いたいのには常に全力で提督で、海軍に貢献したいなら

艦娘達とやりまくりなさい、という事よ！」

提督「それはあまりにも節操がないというものだ。もう少し節度というものがあつて

も……」

彼女「ま、貴方ならそう言うと思つたわ。でも、もう少し積極的になつてもいいのよ？」
提督「まあ、考えておく……」

扉「ガタガタッ」

彼女「それに……も、もしどうしても抵抗があるなら……わ、わたしで練習してもいいの……よ？」

バンツ

武蔵「それはダメだあああああ！」

提督「ん？」

彼女「ちよ、む、武蔵!？」

武蔵「お前は私の嫁だと言つたじゃないかあ！私を見捨てるのか!？」ダキッ

彼女「ちよ、誰が嫁よ？逆でしようが！あつ、ちよつとやめてよ、こんなところで！」

武蔵「嫌だ！お前が考え直すまで絶対に離れない！」

提督「……暫く留守にする。好きに使つて構わないぞ」

彼女「え!? ちょ、ちょっと私を見捨てる気!？」

提督「見捨てるとは人間きの悪い。気を遣ったただけだ。それじゃ、また後でな」

彼女「えつ、ちょっと待ってよ! まだ話が残つ…… やつ。武蔵こんなトコじゃ

ダメ! ダメだった…… 触つちやだ——」

バタン

提督「ふう……」

羽黒「あ、あの大佐……」

提督「つ、羽黒…… いつから……」

羽黒「ご、ごめんなさい! お茶の用意をしようと思つて来たんです……」

提督「いや、別にそれは謝る事じゃない。それで…… 聞いてたのか?」

羽黒「…… / / / コク

提督「羽黒、頼みがある。この事はできるだけ内密に……」

羽黒「大佐…… ごめんなさい。それは無理だと思います」

提督「なに」

羽黒「さつき、青葉さんが真つ赤な顔をして走つて行つちやいましたから……」

提督「……」ガクッ

羽黒「た、大佐！ 大丈夫ですか!？」

提督「ああ…… ちよつと…… 少し疲れただけだ……」

羽黒「い、医務室にお連れしますね」

提督「すまない、頼む。今は少し休みたい」

羽黒「はい、分かりました。それじゃあ肩を……」

提督「む…… 助かる」ヨロ

羽黒「……」トコトコ

提督「……」ヨロヨロ

羽黒「大佐……」

提督「……ん？」

羽黒「先程の少将殿お話の件…… 羽黒は、私は構いませんから…… ね？」カア

提督「…… ああ」

第6話 「作戦会議」

雷「皆！　〃これから大佐とラブラブになろう！会議〃を始めるわよ！」

電「今回は、わたし達駆逐艦だけの会議なのです」

黒潮「何でうちらだけなん？」

雷「いい質問ね！　それはわたし達の見た目がお子様だからよ！」

文月「い、言い切っちゃった……。それは文月達にとつて禁句なのに……」

雷「だからこそよ！　わたし達はこのハンデを受け入れたうえで、大佐に好きになつてもらわなければならいの！」

長月「成程な……。いつまでも逃げてはいられないからな」

雷「そういう事！　それじゃ、会議を始める前に今回わたし達にとつて喜ぶべき収穫と驚くべき情報を紹介するわ！　望月、報告をしてちょうだい」

望月「はい。今回わたしからの報告は、大佐にわたし達見た目が子供の駆逐艦も恋愛の対象として見て貰える様、ストライクゾーンの拡大の要求に成功した事だよ」

ザワザワ……。

不知火「そ、それは本当なのですか!？」

望月「本当だよ。わたしの交渉術でその条件を引き出したわけ」

雷「前にわたし達にとっておきのお土産がある、つて言っていたのはこの事だったのね」

望月「そういう事。褒めていいよ？」

モチツキー！ モッチー！ サスガー！

雷「これは本当に喜ぶべき朗報ね！ 皆、今暫くこの幸運を噛みしめましょ！」

陽炎「……へ、へえ。大佐が、ね……。わたしでもチャンスがあるんだ」

霰「この気持ちは何……？ 涙が……止まらない……よ」

綾波「う、ぐす……やつと、やつとこの時が来たのですね……！」

秋雲（うーん、先に恋人にしてもらった手前、素直に喜べないなあ）

雷「はい！ 余韻タイム終了よ。名残惜しいけど次に行くわよ！」

菊月「その通りだ。私達は常に前を向いて生きていかねば、な」

雷「言い事いうじやない菊月！ その通りよ！ わたし達は、わたし達の明るい未来の為にこの会議を成功させなくちゃいけないのよ！」

電「なのです!」

雷「はい、それじゃ次に驚くべき情報を報告するわ! これは、えーと……夕雲でいいのかしら?」

夕雲「はい。青葉さんから情報を確認したのは私です」

雷「よかった。それじゃ、報告頼むわよ!」

夕雲「了解致しました。私からの報告は、大佐と恋仲になるのは決して大佐にとって不利益にならないと言う情報です」

ザワザワ……。

卷雲「それだけだとよく判りませぬね。一体なにが大佐にとつて有益なんですか?」

夕雲「それは……大佐とは、肌を重ねることによつて、大佐が常に健康な身体でいられるという事です」カア

シーン……。

雷「ね、ねえ。そ、それつてつまり、どういう……事?」

夕雲「まぐわ……エツチです。大佐とエツチをすれば、大佐も健康になります」

ザワザワザワ……!

島風「えつち?」

雪風「島風ちゃん。あ、あまり大きな声で言わない方がいいよ……」カア

島風「え？　ねえ、えっちってどういう事？　大佐にパンツとかを見せればいいの？」

叢雲「違うわ。そういう視覚的なものじゃなくて、実際にエッチをするって事よ」

島風「実際に？」

谷風「だ、だからあ……お互い裸になって……そ、そのわたし達の大事なところ……
コシヨコシヨ」

初春「恥ずかしいなら無理をするでないわ。よいか島風、エッチというのはな。女の
ホトに大佐のマラを入れたり出したりする事じゃ」

白露「ぶっちやけ過ぎ！」

島風「ホト？　マラ？」

霞「もう、だからっ。島風のこ、ここに」フニヨ

島風「ひゃんっ」

霞「た、大佐のち、チンチンを入れて貰うって事よ……」プシュー

朝潮「霞、貴女はよくやりました……流石です」グス

曙「お疲れ様。恥ずかしかったでしょ、ゆっくり休みなさい」

霞「……」プシュー

島風「島風のココに……」カア

雪風「あわわ……」カア

雷「そ、それはほ、本当に凄い情報ね！ た、確かにそれが本当ならた、大佐とえ、エツチする大義名分はな、成り立つわ！」

臈月「目的はとも人様に言えない内容なのに、大義名分ってどうなんだろ……」

臈「ち、恥辱も試練の一つよ……。がんばらなきゃ」

夕立「でもお、どうやって大佐とエツチするわけ？ 雰囲気とか大事じゃん？」

時雨「攻めるしか、ないよ」

満潮「し、時雨？」

時雨「今まで僕たちは奥手だった。自分たちの体が幼いからあまり直接的な手段に出れなかった。でも、今日のこの2つの情報が本當なら、今こそ攻めるべきだよ」

響「……時雨が言わなかったら。もう少し感動できたのにな」

時雨「ええ!? そ、それってどういう事!？」

涼風「こんな大きい胸してる癖に、時雨が幼いって言ったって、あたい達はへこむだけなんだよ！」モニユ

時雨「ひゃあっ」

Z1「ま、それは置いておいても、確かに時雨の言う通りだよ。これからはもつと積極的に行動しよう」

Z3「だからって、大佐にあまり迷惑は掛けない様にしないとね」

五月雨「それは当然ですね！」

雷「んっ、なんだかんだでいい感じに意見がまとまつてるみたいね！ それじゃ、結論を出しましょうか！」

電「わ、わたし達は大佐に振り向いてもらう為に、ちよ、ちよつとエツチな方法でも取るべきなのです！」

荒潮「その通りねえ。これからは攻めるわよお」

子曰「今日は決意の日だね！」

雷「子曰、あなたも良い事いうわね！ それじゃ、答えが出たみたいだし最後に関の声を上げて決意を固くするわよ！」

一同「了解！」

雷「それじゃあ、いくわよ！ 暁の水平線に!!」

一同「愛を掴もう!!!」

雷「解ってるじゃない！ 皆、行くわよー!!」

ワアアアアアアアア

「その頃、とある酒場

提督「……!?!」ゾク

彼女「どうかした?」

提督「いや、飲み過ぎたか……?」

彼女「まだ、コップ一杯のビールも空けてないじゃない」

提督「そうだな……」

彼女「大丈夫?」

提督「ああ。取り敢えず飲もう」

彼女「んっ」

第7話 「お祝い」

彼女「じゃ、再会を祝して」

提督「乾杯」

チン

彼女「全く、ビール一杯でいきなり変な反応するんだも何事かと思ったわよ」

提督「すまん。何故か急にな。今は大丈夫だ」

彼女「……ちゃんと健康管理してる？」

提督「体作りはしている」

彼女「それ、健康が管理できてなかったら、ただ体をいじめてるだけよ？」

提督「む……」

彼女「基地の食事を摂っていれば大体問題ないとは思うけど、偶には料理とかもしたほうがいいわよ？」

提督「君のおかげでそれは、今や俺の趣味になっている。だからその点は大丈夫だ」

彼女「むっ、悪かったわね」

提督 「……あれからどうだ？」

彼女 「どうって？」

提督 「苦手な事だ」

彼女 「なんで気にするのよ？」

提督 「別れてからは、自分でまたしなないといけなくなっただろ？ ちゃんとできているのかと思つてな」

彼女 「少なくともあなたに心配されない程にはマシになつたと思うわ」

提督 「ほう？ 料理も作れるように？」

彼女 「わたし、才能豊かなのよ？」 ニツ

提督 「自分で言うか」

彼女 「自惚れでない自信だからね。断言させてもらうわ」

提督 「相変わらずだな」

彼女 「……惚れ直した？」

提督 「その言葉は聊か不適切だな。別れたのはどちらかというと俺が逃げたのが原因だからな」

彼女 「でも起因は私よね？」

提督 「だからと言って君自身が嫌いになつたわけじゃない。元々俺は君には良い印象

を抱いていた。そしてそれは今も変わらない」

彼女「不適切だつて言ったのはそういう事？」

提督「そうだ」

彼女「それじゃ、まだ私にもチャンスはあるつて事？」

提督「チャンスだなんて言うな。君が全部悪いとは思っていない」

彼女「寄り戻してくれないの？」

提督「……再会してから思っていたが、まだ俺のことが好きなのか」

彼女「一目惚れよ？」

提督「……そうだったな」ゴク

彼女「答えは？」

提督「俺は君ほど肌を重ねてはいないとは言え、既に何人もの娘に告白され、更にそ

の内に何人かとは体を結んだ人間だぞ」

彼女「ふふ、あなたにしては大したものだと思うわ」

提督「そこは軽蔑するところだろ」

彼女「好きなのは仕方ないの」

提督「武蔵はどうした？」

彼女「気を遣ってくれたわ。あの子、あれでいぎという時はやってくれるのよ？」

提督「良い奴とケツコンしたな」

彼女「そういう言い方しないですよ。確かに私、あの子のこと愛してるけど、それはあなたも同じなのよ？」

提督「君は同時に好きな人を愛せるほど器用だったか」

彼女「提督をやつてたら誰だつてそうなるんじゃない？」

提督「耳が痛い話だ」

彼女「それで？」

提督「ん……」ゴク

提督「つふう……。密会や秘愛のような尾を引く真似はしたくない」

彼女「そう……」

提督「だから皆が、武蔵が認めるのなら、な」

彼女「っ、それ本気で言ってる？」

提督「ああ」

彼女「……ふふ」

提督「ん？」

彼女「んーん、お酒が美味しいの」

提督「今まで美味しくなかったのか？」

彼女「普通。でも今のは凄く美味しい」

提督「ほら……」

彼女「え？ 私泣いてた？」

提督「今も、だ」

彼女「やだ、恥ずかし」カア

提督「返さなくていいぞ」

彼女「ん……、ありがとう」

提督「……すまなかつたな」

彼女「気にしないで。来た甲斐があつたわ。本当に」

提督「期待していたのか？」

彼女「しないわけじゃないじゃない。これでも結構緊張していたのよ？」

提督「そうか……」

彼女「ねえ」

提督「ん？」

彼女「今も緊張してる……」

提督「……」ポン

彼女「あ……」

提督「今は、これで我慢してくれ。やはり秘め事にはしたくない」
彼女「うん……♪」

その頃、港

長門「そんなところで何してるんだ？」

武蔵「なんだ。老朽艦か。ほっとけ。今は一人になりたいんだ」

長門「相変わらず口が悪いな。自信があるのは結構だが、それだと嫌われるだけだぞ？」

武蔵「別に、提督さえいればいい……」

長門「……まあ、な」

武蔵「……大佐はいい男か？」

長門「ああ。お前も惚れるかもしれないぞ」

武蔵「私は、提督の、あいつの胸がいいから、それはない」

長門「……本当に好きなんだな」

武蔵「……一目惚れだからな」

長門「なるほど……」

武蔵「なあ」

長門 「ん？」

武蔵 「やっぱり寂しい」グス

長門 「そうか。じゃあ私の部屋に來い。皆と一緒に酒でも飲もう」

武蔵 「受け入れてもらえるだろうか」

長門 「提督が好きなら奴に悪い奴はいないさ。皆、それくらい解っている」

武蔵 「……そうか」

長門 「ああ、そうだ。……来るか？」

武蔵 「ああ。ご相伴に預からせてもらおう」

長門 「殆ど酒しかないぞ？」

武蔵 「酒も飯だ」

長門 「ふふ、なんだそれ。上手い事言ったつもりか？」

武蔵 「えっ？」

長門 （天然だったか。こいつも可愛いな）

第8話 「ご機嫌」 R-15

彼女「~~~~♪」

武蔵「……………機嫌が良いな」

彼女「まあね」

武蔵「大佐と仲直りしたのか？」

彼女「ん？ ふふ、別に仲違いなんてしてなかったわ。私の思い過ぎだったみたい

♪

武蔵「そうか、良かったな。大佐は優しいんだな」

彼女「そういうのじゃないわよ。私がずっと嫌われたって勘違いしていただけ」

武蔵「そうか……………まあ、よかったじゃないか」

彼女「……………ねえ」

武蔵「なんだ？」

彼女「甘えていいわよ。思いつきり」

武蔵「つ、それは……………これが、最後までかそういう意味……………か？」プルプル

彼女「バカね。そんなわけじゃない。この指輪は絶対に外したりなんかしない

わ

武蔵「じゃ、じゃあ私は二番目なんだ……な」

彼女「あなたが女という時点であいつと比較なんてできないわよ」

武蔵「そ、それは……どう意味だ……？」

彼女「女ではあなたが一番ってことよ」

武蔵「つ、xxxxいいい！」

彼女「はい。いらっしやい」

ダキッ

武蔵「うっ……ひっく……すん」

彼女「久しぶりね、名前で呼んだの」

武蔵「すまん。規則を破った」

彼女「いいのよ。こういう時くらいは目を瞑るわ。寧ろ、呼んでくれた方が嬉しい」

武蔵「……！」スリスリ

彼女「んっ……服が皺になるから脱ぐわね」

武蔵「……脱がしたい」

彼女「ふふ、いいわよ。今日は何でも応えてあげる」

武蔵 「…… 今日黒色じゃないんだな」

彼女 「昔を思い出してね。あの頃は『女の子』だったから」

武蔵 「何を言ってるんだ。今だってそうだ。取るぞ？」

彼女 「ん……」

武蔵 「ん？ もう勃ってるのか？」

彼女 「んっ、今日は何でもしてあげるって言ったら、自分自身を興奮させちゃったみたい」クス

武蔵 「……！」

武蔵 「ちゅう…… ペろ」

彼女 「…… はっ、ふ…… く。イイっ」

武蔵 「凄いな……」

彼女 「そうね。自分で言うのもなんだけど、ここまでなったのは初めてかも」

武蔵 「苦しそうだな。今解放してやる」

彼女 「あっ…… もう……」

武蔵 「はあ…… もう、溜らん。れる…… じゅるるるっ」

彼女「ああつ……ふう……つく、はあ、はあ……ふふ。もう犬みたつ……い
 にながつついちやつて」

武蔵「わたしゆは、今日もご、じゆるつは、お前の……ん、ペろつ……犬だ」

彼女「くううつ。はあ……あ、愛撫犬つてやつ？ やらしいわね」

武蔵「何とでも言え。今日は好きにさせてもらう」

彼女「いいわよ。ほら……こつちもお願ひ」

武蔵「ふふ、可愛いな。可愛がつてやろう」

彼女「あ、指……そこ……！」

武蔵「今日はこつちも攻めさせてもらうぞ」

彼女「あああああつ。凄つイイ！ はあつ……ふう……はあつア」

——数時間後

彼女「はあ……はあ……武蔵……むさし……ペろ」

武蔵「んくつ、いい……ぞ。もつと……！」

彼女「あ……もう、夜が……明けつ、ちやう……」

武蔵「寝てていいぞ。私はまだお前のココを弄つていたい」

彼女「何言ってるのよ。こんなにヒクヒクさせてくるくせに…… ちゅ」

武蔵「あ、ふ。し、仕方ないだろ。どんどん溢れてきてしまうんだ」

彼女「ふふ、武蔵って肌はちよつと浅黒なのに、ココはちゃんと…… かーわいい♪
でも、あと1時間ね」

武蔵「仕方ないな。じゃあ、私はやっぱり最後までココを…… ちゅ」

彼女「んんっ！はあ…… じゃ、私は目覚めの良い朝の為にあなたのを……」ム
ニユウ

武蔵「あつ……！ はあ、はあ…… やるな」

彼女「誰が先にイカせるか勝負よ」ニツ

武蔵「ふ、望むところだ」

同刻、提督執務室

コンコン

提督「……ん？」

ガチャ

提督「…………… どうしたんだ。三人ともこんな朝早くに」

名取「ひつく…………… な、なんか何処からかわかり…………… ませんが、悲鳴みないな

声が聞こえるんです」

暁「ふ、震えて可哀そうだったから、あ、暁が連れてきたのよ！」プルプル

提督「悲鳴…………… ?」

妙高「あの大佐……………」

提督「ん？」

妙高「…………… コシヨコシヨ」カア

提督「…………… なるほど。3人も、今日は夜が明けるまで俺の部屋で寝ろ。特別に許

可する」

名取「ほ、本当ですか!」ウル

暁「たいしやああ」ブアッ

妙高「わ、私もいいんですか？」

提督「ああ。4人では少し狭いだろうが、妙高は名取の隣に、俺は暁を見る」

妙高「ああ、そういう……………」

名取「あ、ありがとうございます！」

暁「た、大佐の隣…………… ♪」ポ

提督 「妙高」

妙高 「はい？」

提督 「今日、晩酌に付き合ってくれるか？ 指名したい」

妙高 「っ！ よ、喜んで！」

提督 (ふう……)。若さを保つてるといふのは本当らしいな。いや……愛、か)

第9話 「アイドル」

提督 「そういえば那珂は、歌が得意なのか？」

那珂 「えっ。ど、どうして？」

提督 「いや、ふと気になっただけだ。よくお前は自分の事をアイドルと言っているからな」

那珂 「い、いやまあそうなんだけど。別にアイドルだからって歌に拘る必要はないんじゃないかな？」

提督 「とうとう？」

那珂 「ば、バラエティとか……」

提督 「この辺境の地でバラエティか……」

那珂 「にゅ、ニュースキャスターとか！」

提督 「歩く情報発信源みたいな奴が既にいるからな。それもどうだろう」

那珂 「うう……」

提督 「……もしかして、ただ目立ちたいだけだったか？」

那珂 「なあ!」 ギク

提督「凶星か。何故そんなに目立ちたがる？」

那珂「だ、だって……わたしってあまり特徴ないじゃん？」

提督「特徴？」

那珂「一時は改二になって凄くはりきってたけどさ、神通姉さんが改二になってからはあまり戦闘で活躍するのともうかなって」

提督「姉に気を遣ったのか？」

那珂「あ、気を遣ったのは川内姉さんにだけだね。ほら、神通姉さんは私が言うのもなんだけど、凄く出来た人じゃん？」

提督「なるほど。あいつ最近元気がないと思う時があつたが、そういう事だったのか」

那珂「あ、やっぱり？ わたしももう直ぐ姉さんの番だよって励ましたりしてるんだけどね」

提督「そういうのはなるべくやめておけ。神通じゃないと逆効果だ」

那珂「それってどういう意味!？」

提督「普段の行いの所為だろう」

那珂「う……。ま、まあそういうわけで那珂的には適当に目立って皆の印象に残ろうかなって思ったわけでありまして……」

提督「そうか」

那珂「め、迷惑だった？」

提督「いや、迷惑というより、余計に印象が悪くなるだけだから寧ろこれからは控えた方がいいと思うぞ」

那珂「ええ!？」

提督「那珂、自覚してるかもしれないが、お前は軽巡としては優秀な部類に入る。そんなお前が実力を出し惜しみしてどうする？」

那珂「でも川内姉さんが……」

提督「川内はあれで、なかなか責任感があつて妹思いのしっかりした姉だ。そんなあいつがお前が遠慮していることを知ったらどう思うと思う？」

那珂「……」

提督「妹の負担になってると知ったら、きつとあいつは今以上にショックを受けるぞ」

那珂「あり得るかも……」

提督「那珂、お前は無理に自分のイメージを作る必要はない。目立ちたいなら自分の実力を誇ってみせろ。実力に見合った戦果を示してみろ」

那珂「大佐……」

提督「お前は元々真面目な性格だと俺は思っている。勿論、決めつけるのはよくないが、それでも姉思いなのは間違いないだろ？」

那珂「うん……」

提督「なら、それを隠してどうする。寧ろその姿を姉たちに見せつけて、お前が一人前である事を伝えてあいつらを安心させてやれ」

那珂「姉さんたちを安心……させる……！」

提督「自信が出てきたか？」

那珂「うん！ 大佐、那珂ちゃ……ううん。わたし頑張る！ わたしがわたしである証をど真ん中にアピールしてみよう！」

提督「良い意気込みだ。正に艦隊のアイドルだな」

那珂「ちよ、今それをここで言うのー？」
「プク」

提督「はは、悪い。だが、お前の活躍で仲間の士気があがれば、アイドルという異名もそう悪くはないと思うぞ？」

那珂「わたしの活躍で皆の士気を……」
「ゾク」

提督（前々から思っていたが川内は元々だったが、下の妹2人も姉に劣らずに戦闘では頼もしい面を覗かせる。神通は改造によって自信を持ったが、こいつの場合は自分を見失っていたのかもしいな）

那珂「大佐」

提督「ん？」

那珂「これからのわたしの活躍、期待しててね？」

提督「いい顔になったな。頼もしさを感じる」

那珂「そ、そうかな？」 テレ

提督「だがな那珂」

那珂「あ、はい！」

提督「本当に頼もしさを感じさせてくれるなら、目の前にあるこの書類の束を減らすのにも力を貸して欲しいんだが？」

那珂「えっ。あー……な、那珂ちゃんはあ、アイドルなのでえ……」

提督「おい、さっきの頼もしさは何処に行った？ 一気に本当に人気があるのか怪しいアイドルになってるぞ？」

那珂「じ、事務処理は苦手なんだよーお」

提督「そこは姉に負けてるのを認めるわけだな」

那珂「ま、負けてると言っても神通姉さんだけだし！ 川内姉さんはズボラだから絶対にこういう仕事不得意なはずだし！」

提督「お前それ、絶対に川内の前で言うなよ？ あと、不得意を競うな」

那珂「う……」

提督「事務処理が苦手なら克服すればいい。神通に聞いてもいいし、今ここでなら俺

も教えてやれる」

那珂「た、大佐が教えてくれるの？ 仕事遅れちゃうよ？」

提督「先行投資というやつだ。将来が有望なアイドルなら投資して然るべきだろう？」

那珂「あ……」ポ

提督「輝いてくれるか？」

那珂「うんっ任せて！」

第10話 「子守り」

島風・雪風「ジー……………」

提督「……………」

島風・雪風「ジー……………」

提督「なんだ…………… 二人とも」

島風「っ、気付いた！ 行くよ！ 雪風ちゃん！」ダッ

雪風「りよ、了解しました！」ダッ

島風「大佐っ！」

雪風「見て下さい！」

バツ

提督「…………… 何故、下着を見せる？」

島風「エッチな方法で大佐をのーさつするのっ」

雪風「た、大佐。どうですか？ 嬉しいですか？」

提督「…………… 一体、誰の入れ知恵だ」

島風「雪風ちゃん、大佐あまり喜んでないみたい」ヒソ

雪風「そうですね。や、やっぱり脱いだ方が……」カア

提督「二人とも」

島風・雪風「はい！」

提督「ふう……おいで」

島風・雪風「？」トコトコ

ギユ

島風「あ……」

雪風「ふあ……」

提督「別に恋人になるにはそういう事をしないとイケない、というわけではないんだ」

島風「そうなの？」

雪風「男の人はこれが一番好きなんじゃ……」

提督「それは、別に男だけとは限らない。女だってそういう人はいるぞ」

雪風「そうなんですか？」

提督「ああ。だが、俺は二人にはそういう方法はまだ時期が早いと思う。だから、こ

れが今は最適の方法なんだ」

島風「それって、いつでも大佐に抱き着いていいってこと？」

提督「いつでもだと俺も困るな。仕事をしていない時に頼む」

島風「っ！ わかった！ ね、まだこのままでいい？」

提督「ああ、もう少しならな」

雪風「ゆ、雪風も！」

提督「二人とも一緒だ」ポン

島風「むふー♪」スリスリ

雪風「たーいさあ♪」スリスリ

——数分後

雪風「すう……すう……すう……」

島風「くー……すー……」

提督「……」ナデナデ

ギユ

提督「ん？」

響「響も……」

提督（いつの間に……）

提督「……ちよつと待ってる。2人をベッドに寝かせてくる」

響「了解、待ってる」

提督「待たせたな」

響「大佐っ……！ダッ

提督「む」キヤツチ

響「んー……♪」スリスリ

提督「いつにも増して甘えん坊だな」

響「……これからこういう子がどんどん来ると思う」

提督「なに？」

響「でも、今は響だけを可愛がって」

提督「……ああ（増える……？）

響「撫でて」

提督「ん」ナデナデ

響「ふ……んむ……」チュ

提督「っ」

響「……やった」

提督「また不意を突かれたな」

響「油断どんどんしていいよ？」

提督「そこは窘めてくれ」

響「やだ」プイ

提督「……全く」

——数分後

響「ん……もういいよ」スツ

提督「ん、そうか」（自分から離れるとは珍しいな）

響「名残惜しいけど……次は雷の番だし、ね」

提督「なに？」

雷「大佐っ！」ダキ

提督「おっと……一体どこから」

雷「ちゃんとドアから入って来たわよ！ ほら」

提督「……」

響「皆、順番に待ってるから、ちゃんと相手をしてあげてね」

雷「大丈夫よ！ 一日10人までって決めてるからお仕事の邪魔はさせないわ！」

提督「そうか……」

響「雷」クイクイ

雷「ん？ なに？」

響「エツチなのは今日はダメだよ？ 反則」ヒソ

雷「つ、わ、分かってるわよ」カア

響「ん。ならいい。じゃ、大佐。よろしくね」
バタン

提督「……………」

雷「大佐っ」

提督「ん？ む……………」

チユ

雷「えへへ…………… やったわ♪」

提督「我ながら学習しないな……………」

雷「隙を見せる方がわるいのよっ♪」スリスリ

雷「ね」

提督「ん？ 撫でるか？」

雷「ううん、違うの。お、お腹をポンポンってして」

提督「…………… わかった」

ポンポン

雷「あ…………… なんだろ…………… 撫でられるのと違ってこれ…………… いい」

提督「そうか」

雷「うん。なんか…………… 安心するっていうか、体がポカポカして幸せな気分なの」

雷「ね、今度はお腹撫でて」

提督「ん」

ナゲナゲ

雷「ん…………… ふあ、これもいいなあ……………」ウツトリ

提督「それは良かった」

雷「ね。上からあ、足の付け根のところまでスーってやって」

提督「雷、それは……………」

雷「べ、別に服の上だし。パンツを触るわけじゃないからいいでしょっ」カア

雷「ね、お願い。それ以上は我儘言わないから」ウル

提督「…………… ふう」

スー…………… サスサス、スー……………

雷「あふう…………… あり…………… と。しば…………… らくそのまま、ね」

く執務室前の廊下

不知火「……………」カア

陽炎「ど、どうしたの？ 何が見えるの？」

不知火「いえ……………」スルツ

陽炎「どうしてパンツ脱ぐの!？」カア

第11話 「対峙」

榛名「……」

彼女「あの、何か？」

榛名「少将は大佐の元恋人なんですよね？」

提督「榛名」

彼女「いいのよ。そうだけど、それが？」

榛名「今も『元恋人』なんですよね？」

彼女（なるほど、そういう事……）

彼女「榛名、さん」

榛名「つ、どうして本部の提督とは言え、階級も大佐より高い少将が私なんかになんか『さん』を付けるんです？」

彼女「今から貴女にお願いしたい事があるからよ」

榛名「……お願い、ですか」

彼女「榛名さん、貴女、この人の事を好き……愛してるわよね？」

榛名「……はい。大好きです」

彼女「私は貴女はその気持ちを理解したうえでお願いしたいの」

榛名「大佐との仲直り、ですか？」

彼女「いいえ。復縁よ」

榛名「っ！ 駄目です！ 許しません！」

彼女「……理由を教えてくださいませんかしら」

榛名「榛名から大佐を奪わないでください！」

彼女「奪いはしないわ。ただ、昔と同じように恋人になつてほしいd」

榛名「それが榛名達から大佐を奪う原因になるんです！」

彼女「何故？」

榛名「榛名は……私は、所詮艦娘です。人間じゃありません……。生まれた時から親もいなくて、ただ一人……」

榛名「少将、そんな私達にとって唯一常に傍にいて身近に感じる人、提督がどんな存在か解りますか……？」

彼女「……よく解るわ。だって武蔵にとつても私はたった一人の提督だもの」

榛名「なら……！」

彼女「榛名さん、私が貴女に訊きたいのはそんな事じゃないのよ？ どうして私が彼と恋人に戻つたらいけないのか、を訊いてるの？」

榛名「……少将は人間じゃないですか」

彼女「そうね」

榛名「艦娘の恋が人間同士の恋に勝てると思いますか？」

提督・彼女「……」

榛名「人間同士ならいざそれの……子供だつてできますよね？もしそうだったらそ

れこそ、大佐は二度と榛名達の方を振り向いてくれなくなります」

榛名「私は……そんな絶望にあいたくありません。大佐を一生失うなんて考えられま

せん！」

彼女「……それが理由？」

榛名「……そうです」

彼女「榛名さん、これを見てくれる？」

榛名「それは……ケツコンの指輪、ですよね？」

彼女「そう。これは、武蔵と私のケツコンの証の指輪よ」

榛名「っ！少将は、武蔵さんを裏切るんですか？」

彼女「そんなわけじゃない。これは絶対に彼女を離さない誓いでもあるもの」

榛名「ならなんで大佐と……！」

彼女「……許しを貰ったの」

榛名「え？」

彼女「彼女に彼と寄りを戻していいっていう許しを……」

榛名「二人とも手に入れようしているんですか？ 強欲が過ぎますよ？」

彼女「だって……好き、なのよ？」

榛名「な……」

彼女「この気持ち、止められると思う？ 貴女なら」

榛名「引き際を……諦めを着けるのも、周りに迷惑を掛けない決意を表す選択なんですよ？」

彼女「そんなのごめんだわ。絶対に後悔するから」

榛名「え」

彼女「榛名さん、私は武蔵も彼も、二人とも“好きなの。そんな我儘な私がどちらか一方だけを愛するなんてするわけないじゃない”

榛名「あ、貴女はさつきから何を言ってる……」

彼女「榛名……貴女も我儘でいいのよ？ 私は彼の事を愛してるけど、絶対に貴女から奪うような真似はしない。だって貴女の気持ちを知ってるもの」

榛名「私は今でも十分我儘のつもりです。それなのにこれ以上なんて……」

彼女「なら諦める？」

榛名「っ！ 嫌です!!」

彼女「私もよ。絶対に嫌」

榛名「あ……」

彼女「ね？」ニコ

榛名「あ……ああ……」

彼女「もう我慢しないでいいわ。本当に心の底から貴女の好きないようにしなさい」

提督「……」（俺の艦娘なんだが……相変わらずなんという状況制圧力だ）

榛名「わ、私は……」

彼女「榛名……」フワ……ダキ

榛名「あ……」

彼女「ごめんね。女の胸なんかで。でも安心してほしいの。私を信じて。私も榛名と

一緒に幸せにさせて？」

榛名「少将……」ギユ

彼女「いい子ね……大佐もそんな貴女の事がきつと好きはずよ。もしかしたら、私

よりも……」

榛名「そう……でしょうか？ 榛名が人間の少将より大佐に好かれるなんて……」

彼女「自信を持ちなさい。貴女は艦娘である前に乙女なのよ？ 乙女が男を虜にする

のに自信がなくてどうするのよ？」

榛名「少将……」ウル

彼女「泣きなさい。全部受け止めてあげるわ。あ、でも大佐に抱き着くのは後にしなさい？ 服が濡れちやうからね。私は客人だからいいけど」

榛名「うわああああん！ 少将おおおお!!」ギユ

彼女「はいはい。いーこ、いーこ」ポンポン

提督「……」（俺はひよつとして無用の存在なのではないだろうか……）

——数分後

榛名「すん……」

彼女「……落ち着いた？」

榛名「はい……」

彼女「ついでに聞いて悪いけど、私の我儘許してもらえる……う？」

榛名「少将ならっ」ニコ

彼女「っ、ありがとう！」ギユ

榛名「ん……少将、苦しいです♪」

彼女「あ、ごめんね。嬉しくて……。ね、更についでで申し訳ないけど……大佐に……」

彼に抱き着いていいかしら？ 幸せが……止まらないの……」

彼女「彼に……受けて止めて欲しいの……」

榛名「もう少将と私は大佐の恋人同士じゃないですか。遠慮しないで下さい。あ、でも次は榛名ですよ？」

彼女「……うん！」

榛名（あ……可愛い……）

彼女「大佐……」

提督「……俺からは何も言う事は……いや、また恋人になつてくれるか？」

彼女「勿論よ……！」ブアッ

ダキッ

彼女「ね、キス……」

提督「駄目だ。仕事中はそういう事はしない」

彼女「状況に流され易い癖に……ん、いいわ。今は抱き締めてくれるだけで」

提督「まあ、それなら……」ギユッ

彼女「ねえ」

提督「ん？」

彼女「私今、凄く幸せよ？」

提督「知っている。さつき榛名に言ってたからな」

彼女「もう……霧囲気考えてよ」プク

提督「榛名が見てるのに霧囲気と言われてもな……」チラ

榛名『タイサ ファイト！』ブンブン

提督（身振りで……）

ギユツ

彼女「んっ、どうしたの？」

提督「いや」（本当に女には適わないな）

く扉の向こう側

加賀「……どう、思います？」

金剛「Oh……凄い、強敵ネ」

武蔵「むう……抱き着き過ぎだっ」

加賀「私達も負けてられませんね？」ニツ

金剛「当然ヨ！」

武蔵「ふつ、誰に口を聞いている？」

加賀（そう。例えケツコンしなくても、人間でもなくても……恋は誰にも負けるつもりはないわ。……愛してます、大佐）

第12話 「配膳」

グ……

提督（む、腹が……）

提督（そういえば、今日は秘書艦を充てがうの失念していたな。まさか、昼の仕事が終わるまで気づかないとは……）

提督「……食堂に行くか」

コンコン

提督「ん？」

鳳翔「鳳翔です。大佐、いらっしやいますか？」

提督「ああ、入れ」

ガチャ

鳳翔「お邪魔します」

提督「どうし……た」

鳳翔「ふふ、やつぱりお食事、摂られてなかったんですね」

☆配膳メニュー

『赤みその味噌汁・麦飯・香の物・焼き鮭』

鳳翔「秘書艦らしい方が見えられなかったのもしかして、と思ったんです」

鳳翔「食堂のメニューは全部終わってしまいました、残ってた食材で形だけ拵えてみました……。如何ですか？」

グク……

提督「む」

鳳翔「ふふ、気に入ってもらった様でなによりです♪ お召しになって下さい」

提督「ありがとう」スツ

鳳翔「あ、あの……」

提督「ん？」

鳳翔「もし宜しければ……宜しければいいんですが……」

提督「なんだ？ せっかく気を遣ってこんな美味しそう食事を用意してくれたんだ。

遠慮なく言ってくれ」

鳳翔「あ……ありがとうございます。それでは……スウーハー……」

提督「？」

鳳翔「もし宜しければ……食べせてさしあげたいんですが……」

提督「な……」

鳳翔「遠慮なく、と申しました……よね？」チラ

提督「俺は病人でも怪我人でもないぞ」

鳳翔「意地悪しないで下さい……。私にだって……少しくらい、アピールさせてく下

さい……」ボソ

提督「……頼む」

鳳翔「っ！ はい、承知致しました！」パア

鳳翔「それでは……」スツ

鳳翔「ふう……ふう……」

提督「なあ」

鳳翔「はい？」

提督「そんなに熱そうに見えないんだが」

鳳翔「気のせいです♪」ニコ

提督「……そうか」（あと息が近い、とは言わない方がいいんだろうな）

鳳翔「はい、どうぞ」

提督「ん……」パク

鳳翔「どうです？」

提督「……美味しい」

鳳翔「良かった！ それじゃあ次は……」

く数十分後

提督「美味かった。ごちそう様」

鳳翔「お粗末さまでした」

提督「まあ形はどうあれ、本当に美味かった。改めて礼を言う」

鳳翔「そんな、大げさですよ」ニコニコ

提督「いや、また食べたいくらいだ」

鳳翔「お望みでしたらいつでも」

提督「それは流石に体裁もあるかな。こういう時か、俺から頼みに来た時でいい」

鳳翔「遠慮なさらなくていいのに……。あ」

提督 「ん？」

鳳翔 「お茶、残ってますね」

提督 「ん？ ああ、全部飲んだ方が片付け易いか。ちよつとまて」

鳳翔 「待ってください」

提督 「？」

鳳翔 「……」ス

提督 「おい……」

鳳翔 「……コクコク」

提督 (まさか……)

鳳翔 「ん……」ズイ

提督 「大胆だな……」

鳳翔 「……」カア

鳳翔 「んっ……」フルフル

提督 (そのまま飲めとも言えないか、苦しそうだし)

提督 「鳳翔……」

鳳翔 「んあ……あ……ん……」

提督 「くちゅ……こく……」

ツ

提督 「ふう……」

鳳翔 「はふう……」 ドキドキ

鳳翔 「あの……」

提督 「ん？」

鳳翔 「申し訳ありませんでした。失礼な真似を……」

提督 「……お前の“お茶は美味かったぞ”」

鳳翔 「っ」 カアア

鳳翔 「大佐……」 スツ……ピト

提督 「ん」

鳳翔 「ありがとうございます……」

提督 「ああ」

鳳翔 「私にだつてこういう時くらいあるんですよ？」

提督 「そうだな」

鳳翔 「嫌いに……なりました？」 フルフル

提督 「……鳳翔」

チユ

鳳翔「たいs……ん……」

提督「……ふ。……悪いな。昼休みも僅からだからこれが限界だ」

鳳翔「大佐……」ポ一

提督「鳳翔？ すまん。俺が無神経だ」

鳳翔「……手を」

提督「ん？」

鳳翔「手を……私の胸に……」

提督「……」（鳳翔を信じよう）

フニョ

鳳翔「ん……」ピクツ

鳳翔「慎重しやかですみません。……どうです？」

提督「激しい鼓動を感じる」

鳳翔「もう、もつとそれっぽくお願いします。」

提督「凄くドキドキしているな」

鳳翔「これが私の気持ちです」

提督「そうか……」

鳳翔「大佐」

提督「ん」

鳳翔「今夜……閨をお訪ねして宜しいでしょうか……」

提督「ああ。皆が寝静まつてから来い。寝ないで待っている」

鳳翔「っ！ ありがとうございます……！」ウル

鳳翔「それでは失礼しますね。また……今夜に……」カア

提督「ああ」

バタン

提督「……あの鳳翔が、な」

第13話 「夜伽」 R—15

鳳翔 「失礼します」

提督 「ああ」

鳳翔 「良かった。まだ起きていてくれたんですね」

提督 「流石に破ったりなんかない」

鳳翔 「ありがとうございます……あの、それでは大佐……」

鳳翔 「ん……ちゆ」

提督 「ちゆ……ん……っは、ベッドまで待てないか？」

鳳翔 「ん……ふ、はあ……しながら連れて行って下さい」

提督 「分かった」

提督 「下着、着けていないんだな」

鳳翔 「普段はちゃんと着けてますよ？ こういう時だけです」カア

鳳翔 「ごめんなさい。はしたない女で……」

提督 「いや、魅力的だ」

きゆう

鳳翔「ああつ」

提督「もうこんなに感じているのか……………脱がしていいか？」

鳳翔「……………はい」

パサツ

鳳翔「ごめんなさい。貧相な体で……………」

提督「貧相なんかではない。細くて可憐だ。守つてやりたくらいに……………ちゆ」

鳳翔「んんっ」

鳳翔「あ、そこ……………」

くちゆ

鳳翔「あはあ……………んん……………ああ」

提督「いい具合だ……………ぺろ」

鳳翔「ああつ、大佐あ」

提督「まだいけるな。今度は深くいくぞ……………ちゆう」

鳳翔「い、ああああ……………んくううう……………」

鳳翔「だめっ、こ……………れ……………あああつ」

提督 「最後の仕上げだ」

鳳翔 「あああつ…………… すご…………… はあああ！」

鳳翔 「はあはあはあ……………」

提督 「大丈夫か？」

鳳翔 「はあはあ…………… 大佐…………… お上手過ぎ…………… です」

鳳翔 「やつぱり…………… 経験ですか？」

提督 「…………… まあな」

鳳翔 「それじゃあ、今度は私に経験を積ませてもらえますか？」

提督 「ん……………」

鳳翔 「あ…………… 凄い、硬い……………」

鳳翔 「苦しそう…………… 今、自由にしてさしあげますね……………」

鳳翔 「嬉しい…………… 私で感じてくれていたんですね」

提督 「つ…………… あんなものを見せられては感じない方が難しい」

鳳翔 「ふふ、ありがとうございます。それでは……………」

提督 「…………… つ」

鳳翔「可愛いですね♪ なら今度は、これはどうです？」

鳳翔「んん……ちゆう」

提督「く……」

鳳翔「我慢……しなく、て……あむ。いいんです……よ？」

提督「いや……最初は、やはりお前が……いい」

鳳翔「大佐……」

鳳翔「分かりました……どうぞ……上がいいですか？ 後がいいですか？」

提督「上に……」

鳳翔「わかりました……。いきますよ……んっ……」ピク

鳳翔「大佐……見えますか？ 今から……ここに……貴方を……」

提督「鳳翔、来てくれ」

鳳翔「はい……！」

鳳翔「んんん……あっ、あああああっ」

鳳翔「あ……はあ……はあ。お腹の……中が……」

提督「む……くっ……」

鳳翔「あっ……あっ……あああ。大佐、もつと……もつと……！」

鳳翔「うっ…… ああああああつ。く…… んんんん！ ふあああああ！」

提督「鳳翔…… つ。もう限界が……」

鳳翔「はあ…… あっ…… はあ、わたし…… も、で…… す。おね…… が

い一緒に……！」

提督「…… いくぞっ」

鳳翔「つつ、あああああああああああああああああ」

提督「うっ、く……」

鳳翔「あ、熱い…… すご…… い…… あ…… ああ」

鳳翔「大佐…… 愛しています……」

提督「ああ。分かっている」

——数十分後

提督「鳳翔……」

鳳翔「ん…… なんですか？」

提督「まだこのままなのか？」

鳳翔「ん、もうちよつと…… 貴方を感じて…… いたいから」

提督「……そうか」

鳳翔「もう一回は流石に無理でも……この状態なら……暫く問題なさそう、です
すね」

提督「お前が気のすむままするといい」

鳳翔「ありがとうございます……」

鳳翔「大佐……」

提督「ん？」

鳳翔「もうすぐ、朝ですね」

提督「そうだな」

鳳翔「朝ご飯は……私、でいいですか？」

提督「どちらも所望させてもらおう」

第14話 「お誘い」

赤城 「おかわりです！」

提督 「お前それだけご飯だけ食べて、よく飽きないな」

赤城 「ご飯はオカズなんですよ」

提督 「味は変わらないだろ」

赤城 「ほら、塩」

提督 「……塩味のご飯をおかずに普通のご飯を……？」

赤城 「そうです」

提督 「……」

赤城 「大佐？」

提督 「赤城」

赤城 「はい？」

提督 「今度一緒に食事でもどうだ？」

赤城 「えっ？」

食堂のイス 「ガタツガタツ」

赤城「た、大佐……。そ、それってデ、デートの……。」

提督「なんだかお前を見ていたら不憫に思えてな。一度美味しい食事を食べてもらいたいと思ってしまった」

赤城「何ですかその理由!？」ガーン

提督「嫌か？」

赤城「行きます! …… ついで大佐もた、食べちやったりして……。」ポ

食堂の視線「ギロツ」

提督「そういう事を安易に言うな」

——数日後、提督執務室

赤城「お食事って提督が作ってくださいるんですか」

提督「料理が好きでな」

赤城（執務室に食卓とキッチンがある……。）

提督「というわけで、今日は俺の好物をこしらえてみた」コト

食卓『海老ピラフ：2升 ツナサラダ：5kg わかめスープ1ℓ』

赤城「わぁ♪」

提督「シンプルで悪いな」

赤城 「いいえ！ わたし、こういう方が好きですよ♪」

提督 「そうか。良かった」（量はこれでよかったみたいだ）

提督 「それでは頂こうか」

赤城 「はい♪ 頂きます」

ぱくぱく

赤城 「んー、美味しい♪」

提督 「そうか？」

赤城 「ええ。とつても」

赤城 「このピラフの海老、予想以上にプリツとしてて」

提督 「ああ、食材はなるべく新鮮な物を用意してこしらえたからな」

赤城 「え、そうなんですか？」

提督 「ああ。今日料理に使った食材の殆どはお店ではなく、市場から直接仕入れたものだ」

赤城 「う……ごめんなさい」

提督 「どうした急に」

赤城 「大佐に面倒を掛けちゃって……」

提督「気にするな。俺は料理が好きだと言ったろう。結構楽しかったぞ。それに」
赤城「？」

提督「お前とこうして二人で食事をするのも久しぶりだしな」

赤城「あ……」

提督「昔を思い出したか？」

赤城「ええ……」

提督「あの時は戦力が心許なかったからお前に苦勞を掛けてしまったな」

赤城「そんな！ わたしは楽しかったですよ？」

提督「ん？」

赤城「確かに戦力が少なくて苦勞したかもしれませんが、だけど……」

提督「なんだ？」

赤城「人が少なかった分、大佐との時間は今よりありましたから……」

提督「ああ……」

赤城「大佐」ニギ

提督「ん」

赤城「偶にはわたしの相手もして下さいよ」

提督「そうだな。機会は増やせるようにする」

赤城 「ホントですか？」 ジツ

提督 「約束をするか？」

赤城 「ん、いいです。大佐のこと信じてますから」

提督 「部下に信用されること程、指揮官としてはこれほど有り難い事は無いな」

赤城 「信用じゃ、ありません。信頼です。それと」

提督 「ん？」

赤城 「“部下”なんて、言わないで下さいよ……」

提督 「む」

赤城 「それは、大佐からしたら一番付き合いが古い部下の一人かもしれないけど……」

ど……ムス

提督 「赤城……」

赤城 「もう解つてますよね？ じゃあ、ちよつと大佐の膝に座りたいです」

提督 「膝に？ ああ……」

赤城 「そ、その…… 久しぶりに抱きながら食べさせ……」 カア

提督 「そういえばお前は空母の中で一番甘えん坊だったな」

赤城 「そ、そうでしょう。皆には内緒ですけど」

提督 「そうだったな。俺の前だけでは、だったな」

赤城「うん……それで、そっち、行っているんですか？」

提督「おいで」

赤城「大佐あ♪」パア

ギシ

赤城「重く、ないですか？ その、久しぶりだから……」

提督「いや。意外と言えば失礼だが、空母の奴は見た目より軽い奴が多いからな」

赤城「わ、私そんなに重く見えてました？」

提督「見た目からは特に。ただ、よくたっ」

赤城「そ、それは分ってます。それにわたし太らないですし」

提督「悪い。少しからかってしまった」

赤城「もう、以前の大佐からは考えられないです」

提督「機嫌を損ねたか？」

赤城「ん……いいえ。もっと……構って、いじめて……欲し……かった

り」

スル

提督「下着、見えてるぞ」

赤城 「見せているんですけど？」

提督 「…… 今はダメだ」

赤城 「今晚はいいんですか？」

提督 「…… お前がいいならな」

赤城 「っ！ ほ、本当に？」 ジッ

提督 「待たせてしまっていたか……？」

赤城 「そうですね！ でも、嬉しい…… やつと……」 ジワ

提督 「む、泣かせてしまうほどか…… すまん」

赤城 「ううん、いいんです。 やつと、思いを遂げる事ができるのなら」

提督 「…… ありがとう」

赤城 「それは…… もう、いいです」 クス

提督 「そうか」

赤城 「大佐」

提督 「ん？」

赤城 「その…… 本番の前に、キス…… 欲しいです」

提督 「ああ」

チユ

第15話 「捕鯨」

文月「今日も釣れないねー」

提督「…… そうだな」

五十鈴「よく飽きないわね」

提督「釣りをすること自体に意味があるんだ。釣れたら幸運だと思ってくらいでいい」

五十鈴「何それ……」

文月「大佐、おじいちゃんみたーい」

提督「…… 最近よく言われる」

五十鈴「あ、傷ついた？ 慰めてあげてもいいわよ♪」

文月「あつ、だめ。それ文月がするの！」

提督「二人とも暇だったら他の事をしてていいんだぞ？」

五十鈴・文月「いやよ」「いや！」

提督「そうか……」（何がしたいんだ？）

ちやぶ…… くいつ

文月「あ！ 大佐、引いてる！」グイ

提督 「ん？」

五十鈴 「え？ 本当だ！ 大佐、引いて引いて！」 グイグイ

提督 「分かった。分かったからお前たちは服を引っ張るのをやめろ。引き難い」
ググ……

提督 「これはっ…… デカいな？ なかなか…… うん？」

ぶくぶく…… ちゃぷん

大鯨 「……」

提督 「……」

五十鈴 「え？」

文月 「魚…… じゃ、ない……」

大鯨 「こ、こんにちわ……」

提督 「…… やあ」

大鯨 「あ、あの…… 私、わたし……」

五十鈴 「え？ 艦娘？」

文月 （漂流してきた駆逐艦？）

提督 「取り敢えず上がらないか？ 話は基地で聞く」

〔鎮守府、提督執務室〕

提督「潜水母艦？」

あきつ「それは変わった艦でありますね」

明石「珍しいですね」

五十鈴「貴女達に言われたくはないわよ。というか、なに何食わぬ顔でいきなりいるのよ」

文月「オンリーワンがまた増えたあ！」

提督「待て、まだ此処に所属すると決まったわけじゃない」

大鯨「え？」

提督「ん？」

大鯨「お、置いてくれないんですか……？」

五十鈴「えつ、元々此処に来る筈だったの？」

大鯨「さ、さあ……？」

明石「は？」

あきつ「一体彼女は何を言いたいのでありましよう？」

文月「うーん……謎だね！」

提督 「お前たち、少し黙っていてくれるか。状況がまだ把握できていないんだ」
4人 「……」

提督 「ん、君は大鯨、だったね？」

大鯨 「はい」

提督 「艦娘か？」

大鯨 「そうだと、思います」

提督 「さつきからいろいろと曖昧な答え方だが、何故かな？」

大鯨 「め、目覚めたら海を漂って……め、目の前に港が見えたんです……」

提督 「ふむ……」

五十鈴 「あっ」

提督 「ん？ どうした五十鈴」

五十鈴 「大佐、これ……」

提督 「今朝届いていた海難事故の軍報か。これはもう確認……ん」

文月 「どうしたの？」

明石 「大佐？」

あきつ 「き、気になります！」

○海軍、海難事故知らせ

『○月○日 深夜未明、南方海域珊瑚諸島沖において任務遂行中だった海軍の輸送艦隊が深海棲艦の奇襲に遭い、輸送艦に小破の被害を受ける』

提督「輸送艦小破……」

五十鈴「多分、その時にこの子だけ流れちゃったんじゃない？ しかも目覚める前に」

提督「……一応、確認をしてみるか」

提督「大鯨」

大鯨「は、はい」

提督「君の身元が判明するまで、一時此処で身柄を預かる事にする。構わないか？」

大鯨「あ……はい！ それは願ってもありません！ こちらこそお願いします、お

父さん！」

ピシ

提督「なに？」

五十鈴「お父さん？」

文月「え？」

明石「大佐が？」

あきつ「なんと……」

五十鈴「大佐……ちよつと訊きたい事があるんだけど」

提督「何だその眼は、俺には全く心当たりがないぞ」

文月「こ、心当たりとか言ってる時点で怪しいよ！」

明石「え、え？　そ、そうなの？　やっぱりそうなの？」

あきつ「こ、これは一大事でありあます！」

大鯨「お、お父さんを苛めないで下さい！」

提督「大鯨やめろ。火に油を注ぐな」

大鯨「いやです！　大佐は大鯨のお父さんです！」ギョ

五十鈴「大佐あ？」ギロ

文月「ふ、文月たち以外に子供なんて……ダメ！」

明石「これは詳細な調査が必要ね」

あきつ「し、衝撃の事実発覚であります！　皆に知らせるであります！」

提督「待て、やめろ」

その後、本部に確認して判明したところによると、大鯨のこの発言は事故当時に受けた衝撃が原因である可能性が濃厚との事だった。

提督と艦娘との初コミュニケーションによる心情契約が誤作動を起こし、所謂「刷り込み」に変化してしまったらしい。

「面倒だからそつちで面倒見ろ」という中将の鶴の一声で大鯨は提督の鎮守府所属になった。

あまりにも乱暴なこの中将の決定に、提督はその日から胃に痛みを感じるようになったという。

第16話 「情浴」 R-15

ガラツ

提督「？」

赤城「来ちゃいました」

提督「おい……」

赤城「お背中流しますね」

提督「……頼む」

赤城「はい♪ それでは腕から……」

ムニユウ

提督「……」

赤城「大佐、気持ち良いですか？」ゴシゴシ

提督「ああ……」

赤城「良かった♪ 今度はこっちの腕ですね……」

赤城は、洗らい易い位置に体を動かす際にワザと提督の背中に胸を擦り付けた。

くにゅ……

赤城「んっ……」

赤城「はぁ…… お待たせしました…… 次はこつちですね。ん……」
 ごしごし、ムニユムニユ、ごしごし、くにゅくにゅ……

赤城「んん…… ふう…… あ…… う」

赤城「ふふ…… こんなにしちゃって…… 触つてもいいですか？」

提督「ああ……」

ギユツ

赤城「あつ、今ピクンって動きましたね」

提督「まあ、後ろからそんな風に触られたらこれくらい反応はするだろう」

赤城「ふふ、なんか嬉しいですね。ここが気持ち良いんですよ？」

提督「つく……」

赤城「へえ…… ここはこんなに硬いの…… ふふ、なんか可愛い♪」

提督「…… つふ、赤城、もう…… いい」

赤城「あ、出そうですか？ 出しても……」

提督 「いや、その前にお前もしてやりたい」

赤城 「え？ きやつ……」

赤城 「ん、いきなりそこからですか……？」

提督 「お前だつて俺に同じ事をしただらう？」

赤城 「それはそうですけど…… やっぱり恥ずかしいものですね」

赤城 「はい。どうぞ、ご覧下さい……」

提督 「触つていいか？」

赤城 「ここを見て下さい…… 拒んでる様に見えます……？」

提督 「…… そうだな」

ちゆく

赤城 「あ……」

提督 「これは凄いな、熱い……」

赤城 「あつ、あつ…… 大佐、それ…… ああああ」

赤城 「大佐…… ここも、お願いします……」

提督 「ああ」

赤城 「んっ…… いい…… つです、大佐っあ」

提督「これはどうだ？」

赤城「くうううううう!! 大佐つ、そ……れ……はあああん」ビクツ

赤城「はあ……はあ……はあ……。た、大佐……もう……」

赤城「お願いします……最後はこれで……」

提督「分かった……。いくぞ」

赤城「つつ、くう! あつ……はあ……ああああんつ、んんん……!」

提督「……ふっ」

赤城「いつ、くう……いい……あああああつ」

提督「つく、赤城……」

赤城「だつ、だめ……です、大佐! わ、わたひ……も、もう……あああつ」

提督「赤城っ」

赤城「ああああああああああ」

赤城「あ……はあ……はあ……。大佐……ちゆ」

提督「ん……ちゆる……」

赤城「つぶはあ……はあ……。大佐……良かったです……か?」

提督「お前が思っている通りだ……」

赤城「はあ…… ふう…… ふふ、良かった♪」

ギョツ

赤城「でも、まだですよ？」

提督「分かっている。だが、まずは一旦体を洗おう」

赤城「また同じ事になりそうですけど……」

提督「その時はその時…… にならないように俺が何とかする」

赤城「ふふ、頼りにしてますね大佐…… 愛してます、ちゅ」

提督「ああ、俺もだ。そして、改めてこれからもよろしく頼む」

第17話 「娘たち」

大鯨「文月さん離れてください！ 大佐は私のお父さんなんです！」

文月「何でそうなるの！ 大佐が大鯨のお父さんなら当然文月のお父さんよ！」

不知火「大佐、これはどういう事ですか？ 不知火という娘がいながら……」

霞「ズルい……。霞も娘にしてほしい」

龍驤「ちよい待ち！ 娘にするならうちみたいに見える目は子供やけど中身はぱつつん

ぱつつんの方がええで！」

瑞鳳「何がぱつつんぱつつんよ!? 分かるわけないじゃない！ 大佐、娘にするなら

瑞鳳にして！」

日向「…… 駆逐艦に混じって龍驤まで騒いでるな」

利根「うむ、何やらあやつはここ最近フツ切れたらしいな」

鳥海「瑞鳳ちゃんもいますね……」

矢矧「あの二人に限っては駆逐艦に混じっても違和感がないというのが、何とも言えないもの悲しさを感じさせるわね」

夕張「それ、本人に絶対言っちゃだめよ？」

ギヤーギヤー

提督「……」ゲツソリ

長門「なんだ、なんだ？ ついにこの鎮守府にもベビーブーム到来か？」ニヤニヤ

提督「長門……」

長門「おつとそんな目で見つめられても困る。残念ながらこの娘らは私の子ではないからな」

扶桑「じゃ、じゃあ私の子という事で……」

山城「姉様何を!？」

金剛「ちよ、ちよつと大佐ア！ これはどういうコト!？」

衣笠「そ、そうです！ これは詳細な説明が必要です！」

提督「説明も何も俺は何もしt」

大鯨「お父さん！ 大鯨を一人ぼっちにしなさい！」ダキッ

天龍「んな!？」

龍田「あらあ？」ニコオ

提督（マズイ、これは收拾がつかん）

クイクイ

提督「ん？」

ハチ「大佐、こっちこっち」ヒソ

神通「大佐っ」ヒソ

提督「む……」

コソコソ

大鯨「あっ！ お父さんがいない！」

!?

霧島「何ですって!？」

霞「探すのよ！」

島風「島風、いつきまーす！」

蒼龍「面白そう♪ わたしも探す！」

ワーワー

く潜水艦専用整備ドッグ

ハチ「危ないところだったわね」

提督「すまない。助かった」

神通「お疲れ様です。大佐」

イムヤ「大丈夫？ 疲れてない？」

提督「ああ、大丈夫だ」

イク「皆、凄い迫力だったの。ちよつと引いたの」

ゴーヤ「ま、仕方ないと言えば仕方ないけどね」

提督「俺自身に問題があればまだ諦めも着くが、今回は完全に不足の事態だ」

まるゆ「お父さんの一言だけで…… 大佐、凄い人気ですね」

提督「…… 褒められてこれほど嬉しくないのは初めてだ」

神通「それで、これからどうします？」

提督「ほとぼりが冷めるまで何処かに身を隠したいところだが……」

イク「なら、ここに暫くここに居るといいの。このドッグつて潜水艦しか使えないから意外と人來ないの」

提督「そうなのか？」

ゴーヤ「本当よ。例外は神通さんくらい」

提督「そういえば、この中で潜水艦じゃないのは神通だけだな。一体どうして」

神通「それは…… 実は私、よくイムヤさんに水泳の練習を見てもらってまして」

提督「水泳の？」

イムヤ「そうよ。練習の後、よくここで話しやミーティングをしてたの」

提督「神通、お前泳げなかったのか」

神通「完全に泳げないというわけではありませんでしたが、苦手でした」

まるゆ「神通さんは自分が水泳の選手に選ばれる可能性も考えて、まるゆ達にコーチをお願いしてきました」

提督「なるほどな……」

神通「ふふ、おかげで今ではすっかり泳げるようになりました。もう大佐に堂々と水着を見せることができます」

提督「泳ぐ姿じゃなくて、水着か」

神通「あ……わ、私ったら」カア

ハチ「照れることはありませんよ。神通さんの水着とっても魅力的ですから」
イムヤ「そうね。神通さんって意外と着やsもご」

神通「も、もういいですから。やめてっ」アセ

提督「神通」

神通「は、はいっ」

提督「今度一緒に海に行くか？」

神通「え……」

イムヤ「わつ。デ、デートのお誘い？」

提督「まあそう思えなくもないが…… どうだ？」

神通「あ…… い、行きます！ ありがとうございます、大佐！」 パア

ゴーヤ「いいなあ……」

ハチ「ゴーヤ、空気を読むのも大切ですよ？」

神通「……」

神通「大佐？」

提督「ん？」

神通「よかったら潜水艦の子たちも……」

潜水艦ズ「！」

提督「勿論だ」

第18話 「おつかい」

大鯨「嫌です！」

イムヤ「大鯨、大佐の言う事はちゃんと聞かないとダメよ？」

ハチ「そうですよ。少しだけ離れるだけじゃないですか」

大鯨「でも、でも………こんな長い遠征、お父さんと離ればなれになるなんて………」

ゴーヤ「確かに少し長いけど、ほんのちよーつと我慢するだけよ？　ちゃんと我慢すれば帰って来た時、大佐が凄く褒めてくれるわよ？」

大鯨「う………」

イク「ほら、涙を拭くの。大鯨だって、大佐に迷惑掛けたくないでしょ？」

大鯨「うん………」ポツリ

まるゆ「なら、まるゆ達と一緒に行きましょう。大丈夫です。遠征に言ってる間はまるゆ達が寂しい思いなんてさせませんから！」

大鯨「まるゆさん………」

イムヤ「ね、行こ？」

大鯨 「…………… 分りました。行きます」

イク 「大鯨、偉いの！」

ハチ 「信じてましたよ」

ゴーヤ 「それじゃ、大佐に行ってきますの挨拶をしに行こう！」


大鯨 「……………」グシグシ

まるゆ 「大丈夫ですか？」

大鯨 「…………… うんっ」

大鯨 「大佐、大鯨、行ってきます！」

提督 「そうか。よく決断してくれたな。偉いぞ」ポン

大鯨 「ん……………」

イク 「……………」(ちよーつと羨ましいかなあ)

提督 「大鯨、頑張れるな？」

大鯨 「…………… はい！」キリッ

提督 「そうか、信じてるぞ。イムヤ」

イムヤ 「はいっ」

提督 「少し長くなるが、大鯨の事を頼む」

イムヤ「任せて！　ね？　皆！」

ハチ「全く問題ありません。お任せください」

まるゆ「まるゆ、こんなに燃えるのは生まれて初めてです！」

ゴーヤ「期待しててくださいでち！」

イク「イク達に任せるの！」

提督「よし……。それではこれより遠征を開始せよ。皆、頼むぞ」

遠征メンバー「了解！」

提督「……」

木曾「……　巢立ちの儀のつもりか？」

提督「半分はそうだ」

木曾「ま、確かにこのまま『お父さん』でいるわけにもいかないしな」ニヤ

提督「……　お前がそれを言うとは似合わないな」

木曾「え？」

提督「お前の場合はやっぱり『親父』と呼ぶ方が似合ってる気がするな」

木曾「……　そ、そんなに俺は男っぽいか……？　？」

提督「今の口調を自分で聞いてどう思う？」

木曾「う……」

木曾「あ、あのよ…… いや、さ？」

提督「無理するな。なんだ？」

木曾「や、やっぱり大佐は、お、男っぽい性格は嫌い…… か？」

提督「お前はお前だ、もつと自分に自信を持って。そのままの方がお前らしくて魅力的だ」

木曾「み、魅力的って……」カア

提督「木曾」

木曾「な、なんだ？」

提督「敢えて言わせてもらうが、可愛いぞ？」

木曾「なっ」カアア

提督「今のお前は女らしいな。木曾、やはりそんなに気にする必要はない。多少男勝りでも、お前は間違いなく乙女だ」

木曾「お、乙女って……」カア

提督「すまん。あまりにもズケズケと言い過ぎたか」

木曾「あ、いや。大丈夫だ…… うん、大丈夫」

提督「ん？」

木曾「あ、今のつ。お、女らしい言い方だっただろ？」
提督「……………ふつ、そうだな」

武蔵「むむ……………大佐の奴、とんだ女たらしではないか」

彼女「……………大鯨つて」

武蔵「ん？」

彼女「大げ……………うちの龍鳳もあんな感じだったかしら」

武蔵「いや、私達の所の龍鳳はあんなに甘えん坊じゃないぞ。もつと真面目で頼りになる奴だ。私の事もお姉様、と呼んで本当にかわ——」

彼女「そう……………よね（無視）いや、なんかここにいと皆、あいつに甘い気がしちやつてね。いや、あいつが甘いのかな？」

武蔵「む……………少なくともお前は普段より気が緩んでる気がするぞ」

彼女「そう？」

武蔵「ああ」

彼女「仕方ない、認めましょうつ」クス

武蔵「……………なあ」

彼女「ん？」

武蔵「…… お前は、やっぱりあいつが好きなのか？」

彼女「ま、一目惚れだからね」

武蔵「そ、そうか……」

彼女「武蔵」

武蔵「ん？」ムス

彼女「あなたと一緒によ」ニコ

武蔵「あ……。ず、ズルいぞ」

彼女「そうね。一目惚れってズルいわよね……」

武蔵「…… そうかもな。仕方ない」

彼女「うん、仕方ないわね。ふふ」

武蔵「全く、いつまで経っても適わないな」

彼女「ま、一応提督だからね」

第19話 「予測外」

綾波 「な、なんで……」ガクツ

龍驤 「あややん、あんたは悪くない。悪いのはこの世の中なんや」ポン

響 「元気出して」

綾波 「だって、改二ですよ!？」期待しますよね、普通!」

響 「綾な…… あややん落ち着いて。ここにいる人は全員それ経験してるから」

龍驤 「うんうん。誰でも最初はそうやって期待するもんや。あややんの気持ちは痛い程よくわかるぞ」

綾波 「皆あ……」グス

龍驤 「取り敢えず、涙拭きな。はい」

綾波 「う……ぐす、ありが……とう」

響 「飴食べる?」

龍驤 「世の中つちゆうのはホンマに残酷なやつちやな……」

提督 「残酷なのは俺の仕事を邪魔し続けてるお前たちだ」

響 「大佐、おはよう」

提督「おはよう。朝から元気だな。秘書艦なんだから仕事を手伝ってもいいんだぞ？」

響「今はダメ…… あややんを慰めないと……」プイ

提督「…… 仕事をしたくないだけじゃないのか？」

響「…… あややん大丈夫？」

提督・龍驤（逃げたな）

綾波（私をダシに使わないで！）

提督「取り敢えず、何をそんなに落ち込んでいるんだ」

綾波「そ、それは……」カア

龍驤「大佐」

提督「なんだ」

龍驤「うちと響ん、上位改造受けたやろ？」

提督「ああ、そうだな」

響「綾波も受けたんだよ？」

提督「知っている。許可を出したのは俺だからな」

龍驤「なら、そういう事や」

提督「どういう事だ」

響「……………大佐の鈍感」

提督「む……………」

響「……………」ジツ

提督「……………」胸か？」

綾波「っ！」ブアッ

龍驤「あややん!!」

響「あややん！」

綾波「大佐にまで、大佐にまで判るほど変わってないなんて……………」！」メソメソ

龍驤「気にすることは無い！大佐は、ロリもいけるで！」

提督「おい」

響「大佐、望月との約束」ズイ

提督「それは……………」

響「やくそく」ズズイ

提督「まあ……………」それはそれとして、改造に豊胸を期待すること自体がそもそもおか

しい事なんだぞ？」

龍驤「なんや！夢を見るのもあかん、ちゆうんか!？」

響「大佐の鬼。早くロリコン認めて」クイクイ

提督「響、お前は少し黙っててくれ。頭痛がしてきた」

綾波「大佐……………大佐はおっきなお胸じゃないと駄目なですかあ……………？」グス

提督「綾波……………」

響（あややん、ナイスタイミング）b

龍驤（ようやったでえ、あややん！）

綾波「綾波の、綾波のちっちゃなお胸じゃダメですか……………？」

提督「俺は……………以前、胸に大きさは関係ないと言った」

綾波「じゃあ……………！」ペア

龍驤（お、生きる希望が）

提督「だが、やはり見た目だけでも子供なn」

グイ

響「約束……………」ジロ

提督「……………見た目が幼くても、それはそれで愛らしいから有り、かもな……………」

綾波「大佐あ!!」ダキッ

提督「つと、いきなりは……………」

龍驤「響ん、うちらもいくで！」

響「了解。響ん、これより突貫する」

龍驤・響「大佐！」ダキッ

提督「ぐっ……分かった。分かったから仕事を……」

チヨンチヨン

提督「ん？」

Z1「助けてあげようか？」

Z3「仕事も手伝ってあげてもいいわよ？」

提督「……何が望みだ」（嫌な予感しかしない）

Z1「ロリコンに」

Z3「なりなさい」

提督「……」（胃が……）ギリギリ

その後、提督は上位改造を受けて改二になった艦のみを、恋愛の対象にする条件で交渉を試みたが、珍しく不機嫌な叢雲と初春の古参二人に却下の一言で一蹴された。

結局、以前望月との約束で書かされた幼女愛好誓約書が依然として強い力を發揮し、提督は自他ともに認める幼女も愛好する提督となった。

ただ、最後の悪あがきなのか、提督は誓約を認める際、自分を決してロリコンと叫ばない事という条件を付けたた。

子供じみた抵抗にも思えるが、これはこれで彼の男として、提督としての矜持だった

の
か
も
し
れ
な
い
。

第20話 「勘違い」

由良「大佐、潜水艦隊の戦果報告です」

提督「ん、ふむ……まるゆが著しいな」

由良「そうですね。単艦で駆逐艦を2隻も撃破してますから」

提督「ああ。まるゆも自分の戦果に驚いていたな」

由良「やっぱり艦首魚雷の性能凄いですね」

提督「別に装備のお陰だけじゃない。まるゆは今までずっと頑張ってきたからな。それまでに培った経験も活かしているんだろう」

由良「そうですね。わたしだったら装備の性能だけ褒めて、まるゆちゃんの事を疎かに……」

提督「誰だって同じ反応をするだろう。まるゆの努力をちゃんと認めさえすればいい」

由良「はい。気をつけます」

提督「よし、それじゃあ食事にするか。由良、悪いが持ってきてくれるか？ 今日はこちらで書類を確認しながら摂りたい」

由良「分かりました。ちょっと待ってて下さいね」
バタン

コンコン

提督「ん？」（早い。由良じゃないな）

ガチャ

鈴谷「失礼するじゃん、大佐ー」

提督「入室の許可を待て」

鈴谷「えー、いーじゃん。大佐とわたしの仲じゃん？」

提督「その前に上司と部下だ。規律を守れ」

鈴谷「…… はいはい。分かりましたよー」ドサツ

提督「…… おい」

鈴谷「ん、なに？」

提督「胡座をかくな」

鈴谷「あ、パンツ？ 別にいいじゃん減るもんじゃないし」

提督「そういう問題じゃない。節度を……」

鈴谷 「じゃ、規律を緩くしてー」

提督 「子供みたいなこと言うんじゃない」

鈴谷 「鈴谷子供だしー、女子高生（風）だしー、言っても別に悪くないじゃん」ピラ
ピラ

提督 「捲るな」

鈴谷 「じゃ、ノーパン」

由良 「痴女か!!」

パン

鈴谷 「あ」

由良 「鈴谷、あなたねえ」ワナワナ

鈴谷 「あー、思ったより早く戻ってきちやったかあ。大佐ーまたねー」フリフリ
由良 「こら、待ちなさい!」

鈴谷 「大佐は緑色が好きなんだよ?」ヒソ

由良 「は?」

鈴谷 「由良っち今何色のパンツ履いてる?」ヒソ

由良 「なっ」ボツ

鈴谷 「にひひ。頑張ってねえー」

由良 「あ、ちよつと」

バタン

由良 「……」

提督 「どうした？ 鈴谷が何か言ったか？」

由良 「え？ ひいや、なっ何も!？」

提督 「何を動揺している……」

由良 「な、何でもありません。それよりお食事持ってきました」

提督 「ん、ああ。ありがとう」

提督 「……」モグモグ

由良 「……」チラッ

提督 「……」モグモグ

由良 「……」チラチラッ

提督 「……」なあ

由良「は、はい？」

提督「俺に何か言いたい事でもあるのか？」

由良「あ、いえ……………」

提督「本当にそうか？」

由良「う……………あの」

提督「うん？」

由良「大佐って緑色好き、ですか？」

提督「ん？ ああ、好きだが」(緑……………緑黄色、キャベツの事か?)

由良「あ、青とどっちが好きですか？」

提督「青？ ああ、比較するなら緑だな」(焼き茄子もいいが、こう暑いとさっぱりして冷たいキャベツだな)

由良「そ、そうなんだ」(よしっ)

由良「た、大佐。という事は鈴谷よりわたしの方がいいって事ですよね」

提督「由良？ まあ……………そうだな。お前だな」(落ち着いてゆつくり食事できるしな)

由良「あ……………そ、そうですか」ポ

提督「何故照れる」

由良「い、いえ」

提督「? ふう…… ぐちそうさま」

由良（食べ終わった。やるなら今ね）

由良「ん……」

提督「ずず……」

由良（お茶を飲んで気付いてない!）ガーン

由良「た、大佐」（は、恥ずかしいけどもう少し足を……）ググ

提督「ん?」

由良（今度は書類見てる!）ガガーン

由良「きよ、今日は良い天気ですね」（もうこれじゃ丸見えじゃない!）ガバ

提督「そうだな。相変わらず暑いが、この景色は嫌いじゃない」

由良（景色見てる!?!）グワーン

由良「う、うう……」プルプル

由良（も、もうこうなったら強引に注意を引くしか）

提督「ん?」

由良「大佐!」ドン

提督「つ、どうした急に」

由良（か、顔に注意が……！）ジワア

提督「おい、お前なんで泣いて……」

由良「パ……」

提督「なに？」

由良「パンツ……」

提督「は？」

由良「パンツ見てくださあぁあぁい。うわーん」ブワア

提督「由良、大丈夫か？ 落ち着け」

由良「うええええええええん……わたし痴女だぁぁぁ」

提督「……」（一体何が……）

青葉「こ、これは大スクープです！ た、大佐が由良さんにセクハラ!!」

鈴谷「あつ、それ違うから」ピラ

青葉「ひゃあ!!? な、何するんですか!!」

鈴谷「お、青葉つちも緑かー」

青葉「え？」

鈴谷「ねえいいこと教えてあげようか？」ニヤ

第21話 「快男児」

くとある鎮守府

「敵機来襲！ 敵機来襲！」

丁督 「おいでなすったか！ 大淀！ 敵は何だ？」

大淀 「深海棲艦、これは…… レ級です！ レ級率いる深海棲艦隊です！」

丁督 「そうか、危険レベルは赤信号だな！ ははっ！」

長門 「何で嬉しそうな顔をする」

丁督 「当たり前だろ！ ここでそいつを叩けばまた一步祖国の平和に繋がるんだ！」

金剛 「テートクのそういうところ嫌いじゃないケド、偶には cool になつてほ

しいデス」

丁督 「俺は常にクールだ。ちょっと頭に血が上り易いけどな！」

日向 「いや、それ駄目だろ」

丁督 「相変わらずよく口答えしてきやがる。まあ、それだけの實力を持つてるからい

いけどな。加賀！ 準備はいいか？」

加賀 「いつでも。敵がレ級でしようがなんでしようが、有象無象問わず粉碎してみせ

ます」

丁督「翔鶴！」

翔鶴「右に同じく。提督の前に立ち塞がる敵は、全てこの翔鶴が葬って差し上げます」

丁督「大井は？」

大井「提督の為ならわたし、ヤっちゃいます♪」

丁督「長門、金剛、日向は？」

長門「愚問だ。私の砲から逃げられるものはおらんよ。必ず全部潰してみせる」

金剛「今日のワタシ 2ウイークス もお預けくらつてますカラネ！ 欲求不満は敵

の *destroy* で解消させて貰うワ！」

日向「私は1か月だ……。提督、今日は相手をしてくれるんだろうな？」

丁督「ああ、寝かせない」

日向「ん……皆には悪いが、今日の武功第一は私だ」

丁督「よし！ お前たち気合は十分だな！ 龍田、青葉、雷！」

龍田「はあい。ご主人様」

青葉「はっ、ここに！」

雷「待っています！」

丁督「残りの艦隊の指揮を執って鎮守府の防衛に当たれ。大淀は此処で総指揮だ」

大淀「提督は？ まさか……」

丁督「ああ。俺は高速艇に乗って第一艦隊を最前線で指揮してくる！」

大淀「やつぱり……」

丁督「止めるなよ？」

大淀「今更止めませんよ。信じてますら、提督も長門さん達も」

丁督「そうだな。おい、お前たち！ 守れよ？」

長門「偉そうに…… まあ、余裕だな」

金剛「面白くなってきたネ！」

日向「エサが目の前にあった方が燃えるな」

大井「少しでも敵が提督に砲を向けたら…… 沈めてやる……」

加賀「死ぬときは一緒ですか。いいですね。死にませんし、死なせませんが」

翔鶴「冥府への花道を敵の方にプレゼントしてさしげます」

丁督「よし、それじゃ行くぞ。出撃！」

く鎮守府近海

ザパアツ

レ級「ああっ！ 君、この前邪魔しに来た艦隊でしょ!? 覚えてるよ！」

丁督「ああ？ この前？ ああ、随分前の基地の襲撃の…… お前か！」
夕級「なんで提督も一緒なのよ……」

丁督「うるせーよ！ こっちの方がやり易いんだ！」

ル級「う…… 私、ああいうタイプ苦手だなあ……」

ヲ級「殺しても死なないタイプね」

加賀「死なせませんよ。覚悟はいいですか？」

レ級「今後の為に君たちは潰させてもらうよ！」

大井「それはこっちのセリフよ。水底に沈めてやるわ！」

丁督「さて、もういいだろ。総員、攻撃開始！」

レ級「負けないよ！」

金剛「Oh……なんてコト。あれだけ撃って、小破止まりなんて」

翔鶴「燃料と弾薬ちよつと心許なくなってきました……」

長門「こつちもダメージ自体は大したことは無いが……」

日向「戦るのなら一瞬で決着をつけなくちゃな、どうする？ 提督」

丁督「……」

レ級「強いなあ…………。中々捕捉できない」

ル級「疲れちやった…………。シャワー浴びたい…………。」

ヲ級「私も…………。」

タ級「レ級、もう今日はいいいんじやない？」

レ級「…………。よしっ」

丁督「む、動くか」

レ級「撤退！」

丁督「逃げるか！」

レ級「撤退も立派な選択だもん！ 選択と決断は勇氣だよ！」

丁督「…………。なに」

レ級「じゃーねー！」

ル級「もう暫くは此処には来たくないわね」

ヲ級「同感」

タ級「はいはい。ぶーぶー言わないの。行くわよ」

丁督「…………。」

長門「どうした？ 追わないのか？」

丁督「あいつ」

長門「ん？」

丁督「選択と決断は勇気だと言った」

大井「それが？」

丁督「いや、偶然だと思いが、親父………俺が世話になった人がよく言ってたセリフでな」

金剛「フアーザー？ ああ、中将ネ」

丁督「まあいい。俺達も帰るぞ」

日向「提督？」 スス

丁督「おい、こんなところかよ。さわ………握るな」

日向「いいじゃないかずっと待ってたんだ。ほらもうこんなに硬く………」 ニギニギ

金剛「ああつ！ 日向、ズルいヨ！」

加賀「仕方ありませんね。皆さんには戦闘が長引いたと言いましよう」 スルツ

長門「加賀、お前もか」

大井「私は提督となら何処でもいいわ」ヌギツ

長門「やれやれ6Pか」スルツ

翔鶴「いいえ。7Pです」パスッ

丁督「お前たち……ま、体は海で洗ったらいいか。よし、来い！ 皆相手をしてやる！」

艦娘一同「てーとく♪」

く大佐の鎮守府

提督「む、また襲撃か。ん？ これは……」

彼女「なになに？ どうしたの？」ヌツ

潮「ひっ」

提督「いきなり後ろから現れるな」

彼女「驚いた？」

提督「潮がな」

潮「あ、あ……その……」

彼女「あ、ごめんね。コーヒを持って来たの。あなたも飲む？」

潮「あ。ありがとうございます」

彼女「いいのよ」ナデナデ

潮「あう……ポオ」

提督（無意識なんだろうが、籠絡してるなあれ……）

彼女「で、どうかしたの？」

提督「ん、いや。この軍報を見てみる」

彼女「んー？　また襲撃……へえ、ほぼ被害なしで撃退、やるじゃない。あ……」

提督「あいつ、暫く見ないと思つてたらこんな最前線にいたのか」

彼女「彼らしいといつたららしいけど、なんでまだ中佐なのよ」

提督「人の事言えないが、うちとは違った事情なんだろうな。予想は着くが」

彼女「そうね。大方資材の消費のし過ぎが原因でしょうね。この前なんか本部に乗り込んだらしいわ」

提督「本当か？」

彼女「ええ。中将は笑つていたらしいけど、大和が顔を真っ赤にして怒つてたつて」

提督「変わつてないな……」

彼女「会いたい？」

提督「暫く会つてないからな」

彼女「ちよつと、それは私も一緒よ？」

提督「君は暫くここに居るだろ」

彼女「……どうせ把握してない事だと思つてたけど」

提督 「ん？」
彼女 「明日、私帰るのよ」

第22話 「公認」 R—15

彼女「待った？」

提督「いや」

彼女「そ」

提督「それじゃあ、行こうか？」スツ

彼女「ん♪」ギユツ

提督「こうやって二人で歩くのは久しぶりだな」

彼女「そうね。あなた見てると時の流れを感じるわ」

提督「それは俺への当て付けか。確かに君は変わってないが」

彼女「別にさ、あなた老けてるってことは……あまりヤツてないって事でしょ？」

提督「……最近はそうでもない気がするが、それでもまだ見た目がそんなに変わってないところを見ると、頻繁ではないらしいな」

彼女「ね、気にしてくれたの？」

提督「悪いが、ここに来てから俺の倫理観は割とガタガタだ。事後にいつも軽く鬱に

なったりする事もあるが」

彼女「それやっただ娘に言っていないでしょうね？」

提督「流石に言わないし、俺も日々後悔しない様に心を鍛えているつもりだ」

彼女「相変わらず硬いわねえ。もっと大らかに受け入れてあげなさいよ」

提督「行為の途中ではそういう気持ちにもなるがな。途中から思い始めてもなかなか

こう……いや、よそう」

彼女「？」

提督「今は、君といえるからな。あまり他の女性の事を話すのは君に対して悪い」

彼女「……気、大分使えるようになったのね」

提督「見た目通り経験は積んでるからな」

彼女「もう、そこでそう言う？」

提督「はは、悪い」

彼女「でも、寄りを戻してくれ私は本当に嬉しかったよ」

提督「……それは俺もだ。お蔭で過去の自分から反省する事ができた」

彼女「うん。それは私も」

提督「そういえば、前にコーヒーを淹れてきてくれたな。美味しかった」

彼女「コーヒー一杯で大げさよ」

提督「俺はそうは思わない。あれはインスタントコーヒーだろ？ 粉末の配分だけであそこまで味を出せるとは正直驚いた」

彼女「そ、そう……」

提督「コーヒー一杯にあそこまで…… 本当に君は才能豊かだな。俺には勿体ないくらいだ」

彼女「やめてよ。私はあなたがいいの」

提督「ああ。ありがとう」

彼女「どこかに寄ったりはしないのね。歩いてるだけ？」

提督「俺の我儘で申し訳ないが、今日が最後の日だと思おうと君との時間が惜しくかんじてね」

彼女「…… あなたたって昔からスケコマシな台詞を天然で言うわよね。嬉しいからいいけど」

提督「スケコマ……」

彼女「あ、気にしないでね？ あなたの場合は本心だって解ってるから」

提督「ああ……」ズーン

彼女（気にし過ぎ！）

く鎮守府正面入り口前

彼女「着いたわね」

提督「ああ。なんだかあつという間だった気がする」

彼女「ふふ、楽しかった？」

提督「久しぶりに充実した気分になれた」

彼女「……部屋、来るでしょ？」

提督「武蔵は？」

彼女「その事で私からお願いがあるの」

提督「なんだ？」

彼女「武蔵も……一緒にして欲しい。あの子だけ別にはしたくないの」

提督「……武蔵本人の気持ちはいいのか？」

彼女「別にあの子、男が嫌いってわけじゃないから。それに」

提督「？」

彼女「あなたなら、きっと大丈夫よ」

く彼女の部屋

武蔵「やはり来たか」

提督「お邪魔する」

彼女「武蔵、いいわね？」

武蔵「お前が好きなら仕方ない。私もお前が好きだからな」パイ

彼女「ふふ、ありがと」ポフ

武蔵「う、うむ……」

彼女「武蔵、私と大佐の服を脱がせて。私は彼とキスをするわ」

武蔵「わかった。どこから脱がしても？」

彼女「好きになさい」

提督「いや、俺は脱がしてもらわなくてm」

チュ

彼女「ここに来て何度目のキスからしら。数えるほどしかしえないから、もつ

と……ね？」

提督「……ああ」

彼女「ちゅ……んちゅ……れる、はあ……」

武蔵「脱がすぞ」

彼女「ん…… あっ」（いきなり下を全部……）

武蔵「次は、大佐だ」

提督「ちゅ…… つぶ、なに」

ぎゅっ

提督「んくっ、武蔵……」

武蔵「ふふ、熱いな。そして硬い。まだ何もしてないのにもうこんなに…… しろ」

彼女「あ、ちよつと武蔵なにを」

武蔵「ん…… しろ、なんだ？ 大佐のコレを独り占めされて悔しいのか？」ニヤ

彼女「それは……」

武蔵「ちゆるっ。んはっ…… いいんだぞ？ 譲つても」

提督「ん、ふっ…… 武蔵」ポン

武蔵「んふあ、ふあいふあ？」

提督「武蔵、無理に気丈にふるまうな。お前は愛したいように彼女を愛するといい。

そして俺は、その邪魔にならない様に二人を愛させてもらう」

武蔵「つぶは…… 大佐」

提督「さあ」

提督「武蔵を頼む。俺は君を……………」

彼女「ふふ、了解」

彼女「ね、彼優しいでしょ？」

武蔵「うん。私はちよつと焦っていた。自分が恥ずかしい……………」

彼女「可愛いわよ武蔵。それじゃ……………」

武蔵「あつ、それ……………。ああつ」

彼女「あつ、んむ、ちゆるつ。いい…………… 武蔵つ」

もにゆ

武蔵・彼女「ああつ」

提督「まだだ、いくぞ」
にゆるつ

彼女「んんつ、くあつ」

彼女「あ、あつ…………… ふと…………… んんん！」

武蔵「はあ…………… はあ…………… ねえ、もう……………」

彼女「あ…………… 武蔵？」

提督「武蔵、いいか？」

武蔵「ああ……だが、次は私に頼むぞ？」

提督「ああ。分かった。いくぞ」

彼女「あああああああつ。これ、本当にひさし、ぶ……っり♪」

提督「武蔵、次はお前だ」

武蔵「う、あああああつ。す、凄いつ！ はあ、はあ……これが男、か」

提督「つぶ、もうキツイな。最後は二人一緒にイケつ」

彼女「え、ちよつとこれ、激し……あああああ！」

武蔵「な、なんだこれは!? もう耐えれ……んんん、ああつ」

提督「ふう……はあ……はあ」

彼女「んつ、ちよつと重い……やつ、あん。ふふ」

武蔵「ん……なんとも言えない心地よい重さだな」

提督「こんなに……張り切ったのは初めてだ」

彼女「この感じ……久しぶりすぎて癖になりそう」

武蔵「ああ。私もまだ足りない」

武蔵「大佐、すまないが今度は中に……」

提督「今日は気が済むまで相手をしてやる事を決めたんだ。二人は遠慮するなよ」
グッ

彼女「あああああつ、ねえ……今、更だけど……本当に、好きよ？」

武蔵「ああ、大佐なら。こいつを任せても抵抗はない。私がいなるときに、求められ
たら……頼むぞ？」

提督「……なるべく善処はしよう」

第23話 「出立」

彼女「それじゃそろそろ行くわね」

提督「ああ、元気でな」

彼女「あなたも。あまり無理してはだめよ？」

提督「分かっている」

武蔵「大佐、またな。短い間だったが色々楽しかった」

提督「武蔵、あつちにいる親父殿や大和にもよろしくな」

武蔵「承った。必ず伝える」

天龍「おい漣、武蔵ってあんなだったか？」コシヨ

漣「いいえ。少なくとも漣が知っている武蔵さんはもつとツンツンでした」コシヨ

天龍「大佐だと思うか？」コシヨ

漣「多分」コシヨ

提督「おい、二人とも何をこそこそしている。別れの挨拶くらいしつかりしないか」

天竜「つと、悪い。あー……えつと、しよ、少将殿もお元気で？」

武蔵「なんで疑問形なんだ。あと、上官に対しては敬語を使え」ギロ

天龍「申し訳ありませんでした！」（あれ？ やっぱりいつも通り？）

漣「申し訳ありませんでした！」（気のせい？）

彼女「武蔵、それくらいでいいわよ。礼儀を教えるのはいいけど、あまり高圧的にしてもダメよ？」

武蔵「む…… すまない。二人とも悪かったな」

天龍「へ？ ああいや、べ、別に気にしてないぜですから！」

漣「天龍さん言葉が…… お心遣いありがとうございます！」

彼女「ふふ…… 大佐、いい娘に育ててるじゃない」

提督「俺がこいつらに恵まれていただけだ。運が良かった」

彼女「そう？ まあいいわ。あ、本当にそろそろ行かないと。武蔵」

武蔵「うむ」

武蔵は港から海の上に浮上すると、白く光って戦艦の姿へと変わった。

天龍「ほえー、いつ見てもでつけーなあ」

漣「カッコいいですっ」

彼女「当然よ。私の自慢の娘だからね」

提督「いいコンビだ」

彼女「ふふ、ありがとう。あ、大佐」

提督「ん？」

チユ

天竜・漣「」

彼女「……………うん。これでいい。じゃ、またね」

ブオオオオオオ

提督「……………」

天龍「なあ、大佐」

提督「なんだ」

天龍「今の、何？」

提督「なに、とは？」

漣「キスの事です！」

提督「ああ、仲直りをしたからな」

天龍「仲直りしたらキスをするのか!？」

漣「それって本当ですか!？」

提督「何を言っているんだお前達は」

天龍「……………よし、俺は大佐に宣戦を布告するぜえ」

提督「布告してどうする。戦争でもする気が」

天龍「喧嘩だ！ んでもって仲直りしてキスだ！」

漣・提督「……………」

漣「その発想はなかったです！」

提督「いや、違うだろ。明らかに思考がおかしいと思わないのか。故意に喧嘩をしては、仲直りも何もあつたものじゃないだろ」

天龍「えつ、そ、そうなのか？」

提督「…………… 今度龍田に教えて貰え」

天龍「龍田に喧嘩を売って事か。解つたぜ！」

提督「……………」（いい薬になりそうだから黙っておこう）

漣（え、止めないの？）

天龍「あー、でもいいなあ。俺も彼氏欲しいなあ」チラ

提督「那智なんかどうだ？ 性格も凛々しくて、お前の事も守ってくれそうだぞ」

天龍「那智は女じゃねーか！」

提督「一応それに気づくくらいには頭は大丈夫だったか」

漣（ひどい……………。でも、天龍さんなら仕方ない気もする）

提督「漣」

漣「え？ あ、はい。なんでしよう？」

提督「お前も彼氏が欲しいのか？」

漣「ええ!?! な、なんですか急に!?!」

提督「いや、天龍を見てたら何となくな」

天龍「それってどういう意味だよ!?!」

提督「(無視)で、どうなんだ？ 答え難いなら別にいいが」

漣「あ、欲しいかも……です」

提督「そうか、判った。天龍、手を」

天龍「え？ な、なんだよ……ほら」サツ

提督「漣も、いいか？」

漣「あ、はい。お願いします！」

提督「うむ」

ギユツ

天龍・漣「え？」

提督「おめでとう。カップル成立だな」

天龍「だから俺は女で、漣も女だろうが！」

漣「い、いくら男っぽい天龍さんでも漣は、ちゃんと男の人がいいです！」

天竜「誰が男っぽいだ！」

漣「いつもじゃないですか!？」

提督「こら、二人ともやめないか」

天竜「でも大佐、漣が……」

漣「何言ってるんですか！ もとはと言えば天竜さんが男っぽいのが……」

提督「まあ、そこまですておけ。ほら、天竜仲直りのキスだ」

天竜・漣「え？」

提督「ん？ 天竜は喧嘩をして仲直りのキスをしたいんじゃないのか？」

天竜「大佐…… 最初から俺を躲す為に嵌めたな？」

漣「あざとい！ あざといです大佐！」

提督「漣には悪いが、天竜を見ていると何となくな」

漣「あ、それ解ります」

天竜「なんでだよ!？」

ギャーギャー

それは、少将との別れを惜しむ気持ちを誤魔化す為だったのか、提督の狙いは見事的中し、その帰り道は基地に着くまでずっと賑やかだった。

第24話 「ゲーム2」

提督「王手」パチ

多摩「にや!？」

多摩「そうはいかないにや! 多聞丸、ここは一時撤退にや!」

提督「ん、王手。詰み、だな。これは」パチ

多摩「にやあああ! 多聞丸があ!!」

飛龍「ちよつと多摩、何してくれてるのよ! 多聞丸があ!!」

提督「…… 駒に名前を付けるなよ。後、なんで山口司令官の名前を付ける。飛龍が

さつきから怒り狂ってるぞ」

飛龍「ちよつと、多摩代りなさい! 多聞丸はまだ敗けていないわ! 実は死んだ振

りをふりをして起死回生を狙っていたのよ!」

提督「なんだそれは」

飛龍「ま・だ・ま・け・て・な・い・ん・で・す!!」

多摩「おお、飛龍が燃えているにや…… まるで山火事のようにや」

提督「まあいいが、将棋でいいな?」

飛龍「…… オセロにしましょう！ これなら白黒ハッキリ着きますし！」

多摩「あ、山火事だと思つたら小火だったみたいにや」

提督「いいだろう。オセロだな」

パタパタパタ

飛龍「いやあああああ！」

提督「もう逆転の余地がないな」

多摩「器用にや。どうやったらかこまで綺麗に白一色になるにや……」

提督「角を取ろうと躍起になり過ぎたな。お蔭で中は荒らし放題だったぞ」

飛龍「うわああああん。多聞丸うう!!」

提督「山口司令官はお前のなんなんだ…… 見てるとペットが死んだのを悲しんでいるように見えるぞ」

飛龍「多聞丸は多聞丸なんです！」

長波「ちよつと代つてくれますか。仇はこの長波が取つてみせますから」

飛龍「な、長波……」ウルウル

長波「いいですよね？ 大佐」

提督「ああ」

長波 「いくわよ！ 頼三！」

提督 「お前もか。オセロでいいか？」

長波 「…… 紙飛行機で勝負よ！」

多摩 「最早、競技ですらなくなってきた気がするにや」

提督 「別に構わないが、長距離飛ばした方が勝ちか？」

長波 「それでいいわ。負けないわよ！」

スイー……

長波 「ら、頼三!!」

飛龍 「おお、大佐凄いですね。よくあんなに飛ばします」

多摩 「対する長波は序盤から急降下しちゃったにや」

提督 「船乗りを飛ばしたのが間違いだったんじゃないか？」

長波 「何よそれ！ 慰めているつもり!？」

飛龍 「悔し泣きはやめなさいよ。可愛いけどさ」

多摩 「自分が愛してた者が負けちゃうのは悲しものにや。多摩も大事にとっておいた

煮干しを間違つて海に落としちゃった時にやんか……」

飛龍 「ちよつと！ 多聞丸と煮干しを一緒にしないでよ！」

長波「ら、頼三が煮干しと同じだって言うの!？」

多摩「あ、地雷踏んだかにや? ばいにやー」ピュー

飛龍「あ、ちよつと待ちなさいよ! くう、こんな時に限って艦載機が……!」

提督「基地の中で何をする気だ馬鹿者」

長波「飛龍さんあっちに行つたわ! 追いかけて直接爆撃よ!!」

飛龍「了解よ!!」

飛龍・長波「待てー!!」

提督「……さて、片づけるか」

トントン

提督「ん?」

隼鷹「なんか勝負してるみたいじゃないですか。どうです? 飲み比べでも?」

提督「昼間からそんな事するわけないだろ。夜にしろ。付き合つてやるから」

隼鷹「やっつい♪」

第25話 「堂々」 R-15

『あ、あ…… 提督、いい！ ああっ』

『まだ果てるなよ。まだまだこれからだ！』

『うああ！ は、激し…… あああああ！』

金剛「Oh……」

翔鶴「盗み聞きはよくないですよ」

金剛「これだけ大きな声でやってるんだカラ、盗み聞きもなにもないワヨ」

翔鶴「まあ、そうですけど……」

『提督、提督っ、ちゅじゅる…… つぶは、うあああ！』

『もつと鳴け、思う存分乱れていいぞ！』

『提督、ダメだ…… 菊座は…… んん…… つは、いい…… 気持ち、あつ』

翔鶴「長門さん？」

金剛「多分そうネ。ああ、いいなア。長門」

翔鶴「貴女は3日前に提督に相手をしてもらったじゃないですか」

金剛「そ・れ・で・も！　こう突きつけられたら……ネエ？」ピラ

翔鶴「きやつ」

金剛「フフ、翔鶴だつて興奮してるじゃナイ？」

翔鶴「私はもう3週間も、ですから……」

金剛「相手してあげようか？」

翔鶴「うーん……魅力的な提案ですけど、遠慮しておきます。焦らされた分、つて言うじゃないですか」

金剛「それわカル！　ワタシも3日前は1ウィークぶりだったからネ。夜が明けるまでヤつちやつたワ」

翔鶴「一週間も待てないんですか……とんだビッチですね」

金剛「Oh　翔鶴の辛辣な発言はゾクゾクして素敵ヨ♪」

翔鶴「もうそんな事言つて……あの、金剛さん」

金剛「um？」

翔鶴「私も濡れてますけど、金剛さんはもう履いてる意味ないくらいの状態になりますよ」

金剛「えっ」

グツシヨリ

金剛「Wow お漏らししちゃったみたいネ」

翔鶴「下着、早く洗わないと使えませんよ？」

金剛「hmm…… これからはノーパンで行こうかシラ」

翔鶴「提督は興奮するかもしれませんが、別にそういう嗜好を持っているわけではな
ありませんからね。偶にならいいのでは？」

金剛「そうネ。履いてるからこそ、汚す事も、半脱ぎもできるからネ！」

翔鶴「あ、そういえばこの前提督は半脱ぎが好きだって言っていました」

金剛「そうなの!？」

翔鶴「はい。なんでも足首にかかったままの状態がそそらしいです」

金剛「だらしがないのがいいってことかシラ」

翔鶴「うーん…… 男性の嗜好は時として私たちの理解を超えますからね。あ、あと
ブラはフロントホックが好きって言っていましたね」

金剛「あ、それは何となく分かるワ」

翔鶴「こう、上になっているときに外して胸が震えながら露わになる様が最高なのだ
とか」

金剛「ウン。ワタシも前にそうしたらテートクったら、喜んで吸い付いてきてベイビーみたいだったワ♪」

翔鶴「私の時もそうでした。提督ったら興奮しすぎて歯型まで残しちゃって……
フフ」

金剛「……ねえ翔鶴」

翔鶴「はい？」

金剛「話したらムラムラしてきちやったヨ」

翔鶴「お相手して差し上げましょうか？」

金剛「いいノ？」

翔鶴「ちようど、私も我慢できなくなってきたやいましたから」

金剛「サンキューね翔鶴！」 チュ

翔鶴「はいはい。それじゃ、先ずはシャワーを浴びましょうか」

金剛「了解ヨ♪」

↳ 提督私室

丁督「なあ長門」

長門「ん、なんだ？」

丁督 「お前わざと大きい声出しただろ？」

長門 「バレたか」

丁督 「聞き耳立てた奴らに聞かせる為か？」

長門 「相手をして貰えなくて可哀そうだったからな」

丁督 「俺の体は一つだからなあ。そこは我慢してほしいもんだ。悪いとは思うが」

長門 「だから我慢してこうやって順番に相手をしてもらってるんじゃないか」

丁督 「船のどの件は？」

長門 「あれはノーカンド。ボーナスだ」

丁督 「随分自分に甘い長門さんだな」

クチュ

長門 「ん…… 提督、いきなり触らないでくれ」

丁督 「何か急に触りたくなった」

クチュクチュ

長門 「何…… だ、珍しいな。またしたいのか？」

丁督 「いや、なんかお前が可愛いから、お前の大事なところを占有したくなってるな」

クチュクチュジュプッ

長門 「だからって、ん…… 普通に話しながら…… ら、される、つと…… あっ」

丁督「いいから普通にしてくろ。今はこうしていたい」
チュクチュクチュプツ

長門「んあつ、そんな……にしたいなら、いつで……もいいんだぞ？」

丁督「偶にやるからいいだよ。ほら動くな」

カリツシユツシユツ

長門「あつ、ああ。提督、そこ……攻められる……と。あつ」

ピユツピユツ

丁督「お、出たな。どれ、ズズ」

長門「……目の前でやられると流石に恥ずかしいな。美味いか？」

丁督「お前の味だからな」

長門「そうか。なあ提督……」

丁督「そうだな。第13ラウンドいくか」

第26話 「雑談」

高雄「あら？」

提督「……」

高雄「大佐、ドアも窓も開けっぱなしでどうしたんです？」

提督「ああ、高雄か。いや、明日天氣が崩れるせいかもしれないより風が強くてな、つい天然の扇風機替わりになっていた」

高雄「ぶつ。なんですかそれ」

提督「加えて夜風だ、嵐にでもなる前に利用させてもらってもいいだろう」
びゅうう

高雄「ん、確かにいつもの生暖かい風と比べたら勢いもあつて少し涼しいですね」

提督「だろう？ 思つたより心地がよくてな。寝ない様に頑張つてた」

高雄「寝ない様について…… ふふ」

提督「おかしいか？」

高雄「ええ。だって大佐なんだか台風が来る前の子供みたいなんですもの」

提督「…… 言われてみれば」

高雄「大佐は子供の頃台風が好きだったんですか？」

提督「学校が休みなる事に関しては嫌いではなかった」

高雄「あ、それよく聞きます。でも、学校が休みになる事だけ、ということとは……」

提督「ああ、家ではそうでもなかった。やはり学校と家では作りが違うからな。学校はコンクリートの壁に風が当たっても揺れることはなかったが」

高雄「一般の住宅の場合はそうもいきませんよね」

提督「そうだ。風で家は、特に二階の俺の部屋は揺れて、風の音も雨戸をしてるにも関わらず凄かった」

高雄「……怖かったですか？」

提督「恥ずかしながらな」

高雄「意外です。大佐の事だから読書とかしてて、その邪魔になつて気分が悪かつたとか言うと思つていたのに」

提督「随分具体的な例を挙げるな。読書自体は嫌いじゃなかったが、俺の住んでたところは台風の時はよく停電していたからな。残念ながら読書はできなかった」

高雄「ああ、停電だとテレビゲームとかもできませんよね」

提督「そうだな。俺の家にもあつたが、ゲーム機が古くてもうあまり遊んでなかったから、どっちみちやらなかつただらうが」

高雄 「どんなゲームをやったんです？」

提督 「なんだ、高雄はゲームをやったりするのか？」

高雄 「あ、意外ですか？ 実は私、結構通販で取り寄せて遊んだりするんですよ」

提督 「鬼怒はよく遊んでるイメージがあったが」

高雄 「あ、鬼怒ちゃん私の大事なゲームの遊び仲間ですよ」

提督 「質問を受けていてなんだが、どんなゲームをやるんだ？」

高雄 「いろいろです、本当に。最近はレースゲームですね」

提督 「ほう。新しいのか？」

高雄 「そうです。私そのゲームが発売されるのをずっと待ってて、やっと出た時にそれに対応した本体も揃えたんですよ？」

提督 「そこまでののか」

高雄 「ええ。そのゲーム、シリーズもので結構色んなゲーム機で出ていたんです。多分、大佐が持っていたゲーム機でも対応したのが出ていたと思いますよ」

提督 「ほう。面白かったか？」

高雄 「まあそれなりに。でもどちらかと言うと、私は過去のシリーズが好きですね。まあそこは人それぞれの好みですから」

提督 「なるほどな」

高雄「あの、興味……あります?」

提督「ん? まあな。一応ゲーム機は古くても持つてはいたわけだし」

高雄「あ、なら今度いつしよにやりませんか? 望月ちゃんや夕張ちゃんも一緒に遊んだりするんですよ?」

提督「あいつらもか。そうだな、腕の差は出るかもしれないが久しぶりにそういった娯楽に興じるのも悪くないかもな」

高雄「遊んでくれるんですね!」

提督「ああ。お前達さえよければ」

高雄「勿論です! やったあ楽しみ♪」

提督「大袈裟だな。……ん?」

高雄「どうしました?」

提督「いや、お前は愛宕と同じ部屋だろ。友人を誘ってゲームをしてるのに、妹は一緒にやらないのか?」

高雄「あ……愛宕はそのやってますが、違うのを……」

提督「ああ、違うゲーム機で遊んでるのか」

高雄「い、いえ。ゲーム機というかパソコンなんですけど……」

提督「そうか。パソコンでもゲームはできるからな。あいつはどんなのをやっている

んだ？」

高雄「えっと……」

提督「なんだ？ 人に言い難いゲームでもやっているのか？」

高雄「そういうわけじゃ、いや…… そうなのかな……」

提督「？」

高雄「あの、この事はなるべく誰にも言わないで下さいね？」

提督「一体どんなゲームをやってるんだ」

高雄「え、エロゲーです」

提督「なに」

高雄「成人指定の…… その、エッチなゲーム…… です」

提督「…… あいつは欲求不満なのか」

高雄「た、多分違うと思います！ 実際にやったことがないからはつきりとは断言で

きませんが」

高雄「愛宕が言うにはその手のゲームでしか味わえない楽しみや発見があるのだと

か……」

提督「そうか……。 まあ偏見はいけないな。今度機会があれば、愛宕にそれとなく

聞いてみるか」

高雄「だ、大丈夫かな……」

提督「あいつなりに面白いと思つてやっているわけだから、何が面白いのか勉強させて貰うくらい構わないだろう」

高雄「べ、勉強つてそんな真面目にならなくても……」

提督「お前も姉として妹に対する理解を深める良い機会になるかもしれないぞ？」

高雄「な、なるほど」

提督「まあその話はその機会があればにしよう。それよりお前がさつき言っていたゲームの事だが、どういうキャラクターが……」

高雄「あ、それはですね……」

こうして涼しい風が吹きすさぶ部屋は二人の体を涼めるも、会話の熱は上げるといふ珍しい状況を作るのであった。

第27話 「説得」

大鯨「お父さんただいまー！」ダキッ

提督「おかえり。よく帰ってきたな」

大鯨「うん！ 大鯨、頑張りました！」

提督「ああ。偉いぞ。お前たちも長期間の遠征ご苦労だった。今日はゆっくり休んでくれ」

まるゆ「ふわあ、疲れましたあ」ヘタ

ゴーヤ「そうね。でも、お蔭で久しぶりの鎮守府の雰囲気懐かしく感じるわ」

イムヤ「3週間ぶりだからね。まさか、こんなに長く続くとは私も思わなかったわ」

ハチ「でも、遠征した甲斐はありましたよ。ほら、資材だってこんなに。あ、大佐これ確保した資材の報告書です」

イク「いーっぱいとれたの！ 大鯨も頑張ったけど、イク達も頑張ったのよ？ 褒めてえ♪」

提督「ああ本当によくやってくれた。お蔭で大分助かった」ナゲ

イク「えへへー♪」

大鯨「あつ、お父さん大鯨も！」

イムヤ「も、勿論私たちもしてくれるのよね？」

ゴーヤ「労を労うのは大佐の義務よ！」

ハチ「期待してもいいでしょうか？」

まるゆ「ま、まるゆ頑張りました！」

提督「皆撫でてほしいのか……まあいい。ほら来い」

ナデナデ

遠征ズ「〜♪」

ゴーヤ「んー、でも本当に疲れでち。体も潮でベタベタだしお風呂入りたいでち」

イムヤ「いいわね。行きましょ！」

ハチ「賛成です」

イク「ナイス提案なの！」

まるゆ「ご一緒します！」

大鯨「お父さんも一緒に入ろ！」

シーン

提督「……」

大鯨「？ お父さん？」

提督「大鯨、俺は……」

イムヤ「た、大鯨。大佐は男の人だから一緒には入れないのよ？」

大鯨「え、何ですか？ 大佐は大鯨のお父さんですよ？」

ハチ「それは私たちにとつても同じですよ。でもね大鯨、年頃の女の子が大人の男の人とお風呂に入るにはいろいろと準備が必要なのです」

大鯨「準備？」

ゴーヤ「そ、そうよ。準備もいろいろあるけど…… た、大佐は他の女の子に裸を見られるのが恥ずかしいのよ！」

イク（あ、その言い方嫌な予感がするの）

大鯨「あ、それなら私後でお父さんと一緒に入ります」

ゴーヤ「」

イク（ほらね）

まるゆ「あわわ…… た、大佐と一緒に……」カア

イムヤ「た、大鯨そういう問題じゃなくてね……」

クイクイ

イムヤ「え？」

ハチ「イムヤ、今はそれ以上言つては逆効果です。ここは肯定も否定もせず大佐に任せましょう」コシヨ

イク「イクもそれがいいと思うの。今これ以上言つちやうと、多分大鯨泣いちやいそ
うなの」コシヨ

イムヤ「う……」

大鯨「イムヤさん？」クビカシゲ

ゴーヤ「と、取り敢えず私たちはお風呂に行こう！」

大佐「な」

まるゆ「そ、そうですね。大佐、後はよろしくお願いします！」

イムヤ「…… 大佐ごめんね！ さあ皆行くわよ！」

「行つてきまーす！」

提督「……」

大鯨「皆どうしたんでしょう？」

提督「さあ……な」

大鯨「お父さん、お風呂いつ入ります？」

提督「大鯨」

大鯨「？」

提督「悪いが個人的にはお前には一人で風呂に入って欲しい」

大鯨「え？」

提督「俺は一緒に入るわけにはいかないんだ」

大鯨「そんな…… いやあ」ジワア

提督「いや、お前が嫌いなわけじゃない。ほら、ハチがさつき言っていただろう？」

大鯨「ぐす…… ふえ？」

提督「年…… 大鯨みたいな可愛い娘は俺みたいな大人と一緒に風呂に入るには準備が必要なんだ」

大鯨「準備ってなんですか？」

提督「…… 改造だ」

大鯨「え？」

提督「大鯨、お前はここに来たばかりで知らないのも無理はないが、ここにいる先輩たちを見て何かに気付かないか？」

大鯨「…… ごめんなさい」

提督「いや、気にするな。それはな、皆強化改造を受けているという事なんだ」

大鯨「強化……？」

提督「そうだ。お前は俺と一緒に風呂に入りたと言ったが、実は人間とお前たち艦娘では入る風呂は湯の成分がだいぶ違っていてな」

提督「お互いに対策なしで入るのは危険なんだ」

大鯨「そんな……じゃあ私は……」ジワア

提督「待て、泣くな。俺はどうやっても入れないが、お前達なら話は別なんだ」

大鯨「ぐす……どういう……事です？」

提督「お前たちはある程度練度を積むことによって改造による強化を受けることができる。その強化によって人間の風呂にも体が耐えられるようになるんだ」

大鯨「改造で……」

提督「そうだ。お前は残念ながら今は練度が低い。だが、多少時間は掛かってしまいかもしれないが、改造を受けられるようになればお前も……後は解るな？」

大鯨「うん……解りました。大鯨、早く皆と同じように大佐とお風呂に入れるように頑張ります！」

提督「そうだ。その意気だ」(しまった。皆と同じ……)

大鯨「それじゃ、ごめんなさいお父さん。大鯨もイムヤさん達と一緒に風呂に入ってきますね！」

提督「ああ……。ゆっくり疲れを癒せよ」

大鯨 「はい！ 行つてきます！」

提督 「……」

鈴谷 「大佐あ？」

提督 「む……」

鈴谷 「なんか言い事聞いたじゃない？ 改造を受けてたら大佐とお風呂入れるの？」

提督 「鈴谷、お前なら解るだろう。何故大鯨に俺がああ言ったのか」

鈴谷 「えー？ 大佐はあんな良い子を騙す事言うのお？」

提督 「人聞きが悪いぞ。あくまで鎮守府の風紀をだな……」

北上 「その風紀、守りたいなら私たちのお願い聞いて欲しかったりして」

提督 「いつの間に」

北上 「鈴つちのスカートに隠れてたの」

鈴谷 「うっそ。鈴谷今、ノーパンなのにつ」

北上 「いや、嘘に決まってんじゃない……」

提督 「おい」

鈴谷 「あ」

提督 「鈴谷、お前今、穿いてないのか？」

北上「あ、説教モード？ 鈴っちのバカ。いい流れだったのに」

鈴谷「ごめんって。ていうかこれ切り札のつもりだったのに。あー、タイミング悪っ」

提督「お前達には改めて軍人としての風紀を叩き込む必要があるがそうだな」

鈴谷「ヤバっ、大佐この事は誰にも言わないから鈴谷とお風呂、考えといてねー」

ピュー、ピラッ

北上「本当に履いてないよ……。あ、大佐それわたしもよろしくね。じゃっ」ピュー

提督「こら待て……ふう、疲れた」ドサ

提督は何とか難局を乗り切った事を実感して、力を抜いて深く椅子に腰かけた。

提督（疲れた…… 今日早く寝よう）

第28話 「帰投」

彼女「中将殿、只今戻りました」

大和「少将、ご苦労様です」

中将「おう、ご苦労だった。で、どうだったよ？」

彼女「中将の予想通りでした。私から用心するよう注意はしました」

中将「そうか、それでいい。あいつならそれで十分だろう」

彼女「後、一応視察の名目だったのでこれは報告書です……」

中将「ん、そこに置いておいてくれ。大和、後でそれを……大和？」

大和「……」

武蔵「……」

大和はさつきから心ここにあらずという感じで窓を見ている武蔵をずっと見ていた。少将のワンコな武蔵は見たことがあるが、あんなに呆けた武蔵を大和は初めて見た。

中将「おい、どうした大和？」

大和「あ、申し訳ありません。ちよつと考え事を」

中将「ほう、珍しいな。なんだ？ お前も大佐の事を考えていたのか？」ニヤ

大和「はい？」ギロ

武蔵「なんだと？」

彼女（また何を……）

武蔵「おい、大和それはほんつ」

大和「中将？」

中将「ん？」

大和「どうして私が貴方ではなく、大佐の事を考えていなければならないんです？」二

コ

中将「お？」（あ、逆鱗に触れたか）

大和「前から言ってますよね？ 私は中将一筋だと」

武蔵「え？」

彼女（大和、怒りで周りが見えて……）

中将「おいよせ。恥ずかしいだろ。はははは」

大和「もう笑わないで下さい！ 本気なんですよ！」

中将「ああ、分かった分かった。分かったから取り敢えず、今はここまでにしておけ、

ほら二人に惚気てるところを見られて恥ずかしいし」

武蔵「あ、いや別に……」（ん？ あれノロケてたのか？）

彼女「いえ、どうぞお気になさらず。報告書の提出も終わりましたし、もう退出するところでしたので」

彼女（どこが惚気よ。中將は本当にガードが…… いや、何か違う……？）

大和「あ……」ボツ

中將「ほら、言わんこつちやない。ここは2人の気遣いに感謝しておけよ」

大和「あ、はい……」シユン

武蔵「あ、いやその、気にするな。う、うん。私は何も見ていない」

大和「っ！」ウル

武蔵「ええ!？」

彼女「武蔵、行くわよ」

武蔵「え？ あ、おい？ あ、謝ったほうが……」

彼女「いいのよ。ほら、さっさとする。中將殿失礼し致しました」カツ

中將「ああ。ご苦労だったな」ヒラヒラ

武蔵「え？ え？ 私、何か悪い事したのか？」ズルズル

バタン

中將「……」

大和「う……ぐす」

中将「ほら、こい」

大和「中将お！」ダキ

中将「全く、お前は偶にこうなるよな」ナデナデ

大和「ごめんなさい……」メソメソ

中将「ま、儂の事を想つての事だしな。別にいいが」ポンポン

大和「中将……」スリスリ

中将「はは、まるで借りてきた猫だな」

大和「んー♪」スリスリ

中将「おい、膝にまで乗ってくるな。重いわ」

大和「や、です」

中将「まるで童女みたいだぞ」

大和「恋人が無理ならもう、娘でもいいです……」

中将「ん……すまん」ナデ

大和「…… 中将」

中将「ん？」

大和「なぜ、です？」

中将「…… 大和」

大和「はい」

中将「儂、老けてるだろ？」

大和「え、そんな事……」アセ

中将「いやいや、ここでお世辞はもう無理がある、ふははは！ まあ、ちゃんと年相応に見えるだろ？」

大和「…… はい」

中将「それがどういう事が判るな？」

大和「…… / / / / / コク

中将「今は全部は言えが、少しだけ秘密に触れてやろう。大和、儂ら幹部、特に上層部の連中は皆、他の幹部に比べて年相応というか、老けてるだろ？」

大和「言われてみれば……」

中将「それはな、儂らが過去にある罪を犯した事に対しての贖罪の意志の表れなんだ」

大和「贖罪？」

中将「ああ、そうだ。儂もそれに関わった。自分だけいい子ぶるつもりはないが、止めようと必死にもなったがな。結局叶わなかった」

大和「中将…… 一体過去に何が……」

中将「それはまだ言えんが、一つだけ教えてやれるとしたら」

大和「……はい」

中将「深海棲艦が今世の中にこれだけ蔓延っているのは、先ず間違いなく儂ら海軍の所為だという事だ」

第29話 「メイド」

提督「…… 榛名」

榛名「はい。なんですかご主人様？」

提督「その服装はどうしたんだ？」（口調は漣の真似か？）

榛名「あ、メイド服ですか？ 金剛お姉様にお借りしたんです」

提督「なんでそんなものを……」

榛名「だって、大佐ったらいつまで経っても部屋の調査に来てくれないんですもの。

だから自分から来ることにしたんです」

提督「別にここになら結構来てるだろ。後、その服を着ている意味は？」

榛名「ただ何うだけじゃ意味がない事くらい分ります。だからメイドとしてご奉仕さ

せてもらおうかなって……」

提督「却下だ」キッパリ

榛名「ええ!?」ガーン

提督「自分達の部屋で着るならまだしも、基地の中でその格好で歩き回られては、軍の施設としてのモラルが問われる」

榛名「だ、だから大佐の部屋で……」

提督「ダメだ。俺の部屋も一応その施設の一部だからな」

榛名「そんなあ……」

提督「それに」

榛名「？」

提督「お前の後に隠れている足柄がさつきから恥ずかしがって泣きそうな顔をしてるからな」

榛名「あ、足柄さんなんで!？」

足柄「何でもなにもないわよ！ わたし、コスプレなんて趣味ないわ！」

榛名「えっ、でも昨日の夜はあんなに喜んで……」

足柄「お酒飲んで酔っぱらってたからよ！ なんか自分のペースで飲ませてくれないなあと思つたら……」

提督「その服を着たまま寝てしまい、抵抗虚しくそのまま連れてこられたわけか」

足柄「うう……」コク（せめて髪に櫛を通す時間くらい……）

榛名「で、でも足柄さん凄く可愛いですよ？」

足柄「そういう問題じゃないの！ そういう趣味があるかないかの嗜好の問題なの!!」ブアツ

提督（あ、ついに泣いた）

榛名「足柄さんなんで泣いて……………!？」

足柄「恥ずか…………… ひっく…………… しいからに決まって…………… るじゃにやあ

い……………! うわーん」

榛名「た、大佐助けて下さい！」アタフタ

提督「いや、部屋に連れて行って元の服に着替えさせたらいいだろ」

榛名「そこは、引けません！」

提督「なんでそんなに必死なんだ」

足柄「鬼!!」ブワッ

榛名「もう、足柄さんそんなに恥ずかしがる事ありませんよ？」ガシッ

足柄「あつ、いや、ちよつ…………… 離して！」ジタバタ

足柄（くつ…………… 凄い力……………!）

榛名「大佐、ちよつと失礼しますね」

提督「ん？ ああ」

そういうと榛名は足柄を羽交い絞めにしながら、提督に声が聞こえない位置に移動した。

榛名「足柄さん、大佐はこの服を駄目だとは言ってますけど、『嫌』とは言っていないじゃないですか」

足柄「そ、それは……」

提督「ん……？」（今、榛名は足柄に何を言ったんだ？ 足柄の反応が……）

榛名「少なくともこの格好が嫌いじゃないなら、私達がすべき事は一つじゃないですか」

足柄「す、すべき事って……？」

榛名「ご奉仕です」

足柄「ほ、奉仕？」

榛名「私達は、普段お仕事くらいしか手伝ってないので、この機会に私達が大佐の身の回りまでお世話をするんです」

足柄「どうしてそこまで…… 嫌、じゃないけど……」

榛名「それはご褒美の為です」

足柄「ご、ご褒美？」

榛名「大佐が私達のご主人様なら、当然ご奉仕に対してご褒美がある筈です」

足柄「ご褒美…… 何かしら……？」

榛名「絆です」

足柄 「え？」

榛名 「私、最近気づいた事があるんです。金剛お姉様や長門さん達を見てて……………」

足柄 「榛名さん？ 何を言ってる……………」

榛名 「多分お姉様達…………… 大佐と…………… え、えっち、してるみたいなんです」

足柄 「なあ!？」

榛名 「しっ、声が大きいですよ」

足柄 「ご、ごめん……………」

榛名 「お姉様達は私達が気付かないところで上手く、大佐を誘惑して成功してるみたいなんです」

足柄 「ゆ、誘惑だなんて……………」カア

榛名 「足柄さん、これはチャンスですよ！」ズイ

足柄 「うっ!？」ビクッ

榛名 「足柄さん、大佐の事大好きですよね、愛してますよね？」

足柄 「それは…………… あう…………… うん」コク

榛名 「良かった。私と一緒にですね」パア

足柄 「い、一緒?」

榛名 「そう、一緒です。だからここは2人で協力して大佐を誘惑しちゃいましょう!」

足柄「で、でも…… 恥ずかし……」

榛名「恥ずかしがってたら、大佐とは今の関係のままですよ？」

足柄「い、今だってそんなに悪くは……」

榛名「大佐に触れて欲しくないんですか？」

足柄「ふ、触れて……」

榛名「真に愛される事というのは、体の関係までにいつてこそなんですよ？」

榛名（つて、金剛お姉様が言っていました）

足柄「う……」

榛名「足柄さん、私達いつまでも中身は子供のままではいけません。だから一緒に大人に、大佐の本当の意味での恋人になりましょう？」

足柄「榛名……」

榛名「ね？」

足柄「……」コク

榛名「足柄さん！ ありがとうございます！」ダキッ

足柄「あ、ちよつと…… ふあ」ムギユ

榛名「じゃあ、お互いに意見が一致したところで、この場は引きましょう。大佐に釘をさされてしまいましたし」

足柄「え、じゃあいつ……？」

榛名「夜に決まってるじゃないですか」

足柄「あ……カア

榛名「足柄さん、いいですか？皆が寝静まったら……に集合です」

足柄「……分かったわ」コク

榛名「打ち合わせ完了ですね。それじゃ、ここは一旦戻りましょう」

提督「ん？ 話は済んだのか？」

榛名「はい。足柄さんを説得してみたんですが……残念ながらダメでした。だか

ら、榛名ももう今日の所は諦めます」

提督「今日のところは、か」

榛名「はい。まだ私諦めてませんから！」（嘘は付きたくないし、ね）

提督「ま、認める事はないとは思うがな。程々にな」

榛名「はい。それでは私達はこれで失礼します。大佐、ご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした。足柄さんもごめんなさい」

足柄「え？ あ……べ、別にいいわよ」

榛名「ありがとうございます。あ、じゃあ失礼しますね。足柄さんも服お返しますか

ら行きましょう」

足柄「え、ええ。そ、それじゃ大佐、失礼しました」

ボタン

提督「やけにあっさり引き下がったような…… 気のせいだいいが」

第30話 「ご奉仕」 R-15

「基地の裏手

榛名「足柄さんこつちです」

足柄「あ……」 タツタ

榛名「どうです？ 上手くいききました？」

足柄「うん。お酒の相手をさせてくれる事になったわ」

榛名「狙い通りですね。これで準備ができました！」

足柄「ねえ、本当にやるの？」

榛名「私はこれ以上出遅れるつもりはありませんから」 キツパリ

足柄「そう……」

榛名「足柄さん、躊躇するのは解りますがここで前に進んでおかないと大佐との距離

は縮みませんよ？」

足柄「そう……ね」

榛名「足柄さんは私のペースに合わせてください。後は多分、何とかかります」

足柄「何とかって…… わかったわ。こうなったらやるだけよ」

榛名「その意気です！ それじゃあ着替えましょうか」

足柄「はあ…… また着るのね……」

榛名「当然です！ 何と言つても大佐に『ご奉仕』するのが大前提ですから！」

足柄「うう…… やっぱり恥ずかし……」

榛名「しつかりご奉仕して、大佐から『ご褒美』もらいましょうね！」

足柄「ご褒美…… っ！」カア

榛名「ね？ 足柄さん」

足柄「…… うん」

く深夜、提督執務室

コンコン

提督「足柄か？ 遅かったな。入っていいぞ」

ガチャ

足柄「失礼します……」コン

提督「足柄……？」(何故顔だけ出す？)

足柄「あ、あの……」

提督 「ん？」

足柄 「ご、ごめんね？」

提督 「ん？ 何を謝……………」

提督 「足柄、お前なんでまたその格好……………」

?? 「大佐、失礼します」

提督 「榛名、お前まで……………。その格好はダメだと言っただろう」

榛名 「お願いします。今だけ許してください！」

提督 「いや、お願いされてもな。これは……………」

足柄 「大佐、その…………。わたしからもお願い……………」

提督 「足柄、お前までどうした……………」

足柄 「そ、その…………。本当に今だけでいいから、許して貰えないかしら？ 一応待機

任務中と言つても、やる事もない時間なんだ…………。し」

榛名 「大佐！ 榛名、大佐にご奉仕がしたいんです！」

提督 「別に奉仕するだけならメイド服じゃなくてもいいと思うんだが」

足柄 「！」

足柄 「うわあああああんん!!」

榛名「あ、足柄さん！」

提督「……」

榛名「大佐ひどいです！」

提督「俺が悪い……」

榛名「……」ジツ

ポン、ナデナデ

提督「必要ないなんて言って悪かった。その格好、似あ……可愛いぞ」

足柄「ええ……？」ピクツ

足柄「おかしく……ない？」

提督「ああ」

足柄「本当？」

提督「本当だ」

榛名「榛名は？」

提督「……」(こいつ……)

榛名「大佐？」ジワ

提督「ああ、お前も可愛い」

榛名「つ、大佐あ♪」ダキッ

足柄「あ、わつ、わたしも!!」ギユッ

提督「よし、二人とも満足したか? 部屋に戻れ」

二人「ええ!?!」ガーン

榛名「な、何を言ってるんですか!? 榛名達のご奉仕に来たんですよ!?!」

足柄「そ、そうよ! ご、ご褒美! ご褒美が貰えないじゃない!!」

提督「褒美?」

足柄「あ……」カア

提督「褒美とは何が希望なんだ?」

榛名「そ、それは……」モジモジ

足柄「つ、こ、こういう事よ!」

チュウウツ

提督「んぐっ」

榛名「大佐…… 逃げないで下さい…… 今から、ご奉仕して差し上げますか

ら……」

ツーン…………ツ

提督「つは、榛名、お前……………んっ」

足柄「はあ……………はあ……………はあ、大佐……………ちゅ、じゆる……………たいふああ」

榛名「ペロ……………はあ……………足柄さんその調子です」

榛名「大佐、ごめんなさい、こんな強引な事をして……………。でも、もう榛名達は一步踏み込む事を決めたんです」

提督「はふ……………な」

榛名「はあ……………大佐の胸、やっぱり大きくて硬いです。遅しい……………」

榛名「あ……………男の人もやっぱり硬くなるんですね……………ん、足柄さんちよつと場所を開けて貰えますか？」

足柄「んふあ？」

榛名「んちゅ、ペロ……………はあ……………大佐の、小さくて可愛いです……………ちゅっ」

提督「んふっ、ちゅ……………つく」

足柄「ちゅぶ……………はあ、はあ……………大佐……………」

足柄「……………」

サワツ

足柄「あ……………」

足柄（キツそう……………。これって…………。そうなのよね。じゃあ楽にしてあげなきやぶるんっ

足柄（凄い…………。これが大佐の…………。ちゆ、ペロ」

榛名「あしふあ……………!!？」

提督「つく……………ふっ……………」

榛名「んふっ……………。どうですか？ 大佐、気持ちいですか？ 好きにしているんです

よ

提督「榛名……………」

ちゆう、ペロ、ちゆぼっ

榛名「ああつん、大佐あ」

提督「うっ……………ぐ、足……………柄」

ペロペロ、チロツ

提督「……………くっ、二人とも、もうキツイ。そろそろい……………」

榛名「はあ……ふう……。いいですよ、いつでも」

足柄「あ……大佐、わたしも……」

足柄「大佐……どっちからでも……」

榛名「お召し上がりください……」

提督「……」

にゆっ

足柄「あっ」

榛名「んん……ああああっ」

提督「大丈夫か？」

榛名「い……ったいけど、大丈夫です。これで私も大佐の本当の恋人に……

はあ」

提督「榛名……」

足柄「……！」ゾクッ

榛名「大佐……ゆっくりでいいですから動いてください。その内よくなりそ

う……です」

提督「……わかった」

榛名「あっ、あっ。そ、そう……それくらいで……もう少しした……っら、

もつと早くし…… うあつ、 んんんんん」

足柄「そ、そんなに…… 気持ちい…… ああつ」
にゆく

提督「榛名の相手をしている間にお前は十分に解しておかないとな。まあこれだけ溢れさせているなら大丈夫かもしれないが……」

足柄「あつあつ…… 指いい。いいっ！ そこ、あつ。うんくつ、もつと、もつとお」

榛名「ああ…… ああああ いいです！ 大佐あ！」

提督「つく、榛名……」

榛名「はい。どうぞ全部…… 榛名を満たし…… ああああつ♪」

榛名「あつ…… あ…… まだ、まだ出て……」

足柄「凄い……」

提督「榛名、お前は暫く休んでいろ」

榛名「ふああい」

提督「足柄、いいか？」

足柄「大丈夫？ あんなに出したけど……」

提督「お前だけ置くような真似はしない。安心しろ」

足柄「大佐あ……ウル

提督「それに、お前のココも大分待っていたみたいだしな」

ちゆく

足柄「あああああつ」

提督「これだけなつていれば、榛名よりかはマシかもな……いくぞ」

足柄「うん。お願い……きて……」

足柄「いたつ、あ……これ、はあああああー」

提督「良かった。思ったより痛みはなかったみたいだな」

足柄「う、うん……あつ。でも……あああつ。ちよ、ちよつと残念」

提督「ん？」

足柄「も、もう少し……いつ、痛け……んんんん！れば、気持ちよくなる

過程が……が、楽しつ……ふあああ！めれたかなつて……」

提督「……大丈夫だ。今からその事を忘れるくらいに良くしてやる」

足柄「んん、あああああつ。きゅ、急に激しすぎ……！あああつ」

ギユウウウウツツ

提督「そろそろか、いくぞつ」

足柄「ああああああ……ふ、つく……うううううー！」

足柄 「はあ、はあ……す、凄……こ、こんなに……」

榛名 「はあ…… あしふあらさん、しゅごい……」

榛名 「もつと…… よく、見せて…… 見たいれす……」

クニイ

足柄 「ちよつ、あああん」

榛名 「ふふ、凄い…… 可愛い…… ちゆ、ペロ」

足柄 「は、榛名つ、あつ今はダ…… く、はああああ！」

提督 「…… つく」

足柄 「あつ……」

榛名 「ふふ、流石大佐です……。それでは今度は上からお願いできますか……」

？」

足柄 「わ、たしも…… 今度は口で…… シて？」

提督 「もう遠慮するな。好きなだけ相手をしてやる」

第31話 「綱紀肅正」

長月「長月参上！」

菊月「菊月、まかり越した！」

三日月「三日月、お待たせしました！」

長・菊・三「三人揃って」

「睦月型戦隊マジメンジャー！」ドーン

提督「……何をやっているんだお前たち」

菊月「ああ、大佐か。いや、この前睦月型一同で話していたら」

三日月「誰が一番真面目なのかという話になりました」

長月「話し合いの結果、私たち三人が特に真面目で可愛いという事に決定したんだ」

睦月「え？ 可愛いなんて議論したっけ？」

菊月「（無視）まあそういうわけで、せっかく駆逐艦の中でも一番真面目で輝いてる女子として選ばれたわけだから」

文月「輝いてる？」

長月「（無視）この際、真面目な子同士で団結して鎮守府内の風紀の乱れを正す為に日

夜奮闘している大佐の力になる事を決めたんだ」

鈴谷「へえ、それでー、なんだっけ？ ああ、ダルイ戦隊マジメンドイを結成したんだ」

三日月「マジメンジャーです!! 名誉棄損でジェーン判事に訴えますよ!」

熊野「あら、でもマジメウドンにしろマジモロコシにしろ、"men"が入ってる時点で男性扱いですから、そのネーミングは正しくないと思いますわよ?」

菊月「マジメンジャーだ!! どうして全部食べ物なんだ!?!」

長月「だが、熊野さんの言う事にも一理ある、せっかく結成したグループ名が婦女子っぽくないのは問題だ」

望月「三日月たち三人以外が全員真面目じゃない奴みたいなの扱いを受けるのも問題だと思うんだけど」

文月「文月は真面目だもん! ちよつと甘えん坊なだけだもん!」

提督「お前たち本当に議論したのか?」

菊月「ああ、皆が集まる前に結論を出したぞ」

臯月「それ会議してないじゃん!?!」

三日月「(無視) まあそれはともかく、女の子っぽい名前じゃない、ですか……」

子曰「子日にいいアイデアあるよ!」

長月「おお、聞こうじゃないか」

子曰「鼠戦隊ハツハルレディースとかどうかな！」

菊月「おい、戦隊の名前が病原菌を蔓延させる齧歯類になってるぞ」

子曰「げ、齧歯類!？」ガーン

初春「ハツハルレディースという名前も何やら古臭さを感じるのう。というか、妾を巻き込むでない、この戯け」

子曰「シヨック！」

三日月「取り敢えず子曰の案は却下ですね。うーん、何がいいでしょう……」

菊月「大佐は何か案はないか？」

提督「俺に聞くな」

長月「案つ、案が欲しいんだ！」グイグイ

提督「服を引っ張るな。分かったから」

長月「うむ」

提督「ふう……そうだな、綱紀肅正戦隊カゼカオルとかいうのはどうだ？」

菊月「おお……キラキラ

三日月「こ、綱紀肅正戦隊……」キラキラ

初霜「な、なんか一気に物騒な戦隊名になってない……？」

暁「そうね。って、初霜は戦隊に入っていないのね、真面目なのに」

初霜「私は辞退したの」ヒソ

暁「ああ……」

長月「そのカゼカオルというのはどういうモチーフで決めたんだ？」

提督「風紀を正すという事は鎮守府内の空気を正す事だ。どうせ正すなら良い香りがあるくらい清らかな空気（風）で満たしたいだろう？」

長月「な、なるほど……」

叢雲（本人の前では言えないけど、大佐のネーミングも独特というか、なんか古臭いわね）

菊月「では、戦隊の名前はそれでいいだろう。どうだ？ 皆」

三日月「異議なし！」

長月「賛成だ」

菊月「よし、ではリーダーとしてこの戦隊の名をこれより鎮守府内にとd」

長月「ちよつと待て」

菊月「なんだ？」

長月「何故菊月がリーダーなんだ？ 私じゃないのか？」

三日月「え、ちよつと待ってください。リーダーは三日月じゃ……」

菊月「お前たちは何を言ってるんだ？ リーダーは最初からこの菊月以外いないだろ？」

三人「……」バチバチ

卯月「早くも解散の危機ぴょん♪」

霞「なに楽しそうに言ってるのよ」

菊月「いいだろう。ではどちらがリーダーに相応しいか砲撃による的当てで決めようじゃないか」

長月「それでいいのか？ 後悔するなよ？」

三日月「望むところです」

提督「こら、勝手に実弾での訓練をするな。許可はしないぞ」

菊月「嫌だ！ これはリーダーを決める大切な戦いなんだ！ 訓練つ、訓練をさせて

くれ！」グイグイ

提督「だから服の裾を引っ張るのはやめろ」

三日月「白黒はつきり着けないとダメなんです！」グイグイ

提督「三日月もか……。お前たちいいか、そもそも——」

不知火「話は聞かせてもらいました」

三人「!?」

Z3 「私たちを差し置いて真面目がどうかうとはいいい度胸ね」

夕雲 「貴女達、昨日散々会議をするとか言つて部屋を散らかしっぱなしにしたのを忘れてないかしら？」

菊月 「み、三日月片付けてなかったのか!？」

三日月 「な、何を言ってるんですか!?! お手洗いから戻った後に片付けると言ったのは長月ですよ!」

長月 「ちよつと待て! 私は菊月が片付けると聞いたぞ!」

三人 「……」

不知火 「もう充分です」

ビクッ

Z3 「貴女達に罪の意識が全くないことはよく判つたわ」

ビクビクッ

夕雲 「普段は真面目なのに、何かに夢中になると周りが見えなくなるのは悪い癖ですね。これは……」

不・3・夕 「肅清が必要ね」

菊月 「そ、総員撤退!!」

長月 「了解した!」

三日月「仕方ありません！」
ダツ

不知火「逃がしませんよ。覚悟しなさい」

Z3「私たちが真面目じゃない扱いにした罪は重いわ」

夕雲「二人ともそんな事気にしてたんですか……」

ワーワー

提督「……あの三人は、急に戦隊とか一体どうしたんだ」

クイクイ

提督「ん?」

響「これ」

『海上護衛戦隊シーガーディアンズ 制作：大本営情報部広報課シーガーディアンズ制作委員会』

提督「なんだこれは」

響「面白いよ?」

提督「お前の影響か」

響「一緒に観よ」

提督「いや、俺は……ん？」

部屋に残ってる駆逐艦達「……」キラキラ

提督「……まあ、偶にはいいか」

第32話 「査察」

長門『こちら長門、大破した。撤退したい』

丁督「いいぞ、さっさと戻ってこい。沈むなよ？　沈んだら笑うからな」

長門『ふつ、死に様は笑われたくないな。了解した、敵を食い殺してでも帰還を約束する』

丁督「おう、その意気だ。他の奴らも長門の事頼むぞ」

翔鶴『この命に代えても。あ、でも沈んじやったら私も一緒に死んだ方がいいですか？』

丁督「死にたかったら死ね。だが、それだと俺はちよつと悲しい」

長門『おい！　聞こえているぞ！　沈むか、バカ!!』

丁督「はっはっは！　大丈夫そうだな。待ってるぞ」

加賀『了解。帰ったら一発お願いしますね』

金剛『ハア!?　何それズルいデス！　提督ウ！　ワタシも、ワタシも帰ったら——』
ブツ

丁督 「まあ大丈夫だろ」

提督 「…… お前はいつもこんな無茶苦茶な指揮をしているのか」

丁督 「無茶苦茶とはなんだ。これでも結構ちゃんとやってるんだぜ」

提督 「どこがだ」

丁督 「一隻も沈ませたことがない」

提督 「……」ギロツ

丁督 「相変わらず、頭の固い…… いや、甘い奴だな」

提督 「そう言うお前は本当に昔のままだな。粗暴で無礼で直情的なのは何も変わって
いない」

丁督 「変えるか阿呆。俺は俺のまままで軍に尽くす、祖国を守る、こいつらを愛す」

提督 「…… 少なくともその3点については俺も同意だ」

丁督 「反論してきたら殴り飛ばすところだったぞ」ニヤ

那智 「きさ…… 中佐殿、口を慎んで頂きたい。こちらは査察で来ているお忘れか」

ワナワナ

丁督 「我慢するな。ここでは自分を隠さず常に堂々としろ」

那智 「つ、なら言わせてもらうが、貴様は——」

提督 「那智、やめろ」

那智「大佐、しかし！」

提督「これがこいつのやり方であり、ここでのルールなんだ」

那智「つく……………」

提督「上下関係なく隠し事はせず、本心で当たる、だったか？」

丁督「そうだ。それが俺の信条だ」

提督「そんな風だからいつまでも中佐のままなんだぞ」

丁督「出世に興味はない。俺が興味があるのは仕事とこいつらを愛する事だけだ」

提督「……………全く」

丁督「そんな辛気臭い顔するなよ。俺は別にお前の事を嫌ってるわけじゃないぜ？」

提督「それは俺も同じだ。最初からある程度ぶつかる事は予想していたしな」

丁督「ははは、俺もだ。しっかしまあ、まさかお前が来るとはなあ」

提督「今の査察システムでは、有り得ないことじゃないさ」

提督（ま、もつともこいつに俺が当たった時点で、中将や彼女の息を感じる気はしないでもないがな）

○海軍新査察システム

従来は本部の高官が定期的に行っていたが、数年前に新しく就任した海軍の新総帥の

改革によりその内容が大幅に変更された。

・これまで定期的に行っていた査察を抜き打ち的にも行うように追加。

・本部からのみ派遣していた査察官を各鎮守府の支部からも不特定に派遣するようにし、その評価の公正性を強化。

当初は、この改革に反対する者が多数いた。

その殆どが保身に焦る者達だったが、一部には密告システムにも捉える事ができるこの改革の危険性を心から心配する者も当然いた。

新総帥はそんな彼らに対して「異議のある者には任期満了額の退職金を以て解雇す」の決定を下し、反対意見を強硬に一掃した。

こうして残ったのは新たなシステムを心配しつつも、海軍に忠を尽くす事を誓うベテランの老幹部と、新総帥の意向に心から賛同し、海軍の健全性の維持に全力で努めようとする若手のみとなった。

提督の同期である中佐はそんな若手の中でも特に使命に燃える熱血漢であり、そんな彼には本部からある権限が与えられていた。

丁督「そういうえばお前、この前に起こった艦娘の反乱事件知ってるか？」

提督「ああ……」

丁督「前々からあそこの鎮守府の評価内容が胡散臭いとは思っていたが、やっぱり事

が起つちまつたな。クソツ、出撃中でなけりやな」

提督「前々から？」

丁督「ああ。お前だから言うけどな、俺は実は抜き打ちで査察ができる特務権限を本部から貰っているんだ」

提督「お前が……」

丁督「ただの勘だったけど、本当にクソ野郎だったとはな。海軍の人事部は気の毒だぜ。あれだけ厳正に審査してもああいうのが出ちまうんだからな」

提督「その権限とはどれほどのものなんだ？」

丁督「査察の時のみに限定されるが二階級上の扱いになる。つまり、俺は今中佐だから現状、本部以外のどこの鎮守府に行っても俺より上の奴はいなくなる」

提督「大将や中将はどうなる？」

丁督「そのレベルになると、本部の連中が選任で当たるらしい。ま、俺もあまり目上に威張りたくはないからその方が楽でいいけどな」

提督「なるほどな。査察は頻繁に行くのか？」

丁督「余程の事情がない限り、いつでも自由に行ける。公費、でな」ニヤ

提督「む……」ピク

丁督「察したか。そ。俺があまりにも縦横無尽に公費使いまくって粗探しするもんだ

から本部の連中から結構睨まれてる」

提督 「なかなか昇進しない理由はそれか」

丁督 「出撃任務ではしっかり成果も出してるからな。中佐で止まってるのはそういう事情の積み重ねで、妥当な状態ってやつだ」

提督 「一体どれだけ査察を行ってているんだ」

丁督 「取り敢えず気になったところは全部だ。昼夜問わず行く。お蔭で今では俺は『鉄鯨』とか言われて一部の胡散臭い連中に嫌われている始末だ。ははは」

提督 「……俺の所には来ないんだな」

丁督 「馬鹿野郎。俺は、お前と親父と本部の一部、ああ、後、あのエリートだけは信じてるんだよ」

提督 「面と向かって言われると照れるものだ」

丁督 「へへ、数年ぶりに再開したんだ。照れるのも仕方ないぜ」

提督 「なあ」

丁督 「ん？」

提督 「差し出がましい事だとは承知してるが、敢えて尋ねさせてくれ。あの長門は本当に大丈夫なのか？」

那智 「……」

丁督「大丈夫だ。俺は、自分が直接指揮しない時は基本的に現地での判断は全部あいつらに一任している」

提督「指揮を全くしないのか？」

那智「なっ!？」

丁督「それくらいしても安心できるくらいには鍛え上げたつもりだ。伊達にこの基地の艦娘は『少数精鋭』で通つてるわけじゃない」

提督「だが、全く関知しないというのは流石に……」

丁督「問題ねーよ。ヤバいと思つたらあいつらからああやって通信がくるし、俺もそれなりの判断で動く」

提督「…… 正に鉄の絆だな。真似しようとは思えんが」

丁督「鉄だなんて色気のない言葉使うなよ。絆だ。それで十分だ。なあ大淀？」

大淀「えっ? あ、はい……」モジモジ

提督「？」

丁督「実はな、ここにいる艦娘は全員建造で生まれたわけじゃない」

提督「なに？」

丁督「こいつらは全員、俺が査察した先で問題が有りと認めた後に、本人の希望で引き取った奴らだ」

提督「……」

丁督「まあお前の想像通りやることはやってるが、その絆が強い理由も、もうお前なら判るだろう？」

提督「……」

那智「……」カア

丁督「ま、唯一の例外はこの大淀と明石だけだ。お前の所もそうだろうが、こいつらだけは最初から俺の傍にいる」

丁督「だから俺もこいつらだけにはちよつと他の奴らと違って特別な思い入れがあるんだ」

大淀「提督……」ポ

提督「いや、うちには大淀はいないが」

丁督・大淀「えっ」

那智「……」

提督「元々配属される予定だったのかは分からないが、今の鎮守府に着任した当初は全部仕事は一人でやってたからな…… ああ、やはりいなかったと思う」

丁督「大淀？」

大淀「そ、そんな筈は…… どんな鎮守府にも必ず一人は“私”が充てがわれている

筈ですが……」

那智「大佐、その事なんだが……」

提督「ん？」

那智「確かにうちにも最初は大淀はいたんだ」

提督「なに、そうなのか？」

那智「ああ。だが、その……さつきも言ってた通り、仕事を全部一人でこなしてたろ？」

提督「ああ」

那智「本部から戦闘参加許可が貰えず、仕事の手伝いだけが唯一の存在意義だった大淀は、大佐に存在を気付いて貰えなかった事に悲観に暮れてその……」

提督「まさか自沈……」

那智「いや、食堂で鳳翔と一緒に調理の手伝いをしているぞ」

提督「」

那智「本当に気付いていなかったのか？」

提督「あ、ああ……」

丁督「マジ……？」

大淀「ひどい……」ウル

那智「私が言うのもなんだが、大佐は妙なところで鈍感が過ぎる……。機会があったら是非、彼女に声を掛けてほしいんだが」

提督「確約する」

丁督「当たり前だな」

大淀「当然です!!」

提督「…… 申し訳ない」

丁督「おい、那智」

那智「あ、はい」

丁督「さつきは悪かったな。ま、そういう事だから今後とも宜しくな」

那智「あ、いえ。こちらこそ先ほどは失礼しました」

丁督「いいっていいって。それとな、こいつ早く連れて帰ってくれ。大淀が不憫だ」

提督「いや、まだ査察が……」

丁督「特務権限が与えられている提督の鎮守府に問題があるわけないだろ。いいからさっさと行け。帰れ。帰って大淀とベッドインだ」

那智「おい」

大淀「提督それは……」

提督（言い返したいが、立場的に今は無理だな）

丁督「悪い、失言だった。ま、取り敢えず適当に済ませて早いとこ帰れよ。んで、機会があつたら今度酒でも飲もうぜ」

提督「了解した」

コンコン

ガチャ

龍田「提督うゝ、第一艦隊帰還したわあ。長門さんのお帰りよ。もう凄い格好なんだからあ」

丁督「ん。分かった直ぐ行く。じゃ、大佐そういう事だからちよつと失礼するわ」

提督「ああ」

丁督「用事が済んだらさっさと帰れよ。挨拶とかはいらねーからな」

提督「分かった」

丁督「……またな」

中佐はそういうと拳を提督の前に差し出してきた。

提督「ふっ……」

提督も同じく拳を突出し彼の拳に軽く当てた。

ゴッ

中佐は提督からその反応を受ける否や、それ以上は何も言わず、踵を返して長門を迎えに行つた。

龍田「男同士の友情つてやつですかあ。素敵ねえ♪」

提督「……ありがとう」

提督はその場にいた全員と、今日この機会を与えてくれた偶然(?)に心から感謝し、誰にともなくそう呟いた。

第33話 「仲直り」

鳳翔 「大淀さん、次はこれを浸しておいてください」

大淀 「はい、分かりました」 トントン

鳳翔 「お汁の方はどうですか？」

大淀 「大丈夫だと思います。はい」

鳳翔 「ん、失礼しますね。ズズ……」

大淀 「もう少しお味増足します？」

鳳翔 「いいえ、大丈夫です。美味しいですよ」

大淀 「よかったあ♪」

提督 「……」 (本当に居た)

提督 (どうする、今まで存在に気付かずに一年以上は経っているぞ。これはもうれっきとした虐めだ)

提督 (自然に話しかけた方がいいか？ いや、やはり先ずは土下座も辞さない構えで

謝罪の意を表した方が……)

提督「ブツブツ……」

鳳翔「え？ 大佐どうしたんですか？ 厨房に来るなんて初めてですよ？」

提督「む」（しまった）

大淀「！」ビクッ

提督「いや、まあ…… その、大淀…… に用があつてな」

鳳翔「大淀さんですか？ 居ますよ。でも、ここまで来るなんて珍しいですね、執務室ではお会いになられなかつたんですか？」

提督「いや…… 会うというか……」

鳳翔「？」（何か歯切れが悪いわね。凄く珍しい）

提督「まあとにかく大淀をちよつと借りていいか？」

鳳翔「ええ、構いませんよ。夕食の準備はもう殆どできましたから。大淀さん」

大淀「…… 知りません。大淀つて誰ですか？ そこに誰かいるんですか？」

鳳翔「え？」

提督「……」（当り前だが激怒しているな）

鳳翔「お、大淀さんどうしたの？」（何か急に機嫌が……？）

大淀「あ、鳳翔さんごめんなさい。鳳翔さんはちゃんと見えますよ。でもあそこに誰がいるのかは私にはちよつと判らないんです。ごめんなさい」

鳳翔「ええ!？」

提督「大淀……」

大淀「……」プイツ

鳳翔「た、大佐。これってどういう事です？」

提督「あ、うむ。その、実はな……」

鳳翔「……酷い」

提督「弁明の余地もない」

鳳翔「いえ、これは弁解も無理ですよ」

提督「……だな。失言だった」

鳳翔「まさか大佐がこんなに鈍感だったなんて……」

提督「申し訳ない」

鳳翔「謝らないといけないのは、大淀さんにですよ？」

提督「もつともだ」

大淀「……」ツーン

鳳翔（あの大淀さんがここまで……でも、流石に仕方ないわよね）

提督「どうしたらいいだろうか……あ、いや。他人に助けを求めるのは筋違いだな

これは」

鳳翔「え？ 他人？」カチン

提督「ん？」

鳳翔「大佐、私と貴方は既に結ばれた仲ですよね？」

大淀「!?」

提督「結ば…… おい、いきなり何を」

鳳翔「言い替えれば恋仲です。それを『他人』と言いますか？」ニコ

提督「待て、鳳翔。それは誤解だ。あくまで第三者という意味での他人であつて……」

鳳翔「そ・れ・で・も！ 私の前では言つて欲しくくないです」プクツ

提督「心得た。了解だ。だから機嫌を……」

大淀「大佐あ？」ユラア

提督「お、大淀？ お前俺を無視してたんじゃ……」

大淀「そんな事は今はどうでもいいんです。それより、さんざん私の事に気付かなかつた癖に」

大淀「私がこうやって厨房が居場所になつてしまった間に大佐、貴方は一体何を……」ワナワナ

提督「ぐ……」（手詰まりだ。最早死んで詫びるしかない）

鳳翔「大佐？」ズイ

大淀「大佐あ？」ズズイ

提督「悪かった……この過ち、死んで償うか……」

鳳翔「そ、そこまでしなくていいです！」（言い過ぎちやつた!?!）

大淀「別にそこまで望んではいません。じゃ、何でも私の言う事聞いて下さい」

鳳翔「え？」

提督「分かった。可能な範囲で善処する」

大淀「……無責任に全部叶えと言わないだけマシですね。それでは一つ目です
が」

提督「ああ」

大淀「もう仕事の手伝いはしたくありません。ここ（厨房）で働きたいです」

提督「つ、それは……仕方のない事だよな」

大淀「勘違いしないで下さい。別に元々の職務が嫌になったわけじゃないです。ただそれ以上にここでの仕事が好きになったんです。いいですか？」

提督「……勿論だ」

大淀「では2つ目です。もう私の事を見失わないで下さい。これは絶対です。いいです
ね？」

提督「…… この命に代えても」

大淀「3つ目ですが、これで最後です。私も大佐の恋人にしてください」

提督「…… 俺の？」

大淀「何不思議そうな顔をしてるんですか？ まさか嫌だとも？」

提督「いや、そんなことは……。だが、俺だぞ？ 今までずつとお前の事に気付か

なかつた最低な男だぞ？」

大淀「それはわざとじゃなかつたんですよ？ なら本当に大負けで許してあげます」

大淀「その代りに失った時間の分、つまり過程を飛ばして私を恋人として受け入れて下さい。今度はきちんと私に自分も大佐の大事な艦であるという自覚を下さい」

提督「……」

大淀「以上です。いですよね？」

提督「断わるわけがないだろう。その条件、全て受け入れさせて貰う」

大淀「…… なら、いいです。今までの事は水に流してあげます」ニッコツ

提督「本当にすまない。そしてありがとう……」

鳳翔「あ、あの！」

提督「うん？」

鳳翔 「わ、私も。私も1個だけお願いがあります」

提督 「遠慮するな。言ってくれ」

鳳翔 「き、キスして下さい。改めて私が貴方の恋人だという証明が欲しいです……」

提督 「……分った」

大淀 「……大佐、4つ目追加です。私もそれ下さい」

提督 「……了解した」

チュ……チュ

鳳翔 「はい、これで♪」

大淀 「仲直り完了です♪」

提督 「……溜飲が下がる思いだ」

第34話 「心労」

島風 「大佐ー、ヒマー」ゴロゴロ

提督 「……： そうか」

雪風 「島風ちゃんソファアの上でゴロゴロしちやダメだよ。大佐に怒られちゃうよ」

提督 「……：」

雪風 「大佐？」

提督 「ん？ ああ、悪い。なんだ？」

雪風 「あ、いえ……：」

提督 「？」

島風 「大佐なんだか疲れた顔してるー」

雪風 「し、島風ちゃん！」

提督 「俺が？」

島風 「うん。だって、ずーと机で腕組んでるだけなんだもん」

提督 「ん？ ああ、これは……： 今は休憩中だからな」

雪風 「休憩中に腕を組むなんて、何か考え事ですか？」

提督「いや、考え事というわけじゃないんだが……」

島風・雪風「？」キョトン

提督「……子供はいいな」

島風・雪風「え？」

提督「無邪気で、元気で、素直で……」

雪風「え、あの？ 大佐？」

島風「むう、わたしは大佐が言うほど子供じゃないよ！」

提督「ははは。まあそうムキになるな。可愛いけどな」ナゲ

島風「!?」ゾゾ

雪風「ひっ」ビクッ

提督「ん？ どうした？」

雪風「え？ な、なんでもないです……よ？」

島風（な、撫でてもらったのに何だか凄く怖…… かった？ なんで……？）

提督「ん？ 二人して一体どうしたんだ？」ニコ

島風・雪風「!?」ゾゾゾ

島風「大佐……何かあったの？」

提督「え？」

雪風「そんなに愛想が良くて笑う大佐なんて大佐じゃないです……」グス
提督「なに？」

島風「あ、今の太宰つばい！」

雪風「ほ、本当です！ ちょっと怖くて気分を害した顔をしてました！」ペア

提督「…… お前たちは一体何を言ってるんだ」

不知火「いつもの太宰らしくないと言っているんです」

島風「わつ、不知火ちゃんいつの間に」

不知火「失礼。休憩中の所為かは解りませんが、ドアが開きつばなしだったもので」

提督「ああ、ドアを閉めるのを忘れていたのか」

雪風「…… 太宰」

提督「ん？」

雪風「なんだか疲れてませんか？」

不知火「なるほど。つまり鳳翔さん達に振り回された所為で大人の女性との恋愛に飽きて少女趣味になったと」

提督「おい、自然に自分の願望を織り交せて俺の心労を曲解するな」

雪風「そうだったんですか…… 大人の恋愛は大変なんですね」

提督「雪風ありがとう。お前は天使の様に優しいな」ニコ

雪風「ひい!」ゾゾ 不知火「っ!」ゾゾ

島風「もう! 二人を苛めちゃだめだよ大佐!」

提督「はっ」

不知火「……なるほど。これは重症ですね」

雪風「完全に心の癒しを子供に求めちゃってますね」

島風「それってダメなの?」

不知火「不知火達的には幸運なんですしょうけど……」

雪風「大佐本人の性格が壊れてちゃダメですよ……」

提督「俺は……フルフル」

雪風「あ、ようやく自覚してきたみたいです」

不知火「大佐、不知火達に癒しを求めるのは結構ですが、ご自分を見失っては困りま

す。求めるなら『卑し』にして下さい」

提督「おい、不知火。お前今どういう意味で同じ音の言葉を二回言った?」

島風・雪風「?」

不知火「不知火は下着くらいなら大佐に平気で見せることはできますよ?」ピラ

雪風「きゃっ」カア

島風「パンツを見られるのが平気なのがどうかしたの？」キョトン

提督「よし、俺はった今完全に調子を取り戻した。だからお前たちはここから出ていけ」ヒラヒラ

雪風「ええ!? 雪風もですか!」ガーン

島風「わたし何もしてないよ!」プク

不知火「反省しました。なのでここに居させてください。頭撫ってください」
ギャーワー

提督（ふう……… やはり何だかかんと言つて、こいつら無邪気な反応は癒しになるな」

第35話 「完遂」

サブ島沖海域、危険区域

鈴谷「これで…… 決まりじゃん!!」

ドォーン!

タ級A「……!!!」

足柄「悪いわね、これで終わりよっ」

ズガアォーン!!

タ級B「っ!?!」

夕立「バイバイ! もう会いたくないけど、君本当に強かったよ!」

響「今度は艦娘として生まれ変わってきてね」

チュドーン!!

へ級・ヨ級「……」

B i s 「貴方の海はここでお終い! A u f W i e d e r s e h e n ! (ツフ

ヴイーダーゼーン)」

ズドオォォーン!!

戦姫「xxxxxx!」

金剛「Hey! 逃がさないヨ! …… See you again!!」

ドウ! …… ヒュウウウウウ… ツ、バアアアアン!!

ワ級「!!!」

金剛「Yeah!! やったネー!!」

Bis「勝ったわああ!!」

足柄「ふう… やつと終わった」

鈴谷「あ、緊張が抜けたらおしっこしたくなっちゃった」

響「感動が一気に台無しだよ…」

夕立「あははは! でも、分かる。夕立も」

金剛「二人とも! ちょっとは勝利のヨインにひたらせてヨ!」

Bis「… プルプル

足柄「我慢しなさいよ?」

響「さ、大佐に勝利の報告をしに行こうか」

↳ 提督執務室

加賀「大佐、先程金剛さんからサブ島沖海域の完全制圧が完了したとの報告があらま

した。彼女たちも間もなく帰還するものと思われます」

提督「そうか…… やつと、か」

加賀「…… 長かったですね」

提督「まあな。夜戦用の装備がある程度揃っていたからなんとかあったが、それまでは本当に制圧できるか疑問に思うまでになっていたからな」

加賀「お疲れ様です」

提督「ありがとう」

加賀「あと、追加で報告があるのですが」

提督「なんだ？」

加賀「制圧の可能性に手応えを感じてから、彼女たちの希望だったとは言え、連続で出撃した事により資材が少々……」

提督「まあ、それは覚悟の上だ。どんな状況だ？」

加賀「こちらを」

『鎮守府保有資材数量：燃料・鋼材・ボーキ／6桁 弾薬／4桁』

提督「まあ、毎度の事だが弾薬が厳しいな。まだ4桁をギリギリ維持してるだけマシンか」

加賀「安心しているとところ申し訳ないのですが、更に追加の報告があります」

提督「なに？」

加賀「今回の出撃で2交代制で出撃していた霧島のグループで川内が上位改造可能練度に達しました」

提督「なるほど、改造か……許可しないつもりはないが確かに出費が痛いな」

加賀「残念ながら上位改造を受けられるようになったのは川内だけではありません」

提督「ん？」

加賀「今回の戦果で本部より勲章が授与されることになりました」

提督「利根と筑摩……」

加賀「そうです。二人とも既に改造を受ける事ができる練度には達しています。加えて、これに必要な勲章の数も揃う事になります」

提督「……弾薬はどれくらい残る？」

鎮守府内で「運動不足による不満が爆発するレベル、でしょうか」

提督「……」

加賀「またあそこの提督にお願いしますか？」

提督「今回ばかりは仕方あるまい」

加賀「分かりました。後ほど連絡を取ってみます」

提督「頼む」

加賀「最後にまだ報告があるのですが」

提督「まだあるのか」

加賀「これで最後です」

提督「なんだ」

加賀「今回の作戦でマリアさんが成長限界に達しました」

提督「……………」

加賀「幸い、本人はまだ気づいてないようですが……………」

提督「……………」

加賀「大佐」

提督「ああ」

加賀「指輪、どうします?」

提督「……………」 お前と長門は確かレベルは一緒だったな。いくつだ」

加賀「もうすぐ98になります」

提督「……………」 そうか。直ぐ、だな」

加賀「大佐……………」

提督「……………」 本部に指輪を発注する」

加賀「っ、大佐……………」 !」 ウル

提督「もう決めた…………… いいか？」

加賀「き…………… 聞かないでくだ…………… さい…………… ぐす」

提督「加賀……………」

加賀「大佐つ……………」

チュツ

提督「ん……………」

加賀「んちゅ…………… ちゅ、ちゅ…………… ぺろ」

提督「ちゅ…………… 加賀、ここでは駄目だ。もうすぐ金剛達も帰つて…………… んぐ」

加賀「はあ…………… ちゅ、分かつて…………… ます。キス、だけ……………」

提督「いや、だから金剛達が……………」

バン!!

鈴谷「うう、トイレトイレく！ あ、大佐。大佐のトイレちよつと貸し……………」

夕立「たっだいまあ！ あれ鈴谷さんどうし…………… た……………」

Bis「ねえ、二人とも行かないの？ なら私が先…………… さ…………… き!?!」

足柄「どうしたの？ 大きな声を出して何かあつ…………… た……………」

金剛「大佐ア！ 勝利の報告をしにき…………… って何をしてるネエ!?!」

響「見境がないね。そういうのも有り、かな」

提督「……皆、落ち着け。これは……んんっ」

加賀「ダメです。大佐、今は私だけ見て……ん、ちゅ……」

金剛「ちよ、ちよつとお!!? やめるデス!!」

Bis「な、なんで加賀だけなの？ 私も！ 私もして欲しい!!」

足柄「……う」カア

響「して欲しいならしてって言えばいいと思うけど？」

鈴谷「鈴谷ちよつといきなり乱交はあ……あ、漏れちやう。大佐、トイレ貸してね

！」

バタン

夕立「ああ、羨ましいけど、こつちも余裕ないっぽい！ 鈴谷さん早く早くう！」モ

ジモジ

金剛「加賀ア！ 独り占めはダメよ！ 代つて代つて！」

Bis「ちよ、ちよつと待ちなさい。ジャンケン！ ジャンケンで公平に決めるのよ

！」

足柄「あ、あの……それわたしも……」

加賀「んちゅ……ごめんなさい。もうちよつとだけ……」

提督「か……ん……」

加賀「つはあ……大佐」

提督「加賀もうや……ん？」

加賀「大好きです。そしてありがとうございます」ニコ

チュ

金剛「ちよつとー!?」ブアッ

Bis「わ、私もしてよお!?」ジワ

足柄「わ、わたしも忘れちゃ嫌……よ?」グス

コンコン

響「夕立、まだ? 私も使いたい」

鈴谷「うわつ、すつごい状況。修羅場つてやつ?」ニヤニヤ

提督（せっかく持ち直した気力が……資材が……作戦の成功を喜ぶ機会

が……や、やはり子供が一番……）

チーン

第36話 「改造2」

利根 「大佐、戻ったぞ！」

筑摩 「只今戻りました♪」

川内 「戻りましたあ。にん！」

提督 「……」

利根・筑摩 「……」

川内 「ちよ、何か反応してよ!!」

提督 「ああ…… 改造を受けたん…… だな？」

川内 「受けましたよ！ 失敗なんかしてませんよ!?!」

利根 「川内の奴は極端なのじゃ。吾輩の様にこう恰好良くないと、な？」

筑摩 「姉さん、素敵です♪」

川内 「いや、私だってこのデザインはどうかと思ってるから！ 希望のと大分違って

驚いてるから！」

提督 「服のデザインはお前達の希望だったのか」

利根 「うむ。吾輩前々からこういう妖艶な雰囲気のを着てみたくな」

筑摩「私はちょっと恥ずかしかったのですが、姉さんと一緒ならという事で」

提督「その様子を見るとかねがね希望通りみたいだな」

利根「うむ、吾輩は満足じゃ♪」

筑摩「……」ピラツ（大佐、こういう服好きなのかな……）

川内「私は神通みたいに凛々しくも可憐で、それでいて威厳があるのって言ったの
に……なんで忍者になるのよ!？」

提督「何となくどうして川内がこうなったのか解った気がする」

筑摩「そうですね。何事も注文を付け過ぎてはいけませんね」

利根「恐らく、技術部も川内が何を求めているのか解らなくなったのじゃろうな」

川内「だからってなんで忍者なのよお!? こんなカツコイイマフラーまでくれちゃつ
てさ!」モフモフ

提督「……実は気に入ってるんじゃないか?」

川内「そんなわけないでござろう! ……あ」

提督「……」

利根「単純な奴じゃ」

筑摩「に、似合ってますよ。川内さん」

川内「うう……」プルプル

提督「……ふう、川内」

川内「な、なんです……か」

提督「これでやつとお前の本領が発揮できるな」

川内「え？」

提督「忍は闇の中でこそ本領を発揮するものだからな。お前は以前から夜戦を得意（希望）としていたし、これでようやく完全体になったんじゃないか？」

川内「か、完全体……」

利根（大佐め……言いよる）

筑摩（これってただ言いくるめてるだけよね？ 川内さんが納得するならいいけど……）

提督「夜戦の王、正に『夜王』だな。前回のサブ島沖攻略作戦、お前の改装が間に合っ
ていればもう少し作戦の成功が早かったかもな」

川内「や、夜王……！」キラキラ

利根（落ちたな）

筑摩（凄く目が輝いてる……）

提督「川内、お前の今後の活躍に期待しているぞ」

川内（期待！）

川内「は、はい！ どうぞこれからの川内の活躍にご期待ください！ 夜王の異名に相応しい働きを示して見せます！」

提督「ああ。期待しているぞ」

川内「はい！」トテテ

提督「？」

川内「……」ジッ

ポン

提督「頑張れよ」ナデナデ（まるで犬だな）

川内「あ…… えへへ♪」

利根・筑摩「……」

利根「大佐よ」

提督「ん？」

利根「吾輩達には期待してくれないのか？」

筑摩「ほら！ 火力も上がりましたし、水上爆撃機だつて飛ばせますよ！」

提督「ああ、勿論お前たちにも——」

川内「大佐あ、手が止まっていますよ。もつと、もつと撫でて下さい♪」スリスリ

利根「ほう……」

筑摩「へえ……」

提督「おい、何を考えている」

利根はいきなり四つん這いになると、そのまま提督に近づいてきた。

元々深いスリットから覗いていた太ももが、四つん這いになる事によって更に露出し、その艶かしい肌が提督の目にも明らかになった。

利根「大佐あ」

提督「……なんだ？」

利根「吾は……利根も撫でて欲しい、ワン」スリスリ

川内「なっ」

提督「そんな事をしなくても撫でるくら——」

筑摩「大佐……筑摩も撫でて欲しいです……あ、ワン」スリスリ

川内「」

提督「筑摩、お前まで……」

利根「大佐あ撫でてくれないのか？ それならお主の胸を借りるしかないぞ」

ピト

筑摩「ん〜♪」スリスリ

川内「なあ!？」

利根「ん、大佐の胸は大きくて硬いのお。逞しい男の胸そのもじゃ。これは癖になるワ♪」スリスリ

提督「おい、利根。撫でてやるからやめ——」

筑摩「大佐…… 筑摩も忘れないで下さいワ♪」ギョツ、ピト

川内「にやあ!?!」(震え声)

提督「…… 腕に当てるな」

筑摩「何事ですか、ワ♪? 筑摩はい犬なので何を言ってるのか分からないです、ワ

♪」スリスリ、ムニユムニユ

利根「大佐あ♪」スリスリ

筑摩「大佐……」ムニユムニユ

提督「……」(もう、気が済むまで放っておこう)

川内「……」ムニユムニユ

川内「…… つ、!」ブアッ

提督「川内? 何を泣いて……」

川内「大佐つ、大佐はやっぱり胸が大きい子がいいんですかあ!?!」メソメソ

提督「なに?」

川内「私は別にある方じゃないけど、それでもゼロじゃないですよ!?!」

提督「そんなに必死に訴えなくても分かって——」

川内「じゃあ私の事を忘れないで下さい！ 撫でてえ！」ビイツ

提督「……」

数十分後

川内「ぐす……すん……」ギユツ

利根「ゝ♪」スリスリ

筑摩「ん……ん♪」ギユムギユム

提督（俺は何してたんだけな……）ポンポン、ナデナデ

第37話 「贈り物」

B i s 「♪」

B i s 「……」 サツ、ジツ……

B i s 「えへへ♪」 ニコニコ

金剛 「Um? hey マリア。何だか嬉しそうネ！」

B i s 「あ、金剛。うん、まあね♪」 アシプラプラ

金剛 「どうしたデス？」

B i s 「んー? 実はあ、私も金剛と一緒に指輪を貰ったの♪」

金剛 「Oh really? マリアいつの間にかそんなレベルが上がったの

ネ」

B i s 「まあ、私自身が気づいてなかったくらいだから、自分でも意外だったわ」

金剛 「これで指輪を持つ best friend が増えまシタ。ワタシ嬉しいネ

♪」

B i s 「加賀や長門ももう直ぐつて聞いたわ。意外に一夫多妻な提督の環境早くでき

そうね♪」

金剛「ま、いくら wife が増えても大佐への愛は負けるつもりはないケドネ！」
Bis「それは私もよ？」

金剛「フフン、いい返事デス」

Bis「あなたも、いい意気込みだわ」

金剛「……………」

Bis「……………」

金剛「ぶつ、あはは♪」 Bis「フフ♪」

Bis「はあ、でもケツコンかあ、結婚……………」 ふふ♪」

金剛「……………」 (本当に幸せそう。可愛いなあ)

金剛「ネエ、マリア」

Bis「ん、なに？」

金剛「これで晴れて夫婦になれたんだカラ、これからは遠慮なく大佐に k i s s

とかができるネ♪」

Bis「つ、そ、そうね……………」 夫婦なんだからキスくらい普通よね……………」 よし、こ

れからはしてみよう」グッ

金剛「人の事と言えないケド、マリアも本当に大佐の事が好きネ」

Bis「え？ うん、まあ……………」 私が艦娘という事もあるんだろけど……………」

金剛「ケドなに？　もしかして大佐に惚れた　story　でもあるノ？」

Bis「結構単純よ？　私ここで生れた時、戦艦ではただ一人の海外艦だったから表面は取り繕ってても実は内面では寂しかったの」

金剛「うんうん」

Bis「そんな時、大佐が私に声を掛けてくれたの『一緒に釣りでもしないか？』って」

金剛「Oh　釣りですカ……………」

Bis「ふふ、そうよ？　金剛の思っている通り何も釣れなかったし、ただ座っているだけで凄く退屈だったわ」

金剛「で、ですヨネ……………」

Bis「でもね、その時大佐が私に言ってくれたの『今までこんなに周りを気にしないで退屈な事があったか？』って」

金剛「ハア？」

Bis「そうよね。そういう反応しちゃうわよね。私も実際そんな反応をしたんだと思う。そしたら大佐が今度は『今本当にストレスのない顔をしてるぞ』って」

金剛「ん……………」

Bis「その時からかしら。私が大佐に対しては気兼ねなく接するようになったの」

は」

金剛「それがきつかけデ、いつの間にか惚れてたカンジ？」

B i s 「そうね。そうだと思う。実際、それから大佐と関わる度にどんどん好意をもつようになつたし」

金剛「そつかア。フフ、なんだかワタシと似てるネ」

B i s 「金剛もそうだったの？」

金剛「ワタシは……金剛型の中でも取り分け『私』は提督に好意を持ち易いようになつてるみたいデ」

金剛「最初はワタシも大佐が好きなのは当たり前、というヨリ仕方がないといった感覚だったワ」

B i s 「……」

金剛「でも、ワタシがどんなに積極的に接しても大佐の態度はあまり変わらなかつたノ。いつも避けてたというカ、まともに相手をしてくれなかつたといウカ」

B i s 「昔の大佐ネ」

金剛「ウン。でもね、その頃からあの人には、中々表には出してくれなかつたケド、ワタシたちの事を常に気遣う心があつたノ」

金剛「ワタシは、それに気づいた時から本当に彼に振り向いて欲しくなつて、努力

するようになったワ」

B i s 「ふふ、それって昔より過剰に接するようになったって事でしょ？」

金剛「あはは、まーネ。B u t 紅茶の美味しい淹れ方とかは本当に練習したワヨ？」

B i s 「ああ、金剛の淹れてくれた紅茶は本当に美味しいわよね。私、それを飲むまではコーヒー派だったのに、今ではすっかり紅茶の方が好きになったわ」

金剛「W o w ! それは大変な h o n o r ㇿ。T h a n k y o u v e r y m u c h ㇿネ」

B i s 「お茶一つで感謝し過ぎよ……あ、話してたらちよつと飲みたくなった」

金剛「良かったら飲みにクル？ せっかく褒めてくれたんだし、淹れるワヨ？」

B i s 「いいわね。ご馳走になろうかしら」

金剛「y e a h ! じゃ、早速行きまシヨウ」

第38話 「予想外」 R—15

三隈 「あ、貴女達あまりにもはしたないですわよ！」

最上 「あ、三隈久しぶりー」

熊野 「あら三隈さんお久しぶりですわ」

鈴谷 「zzz」 ポリポリ

三隈 「す、鈴谷あ！ 婦女子が寝ながらま、股を搔くんじゃありません！」

鈴谷 「んー？ なにに？ うるさいなあ」

三隈 「うるさい、じゃありません！ 鈴谷、この惨状は貴女の仕業ですわね!」

鈴谷 「え？ なにいきなり？」

三隈 「しらばくれても駄目ですわよ！」

鈴谷 「だからあ、鈴谷が何をしたつての？」

三隈 「だ、だから……ゴニョゴニョ」

鈴谷 「え？ 何、聞こえない」

三隈 「つ、ここにいる人たちが全員ショーツを穿いていない事です！」

鈴谷 「あー、なんだそんな事。別に鈴谷は何もしてないし。皆暑いから脱いだだけだ

し」

三隈「え？」

鈴谷「そうっしょお？ ねー皆あ」

最上「まあね」

熊野「の、ノーコメントですわ！」

鈴谷「ね？」

三隈「そ、そんな……」

三隈はその事実にかげりとした。

鈴谷「てかミツクンも暑かったからここでは脱いでいいんだよ？」

三隈「そ、そんな事するわけ……！」

鈴谷「一回やってみなつて。凄くスースーしてかえつて気持ちいいよ？ スカートつ

てこの為にあるんだつてくらい」

三隈「だから私はやらな——」

鈴谷「もうっ、強情だね！ 一回やってみなつて！」ズルツ

三隈「きやあああ!？」

鈴谷「お？ ミツクンつてば黒いの穿いてんじやん。結構色っぽい穿くんだねえ」

熊野「く、黒？」

最上「へえ」

三隈「か、返して！」

ゴト

鈴谷「はい。扇風機」

三隈「え？」

鈴谷「当てたら返してあげる」

三隈「何を……」

鈴谷「当てて気持ち良くなかったら返してあげる」

三隈「そんな…… 大体当てたらみ、見えちゃう……」

鈴谷「女同士なんだから気にする事ないじゃん。ほら、鈴谷も見せるから」ペラ

三隈「や、やあ……」

鈴谷「鈴谷のだけじゃダメ？ ならクマノンとモガミンのも見たらいいよ」

三隈「ええ!？」

熊野「い、いきなりそんな事……。それに改めて言われると……」

鈴谷「あー、自分じゃ見せられない？ じゃ、鈴谷が手伝ったげる」

熊野「け、結構ですわ！ は、はい」ペラッ

三隈「な…… 熊野さん貴女まで……」

鈴谷「ね、クマノンのココってさ、鈴谷も人の事言えないけど、なんか赤ちゃんみたいで可愛いくない？」

熊野「んいやあ、鈴谷そんなこと言わないで……」

三隈「そ、そんなこと…… 知りません！」

鈴谷「純情だなあ。ま、それがミックンのいいところだけだね。はい、次はモガミンだよ」

最上「僕はもう最初から見えてるじゃん。ほら、好きなだけ見なよ」

三隈「……」

鈴谷「ね？ 皆そうでしょ？」

三隈「け、けどお……」

鈴谷「ほら、覚悟を決めてミックンも見せなつて。案外一度やったら場所さえ限定すれば気にならなくなるって」

鈴谷「ほら、早く早く。皆も見たがってるよ」

熊野「三隈の…… あ、いえ」カア

最上「僕は別に…… あ、でも黒い下着履いてたんだよね？ 大人つつぽいの穿いてたつて事はもしかして……」

鈴谷「えっ、もしかしてミックンって、生えてる？」

三隈「は、生えてませんわ!!」バツ

鈴谷「あ、本当だ。ミツクンも生えてないね。てか、熊野んと一緒になんか可愛い」
最上「あのさ、さつきから聞いてたら、僕のは可愛くないみたいだに聞こえるんだけど？」

鈴谷「あ、そういうわけじゃないけどさ。ほら、クマノンとミツクンって普段からちよつとお嬢様してるじゃん？ だからなんというか」

最上「なるほどね。言いたいことは大体解ったよ。ふーん、でも言われてみれば……」ジツ

三隈「ひやつ。そ、そんなに見つめないで……」カア

熊野「も、最上近いですわ。い、息が……はあ……」

鈴谷「ね、可愛いっしょ？」

最上「んー……」
ぷに

三隈「ひゃあっ!?!」

最上「へえ、こんなにやわらかかったんだ。これはちよつと癖になるかも」
ぷにぷに

三隈「あ、ちよ、やつ。ああんっ」

熊野（三隈さん恥ずかしがってるけど、気持ちよさそう……）

熊野「ん……」モジモジ

鈴谷「お？ クマノンだったら、もしかして発情しちゃった？」ニヤ

熊野「そ、それは……」カア

最上「鈴谷、それ以上やると可哀そうだからやめてあげたら？」

鈴谷「ん？ あ、そだね。やめよつか。可哀そうだし」

三隈・最上「えっ」

鈴谷「あ？ もしかして期待してた？ だったらメンゴ！ 鈴谷一応そういう趣味な
いつていうか、やるにしてもムードを大切にする方だから」

最上「同じく。ごめんね、生憎今はそういう気分じゃないんだ」

三隈（な、生殺し……！）

熊野（こ、この二人本当に天然……！?）

三隈「う、うう……べ、別に平気ですわ」プルプル

熊野「そ、そうです。な、何も期待なんかしていなかったですわ」プルプル

鈴谷・最上（可愛いなあ）

最上（だからこの二人は本当に）

鈴谷（愛しくて弄り甲斐があるよねっ）

第39話 「鬱」

山城「大佐、良い天気ですね」

ピシヤツゴコロ！

ザアザア……

提督「……」

山城「あらあ？ 急に嵐になっちゃうなんて、無礼にも姉様の真似をしちやったからかしら？」ニヤア

提督「……ズズ」

山城「まあ、私なんてどうせ欠陥戦艦だし……こんな事言ったところで……」

提督「……」パラパラ

山城「はあ……不幸だわ」フウ

提督「……」カキカキ

山城「ちよつとお!!」バン

提督「やめろ、机を叩くな。字がズル」

山城「そんな事より何さつきから無視してるんですかあ!？」

提督「…… 声を掛けて貰いたかったのか？」

山城「当たり前です！」バンバン

提督「叩くな。…… 前から思っていたが山城、お前の感情表現は解りにくい」ピシッ

山城「うっ……」

提督「憂鬱な気分なのは判るが、さっきまでの独り言では逆に声を掛け難いぞ？」

山城「そ、それでもお……」ウル

提督「泣くな。取り敢えず仕事をしろ。そうすれば仕事をしながら話を聞いてやるから」

山城「そこはせめて慰めてから仕事をする、って言つて下さいよ！」

提督「駄目だ。今は余裕がないし、お前の力量を信じての事だ」

山城「わ、私の力……」

提督「別にお前は戦闘が全てというわけじゃないだろう？」

山城「あ……」

提督「鳳翔が料理が上手かったり、霧島が見た目に反して好戦的だったり、人には意外な長所があるものだ」

山城「大佐……」（最後の霧島のはどうなのかしら）

提督「助けてくれないか？」

山城「ええ！ 分かりました！ お任せください！」　　ペア

——2時間後

提督「……なるほどな、欠陥戦艦のジंकウスから抜け出せないのと、俺に姉が取られそうで嫉妬していたわけか」

山城「もうちよつとオブラートに包んでくれないですか！ 直球過ぎです！」

提督「ここは下手に遠まわしに言うよりいいと思っただが」

山城「まあ大佐らしいですけど……」

提督「ふむ。まず前者についてはそんなことはないと思う」

提督「お前は『航空戦艦』としては立派に活躍しているし、気にしている性能の落差も艦隊のメンバー編成によっていくらかでもカバーできるしな」

山城「そ、そうかしら……」

提督「火力の低さを気にしているのか？ 大丈夫だ。その代わりにお前は艦載機を搭載できる『戦艦』なんじゃないか」

提督「しかもその種の戦艦は現状、伊勢型とお前達扶桑型しかない。これはなかなか貴重な存在なんだぞ？」

山城「う、うん……」

提督「それに、今後例え同種の新艦を抱えることになったとしても、それによってお前たちの扱いは変わることに無い。これは予め約束する」

山城「大佐……」

提督「だから、な？ 自信を持って」ポン

山城「あ、ありがとう……ございます。えへへ♪」

提督「後は扶桑の事か……。これは単純に俺が彼女の好意を丁重に断れば済む……」

山城「あ、それ却下です。それやったら姉様泣いてしまいます。そして泣いたら私もしかししたら大佐を……」

提督「物騒な事を言うな」

山城「まあ、どうするかは半分冗談として」

提督「半分は何をするつもりだったんだ」

山城「(無視) 姉様を泣かせるのは認められません」

提督「泣くのは確定なのか」

山城「悔しいですけど、姉様大佐の事大好きですから」

提督「……そうか。光栄の限りだがそれだとどうすればいいものか」

山城「簡単ですよ。私も大佐が好きになればいいんです」

提督「なに？」

山城「私も大佐が好きになれば、私の大佐への嫉妬心は今よりかはマシになると思います。この人なら好きになるのも仕方ないって」

提督「それはあまりにも強引な理論じゃないか？」

山城「大佐は私が嫌いなんですか？」

提督「極端だぞ。好きか嫌いの二択なら選択肢は一つしかないじゃないか」

山城「え？ と、と言うと……？」

提督「好き、しかないだろう」

山城「きゅ、急に恥ずかしい事言わないで下さい!!」カア

提督「…… 一体どうしろと」

山城「と、取り敢えずもう仕事終わってますよね？」

提督「ん？ ああ、お蔭様でな。ありがた」

山城「じゃ、じゃあこ、恋人になるステップとして私を抱きしめてください」

提督「おい、『好きになる』から既に『恋人になる』へステップアップしてるぞ」

山城「つ、い、いいですから！ は、早く！」

提督「…… もう直ぐ昼休みか。分かった、ほら」

ギユ

山城「あ…………。そ、そのまま大佐の膝に座つてもいいですか？」

提督「ああ」

ギシ…………

提督「これでいいのか？」

山城「ん…………。あ、あと…………。」

提督「ん？」

山城「わ、私がいいって言うまで頭撫でて下さい」

提督「了解」

ナデナデ

山城「ん…………。ふう…………。そう、です。あ…………。うん、そのままですよ？　まだですよ…………？」

——数分後

山城「す…………。す…………。」

提督（案の定寝てしまった。これでは、撫でるのを終わる事ができないな）

グウ…………

提督「腹…………。減ったな」

第40話 「最怖」

山城「すー……すー……」

提督（さて……これだけ熟睡してたら撫でるのをやめても気付かないだろ）

提督（外も晴れて陽が差してきた。俺も少し眠らせて……）

ピシヤツゴロロロ！

ザアアアアアアアアア!!

提督「……」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

扶桑「……」

扶桑「た・い・さ♪」

提督「扶桑……」

扶桑「山城に浮気ですか？」ニコッ

提督「お前には言い訳にしか聞こえないだろうが、俺は……」

扶桑「解っていますよ。大佐の愛は私だけに向けられているものではありませんから

ね」ニコ

「でも」

扶桑 「流石に妹を手籠めにしちやつてるところを見ちやうと、嫉妬しちやつても仕方ないですよね？」ニコオ

ズゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

提督 「…… つく」

扶桑 「大佐あ、まさか山城にだけこんな事をして、私には無しか言いませんよねえ？」

提督 「いや、俺は今から昼寝でもしようかと……」

扶桑 「じゃあ、一緒に寝ましょう？」

提督 「山城が……」

扶桑 「それなら私にお任せ下さい」

扶桑 「ん…… つしよ、と」ヒヨイ

山城 「んむう…… にやあ……？」

扶桑 「山城、良い子ね……」ナデナデ

山城 「ん……」スリスリ

扶桑 「はい、良い子良い子。ほら、ソファに行きませうねえ」
そ……

山城「ん………… すー………… すう…………」

扶桑「はい♪」

提督「いや、何がハイ、だ」

扶桑「寝ましよう?」

提督「もうソファアが空いていない」

扶桑「ベッドがあるじゃないですか」

提督「昼間から何を…………」

扶桑「大佐」

ピシヤツ!! ゴロゴロツ!

提督「、っ」

扶桑「嵐………… 止んだ方がいいと思いませんか?」

提督「まさか………… 冗談だろ、流石に」

扶桑「大佐…………」

ゴゴゴゴゴゴ

提督「つく」

ピト

扶桑「休み時間の間だけでいいですから……」

提督「……一緒に寝ると暑いぞ？ 汗の臭いも……」

扶桑「私シャワー浴びましたし、大佐の臭いなら別に……」

提督「降参だ。嵐を鎮めてくれ」

扶桑「ええ？ 何の事ですか？ ふふ……」

提督「……なあ」

扶桑「はい？」

提督「そんなに抱き着いて、暑くないか？」

扶桑「心地良いですよ？ 私はこの温かさは大好きです」ギョツ

提督「臭い……本当に大丈夫か？」

扶桑「汗ですか？ そうですね……くんくん」

提督「おい」

扶桑「あ、逃げないで下さい。ん……すん」

提督「これは……思ったより恥ずかしい」

扶桑「そうですね。確かに僅かですけどします」

提督「僅かか？」

扶桑「気にしないで下さい。私、この匂い好きです」

提督「汗の臭いが好きと言われてもな」

扶桑「臭い、じゃありませんよ。匂い、です」

提督「……………」

扶桑「大佐こそ、私の……………大丈夫ですか？」

提督「シャワーを浴びて来たんだろ？ それこそ香り立つような良い匂いしない」

扶桑「ふふ、大好きです♪」ギョツ

提督「ん……………足なんか絡めたら、見えるぞ」

扶桑「見てもいいですよ。自信がないわけじゃないですから」

提督「今は……………な」

扶桑「ですね。じゃあ感触だけでも」グツ

提督「ふう……………」

扶桑「あ、興奮してます？」

提督「お前に言われたくはないな」ソツ

扶桑「あ……………」

提督「これくらいで今は我慢、だな」ナデ

扶桑「ん……………これは寝過ごさないように注意しないと♪」

提督「同意だ」

グウく…………

扶桑「…………」

提督「すまん…………」

扶桑「つぷ、くすす………… 山城ったら。大佐、ごめんなさいね」

提督「いや、山城は責めないでくれ」

扶桑「ふふ、大丈夫ですよ。お食事お持ちしますね」

提督「3人分頼む」

扶桑「………… ありがとうございます♪」

第41話 「偶然」

提督「……………」ダラダラ

大淀「……………」ニコニコ

武蔵「？」

大淀「大佐、何か言う事は？」

提督「ない。敢えて言えば間が差したとしか……………」

大淀「弾薬どうするんですか？」

提督「そこは、武蔵の誕生日という事にはいかないだろうか。仮にも一回で生まれて来てくれたわけだし……………」

大淀「その“一回”でこの鎮守府がどれだけ窮地に立つ結果になってしまったのか解つてます？」

提督「……………」そうだな。弾薬の交換の話が成立してなかったら終わっていたな」

大淀「全く、大佐らしくない……………」

提督「申し訳ない。男というのはこういう時に衝動で動いてしまうものなんだ。今日俺も、その類の例に漏れないという事をつくづく痛感した……………」

武蔵「な、なあ。私生まれたら駄目だったのか？」

大淀「そんな事はありませんよ！ 武蔵さんは間違いなく大戦力のひとつですから。わが鎮守府には絶対必要な戦艦です！」

武蔵「大戦力……！ そ、そうか！ そうハッキリ言つて貰えると嬉しいものだな」テレテレ

大淀「問題は、大佐です。間が差したとは言え、前の作戦で消費した弾薬の補充もできていなかったのにまさか大型建造をしてしまうなんて……」

提督「重ね重ね申し訳ない。腹を切れと言うのであれば、新しい提督着任の要請を次第すぐにこの場で……」

大淀「誰もそんな事言つてません。大佐の事大好きなんだから死なれても困ります。というか死ぬなんて絶対に許しません」

提督「申し訳ございません……」

武蔵（だ、大好き……）

武蔵「な、なあそんなに弾薬が…… 弾薬だけがヤバイのか？」

大淀「はい。それ以外は全く問題ありません。何せ弾薬以外は保有限界量を常に維持してますから」

武蔵「そ、そうか」（あ、結構私に向いてる鎮守府だったみたいだ）

提督「望月や加賀に会わせる顔がないな……」

大淀「正直に言った方がいいところでしょうけど……まあ、表面上は取り繕ってごまかせるくらいの量がありますから。そこは私が何とかしてみせます」

提督「できるのか？」

大淀「その為に一時的にこの仕事に復帰したんです。執務専任の私の力、甘く見ないで下さい」

提督「頼もしいな。あ、いや、頼りない提督で本当にすまない」

武蔵「た、大佐。もうそんなに謝るのはやめてくれ。わ、私を建造してくれたんだろ？ その事に関しては私は凄く感謝しているから」

大淀「そうですね。今回はただの戦力の拡充ではなくて、大幅な拡充になりましたからね。その点だけは喜ぶべきだと私も思います」

提督「……」

大淀「大佐、もうしませんか？」

提督「誓って」

大淀「今度からは建造する前に必ず相談してくださいね？」

提督「必ず」

大淀「キスして下さい」

提督・武蔵「え？」

大淀「何か？」

提督「いや……………失礼する」

チユ

大淀「ん……………ちゅ……………ん……………ふ……………」

武蔵（わ……………わ……………）カア

提督「ちゅ……………ん……………」（長い……………）

大淀「ん……………れろ……………ちゅ……………ふう」

提督「つ……………ふう……………はあ」

大淀「はい。よく出来ました。これで全て許してあげます」

提督「あ、ああ。ありがとう」

武蔵（す、凄いキスだったな……………）ポ

大淀「あ、武蔵さんもします？」

武蔵「ええ!? なんで私が!? あ、いや嫌いとかじゃないけどあまりにも振りが唐突

というか」アセアセ

提督「おい、流石に無理があるぞ」

大淀「そうですか？ この鎮守府にいる艦娘は基本、全員大佐の恋人だと思っていた

のですが」

武蔵「こ、恋人……」カア

提督「せめて本人の意思くらい尊重してやれ」

大淀「まあ、そうですね。確かにそこは私の勝手でした。武蔵さんごめんなさい」

武蔵「ああいや、別に！ 私も嫌だったわけじゃ！」

大淀「へえ？」ピク

武蔵「え？」

大淀「〃私の大佐〃の恋人になる機会を自ら辞退したにも関わらず、キスは嫌じゃなかった？」

武蔵「え、いやそれは……」

大淀「武蔵さん、貴女は大変お強い戦艦なのでしようが、大佐の事はあまり安く見ないで下さいね。でないと……」ゴゴゴ

武蔵「あわわ……」ジワ

提督（大淀ってこんな性格だったのか。あいつの所で見た大淀とは大分違う気がするな）

大淀「……後悔しますよ？ いろいろと」ギロ

武蔵「ひゃ、はい！」

大淀「……なんて冗談ですよ。ちよつとこの鎮守府に配属になる上で軍人として心構えを持つて欲しかっただけです」ニコ

武蔵「ふ……ええ？」グス

大淀「私みたいな巡洋艦が偉そうな口をきいてごめんなさい。それじゃ、大佐。私は皆に武蔵さんを紹介する場を設ける準備とかをしてきますので」

提督「ああ、頼む」

大淀「あ、弾薬の件も忘れてませんからね。全てこの大淀にお任せ下さい。キスの分はしっかり働いてみせますよ」

提督「そうか……」

大淀「はい。あ、武蔵さん」

武蔵「はいっ」ビクッ

大淀「私は席を外しますので、後は大佐と適当に話して挨拶でもしておいて下さい」

武蔵「了解した。大淀殿！」ビシッ

大淀「そんなに畏まらないで下さいよ」ニコ

武蔵「す……申し訳ない！」ビクッ

大淀「だから大袈裟ですって。あ、もう行かないと。それでは失礼しますね」
バタン

武蔵「……………」

提督「まあその…………… 怖かったな」

武蔵「！」ピクッ

提督「我慢しなくていいぞ」

武蔵「！」ピクピクッ

提督（ん？ 髪が動いた……………？ 気のせいか）

武蔵「……………」クルッ

提督「ん？ 武蔵？」

武蔵「…………… た、確かに怖かった」プルプル

提督「そうだな。俺も気を付けないとな」

武蔵「な、なあ」

提督「ん？」

武蔵「抱き着いていい…………… か？」グス

提督「遠慮するな」

武蔵「つ…………… ふわあああああん！ 怖かったよおおお！」ダッ

提督（しまった。こいつは戦艦、しかも大和が……………）

ダキツ

提督「ぐうつ……………く……………むぐ……………ぐあ」ドゴ

武蔵「ふええええん！」メキミシ

提督（耐えろ、耐え抜け俺……………）

提督「む……………さし」

武蔵「ぐす……………なんだ？」

提督「もす……………少し力を緩めてくれたら撫でてやれるんだが……………」クラクラ

武蔵「あ……………うん、撫でて欲しい」パツ

提督「つ……………はあ……………ぜえ……………」

武蔵「あ、力……………大丈夫か？」アセ

提督「気に……………するな……………。それよりほら……………」

くしや……………ナデナデ

武蔵「あ……………ふあう……………ん……………」

——数分後

武蔵「ん……………」スリ

提督「落ち着いてくれてよかった」ナデ

武蔵「ん……この心地、良いな。好きだ」

提督「そうか。よかった」ナデ

武蔵「大佐」

提督「うん？」

武蔵「大佐は優しいな。それも嬉しかったぞ」カア

提督「……あまり強さを誇るなよ。強すぎる自負は心の負担も増すからな」

武蔵「うん……この鎮守府に来た時からもう私は大佐の命令をちゃんと聞くと決めたからな。大丈夫だ」

提督「賢い子だ」ナデ

武蔵「んん♪ だから……もう少し、いいか？」

提督「遠慮するなと言ったろ？」ナデ

武蔵「ふあ……ありがとう」

第4 2話 「昼休み2」

武蔵「なあ」

彼女「んー？」

武蔵「本部から各鎮守府へ『私』の建造許可が下りたらしいな」

彼女「そうね」

武蔵「ふふん」

彼女「……なにを自慢げにしてるの？」

武蔵「いや、いくら他の鎮守府の提督が『私』を造ろうが、ここにいる私は正真正銘の一人目だからな。他の奴は私がいるからできるわけで」

彼女「つまり自分がオリジナルなのが誇らしいのね」

武蔵「それだけじゃない。しかも私はお前に拾われた身だからな。やはり、作られた奴等とは違うんだよ」

彼女「……あまり差別的な発言をする子は好きじゃないわね」

武蔵「ご、ごめんなさい！」ブアツ

彼女「いちいち泣かないですよ。いくらなんでもあなたは私に対して隙があり過ぎ」

武蔵「だって、好きなんだ…… 仕方ない」

彼女「感情的な論理の帰結は認めませーん」

武蔵「い、意地悪しないで……！」グス

彼女「はいはい。分かったから」ナデナデ

武蔵「うん……」

彼女「それでも大和に続いて武蔵も、とはね」

武蔵「戦況の悪化か？」

彼女「どうだろう。今の状態だと戦い続ける限り決着はつかないからね。お互いに膠着が最も望ましい形なのだと思うんだけど」

武蔵「ふーん…… 敵が本気で来るのかも？」

彼女「それはそれで望むところよ。ここにいる艦娘は何れも全て“一人目”にして最強。まだ一部にしか公にしてない秘蔵艦もいる」

彼女「彼女たちに挑む事は私達の力を敵が思い知る事と同義。その時、私達は自分の仕事をして勝つだけよ」

武蔵「慢心はいけないぞ」

彼女「ふふ、慢心にしろ自惚れにしろ、自分に溺れる自信くらいないと提督なんてやつてられないわよ。いい？ 武蔵。だから私はあなたの提督なのよ？」

武蔵 「……」ポ

彼女 「ん？ なに？」

武蔵 「いや、カッコ良すぎて惚れ直してしまった」

彼女 「あら、ありがとう」

武蔵 「今晚は燃えそうだ」

彼女 「仕事中よ。そういう話は休み時間」

武蔵 「すまん」

彼女 「解ってるからいいわよ。んー、それにしても敵が攻めてくるかも、かあ」

武蔵 「久しぶりに全力で暴れてみたいものだな」

彼女 「あなたがそれをする時は死をも覚悟する時よ」

武蔵 「私とて戦艦だ。それくらい分っている」

彼女 「違う。解ってない。私は死んで欲しくないっていつ言ってるのよ？」

武蔵 「…… 提督！」ダキッ

彼女 「やめて。仕事できない」

武蔵 「やだ。暫くこのままがいい」ムギユムギユ

彼女 「またそんな事言って…… あ、もうすぐ休み時間か」

武蔵 「な？ いいだろう？」

彼女「ま、いいか。温かいし」

武蔵「最近寒くなって来たな」

彼女「そうね。…… そういえばあいつがいる所はずっと夏だったわね」

武蔵「大佐か？」

彼女「うん。あいつね、日本の四季が結構好きなのよ」

武蔵「そうなのか？ それじゃあ大佐にとっては年中暑いあそこは苦痛だな」

彼女「ふふ、それがそうでもないの」

武蔵「？ どういうことだ？」

彼女「あいつね。四季は好きだけど、寒いのが苦手なの」

武蔵「はあ？ ははは。なんだそれは」

彼女「面白いでしょう？」

武蔵「意外だ。大佐は表情がいつも硬いから何が苦手なのかも分り難かったからな」

彼女「でしょう？ 寒いとね。あいつ本当に外に出ようとしないのよ」

武蔵「そうなのか？」

彼女「真面目な顔していろいろ理由を着けて炬燵からなかなか出ようとしないの」

武蔵「へ？」

彼女「風邪になるから、とか。霜焼けになるから、とか。それはもういろいろね」

武蔵「信じられないな……」

彼女「ま、学生時代の話だから今はどうか分らないけどね。でも少なくとも今の環境はあいつにとってそう悪くない筈よ」

武蔵「なるほどなあ」

彼女「あ、休み時間がなくなっちゃうわね。武蔵、今日は食堂で食べるわよ」

武蔵「む……名残惜しが解放するか」

彼女「宜しい。行くわよ」

武蔵「ああ」

大和「……」

大和「中将、私達も食事行きましょう」

中将「あ？ 私達も？」

大和「あ、いえ」

中将「僕は今から煙草を吸うから、食事ならお前一人で行っていいぞ」

大和「中将……」

中将「おいおい。何て顔するんだ」

大和「お父さん、行きましょう！」

中将「いやだ。爺ちゃんと言え」

大和「えっ」

中将「爺ちゃん」

大和「じ、じ……」

中将「ほれ、どうした？」ニヤニヤ

大和「じ……うう……」ジワ

中将「ははははは。よっしや、可愛い孫に泣かれちや敵わんから行くか」

大和「最初からそうして下さい！」

第43話 「対抗心」

長門「……」ジーン

武蔵「な、なんだ？」

長門「いや、前に見た時も思っていたがやはり……」

武蔵「一体何の話だ？」

長門「胸だ」

武蔵「は？」

長門「武蔵は胸が大きいな。これは扶桑……いや、もしかしたら愛宕か五十鈴以上か……？」

武蔵「藪から棒になんなんだ。いきなり胸なんて」

日向「武蔵の言う通りだ。胸なんて飾りだ」

長門「日向、いくら戦艦の中では胸がない方だからといってひがむのはよくないぞ」

日向「なに？」

比叡「そうですね。いくら私達にも負けてるからってひがむのはよくないですよ！」

伊勢「嘘!? そうなの!?」ガーン

日向「長門に比叡、それは聞き捨てならないな。一体いつから私の胸の評価はそんなに下がったんだ？」

伊勢「そ、そうよ。少なくとも…… 榛名以上はあるんじゃない？」

榛名「…… それは、榛名が小さいという事ですか？」

日向「ほら、自分でそう言うのは認めているようなものだろう」

榛名「な、なにを言うんですか！ 大体、わたし達姉妹の中で一番小さいのは比叡お姉様です！ 榛名じゃありません！」

比叡「榛名!？」

金剛「ワタシは普通だと思うけど、霧島は大きいヨネ」ボソ

霧島「余計な事を言わないで下さい！」ボソ

扶桑「誰が小さいなんてどうでも良い事ですよ。これから大きくなる可能性だってあるわけですから」

日向「いや、私はだから小さくはない」

伊勢「わたしもよ！」

比叡「いや、それはわたしだ」

榛名「さして問題のない大ききさだと思えます」

山城「ふふ、まあそこはお互いドングリの背比べしているといいわ」

扶桑「山城…… 言い方に気をつけなさい。皆だつて気にしているのよ?」

山城「あ、ごめんなさいお姉様♪」チラ

日・伊・比・榛「……!」

武蔵「お、おい。もうそれくらいにしてくれ。誰が胸が大きくなった方がいいじゃないか」

扶桑「武蔵さん、そはいかないんです」キツパリ

武蔵「なぜ」

山城「武蔵さん、貴女が来るまで誰が一番戦艦の中で胸が大きかったと思います?」

武蔵「そんなの知るわけないだろ。それ以前に興味ない」

山城「貴女に興味なくても、こちらとしては大問題なんです! 武蔵さん、貴女がこ

こに来るまではお姉様がトツプだったんですよ!?!」

武蔵「だからなんだと……」

扶桑「戦艦としては半端、航空戦艦としても伊勢達に負けていた中で唯一の誇り

は…… 胸だったんです」

武蔵「そんな航空戦艦聞いたことないぞ……」

陸奥「ま、そこは持つ者の悩みってやつよ」

山城「というわけでまた不幸が増えてしまったんです。どうしてくれるんですか!?!」

武蔵「知るか!?!」

武蔵「大体、胸が大きいからと言ってなんだと言うんだ。自分以外喜ぶ奴がいるとでもいうのか？」

金剛「あ、一応自慢くらいには思っていたノネ」

武蔵「つ、そ、そんな事はどうでもいい！ どうなんだ？」

長門「どうって、そりゃあ……」

陸奥「大佐が喜ぶんじやない？」

武蔵「え？ た、大佐は大きい胸が好きなのか？」

山城「そりゃあ小さいよりかは大きい方が好きなのは当たり前ですよ」

日向「待て。それはいくらんなくても早計だ」

伊勢「そうよ！ そ、それに巨乳って感度が悪いっていうじやない！」

長門「そんなことはないぞ？」

陸奥「まあ……ね」

扶桑「私も……そう思います」

山城「お姉様!?!」

日向「何でそんなに早く即答ができる。特に長門」

長門「ま、そこは経験者が語るというやつだ。結局は経験が無い者がどう言おうが、胸の有る無に関わらず経験の有る者の方が有利という事だ」

陸奥「まあ、そういう事ね」

金剛「なるほど。その理屈でいけば、ワタシも lead しているって事ネ」

榛名「……」カア

比叡・霧島「!?」

扶桑「え? ねえ、それってどういう……」

山城「お、お姉様から黒いオーラが……!」

日向「む、不味いな。いろいろ言い返したいことはあるが、何だか嵐が来そうだ。伊

勢姉ここは一時撤退……」

伊勢「撤退よ!」

武蔵「え? え?」

扶桑「大佐…… 扶桑は、扶桑は悲しゆうございます…… ふふふ」ユラア

比叡「まさかお姉様が既に…… これは問い詰めないと!」

金剛「ホラ、霧島も青くなつてないデここは一回引きシヨウ?」

霧島「あ、はい……」

榛名「霧島、大丈夫?」

武蔵「なあ、一体皆どうしたと言う——」ガシツ

山城「いいから! ここは避難です! 大佐、ご武運を!」

武蔵「え？ 大佐がなんだって……て、おいどこへ連れて行く！」

扶桑「大佐あ……今行きますねえ」ユラア

比叡「大佐！ わたしに相談も無しに……ひどいです！」

く 提督執務室

加賀「大佐？ 資材の交換の約束は午後からの筈では？」

提督「いや、なんだか背筋に未だ感じた事がない悪寒が走つてな。こういう時は直感に従うに限る」

加賀「はあ」

提督「済まないが後は頼むぞ」

加賀「分かりました。お土産宜しくお願いしますね」

提督「あんまり量は期待するなよ。ではな」

第44話 「動揺」

B i s 「大佐、早くっ」

提督 「ああ、待たせた」

B i s 「私が乗せて行ってもいいのに」

提督 「そのつもりだったが、今は目立ちたくないんだ」

B i s 「そう……でも、二人つきりね♪」

提督 「そうだな。ま、目的地までは少し時間が掛かる、その間はのんびり過ごそう」

B i s 「mein Lieber (愛しい人)……」 ボソ

提督 「ん？ ドイツ語か」

B i s 「あ、その……」 カア

提督 「ん…… Ich mag dich. (イツヒマアクデイヒ) でいいか？」

B i s 「大佐……でもそこはできたら "liebe" (リーベ) を使つて欲しかつ

た、かな」

提督 「ああ、そうか。最初にお前が使っていたな。すまん、こつちだと普段使うには

意味が重いと思つてな」

B i s 「ん、確かにドイツ人にも日本人と似た気質のところがあるから、そういうのも気にする人はいるけど。でも、私はそっちの方がいいわ」

提督 「覚えておく」

B i s 「ううん、いいの。言ってくれただけで嬉しかったから」

提督 「そうか」

B i s 「ね」

提督 「ん？」

B i s 「キスして欲しい……………」

提督 「まだ港が見える。もう少し我慢してくれ」

B i s 「…………… じゃあ撫でて？」

提督 「それくらいなら。ほら」 ナデ

B i s 「ん……………」

——港を出て数分後

B i s 「すう…………… すう……………」

提督 （撫でていたら寝てしまった。まあ、潮風や日差しが気持ち良いからな）

提督 「少し寝かせておくか……………」 ソツ

B i s 「んん……」ギユツ

提督（む、腕が……）

B i s 「んー……♪」スリスリ

提督（参つたな。何時までも自動操縦にはしておけないし）

??? 「わあ、お熱いねー、つてやつ？」

提督 「……レ級？」

レ級 「せいかーい！というか驚きもしないんだね」

提督 「……いつの間に」

レ級 「あはははは。何それ同情？ やめてよもー、恥ずかしいじゃん！」

提督 「いや、驚いたのは本当だ。一体いつの間に」

レ級 「小舟が見えたから漁船かと思つてさ。ちよつとお魚分けて貰えないかなーつて」

提督 「脅すつもりだったのか？」

レ級 「む、違うよ！ ちゃんとお願いするつもりだったもん！ 断わられたら諦める

つもりだったし！」

提督 「一般人が深海棲艦なんか見たら大抵は恐怖に震えて要求を呑むと思うがな」

レ級 「だ・か・ら、お願いするつもりだったんだって！」プク

提督「随分礼儀正しい深海棲艦だな」

レ級「え？ もしかしてそれ褒めてくれてる？ その子みたいに撫でてくれる？」

提督（しまった……… マリアが無防備だ）

レ級「心配しなくたってまだ休戦中だし、そうじゃなかったとしても僕は絶対にそんな卑怯な真似はしないよ」

提督「………」

レ級「本当だって。それにこの子可愛いしね。ね、触っていい？ わあ、ほっぺた柔らかなーい」ツンツン

提督「もう触ってるじゃないか」

レ級「襲わないからいいじゃん。わ、この子胸も意外にあるんだね。わあ服の上からでもふわふわするー」

むにゅむにゅ

B i s 「ああん……… 大佐あ………」

レ級「へ？」

提督「………」

レ級「あー………なるほどー」ニヤニヤ

提督「………なんだ？」

レ級「たーいさ、ね。僕、どう？」ピト

提督「おい、俺とお前は敵同士……」

レ級「今はそういうのナシ！　ね、それでどう？　僕は？」

提督「なにがだ」

レ級「僕、この子みたいに胸があるわけじゃないけど、そこそこ可愛いと思うんだ」

提督「自分でそれを言うか。というよりそもそも俺が可愛い娘なら誰にでも手を出しているというその考えは遺憾だ」

レ級「え、違うの？」

提督「当り前だ。ちゃんとお互いの同意の上、好き合ってる者同士だ」

レ級「ふーん……じゃ、僕も」

提督「なに？」

レ級「僕も好きになつて！」

提督「お前は敵だろう……」

レ級「そ・れ・で・も！　敵に愛通じ合う子がいるなんてロマンじゃん！」

提督「随分軽いロマンだな。悪いがお断——」

チユ

提督「っ!？」

レ級「……………ん……………ふ……………」

提督「……………つ」ググ

レ級「……………つふう。もうそんなに抵抗しないでよ。傷つくなあ」

提督「な……………つく……………」

レ級「へえ、大佐もそういう顔するんだ。初めて見たかも。もしかして超レア？」

提督「お前は、何を考えて……………」

レ級「好きな人に敵も味方も関係ないよ。うん、決めた。僕大佐が好き」

提督「……………は？」

レ級「よし、キスも貰った事だしもう行こうかな。あ、好きになった分は奇襲少なくなるから。じゃ、大佐またねー」

チャプンツ

B i s 「ん……………私寝ちやつて……………あ、大佐。傍に居てくれたんだ」

提督「……………」

B i s 「大佐？」

提督「ん？ ああ、おはよう。目が覚めたか」

B i s 「うん……………何かあったの？」

提督 「…………… キスの事をな」

B i s 「え？」

提督 「しないか？」

B i s 「あ、覚えてくれて…………… うん、してっ♪」

チュ

B i s 「ん……………」

提督 「……………」

提督 (同じ感触だ、温かい。レ級も同じだった)

B i s 「ん…………… ちゅ」

提督 「……………」ギユツ

B i s 「あ…………… ♪ ん…………… ちゅ……………」

提督 (深海棲艦と人間、本当に敵対するしか道はないのだろうか……………)

第45話 「説教」

T督 「やお久しぶりです！」

提督 「ご無沙汰しております。またご迷惑をお掛けする事になって申し訳ない」

T督 「いえ、そんな事言わないで下さいよ！ この取引は結果的には僕の方が得をし
てしまつてゐんですから」

提督 「だとしても、枯渴寸前の弾薬をご用意して頂けるのですから、やはり感謝はし
ます」

T督 「ははは…… まあ、そんなに気にしないで下さい」(また弾薬だけかあ。本当
に極端だな……)

叢雲 「お久しぶりです大佐。今日の付き添いは叢雲じゃないのね」

提督 「叢雲は今遠征中なんだ」

Bis 「へえ、前の付き添いは彼女だったのね。あ、ご挨拶遅れました。ビスマルク
です」

T督 「あ、これはどうも」(初めて見た…… 綺麗だなあ)

叢雲 「…… ちょっと」ニギッ

T督「あああああ!! ちよ、叢雲! 痛い! 潰れるう!!」

提督「……………」ゾッ

Bis(ま、股ぐらを…………… 凄く痛そうね……………)ドキドキ

パツ

叢雲「ふんっ……………」

T督「ぜえ…………… ぜえ…………… ど、どうも失礼しました。お、お見苦しいところを……………」

提督「ああ、いえ……………」(かなり強く握られていたな。加減はしていただろうが、大

丈夫か?)

叢雲「ちよつと、それだけ?」

T督「い、いや!? 愛してるよ叢雲! そして本当にごめんなさい!!」

叢雲「…………… まあいいわ…………… 今日私は私が満足するまで寝ちやだめだからね」

T督「は、はい!」

提督(公の場で堂々と…………… ある意味大した仲だな)

Bis(ね、寝ちや駄目って…………… アレの事、よね)カア

T督「あ、それでは交換の準備をしましよ…………… お?」

キラッ

T督「おお、大佐…………… いや、先輩。ビスマルクさんとケツコンされたんですか!」

B i s 「え？」

提督 「ええ、まあ……………」(先輩?)

叢雲(アイツ先を越され……………」 あ、そもそもレベルが。ちゃんとアピールできたのかしら)

T 督 「おめでとうございます！ いやあ、そうと知っていれば何かお祝いの品でも用意していたんですが。あ、ビスマルクさんもおめでとうございます！」

B i s 「あ、ありがとうございます」

T 督 「お二人ともお似合いですよ！ まさに理想の夫婦つてやつじゃないですか！」

B i s 「そ、そうですね？ えへへ……………」 金剛よりもそう見えるのかな」

T 督 「え？」

叢雲 「……………」

B i s 「はい？」

T 督 「あ、いえ。先ほど金剛がどうのこうのつて……………」?

B i s 「ああ、私二人目のケツコン相手なんです」

ピキツ

提督 (む……………」? 空気が……………」?)

叢雲(あーあ、地雷踏んじやったか。ま、別に大佐は悪くないんだけど……………」 それで

もねえ……)

T督 「あの…… 先輩」

提督 「せんば…… ああ、私の事ですか。なんですか？」

T督 「つかぬ事をお聞きますが、先輩は重婚されているのですか？」

提督 「…… 耳に痛い言葉ですが、その通りです」

T督 「そうですか…… うん……」

提督 「少将殿？」

B i s 「なんか…… 怖い」ギユッ

T督 「先輩！」

B i s 「ひっ!」ダキッ

提督 「…… なんでしよう？」ナデ

T督 「今日ちよつと飲みましょう！」

提督 「は？」

T督 「飲みましょう！」ズイッ

提督 「いや、交換だけとはいえ、一応職務中ですし……」

T督 「僕はそうじゃありません！ 実は非番なんです。秘書艦に頼む事も出来たんですけど、せつかくの機会でしたので」

提督「なら尚のこと、貴重なお時間を使うわけには……」

T督「いいんです！ 飲みましよう、ねえ！」ズズイ

クイクイ

提督（ん？）

叢雲「こうなつたらもう付き合つて貰うしかありません。うちの提督、ああなつちやうともうテコでも引かないんです」コシヨ

提督「しかし……」ヒソ

叢雲「大丈夫です。大佐にはアルコールが入つてないのを私が直接用意しますので」

コシヨ

提督「なるほど……」ヒソ

T督「先輩、聞いてます!？」

提督「ああ、失礼。そうですね。せっかくですから」

T督「ありがとうございます！ それじゃ行きましようか！ あ、叢雲。君はビスマルクさんのお相手をお願いできるかな」

叢雲「いいけど、お酒は私が運ぶからね？」

T督「うん。ありがとうございます！」

B i s 「え？ え？」

叢雲「ごめんなさい、ビスマルクさん。そういうわけだからちよつと其処で寛ぎながらお話でもしましょう?」

Bis「あ、うん……」

くそれから数十分後のT督執務室

T督「つぷは! だからね! 僕は愛を捧げるのはやつぱり一人だけ、意中の相手は一人だけにすべきだと思ふんです!」

提督「非常に理解できます。そしてそれ故に申し訳ない」

T督「や、先輩は悪くないですよ? それは分つてます! でも、でもね? 好きな相手はいくらいてもいいけど、ケツコン相手はやつぱり——」

提督「…… コップ一杯でよくもまあここまで。しかしこれも俺が選んだ道の贖罪だと思えば…… 必然か」

く待合室

叢雲「——でね、その時は……」

Bis「そ、そんな攻め手が……?」カア

結局、その日提督が鎮守府に戻ったのは予定より大きく遅れた時刻だったそうです。帰った時の提督は、やっと資材が補充できたというのに何だか浮かない顔をしていました。

それに対して付き添いだったビスマルクは顔を赤くして一人でブツブツ何かの実行を決意するような表情をしていたそうです。

第46話 「レトロゲーム」

高雄「はい！ 赤甲羅取ったわよ！」

夕張「マジ!? わわ、ド○キー粘るのよ！ しっかり壁の役割を果たしなさい！」

ピュー………… ドゴツ、キュルル！

望月「150ccのド○キー、殆ど壁の役目を果たせなかったね…………」

提督「このゲーム、こんなに速いクラスがあつたのか」

高雄「もう………… 少し！ え？ 大佐知らなかつたんですか？」

夕張「やらせないわよ！ 電、じゃなかつたイナズマ出る！ 大佐何のクラスで走っ

てたんですか？」

望月「もしかして50？」

提督「ああ」

望月「ぷっ、お爺ちゃんみたい」

提督「…………」

夕張「よし、逃げ切つ………… ええ!? イナズマ!？」

高雄「ふっ…………」

夕張「やめて！ 踏まな……………」

プチツ

望月「あ」

提督「どんどん抜かれていくな、惨い……………」

・結果

1位：キ〇ピオ（高雄） 6位：ノ〇ノコ（夕張）

高雄「いい勝負でしたね！」キラキラ

夕張「……………」プルプル

望月「可哀そうに、あんなに震えちゃって」

提督（こんな雰囲気になるゲームだったか……………？）

望月「いやあ、それにしても古いゲームでも遊べるもんだね」

夕張「最初は古いゲーム機そのまま使おうとしたけど、流石にソフトの電池切れてたみたいね」

高雄「そういう時の次世代ゲーム機よ。大佐の持ってたゲーム、私のゲーム機に入ってた良かったです」

「愛宕「あなた達、一応次世代ゲーム機なんだからもつと性能を活かせるゲームやりなさいよ……」」

提督「お、愛宕」

高雄「あら、愛宕気になる？　なんだったら一緒に遊ぶ？」

愛宕「え、いや私はまだ攻略しないといけない……ゴニョゴニョ」

提督「……望月、ちよつと皆と遊んでいてくれないか。俺は愛宕の遊んでるゲームが気になるから、少し見てみる」

愛宕「た、大佐!？」

高雄「あ……それじゃ、私も……」

愛宕「高雄姉さん!？」

高雄「夕張、ちよつとだけいいかしら？」

夕張「えー？　勝ち逃げですかー？」

望月「ま、ノ○ノコだしね。勝てないよ絶対。亀だし」

夕張「……ちよつと、亀バカにしちゃダメよ？　皆遅いみたいに言うけど、この子凄く安定してるから私みたいな玄人が使うと凄いのよ？」

望月「さつき負けたじゃん」

夕張「あれは運が悪かったのよ!」

望月「はいはい。そういのはわたしに買ってから言っただけよ！」

夕張「望むところよ！」

提督「……ふむ、それでは愛宕」

高雄「あなたの遊んでるゲーム教えてくれる？」

愛宕「え……ほ、本当に？」

提督「高雄から大体聞いている。偏見の目で見るともりはない。お前が知っている限りでいいから、そのゲームのどういう所が良いのか教えてくれるか？」

愛宕「うう……でもお」モジモジ

高雄「愛宕、大佐は絶対に呆れたりなんかはしないわ」ポン

提督「姉さん……。分かりました。では、軽く」

提督「頼む」

愛宕「まず、私が遊んでるゲームは、所謂……っというの知ってますよね？」

提督「ああ」

高雄「エッチなのよね」

愛宕「ま、まあ…… そうなんですけど。でも、そういう一般のゲーム機では表現できないところまで表現できるからこそ面白い内容のものもあるわけで」

提督「なるほど。多少過激な内容は別に官能的なものだけではないからな」

愛宕「そうです。まあ官能的な内容だからこそ映えるストーリーもありますけどね」

提督「そこは映画とかも一緒だ。構成的どうしても入れた方が良いシーンなどもあるからな」

愛宕「あ、そういう風に考えていただけると、ちよつとは理解し易いかもしれません。私がやってるのは……」

提督「ほう、地域制圧型のシミュレーションか……」

高雄「へえ…… 世界観結構凝ってるのね」

愛宕「これ、一応人気で10年以上続いているシリーズですから……」

高雄「わわ…… 早速」

愛宕「こういうのもあってこそそのゲームなの。姉さんこだけで評価を決めないでね」

提督「ふむ、下衆な人物故にそのキャラクターに対する怒りでストーリーも盛り上がるのか……」

愛宕「まあ、こんな感じですよ」

高雄「続きが気になるわね。これ続くんでしょう？」

提督「次で最後の話になるみたいだが、ここまで作りこんだ世界観と設定を活かし、どう完結へと持っていくのか見ものだな」

愛宕「二人とも、最後まで興味を持って見てくれてありがとう。少し恥ずかしかったけど、私嬉しかったです♪」

提督「ふむ……愛宕の説明を聞いていた限り、まだこれ以外にもいろんなジャンルがありそうだな」

愛宕「まあ……この手のゲームはジャンルだけは本当にいろいろありますから」

愛宕「でも、人によっては生理的に無理なくらいキツイのあるので、これ以上調べるなら正直自己責任で行って頂いた方が良いと思います」

高雄「ど、どんなのがあるのかしら。私ちよつと……」

提督「高雄、愛宕が言ったことを忘れるなよ？ここから先は自己責任だぞ」

愛宕「そうよ姉さん。あ、でも調べるときは姉さんの場合は一言相談してくれた方がいいかも」

高雄「あら？私、そんなに心臓弱くないわよ？」

愛宕「ううん……結局は私の姉さんだから変なハマり方しないか心配で……」

提督「なるほど……」

高雄「ちよつと!」

クイクイ

提督「ん?」

望月「ねえ、まだー? もう夕張さんが負けすぎていじけちやったんだけど」

高雄「望月ちゃん、一体どれだけ打ち負かしたの……」

望月「50連勝くらい?」

愛宕「え……酷い」

提督「少しは手加減してやれよ」

望月「いや、夕張さん目がマジだったからさ……」ポリポリ

愛宕「ふふ、それじゃ今度は私がやろうかしら。あまり家庭用のは遊んだ事がないか

らちようどいいかも」

高雄「いいわね。じゃ、次はゴ○モンでもやります?」

望月「おお、いいねー」

夕張「ゴ○モン!? それなら負けないわ! わたし、エ○ス丸使うからね!」

提督「夕張、お前さつきから無意識にキャラクター選んでるんだよな?」

夕張「え? あ……は、ハリセンで豪快に叩く攻撃が好きなのよ!」

望月「はいはい。それじゃやってみようか」

高雄「え？ これやるの？ 確かにゴ○モンだけど、本当に昔のゲームってシンプルに見えてその分難易度凄いのよ？」

夕張「あれ？ これハリセンじゃない……」

提督「夕張、ハンカチ持っていた方が……」

夕張「ええ!？」

第47話 「蜜月」 R—15

カチャツ、キイ……

提督 「…… 叢雲か？ 初春？」

叢雲 「よく、分かったわね」

初春 「ふむ、それに妾達が来るのを予測していたみたいじゃ」

提督 「時間帯もそうだが、ノック無しで敢えて開けてくるのはお前たちくらいだからな」

提督 「それに今日のこの天気、何となくお前たちを初めて迎えた頃を思い出しててな」
叢雲 「ああ…… そういえば大佐、初めて此処に来た時、道に迷って着いたのは夜だったわね」

初春 「ふふ、待ちぼうけを食らっていた叢雲が暇に耐えかねて妾を建造したんだつたな」

提督 「あの時は驚いた。やっと辿り着いた鎮守府で待っていた艦娘が2人いたんだからな」

提督は着任当初、船が嵐に遭い予定していた到着ポイントから大幅に外れてしまっ

た。

それでもなんとか陸には上がることができたが、今度はその場所が基地からそんなに離れてないと言う理由から、なんと案内人もなく地図だけ渡されて彼はその場に置き去りにされたのだった。

自力で辿り着くことを余儀なくされた提督は、激しい風雨の中道に迷ってしまい、更に基地に到着するのが送れた。

やつとの思いで辿り着いた目的地では、一人のみと聞いていた筈の艦娘が何故か二人おり、自分を待っていたのだった。

叢雲「まあ…… 勝手に建造したのは悪かったと思ってるわ」

初春「おい、つれない事を言うでない。お前が建造してくれなかったら妾は此処になかったのかもしれないのだぞ？」

提督「ふっ、そうだな。お蔭で俺は『最初』から二人の艦娘と最も古い付き合ひになつている」

叢雲「ねえ、私達が今日此処に来たのは……」

叢雲が緊張した面持ちで決意を込めた目で提督を見る。

提督「言わなくていい。お前たちとは何れ、と思つていた」

初春「無粋というやつかえ？ 全く鈍感なんだか気が利くんだか……」

叢雲「そう、なら話は早いわ。ねえ大佐……………今宵こそ……………」

初春「妾達を……………貫ってくれる、かの?」

提督「……………全部は脱がないのか?」

叢雲「あ、ぬ、脱いだ方がいい? これでも十分全部見えると思うんだけど」

提督「いや、それでもいいんだが、何とか脱ぎ掛けのままというのも少し……………な」

初春「ふふ、劣情を覚えるかえ? んちゅ……………」

初春「ん……………ふ……………ちゅ……………。ふう……………どうかの大佐? 気持ち良えか

え?」

叢雲「身体の貧相さはどうしよもないけど……………あなたを気持ち良くさせる事なら

十分にできるわ。だから……………ん……………ペロ」

提督「くつ、叢雲……………」

叢雲「ちゅ……………ペロ、んむ……………はあ……………んむ」

初春「叢雲……………やるのお。さて、妾はどうするか……………」

ムニユ

初春「はあ！ た、大佐駄目じゃ。そこは……恥ずかし……」

提督「言つただろ？ 俺は大きさはそこまで気にしないと」

ムニユムニユ

初春「そこまで……って、あ……やはり……ああつ、気にする可能性もあ……いうことではな……やあ！ そこ、は……んんっ」

提督「我慢しなくていい」

クニクニ、ムニユ

初春「きやあ、あつ……あつ……んあああつ」

初春「はあ……はあ……」ピクン、ピクンッ

初春（情けない……あれだけでイってしまった……）

提督「可愛かつたぞ」

初春「もう、馬鹿……」

叢雲「あ、大佐……あつ」

提督「……叢雲？」

叢雲「大佐……私……わたし、もう……」

くちゆくちゆ

叢雲「あ…… ああつ……」ビクツ、ビクン

提督「叢雲…… 可愛かった」

初春「ふふ…… ほんに、まさかお前があんな顔をするとは、の」

クチユウ……

叢雲「あつ、ちよ…… そこは…… んんんんん！」

初春「おうおう、よくもまあこんな……」

叢雲「いやああああ、初春それいじよ…… ああああつ」

初春「ふむ、これくらい解せばもう大丈夫じやろ。大佐、そろそろ……」

提督「大丈夫か？ 相当キツそうだが……」

初春「それは叢雲自身の事かえ？ それとも叢雲のココのこと……？」

ちゆく……

叢雲「えっ？ こ、これ…… ふ、ふあああああ!!」

キユキユ…… ウウ

提督「うくつ、これは……」

叢雲「あつ、あつ…… 大佐のがお…… 奥に…… !」

初春「はあ……いいのお……その表情……」

提督「初春……」

初春「大佐、全部好きにしてくりやれ。舌で手で、もう破つても構わぬ。ぐちやぐちやにして……」

提督「初春……ちゆ、ちゆるる！」

初春「あああああああ！」

初春「た、大佐……つ。こ、これはちよ……くつ、あああああう！」

ツプ……ニユクツ

初春「ひっ……あ!？」

初春「も、もう……限界じゃ……!う、く……んんんあああつ！」

叢雲「た、大佐! こ、こつちも……お、お願い。このまま中に……い、イク……う、うあああああああ！」

叢雲「あ……」

——それから数十分後

提督「すまん……お前たちにはキツかったな」

叢雲 「大佐だったら…… 激しすぎ…… でも…… ありがとう」

初春 「ほんに…… 少々異色の体験じゃったが、これもまた良い経験じゃ。じゃが、途中本当に意識を桃源郷に持つていかれると思つたぞ？」

提督 「…… 反省している」

叢雲 「あら、それじゃあ今度は私をそこに連れて行つてよ」

初春 「…… ならん。やっぱりあそこは妾だけのものじゃ」

叢雲 「なによ、ケチ」

初春 「宝物は独り占めしたいからの、悪く思わんでくれ」

叢雲 「ふーん…… 宝物、ね」

初春 「そうじゃ、宝物…… じゃ」

叢雲 ・初春 「……」

叢雲 「大佐……」

提督 「ん？」

叢雲 「今宵は蔭外の無い宝物をありがとうね。初体験としてはちよつとアレだったけど、それでも私達にとつては何にも勝る宝物よ」

初春 「まあ、内容は確かにアレじゃが、初めてを捧げられたのじゃ。宝物には相違あるまい」

提督「そうか……」

叢雲「ぷっ、なによその顔？ 私嬉しいのよ？」

初春「大佐はもう少し女子の気持ちに分かってくりや……いや、やっぱりその方が……いい、な」

叢雲「そうね。それも含めて大佐だものね」

初春「そう……ね。ねえ、大佐」

提督「ああ」

叢雲「ありがとう……好きよ、大好き」

チユ

第48話 「朝食」

提督「コーンフレーク……………」

加賀「厨房のガスコンロの調子が悪いみたいで、急遽朝食はそれで代用する事にした
みたいです」

提督「…………… そうか」

加賀「大佐？ ああ、牛乳ですか。絞りますか？」

提督「何をだ。というか出ないだろ」

加賀「これから頑張れば或は……………」ジツ

提督「やめろ、朝から。早く後ろ手に隠しているものを出せ」

加賀「バレてましたか」チツ

提督「おい」

加賀「どうぞ」シレッ

提督「全く……………」

提督「……………」

加賀「？」（お皿をずっと見つめてどうしたのかしら？）

提督「加賀」

加賀「はい」

提督「悪いが、ちよつとお遣いを頼まれてくれないか？」

加賀「構いませんが、何を買ってくれば？」

提督「たば……いや、おむすびを適當なのを」

加賀「……大佐」

提督「なんだ」

加賀「もしかしてコーンフ레이크が苦手なんですか？」

提督「……別に」

加賀「なら何故煙草やおむすびを買いに行かせようとしたんです？ 私が出ている間に処分しようとか考えてませんでした？」

提督「……」

加賀「苦手なんですかね？」

提督「……ああ」

加賀「ふっ……なんか子供みたいで可愛いですね」

提督「やめろ。昔から洋食とは相性が悪いんだ」

加賀「洋食ですか。そういえば、この前シチューも結構残していたような……。赤

城さんとそれを取り合つたのを思い出しました」

提督「……」

加賀「牛乳も苦手なんですね」

提督「……はい」

加賀「大佐、良い機会ですから克服してみては？　こんな事態がまたいつあるかわかりませんし、多少でも対応できるようなしておかないと」

提督「いや、無理に食べようと思えばできるんだ。食べたところで腹をくだすこともない。ただな」

加賀「ただ？」

提督「相性が悪い食べ物を食べると、その日は非常に調子が悪くなる。具体的にはあらゆる反応が鈍くなるという言うか」

加賀「……隙が出来るという事ですか」

提督「おい、今邪な気配を感じたぞ」

加賀「気のせいです。大佐、私もご助力致しますので克服しましょう」

提督「話を聞いていたか？」

加賀「少しだけです。一口食べてダメそうなら私もそれ以上はしません」

提督「いや……」

加賀「あーん、がしたいです」ズイ

提督「それか」

加賀「はい」

提督「……」

加賀「お願い……」ジッ

提督「分った、一口だけだぞ」

加賀「大佐……」ポワア

カチャ……

加賀「ふう……ふう……」

提督「おい、何故冷ます必要がある。最初からこれ冷ます程の熱もないだろ」

加賀「雰囲気です。はい、どうぞ」

提督「む……」

加賀「ど・う・ぞ」

提督「む……う」

加賀「口移ししますよ？」

パク

提督「むぐむぐ…… しゃく」

加賀（こんな渋い顔した大佐見たの初めてね。なんかイジめてるみたいで変な加虐心が……）

加賀「どうです」

提督「ああ…… やつぱり、ちよつと…… な」サア

加賀（たつた一口で。アレルギーじゃないわよね）アセ、タラー

加賀「大佐、大丈夫ですか？」

提督「ああ……」クラクラ

加賀「ちよつと休みますか？ 私の膝で」

提督「ああ……」

加賀（即答……！ これ薬じゃないわよね。だとしたらこれは…… いえ、駄目

よ。これは奥の手として滅多に使わないようにしないと）

加賀「はい、どうぞ」ポン

提督「うむ……」ポテ

加賀「あ…… た、大佐。うつ伏せに顔を乗せちゃ……」

提督「……」グテー

加賀「ん…… 息が…… あ……」

提督「……………すー……………」

加賀（気ぜ……………寝ちやつた!?!）

加賀「大佐」

ツンツン

提督「……………」

ペシペシ

提督「……………」

加賀「凄いわね……………。んっ、あ……………」ピクツ

加賀（ちよつと、ちよつとだけ足を開いて……………）グ……………

フニイ

加賀「んん……………！」ピクン

加賀（朝礼までまだ時間が大分……………これはこれでいいかもしれないけど、生殺しな

分なかなか辛くもあるわね）

第49話 「不意」

大鯨「お父さん！」

潮「お、おとうさん？」

提督「大鯨、もうお父さんはやめないか？ 元々反応の異常だったわけだし」

大鯨「え……だ、駄目ですか？」

提督「人目がな……」

大鯨「わたし、大佐の事本当にお父さんみたいに思ってます。それでも……？」グ
ス

提督「……それじゃあ基地の中だけにしよう。それでいいな？」

大鯨「っ……はい！ ありがとうございます、お父さん！」ダキッ

潮「あ……」

クイクイ

提督「ん？」

潮「大佐、潮もその……大佐の事……お父さんって……」

大鯨「え!? それは、駄目です！ お父さんは大鯨だけの……！」

潮「や、やっぱりそうですね。ご、ごめんな……………ぐす」

大鯨「う……………」

提督（凄い。あの独占欲の強い大鯨が押されている……………）

潮「大佐、急に変な事を言っ……………」

大鯨「……………いいですよ」

潮「え？」

大鯨「潮さんだけ特別です。お父さんって言っ……………いいですよ」

潮「ほ、本当!？」

大鯨「はい」

提督「俺の意思は無視なんだな」

潮「だ、駄目ですか？」

大鯨「お父さん！」

提督（何故か悪役になった気分だ）

提督「いや、分かった。基地の中だけだぞ」

潮「……………！ ありがとうございます、お父さん！」ダキッ

響「Папа（パーパ）」ダキッ

提督・大鯨・潮「!？」

響「どうしたの？」

提督「いや、一体どこから現れた？」

響「ずっと足元にいたけど？」

大鯨「気付かなかった……」

潮（響さんの気配の消し方は相変わらず凄いな……）

提督「それで、響。お前さつき何て言った？ ロシア語か？」

響「響ロシア語なんて話せないよ。きつと聞き間違い」

大鯨「え、でもさつきのパー…… なんとかつて」

響「ちよつと寝ぼけて抱き着いただけだよ。あれはただの寝言」

潮（そうは見えなかったけど……）

響「大佐」

提督「なんだ」

響「大佐は大鯨さんと潮のお父さんになるの？」

提督「呼称を許可しただけだ。実際にそういう関係になるわけじゃない。愛称みたいなものだ」

大鯨「そうですよ。大佐は私のお父さんですけど、何れは…… その、お嫁…… さんに「カア

潮「う、潮も！ 潮もいつか大佐の……！」

提督「二人とも落ち着け。分かったから」ナゲナゲ

大鯨「んにや…… お父さあん……♪」スリスリ

潮「あう…… お父さん……」ポ

響「…… ふーん。ね、大佐」

提督「ん」

響「響も大佐の呼び方変えていい？」

提督「…… なんと言うつもりだ？」

響「…… Милый Мой (ミーリモイ)」ボソ

提督「なに？」

潮「み、みい……？」

大鯨「ど、どういう意味ですか？」

響「知りたい？」

潮「は、はい！」

大鯨「気になる！」

響「いいよ。じゃ、大佐、ちよつと屈んでくれる？」

提督「こうか？」ググ

響「もうちよつと、そう響の顔の位置まで……………」

提督「これくら……………ん」

チュ

大鯨・潮「!?」

響「んちゅ……………ちゅ……………ちゅう」

提督「ひ……………む……………ん、く……………」

響「ちゅ……………ちゅ……………ふう」

大鯨「あ……………あ……………」カア

潮「わ……………あう……………」カア

提督「響……………」

響「ダーリンって意味だよ」ピシッ

第50話 「湯上り」

提督 「ふう……」

龍田 「あらあ、今上がり？」

提督 「龍田、お前もか」

龍田 「そうよお。でも大佐、こんな遅い時間にお風呂なんて一体いつまで仕事をしていたの？」

提督 「ついさつきまでだ。目処が着いたからひとつ風呂浴びて……」

龍田 「まさかもう一仕事？」

提督 「いや、風が涼しくて気持ちいから外に行こうかと」

龍田 「へえ……。ねえ、それ私も一緒に行つていい？」

提督 「ん？ ただ、酒一缶片手に煙草を吸うだけだぞ？」

龍田 「それでもいいわ。ね、いいでしょ？」

提督 「酒は飲むか？」

龍田 「ちよつとだけなら」

提督 「そうか。なら行くか」

龍田「やった♪」

く鎮守府、艦隊娘用居住棟屋上

龍田「涼む時は何時も此処なの？」

提督「いや、割とバラバラだ。海岸に行ったり自室で窓を開けたり」

龍田「そ」

提督「さて、先ずは開けるか」

龍田「お酒ね」

提督「ああ。龍田はこれだ」

龍田「お猪口？ でも、それじゃ大佐は」

提督「俺も杯を持ってきた」

龍田「漆杯…… お洒落ねえ」

提督「そんなに飲むつもりはないからな。今日はこの一缶を二人で分けよう」

龍田「ええ、いいわよ」

提督「それでは注いでやろう」

龍田「え、いいわよ私は。大佐に注いでもうらうなんて……」

提督「こういう時は仕事の事は忘れる。今はただの親しい仲間士だ」

龍田「いいの？」

提督「遠慮するな。ほら」トクツ

龍田「ん……ありがとう」

提督「焼酎が大丈夫か？」

龍田「飲んだことないから分らないけど、でも多分大丈夫」

提督「口に合わなかつたら直ぐに飲むのを止めるよ」

龍田「もう、そんなに心配しないでよ。はい、私も注いであげる」トクトクツ

提督「ありがとう」

龍田「どう致しまして♪ はい、それじゃ」

提督「乾杯」

コチンツ

提督「……ん」ツイ

龍田「ん……」コク

提督「ふう……どうだ？」

龍田「ん……はあ、ちよつと……辛い？ かしら。匂いもなんか独特ね。嫌

じゃないけど」

提督「黒糖の焼酎だ」

龍田 「お砂糖？ 甘くないわね」

提督 「一応サトウキビの汁が使われているがハッキリ判る程の甘さは無い筈だ。どちらかというとう口当たりの良さとまろやかさが特長だな」

龍田 「へえ…… アルコールも結構高い？」

提督 「この種の焼酎で25度より下は見ることがないな」

龍田 「25…… 決して低くはないのね」

提督 「そうだ。だから例え味に抵抗はなくてもあまり無理して飲むなよ」

龍田 「私はお猪口よ？ 流石にこれ一杯で酔ったりはしないわあ」

提督 「ならいいんだが」 ツイ

龍田 「大佐はこのお酒よく飲むの？」

提督 「俺は酒は焼酎派だからな。だからと言って他の酒が飲めないわけじゃないが」

龍田 「強いのが好きなのね」

提督 「そういうわけでもないんだが、焼酎は二日酔いし難いからな。あと、やっぱり味か」

龍田 「ふうん…… ペろ。やっぱりまだ私には味がよく解らないわねえ」

提督 「鼻で香りも楽しめるようになれば、少しは美味しく感じるかもしれないぞ」

龍田 「香り？…… すん…… あ」

提督 「どうだ？」

龍田 「さつきは独特の匂いとか言ったけど、良く嗅いでみたら匂いが少し甘い」

提督 「気づいたか、そういう事だ。これは甘さ自体が完全に消えたわけじゃない。香り程度はちゃんと残っているんだ」

龍田 「香りを楽しみながら…… 飲む……」 コク

龍田 「…… 美味しい」

提督 「良かった」

龍田 「お酒はただ飲むだけじゃダメね」

提督 「そうだ。自分でも楽しまないと」 シュボツ

龍田 「あ、煙草……」

提督 「あまり吸わないようにはしてるんだが、気分が良い時は、な」

龍田 「そういうものなの？」

提督 「こればかりは喫煙者にもよると思う」

龍田 「ふーん」

提督 「…… ふう」

龍田 「ねえ」

提督 「ダメだぞ？」

龍田「ええ、私まだ何も言っていないわよお？」

提督「煙草を吸ってみたい、だろ？ ダメだ。これは興味本位であまり始めない方がいい」

龍田「じゃあ、どういう時に始めたらいいの？」

提督「……気分、かな」

龍田「ふふ、何それ」

提督「何となく吸ってみたくなくて吸ってみたら、これが予想外に心地よさを感じた。

俺はこれがきつかけだった」

龍田「ねえ、それってどんな時だった？」

提督「……今日みたいに風が心地よくて星が良く見える夜だったな」

龍田「一人で吸ったの？」

提督「ああ」

龍田「誰かと吸ったりはしなかったの？」

提督「ない事もないが、こういう時は大体一人か気心の知れた人とでないと吸いたくはないな」

龍田「ねえ、それって……もしかして誰かが隣にいて吸うのは初めて？」

提督「……そういえばそうだな」（彼女は煙草が嫌いだったからな）

龍田 「つ、……」 ギユツ

提督 「龍田？」

龍田 「あ、顔見ないでね。今何だか凄く幸せな気分であらしない顔してると思いうから……」

提督 「ああ……」

龍田 「ねえ、大佐」

提督 「ん？」

龍田 「好きよ？」

提督 「……そうか」 ポン

龍田 「あ…… うふふ♪」 ギユウ

第51話 「釣り3」

大潮「釣れないですねー」

提督「だめだぞ大潮。釣れないのも楽しめるようにならなければ」

大潮「！　そうでした」

提督「いや、そう気合いを入れるもんでもない」

大潮「うー……　難しいです」

提督「女子と釣りはやっぱり相性が良くないのかもな……」

大潮「えつ、そ、それって……　大潮が大佐の邪魔をしてるつと事でしょうか……

!？」

提督「考えが飛躍し過ぎだ。そんな事はない」

大潮「そ、そうですね。良かったあ……」　ホッ

提督「それだ」

大潮「え？」

提督「別に釣れなくてもこうやって青空の下、話しながら釣りをするのは楽しいだろう？」

大潮「あ……」

提督「ふっ…… 理解できたか」ポン

大潮「は、はい！ 大潮解りました！ それと頭を撫でてくれてありがとうございます！
す！」

提督「こんな事くらいでお礼は言わなくてもいい。ほら、釣るぞ」

大潮「はい！」

大潮「海の上からはお魚が見えるのに何で釣れないんですでしょう」

提督「海が綺麗だからな。餌にも困ってなくて、もしかしたら今は満腹なのかもな」

大潮「場所、変えます？」

提督「いや、綺麗な海を見るのもいいだろう？」

大潮「そうですね！」

大潮「うう……」コシコシ

提督「眠いか？」

大潮「あ、いえっ！」

提督「気にするな、気持ち良いからな。寝ていいぞ」

大潮 「で、でもお……」

提督 「ほら、膝を貸してやる」

大潮 「あ…… 本当がいいんですか？」

提督 「寝る子は何とやらだ。目が覚めた時のお前の成長振りに期待しているぞ」

大潮 「あ…… ま、任せてください！ あ、それじゃお休みなんです……」

大潮 「す…… す……」

提督 「ふっ……」ポン

矢矧 「良い顔ね」

提督 「矢矧」

矢矧 「デートのときはあんな顔見せてくれなかったわよ？」

提督 「ああ、ヌイグルミの時の事か」

矢矧 「隣、いいかしら？」

提督 「ああ」

矢矧 「ん……」

提督 「どうした？」

矢矧 「私？ いや、海を見るのが好きなの。そしたら大佐を見つけて」

提督「そうか」

矢矧「うん……」

提督「一人で海を見るのは好きか？」

矢矧「え？」

提督「……」

矢矧「……ううん。実はあんまり」

提督「直接経験したわけでもないのに昔の記憶があるというのも辛いものだな」

矢矧「私たちが私たちでいられる理由でもあるからね。気に入らなくてもやっぱり必要だと思おうわ」

提督「頼もしいな」

矢矧「ふふ、嬉しいけどその言葉、女としてはなんか複雑ね」

提督「気に障ってしまったか」

矢矧「あ、ううん、別に。ちよつと嬉しかったし」

提督「そうか、安心した」

矢矧「うん……」

提督「……」(本当に釣れないな。ハゼでもいいんだが)

矢矧「ねえ」

提督 「うん？」

矢矧 「この前にみたいにさ……」

提督 「ん？」

矢矧 「で、デートっぽい事していいかしら？」

提督 「というと？」

矢矧 「大佐の肩に寄りかかったり、とか」

提督 「それくらいなら。眠くなったら寝てもいいぞ。夕方までは釣るつもりだからな」

矢矧 「それは夕方まで釣れないままにいる、という事？ それとも夕方までには何か

釣るって事？」

提督 「……」

矢矧 「そ、そんなに釣れないの？」

提督 「…… よく履歴書の趣味の欄に『釣り』と書く男は大体嘘をついているという風潮があるみたいだが、俺は本当に趣味でやってるんだがな……」

矢矧 「最後に釣ったのは？」

提督 「…… 大鯨だ」

矢矧 「へ？」

提督 「いや、もう随分前だ。何を釣ったのかも忘れてしまった」

矢矧 「そ、そう。あ、じゃあちよつと失礼するわね」

提督 「ああ」

矢矧 「ん……」

提督 「肩、硬くて痛くないか？」

矢矧 「不思議とそんなに」

提督 「そうか。まあ、大丈夫ならいい」

矢矧 「うん……。あ、本当に眠くなつてきちやつた」

提督 「寝ていいからな」

矢矧 「それじゃ、お言葉に甘えようかしら」

矢矧 「あ」

提督 「どうした？」

矢矧 「えーつと……。ね、寝てるからつて変な事しないでね？」

提督 「大潮を見る。信用しろ」

矢矧 「うん、それ。聞きようによつてはとんでもない誤解を招くから。気を付けてね」

提督 「？」

矢矧 「何でもないわ。おやすみ」

提督「ああ？ ああ……………」

大潮「……………すう」

矢矧「ん……………すう……………」

提督「二人ともよく寝てるな」

矢矧「……………大佐あ」

提督「ん？」

矢矧「わらし……………私も釣って……………いいの……………よ……………」

提督「……………」（聞かなかつた事にしよう）

第52話 「前進」

比叡「大佐ー」

提督「ん？」

比叡「お姉様に手を出しましたね」

提督「……………」

比叡「……………」ジトー

提督「手を出したと言うのは……………」

比叡「あ、それ以上言わないで下さい。殴りますよ」

提督「比叡、上官に軽率な発言は気を付ける。その場その場で感情的になつては不利になるのはお前だぞ？」

比叡「う……………ごめんなさい」

提督「いや、俺もお前には後ろめたさは感じていたからな。すまない」

比叡「罪悪感とかじゃないんですか？」

提督「昔の俺ならそうだったかもしれないが、今それを感じると……………解るか？」

比叡「はい。お姉様に失礼です」

提督「そういう事だ」

比叡「はあ……でも……つ、ついにヤッチやいましたかあ……」

提督「……」

比叡「ううん。お姉様も大佐も悪くない。だって好き合ってたんだ……もん」

比叡「でも、でも……やっぱりちよつと……お姉様が遠くに行つちやつた気が
しなくもないと言うか……」ウル

提督「比叡」ポン

比叡「ふ……うえ、大佐？」

提督「我慢するな」

比叡「つ……、ふええええん！ 大佐あああ！」ダキツ

提督「大丈夫、大丈夫だ。お前の姉に対する気持ちは悪くない。それに金剛は絶対にお前を置いて遠くに行つたりはしない」ナデナデ

比叡「う……ぐす……そ、そう……かなあ？」

提督「お前が大好きな姉が好きになつてくれた俺が言うんだ。信じられないか？」

比叡「あ……ん……ううん、そんな事ないです！」

提督「そうか、よかった」

比叡「大佐……ありがとうございます。あの……それと、できればなんですが」

提督「ん？」

比叡「もう少し抱き着いていいですか……？」

提督「もう今日の仕事は終わってる。それにこの時間帯、お前が訪ねて来た時点で用はこの事じゃないかと予想していたからな。遠慮するな」

比叡「ぐす……ありがとうございます」

提督「礼なんていい。金剛でなくて申し訳ないが、俺で良かったら好きだけ抱いてやる」

比叡「大佐……ふ……ん……」スリ

提督「……」ナデナデ

——数分後

提督「落ち着いたか？」

比叡「はい。ありがとうございした」

提督「ああ」

比叡「大佐」

提督「なんだ？」

比叡「わたしと大佐って、一応付き合ってるんです……よね？」

提督「そういえば前にお前からそんな宣言を受けたな。正直言ってお前からこうして確認されるまで自覚は薄かったが」

比叡「う…………… 確かに。恋人らしい事なんて…………… あ、あの時のキスくらいですか
らね」

提督「そうだな」

比叡「あの……………」

提督「ん」

比叡「い、今からしません？ こ、恋人らしい事……………」

提督「…………… 比叡」

比叡「は、はい」

提督「焦らなくていいぞ」

比叡「あ……………」

提督「お前が姉妹の中で一番そういう事に初心なのは何となく分ってる」

提督「だから、無理に焦って姉と同じ位置行こうとしなくてもいいんだ」

比叡「わたしの緊張バレてたんですね……………」

提督「緊張で空気が震えていたからな」

比叡「そ、そんなに!？」

提督「冗談だ」

比叡「もう、大佐！」

提督「ははっ、だが…… そんなに顔を赤くして震えながら言う姿を見れば、そういう風を感じるのも無理はないと思うけどな」

比叡「あ……」カア

提督「可愛いぞ」

比叡「え…… や…… み、見ないで下さい！」

提督「ん、分かった」

比叡「あ、だ、ダメ！ や、やっぱり……」

提督「キスをするか？」

比叡「え？」

提督「無理に体の関係までいくことはない。なら、キスくらいは自然でできるようになるか？」

比叡「あ…… はい」コク

提督「俺は座ったままでいいのか？」

比叡「はい。あ、大佐の膝に跨っていいですか？」

提督「なに？ 俺の膝？ ちよ、ま……………」

フニイ

提督「……………」

比叡「？ どうかしました？」

提督「いや……………」

提督（薄布一枚を挟んで比叡の感触が伝わる…………… これは理性を総動員だな）

比叡「あ、後手を…………… そう、こうやって繋いでくれます？」

提督「どうか？」ギユ

比叡「はい。あ、両手です」

提督「ん」

比叡「あ…………… ちよつとあまり膝を動かさないで下さい。くすぐりたい……………」

提督「ああ分った」（動いたらこつちがマズイしな）

比叡「はい。それでは準備完了です。大佐……………」

提督「ん……………」

チュ

比叡「ん……………」

提督「ちゆ…………… ん…………… む……………」

比叡「たいふあ…… んちゆ。ちゆむ……」

提督「ふう…… どうだ？」

比叡「はふう…… え？」ポ—

提督「その様子だと悪くなかったみたいだな」

比叡「あ、はい！ な、なんかこういう甘い雰囲気も悪くありませんね♪」

提督「それはよかった」

比叡「あの、時々こうしに來ていいですか？ そしてその内この続きも……」

提督「ああ。事前に約束ができていたらな」

比叡「っ…… ありがとうございます！ 大佐、今日は本当に……！」

提督「気にするな。俺もお前との間にあつた壁がようやく完全になつたような気がして嬉しい」

比叡「そうですね。わたしもです！ あ、それじゃ夜ももう遅いし、あまりお邪魔するわけにもいかないのでこれで失礼しますね！」

提督「ああ、お休み比叡」

比叡「はい、大佐もおやすみなさい！ 失礼しました」

ボタン

提督「ふう……」

提督（嬉しくもあつたが、久しぶりにかなり精神を使つたな。もつと鍛えよう）

第53話 「不覚」

提督「……………」

青葉「大佐、なにさつきから外ばかり眺めてるんですか？」

提督「ん？ ああ、冬だなと思つてな」

青葉「へ？」

提督「……………」

青葉（また外を眺めてる。それに冬つて…………… こんなに暑いのに）

青葉「た、大佐……………？」

提督「…………… もう雪がふつているだろうな」ボソ

青葉「!?」

青葉（た、大佐がおかしくなったあ!!）ウル

青葉（ど、どうして!? やっぱり私の所為？ 私があまりにもいろいろ騒ぎ立てるか

ら大佐の精神が……………!?)

青葉「……………」チラ

提督「……………」ボソ

青葉「ふえ……」ジワ

提督「……ん？」

青葉「うえええええんん！ 大佐あ、ごめんあさああい!!」ダキッ

提督「なっ？ おい、青葉」

青葉「青葉…… 青葉が悪かったですからあ！ 今までの事全部謝って、これからは

良い子にしますからあ!!」

提督「おい、何を……」

青葉「だから、だからいつもの大佐に戻ってくださいいい!!」

提督「いつものって…… おい、青葉。何のことだ？」

青葉「大佐の頭がおかしくなっちゃったんですう！」

提督「……なに？」

青葉「ボーっと外ばかり眺めて、青葉の言葉にも反応が鈍くて……」

青葉「ついには…… こんなに暑いのに雪だなんて…… うわああああん！ 大

佐あ、ごめんあさああい!!」

提督「……なるほど。そういう事か」

青葉「あ、正気に戻りました!？」

提督「戻るも何も俺はいつも通りだ」

青葉「ええ？」

青葉「そ、そうだったんですか…… “日本が” 今は冬なんですネ」

提督「そうだ」

青葉「わ、わたししたら勘違いしちゃって……」カア

提督「だが、心配してくれたんだろ？ ありがとう」

青葉「い、いえそんな、お礼なんて……！」

提督「いや、言わなくては。信じられないことに、お前はこれから “良い子” になるって宣言したんだからな」

青葉「」

提督「俺は感動して泣きそうになったぞ」

青葉「」

提督「軍人、青葉に二言はないな？ これからのお前の落ち着きぶりにきこ」

青葉「は、反則です!!」

提督「ほう？」

青葉「あ、青葉は大佐を正気戻すためにそういう条件を出したんです！ 元から正気ならそもそもその条件は無効です!!」

提督「そうか。なら、今まで通り悪い子でいるということか？」

青葉「ちよ、人の事を普段から悪い子だなんて言わないで下さいよ!!」

提督「そう言われてもな。結構俺はお前の、故意だか偶然だか判らない噂の流布に実害を被つてるぞ?」

青葉「そ、それは……!」

提督「ふむ……。そうか、やはり元に戻つてしまうのか」

青葉「だからそれは一方的な見方であつて……!」

提督「素直で良い子な青葉が俺は好きなんだがな」

青葉「だから……! って、え?」

提督「ん?」

青葉「い、今なんて言いました?」

提督「……雪か」

青葉「ねえ、ちよつとお!!」

提督「なんだ騒がしいな。俺は故郷の冬を思い出してゐるんだ。邪魔をしないでくれるか」

青葉「あからさまに話をそらそうとしてるだけじゃないですか! ていうか、今何て言ったのかも一回言つて下さいよお!!」

提督「悪いが憶えてない。俺はボケたからな」

青葉「真顔でそんな事言っても信じられるわけないでしょう!？」

提督「そうか？」シレッ

青葉（嘘をつくのもやめて拒否した!?)

青葉「う…………ぐす…………」

提督「む」

青葉「ねえ、言つて下さい…………言つてよお…………。大佐、そんなに青葉のことが…………ひつく、嫌い…………なんですかあ」ブワア

提督（しまった…………まさか泣くとは）

青葉「うええん…………ぐす、ひぐつ…………ぐす…………」

提督「青葉」ポン

青葉「ふあ…………大佐あ？」

提督「良い子な青葉が好きだ」

青葉「ほ、ホントに…………？」

提督「…………良い子、だったらな」

提督（ここで念を押せば、恥ずかしがって今言つた事をうやむやにできるかもしれない）

青葉「な、なります?」

提督「ん」(なに)

青葉「あ、青葉良い子になります!」

提督「そう……か?」

青葉「はい! 青葉、これからは良い子になって大佐に迷惑を掛けません!」

提督「……あまり我慢しないでいいんだぞ? 多少騒ぐのもストレスを溜めるよ

りかは……」

青葉「しません! 大佐が好きになってくれるなら、良い子にした方が絶対にいいで

す!」

提督「そうか……」

青葉「大佐、今の言ったこと本当ですよ?」

提督「……ああ」

青葉「大佐あ!」パア

提督「青葉……」

提督(凄い嬉しそうな笑顔だ。ここでつい口が滑ったなんて言おうものなら俺は死ん

だ方がいい)

青葉「ねえ、大佐」

提督「なんだ」

青葉「青葉をギユツとして下さい。もう今この時点から青葉は良い子の青葉ですか
ら……」

提督「こうか？」ギユツ

青葉「はわああああ……ありがとうございます。し、幸せえ……」トローン

提督「大袈裟じゃないか？」

青葉「そんな事ないです！ い、今更ですけど、あ、青葉も大佐の事好きだったんです」

提督「……そうだったのか？」

青葉「はい！ でも、まさかそれを大佐の方から言ってくれるなんて……これはもう幸せと言う言葉以外適当な言葉はありませんよお」

提督「……」

青葉「？ 大佐？」

提督「いや」ナゲ

青葉「はう……」トロン

提督「青葉、これからよろしく頼む」

青葉「は、はい！ 青葉頑張っちゃいますから！ 頑張つて……ケツコン目指しま

すからー！」

提督「無理はするなよ、程ほどにな」

青葉「大佐の頼みなら！」

提督「そ、そうか………ありがとう」

青葉「お、お礼なんて………ただ、こうして抱きしめて貰えるだけで青葉は………大

佐あ〜♪」スリスリ

提督「良い子だな、青葉」ナデナデ

提督（………自分のスケコマシ振りが恥ずかし過ぎて穴に埋まりたい気分だ………）

第54話 「過癒」

青葉 「大佐は寒いのが嫌いなんですか」

提督 「嫌い…… そうだな。苦手というよりかは嫌いという表現の方が合っているな」

青葉 「じゃあ日本にいる時、季節が冬だと外にもあまり出ないんですか？」

提督 「炬燵に一度入ってしまうと、それこそ出なくなる。子供染みているがその癖は今も治ってないかもな」

青葉 「そうなですかあ」

提督 「ああ」

提督 「…… 青葉」

青葉 「あ、はい。なんですか？」

提督 「いつまで抱き着いているつもりだ？」

青葉 「お昼休みの間です」

提督 「まだ大分時間があるな……」

青葉 「あ、迷惑なら直ぐに……」 シュン

提督「…… いや、まあ別に——」

「迷惑だ」

青葉「!?」

提督「…… 武蔵」

武蔵「大佐、ここはハッキリ言った方がいいぞ? いつもまでもひつつかれると暑い、と」

青葉「む、武蔵さん! あ…… え? ちょ、や、な、何をするんですか!?!」

武蔵「ちよつと大佐と戯れに来てみれば馴れ馴れしくしてからに」ヒョイ

武蔵「代われ、大佐の犬は私だ」

提督「」ピシッ

青葉「い、犬!?!」

武蔵「なんだ? さつきはまるで主人に甘える犬の様に大佐に擦り着いていた癖に否定するのか?」

青葉「え?」

武蔵「まあ否定するのなら仕方ない。ここは正当な飼い犬である私が大佐に甘える権利を行使するでしょう」

武蔵「大佐あ…… あんな貧相な犬では満足できなかったらどう? ほら、武蔵が来

たぞ。たっぷり可愛がつてくれ♪」スリスリ

青葉「なあ!？」

提督「……………」

青葉「ちよ、ちよつと待つてくださいい！いきなり横から入ってわたしを摘み上げて何をしてるんですかあなたは!？」

武蔵「んん……………？なんだ？チワワが吠えているようだが煩わしいな。部屋から摘み出すか、大佐」

青葉「ち、チワワ!？ 青葉が…………… 重巡がチワワ!？」ガーン

比叡「そうです！ 青葉がチワワならわたしはどうなるんですか!？ 豆柴ですか!？」

青葉「比叡さん!？ いつの間に!？」

武蔵「誰かと思ったら金剛姉妹のワンコか。しかも自分から豆柴とは…………… 貴様、解っているな?？」

提督「…………… 一体、お前たちは何の話をしているんだ……………」サア

比叡「あ、たい…………… さ!？ どうしたんですか!？ 顔色が凄く悪いですよ!？」

武蔵「なにっ?？ あ…………… 見ろ！ お前たちが騒ぐから大佐が体調を崩してしまつたじゃないか!？」

青葉「あ、青葉達の所為なんですか!？」

比叡「言いがかりです！　　というか、そこどいて下さい！　　大佐はこの比叡が癒します！」

ギヤーギヤー、ワーワー

長門「……」

日向「長門、何をじつと見ているの？」

長門「いや、ちよつと面白い光景を、な」

日向「ん？　　おい、どうしたんだこれ。糸が切れたマリオネットみたいな大佐を戦艦と重巡が取り合っているぞ」

長門「面白いだろ？　　オスを取り合うメス犬の様な青葉達も愛くるしいが、それ以上にあんなに精神的に弱り切った大佐が可愛い」

日向「長門、あなたね……」

長門「ふふ、これは後で私が癒してやらねば、な？」

日向「あの状態からそんなチャンスがあるのかしら？」

長門「あの状態だからこそ、だ。あの精神状態では大佐はまともに武蔵達の相手をする事などできまい？　　皆が大佐に気を遣っていなくなつた所で美味しいところをかつさらうんだ」

日向「上手くいくかしら……」

長門「大佐は真面目だがその分極端に打たれ弱い部分があるからな。そこを優しく労うように話し掛ければ、間違いないだろう」

日向「全て計算尽というわけね」

長門「ああ」

日向「……長門」

長門「ん？ 日向、お前も乗るか？」

日向「ええ」

加賀「はい、そこまでです」

長門「む？」

日向「え？」

望月「全く、部屋が探しいと思って来てみれば」

神通「あまり、大佐をイジメちゃダメ、ですよ？」ニコ

長門「ふむ……ここは分が悪いな」

日向「長門と共犯扱いされるのはアレだけど……私も乗ってしまったからな」

長門「おいおい」

日向「分かった。退散する。大佐を助けてやってくれるか？」

赤城「心得ました」ニコ

加賀「それでは皆さん準備はいいですか？」

望月「私は出来ることが限られてるから、適当によろしく」

赤城「いつでも」

神通「大佐……お救いします」

加賀「……救出開始です」

長門「やれやれ、あんな気合いの入った目を向けられては退散せざるを得ないな」

日向「ま、今回ばかりは加賀達に任せた方がよかつたさ」

長門「戦艦2人に重巡1人と正規空母2人と軽巡、駆逐、どっちに分があると思う？」

日向「愚問よ。〃強い〃方に決まってるじゃない」

長門「はは、そうだな」

第55話 「記憶」

レ級「〜♪」

ル級「レ級なんだか嬉しそうね。何かあったの？」

レ級「ええ？ んふ〜、実はねえ〜、えへへ〜♪」

タ級「何なのよ……」

ヲ級「ドキドキ」

レ級「僕、大佐とキスしました！」

ル級「えっ」

タ級「へえ」

ヲ級「わあ」

レ級「あ、違った。大佐を好きになっちゃった、だ」

タ級「どっちにしても同じような意味よ」

ル級「そ、それホント？ 敵を好きになっちゃったの？ いくら大佐でも……」

ヲ級「大佐かあ……」

レ級「大丈夫！ いくら好きになってもちちゃんと敵同士だから！」

夕級「きっぱりしてるわね。ま、あなたらしいけど」

ル級「す、好きな人が敵だなんて……なんかロマンチックね！」

ヲ級「うんうん！」

レ級「あ？ やっぱりそう思う？ 思うよね？」ニマニマ

夕級「なに喜んでるのよ……。姫にはどう言うの？」

レ級「もう言ってきた」

ヲ級「お、怒られた？ 怒られたよね？」

レ級「頭痛くなった、って言って寝ちやった」

ル級「姫……」

夕級「全く……それで、これからどうするの？ 本当に敵同士のままでもいいの？」

レ級「うん！ その方針は変えないつもりだよ！ ただ……」

ル級「ただ？」

レ級「これから大佐の所だけ奇襲する回数は減らそうかと思ってる」

夕級「奇襲を減らす……それってもしかして、これからは事前に通告して襲うって

事？」

レ級「うん！」

ヲ級「せ、宣戦布告ね！ なんだかそれ、カッコイイ！」キラキラ

ル級「いや、来襲ポイントまで間に合えば襲わないんだから、実質会い行くだけだよそれ……」

レ級「うん！ これからは堂々と大佐に会いに行けるね！」

タ級「確かにこれは姫も頭痛くなるわよね……」

ヲ級「遊びに…… わあ、楽しみたい♪」

ル級「ヲ級……」

レ級「取り敢えず、そういう事だから！」

タ級・ル級「……」

ヲ級「ねえ、ねえ。いつ行くの!？」

レ級「え？ うーん、そうだなあ……」

タ級「ヲ級、すっかりレ級の話に乗っちゃったわね」

ル級「うん……」

タ級「ル級、あなたも？」

ル級「え、えつと…… ど、どちらかというと、た、楽しみ、かな……」

タ級「……」

ル級「う……」

夕級「ふう……」

ル級「っ、ビクッ

夕級「そうね。私もよ」ニコッ

ル級「夕、夕級！」パアッ

夕級「私だつて元艦娘、だもん。それは……ね」

ル級「……戻りたい？」

夕級「また沈まないといけないのはアレだけど……どうかしら。私沈んだ時の記憶がないのよね」

ル級「え、夕級も？」

夕級「私もつて、もしかしてあなたも？」

ル級「うん……」

夕級「……ねえ、ちよつと」

ル級「夕級？」

レ級「うん？ なにー？」

夕級「レ級つてさ、艦娘のだった頃に沈んだ時の記憶つて……ある？」

レ級「ないよ？ なんだか分からないけど、僕だけ全然思い出せない」

ヲ級「え？ レ級も？」

レ級「レ級もつて、え？ もしかしてヲ級も？」

ヲ級「うん……私だけだと思つてた」

タ級「……それ私達も、よ」

レ級「ええ？」 ヲ級「ウソお!？」

ル級「ホントよ…… 凄く驚いてるけど」

タ級「ねえ、私達つて姫みたいな特別な存在を除けば、大体沈んだ時の事を憶えてるわよね？」

レ級「少なくともここにいる面子以外はそう、かな？」

ル級「うん、そう。私も結構聞いている」

ヲ級「私も」

4人「……」

タ級「なんで私達だけ……」

ル級「お、憶えてないくらい沈んだ時の恨みが強かった…… とか？」

ヲ級「え、なんかヤダよそれ……」

タ級「そうね。でも有り得ないとも……」

レ級「多分、違うと思うよ」

タ級・ル級・ヲ級「え？」

レ級「多分、強いからだよ。僕たちが」ニツ

タ級「強いからって……ただ、それだけ？」

レ級「うん！ 多分他の子より特別強くて、自信とか誇りとかがあったから、沈んだ時も後悔しなかったんじゃない？」

ル級「後悔しなかったから憶える必要がないって思ったって事？」

レ級「そ」

ヲ級「そ、そっちの方がいいなあ。なんだかカツコイイし！」

タ級「あなたそればかりじゃない……でも、そうね。私もその方がいいわ」

レ級「ね？ そうでしょ？ きつとそうだよ！」ニコツ

ヲ級「流石、レ級！ 大好き♪」ギユツ

レ級「えへへ、そんなに褒めないでよ♪」テレ

ル級「流石、私達のリーダーねっ♪」

タ級「全く、あなたのその自分を疑わない真っ直さには適わないわね。でも、ありがとう。あなたが私たちのまとめ役でよかったわ」

レ級「もう、タ級まで。照れるからもうやめて！」テレテレ

レ級（うん…… 多分そうだよ。辛い記憶だった印象は無いし……。ただ、他の子は分からないけど、僕の中に微かに残っているのは……。燃え盛る炎の中で傷だらけなのに、優しく豪快な笑みを浮かべた“誰か”の顔だけ……）

レ級「元氣かなその人……」ボソ

ル級「え？」

レ級「あ、ううん何でもないよ」

第56話 「回復」

初雪 「大佐」

提督 「……… なんだ」

初雪 「昼間っから何で寝てるの？」

提督 「ちよつと、な」

初雪 「体調でも悪いの？」

提督 「そんなところだ」

初雪 「大丈夫？」

提督 「別に病気とかじゃないから大丈夫だ」

初雪 「え、じゃあ何が調子悪いの？」

提督 「………」

初雪 「大佐？」

提督 「大人だつて時にはいじけたくなる時もあるんだ」

初雪 「へ？」

提督 「初雪」

初雪「な、なに？」

提督「女は怖いな」

初雪「え？」

提督「……」ポフツ

初雪（ふ、布団被つちやつた。な、なに。何があつたの？　ていうかホントにこれ大佐？）

初雪「ね、ねえ大佐元気出してよ。仕事どうするのさ」

提督『執務なら今日中のは全部やって机においてある』

初雪「え？」

初雪が提督の机を見ると山のような書類がきちんと整理されて置かれていた。

初雪（あの量を午前中だけで……？　嘘でしょ……）

初雪「で、でもさ艦隊の指揮はどうするの？」

提督『出撃や演習の指揮を執る時はちゃんと出るから大丈夫だ』

初雪「そ、そう……」

提督『ああ』

初雪「ねえ、大佐」

提督『なんだ』

初雪「何があつたの？」

提督『…… 初雪、お前は個性的ながらも頼りになる部下が、いきなり自分は上官の犬だ、なんて自信を持つてしかも嬉しそうに言つたりする姿を見たらどう思う？』

初雪「え？」

提督『俺は衝撃を受けると思う。今まで真面目に訓練してきたつもりだったが、どこで育て方を間違つたのかと。俺は自信がなくなつてしまつた』

初雪「え、えつと……」

提督『衝撃を受けて呆然としている俺を信頼していた部下たちが、チワワである自分こそ提督を癒すに相応しいとか、豆柴である自分の方が提督の好みだとか、ハスキーの自分こそが提督に色々してやれるなどと言つて取り合い…… 俺は心の中で泣いてしまつた……』

初雪「うわあ……」（そりや大佐にはキツイかも……）

提督『俺は女と言う生き物が怖くなつてしまつた』

初雪「大佐……」（あ、重症だこれ）

初雪「あのさ大佐」

提督『ん？』

初雪「こうやって話してる分にはわたしは平気そうだね」

提督『駆逐艦は大丈夫だ。お前たちは常に素直だからな。信用できる』

初雪「あ……あ、そう」（なんでだろう嬉しい事言ってくれている筈なのに素直に喜べない）

初雪「でもさ大佐、その誰だかわからないけど大佐を取り合つた子も、大佐の事が好きでやつたんでしょ？」

提督『……かもな』

初雪「なら、そこは素直に喜んでお礼を言うべきじゃない？　じゃれつかれるのが苦手でも、そこで動揺せずに平静を装って対応ができれば上手くいったかもよ？」

提督『……』

初雪（まだダメか……）

初雪「じゃ、じゃあさ大佐」

初雪「わたしが犬の真似したらどう思う？」

提督『……なに？』

初雪（えーい、こうなりやヤケだ！）

初雪「わ、ワン！　は、はつゆ……初ワンだワン！」　カア

提督『……』

初雪「た、大佐ど、どうしたワン？ げ、元気出すワン。く、クゥンクゥン」カァア
 提督（なんだ……？ 一見して下手なのに、俺なんかの為に一生懸命に犬の真似を
 する初雪の姿がどうしようもなく嬉しくて心が熱い）

初雪「た、大佐あく元気を出して欲しいわ、ワゥン」プルプル

提督（羞恥のあまり泣き笑いのような表情を……俺は、俺はこのままで……！）
 バツ

初雪「ワン!?」ビクッ

提督「初雪……」

初雪「な、なに？」

ギユッ

初雪「きやつ」

提督「ありがとう……俺は間違っていた。お前の必死に頑張る姿を見て、俺は今、
 自分の心が洗われたような気持ちだ」

初雪「わ、ワン……」（あ、犬真似の癖がまだ……）

提督（まだ俺なんかの為に犬の真似を……くっ）

提督「……これはいけない。お前達に心配を掛けない提督の姿を再び示さな
 れば」

初雪「あ……も、もう平気？」

提督「ああ、ありがとう初雪。お前のおかげだ」

初雪「う、うん……元気になっってくればいいよ」

提督「安心しろ。もう大丈夫だ」

初雪「そ……」（なんか残念だなーなんて、ね）

初雪「……ちえ」

提督「ん？ どうした？」

初雪「ううん、なんでもない」

第57話 「昇進」

大淀 「大佐、本部より大佐に通達が来ています」

提督 「そうか…… 定食と一緒に通達を受けるのは初めてだ」

大淀 「はい、これオマケの封筒を切る為のカッターです」

提督 「ファミレスのメニューのトッピングのように言わないでくれ……」

雷 「大佐―それな―に―?」

提督 「本部からの通達だ。中身はまだ見ていない」

暁 「気になるわね。開けてよ!」

提督 「今食事中だ」

飛鷹 「私が開けてあげるわよ?」

提督 「お前は、ただ中身が見たいだけだろ。見た目は一応大人なんだから、もう少しそれらしくしろ」

曙 「ちよ、それってあたしが子供っぽいって事ですか!」

提督 「いや、お前たちと比べたら飛鷹の方が子供だな」

飛鷹「ちよ!？」ガーン

加賀「何にせよ。食堂で開けるわけにはいかないわ。皆、ここは大人しく退散しなさい」

ハーン

提督「加賀、悪いな」

加賀「いえ」

提督「……」モグモグ

加賀「……」ズズ

提督「お前も気になるのか」

加賀「ま、人並みには」

提督「何故？」

加賀「もしかして異動のお話だったりしたら……」
「!？」ガタッ

提督「お前達落ち着け」

加賀「……」

提督「突然何を言うんだ」

加賀「可能性はゼロじゃないじゃないですか……」

提督「お前まさか、通達が来る度にその可能性を心配してたんじゃ……」

加賀「いけませんか？」

提督「もし、その辞令だったらどうするつもりだったんだ」

加賀「絶対に着いて行きます」

提督「子供みたいなこと言うな」

グツ

加賀「つ・い・て・い・き・ま・す」グス

提督「分かった。分かったから無表情で睨みながら泣くな」

提督「……失礼しました」グシグシ

提督「……ふう。伊勢」

伊勢「あ、はい？」

提督「悪いがこの封筒の中に入っている辞令を今この場で読んでくれないか？」

伊勢「え？ 今ここで、ですか？」

提督「ああ」

加賀「大佐……」

伊勢「わ、分かりました。じゃ、ちょっと失礼しますね」スー……ピツ

伊勢「えーつと……あ」

提督「どうした？」

加賀「な、なに……？」ビクッ

伊勢「大佐、おめでとうございます。これ昇進の辞令ですよ。大佐は明日の〇〇〇〇時より階級が准将になるそうです」

オオオオオ ガヤガヤ

提督「そうか」

加賀「……」ホッ

木曾「ん？ じゃ、これからは大佐の事は准将って呼ばないといけないのか？」

島風「えー、やだそれー言い難い！」

妙高「でも、今まで通り大佐と呼ぶのも……階級が下になるわけですし」

鈴谷「じゃあ、提督にする？ これがメジャーっぽいけど、鈴谷はずつと大佐だった

から大佐がいいなあ」

提督「大佐でいい」

妙高「え？」

提督「今までお前達と一番長い時を過ごした階級がそれだったんだ。なら俺もそつちの方がしつくりくる」

翔鶴「しかしそれでは階級が……」

提督「敬称という事にしておけばいい。少なくともここでは上官の前でない限り今まで通り大佐でいい」

霧島「さつすが大佐です。私もその方がいいです♪」

名取「わ、私も…… その方が嬉しいです。ありがとうございます…… 大佐」

タイサ！ タイサ！ ガヤガヤ……

伊勢「あ、まだ紙があつた。これは…… ちゆ、中将からです！」

伊勢「え、えつと、尚、この辞令を受けた提督は、昇進祝いをするので明日の昼までに大本営海軍本部まで出向く事。随伴艦は3人迄編成は自由……」

シーン……

提督「ん？」

金剛「大佐ア！ ワタシ！ ワタシが行くネ！」

武蔵「待て。この武蔵を差し置いて金剛が行くなど……」

矢矧「3人とは少ないわね…… た、大佐、私なんてどう、かな？」

子曰「子曰も行ってみたい！」

ワタシ！ ワタシヨ！ ガヤガヤ

提督「お前達、少し落ち着……」

鳳翔 「みなさん静かにしてください？」

大淀 「静かにしないとこれから1カ月おかずに1品減らしますよ？」

シーン……

加賀 「取り敢えず、抽選と言う事にしましょうか」

提督 「…… そうだな」

第58話 「練習」

初雪「……………」

初雪「…………… わん」

初雪「初ワンだわん……………」

初雪「違うな……………」

初雪「こんばんワン♪ 初わんだワン！」

初雪「…………… うん」

望月「?!?!?! 何してるの」

初雪「?!?!」

望月「いや、そんなに驚かないですよ。ドアから声が漏れてたよ？」

初雪「えっ…………… つ、」グス

望月「え、泣く事ないよ。大丈夫、多分気付いたのわたしが最初だから」

初雪「も…………… 望月が最初で…………… もお、う…………… ぐす。恥ずかしいよ……………」

望月「ごめんけど、そこは諦めてよ。気付いたのがわたしで良かったと思えばいいと

思うよ？」

初雪「…… まあ、そう言われれば……」

望月「でしょ？ って自分で言うのもあれだけどね」

初雪「ううん、望月で良かった」

望月「そりやどうも。で、何してたの？」

初雪「…… 犬の練習」

望月「はあ、そりやまたなんで？」

初雪「大佐、犬が好きっぽいから……」

望月「…… 待って」

ガチャ、バタン、カチツ

初雪「どうして部屋中の鍵を閉めるの？」

望月「この手の情報は外に漏れると收拾が付かなくなる事があるからね。大佐には迷惑を掛けたくないでしょ？」

初雪「なるほど……」

望月「それで、なんだっけ。大佐が犬が好きだから犬の真似してたの？」

初雪「うん」

望月「それホント？」

初雪「間違いない。わたし…… 凄く可愛がってもらった」

望月「…… へえ」

初雪「望月も大佐が好き？」

望月「まあね。何よりも好きなのは間違いないよ」

初雪「意外。全然気づかなかった」

望月「そりゃ初雪だってそうだよ。わたし普段の態度から悟られる事がないようには一応気を付けてたつもりだし。初雪だってそうだったんでしょ？」

初雪「まあ……」

望月「でもなるほどねえ。大佐は犬が好きかあ」

初雪「望月も犬の真似してみる？」

望月「大佐が喜ぶならね。わたしだって可愛がってもらいたいし」

初雪「はい、犬耳」

望月「ん？ ああ、いいよ。本番では着けるけど、練習の時はいらぬ」

初雪「為り切るのに必要だよ？」

望月「まあ見て……」

初雪「？」

望月「ごほん……」

望月「こっつんばんワン♪ 望わんだよ♪ え？ 最後語尾がワンじゃなかったって？
そつれはあ…… 望わんをちゃんと可愛がってくれたら言ってあげる…… ワン
？」

望月「…… こんな感じ？」

初雪「凄い……」

望月「ま、キャラづくりは得意だよ」

初雪「なんか資料でもあるの？」

望月「主に漫画関係」

初雪「へえ……」

望月「初雪も見してみる？」

初雪「うん……」

——数十分後

初雪「初わんと♪」

望月「望わんだワン♪」

初雪「たーいさあ、初わんをもつとナデナデするワァン」

望月「だーめっ。先にナデナデするのは望わんにして！ じゃないと、ペロペロして

あげないよっ?」

初雪・望月「……………」

望月「なかなかいい感じじゃない?」

初雪「うん……………これなら、頑張れる」

望月「じゃ、後は甘えるタイミングでも決めようか」

初雪「了解。この時間帯とか……………」

祥鳳「……………」

千歳「翔鳳さん人の部屋を見るのは良くないですよ」

祥鳳「あ、その……………ごめんなさい。つい、可愛すぎて……………」

千歳「可愛すぎて?」

祥鳳「うん、ほら……………」

千歳「え? これっ、わああああ……………」キラキラ

祥鳳「ね?」

千歳「こ、これはいけないのは分つていても破壊力が……………はわあああ」キラキラ

祥鳳「青葉を呼びましょう」

千歳「そうですね! これは保存しないと!」

第59話 「準備」

提督 「抽選のクジで残ったのは……」

長門 「私と」

武蔵 「私と」

初春 「妾じゃな」

加賀 「戦艦二人と駆逐艦、クジにはなかなか悪くない編成だと思います」

筑摩 「残念ですけど仕方ないですね。こればかりは運ですから」

神通 「皆さん、大佐の事をお願いしますね」

陸奥 「長門、しっかり頼むわよ」

叢雲 「初春もね」

長門 「任せてくれ。運だとしても希望して選ばれたんだ。勤めは果たしてみせる」

武蔵 「右に同じくだ。武蔵の名に恥じない働きをしてくるさ」

初春 「心配無用じゃ。それは叢雲も分かっておるじやろう？」

加賀 「皆さん良い返事です。私からも大佐の事を宜しくお願いします」

提督 「おい、なんか俺の扱いが初めてお遣いに出す子供のようだが」

加賀「それだけ身を案じているんですよ」

提督「そうか」

筑摩「あの、ちよつとよろしいですか？」

提督「何だ、筑摩」

筑摩「中将からの手紙では明日の昼までには本部に着くようにとの指示でした
が……」

長門「あ」

加賀「……ここから日本までの距離はかなりありますね。それなのに明日の昼ま
でにとは一体……」

提督「その事なんだがな。迎えが来る」

武蔵「迎え？ 海路……ではないな。どんなに速い潜水艦でも間に合うまい」

提督「恐らく複座式に改造した疾風だ」

長門「疾風……四式か」

筑摩「確かに疾風なら10時間もあれば着くとは思いますが、燃料が……」

加賀「空母ですか？」

提督「そうだ。途中、作戦行動中の給油用の空母が待機しているらしい」

初春「随分と準備がいいのう」

提督「昇進自体決めるのは本部だからな。それに合わせて元々作戦行動も取っていたんだらう」

陸奥「なるほどねえ」

叢雲「心配したのは中将かしら」

提督「恐らくな」

加賀「という事は出発は今夜ですか」

提督「ああ」

長門「空か……初めてだな」

武蔵「なんだ。怖いのか」ニヤ

長門「かもな。でも楽しみでもある」

武蔵「そ、そうか……」

初春「なんじゃ、怖いのは武蔵殿じゃったか？」

武蔵「なあ!! ば、馬鹿を言うな! 私はただ……」

陸奥「体重？」

武蔵「う……」

筑摩「一応、最大の戦艦ですからね……」

提督「お前達、当たり前だが艦装は外していくからな？ そんなものを着けて飛べる筈がないからな」

武蔵「えっ」

提督「お前は俺たちを海に落とす気だったのか」

武蔵「い、いや、そんな！ た、ただ…… 私は普段から艦装を着けていることが多
いから…… 落ち着かないというか」

加賀「普通の女の子になるのが恥ずかしいようです大佐」

武蔵「か、加賀！」

叢雲「意外ね。武蔵さんって結構乙女だったのね」

長門「なあ、一応それは武蔵だけに言っているんだよな？ 戦艦でひとくくりにして
はいないよな？」

陸奥「なにこんな時に乙女アピールしようとしてるのよ……」

提督「お前達が艦娘である前に一人の女性であることは俺も承知している。だから武
蔵、そんなに気にするな」

武蔵「あ、ああ…… 分かった」

長門「大佐、私には言ってくれないのか？」

陸奥「だから、自分から乙女アピールしてた人間が何言ってるのよ！」

初春「ふふ。これは道中の道のりは退屈しないで済みそうじゃ」

加賀「大佐、そろそろ支度の準備を。仰る通りなら迎えが来るまでもうあまり時間がありません」

提督「そうだな。分かった」

第60話 「出迎え」

提督「もう直ぐ着くぞ」

初春「ふう、最後の移動が船でよかつたわ」

長門「確かに、数時間も狭い飛行機の中というのはちよつとキツイからな」

武蔵「隣から嬉しそうに手を振っていた奴がよく言う……」

長門「仕方ないだろ、楽しかつたんだから。ああ、そういえばお前はずつと海面を見て青い顔をしていたな。ふふっ」

武蔵「なつ、あ、あれは違う！ 敵の奇襲を警戒していたんだ！」

長門「あんな上空から発見しても意味ないだろ…… 砲撃だつて届かないし」

武蔵「も、もしもの場合がだな——」

提督「二人ともあまり騒ぐな。もう直ぐ着く、出迎えてくれる方に恥ずかしいところを見せるな」

初春「誰が迎えに来てくれるのじゃ？」

提督「信じられないが、中将と彼女、そして…… 元帥だ」

武蔵「元帥も？ ちよつと大げさ過ぎないか？」

提督「昔からの中將の同僚で、声を掛けたららしい。彼女は俺と同じ中將の教え子だ」
長門「錚々たる顔ぶれだな」

提督「そうだな。海軍の総司令官補佐と第1、第4司令部の司令官の直々の出迎えだから」

武蔵「第1司令部の司令官が元帥という事は総司令部の司令官と兼任なのか？」

提督「いや、総司令部の司令官は総帥だ」

長門「では、第2、3の司令部の司令官は誰が務めてるんだ？」

提督「単純に階級と役職順だ。上から総帥、元帥、大將、中將、少將、だな」

初春「第3司令部の司令官は大佐の言う中將とは違う方みたいじゃな」

提督「その通りだ。俺もその司令官には会った事がない」

初春「なるほどのう」

武蔵「初春は知らなかったのか？」

初春「大佐との付き合いは長いが、本部には一度も行った事がないからの」

長門「右に同じく」

提督「艦娘の本土への上陸は本部からの許可がないとできないからな。一応、お前たちの存在はまだ機密扱いなんだ」

武蔵「うむ。私の建造も重要機密だったからな」

長門 「…… 何を威張つてるんだ？」

初春 「そこは聞くだけ野暮というものじゃ」

武蔵 「聞こえているぞ！」

提督 「全員静かにしろ。港が見えて来た」

長門 「ん……？ なんか人数が多くないか？」

初春 「そうじゃの。3人の司令官に供してゐる艦娘を入れても、少し多い気がする」

提督 「あれは……」

中将 「おお！ 来たなあ。待つてたぞ！」

元帥 「准将、昇進おめでとう」

彼女 「遅いわよ、なんて事ないから安心しなさい」

ト督 （以降、一時的に少将） 「先輩！ 昇進おめでとうございます！」

丁提 （以降、一時的に中佐） 「おう、酒の約束果たしに来たぜ」

提督 「元帥殿、中将殿、少将に……」

彼女 「ちよつと、わたしにも『殿』つて付けなさいよ」

少将 「僕がよく資材の件でお世話になつてゐるのを元帥閣下が把握されていたんです。

それで今回気を遣つて頂きました」

中佐「俺は親父経由だ」

大和「中佐、何度も言わせないで下さい。親父ではなく中将殿、です」

中佐「わーつてるよ。……いきおくれ」ボン

大和「は……？」プチツ

長戸「ん？ やるのか？ “本部の大和”とやるのは初めてだな♪」

叢雲「数週間ぶりね大佐。あら……？」

長門「ん、なんだ？」

叢雲「いえ、あなたそれ指輪？」

長門「ん？ ああ、此処に来る直前の演習で成長限界に達したんだ。ふふつ、これで

私もたい…… 准将と晴れて夫婦というわけだな。3人目だが」

少将「…… あ？」

提督（しまった）

少将「先輩、この前僕が言った事覚えてますか？ いや、強制のつもりはなかったですけれどね。まあ、取り敢えず飲みましようか、ねえ！」

初春「なるほどの。重婚というのはこういう災難も呼び寄せるのか。ふふ、これは勉強になるのう」

無蔵 「ん？ おい、お前新顔だな」

武蔵 「ん？ ああ、同型か。同じ顔というのは気持ち悪いものだな」

無蔵 「そうだな。が、まあ私はオリジナルだからな。もうその時点でお前とはポテンシャルが違うぞ」

武蔵 「そんな事をいちいち自慢するとは器の小さい奴だ。私の同型とは思いたくないな」

無蔵 「なに？」

武蔵 「いいか？ 私は准将の誰よりも従順な犬なんだ。聞こえはあまり良くないが、あの人と私の間には既にケツコン前から信頼を超えた絆がある。私が誇るのはいそれだけだ」

無蔵 「何を言うかと思えばそんな事か。だが生憎な、絆に関する事なら私も負けていないぞ。彼女こそ私が誰よりも愛している生涯のパートナーであり、そして私はその下僕だ」

武蔵 「げ、げぼ!？」

彼女 「あなた達はさつきから何を言っているのよ……」

ギャーギャー、ワーワー

中将「はっはっは。一気に騒がしくなりよった。なあ元帥」

元帥「全く、若いというのはいいものだな」

???「止めないのですか？」

元帥「いや、昔を思い出す。暫くこうやって眺めるのもいいだろう」

中将「ふはっ、相変わらず人が悪いな」

元帥「お前に言われたくはないわ」ニヤ

???「全く……それでは、私は先に宴会場の準備の様子を確認してきますね」

元帥「ああ、紀伊。頼んだ」

第61話 「宴会」

少将「それでは、准将の昇進を祝いまして……」

「かんぱーい！」

中佐「ごく……ごく……ふはあ、にしてもやつと昇進かあ。良かったな」

提督「俺からすればお前がまだ中佐のままの方が不思議だ」

彼女「そうね。いくら資材の消費が激しいからってそれを補って余りある戦果だつて挙げてるでしょうに、その戦果すら霞ませる消費ってなんなのよ」

中佐「んあ？ まあそれはアレだ。あいつを見る」

提督「お前の長門か」

中佐「そうだ。俺が鍛え上げた、親父の様に。それがどういう意味か解るだろう？」

彼女「ケツコン以後の成長限界に達しているって事かしら」

中佐「それだけじゃない。経験と鍛錬を唯ひたすら積み重ねてきた。これは能力では補えない精神的強さになる」

提督「ふむ、お前はその為に全てを注ぎこんでいるんだな」

中佐「その通り。その為なら昇進なんてどうでもいい。お蔭で俺の艦隊は今も最強の自信がある」

彼女「豪語するわねえ……。ま、その言葉がハツタリじゃないのは解るけど」

中佐「おう。お前とこの武蔵にも負けないうぞ」

彼女「言うわね。だけど、演習はしないわよ？　こんな席でそんな話したら中将に何を言われるか分からないもの」

中佐「残念、釣れなかつたか」

提督「今日は元帥もいるんだ。少しは自粛しないとな」

無蔵「お前は准将の所の初春か？」

初春「そうじゃ。この前来た時はろくに挨拶もできなくてすまなんだのう」

無蔵「いや、気にするな。ふっ……」

初春「なんじゃ？」

無蔵「いや、准将は養女趣味もあるのかと思つてな」

初春「ほう。妾の矮軀を晒うか。ま、否定はせんがの」

無蔵「ほう。感情的に反論してくると思つたら意外に身の程を弁えてるじゃないか」

初春「その不遜な態度、自分の実力に対する絶対の自信があるようじゃな。大したも

のじゃ」

無蔵「ん？ ま、まあな」（なんだ？ ここまでして乗つてこない奴は初めてだぞ）

初春「妾が憤怒しないのが不思議かえ？ それは残念じゃったな。これでも妾はこと忍耐と機を読む力に關しては絶対の自信があるのじゃ」

無蔵「なんだ、単に我慢強いという事か？」

初春「そんな安易なものではない。心から慕う殿方と最も古い付き合ひの一人でありながら、その想いを殿方自身から好意を受けるまで秘することができる程度の忍耐ぞ？」

無蔵「なんだそれ。やっぱりただ我慢してるだけじゃないか」

初春「ふつ…… 最も数が多く、そしてその脆さ故に練度を鍛え難い駆逐艦の悩みは無蔵殿には流石に理解は難しいじゃろうて」

無蔵「あ…… えっと、す、すまなかつたな。あまりにも無神経が過ぎた」

初春「よいよい。もう直ぐ先ほど申した、妾が得意とする力を経験することになるじゃろうし。今回は大負けに許してしんぜよう」

無蔵「は？」

初春「忍耐と、機を読む事にも自信があると申したじゃろう？ 無蔵殿、覚悟されよ。もう直ぐ妾が読んでいたその機が主に襲い掛かるぞ？」

無蔵「な、なにを……」

むきゆ

無蔵「ひや、ひやあああ!?!」

少将「駆逐艦の……何が悪いって言うんですかあああ!?!」

無蔵「しよ、少将!?! あ、ちよつと……や、やめてくれ! 客人には危害を加えら

れないんだ!」

少将「にやあああに言ってるんですか? さつき無蔵さん駆逐艦の事馬鹿にしたでしょう? それはね、僕の叢雲を馬鹿にしてる事と同じなんですよ!?! その何処が危害を加えてないってゆーうんですかあ!?!」

むぎゆうう

無蔵「ひ、ひひやいつ! ひや、ひやへて! あひやはふはは!」

少将「何言ってるのか分かりませんよ! 反省がまだ足りないみたいですね!」

ぎゆむう

無蔵「ひひやああああつ!?! はふはひゆ、はふへへ……」

初春「……」ニコニコ

無蔵「……!」ゾッ

初春「……」トントン……

無蔵（も、モールス信号？）

トトン………（シバラクハンセイスルガヨイ）

無蔵「！」

初春「〜♪」バイバイ

少将「なあああに余所見してるんですかああ!!」

ギユギユウ

無蔵「ひい、ひゃああああああ!!」

武蔵「……… 凄いな」ゾッ

叢雲「あーあ、怒らせちゃって。ま、嬉しいけど」

長戸「はは、嬉しいって酷いな奴だな」

叢雲「私だつて駆逐艦なりの誇りは持つてもの。彼はそれ代弁してくれてるのよ。嬉しいに決まつてるじゃない」

武蔵「じ、自分の分身ながら鏡を見ているようで気分が………」サア

長戸「おいおい、そっちの武蔵は随分大人しいんだな」

武蔵「わ、私はお前たちが思つてるほど不遜ではないぞ？　ちゃんと准将に躰けられてるんだ」

叢雲「寝って……」

長戸「ほうほう、そういう趣味か。よし、お姉さんとちよつとエロトークでもしよう！」

武蔵「お、お姉さんって……。わ、私は大和型だぞ!? 武蔵なんだぞ!?」

長戸「こーんな可愛い武蔵が私よりお姉ちゃんな筈がなからう。さあおいで可愛がつてやろう」

武蔵「な、なにを……!?!」

長戸「叢雲、お前も付き合ってくれよ? 見た限りお前も相当アツチの話はできそうだしな」

叢雲「へえ、よく判ったわね。ま、退屈だったからいいけど」

長戸「そこなくては!」

武蔵「や、やめろおお! 大佐ああ! うわああああん!!」

長門「皆盛り上がってるな」

大和「そうね……」

長門「お前は酒が入ってるのに全然変わらないな。寧ろ落ち込んで。一体どうしたんだ?」

大和「…… いいわよね、貴方たちは提督と恋仲になれて」

長門「ん？」

大和「……」
「フイ、グビ」

長門（ああ、そういう事か）

長門「中将が好きなのか？」

大和「……」
「大好き」

長門「告白はしたのか？」

大和「もう何回も……」

長門「全て断られてるのか？」

大和「というより、まともに相手にされない。悪気がないのは分かるけど。それでも振り向くくらいはしてくれたっていいじゃない……」

長門「なるほどな」

大和「長門、私どうしたらいいのかな……」

長門「ん？ そうだな……」（酒が入ってる所為か口調が段々子供みたいになつてきたな）

大和「う……ぐす。どうやったら、振り向いてもらえるの……か
にやああ……」
「ジワ」

長門「うーん………… あっ」（泣き上戸か。これは厄介だぞ）

長門「取り敢えず、後ろの中将殿に慰めてもらったらどうだ？」

大和「ふえええ…………？」

中将「何を泣いてるんだ、この娘は」

大和「ちゆ、中将お………… だつて………… だつてえ…………」ブア

中将「お前は酒が入るといつもこうだな」

大和「う………… ぐす………… ごめんなしゃい…………」

中将「泣く泣くな。ほれ、こつちにきて一緒になんか食べよう。酌をしてくれるか？」

大和「つ、中将おおお！」ダキッ

中将「おつとつと、ほら行くぞ」

大和「はあ………… い♪」スリスリ

中将「調子のいい奴だな。長門、面倒掛けたな」

長門「あ、いえ」

中将「うむ、ほら行くぞ大和お」ヒヨイ

大和「んふふふ、おんぶー♪」

長門「…………」

長門（中將のあの目、気になるな）

元帥「賑やかだな」

紀伊「……」

元帥「どかしたか？」

紀伊「いえ」

元帥「そうか」

紀伊「……閣下」

元帥「ん？」

紀伊「お注ぎ致します」

元帥「ふっ、ありがとう」

メインストリー (第四章)

第1話 「謎」 R—15

元帥 「それでは達者でな」

彼女 「偶には仕事以外で来なさいよ？」

中将 「ぐふふ、久しぶりに一緒に飲めて良かったわ。また、飲もうな！」

大和 「中将まだお酒が抜けてないんですか？」

提督 「皆さん、この度は本当にありがとうございます」

元帥 「本当に帰りは送らなくていいのか？ 輸送機を用意しようと思っていたのだが」

提督 「ええ、大丈夫です。帰りくらいは自分達で——」

中佐 「帰りはゆつくりでいいんだろ？ なら、俺の……」

長戸 「提督……」 クイ

中佐 「あ？」

長戸 「……」 チヨン

中佐「お前な……。悪い、ちよつと無理そうだ。あー……、あ、後輩！」

少将「え？」

中佐「おま……。あ、階級は上なのか……。あー、えつと」

少将「ははは、気にしないで下さいよ。中佐の武勇伝はよく耳にしています。勿論、昇進が出来ていない理由も」ニコツ

中佐「うわ、なんかカツコワリイなそれ。まあいいや。後輩、こいつの事頼めるか？」
提督「いや、俺は連れて来た誰かに乗れば……。」

中佐「遠慮すんなって、ここまでは原形にならずに一緒に来たんだろ？　なら、帰りも旅行気分でいけよ。俺だってわざわざその為に別の船で来たんだぜ？」

彼女（滅多に使わない有給、この為に浸かったのね）

少将「そうですね。遠慮は無用です。幸い僕の鎮守府はここからそんなに遠くはないですからね。基地に着いたらそこから96式の輸送機でお送りしますよ」

少将「いいだろ？　叢雲」

叢雲「当然よ」

彼女「……。どうして一鎮守の提督が輸送機なんて持つてるのかしら？」

少将「あ、実は叢雲とケツコンした時にハネムーンの旅行用に無理言つて……。えへ

へーテレ

武蔵（何か急にノロケ始めた！ 私も大佐に甘えたいぞ！）

無蔵（ふむ……新婚ごっこということのものもありかな）

初春（この2人、結局は同型だけあつて本質は同じみたいじゃない）

大和（またなんかラブラブな事考えてるわね。キー！）

長門「ふっ、お熱いことだ」

紀伊「……」

提督「ふむ……少将殿、では頼めるだろうか？」

少将「はい！ お任せ下さい！」

提督「ありがとうございます。では、皆さん私達はこれで」

中将「おう、またな！」

彼女「……メールや電話の履歴はちゃんと確認するようにしてね」

元帥「君たちの今後の活躍を期待している。また会おう」

提督「はっ、それでは失礼いたしま——」

紀伊「准将」

提督「はっ、貴女は……」（しまった、そういえば全然知らないぞ。挨拶くらいはし

たが、名前を聞いてなかった)

初春 (相変わらず妙な所が鈍いの)

紀伊「元帥専任の秘書艦をしています艦娘です。故あってまだ名前を明かす事はできませんが、私もあなた達の活躍に期待しています」

提督「はっ、ありがとうございます」

少将「ありがとうございます！」

中佐「……感謝します」

紀伊「少将、准将、中佐……あなた達は艦娘の提督、指揮官です。貴方達の采配一つ一つが私達の今後を作用する事をお忘れなく。脅すわけではありませんが、その采配が常に間違っていない事を祈ります」

元帥「……」

彼女 (紀伊……)

大和 (紀伊さん……)

武蔵 (ふん……)

中将 (紀伊、そうかこいつは……)

提督「……了解しました。肝に銘じておきます」

少将「僕も了解しました。当然です！」

中佐「同じく。絶対に後悔なんてさせはしませんよ」
 紀伊「…… 大変結構です」ニコ

「数時間後、とある海域航行中の丁督専用高速艇

長戸「ん…… ちゅ…… なあ、提督」ギシ

丁督「ちゅ…… ん？」

長戸「最後に私達に声を掛けた艦娘、誰だと思う？」

丁督「やっぱり、お前も知らなかったか」

長戸「お前も？ って…… あっ…… んっ……」ピクツ

丁督「宴会の席でも誰もあいつの事を知ってるような反応をする奴はいなかったからな」

長戸「そう…… だった…… の、か」

丁督「ああ。そして結局お前も知らなかった。お蔭で答えが出たぜ」

長戸「え？ それって…… ああっ、や…… んふっ……！」ギシツ

丁督「恐らく大和の姉妹だ。存在しなかった筈のな」

長戸「存在しなかつ…… ちよ、ていと…… 急に激しぞ…… ちゃんと教

え…… は…… あああん！」ピクンツ

丁督「湿っぽい話は後だ。いくぞっ」グツ
長戸「ああ、んんんっ……!!」

同刻、とある空域飛行中のT督専用輸送機

長門「なあ、大佐……」

提督「あの艦娘の事か？」

長門「ああ」

T督「あ、それ僕も気になってました。誰なんでしょうねあの人」

叢雲「初春は知らないの？」

初春「そうじゃの。同じ仲間（艦娘）であることは直ぐに判ったのじゃが」

長門「ふむ、まだ建造許可が下りてない秘蔵艦という事か。なあ、武蔵は……
武蔵
？」

武蔵「……ん？ ああ、悪い。少し微睡んでいた」

提督「あの艦娘を見てからずっとその調子だな」

武蔵「気づいてたのか。うん、そうだ。宴会の時はあまり余裕がなかったからそんなに気にもしてなかったんだが……」

初春「何か気付いたのかの？」

武蔵「いや、分らない。ただ、他人とは思えない気はするんだ」

T督「へえ、それじゃもしかしてあの人も戦艦なのかもしれませぬ」

叢雲「見た感じはそれっぽかったわね」

提督「……」

長門「大佐？」

提督「ん、いや。まあその話は後だ。もう直ぐ我が家だぞ」

初春「もうかえ？ 疾風より明らかに遅い筈なのに随分と早く着く気がするのう」

長門「疾風の時は皆バラバラだったからな。時間の進みを遅く感じたのだろう。こうして話してるとどれだけ暇潰しが重要なのがよく分かるな」

武蔵「そうだな。皆で乗れば空の上も怖くないしな」

T督・叢雲「え？」

長門・初春「ほう？」ニヤ

提督「……」

武蔵「?…… は！ ち、違うぞ?! さっきのはあれだ！ 皆が怖くないように私が

一緒にだな！」

長門「意外に可愛い奴だな。撫でていいか？」

武蔵「なっ、だ、ダメだ！ 私を撫でていいのは大佐だけだ！ あ、ギョツとするの

もダメだぞ！」

叢雲「ちよつと、こんな所でノロケないですよ。妬いちやうじやない。ね？ 提督？」サ
ワッ

T督「ちよつ、む、叢雲!?! 運転中はダメだよ！」

初春「盛るのは良いが。くれぐれも理性は落ちないように、の？」

提督「全員、落ち着け。説教だ」

第2話 「挑戦」

レ級「今回は海軍の本部を襲ってみようと思います！」

ル級「えっ」

ヲ級「……マジ？」

タ級「私達4人だけで？ 本気？」

レ級「何れ攻めることになるかもしれないしね！ 大丈夫、偵察みたいなものだよ！」

ル級「偵察で本部を襲うの？ 大丈夫かな」

タ級「まさか、正面から襲うなんて考えてないわよね？」

レ級「流石にそれはないよ！ 本部の基地に帰港しようとしてる艦隊を見つけて襲っ

てみようと思います！」

ヲ級「あ、なるほど」

ル級「それなら本部の戦力全部相手にしなくて済むね。危なくなったら逃げちゃえば

いいし」

レ級「そういう事！」

タ級「でも私達は4人、そして相手は本部の艦隊。それを忘れちゃ駄目よ？」

レ級「分ってるよ！ 撤退のタイミングは絶対に誤らない。これは絶対だからね！」
レ級「それじゃ、決を取るよ！ いつも通り決定は満場一致のみ！ …… 本部、襲っちゃおうと思います！ 賛成の人挙手！」

3人「賛成」スツ

レ級「よーっし、行ってみよう!!」

く 大本営海軍本部、総司令部副官執務室

中将「ほう？ うちの艦隊が襲われた？」

大和「はい。ちようど方面指揮官の元帥の査察から帰港していた大將が襲われたみたいです」

中将「よりによってあいつをな……。それで戦況は？」

大和「未だ継続中です。大將が応援を拒否されてるので戦闘の状況の確認だけでしたら大展望から肉眼でもできます」

中将「戦況は膠着してるっていうのか？ やるなあ。見るぞ！」

大和「そう仰ると思ってきました。どうぞこちらに」

く 海軍本部大展望広場

中将「おお、やつとるやつとる！ 本当にまだ続いてるじゃないか！ 敵もやりおるのお！」

大和「なに楽しそうに言ってるんですか、もう。敵の勢力は深海棲艦レ級、ル級、タ級、ヲ級、全てカテゴリFS以上です」

中将「たつた4隻？ 大将の奴の艦隊は？」

大和「査察が目的でしたから、艦隊は然程強力ではありません。一応6隻編成ではありませんが」

中将「ふーん、〃強力じゃない艦隊〃でも、たつた4人だけであそこまで戦えるか。おい、双眼鏡くれ！」

大和「はいはい」（全く……）

く海軍本部正面近海

レ級「くうく、流石に強いなあ」

タ級「ホント、艦隊は駆逐艦と重巡だけなのに凄いわね」

ヲ級「ふえええ、なかなか艦爆が決まらないよお」

ル級「捕捉できそうところで、ギリギリ避けるのよね。うん、やつぱり強いよ」

タ級「しかも基地の近くだと言うのに応援を呼んでる気配もない。これは自分の実力

に絶対の自信がある証拠よ」

レ級「あの提督の艦隊も強かったけど、まさか駆逐艦と重巡でここまで抵抗できるなんてねえ。うん、この人たちの強さは別格だよ」

ル級「どうする？」

レ級「4人だけだけど、編成見た時勝機ありだと思ったんだけどなあ」

タ級「それは私も同じよ。今回はいい勉強になったわね」

ヲ級「退散！ 退散！」グイグイ

レ級「分ってるよ。じゃ、悔しいけど、退散！」

く再び大展望広場

中将「お、撤退して行くな。てつきり継続するのかと思つたが、大将の艦隊を編成だけで判断せんかったらしい。思いの外敵も冷静だわ」

大和「大将は追撃するでしょうか？」

中将「いや、恐らくせんな。あいつは無駄な事が大嫌いだからな。敵の戦力を侮つていなければ、その判断はやはり有り得ん……………ん？」

大和「どうしました？」

中将「いや、あの逃げていくレ級、どこかで見た覚えが？」

大和「以前戦った事が？」

中将「いや、それはあるが。ただ今見てるあいつに関しては、それとは違って親近感に近い感じというか……」

大和「はあ」

中将「……いや、わしも自分で何を言ってるのか分からなくなってきた。取り敢えず大将の奴を迎えに行こう。感想とか聞いてみたいし」

大和「そんな事言って……また喧嘩とかしないで下さいね」

中将「ふふ、喧嘩する程なるとかと言うだろう？ わしとあいつはそういう仲なのよ」
大和「はいはい。それでは私は紀伊さんに報告してきますから」

中将「おう」

くとある海域

レ級「うくん……」

ル級「レ級どうしたの？」

レ級「いや、最後撤退する時に、基地の上の方で誰か僕達の戦いを見てる人がいたんだけど……」

ヲ級「え、そんな事気にしてたの？　というか、よく気付いたね」

レ級「や、なーんか視線を感じちゃってさ。あ、嫌な視線とかじゃないよ？ 何故だか分からないけど見られてたのが直ぐに分かっちゃったんだ」

タ級「不思議な事言うのね」

レ級「うん。自分でもそう思う」

ヲ級「どんな人だったの」

レ級「ひげもじやのの人。歳はおじいさんくらいかな」

タ級「海軍の幹部かもしれないわね。なんで気になったのかしら。もしかしてその人の元艦娘だったとか？」

ル級「え、それホント!？」

レ級「え、それはまだ分らないよ……うーんでもそうなのかなあ。気になるなあ」

ヲ級「本部怖いから暫く近づきたくないな」

レ級「大丈夫。僕ももう少し少ない人数で行こうとは思わないよ」

ル級「あ」

タ級「どうしたの？」

ル級「解決するか分からないけど、大佐に聞いてみたら？ 今度会う時にでも」

レ級「あ、それいいね！ じゃ、明日行こうか！」

タ級「こら、ちゃんとそういうのは本人の都合を調べてからにしてください」

レ級「あはは、だよね。ごめん」

ヲ級「潜水艦の子にちよと様子の確認をお願いしてみる？」

タ級「そうね。それがいいわ」

レ級「お願いします！」

ヲ級「は〜い」テクテク

レ級（ホント、あの人誰だったのかな。気になるなあ）

第3話 「回避」

加古「大佐が帰って来たよー!!」

望月「準備はいい? 初わん」

初雪「いつでも、望わん」

青葉（……）これはマズイなあ。上手く止めないと大佐の迷惑になっちゃう……。わたしはなんとかしないと

青葉「……」ポチポチ

pr r♪

提督「ん?」

武蔵「私だ。ラ○ンだ」

初春「スマホか。すっかり馴染んでおるのう」

長門「ま、うちの鎮守府だって携帯もスマホも持ってない奴はいないだろ」

武蔵「……」

初春「ん? どうしたのじゃ? 武蔵」

武蔵「大佐」

提督「ん？」

武蔵「ちよつとお願ひがあるのだが」

ガチャツ

初雪「来た！」

望月「いくよっ」

初雪「大佐、おかりワン！ 初わんだよ！」ダキツ

望月「まつてワン。この望わんを待たせるなんて大佐も意地悪な人だワァン♪」ス
リスリ

提督（？）「……」

初雪「？ 大佐？」

望月「黙つてどうしたワン？ 疲れ……」
ムニユ

望月（ん？ ムニユ？）

提督（？）「可愛い……」

初雪「え？」

長門「ああもう！ 可愛いなあ!!」ギユウウ

望月「な!? え? な、なが…… むぎゆ」

長門「こんな可愛い姿で私を出迎えてくれるとは。お前達本当にありがとう！」

ギユツ

初雪「え、ちよつとこれつてどういう——」

武蔵「…… ふむ」

青葉「何とか上手くいったみたいですね」

提督「…… 一体」

武蔵「危うく皆の前で犬好きがバレるところだったな」

提督「犬好き?」

青葉「大佐、青葉、大佐の為に頑張りました。褒めてください!」

提督「青葉?」

武蔵「なに、礼ならあ、頭を撫でてくれたら…… いいぞ?」

青葉「ああつ、ズルいです! 大佐、青葉! 青葉を先にクシヤクシヤつて撫でて下

さい!」

提督「お前達、一体なにを言ってるんだ」

——数分後

提督「……なるほどな。俺はお前達に助けられたわけか」ナゲ

武蔵「そういう事だ。ん……………」♪」スリ

青葉「ふあ……………」大佐あ……………。青葉は幸せですう♪」スリ

提督「しかし、これは初雪たちに少し悪い事をしたな」

武蔵「ん……………」だからと言って犬好きがバレたら大変なことになっただろう？」

提督「いや、確かに犬は好きだがこういう趣味は……………」

青葉「大佐あ……………」もつと撫でて下さあい♪」スリスリ

提督「ん……………」ナゲ

武蔵・青葉「く♪」

提督「……………」(後で長門から助けに行こう)

——その夜

初雪「う……………」ぐす」

望月「……………」ゲツソリ

提督「二人とも大変だったな」

初雪・望月「っ、」ダキッ

提督「よしよし」（長門…… 一体何をしたんだ）

初雪「大佐、ひどいよ。長門さんに提督の格好をさせるんなんて」

望月「身長差利用したね。確かにあれじゃあちやんと顔を確認しないと間違える」

提督「二人ともすまん。長門がイタズラをしたと言いついてな」

提督（すまん長門。だがお前もあれだけ満足していたんだ。これくらいいいよな？）

初雪「別にもういいよ。今結構嬉しいし」

望月「うん。助けてくれたしね」

提督「二人とも」

初雪・望月「？」

提督「犬の格好何てしなくても、俺はお前たちの事をこうやって撫でてたり抱いてやる事はできる。だからあまりこうなんというか……」

望月「コスプレは嫌？」

提督「コスプレ…… まあ人目があるところでは気まずいな」

初雪「そっか。ごめんね」

望月「それは迂闊だったよ。今度から気を付けるね」

提督「いや、分かってくれればいい。二人とも今日は俺を出迎えてくれようとしてあ

りがとうな」ナデナデ

初雪「ん……♪」

望月「おおお……これは長門さんに捕まった甲斐があつたねえ♪」

提督「……」（やっぱり駆逐艦は素直でいいな）

第4話 「サボテン」

提督「島風、雪風」

島風・雪風「はいっ」

提督「俺がいない間、ちゃんとサボテンの世話をしてくれていたみたいだな。ありがとう」

雪風「いいえ！ 雪風達は殆ど何もしていませんから」

島風「そうだねっ。わたし達の部屋に置いてちゃんとお日様に当てて、時々虫が付いてないか見てただけだもん」

提督「それでも十分だ。コイツとは長い付き合いだからな。大事にしてもらって嬉しい」

雪風「あ……そ、そんな。そこまで褒められる事なんて」テレ

島風「島風たちエライ？ 凄い!? ありがとう大佐♪」ピョン

提督「ああ。二人ともよくやってくれた」ナデナデ

島風・雪風「えへへ♪」

加古「……」

提督「加古」

加古「は、はいっ」

提督「お前も俺がいない間、駆逐艦達の面倒をみてくれてありがとう」

加古「あ、いやっ。あたしは別に…… 赤城や天龍たちが殆ど基地の事はやってくれてたし……」

提督「それでもこのサボテンを島風達と一緒に面倒を見てくれたろ？ それだけでも十分だ」

加古「は、はあ……」(アレ、ただのサボテンだよな？ そうだよな?)

加古「…… あの〜」

提督「ん？」

加古「そのサボテンってそんなに大事なもののなの？ 普通のサボテンだよな？」

提督「ああ……。確かに何の変哲もない普通のサボテンだぞ」

雪風「えっ」

提督「ん？ どうした？」

雪風「わ、わたしこのサボテン、凄く価値のあるものだと思ってました」

提督「はは、価値か。まあ普通だな1000円くらいか、適当だが」

島風「違うよ！ 1000円なんかじゃないでしょ！」

加古「え？ 島風？」

島風「そのサボテン、大佐の大事な友達なんでしょ？ だったら10000円なんて値段なわけないじゃん！ 価値なんて付けられないよ！」

雪風「島風ちゃん……」

加古「あ……」

提督「…… 島風の言う通りだ。加古、質問に答えるのが少し遅れたが、さつきも言った通りこれは普通のサボテンだ。だがな」

雪風「友達なんですね？ 提督の」

提督「まあ友達と言うより相棒みたいなものかな。何しろ俺が赤ん坊の頃からの付き合いだからな。もう20年以上になる」

島風「そんなに!? すごい！」

加古「こんなにちっちゃいのが20年も…… ははあ」

雪風「友達というのは本当だったんですね！」

提督「ああ。あながち間違いではないな」

島風「ねえ大佐」

提督「うん？」

島風「名前は？」

提督「ん？」

島風「名前！ この子、名前は何て言うの？」

提督「名前？ いや、名前は特に……」

島風・雪風「えー？」

提督・加古「え？」

島風「赤ちゃんの頃からの友達なのに名前がないの!？」

雪風「それ、可哀そうです！」

提督「……そうか？」 チラ

加古「えあや!？ あ、あたしに聞かない下さいよ！」

島風「そうだよ！ 名前がないのは可哀そうだよ！」

雪風「そうです！」 コクコク

提督「ふむ、じゃあ付けるか。何がいいだろう。加古は？」

加古「ええつ、いきなりあたしですかあ？ うーん…… そうだなあ」

島風「ドキドキ」

雪風「ワクワク」

加古「あ、3号とかどうです？」

島風・雪風「」

提督「……一応、何かから思い付いたのか教えてもらえるか？」

加古「やあ、20・3cm砲が……」

島風「ダメ！」 雪風「だめです！」 提督「却下だ」

加古「即答!？」

島風「そんなの全然可愛くないよ！」

雪風「数字の名前なんてあまりにも可哀そうです」

提督「自分の願望を人の大事なものに被せるな」

加古「あははは……そ、そんなにダメだったかな」

島風「い・や！」

雪風「めっ！」

提督「そういう事だ。では二人はどうだ？」

島風「わたし? えへへ、わたしはねえ。 トゲピーー！」

雪風「わたしは雪雲です！」

加古「へえ、トゲピーか。可愛いんじゃない？」

島風「えへへ、でしよー？」

提督「雪風その雪雲というのは？」

雪風「建造の予定だけあった駆逐艦の名前です。わたしの字が入ってるのでそ

の…… 選びました」

提督「ふむ……」

加古（あ、これは決まったかな）

提督「島風」

島風「なに？」

提督「雪雲でいいか？」

雪風「た、大佐」

島風「え？ うーん…… 『ゆつきー』 っと呼んでもいい？」

提督「雪風？」

雪風「え？ い、いいの？ 島風ちゃん？」

島風「ゆつきー、っと呼んでもいいならね！」

雪風「うん…… 勿論だよ！ ありがとう島風ちゃん！」

島風「雪風ちゃんが考えた名前なんだもん、いいに決まってるよ！」

加古「あの一」

提督「ん？ なんだ、異見か？」

加古「ああ、いやそうじゃないんだけど。大佐は何か考えなかったの？」

島風「あ」

雪風「そ、そうですよ！ 大佐の友達なんですから一応大佐も考えないと！」

提督「俺も？ ふむ…… ミッドウエーとかどうだ？」

加古「…… 一応聞くけど、どうしてその名前に？」

提督「失敗に終わったMI作戦、その悲劇を繰り返さないた——」

加古「雪雲だね」

島風「うん！」

雪風「です！」

提督「…… そうか」

第5話 「風邪2」

日向「風邪、ね」

提督「……」

日向「また大佐の風邪に立ち会う事になるとはね」

提督「…… 面目ない。前に本部に行ったとき季節が冬で寒かったから、こここの温度差でひいたのかもな」

日向「なるほどね。今回は安静にしてくれるのよね？」

提督「…… ああ」

日向「よかった。待ってて、今リンゴでも剥いて来るから」

提督「すまない」

日向「気にしないで…… やつと私にもチャンスが来たみたいだしね」ボソ

提督「ん？ 誰か来たのか？」

日向「独り言よ。はい、リンゴ」

提督「早いな」

日向「実は大佐が風邪っぽいって判断した時点で剥いていたの」

提督 「…… さっきは兎にしていたのか」

日向 「そう。可愛いでしょ？」

提督 「兎に剥かれたリングゴなんて久しぶりだ。食べるのが惜しいな」

日向 「そこまで言ってもらえると剥いた甲斐があるというものね。はい」

提督 「…… いや、いい」

日向 「あーん」

提督 「…… あ」

パク

提督 「……」 シャリシャリ

日向 「ん、よく味わってね」

提督 「…… 美味しい」

日向 「それは良かった。はい」

提督 「まだやるのか？」

日向 「やらせてくれないの？」

提督 「…… あ」 パク

日向 「ふふ、良い子ね♪」

提督 「まるで子供だな」

日向「今は、そうであつてくれると嬉しいな」

提督「…… タオル、冷やしてきてくれないか？」

日向「うん。分かった」

提督「ふう……」

日向「お待たせ」

提督「ああ、ありが——」

コツ

日向「……」

提督「……」

日向「うん…… 良かった。熱は、あまりないようね」

提督「…… 急に驚いたぞ」

日向「ん？ ふふ、キスかと思つた？」

提督「風邪が感染るからそれはないな」

日向「大佐とできるなら、感染つてもいいんけどな」

提督「それは俺が受け入れられない。それに」

日向「それに？」

提督 「口が乾いてるからきつと臭い」

日向 「ええ？ ふふっ」

提督 「なにか可笑しいことを言ったか？」

日向 「ああ、いやすまない。大佐もそういう事を気にするんだなってね」

提督 「…… 女性と付き合ったことがないわけじゃないからな」

日向 「おっと、そこまで。くれぐれも今はそこで他の女の名前は出さないでね？」

提督 「…… それくらいは心得てる」

日向 「大佐って、そういう機微には聡いのもつと単純な事には鈍感よね、何故かしら？」

提督 「ん？ 何か不快な思いをさせてしまったか？」

日向 「ううん、今は私は凄く幸せな気分よ。こんな風は大佐と話す事あまりないから」

提督 「幸せとは、ちょっと大袈裟なきがするが」

日向 「いいの。幸せに間違いはないんだから」

提督 「…… そうか」

日向 「うん、そう」

日向 「……」

チユ

提督「おい」

日向「頬だ。風は感染らないよ」

提督「いや、ヒゲが」

日向「それくらい気にしないわよ。ほら」

チュ

提督「……」

日向「ね？」

提督「ふう……」

日向「ん？もしかして照れてる？」

提督「俺も人間だ。恥の感情くらいは持っている」

日向「ふふ、なんか可愛いな」

提督「やめてくれ。男がそんな事言われても嬉しくはない」

日向「そう、それは行幸。攻め手が一つ増えたわ」

提督「おい」

日向「冗談よ。半分ね」

提督「敢えてもう半分は……」

日向「本気よ。私、大佐を攻めたい」

提督「……今は駄目だぞ」

日向「分かつてる。ねえ」

提督「ん？」

日向「風邪、治ったら…… もっと、恥ずかしい事しない？」

提督「……風邪が治ったらな」

日向「っ、ほ、本当？」

提督「そんな顔しないでくれ。本当だ」

日向「っ……、嬉しいな。これで私も恋人になれるのかな」

提督「別にしなないとなれないというわけじゃ——」

日向「したい」

提督「……そうか」

日向「ねえ」

提督「うん？」

日向「その……本番の前に心の準備をさせて欲しい」

提督「ああ、看病助かった。休んで——」

日向「違う」ジトツ

提督「……今のは鈍かった、か？」

日向「そうね。ま、気づけただけマシだけど」

提督「それで、準備と言うのは？」

日向「一瞬でいいから抱き締めてほしい」

提督「……感染したくはないんだがな。それに汗が……」

日向「分かっている。汗も気にしない。だから一瞬」

提督「……ほら」

日向「あ……」

ギョツ

提督「……大丈夫か？」

日向「……汗？ ああ、気にならないくらい今幸せだからね」

提督「そうか」

スツ

日向「ありがとう」

提督「いや」

日向「寝るまで、ここにいていい？」

提督「……お前さえよければ」

日向「ありがとう。好きよ、大佐」

第6話 「自慢」

蒼龍「あははは！　ねえ飛龍、悔しい？　悔しい？」

飛龍「……　つの、悔しくないって言ってるじゃない！」

蒼龍「あはははっ、嘘ばっかしー！」

提督「……　一体どうしたんだ蒼龍は」

加賀「改二の件がよほど嬉しかったみたいですね」

提督「上位改造の件か？　蒼龍は練度が僅差で足らなかった筈だが……」

加賀「はい。どうやらその差が、自分の方が熟達した結果の改造だという考えに行き着いたみたいですね」

提督「……　そんな考え方もあるのか」

加賀「あまり見ない例ですが、彼女の場合はそうみたいですね。ほら、あんなに嬉しそうです」

蒼龍 「そんなにわたしの方が改造レベルが高かったのが悔しいの？　ね、そうなんではよ？　いやあ参ったなあ」

飛龍 「だ・か・ら！　そんな事ないってきつきから言ってるじゃない！」

蒼龍 「えー？　じゃあ、なんでそんなに怒ってるのー？」

飛龍 「そ、それは……」

蒼龍 「ほらー、やっぱり悔しいんだー」

飛龍 「そ、そうじゃないって言ってるゆでしよお！」　グス

加賀 「あ、ついに半泣きになりましたね」

提督 「そうだな。止めるか」

加賀 「待つてください」

提督 「どうした？」

加賀 「いえ、あんな飛龍はあまり見ないので……可愛い」

提督 「おい」

蒼龍 「もう、そんなに涙ぐんじやって。悔しいなら大佐の胸で泣いていいんだよ！」

飛龍 「だつ、だからあ！　しよ、そんなことしないってえ……！　」　グス

提督 「そこまでだ」

蒼龍 「あ」

飛龍 「大佐……………」

提督 「蒼龍、嬉しいお前の気持ちも分からないでもないが、あまり飛龍を苛めるのも感心しないぞ？」

蒼龍 「え、う、うーん……………」

提督 「あまり脅すような事はしたくないが、上位改造受けたくないのか？」

蒼龍 「！ う、受けたい！ 受けたいです！」

提督 「なら、少しは大人らしい態度をとれ」

蒼龍 「う……………」

提督 「加賀？」

加賀 「そうですね。これ以上飛龍さんをイジめるなら私も黙ってはいませんよ？」

蒼龍 「か、加賀さん!？」

提督 「蒼龍」

蒼龍 「う……………ご、ごめんなさい」

提督 「俺に言う言葉じゃないな？」

蒼龍 「う…………… 飛龍、ごめんね。ちよつと調子に乗りすぎたわ」

加賀「それは心からの言葉ですか？」

蒼龍「むぐ…… 飛龍ごめん！ もうしない！ わたしちよつと有頂天になってた

！

飛龍「…… もういいよ。分かったから」

蒼龍「ホント!？」

飛龍「うん。大佐も来てくれたし……♪」スリ

蒼龍「な!？」

加賀「おや」

提督「……」

蒼龍「う、うう…… た、大佐!」

提督「ん？」

蒼龍「ちや、ちゃんと私も改造可能なレベルまで上げて下さいね!」

提督「約束する」

蒼龍「あと、改造が終わったらわたしも飛龍みたいに甘えさせてくださいね!」

提督「ああ、わか…… なに?」

蒼龍「言質取りましたからね?」ニヤ

提督「おいちよつとま——」

蒼龍「それじゃあそういう事で！」ピュー

加賀「……行つてしまいましたね」

提督「そうだな……」

飛龍「あの、大佐」

提督「ああ、大丈夫か？ 飛龍」

飛龍「あ、はい。ありがとうございます……」

提督「気にするな」

加賀「そうですよ。飛龍さん何も悪くないんですから

飛龍「加賀さん……ありがとう」

提督「ふむ、今日はお前達二人に晩酌に付き合ってもらうか」

飛龍「え、いいんですか？」

加賀「本当ですか？」

提督「嫌か？」

加賀「是非」 飛龍「とんでもない！」

提督「では、宜しく頼む」

第7話 「結婚できますよ?」

提督「何だこれ」

加賀「指輪です。大佐」

提督「そんなのは見れば分かる」

提督「俺が知りたいのは、どうしてわざわざ二つ並べて指輪が机に置いてあるのかということなんだが」

加賀「分りませんか?」

提督「…… さてな」

加賀「中佐、意地悪しないで下さい」

提督「ふつ、久しぶりに降格したな」

加賀「当り前です」ブス

提督「怒っているか?」

加賀「とても気分を害しました。賠償として可及的速やかに結婚を申し込みます」

提督「日本語がおかしいぞ。賠償は普通請求するものだぞ」

加賀「大事なプロポーズを請求なんかしたくありません」プイ

提督 「そうだな。悪かった、加賀」

加賀 「……………抱きしめて下さい」

ギユ

提督 「……………他には?」

……………加賀 「もつと強いです」

ギユッ

提督 「どうだ?」

加賀 「最高です。次は頭撫でて下さい」

提督 「了解」

ナゲ

提督 「相変わらず撫で心地が良いな」

加賀 「それは私も同じです。ん……………♪」

提督 「まだあるか?」

加賀 「当然です。次はキ——」

チュ

提督 「……………」

加賀 「……………ん……………」

提督「……ふ」

加賀「……初めてですね。貴方からキスをしてくれたのは」

提督「そうだったか？」

加賀「はい。私、感情表現が……今、これでもとつても幸せです」

提督「久しぶりに聞く言葉だ。確かお前が初めて俺に告白した時の言葉だな」

加賀「憶えていたのですか？」

提督「当り前だ。お前をここに迎え入れて、次の日にいきなり受けた言葉だぞ？」

加賀「……そういえば、そうでしたね」

提督「あの時の俺は、その時の答えを保留にする事しか考えられなかった。それでもお前はそう言ったな。何故だ？」

加賀「断わられると思ってましたから……『検討しておく』という貴方の言葉にどれだけ希望を持ったことか」

提督「それである言葉か。ハッキリ言つてあんなことを言われた時の俺のあの時の気持ち、半分脅迫されたような心地だったぞ」

加賀「ふふ……それが狙いでもありませんから」

提督「なあ」

加賀「はい」

提督 「何で俺なんかを好きになつた?」

加賀 「艦娘だからなのかもしれないが、一目惚れです」

提督 「…… そうか」

加賀 「驚きました?」

提督 「…… いや、その…… 初めてじゃないからな」

加賀 「他にも私と同じような子が?」

提督 「いや、お前たちじゃなくて前に来た彼女だ」

加賀 「ああ…… あの人もだつたんですか」

提督 「そうだ…… それにしても一目惚れなんてのは半信半疑だつたんだがな。流

石に2回もそうだとされると」

加賀 「信じざるを得なくなりました?」

提督 「正直言つてそうだ」

加賀 「ふふ。でもやつとこうして今、ずっと願ひ続けていた想いが叶いそうです」

提督 「と言うと?」

加賀 「私に言わせる気ですか?」 ムツ

提督 「なるほど…… そうだな」

加賀 「言われたいんです。いくらでも言う事はできますが、偶には……」

提督 「結婚してくれるか？」

加賀 「…… もう少しムードを考えて欲しかったですね。あまりにも唐突です」

提督 「…… すまん」

加賀 「ふふふ、いいですよ。気にしてませんから。だから好きなんです」

提督 「…… 返事は？」

加賀 「愚問です。断わると思いませんか？」

提督 「いや、で——」

加賀 「んっ……ん！」

提督 「っ……ん……ん……」

加賀 「ふう……」

提督 「加賀……」

加賀 「ありがとう。愛しています！」

第8話 「在庫」

提督 「…… また徹甲弾か」

金剛 「もう18個目ネ」

提督 「調子がいいな？」

金剛 「そんな疑問形で言わないでヨ。ワザとじゃないワ」

提督 「狙って出せるならそれはそれで凄いからな」

金剛 「そうヨ！」

提督 「悪かった。悪かったから抱き着くな」

金剛 「や！」 ギユウ

提督 「おい」

金剛 「ダツテ秘書艦久しぶりなんだもん！ イチャイチャしたいネ！」

提督 「こら、秘書艦の仕事を逢引みたいに言うな……… 全く」

金剛 「んー♪スリスリ

提督 「それにしても………」 チラ

徹甲弾の山 「ゴロン」

提督 「……なんだ？ ついにレ級達と戦う事になりそうなのか？」

金剛 「大佐と加賀との結婚祝いじゃナイ？」

提督 「こんな物騒な結婚祝いいらん」

金剛 「それもそうネ」

提督 「ふむ……」

金剛 「私達も装備できたらいいのにネ」

提督 「そうだな」

金剛 「装備できたら霧島とか喜びそうネ」

提督 「霧島か……」

霧島 『新たに強化改装された霧島の火力存分に味わって下さい。…… ○ネ！ ゴ
ルア!!』

提督 「…… うむ」

金剛 「大佐？ ナンカ霧島に対して失礼なコト考えてナイ？」

提督 「いや……」

金剛 「ほんとにイ？」

提督「金剛は可愛いな」ナデナデ

金剛「あふう……… 大佐あ♪」

提督「まるでね……… いや、ちよろいだったか？」

金剛「ハ？」

提督「この前鈴谷が秘書艦だった時にいろいろ教えてくれてな。さつきみたいだな金剛の事をそう言うらしい」

金剛「鈴谷……… 大佐になんて事を教えてくれるネ………」グギギ

提督「ん？ もしかして悪い意味だったのか？ 撫でれば機嫌を直すなんて猫や犬みいたで可愛いじゃないか」

金剛「えっ」

提督「ん？」

金剛「たーいさつ」ピヨン

提督「なんだ、いきなり」

金剛「大佐ア、大佐は猫と犬どつちが好きデス？」

提督「なんだ唐突に？ まあどちらかと言われれば犬だが」

ガタツ

金剛「なら、ワタシは今から大佐のワンちゃんになるネ！ だから好きなだけ可愛

がってヨ♪ クウ〜ン♪」スリスリ

提督「しまった。また武蔵みたいなのが……」

提督「まだ仕事が残ってる。だからやめろ」

金剛「もう午前中は *little* ネ。午後からでも直ぐ終わるワ」スリスリ

提督「いや、駄目だ。そういうのはちゃんとケジメをつけけないとい——」

バンツ

武蔵「そうだぞ！ そんな手段で私の大佐へのポジションを奪おうとは金剛、お前はなんて浅ましい奴だ！」

比叡「金剛お姉様ズルイ！ 最初のワンコはわたしなんですよ！」

青葉「違います！ 青葉です！ 大佐に忠実なこのわたしこそ大佐のワンちゃんに相

応しいんです！」

望月「…… それには同意しかねるけど、金剛さんだけが、大佐のワンコっていうのはないかなあ」

初雪「抜け駆け、ダメ」

金剛「な…… ライバルが既にこんな二!？」

提督「……」

武蔵「というわけで誰が一番大佐の犬に相応しいか勝負だ！」

比叡「望むところです！」

望月「競技は何にするの？」

青葉「青葉は作文がいいです！」

初雪「それは青葉さんだけが有利過ぎるからダメでしょ」

金剛「なら、お茶の美味しい淹れ方もダメネ」

比叡「なら駆けっこです！ これなら単純で……」

青葉「比叡さんずっと前に罰で駆逐艦とランニングさせられた事を忘れたんですか？」

長距離であんなだったのに、短距離なんて絶対無理ですよ」

アーダ、コーダ

提督「……皆適当にやっておいてくれ。俺は残りの仕事を食堂で片づけてくる」ス

タスタ

く食堂

鳳翔「あら、大佐。どうしたんですか？ こんなところで」

提督「ちよつと、な」

鳳翔 「お茶でも淹れます？」

提督 「ありがとう。頼めるか？」

鳳翔 「はい、分りました」ニコ

第9話 「約束」 R—15

日向「大佐、今空いてる？」

夜更けに日向が訪ねて来た。

その目的は、以前提督が風邪をひいた時に交わした約束を果たしてもらおう為だろう。

提督は直ぐにその事を察した。

提督「ああ、今は大丈夫だ。時間も……ちゃんを選んで来たんだな」

日向「一応、ね。寝てるんじゃないかと不安だったけど」

提督「仕事が今日は多かつたからな。そういうばお前、昼くらいからずっと仕事の量を気にしていたな」

日向「気づいてた？ うん。この量なら今日は遅いかなって」

提督「ふつ、読み通りだったな。だが、その仕事も今しがた殆どキリが着いたところだ」

日向「本当？ 何か手伝うことは無い？」

提督「お前、今日は秘書艦じゃなかつたろ？ そういう時は気にするな。それに大丈夫だ、本当にもう全部終わった」

日向「そう…… それじゃ」

提督「いや、悪いが」

日向「え？」

提督「そんな泣きそうな顔するな。お前らしくないぞ。単にシャワーを、な」

日向「あ……」

提督「お前は浴びて来たみたいだな」

日向「……っ」カァァ

提督「すまん、今のはデリカシーがなかったな」

日向「別に大丈夫。だから、どうぞ」

提督「ああ。悪いが少し待っていてくれ」

提督はそういうと上着だけハンガーに掛けると浴室へと入っていった。

日向「……」

日向（大佐の上着…… 私、これからスるのよね……）

ス……

日向（大佐の匂いだ…… 落ち着くな。自分らしくもなく少し緊張していたけど、これなら大丈夫そう）

スウ…………。

日向「はあ………… 大佐…………」ウツトリ

日向（まだ、出ないわよね）チラ

ス………… ウウ…………。

日向「ふう…………」

くちゅ

日向（つ、私つたら匂いだけで）

日向「ん………… ふっ…………」

日向（だめ、指が止まらない…………！）

日向「あつ………… あつ、大佐…………！」

提督「…………」

日向「!!」

提督「………… すまん」

日向「っ…………！」

提督「待て。逃げることは無い。大丈夫だ」ガシツ

日向「離してっ。私、凄くはしたな——」

チユ

提督「……………」

日向「ん……………」

提督「……………」落ち着け。大丈夫、俺は何とも思つてない」

日向「……………」嘘」

提督「本当だ。寧ろ……………」

日向「え？」

提督「寧ろ、意外で可愛かった」

日向「か、可愛かったって。あ、あんなのが……………」っ」

提督「可愛かった。恥じらいながら俺の事を想つていてくれたお前の顔が」

日向「お、想つていたって、あ、あれは……………」カアア

提督「俺の服を使つていただろ？」

日向「っ！」ボツ

提督「日向……………」ギユツ

日向「うう……………」馬鹿」

提督「可愛いな、本当に」ナデ

日向「もう……………」ボフ

提督「日向」

日向「ん？」

提督「日向の可愛いところ見ていいか？」

日向「い、いきなりそんなとコロ……」

提督「わざとじゃないとは言え、いきなり見てしまったからな。正直気になってい
た……いいか？」

日向「……」コク

提督「ありがとう」

ピラ

提督「やっぱり下着着けていなかったか」

日向「その……誘うつもりだったから……」カアア

提督「足、もっと開いてくれるか」

日向「うん……」

提督「……」ジッ

日向（う……見られてる。それにさつきシてたばかりだから蕩けて……）

提督「可愛いな」

チユ

日向「ああつ、そんなトコつ。だ……ううんっ！」ピクン

提督「イク前だつたらう？ ならこのまま一回……ペロ」

日向「ひぐつ、あああああつ」

提督「ん……ちゅ」

日向「あつ、中までっ！ひあつ、か、掻き回さ……うあああ！」

提督（舌なのに凄いな……）

日向「はあ……はあ……」

提督「どうだ？」

日向「さ……流石に経験者なだけある……な。完全にイカされちゃっ

た……」

提督「別に経験者だからとかそういうのは関係ない。単にお前が可愛かったから俺も

ここまで夢中になってしまったんだ」

日向「また……。ふふ、でもそう言われるのも……悪い気分ではなくなつてき

た……かな」

提督「それはよかった。日向……」スツ

日向「あ……その、上は……」

提督「？ 恥ずかしいか？」

日向「全くそうじゃないわけではないけど、それより私あまり大きく……」

提督「……ふ」

日向「わ、笑わないで」ウル

提督「いや、悪い。別に大きくないのを晒ったわけじゃない。お前がこういう事を気にしてたのが意外で、可愛らしく思えてな」

日向「私だつて女だ。気に入らない………する」

提督「日向」

チユ

日向「あ、ん………大佐？」

提督「見せてくれ」

日向「大佐………」コク

スルツ………パサ

提督「………」

日向「ど、どう？」

提督「別に小さくなんかない。気にし過ぎだ」

日向「ホント？」

提督「ああ。ほら」フニツ

日向「んっ」ピクッ

提督「こんなに柔らかい」フニフニ

日向「や……あ……ん」ピクピクッ

提督「ここも、小さくて綺麗だ……ちゅ」

日向「あつ、そこ……いいっ」ピクン

提督「分かるか？ 固くなつてる……ペロペロ、ちゅう」

日向「あつ……あん……あつ、ああ……わか……る。き、気持ち……」

提督「良いか？ ちゅぽっ」

日向「あああっ」

提督「……また、イツたか？」

日向「はあ……はあ、あ……ああ。ホントに上手いな」

提督「お前が多少感じ易い体質なのもあるかもな。ん……もうこつちは問題ない

みたいだ」

日向「あ……ブルッ

提督「日向、いいか？」スルッ

日向「あ……す、凄いな。ソレが今から私に来るのか……」
提督「怖いかな？」

日向「ちよつと、ね。でも……手を握っててくれるなら……」

提督「勿論だ」ギユ

日向「ありがと……いいよ。来て」

提督「ああ」グツ

日向「あ、う……んん……い……つく……っ」

提督「もう少し……だ」

ググツ……

日向「っ……ああ、ああああ……」

提督「大丈夫か？」

日向「ちよ、ちよつとだけ……そのまま……」

提督「気にするな。落ち着くまで動かない」

日向「ありが……く……うう」

提督「……」スツ

日向「あ、だめ！」ガシツ

提督「おい、ひゆう……」

日向「あつ……」
ズン

日向「う……く、ふう…… はあ、は…… ああああ」

提督「おい、大丈夫か？」

日向「う、うん…… ちょっと驚いただけ……」

提督「そうか」

日向「う、うん…… それより」

提督「ん？」

日向「どう？ 中……」

提督「ああ、熱い。全て搾り取られそうだ」

日向「あ…… は。そう…… わた、私も…… 凄く熱い。焼かれてるみ、たい」

提督「それは痛みじゃないのか？」

日向「痛いのは…… うん、慣れてきた。それより…… ううん、ホントに熱いの。

これ、気持ち良いって…… 言うのかな」

提督「…… クイ

日向「あつ」

提督「どうだ？」

日向「うん……良かった」フルツ
グツ、グ……

日向「あつ……あつ……」

提督「……大丈夫そうだな」

日向「う、うん……いいよ……ねえ、もつと……」

提督「ああ」

パツ……ンツ

日向「あああああ。ん、んんんん……ふあつ」

提督（凄い締め付けだな……ぐつ、これは……）

日向「大佐？ も……もう、イキそ……う？」

提督「ああ……これ程とは……よそ……くつ」

日向「ふ……ああつ。いい……よつ。ねえ、がま……しないでつ。わた、た

しも……もう……おねがつ、い、一緒に……！」

提督「日向っ」

日向「あ、あああああああ！」

日向「……ねえ、どうだった？」

提督「何も言えないくらい良かった」ギユ

日向「あ……うん。私も……嬉しいよ」

提督「頑張ったな」ナデ

日向「もう……確かに初めてだったけど……ああ、いいや。今は……うん。」

「こういう時だけは甘えていたい……から」

提督「そうだ。遠慮は今はするな」ナデナデ

日向「ありがと……ねえ大佐」

提督「ん？」

日向「好きだよ」

チユツ

第10話 「酒（劇）場」

飛龍「だつからあ！ わやし言つてやつてやんでしゅ！ 改ひのレベゆのしやは、ぎゆゆのしやじゃにやーつて！」

提督「……？ ああ」（何て言つてるんだ？）

加賀「飛龍さん、のみす…… ヒック」

提督「加賀？」

加賀「だいじよ…… ぶです」

ドンッ

飛龍「ちよつしよ！ たいさつ、無視しにやいでくじやさい！ 泣きますよお!？」

提督「聞いている。だからそんなに強くテーブルを叩くな。ツマミが零れる」

飛龍「ちゆマミがにやんだつてんでうかー！」

加賀「飛龍さん」

飛龍「んに？ つ…… んぐ」パク

加賀「どうです？」

飛龍「おいし……」モグモグ

提督（俺のカツオの叩き……………）

飛龍「うっ……………」

提督「今度はどうした？」

加賀「まさか不味……………」

提督「それはない。絶対だ」キツパリ

加賀「そうですか」（……………意外に強情なところがあるのね）

飛龍「う、う……………」ポロポロ

提督「どうした飛龍。味付けが合わなかったか？」

飛龍「うーうん、違えます！」

加賀「そこは違います、よ？　って言っても今は無駄よね」

飛龍「しょうです！　たーさ……………」

提督「ん？　ああ『大佐』か」

飛龍「にやんで、なんでコレこんなに美味しーのかなあ……………」ウル

提督「ああ、それはな。今朝港で漁師に新鮮なの……………」

加賀「大佐、多分それ飛龍さんが訊きたいこと違います」

提督「……………それで、どうした？」

加賀（ちよつと拗ねた？　可愛い……………）

飛龍「カツオのおいしやが目に染みゆんでしゅ……う、ぐす……美味しいよお。
うえーん……」ボロボロ

提督「……これは喜んでいいのか？ 作り手として」

加賀「冷静に。今話に乗ると確実に絡まれますよ」

飛龍「っ、大佐！」ダキッ

提督「うぐっ」

ポロ

加賀「あ」

提督（鳥皮の塩焼きが……っ）

ポス

加賀「キヤツチです」

提督「ありがとう。加賀それを——」

パク

提督「」

加賀「……美味しい」ウツトリ

提督（……こいつも結構酔ってるんだな）

モゾ

提督 「つ、飛龍？ あまり動くな。酒まで零れる」

飛龍 「んふふー♪ えー？」 スリスリ

加賀 「……」 ムッ

飛龍 「たーしゃ、しゆきです。だい好き……♪ ちゆ」

提督 「んっ…… おい」

加賀 「飛龍さん、そこまでです。大佐は私の夫なんですよ？」

飛龍 「やつ！ わたしも好きあもん！」 ギユウウ

加賀 「…… 離れなさい」

飛龍 「いやつたら嫌！ うう、たいしゃあ…… 飛龍も大佐と結婚したいよおお」

提督 「お前も頑張ればそんなに…… んぐ」

加賀 「…… ちよつと」 ピキッ

飛龍 「えへへえ、それじゃあ先にキスしちやいまゆ♪ んちゆっ……」

提督 「飛龍、お前酔いすぎだ。落ち着け」

加賀 「そうですね。もうさつき一回キスしたじやないですか。2回目はちよつと許せ

ません」

提督 「いや、そこじゃないだろ」

飛龍 「あれえ？ キスじやご不満ですか？ んもう…… しあたないですへえ」ヌギ

提督「いかん。だめだ。酔った勢いはダメだ飛龍」

加賀「」プチッ

グイッ

飛龍「ひやつ!? か、加賀さん!？」

加賀「飛龍……ちよつとアツチでお話しましょう?」

飛龍「え、ちよつと。痛つ……ていうか怖……」

加賀「行きましょ?」ニコッ

飛龍「ひいっ!!」ゾクッ

提督（あれは酔いが覚めるな）

飛龍「た、大佐つ、助けてっ……!」

提督「加賀そのくら——」

加賀「大佐は黙っていてもらえますか? 決して間違いは犯しませんので」

提督「それは信じている。だがなあま——」

加賀「皆の前で淫乱な貴方との夜の営みの話をしま——」

提督「飛龍、達者でな」

飛龍「大佐あ!？」ガーン

提督「大丈夫だ。骨は……いや、事が済んだらちゃんと迎えに行つてやるから」

加賀「…………… まあいいでしょう。さ、行きますよ」ズル

飛龍「い、いやああああああ…………… !!」

提督（許せ飛龍……………）

キヤーヤメテー！ ココデスカ？ ココガイケナイノデスカ？ ウワアアアン、ソコ
ハタイサダケノー！ ……………… ンデスツテ？

提督「……………」グビ

提督「…………… 味がしない」

トントン

提督「ん？」

妙高「失礼します。すいません、ドアが開きっぱなしだったもので……………」

提督「ん？ ああ…………… いや、構わない。どうした？」

妙高「その…………… 私、ほら最近…………… になつたじゃないですか…………… ？」チラ

提督（ああ）

提督「妙高」

スツ

妙高「あ、大佐……」

提督「おめでとう。飲もうか」

妙高「は、はい！ 頂きます、大佐♪」

第11話 「自信」

大和「中将、大将殿がお戻りになられました」

中将「お、そうか」

ズンズンズン……

中将「よー、大将ー。残念じゃったな。お前の艦隊、大丈夫だったか？」

大将「…… 老体、俺は今機嫌が悪いんだが？」

中将「知ってる。だからこそその憂さ、今ここで晴らしみんか？」

大将「……」ギロツ

中将「……」ニヤ

大和「……」っ「ビクッ

艦娘達「……」アセタラー

大将「……」ふん。余計な気遣いだ…… 礼を言う」

中将「ふっ、丸くなったのう」

大将「……」大人になったと言え。20年越しだがな。おい、行くぞ」

艦娘達「は、はいっ」

ズンズン……

中将「……………」

大和「ふう……………」ヘタ

中将「ん？ 威圧に当てられたか？」

大和「はい……………」この大和が……………。中将もそうですけど、あの人や総帥は本当に人

間ですか？」

中将「ふはははははは！ 儂も人外扱いか！」

大和「あ、す、すみませ……………」

中将「いや、いい気にするな。ま、そこで元帥を入れなかったのは流石だな。あいつ

優しいしな」

大和「うっ……………」タジ

中将「ははは、泣くな泣くな」ワシワシ

大和「きやつ……………」な、泣いてません！」

中将「ふはは、そうか。んじゃ、行くか。大将も元気そうだったし」

ギユッ

中将「ん？」

大和「あ、あの……」

中将「抱いて行ってやろうか？」

大和「お、お願いします」ポ

く大本営海軍本部、第二司令室

ボスツ

大将「ふう……」

雷「あ、あの……か、閣下」

大将「ん？」

雷「きよ、今日のごめんなさい！」ペコ

艦娘達「ごめんなさい！」

大将「……」

雷「雷達がもつと上手くやってたら追撃も出来たかもしれないのに……」

大将「……」スクツ

スツ

雷「……ひっ」ビクツ

ポン

雷「あ……」

大将「気にするな。お前たちはよくやった」

雷「か、閣下あ……ぐす」ウル

大将「お前達もだ。気にすることは無い。今回はあれだけの戦力でよくやった」

利根「あ、ありがとうございます！」

艦娘達「ありがとうございます！」

大将「利根、それに皆、そう畏まらなくていい。お前たちは俺の艦隊だ、俺の兵器だ、俺の艦娘だ。何も恥じる事はない。以降も死ぬ気で尽くせ。それだけでいい」

艦娘達「はっ」

大将「……それにしても、あのレ級達強かったな。そこら辺の鬼や姫など恐らく相手にならん」

筑摩「確かに……あの者たちの実力、並大抵のものではありませんでした」

衣笠「こつちも無傷だったけど、あつちもほぼ無傷なんて、ね……初めてよ」

電「つ、次は必ず仕留めます！」

暁「物騒な事言うんじゃないわよ。似合わないわよ？」ポン

電「あう……」

雷「そうね、無理して気張る事はないわ。閣下の言う通り、次はもつと死ぬ気で戦え」

ばいいんだから！」

大将「その通りだ。だが死ぬなよ？　それはあくまでもの例えだという事を忘れるな」

雷「は、はい！」

大将「……よし」ポン

雷「ふ……ん♪」

電「あ……か、閣下」ギユッ

大将「ん？……ああ、他に撫でて貰いたい者がいたら並べ。今日はこの後に間宮の甘味も出してやろう」

ワアアア！

——その夜

大将「……さて、駿河、近江、奴らをどう見る」

駿河「……強敵です。今まで戦ってきたどんな深海棲艦よりも」

大将「そうだな」

近江「それに奇妙でもあります。あんな感情豊かな深海棲艦は見た事がありません。悔らない事は勿論ですが、警戒は必須かと」

大将「ふむ…… お前たちがそこまで言うのならそうなのだろう。実際俺もそう思っていた」

駿河・近江「……」

大将「お前達二人は大和型を超える現時点で最強の戦艦だ。だが、同時に実際の歴史では起工すらされなかったあやふやな存在でもある」

大将「そんな実力や存在が不確かなお前たちを俺は信じていいか？」

駿河「大将、わざと挑発的な言動をして私達の自信を引き出そうとするのは感心しない」

近江「そうです。その様な事言われずとも、私達は私達の最強を閣下の御前で確実に示して見せます」

大将「流石だな。俺も先程の発言を失言と認めよう。そしてお前たち、頼りにしてるぞ」

駿河「身に余る光栄です。幻の様な存在なれどこの力、確かなものだとお頼り下さい」

近江「私も、閣下と祖国の為ならいかなる任をも遂げてみませす」

大将「十分だ。それでは今日は解散。各自英気を養え」

近江「はっ。あの、閣下？ …… 偶には一緒に寝てくれてもいいんですよ？」

駿河「あ、おいつ。ズルいぞ！」

大将「……………素が出ればあやふやな存在だろうが、最強だろうが、年相応の娘達だな
本当に」

第12話 「悪夢」

川内「夏だ！」

比叡「七夕！」

瑞鶴「バーベキューよ！」

提督「何を言ってるんだ……」

川内「大佐！ 夏ですよ夏！」

提督「ここはいつも暑いだろ、それに日本は季節的に今は冬だ」

比叡「で・も！ いつもここは夏みたいに暑いんですから、なんかイベントっぽいことやりたいです！」

提督「ならクリスマスでいいだろう」

瑞鶴「わたしは真夏の太陽の日差しを浴びて笑うサンタなんて認めないわ！」

提督「じゃあ、バーベキューだけでいいだろう」

比叡「い・や・で・す！ ここに来てイベントらしい事といたら、水着大会くらいだったじゃないですか！」

提督「水泳大会だ。事実を歪曲するな」

瑞鶴「ちよつと、わたしの水着見てなかったつていうの!？」

提督「何を言つてるんだお前は」

川内「と・に・か・く! 七夕です! 七夕祭りがしたいです!」

比叡「なんか楽しいイベントがやりたいですよ!」

瑞鶴「バーベキューも忘れないですよ!」

ギャーギャー!

提督「…… 静まれ」キッ

川内・比叡・瑞鶴「!」ピタッ

提督「全く……。比叡、七夕をしたいんだな?」

比叡「あ、はい……。その、ちよつと退屈で……」

提督「バーベキューもしたいのか?」

瑞鶴「あ、えつと……。別にバーベキューじゃなくてもいい……です。何かパー

ティーみたいにワイワイ食べれば……」

提督「当然夜がいいんだな?」

川内「やせ……! じゃなかった。はい!」

提督「ふむ……。それじゃあ今夜やるか。消灯時間の1時間くらい前に」

比叡 「ホントですか!？」 パア

川内 「今夜ですわね!？」

瑞鶴 「やったあ♪」

提督 「時間厳守、食事はファーストフード店で軽く用意する程度でいいな?」

三人 「はい!」

提督 「うむ。なら許可してやる。ほら、他の皆に知らせて来い」

比叡 「はい!」

川内 「やつせん、たつなばった♪」

瑞鶴 「おつまつり、おつまつり♪」

ワーワー

提督 「俺も甘くなつたもんだな……………」

響 「そんなことないよ」

提督 「…………… ずっと机の下に居たのか?」

響 「うん」

提督 「何故?」

響 「暇だったから?」

提督「だからといって、机の下は……」
ギョツ

響「……じゃ、膝」

提督「いやそれは……」

響「大佐は甘くないよ、ずっと前から優しいよ？」

提督「……」

響「ね？」

提督「乗れ」

響「〜♪」

ギシッ

提督「……そんなにいいか？」

響「襲いたくなる？」

提督「ちゃんと会話をしろ」

響「ちえっ」

提督「聞いていたと思うが、七夕祭りをする」

響「うん」

提督 「参加するか？」

響 「全員するよ」

提督 「そうか」

響 「ね」

提督 「ん？」

響 「いい子いい子して」

提督 「なんでわざと幼い言い方を……」

響 「甘えてるの」ムッ

提督 「そうか」

響 「やって」

提督 「……」

ポン

響 「んふく♪」

提督 「お前は本当に甘えん坊だな」

響 「そうだよ。というか多分皆そうだよ？」

提督 「なに？」

響 「みんな」

提督「……皆こうして貰いたいと？」

響「うん」

提督「戦艦も空母も重巡も？」

響「そう。あと軽巡と潜水艦他の皆もね」

提督「冗談だろ？」

響「本当にそう思ってる？」

提督「……」

響「皆大佐が大好きなんだよ？」

提督「……！」ゾッ

提督「……」

響「大佐……？ あ、気絶してる」

響「そんなに全員に好かれているのがシヨックだったのかな……？ 響は寧ろ

そっちの方がシヨックだったんだけどな」

響「大佐、逃げないでね。逃げてでも全員追いかけるから……ね？」

・
・
・

提督 「という夢を見たんだ」

響 「…… 失礼だね」 プラプラ

提督 「俺にとつては悪夢そのものだった」

響 「一緒にうたた寝してたら大佐はとんでもない夢を見てたんだね」

提督 「皆が俺を好きとはな」

響 「怖い？」

提督 「いや、信じられないだけだ」

響 「そう」

提督 「…… なんで俺なんだろうな」

響 「大佐だから、提督だからだよ」

提督 「もつと自分に自信を持たなければな」

響 「あまり気負わないでね。響も手伝うから」

提督 「ありがとう」 ポン

響 「ん♪」

第13話 「お祭り」

青葉「みなさーん！ 楽しんでますかー!? 本日は七夕祭りにご参加頂きありがとうございますーす！」

隼鷹「楽しんでるよー。お酒があつたらもつと良かったんだけどねー」

飛鷹「全員いるんだからお酒の所為で騒ぎにでもなつたら大変でしょー」

足柄「ま、仕方ないわよ」

青葉「すいません！ 時間帯とか基地の周りに住んでる人に迷惑を掛けるわけにはいかないのです、お酒は我慢してくださいーい！」

暁「し、仕方ないわね。本当はお酒が飲みたかつたんですけど、今回は我慢してあげるわ」

秋雲「ホントは飲めない癖にー」

谷風「えっ、お酒のんじやダメなの!?!」

天龍「おい」

青葉「今日は七夕祭りなので、参加してる方は食事しながらでもいいので短冊をお願い事を書いて、収集箱に入れて下さいねー！」

鬼怒「金剛さんは何を書くの？」

金剛「It、s child！」

鳥海「え？」

加賀「私と一緒にですか」

赤城「ええ!？」

提督「那智、あそこのメンバー要注意だ。あまり外に晒せない願いだったら訂正させろ」

那智「了解……あの、願い事は恋人とかはダメ、か？」

青葉「名前は匿名でも可です！ 恥ずかしいなら無記名でもいいですよ！」

武蔵「名前を隠す必要なんてあるのか？」

長門「全くだ。晒すからこそ得るものがあるだろうに」

五十鈴「一体何を言ってるのよ……」

青葉「はい、全員書きましたかー!? それでは、順番に箱の中に手を入れてこの笹に

着けて下さいねー！」

最上「ん？ 『絶対におつきくなる！』 なに、これ」

龍驤「……………」カア

ハチ『「先手必勝」……………。これ願いというより信条な気がするのですが……………」

木曾「えっ」

榛名「えつとこれは、え……………？ 『米が減らないお釜』……………？」

利根「無茶な！」

青葉「皆さん、実に色んなお願い（？）を書かれていますね！ はーい、それじゃあ笹を立てますよー！」

青葉「山城さんお願いしまーす！」

山城「み、皆が私に注目してる……………！ 今日が良い日ね！」

扶桑「山城……………」ホロリ

由良「ねえ、あの涙って……………」

妙高「あまり気にしない方がいいですよ」

青葉「……………」コソコソ

鈴谷 「自分だけ目立たないところに掛けようなんてズルイじゃん？」

青葉 「す、鈴谷さん！」

鈴谷 「ま、気持ちちは解らないでもないけどね」

青葉 「う……」

鈴谷 「教えてくれたら秘密にしてあげるよ？」ニヒ

青葉 「ぜ、絶対に誰にも言わない？」

鈴谷 「鈴谷これでも女の子の秘密は守る女の子だよ」

青葉 「これ……」スツ

鈴谷 「んー？ ……ね、これ」

青葉 「あ、あはは。あまりキャラじゃないかなあつて。そう思うと恥ずかしくて……」カァ

鈴谷 「ううん。そんな事ないよ。超良い事書いてんじゃん！ そんな事を恥ずかしくなんてアオちゃん超可愛い！」ギユツ

青葉 「あ、ちよ、ちよつと……」アセ

——祭り後

提督 「花火を用意しなかったのは迂闊だったな」

赤城「そんなに気にすることはありませんよ。皆その花火ができなかつた分、浜辺ではしゃいでましたし」

提督「ゴーヤたちが水着になつた時はもしやと思つたが」

赤城「ふふ、案の定何人か一緒に海に飛び込んだりしましたね」

提督「俺も連れて行かれそうになつた時は流石に焦つた」

赤城「まだ夜の海は？」

提督「慣れてないからな。今度練習でもするか」

赤城「あの、その時は私も……」

提督「ああ、教えてもらえると助かる」

赤城「つ、喜んで♪」

提督「……風が気持ち良いな」

赤城「そうですね。いつもと同じな筈なのに、気分によつて感じ方つて結構変わるものですね」

提督「そうだな……ん」

赤城「どうかしました？」

提督「いや、あれ。あの笹に掛かつてる短冊、丁度向かい風で見堅い位置にある」

赤城「ああ、あんなところに。あつ」

『皆大佐と一緒に幸せになれますように』

提督「……身が引き締まる思いだ」

赤城「まあ、ふふ……そこは力を抜いて受け入れて欲しいものですけど」

提督「一応それも兼ねてだ。誰が書いたんだろうな」

赤城「名前がありませんが……でもこの願いなら誰でも書きそうですから」

提督「……そうか」

赤城「でも、間違はなくこれを書いた人はとつても良い人ですよ」

提督「そうだな。これからもそうある様に頑張らないとな」

赤城「はい、一緒に」

提督「ああ」

ギョツ

第14話 「映画2」

卯月 「えーが、えーが♪」

羽黒 「どんなの上映するんだろう……」 ワクワク

伊勢 「やった！ また観られるなんて運がいいなあ♪」

北上 「映画か…… あ、恋愛ものはパスね」

提督 「…… 何処から聞きつけたんだか」

卯月 「伊勢さんだよ」

羽黒 「伊勢さんです」

北上 「イセっちー」

提督 「……」

伊勢 「あ、あはは……。その、ごめんなさい！ つい」

提督 「いや、悪くはないが、俺が他に映像ソフトを見つけてなかったらお前はまた同じ映画を観るところだったぞ？」

伊勢 「まあ、あれもそれなり面白かったから2度観でもいいだけだね」

提督 「そうか？ 気に行つて貰えているならなによりだ。だが、今回は別のだ」

卯月 「なにになにー?」

羽黒 「どんな映画ですか?」

北上 「エツチなの?」

伊勢 「ええ!」

提督 「北上、俺はそんな変態じゃない。今日観るのはこれだ」

卯月 「ぶ、ぶら……?」

羽黒 「役者さんの顔がちよつと怖いですね……」

北上 「歴史もの?」

伊勢 「前の一緒のジャンルね」

提督 「そうだ。これはアイルランドに実在したらしい祖国の解放の為に奮闘した英雄の話でな……」

卯月 「お、おー……ぐ、グロ……」

羽黒 「ひぐつ……う、卯月ちゃんなんでそんなに平気そうなの……?」

北上 「あはは、お尻出して挑発してたら尻に矢が」

伊勢 「よくそんなに笑えるわね。私は結構痛いそうで笑えないわよ」

北上「うわー…………… えげつな、裏切るんだ」

羽黒「ひどい…………… 可哀想…………… ぐす」

卯月「うーん、でもこの王様、一見冷酷だけど結構優秀そうだぴよん」

伊勢「え、そう？ ただ、性格が悪いだけじゃないの？」

北上「あー、やっぱり捕まっちゃったかあ」

羽黒「ひい…………… ねえ、ねえこれ何をされて…………… や、やっぱりいです」

卯月「うくん、こんな過酷な拷問に屈せずに最後に訴え叫ぶなんて主人公やるぴよん」

伊勢「卯月って結構真面目に観てるのね」

提督「どうだ？」

羽黒「うう…………… 私にはちよつと刺激が強かったみたいです…………… でも、これ最後はちやんと……………？」

提督「ああ、最終的には独立に成功してる」

羽黒「良かったあ……………」ウル

北上「え、そこで泣く？」

伊勢「今回も面白かったわ！ またよろしくね！」

提督「楽しんでもらえたようで…… ああ、羽黒は少し休んでいくか？」

羽黒「はい、ありがとうございます……」

北上「あ、じゃあわたしも」

卯月「卯月も！」

伊勢「わ、わたしも…… ダメ？」

提督「俺の部屋は休憩室じゃないんだが」

北上「おねがーい。ちょっと太もも見せてあげるから」

提督「お前はそんなに俺を…… いや、それ以前にそんな事されたら大井が面倒だ。

やめろ」

卯月「じゃ、卯月はパンツ見せてあげ——もが」

伊勢「それ以上大佐の精神を削っちゃだめよ」

提督「すまない伊勢」

北上「ナイスアシスト」b

提督「事の発端が偉そうに言うな」

北上「ま、それは置いておいて。いい？」

提督「あまり騒ぐなよ。休みの間だからな」

卯月・北上・伊勢「はーい」
ワイワイ ガヤガヤ

提督「羽黒はこつちで休んでろ」

羽黒「はい、ありが……え、ベッドいいんですか？」

提督「ああ。流石に昼からベッドで寝たりはしない。ああ、臭いとか気になるか。それならソファーに……」

羽黒「い、いえ！ ベッド、ベッドがいいです！」

提督「そうか？ まあお前が構わないなら」

提督「なんだ？ なんか一瞬で元気になっている気が……？」

羽黒「ありがとうございます！」

羽黒（大佐と同じベッドなんて、こんな機会逃せられないよ！）

提督「それじゃあ俺は休み時間まであいつらの相手をしてるからお前は……」

羽黒（えへへ、大佐のベッド♪ 何となく大佐の匂いもする♪）

羽黒「♪」モゾモゾ

提督「……まあ、ゆっくりな」

第15話 「特徴」

霰「大佐……………」

提督「ん、霰か。どうした」

霰「ちよつと、大佐の意見が聞きたくて……………」

提督「なんだ？」

霰「霰と弥生ちゃんって似てる？」

提督「お前と弥生が？」

霰「…………… うん」コク

提督「それは外見ではなく、内面を比べてという事か？」

霰「そう」

提督「なるほど…………… ああ、似ていると言えば似てる」

霰「例えば何処？」

提督「ん？ そうだな。例えばその話し方だ。たどたどしくて静かな声が弥生と感じが似ているな」

霰「そう……………。それじゃあ霰が弥生ちゃんのモノマネしたら完璧？」

提督「……………その発想はなかった。確かに、話し方だけなら声さえ似せれば弥生そのものだ」

霰「そう……………」

提督「嬉しそうだな」

霰「え？……………うん。霰、あまり特徴ないし。こういう特技くらいしか……………」

提督「霰」

霰「ん？」

提督「お前が真似をしようとしている弥生もそんなに自分に自信がなさそうな感じなのか？」

霰「ううん。弥生ちゃんはしっかりしてる。物静かだけど、約束や時間はちゃんと守るし、行動とかも何気に早くて凄くキビキビしてる……………」

提督「そうか。それは俺が霰にもっている印象と同じだな」

霰「え？」

提督「なんだ自分で気づいてなかったのか？ お前は自分が思っているよりも他の人から見たらしっかりしているぞ？」

霰「そ、そう？ 霰そんなにしっかりしてる……………かな？」

提督「ああ、大丈夫だ。だから弥生のモノマネをする時は話し方だけでいいぞ？」

霰「大佐……………ありがとう。霰、ちよつと自信持てた。嬉しい……………」

提督「ああ。これからもその調子でな」ポン

霰「あう……………んん……………」

提督（目を細めて気持ち良さそうに……………猫みたいだな）

霰「大佐、もつと……………」

提督「うん？」

霰「もつと撫でて欲しいの……………霰もつと頑張るから」

提督「そうか。だが、あまり無理はするなよ？ 頑張り過ぎないのも頑張る事の一つ

だからな」

霰「え？ ……んと、分つた。ちよつと難しいけどやってみる」

提督「その意気だ」ナデナデ

霰「んふう……………」

弥生「……………」

球磨「弥生、何をみているクマ？」

弥生「……………自分」

球磨「え？」

弥生「霰ちゃん凄い………… あれは、もう弥生以上に弥生だよ…………」

球磨「え？ え？ 弥生以上に弥生ってどういうことクマ？」

弥生「球磨さんはクマさんって事だよ」

球磨「球磨がクマさん？ いやあ、そう言われると照れるクマあ♪ 熊強いもんねー

♪

弥生「うん…………… どんな状況でも会話を成立させる球磨さんはやっぱり凄いと思うよ」

球磨「もう言い過ぎだクマあ。♪ 嬉しいけどお♪」テレテレ

弥生「球磨さんの長所ってさ。力が強くて凄く能天気なところだよね」

球磨「えっ」

弥生「弥生の長所ってなんだろう……………」

球磨「ち、力が強くてのうてん…………… き……………。そ、それってつまりどういう事ク

マ……………？」フルフル

弥生「？ そのままだと思うけど……………」？」

球磨「!!」（馬鹿にされたああ!!）ウル

弥生「球磨さん？」

球磨「く、球磨はおバカさんじゃないクマ！」

弥生「え？」

球磨「や、弥生ちゃん今に見てるクマ！ きつと近い内に弥生ちゃんが認めるくらいの完璧な球磨になって見せるクマー!!」ダダッ

弥生「あ、え……？」

弥生「球磨……さん……？」ポツーン

提督「なんか外が騒がしくなかったか？」

霰「……」

提督「霰？」

霰「すう……すう……」

提督（本当に猫だな。少し寝かせておくか）

く球磨と多摩の部屋

多摩「にやにや！ なんか最近多摩のアイデンティティが侵略されているような気がするにや！」

球磨「そうクマ！ 多摩、今こそわたし達は新たなあいで…… あい……？」
多摩「アイデンティティにや」

球磨「そう！ それで新たな境地を開拓するクマ！」

多摩「おー、なんだかいつになく球磨燃えてるにやね」

球磨「おバカな球磨からの脱出だクマ！」

多摩「にや？」

球磨「多摩も球磨と一緒におバカな多摩から脱出するクマ！」

多摩「にやあ!? た、多摩は馬鹿じゃないにや！」

球磨「そう思ってるのは自分だけだったりするクマよ!?!」

多摩「にや、にやんだってえ!?!」ガーン

球磨「多摩、頑張るにや！」

多摩「な、何だか分らないけど分ったクマ！ イメージアップクマね！」

球磨「そうにや！ イメージアップにや！」

球磨・多摩「……」

球磨・多摩「あれ？」

第16話 「届け物」

提督「届け物？」

鳥海「はい。大佐宛ではなかったんですが、鎮守府宛てだったので」

提督「……これは艦娘宛てだな」

鳥海「え？ そうなんですか？」

提督「ああ。ほら、宛先のところのシールのこの部分が剥がれてしまっている。恐らく荷物を下ろす時か置いてある時に磨れてこの部分だけ取れてしまったんだろう」

鳥海「でもそれだけでは大佐宛じゃないとは……」

提督「俺は通販は使った事がないんだ。この通販会社すらな」

鳥海「ああ……」

提督「しかし宛先が分からないとは言え、このままにしておくのもな」

鳥海「だからと言って手当たり次第に確認するのも憚れますよね。知られたくないものかもしれないですし」

提督「そうだな。さてどうするか……」

鳥海「……中身を確認してそれっぽい人に確認すると言うのは？」

提督「勝手に開けるのは、な」

鳥海「そうですよね。ちよつと振つてみますか」

提督「大丈夫か？」

鳥海「持つた感じ全然重くないですし、運んでる最中も中から特に音は聞こえなかつたです。から多分大丈夫ですよ」

提督「そうか。ならいい」

鳥海「はい。それでは」フリフリ

提督・鳥海「……」

提督「しないな」

鳥海「しませんね」

提督「しつかり梱包されてるからか？」

鳥海「確かに、重さの発生源は箱の中央から感じます」

提督「マグカップくらいの大きさの箱で、そんなに重くないもの、か」

鳥海「いろいろありますね。本当にマグカップかも」

提督「だったら開けたところでそんなに問題はないんだろうが……」

鳥海「確実じゃありませんからねえ」

提督「ふむ……」 鳥海「うーん……」

コンコン

提督 「ん？ 誰だ？」

摩耶 「摩耶だ、です。入ってもいい、ですか？」

提督 「ああ、いいぞ」（何か緊張してる……？）

ガチャ

摩耶 「失礼します。大佐、今日基地に何かとどけ…… あっ！」

提督 「ん？ これお前宛だったのか？」

烏海 「え、そうなの摩耶？」

摩耶 「そ、そう！ …… 中身、見た？」

提督 「いや」

烏海 「ううん」

摩耶 「そ、そう。ふう……」

烏海 「…… 摩耶」

摩耶「ん？」

鳥海「これ、なに？」

摩耶「え!? そ、それは……………」

鳥海「そんなに焦るなんて、まさか規則に違反するものじゃ……………」

摩耶「そ、そんな事ない! 絶対だ! だ、だから開けるな! お願ひ!」

鳥海「なんでそんなに必死なの? 姉妹なら私にくらい見られても問題ないわよね?」

摩耶「だ、ダメ! それだけは絶対!」

鳥海「摩耶……………あなた本当に危険な……………」

摩耶「ち、違う。違うからあ! お願ひちようだい!」ウル

提督「……………」

鳥海（あんなに涙を滲ませて……………まさか、本当に……………? ここは心を鬼にしにと!）

鳥海「摩耶悪いけど……………」

摩耶「!!」

提督「鳥海」

鳥海「ダメですよ大佐。私だって疑いたくはないですけど可能性は……………」

提督 「鳥海、お前は摩耶を信じているだろうか？」

鳥海 「え？」

提督 「摩耶の事を同じ姉妹として大切に思っているだろうか？」

鳥海 「そ、それはまあ……でも」

摩耶 「大佐……？」

提督 「なら、ここは俺に任せろ。俺がいまから摩耶に耳打ちにしてそれが正解なら開封せずに麻耶に渡す。それでどうだ？」

鳥海 「大佐は中身の予想が？」

提督 「まあ、多分……大凡だが」

摩耶 「……」（ええ!?） カア

提督 「摩耶」 スタスタ

摩耶 「……っ」 ビクッ

提督 「耳を貸せ。お前が取り寄せたのは……じゃないか？」

摩耶 「……!!」 カア

提督 「合っているか？」

摩耶 「……」 コク

提督 「鳥海、摩耶に渡してやれ。大丈夫だそれは本当に危険でもなんでもない」

鳥海 「え？ 正解だったんですか？」

提督 「まあな」

摩耶 「……」コク

鳥海 「一体何……」

提督 「後で教えてやる」

摩耶 「た、大佐あ」ウル

提督 「大丈夫だ。信じろ」

摩耶 「……わ、わかった」

提督 「そう言うわけだ。後で教えてやるから渡してやれ」

鳥海 「はあ、まあそう仰るのなら。はい、摩耶」

摩耶 「つ……」バツ

提督 「落ち着け」

摩耶 「……ありがたう、ありがたう。ふう……失礼します」

バタン

鳥海 「一体……」

提督 「生理用品だ」

鳥海「え？」

提督「自分にも子供が作れるようになる時が来るかもしれない、てな」

鳥海「そんな。私達はそんな身体的機能は……」

提督「可能性くらいは希望として持たせてやってもいいだろう」

鳥海「それは……」ジツ

提督「ん……こほん」

鳥海「あ……」カアア

提督「ま、仕事をしようか」

鳥海「は、はい」アセ

く摩耶と鳥海の部屋

摩耶（バレちゃったバレちゃった！ 鳥海には言わないと思うけど、大佐にはバレ

ちゃった！）カアア

摩耶「……ふう」

摩耶（ま、まあ大佐にならないか……うん）

カチツ、ヴィイイン

摩耶（こんなの興味本位で買っちゃったなんて言えないよな……）

第17話 「始まり」(前編)

倫理的生物兵器開発計画。

一見この冗談の様な軍事計画が全ての事の発端だった。

先の大戦から敗北後、ある方法により条件付きで連合側の降伏を受け入れに成功した日本は、連合国による軍の解体と公職の追放、更には占領統治していた大部分の領土の放棄すら免れ、晴れて民主国家となった。

降伏後、暫くは連合国による分割統治などが行われていたが、やがてそれも傀儡政権が解体と主権の回復によって結果的には占領した一部の領土放棄のみで再び日本は独立することが出来た。

解体と追放が行われなかったとはいえ、その中枢的役割を担っていた重要人物は悉く罷免され、主権はそのままで統帥権のみが完全に軍へと移行した日本は、民主化としたことも合わせてその実態は既に以前の日本とは別物となっていた。

大佐(後の親父)「倫理的生物兵器開発計画?」

少将(後の元帥)「そうだ。新しい軍の兵器開発計画だ」

准将(後の大将)「何だそれは？」

少将「私からは何とも……正直内容があまりにも馬鹿らしくて……」

大佐「？」

准将「計画の概要書は？」

少将「これを」スツ

准将「ふむ……ん……」ピク

大佐「どうした？」

准将「どうもこうもない。なんだこれは」

少将「……」

准将「陰陽道によって過去に使用していた兵器に魂を宿らせて自立思考型兵器として運用する、だと？」

大佐「はあ？」

准将「なんだこれは。俺達を馬鹿にしているのか!!」ドンツ

少将「怒るだろうと思ってた」

准将「当り前だ! ふざけてるのか!!」

大佐「まあ落ち着けよ」

准将「……失礼した」

少将 「いや、気にするな。無理もない事だ」

大佐 「確かにな……しかしなあ、これ本気か？」

少将 「本気だからこそ米国にも正気を疑われ、勝手にしろと言われた」

大佐 「だろうなあ」

准将 「……本気でこんな事が可能だと？」

少将 「出来るかどうかはまあ……一応根拠はある」

大佐 「へえ、なんだよそれ」

准将 「根拠？」

少将 「ここにいる3人、私も含めて知らなかった事だが、日本には太古からある組織が存在していたらしい」

大佐 「組織？」

少将 「八咫鳥だ」

准将 「……シラー」

大佐 「おいおい……」

少将 「そんな目で見ないでくれ。私だって恥ずかしいんだ。とにかくその組織だか結社が本当に存在したらしい」

大佐 「はあ、まあそれで。その焼き鳥かなんかがどうかしたのか？」

少将「八咫鳥だ。まあそれが紆余曲折あつて軍部と協力する事になつたらしい」

准将「なんだその紆余曲折つてのは……」

少将「敗戦後に新体制が発足した事によつて埃をかぶつてたり元々隠れていたのがいろいろと明るみに出たらしい。その時に」

大佐「つくねが見つかったのか」

少将「……腹でも減つてるのか？ そうだ。八咫鳥が表舞台に姿を表したらしい」

大佐「ふーん、それで？」

少将「ん？」

大佐「軍部とそれが協力して、その事をお前が俺達に話すつて事はもうその兵器とやらがいくつか出来てるんだろ？」

准将「！」

少将「察しがいいな。ああ、実はもういる」

准将「いる？」

少将「扶桑、入れ」

大佐「ん？」

准将「ふ……そう？」

ガチャ

トコトコ

扶桑「扶桑です」

大佐「……………」

准将「……………」

少将「これが生物兵器、扶桑だ」

准将「……………」ピキピキ

大佐（准将の奴、よく堪えているな。ここはなるべく話を行きわたらせないとな）

大佐「あー、少将」

少将「ああ」

大佐「この……………」あー、この、こいつが兵器だつて？」

少将「そうだ」

大佐「女だぞ？」

少将「そうだな」

大佐「少女だぞ？」

少将「間違いない」

大佐「これ……………」この子が兵器だつてののか？」

少将「そうだ」

准将「……っ」ブチッ

大佐「まあまあ待て准将！ 待てって！ 俺が話してる！」

准将「これ以上こんな戯言を聞けど………！」ゴゴ

大佐「だからもうちよつと聞け………ん？」

准将「……どうした？」

大佐「いや、この扶桑って奴、さつきからずっと黙ったままだなつてな」

准将「それがなんだと言うんだ」

大佐「いや、見てみろつて。自分の名前を言つてからずーつと立っているだけだぞ」

准将「だからそれがなんだと………」

扶桑「………」

准将「おい、少将」

少将「ん？」

准将「こいつどうしたんだ。まるで人形みたいだ。生気を感じない」

少将「二人ともいいところに気付くな。そうだ。生物兵器自体はこうやって既に誕生はしているが、一つだけ問題、というか欠落的なものがあつてな」

大佐「欠落？」

少将「そうだ。読んで字の如くだ。この子にはな、魂は宿っていても意思が存在しな
いんだ」

第18話 「始まり」(中編)

准将 「意思がない？」

少将 「そうだ」

大佐 「それじゃあ本当にただの人形じゃないか」

少将 「だからこそ我々が指示を出すんだ。少なくとも彼女はそれを理解して実行する力がある」

大佐 「実行って、なあ。どうやってこんな子が戦うってんだ？」

少将 「それを説明しようと思っただけだ」

准将 「……頼む」

少将 「まず彼女、この生物兵器の正式な名称だが艦隊娘、略して艦娘になる予定だ」

大佐 「かんむす……腹が減るな」

准将 「お前は常に腹が減っているのか？　というか何を想像した」

少将 「次にこの艦娘の開発方法だが、八咫鳥によると魂を宿らせる為に対象となる軍艦に縁のある物が必要だそうだ」

大佐 「縁？　残骸とかか」

少将「ああ。それと設計図や開発に携わった人間の所有物や遺品でもいいらしい」
准将「……随分応用が効くんだな」

少将「ああ、それについてもちよつとした理由がある」

大佐「ほう？」

少将「艦娘の開発だが、基本的に一体しか創れないらしい」

准将「なに。一体だけだと？ いや、兵器としてはまだ全く信用していないが、それでも一体だけと言うのは……」

少将「まだ続きがある。確かに艦娘自体は一体しか創れないが、それは素体のみに限るのだそうだ」

大佐「素体……とういことは量産型なら複数可能だ？」

少将「そうだ。まだ開発中だが素体が一体でもいれば、以降は特殊な製造機を使うことでその最初の一体から同型を量産できるらしい」

准将「……量産型と素体との違いはあるのか？」

少将「素体は量産型と比べて複製が効かない分、性能面では全体的に量産型をかなり上回るらしい。そして」

大佐「そして？」

少将「さつき説明した内容と重複するが、量産型を作るには基本、素体が必ず必要だ。」

つまり……」

准将「素体が何らかの理由でいなくなれば、量産が不可能になる？」

少将「そうだ」

大佐「その場合今まで作った量産型はどうなる？ 霧散したりするのか？」

少将「いや、それ以上造れなくなるだけだ」

准将「素体の再開発は？」

少将「可能だ。媒体さえあればな」

大佐「……ふむ」

准将「大佐、何を考えている？」

大佐「お前と同じだと思うが？」ニヤ

准将「ふむ。その艦娘とやら確かに兵器として有用なのであれば、これほど運用に魅力的なものはないな。しかも意思がないというのであれば、兵器としては当たり前だが、理想的であり合格だ」

大佐「……ふん」

准将「ま、こいつはそういうのは好きそうじゃないからな」

准将「それで、まだ続きがあるんだろう？」

少将「ああ。次にこの艦娘の性能についてだが。この兵器は今のような見た目が人間

にしか見えない人型と艦本来の姿である原型の二つの姿を自由にとる事が出来る」

准将「ほう」

大佐「人型では戦闘はしないんだな？」

少将「いや、可能だ。人型の場合は艦装と呼ばれる艦娘専用の装備を駆使して戦闘ができる。扶桑、艦装を装備せよ」

扶桑「了解しました。…… 転送」

ブン

大佐「おおうつ」

准将「！」

扶桑「艦装、装備完了しました」ジャキン

少将「よろしい。こんな具合だ」

准将「見ただけでも重そうに見える装備を平然と……」

大佐「こいつ力ありそうだな」

少将「力だけじゃない。艦娘の身体能力は基本的に人間のそれより遥かに上だ」

准将「…… 意思がなくてよかつたな」

大佐「む…… 反乱の想定か？ まあそうだが……」

少将「あとこの状態だと水上に浮かぶことができる」

大佐「ほう。ボート見たいに波を割くのか？」

少将「直接水面には着かない。すれすれで浮遊する感じだ。その状態のまま艦と同じ速度で移動も可能だ」

准将「走るのか？」

少将「いや、進みたい方向に上体を傾けた姿勢でそのまま移動する感じだ」

大佐「やれやれ……。まるで、どこるか完全に未来の兵器じゃないか」

准将「確かに。これは兵器として申し分ない。軍艦用の電探や砲の換装も可能なのか？」

少将「今のところ関連する装備だったら開発も装備も可能だとしてる。新兵器も勿論可能性は有望だそうだ」

大佐「へえ……。あ、そうだ一番大事なことを聞き忘れてた！」

准将「……。なんだ？」(嫌な予感しかしない)

少将「何かな？」

大佐「こいつ飯は食うのか？」

准将「……。」

大佐「なんだよ？ 大事な事だろ？」

少将「いや、准将。大佐の質問は結構的を射ている」

大佐「ほらな」

准将「うるさい。とうとう？」

少将「まず艦娘を実際に運用する上で欠かせないのは物資の補給と整備だ。つまり運用そのものは軍艦と変わらない」

准将「まさかこの姿のまま油を飲んだり弾薬を食ったりするのではあるまいな？」

少将「ははは。それは私も怖いな。だが安心してくれ。物資の補給は今のところ原型でしかできない」

大佐「整備も原型でやらないといけないのか？」

少将「いや、そこがこの艦娘の優れている点の一つだな。なんと風呂に入れば治るらしい」

大佐・准将「は？」

第19話 「始まり」(後編)

大佐「風呂に入ると整備、いや破損か？ それが直るっていうのか？」

少将「そうだ。正確には艦娘専用の溶液を沸かした湯だな」

大佐「油や弾薬はいいとして、鉄やボーキの補給は？」

少将「それは原形の状態で艦の中に置いてくれれば、人型に戻った時に吸収するみたいだ」

准将「人間の状態だと傷のように見えるんだな」

少将「その通りだ。人間と同じように自然治癒もするが、それでは時間が掛かるので入浴という名の入渠をしてみよう形だ」

大佐「准将、順応が早いな」

准将「いや、なんかいろいろとな……」

少将「まあ、そこはある程度フツ切れてもらった方が楽だろう」

大佐「普通に風呂とか入れるんだな？」

准将「大佐…… お前何を考えている？ 飢えているのか？」

大佐「ああ？ はははははっ、ちげーよ！ ほら、その溶液とやらがどんなのかは分か

らねーけど、やっぱ本場の風呂は気持ちいだろ？ 心の癒しってのも必要だと思っぜ」

少将「まあ、可能だが。何ぶん彼女たちには今現在意思がないからな。気持ちよく感じるかどうかは……」

大佐「だからそこは心の問題だつてーの！ あ、それと飯だ飯は食べるのか？」

少将「ああ、その事なんだが。基本兵器として運用しなければ、体調管理の維持は人間と同じものが必要だ」

大佐「つまり飯と寝る事だな」

少将「そういう事だ。見た目だけが人間と言うわけではないという事を忘れないで欲しい。これは結構重要だ」

准将「単純に兵器としては扱えないということだな」

少将「その通り」

大佐「いいよ！ それなら訓練しようぜ訓練！ 軍人としての心構えも叩き込んでやる。心ができるようにな！」

准将（早速目的がズレ始めてるな……）

少将「ははは、君は本当に相変わらずだな。だが、君ならそれでもできそうな気がする」
准将「おい物騒な事…… 分かった。分かったからそう睨むな」

大佐「おうっ！ やっぱり一緒に仕事するなら楽しくなくちやな！」

准将「…… やれやれ」

少将「さて、私からの説明は以上だが君らから他に何か質問はるか？」

大佐「あるぞ！」

准将「またお前か。まあいいが…… 俺は思いつかない」

大佐「こいつ、扶桑とか言ったな。扶桑と言ったら、あの、扶桑か？」

少将「航空戦艦にする予定だった方のか？ だったら違う。この子は我が国最初の甲鉄艦の方の扶桑だ」

大佐「初代か！ 渋いなあ！」

准将「また趣味な……」

少将「国産ではないとは言え最初の本格的な戦艦だからな。げんを担いだんだろう」

大佐「東艦じゃないのか？」

少将「創造しようにも流石に古くてな…… 現在、関連品を搜索中らしい。つまりその内できる。そうなれば、立場上是東が彼女の先輩になるな」

准将「戦争でゴタゴタしてたからな。無理もないか」

大佐「なるほどな。ま、取り敢えずはこいつが艦娘としては1号になるわけだな」

少将「そうだな。ん？ おい大佐？」

大佐「おう、クソガキ」

少将「な……」

准将「…… つくく」

扶桑「……」

大佐「おう、ダンマリか。お前だ扶桑」

扶桑「はい、なんでしょう大佐」

大佐「ふーん、自分の名前以外には反応しないのか」

少将「あ、あまり変な事は覚えさせるなよ」

大佐「分かっているって。おい、ガキ」

少将「」

准将「はあーはっはっは」

大佐「ガキ、お前だ。扶桑、お前の事だ」

扶桑「大佐、扶桑はガキではありません。扶桑は扶桑です」

大佐「ああ？ そんなつまらない返ししかできないのは全部ガキだぞ？」

少将「胃が……」

准将「まあ、見えてやれ。ふっ……」

扶桑「大佐、扶桑はガキなのですか？」

大佐「嫌か？」

扶桑「分かりません。選択肢に選ぶことができる回答がありません」

大佐「そうか…… 少将」

少将「ん、ん？」

大佐「こいつちよつと外に連れて行っていいか？」

少将「だ、ダメに決まつてるだろう！ 一応まだ重要軍事機密扱いだぞ！」

大佐「大展望広場ならいいだろう？ 基地の一部だし、前は海なんだからさ」

准将「誰かに見られたらどうする？」

大佐「見た目はこんなんだからな。俺の娘って事にしとく」

少将「君は結婚してないだろう……」

大佐「じゃ、隠し子だ」

准将「相変わらず周りの目を気にしない奴だ」

大佐「な、いいだろう？」

少将「…… 私も一緒に行くからな」

大佐「おう！ ありがとな！ 准将はどうする？」

准将「馬鹿がこれ以上馬鹿やらかさない様に見張らないとな」

大佐「よっしゃ！ それじゃ扶桑、行くか！」

扶桑「何処へですか？」

大佐「外だ外！ 肩車してやる。よっと！」
スクツ

扶桑「……っ？」

大佐「お？ 今驚いた顔したか？」

扶桑「そうですか？ すいませんわかり——」

大佐「まあいいや。行くぞー！」

ゴンっ

少将「た、大佐！ ドアを抜ける時くらい降ろせ！ ふ、扶桑大丈夫か!? どこか壊れてないか!？」

准将「くくく…… ははははは！ 扶桑の奴の顔を見ろ。自分に何が起こったのか理解できていないぞ」

大佐「うわっ、扶桑悪かった。大丈夫か？」

扶桑「……え？」ピヨピヨ

大佐「よし、大丈夫だな。行くぞー！」

少将「何故!? 今のどこが大丈夫だったんだ!？」

大佐「俺の勘だ。というか今のできつきより随分良くなった気がする」

准将「気のせい……とは言い切れんのがなんとも」

少将「うぐっ……い、胃が……」

大佐「ほら扶桑、また肩車だ！ 今度は気を付けるからな！」

扶桑「あ……や……」

大佐「お？」

准将「む？」

少将「え？」

3軍人「……」ジツ

扶桑「……っ？」ピクツ

大佐「ふっ、行くぞー！」

少将「程ほどにな。程ほどだぞ！」

准将「今日は面白い一日になりそうだ」

第20話 「終わり」(前編)

艦娘の研究が本格的に開始されてからいくつか新たな事実が判明していった。

一つ、純国産でない軍艦を艦娘化した場合、極めて自我に乏しい艦娘が生まれるという事。これは兵器としては理想的であった。

*後にこの定説はある艦娘の存在によって覆る事になる。

詳しい原因は不明だが、ある程度長く運用された軍艦ならこのケースに当てはまらず、次の様な艦娘になり得た。

二つ、純国産の軍艦を艦娘化した場合は逆に明らかに性格と呼べる極めて強い自我をもった艦娘が生まれるという事。

これは兵器としては由々しき問題であったが、その代わりにその艦隊娘の戦闘力は、明らかに先に創造された国産ではない艦娘を上回っていた。

三つ、例えば海外の軍艦でもそれが確実に生産された国で国産として運用されたものならば、二つ目の条件にあてはまる自我の強い強力な艦娘を造る事ができた。

四つ、艦娘は誰でも使いこなせるといわけではなく、ある程度適正のあるものが指揮することによって初めてその能力を最大まで引き出す事ができた。

これによつて適正があるものを階級に係なく、提督”という役職を与え、指揮させる為の特別な軍制度ができた。

制度ができると同時に総帥腑から特別勅令徴兵令が発せられることとなり、あらゆる分野から一般人と公人関係なく適性のある人材が集められた。

*先に登場していた少将達は元々適正があつたらしく、軍人で、しかも高い階級を持ち、艦娘の指揮ができる本物の提督としてエリート的存在であつた。

五つ、適性のある者は艦娘と提督との間に”絆”を育むことができ、それが強い艦娘ほど戦闘力の工場が通常の艦娘と比べて著しかった。

六つ、研究が進むにつれて妖精と言う艦娘に極めて関連性の強い存在が発見された。

これらの更なる研究から妖精自体の複製と艦娘の兵器への転用と強化が可能となり、そこから空母のような特殊な装備を武器として扱える艦娘の本格的な運用できる様になつた。

七つ、何故かいくら創造しても生まれる艦娘の性別は全て女性であつた。

八つ、近代化改装によつて”使用された方”の艦娘は強化される艦娘と融合する形となり、戦闘力の強化と共にその記憶も受け継いだ。

しかしこれは、非人道的な面が目立つとの意見が軍内部だけでなくさる筋からもたらされ、完全に人間として存在させる技術の確立を目指すきっかけとなつた。

解体処分にも同様の技術が導入される事が決定した。

そして九つ目、艦娘を兵器としてようやくまともに運用するようになってから暫くして、後に深海棲艦呼ばれる謎の敵対勢力が発生し、世界中の海の安全を脅かすようになった。

これらの事実がある程度軍内部での常識として認知されるようになった頃。

准将（後の親父）「なんだとー！」

ドンツ

元帥「先ほど通告した通りだ。古い艦娘は全て不用品として廃棄処分する」

准将「本気で言ってるのか!? アイツらだつて生きてるんだぞ!」

元帥「あんな自己主張もできないモノに気を遣う必要はないぞ?」

准将「そういう問題ではないだろう! 今まで散々俺たちの為に働いてくれたというのにそれを魚の餌にしろつていうのか!」

元帥「それは安心しろ。我々もそこまで冷酷なつもりはない。処分する艦娘は全て機能停止状態にして投棄用の収納ケースに入れて処分する。なに、大丈夫だ。あいつらは機能停止状態でも死んでるわけじゃないから醜く腐ることもない」

准将「くっ……… 棺桶かよ!」

元帥「いい加減にしろ。これは既に決定した事項だ。何しろこれでもう5度目なんだから」

准将「……なに？」

元帥「やはり知らなかったか。無理もないな。お前が一番うるさそうだから」

准将「最近新しい艦娘が目立つと思っていたらそういう事か……！」

元帥「因みにこの5度目は准将、お前のための5度目だ。最後に残っている旧式はもうお前のところだけなんだよ」

准将「なんだと！」

元帥「これは艦娘の育成に絶大な功があるお前への我々からの情けだと思え。急げよ？ 明日中には処分しておけ。以上だ」

バン！

准将「……」

中将(後の元帥)「准将……」

准将「……知ってたのか？」

中将「ああ」

准将「お前の艦娘達はどうした？」

中将「全て抹消した。皆何も言わず霧のように消えたよ……」
准将「っ……」

中将「最後に残った子が一人だけ私の手を自分から握ってくれた。お礼のつもりだったんだらうな」

准将「馬鹿野郎……！」

少将（後の大将）「……」

准将「少将、お前……は」

少将「知ってるだろう？ 俺のは全て巡回中に遭遇した深海棲艦に沈められた。全く歯が立たなかった。新型の艦娘を引き連れた援軍が来なかったら俺も危なかったな」

准将「そうか、すまない」

少将「気にするな」

中将「准将、君はどうする？」

准将「俺も……征く」

中将「……何処へだ？」

准将「奴らの巣窟、深海棲艦の存在が最も確認されている魔の海域だ。俺は決めたぞ。俺は自分と自分の娘達の墓をあそこにする」

第21話 「終わり」(中編)

ガチャ

扶桑「准将」

東「准将」

八島「司令官」

敷島「提督」

トコトコ

准将「……」

准将(こいつらは見た目こそ最初の頃と変わらないが、それでも内面は確実に成長している。自分から俺に話しかけてくるし近寄って来る。褒めてやれば僅かだが喜ぶような素振りすら見せるようになった。最初から意思がないわけじゃない。心が未発達なだけなんだ! だと言うのに上の連中は……)

扶桑「准将?」

准将「ん…… いや、ちよつとな……」

ポン、クシヤクシヤ

扶桑「……………ん」

東・八島・敷島「……………」ジ―

准将「ん？　なんだお前たちも撫でて欲しいのか？」

東「……………」キョトン

八島「……………」分りません」ムスツ

敷島「分りませんか？」ジツ

准将「ははははは。そうか、じゃあ俺からやってやろう。ほら」

グワシグワシ

東「……………」ボー

八島「ん……………」♪」

敷島「つ……………」？」ビクツ

准将（四者四様の反応だが、不快ではなさそうだ。寧ろ八島に至っては明らかに嬉しそうな顔をするようになったな。そんなこいつらを俺は……………」

准将「……………」ふう」

ギユツ

准将「ん？」

扶桑「…………… 准将?」

准将「…………… ふつ、整列!」

扶桑・東・八島・敷島「!」バツ

准将「お前たちに訊く、俺と死ぬ覚悟はあるか?」

4人「あります」

准将「…………… 怖くはないか? 俺の指示に不満はないか?」

4人「何もありません」

准将「…………… 本当か? 敷島、お前は?」

敷島「ないです」

准将「怖くないのか?」

敷島「ないです。提督と一緒になら何も問題ありません」

准将「…………… そうか。八島は?」

八島「不満も恐怖もありません」

准将「無理してないか?」

八島「してません。…………… 心配、して頂けなくても大丈夫、です」

准将「そうか。…………… 東、お前は?」

東「分りません」

准将「ほう、何がだ？」

東「准将が何が不安なのか」

准将「……ほう」

東「准将、東は大丈夫です」

准将「分った。扶桑、お前は？」

扶桑「私はずっと准将の役に立つと……」

准将「？」

扶桑「自分で決めました。だから答えは東達と一緒にです」

准将「……そうか自分で、決めたか。分かった」

扶桑「作戦ですか？」

准将「ああ、上の決定でお前たち旧式の艦娘は処分になるらしい。というか、もういつのまにか残ってるのはお前たちだけらしい」

敷島「それでは私達も？」

准将「いや、それは俺が絶対嫌だ」

八島「ではどうするのですか？」

准将「敵の本拠地に特攻する」

東「准将も死にますよ？」

准将「ああ」

扶桑「私達と一緒に死ぬつもりですか」

准将「そうだ。だが、自殺じゃないぞ？ 俺達は軍人だからな、戦死だ、殉職だ、名

誉だ」

扶桑「…………… 准将、私勝つてみせます。そして准将を守つてみせます」

准将「ふつ、そうか」

敷島「…………… 私も、必ず果たします」

准将「ん……………」

東「…………… 全身全霊でいきます」

准将「ああ……………」

八島「司令官は心配されなくて大丈夫です」

准将「八島、お前ら…………… 分つた。もう何も言わん。征くぞ！」

扶桑・東・敷島・八島「了解しました」

少将「止めないんだな」

中将「止められるものか。気持ちは痛いほど解る」

少将「…………… そうだな」

中将「それに、准将らしいしな。あの方がいいだろう」

少将「やれやれ、海軍はとんでもない損失を出すことになるな」

中将「…… 少将、私は元帥を目指す」

少将「うん？」

中将「元帥になって総帥に異見できる今よりもっと強い力を持つ提督に絶対になる」

少将「…… そうか」

中将「その時は少将、お前も私の傍で力を貸してくれないか？」

少将「最初から人を頼るのもどうかと思うが、まあ目指す目的を考えれば至極真つ当な結論だ。下手に自尊心を優先して強がるよりよっぼどいい」

中将「では？」

少将「ああ、その船乗ったぞ」

中将「ありがとう」

少将「気にするな。このツケ、上の奴等に絶対に払わせてやる」

—— 深海棲艦生息濃度最大、特危険海域最深部

准将「ゼエ…… ぜえ…… はあ……」

パチパチ…… ゴオオオ

扶桑・東・敷島・八島「……………」

准将「くつ、足が…………… 代りは…………… つ！」

カロン

准将「敷島…………… お前の砲借りるぞ…………… ふんっ！」

ズブツ…………… ビチャビチャッ！…………… ジユウウウウウ！！

准将「ふぬっ…………… ！ くう…………… ふっふ…………… くく…………… ああっ！！」

ギユウツ！

准将「…………… よしっ」

カンツ、コツ、カンツ、コツ……………。

棲艦鬼姫(以降、鬼姫)「オオオオオオオオオ」

准将「…………… つふ、精々派手に頼むぞ」

ズツ…………… ドオオオオン！！

鬼姫「！！」

准将「…………… おい、扶桑」

扶桑「…………… まだです」

ドドドドドド!

鬼姫「っ！」

准将「………… お前もか東」

東「甘い………… まだ戦闘不能、じゃない」
ドーン!!

鬼姫「オオオオ！」

准将「おいおい…………」

敷島「まだまだです………… やれます」

ズガガガガ!

鬼姫「オオオ………… つ!？」

准将「っふ、本当にお前らは…………！」

八島「降参は、しないです。勝ちます」

ポオオオオ…………。

准将（ん？ こいつらから光が…………）

扶桑・東・敷島・八島「…………」

准将（なんだか知らんが、戦れる。勝てる気がする！ いや、勝つ!!）

准将「よし、お前たち!! しまつて征け!! 最後にたつぷりぶちまけろ!! 勝つて生

き残って凱旋だあああ!!」

扶桑・東・敷島・八島「了解」

准将「攻撃、開始!!!」

鬼姫「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

第22話 「終わり」(後編)

元帥「艦隊が帰って来る？ 准将の艦隊が？ あの危険海域に向かった艦隊がか？」

中将「はい。間もなく港に着く頃かと」

元帥「…… 大将」

大将「はっ」

元帥「悪いが、総帥に報告しておいてくれ、私は准将を迎えに行ってくる」

大将「はっ、かしこまりました」

中将「……」

元帥「意外そうな顔だな」

中将「いえ……」

元帥「艦娘の扱いは非道で通ってるかもしれないが、これでも一応軍人なのでな。戦果をあげて帰還する部下に敬意を表することくらいはできる」

中将「…… 恐縮です」

元帥「ふん、行くぞ」

少将「おお、中将来た…… 元帥殿」

元帥「別に機嫌取りで来たわけじゃない。義務を果たしに来ただけだ」

少将「左様ですか」

元帥「……」

少将「……」

中将「あつ、見えた。見えました！」

少将「なに、ほんと…… か…… これは……」

元帥「……！」(全艦帰投、だと?)

3人の前に現れたのは4隻の戦艦だった。

素人目でも判るほど激しく損傷したその戦艦らは、行動不能に陥って曳航される艦の如くゆつくりと港に近付いて来た。

何れも准将が基地を出た時の編成のまま、欠落した艦はいないようだった。

やがて准将が乗っているとと思われる艦が1隻だけ港に着船し、船内から人影が現れた。

カンツ、コツ…… カンツコツ……

元帥「……」

中将「……っ！」

少将「あいつ足が……」

准将「…… 只今、帰投した」

元帥「…… ご苦勞。戦果は？」

准将「これを」

少将「…… 首か」

中將「…… これは？」

准将「ここら一帯の深海棲艦をまとめていた首領だ。これで暫くは海が静かになるぞ」

元帥「それは本当か？ あの艦隊で討伐したというのか？」

准将「…… 確かに。だが俺はあの戦いで艦娘の起こした更なる可能性、奇跡を目にした。己の命を糧に、最後の攻撃に全てを懸けた渾身の一撃を」

元帥「だが……」

准将「…… 証拠はある。あいつらの最期を看取ってやってくれ。生命力の全てを使い果たしたあいつらは、もう人間の姿になる事もできない」

少将「なに」

准将「もうあいつらには何も残っていない。俺を此処まで運んで来た時点で既に限界を超えていたんだ。後は沈むだけだ」

ズズ……。

准将を降ろしてから間もなくして帰港していた4隻の艦に異変が起きた。全ての艦が徐々に船体を傾かせて海に沈み始めたのだ。

中将「ああ……。」

元帥「……。」

少将「……。」カッ

准将「お前たち、よく頑張ったな。ありがとう。ゆっくりやす……いや、また会おう」

元帥「……なに？」

准将「元帥、俺はあの海域である真実を見た」

元帥「……何を見た？」

准将「敵の本拠地で廃棄されたはずの艦娘が収められた大量の収納ケースだ」

元帥「……！」

中将「なんだって!？」

少将「……。」

准将「深海棲艦はな、艦娘だったんだよ。轟沈したり廃棄された艦娘が無念に駆られた結果、深海棲艦になっていたんだ」

元帥「なんだと……」

准将「あんたらは旧型には意思がないとか言っていたが、もしそうならこうやって無念の所為で深海棲艦になったりはしないよな？　だが、事實は違った」

元帥「……」

准将「なあ、俺達は新型の艦娘が造れるようになってから一体どれだけの旧型を廃棄したんだ？　どれだけの数を世界に広めてしまったんだ……？」

元帥「少なくとも……　本国だけで5000体以上だ」

中将「そんなに……!？」

元帥「新しい安全保障を条件に米国を筆頭に各国から艦娘の受注を受けていたからな……。最終的な総数は見当もつかん……」

少将「……」

准将「俺達は艦娘という存在をあまりにも甘く見ていた。使い勝手がいいという事だけに注目し、その癖その管理はあまりにも杜撰だった。その結果がこのザマだ」

准将「恐らく、これは俺の予測だが、艦娘創造のきっかけを作った八咫鳥からはその運用についていろいろ注意されてたんじゃないか？」

准将「それなのに早期の配備にばかり気を取られて、話半分で殆ど聞き流していたんじゃないか？」

元帥「…… 情報部に関連資料の精査を早急に指示する」

准将「……」

元帥「…… 責任は全て私と総帥が取る」

中将「げ、元帥殿。おいそれとそのような事は……」

元帥「いや、必要だ。この過ち、私達の首だけでは足りないくらいだ。最終的には、悪
い…… 大将にも付き合つて貰う事になるだろう」

准将「俺も辞めるぞ」

少将「俺も辞めますよ」

中将「私もです！」

元帥「いや、駄目だ。君らは正しかった。そして君たち程、本部の幹部として、指導
者として、提督として、艦娘を良く運用していた者はいない。君たちは今後の海軍に絶
対に必要な存在だ」

中将「元帥……！」

少将・准将「……」

元帥「さらばだ諸君。できれば軍法会議で死刑が望ましいが、そこまでの処分をする
と逆に外に勘ぐられて事の真相がバレかねないからな。残念だが懲戒処分の上で一生
国の監視下に置かれる程度で済んでしまうだろう」

元帥「結果的には隠蔽になるが、現状深海棲艦に対抗できる勢力が我々海軍だけなのも事実だ。その均衡が崩れることによつて無用な混乱を招くわけにもいかん。気分は良くないだろうが、時期が来るまではこの事は最高機密扱いで頼む」

中将「……了解しました」

少将「了解。お任せください」

准将「……」

元帥「准将、すまなかつたな。今更こんな事を言つても言い訳でしかないが、お前には悪い事をしたと思つている」

准将「いえ、その言葉を頂けただけでも、あいつらの名譽は守られました。俺の方こそ貴方には随分失礼な態度を取つてきた……どうか御達者で」カツ

元帥「……海軍を頼んだぞ」

くとある海域

ちやぶんつ

レ級「僕は……」

タ級「どうしたの？」

レ級「え？」

夕級「何か悩み事？」

レ級「うーん……」

夕級「？」

レ級「分かんない！」

夕級「え？」

レ級「だつて目が覚めたらいつの間にかこんな姿だつたんだもん」

夕級「…… あなたもしかして艦娘だつた？」

レ級「うん！ どんな姿だつたかとか艦娘だつた頃の事は全く思い出せないけど、艦娘だつた事は何故か凄く自信あるんだ！」

夕級「そう…… 私と同じね」

レ級「え？ 君も？」

夕級「そう。あそこにいる二人もよ」

レ級「へ？」

ヲ級「もうっ！ いきなり水を掛けるのやめてよ！ ビックリしたじゃん！」

ル級「ご、ごめんなさい。隣にいるのに気付かなくてビックリしちやつて……」

ヲ級「え？ 君私の隣にいたの？」

ル級「目が覚めたらいたよ？」

ヲ級「……… なんで？」

ル級「さあ？」

レ級「……… ふふ」

タ級「どうしたの？ 急に笑って」

レ級「分かんない。でも、あの二人なんか気が合いそうな気がするんだよね」

タ級「そうなの？」

レ級「うん！ あ、君もね！」

タ級「私も？」

レ級「うん！ 友達になってよ！」

タ級「……… いいけど」

レ級「やった！ よろしくね！」

タ級「え、ええ………」

レ級「それじゃ、あつちにいる二人にも声掛けに行こうか！」

タ級「慌ただしい子ね。ま、賑やかなのは嫌いじゃないけど」

レ級「ホント!? やっぱり僕たち気が合うね！ それじゃ行こうか！」

夕級「はいはい」

レ級「おーい！ 君たちー!!」

ヲ級・ル級「え？」

その後、事態を知る事になった総帥は元帥の言った通り自らの辞職を以て全ての責任を取る事を即決した。

元帥の部下だった大将も巻き込まれた形にはなったもの、一切の不平不満を漏らさず将官としての務めを全うする為、彼らに従う形で一緒に辞職をした。

軍法会議の結果も真相が真相だけに、責任の所在の追及に窮した軍統制監査部は、これも元帥の言っていた通りに一応は彼らを一生保護監視下に置く決定をする事で半ば無理やりに決着させた。

それから暫して、国は中将を緊急措置で元帥海軍大将に昇進させることよって海軍総帥代行に抜擢し、准将と少将も同じ措置で2階級特進させて彼を支える体制を作った。

それから更に数年後、若い時分から経験を積ませる事よって有能な総帥を育てる事を目的とした元帥は、国に要望して前例のない若さの総帥候補を用意させた。

彼はとても優秀で、僅か三年足らずで元帥たちに教えられた全ての知識を吸収し、海軍の総帥として恥ずかしくない誇れる存在となった。

更にそれから十数年後、完全に軍の統帥権を総帥に委ねた元帥たちは新たな幹部候補として若い人材を探していた。

大将「おい、士官学校の校長をやるって本当か？」

中将「ああ、面白い奴らがいたら鍛えてみたくてな」

大将「……相手はあくまで人間だからな？　あまりやりすぎるなよ？」

中将「分かっているわい」

大和「……心配です」

大将「……夫の浮気を心配する妻みたいな顔だなでなければ、さまになったセリフだったんだがな」

大和「ちよ、た、大将殿！」カアア

中将「はははは！　そうか、それじゃ若い娘にもちよつかいせんな」

大和「中将!？」

中将「おお怖っ！　じゃ、ちよつと行ってくる！」

女「ねえ、今度デートしない？ 奢るわよ」

男1「なんでいきなり声を掛けられた見ず知らずの女性にデートで奢られなければいけないんだ……」

男2「え？ お前達付き合ってるじゃねーの？」

男1「いや、別n——」

女「そうよ。たった今からよ」

男1「」

中将「……なんか面白そうながキだもだな。よしつ。おーい!!」

第23話 「機微」

榛名「……………」ズーン

提督「……………」榛名の奴はどうしたんだ？」

秋雲「なんでも改二の改造を受けれるレベルが金剛ネーサン達と違って高かったみたいな。それで……………」

提督「受けられなかったのか」

秋雲「そうみたいね」

榛名「なんで……………」 どうして……………」 やつと改造の機会が来たと思ったのに……………」
ズーン

提督「……………」 蒼龍とは逆のパターンか」

秋雲「え？」

提督「いや、なんでもない。ふむ、俺がもつと鍛えてやってたらな」

秋雲「ま、そこは最近はケツコン間近組から大佐ずっと出撃や演習を迫られてたからね。無理はないと思うけど」

提督 「押し切られた俺の弱さにも問題があるだろう」

秋雲 「わたしの押しにはなかなか屈せずにエッチしてくれないの？」

提督 「……」

秋雲 「冗談だつて！ やだなあもう！ そんな顔しないでよ！」

提督 「ああ、いや……」

秋雲 「だから冗談だつて、半分だけど」

提督 「半分か」

秋雲 「そうは——」

榛名 「……」 ゴゴゴゴゴゴ……

秋雲 「!!!?」

提督 「? 秋雲？」

秋雲 「あ、じゃ、じゃあ大佐、わたしちよつとお茶の用意して来るね！」

提督 「なに？ お茶ならここでも用意できるだろ？」

秋雲 「いやいや、わたしの部屋にめっちゃ美味しそうな色材があるんだつて！」

提督 「俺に何を飲ませる気だ？」

秋雲 「ま、まあそういう事だから。ちよーつと待っててね。少ししたら戻ってくるか

ら！ あと、ご武運を」

提督「武運？ 何故？」

秋雲「……………」クイクイ

提督「……………」つ

秋雲「じゃね！」

バタン

榛名「……………」大佐？」

提督「なんだ？ 後ろにいるならいるで教えてくれると嬉しかったんだが」

榛名「あら、お気づきになってなかったんですか？ 通りで榛名の目の前で秋雲ちゃ

んとエツチなお話を……………」

提督「いや、してないし、実際にまだ行為にも及んだ事はない」

榛名「まだ？」

提督「……………」いや（この榛名は無敵か？ 隙がない）

榛名「大佐？ 別に榛名はいいんですよ？ 大佐が誰とエツチな事しても。榛名も好

きでいて下さるのなら」

提督「いや。それは流石に倫理的に節操がないというか……………」

榛名「で・も！」ズイ

提督 「…… なんだ？」

榛名 「榛名が落ち込んでる時くらい慰めて欲しいです……」 ダキッ

提督 「ああ……」

榛名 「大佐、お膝に座っていいですか？」

提督 「ああ」（今は絶対に断れない）

榛名 「ありがとうございます♪ あつ、自分でお願ひしておいてなんですけど、重くはありませんか？」

提督 「いや全然」（実際、金剛の次くらいに榛名は軽いからな）

榛名 「そうですか♪ それじゃあ失礼しますね」

ギシッ

榛名 「はあ…… 大佐の懐はやっぱり落ち着きます♪」 スリ

提督 「…… そうか」

榛名 「んー…… ♪ あ、大佐……？」

提督 「……」 ナデナデ

榛名 「♪」

提督 「榛名は良い子だな。俺の所為で練度が足りなくて改造を受けられなかったというのにこんなに怒らずにこんなに優しくして…… 頑張り屋さんだ」

榛名「そんなあ…… 榛名はこうやって大佐に抱きしめてもらえれば……」ス
リスリ

提督「遠慮するな。今は思いっきり甘えろ」

榛名「っ、大佐あ♪」

提督（榛名は下手に気を利かせずに、子供をあやす様に甘やかすのが吉だと最近分かるようになってきたな。逆に比叡は少し放置した方が……）

提督「……」ズーン

榛名「あ、あの大佐？ どうかしました？」

提督「いや、自分のスケコマシ振りにちよつと嫌悪感が、な」

榛名「そんな！ スケコマシだなんて！ 大佐は単に純粹なだけです！」

提督「……」（何故だろうフオローしてくれている筈なのに逆に男して惨めな気分……）

榛名「大佐、榛名の…… お、お尻ちよつと触ってみてください」

提督「いや、日中にそんな事をする気は……」

榛名「あ、ち、違います！ お、女の子って好きな人ならお尻を触られるのって結構気持ち良くて好きなんですよ？」

提督「そうなのか？ でも、どうしたんだ突然」

榛名「大佐がちよつと元気なさそうだったので、榛名で気持ち良くなってもらいたくて……」

提督「そんな事で尻まで差し出さなくていいぞ」

榛名「あ、ごめんなさい」

提督「いや、いい。俺はこうやってお前を撫でているだでも割と心が癒——」

榛名「あの、お尻は触って欲しいのですが」キツパリ

提督「そこは譲らないのか」

榛名「はい」

提督「……分かった」(まあマツサージでも尻は揉むしな。その心持だ)

ムニツ

榛名「あ……」

提督「柔らかいな。特に凝っているところもなさそうだ」

榛名「あ、マツサージするおつもりだったんですか？」

提督「いや、まあ撫でるならその方がいいかなと思っただけだ」

榛名「ふふ、そうなんですか。いいですよ。榛名を好きにだけマツサージして下さい

♪

提督「甘えん坊だな」ナデ

榛名「んん……………♪ お尻も忘れないで下さいね？」
提督「ああ」

——数十分後

秋雲「大佐あ、生きてるー？」ソー

榛名「すう……………すー……………」

提督「……………」ゲツソリ

秋雲「ありや、こりや結構お疲れみたいだね」

提督「……………」榛名には言うなよ？ 単に自分と戦っていただけだ」

秋雲「性欲？」

提督「……………」つ」グサツ

秋雲「あ、意外」

提督「……………」俺は駄目な男だ。ちよつと前までは仕事に集中したらそれ以外は頭に入らなかつたのに。今となつては……………」

秋雲「あーいやいや、女の子触つて欲情しない男なんてそういないから大丈夫だよ」

提督「……………」普段の俺なら堪えるフォロードだが、今はそんなお前の言葉も嬉しく感じる……………」

秋雲「あははは。まあまあ、秋雲もパンツくらいならいつでも見せてあげるから」

提督「……立ち直った」

秋雲「あ、狙い通り」

提督「流石だな」

秋雲「そりや大佐の事大好きだもん。好きな人の立ち直し方なんて基本よん？」

提督「……そのお茶、貰えるか？」

秋雲「はい、どうぞ。ついでに秋雲もどうぞ？」

提督「榛名をソファアーに寝かせたら。膝に乗れ」

秋雲「やっぴい♪」

第24話 「マツサージ」 R—15

青葉「青葉が収集したデータによると大佐はお風呂が大好きで、必ず一日の終わりに入浴しています」

比叡「入浴直後が一番力が抜けてるって本当？」

青葉「ええ、確かです。一番力が抜けてリラックスしてる状態で、前に青葉が頭を撫でて下さい！ っってお願いをしたら直ぐに撫でてくれました」

比叡「なるほど…… 攻めるとしたら絶好の機会ってことね」

青葉「そうです。それでも頻繁には使えないので、その機を狙うとしたらある程度の間隔は空けてないといけません」

比叡「最後にその手を使ったのは？」

青葉「3週間前ですね」

比叡「…… イケるかな？」

青葉「恐らく」

比叡「…… よしっ」

大佐「ふう……」ホカホカ

比叡「あ、大佐」

青葉「こんばんわです」

提督「比叡、青葉…… どうした？」

比叡「いえ、ちよつと大佐にお願いがあつて……」

提督「俺に？ なんだ？」

青葉「大佐つてちゃんと疲れとかとつてます？」

提督「疲れ？ 肩凝りとかの疲労か？ まあない事はないが、こうやって最後に風呂

に入ると多少癒されてる気はするな」

比叡「いけません！ それだけじゃいけませんよ！ そこはちゃんとした手段で癒さ

ないと！」

提督「ちゃんとした手段？」

青葉「大佐、宜しければ青葉達が大佐をマッサージして差し上げたいのですが」

提督「なに？ お前たちが？ いや、それは流石に悪い」

比叡「遠慮しないで下さい大佐！ わたしこれでも普段から大佐に感謝してるんです

！ だから、こういう時くらい恩返しさせて下さい！」

提督「いや、何もそこまで過大に感謝しなくても……」

青葉「いいえ！ 青葉も大佐にいろいろとお礼をしたと思うっていたんです！ だから、こんな程度の事で申し訳ないのですが……」

提督「こんな程度の事ってマツサージの事か？ いや、それでも十分だろ」

比叡「本当ですか!?! じゃあ」

青葉「青葉達に恩返しさせて下さい！」

提督「……分った。頼む」

く 提督私室

提督「ベッドに寝てればいいか？」

青葉「あ、はい。うつ伏せでお願いします。はい、このクッションを胸と顔に」

提督「ん」

比叡「それじゃ、行きますよ。よっ」

グキッ

提督「!!」ビクンッ

青葉「あ、なかなか良い反応なんじゃないですか？ これ。じゃあ青葉はここ

を……ほっ」

ゴキンッ

提督「……………っ……………は……………あ……………!?!」ビクツ
チーン……………。

比叡「……………あれ? 大佐?」

青葉「急に反応が? おかしいですね……………あ」

比叡「どうしたの?」

青葉「き、気絶してる……………」

比叡「ええ!」

青葉「ど、どうして……………」

コンッ

比叡「コン?」

青葉「え?」

比叡「……………あ、私達艦装着了たままだ」

青葉「青葉達もそうですけど、大佐……………その事を指摘するのを忘れるくらい気が抜

けてたんだ……………」

比叡「ど、どうしよう!?! 大佐、多分私達の重さが乗った指圧で気絶しちやっただ

よね!」

青葉「お、落ち着いて下さい! 幸いにも息はしています。体もちよつと衝撃が走つ

て一時的に気絶しただけみたいです」

比叡「本当!? ヒビとか入ってない?」

青葉「多分…… 触った感じには……」

比叡「不安よ! ちょっと調べてみよう!」

青葉「そうですね!」

比叡「大佐、ちよつと失礼しますね」ヌガシヌガシ

青葉「あ、じゃあ青葉は下の方を……」

比叡「下?」

青葉「あ」

比叡・青葉「……」

比叡「ど、どうする?」

青葉「ど、どうしましょうか?」

比叡「大佐…… 寝て…… 気絶してるんだよね。起きないかな」

青葉「こ、これは介抱です! 何もやましい事なんてありません! 多分……」

比叡「うん、そうだよ。じゃ、じゃあちよつとだけ?」

青葉「そ、そうですね。少しくらいならやって…… いや、必要ですよね!」

スル……ぼろん

青葉「あ、これが大佐の……」

比叡「へえ……こういう感じなんだ」

青葉「あ、青葉も！ ん……」

比叡「わわ、いきなり大胆……！ じゃ、じゃあわたしは……ペロ」

青葉「どうです……？」

比叡「特に何も……？」

ビクンッ

比叡「きやつ」

青葉「わわっ」

ググッ……

比叡「す、凄い……」

青葉「こういう風に大きくなるんですね。はあ……」

比叡「き、気絶していても反応するんだ」

青葉「みたいですすね。大佐は未だに気を失ってるみたいですし」

比叡「……ギユッ

ビクンッ

比叡「あつ…… ふふ、なんか可愛い♪」

青葉「比叡さんズルいです!」

比叡「シーっ、静かに。ほら青葉も……」

青葉「あ、ありがとうございま…… ちゅ」

比叡「はあ…… はあ…… あ」

ぐにぐに

青葉「ちゅ…… 比叡さん?」

比叡「ん…… これもなんか気持ち良いかも♪」

ぐにぐに

青葉「そ、それは……」

比叡「わたし姉様に聞いたことがある。この中に子供を作る為の大事なものが蓄えられてるんだって」

青葉「へえ…… あ、凄く柔らかい。ここは硬くならないんですね」モミッ

比叡「……」

ムニユ

青葉「きゃあつ!? ひ、比叡さん?」

比叡「本当だ。青葉のより柔らかいね」

ムニムニ

青葉「きや、あ……………んう……………比叡さん……………」

比叡「わ、わたしちよつと暑くなってきちやった」ヌギ

青葉「あ……………比叡さん意外にあるんですね……………」

比叡「青葉の方が大きいけどね？」

モニユ

青葉「ああんっ」ピクッ

比叡「あ、青葉もう硬く……………」クリッ

青葉「ああつ、ふ……………う……………そ、それは比叡さんもじゃないですか……………」ペ

口

比叡「んあつ!? ちよ、いきなり……………や……………あつ」

青葉「ちゆう……………」

比叡「はあ……………はあ……………ね、青葉わたし……………」

青葉「はい、青葉もうグシヨグシヨです……………ほら」

比叡「凄……………」

青葉「比叡さんは……………？」

比叡「ん……………」ピラッ

青葉「わわ、と、トイレには行ったんですよ……？」

比叡「や、言わないで……」フルフル

青葉（可愛い……）

提督「ん……う……」

比叡・青葉「！」

提督「……ん」

提督「俺は……寝ていたのか……ん」

提督（体が少し軽い……？）

提督（ああ、そういえば青葉達にマッサージを……気持ち良くて寝てしまったの

か）

提督「あいつらには今度お礼を言わないとな」

く廊下

比叡「あう……途中で目を覚ましちゃうなんて反則です大佐……」

青葉「仕方ないですよ……。まあ、気付かれなかっただけでも良しとしましょう」

比叡「はあ……下着気持ち悪いなあ」

青葉「逃げなければ良かったでしょうか……」

比叡「……ううん、やっぱり寝込みを襲うのは良くないわ！ やっぱり大佐の意思で正面から抱かれたいし」

青葉「はつきり恥ずかしい事を言いますねえ……でも青葉もその異見には賛成です」

比叡「でしょ？」ニツ

青葉「です！ あ、取り敢えず下着早く替えましょう。このままじゃ風邪ひいちゃうかもしれない」

比叡「そうねっ」

第25話 「訪問」

赤城「第二艦隊、遠征から帰投しました」

提督「ああ、ご苦労」

雷「たっいさーたっだいまー♪」

曙「帰ったわ」

白雪「戻りましたー」

衣笠「お疲れ様あ」

瑞鳳「疲れたあ」

レ級「本当にねー」

ル級「久しぶりだねー」

ヲ級「わあ、執務室ってこうなってるんだー」

タ級「……………」

提督「……………」

赤城「……………!?!」ダラダラ

雷「え?」

曙 「なあ!？」

白雪 「…… はい?」

衣笠 「…… バタツ

瑞鳳 「衣笠さん!？」

——数分後

提督 「全く、行きなり訪ねて来るとは……」

レ級 「前に今度は遊びに行くって言ったじゃーん」

ル級 「言ったつけ?」

ヲ級 「どうだったかな?」

夕級 「知らないわよ…… 大佐、ごめんね? 急に来ちゃって」

赤城 「そ、そうです! な、なんなんですかあなた達は!?! 深海棲艦なんですよ?

私達の敵なんですよ!？」

レ級 「何でそんなに怒ってるの? 今日は戦いに来たわけじゃないからいいじゃん」

赤城 「そんな問題ではありません! 会いに來ただけというのなら最低でも武装を解

除してください!」

レ級 「あ、装備? そだね。じゃ外すよ。皆も外してねー、よっ」ポン

赤城（尻尾が取れた!）

ヲ級「んしょつと……」

赤城（あれつて被りも…… 装備だったの!）

ル級「つしよ……」 夕級「んつ……と」

ゴト、ゴト

レ級「これでいい？」

赤城「え、ええ……」（ちよつと青白いただの女の子になつちやつた……）

提督「…… それ、全部装備だったのか……」

レ級「そうだよ。まあ機械とはちよつと違うから自衛行動もある程度可能だけどね」

レ級尻尾「ビチビチツ」 ヲ級帽「パクパク」

赤城「ひつ……」

ヲ級「ふう…… 久しぶりに装備外したあ。かるーい♪」

ル級「ねー♪」

夕級「まあ偶にはいいか…… な」

提督「それで、今日は一体何の用だ？」

レ級「むつ、それが自分を好いている女の子に対して言う言葉？」

赤城「え？」

提督「おい」

レ級「あ、否定する気？ それじゃあ……………」スス

赤城「ちよっ」

鳳翔「…………… 止まりなさい？ 爆散されたいですか？」

レ級「おっと」

夕級「早い…………… いつの間に」

ル級・ヲ級「ひっ」

提督「鳳翔……………」

鳳翔「大佐、ご無事ですか？」ニコオ

提督「…………… それはこれから俺が無事に済むかどうかだな」

レ級「ちよっと、大丈夫だつて。何もしないから」

鳳翔「…………… 黙りなさい」ジッ

赤城（怖い…………… 鳳翔さん怖い……………）

レ級「やだっ。そんな上から目線は嫌いだもん！ ベえー！」

鳳翔「つ…………… ふう、不思議な子ですね」

レ級「…………… ムスッ

鳳翔「ごめんなさいね。もう何もしないわ」

ル級「ほ、ほんと？」

ヲ級「ぜったい？」

タ級「なんであなた達が聞くのよ……」

レ級「もう脅さない？」

鳳翔「ええ」ニコ

レ級「ん……じゃあ許してあげるっ」

鳳翔「ふふ、ありがとう。あ、大佐、失礼しました。私はこれで。何かあったら直ぐにお呼び下さいね？」

提督「ああ……」

レ級「何もしないよ！」プクー

鳳翔「ふふ、そうね。それじゃ……」

パタン

赤城「……っはあ、怖かったあ」

ヲ級「怖い！」

ル級「あ、あまり大きな声で言っちゃだめだよっ」

レ級「あははははは」

提督「それで？ 今日はどうしたんだ？」

レ級「あ、そうだった。あのね、大佐」

提督「ああ」

レ級「海軍の本部のね、こーんなに背が高くて、ヒゲもじやのお爺さん知ってる？」

提督「……いや、他に特徴は？」（もしかして親父か？）

レ級「えーつとねえ…… あつ、足が片方鉄の棒だった！」

提督「……」（親父だ、間違いない）

レ級「あ、その顔知ってる顔だね？ ねつ、そうでしょ？」

提督「だとしても、敵であるお前達においそれと情報を渡すわけにもいかん」

レ級「えー…… まあそれはその通りなんだけどさあ。あ、じやあこれだけ教えて
？」

提督「なんだ？」

レ級「その人昔、今とは別の艦隊持ってた？」

提督「…… まあ外見がある程度の年齢の人間なら過去に何回か艦隊が変わってる
可能性はあるかもな」

レ級「あ、やつぱりそうなんだ。ふーん」

提督「一体それがどうしたと言うんだ？」

レ級「えへへ、実はねー」

タ級「その人、もしかしたらこの子の元提督だったかもしれないのよ」

提督「なに、そうなのか？」

レ級「もしかしたらねっ」

提督「何か根拠でもあるのか？」

レ級「特にこれと言つてないんだけど、でもなんかあの人見た時不思議な感じがしたんだよねー」

提督「不思議な？」

レ級「うん、なんか見てて懐かしい気持ちになったっていうか」

提督「……： そうか」

レ級「ね、大佐」

提督「ん」

レ級「僕、その人に会つてみたいな？」

提督「……： 今度会う機会があつたらそれとなく聞いてやる」

レ級「ほんと!？」

提督「聞くだけで。本人が会つてくれるとは限らないぞ？」

レ級「ううん、それでもいいよ！ ありがとう大佐っ、大好き！」

チユ

赤城 「はあああああ!？」

ル級・ヲ級 「きやつ」

夕級 「やるわねえ……」

提督 「お前、そういうのは……」

レ級 「いいじゃん。お礼なんだから。あ、もしかしてもつと別のを期待してた……
？」チラツ

赤城 「」ピシツ

ル級・ヲ級 「きやあああ♪」

夕級 「ちよつと……」

提督 「おい、やめ——」

シユツ……

レ級 「よつと」パシツ

赤城 「……」ゴゴゴゴゴ

レ級 「危ないなあ」ニマニマ

赤城 「ふふふふ、ごめんなさい。つい手が、ね？」

レ級 「あ、そうなんだ。じゃ、仕方ないね」ニヤ

赤城 「つ……」カチン

ル級 「…… あつちで遊んでよつか」

ヲ級 「そだね」

夕級 「止めなさいよ」

提督 「赤城やめ——」

赤城 「レ級さんちよーつとそこでお話ししましょうか？」

レ級 「物理的なお話？ ならお断りだよ？」

赤城 「いえいえ、この鎮守府でのマナーを少し、ね？」

レ級 「あー、そういう事？ いいよ？」ニヤ

赤城 「…… 良い度胸です」

レ級 「じゃ、行こつか」

提督 「……」

夕級 「大佐、ほんつとにゴメン！」

提督 「…… 昼までには帰れよ」トンツ

夕級 「…… これは？」

提督 「食堂の食券だ。少なくともその姿なら一方的にバレル事はないだろう。これで

何か食べて行け」

夕級「い——」

ル級「いいの!？」キラキラ

ヲ級「ホント!？」キラキラ

夕級「本当にもうあなた達は……」

第26話 「ゲーム3」

高雄 「真空、もらったわ！」

愛宕 「甘いわ！ 言葉そこよ！」

高雄 「くっ、抜けられた！」

愛宕 「まだまだよ姉さん♪」

ワーワー

提督 「……」

木曾 「へえ、やるもんだなあ」

提督 「解るのか？」

木曾 「俺、格ゲーだけは結構好きでよくやるんだ」

提督 「…… 天龍とか？」

木曾 「よく分ったな」

提督 「いや、何となくな」（ベタだな……）

高雄「ああ、負けちゃった」

愛宕「なかなかいい線だったわよ、姉さん」

高雄「愛宕、あなたパソコンのゲームだけやってたんじゃなかったのね」

愛宕「んー、これも一応パソコンのゲームだから……私の場合はキャラ愛で始めた結果ここまで上達したのよ」

高雄「キャラ愛？」

愛宕「このゲームいろんなゲームのキャラがタイトル関係なしに対戦できるだけじゃなくて、独自に作成したキャラクターも使えるのよ」

高雄「独自に？」

愛宕「そう。実際に存在しないキャラでも既存のキャラをベースに作ったり、擬る人は本当に一から作ったりするの」

高雄「あなたのもそうなの？」

愛宕「これは私が作ったわけじゃないけどね。でも元々好きなキャラだったから、それがこうやってゲームで使えるようになったのが嬉しくてつい使い込んでしまったのよ」

高雄「なるほどねえ。それであんなに手馴れてたのね」

愛宕「好きなキャラだったら大体私使えるわよ」

高雄「そうなの？ んー、悔しい。私も格闘ゲームは割とやっていた方なんだけどなあ。正規キャラで負けるとわね」

木曾「ふつ、なら高雄姐の仇俺が取ってやるよ」

高雄「木曾、やる？」

木曾「ああ、交代だ」

愛宕「どうぞー。歓迎よ♪」

木曾「俺はやっぱりドラ○ロだな！」

愛宕「わ、渋いわねえ。解るわ。なら私は……」

ワーワー

提督「……ズズ」

磯波「大佐はやらないのですか？」

提督「俺は格闘ゲームがそんなに上手くなくてな。ブ○ド○レードなら得意なんだが」

磯波「そうなんですかー」（なんだろそれ……聞いたことない）

深雪「じゃあ何か得意なジャンルはあるの？」

提督「断然SLGだ」

磯波「シミュレーションゲームですかあ。大佐らしいですね」

深雪「う…… あたしは逆にそういうのは苦手だなあ。いろいろ考えるんだろ？
その手のやつって」

提督「ゲームによる。例えば俺が好きなの一つにこういうのがある」

深雪「ん？ なにこれ？ お城を作ってる？」

磯波「わわ、人がたくさん動いてます」

提督「このキャラたちを使って資材や食料を調達し、建物を作り、砦や兵士の装備も作るんだ」

磯波「うわっ、聞いただけで難しそう……」

提督「このゲームはそれほどでもないと思うがな。ある程度慣ればこういうことが可能だ」カチツ

磯波「わあ、兵隊が列を組んで…… 軍隊みたいですよ！」

那智「……」ピクツ

深雪「おー」

提督「これで攻め込んだり、自分の領地を守ったりする」

深雪「え、人で城壁を壊せるの？」

提督「一応できるが、それだと時間が掛かって壊してる最中に矢で倒されてしまうか

らな。そういう時は攻城兵器を使う」

磯波「へえ、面白s」

那智「面白そうだな、それ！」

深雪「わっ」

磯波「那智さん、びつくりしました」

提督「読書はもういいのか？」

那智「いや、本を読んでいたら何やら興味深い話が聞こえたもので」

磯波「那智さんゲームとかやるんですか？」

那智「いや、全く。でも、これは面白そうだな」

深雪「ゲームを全くやったことがない那智さんが……あ、あたしもそれちよつと

やってみようかな」

提督「興味があるなら教えてやれるが？」

那智「是非！」

深雪「あたしも！」

磯波「わ、わた——」

シンクノー♪ オウゴンノテツノカタマ——

磯波「……………」

那智「ふふ、興味があるならあつちでもいいんだぞ？」ポーン

磯波「あ……………」

提督「ふつ、いろいろと興味が出て迷うか」

磯波「う……………」ちよ、ちよつとだけ！ ちよつとだけ見てきます！」タタツ

深雪「意外、磯波つて格ゲーに興味あつたんだ」

那智「いや、多分違うな。あれは自分の趣味に合った音が聞こえたからだろう。興味の広がりというのはそういうものだ」

提督「だとすれば、愛宕はその事を教えることについては適任だな。さて、では俺達も始めるか」

那智「ああ、宜しく頼む」

深雪「て、丁寧をお願いな！」

第27話 「悪夢2」

朝目覚めて鏡を見たら女性になっていた。

髪が長い。

背が男の時より縮んでる。

腕は細い。

腰も明らかに縊れて尻が若干大きくなったような。

胸は……これは、叢雲と同じくらいか？

そしてなにより……なくなっていた。

提督（さて、どうしたものか。夢に違いないが、だとしてもこの状態から目を覚ます手段がない）

提督「……もう一度寝るか？」

トントン

提督「ん？」

加賀「大佐、加賀です。朝食をお持ちしました」

提督「……」

提督（この姿を見て夢の中の加賀はどう思うだろうか。いや、意外とこれがデフォルメの世界かも）

加賀「大佐？どうかしました？」

提督「いや、何でもないはい——」

バンツ

提督「きやつ」（何だ今の？ 俺の声か？ 俺の口から出たのか？）

加賀「……」ジツ

提督「ひっ……」（怖い。クソ、なんだこの感情は？ 止められない）

加賀「あなた誰ですか？」

提督「えっ」

加賀「何故大佐の服を着ているんですか？」

提督「か、加賀俺は——」

加賀「申し訳ありませんが、あなたに呼び捨てにされる程親しい関係だった覚えはありません。というよりあなたを私は知りません」

提督「つ……」

加賀「もう一度訊きます。あなたは誰ですか？」

提督「……大佐、です」

加賀「はい？」キツ

提督「大佐……です」

加賀「……」

提督「う、嘘じゃない……です。本当に……」

提督（俺が俺でないみたいだ。女性というのは責められるところも心理的に弱くなり易いものなんだな）

加賀「……私が機嫌が悪い……もとい、拗ねた時によく大佐にする癖があります。分りますか？」

提督「え？」

加賀「……」

提督「……か、階級を下げて呼ぶ……です」

加賀 「…………… どうやら本物のようですね」

提督 「し、信じてくれるの？」

提督 (もう最早言葉が女言葉しか出ないようになってきた)

加賀 「信じたくありませんが。ふう、これは一体どうしたことでしょう」

提督 「し、知らない…………… 解つたらわたしが教えて…………… 欲しい」

加賀 「……………」

提督 「う…………… ぐす。ひつく…………… えぐ」

加賀 「おいで」

提督 「…………… え？」

加賀 「来てください、大佐。安心させてあげますから」

提督 「加賀？」 トコトコ

加賀 「……………」

ギユ

提督 「あ……………」

加賀 「何も怖い事はありませんよ。大丈夫、私がちゃんと守ってあげますから」

提督 「か…………… が…………… ウル」

加賀 「女の子の大佐というのもなかなか可愛いものですね」 ナデナデ

提督「あ…………… 加賀……………」

提督（撫でられるのがこんなな心地良くて安心するものだとは）

加賀「大佐、このままお眠りください。そして目覚めればきつと何もかも元通りです」

提督「そう…………… かな」

加賀「私が保証します。もしダメでも……………」

提督「うん……………」

加賀「私が男に『戻して』さしあげますから」ギラッ

提督「!!!」

提督「…………… つ!」ガバッ

提督「……………」

提督「夢…………… か?」

ギユウウ

提督「…………… な…………… つ!」バサッ

隼鷹「にへへー、大佐あ」ニギニギ

飛鷹「もう、これ以上のへないわひよー」グデー

提督「……………」

ココンッ!

2 HIT!

隼鷹「あいたー!？」

飛鷹「いつ……え? あれ?」

——数分後

提督「……なるほどな。俺と一緒に酒を飲む約束をしたのにいつまでも誘いが来ないから……」

隼鷹「晩酌してたらそのまま飛び込み参加しようかなあつて……」

飛鷹「でも寝てたから……二人だけ始めて……」

提督「そのまま酔い潰れて寝た結果、ソファーから大移動して俺のベッドに潜り込んだと?」

隼鷹・飛鷹「はい……」

提督「……」

隼鷹・飛鷹「ごめんなさい」

提督「いや、俺もいつまでも誘わなかった所為もあるからな。今回は大目に見よう」

隼鷹「え、じゃあ今から飲み直し!?」キラキラ

飛鷹「そうなの!」キラキラ

提督「反省しろ」

カコン!

隼鷹「あうっ」

飛鷹「ごめんなさい……………」

提督「…………… 飲み直しは今度な」

隼鷹「ホント!」パア

飛鷹「絶対よ!」パア

提督「どれだけ酒が飲みたいんだお前たちは……………」

隼鷹「違う! あたしは大佐と酒が飲みたいんだ!」

飛鷹「そうよ!」

提督「分った。分ったからまた今度な。絶対俺から誘うから」

隼鷹「むう、約束したよ! ちゃんと誘ってよ!」

飛鷹「待つてるからね!」

提督「ああ、約束する」

ボタン

提督「ふう……」

提督（あの夢は、女心をもう少し知るべきだという警告だったのかもしれないな）

提督「だがそれにしても……」

提督「……」ゾクツ

提督（いや、考えないでおこう。どうやって男にするつもりだったかなんて、な）

く 赤城と加賀の部屋

赤城「加賀さん何を読んでるの？」

加賀「前に大佐に貸した本を読み直してるの」

赤城「どんな本？」

加賀「夏だからちよつと怖いのをね」

赤城「へえ、私も読んでみようかしら」

加賀「…… 止めておいた方がいいわ。これ、結構過激よ？」

赤城「え、そうなの？」

加賀「ほらこのページなんて」

赤城「う……ぶ、文章なのに結構来るものが……」

加賀「ね？」

赤城 「よ、よく平気な顔して読めますね」

加賀 「違うわ」

赤城 「え？」

加賀 「読み始めたら、怖くて目が離せなくなっちゃったの……」カタカタ

赤城 「へ？」

加賀 「赤城さん…… 助けて……」グス

赤城 「……っ」

加賀 「赤城…… さん？」

赤城 「もうっ、加賀さん可愛い！」ダキッ

加賀 「きやつ」

第28話 「新開発」

提督「それは？」

霧島「ナノ資材です」

提督「ナノ資材？」

霧島「はい。技術開発部が開発した新しい資材ですよ」

提督「錠剤にしか見えないが」

霧島「この錠剤の中に私たちが艦娘として使うのに必要なエネルギーが全て込められているそうです」

提督「この中にか？」

霧島「はい、そうです。今まで私たちは、資材の補給をする場合原型でしかできませんでしたが」

霧島「この度開発されたこの新エネルギーで人の姿でも容易に資材に代わるエネルギーが補給できるようになりました。何しろ普通の錠剤と一緒に飲み込むだけですから」

提督「ほう、それは凄いな。これで我が鎮守府の極端な資材の偏りという問題も解決

されるのか」

霧島「いえ、残念ながら……」

提督「ま、そう話は上手くないよな。霧島、詳細を」

霧島「はい。このナノ資材ですが、実際の資材と同じく燃料・弾薬・ボーキ・鋼材の4種類があります」

提督「ふむ」

霧島「錠剤の数に応じて補給の量を調整も可能なので、効率的になる以外は本当に単純に補給の仕方が変わるだけなんです」

提督「今まで使っていた資材は？」

霧島「そこなんです、このナノ資材、現状本部からしか入手できません」

提督「というと？」

霧島「ナノ資材の搬入を希望する場合は、今まで通り相応の量の実際の資材と交換となります」

提督「……なるほどな。つまるところ資材の節約か」

霧島「その通りです。艦娘は運用が今までの兵器と比べて容易な分、消費する資材もかなりのペースでなくなります」

提督「最近では環境問題もいろいろ気にされているからな。無理もない」

霧島「交換のレートはまんま同数量というわけではなく、実際の資材の方が交換するナノ資材と比較して2割ほど少なく設定するようなので、以前と比べたら楽にはなると思いますが。若干ですが」

提督「なるほど、理解した」

霧島「あ、因みに、生身の人間が飲んでも全く無害です」

提督「実際に重油や鋼材が使われているわけではないという事だな」

霧島「そうです。これは艦娘にしか効果が出ません。生身の人間が飲んでも効果の弱いビタミン剤程度の影響しかありません」

提督「間違つて飲むには少々高価なビタミン剤だな。注意はするが」

霧島「ふふ、そうですね。……それでどうします?」

提督「利用するかどうか? 勿論する。今ある資材と全て交換だ」

霧島「了解しました。手配しますね」

——数日後

提督「……あの膨大な資材の塊が、こんなダンボール5個ほどになるとはな」

翔鶴「にわかには信じられませんね」

提督「そうだな。この程度の量なら執務室にすら置いておける」

翔鶴 「保管場所どうします?」

提督 「武器庫でいいだろう。整備ドックにも近いし、場所が場所なだけに防備も厳重だしな」

翔鶴 「了解しました」

提督 「それよりだ……」

翔鶴 「はい?」

提督 「この余ってしまった膨大なスペースどうしたものか……」
ガラーン

翔鶴 「ああ……」

提督 「ジムにでもするか? 待機組や非番の奴が退屈しない様に」

翔鶴 「それもいいですけど……」

提督 「ん? なにか希望でもあるか?」

翔鶴 「あ、いえ。その…… 喫茶店なんてどうかあつて」

提督 「喫茶店……」

翔鶴 「あ、いえ。あくまで妄想なので」アセ

提督 「基地の中に喫茶店か……」

大淀 「いいですね。やりましょう!」

提督「大淀」

翔鶴「大淀さん」

大淀「ごめんなさい。ちょっと通りかかりに興味深い話が耳に入ったものですから」

提督「いや、それは別にいいが。大淀、お前は喫茶店に賛成なのか？」

大淀「そうです。食堂の方で大分腕も鍛えましたし。それに、もし喫茶店の運営を任せて頂けるのでしたらなんだか独り立ちするみたいでワクワクするじゃないですか」

翔鶴「大淀さん、最近は鳳翔さんの代わりに厨房頭を務める事もありますからね。勿論美味しいです♪」

大淀「ありがとう翔鶴さん。ね、大佐どうでしょう？」

提督「本部に許可を願い出してみる。下りれば建造妖精達に改装してもらおう」

大淀「お願いします！」

翔鶴「楽しい♪」

提督「まだ決まったわけじゃないぞ？」

翔鶴「艦娘のポテンシャルを維持する為とか尤もらしい理由をつければ大丈夫ですよ！」

提督「そうか？ まあ上手くいくといいが」

翔鶴「はあ……鳳翔さん仕込みの大淀さんのスイーツ……楽しみ」ポワワン

大淀「……翔鶴さんもああいう顔するんですね」

提督「女性は甘いものに目がないのは昔から変わらないな。これは気合いを入れて許可を貰わないとな」

大淀「ふふ、頑張ってくださいね♪」

第29話 「喫煙」

提督 「……ふう〜」

文月 「あー、大佐タバコ吸ってるー」

提督 「ん、文月か。皆には内緒だぞ」

文月 「内緒にしたいような事をするのはよくないよ?」

提督 「大人は駄目と分かっても気分がこれを求める事があるんだ」

文月 「我慢できないの?」

提督 「出来ない事もないが、許してくれそんな人の前では少し気が緩んでしまうかな」

文月 「えー、文月そんな軽い女じゃないもん」

提督 「使い方が間違ってるぞ」

文月 「え? そ、そう?」

提督 「ああ。あまり良い意味じゃない」

文月 「えっ……ふ、文月良い子よ? ホントよ!」ジワ

提督 「分かってる」ポン

文月 「ん……」

提督 「文月、もう一本吸っていいか？」

文月 「もうズルいんだから。後一本だけだからね？」

提督 「ありがとう」 シュボ

文月 「今日はよく降るね」

提督 「ああ。お蔭でこれが美味しく感じる」

文月 「雨が降っていた方が気分が良いの？」

提督 「多少湿気があるとな。風味が微妙に良くなる事がある」

文月 「へえ」

提督 「文月は雨が嫌いか？」

文月 「え？ ん、嫌いじゃないけど……でもやっぱり文月はお日様が好き！」

提督 「そうか。うん、晴天もいいよな」

文月 「あ、でも……こうやって大佐と長くお話ができるなら雨も悪く、ないかな」

提督 「そうだな。俺も偶にはこういうのもいい」

文月 「本当？」

提督 「嘘をついてどうする」

文月 「もし嘘だったら罰として大佐のお膝に乗るつもりだったのに」

提督 「……」グシグシ

文月 「あれ？ もう吸わないの？ 大分残ってなかった？」

提督 「吸ったままだとお前の頭にタバコの灰が落ちるかもしれないだろう？」

文月 「あつ…… いいの？」

提督 「嫌か？」

文月 「ううん！ ありがとうー♪」

文月 「大佐ー」

提督 「ん？」

文月 「今日は一日雨なのかな」

提督 「天気予報は見てなかったからな。時雨にでも聞いてみたらどうだ？」

文月 「しーちゃんは雨が好きだからそういう事は聞かない様にしてるの」

提督 「そうなのか？」

文月 「うん」

提督 「……」ナデナデ

文月 「ん…… つ、大佐？」

提督 「良い子だな文月は」

文月 「こ、子ども扱いは……」

提督 「ああ、悪い」スツ

文月 「あ、やつ……だめっ」ギユ

提督 「ん？」

文月 「撫でるのはやめてほしくないの」

提督 「分かった」ナデナデ

文月 「〜♪」

提督 「ん、晴れてきたな」

文月 「あ、虹だあ」

提督 「ああ、本当だ……」

文月 「きれー♪」

提督 「そうだな」

文月 「……」

提督 「……」

提督 「さて、戻るか」

文月 「え、もう？」

提督 「このままここにいたら、今度は日差しで一氣に蒸発した湿気を味わう事になるぞ?」

文月 「う……」

提督 「ここは大人しく部屋で扇風機に当たっていた方が良いでしょう」

文月 「扇風機…… 大佐」

提督 「うん?」

文月 「どうして文月たちの鎮守府にはエアコンがないの?」

提督 「…… 単純に取り付けられる業者がないんだ」

文月 「パソコンとかはあるのに……」

提督 「エアコンが日本ほど普及してない所為みたいだな」

文月 「ええ」

提督 「…… 今度買い物に行くか」

文月 「え?」

提督 「外出申請を出してもつと都会に行けば、ここでもエアコンが手に入ると思うし」

文月 「そ、それって文月も行つていい?」

提督 「行きたいのか?」

文月 「…… !」 コクコク

提督 「お前の都合が着けば構わないが」

文月 「じゃあ予定が分かつたら絶対に直ぐに教えて！ その日は非番にしたいの！

提督 「あまり言いふらすなよ？ 遊びに行くわけでもないが、お前だけ特別扱いされ
ているようにも思われたりしたら気まずいからな」

文月 「分かった！」

提督 「よし、じゃあ戻るぞ」

文月 「はい。戻ったら扇風機の前であゝっつてするの♪」

提督 「…… それは口が乾くから駄目だぞ」

第30話 「訓練」

大将「射撃訓練開始」

雷「つてえー!!」

ドーン!

大将「遅い! もっと早く撃て! 敵に反撃する隙を与えるな!」

電「撃ちます!」

ドーン!

大将「全然駄目だ! なんだそれは!? もつと的をよく狙え!!」

暁「撃つわ!!」

ドォーン!

大将「的に当てればいいというものじゃない!! しつかり真ん中に当てて粉碎しろ!!」

甘い!!」

利根「参る!!」

ズドツ!!

大将「まだまだだ! 着弾に時間が掛かってるぞ! 誤差修正をもっと念入りにしろ」

!!

筑摩「いきます!!」

ドォーン!

大将「衝撃を完全に受け流せてないぞ!! もっとしつかり構えろ!!」

衣笠「…………… つふ!」

ド…………… オォォン!

大将「マシンな方だが調子に乗るなよ! もっと撃て! もっと精度を上げろ!!」

——数分後

ぜえ…………… はあ…………… ひい…………… げほつ。

大将「後2分で訓練再開だ。これで終わりだと思ふな! まだ続ける意思がある者は

返事をしろ!!」

全員「サッー!!」

大将「よし! 今日は泣いてもやめんからな!! 覚悟しろ!!」

全員「サー、イエッサー!!」

彼女「…………… 相変わらず大将の訓練は凄まじいわね」

武蔵「ああ、私も参加した事があるが、途中で泣いてしまった……」

彼女「あなたが？ 訓練に耐えれなくて？」

武蔵「いや、訓練自体は耐えられる自信は始終揺るがなかった。ただな」

彼女「？」

武蔵「大将が怖すぎて……」

彼女「ああ……」

武蔵「嫌つてるわけじゃないが、以降それがトラウマになって私は大将が苦手なんだ」
彼女「擁護する形になるけど、大将がああなのは戦闘や訓練の時だけだからね？ それ以外はただ真面目な提督よ？」

武蔵「分つてるさ。この前廊下ですれ違った時も自分から挨拶してくれたいし」

彼女「うん。だから普段は怖がる必要はないわ」

武蔵「ああ、でも…… そうだと分つていてもだな……」

大将「何をしている!? 立て！ 遅い!! そうだ!! まだまだ!!」

武蔵「……」
「サア」

彼女「……」
あの日々の訓練の結果、大将の艦隊の子達は戦艦は勿論、駆逐艦の子ま

で「駆逐艦の皮を被った何か」と言われるまでの精強なのよね」

武蔵「お前の艦隊だつて強いと思うぞ？」

彼女「当り前よ。私も訓練に手を抜いているつもりはないわ。でもね、あれを見ちゃうとねえ」

武蔵「…… やっぱり演習をしたら負ける、かな」

彼女「全力で当たると、としか言えないわね」

武蔵「そうだな。勝つけどな」

彼女「ええ、そうよ。その気持ちを忘れないで」

武蔵「ああ」

大将「よーっし！ 今日はこちらまで！！」

雷「……」バタツ

電「う…… うう……」フラフラ

暁「きよ、今日も泣か…… なかつたわ」

利根「は…… ははは、はあ……」グテツ

筑摩「う…… 水…… 水さえあればまだ……」

衣笠「すう…… はあ…… う……」クラクラ

パシヤアアアアアア

雷「あ……」

電「水……」

暁「はあ…… 気持ち良い」

利根「あ…… ぐくぐく。ぷはあつ。ははははは、美味い！」

筑摩「…… んー……。はあ…… 極楽です……」

衣笠「ひゃあー♪」

大将「今日もよく耐えたな。これでまずは体を冷やせ。落ち着いたらシャワー浴びて

休んでよし」

「了解です！ ありがとうございます！」

大将「よしっ、解散!!」

利根「んー、今日の訓練も厳しかったのー」

筑摩「ほんと、いつももうダメかと思つてしまいます」

雷「でも耐えたわよ！ 次だつて耐えてみせるわ！」

電「なのです！ 電は次の訓練もへっちゃらです！」

衣笠「実際本当にキツイけど、終わった後は気分が良いわよね。いろいろ鍛えられるし」

暁「淑女としては最高潮のレベルにわたし達いるんじゃないかしら」

雷「随分アクティブな淑女ね。ま、いいけど♪」

電「部屋に戻って早く寝た……あ、アイスがありました!」

筑摩「えっ」

利根「誠か!」

電「はい。この前第3司令部の中将さんがお裾分けしてくれたのです」

衣笠「あー、あの人があ。よくいろいろくれるよね。私達に気があるのかな」

暁「ちよつとそういう事は思つても言つちやダメなのよ? 噂にでもなつたら中将が

可哀想じゃない」

利根「そうか? あの方はあまりそういうの気にしない性格に見えるがの」

筑摩「そうですね。何というか……よく分らない方ですよね」

衣笠「見た目や仕草は凄くオジサンなのよねえ。でも仕事はしつかりやつてるみた

い。仕事してるとこあまり見た事ないけど」

暁「そ、それって大丈夫なの?」

雷「大丈夫なんじゃない? だって、現になんの問題も起きていないから」

利根「そうじゃの。と、それよりアイスじゃアイス！ 電、人数分はあるのじゃろうな？」

電「はい。勿論です」

衣笠「やったあ。アイス祭りよー」

暁「訓練の後のアイス……はわあああ」

筑摩「とても良いものですね♪」

雷「早く、行くわよ！」

第3司令部、提督執務室

中将「へっくし」

信濃「風邪？」

中将「んーどうだろうね。あ、信濃さんお茶」

信濃「どうぞ」

中将「ズズ……はあ。よつと」ギシッ

信濃「何処へ行くの？」

中将「ちよつと煙草吸いにトイレに」

信濃「外で吸いなさい外で」ジトッ

中将「はい……」

第31話 「外出」

明石「全く、エアコンを設置したいなら私に言ってくださいよ」

提督「すまん。お前の事をすっかり忘れていた」

明石「わ、酷い。酷いですよ？ これはしつかりお礼貰いますよ？」

提督「勿論だ。なんで——」

文月「めっ」

提督「文月？」

文月「そのセリフは不用意に言っちゃダメなんだよ！」

明石「文月ちゃんしつかりしてますねえ。でもちよつと残念」

提督「？」

明石「で、エアコンでしたね。買いに行くんですか？ 経費節約したいなら一から作つてもいいですよ？」

文月「そんな事ができるの？」

明石「工作艦を甘く見ないでね？ 少し時間は掛かるけど余裕よ」

提督「ふむ……だがもう外出許可は取り付けてあるしな」

明石「じゃ、エアコン自体じゃなくてパーツを買いに行きましょう。その方が新品をそのまま買うより安くつきますから」

提督「お前も来てくれるのか？」

明石「今日が非番で本当に運が良かったです♪」

提督「そうか。なら行くか。文月準備は？」

文月「できてまーす」

提督「明石は……」

明石「…… 実はもうそのつもりで」

提督「よし、では出発だ」

提督「…… この廃品にしか見えない鉄の塊から冷房を、な」

明石「ちよつと業務用っぽくなりますが、その方がパワーも有るし、何より頑丈です
よ」

文月「店主さん不思議そうな目で見てますね」

提督「まあ俺達が買い取らなければ処分されるだけのゴミだからな」

明石「これだけ下さい」

ごつちやり

店主「はあ、どうも…… 本当にこんなので？ 古いですけどちゃんと動くのはありますよ？」

明石「これがいいんです」

提督「申し訳ありませんが、これで」

店主「まあそう仰るなら…… はい、こちらになります」

提督「…… 安いですね」

店主「そりや部品として流用しない限り使い道がないですから。うちはメーカーという訳でも、そこまで修理ができる店でもありませんから」

提督「なるほど」

店主「あ、でもお解かりだとは思いますが返品はききませんからね？」

提督「大丈夫です」

店主「まいどありがとうございます」

文月「基地に送ってくれて助かったねー」

明石「流石にあれを抱えたままじゃ外を闊歩できないからね」

提督「軍人というのものもある程度効果があったんだろう。送り先を言った時に態度を少し改めていたからな」

明石「それで、これからどうするんですか？」

文月「あ……」モジモジ

提督「せっかくだ。行きたいところがあつたら付き合おうぞ」

明石「あ、なら私は服！」

文月「文月はデザート！」

提督「よし分った」

く服屋

明石「大佐、文月ちゃんこれなんてどう？」

文月「わあ、とつても似合ってます」

提督「……？ さつきのとどう違うんだ？」

明石「え、ああ。着こなしを変えてみたんですよ。ほらここをこう……」

文月「大佐あダメだよ？ そういう所にも気付けな」と

提督「……」面目ない

明石「ふふふ、いいですよ。まだ着てみたいのがたくさんありますから。あ、これな

んて——」

文月「わぁ♪」

提督（服の買い物だけでももう数時間、凄いな……………）

く喫茶店

文月「おいし〜♪」

明石「ホント、大淀さん達のデザートもいいですけどこういう地元でしか食べられないのもいいよねえ」

提督「……………ズズ」

文月「大佐は食べないの？」

提督「ん？ ああ、俺は甘い物が少し苦手だな。特に洋菓子が……………」

文月「はい」

提督「ん？」

文月「食べてみて。美味しいよ？」

提督（よりによって生クリーム……………）

文月「はい、あーん」

提督「いや俺は……………」

明石「……………」ジー

提督「……………」パク

文月「どう?」

提督「あ……………ああ。意外に、美味しい……………な」フルフル

文月「ほんとう!?! じゃあ特別にもう一口あげるねっ」

明石「あ、それ私も、やりたい、な?」

提督「…………… ほんと来い」

「ありがとうございましたー」

文月「美味しかったあ♪」

明石「ふふ、ほーんと♪」

提督「……………」チャリン

明石「あれ、大佐? お店を出たばかりなのにいきなりお茶をかうんですか?」

文月「え、それ熱いの…………… 間違ってない?」

提督「ぐく……………ぐく…………… ふう、やっぱり日本人はお茶だな」

明石・文月「?」キョトン

く基地

文月「はあ、楽しかったあ♪」

明石「本当ね。偶にはこういうのもいいわねー」

提督「割と試練だった……」ボソ

明石「え？」

提督「いや。冷房は部品が届いたら直ぐに作るのか？」

明石「建造妖精の子達にも手伝ってもらえたら……うん。3日以内なら全施設に設置できると思います」

文月「たった3日で？　すごーい！」

明石「うーん、一応他にも人手がいたら方がいいかな……？　頼めますか？」

提督「任せろ。俺から何人かに声を掛けてみる」

明石「ありがとうございます♪」

文月「それでは文月はこれでお休みします。大佐あ今日はどうもありがとうー」

提督「ああ。また明日から宜しく頼むぞ」

文月「はーい」

明石「じゃあ私も戻りますね。今日はありがとうございました」

提督「いや、礼を言うのはこちらの方だ。今日は助かった」

明石「いえいえ、大佐と基地の為に♪ それではおやすみなさいっ」

提督「ああ、おやすみ。ご苦労様」

提督「……」

提督（もう少ししたらこの暑い夜と部屋で会う機会が減るのか……。それはそれで少し寂しい気もするな）

第3 2話 「尻取り」

金剛「第一回金剛姉妹歴史上の人物尻取り大会デース！」

榛名「わあ、榛名負けません！」

霧島「私の頭脳の冴えお見せしましょう！」

比叡「ひええ、わ、わたしそういう勉強っぽい遊び苦手ですう。でも、がんばります！」

提督「……俺は帰っていいか？」

金剛「No！」 比叡「だめ！」 霧島「却下です」 榛名「だめです！」

提督「……夜中に突然呼び出されて何があつたのかと来てみれば……」

金剛「大佐ア、こんな cute な girls に囲まれてそんな顔しちゃダメヨ？」

霧島「ごめんなさい大佐。宜しければ姉達の戯れにお付き合い頂けないでしょうか？」

榛名「榛名からもお願いします！」

比叡「あれ？ お姉様主催なのにさり気にとわたしも事の発端にされちゃってる？」

提督「…… まあ来なかつたら酒か煙草をやつてただけだしな」

金剛「さつすが大佐ネ！ you are champion！」

比叡「はやっ!？」

霧島「いや、それはないですから」

榛名「大佐おめでとうございます！」

提督「やる気あるのか？ ルールは？」

霧島「負けの条件は語尾に『ん』がつくか、1ゲーム5分の内に最後に答えられなかつた人です」

提督「分つた」

榛名「大佐から姉妹の上から順でいいですか？」

金剛「オーケーヨ！ さあ大佐、please！」

提督「織田信長」

金剛「オダノブナガ？」

比叡・霧島・榛名「えっ」

金剛「え？」

霧島「お姉様…… 織田信長知らないのですか？」

金剛「え？ そ、そんなに有名？」

比叡「わ、わたしでも知ってます……………」

榛名「お姉様……………」

金剛「え？ え？」アセ

提督「後で歴史の授業をしてやる」

金剛「really!?! 二人つきりヨ!?!」ダキッ

比叡・霧島・榛名「え？」

提督「分つたから離れる。ほら次はお前だ」

比叡（お姉様ズルい……………」

霧島（くつ、これが天然……………」

榛名（榛名もおバカな振りをすれば……………」

金剛「イエス！ ん……………」ガ……………」が……………」が？」

金剛「……………」

霧島（これはなかなか厳しい）

比叡（ごめんなさいお姉様、思いつかない……………」

榛名（蒲生氏郷……………」

金剛「か……………」ふえ……………」グス

比叡「お姉様！」

霧島「大佐……？」

榛名（ガリレオ・ガリレイ……）

提督「俺が悪いのか……？」

金剛「ふええええん！」

霧島「大佐っ」ヒソ

提督「……ほら、泣くな」ギユッ

金剛「大佐ア……」グス

提督「このくらい気にすることは無い。偶々分らなかつただけだろう？」

金剛「う……ぐす……ワタシお姉ちゃんなのに……」

霧島「気にしないでお姉様。『が』は流石に難しかったと私も思います」

比叡「そうです！」

榛名（ガイウス・ユリウス・カエサル……）

金剛「ぐす……比叡、霧島……」

榛名（濁点無しはありかな？　じやないと難しいものね。葛飾北斎、勝海舟……

か……か……）

提督「いい妹を持ったな金剛」ポン

金剛「あ……ウン。本当にワタシは幸せな姉ネ……」

比叡 「さあお姉様第二ラウンドです！」

榛名 「か……………か……………」ブツブツ

霧島 「榛名……………」？

金剛 「ウン。サンキューネ大佐、比叡、きりし——」

榛名 「あつ、加藤清正！」

提督 「ん？」

金剛 「エ？」

比叡 「え？」

霧島 「榛名、あなた……………」

榛名 「え？ あ……………」

金剛 「……………え？」

提督 「……………」

第33話 「勉強」

金剛「……………なんでマリアもいるのヨ……………」

Bis「歴史の授業なんでしょ？ 私、この国の歴史はあまり知らないから興味があ
るのよ」

金剛「大佐ア」

提督「……………別に隠し……………いや、確かに二人きりとは言ったが、秘密ではなかつ

ただろう？ マリアに会った時に何をしているのか聞かれてそれに答えただけだ」

Bis「お願いっ。私も授業に参加させて。興味があるのは本当なの！」

金剛「むう……………仕方ないですネ。何より同じ大佐の wife であるマリアの
頼みだし……………ネ」

Bis「金剛！」 パアア

提督「すまんな」

金剛「never mind！ 気にしないでいいワ。それより大佐、早く授業！」

Bis「確かオダノブナガだったわね？ どこまでが名字でどこからが名前なの？」

提督「織田が名字で、信長が名前だな」

金剛「アーハン、ノブナガ・オダ、ネ」

B i s 「字はどう書くのかしら？」

提督「字？ 漢字でいいのか？」

B i s 「ええ、平仮名は読めるから漢字でお願い」

金剛「マリアは偉いネ。フツー字まで知りたい人はそういないヨ？」

B i s 「漢字って面白いのよ？ たった一文字の中にちゃんと意味があつて、しかもっ読み方も複数あるの。私はそれを理解しながら覚えていろいろ想像するのが楽しいのよ」

金剛「はあ、凄いネエ、マリア……」

B i s 「やめてよ。照れるじゃない。それで大佐、字は？」

提督「ん、字はこう書く」サラサラ

金剛「Oh 名字の最初の文字、凄く難しそうネ」

B i s 「そうね。画数が多い……。ね、それぞれの漢字の意味を教えてください」

提督「分かった。まず織田の『織』だが……」

B i s 「なるほど。大体わかつたわ。名字自体は先祖が住んでた地名から、(多分地名自体も何か縁があるんだろうけど) 名前は意味よりも先祖から代々受け継いできた共通

の文字を重視していたわけね」

提督「まあそんな感じだと思う」

金剛「へえ……名前一つにここまで……なんかもうワタシこれだけで凄く勉強した気分ネ」

提督「はは、流石に名前だけで終わっては霧島たちに示しがつかないぞ？」

金剛「あ、そうデシタ」イソイソ

Bis「それで、その人はどんな人だったのかしら？ 先ずは大まかな概略をお願いできる？」

提督「ああ。まず覚えておくといけないのはこの人物は日本の中で恐らく、歴史や勉強が苦手な人でも大体名前だけは知っているという程、日本で一番有名な歴史上の人物という事だな」

金剛「へ、へえ〜」（そんな人物をワタシったら……）カア

Bis「なるほど。それは重要ね。それで、具体的にどんな人物なの？」

提督「ああそれはな……」

金剛「um……なるほど〜。それは確かに凄いキーパーソンの人ネ」

Bis「いろいろ酷い事もしてるみたいだけど、それを批判するにはその時の時代背

景の勉強が不足してるから今は無理ね。でも取り敢えず非常に非凡な人だったというのは分かったわ」

提督「ああ、そんな感じで良いぞ。歴史と言うのは人によって、見方によって違う。大事なのは人の意見に流されるのではなく、自分で調べて自分の考えをしつかり持つことだからな」

金剛「大佐アリガトウ！ 凄く勉強になったワ！」

Bis「私も、久しぶりにとでも充実した時間を過ごせた気がするわ」

提督「いや、俺もお前たちが俺たちの国の歴史に興味を持ってくれて嬉しい。講師役もやってみるものだな」

金剛「えへへ、そんなア♪」テレ

Bis「わ、私は…… 貴方だから授業を受けたいという気持ちもあつたのよ……」

ポツ

提督「どつちにしても俺も楽しかった。二人とも礼を言う。ありがとうな」ポン

金剛「んん…… 大佐ア♪」スリスリ

Bis「あう…… うん……」ウツトリ

提督「さて、今日はもう遅い。これで終わりに——」

ギユ

提督「ん」

金剛「そうネ。だから今度は違う授業を……受けたいワ」ウル

B i s 「あ……私も……その、最近なかつたから……ダメ？」ジツ

提督「……電気消すぞ」

金剛「大佐アツ」ダキッ

B i s 「好きっ、大好きよっ」

第34話 「二色」 R-15

金剛「あつ、あつ、マリア…………… ああつ」

Bis「んちゅ…………… 金剛、おいし……………」

ちゅうつ

金剛「あああつ、イ…………… ああつ」

提督「マリア……………」グツ

Bis「あつ、たい…………… んんつふあああああ！」

Bis「ん…………… ちゅ。ペろつ」

金剛「アアアアつ！ だ、ダメよマリア、ま、まだ…………… 大佐に…………… んあつ、イ、

イツ…………… あつ！」

Bis「金剛…………… こんご…………… あつ、あつ…………… わた、わたしも…………… ああ、

あああああつ大佐あ!!!」

金剛「はあ…………… はあ…………… モウ、大佐に可愛がつてもうら前にマリアにイカされ

ちやつたワ…………… くす」

Bis「はあ…………… は…………… あ…………… ごめ…………… 金剛」

金剛「ふふ、気にしないデ。それよりワタシも sorry ネ。その…… マリアを汚し…… ちゃつテ」カア

B i s 「ああ…… これ？」

B i s 「ん…… ちゆ。大丈夫、美味しいから」

金剛「あ……」

金剛「……」

B i s 「こ、金剛…… きやつ」

B i s 「金剛？ ど、どうしたの？」

金剛「ワタシをよくしてくれたお礼ネ。マリアのも……」

B i s 「こ、金剛……！ い、いやつ。この格好は、ちよ……はずか……」

金剛「逃げないでマリア…… 今度はワタシが…… ん」

B i s 「ダメ金剛！ 私今イっ…… やあああああ！ あ、ああつ」

金剛「あ…… はあ…… マリアと大佐の…… する、ネ」

提督「…… グイ

金剛「あ…… 大佐？」

提督「金剛…… 次はお前に…… いいか？」

金剛「あ…… 嬉しいネ…… お願イ…… めちやくちやに…… シテ？」

ググッ

金剛「あつ、ん…………… せん…………… ふあ、ソコだへ？」

提督「こちらは気にするな。それよりマリアを可愛がつてやれ」

金剛「んふつ…………… わかつふあ…………… ちゅつ」

Bis「あつ、あつ、こんご…………… も、もう…………… いい…………… やつ、ふああああ」

金剛「ノンノン…………… にげちゃ…………… ふあめ…………… ちゅつ」

Bis「んあつ…………… はあつ！ イつちや…………… うあああ」

金剛「んふ…………… マリアかわ…………… え…………… ？」

グッ…………… ！

金剛「んつふあああ！ あああ、あつ…………… 凄い…………… 大佐…………… コレ…………… あ

あつ、イイ！」

提督「良かった。最初から全力でいって俺も体力が持たないからな。最後はこれ
いかせて…………… もらうっ」

金剛「お…………… あふああああ…………… あっあつ…………… あああっ」

Bis「こ、金剛……………」

提督「…………… ふつ…………… つ、金剛…………… マリアをつ…………… マリアが寂しそうでぞ」

金剛「ア…………… マリア…………… んっ」

B i s 「あああつ、こん……………ごうっ♪」

提督 「…………… 金剛、もうイキそうだ。お前も…………… マリアを……………」

金剛 「んちゅ…………… つぷはあ。わ、わか…………… たネ。はあ、はっああつ、マリア…………… また一緒に……………」

B i s 「うん…………… 金剛…………… いつ一緒に…………… よ…………… あつ、あああ！」

金剛 「…………… たい…………… イクううううう！」

提督 「…………… くっ」

金剛 「久しぶりに一杯しちやったネ♪」

B i s 「すう…………… す…………… ん…………… すき……………」

提督 「久しぶりに全力を出した感じだ。マリアも疲れたんだな。よく寝ている」

金剛 「んふふ。可愛い♪」

ぷにぷに、くにくに

B i s 「んっ……………」ピクッ

提督 「おい、あまり眠ってる人を弄るのはよくないぞ」

金剛 「分ってるワ。でも…………… ほら……………」

提督 「……………」

金剛 「なんか眠ってる子をイジるのって興奮しない？」

提督 「…………… 眠ってても感じるんだな」

金剛 「ふふ…………… これでも起きないなんてよほど疲れてるのネ」

提督 「…………… もうその辺にしておけ」

金剛 「そう…………… ね。 Good night マリア♪」

ちゅっ…………… ペロ

B i s 「ん…………… ふあっ……………」 ピククツ

提督 「おい…………… 何処に……………」

金剛 「ふふ…………… クセになりそうネ」

提督 「全く……………」

金剛 「ね、大佐……………」

提督 「…………… 今日はもうシないぞ」

金剛 「ウン、分ってる。だから最後に…………… ネ？」

提督 「お前にも困ったものだ…………… ちゅ…………… ペろっ」

金剛 「んあっ♪」

提督 「さ、寝るぞ」

金剛 「ん♪」

ギ
ユ
ツ

第35話 「オジサン」

曙「……………司令官何してるの?」

中将「釣り」

霞「一応待機任務中じゃ……………」

中将「そだね。だから雷達が頑張ってる……………」

叢雲「いや、わたしたちは?」

中将「……………大丈夫。無線ならここにあるから」

満潮「そういう問題じゃないでしょ!」

中将「まあまあ。俺達は俺達の仕事をきっちりこなせばいいんだから」

朝潮「だからってあまり気を抜くのは……………」

中将「それでも一応気張ってるんだけどなあ」

曙（見えない）

霞（どこが?）

叢雲（ただオジサンしてるだけじゃない）

満潮（だったら煙草まで吸わなければいいのに）

朝潮「…… また信濃さんに怒られますよ」

中将「おっと、それは怖いな。「戻るか」

曙「最初からそうしなさいよ!!」

中将「……」ソロオ

信濃「お帰りなさい」

中将「あっ」

信濃「何処へ行ってたの?」

中将「…… 信濃さんのあつつい。お茶飲みたいなあ」

信濃「誤魔化してるつもり?」

中将「失敗?」

信濃「…… はあ」

コトツ

信濃「どうぞ」

中将「ありがとう」

信濃「……」

中将「ずず……」

信濃 「…… 私達の待機任務長いわね」

中将 「いいんじゃない？ 暇なのはいいことだよ。平和だしね」

信濃 「あなたはちよつと緩み過ぎだと思っけど？」

中将 「おつと、それはいけないな」 ササツ

信濃 「……」

中将 「どう？」

信濃 「なにが？」

中将 「髪型直したんだけど。男前になったかな」

信濃 「いつも通りよ」

中将 「さいですか」

信濃 「……」

中将 「ちよつとトイレに行ってくるね」

信濃 「煙草は外」

中将 「…… はい」

信濃 「はあ……」

加賀 「…… あの」

信濃 「あら、加賀さん。どうしたの？」

加賀 「いえ」

信濃 「何か？」

加賀 「…… 信濃さんと司令官は仲が良さそうだなと思ひまして」

信濃 「私と司令官が？」

加賀 「はい」

信濃 「そう見えるの？」

加賀 「付き合ってるんですか？」

信濃 「話が飛び過ぎよ。付き合っていないわよ」

加賀 「じゃあ好き？」

信濃 「何がじゃあなのよ。いいえ別に」

加賀 「それは司令官を侮辱してるのですか？」

信濃 「模範的解答を要求します」

加賀 「ごめんなさい。参りました」

信濃 「全く…… あなたは好きなの？」

加賀 「…… 分りません。ただ、信濃さん達を見てるとちよつと嫉妬を感じました」

信濃 「そう」

加賀 「……」

信濃 「あの人はね、誰にでもそうよ。私の事は確かに好いてる様にも見えるけど、それでも自分からは絶対にある一定の範囲以上は踏み込んで来ないのよ」

加賀 「そうなんですか？」

信濃 「ええ、だからご覧の通り今もこんな感じよ」

加賀 「そうですか……。何故でしょう」

信濃 「何が？」

加賀 「司令官がああなのは」

信濃 「オジサンだからじゃない？」

加賀 「えっ？」

信濃 「ふふ、あなたもそんな顔するのね」

加賀 「不覚」

龍田 「司令官さくん、こんなところで煙草ですかあ？」

中将 「いる？」 スツ

龍田 「えっ」

中将 「いない？」

龍田「あつ…… えっと…… 私……」

中将「大丈夫。誰にも言わないから」

龍田「知ってたの？」

中将「隠してたからね」

龍田「…… 悔れない人」

中将「一応本部の司令官だからねえ。はい」

龍田「ありがと……」シユボツ

龍田「ふうく……」

中将「はあ……」

龍田「…… 今日も平和ね」

中将「そうね」

第36話 「引き取り」

??? 「……」

中将「どしたの？」

??? 「？」

中将「掃除？」

??? 「はい」

中将「そつか。手伝おうか？」

??? 「…… 中将殿のお手を煩わせるかけにはいきませんか？」

中将（…… 旧式だな。殆ど封印されてると思つてたけど、こんな所にもいるんだな）

中将「はい、貸して」ヒョイ

??? 「あ」

中将「いいのいいの。暇だから。はい、君そこね」

??? 「了解しました」

中将「君名前は？」

??? 「朝日です」

中将 「そっか」

朝日 「……」 サツサツ

中将 「はい、終わり」

朝日 「ありがとうございます」

中将 「礼はいいって。そいじゃ——あ、大将」

大将 「……」 中将

中将 「どうも、おはようございます」

大将 「ああ、おはよう。で、お前は朝から艦娘をナンパか？」

中将 「いやあ、私もこの歳なんでこんな若い子は無理ですよ」

大将 「そうか。いや、失礼な事を言ったな」

中将 「いえいえ」 クイクイ

中将 「ん？」

朝日 「……」 ジツ

大将 「ほう」

中将 「?」 どしたの?」

朝日 「……」 あ」

大将「中将、お前、娘はどうだ？」

中将「は？」

大将「冗談だ」

中将「……ま、いい奥さんがいたらいいんですけどね」

大将「いないのか？」

中将「ははは。これがなかなか縁がなくて」

大将「艦娘には抵抗はあるか？」

中将「ああいえ、あいつらはどっちかというと部下ですから」

大将「ふむ」

中将「あ、でも可愛いとは思いますがよ？ 別に異性に興味がないわけじゃありませんから」

大将「そうか」

クイクイ

中将「ん？」

朝日「……あの」

中将「うん」

朝日「私……ありがとうございます」

中将「お礼の言葉はさつきもらつたよ」

大将「…… 中将」

中将「はい？」

大将「こいつ、朝日をお前の艦隊で引き取らないか？」

中将「え？」

大将「無論、戦力としてではない。事務方の仕事でもさせるといい」

中将「はあ」

大将「何か不満が？」

中将「いえ。お受けします。暇なんで」

大将「暇？」

中将「あ」

大将「…… くく、面白い男だな。じゃ、任せたぞ」

中将「はっ」

中将「…… 朝日」

朝日「はい」

中将「よろしく」スツ

朝日「……！」ペア

ギョツ

中将（こんなに笑うんだねえ）

信濃「司令」

中将「うん？」

信濃「こちらの方は？」

中将「朝日ちゃん」

信濃「はあ」

中将「仲良くしてね」

朝日「よろしくお願いします」ペコ

信濃「信濃です。よろしくね」

朝日「はい」

信濃「司令」

中将「ああ、うん。旧式の子だよ」

信濃「やっぱり。でもなんで？」

中将 「いやあ、偶然見つけたらなんか大将に面倒を見るように言われちゃってさ」
信濃 「はあ」

中将 「ま、こんなオジサンだったら手を出さないと思つたんじゃない？」

信濃 「は？」

中将 「ごめんなさい。失言でした」ペコ

信濃 「全く…… また娘が増えたわね」

中将 「あ、信濃さんもそう思うの？」

信濃 「寧ろ、そう思つてなかったの？」

中将 「はっはっは。結婚してないのに娘が多いつてもアレだね」

信濃 「そう？ 結構いい父親してると思うけど？」

中将 「やめてよ。俺は信濃さん一筋よ？」

信濃 「窓を眺めながら言うセリフじゃないでしょ……」

中将 「いい天気だなあ…… 眠い」

信濃 「え？」

中将 「さーて、仕事仕事！」

信濃 「…… はあ」

第37話 「お願い」

大鯨「お父さん！」

提督「ん」

大鯨「大鯨はいつになったら改造を受けれるんですか！ もうレベル50ですよ！
練度的には十分だと思います！」

提督「…… それなんだがな」

大鯨「？」

提督「大鯨、お前が改造を受けるには勲章が必要らしい」

大鯨「勲章？」

提督「そうだ。お前の改造は利根やマリアみたいな技術が少々高度らしくてな、その改造の許可をもらうにはある一定のノルマ的な評価が必要なんだ」

大鯨「それが勲章？」

提督「そう。そしてとても心苦しい事だが、その勲章の数が今のところ改造の許可を
もらえるレベルに達していない」

大鯨「そんな……」

提督「だからな、もう少し辛抱する事に……………」

大鯨「……………やだ」

提督「……………」

大鯨「やだあ！ 大鯨、お父さんとお風呂に入りたいよお！ えええーん」

提督「大鯨……………お前そんなに俺と風呂に入りたいのか？」

大鯨「そうです！」

提督「なぜ？」

大鯨「親子なら当然です！」

提督「そこは最早ツツコむつもりはないが、それでも仲が良いからといって風呂に拘ることは無いだろう？」

大鯨「やつ！ 先輩達と同じようにわたしもお父さんと楽しくお風呂に入りたいんです！」

提督「それはあくまでお前が仲間と一緒に楽しく風呂に入ってるという事だからな？俺が常にあいつらと一緒に風呂に入っているわけじゃないからな？」

大鯨「え？」

翔鶴「言葉の面白いところですね。大鯨ちゃんの言い方だと私達が大佐と一緒にいつも楽しく入っているように聞こえますものね」

提督 「それを今誤解されないように念を押ししている」

翔鶴 「別に私は…… いいんですけどね」 ボソ

提督 「…… 大鯨」

翔鶴 (無視された！ 絶対に聞こえていたと思うのに無視された！) ガーン

大鯨 「なに？」

提督 「プール…… いや、海じゃだめか？ それなら風呂みたいに水に浸かれるぞ」

大鯨 「お・ふ・ろ がいいんです！ お父さんと一緒に泡あわしたい！」

提督 「……」

翔鶴 「大佐」

提督 「なんだ？」

翔鶴 「もういつそのこと諦めて一緒に入ってあげては？」

大鯨 「翔鶴お姉ちゃん！」 パア

翔鶴 「はうっ」 キューン

提督 「何を言い出すんだ。そんな事俺は」

翔鶴 「大佐はロリコンじゃないんでしょう？」 ヒソ

提督 「そうだ」 ヒソ

翔鶴 「なら、雷ちゃんや大鯨ちゃんの裸を見ても興奮しませんよね？」 ヒソ

提督「そういう問題じゃないだろう」ヒソ

翔鶴「大丈夫ですよ。いかがわしい思惑さえなければ、見た目は何とか凄く年が離れた親子にも見えなくもないですし問題な——」

瑞鶴「異議あり！」バン

提督「瑞鶴……」

瑞鶴「あつ、ごめんなさい。失礼します」

提督「いや、いい。それでどうした？」

瑞鶴「偶然、あくまで偶然翔鶴姉の言葉が聞こえたから意見させてもうらうけど、その流れで行くと私だって大佐とお風呂に入っても問題ないじゃない！」

翔鶴「えっ」

提督「……なぜ？」

瑞鶴「わ、わたしだって……ほら見た目結構幼いじゃん？ だから……」カア

提督「体型のことで同じ空母の仲間にくくるなら龍驤や瑞鳳には遠く及ばないと思うんだが」

瑞鶴「そ、それは……ああ……」

く 瑞鳳の部屋

瑞鳳「成敗！」

龍驤「にやにをう！ ならうちは、ぶああくはつ！ や！」

祥鳳「二人とも何をしてるの……？」

千代田「カツコイイ決めセリフゲーム？ だっけ。最後に思い浮かばなかったら負けなんだって」

千歳「終わりあるのそれ……」

瑞鳳「やるわね龍驤！ならわたしは…… あ」

龍驤「…… うん？」

翔鳳「どうしたの？ 二人とも」

龍驤「いや、なんか今めっちゃ失礼な事言われた気がする……」

瑞鳳「え、龍驤も？ そうなの、わたしもなんか今凄く失礼な噂話されてた気がする

の……」

隼鷹「え、なにそれ。エスパー？」

鳳翔「き、気のせいですよ。多分……」

く再び、執務室

翔鶴「と、とにかく。大鯨ちゃんとお風呂に入ってあげたらどうです？ 回りが公認

してるなら後は大佐の倫理さえ大鯨ちゃんのために沿えば……………」

大鯨「おとーさん！」グイグイ

提督「……………」

瑞鶴「お、おと——」

翔鶴「やめなさい」パシ

瑞鶴「へぶっ」

提督「……………ふう」

翔鶴「あ」

瑞鶴「まさか」

大鯨「お父さん……………？」（お、怒らせちゃった……………？）

提督「翔鶴、瑞鶴」

翔鶴「はい」瑞鶴「……………はい」ツーン

提督「……………」スッ

翔鶴「そ、それは喫茶店のデザート食べ放題のチケット……………！」

瑞鶴「嘘っ!? バイキングじゃないあの喫茶店にそんなチケットあるの!?!」

提督「言いたい事は判るな?」

翔鶴「はっ、命にかえても!」

瑞鶴 「絶対に守るわ！」

大鯨 「？」ポカン

提督 「ならない。ほら」

翔鶴 「やったあ♪ 行くわよ瑞鶴！」キラキラ

瑞鶴 「はーい。お・ね・え・ちゃん♪」キラキラ

翔鶴・瑞鶴 「失礼しましたー」

バタン

提督 「……」

大鯨 「え……？」

提督 「大鯨」

大鯨 「え、なに？」

提督 「入るか…… 風呂」

大鯨 「おとーさん！」 パア

第38話 「入浴」 R—15

大鯨 「わあい。おっふる、おっふるー♪」

提督 「……」

大鯨 「やつとお父さんとお風呂に入れました。大鯨嬉しー♪」

提督 「なら、もう出てもいいか」

大鯨 「だめっ。ちゃんと最後までして！」

提督 「そのセリフあまり他で言うなよ。誤解される」（もう誤解されてもおかしくはない状況だけどな）

大鯨 「はーい♪」

提督 「嬉しー♪」

大鯨 「はいっ。だつてずっと入りたかつたんだもん♪」

提督 「そうか……」

大鯨 「なんだか元気ないですね。大鯨とはそんなに……」ウル

提督 「いやそんなことは無い。ちよつと慣れてないだけだ」

大鯨 「そうなんですか？　じゃ、これからはいつでも入れるように慣れて下さいね」

提督「いつでも……どんな時でも入れるように、だな？」

大鯨「え？」

提督「〃いつも〃とは常に一緒に入るという意味じゃ……」

大鯨「そ、そんなに念を押すなんて、やっぱりお父さんは大鯨と……ふえ」ジワ

提督「違うそうじゃない。誤解だ」

大鯨「ホント？」ジツ

提督「ああ」

大鯨「じゃ、ぎゅつとして」

提督「ん……」

ギユツ

裸の大鯨を抱きしめる事によって、提督に彼女の柔らかな感触が全て伝わった。

大鯨「んー……おとうさーん♪」スリスリ

提督「……」

提督（それにしても、全く恥ずかしがってる気配がないな。タオルを使わず一糸纏わないとは）

提督（憤ましやかとはいえ、成長途中の胸は明らかに殆どの駆逐艦よりかはあるし、腰だつてしっかり縊れていて女の体をしている）

提督（なのに、それを一切隠さず晒していても恥ずかしがる様子はない。これは本当に親子で入っている感覚なのかもな。そうと考えれば、俺も少しは気が楽か）

大鯨「お父さん？」キョトン

提督「いや、なんでもない」

大鯨「？ あつ、お父さん、お風呂の中でタオルを巻いたまま入ったらいけないんですよ！」

提督「……悪いが、これだけは外せない。ある意味男としてのプライドのようなものだ」

大鯨「プライド？ 恥ずかしいんですか？」

提督「そうだ」

大鯨「ん……なら、仕方ないですね」ニコ

提督「良い子だな」ポン

大鯨「えへへー♪ それじゃ、早速洗いつこしましよー」

提督（やっぱりか）

提督「なら俺が洗ってやろう」

大鯨「本当ですか？ ありがとうございます♪」

提督「ほら、後ろを向け」

大鯨 「はーい」クルツ

提督 「まず背中だな……………」ワシヤワシヤ

大鯨 「く♪」

提督 「次は肩と腕……………」ゴシゴシ

大鯨 「ふあく……………」んふふ♪」

提督 「……………」よし。これで……………」

大鯨 「……………」はい」スクツ

提督 「なんで立つ？」

大鯨 「え？ だってまだお尻と足がまだですよ？」

提督 「洗って欲しいのか？」

大鯨 「うん♪」

提督 「わかった……………」

むにむに、ワシヤシヤ

大鯨 「んく♪」

提督 「次は脚だ」

ごしごし、わしやわしや

大鯨 「はわあ♪」トローン

提督「よし、これでいいだろう。大鯨前はじぶ……………」

大鯨「はーい」クルツ

提督「…………… 洗うぞ」

もにゆ、ごし、もにゆ、ごし

大鯨「ん……………」

提督「次は腹……………」

す……………ゴシツ、す……………ゴシツ

大鯨「ひやつ、ふふ…………… あふ、あはははつ。くすぐったーい♪」

提督「次は…………… 大鯨？」

大鯨「はい？」

提督「いいのか？ ココ」

大鯨「え？ な、なにか悪いところありました……………？」ビクツ

提督「いや、そうじゃないが……………」

大鯨「本当ですか？ よかつたあ……………」ホツ

提督「……………」（洗ってやらないと駄目みたいだな。仕方ない）

ふにい

大鯨「きやうつ」ピクン

提督「すまん。痛かったか？」

大鯨「あ、ううん。ちよとくすぐったかっただけです」

提督「そうか……」

むにむに、くに……。

大鯨「んっ、んっ……」プルプル

提督「よし、終わったぞ」

大鯨「はふう…… 最後、ちよとくすぐったくて我慢するの大変でしたあ」

提督「よく我慢したな。偉いぞ」ナデナデ

大鯨「えへへっ」

提督「よし、最期は頭だ」

ワシヤワシヤ

大鯨「っ♪　っ♪」

提督（これは本当に気持ちよさそうだな。彼女の時と一緒にだ）

ザパアツ

大鯨「ひやうっ」

提督「よし、終わりだ。先に湯船に入っているぞ」

大鯨「えっ」

提督「ん？ どうした？」

大鯨「わたし、普通のお風呂に入っても大丈夫なんですか？」

提督（しまった）

提督「……」

大鯨「お父さん？」

提督「さ、最近になって普通の風呂にも入れるようになったらしい……」

大鯨「え、そうなんですか!？」

提督「ああ、本当だ。気づいていないようだが、徐々に入渠に使っている溶液の成分を変えて普通のお湯に浸かっても大丈夫なように慣れさせていったんだ」

大鯨「それは、知らなかったです」

提督「すまん。言うのを忘れていた。皆にはもう言ってたんだけどな。お前に言うのは風呂に入るまで忘れていた」

提督（我ながら苦しすぎる言い訳だ）

大鯨「あ、気にしないで下さい。わたし、一緒にお父さんとかうやつてお風呂に入るようになっただけで嬉しいですから♪」ニコ

提督「……そうか」（罪悪感が……）

大鯨「ですよ。あ、じゃあお風呂に入る前に今度は大鯨がお父さんを……」

提督 「背中だけでいいぞ」

大鯨 「え、それでいいんですか？ お尻とか前は……」

提督 「…… 男というのは前は自分で洗いたい生き物なんだ」

大鯨 「そうなんだ。分りました。それじゃ、後ろだけ大鯨が洗いますね」

提督 「頼む」

大鯨 「はいっ。お父さんの背中ひろーい♪」ゴシゴシ

チャプン

提督 「…… 入るのも一緒か」

大鯨 「はいっ♪」

第39話 「ピンチ」

榛名「榛名、改造完了！ リニューアルされて帰って来ました！」

提督「……………」

古鷹「……………」

榛名「帰って…………… え？」

古鷹「はっ。は、榛名さん！ 大佐、大佐！ 榛名さんですよ！ 改造を受けて帰っ

て来ましたよ」ユサユサ

提督「はっ」

榛名「大佐？ 古鷹さん……………？」

提督「ああ、榛名か。うん、改造を受けて来たんだな」

榛名「ええ。そうです！ どうですか？」クルーリ

提督「…………… あ、ああ。いいぞ。いい感じだ」

榛名「…………… へ？」

古鷹（大佐！）

榛名「あの、大佐どうしました？ なんだか様子が……………」

提督「……」

古鷹「大佐！」ヒソ

ギユムツ

提督「！」

榛名「あの一……」

提督「榛名」

ギユツ

提督「すまない。お前の姿にちよつと見惚れていた」

榛名「え……？　そ、そんなあ」カア

古鷹（ああ……　凄い動揺してる。こんなに褒める大佐見た事ないよ……）

提督「榛名、よく戻って来た」ナデ

榛名「大佐あ……」スリスリ

提督「改造した甲斐があつた」ナデナデ

榛名「ああん、大佐……」トローン

提督「ふっ……　お前の前では資材なんて霞む……」

古鷹（大佐あ！）

榛名「そんなあ……　褒めすぎですう」テレテレ

古鷹「……」

榛名「大佐、何だか今日の大佐凄く優しいですね」

提督「ああ、今の俺はお前の為なら何でも……」

古鷹「ちよ、大佐それはだ——」

榛名「古鷹さん」

古鷹「！」ビクッ

榛名「今、凄く良いところなんです。邪魔……しないで下さいね？」ニコオ

古鷹「ひいっ」

榛名「あ、大佐ごめんなさい。今なんて……大佐？」キヨロキヨロ

提督「古鷹大丈夫か？」

古鷹「……え？」ブルブル

提督「怖い思いをさせてしまったな」ギョツ

古鷹「きやつ……あ……え……？」

榛名「!？」

提督「すまないな……」ナデ

古鷹「そ、そんなやめ……いや、そうじゃなく……はう」カアア

榛名「古鷹さん……」プルプル

古鷹「あ……………大佐あ……………た……………はっ！」

榛名「……………」ゴゴゴ

古鷹「!!」

提督「古鷹？」

古鷹「た、大佐はな、離して……………！」ジタバタ

提督「ふるた……………？ つ」グラ

ポヨン

榛名「キャッチです♪ もう、大佐つたら急にいなくなっちゃうんですから」

提督「はる……………」

榛名「大佐……………ん」

チユウ

提督「む……………んぐ……………」

古鷹（人の目の前で何してるのー!?!）

榛名「つふ……………大佐、さっき大佐は榛名の為なら何でもしてくれるって言おうとしませんでした？」

提督「……………俺は」ボー

古鷹（あ、正気に戻って来た）

榛名「じゃあ、ここで榛名と……。」スルツ

古鷹「ちよつ」

榛名「ふふふ……。」

バツ

榛名「むんぐ!!」

叢雲「はい。却下。ダメよダメ。全く、何やつてるのよ」

初春「ふふふ、危なかつたのお大佐。いや、惜しいことしたか、の?」

古鷹「む、叢雲さん、初春さあん!」ウル

榛名「つぷは、え、あ……。」

叢雲「榛名さん、自分を見失つちやダメよ。良い子なのがあなたの取り得でしょ?」

初春「ま、今回は大佐がほぼ原因じゃ。そう厳しくいう事もいらないじゃろ」

叢雲「二人ともこの場は私達が預かるわ。古鷹さん、悪いけどちよつとの間だけ秘書

艦の役割代らせてね」

初春「榛名殿も少しだけ我慢してたもれ。大佐に会うなら彼が落ち着いてから、の?」

古鷹「分りました。お任せします」

榛名「あう……。私つたら……。ご迷惑をお掛けしました。大佐をお願いします」

ペコリ

叢雲 「ええ。任せなさい」

初春 「期待に十二分に応えてみせようぞ」 ブイツ

古鷹 「お願いします。それでは——」

榛名 「失礼しました」

バタン

叢雲 「……」

初春 「さて？」

叢雲 「一体どうしたのよ？」

提督 「これを……」

叢雲 「恒例の資材残量ね。今度も弾薬が3桁なのかしら？ それとも2け……」

初春 「ん？ おお、これは凄い。マル一つか」

叢雲 「大佐これ……」

提督 「ナノ資材は怖いな。手軽に運用できる分、消費する時の配慮が欠けてしまう」

初春 「何に使ったのじゃ？」

提督 「榛名の改造に……」

叢雲 「ああ…… そりや言えないわよね」

提督「榛名を見た時罪悪感でちよつと取り乱してしまった」

初春「ちよつと？」ニヤニヤ

叢雲「初春」

初春「はいはい」コウサーン

叢雲「でも、これは……どうしよう。うーん……」

提督「補給だけでなく、開発や建造にも転用できるとはな。ふつ……調子に乗って
しまった」

ダキツ

初春「よしよし。大佐に悪気はなかったのだから、そんなに思いつめる事はないぞえ」

叢雲「あ、ちよつと」

初春（役得じゃ）ニヒヒ

提督「……すまない」ギユツ

初春「あ……ん……ふふ。よいよい」（愛いのお♪）

叢雲（大佐……こりやそうとう参つてるわね）

叢雲「ま、資料に関しては大淀さんと加賀さんと……」

初春「あと、秋雲と夕雲じゃな。あ奴達もなかなかやりおる」

叢雲「うん。それ以外にも頼りになりそうな子達に相談してみるからそんなに心配し

ないで」

提督「ああ………」

叢雲「それじゃわたしたし………」

叢雲「初春」

初春「んー？」 ナデナデ

叢雲「頼んだわよ、大佐」

初春「うむ。任せておけい」 ブイツ

叢雲「もう………」 クス

第40話 「エアコン」

カチ、カチ…………… キイ…………… バタンツ。

明石「ふう…………… よし、設置完了ー」

わあああああ

北上「え？ マジ？ これでもう暑いからって大井つちにパンツ脱がされる危険がなくなるの？」

川内「わーエアコンだー。涼しい♪」

不知火「……………」

衣笠「あまりもの快適さに不知火が言葉を発する事を忘れて風に当たってる……………」

ハチ「涼しいですねえ♪ 潜水艦なだけに特に感慨深いです」

鈴谷「うーん……………」

あきつ「何を悩んでいるでありますか？」

鈴谷「いや、エアコンついたじゃん？ これで涼しくて快適になるわけだから鈴谷がパンツを脱いでる意味が……………」

あきつ「えっ？」

伊勢「うわあ、これで暑さにだれる度に扶桑たちの所にいつて迷惑を掛けずすむね」
扶桑「…… それ、どういう効果で避暑になっていたのか教えて貰えますか？」

龍驤「これで裸で寝る日々ともおさらばやー♪」

瑞鳳「え、裸だったの!？」

わーわー

提督「明石、それに妖精と手伝ってくれた皆、ご苦労だったな」

明石「いえ、私も久しぶりに工作らしい工作ができて楽しかったですから」

加古「そだねー。偶にはこんな風に汗水垂らせて働くつてのもいいね」

妖精「〜♪」

提督「そう言つて貰えると俺も嬉しい。だが、流石にそれだけで済ませるつもりはな

い。大淀、鳳翔」

鳳翔「はい」

大淀「待っていました」

提督「皆、聞いてくれつ。明石たちの労を労う為にかき氷を用意した。勿論皆の分も

ある。これで一つ納涼といこうつ」

きやあああああ♪

明石「大佐…… ありがとうつ」

青葉「くあああああ！ 冷たいですねえ、キーンときますねえ！」

妖精「くく♪」

提督「慌てて食べるなよ。沢山ある」

提督「明石、どうだ？」

明石「美味しいです。いいですねこういうの♪」

提督「そうか、気に入って貰えたようで何よりだ」

加賀「しゃくしゃく……」ウツトリ

熊野「これは……これはいいものですね♪」

初雪「……美味しい」

陽炎「ちよつとそれあたしのレモン！」

弥生「イチゴで我慢」

Z1「弥生ちゃん……かき氷に夢中になり過ぎだよ……」

隼鷹「夏はやつぱりビールかき氷でしょ！」

飛鷹「先に言っておくけど、それ想像より美味しくないから」

提督「ふむ、皆思い思いにエアコンの設置を喜び、納涼を楽しんでいるな」

霧島「念願のエアコンですからね。無理もありませんよ」

武蔵「我々戦艦組も大変ありがたい。こう暑いと胸が蒸れてな」チラ

比叡「それは、わたし達に対する当てつけですか!? ね? 日向さん」

日向「私に振らないでよ……くっ」

提督「……黒潮、楽しんでるか?」

黒潮「へっ? 勿論や!」

山城(逃げた)

龍田(逃げたわねえ)

——その夜

提督「エアコンの一つで大分変わるものだな」

赤城「そうですね。快適ですよね」

提督「窓を閉めたせいで虫の鳴き声が聞こえ難くなったのは少し寂しいがな」

赤城「ああ、それはあるかもしれませんが」

提督「まあそれも、蒸し暑くて寝難かった頃と比べれば大分マシか」

赤城「そうですね。私結構汗を掻くので胸とか蒸れちゃって……」パタパタ

提督「エアコンが効いているのに、わざわざ暑かった頃を再現するな」

赤城「えへ」

提督「えへ、じゃない。早く整えろ」

赤城「ちえー」

提督「子供ぶつてもダメだ」

赤城「……お堅いですね」

提督「……この快適な空間、暑さで途中で気力が尽きた所為で残った仕事を片づけるにはうってつけだ」

赤城「うう、あまりにも灰色過ぎる使い方です……」

提督「逆に言えば、これからはもつと時間と心の余裕ができるという事だ。今日頑張れば明日への幸せに繋がると考えろ」

赤城「はいはい。頑張りますよー」

提督「ああ、頑張れ。なんとか終わらせたら昼の残りの素麺でも食べよう」

赤城「一航戦参ります！」

提督（現金な奴だ）

第41話 「おいかけっこ」(前篇)

提督「ちよつと出掛けてくる」

夕張「はえ? 今日何か外にでるお仕事とかありましたっけ?」

提督「いや、今日は非番だ」

夕張「制服着てますけど?」

提督「つい忘れて着て来てしまった。代理は長門に頼んである」

夕張「あ、そうですか」

提督「夕張、悪いが上着を掛けておいてくれ」スツ

夕張「あつ……」ポス

提督「俺は私室で着替えてくる」

夕張「あ、はい」

ボタン

夕張「……」ポフ

夕張「すん……ん……くふふ」(何か幸せ)

ガチャ

提督「じゃあ行つて来る」

夕張「あ、はい行つてらっしゃい」（わ、大佐のラフな格好初めて見るかも）

青葉・武蔵・瑞鳳「……」コソコソ

武蔵「おい、大佐のあの格好観たか？」

青葉「見ました。青葉見ちゃいました」

瑞鳳「大佐休みなんでしょ？ 別におかしくなんか……」

武蔵「確かに。格好はそんなに畏まってないし軽いものだった。だが、自分たちの慕う男が一人で外に出るとなると気になるじゃないか」

青葉「です！ 大佐のプライバシーを侵害しない程度の情報の把握は、あの人の身の安全を確保する為にもある程度は必要です」

瑞鳳「もう割と侵害しそうな事しようとしてるように思えるけど……」

武蔵「ならヒヨコちゃんは残るか？」

瑞鳳「ひ、ヒヨ…… ってもしかしてわたしの事!？」

青葉「あ、なんか分ります。小さくてかわ——」

瑞鳳「……」ジトツ

青葉「あはは。ごめんなさい。いーこいーこ」ナデナデ

瑞鳳「もうっ、やめてよ！」プクツ

武蔵「子ども扱いが嫌なら大人らしく振る舞って私達と行動を共にするか？ それならお前の事を立派なニワトリとして認識を改めて扱ってやるぞ？」

瑞鳳「ニワ…… 鳥類から離れてよ!!」

青葉「くく…… ひひ…… ち、チキン…… ぶくく…… つ、ツボに……」

瑞鳳「青葉さん！」

武蔵「まあ冗談だ。大佐が外に出るぞ。さあ忠犬部隊出撃だ！」

青葉「甲斐犬青葉行きまーす」↑最近チワワから甲斐犬にジョブチェンジをした。

武蔵「うむ、正に甲斐犬(飼い犬)の如く活躍に期待しているぞ」

瑞鳳「ちゅ、忠犬部隊って……」

武蔵「何をしているチワワ。行くぞ」

瑞鳳「え、わたし!? 今度は瑞鳳がチワワなの!？」

武蔵「ふっ…… そのきやんきやん喚く愛らしい姿、正にチワワじゃないか。さあこの武蔵について来い！」

瑞鳳「…… 武蔵さんは何犬のつもりなのかしら」

青葉「一応、ハスキーが好きみたいですけど何か名前が気に入らないみたいです、表
だつて言う事はないみたいですよ」

瑞鳳「それつてやっぱり……」

青葉「シベリアンの『シベリア』が気に入らないんでしょうね。ソ連を連想させるか
ら」

瑞鳳「今はロシアなのに」

青葉「武蔵さん、そういうところちよつと融通効きませんからね」

武蔵「何をしている青ワン、瑞ワン。行くぞー！」

青葉「あ、はい」

瑞鶴「ず、瑞ワン…… まあヒヨコやニワトリよりマシか…… あ、行く、行くか
ら待つてー！」

第4 2話 「おいかけっこ」(中編)

青葉「大佐発見！ 只今大佐の後方より20mの位置です」

瑞鳳「そんな事言わなくなつて分かるわよ。一緒にいるんだから」

武蔵「まさか車で移動するとはな。レンタカーが間に合つてよかつた」

青葉「軍の所属証見せたらあつさり貸してくれましたね。良かったあ」

瑞鳳「いくら私達の事信用しているからつて所属証だけで貸すのもどうかと思うけどね」

武蔵「ふつ、そこは我ら大日本帝国海軍の威信の賜物……いや、大佐が献身的にこ

この地域を守つてくれているお蔭だな」

青葉「大佐の指揮のお蔭で未だ青葉達は此処の人たちに被害を及ぼしていませんからね。流石大佐です！」

瑞鳳「まああまりべた褒めはしたくないけど、わたし達だけじゃあんなに上手く動けないものね」

武蔵「うむ、やはり主人あつての私達なんだよ。お、大佐の車が止まつた」

青葉「あ、距離取つて下さいね。気付かれてしまいます」

瑞鳳「いったん通り過ぎて……あ、あその端に停まろう！ 幅員が広がってる」

武蔵「よし」

ブロロロロ……キツ。

青葉「ここは……」

武蔵「石段だな……神社か？」

瑞鳳「ここ、一応日本領だけど、日本じゃないよ？」

青葉「大佐はここを上ったのでしょうか」

武蔵「高いな……一体何段、何メートルあるんだ？」

瑞鳳「木が生い茂ってトンネルみたいに石段の上を覆ってるね……涼しいけどな

んか……」

ヒュウ

瑞鳳「ひやつ」ピト

青葉「ひつ」ピト

武蔵「お前達……」

青葉「あ、あはは。ご、ごめんなさい武蔵さん。ちよ、ちよつと手を繋いでもら

えますか？ できれば階段を上がりきるまで」

瑞鳳「ず、瑞鳳も！」

武蔵「仕方ないな。ほら瑞鳳は私の方に乗れ、肩車だ。青葉は抱いて行ってやる」

瑞鳳「えつ、そ、そんな悪いよ。流石に自分で歩ける……」

武蔵「遠慮するな。ほらっ」ヒョイ

瑞鳳「きやつ、ぱ、パンツ見えちや……」

武蔵「こんな所で見えるやつなんていなさいさ。ほら、青葉も」

青葉「え、えつと……抱くつていうのはしがみ付くような抱かれ方ではありません

よね？ も、もしかしてお、お姫さ……」

武蔵「その通りだ。よっ」スツ

青葉「きやあつ」

武蔵「これでよし」

青葉「あ、あう……ちよ、ちよつとこれは恥ずかしいですね」

瑞鳳「二人も抱えて……お、重くない？」

武蔵「私は戦艦だぞ？ しかも大和型だ。速さではお前達に負けるが、事体力に関し

ては言うに及ぶまい？ 勿論膂力もだ」

瑞鳳（ほんと涼しい顔してる……）

青葉（凄いなあ……）

武蔵「ふふ、二人とも得心がいったようだな。さ、上るぞ」

青葉「よ、宜しくお願いします」

瑞鳳「あ、ありがと……」

武蔵「ふつ、先ずは一段つと」

提督「……？」

提督（何か下の方で聞こえたような。気配……？）

提督「……ここを使う人、俺以外にもいるんだな」

提督「……」クル

提督（さて、もうひと踏ん張りだ）

武蔵「……」スツ

武蔵「どうだ瑞鳳何か見えるか？」ヒソ

瑞鳳「うーん……」キョロキョロ

瑞鳳「あ、いたつ。大佐見つけたよ。なんかおつきな木の前でしゃがんでる」

武蔵「木の前でしゃがんでる？ ……見当がつかんな。なにやってるんだ？」

い、青葉。お前何か——」

お

青葉 「にへへ…… 武蔵さんのおっぱいふかふか……」

武蔵 「……」パッ

青葉 「ひやあつ!」

トスツ

武蔵 「起きたか」

青葉 「あ…… え? ああ、あはは。お、おはようございます」

武蔵 「おはよう。よく眠れたうよううで何よりだ。そんなに気持ち良かったか」

青葉 「え、えつとそれは、その……!」アセアセ

武蔵 「冗談だ。それより聞け——」

青葉 「うーん……」ジー

武蔵 「どう見る?」

青葉 「何か…… お祈り?」

瑞鳳 「やっぱりそう見える?」

武蔵 「まあ妥当だよな」

青葉 「あのおつきな木、わざわざ日本で使われているのと同じしめ縄が巻かれますし、多分間違いないかと」

武蔵「鍛錬の一環か？　最後に神木に祈願して無事を祈るとか」

瑞鳳「あ、それなんか大佐っぽい」

青葉「ですねえ。でもなーんかそれにしては大佐の雰囲気か……あ」

武蔵「どうした？」

青葉「し、しまった……見失っちゃいました！　大佐の姿が……」

武蔵「なに？　もつとよく探せ」

瑞鳳「わ、わたしも探すっ」

「その必要はないぞ」

武蔵・青葉・瑞鳳「え？」

提督「お前達、着いて来ていたのか」

第43話 「おいかけっこ」(後編)

武蔵「た、大佐」

青葉「あわわ、見つかってしまいました」

瑞鳳「ふえ……」ジワ

提督「……取り敢えず怒らないから瑞鳳は泣くな」ポン

瑞鳳「ふ……ぐす、ごめんなふあい……」

提督「悪い事をしていと思うていたのか？ 大丈夫だ。俺は気にしてはいない」ナ

デナデ

武蔵「……」

青葉「……」

武蔵「た、大佐？」

青葉「あ、青葉達も実は……」

提督「お前達は反省していいんだぞ？」

武蔵「うっ……」タジッ

青葉「は、反省……いえ、猛省します！」ピシッ

提督「……………ふっ。もういい。それで一体どうしたんだ？　なんで着いてきた？」

青葉「そ、その大佐が私服で一人で何処かに行くのが珍しくて……………」

武蔵「気になって、な……………」

瑞鳳「わ、わた……………ひっく、わたし……………も誘われたときに興味……………ぐす、持つちやつて……………」

提督「なるほど。それで追いかけてきたと」

青葉「はい」　武蔵「そうだ……………です」　瑞鳳「うん……………」

提督「そうか……………まあ、確かに一人で来たかったから誰にも特に目的は言わなかったけどな」

青葉「ご、ごめんなさいです！　お、お邪魔しちゃつて」

武蔵「私も……………少々浅慮だった。申し訳ない」

瑞鳳「う……………ぐすつ……………！　ギユウ」

提督「瑞鳳はもういい。だから落ち着くまでそうしてろ。な？」

瑞鳳「……………」　コク

提督「さてと、まあ一人で来るつもりだったとは言え、別に隠し事のもりでもないしな。知りたいなら教えてやるが」

青葉「あ、はい。その……………凶々しいのは承知してますが、教えて頂けるのな

ら……」

武蔵「……」

提督「武蔵は何となく雰囲気で察していたみたいだな？」

武蔵「神木に祈り……祈願かとも思ったが、なるべく一人で来たいと思つていたという事は……」

提督「そうだ。冥福を祈りに来た」

青葉「冥福……」

瑞鳳「お、お墓参り……？」

提督「まあそんなようなものだ」

武蔵(やはりか)

提督「俺が此処に提督として赴任して間もない頃は、当然だが今より未熟でな。故意ではないとは言え、作戦中に轟沈した艦娘も決して数は多くはないが、少なからずいたんだ」

青葉・武蔵・瑞鳳「……」

提督「幸いにして部下たちはそれでも俺を支えてくれ、そして理解してくれた。だから俺も今この時まで挫折することなくお前たちの最期に正面から向き合うことができ

ているわけだが」

提督「ただ、その中でも一人だけ今でも後悔……というのか、轟沈させてしまった事が自分の所為として許し切れていない奴が一人いてな」

武蔵「では、その一人の為に此処に？」

提督「ん、冥福を祈る事自体は沈んでしまった奴ら全員に捧げているつもりだが、割合的にはまあそうだな。そいつに対するものが多いか」

青葉「その、差支えなければ教えて頂けますか？ その人は……」

瑞鳳「あ、青葉さん……」

提督「いや、いい。さつきも言った通り別に隠しているつもりはなかった。訊かれればお前達にならいつでも話せる心づもりではあつたしな」

武蔵「大佐……」

提督「その一人とはな、千代田の事だ」

青葉「え、千代田さん？ でも彼女は今も居ますよ？ あっ……」

武蔵「二人目、か」

提督「そうだ。今にいる千代田は先代と言つたらいいのか、前にいた千代田の後に来た子だ」

瑞鳳「知らなかった…… いつも姉妹仲良くしてるから……」

提督「いや、実際に仲はいいぞ？ 今の千代田も姉の事を慕っているし、千歳もそれは同じだ。そして今の千代田はこの事も知っている」

青葉「……………」

武蔵「私はともかく、お前達はその事を知らなかったのか」

瑞鳳「わたしが大佐の鎮守府に来たのはそんなに前の事じゃないから……………」

青葉「恥ずかながら重巡の中ではわたしが一番最後に所属したんです。大佐の話ぶりから察するに、前の千代田さんがいたのはもつと前の頃だと思います」

提督「そうだ。青葉がうちに来る前だからお前たちが知らないのは当然だ」

提督「先代の千代田と千歳を一緒に出撃させた時だったな。俺の判断の誤りから千代田が轟沈してしまった」

提督「千歳は『実戦では仕方のない事、覚悟はできていました』なんて気丈にふるまっていたが、その眼は悲しみに濡れていた」

提督「無理もないだろう。あいつらはほぼ二人揃ってうちに来たり、その練度もお互いほぼ一緒の時間の中で成長してきたんだ。二人の間に強い絆があったのは明白だった」

瑞鳳「大佐……………」

提督「だが、それでも俺の事を気に掛けて努めて明るい顔で許してくれたあいつの笑

顔が俺には相当堪えてな。以降はこうやって時間がある時に冥福を祈って自己満足をしている次第だ」

武蔵「その木は？」

提督「昔、偶然見つけてな。あまりにも立派だったから土地の所有者に相談して全て自費で購入した。この石段もしめ縄も全部自前で用意した」

武蔵「なるほどな。ではここはさながら大佐にとつては慰霊の地というわけだな」

青葉「そ、そんな大事な場所、大事な事を青葉達は……」ジワ

瑞鳳「っ……っ……」ギユウツ

提督「よしよし」ナゲナゲ

提督「いや、そこは気にするな。さつきも言った通り別に隠していたつもりはない。それに沈んだ奴らだつて仲間が来てくれれば嬉しい筈だ」

青葉「そんな……でも……」

提督「気にするなと言つたろ？ それにせつかくここまで来たんだ、どうせならこの景色も見て行け」

青葉「景色？ あ……」

武蔵「瑞鳳、瑞鶴見ろ」

瑞鳳「ぐす……ん……？ あ……」

提督「良い眺めだろう？ 俺がここに来たのはこの景色を見る為でもあるんだ」

武蔵「山を登っていた自覚はあったが……こんなにも高い所に来ていたんだな」

瑞鳳「わあ……きれい……」

青葉「あ、わたし達の基地も見えます！ 小つちやいですねえ！」

提督「ああ、そうだな、小さい。だが俺たちはこの手を広げば全て覆う事が出来るこの地を今までずっと守ってきたんだ」

瑞鳳「大佐……」

青葉「そう……ですね。守ってきました」

武蔵「誇らしいな。自惚れでなく、本当にそう思える」

提督「そうだ。誇りだ。未だ過去を引きずっている俺が言ってもあまり格好にならないが、お前達はそのあり方をゆめ忘れるな。常に強く、潔く、正しくいてくれ。これは俺からお前達への、昔から一貫して変わらない心からの願いだ」

武蔵・青葉・瑞鳳「了解！」バツ

提督「……良い部下を持った本当に」

第44話 「音楽」

村雨「大佐これ」

提督「ん？ それがどうかしたか？」

村雨「あ、ううん。どんな曲が入っているのかなあつて」

提督「まさに言葉の如くいろいろだな。ジャンル問わず気に入ったものを入れてい
る」

村雨「へえ、アルバム一枚丸ごと入れたりはないんですか？」

提督「俺は聞きたい曲だけを選んで入れる方だからな。おかげで中間クラスのモデル
ながら、未だに容量は余裕がある」

村雨「ふーん……」

提督「聴いてみるか？」

村雨「えっ、いいんですか？」

提督「興味がありそうに見えたからな。それにもしかしたらお前が気に入る曲もある
かもしれない」

村雨「大佐が許してくれるなら聴いてみたいわ」

提督「ほら。好きに操作していいぞ」

村雨「ありがとー♪ ん……………」カチツ

村雨「大佐、アニソンも聴くのね」

提督「実際に教えて貰ってアニメの曲だと知ったものある。が、好きなものは好きだな」

村雨「他にはクラシックに……………フォークソング？ に、わっ、急に激し……………これロックですか？」

提督「そうだ。ロックは特に色々ジャンルがあるから聞いていて飽きない」

村雨「へえ、レゲエ風っていうのかしらこれ。ん……………よく聴くと激しくてもちゃんとりズムが取れてていい感じね」

提督「ああ。なんでもじっくり聴いてみるものだぞ」

村雨「んー、これは民謡？ 演歌、歌謡曲、何かのサントラかしら……………本当にいろいろですね」

提督「まあな」

村雨「……………あ、これ」

提督「何か良いのがあったか？」

村雨「大佐これ、これなんていうの？」

提督「……アイリッシュパンクだな。歌詞がないタイプの曲だが、そうかこれが入ったか」

村雨「このアーティストいいかも、他にも聴いてみたいわ。でもこの曲良いわねえ」

提督「どういふところが気に入った？」

村雨「最初は普通のアイリッシュ曲だと思っただけけど、徐々に曲調が早くなつてドラムの音がリズムカルになるところかしら。後半のエレキギターもいいわね。こんな曲調初めて♪」

提督「このアーティストは結構なベテランだ。だが、少なくとも俺たちの国では知っている人はあまりいない」

村雨「そうなの？　こんなに良い曲なのに」

提督「本国ではどうかは知らないが、何故かな。だが、これを好きな人は本当に好きな人ばかりみたいだ。おかげでアンチもあまり見かけない」

村雨「へえ」

提督「村雨はどういのを聴くんだ？」

村雨「私ですか？　私は意外にも思うかもしれないませんが、激しめのロックが好きです」

提督「なるほど。確かに普段のお前のイメージからしたら意外だな。俺のやつには気

に入ったのはなかったか？」

村雨「結構もう私が聴いてるのが多かったですから」

提督「やるな。お前は本当にそのジャンルが好きそうだな」

村雨「人によってはうるさく感じるだけかもしれないませんが、私は逆にこういう曲を聴くと元気になるんですよえ」

提督「解る。感情がフィルター無しで歌になった感じが俺は好きだな」

村雨「良い例えですね。私もそんな感じですよ」

——数分後

村雨「じゃ、これとこれと……」

村雨「これが欲しいです」

提督「結構見つかったんだな。良かった」

村雨「いえ、おかげで私のプレイヤーにも新しいジャンルが加わりますよ」

提督「曲は俺のパソコンから直接入れるか？」

村雨「そうですね。その時に今度は私のも聴いてみてください。気に入るのがあればその時に交換しましょう」

提督「了解した。楽しみにしてる」

第45話 「髪型」

暁「夜戦！ 残りの敵にはこの暁がすっかり淑女としての礼儀作法を……」

チユドーン

暁「」

隴「え？」

千歳「よしっ」

天津「ち、千歳さん？」

谷風「い、今のつて雷撃だよね。なんで？ どうして？」アセ

初春「ん？ どうしたのじゃ、お主ら？」

千代田「へ？」

く 鎮守府

天津「ああ、水上機空母の千歳さんだったの」

谷風「いやあすっかり航空の方の千歳さんかと思ってたから、夜戦の時はびっくりしたよー」

千歳「そうですよ。見分けが付くようにちよつと髪伸ばしてただけだな。気付かなかった？」

暁「あ、そういえば。千代田さんも……」

千代田「そ、わたしも水上機の方の千代田よ。髪の毛、伸ばした千歳姉より更に長いからわたしは分かり易いと思うけど」

朧「イメージチェンジしたのかと思つてました」

初春「ははは。皆気づいてなかったと見える」

暁「初春は気付いてたの？」

初春「然り」

朧「よく判りましたねー」

初春「それは、ほれ。年期じゃ。妾の方が年寄なのじゃ」コツン

谷風「こんな可愛くて愛嬌のある年寄いないよー」

千歳「ふふ、初春さんは昔から居るものね。少しくらいの違和感でも直ぐに判るのよね」

千代田「初さんやるう」

初春「あまり褒めないでくりやれ。照れるわ」ポツ

暁「にしても、見た目が一緒だと例え種類が違っても暁はやっぱり見間違えそう」

千歳「伸ばすだけじゃダメかしら」

朧「そうですねー…………。あ、伸ばした髪をポニテールにしたりして、航空の方の千歳さん達とは違う髪型にしてみてもどうでしょう？」

千代田「あ、それわたしも思ってた。いろいろ試したい髪型あったんだよねー」

谷風「お、いいねそれ。ついでにストパーとかもやってみちやう？」

初春「面白い思い付きじやの。千歳殿は単純に髪型を変えるだけで済むとしても、千代田殿は少々くせつ毛じやからの、ストレートにすると大分見た目が変わるかもしれぬの」

谷風「ついでに伊達眼鏡もいつとく？」

「いいねー」

提督「…………。それでそんなに変わったのか」

千歳「はい。どう、でしょう？」

千代田「えへへー、この髪型気に入っちゃったあ♪」

提督「二人揃って…………。千歳は眼鏡も掛けたんだな」

千代田「わたしより明らかに千歳姉の方が見映えする気したからねっ。で、似合っ

るでしょ?」

千歳 「ちよ、ちよっと千代田……」カア

提督 「そうだな。似合っている。まるで空母になった霧島のようだ」

霧島 「た、大佐?」

千歳 「……艦隊の頭脳と言われるように、頑張ります!」キリッ

千代田 「おー、似てる似てる!」

千歳 「あ……わ、私ったら」カア

霧島 「う……似ている上になんか可愛い……。ちよ、ちよっとこれはアイデン

ティテイの危機を感じますね」アセ

提督 「そこまで意識する事ないだろう。お前にはお前の魅力がある。変に意識する事もないさ」

霧島 「あ……はい……♪」

千歳 「ですよ。霧島さんは霧島さんです」

提督 「その通りだ。ふむ、それにしても千代田、お前は」

千代田 「はい?」

提督 「千歳もそうだが、単純な見た目ならお前が一番変わった気がするぞ」

霧島 「確かに。ストレートパーマをかけたのね。凄くイメージ変わったわ」

千代田「そ、そう？　そこまで変わっちゃってる？」

千歳「自信持って大丈夫って言ったでしょ？　私は良い意味で代つてると思うわ。凄く素敵よ」

千代田「そ、そうかな？」テレ

提督「すまん。言葉が足りなかつたか。ああ、俺も良くなつていると思う。前のが劣るという訳ではないが、新鮮味があるという意味も含めて良い感じだ」

霧島「ふふ、ポニテール似合ってるわよ」

千代田「あ、ありがとう♪」

霧島「……んー、私も髪型変えてみようかな……」ボソ

千代田「え、霧島さんも？」

霧島「あ、いや。ちよ、ちよっと……ね」

千歳「ふふ、その時は比叡さんも誘って一緒に変えれると良いと思いますよ」

霧島「え、お姉様を？」

提督「ああ……長さ、か？」

千歳「そうです。霧島さん達姉妹の中で髪が短めなのは霧島さんと比叡さんですからね。どうせ変えるのなら一緒に変えてみては、と思います」

千代田「なるほどー、それいいかも！」

霧島「え、えっと…… そんな急に言われても……」

提督（迷ってるな）

千代田（迷ってるわね）

千歳（もうひと押しすればいけそうね。でも……）

千歳「ふふ、ごめんなさい。無理強いは良くないですね。でも比叡さんに会った時にこの事をお話ししてみても良いと思いますよ」

霧島「ん…… そうね。考えてみるわ。アドバイス有難う千歳さん、千代田さん」

千歳「いいえ」ニコ

千代田「変えたら教えてくださいね！」キラキラ

提督「ふつ、早速期待されてるみたいだな」

霧島「た、大佐」

提督「俺も少し楽しみにしてるぞ」

霧島「あ…… えっと…… は、はい」コク

千歳（あ、陥落？）

千代田（大佐ナイスー！）

提督「？」

第46話 「意外2」

皐月「たーいーさっ」ギョツ

提督「ん、急にどうした」

皐月「えへへー、ただこうしたかっただけー♪」

提督「……………」?

ササツ

電「うーん……………」8点!」

文月「9点です!」

敷波「な、7点……………」ふんっ」

皐月「合計24点かあ。まあまあかなっ」ピヨンツ

提督「……………」なんだ?」

電「一番恋人っぽいセリフを言った人が勝ち! ゲームなのです」

提督「……………」

皐月「僕はまあまあいい線いってたみたいだね。敷波の評価がちよつと厳しい気がし

たけどなあ？」チラ

敷波「べ、別に嫉妬とかじゃないからねっ。こ、公平に評価した結果だもん！」

文月「本音がダダもれですね〜」

電「敷波ちゃんは大佐が大好きなのです♪」

敷波「ち、ちが……！　ちが……　違わないけど、さ」カア

提督「もしかしてお前達もするつもりなのか？」

文月「当然！」

電「なのですよ」

敷波「だ、だめ？」

提督「……一応聞いておこうか」

文月「やったあ。それじゃあ今度はわたしですねえ」

文月「大佐、ちよつとベッドに寝て貰えますか？」

提督「何故？」

文月「このゲームはシチュエーションも評価の対象なのです。だからお願い」

提督「……分かった」ゴロン

文月「あ、布団も被って下さいねー」

提督「ああ」バサッ

文月「ありがとうございます。それじゃ文月いきまーす」

文月「大佐、大佐起きて。もう起きないと遅刻しちゃうよ」ユサユサ
提督「……」

臯月「うーん、これは…… 7点!」

電「ちよつと惜しいのです。7点!」

敷波「つ…… 7点!」

文月「合計21点ですか。残念ですなえ」

提督「…… 因みに臯月との点差が出た理由は?」

臯月「雰囲気は良かったけど、でもこれはどっちかという」と

電「幼馴染なのです」

敷波「惜しかったけどね!」

文月「なるほど。これは迂闊でしたあ」

提督「それで、次は誰だ?」

電「電です! 大佐、今度はまた椅子に座つてもらえますか?」

提督「わかった」ギシッ

電「それではいくのです!」

電 「おはようございます大佐。昨夜はその……………」ポツ

提督 「……………」

臯月 「え？ それで終わり？」

電 「なのですよ」

臯月 「ごめん、よく分からなかった。5点！」

文月 「じゅ、10点……………」カア

敷波 「10……………」カア

臯月 「えっ」

電 「合計25点。トップなのです♪」

臯月 「えっ、えっ？ な、なんで？ どうして二人ともそんなに点数が高いの？」

文月 「そ、それはあ……………」

敷波 「えっと……………」

電 「金剛お姉ちゃんの言う通りにやったら上手くいったのです。ブイツなのです♪」

提督 (あいつか……………)

臯月 「え、なんかよく分からないよ」

文月 「ま、まあ次行きましょう。はい、敷波ちゃんですよ」

敷波 「は、はいっ」ビクッ

提督 「今度はどうしてたらいいんだ？」

敷波 「あ、大丈夫そのまま座ってて」

提督 「分かった」

敷波 「すう……はあ……。行きます！」

敷波 「大佐」

提督 「ん？」

ガシッ

皐月・文月・電 「えっ」

提督 「ん？ おい、敷な——」

チュ

敷波 「だ、大好き……」カアアア

皐月・文月・電 「……」

敷波 「……ど、どう？」

皐月 「はっ……ひゃ、100点！」

文月 「これは100点です」

電 「これは予測外なのです。100点！」

敷波 「……ありがと。や、やった」

提督 「敷波……」

敷波 「大佐、宜しく……な？」

第47話 「守秘」

白露「あ、スズヤンだ。おーい！」

鈴谷「あ、ツユツチ！ やっほー」

白露「スズヤン今帰り？」

鈴谷「そ、丁度遠征から戻ってきたとこ。ツユツチも？」

白露「そうだよ。偶然だねー♪」

鈴谷「だねー♪」

キャツキャツ

初雪「なんかあの二人って並んで違和感ないよね。どっちも駆逐艦にも重巡にも見える……」

最上「二人の雰囲気似てるからじゃない？ どっちもギャルっぽいっていうか」

白雪「なるほど」

最上「あ、ほら何かパンツ見せあってるよ」

初雪「あ、穿くようになったんだ」

白雪「え？」

初雪「鈴谷さん達今までパンツ穿いてなかったんだよ」

白雪「ええ!？」

最上「冷房が効くようになったからね。穿いてないとお腹冷えちゃうし」

白雪「そ、そういう問題？ 冷房がなかったら穿いてないのもどうかと思うけど……」

最上「因みに航巡組は全員穿いてなかったよ。勿論僕も」

白雪「」

初雪「あ、白雪が白くなった」

最上「そんなにシヨックだった？」

初雪は「良い子だからね」

最上「なるほど」

初雪「ほら、パンツもその性格を表す様にしろ……」ペラ

最上「…… 黒いね」

初雪「しかもレースが入った大人びたやつ…… 意外」

最上「意識が戻る前に手を放した方がいいと思うな」

初雪「そだね」パッ

鈴谷「あれつ、モガミンとハユツチじゃーん」

白露「あ、ホントだー。白雪ちゃんもいるねー。とうかなんか白い……？」

初雪（マズイ、今この場で一番厄介なのが）

最上「任せて」ヒソ

最上「白雪は今考え事をしてるんだ。話し掛けちゃダメだよ？」

鈴谷「え？ そうなん？ わー、流石ゆーとーせー。真面目だねー」

白露「白雪ちゃんのはわたし達駆逐艦の中でも委員長こと、綾波ちゃんと双壁をなすお姫様だからねー。そりや真面目だよー」

初雪「双壁？ 磯波が抜けてるよ？」（最上さんナイス）

白露「磯波ちゃんはねー、清楚で守ってあげたい系てういかあ」

鈴谷「弄りたくなっちゃうタイプ？」

白露「そーそー」

初雪（今度から磯波はあまり鈴谷さんには近づかない方がいいかも。あの子本当にメンタル弱いからなあ）

最上（なんとなく初雪が考えている事が分かるな。磯波ちゃんの事は注意してあげよう）

鈴谷「んー？ さっきから二人ともどーしたの？」

白露「ホントだ。なんか心ここに非ず、みたいなの？」

初雪「わたし達もちよつと考え事してたの」

最上「そ。ちよつと初雪とお話ししててさ」

鈴谷「へえ、なになに？ 鈴谷にも教えてー」

白露「あ、わたしも。わたしにも教えてー」

初雪「この二人つて戦いでは凄くしつかりしてるのに、ホント」

最上「プライベートでは屈託がないというか、*“今どきの女の子”*だよ。ま、それが魅力でもあるんだけど」

鈴谷「ちよつと二人とも聞いている？」

白露「内緒話は共有しないとダメなんだよー？」

初雪「あ、うん……ごめん」

最上「いや、別に話すような事じゃないんだけどさあ」

最上「う…… 躲すのが段々面倒になってきた」

「こんなところで何してるんだ？」

鈴谷「あ、大佐」

白露「大佐ー、今帰ったよー」

初雪「なんとというタイミング！」

最上「タイミング良すぎだよ。あーでも一番頼りになる人が来てくれた」

提督「ああ、そうか。二人は遠征に言ってたんだったな。お前達はどうした？」

初雪「別に。ちよつと最上さんと白雪と話してただけ」

最上「そ。ちよつと話が長くなつちやてさあ」

提督「そうか。ん？ 白雪？」

白雪「」

鈴谷「あ、なんかお姫様考え事してるみたいだよ」

白露「でも、いい加減長いよね。周りが見えてないみたい？」

初雪「あ、悪い流れ。これは……」

最上「いや、だからそつとしてあげ——」

鈴谷「こういう時はやつぱしショック療法つしよー。こうやってスカートを……」

スカンツ

鈴谷「きゆう」

提督「いらん事をしないでさつきと補給をして来い。白露もだ」

白露「あはは。はい、了解でありますっ」

鈴谷「ふぁーい、いって…… きまーす」 テテツ

提督「全く…… ん？ なんだ二人とも俺を見て」

初雪「大佐…… わたしは今とても感動してる」 ウル

最上「うん。やっぱり大佐こそ僕たちの提督だよ！」

提督「…… は？」

第48話 「トレーニング2」

長門 「…………… つ…………… ふっ」

陸奥 「精が出るわねえ」

長門 「…………… 陸奥、お前も鍛えに来たか？」

陸奥 「いや、わたしは別にいいわよ」

長門 「…………… そうか？ ……………… ふっ。鍛えるのも…………… ふっ、プロポーションの維持には有効だぞ」

陸奥 「筋トレって苦手なのよねえ」

長門 「ふう……………。同じことを繰り返すだけだ。難しい事じゃないぞ？」ゴトツ

陸奥 「そうだけど。長続きしないって言うか……………」

長門 「汗を流した後のシャワーや水分補給は最高だぞ？ ごく……………ごく……………ぶはっ」

陸奥 「うーん……………」

長門 「そして何より……………」

長門 「スタイルが良い方が大佐だって嬉しい筈だ」

陸奥「う、それは……」

長門「陸奥、少し動くな」

陸奥「え？ 長門？ あ、やつ……」

むにゆ

長門「胸は…… ふむ、相変わらずだな」

陸奥「ちよ、ちよつとお」

むにつ

長門「む、腰は…… ふむ」

陸奥「や、やめてつてば」

もみつ

長門「ん、尻は胸と一緒に。張りがあんな」

陸奥「つ、はあ。もう、いきなりやめてよ」

長門「すまんすまん。乳と尻は良い感じだったぞ。何もなくてもあの状態を維持しているとは大したものだ」

陸奥「別に、何もしてないわけじゃないわ。最低限のエクササイズくらいはしてるもの……」

長門「うむ、それは重畳だな。だがな」

陸奥「う……腰？」

長門「そうだ。僅かにだが余分なに——」

陸奥「そ、それ以上は言わないで！」

長門「ここが油断すると一番付き易いからな」

陸奥「分つてる。分つてるんだけどね」

長門「その部分だけでも落とすトレーニングしてみてはどうだ？」

陸奥「長門は何かしてるの？」

長門「私？ いや、知らん」

陸奥「は？」

長門「私は、私が好む筋トレを毎日やってるだけだ。その結果脂肪がついてないだけなんじゃないか？ 部分的な脂肪を落とすためのトレーニングは私も分らないな」

陸奥「言いだしておいてそんな適当な……」

長門「いいじゃないか。私と同じメニューをずっとこなせばその内こうなるぞ？」
ス
ラッ

陸奥「だから続けるだけの根性がないって言ってるじゃない」

長門「我儘な奴だな。なら大佐との夜の運動をもっと活発にやってみてはどうだ
？ アレは特に腰を使うからな？」ニヤ

陸奥「ちよ、ちよっと」カア

長門「ははは、冗談だ」

陸奥（絶対に冗談じゃなかった）

長門「だが、そうなるとな。やっぱり部分的に鍛えるしかないわけだが」

陸奥「誰か詳しい人いないかしら」

長門「いや、いるぞ。その道のプロが」

陸奥「いるの!?! 最初からその人紹介しなさいよ!」

長門「いや、でもな。その人物は厳しいんだ。私だってちよっと挫けそうになった事があるんだぞ?」

陸奥「長門が? そ、それは怖いわね……」

長門「だがまあ、部分的なものだからな。全メニユーこなすわけじゃないし、案外陸奥でもいけるかもな。紹介してやろうか?」

陸奥「うーん、それじゃ話だけとかダメ? できそうならやる」

長門「いいと思うぞ。やるのは本人なんだし。それじゃ、ちよっと待っている」
バタン

不知火「どうも。ご紹介に預かりました不知火です」

陸奥「…… 長門のトレーナーって不知火だったの」

長門「ああ、そうだ」

不知火「で、早速ですが腰のに——」

陸奥「そ、そうです！」

不知火「…… なるほど。それじゃこれをやってください」カラン

陸奥「これは…… フラフープ？」

不知火「そうです。セツト型のエクササイズもあるのですが、これが一番単純で続けられると思います」

陸奥「な、なるほど。それでどれくらいやればいいのか」

不知火「泣くまでです」

陸奥「え？」

長門（うわ……）

不知火「お腹が熱くなって痛くて泣きそうになるまでやって下さい。それを毎日です」

陸奥「そ、それは……」

不知火「長門さんや不知火のようになりたいんですよね？ ならやって下さい」

陸奥「いや、確かにそうだけども。でも不知火は長門程むね——」

長門「あ」

ピシッ

不知火「はい？」

陸奥「え？ ひっ」

不知火「………… 陸奥さんは大変やる気があるようですね。分りました。では、不知火が直接指導してさしあげます。喜んでください」

陸奥「い、いや。私はまだやるとは——」

不知火「喜べ」

陸奥「や、やったー！」

長門（………… いつも思うが、キレた時の不知火は駆逐艦とは思えない程の威圧感があるな）

不知火「良い返事です。それでは始めましょうか」ゴトツ

陸奥「え、その重りで何をするの…………？」

不知火「長門さん？」

長門「ん？ ああ、それじゃ陸奥後は頑張れよ………… 武運を祈る」

陸奥「え？」

長門「悪い、達者でな」

陸奥「え、ちよつと長門？ え、なに？ 何が始まるの!? 待って、置いてか——」
バタン

陸奥「いやああああああ！」

長門「陸奥…… お前なら乗り切れるさ」

第49話 「見舞い」

提督「……………それでこの有様な訳か」

不知火「…………… すいません。ついやり過ぎてしまいました……………」シユン

陸奥「いい、いいの…………… よ。不知火は実際に私の希望を叶えてくれたし…………… ね」
ゲツソリ

不知火「陸奥さん……………」

陸奥「ただ、次からはもう少し優しく、ね？ わたしも口には気を付ける…………… から」

不知火「了解です。そして本当にごめんなさい」

提督「まあ一時的な過労なようなものだからな。暫くはゆっくり休め」ポン

陸奥「う…………… ごめんなさい」

不知火「…………… っ」

提督「不知火もそんなに自分を責めるな。陸奥の為に良かれと思っただろ？ まあ

陸奥はこんな感じだが、結果的にはこいつの希望を叶えたわけだし」

不知火「で、でも……………」ウル

陸奥（大佐……………）クイクイ

提督（ああ。分った）

ギユツ

不知火「あ……………」

提督「よくやってくれた。これは陸奥の分のお礼だ」

不知火「たいさあ……………ぐす」ギユウ

提督「ん……………」ナデナデ

陸奥「……………」

クイクイ

提督「ん？」

陸奥「……………」ジツ

提督「……………」

ポン、ナデナデ

陸奥「く♪」

提督「二人とも落ち着いたか？」

陸奥「わたしはもう大丈夫よ。ありがとう♪」

不知火「不知火も……………どうもすみませんでした。ありがとうございます」

提督「いや、いい。では何か作ろうか」

陸奥「え？」

提督「腹減ってないか？ 良かったらラーメンでも作って来るぞ」

不知火「大佐のラーメン……いいのですか？」

提督「運動の後は腹が減るからな。お前たちが良ければ」

陸奥「食べたいっ」

不知火「私も、お願いします」

提督「分った。待ってろ」

提督「そら、例によつて台湾風の辛いラーメンだ。辛さは2人とも疲れている様だから少し控えめにしてあるから食べ易いと思う」コトツ

陸奥「ん……美味しそう♪」

不知火「これは……」キラキラ

提督「遠慮なく食べてくれ」

陸奥「ありがとう♪ それじゃ」

不知火「頂きます」

陸奥「んー、美味しい♪」

不知火「……」チュルチュル

提督（無言で食べてる。気に入ってくれたみたいだな）

提督「そうか。それは良かった」

陸奥「あれ、大佐は食べないの？」

提督「この時間だからな。あまり夜食は摂らないんだ」

陸奥「でも食べる事もあるんでしょ？」

提督「まあな」

陸奥「そう。なら、はい」

提督「ん？」

陸奥「あーん」

不知火「……」ピタッ

提督「いや、ラーメンは…… 箸を唾えないといけないだろ……」

陸奥「いいの、気にしないから。ねっ」

提督「……」パク、チュルル

陸奥「ふふ、美味しい？」

提督「ああ」モグモグ

クイクイ

提督「……………」

不知火「私のも食べて…………… 欲しいです」

提督「……………」

不知火「！ 失礼します。はい…………… どうぞ」

提督「…………… 美味しい」モグモグ

不知火「良かった。嬉しいです」

陸奥「…………… ねえ、今度はスープはどう？」

提督「ん？ ああ、ならちよつと丼を」

陸奥「……………」

不知火「！」

提督「……………」

陸奥「ふあい」

提督「それは流石に……………」

「そっだぞ」

陸奥「っ！ ごくんっ。ふはっ、な、長門!？」

長門「全く、様子が気になって来てみれば、元気そうじゃないか」ニヤニヤ

陸奥「や、これは……」

長門「陸奥、お前は疲れているんだから大佐に言われた通り今は休んだ方がいいぞ。ほらラーメンも貰ってやる」

陸奥「それ、絶対長門が食べたいだけでしょ？」

長門「ふふ、まあな。くれるか？」

陸奥「……どうぞ。わたしもう結構食べたし。仕方ないわね」

長門「おお、悪いな……うん、美味しい♪」

提督「長門……」

長門「大佐よ。邪魔してしまっただか？　なら悪かったな」

提督「いや、いい。それよりお前も美味いか。良かった」

長門「ああ。この辛さ中々に癖になる……と、どうした不知火？　頬がちよつと膨らんでいるぞ」

不知火「……！」フルフル

陸奥（多分、入ってるわね）

不知火「ごくっ……ふう、なんでもありません」キリッ

長門「ふふ、そうか？」

不知火「……」プイッ

提督「……それじゃ、そろそろお暇しようか。長門後は頼んだ」

長門「ああ任せてくれ。大佐も不知火も今日は陸奥を見に来てくれてありがとうな」

陸奥「そうね、ありがとう。嬉しかったわ」

提督「いや、早く良くなるといいな。それじゃ」

不知火「お大事に。そして重ね重ねになります、ごめんなさい。失礼します」

バタン

長門「……陸奥……？」ニヤニヤ

陸奥「ちよ、そんな顔で見ないでよっ」カアア

第50話 「休養」

加賀 「新しい作戦指示が本部から来てるみたいですね」

金剛 「イエス。 but……」

長門 「大佐がああ状態ではな……」

提督 「……」

叢雲 「まさか、過労で倒れるなんてね」

川内 「え、え、でもわたしたちが仕事をお手伝いするようになって負担は減ってたんじゃないの？」

足柄 「そうよ。でもそれ以前に溜まっていた疲労は解消されずに残っていたみたいで……」

イク 「無意識のうちに限界を超えてしまったのね」

鈴谷 「大佐……」

鳳翔 「症状はどうなのですか？」

大淀「命の危険があるような状態ではないけど……それでも暫くは安静と療養が必要ね」

大井「そうすれば元気になるのね？ そうなのよね？」

明石「それは間違いありません。病気ではありませんから」

あきつ「ほっ……。良かったであります」グス

日向「問題はいつまでこの状態が続くかね」

青葉「そうですね。回復の見通しがはつきりと判らない以上、このままでは今回の作戦のが遂行自体が……」

大淀「……」

神通「せっかく作戦成功の暁に大淀さんの戦闘参加許可あったのに……。大淀さん、どうか気を落とさないで下さいね」

大淀「大丈夫ですよ。確かに少し残念でもありませんが、でも今は……。この人の回復だけが願いですから」

島風「大佐おき……。てよ。島風、静かに、良い子にしてるから……」

雪風「島風ちゃん……」

龍驤「ま、皆で不安がつてもしやーないわ。ここはさつきも決めた通り皆で順番に交代で看病しよ」

赤城「そうね。じゃあ皆一旦出ましようか。最初は、確か鈴谷ちゃんね。お願いね？」
鈴谷「おっけー、任せて」グッ

ボタン

鈴谷「……」

鈴谷「ばーか。鈴谷があんだけモーション掛けてたのに乗らないからだよ」ツン

提督「……」

鈴谷「さっさとわたしとエッチしてたら元気になつてもよー？」ツンツン

提督「……」

鈴谷「せっかく冷房が入る前までノーパンでいたのにさ……もう、しつぽーってや

っ?」

提督「……」

鈴谷「ばーか、ばーか。早く元気になーれ」ツンツン

提督「……」

鈴谷「……」スッ

ぽよん

鈴谷「鈴谷のおっぱいだよー。気持ちいいでしょー。治ったら直に触らせてあげる

よー」

提督「……………」

鈴谷「……………」パツ

鈴谷「つまんない……………」グス

提督「……………」う」

鈴谷「！」グシグシ

鈴谷「えつと、何……………」？ あ、意識はまだない……………」のか。えつと……………」あ、口

カサカサ

鈴谷「……………」乾いてる。喉渴いてるのかな。ちよつと唇湿らせてつと）チョン

提督「……………」

さわ……………」カサ

鈴谷（うん。やつぱ直ぐに乾いちやう。水だねこれは）

鈴谷（こうやって腕と胸で頭を支えてあげて……………」

鈴谷「よいしょつと、大佐ちよつとごめんね」

提督「……………」ん」

鈴谷「これで……………」大丈夫かな。はい、大佐水だよ」ツウ

提督「……………」こくつ」

鈴谷 「飲んだかな……？ ん、喉が動いた、よしっと」

鈴谷 「はい大佐、元に戻すよー」 スツ

提督 「……」

さわ

鈴谷 (ん、乾きは収まったかな)

鈴谷 「…… 早く良くなってよ、もう…… ばーかつ」

第51話 「奮闘」

潮「うつ、げほつ。ひい……………ぜえ……………はあ……………えつ、ぐえつ……………」

大将「立て！ 立たんか！ もう限界か!？」

潮「う、うう……………。ぐつ……………へぐつ。ぜえ……………はあ……………」プルプル

大将「……………雷」

雷「は、はい！」

大将「潮を医務室に連れて行ってやれ」

潮「！ か、閣下！ つぐ……………ふう……………はあ……………う、潮はまだ……………まだ

やれまつ……………がひゅつ」

大将「心は折れてないようだが、体はもうそれ以上は無理だ。大人しく休んでろ」

潮「だい……………じょう、ぶです！」プルプル

大将「休め。初日からここまで着いてこれただけでも大したものだ」

潮「……………くつ」ジワ

雷「大丈夫よ。大将は本当に褒めてくれてるわ。大人しく命令に従うのも立派な態度

よ」ヒソ

潮「…………… 分かりました。ありがとうございます。失礼します」

大将「ああ、ゆつく休め」

「お前達は、まだやれるな!？」

「イエツサー!」

「よしつ、ならその心意気を今日も証明してみせろ!!」

「イエツサー!!」

潮「……………」トボトボ

雷「気にする事ないわ。大将の訓練が厳しいのは有名だもの。あなた、支部から来た子でしょ? ここまで着いてこれたのは本当に凄いわ」

潮「研修を……………」

雷「ん?」

潮「研修を甘く考えていた自分が情けないです……………」

雷「……………」

潮「提督に…………… 提督にあんなに自信たつぷりに強くなって帰ってくるって約束したのに…………… ぐす」

雷「……………」

潮「わたしは…………… わたしは、自分が情けなくて、それが恥ずかしくて…………… 悔しくて……………」

ポン

潮「あ…………… 雷さん……………」

雷「大丈夫。そこまで言えるようになっていなくても貴女は立派に成長しているわ。他の子だと大体辛くて泣いちゃってその日の内に帰っちゃうんだもの」

潮「雷さん……………」

雷「泣くの我慢してたのなら今はうんと泣きなさい。そしたらスッキリして今より強くなってる筈よ。次の訓練はきつと耐えられるわ」

潮「う、うわああああん」

雷「よしよし。ちよつと寂しくて申し訳ない胸ただけど。わたしの良かったら好きなだけ泣いてね」

潮「うえええええん！」

大将「潮の様子はどうか？」

雷「熟睡してます」

大将「そうか」

雷「…………… よく…………… 耐えれたと思います」

大将「そうだな。今まで見てきた研修生の潮の中では一番かもしれない」

雷「…………… あの、できれば……………」

大将「見舞いに行く。着いて来るか？」

雷「はい！」

く 医務室

大将「潮、大丈夫か？」

潮「っ！ か、閣下！」

大将「起きるな。今はいい」スツ

潮「あ…………… う……………」

大将「よく耐えたな」

潮「…………… つ。う…………… うう……………」ジワ

大将「それは悔し涙か？」

潮「はん…………… えぐっ…………… 半分、は」

大将「ほう。では残りの半分は？」

潮「か、閣下に…………… 褒められたのが…………… ぐす…………… うれひくてえ……………」

大将「そうか。頑張ったな」ポン

潮「あ…………… ふえ…………… あ、ありがとうございます…………… ざいます…………… ！」

雷「……………」ニコニコ

大将「ああ。後で何か美味しい物でも届けさせる。それを食べて入渠して、今日は
ゆつくり休め」

潮「はい！ ありがとうございます」

大将「ああ…………… 次の訓練にも参加するか？」

潮「大将さえよろしければ、是非！ 次は耐えてみせます！」

大将「そうか。期待しているぞ」

潮「はいっ。ありがとうございます！ がんば…………… 全力で応えてみせます！」

大将「良い返事だ。それじゃな」

雷「…………… ♪」ガッツポーズ

潮「…………… ！」コクッ

く廊下

雷「♪」

大将「嬉しそうだな」

雷「はい。支部の子にしろ研修生にしろ、自分の仲間が遅くなる様子は見てて頼もしくて心が温かくなりますから」

大将「そうだな」

雷「大将」

大将「ん？」

雷「雷はもつと激しくしていいんですよ？」

大将「……そのセリフ、他の奴の前では言うなよ。誤解されかねん」

雷「？」クビカシゲ

第5 2話 「駆け引き」

中将 「ラーメン」

信濃 「はい？」

中将 「ラーメン食べたい」

信濃 「はあ」

中将 「信濃さん食べたくない？」

信濃 「別に」

中将 「……」ジトツ

信濃 「そんな目で見たって食べないわよ」

中将 「天龍は？」

天龍 「食べたい!!」

中将 「そ」ポス

天龍 「ん？ なんだこの金？」

中将 「注文してきて。それでついでにこっちに運んできて」

天龍 「普通に出前頼めよ！」

中将「そこ出前やってないのよ。でも俺の名前出してくれたら受け取りは特別に対応してくれるからさ」

天龍「で、食った後も皿返しに行かねーといけないんだろ？ メンド——」
ポス

天龍「ん？」

中将「これでお菓子買っていていいからさ。お願い」

天龍「！ 任せとけ！」
ペア

中将「龍田、龍田」
ヒソ

龍田「はあい？」

中将「天龍が無駄遣いしないように監視宜しく。煙草でも酒でも安いのだつたらお前が好きなもの買っていていいからさ」
ヒソ

龍田「まあ。やったあ♪」

天龍「おい！ なにココソコソやってやがる！ ていうか龍田は隠す気ねーだろ！」

龍田「うふふ、なんのことかしかしらあ？ それじゃ中将、行つてきますねえ」
フリ

中将「うん。宜しく」

エ、オマエモイクノ？ ナニカモンクデモ？
べ、ベツニ

信濃 「…… 相変わらず人を使うのが上手ね」

中将 「信濃さんは上手く扱えないけどね」

信濃 「そうね」

中将 「えっ、それだけ？」

信濃 「仕事しなさい」

中将 「…… はい」

信濃 「……」

中将 「…… 追加で何か注文する？」

信濃 「別に欲しくないわよ」

中将 「…… さいですか」

クイクイ

中将 「おお、朝日どした？」

朝日 「お仕事、終わりました」

中将 「え、もう？」

朝日 「……」コク

信濃 「どこかの司令官とはエライ違いねえ」

中将「……」

朝日「まだお仕事あります？」

中将「……」

信濃「自分の分をやらせないでよ？」

中将「ギク」

信濃「やらせるつもりだったの……」

中将「朝日」

朝日「はい」

中将「信濃さん手伝ってあげて」

朝日「分かりました」コク

信濃「あら、いいのかしら？」ニツ

中将「殆ど信濃さんが誘導したようなもんじゃん……」ボソ

信濃「何か？」

中将「いえいえ。仕事楽しいなー」

朝日「楽しーなー」

信濃「ダメよ朝日さん。あんなオジサンの真似したらあなたもダメになるわよ」

朝日「ダメ？」

中将「ダメ……」

信濃「ふふ、何でもないわ。取り敢えずこれお願いできる？」

朝日「了解しました」

「その頃、とあるスーパー

天龍「おい！　なんでタケ○コの里がダメでキ○コの山はオツケーなんだよ!?　俺はタケ○コが食べたいんだ！」

龍田「ダメよお？　あんなサクサクしたのよりキ○コのカリッツとした食感の方が良いに決まってるじゃなあい」

天龍「だからって俺が欲しいお菓子にまで口を出す事ないだろ！」

龍田「ごめんね天龍ちゃん。これだけは譲れないの」キリツ

天龍「意味わからねーよ!!　タケ○コ買わせる！」

龍田「その後ろ手に持つてるポテ○やポ○キーを戻したらね？」

天龍「っ！」ギク

龍田「オヤツは350円までよお？」ニコ

天龍「なんだよその中途半端な金額は？　ていうか龍田、お前こそその手に持つてる酒やめろよ！　そっちの方が高いだろ！」

龍田「私はこれだけでもおん」チャプン

天龍「なっ、ズルイぞ！」

龍田「ハイハイ。取り敢えず早く決めましょう？　中將がお腹空かせてるわよ」

く再び、本部

中將「遅いな」グー

朝日「遅いです？」

信濃「取り敢えず司令は手を動かさない」

第53話 「早起き」 R-15

ザアアアアア……………。

??? 「!」ピクリ

バサツ、タタ……………

??? 「わああ……………♪」

スゴイナー フツテルナー ワア、キヤツキヤ

??? 「んむう…………… 武蔵い?」

武蔵 「ああ、起こしてしまったか。悪いな」

彼女 「素っ裸で何やってるのよ」

武蔵 「台風だ台風、凄いなあ外は嵐だ♪」

彼女 「子供か…………… いいから下着くらい着なさいよ」

武蔵 「お前も裸じゃないか」プルン

彼女 「ドヤ顔で何言ってるのよ」

武蔵 「胸を隠すなんて乙女な事するじゃないか」グイッ

彼女「あ、ちよつと……」

バツ

武蔵「私の前では隠さないで欲しい……」

彼女「……もう」

武蔵「可愛い胸だな。私ほど大きくはないが、それでも十分な大きさだしそれに綺麗だ」ツン

彼女「んっ……」ピクツ

武蔵「ココは小さくて可愛らしいな」クニクニ

彼女「ちよつと……ん……こんな夜明け……あつ、前から……また」ピクツ

武蔵「下の方はどうかな？ 上だけ可愛がつてる所為で寂しくて泣いて、ない

か……」スツ

彼女「だめよ」ガシツ

武蔵「ええっ」ガン

彼女「今日は朝早くからやる事があるからね」

武蔵「ちよ、ちよつとだけっ……」

彼女「だ・め。メリハリが大事なの」

武蔵 「そんなあ」

彼女 「それに、ほら」 スツ

武蔵 「え？」

彼女 「陽炎、どうしたの？」

武蔵 「」

陽炎 「あ、あの……… わ、わたし。司令の声の様子がおかしかったからその………」

武蔵 「あ……… う………」 パクパク

彼女 「陽炎」

陽炎 「は、はいっ」 ビクツ

彼女 「おいで」

武蔵・陽炎 「え？」

彼女 「お・い・で」

陽炎 「えつと、わたし………」

彼女 「大丈夫だから、ね？」 ニコツ

陽炎 「あ……… はい………」 フラフラ

ギユツ

陽炎 「きやつ」 ムニユ

武蔵「ああ……」

彼女「裸でごめんね。気持ち悪い？」

陽炎「／＼／＼」フルフル

彼女「そう。いい子ね。ね、私が言いたい事判るかしら？」

陽炎「ぜ、絶対に誰にもいいまふえん……」ポオ

彼女「よく出来ました」ナデ

陽炎「しれええ……」

彼女「秘密を守ってくれるならいいわよ。ほら、もつとおいで」

ギユウ

彼女「ふあああ…… しれええ……」

武蔵「……ぐす」ギユツ

彼女（我慢しなさい）チラ

武蔵「ふにやあああ!？」ガーン

——数分後

武蔵「……ぐす……すん」↑イジケて二度寝

陽炎「すう……すう……すき……」↑夢心地

彼女「……………朝から……………はあ……………」

阿賀野「司令ー？」

彼女「阿賀野……………」

阿賀野「コーヒー飲む？」ニッ

彼女「……………ありがとう」クス

第54話 「日常」

T督 「叢雲ーただいまー♪」

叢雲 「おかえり。ダーリン♪ 演習の指揮お疲れ様っ」

チユ

T督 「えへへ」

叢雲 「うふふ」

イチャイチャ

隼鷹 「……………」 イライラ

吹雪 「……………」 ブスッ

妙高 「……………」 ヒクヒク

山城 「……………」 あのー」

T督 「あ、ちよつとごめんね叢雲。山城どうかした？」

山城 「あ、お邪魔してごめんなさい」

T督 「ああ別にいい——」

叢雲 「別にいいのよ。手短かに、ね？」
ピキッ

山城 「ど、努力します」 ヒクヒク

T督 「あ…… うん。それで、えっと…… どうかした？」

山城 「いえ、大したことじゃないんですけど…… ね？」

T督 「うん」

山城 「私達もその…… 演習頑張りましたよね？」

T督 「うん。そうだね。君達のお蔭で勝てたよ」

山城 「君達…… まあいいです。勝てたのは提督の指揮のお蔭でもありますし。あの、それでですね」

T督 「うんうん」

山城 「私達もその…… ご褒美が欲しいなあって思うんです」

T督 「なるほど。うん、そうだね。構わないよ。僕にできる事ならなん——」

叢雲 「ダメ。それ以上は言っちゃダメ」

T督 「む、叢雲？」

山城 「っ、叢雲……」

ピリピリ

叢雲「……………」

T督「え？ え？」（なに、この空気？）

叢雲「山城さん達は頑張ったのは本当だと思うわ。でも、その見返りに求めるご褒美って何かしら？ 先に内容を伺いたいわ」

T督「ああ、なるほど」ポン

山城「……………」別に大したことじゃないのよ？ ちよつとね、私達とケッコ——」

叢雲「ダメ！」

T督「え？」（なんて言おうとしたの？）

山城「叢雲……………」あなたと提督が愛し合っているのは理解してるわ。でもね、もう私達、貴女が提督を独り占めしている事に対して結構キてるのよ」

T督「ひ、独り占めってそんな……………」ま、まあ愛しているのは本当だけど……………」

叢雲「そういう事。申し訳ないけど、ケッココンした相手にのみ愛を捧げるといのは提督の方針なの。山城さん達は気の毒だと思っうけどここは……………」

T督「ああ、なるほど。独り占めってそういう……………」う」アセ

叢雲「あ、提督は気にしなくていいのよ。これは女同士の問題だから」

ト督「叢雲でも……」

叢雲「大丈夫。私に任せて」

ト督「…… いや、やっぱりダメだ。叢雲、ここは僕に話をさせてくれ」

叢雲「……」

ト督「それと、今更だけどどんな結果になってもできればそれを受け入れて欲しい。大丈夫、僕の一番は常に君だから」

叢雲「提督…… 仕方ないわね。でも、約束——」

チユ

叢雲「ん……」

ト督「うん。約束だ」

叢雲「うん…… なら、いいわ」

ト督「ありがとう」ニコ

ト督「待たせたね。要求を聞こうか。いや、もうこの際だから当てよう。ケツコンの事かい？」

山城「そうです。私達、提督とケツコンしたくて今まで頑張ってきました。その結果既に艦隊の八割以上は既に成長限界に達しています」

T 督 「うん、そうだね。お蔭で僕の艦隊は数ある鎮守府の中でも中の上に入るくらいには強い事で有名だ」

叢雲（中の上って…… ふふっ、自分で言っちゃうからカッコウ付かないのよね）

T 督 「山城、君はその全員と僕とケツコンして欲しいと言うのかい？」

山城 「そうです。別に叢雲のように一途な愛を貰えなくてもいいの。ただ、今以上の絆が、提督とやつとここまで来たっていう実感が欲しいの」

T 督 「ふむ……。山城、僕はケツコンは愛の証だと思っている。だからこそ今この時までその関係は叢雲とのみとしてきたんだ。それは分かるね？」

山城 「ええ」

T 督 「僕は皆が嫌いなわけじゃない。寧ろ逆に大好きだ。でもね、それは愛情とはやっぱり違う」

山城 「っ……」ジワ

隼鷹 「提督っ。もう少し柔らかく言ってくれたって……！」

T 督 「隼鷹、まだ話は終わってないよ？」

隼鷹 「でも、こんな話あたしは聞いてらんないよ！」

吹雪 「そうです！ これ以上はやめてください！」

妙高 「結論は見えています。もう……いいでしょう」

T督 「いや、ダメだ。さっきも言った通りまだ話は終わってないからね。山城？」

山城 「…… いや！ 聞きたくない！」 ビクツ

T督 「聞くんだ」ズイ

山城 「きやつ」（ち、近い……）カア

ギユツ

T督 「山城、確かに君たちに叢雲ほどの愛情は捧げられない。これは不変だ」

山城 「…… うん」

T督 「でもね。僕は君たちの態度と想いを確認して今思ったんだ。これほど自分を慕ってくれてる子の想いに報いてやらないわけもいかないって」

山城 「提督それって……」

T督 「叢雲……」クルツ

叢雲 「…… なに？」

T督 「僕は山城たちとケツコンをしようと思う」

山城 「提督！」 パア

隼鷹 「嘘!?! 本当!?! じよ、冗談じゃないよね!?!」

吹雪 「…… つ」 ブワア

妙高 「てい…… とく……」 ジワ

叢雲「そう……貴方がそう言うのなら仕方ないわね。でも……」

T督「大丈夫！ 確かに結婚はするけど、それは山城がさつき言っていた通り今より強い絆を結んでより良い関係を構築する為だから！」

全員「え？」

T督「山城……隼鷹、吹雪、妙高……。君たちの気持ちは確かに僕は理解したよ。ケツコンしよう……。そして今よりもっと仲の良い最高の『友達』になろう！」ドーン

全員「……」

叢雲「……」

カチャ

T督「あれ？ どうしたの叢雲？ なんで鍵翔けるの？」キョトン

叢雲「……あなた……、山城さんごめんなさい。今日は何も言うつもりはないわ。好きにして」

山城「……言われなくても……」ゴゴゴゴ

T督「え。ど、どうしたの山城なんか雰囲気……」

隼鷹「提督……あたしや確かにアンタは鈍いとは思ってたけど、ちよつとこれ

は……ねえ？」

吹雪「ふふふ……」

妙高「ねえ？」ニコオ

T督「ちよつ。ど、どうしたの皆!? な、なんか凄くこわ——」

山城・隼鷹・吹雪・妙高「やつかましいいいい!!!」

T督「?!?!?」ちよ、ちよ、皆ま……ギャ——!!!」

!?!?!

第55話 「問題」

丁督「だーっしやああ!!!」

大井「荒れてるわねえ」

金剛「あれガ？ キツドみたいで可愛いケド？」

長門「仕方ないさ。なんとたつて今回の作戦は私たちにとっては致命的だからな」

翔鶴「艦隊を編成する数が足りませんからねえ……」

加賀「少数精鋭がここに来て裏目に出してしまいましたね」

日向「まあ私たちは元々そんなに作戦による出撃はしてない方なだけだね。新しい

作戦、割と興味があったみたいね」

熊野「て、提督落ち着いて下さいまし！ ほら、熊野が慰めて……」スルツ

巻雲「え？ 脱ぐんですか？ というかここでやるの？」

羽黒「わ、私は嫌じゃないけど…… 明るいところでやるのは……」

丁督「だーっしやああ!!!」ドン

全員「！」ビクッ

丁督「…… すまん。ちよつと熱くなつちまつた。青葉、茶っ！」

青葉「生憎切らしてます。青葉の胸で落ち着いて頂けますか？」ムニムニ

丁督「ん…… いや、悪いがそういう気にはならないんだ。だから全員脱ぐなよ？半裸もダメだぞ？」

ハーイ

丁督「はあ〜」

長門「それで、どうするんだ？ 作戦」

丁督「無理やり遂行しようとすれば出来ないこともない気はするんだけどなあ」

日向「全艦隊で出撃する気？ それはリスクが大きいのと思うけど」

大井「私達は別にいいけど、提督が危ない目にあるのは嫌よ？」

丁督「お前ら…… いい女だな。ほれ」ナデナデ

大井「きやつ♪」

日向「ん…… ♪」

長門「提督……」ススッ

金剛「テートクう……」ススッ

丁督「あ、しまった。つい。ナシナシ。だから今はそういうのはしない！」
ちえー

丁督「拗ねるな拗ねるな。今日はなんもやる気起きないからいくらでも相手してやるから」

キヤー♪

丁督「だが、その前にやっぱり準備運動がしたい。体を動かしたい！性的運動以外で！」

翔鶴「南方の海域でもちよつと荒してきますか？ 適当にいろいろ沈めますか？」

電「電、やっちゃうのです！」

丁督「や、それはしない。前もやったし」

加賀「では？」

丁督「んー……」

レ級「僕たちと戦う？」ヒョコ

丁督「なんでえ、おめえ藪から棒に」

全員「!？」

レ級「あれ？全然驚かないんだね？」

丁督「俺以外は驚いてるだろ」

大淀「警報も反応してない…… 一体どうやって」ゾッ

レ級「一人で来たからじゃない？ ススイツって一気に抜けてきたから」

丁督「…… やっぱお前が一番今のところ危険だわ。ま、それで何しに来た？」

レ級「戦わないの？」

丁督「お前にその気がないからな」

レ級「分かっているじゃーん」ニツ

丁督「うるせつ。敵と慣れ合うつもりはねーよ。で？」

レ級「なんか最近海軍が新しい作戦実行したみたいじゃん？ それで僕らの所も」

丁督「ははっ、負けて縄張り追い出されたか？」

レ級「ううん。全部蹴散らしたよ？」

全員「！」

丁督「…… ほう？」ゾワ

長門（あ、提督の奴マジ切れ寸前だ）

レ級「ま、それはいいんだけどね。一働きして帰る途中に此処の前を通たからさ。

ちよつと寄ってみようかなって思ったの。前にも一度戦ってるし、状況はアレだったけ

ど一応僕達顔見知りじゃん？」シレツ

丁督「…… へえ、本当に暇潰しで来たんだな」

レ級「まあね。今まで僕らと戦って負けてないのは此処と本部くらいだもん。直ぐに

勝負がつかない相手ならそんなにを決着を焦ることもないでしょ？」
ピキッ

丁督「…………… 舐めてるのか？」

艦娘達「！」ゾクツ

レ級「え？ 全然！ 寧ろ君達には敬意を持つてるよ！ 強いもん！」

丁督「……………」

レ級「？」

丁督「ま、茶でも飲んでけ。青葉、茶…………… は切らしてるんだっけか。コーヒーでいいか？」

レ級「くれるの？」

丁督「せっかく来たんだ。飲んでけ。青葉用意してくれ」

青葉「は、はい」パタパタ

レ級「意外。君の事だから怒るのかと思ったのに」

丁督「そんなに素直に賞賛されたら、軍人として冥利に尽きるってもんだろ。それも強敵からなら尚更だ」

レ級「ぷくくつ、君変わってるなあ」

丁督「うるせつ。ほら、煎餅食うか？」

レ級「えー？ コーヒーに煎餅？」

丁督「文句言うならやらん」

レ級「嘘嘘。ちよーだい」

丁督「……変な奴」

レ級「それはお互い様じゃない？」

丁督「ははっ、ちげーねえ」

大淀（奇妙な光景ねえ……）

第56話 「経歴」

大本営海軍本部第三司令部司令官の中將は、他の司令部を務める司令官とは違って唯一人最初から軍人としてではなく、公安の刑事としての実績が認められて海軍に提督として起用された異色の経歴の持ち主。

本人は当初軍人へと転職に難色を示したが、その起用自体がお上からの勅令だったので公務員だった彼は本気で逆らう気にはなれなかった。

これは海軍にとつては幸運だった。

もう一つ転職を決意した理由としては元居た職場との確執だった。

勤務姿勢に一部難ありとされつつもその仕事ぶりと能力には一定以上の評価があった彼は、保有するモラルもまた一定以上のものがあつた。

やる気がない風を装いつつも、職場の腐敗を不快に思っていた彼は徐々にではあるが、その腐敗を明るみに出し追い詰めていった。

それが上層部との確執を決定的にし、ほぼ解雇同然の閑職への異動の一因となつた。海軍からの誘いがあつたのは正にその職場に移されんとする直前だったのだ。

そんな事情もあつて完全に本人の意思によるものとは言えないものの、軍人へと転職

した彼は、その持ち前の「一定以上の能力」で着実に実績を積んでいった。

そして、その実績に対する評価はいつのまにか本部への司令官を任される程になっていった。

しかし、ここで彼にある悲劇が起こる。

それは、信濃事変と言われるとある事件だ。

晴れて本部の司令官となった彼はあろう事か、自分の専属艦として配属された秘蔵艦の信濃に対して冗談でお茶汲みに任命してしまったのだ。

当然信濃の逆鱗に触れた中将は、絶対零度の彼女の笑顔の下、「凄惨な仕打ち」を受ける事となり、それが以降の（悪い意味で）上司と部下の関係とは思えぬ関係を構成する決定打となつてしまった。

そして現在に至る。

彼女「知りませんでした。中将殿にそんな過去が……」

老体「なあ？ 面白いだろう？ 儂もあいつを見た時妙な奴だとは思っていたが……ぶつくくく、あはははは！ 妙ではなく面白い奴だったわけだ！」

大将「おい、あんまり大口で笑うな。カスがこつちに飛ぶ」

中将「いやー照れますねー」

元帥「中将、言われっぱなしでいいのかね？　ここは一つガツンと反撃でもしないか？」

中将「いやあ、私にはそんな反論できる取り得なんて」

老体「おいつ、中年とは言え、儂らより一回り以上も若い癖に何を言うか！　ほれつ、この老いぼれの心に響く一喝でも言ってみろ！」

中将「いやあ、そんなのありませんって……」パクパク

老体「ああ、何を情けない事を！　いいからさつきと何か……　て、おい。お前何を食ってる？　それ、儂のツクネじゃないか？」

中将「え？」パクパク

老体「ああつ、やつぱり儂の……　！　て、ああつ!?　言ってる傍から完食だと!?」
ゴクン

中将「いや、名誉中将殿ごちそう様です」アリガタヤー

老体「ふぎけるなあああ!!」

大将「うるさいっ！　カスが飛ぶと言ってるだろうが!!」

元帥「お、おい。二人とも落ち着け！」

彼女「あ、あははは」(なんなのこの状況……)

——数刻後、第三指令室

中将 「ただいまー」

信濃 「おかえりなさい」

中将 「はいお土産」

信濃 「そこに置いておいて。後で頂くわ」

中将 「まだ仕事やってたの？ 偉いなー手伝おうか？」

信濃 「飲み会に行くからって一日分の仕事を無理して片付けた人が何言ってるのよ。

あなたこそもう休んだ方がいいわ」

中将 「そ？」

信濃 「ええ、ご遠慮なく」

中将 「…… よっこらせつと」ギシッ

信濃 「ちよつと……」

中将 「まあまあ」

信濃 「……」

中将 「さつさと終わらせて食べよう」

信濃 「そうね」

中将 「うん」

信濃「ね」

中将「ん？」

信濃「ありがとうございます」

中将「どういたしまして」ニッ

第57話 「決意」

レ級「ケツコンカツコカリ？」

ル級「そう！ 私聞いちやったの！」

ヲ級「なにそれ？」

早速興味を持ったヲ級が質問する。

夕級「提督と結婚できるっていう例のアレ？」

ル級「あ、夕級知ってるの？ そうだよ。それ！」

レ級「提督と結婚？」

提督という言葉聞いてレ級も興味深そうに聞いてきた。

ヲ級「それってどういう事？」

ル級「え？ それは…… えつとお……」

夕級「あなた達結婚の意味知らないの……」

自分で話題を振っておいて早々に壁にぶつかって悩むル級の姿に、呆れ顔で夕級が溜め息をつく。

その落ち着いた様子に、どうやら彼女は詳細を知っているようだ判断した夕級以外

の三人は同時に同じ言葉を発した。

レ級・ル級・ヲ級「教えて！」

タ級「はいはい。いい？ 結婚というのはね……」

レ級「ずっと一緒!？」キラキラ

ル級「奥さん!？」キラキラ

ヲ級「子供!？」キラキラ

タ級「いや、ヲ級はちよつとそれ結論早いから。過程飛んでるから」

レ級「でも、結婚したら提督とふーふつてのになれるんではよ？」

結婚の意味を知ったレ級が目をキラキラさせて身を乗り出して聞いてきた。

ル級「そしたら提督の奥さんになるのよね？」

ヲ級「つまりずっと一緒になる？」

タ級「あくまで効率的な艦隊運用様の仕組みだと思っけど……まあ、結婚という言葉を使っている以上、建前上はそうとつても問題はない、かな？」

タ級「でも完全じゃないからこそ、敢えてその名称を漢字じゃなく片仮名で表記……」

結婚の意味に盛り上がる三人に対して、その仕組みの根本的な問題も理解していたタ

級はレ級達の勢いを宥める為に説明を続けようとしたが――

レ級「結婚したい！」

案の定、レ級の元気いっぱい期待に満ちた声に遮られた。

ル級「したーい！」

ヲ級「したら。基地のごはん毎日食べられるー♪」

ル級とヲ級も後に続く。

が、ヲ級の動機は明らかに結婚本来の目的とはかけ離れていた。

タ級「……ヲ級はご飯目当てで結婚？ レ級とル級は？」

レ級「僕は太佐好きだし結婚してふーふになりたい！」

ル級「私も太佐のこと嫌いじゃないけど、やっぱりヲ級と一緒にご飯食べたいなあ」

タ級「レ級以外は動機が不純ね……」

本日二度目の呆れ顔で苦笑しつつタ級は今度はレ級の方を向く。

レ級「タ級は？」

タ級「え？」

レ級の不意の言葉にタ級は聞き返す事しかできなかつた。

レ級「タ級は太佐のこと、好き？」

タ級「え、ちよつ、な、にやに……なに言ってるのよ」カア

ル級（嘖んだ）

ヲ級（嘖んだね）

レ級「？　なんでそんなに照れてるの？　好きかどうか訊いてるだけじゃん？」

タ級のあからさまな動搖にレ級が首を傾げてキョトンと不思議そうな表情をする。

タ級「だ、だからって急にそんな事言われたら困るじゃない……」

ル級「好き？」

ヲ級「嫌い？」

天然なレ級に対して多少は心の機微に聡い二人が面白そうな顔でレ級の質問に乗つて来た。

タ級「もう、あなた達まで……。別に……。嫌いじゃ……。ないけど」

レ級「本当!?　じゃ、僕と一緒にだね！　大佐とけっこ——」

その言葉にタ級も自分と同じ見解だと判断したレ級は嬉しそう顔をした。

そんなレ級に対して少し申し訳ない気持ちで今度はタ級が彼女の言葉を遮った。

タ級「でもね」

レ級・ル級・ヲ級「？」

タ級「私達、深海棲艦なのよ？」

ル級・ヲ級「あ」

夕級「結婚できるわけ、ないじゃない……」

明瞭にして普遍の事実だった。

そう、これがなによりの問題だった。

レ級「艦娘に戻ればいいじゃん」

そんな事実を前にしてもレ級は結婚への意志を諦めることなく、子供の様にちよつと不機嫌な顔で解決策を提示する。

夕級「今のところ敗けて沈むしか艦娘に馬割れ代る手段はないでしょ？ それに生まれ変わったとしても過去の記憶が残ってるかも分らないし……」

レ級「僕は忘れないもん！」

ついにレ級が叫んだ。

普段子供の様で、その実芯はしっかりしていて、何事にも動揺しない彼女がこうも激しい感情を露にするのはとても珍しい事だった。

その証拠に今まで面白そうな顔で話に乗っていたル級とヲ級も、今では目を丸くして二人の様子を伺うにとどまっている。

夕級「子供みたいに意地張らないの。自信はあっても保障はないでしょ？」

レ級「……」

ル級「レ級……」

ヲ級「元気出して！」

黙り込んでしまったレ級を心配してル級達が励ましの言葉を掛ける。

タ級「残念だけど今は諦めるしか……」

レ級「深海棲艦のまま……」

タ級「え？」

レ級「深海棲艦のまま結婚しちゃダメなの？」

我儘な答えだった。

でもそれしかもうレ級には考えが浮かばなかった。

彼女の目尻には悔しさからか僅かに涙の滴が滲んでいた。

そんなレ級を可哀そうだと思いつつも、丁寧に諭してやる事しかできないタ級はこう言った。

タ級「レ級、あなた何を言ってる……。ダメに決まってるでしょ、そんなシステム元々ないし、それに私たちと海軍は敵同士なのよ？」

レ級「姫に相談して僕達一派だけでも海軍の味方になるっていうのは？」

タ級「仕事とは言え、今までどれだけの艦娘を沈めて来たと思ってるの。その中には生身の人間、提督だって少なからずいた筈よ？ その行いを海軍が赦して受け入れてくれると思う？」

レ級「その時は……」

タ級「ダメよ」

レ級「えっ」

短いながらも今まで一番強く厳しい口調で即座にタ級が否定の言葉を放った。

タ級「自決して自分一人で責任取るつもりだったでしょ？　ダメよ。恥を晒さない為の自決ならまだしも、そんな我儘の私情による自決なんて私の矜持が許さないわ」

レ級「うう……でもお」ウル

タ級「ほら、泣かないの。何も絶対無理とは言っていないわ。姫に相談して襲うのを止めて、話し合いの機会を伺うという手段もあるわ」

ついに泣き出してしまったレ級をタ級は優しく抱き寄せ、その頭を撫でながら語りかけた。

レ級「ぐす……待つの？」

タ級「こういう問題は直ぐには解決はできないの。あなただつてそれは判るでしょ？」

レ級「……うん」コク

タ級「いい子ね。それじゃ、まずは姫に相談するところから一緒に考えましょう。どうやって切り出すか。そして、それが上手くいったら大佐にも相談する……順序を

踏まなくちやね」ナデナデ

レ級「うん…… そうだね。分った」グシグシ

ル級「レ級…… 大丈夫よ！」

ヲ級「そうよ！ わたし達も協力するから！」

レ級「ル級、ヲ級…… 皆ありがとう！」

友人達の温かい言葉にレ級は涙で少し赤くなった目を拭いながら、いつも通りの明るい笑顔でお礼を言った。

第58話 「お話」

姫「……本気？」

姫「お前達だけ抜けて投降するというのは？」

レ級「それじゃ意味がないでしょ？ 目的はあくまで敵対関係の解消なんだから」

姫「私がそれに同意するとても？」

レ級「勿論思つてないよ。だから説得しに来たの」

姫「……」

レ級「答えは分かつてるよ。でも——」

姫「わかつた」

レ級「やつぱり？ でもさ……え？」

姫「交渉に臨んでもいい。聞こえた？」

レ級「……ほん……とに？」

姫「信じられないのは分かるけど本当。嘘じゃない」

レ級「でも、なんでそんなにあつさり……」

姫「お前達と行動を共にしてるとね……降参した敵には絶対に手を出さなかつた

り、どんな相手にも強さに関係なく敬意をもって戦いに臨んだりする姿勢が昔の、艦娘だった頃の私を思い出させるのよ」

姫「誇り……矜持と言うのかしら、艦娘だった頃に軍人として持っていた実直な精神を思い出したの」

レ級「姫……！」 パアッ

姫「他の子には私から言い聞かせるけど、でも、本当に和睦が実現すると思う？」

レ級「分からない。でも頑張るよ！」

姫「……それもそうか。応援はさせてもらうわ。頑張りなさいよ」

レ級「うん。任せて！ あ…… 姫？」

姫「ん？」

レ級「その答えは本心、だよね？」

姫「疑うのも無理はないけど本当よ。嘘じゃない」

レ級「……」 ジッ

姫「……」

レ級「……」 ツカツカ

姫「ん？ なに？ って、え、ちよ……」

ギユッ

姫「……………」

レ級「……………」 姫、ありがとう。僕、姫を信じるよ」

姫「レ級……………」

レ級「じゃ、僕はまた折を見て大佐、知り合いの提督に聞いてみるから」

姫「そう。わかった」

レ級「姫っ、ほんっ……………」 どうつに、ありがとうー！ニパ

姫「もう、分かったからさつきと行きなさい。眠るから」

レ級「はい。おやすみー♪」フリフリ

シーン

姫「……………」 おやすみ」ボン

側近「……………」 姫様？」ヌツ

姫「勘ぐってるの？ 本気よ。もう憎しみに駆られた行動は飽いた。ここでひとつ、かつての仲間……………」 人間に期待してみるのも一考じゃない？」

側近「大丈夫でしょうか？」

姫「不安は誰でも同じ。ここはレ級達を信じなさい」

側近「そうですね。失礼しました」ヌツ

姫「待て」

側近「はい？」

姫「一緒に寝ない？」

側近「え？」

姫「どう？」

側近「あ……／＼／＼」コク

姫「ふふ、ありがとう♪」

第59話 「氣遣い」

彼女『寝込んでる？』

加賀「はい、そうです。どうやら過労が原因らしくて」

彼女『大丈夫なの？』

加賀「それは問題ありません。ちゃんと医師の方にも診て貰ってますし、私達も細心の注意を以て看護してありますので」

彼女『……そう。あなたがそう言うのなら間違いないわね。でもそっか……寝込んでるんだあいつ……』ブツブツ

加賀「少将殿？」

彼女『あ、いえ。でもないか、加賀？』

加賀「はい」

彼女『今度査察の任務の帰投中に近くを通りかかる時があるの。だから——』

加賀「分かりました。予定をお教えいただければ出迎えの準備を致します」

彼女『話が早くて嬉しいわ。それじゃ、よろしくお願いできるかしら？』

加賀「委細承知致しました。了解です」

彼女『ありがとう。それじゃあ宜しく……え？なに？あなたも何かあるの？』

加賀「？」

彼女『あ、ごめんなさい加賀、ちよつと代わるわね』

加賀「？はい」

武蔵『聞いたぞ加賀！私の大佐が——』

ガチャン

加賀「……」

Z1「切つてよかつたの？なんかまだ話し声が聞こえた気がしたけど」

加賀「私の、なんて図々しい……」ボソ

Z1「え？」

加賀「なんでもないわ。それより、近く大佐の元……いえ、復縁した彼女さん、少将がここに来るわ」

Z1「そうなの？ やつたあ。僕あの人優しいから好きだなあ」

加賀「確かに優しいですね。というより人物的に隙がない強敵というべきでしょうか」

Z1「え、強敵？」

加賀 「恋のライバル、というやつですよ」

Z1 「へえ…… ねえ加賀さん」

加賀 「なんですか？」

Z1 「僕も恋のライバル？」

加賀 「……」

Z1 「加賀さん？」

加賀 「訂正します。恋の仲間です。略して恋友」

Z1 「あれ？ 〃仲間〃は？」

加賀 「〃恋仲〃だと恋人になってしまいます。日本語の妙ですね」

Z1 「えつと、つまりライバルじゃなくて大佐が好きなもの同士の仲間っていう事？」

加賀 「その通りです。流石はレイスですね。賢いです」 ナゲナゲ

Z1 「ん…… ダンケシエ…… 加賀に撫でられるのも好き♪」

加賀 (可愛い……)

Z3 「……」 ジー

Z1 「あれ？ ジェーン？ どうしたの？」

Z3 「ジェーンの方が可愛いわよ……」 ボソ

Z 1 「え？」

Z 3 「こほん、なんでもないわ」

Z 1 「？」

B i s 「無理はよくないわよ！」

Z 1 「あ、マリアさん」

加賀 「これはこれは、海外組が勢揃いですね」

B i s 「ジエーン、羨ましかつたら私が撫でてあげるわよ！」

Z 1 「え？」

Z 3 「……っ」カア

加賀 「……」

B i s 「恥ずかしながらなくていいのよ？ ほら、お姉さんが撫でて——」

Z 3 「加賀さんお願いします」ファイ

B i s 「!？」

加賀 「私でいいのかしら？」

Z 3 「デリカシーがないドイツ人はドイツ人じゃないわ」キツパリ

B i s 「え!？」

Z 1 「え？ それってマリ——」

加賀 「レース、それ以上はダメ」

Z1 「……………」

加賀 「……………」

加賀が目配せしての方を向くと、そこには涙目になったマリアがいた。

Z1 「えっ、マ、マリアさんどうし——」

Bis 「うわあああああん!!」

ボタン!!

Z1 「……………」

Z3 「……………」

加賀 「ジエーン」

Z3 「……………」

加賀 「ちゃんと後でマリアさんに謝るのよ？」

Z3 「……………」

加賀 「そう。ならいいの」

Z3 「ん……………」

Z1 (早く大佐にも撫でて貰いたいなあ……………)

第59話 「お仕置き」

彼女「こんにちは。そちらは相変わらずつつがないかしら？」

加賀「ようこそお待ちしておりました。ええ特に、大佐以外は問題なく」

武蔵「それが一番の問題だろ？」

彼女「武蔵」

武蔵「う……」タジ

彼女「ごめんなさいね。悪気はないの」

加賀「いえ、構いません。心配して頂けるのはこちらも嬉しいですから」

武蔵「あ……その、悪かった。そうだな。一番心配してるのはお前たちだよな」

加賀「別に心配はしていません」

武蔵「え？」

加賀「大佐の容体も大分良くなってきたので目を覚まされるのも時間の問題だと思います。だから、心配はしていません」

武蔵「む……それでもお前たちの主人だろう？少しは……」

加賀「ええ、気にはしていますよ。寝てる間ずっと寂しかったですから」

武蔵「ん……」

彼女「でしょうね。全く、アイツったらこんな上司思いな子達に寂しい思いをさせちゃって」

加賀「あ、いえそれは……」

武蔵「何を謙遜しているんだ。起きたら抱き着くくらいしても許してくれると思うぞ？」
ああ、寧ろそれは競争か」ニヤ

加賀「……／＼／＼」ファイ

彼女「むさし〜？」

武蔵「ふふ、ニヤつきながら怒られても全然怖くないぞ？」

彼女「そこは突っ込まないの。それじゃ加賀、案内してもらえるかしら？」

加賀「失礼しました。どうぞこちらへ」

く提督私室

彼女「……よく寝てるわね」

武蔵「本当だったか……。いや、疑ってたわけじゃないが、でも実際に見るとなんだか胸にくるものがあるな」

提督「……」

加賀「そんなに不安な顔されなくても大丈夫ですよ。本当にもう全快一步手前の状態なんです。顔色も倒れられた時と比較にならない程良くなっていますし」

彼女「そうね。穏やかな顔だと思うわ」

武蔵「そうだな。普段は殆どしかめっ面……」

加賀「？」

彼女「武蔵？ どうしたの？」

武蔵「いや、普段ガードが堅くてイロイロつるめなかつた大佐が今は無防備の状態が
ちよつと、な」

彼女「は？」

加賀「……」

武蔵「ちよーつとイタズラくらいして——」

バン！

武蔵「貴様！ それでも私のオリジナルか！ 恥をしれ！」

無蔵（彼女側の武蔵）「なっ!？」

武蔵「殊勝にも大佐の見舞いに來た事に感心して敢えて静観していれば調子に乗り
折ってからに！」

無蔵「貴様覗き見していたのか!? ならそつちこそ恥をしるがいい! 仮にも大和型たる戦艦がそのような不埒な真似をよくもまあ……」

武蔵「なんだと! 自分の痴態を棚にあげるか!」

無蔵「お前の醜態の方が看過できないからな。当然だ!

武蔵「なにを!」

無蔵「やるか!」

彼女「……あなた達」

加賀「ちよつと」

彼女「静かにしなさい」 加賀「静かにして下さい」

武蔵・無蔵「」

彼女「せつかく具合が良くなっているのにあなた達が騒いだ所為でまた悪くなったらどうするのよ?」

加賀「その通りです。これはちよつとお二人には反省してもらわなければいけませんね」

武蔵「なつ、私もか!? 悪いのは明らかにこいつだろう!」

無蔵「いや、そもそも最初に騒ぎ出したのはこいつだ!」

武蔵「ああ!？」

無蔵「事実だろうか? ああ!？」

彼女「ふう……」

無蔵「は!」ビクッ

加賀「……」スッ

加賀が無言で矢をつがえる所作を見せた。

武蔵「ちよ、加賀!?! そ、それ実戦用の爆薬積んで……!?!」

彼女「ごめんね加賀。お願いできる?」

加賀「本部の少将の片の頼みとあらば無碍に断るわけにはいけませんね」

無蔵「ちよ、おい!?!」

彼女「じゃあね。後でまた入渠区で会いましょ」ニコ

武蔵・無蔵「……!」ゾゾッ

加賀「それではお二方、覚悟はいいですか?」ゴウンゴウン

三本の矢を纏めてつがえた加賀が弦を引き絞り、2人の武蔵に狙いを定める。

矢を放つ前だというのにその矢先からは彼女の気合が伝わったのか、既に艦載機のエン

ジン音が響いていた。

武蔵 「ま、待て！」

無蔵 「話を——」

加賀 「第一航空戦隊の怒り、思い知りなさい」

ズババババババ！

武蔵・無蔵 「ぎゃー!!」

第60話 「侵入」

そゝ……コソツ

レ級「……」キヨロキヨロ

ヲ級「どう？」

レ級「うん。誰も居ない」

ル級「チャンスね！」

タ級「でも変じやない？ この時間帯に執務室に秘書艦どころか大佐も居ないなんて」

レ級「きつとトイレだよ」

ヲ級「そうだよ！」

ル級「そう……かしら？」

タ級「……まあ誰も居ないなら機を逃す事もないわね。でもちゃんと警戒するのよ？」

レ級「はい」ヨジヨジ

ドテツ

窓からよじ登ったレ級は部屋に何とか入ったものの、窓枠に足をひっかけてしまい盛大にこけることよって侵入を果たした。

夕級（言ってるそばから！）

ヲ級「レ級大丈夫!？」

レ級「いてて……大丈夫。気付かれて……ないみたい」

ル級「ほっ」

ヲ級「じゃ、わたしも行くね。んちよつと……」ヨジヨジ

ヲ級も危なげに窓をよじ登って侵入に成功するが、窓から部屋に身を乗り出した瞬間上半身から部屋に転げ落ちた。

ゴロン

ヲ級「わぶっ」

夕級「あなた達ね……」

夕級は眉間に手を当てて悩ましげな表情をした。

ル級「二人とも背が低いからね。次は私……つと」

スルツ

ル級は先の二人と打って変わり、窓枠に両手を掛けると勢いをつけて危なげなく飛び越えて侵入した。

レ級「ズルイ！」

ヲ級「卑怯！」

ル級「ええ!?!」ガーン

タ級「何やってるんだか……。ふっ……。！」

ヒョイツ

タ級もル級と同じ要領で軽快な動作で片手で飛び越えた。

レ級「すごい！」

ヲ級「カッコイイ！」

パチパチ

ル級「なんでえ!?!」ウル

タ級「騒がないの。……確かに誰もいないわね」キヨロキヨロ

レ級「あ、もう一つドアがあるよ。ここも調べてみよう！」

タ級「あれは、大佐の私室ね、多分」

ヲ級「え？ 大佐の部屋に入るの？」

ル級「お、男の部屋に……。ポッ

レ級「え？ これ大佐の部屋なの？ へえ、どんな部屋なんだろ」キラキラ

タ級「目的見失ってるわよ。他人のプライベートはあまり侵害したくないけど……」

まあ仕方ないわね。行くわよ」

レ級・ル級・ヲ級「はい」
ガチャ

タ級「……あ」

レ級「誰か居た？ 大佐？」

タ級「そう……ね。大佐が居たわ」

ル級「わわっ。き、気付かれちゃった？」

タ級「いえ……寝てるみたい」

ヲ級「今お昼だよ？ まだ寝てるの？ ぶぶ、おねぼーさんだね」

レ級「大佐寝てるの？ ねえ、入れて！ どんなのか見たい！」

タ級「ちよつと、押さないですよ。はい」

トテトテ

ル級「あ、本当に寝てる」

ヲ級「寝て……あれ？」

レ級「大佐の寝顔いっただきー！」 テテツ

タ級「あ、こらっ」

レ級「くふふ、大佐のどんな顔をして……ん？」

タ級「どうしたの？」

レ級「確かに寝てるんだけど、だけど……なんか……」

ヲ級「元気がない？」

レ級「うん。そんな感じ？」

ル級「ええ？ あ、ホントだ」

タ級「……疲れて寝てるのとはちよつと違うわね。意識がないみたい」

レ級「大佐病気なの？」

ル級「違うと思う。気力は確かに弱いけど、活力はちゃんとあるみたい」

ヲ級「そうね。多分電気の充電みたいに大佐も今体力を貯めてるのよ」

レ級「へえ……つまり疲れて寝てるけど、体力が戻るまで起きないって事？」

タ級「恐らく」

レ級「そうなんだ！ それなら……」

タ級「あ、ちよつとレ級？ 何を……」

グニツ、グニツ

提督「……ぐむ」

レ級「ぷっ……ぐ、あはは。変な顔ー♪」グニグニ

ル級「……ぷっ」

ヲ級「あ……くふふふ」

タ級「何やってるのよ……」

レ級「お話できないならちよつと遊んで帰ろうかなあつて」

タ級「だからつて眠ってる人に……」

ヲ級「わたしもやる！」

ル級「え？ あ……わ、私も！」

タ級「あなた達ねえ……」

ガチャ

レ級「あ」

ル級「え？」

ヲ級「ん？」

タ級「……」

赤城「……ふふ」ビキビキ

夕級「逃げるわよ！」ダッ

レ級「ちえーもうちよつとあそ——」

ビュッ

ル級「きやつ」

赤城「逃がすか!! ふん捕まえてやるんだから！」ゴゴゴゴ

ヲ級「きやー♪」

夕級「余裕かましてるんじゃないの！ そんな事したら……」

赤城「もう容赦しないわ！ 覚悟しなさい！」

レ級「最初から本気のクセにー。ま、今日は帰ろつか」

ル級「早く早く！」

夕級「ごめんなさいね。この子達にはちやんと言っておくから！」

赤城「にーがーすーかああああ!!」ズゴゴゴゴ

レ級・ヲ級「わー♪」

ル級「ひいい」メソ

夕級「全くなんでこんな事に……」

第61話 「起床」

島風「大佐はまだ起きないのー？」

那智「まだだ。だが、もう直ぐだぞ」

雪風「本当ですか!？」

加賀「間違いないわ。あれからどれだけ時間が経っていると思ってるの？ 休養はもう純分なはず。後は……」

金剛「目覚めの k i s s ネ！」

足柄「え？」

加賀「そうでした。後は接吻だけです。なら私が……」

金剛「ちょ!?! ナンバーワンの w i f e はワタシなのヨ!?! ならワタシがすべきだと思います！」

那智「金剛さんナンバーワンというのは、ケツコンした順番の事だろうか？ 愛情の順番ならまだ一考の価値はあるがそれではな」

足柄「え、那智？ なんで大佐の所に近づいて……」

那智「いや……ちよつと大佐の汗でも拭いてやろうかと」

加賀 「ハンカチも持たずにですか？」

那智 「つ……」

金剛 「那智い？」

加賀 「那智さん？」

那智 「わ、私にだって好きになる権利はあるだろう。だろう、足柄」

足柄 「え？ あの、その」アセアセ

加賀 「……埒が開きませんね。やはりここは一航戦の代表として私が……」

金剛 「No！ 大佐への love が一番強いワタシが！」

足柄 「あの、私……私も、その……」

4人 「……」

島風 「ねえなんか加賀さん達急に黙り込んでどうしたのかな？」

雪風 「お、女同士の戦い……」ゴク

島風 「へえ〜」

雪風 「……」チラ

提督 「……」

雪風 「……！」カア

島風「雪風ちゃんどうしたの？」

雪風「えっ？ な、なんでもないよ」

島風「もしかしてキスの事？」

雪風「えっ」

島風「大佐にキスをしたら起きるのかな」

雪風「ど、どうだろ……」

島風「ね、してみたら？」

雪風「え!？」

島風「雪風ちゃん幸運の艦つてよく言われるじゃん。幸運のキス今こそつて思わない？」

雪風「そ、そんな急にいわれてもお……わ、わたしは……」

島風「雪風ちゃんがしないならわたしがやっていい？」

雪風「ええ!？」

島風「あ、やっぱり雪風ちゃんも大佐の事が好きなんだね」ニヒ

雪風「あ、あう……」

島風「ねえ、してみなよ。雪風ちゃんがしてダメならわたしがやってみるからさ」

雪風「でも……」チラ

提督「……」

島風「ゆ・き・か・ぜ・ちゃん？」

雪風「つ……、わかった」ポツリ

島風「おうっ」

雪風「分かったよ島風ちゃん！ わたしやって——」

那智「だから！ ケツコンしていようがいまいが、好きならキスをする権利くらいだれにでも……！」

スポン

金剛「あ、連装砲……」

つい感情的になってその気持ちを身振りで表そうとした那智の振り上げた手から、艦装の連装砲がすっぽりと抜けた。

ヒュッ

それは綺麗な放物線を描き提督が眠るベッドへと向かっていき……。

雪風「分かったよ雪風ちゃん！ わたしやって——」

ゴンッ

提督「!?」

バタツ

雪風「え？」

島風「」

金剛「た、大佐ア！」

加賀「」サア

足柄「あ、青くなっている場合じゃないわよ！ あの落ち方ちよつと……」

那智「あ……あ……」ガクガク

その場にいた全員が蒼白の顔でベッドから落ちた提督の姿を目で探した。

だが、落ちた拍子に掛け布団も一緒に落ちたので実際にどういう状態になっているのか判らなかつた。

加賀「くっ……大佐！」

やがて冷静さを取り戻した加賀がまつきに様子を確認しようとした時だった。

「ぐ……むう……」

声が出た。

明らかに低い男の声だ。

その場に提督と艦娘しかいなかったのも、その声の主は一人しかない。

皆が声かした方を見つめる。

やがて提督と一緒に落ちた布団が明らかに中からの力で動き、徐々にその中身にいたモノが立ち上がり、それと同時に布団が滑り落ちていった。

ムクツ

提督「つ痛……。なんだ？ 此処は……。皆どうしたんだ？」

あまりにもあつさり目覚めてしまった男は、鈍く走る痛みに耐えながら不思議そうな顔で、揃って自分を見ている部下たちを確認してそう呟いた。

メイנסトーリー (第五章)

第1話 「誓約」

提督「そうか、そんなに眠っていたのか」

数日振りに目覚めた提督はいつもと変わらない様子だった。

だがよく見ると微妙に眉間の皺が減っているようにも見える。

鈍った体力を取り戻すのに少し苦労したが、それも体がまともに動くようになるにつれて自身の予想より早く回復した。

不測の事態だったとはいえ、今回の療養は提督の身体に大きな恩恵をもたらしたのは確かのようにだった。

金剛「そうヨ？ 大佐ったらあれだけ無理はしないデってお願いしたのにつ」プクツ
雪風「でもこうやって元気になってくれて良かったです！」

提督「雪風、金剛……すまないな。ありがとう。他の皆もだ。心配かけてすまなかつた。そして恩に切る」

加賀「いいのです。あなた……大佐さえ元気になってくれればそれだけで私は満足ですから」

利根「右に同じくじゃ！ 大佐よ、待つておったぞ！」

雷「大佐、おかえりなさい！」

「おかえりなさい！」

提督「ああ、ただいま。この礼は何れさせてもらう。期待しててくれ」

龍田「あらあ、お礼なんてえ♪ じゃあ、ここにいる娘全員に練度関係なしに指輪く
れたりしてくれるのかしらあ？」

シーン

提督「……む」

ジーツ

提督の鎮守府に所属する艦娘達全員が彼を見つめていた。

提督「まさか？ 冗談だろう？」

提督「まさかとは思うが、全員俺としたい……と？」

山城「ダメなんですか？」

比叡「それはあんまりです！」

大井「私、大佐となら……北上さんと同じくらい愛してあげても……いい、のよ？」

男に興味がない代表格の三人がこんな事を言う時点で最早答えは明らかだった。

長門「大佐よ。まあ既婚者としてはちよつと妬けてしまいが、器の大きい所を見せてくれると私も惚れ直すと思うぞ」

明らかに意図的なタイミングで長門が割り込んできた。

妬けるとか言っておきながらその顔は、この事態を楽しんでいるかのように面白そうに笑っていた。

提督「長門……。俺は前に恋人ならとは言ったが、まさか全員とケツコンとは、な……」

榛名「大佐ごめんなさい。榛名はしたいです。ゼツタイ」

秋雲「諦めてしちやつてよー。あ、勿論わたしもだかんねっ」

提督「……分った。流石に練度の件は無視するわけにはいかないが、条件を満たした者とは……その、しよう」

足柄「何をしてくれるのかしら？」

提督「足柄、お前……」

足柄「な・に・をしてくれるのっ？」ズイ

いつになく真剣な表情で足柄が提督に迫る。

彼女があやふやな答えではなく、提督自身の口から明確な答を言うことを欲している

のは明らかだった。

提督「ケツコン——」

足柄「それはあくまで手段でしょ？　違うの。私は提督に……その……」モジモ

ジ

提督「……足柄、一度皆の所に戻ってくれ」

足柄「……分った」

テテツ

提督「んんっ」

「……」

艦娘達が提督を見つめていた。

期待している言葉が出るのだろうか、あの提督が果たしてそんな言葉を発してくれるのだろうか。

期待と不安が入り混じった空気がその場の雰囲気立ち込める。

提督「皆」

「はいっ」

提督「ケツコンの暁には……いや、関係なく意思ある者は愛する事を誓う」

ワアアアアアア!!

提督（次に生まれ変わるとしたら女がいいな……）
湧き上がる完成の中、何故か提督はそんな事を思った。

く同刻、大本営海軍本部技術研究室

技術将校（以降、将校）「ん？ これは……」

中将「どしたの」ヌツ

将校「わつ。ちゅ、中将殿どうしてこんな所に？」

中将「トイレからの帰りだよ」

将校「トイレなら司令室にあるではありませんか。何故わざわざ此処まで……」

中将「悪い事してないか確かめるのも管理職の仕事だからね」

将校「べ、別に私は……」

中将「分ってるって。それで、どうしたの？」ズイ

将校（う……なんだこの威圧感？ 中将からこんな気配がするなんて……くつ、逆
らえない）

将校「こ、これを……」スツ

中将の威圧（本人にその気なし）に負けた技術将校は折れ線グラフが印字された紙を中将に見せた。

中将「ん？ このグラフは……」

将校「詳細につきましては最高機密の技術ですので特別な許可がない限りお教えできませんが、これは有る方法にて艦娘達の感情レベルをグラフ化したものです」

中将「へえ……。これ、凄く盛り上がってるみたいだね」

将校「そうなんです。ここの鎮守府は以前から落ち着いていたのですが、急にこんな数値が……。まあ流石にこの変動は急激すぎるのでバグだと思えますが」

中将「ふーん、因みにこれを管理して艦娘の反乱の意志とかをチェックしたりしてたの？」

将校「……おおよそその通りです。優れた存在とはいえ、所詮は兵器ですから。そのくらいの管理は絶対に必要です」

中将「……そうだね。人間、これくらい臆病でないと生き残れないよね」ボソ

将校「は？ 中将殿今何と……」

中将「いや、よく出来たシステムだなと思ってね」

将校「あ、ありがとうございます！」

中将「うん。君の艦娘が兵器と言う認識は間違っていないと思うよ。これからもその

つもりでしつかり管理してね」

将校「はっ、お任せ下さい！」

中将「うんうん。お願いね。それじゃ」

将校「はい。おつか……って、その、それっ。グラフを！」

中将「ああ、ごめんごめん。はい」ポン

将校「ああ。ありが……タバコ？」

中将「ダメ？」

将校「……」

中将「頼むよ」

将校「……中将殿この事は……」

中将「俺が守らないとでも？」

将校「いえ、信じております。どうぞ」

中将「うん。ありがとう。今度また何か奢るよ」

将校「い、いえそんな」アセアセ

中将「気にしない気にしない。若い子の面倒を見るのもオジサンの仕事だから。

じゃ、頑張ってねー」

将校「あ、はい。すみません。ありがとうございます……」

く廊下

中将「……」

中将（何か艦娘に仕込んでるみたいだな。今度調べてみるか）

第2話 「作戦」

提督「新しい作戦か」

扶桑「はい。大佐がお休みにいられている間に本部より新しい作戦遂行指示がきておりまして」

病み上がりの提督に仕事の話をする事をきにしているのか、すまなそうな表情で扶桑は言った。

提督「なるほど。それで概要は？」

扶桑「はい。こちらを……」

提督「ふむ……」

提督は作戦の概要書を見て顎に手を当てる。

その渋い表情から今回の作戦の難度の高さが伺い知る事ができた。

扶桑「ご覧の通り今回の作戦我が鎮守府の総力を賭すものと考えても間違いないものだと思います」

提督「第二次AL／MI作戦か……」

扶桑「総力戦である以上所費する資材も相応の量が予測されます。加えて、ほぼ全戦力を投入するため、主力の第一艦隊以外の艦隊にも奮闘してもらわなければいけません」

提督「ふむ……」

提督はまた考え込むように手で顎撫でた。

扶桑「……大佐、失礼とは思いますが私個人の正直な見解を述べてもよろしいでしょうか？」

提督「……言ってみろ」

扶桑「今回の作戦、大事を取って不参加を決意するのも手だと思います」

提督「……資材、弾薬と主力以外の艦隊の事か？」

扶桑「はい、そうです。弾薬以外の資材は問題ないものと判断できますが、やはり弾薬が2万では少々キツイと……」

提督「して戦力は？」

扶桑「第二艦隊以降の戦力は、主に成長レベルが60に達していない者がほとんどです。この戦力で今回の作戦に臨むのは些か不安に思います……」

提督「なるほどな」

提督は特に表情を変えることもなく、いつもの調子で短く答えただけだった。

扶桑「大佐……如何致しますか？」

提督「……」

目を閉じて瞑想しているかのように考え込んでいる様子の提督。

扶桑はその時ある事に気付いた。

考え悩んでいるはずの提督の表情がどこか先程までと違い、穏やかに見えたのだ。

提督「扶桑」

暫くして目を開けた提督が静かに扶桑の名前を呼んだ。

扶桑「はっ」

提督「この作戦、実行する」

扶桑「……はっ」

予想してなかったわけではなかった。

ただ、自分たちの提督は基本的に慎重派なので、この選択を選ぶ可能性は作戦を実行しない選択に比べて低いだろうと思っていたんだ。

提督「扶桑、心配しなくていい。これから説明してやる」

扶桑「大佐……ええ、よろしければお願いします」

提督「まず今回の作戦だが、A.L作戦に投入する戦力は基本、作戦の目的が揺動にある為、主力以外、所謂二軍を投入することになる。ここまではいいな？」

扶桑「はい。その判断は間違っていないと思います」

提督「ありがとう。だが、気になるのは二軍の戦力だろうか？」

扶桑「はい。その通りです」

提督「扶桑、我が鎮守府には確かに主力と比較して戦力が劣る艦娘がいる。お前が言った通り主力との戦力差は重要だろう」

扶桑「はい」

提督「だがな。一つ気付いて欲しいのはその劣る戦力がどれだけいるか、だ？」

扶桑「え？ どれでだけ、ですか？」

提督「そう。数だ。我が鎮守府には一つの育成方針がある。それは知っているな？」

扶桑「はい。『総合武力向上計画』ですな」

提督「そうだ。この計画に則り俺たちは各艦種にあるノルマを課しているな？」

扶桑「はい。戦艦はレベル75、空母は80、重巡は70、軽巡は60、駆逐は50でしたでしょうか？」

提督「そうだ。潜水艦を敢えて計画に入れてないのは常に基地周辺の警戒をさせる事によって練度の向上が全艦種の中で特に著しいからなのだが、それはひとまずここでは置いておこう」

提督「それでだな。現状その育成方針に則り、お前達を鍛えてきたわけだが。その結

果今はどのような状態だと思う？」

扶桑「そうですね……。全ての子がノルマを達成しているわけではありませんが、方針のお蔭で現状、新人の要育対象の子を除けばレベルが40より低い子は一人もいなかったと思います」

提督「その通りだ。そしてそれが今回俺が、この作戦を実行可能だと判断した肝なんだ」

扶桑「レベルが低い子がほほいないのが重要だと？」

提督「そうだ」

扶桑「でも大佐、いくらレベルが低くないとはいえ、平均しても50半ばの子で編成を組むのはやはり戦力としては不安では？」

提督「そこに関しては出撃前に、遠征前に必ず行っていた集中力強化訓練を行う」

扶桑「遠征の前の……あっ」

提督「気付いたか？ そうだ。この集中力強化によってお前達艦娘は戦果の向上を図ることができただろう？ それが遠征の成功率の高さでも証明されているわけだが」

提督「今までは単発的にしかこれを行わなかったが、今回は慎重に慎重を重ね、全ての出撃に置いて全艦にこの訓練を義務付ける。それこそいくら面倒でも構わない。必ずこれを実行する」

提督「これによって艦隊の攻撃の正確さ、被害の軽減の実現性が増す。更にこれに繋がるか？」

扶桑「資材の節約、です」

提督「満点だ。流石だな扶桑」

扶桑「そ、そんな……」ポツ

提督「以上の対策により作戦の長期化にさえ焦りを憶えなければ、MI作戦も含めて今回の作戦は十二分に遂行が可能だと俺は判断したわけだ」

扶桑「なるほど……慎重の上に慎重を重ねて……。あ、でもそれだと作戦が実行期間が終わってしまう可能性も……」

提督「その時はすっぱり諦める」

扶桑「大佐……」

提督「扶桑、ダメか？」

扶桑「……いえ。これなら……この計画なら私も本作戦は十分に遂行可能だと思います！」

提督「そうか、ありがとう。なら、今から今回の作戦について全員にミーティングを行うから皆を集めてくれるか？」

扶桑「はい！ 分かりました！」

第3話 「開始」

提督 「ではこれより作戦の説明と指示を行う」

提督 「皆は既に知っていると思うが、今回の作戦は総力戦の構えだ。戦力を二つに分けて同時に行動し、目的の達成を図る」

提督 「まず揺動が主な目的なAL方面軍だが、揺動が目的である以上こちらに主力を割くことはできない。よって第二艦隊以下の第二戦力にここは奮闘してもらう」

提督 「先ずは駆逐艦だ。陽炎、不知火、いけるか？」

呼ばれた二人は背筋を伸ばして返事をした。

不知火 「愚問です。どうぞお随意に使い潰し下さい。2軍とは思えぬ戦果をご覧にいられてみせます」

陽炎 「ここでわたし達を選ぶとは良いセンスね！ 任せて！」

提督 「結構。次に重巡。摩耶、鳥海、愛宕、頼めるか？」

鳥海 「頼めるかなんて……大佐の頼みなら勿論です！」

麻耶 「おうっ！ 待ってたぜ！ あたしの活躍に期待してなっ」

愛宕 「ふふふ。ひっそりぶりの出番ですねっ♪ がんばりますっ♪」

難しい作戦だというのに普段から活躍できる機会に恵まれてない所為か、三人とも嬉しそうな顔で応じた。

提督「頼もしいな。次は空母。隼鷹、飛鷹、どうだ？」

飛鷹「えっ私!!? ……」

提督に名前を呼ばれた飛鷹は心から意外そうな声で驚きの声を上げた。

提督「ん? 不安か? なら他の者でも……」

飛鷹「違うわ! 嬉しいのよ! やってやろうじゃない!」

提督「そうか、ありがとう。隼鷹は？」

隼鷹「あたしと飛鷹を組ませる時点で勝ち保障されてるよっ! 勿論征くよ!」

自信のこもった声で返事をする隼鷹、久しぶりの飛鷹とのコンビに燃えているようだった。

提督「頼んだぞ。……そして最後は、北上、お前だ」

北上「やっと北上様の出番ってわけねー。ま、期待してていいよ。間違いなく沿うから」

いつもの飄々とした調子で受け応える北上だったが、どことなく声が僅かに嬉しそうに弾んでいるように聞こえた。

提督「ふっ、相変わらざるの自信だな。分かった、期待させてもらおう」

提督「以上の者をAL方面攻略艦隊とする。何か質問や異議のある者は？」

不知火「道中の支援はありますか？」

提督「ない。支援は全て敵の主力に対する決戦支援のみに力を注ぐ。よって主力までの道のりは各自集中力の強化によって自力で乗り切ってもらおう」

不知火「そうですか……」

提督「すまないな。こればかりは資材の関係で仕方なかった。だが、無理はしなくていい。危険だと判断したら任意での撤退を許可する」

不知火「ご配慮ありがとうございます。ですが、無用な心配です。支援がないと聞いて俄然やる気が出ましたので……ふふ」

陽炎（こんなに楽しそうな不知火初めてみるなあ。ま、それはわたしもだけど）

提督「他に質問はないか？ では、AL作戦の説明は以上とする」

提督「MI作戦は敵主力の撃破だ。故にこちらも主力で行く。AL方面の敵の主力も強力だろうが、こちらは間違いなく我が鎮守府最高の戦力で挑まなければ危険な相手だろう」

提督「こちらでも道中の支援は行わず、支援は決戦のみとするが、その替わり戦力の出し惜しみはしない。要撤退レベルの被害を受けた者が出たら直ぐに交代の者を出せる

ように万全の体制を敷く」

提督「M I 方面攻略艦隊に参加する者については今更言うまでもないか。それぞれの艦種を代表して意気込みを聞かせて欲しい。加賀？」

加賀「お任せください」

提督「それだけか？」

加賀「これ以上の言葉は必要ないと判断しました」

短い言葉だった。

だが、加賀と共に並ぶ赤城、飛龍、蒼龍の顔は彼女の言葉に込められた意味を解しているのか、全員頼もしい笑みを浮かべていた。

提督「……そうか。頼んだぞ」

加賀「了解しました」

提督「次はな g」

B i s 「任せてちょうだい！ 大佐の妻としてきっちり——」

金剛「ちよつとマリア、ズルイよ!？」

ギャーギャー

提督「……比叡」

比叡「あつ、は、はい!？」

自分に声が掛かるとは思つてなかつたのか驚いた表情をする比叡。
そんな彼女の頭に提督は優しく手を置いて喋つた。

ポン

比叡「あ……」

提督「あの危なっかしい姉や義姉の事を頼んだぞ」

比叡「あ、はい！ お、お任せください！」

提督「……よし。長門」

長門「ん……何しろ帝国海軍の旗艦と象徴のコンビだ。心配するだけ無駄というもの
だろう。なあ武蔵？」ニヤ

武蔵「当然だ」ニツ

提督「……流石だな。宜しく頼む」

提督「利根？ 大丈夫か？ 震えているが」

利根「……しょ、正直興奮もするが……ちよ、ちよつとだけ怖くてな……」

筑摩「姉さん……」

利根「な、情けなく見えるかもしれんが。心配無用じゃ。必ずやり遂げ——」

ギョツ

利根「あ……」

提督は最後までは言わず、小刻みに震える利根の体を優しく抱きしめた。

提督「怖がるのは恥じじゃない。むしろ当然だ。だが、どうかその恐怖を乗り越えて頑張つて欲しい。大丈夫だ、皆がいる」

利根「大佐……」グス

筑摩「そうですよ。姉さん！ 私たちがいます！」

鈴谷「ま、ここは鈴谷達を頼つて欲しいわけでありましてー。ね？ 神通ネーサン」

神通「え？ ね、姉さんつて……あの、私軽巡なんですが……」

三隈「そんなの関係ないですわ！ 神通さんは頼もしい方ですもの」

提督「そういう事だ。利根、神通頼んだぞ」

利根「う……ぐす……。ふう……。うむ！ 任せるのじゃ！」ニコツ

神通「もう……。仕方ないですね」ニコツ

提督「大丈夫そうだな。奮闘に期待する」

提督「駆逐勢は特に大所帯だ。改二組は勿論、今回は島風と雪風にも参加してもらおう。行けるか？」

名前を呼ばれた島風と雪風が直ぐに元気良く反応する。

島風「当然だよ！ 早く征きたい！」

雪風「雪風の『幸運』を見せる時が来ましたね！」

続いて改二組で最高レベル保持者の響がいつも通り静かに進み出てきた。

響「……作戦が終わったらご褒美だよ？」

提督「ああ、分かった。期待してていいぞ」

提督「これで全員だな。残りの者は鎮守府と教育生の守りに就いてもらう」

提督「それでは諸君、我が鎮守府始まって以来の大規模な作戦だが、諸君らならず
完遂できるもの信じ、ここに作戦の発令を宣言する」

提督「第二次AL／MI作戦開始せよ」

全員「はっ!!」

第4話 「横殴り」

提督「AL方面の方はどうだ？」

扶桑「順調です。今はようやく揺動の本詰め、北方湾港の主力に向かっているところ
です」

提督「部隊の状況に問題は？」

扶桑「愛宕と北上が負傷したそうです。大事には至ってないようですが、作戦の続行
は難しいらしく、本人達はなかなか受け入れなかつたみたいですが、今やつと帰投の途
に就いたみたいです」

提督「そうか。北上たちの悔しそうな顔が目には浮かぶな。それ以外は？」

扶桑「今のところは。後は上手く敵主力を補足してくればこちらからも支援砲撃を
行うだけです」

提督「そうか……」

扶桑「大佐、大丈夫ですよ。あの子ならきつと——」

重苦しい雰囲気の中、その空気を裂くように通信機のブザーが突如鳴った。

ビー、ビーッ

提督「こんな時に通信？ 火急……悪い報せか」

扶桑「取り敢えず出ますね。はい、こちら——」

提督「……」

扶桑「あ、あなたは……」

提督「？ どうした？」

く北方AL海域、北方湾港付近

鳥海「どう？ いる？」

岩礁の陰に身を潜めている鳥海が緊張した声で偵察をしている不知火に聞く。

不知火「……いますね。確認しました」

麻耶「よっしゃ！ 後はそいつらをぶっ潰せばこっちは終わりだな！」

陽炎「簡単に言わないで下さいよ……。MI方面程でないと行ってもこっちの主力な
んですよ？」

飛鷹「んー、予定通り決戦に持ち込めば支援砲撃が来るはずだし、それがあれば割と
余裕で……」

飛鷹が支援を織り込んだ攻撃の計画を立てようとしたときだった。

その時僅かだが隼鷹には砲撃の発射音が聞こえた。

ドツ……。

隼鷹「飛鷹！」

飛鷹「えっ？」

ガン!!

麻耶「ちっ、バレたか！」

不知火「いえ、泳がされていたのでしよう。油断しているところを一網打尽を狙ったの
でしょうね」

いつも通りの冷静な表情で戦闘態勢を取る不知火。

その動作には隙がなく、突如の奇襲にも些かも動揺の色は見られなかった。

陽炎「落ちていてないで反撃行くわよ！ 飛鷹さんは大丈夫!?!」

飛鷹「ええ、なんとか……隼鷹、ありがとう」

隼鷹「いいってことよ！ でも、これじゃ支援は期待できないかもね……」

鳥海「キツイ戦いになりそうね。……つく」

不知火「だから何だと言うんです？」

支援の可能性が低くなった事で全員が暗い気持ちになりそうだったところに再び不
知火の冷静な声が飛んだ。

陽炎「不知火、あんた……」

不知火「2軍とは思えぬ戦果を見せると約束したんです。違えるつもりはないわ……」

背中を見せたまま表情が窺えない不知火はそう淡淡と言った。

そっけない態度だったが、そのいつも通りの不知火らしさにその場にいた全員が勇気づけられた。

麻耶「駆逐艦の癖に生意気言いやがって……おおっし、やるぞ!!」

隼鷹「あいよ！ 皆準備はいいかい!？」

陽炎「敵補足！ 接敵まであと10!」

鳥海「了解！ さあ勝負所よ!」

飛鷹「いいわね！ 負ける気がしないわ!」

不知火「勝つんですよ。3、2……会戦します!」

不知火達の前に敵艦隊が姿を現した。

規模こそ大きくはないが、フラグシップ級やエリート級のみで構成された精鋭艦隊だった。

不知火（相手にとって不足無し……!）

覚悟を決めた全力の一砲を見舞おうとしたその時だった。

ズドドドドドツ……ドオオオオン!

突如あらぬ方向から猛烈な砲撃が敵艦隊を真横から襲った。

不知火「っ、これは!？」

隼鷹「うわっ、ちち! 熱っ! え、何これ? 大佐達の方からの砲撃じゃないよ!？」

飛鷹「あれは……」

北上「おーい、みんなー!」

麻耶「おいつ、あれ北上じゃないか!？」

愛宕「私もいるわよー!」

鳥海「愛宕さんまで……え、あの艦隊は……!」

丁督「おうっ、大佐のとこの! 大丈夫か?」

不知火「あなたは……」

珍しく驚きに目を見開いた表情で突如現れた知らない提督を見つめる不知火。

丁督「お前の所の提督のダチだ。暇だから助けに来たぞ」

鳥海「ひ、暇だからって……」

丁督「うちは艦隊の数が少なくて作戦に参加できなくてな。だからこうやってお前たちを支援してやろうと探してたところだ」

北上「帰投中のわたし達に偶然出会ったというわけ」

愛宕「ベストタイミングだったみたいね♪」

飛鷹「わざわざ提督自ら？」

飛鷹は呆れた目を提督に向けた。

だが、提督はそんな視線を気にする様子もなく、歯をむき出して笑いながらこう言った。

丁督「おう、そうだ！ 悪いか？」

隼鷹「いや、助かったけどさ。でも……」

オオオオオオオオ！

既に半壊状態にありながらも未だに戦意の衰えを見せず、寧ろ怒りから狂乱状態となった敵が雄たけびをあげて接近しようとしていた。

飛鷹「敵はまだ沈んでないわよ！」

丁督「へえ、第一射を乗り切ったか。やるな」

不知火「支援は恩に切ます。ですが、油断はしない事です！」

丁督「別にしてねーよ。お前ら第二射だ。酸素を燃やせ。次は何も残すな」

金剛「了解ヨ！ 行くわヨ長門！」

長門「ああ、次で決める」

日向「艦載機、準備良し」

翔鶴「こちらも問題ありませんよ」

加賀「……潰します」

大井「それは私のセリフよ！」

歴戦の強者が提督の指示に意気揚揚に応じ、準備の万端を告げる。

丁督「おし……やれ」

……ゴオオツ!!

ズ……オオオオオオオオオオオン!!

2度目の艦砲射撃はまさに圧巻だった。

最初より明らかに濃密な弾幕が逃げ場のない熱の塊となつて容赦なく敵を襲い、その上を航空機が悪魔の如く火の雨を降らせた。

丁督「油断するなよー慢心するなよー恥かかせるなよー」

爆熱で髪の毛が焦げるのも構わず、提督が艦娘達に手を抜かないように激を飛ばす。

陽炎「うっ……凄いけど、これ……」

隼鷹「うん。流石にやり過ぎじゃないかな……」

一部分だけ真昼の様に明るい状況に隼鷹は、提督の艦隊の戦力に戦慄し、冷や汗を流した。

不知火「……」

丁督「ん？　なんだ悔しいのか？　手柄を立てれなくて」

皆が事の展開に驚嘆としている中、一人だけ無言で俯いていた不知火に気付いた提督が彼女に話しかける。

不知火「……いえ」

丁督「間違いないとお前たちだけでもやれたさ」

不知火の心中を即座に察した提督は言った。

丁督「まあ今回はアイツの元に無事に戻れる手伝いをしてもらったくらいに思つとけばいい」

不知火「……」

丁督「そんな顔すんな。大丈夫だって、戻つてアイツの顔を見りや直ぐに安心するさ」
不知火「……ありがとうございます。ご協力に心から……」

丁督「そんな堅苦しい礼の言葉なんていらねーよ。いつものお前みたくピシツとしろ」

不知火「……すう……ふう……」

不知火「感謝します」

丁督「ああ、それでいい」

提督は持ち直した不知火の顔を見て心地よさそうにニツつと笑った。

第5話 「小休止」

陽炎「ただいま！」

不知火「戻りました」

隼鷹「お疲れさーん！」

飛鷹「戻ったわよ」

摩耶「帰投したぜ！」

鳥海「攻略完了しました！」

北上「ま、当然だけどねー。た・だ・い・ま」

愛宕「ぱんぱかぱーん！ ぶいっです♪」

提督「皆、よく戻って来た。ご苦労だった」

提督「中佐も、すまないな。助かった」

丁督「気にすんなって。それよりこいつらを褒めてやれ。俺達は補給を受けたらまた支援に出るぜ」

提督「いいのか？」

丁督「俺とお前の仲だろ？ これ以上の言葉が必要か？」

提督「……本当にすまないな」

丁督「いいって事よ。そん代わり補給はしっかりさせて貰うぜ？」

提督「ああ、勿論構わない。……頼りにしている」

丁督「おうつ、それでいい。んじや、また後でな」ヒラヒラ

中佐はそういうと自分の指示を待つ部下の向かう為に早々に部屋を出て行った。

ボタン、扉が閉まる音と同時に不知火が提督に質問をした。

不知火「M I 作戦の方はどうですか？」

提督「今のところは、問題ない。お前達が……お前達の揺動のお蔭だ。あと、中佐の支援もな」

陽炎「じゃあまだ遂行中なのね？」

扶桑「そうよ。今はM I 島の攻略に向けて前進しているところね」

隼鷹「そつか。皆頑張ってるねー」

飛鷹「私達だってこんなに頑張ったんだもん。主力が頑張らなくてどうするのよ」

北上「そだね。ま、あのメンバーならいけるよきつと」

愛宕「豪華なメンバーだものねー。でも私達もその内必ず同じ所に行くわよ♪」

摩耶「あつたり前だつっの！ 今回の作戦、結局支援に最後は助けられりまったが、

かなり手応えを感じたしな！」

鳥海「そうね。自分の実力に少し自信が持てわよね♪」

提督「皆……本当にご苦労だった。作戦が終わるまで部屋で待機して休んでいていぞぞ」

隼鷹「あ、その前に大佐」

提督「ん？」

不知火「少々報告が」

提督「なんだ？」

北上「んふふー、2つあるんだけど1つはまあ直接確認してもらった方がいいかな」

陽炎「いい？　じゃ、入れるわね。さ、入ってらっしゃい」

提督「？」

陽炎がそう言うと、報告の内容をイマイチ予測できずに何事かと訝しんでいた提督の前に見知らぬ少女が部屋に入ってきた。

トコトコ

春雨「は、春雨です……。く、駆逐艦の白露型……五番艦です」

提督「……この子は？」

愛宕「A.Lの主力をやった時に一人だけ艦娘に戻った子がいたんです」
麻耶「で、回収して来たってわけ」

鳥海「大佐に是非、彼女の保護とこの鎮守府への配属をお願いしたく……」

提督「ふむ……」

提督はそう言うのと静かに春雨の前に歩み寄って彼女に問いかけた。

提督「春雨、と言ったね？」

春雨「は、はい」

春雨は提督に話し掛けられて緊張した面持ちでピクリと反応した。

提督「そんなに緊張しなくていい。君は深海棲艦だったのかな？」

春雨「は、はい。多分……そうです。ごめんなさい。それだった時の事は全然憶えていないんです……」

春雨は申し訳なさそうな声で提督にそう言った。

その顔はまだ艦娘に戻れた現実には慣れていない所為か、不安一色だった。

提督「そうか。まあそんなに気にする事はない。難しいかもしれないが、あまり気負わずに楽しんでくれ」

春雨「は、はい……」

提督の言葉を受けて安心した春雨は、少しだけ震えていた身体から強張りが抜けるの

を感じた。

提督「それでいい。では、此処に来て早々だが俺から君に一つ頼みがあるんだが、聞いただけ聞いてくれるか？」

春雨「は、はい。何でも言つて下さい！」

提督「はは、別に君に助けた見返りを要求するわけじゃない。頼みは2つだけだ。一つは先程鳥海たちが言つたが、君をこれから我が鎮守府で保護させて欲しい」

春雨「保護……あ、ありがとうございます！」ペコリ

提督「礼儀正しい子だな。では2つ目だが、俺はこれから君を我が鎮守府の一因として迎え入れる事ができるように本部に願い出てみるつもりだ。それで、あわよくば許可が取れたら……」

春雨「……」

春雨は提督の話を半ば放心した状態で聞いていた。

拾われたばかりの身寄りのない自分をここまで暖かく迎えてくれるとは思っていなかったからだ。

提督「君を正式に我が鎮守府の大切な一員として迎え入れさせて欲しい」

春雨「え……こ、此処にですか？」

提督「そうだ。聞いてもらえるか？」

春雨は提督のその言葉を聞くと、驚きに見開いていた目から涙を溢れさせた。

春雨「……っ!!」

提督「不安だったかな？ ならどうか安心してほしい。この頼みを聞いて貰えれば俺は提督として最善を以て君を——」

春雨「そ、そんな事言わないで下さい!」

提督「……ん」

春雨「う……ぐす、……こそ」

提督「ん?」

春雨「こちらこそお願いします! どうかわたし、春雨を提督、大佐の下に置いてください!」

春雨は涙で赤くなった目を恥じることも忘れ、感謝の言葉をハッキリとした声で提督に伝え、彼の提案を快諾する意を示した。

提督「そうか。ようこそ我が鎮守府へ。これから宜しく頼む」

春雨「はい! 宜しく願います!」

北上「おめでとー、よろしくねー♪」

陽炎「よろしく! 陽炎よ!」

春雨が提督の提案を快諾すると同時に、今までその様子を見守っていた北上達が暖か

い言葉で彼女を迎えた。

提督（……感情抑制装置は、深海棲艦からの回収だから無いとは思うが、一応叢雲たちに調べて貰おう。もしなければ、ダミーを用意させるくらいはさせた方がいいかな）

提督（装置を作った奴らなら必ず報告の時点で装置の有無を確認したがるはずだ。回収の経緯もある程度改変した方がいいかもしれない。報告の前に一度親父に相談してみよう）

提督が春雨たちの様子を眺めながらそんな事を考えていると、誰かが自分の服の袖を引っ張っている事に気付いた。

提督「うん？」

隼鷹「そいでさー、報告の2つ目なんだけど」

提督「ああ、そういえば2つあるとか言ってたな。なんだ？」

隼鷹「ん。今回の作戦の成功でさ」

提督「ああ」

飛鷹「大淀さんの実動部隊への参加の許可がもらえるわよ」

提督「大淀の……」

扶桑「ああ、そう言えば作戦の概要書に一定の戦果を挙げた人にそんな報酬があった
ような」

鳥海「大佐、これはチャンスですよ」

摩耶「大淀の奴にこの事を伝えて喜ばせてやれよ！ 大佐が寝ている間、あいつ半分
その事を諦めてたんだぜ？」

ここぞとばかりに鳥海たちが提督に決心させる為に畳み掛けてきた。

提督「……そうだな。誰か大淀が何処にいるか知っているか？」

愛宕「この時間帯なら鳳翔さんと明日の朝食の仕込みをしているんじゃないでしょう
か？」

提督「そうか。皆、悪いが少し行ってくる」

北上「あ、もうあの話したの？ うん。頑張つてねー」

提督「ああ」

提督は短くそう受け応えると、足早に部屋を出て行った。

第6話 「狂喜」

提督 「大淀、ちよつといいか？」

鳳翔 「あら、大佐。どしたんですか？ 大淀さんならこちらに」

大淀 「大佐？ どうかしましたか？」

提督 「ああ、ちよつとお前に報告があつてな」

大淀 「え、私に報告ですか？」

鳳翔 「大佐が艦娘に報告……あつ」

大淀 「鳳翔さんどうかしました？」

鳳翔 「ふふふ、大佐、私少し席を外しますね」

大淀 「え？」

提督 「いや、別に居ても構わな——」

鳳翔 「ダメですよ？」ズイ

提督 「……分かった」

大淀 「え？ え？」

鳳翔 「それでは少しの間失礼しますねー」パタパタ

大淀「行っちゃった……いったい……？」

提督「さあな……？」

大淀「あ、ごめんなさい。それで、えーと、私にご報告でしたっけ？」

提督「ああ、そうだ。そんなに大した事……いや、お前にとっては重要な事か」

大淀「私に？ はい、なんでしょう？」

提督「先ほど、隼鷹達が作戦から戻りAL作戦の完遂を確認した」

大淀「本当ですか？ それは、良かったですね！」

提督「ああ、そうだな。あいつらはよくやってくれた。後はMI作戦を何とか成功させるだけだが、まあその前にだな」

大淀「あ、そうでしたね。私に何か？」

提督「ああ。AL作戦の目的達成、この戦果を上げた者には本部よりある報酬があつてな」

大淀「あつ……」

提督「気付いたか？ まあ、そういう事だ。その……今更だがよろしく頼む」

大淀「……」

提督「大淀？」

ゴンツ

提督「っ!？」

放心状態に見えた大淀は、何を思ったのか厨房の流し台に立つといきなり拳を振り上げ、それを力いっぱい振り下ろした。

提督「お……大淀？」

予想だにしない行動に困惑の表情で提督は大淀に話し掛けたが……。

ゴンツ、ゴンツ

彼の声が聞こえていないのか、大淀はひたすら流し台を叩くだけだった。

提督（一体どうしたというんだ？ 俺は何か不味い事でも言ってしまったのか？ 怒らせてしまったのか？）

提督は大淀の行動の原因を頭脳をフル回転させて推測しようとしたが、まるで見当がつかなかった。

提督（ん……？）

その時提督は大淀のある変化に気付いた。

大淀「……………くくく」

大淀は耳を澄ませてなければ分からないくらい小さな声で俯いて拳を打ち据えながら低く笑っていたのだ。

提督（これは、もしかして……）

提督はそこでようやく大淀の行動について理解、もとい理由が解った気がした。

俯いて笑っている大淀の姿は一見すると近寄りがたい雰囲気だったが、長い髪から僅かに覗く彼女の顔は紅潮し、何かを我慢するように小さく身体を震わせていた。

そうつまり彼女は――。

提督（嬉しきは必死に堪えているのか？）

もう一度耳を澄ましてみると彼女の低い笑い声の後から

「くうっ……」や「もうっ、ふふ……」といった嬉しそうな声が僅かだが漏れ聞こえた。

提督「大淀――」

ゴンツ、ゴン

提督（流し台が最早見る影もないくらいデコボコに……。俺は、今まであんな力で抱きしめられたりしていたのか……）ゾツ

提督（……なるべく落ち着かせるようにして話し掛けなければな）

提督「大淀、嬉しいのは分かるが、それくらいで一度……」

大淀「大佐！」

提督が最後まで言葉を言わないうちに大淀は自分の方から彼の方を向き、満面の笑みで嬉し涙が滲んだ瞳で続けてこう言った。

大淀「ありがとうございます！」

ギユウウウウツ

提督「ふっ……ぐうっ……」

大淀「大佐……私、私……本当に嬉しくて頭がどうにかなってしまいそうです……♪」
ギユウウウウウウ……

提督「……」（た……耐えろ、俺……。こ、ここで意識を失うわ……け……）

大淀「……？ 大佐？ どうかしました？ さつきからどうして無言で……」

提督「」

大淀「あっ」

大淀「大佐ああああ!!」

その後、大淀の悲鳴を聞いて直ぐ駆け付けた鳳翔が見たのは、自分の予想に反して提督を抱き上げてオロオロしている大淀の姿だった。

幸い意識は直ぐに回復したものの、これが原因となったのかは定かではないが、以降提督が艦娘に自分から近づくことはあまりなくなるとかなんとか。

第7話 「成功」

～M I 島沖

武蔵 「こちら武蔵。今からM I 作戦の最終目標、島確保の任務を開始する」

提督 『……了解した』

武蔵 「大佐？ どうかしたか？」

提督 『いや、長い作戦で疲労しているだろうが、これが最後だ。健闘を……いや、全員無事の帰還を願う』

武蔵 「大佐……。参ったなそんな嬉しい事を言われたら気が抜けてしまうじゃないか。だが、了解した。必勝・必生を約束する」

提督 「頼んだ……待っているぞ」

プツ——

武蔵 「聞いたか？」

長門 「ああ、これはもう絶対に成功させないと」

金剛 「うう、大佐に凄く会いたくなっちゃったヨ……」

Bis「これはもう、帰ったらたくさん甘えるしかないわね！」

加賀「煩惱は少し抑えて下さい。こちらも我慢しているのです」

加賀はそう言つて胸元からある物を大事そうに取り出し、それを見つめ始めた。

赤城「！ 加賀さん、それ！ 大佐の写真!？」

利根「何じやと!？」

加賀「意外ですね。誰もこういうのは持つてないんですか？」

筑摩「……なんで考え付かなかつたんでしよう」ズーン

神通「あ、あの……最後の作戦なのに士気を下げるのは……」

響「……」プイッ

時雨「どうしたの？ 響。悔しいの？」

榛名「し、時雨ちゃん！」

木曾「ふっ……、ははははは。なんだよこれ、最後だつて言うのに締らないな！」

目に涙を滲ませて可笑しそうに笑う木曾。

長門「全くだ。だが、実に私達らしい。なあ？」

武蔵「ふっ、そうだな。さて、気を抜くのも大事だが、それぐらいにしておけよ。そ

ろそろ、行くぞ」

金剛「リョーカイ！」

響「……D a — c (ダー)」

時雨「あ、ロシア語？ 恥ずかしさを隠してるのかな」

神通「あ、レイスちゃん達が戻って来ましたよ！」

Z1「ただいま！ 敵を確認して来たよ！」

長門「戦力は？」

Z3「確認した感じ、あれは姫級の空母だと思うわ」

龍驤「取り巻きはフラグシップクラスの軽空母又級2隻、同クラスの戦艦ル級と駆逐艦二級の……あれは、多分最新型やな」

武蔵「ふむ……どれも出撃前に軍の調査資料を見た限り、その中でも最近確認されたものばかりみたいだな」

利根「相手の力が判らないという事か？ それくらいで吾輩は怖じづいたりはしないぞ！」

筑摩「姉さん、落ち着いて下さい。それはみんな同じですよ」

響「寧ろここまでの道のりは、元々ないものだと思っていた道中支援もあつたからね。正直今の時点の響達の戦力はまったく消耗してはいないよ」

加賀「その通りです。加えて今から出向く最後の戦いには大佐の友人、中佐殿の支援

があるとの事。慢心と油断さえしなければ……ただ前に集中すればいいのです」

赤城「本当に……中佐殿には感謝ですね」

長門「そうだな。なら私達も自身の活躍をもつて感謝を伝えるとしよう」

神通「皆さん準備はよろしいですか？」

Z1「勿論、大丈夫だよ。いつでも！」

Z3「ここまで来て負ける事なんか考えられないわ」

龍驤「ええ気合や！うちも行けるで！」

飛龍「蒼龍？」

蒼龍「大丈夫だって。そっちこそしっかりやってよね」

木曾「よしっ、皆覚悟はいいみたいだな。なら行こうぜ！」

長門「了解した。ならば——」

武蔵「出撃だ！」

〔某鎮守府提督執務室〕

提督「皆、ご苦労だった。よく帰って来てくれた」

金剛「当ったり前ヨ！約束したじゃナ——」

Bis「大佐っ、ただいま！作戦成功させたわよ！抱き締る」

比叡「ああっ!? な、なに一人だけズルイで——」

提督「!!」ビクッ

ササッ

マリアが提督に抱き着こうとしたその瞬間、提督は驚異的な身のこなしで彼女を紙一重で躲した。

B i s 「え……? つわぶっ」ビタンッ

比叡「え?」

丁督「お?」

艦娘達「……」

提督「……こほん、失礼した。マリア、すまないがそういうのは後だ。金剛もいい——」

トコトコ

神通「あ、響ちゃんっ」

響「……」

ギユッ

提督「響?」

響「大丈夫。怖くないよ。響は皆とは違うから」

響以外の艦娘「!!」

丁督「ほほう？」ニヤリ

提督「響お前何を——」

金剛「そうネ！ 大佐、どういう事ヨ!? 大佐はワタシ達が怖いのだ!? だから避けた

ノ!?」

B i s「ええっ!?」ブワツ

加賀「大佐、ご説明願います」

提督「お前たち落ち着け。作戦から戻ってきたばかりだろう。こんな規模の作戦を成
功させたんだ。その祝辞くらいさせ——」

利根「そんな事はどうでもいいのじゃ！ 大佐は、吾輩達を恐れているのか!? そう
なのか!？」

提督「ど……どうでも……」

筑摩「大佐っ、筑摩も教えて欲しいです！」

ワー、ワー！

北上「なに？ これなんの騒ぎ？」

時雨「大佐が僕達の事怖がってるんだって」

北上「へえ？ どうせまあ勘違——」

不知火「聞き捨てなりません。不知火は怖くないです」

陽炎「や、怖いわよ？ 今の不知火」

摩耶「大佐っ、聞いたぜ！ こ、この態度は照れ隠しなんだからな!? 誤解するなよ

!？」

飛龍「そ、そうなの……？ 怖がってるの？」ウルツ

蒼龍「勘違いだと思っただけだなあ」

長門「……木曾、止めてくれ」

木曾「いや、いくら長門姐に言われても……。それに、ほら……」

長門「ん？」

長門が木曾が指を指した方向を見ると、そこには武蔵が涙目になって駆逐艦達と一緒に提督に言い募る姿が見えた。

人目を憚らずに子供の様に提督に自分は怖くないと必死に訴えるその姿は、先程までの頼もさは最早どこにもなかった。

武蔵「せ、戦艦だから怖いのか!? なら大丈夫だ！ 私は大和型、他の戦艦とは違う

ぞ！」

丁督「くつくつく……ふく、ははははははっ」

長門「中佐殿、笑ってないで止めて貰えると助かるのですが」

丁督「いや、悪いが断る。こんな光景俺の鎮守府では見る事ないからな。面白い」

神通「性格悪いですよ……」

丁督「悪いな。ま、これも一種の幸せ？　ってやつだろ。ま、俺はこれでお暇する。またな」

長門「ふう……。支援ありがとうございます。大佐に代り、改めてお礼を申し上げます」

神通「ありがとうございます」

丁督「まったく、出来た女達だな。いいっていいって。もうそれで十分来た甲斐があつたつてものだ」

神通「また何か御用がありましたらいつでも」

丁督「ああ。なるべくそうならないように気合入れるわ。じゃーな」

神通「……どうします？　この収集」

長門「なんか考えるのが面倒になってきた。私達も一緒になって混ざるか？」

神通「大佐が困りますよ？」

長門「ああ、一緒になって困らせ（甘え）よう」
神通「……」

長門「どうだ？」

長門が悪戯っぽい笑みを浮かべて神通に問うた。

神通「いいですね」ニコッ

言葉に含まれた意味を悟った神通が、顔を赤らめながら同じ笑みを浮かべて同意した。

長門「じゃあ行こうか。大佐の奴、珍しく混乱してるみたいだぞ。チャンスだ」
神通「そうですね。お助けしましょう♪ 大佐っ」

第8話 「大量」

舞風「舞風でっす！」

初風「初風よ」

浜風「浜風です」

早霜「早霜です……」

時津風「時津風です！」

雲龍「雲龍よ。よろしくね」

提督「……加賀？」

加賀「はい？」

提督「この子達全員先の作戦で見つけて来たのか？」

加賀「いえ、雲龍さんだけは違います。彼女はM I作戦の成功に貢献したと認められた提督にのみ与えられる本部からの褒賞です」

提督「褒賞……」

加賀「あつ、すみませ……」

提督「いや、いい。俺達がどう思おうが本部はそのつもりでくれたんだろう」

雲龍「？ 私が何か？」

加賀「雲龍さん、大佐はね、あなたが本部から褒賞として送られてきた事がまるで物の扱いの様で気に入らないの」

雲龍「そんなこと……現に私達は兵器だし……」

提督「雲龍」

雲龍「はい」

提督「確かに君の言う通りだ。俺の考えは倫理ばかり気にした軍人としては甘い考えだと思う。だがな、これは俺の信条なんだ。どうか我慢してくれないか」

雲龍「そ、そんな我慢だなんて……」

提督「それでも俺は軍人だ。場合によっては君を冷徹に扱う事もあるだろう。だが、極力そうならないようには最善は尽くす」

提督「そしてそれ以外の時は俺は君を、君たちと人と同じように接するつもりだ。ようこそ我が鎮守府へ。歓迎する」

雲龍「提督……」

提督「ああ、それと。ここでは皆俺の事は『提督』ではなく、『大佐』と呼んでいる。よかつたら皆もそう呼んでくれると嬉しい」

時津風「大佐？ 提督は准将じゃないの？」

加賀「愛称みたいなものよ。皆この呼び方が好きなの」

初風「へえ……でも、甘くない？ さっきの発言だつて……」

舞風「でも、わたしは好きだなー。りよーかい、大佐！ これからよろしくね！」

早霜「……巡り巡つて、こんな素敵な殿方と出会えるだなんて……」

トトツ

早霜はそう言うのと静かに提督に歩み寄り、そつと抱き着いた。

提督「ん？」

早霜「大佐……早霜、この貴方との出会いに感謝致します……。どうぞ、よろしくお願いします、ね？」

提督「……ああ。よろし——」

ギユツ

提督「ん？」

服を引つ張られる感触がした方向を向くと、そこには顔を赤らめて視線を逸らしている浜風がいた。

浜風「その……私も……よろしく、です」

提督「ああ。2人ともよろしく頼む」

雲龍「……いい、人みたいね。分つたわ。私も大佐の全てに従います」ペコリ

どことなくマイペースで掴みどころのない雰囲気を纏っていた雲龍が、此処に来て初めて心からと思える温かい笑みを浮かべて提督に頭を下げた。

時津風「時津風も！ よろしくお願いしたいです！ トツキー、つて呼んでね大佐！」
提督「それは絶対しないが時津風、お前もよろしくな」

時津風「えー？ 呼んでくれないんですかー？ でも、いいや。えへへ♪」ギョツ

初風「……」

気付いてみれば初風は一人だけその場に残されたいた。

厳しい意見を言つてその場の雰囲気を引き締め、あわよくば提督にそれを評価してもらう算段がもろくも崩れた形だ。

加賀「無理しなくていいのよ？」

地面を見つめながら半分泣きそうになっていた初風に気付いた加賀が優しくそう言った。

初風「でも私……」

加賀「大丈夫よ。大佐はこのくらいの事、気にする人ではないわ。寧ろ今はあなたが自分から動かないと。このままこれが禍根となつて大佐との確執に繋がつてもいいの？」

初風「う……」

ポン

初風「あ……」

加賀「安心して行つてらっしゃい」

頭を撫でられて気持ちの整理がついたのか、初風は意を決して提督との距離を縮め始めた。

トコトコ

初風「あ、あの……ごめんなさい大佐。さっきは私……」

提督「いや、初風、君の意見は正しい。だから俺は皆にお願いしたんだ」

初風「うん、分かつてる……」

提督「初風、君もよかつたらこの甘い男の戯言に少しだけでいい、耳を傾けてくれな
いか？」

初風「そ、そんな下手にでないでっ。わ、私のほうこそ、その……あの……」
いざ言葉にしようとする気恥ずかしさからなかなか言葉にならなかった。

ただ一言、「よろしく」というだけなのに。

提督「……」スツ

提督はそんな初風の様子を見て静かに彼女の前に手を差し伸べた。

初風「大佐……？」

提督「さつそく一つ頼みを聞いてくれたか。ありがとう」

初風「え、頼みって……あつ」

提督「そう、『大佐』と呼んでくれた。これからもそう呼んでもらえるか？」

初風「……！ はい！」

提督「ありがとう。では諸君、改めてようこそ。我が鎮守府へ」

「よろしくお願ひします！」

加賀「流石は大佐、掴みはバツチリですね」ポツ

加賀はその様子を少し離れた位置で見ながら改めて自分が愛した提督を惚れ直すのであった。

第9話 「食べ物」

赤城「お腹空いたなあ……」

グ

提督「資材ならあるぞ？ 弾薬以外、だが」

赤城「大佐……。わざとそれ言ってますよね？ 資材はあくまで私達が艦娘として戦

う為のエネルギーなんですよ！」

提督「そうだったか？」

赤城「むう、からかってますね？ いいですか？ 大佐は私達が美味しそうに水の代

わりに重油を飲んで、口を黒色に汚している光景を想像できます？ そんな唇で接吻と

かされたいですか？」

提督「……」

赤城「できないでしょう？ 他の資材だって同じです。どうやってボーキヤ弾薬、鉄

を食べろって言うんですか？ あんなの味がどうこう以前に硬くて食べられるわけな

いじゃないですか」

提督「そうだったな。いや、悪かった」

赤城「もうっ、やっつと分つてくれましたか？ 補給だつてイチイチ原形に戻らないといけなかったから面倒だったんですよ」

提督「ふむ、それだけにあのノ資材には本当に助けられたな」

赤城「そうっ、それですよ！ あんなに簡単にお薬を飲むように処方するだけで補給できるなんて……素敵です♪」

提督「その分、消費に対して感覚を狂わせないように苦労しているがな」

赤城「ふふ、ちよつとパラパラ落とすだけで戦艦も建造できちゃいますからね」

提督「恐ろしい話だ」

赤城「本当ですね、ふふふ。それで大佐、どうしたんです？ 私に何かご用ですか？」

提督「ああ、空腹のところ悪いがお前に渡すものがあつてな」

赤城「ご飯ですか？」

提督「流星にこれは食べられると困るんだが……。これだ」

コトツ

小さな箱から光る物が覗いていた。

それはケツコン指輪だった。

赤城「あ……これ」

提督「昔から空母の主力として支えてくれていたのに待たせてしまったな」

赤城「……」（あ、私……もう限界まで来てたんだ……）

提督「受けてくれるか？」

赤城「……5人目ですか？」

提督「そう……だな。そう言われると心が少し痛いが……」

赤城「嘘です！ 何番目でもいいですよ！ 嬉しい！ ありがとうございます大佐

！」ダキッ

提督「……！ む……」

赤城「ふふ、怖かったですか？ 大丈夫ですよ。私は、大事な旦那様を締め付けたり

なんかしませんから♪」

提督「助かる……。だがな」

赤城「あつ、そうですね。やつと夫婦になりましたからね！ 先ずはキスを……」

提督「いや、違う。扶桑が……」

赤城「え？」

その言葉に赤城がハツとして顔を上げると、そこには黒いオーラ全開で『笑つてない笑み』を湛えた扶桑が佇んでいた。

傍らには山城が重鎮の如く控え、ただでさえ黒いオーラを一緒になって倍増させていた。

扶桑「ふ・ふ・ふ、大佐、い・い・て・ん・き・ですね♪」

提督「扶桑……」

山城「本当、良い天気ですねえ。赤城さん♪」

ピシヤツ、ゴロロロロ!

提督（毎度思うが、この2人には何か超自然的な力でもあるのか?）

赤城「扶桑さん、山城さん……。これは……」

扶桑「別にいいんですよ? 成長限界になったんですものね。その資格を行使する

のは当然だと思います」ニコツ

提督「扶桑……」ゾツ

山城「大佐、こつちも見て下さい? いいですね、指輪。私達も早く欲しいなあ。ね

? お姉様」

扶桑「山城、我儘を言つて大佐を困らせてはダメよ。私達も成長限界まで達したらいいだけの話なんだから♪」

山城「あ、そうですね! 忘れてました♪」

提督（脅迫されてるよな、これ……。? 早く鍛えろつて）

扶桑「それで、大佐あ……。今後の出撃や演習にでる艦隊の編成についてなんですが

……」

提督「いや、それはあくまで予定に則った……」

山城「その予定を少しだけ歪ませて欲しいんですけど……?」

扶桑と山城が凄まじい圧迫感（若干柔らかな物理敵圧力有り）で提督に詰め寄る。

その事態に提督の身の危険を感じた赤城は、密かに忍ばせていた練習用の艦載機の手を手に持つと、一瞬で2人から間合いを取って洗練した動作で弓を使わずに手投した。

解き放たれた烈風が、扶桑達の気を逸らして提督が危機を脱する為の隙を作るべく突進する。

ボンツ

赤城「え?」

赤城は目を疑った。

もう少しで扶桑達の気を逸らす筈だった烈風が小さな被弾音と共に力なく墜落したからだ。

扶桑「赤城さん、邪魔しないでくれます?」ニコツ

山城「危ないですねえ。偶然気付けて良かったです♪」

赤城（偶然? いや、それより艦載機の運用で私が戦艦に負けた!?)

山城「ふふふ、数では負けますが、一対一なら結構自信あるんですよ?」

扶桑「山城、良い子ね」ナデナデ

山城「ああん、お姉様♪」

赤城「う……大佐」

扶桑「大丈夫ですよ？ 別に獲って食べようという訳ではないから。ただちよつと

……」

山城「お話したいだけですよ♪」

提督「赤城、ありがとう。だが、もういい。ここからは俺に任せろ」

赤城「大佐……そんな、嫌です。せつかく指輪をもらったばかりなのに……！」

提督「……後で今日の定食3人前持って行ってやるから」

赤城「大佐、頑張ってくださいね！ ご武運をお祈りしています♪」

テテーツ

提督・扶桑・山城「……」

扶桑「あ、あの大佐……」

提督「何も言うな……」

山城（なんか不憫……）

扶桑「あ。そ、それじゃあちよ、ちよつとお話しましょうか。あ、じゃなくて、させ

て下さい。お願いします」

提督「急にしおらしくしなくていい。話ならちゃんと聞いてやる」

山城「あ、あの……ホントごめんなさい。それじゃ次の出撃なんです……」

結局、無意識とは言え、赤城のお蔭でその日の扶桑達の交渉は、特に揉めたりする事もなく少し出撃の頻度を増やすだけで事なきを終えた。

だが、それと同時に提督の赤城に対する認識も少し変わったという。

第10話 「交流①」

舞風 「大佐ー、いるー?」

提督 「ん、どうした」

舞風 「えへへー、暇だから来ちやったー」

提督 「暇だから……」

舞風 「あ、駄目だった? そういうのここでは禁止?」

提督 「いや、今は休み時間だしな。それに良識の範囲であれば提督と艦娘との交流に特に規則は設けていない」

舞風 「良識の範囲? 曖昧な例えだとわたし分かり難いから具体的に教えて欲しいナー?」

提督 「単純だ。過激なスキンシップだ」

舞風 「あー、大佐が男だから?」

提督 「それもあるし、一応俺達は軍人だからな。国の守り人として、公務員としてある程度は市民の規範でならなくてはな」

舞風 「はあ、堅苦し……や、真面目なんだねえ」

提督「そこまで堅物のつもりはないぞ。さつきも言った通り良識の範囲なら問題……
オーケーだ」

舞風「あ……」

提督「解つたか？ 今みたいにお前が碎けた口調で俺に話し掛けても、それが場の雰囲気壊したり問題となる可能性がなければ、俺はとやかく言うつもりはない」

舞風「なるほどー、それは……」

早霜「良い事を聞きました」

舞風「ひっ!？」

提督「早霜、いきなり出てくるな」ヌツ

早霜「あら？ 私はずっと大佐の椅子の近くにいたではありませんか？」

提督「そうだが、舞風が全く気付いてなかった」

舞風「えっ、今までずっと居たの？ だったら『ここに居ますよー』くらいのアピールあつても良かったのに」

早霜「ごめんなさいね。大佐のお側があまりにも居心地が良かったから、つい失念してしまっていたわ……」

提督「……そこは絨毯の上とは言え、床なんだが？」

早霜「はい、だから？」

提督「そこにずっと座っていて居心地が良かったのか？」

早霜「大佐の側ですから」

提督「……舞風もそうだが、なんでここに来たばかりのお前がもうそんなに俺に好意的なんだ？ 艦娘だからか？」

早霜「……そうですね。艦娘だから、大佐に惚れてしまいました……」

提督「しまった。墓穴を掘ったか」

早霜「というのは冗談ですが好意を持っているのは本当ですよ？」

提督「何故？」

早霜「あの時……大佐が私達を迎えてくれた時に掛けてくれた言葉に私、感激してしまいました」

提督「……」

早霜「……」

提督「ん？ それだけか？」

早霜「はい。いけませんか？」

提督「……いや、もういい。好きにしろ」

提督（こいつの押し強さは加賀や榛名に通じるものを感じるな。何故大人しかつたり冷静な奴に限ってこうも恋路には直情的なのか）

舞風「……はあ」

提督「ああ、すまない。舞風は暇を潰しに来たんだつたな。何か食べて行くか？ 軽く作ってやるぞ？」

舞風「え？ ああ……それもいいけど、なんかなー」

提督「？ どうした？」

舞風「やー、なんかさっきの大佐と早霜のやりとり見てたらちよつとねー」

提督「？」

トコトコ

提督「舞風？」

舞風「よいしょつと」

舞風は提督の近くまで歩み寄るとおもむろに、椅子によじ登り彼の膝に座った。

早霜「！」

舞風「えへへー、別に嫉妬ってわけじゃないかもだけど。なんか見てたら羨ましくなっちゃつてねー。これくらいしてもいいでしょ？」

提督「それだと何も作ってやれないぞ？」

舞風「いいのいいの、今はこれで。このままなんかお話しよー」

早霜「……舞風さん」

舞風 「ん？ なにー？」

早霜 「この早霜、貴女の積極的な行動に少し感銘を受けてしまいましたわ。だからその……」

舞風 「うんっ。代り番こしよっ」

早霜 「！ ええっ」 パアッ

提督 「俺の了承を得るつもりはないのか？」

舞風 「えっ、断わるの？」

早霜 「大佐……」

提督 「お前たち、そういうのはズルイとは思わないか？」

舞風 「艦娘でも一応女の子だしねー。で、いいでしょ？」

早霜 「お願いします、大佐……」

提督 「初めからそう言ってくれ。いいだろう」

舞風 「さっすがー、男前ー！」

早霜 「素敵です……」

提督 「煽っても何もでないぞ」

舞風 「出せるでしょ？ 何か面白いお話してよー」

早霜 「そうですね。私も大佐のお話聞きたいです……」

提督「話か……そう言われると急には思いつかないものだな」

舞風「じゃあ、質問してあげるよ！好きなものは何ですか!？」

提督「平穩だ」

舞風「なにそれ!？」

早霜「それでは私からもさせてください。大佐は私の事が好きですか？」

提督「時間と仲良くなれば、今よりかは好意を持つかも知な」

早霜「ズルイです……」

舞風「ならならっ、今度はー」

提督「俺は質問されるだけか？」

舞風「私達が飽きるまでね！」

早霜「私も大佐の事もっと知りたいので……」

提督「……仕方ないな。まあいいだろう」

舞風「ありがとう！じゃあねじゃあね、次はー」

早霜（聞きたいことが有り過ぎて困っちゃうわ……）

く執務室前廊下

不知火「……」ジー

金剛「ドウ？ 新しい子達と大佐は？」

不知火「非常に……非常に……」ギリツ

伊勢「あー、うん。もう答えなくていいよ」

翔鶴「今回仲間に入った子達は今までの中で最多ですからね。全員の交流が終わるまでは私達も少し我慢しないとね」

島風「うー！ その替り落ち着いたらいつぱい構ってもらうんだからね！」

加賀「それ乗ります」

日向「私もな」

天龍「表情一つ変えずに即話に乗るのな……」

愛宕「ふふ、妬けるわねー♪」

長門「ほどほどにしておけよ？ ほら、もう直ぐ訓練の時間だ行くぞ」
「ハイイ」

武蔵「……」ジー

B i s 「……いいなあ」ボソ

長門「おい、武蔵、マリア行くぞ」

武蔵「はっ!？」

B i s 「え!？」

長門（こいつらが一番心配な気がするな）

第11話 「捕獲」

丁督「……あ？　なんだお前？」

磯風「い、磯風……だ」

丁督「あ？」

磯風「つ……磯風……です」

丁督「ん？　ああ、悪い。ちよつと声が小さくて聞き返したただけだ。そつか磯風か」

丁督達は大佐達への支援を終えて帰路に就いている途中にある深海棲艦の群れを偶然発見した。

その群れは、今回の作戦に多くの戦力が向けられている隙に本土への直接攻撃をせんとする極めて危険な別働隊だった。

丁督達は当然の如く存在を確認した瞬間に戦闘態勢に移行、そして見事不意打ちに成功した。

偶然の発見ではあるが奇襲に成功し、初手こそ有利に進める事ができたものの、いざ交戦してみるとその部隊は、戦艦棲姫2隻からなる特一級の危険度に相当する精鋭中の

精鋭だった。

丁督は、もしかしたらこの戦いで戦死するかもしれないと、心の中で久しぶりの強敵との出会いに興奮し、狂喜した。

彼の色にすっかり染まっていた部下の艦娘達も同様だった。

久しぶりに心の底から本気を出せるかもしれないと、凶暴な笑みを皆無意識に浮かべ、中にはエクスタシーまで感じて絶頂する者までいた。

が、結局結果は敵側も奮闘したものの、味方側少破数隻、敵側完全沈黙による戦果Sクラスの勝利で終わった。

お蔭で丁督達は若干不完全燃焼気味となっており、艦隊の空気はぎすぎすして最悪のものとなっていた。

これは、乱交でもして皆のストレスを晴らすしかないかと、全員が高速艇に集まり脱衣し始めた矢先に磯風は彼らに偶然見つけたのだ。

はつきりいってお互い第一印象が最悪の出会いだった。

磯風（な、なんで？　なんでこの人たち裸になろうとしていたの？）

基本的に勝ち気で男勝りな性格だった磯風だが、発見されて早々この異様な集団に心を折られてしまった。

対して丁督達はこの時点ではまだ機嫌が悪い状態だった為に、不意に現れた艦娘に敵

意の籠った視線を投げてしまい、更に彼女の心を折る形となってしまったのだ。

ーそして現在に至る。

磯風「あ、あの……わ、私……」プルプル

丁督「あー、さつき潰した敵から艦娘に戻ったのか？」

磯風「は、はい。そう……だ……と、思います」

丁督「なるほどなー。駆逐艦かあ」

長門「いいのではないか？ うち駆逐艦もそんなに多くは無いわけだし」

丁督「いや、別に拒むつもりはねーよ。ただほら、駆逐艦の新米なんて久しぶりでさ」

金剛「Oh そういえばそーネ。ふふつ、雷久しぶりの後輩で喜びそーネ」

磯風「……」

磯風はまだ震えていた。

会話の内容があまり穏やかに聞こえなかったからだ。

磯風（私もしかして凄く怖い所に配属になっちゃうかも……）

翔鶴「あの……提督、仲間同士の会話はその辺にしておいた方が……。磯風ちゃん

すっかり怯えちゃってますよ？」

丁督「へ？ あ、ああ。なんか不良っぽい会話に聞こえちゃったか」

加賀「あながち間違いとも言い切れませんがね」

磯風「……っ」ビクビクッ

大井「ちよつと加賀さん」

加賀「失言でした。失礼」

丁督「あー、磯風？」

磯風「は、はいっ」ビクッ

丁督「いや、悪い悪い。怖がらせるつもりはなかつたんだ。いきなりこんなの見せつけられて不安かもしれないが、俺達は……あー、まあそんなに悪い奴じゃないぞ？」

日向「提督……そんなにか言ってしまったら、少しは悪い奴という風にも取れてしまっぞ？」

磯風「……」ジワッ

丁督「ああつ、泣くな泣くな！ ほら、今のは表現だ。言葉のあやだ。俺達はちよつとガラが悪いだけで一応これでも海軍の中では期待されている戦力なんだぜ？」

長門「階級は未だに中佐だけだな」

金剛「部隊も少ないから big な作戦は support くらいしかできないけどなー」

日向「ついでに資材を使いまくるから本部からの印象も悪いけどな」

加賀「オマケに提督も含めて基地の所属員は全員が好色で淫乱……風紀の乱れもここまで来てしまったかという感じですよ」

丁督「お前たちなぜそれを今ここで、このタイミングで言いやがる……」
磯風「……」

大井「わ、わたしは言ってますんよ？」

翔鶴「私も言ってますんからね!？」

提督「そうだな。じゃあ有難い補足を入れてくれたその4人には、お礼に暫くセツクス抜きにしてやろう」

長門・金剛・日向・加賀「!？」

大井「て、提督私達は……?」

提督「ああ、お前たちは基地に帰ったらちゃんと相手して……いや、愛してやる」

翔鶴「提督う……♪」ポツ

長門「ま、待て提督! さ、さっきのはだな……!」

金剛「NO! 提督ウ! sorry ネ! だから……だからあ……!」ジワ

日向「し、暫く……? 提督から暫くと言う言葉は初めて聞いた気がする……い、一ヶ月か? い、いやもしかしたら……?」ガクガク

加賀「私は今から提督の犬です。犬は主人には絶対服従するもの。だから許してくだ

さい。お願いします」

丁督「ああ？ 聞こえんなあ？」

長門・金剛・日向・加賀「提督!!」

磯風「ぷっ……くすす」

丁督「お？」

磯風「ふふふ、あはははははは」

丁督「やつと笑ってくれたか？ 少しは緊張は取れたか？」

磯風「はい。ええ……本当にガラが悪くて淫乱そうだが、悪い人じゃないんだな提督は」

丁督「だからそう言ってるだろ」（口調も本調子に戻ったか）

磯風「……私にも手を出すのか？」

丁督「信じられないかもしれないが、俺は自分から手を出したことは無い。全員要求されて同意した上での関係だ」

磯風「あら、そう。じゃあ私は大丈夫なのね？」

丁督「ああ、お前が俺に惚れなければな？」

磯風「面白い人……それに凄い自信……いいわ。磯風、これより貴方、提督の指揮下に入ります！」

丁督「そうか、ありがとな。よろしく」

長門「な、なんだ。やっぱりこれは磯風の奴を安心させる為だけの……」

丁督「いや、あれはマジだ」

長門・金剛・日向・加賀「」

磯風（あ、白くなつた。表情もなんか……）

大井「大井よ。これからよろしくねっ」

翔鶴「翔鶴です。困った事があたら提督や私を頼つてね♪」

磯風「あ、うん。宜しくお願いする」

提督「よっし、じゃ帰るか。半端になつて悪いが、お前ら服着ろよ」

大井「あ、そういえば私達下着だけね」

翔鶴「あら、本当。きやつ」ポツ

磯風「……」（本当にこの艦隊大丈夫かな……）

第12話 「交流②」

初風「初風、春雨、改めて大佐に挨拶に来たわ」

春雨「来ました！」

提督「ん、わざわざありがとうございます。まあ座って楽にしててくれ」

初風「ええ、ありがとう」

春雨「失礼しますね」

提督に促された二人は部屋に置いてあるソファーに座った。

提督「ああ」

カリカリカリ……

提督「……」

初風・春雨「……」

カリカリカリ……

提督「……」

初風・春雨「……」

カリカ——

初風「ねえ」

放置に耐えかねた初風が声をあげた。

提督「ん？」

初風「私達は座ってる間何をしてたらしいの？」

春雨「は、初風さん」

提督「ああ、すまない。まだ執務が残っていてな。気が利かなくて悪かった」

初風「えっ、いや別にそこまで言わなくてもいいけど……」

春雨「ご、ごめんなさいっ」

提督「いや、気にするな。これは俺が悪かった。そうだな……何か本でも見るか？」

初風「何があるの？」

提督「兵法書や戦史書といった専門書もあるが、一応少ないが漫画もあるぞ？」

初風「あらそう。なら私は戦史書を——」春雨「わたしは漫画がいいです！」

初風「」

提督「分かった。じゃあこれを読んで少しだけ待っていてくれ。もう直ぐ終わるから

な」

提督「ほら、初春」スッ

初風「あ、ありがとう……」

提督「春雨も、これでいいか？　ちよつと男性向けの漫画だが」

春雨「わあ、ありがとうございます♪」

初風「……」ペラッ

春雨「わあ」

初風「……」ピクッ

提督「面白いか？」

春雨「はいっ。確かに最初はアクの強い画風だと思いましたが、読んでみるとセリフ回しが独特でちよつとカッコイイし、ギャグもワザと適当に描いてるところなんて凄く面白いと思いました」

提督「そうか。それは良かった」

春雨「この漫画、山口提督も出るんですね！」

提督「ん？　ああ、歴史上の人物が異世界で戦うというような感じの漫画だからな」

春雨「へえ、日本の漫画だから歴史上の人物も日本字が多いのかな。ふふふ♪」

初風「……」チラッ

春雨「？」

初風 「っ」 バツ

提督 「……」

カリカリ……

初風 「……」 チラツ、チラツ

春雨 「〜♪」

初風 「……」 グス

提督 「……」

提督 「初風」

初風 「な、なに!? ちゃ、ちゃんと読んでるわよ!? お、面白いし!」

提督 「なら丁度いい。春雨と同じ漫画になってしまいが、これを読んでみないか？」

一応、歴史ものだ。作者がよくリサーチして描いてるから結構面白いとおもうぞ? 勉強にもなる」

初風 「え……?」 (大佐もしかして……)

提督 「どうだ?」

初風 「そ、そうね。勉強になる漫画というのも興味深いし、読んでみようかしら」

春雨 「わあ、どんな漫画? 読み終わったらわたしが読んでのと交換してくれませ

んか？」

初風「！ し、仕方ないわね。いいわよ」

春雨「ありがとうございます♪」

初風「……へえ」

春雨「ぷつ、くすす」

提督「ふむ」コク

カリカリ……

初風「大佐、大佐」クイクイ

提督「ん？」

初風「これ、これって本当？ こんな昔にもう地球が丸いって考えてた人がいたの？」
提督「ああ、当時は異端とされていたがな。だが理論的に考えれば当然行きつく答だ。
恐らく一般人の中にも気付いてた人はいただろうが、賢い人程異端扱いされたくないか
ら気付いてないふりをしていただろうな」

初風「へえ」

提督「面白いか？」

初風「うん、予想以上に。戦争の描写ばかりの淡々とした歴史ものかと思ったら、意

外にそうでもなかったもの。トリビア的な要素がもあつて読んで飽きないわ」

提督 「そうか。良かった」 ポン

初風 「あつ……」

提督 「む、すまない。無意識とは言え気易かつたな」 スツ

初風 「あ、ううん。いいの、構わないわ」

提督 「そうか。ありがとう」

カリカリ……

初風 「えっ」

提督 「ん？」

初風 「あ、な、なんでもないっ」 カア

提督 「？」

春雨 「……」 ジー

トコトコ

春雨 「大佐っ」

提督 「ん？ どうした？」

春雨 「わたしも……春雨も撫でて貰えますか？」

初風 「！」

提督「ん？ ああ、まあ別にいいが……」

ナデナデ

春雨「ん……えへへ♪」

初風「……」

パタン

提督「ん？ 初風、もう読み終わったのか？ 早いな——」

トコトコ

初風「……」スツ

提督「初風？」

初風「そ、その……素直になる事にしたの。大佐本当にいい人そうだし……。あ、あ
まり見栄を張るのも……損になっちゃうかなって」

春雨「初風さん……」

初風「だからその……お、お願いできるかしら？」ジツ

提督「……」

ポン

初風「ん……」

提督「これでいいか？」ナデナデ

初風「うん……。ね、もうちょっとしててくれる？」

提督「いや、あまりするのもな。仕事がもう少しで終わるからそれまでは……」
ギョツ

提督「ん」

初風「あつ。ご、ごめんなさい」パツ

クイクイ

提督「……む」

春雨「あ、あの。わ、わたしもできたらもう少し……」

初風（春雨……協力してくれた……？）

提督「……分かった。だが、これが終わったら暫く大人しくしてろよ？」

春雨「はい！」

初風「分かったわ！」

ナデナデ

初風「ん……♪」

春雨「んー……ふふふ♪」

提督（まるで猫をあやしてる気分だ）

第13話 「交流③」

浜風「釣り、ですか？」

時津風「釣れてるー？」

提督「いや、さっぱっりだ」

浜風「ふふ、そうですか」

時津風「えー、釣れてないんですかー？」

提督「ふむ、釣りの醍醐味というのを教えてやろうか？」

浜風「それには及びません。釣りをする事自体に意味があるんですよね？」

提督「そうだ。浜風はよく分っているな」ポン

浜風「ありがとうございます……♪」

時津風「えー？ 何それー？ というか浜風ブルーい！ 大佐あ、わたしも！ 時津

風も！」

提督「ん？ 釣りの良さが分からない奴は褒める気にならんな」

時津風「ええ!!」ガーン

浜風「大佐、今日は何を釣りたいですか？」

ポイントを先制した事によつて気を良くした浜風が自然な動作で提督の隣に座つた。更に何気に寄りかかり、駆逐艦としては潮も超えているのではないかと思える豊かな胸も何気に押し付けていた。

時津風「あつ、浜風胸……」

浜風「あら、どうかしましたか？ 時津風？」 タユン

時津風「う、うう〜」

提督「浜風、時津風をそう弄るな。後、当てるな」

浜風「つ、すいません」 バツ

提督（無意識にやつてたのか？）

浜風「私、この体あまり好きではなかつたのですが、初めて有効に使えらと思つたらいつの間にか……」 カァ

時津風「いいなあ。時津風そういう事したくてもできないし〜」

提督「別に親しくなる方法なら他にいくらでもあるだろう。無理にやらなくてもいい」

浜風「そう、ですか？」

時津風「なににな〜？」

提督「時津風、それはお前が今からやってみたいという事をやってみればいい」

時津風「時津風が？ んー……？」

提督「難しく考えるな。自分が仲の良い友達といつも接しているようにすればいいんだ」

時津風「あつ」

提督「分ったか？」

時津風「うん！ こうでしようっ？ たーいーき！」

時津風はそう言うのと提督の後ろに回って軽く抱き付いた。

それは女子同士のコミュニケーションとしては一般的なものと思われたが、一つだけ誤算があった。

それは、軽く抱き着いたつもりだったのはあくまで時津風の感覚だったという事だ。

ドンツ

提督「そう、この……」

ドボンツ

時津風「あ」

浜風「大佐!？」

数分後

提督「……とまあ、力加減は取り敢えず置いておくとしてコミュニケーションに関してはそこまで難しく考えなくてもいいんだ。解ったか？」ピツシヨリ

浜風「は、はい……」

時津風「ごめんなさい……」シユン

提督「まあワザとじゃないんだ。気にするな」ゴソ

浜風（あ、タバコ）

提督「……」

提督の手に握られた煙草は当然の如く水浸しで吸えない代物となっていた。

ついついその感覚で吸おうと出してしまった事が、かえって提督を海に落としてしまった時津風に罪の意識を感じさせることになってしまった。

これは、提督にとつての誤算だった。

時津風「つ、ふえ……」ジワツ

提督「いや、大丈夫だ。吸えない事は判っていたのについて出してしまったただけだ。怒ってない」

時津風「ひつく、で……ぐす……」

提督「ほら、来い」ヒヨイ

提督はそう言うとき津風を抱き上げて自ら膝の上に乗せて頭を撫でた。

時津風「う……ぐす。ごめんなき……ひつく」

提督「大丈夫だ。だからこれで少し落ち着いてくれ」ナデナデ

時津風「……ん」コク

浜風「……」

浜風「大佐？」

提督「うん？」

浜風「濡れたままでは寒いでしょう。私が温めます」

提督「温める？ いやそこまでは……」

浜風は提督が言い終わらない内に後から彼を優しく抱き締めた。

ギョツ

提督「……風邪をひくぞ」

浜風「大丈夫です。艦娘はそれほどヤワではありません。だと思えます」

提督「やめろと言ってもそうしたくないんだらうな」

浜風「はい。これは半分浜風がしたい事でもありますから」

提督「まあ、天気も良いしな。だが程々にしろよ？」

浜風「……はい」キユツ

提督「……」

浜風「あ」

提督「どうした？」

浜風「いえ……ふふ。時津風がいつの間にか寝てるものですから」

提督「ああ」

時津風「すう……ん……」

提督が自分の膝元を見ると、浜風の言う通り時津風はいつのまにか彼の腕の中でうづくまるようにして寝息を立てていた。

提督「これは、起きた時に魚の一匹は二匹を見せてやりたいな」

浜風「いい考えだと思います。応援します」

提督「お前は大丈夫か？ 寒くないか？」

浜風「私は大丈夫です。ただ、もう少しだけ寄りかかせてもらってもよろしいでしょうか？」

提督「ん……」

浜風「胸、気になりますか？」

提督「スキンシップと思えばそれほどでもない。お前がよければ別に何も言うつもりはないが」

浜風 「ならどうか、このままもう少しお願いします」

提督 「ああ」

浜風 「……釣れるといいですね」

提督 「今日は何となくいける気がする。お前のおかげだな」

浜風 「ふふふ、嬉しいです。では、釣りをする時はいつでも呼んでくださいね」

提督 「まあ気が向いたらな」

浜風 「はい。気軽にどうぞ」

第14話 「交流④」

飛龍「らいはあく、ひふえーひあーふ！
バン！」

勢いよくドアを開けて飛龍が入ってきた。

蒼龍「やつほく、はいふあのでふく？」

飛龍に続き蒼龍も入って来た、二人とも明らかに酔っぱらっていた。

雲龍「二人とも飲み過ぎだよ」

そして最後に雲竜、こちらは飲んでいるのかは定かではないが、一見すると素面だった。

提督「……一体どうした」

雲龍「二人が私の歓迎会開いてくれたんだけど……」

蒼龍「わーい、ソファらあ。ばくへきく」ポスツ

提督「見事に二人が先に酒に飲まれたのか」

雲龍「そう。二人がこんなにお酒に弱いなんて知ら——」

飛龍「よっへはい！ よっへはふえんよ！」

提督「そうか、取り敢えず水を飲め、ほら」

飛龍「あ……ありがと。んつく……んぐつ」ゴクゴク

飛龍「つぶはあ」

提督「少しは酔いがさめたか？」

飛龍「んー……そうです……」フラフラ

提督「ん？」

コテツ

蒼龍「わぶっ」

飛龍「……ね。すう……すう……」Z Z

蒼龍「んく、飛龍くあふい、く重いく」Z Z

提督「……」

雲龍「一応、これ私の先輩達なのよね……」

提督「困った先輩たちだな」

雲龍「え？ そうね。ふふ」

提督「？」

雲龍「何でもない。一瞬大佐に心の中を読まれたのかと思っただけよ」

提督「ん？ ああ、先輩という言葉か」

雲龍 「読みが鋭いのね。読唇術ならぬ読心つてやつからしら」

提督 「ふつ、そこまで大それたもんじゃないさ。単に勘が当たっただけだろう」

雲龍 「あら、そこは残念ながら、とか着けるものだと思っていたのに」

提督 「期待に沿う事が出来なくて申し訳ないが、俺はそういつた能力は別段欲しいと思つたことがないからな」

雲龍 「そう？」

提督 「そうだ。と、ちよつと待て二人を寝かせてくる。手伝ってくれるか？」

雲龍 「部屋に運ぶの？」

提督 「いや、俺の私室だ。俺は今日はここのソファァを使う」

雲龍 「……二人、起こそうか？」

提督 「いや、いい」

雲龍 「優しいのね」

提督 「ただのおせっかいだ。つと」ヒョイ

飛龍 「んゝ……」ギユツ

提督 「……」

飛龍 「えへえゝ♪ んゝ……」zzz

雲龍 「大した寝相ね」

提督「……恐らく本人は知らないだろうな。雲龍、蒼龍を頼めるか？」

雲龍「はい。よつと」ヒョイ

蒼龍「ん……んんう？」（あ……マシユマロ……）

ポスツ

雲龍「んっ……」

蒼龍「ふかふかく♪ きもひい〜♪」スリスリ

雲龍「あ……ちよつと、そんなに頭を……」

プチツ

雲龍「あ……」ハラリ

提督「……先に寝かせて来い。そこで直すといい」

雲龍「うん……」カア

——数分後

雲龍「失礼しました」

提督「いや」

雲龍「……」

提督「……酒」

雲龍「え？」

提督「酒、まだ飲めるか？」

雲龍「あ、うん。まだ全然平気」

提督「楽しんで飲めるか？」

雲龍「気は使わないでいいよ。大丈夫、どっちかというところは今は良い気分だから」

提督「そうか。なら……」

雲龍「はい。喜んでお付き合いさせてください」

提督「了解した。歓迎する。ん……」

雲龍「どうしたの？」

提督「いや、今ちようど洋酒しか無くてな。ウイスキーだが、いけるか？」

雲龍「どっちかという洋酒派なの。寧ろ歓迎よ」

提督「そうか、よかった。飲み方は？」

雲龍「オン・ザ・ロックで」

提督「わかった」

トクトク……カロン

雲龍「大佐はハーフロック派？」

提督「ストレートもオンもどっちもやるが、一番飲み易いのはやっぱりこれだな」

雲龍「へえ」

提督「お前はそれだけか？」

雲龍「うん。これが一番好きなの。あ、これ、ちゃんとグラスも冷やしてくれてるのね」

提督「酒は嫌いではないからな。冷蔵庫には常に冷やしたグラスが入っている」

雲龍「いいわね。これから通っちゃうかも」

提督「うちにも何人か酒飲みがいるからな。頭数揃えて楽しく飲むのもいいし、こうやってゆつくり飲みたいなら他の面子と被らなければいつでももいいぞ」

雲龍「あら、それって誘ってくれてるのかしら？」

提督「俺は一人で飲むのも好きだがな」

雲龍「ちよつと……なんでそこでそう言うのよ」

提督「？ 煙草を燻らせながらゆつくり一人で飲むのもいいぞ？」

雲龍「いや……そうじゃなくて……」

提督「ん……？ ああ」

雲龍「遅い。もう知らないから」プイ

提督「いや、悪かった」

雲龍「嫌よー」

提督「ふっ、これは参ったな」

雲龍「む、大人の余裕というやつからしら。なんか悔しいわね」

提督「もう30だからな」

雲龍「ふふっ、何でそこで肯定するのかしら？」

提督「酔っている所為かもな。ツマミも無いし」

雲龍「あ、口がさみしいと思ったら」

提督「何か作るか？」

雲龍「いいの？」

提督「ああ。料理は嫌いじゃない。軽く用意してくるちよつと待ってろ」

雲龍「ありがとう」

提督「ほら、お代りだ。これを飲んで時間を忘れててくれ」スツ

雲龍「本当に気が利く人なのね」

提督「酒に関してはな。じゃあちよつと外す」

雲龍「うん。お願い」

トントン……ジュッ

野菜を切る音と時折肉の焼ける香ばしい匂いがするなか、雲龍はひとり酒を飲んで
た。

雲龍「……」チラッ

ジャツジャツ

雲龍「……」ゴソゴソ、プチッ

雲龍（なにやってんだか……）

提督「待たせた。サラダとワインナーだ……が」

雲龍「うん。ありがとう。十分よ」

提督「……そうか」

雲龍「どうかした？」

提督「胸元、緩めて……暑いかな？」

雲龍「お酒が回ったのかも」

提督「そうか。じゃあこれを片付けたら取り敢えず今日はこれで終わりにしようか」

雲龍「えっ」

提督「ん？」

雲龍「いや、そこでそう言う？ 普通」

提督 「仕事を言い訳にもできるが……」 コツコツ

雲龍 「……？」

ポン

雲龍 「んっ……」

提督 「なんだかんだでまだお前はここに来たばかりだ。いきなりそういう事は早いと思う」

雲龍 「真面目なのね……」

提督 「そこは男して融通が利かないだけだと思ふ。悪いなこれは性分だ」

雲龍 「はあ……大佐との間にある堀……直ぐに埋めてみから」

提督 「距離があるような言い方だな」

雲龍 「あるじゃない」 ムスツ

提督 「ははっ、お前もそういう顔をするんだな」

雲龍 「大佐にだけよ」

提督 「早速堀を埋めに来たか」

雲龍 「どれくらい埋めれた？」

提督 「さてな。取り敢えずこれを空けるまでにはそれなりの成果が出せるんじゃないか？」

雲龍「了解。雲龍突撃します」キリッ
提督「おい、記念すべき最初の戦果を酒にするつもりか」

第15話 「暇」

〓 大本営海軍本部第3司令室

中将「……」

信濃「さつきから何を見てるの？」

中将「いやあ、ちよつとね」

信濃「何それ、グラフ？」

中将「うん。まあ」

信濃「何の数値かしら？」

中将「……」

信濃「司令？」

中将「信濃さん」

信濃「なに？」

中将「好き」

信濃「は？」ピシッ

空気が痛い、多分凍ってる。

信濃さんの顔が怖い、そんなあからさまに嫌な顔しなくてもいいのに。

中将「ごめんなさい。仕事します」

信濃「全く何を言ってるよ……」

中将「でも、ちよつとドキツとしたでしょ？」

信濃「……ドキツとさせてあげましょうか？」

中将「遠慮します。なんか信濃さんのそれ、心臓止められそうだし」

信濃「そうね。よく分ってるじゃない」

中将「……」（恋愛感情にもあの装置は働くのかな。だとしたらやはり管理し易く……か？）

トコトコ

朝日「終わりました」

中将「おうつ、ご苦労さん。じゃ、お礼に煙草でも……」

信濃「司令？」

中将「やつ、よくやったよくやった」グワングワン

中将は無造作に朝日の頭を掴むとそのまま頭を軽く揺らす様に撫でた。

振り子のように頭を振られ朝日は目をくるくると回した。

朝日「あ……んう……」

信濃「ちよつと、駄目よそれじゃ。加減しなさい」

中将「……はい」

朝日「……」クラクラ

信濃「大丈夫？」

朝日「ふあ……？」

コシコシ

朝日「はい」

信濃「そう。なら、休憩に入ってもいいわよ」

朝日「分かりました。失礼します」

バタン

中将「……」

信濃「どうかしたの？」

中将「ん？」

信濃「さつきから何処となく上の空じゃない？」

中将「んー……」

信濃 「そのグラフが関係あるの？」

中将 「まあね」

信濃 「そう」

中将 「訊かないの？」

信濃 「その事？」

中将 「そう」

信濃 「待つわ」

中将 「そっか」

やれやれ、できた同僚が近くにいと肩身が狭く感じるから困ね。

中将 「そういやさ」

信濃 「ん？」

中将 「ついこの前までやってた作戦」

信濃 「第二次AL・MIの事？」

中将 「そう。久しぶりに大きな作戦だったよね」

信濃 「そうね」

中将 「総帥は何か大きな動きにでも出るつもりかな」

信濃 「それは判らないけど。でも、それとつい最近あつた本部への奇襲は関係あるのかもね」

中将 「ああ、あの時のか。いやあ強かったねお嬢ちゃん」

信濃 「そうね。あの若きで大したものだわ。敵の戦力も油断ならないものだったのに自分の艦隊だけで退けたものね」

中将 「俺は何もやらなかったから申し訳なかったよ」

信濃 「あんな精密な後方支援しててよく言うわよ」

中将 「それはまあ信濃さん達の力だよ。俺はただ命令してただけだし」

信濃 「はいはい。そうね」

中将 「でも、もし本当にこれからもっと大きな動きがあるのだとしたら」

信濃 「私達の出番かしら」

中将 「本部の実動部隊は実質お嬢ちゃんの第四艦隊のみと言われてるからね。俺たちが動くつていうのはそういう事なんだろうさ」

信濃 「自信あるの？」

中将 「ありません」

信濃 「……」

中将 「嘘です。多少あります」

信濃「よろしい」

中将「……まあ、そんな事がない事を祈るけどね」

信濃「そうね」

〔第4司令室〕

彼女「はあ？ もっと改造しろ？」

武蔵「そうだ！ 前の戦い快勝したとは言え、満足のいく結果ではなかったからな」

彼女「だからもっと強くしろっての？」

武蔵「そうだ」フンス

彼女「武蔵……あなた、ただでさえ武蔵の素体で妹（複製）達より割増し以上の力を持つているのに、まだそれ以上必要だと言うの？」

武蔵「大和の奴だって改二の改造を受けてるじゃないか。私も受けたい！」

彼女「あれは大和だから耐えれたような改造なの。まだ大和型の実質的な上位改造の技術は完成していないのよ？」

武蔵「大和が耐えれて私も耐えれないわけないだろう！」

彼女「いいえ。これだけは言わせてもらおうわ、絶対とは言わないけどやめておきなさい」

武蔵「……なんで？」ジトツ

彼女「拗ねないの。あの改造はね、本当に危険なものだったの。成功したとしても感情を失うとか副作用の可能性だって示唆されていのよ？」

武蔵「……怖くないとは言わないが、なら何故大和はその改造を受けたんだ？」

彼女「中将の為よ」

武蔵「……む」

彼女「あの人が求めたわけでもない。あれは大和自身の意思で、自分を改造の実験体としてデータを提供する提案までして行ったものだったの」

武蔵「どうしてそこまで……」

彼女「愛して欲しいからよ。第3司令部の中将は分からないけど、それ以上の提督、つまり今の海軍の体制を作った創設時のメンバーである中将、大将、元帥は何故かケッコシステムを使った艦娘の能力の向上を計っていない」

彼女「武蔵、あなたはそれがどういう意味か解る？」

武蔵「絆……か？」

彼女「そう。中将達は何故かあなた達と強い絆を結ぶことを拒んでいるの。嫌っているわけでもない、寧ろ長い時間苦楽を共にした戦友であるにも関わらずよ？」

武蔵「それは何故だ？」

彼女「分からない。どうやら軍事機密に関わる事らしいから。その内知る事にはなると思うけど」

武蔵「……」

彼女「武蔵、あたはそんな状況でも中将の事を好きな大和の気持ち、理解できる？」

武蔵「……ああ」

彼女「そう、なら私が言っている事も分かるでしょ？私はあなたにわざわざ危険な事をして欲しくないの。だってこんなに私達はこんなに強い絆で結ばれているんだから」

武蔵「……そう、だな。悪かった」

彼女「分かってくれればいいのよ」

武蔵「なあ」

彼女「ん？」

武蔵「今夜……」

彼女「ダメよ」

武蔵「そんなつ」ガーン

彼女「今日はちよつと遅くまでかかっても終わらせないといけない仕事があるの」

武蔵「な、なら私も手伝うぞ」

彼女「あなた事務処理全くできないでしょ」

武蔵「」

彼女「もう補助は霧島や鳥海に頼んであるから大丈夫よ」

武蔵「わ、私は……」

彼女「あなたは今日は非番じゃない。寝てれば？」

武蔵「あまりにも扱いがぞんざいだ！」ガーン

彼女「愚図らないの。暇だったら何処かに出かけてきたらいいじゃない」

武蔵「む、何処……か？」ピク

彼女「そう。何処か面白そうな所か誰かに会いにでも……」

武蔵「……」

彼女「武蔵？ 聞いている？ むさ——」

シーン

彼女「あら？」

第16話 「悩み」

「どうしたんだ？ そんな所で一人で」

「あ、大佐……」

「何か悩み事か？」

「うん。まあ……」

「相談なら乗るが、俺では話し難いか？」

「いや、どっちかというの大佐じゃないと駄目な悩み事です」

「ふむ？」

「……」

明石はまだ話すことを躊躇っている様子だったが、やがて決意したのか小さく息を吐くと大佐の方を向き話し始めた。

「実は、私の……工作艦としての存在意義についてなんです……」

「む……」

「あ、もう分りました？ そうなんですよね。私、実戦に参加するようになってからというものまだ一回も工作艦として艦の整備とかした事がないんですよねえ」

「……」

提督は黙り込むしかなかった。

事実、明石の言った通りこの鎮守府では彼女に艦の整備を指せた事が本当に一度もなかったからだ。

やってもらった事と言えば……。

「エアコン、テレビ、パソコンやネットの接続、製水機……思い出してみれば私って整備関連のお仕事と言えば基地の設備のお仕事しかしていないんですよ」

「確かに……」

「いえ、嫌じゃないんですよ？ 整備自体は好きですし」

「ただ、こう艦に関わらずに設備の整備ばかりしていると工作艦として虚しいというか、他の道がある気がして……」

「明石……」

「あ、理由なら分かってますよ。資材ですよね？」

「ああ」

提督の鎮守府は資材に関しては常に弾薬以外は豊富な事は基地の所属員なら誰でも知っている共通の認識だった。

加えて高速修復罪や開発資材も潤沢にあるので、基本的に修理や建造に関しては手間

を惜しむと言う考えがないのだ。

つまりそれは、艦の整備能力がある明石本来の存在意義を否定しているのと同義でもあった。

元々修理に時間を全く使わない所為で入渠ではなく、今では完全に通常の入浴をする習慣まで艦娘達に就いてしまった鎮守府である。

修理完了後に意気揚々と入浴絵と赴く艦娘達を傍らで見つめていた明石の心情たるいや如何ほどのものであっただろうか。

「私、こんな艦ですから実戦でも戦力としては微妙じゃないですか。だから今の状況って私的にどうなのかあって」

「そうだな……」

「大佐、私これからもここに居ていいのかなあ」

明石はそう言つて再び虚空を憂いで満ちた瞳で見つめた。

中々に深刻な状態だった。

も少しフオローが遅れていたらどうなっていたか分らない。

「明石、ハッキリ言つて申し訳ないが現時点ではこの環境は変わらないと思う」

「はは……まあそうですよね」

乾いた笑いが哀愁漂う雰囲気より増すなか、それを意識しつつ提督はヒヤヒヤしながら

らこう続けた。

「そこでだが、俺から1つ提案がある」

「提案？」

「そうだ。明石、お前、遠征部隊に参加してみないか？」

「遠征ですか……」

あまり興味がなさ気な様子だったが、それでもそこに自分が活躍する居場所があるかもしれないと思つたのか明石は僅かに身を乗り出して聞いて来た。

「それって編成の都合上余つた枠に私が入るといふ事でしょうか？」

「ただ、それだけではない。遠征と言えども参加したメンバーに不測の事態が起こらないとも限らない」

「お前にはそんな事態が発生した時の保険という意味でも参加して欲しいんだ」

「……」

明石は再び考え込むように俯いた。

表情こそ窺えないが雰囲気事態は最初に彼女を見つけた時よりかは良い感じに思えた。

やがて暫くの後、顔を上げた明石はポツリと言つた。

「一つ、確認させて欲しいんですが」

「なんだ？」

「それは命令ですか？」

なかなか厄介な質問だった。

軍人としては命令の一言で終わるが艦娘と言えど明石は女性、単純な答でも気を遣えなければ機嫌を損なう事になる。

「……」

「ふふ、意地悪でしたでしょうか？」

明石は悪戯っぽい笑みを浮かべて提督を見つめている。

明らかに彼が考え込む様子を楽しんでいた。

「部隊にさつき参加して欲しいと言ったな」

「はい」

「あれは嘘だ。訂正する」

「……」

「あいつらを守ってやって欲しい。これは、俺からお前への頼みだ」

「……」

明石は黙って提督を見つめた。

瞳は何も語らないが、提督の答えを吟味している様だ。

「ふふ……仕方ないですね」

「受けてくれるか？」

「こう真摯に頼まれると断れませんよ」

「ありがとう。そして悩みに気付いてやれなくて悪かった」

「お礼なんて、それに誤るのは私の方ですよ。困らせるような質問をしてしまつてごめんなきさう」

「いや、俺も提督として気を配るべきだった。今回は謝るべきは俺だ」

「そ、そんな。そこまで言わなくても……」

提督に再び謝罪され、流石に明石は恐縮した様子だった。

だが、提督の言葉はこれでは終わらなかつた。

続いて出て来た言葉は明石が予想もしなかつたものだった。

「いや、ここはキツパリ謝らせてくれ。それでだな」

「あ、はい？」

「もしお前さえよければ罪滅ぼしとは言わないが、埋め合わせをさせて欲しい」

「う、埋め合わせだなんてそんな！」

「そんなに畏まらなくていい。軽い気持ちで受けてくれ。何処かに付き合えとか、何か小物が欲しいとか。俺に出来る事なら応えさせてもらおう」

「え、ええ……参ったなあ」

思わぬ攻勢（提督に自覚なし）に明石は困った顔をした。

（しまった、大佐の性格を考えてなかった。ここまで律儀だなんて）

「じゃ、じゃあ思いついたら言います」

「ああ、それで構わない。ところでお前はまだそこにいるつもりか？」

「え？」

「特に用がないのなら、基地まで送るぞ」スツ

そう言つて提督は明石に手を差し伸べた。

「あ……」

明石は頬を赤くしながらも嬉しそうにその手を取った。

「……大佐」

「うん？」

「埋め合わせ、これでもいいですよ」

「これって、今この事のか？」

「はい♪」

「お前がそれでいいなら構わないが、何かをしたと言う自覚がないんだがな……」

「それでも十分です♪」

提督は釈然としない様子だったが、彼と手を繋いだ明石は嬉しそうな顔をしていった。

二人が基地への帰路に就いてから暫く経った時の事だった。

基地まで後数分というところで、海岸の方から何かが水を切り提督たちへ近づくと音がしたのだ。

ズバババババ……！

「……ん？」

「っ、大佐下がつて下さい！」

危機を察知した明石が素早く提督の前に立ち、近づいてくる音を警戒した。

（レ級か？）

提督は明石に守られながらそんな事を予想していたが、表れたのは全く予想外の人物だった。

ザパーン！

「よっ」

大きな水音と共に勢いよく堤防を乗り越えて来たのは……。

「大佐！ 遊びに来たぞ！」

ムギユツ

「なっ……!!」

「んぐっ……?」

明石が驚愕して固まっているのも気に留めることなく、その豊満な胸に提督の顔を抱きしめたのは海軍本部の武蔵だった。

第17話 「天獄」

「大佐、二つお聞きしたいのですが」

「明石が不機嫌な理由は想像に任せる。本部の武蔵がここに居るのは遊びに来たからだ
そうだ」

「なるほど……」

不知火はあくまで冷静な顔で納得したが、その実心中は嫉妬の炎が渦巻いていた。

何故なら――

「大佐！ 久しぶりだと言うのに反応が薄いぞ！ ほら、もっと喜べ！」ムニムニ

先程から凶悪な風船を愛しの提督に我が物顔で押し付けてる目の前の戦艦が痛に
障ってしかたないからだった。

「武蔵、俺はお前が来る事を知らなかったんだが」

「それは当然だ！ お忍びサプライズというやつだからな」ムニイ

「押し付けるな」

「……ッ」ギリ

不知火は齒噛みした。

何故自分にはアレがないのだろう。

「遠慮するな。触つていいのはアイツと大佐だけだからな！」グニグニ

「俺は仕事なんだ。風紀が乱れる。やめ——」

「やめてください。大佐が困っています」

ついに我慢できなくなった不知火が介入してきた。

「んん？ まあ固い事は言うな。これは遠く離れた本部から来た私なりの大佐への労いだ」

「なんで俺が労われるんだ。普通は逆だろう」

「お？ 大佐は私を労ってくれるのか？」

挙げ足を取ったと思ったのだろう、これを機に更に自分の望む展開に運ぼうと言う魂胆が見え見えの勝ち誇った笑みを武蔵は浮かべた。

「そうだ。不意とは言え、わざわざ本部から来た客人をもてなさないのでは、この鎮守府の提督としての沽券に拘わるからな。不知火」

「はい」

「客人にお茶と菓子を」

「分かりました」

「ん、私は別にそういうのはいらないぞ？ 大佐と話していれば……」

「だからそういうい訳にもいかないと言っているだろう。仕事からだ。不知火、頼んだぞ」
ポン

「……はい。失礼します」

バタン………テテツ

部屋を出る前に頭を撫でられた不知火は、少し紅潮した嬉しそうな顔で部屋を退出した。

その直後、嬉しさを押さえきれなかったのか足取り軽く小走りで廊下を行く足音が聞こえた。

「なあ大佐」

「ん？」

「なんでさつき不知火の奴の頭を撫でたんだ？ 敢えて必要な場面でもなかっただろう？」

「本当にそう思うか？ これでも機微には聡いつもりなんだが」

「……なあ」

「お前は撫でん」

武蔵が言い切る前に提督は即答した。

「な、何故!？」ガーン

「客人としてはもてなすが、問題児を甘やかすほど俺は優しくはない。分ったら茶が出るまでそこで大人しくしてろ」

「むう、茶が済んだら構えよ?」

「済んでかつ、俺の仕事が終わってたらな」

「午前の仕事の書類はそんなに多くは見えなかったからな。誤魔化そうとしても分るからな」

「……まあ、大人しくしてろ。言った事は守る」

主導権は全てこちらが握っていると思っっているのだろう。

余裕綽々の武蔵を尻目に提督は何故か始終涼しい顔だった。

それもそのはず、提督にはある勝算があったのだ。

「美味しい! なんだこれは!?! こんな美味しいアイスは初めてだ!」

目の前に出されたアイスを夢中で頬張る武蔵を提督と不知火は少し呆れた目で見ていた。

「不知火、少し割に合わないがお代りは絶やささないようにしてくれ」

「了解しました。上手くいきましたね」

「このアイスは好評だからな。ましてやそれを満足いくまで出されれば時を立つのも忘れるというものだ」

「でもやはり、このまま出し続けると言うのは……」

不知火が少し不安そうな顔をして提督に聞いた。

「大丈夫だ。人には必ず許容量というものがある。いくら美味しくていくらでも食べられる気でも、そういう奴に限って自分の限界に気付かないものだ」

「? どういう事です?」

「まあ、その内分かる」

その時の不知火は提督の言葉の意味を理解できなかつたが、暫く後直ぐにその意味を知る事となつた。

アイスの美味しさに夢中になり自分の限界に気付かずに食べ続けた武蔵は、提督の予想通り途中で軽度の低体温症と腹痛に見舞われたのだつた。

結局武蔵はその日ほぼ一日を医務室で過ごす事になつた。

これでやっと提督に甘えられる。

「♪」

昼休み仕事も終わった提督と幸福な過ごす為不知火は意気揚々と執務室に向かつ

ていた。

しかし、現実はその理想通りにはいかなかった。

挨拶と共に不知火の目に入つて来た光景には……。

ガチャ

「失礼しま——」

長月「大佐！ 最近新人ばかりに構つて私の事を忘れてないか？ いや、いいんだがな。でもちよつとは気にしてもいいんだぞ？」

菊月「待て。それを言うなら私もだ。そして、私は長月の様に自分の心を偽つたりはしない。提督、構え！」

初風「ちよ、ちよつと！ 少しは新人に気を遣つてくれてもいいじゃない！」

三日月「た、大佐。み、三日月もその……し、失礼します！」ダキツ

朝潮「三日月さんやりますね……私も負けてはいられません！」ギユツ

浜風「大佐……ここは、浜風に……」ポッ

夕雲「大佐？ 夕雲にも甘えていいんですよ？」ソツ

提督「……お前達、ここは休憩所じゃない」

最近構つて貰えてなかった者、積極的に提督にモーションをかける者、執務室は複数の既存、新米の駆逐艦が集う託児所のような形相を呈していた。

「くつ、何故……」

「ありやあ、今日は満員だねー」

がくりとうなだれる不知火の後ろから声がした。

「秋雲……」

「そんなお前もか、みたいな目で見ないでよー。ま、目的はそうだけどさ」

「あなたもあの中に入るつもりですか？」

「んん？ 『も』 ってことは不知火も？」

「いえ、私は……」

「そか、安心した。じゃ、今日は秋雲頑張っちゃおうかなー？」 チラ

不知火の言葉を聞いてわざと意地悪い顔で秋雲はそんな事を言った。

「……」 ピクリ

「……秋雲、何故あなたはそんなに自信有り気なんですか？」

「えー？ だって、ヌイヌイが参戦しないのはやつぱ大きいっしょー？」 ニヤニヤ

「……挑発しているのですか？」

「さあ？ ま、参戦しないならその方がいいけどね。それじゃー」

「待ち……待って。私も、行き……ます」

「うん。そうこなくっちゃ。素直になるところを誤っちゃダメよー？」

秋雲は嬉しそうな顔で不知火の参戦表明を歓迎した。

「もう、あなたには敵いませんね」

「それはこの勝負の結果次第でいいんじゃない？ それじゃ」

「了解しました。負けません」

「行ってみようか！」

「大佐！」

所変わって、海軍本部

「……」

大佐の鎮守府の武蔵は本部の武蔵と入れ違いで本部に研修に来ていた。

出迎えたのは訓練を担当する大將とその麾下の艦娘達だった。

「よく来た。お前か？ 今日来る予定の研修生は？」

「はい。〇〇鎮守府所属の武蔵です。大將殿、今日から暫くよろしくお願いします！」

「……あの老体の教え子のか」

「え？」

「気にするな。よし、では早速訓練を始める。艦装を外してこいつらと手を繋いで沖に

一日浮いてろ」

「は？」

一瞬何を言っているのか理解できない顔を武蔵はした。

「何を驚いている？ 早く言う通りにしろ」

大將はそんな武蔵のそんな動揺を毛ほども気にしていない様子で命令した。

「い、いえ。指示に従わないつもりはないのですが。こ、これは艦娘の訓練と関係あるのですか？」

「勘違いしているようだから教えてる。ここでは心技体全てを鍛える。お前が言う艦娘の訓練というやつは『技』いわば、訓練の最終段階だ」

「……」

「まずは心と体だ。決して折れる事ない鋼の精神と屈強にして強靱な肉体に鍛えてやる。」

「……」

「覚悟しろよ？ ここに来たからには結末は3つだ。途中で泣いて帰るか、運悪く訓練中に死ぬか……そして最後は一人前の兵士となるか、だ」

底冷えしてしまうような冷たい視線に武蔵は気付かない内に冷や汗を一筋流した。

「なんだこの威圧感？ 人間か？」

「」

「分ったら。さっさとしろ！　これ以上ごねたらお前だけ素っ裸でサメの餌にするぞ！」

帰りたい。

本部の訓練の噂は聞いていたが、ここまでとは予想していなかった武蔵は早速そう思い始めていた。

「ベテラン殺し」その噂は伊達ではなく、噂以上の地獄だった。

第18話 「人違い」

「うつ…………ぐ…………」

大将の訓練で心身共に疲弊し切った武蔵は、鉛のような体を引きずって与えられた部屋へと向かっていた。

(…………)までとは…………)

提督にも相当厳しいらしいという噂は伝え聞いていた。

しかしそれでも、大和型である自分なら耐えられる事ができるという驕りが武蔵を訓練への参加へと踏み切らせた。

(鎮守府が…………大佐に会いたいなあ…………。でも途中で諦めて帰るなんて絶対嫌だ。それだけは絶対…………)

「あら？ 武蔵、あなた帰ってきてたの？」

自分を呼ぶ声に振り替えると、そこには大和がいた。

「やま…………と？」

「あつ、あなた。此処の武蔵じゃないのね。ごめんなさい。私は…………」

「知っている。中将の部下だろ？」

「え？ ああ、あなた……」

「そうだ。大佐のところの武蔵だ」

「大佐は一緒じゃないの？」

「このボロボロの姿を見て分からないか？」

武蔵は大袈裟な素振りや疲弊した自分の姿を大和に示した。

「ああ、大将の……」

「そう。研修に来た」

「どう？」

「……聞くな」

「まあ、そうよね」

「驚かないのか？ 大和型がこんなにも弱気になっているというのに」

「大将の訓練を受けて平気でいる子なんて滅多にいるものじゃないわよ」

「そ、そうか……」

武蔵は少し安心した顔をした。

「その様子だと相当堪えたみたいね」

「ああ、あんなに苛酷だとは正直思っていなかった」

「続けられそう？」

「……来たからには最後までやり抜くつもりだ」

「そう。お世辞にしか聞こえないかもしれないけど、あなたなら大丈夫よ」

「それは、ここの武蔵も訓練を耐え抜いたという事か？」

武蔵はちよつと対抗するような目で大和を見ながら聞いた。

「ここの？ んー……そうね。確かにあつちの方も耐え抜いたけど、でもタフさはあなたの方が上な気がするわ」

「そ、そうか？」

「ええ。これは内緒にして欲しいんだけど、あつちの武蔵は訓練が辛い事より大將が怖くて途中で泣いちゃったみたいだから……」

「……それは分かる。駆逐艦や軽巡ならともかく戦艦の、それも大和型にここまで畏怖を感じさせる人間がいるなんて思いもしないだろうからな」

「そうね。あなたも怖い？」

「怖い」

武蔵は恥じることなくキツパリ言った。

その反応が意外だったのか大和は一瞬目を丸くして驚いたかと思うと、小さく笑いながらこう言った。

「あなた変わってるのね。今まで何回か武蔵を見てきたけどこんなに素直な反応をする

武蔵は初めてよ」

「ふつ、それは大佐の所為だ」

「そうなの？」

「ああ。あの人と接していると自然と素直になつてしまふんだ。その所為か、いつの間にか普段でもそうなつていたというか……」

「ふふ、大佐が好きなのね」

「うむ！……ああ」ジワ

誇らしげにその問いにも即答した武蔵だったが、その直後何かを思い出したような顔をして急に瞳を潤ませ始めた。

あまりにも急な変化に大和も心配する表情で武蔵の様子を伺った。

「どうしたの？」

「大佐の事思い出したら……な、なんか急に……う、ぐす……」

「ああ」

「ひぐ……ぐすつ。な、泣かないつもりだったのに……はは、こ、これではもうこつちの武蔵に勝つているとはい、言えない……な。ぐす……」

ギユッ

「ん……」

「女の胸で申し訳ないけど、これで少し安心して」

「……」

「寂しがるのは恥ずかし事じゃないわ。それだけ大佐が貴方たちと上手くやって、絆を育んでいる証拠だもの」

「……」

「訓練を終えて帰った時に、うんと大佐に甘えるといいわ。それを楽しみにするの。どう？」

大和は少し体を離すとイタズラっぽい笑みを浮かべるとそう言った。

「……そ……うだな。それは悪くないな」

「でしよう？」

「ああ。恩に着る。それを楽しいに思えば何とか耐え抜けそうだ」

「ふふ、大佐、あなたが帰ったら大変ね」

「ふつ、ちよつとくらい困らせたって罰は当たらないだろう。よし！ やる気出たぞおー！」

「頑張つてね！」

「ああ、この武蔵に任せておけ！」

「おおうつ、頑張れよお!!」

「応援してゐるわよ」

唐突に二人以外の声がした。

声が出た方を振り向くと、そこには何が面白いのかニヤけ顔の大和の提督（中将）と彼女がいた。

大和「ちゅ、中将！ いらしてたんですか？」

あからさまに動揺した声で中将がいた事に狼狽える大和。

武蔵はその様子を見て、大和の恋愛事情を即座に悟った。

武蔵（ああ、大和はこの人が好きなんだな）

彼女「こつちの武蔵が出かけたと思つたらあの人の武蔵が来るなんてね」

中将の隣にいた彼女が苦笑しながら武蔵を見て言った。

武蔵「少将殿」

彼女「ようこそ本部へ。キツイかもしれないけどアイツと同じ『武蔵』であるあなたならきつと耐えられるわ。いえ、耐えられるわよね？」

武蔵「はっ。勿論です！」

中将「ぐふふ、いいツラだ」

大和（む……）

中将が武蔵の態度に感心しているのを見て、大和は僅かに不機嫌そうな顔をした。

武蔵が早々に話を切り上げ部屋に切り上げて部屋に戻りたいと言い出したのは、先程と同じように大和の心中を彼女が察したからであった。

武蔵「あの、お話し中申し訳ないのですが少し疲れているのでそろそろ部屋に……」

中将「おお、そうか悪かったな。ゆっくり休め」

大和「え？ ええ、おやすみなさい」

彼女「それは悪い事しちやったわね。おやすみなさい、お疲れ様」

武蔵「はい、それではこれで」

踵を返して武蔵が部屋へと戻った後には3人だけが残った。

「……それでは私も戻ります。中将殿、大和、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

「おやすみなさい。少将」

そしてあつという間に2人だけになった。

「……」

「さて、農らも戻るか」

「……」

「どうした大和？ 何か不機嫌だな」

「別に……」（せっつかく武蔵が気をつかつてくれたのに。気付いてないのかな）

「んん？ お前……」

何かに気付いたのか急に中将が大和の顔をまじまじと見つめてきた。

不意の彼の行動に大和が動揺する。

「な、なんですか？ 中将」

「……ふっ、ははははは。まあいい行くぞ」グイ

「きやつ」

中将は大和の肩を掴んで自分に寄せたかと思うと、今度は頭を撫でてきた。

クシヤクシヤ

「も、もうやめてくだ……」カア

「いや、やめん。このまま部屋まで送れ。はははははは」

「うう……はい」

「……愛い奴だな」ボソ

「ちよっ」ボツ

「うはははは。さあ行くぞ！」

「や、子ども扱いはやめてくだ……もー!!」

第19話 「贈り物2」 R—15

「ん…………ちゅ…………」

月明かりのみが光となつて照らしている暗い部屋の中で艶やかな声が響いていた。

「ちゅる…………ペろっ。ん…………んむ、はあ…………」

部屋の片隅で二つの影が重なっていた。

一人は陸奥。

ベッドに腰掛けた提督になにやら奉仕をしているようだ。

「…………」

一方もう一つの影の提督は、ただ眼を瞑り陸奥の奉仕に一方的に果てまいと耐えるような表情をしていた。

「ん…………ふう…………。気持ち良くない？」

どうやら陸奥にはその表情が自分の愛し方が拙い所為だと思えたらしい。

陸奥に気を遣わせてしまった事を申し訳なく思った提督は、彼女の頬を撫でながらやんわりと否定した。

「いや、いつ果ててしまうか分からないくらい気持ち良い」

「本当？　なら、良かった続けるわね。あむっ」

「くっ……陸奥、それは……」

提督の言葉に気を良くした陸奥は最初より更に強い奉仕を実行した。

「ひふあい？」（痛い？）

上目遣いで陸奥は提督の様子も気を利かせて確認する。

「いや、最初は驚いたがこれは……正直、こんな感覚っ……は……んくっ」

提督は顔を紅潮させて刺激に必死に耐える表情をしながら何とか言葉を絞り出している感じだった。

「んっ、れろれろれろ」

提督の反応を嬉しく思った陸奥は即座に奉仕を『攻め』へと移行した。

「く……待て陸奥。これ以上は……」

どうやら提督は陸奥に迷惑を掛けまいと必死に我慢しているようだった。

だが、そんな提督の気遣いを意に介さないかのように陸奥は更に攻め続ける。

「んっ、んっ、んんっ……！」

「む……っつ、ダメだ……でっ……」

今わの際、最期の力を振り絞って提督が陸奥の頭を掴んで引き離そうとしたしたが、予想外な事に陸奥がそれに抵抗し引かなかつた為、提督はついにそのまま果てしまっ

「言っておくが正真正銘自分のもの、自慰によるものだ。俺は同性愛者ではない」
「そ、そう……良かった」ホツ

（予想通りの事を考えていたか。危なかった……）

「でもその……自分の確認したって……」

「この職場は本当に女だけだからな。信じられないかもしれないが俺だって男だ。偶にどうにもしんどい時もある」

「その時に？」

「ああ。トイレで処理をしていた」

「な、なんか作業的ね……」

「まあ実際そんな感覚だったからな」

「じゃあその時に？」

「ああ。出した本人が味を知らないのではあまりにも不公平すぎると思っていたからな」

「相変わらず変なところが真面目ね……」

何とも言えないといった顔で陸奥は提督を見ながら言った。

「まあそういうわけだ。だからこそ疑問なんだが……」

「ああ、なんでこんな事ができるのか？」

「ああ」

「そうね。さつきも言ったけど確かに大佐の言う通りお世辞にも美味しいとは言えないわ。でもね」

陸奥はそこで一瞬目を閉じて一呼吸置くと、再び提督に密着した。

「好きな人のものだと思つと、例え美味しくなくても……全部愛おしくなるの……んっ」

「っ、陸奥……」

「はいひよーふ……ん、ちゅっ。っは……ココは自分で弄るから、今日は、んむっ」

「わらひの……んっ、ペろ。くひをはおひんで……」

陸奥はそう言つと再び提督への奉仕を開始し、自らも昂ぶつていくのを感じた。

くちゅ、ちゅぶっ

「陸奥……だめだ」グイッ

「ん……ふえ？ え？ ちよ、ちよつと大佐？」

提督は何とか陸奥の奉仕を我慢すると、彼女を少し強引に引つ張つてベッドまで引き上げた。

「あ……」

ちょうどその時、窓から差し込んでいた月明かりが陸奥へと降り注ぎ、より効果的な演出が偶然にも発生した。

「女性の此処を『花』とはよく言ったものだな。今こうして見ると改めて綺麗に見える」
「や…………だめ…………」

月明かりによるライトアップは確かに人工的な照明と比べて美しく思えた。
陸奥はそんな状況について顔を真っ赤にして恥ずかしがる。

「陸奥…………それは本心か？」

「…………もう、バカ…………。解ってるでしょ？ ……お願い。来て…………」

「ああ、行くぞ」グッ

「ああっ…………♪」

第20話 「対抗心」

「んぐ……つはあ……大佐つてさ」

一口で酒を飲んだ雲龍が溜息と共に切り出した。

「んー？」

「付き合っている人いるのかな？」

ピシッ

空気が凍った。

雲龍の言葉を聞いてなかった隼鷹でさえ場の空気の異変に気付き、飲みかけだった酒を途中でをやめた。

「……なに、言ってるの？」

雲龍の一言で酔いが吹き飛んだ飛鷹が少し顔をひきつらせながら真面目な顔で聞き返した。

「いや、大佐つて誰かと付き合ってるのかなつて」

「えー？ 付き合ってるも何も、ケツコンしてる人がもう6人くらいいるんだしー。そんなの今更確認する必要にやいんじやなー？」

飛鷹と違い、酒に酔う事を何よりも好む隼鷹が笑いながら雲龍の疑問が今更のものと指摘する。

「いや、でもそれって結局はケツコンというシステムの話でしょ？ 純粹に付き合うのならシステムとか関係ないじゃない」

「……だから？」

「同じことを何回も言わせないでよ。だから大佐って誰かと純粹に付き合ってるのになって」

「ん〜？ それってさあ、うんにゅーの言ってる事ってさー。公私共に常に彼氏彼女みたいな関係の人がいるのかってことー？」

「そう」

「んー、そー言われると確かにいないとは……」

「ちよ、ちよつと隼鷹」

酔いの所為かはたまた本心から言っているのかは定かではないが、思いもよらない事を言い出す隼鷹に飛鷹は焦った。

「ん〜？ どーしたのさひよー？ べつつにあたしはあんたも大佐を好きなことくらい

……」

「そ、そういう事じゃなくって」

「そう。そういう事ね。つまり純粹に付き合っている人はいないのね」

「えっ」

「んー、それはどーかにやー」

「隼鷹、あなたさつき大佐とちゃんと付き合っている人はいないって言ったじゃない」ゴク

若干目が据わっているように見えなくもない雲龍は、隼鷹のいい加減とも言える反応に僅かにムツつとした表情をした。

「いやー、確かに言っただけどさあ。大佐つてずっと前に自分を好きな人は無条件で受け入れて愛しますーとか言っただからねえ」

「……そんな事言っただ」

「そ、そうよ！ だからもう抜け駆けとかそういうのはね……」

「でも、愛するって言っただけで、誰を本妻にするかは言っていないのよね？」

ピシッ

また空気が凍った音がした。

今度は隼鷹も雲龍の言葉を聞き逃す事はなかった。

「ほ、本妻？」

先程と違ってずっと真剣な表情で飛鷹が聞き返す。

「そ、本妻」

「それってつまり……」

「そう。誰が一番好きなのかって事よ」

「あー……、なるほどねー。それはちよつとあたしも気になるかにやー」

「隼鷹たちの反応を見ていた限り私はいなさそうと踏んだけど、そののとこどう？」

「そ、そうね……確かににはつきりと居る、とは言い難いけど……」

「少なくとも近い人はいるかにやー？」

最初から真顔なのは変わらないが、幾分眼光が鋭くなつた雲龍がすかさず訊く。

「……それって誰？」

「んー……やつぱり加賀さん？」

「こんごーうとマリアもかなあ？」

「……後者の二人は普段から大佐の事を好きな事を隠していない人達ね。でも一方的に見えなくもない……と思わない？」

「えつ。そ、それは……」

「いやあ、アレで心から本当に慕ってるからねえ。大佐も満更じゃないと思うけどねえ」

「大佐は押しに弱いのか？」

「弱いというか優しいのよ。態度は素っ気ないけどちゃんと受け入れてくれるという

か」

飛鷹は顔を赤らめて少し嬉しそうに言った。

「感心しないわね。そういうのは誤解させちゃうのよ」

雲龍はその可能性をにべもなく否定した。

その反応は若干子供っぽく見えなくもなかった。

「い、いやいくらなんでも誤解だと判断するのは……。それこそ一方的なんじゃ……」

「そうだよー、大佐はそんな人じゃないよお？ ていうかうんゆーさあ、あんたも大佐が好きなのは分かるけど、そんなに無理していひ番になろうとするのは、ひよつとおねーちゃん感心しないなー」

「……ごめん。ちよつとお酒まわってるかも」

「いいってことよー。いやあ、若いっていいねえ♪」

「肉体年齢成人以下の癖に何言ってるのよ……」

「いやあ、それはそれってヤツ？ ほら、あたし結構やるからさあ♪」

「最早何を言っているのか理解困難ね」

わざと呆れたような顔をして苦笑交じりに雲龍は言った。

「ごめんね。酒癖悪くて」

「ううん。お酒は美味しく飲むのに限るから」

「そうつ。それ！ あらひはそれが言——」

「はいはい。分かったから今日はこれくらいにしましょ」

「そうね。時間もいい感じだし。それじゃおやすみ」

「またね、楽しかったわ。また飲みましょう」

「ええ!?! もうおわひい?」

「あんたは顔でも洗つて来なさい」

「ふふ、じゃあね。お邪魔しました」

バタン

「……全く。隼鷹、あなたも早く……あれ、何処行くの? 顔ならそこで洗えばいいじゃない」

「ん、ちよつとついでに外の風にも当たりたくてさ。直ぐ戻るよお」

「もう、もう少し加減ていうものを覚えなさいよ?」

「あーい。そいじや行つてきまーふ!」

隼鷹はそういうと足早に部屋を出ていった。

飛鷹(隼鷹?) んー……なんか?)

↳ 鎮守府廊下

トテトテ……

「あ」

「あれ、雲龍さん？ 部屋に戻ったんじゃない……」

「飛鷹、ダメ。こつちこつち」

何となく気になって隼鷹が出た後を追っていた飛鷹だったが、そこで思わぬ人物と再会した。

再会した雲龍は驚くより飛鷹の存在が何かに影響してしまうのが気になる様子で、目珍しく少し焦りがちに手早く彼女を自分が居る廊下の曲がり角に引き入れた。

「ちよ、な、なに？」

「あれ、アレ……」 チョイチョイ

「ん？ あれって……あつ」

雲龍が指を指している方向を見ると飛鷹は軽く驚いた表情をした。
何故ならそこには……。

「たーいさあ。んふー」 ギュッ

「おい、酒臭いぞ」

「あ、ちよつと。いきなりそれはないんじゃない?」

「夜中に訪ねてきていきなりもたれかかつて来る奴に言われたくはないな。飲み過ぎなんじゃないのか?」

「えへへえ、そうかもー。だからさあ……」

「分かった。部屋まで送ってやる」

「えー? そーじゃなくてー。ねー?」

「何を言いたいのか解らなくもないが今日は駄目だ」

「むつ、誰かいるの?」

「いや」

「なら——」

「駄目だ。お前、最近新たな改造を目指して少し無理しているだろう? その結果疲労が溜まって珍しく酒に悪い方に飲まれているんだ」

「むう、そんな事……!」

少しむくれた表情をした隼鷹は、提督の心遣いに退く姿勢を見せず更に言い募ろうとした。

ポン

「無理をするな」

「な……………い……………ん……………」

「俺は無理をしない部下が好きだ」

「ちよつと……………そういうのってズルいと思わない？」ポツ

「そうだな。だが、心配しているのは本当だぞ？」ナデナデ

「んん……………し、仕方ないね。じゃ、じゃあさキスくらい……………ね？」

「……………」

「あ、そこで酒臭いから嫌だというのは——」

チュ

雲龍・飛鷹「！」

「……………ん……………」

「……………」

「……………ごめん」

「何がだ？」

「臭かったでしょ？ お酒」

「ふつ、そう気遣えるのなら次はもっと良いキスができそうだな？」

「あ……うん！　ねえ、今度改造を受けたらさ……」

「分かった。都合はつけてみる。だが……」

「分かってるって。素面でしょ？　ちゃんと守るって！」

「よし、なら約束しよう」

「ありがとう！　絶対だよ!!」

「ああ。だからもう今日は休め」

「あいよつ。じゃ、寝るよ。ごめんね、こんな夜分に」

「気にするな。じゃあな。おやすみ」

「うん、おやすみっ♪」

テテツ……

く廊下、雲龍と飛鷹が潜んでいるポイント

「……」

「……やるね」

雲龍は感嘆とも取れる息を吐いてポツリと言った。

「そうね。隼鷹……くっ……」

「悔しい？」

「んー……というより、油断できないと思った、かな？」

「それは私も同意」

「ね」

「うん。お互いに？」ニツ

「頑張りましょう」ニコツ

薄暗い廊下で雲龍と飛龍はコツンと拳をぶつけ合った。

第21話 「料理2」

「たーいさあ」

「ん？」

「暇やなあ」

提督の机に頭を乗せながら如何にも暇そうな感じで黒潮は言った。

「そうか？ 俺は仕事をしてるが」

「むう、うちは暇なんよつ。それに今お昼休みやん！」

「なら陽炎達と一緒に遊んでいればいいだろう」

「やや！ だって久しぶりの秘書艦なんやもんつ」

黒潮の言う通り確かに久しぶりの秘書艦の役目だった。

最近はず鷹の育成をする為に演習に力を入れている所為か、駆逐艦が秘書艦になると自体稀という状態だった。

「悪いが俺は今少し余裕がないんだ。前の執務がまだ片付いてなくてな。これを何とか処理しなくては……」

「うちも手伝う！」

「休み時間くらいゆつくり過ぎせ」

「そんな言葉そっくりお返しするわっ」

「……」

「うー……」ジーン

「分かった。じゃあこれを……」

「！ 任してとき！」 パアッ

それから数分後

「よし、もういいぞ」

「え？ まだ大分残ってるで？」

「だが休み時間が残ってない」

「仕事するんちゃうん？」

「腹も減ったしな。このままでは戦がなんとやらというやつだ」

「ほな、うち食堂で食事貰ってくるわ」

「いや、給仕の必要はない。俺が作る」

「え？ 作ってくれるん？ うちの分も？」

「ああ。手伝ってくれた礼だ。何が食べたい？ 簡単なやつなら作るぞ」

「ほんまに？ ほならうち、うちなあ……」キラキラ
「オムレツが食べたいぴよん！」

唐突に卯月が元気な声と共に割り込んできた。

あまりにも予想外な展開に黒潮は言葉を失って固まってしまった。

「」

「唐突だな卯月」

「えへへー、大佐の部屋の前通り掛かったら何だか凄く良い事聞こえた気がしたのー」

「そうか。流星は卯月といったところか。耳がいいな」

「エツヘン」

「だが今日は遠慮してくれ」

「ええ!? な、なんでえ!?」ガーン

「お前もう食事は済ませただろう?」

「卯月は食べ盛りぴよん! まだまだいけ……」

「材料がそんなにないんだ。今日は黒潮と俺の分くらいしか作れない」

「ええ……」シヨボーン

目に見えて残念そうな表情をする卯月。

その様はまるでウサギの耳が垂れているのが容易に想像できる程だった。

「そう気を落とすな。今度……いや、明日作ってやるから」

「明日!?! それって今日の次の日!?!」ズイ

「そうだ。それなら我慢できるだろう?」

「うん! 分かったぴよん! 卯月今日は我慢するっ」

「すまないな」ナデナデ

「んんー……♪ 大佐が謝る必要はないぴよん。卯月の方こそ今日はいきなりごめんね」

「気にするな。それじゃあ悪いが今日は……」

「うんっ、また明日来るぴよん! 大佐、クロピヨン失礼しましたあ」

バタン

「ふう、これでよし。ん? 黒潮?」

「」

「おい?」ポン

「はっ!?!」

「どうした?」

「大佐! うち、うち……大佐と二人でご飯が……」

「そうなのか？　ならよかった。卯月は今日は諦めてくれたからな」
「え？」

提督の言葉に呆けに取られて回りを見渡して見ると、確かにそこにはもう卯月の姿はなかった。

「い、いつも間に……。あのワガママで聞かん坊な卯月を……大佐凄いなあ」

「そんなに感心される程の事をした覚えもないんだがな。まあ、作るぞ。何が食べたい？」

「うちお好み焼きが食べたい！」

「ほう。なかなか黒潮らしい選択だな。分かった。少し待ってろ」

「はーい♪」

それから十数分後。

「できたにはできたが、おかげで休み時間が後僅かだな」

「ええやん少しくらい。休み入ってもちよつと仕事してたんやし」

「まあ、食べ終わるくらいまではいいか。この後に急ぎの予定もないしな」

「そや♪」

「では、頂こうか」

提督はそう言うのと相変わらず執務室の中央で異彩を放っている調理台から出来立てのお好み焼きを持ってきた。

コトツ

「ほら」

「わああ、良い匂いなあ♪」

「匂いだけかもしれないぞ?」

提督は笑いながらわざとそんな意地が悪い冗談を言った。

「こんな良い匂いするモンが不味いわけないやん。んん♪」スンスン

「光荣だ。半分がイカ玉、もう半分がブタ玉だ」

「んっ」

「ご飯も食べるか?」

「大佐っ、分かってる! 分かってるわあホンマ! 勿論食べるで!」

「了解した」

「ん? 大佐も食べるん? ご飯」

「ああ、お好み焼きは……」

「オカズやからな!」

タイミングを合わせて即答する黒潮。

「どうやら提督と趣味が合うのが相当嬉しい様子だ。」

「そうだな」

「大佐は関西に住んでたん？」

「まあ子供の頃に少しな」

「そっかあ、だからお好み焼きの事も……」

「その通り。実際、そこから引越した先の人から変な顔された時は戸惑ったものだが」
モグモグ

「そうなんよねえ。なんでやる？ めっちゃ合うと思うんやけど」

「やはり同じ炭水化物だからじゃないか？」

「せやったら、ラーメンとチャーハン一緒に食べるのも同じと思わん？」モグモグ

「形も関係あるんじゃないか？ ほら麺は細いだろ？」

「ん、そんなもんかなあ……。熱っ」

「ほら、水」

「ん、おーきに」ゴクゴク

「っ……ふう」

「美味かったか？」

「うん。めっちゃ♪」

黒潮は満足そうな笑顔でお腹を摩りながら言った。「

「そうか」

「ねっ」

「ん？」

「また作って？」

「いいぞ。また秘書になったときにな」

「うん。おおきに♪」

「さて……」

「お仕事やな！ 任しときつ、バツチリ手伝う……ふ……あう……」

気合十分のやる気を見せようとした黒潮だったが、その意気込みを示す途中で欠伸を
してしまった。

「あ……。ちや、ちやうで？ こ、これは……」カア

「……少し昼寝でもするか」

「え？」

「今は13時半か。2時までにはゆっくりするとしようか」

「そ、そんな。うちに気を使わんでも……」

「お前の手伝いが予想以上に助かっているんだ。あと少しくらいは大丈夫だ」

「え？　うちが……？　そ、そんなに役に立ってたん？　ホンマ？」

「お前はそんなに自分の仕事に自信がなかったのか？」

「そんなことない！　うち真剣にやったもん！」

「だろう？　実際それは俺も確認した。そういう事だ」

「で、でもお……流石に休み時間過ぎて昼寝つちゆうのはあ……」モジモジ

「ああ、大丈夫だ。お前はソファーを使え。俺はこのまま仮眠するから」

「え？」

「ん？」

提督の言葉が意外だったのか進呈不思議そうな顔で聞き返す黒潮。

対して提督は、黒潮が躊躇う理由を的確に当てたと確信していたのか、予想外の彼女の反応に同じく意外そうな顔をした。

「大佐、一緒に寝てくれへんの？」

「俺はそのつもりはなかったんだが……」

「……そや」

「ん？」

「添い寝してくれたらうちも寝るっ」

「添い寝って俺か？」

「当然やん」

「ふむ……」

既に複数の艦娘と情事を交わしているとは言え、心底真面目な本質は基本変わっていない提督は少し考えるような所作をした。

黒潮はそんな提督に答えを迫って考える時間を与えないかのように更に攻めに出た。

ギョッ

「お願い」ジッ

「……分かった」

「ホンマ!？」パアッ

「ああ。だが、ソファードと狭いが……」

「問題あらへん。うちが大佐の上に寝るから」

「それだと俺がお前を抱きしめる形になりそうなんだが……」

「構へん、ええよ。寧ろしてほしいわっ」

「寝難くないか？」

「せやから大丈夫やっつて。あ、それともうちの体重が気になる……?」

「いや、駆逐艦で重そうだった思った奴はいないな」

「ほならねっ？ お願いつ。頼むわあ」グイグイ

「ふう……寝難かったら直ぐに言えよ？」

「うんっ♪ 大佐、ホンマおおきにな！」

それから十数分後。

「……」スヤスヤ

「……」

黒潮はうつ伏せに提督の上に寝ており、ちょうど抱き枕を抱く形で二人ともソファ―に寝ていた。

(本当に一瞬で寝たな。こっちも抱き心地が良いからまんざらでもないが……だが……)

(暑い)

一見和やかな雰囲気ではあったが、提督はそんな事を考えながら寝る為の努力に専心していた。

冷房が効いているとはいえ、身近に体温を感じる状態では意外に寝難いものだ。

提督は、そんな意外な発見を勿論口にする事はこの後もなかったが、そんな状況でも

穏やかに寝ることが出来る艦娘の『強さ』にまた違うベクトルで感心するのであった。

第22話 「大子供」

「ヘーイ、大佐ア！」

「遊びに来ましたよ!!」

「ババン！」

「よく来たな。取り敢えず其処に正座しろ」

「What!?!」「ええっ!?!」

「うう……大佐ア、足が痺れたヨお」

「わ、わたしも……比叡、限界が……」

「たかが1時間くらいで音を上げるなよ」

「Sorry ヨ! マナー違反はゴメンするからア!」

「も、もう限界……です。あ、あひの感覚が……」プルプル

「……はあ。解いてよし」

「ー」

提督の言葉にまるで生きる希望を見出したかのように救われた顔をした二人は、許可

が下りると同時に即座に足を崩した。

「ハア……これが生きてるってことなのネ……。ワタシ今とっても amazing な気持ちヨ……」ウル

「お姉様、比叡もです。わたし今凄く生きてるって気がしてます……！」グス

「たかが正座くらいで大袈裟だな。おい、崩し過ぎだ。二人とも下着が見えているぞ」

「ワザとじゃないヨ？ あ、足が今はゆるーことを聞かないんデス」プルプル

「あ、ホントだ。でも大佐だし……恥ずかしいけど……。あ、わたしも足が今ちよつと無理です」プルプル

「そこは無理してでも淑女としてのプライドを示して欲しかったんだがな」

提督は呆れるように溜息を吐き、それ以上はもう注意をしなかった。

「Sorry ネ大佐。でも、見たいなら好きだけ見てネ？」

「私も構いません！」

「……何か色気も何もあつたもんじゃないな。大丈夫だ。今のところお前達はただの子供にしか俺には見えないからさういった心遣いは無用だ」

「エー!?」ガーン

「そんなあ！ わたしはそんなに子供じゃないですよ！」

「ならもう少し慎みを持ってよ……」

それから数分後

「それで、何しに来た？」

提督は、すっかり痺れが抜けて今はちゃんと俗にいう『女の子座り』をしている金剛と比叡に改めて問いかけた。

「え？ 何しについて、タダ遊びに来ただけヨ？」キョトン

「わたしもです！ なんか構って欲しくて」

「お前達は気まぐれな猫と遊び盛りの犬か」

「dog は大好きデス！」

「猫も好きですよ！」

「そんなことは聞いてない」

「BOW WOW！」

「にや、にや……え？ ばうわ……？ 何ですかそれ？ お姉様？」

「英語の犬の鳴き声だ」

「へえ、英語だとそういう風に言う？ んですなえ」

「そうヨ。帰国子女ならこれくらい当然ヨ！」

「一般的な帰国子女の認識を歪めるな金剛」

「ええ!? ワタシ歪めてた!」 ガーン

「そ、そうなんですか大佐!」 ガーン

「……」 (頭痛い……) ドヨーン

「……もういい。遊びに来たんだったな」

提督は取り敢えずそれ以上はツッコまない事にした。

それ以上のめり込むと深刻な精神的な疲労が懸念されたからだ。

「遊んでくれるノ!」 キラキラ

「本当ですか!」 キラキラ

「こんな夜中にやる事と言ったらもう寝るか読書くらいだったしな。いいぞ、付き合つてやる」

「流石 my darling ネ! I love you ヨ!」

「だ、ダーリン……ラブ……た、大佐! 比叡も! わたしともレベルが最大になったらケツコンして下さいね!」 ジワ

「大好きな姉に嫉妬するほど羨ましいのか……ああ、分かっている。条件に達すればちゃんとしてやる」

「約束ですよ!」

「um……お姉ちゃんとしてはちよつと複雑ネー。可愛い妹を嫁に出すというも中々辛いというカ……」

「お姉様！」 ジーン

「つて、何か辛そうな割には顔笑つてませんか？」

「エツ？」

比叡の言う通り金剛は胸に迫るセリフとは裏腹にその顔はどこことなく引きつり、笑いを堪えているような表情をしていた。

「……お姉様？ 辛いつていうの本当ですか？ 実は大佐を独占したいだけとかじゃないですか？」

「ギクツ。そ、そんな事ナイヨ？」

「ああつ!! 今ギクツつて言いましたよね!？」

(策士策に……いや、最初から策が漏れていては策士ではないか)

「お姉様ひどい！」

「Oh 比叡、ごかいつ。誤解ネ！ キャー♪」

「何笑つてるんですかあ!!」

「ぜえ……ぜえ……」

「はあ……ハ……くふ……あは」

「気は済んだか？」

「No! まだヨ！」

「まだ何もしてないじゃないですか！」

あれだけ走り回っていたというのに金剛と比叡は提督の言葉に即座に反応して姉妹揃って抗議と戯れの継続を要求した。

「もう十分していたと思うが……」（こいつらの元気は一体どこから湧いてくるんだ？）

「分かった分かった。で、何をする？」

「ちよつとしたクイズをしまシヨウ！」

「クイズ、ですか？」

「ほう、お前にしてはなかなかまともな案だな」

「それどういう意味ネ!？」

「日頃の行いを思い出せば済む事だろう？ まあ、いい。それで、クイズだったか」

「むう、後でちゃんとツイキューするからね！ コホン、それでは一人一個簡単なクイズを考えてそれに答えてもらいたいマース！」

「分かりました！」

「了解だ」

「じゃあワタシから行くワヨ！ 私の下着の色を当てて下サイ！」

「……」

いきなりのとんでもない問題に提督と比叡は一瞬で黙り込んだ。

「お、お姉様……？」

流石に比叡も顔を赤らめながら姉を窘めるような表情をしていた。

「それ、クイズか？」

提督も比叡の援護に回る事にした。

「ノンノン！ 誤解はいけないワヨ？ 記憶を辿るのも立派なクイズよ！」

「記憶……あつ」

「そうっ。さつき大佐はワタシ達の下着を見たはずデス！ それを思い出せばいいだけ

デース！」

「お前、それだと俺しか答えられないじゃないか」

「大佐に答えて欲しいノ」ズイ

「お、お姉様……」（頭良い！）

（どうやら比叡に金剛を止めてもらうことはもう叶いそうもないな……）

「……」

「さア答えて！」

「大佐、フアイトです！」

「……む？ いぎ答えようと思ひ出せないものだな」

「えっ」

「あー、そういうのつてありますよねー」

「大佐、ちゃんと見ててヨ！」

「馬鹿者。女が、自分からよりもよつて異性に自分の下着をちゃんと見てろなんて言うな」

「Oh 言われてみれば。でも、それはソレ！ これはコレよ！ 覚えられてないのもなんか魅力が足りない気がして悔しいノ！」

「我儘な……比叡？」

「ごめんなさい。私も覚えてないです」

あつけなく唯一の望みは絶たれてしまった。

「むう……」

「あつ……」

考え込む提督に金剛は何か気付いたようで、少し悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「比叡、比叡っ」ヒソヒソ

「え？ なんですか？」ヒソヒソ

「……」コシヨコシヨ

「お、お姉様それは……」カア

「比叡、これは chance なのヨ！」ヒソヒソ

「うゝ……。わ、わかりました。わたしやりますっ……。」ボソ

「よく決断したワネ！ それじゃ……。」ヒソヒソ

「は、はいっ」

「大佐……」

「ん？ どうした二人して立ち上がって」

提督はいつの間にか立ち上がって自分を見下ろしている金剛と比叡に気付いた。

「あの……。わ、分からないならですね……」

「直接確かめテ！」

ガバッ

第23話 「性的要求」 R—15

ゴツンツ

「アウツ!？」

「ひっ!？」

そのまま勢いで主導権を握つて提督と甘い時間を過ごせるものと確信していた金剛の予測は呆気なく彼の拳骨によつて外れた。

「うう……痛いデス……。大佐ア、これが恋人に対してする事ナノ……？」グス

「人に気も遣わず勢いだけでこんな事をしようとする方が悪い」

「そんな……大佐はワタシのこと嫌いナノ？」

「好きとか嫌いとかそういう問題じゃないだろ。金剛、お前は無邪気で可愛げのある奴だとは思ふが、色々と無計画に勢いだけ進もうとするのは悪い癖だ」

「そ、そんな可愛いだんテエ……」テレテレ

「……訂正だ。自分に都合が良いところしか耳に入れないのも悪い癖だ」

ペチン

「きやうっ!？」

「金剛、俺はお前を叱っているんだぞ？」

「あ……ご、ゴメンナサイ……」 シュン

「ごめんなさい！」

金剛が謝ると同時に、姉が説教を受ける様子を居心地が悪そうに見つめていた比叡も一緒に頭を下げた。

「……金剛お前が何を考えて事に及ぼうとしたのかは解る。まあその中には自分の欲求もあつたんだろうが、それだけじゃなかったんだらう？」

「う、ウン……」

「金剛、俺はな。別にお前とこういう事をするのが嫌なわけじゃない。ちゃんと理由があるから説教をしているんだ」

「ハイ。余りにも無神経でシタ……」

「それはお前の今の行動の事だらう？　だが、もう一つ反省しなければならぬ事があるぞ」

「え……？」 ジワア

金剛は提督の言葉にまだ自分が気付いていない悪点があるのかと、羞恥と罪悪感から本当に泣きそうな顔をした。

「た、大佐。お願いです。お姉様をそんなに責めないで……くだ……」

姉が叱られる様を見ていられなくなつたのか、半泣きの比叡が懇願してきた。

「比叡、俺は別に責めてはいない。ただ少し、金剛に気付いて欲しいだけだ。お前の為にな」

「わ、わたしの……?」

「比叡の為……?」

「そうだ。金剛、お前はお前なりに比叡の事を想つてこういう事をしようしたんだろうが、肝心の比叡は全くの未経験だろう?」

「ハイ。そう……だと思つ……」

「そうですよ!」

少し自信がなさそうに肯定する金剛に、きつきとは打つて変わつて顔を真っ赤にした比叡が全力で肯定した。

「なら、もう少し気を遣うべきだったんじゃないか? お前は一回経験すれば慣れるとか考えたかもしれないが、それは経験の仕方にもよるだろう?」

「あ……」

「大佐……」

「多少焦じれつたく感じるかもしれないが、ここはもう少し慎重に行くべきだと俺は思う」

「そ、それってやつぱりわたしじゃ……」

「そうじゃない。こんな始まりになつてはしまったが……金剛」

「は、ハイッ」

「姉としてお前がしつかりサポートしてやるんだ」

「あ……そ、それじゃア！」

「い、いいんですか!？」

「淑女にここまでさせたんだ。ここで応えないという事なんかしないさ」

シユル……。

「はあ……お姉様きれい……」

「比叡、恥ずかしい……でもしつかり見てるのヨ？」

「はいっ」

比叡はゆつくりと服を脱ぎ白い裸体を晒していく姉の姿を惚れ惚れとした顔で見
ていた。

上着、スカート……そして……。

「正解は、緑だったか」

「ふふ、そこは m i n t 　　って行って欲しかったカナ」

ここに來てようやく先のクイズに答える提督に、優しく微笑みながら金剛は正解を補足した。

「ほら、比叡。あなたも……」

「は、はい……」

金剛に促されて比叡も恥じらいながらもただどしい手つきでゆつくりと服を脱いでいった。

「わ、わたしは黄……レモン色でした」

「無理をしなくていいぞ？」

「む、無理な……あう……」

金剛と同じ姿となった比叡は、流石に初心らしく恥ずかしがって提督と視線を合わせ難そうな様子だった。

「ご、ごめんなさい大佐」

「? どうした？」

「わ、わたし……その、今の格好も恥ずかしいんですけどその……」

比叡は何を気にしているのかもじもじして話し難そうに口ごもった。

そんな妹がきになって金剛が優しく訊く。

「比叡？」

「お姉様みたいに……」

「ウン」

「む、胸がなくて！」

「エ？」

「胸？」

二人はその言葉を受けて比叡の胸を注視した。

「や、やあつ……見ないでください……！」

視線を感じ、両腕でそこを庇うようにして比叡は背中を向けて隠す。

「比叡、アナタ、胸が小さい事気にしてたノ？」

「だ、だって……姉妹の中で一番小さいわだし……」

「確かに姉妹の中ではそうかもしれないが、一般的な感覚で言えばそれほど貧しくもな
いんじゃないのか？」

比叡の恥じらう姿を愛くるしく思いつつ提督が正直な意見を言った。

「ワタシもそう思いマース。比叡、たぶんソレ気にし過ぎだと思おうワヨ？」

「そ、そうです？」

二人の言葉にピクリと肩を反応させて小さく震えながらも比叡は二人の方を向いた。

「ああ。だから間違つてもそれと似たような事を龍驤の前では言うなよ？」

「へ？ 龍驤？ あつ……」

「そうヨ、比叡。上には上がいるのヨ」

「金剛」

「あつ」

金剛は自分の口も災いの元だと直ぐに自覚した。

提督の言葉を理解して口にチャックを引く真似をした。

「ゴメンっ」

「まあ、分かつているのならいい。そういうわけだ比叡。見た目はそんなに気にするな」

「は、はい」

比叡はそう言つて胸を庇うのをやめた。

確かに金剛に比べれば小ぶりだが、女性であることを示す膨らみは十分にあるように見えた。

「さあ、比叡……今度は全部……」

比叡が踏ん切りを付ける事ができたのを見届けると、金剛は新たな段階へと彼女を導く事にした。

即ち提督に自分が女である事を証明するのだ。

「ん……」

パサツ……。

お互いの裸を知る仲にはなったものの、やはりいざ事に及ぶとなると完全に羞恥心を拭いきれないのか、少し顔を紅潮させていた。

「ふう……」

興奮して徐々に息が荒くなってきている金剛は、それでも努めて平静を装って比叡に不安を与えまいとした。

スル……。

「はい、終わりッ」カア

「は……ああ……はあ……おね……様……」

比叡は金剛がまるで神々しいばかりの輝きを放っているかのような蕩けた目で興奮しながら彼女を見つめつつも、金剛に起こっていたある変化を見逃さなかった。

（お姉様興奮してる……。 凄い……。 あんなになるものなの……？）

女性の身体の変化に驚きと強い関心に夢中になる比叡だったが、その時に自分の体にも怒っていたある反応に気付いた。

ジュン……。

(あ……………? 冷た……………? えっ、これわたし? お姉様の裸を見てわたしもお姉様みたいに……………?)

驚いた比叡はなるべく悟られない様に視線だけ下へ向けると更に驚いた。

金剛の比ではないくらいの変化が自分にも起こっていたのだ。

「え……………!?!」

ついに驚きで声を出してしまった比叡だったが、そんな事に気付く余裕もなく自分の体の変化に、痴態に、衝撃を受けてその場所を見つめ続けるばかりだった。

「Wow 比叡、これ凄い……………」

「え? あ、あ……………だめ! やあ!!」

いつの間にか肩から金剛が比叡のソコを覗いていた。

比叡はあまりの恥ずかしさに顔をトマトのように真っ赤にさせて両手で必死に隠そうとした。

「ダメ……………お姉様……………大佐……………みな……………見ないでえ……………!」

目に涙を溜めて尚も隠そうとする比叡だったが、その手を金剛が優しく掴んだ。

「お、お姉様……………お、おねが……………」

「No 比叡。恥ずかしがらないで? 今は恥ずかしくて堪らないかもしれないけど、

ソレは今のあなたには凄く助けになるのヨ？」

「た、助け……？」

「そうヨ。比叡、そんなに恥ずかしがることはないワ。寧ろ興奮したらそうなるのが lady としては当たり前ナノ」

「ほ、本当ですかあ……？」グス

比叡は尚も羞恥で顔を赤らめながらも僅かに落ち着きを取り戻したのか、縋るような目で金剛に自分が異常じゃない事を確認した。

「realley! 比叡、こんなになるなんてある意味あなたの才能ヨ。エッチをする時は自分もうんとエッチになった方がいいノ」

「お姉様……」

金剛の言葉にようやく安心した比叡は金剛の手の力に従い力を抜いた。

「良い子ネ比叡……さ、ちよつと順番が逆になつちやつたケド、大佐に比叡のエッチなところ見てもらいマシヨ……」

「は……はい。た……大佐……」ウル

「金剛? あまり無理をさせなくても……」

先程からずっと金剛の比叡へのリードを感じた顔で見守っていた提督だったが、い

ざ比叡のまだ泣きそうな顔を見るとまだ彼女が無理をしているように見えたので、金剛に自制を促そうとした。

「だ……大丈夫です。もう……お姉様が安心させてくれました……。確かにまだ恥ずかしいけど……でも……でも……」

「そうヨ比叡……。手伝ってあげル……。さ、比叡？」

「はい……」

背中に感じる温かくも柔らかい感触により安心感を覚えた比叡は、金剛の導きに従って彼女の手に自分の手を重ねてた。

スル……。

「ハイ、よくできました♪」

「大佐……どうですか？ わたしの……」

「ああ。何も問題ないぞ」

「いやら……そんな。あつ……んっ」ピク

提督の言葉に耳まで真っ赤にした比叡は、そこで何か身体の奥から湧き上がってくるものを感じ、小さく震えた。

（え？ 今言葉だけで？ この子どもまで才能があるの……？）

（これは……これだけ感じ易ければ問題ないだろうが。だが……本当に大丈夫か？ 比叡の意識はもつのか？）

提督と金剛はそれぞれに比叡の性的興奮の激しさに内心驚愕と心配を覚えていた。

「あ……わ、わたし……今……？」

「……金剛、比叡をのままま手伝つてやれ。なるべく違う場所に意識を集中させるんだ。

これは、このままだとこいつがどうなるか分からないぞ」

「りよ、了解デス。比叡、外すヨ？」 プチッ

「あっ……」

「んっ、恥ずかし……」

「比叡、しっかりするですヨ？」 キュッ

「ああっ!? だ……う……んああ!!」 ピクピクンッ

「Oh……」

金剛は比叡の性感の高さに再び驚いた顔をした。

「……金剛、そのままだ。行くぞ」

「ハイ。比叡……ゆっくり息をして……落ち着いて」

「はあ……はあ……お姉様？ つ、た、大佐それ……」ビクッ

「比叡、怖がるなどは言わない。だが、どうか俺を信じて欲しい。なるべく苦しくはさせない」

「う……た、大佐……でも……でも……」ブルブル

「比叡、大佐を……信じて」

「お姉様……」

「比叡」

「大佐……」

提督と金剛、後ろと前から優しく肩を握られ、恐怖の色に染まっていた比叡の目は、徐々に落ち着きを取り戻していった。

「大佐……お願ひします」

「ああ。金剛、頼むぞ」

「任せテ！」

「比叡、下を見るな。俺の顔だけ見てろ」

「は……あつ……？ あああああ……んんんつく、ふ……ふわあああああああ!!」

（やはり準備は事態は問題ないな。これなら痛みもそれなりに……なに、これは……）

(て、抵抗もなく……。もしかしてゆる……。良かった。大丈夫みたい)

「比叡……痛くないか？ 大丈夫か？」(スムーズにいったと思つたらこの圧力……くつ……)

「あつあつあつ……。た、大佐、こ、これ凄……。も、もつ……。んつ。ああああんん……
！」キユウ

「つく。こ、これなら続けても大丈夫そうだな。いくぞ比叡」(寧ろ何もしないとこつちがキツイ)

「っ！ お、お願いします！ こ、これ以上の気持ちよ……。良きなん……。お願い……。しま……。あつん、ああああ！」

「ぐあ……。行くぞ、比叡……。」グツ(これは今日は金剛の相手をまともにしてやれるか分からんな)

——数時間後。

「すう……。すう……」

「フフ……。比叡、凄く安らかな顔してマス♪」

「ああ……」

「大佐、大丈夫ですか？」

「正直、今日程軍人として体力を付けていて良かったと思つた日はない……」

安らかな寝息を立てて眠る比叡にそれを幸せそうな顔で見つめる金剛の傍ら、体力を使い果たした提督はベッドの上ではほ体が動かせない上体でいた。

比叡の処女を貰つた後も、彼女の性的欲求は提督の予想通り高まり続けなんと、あれから7回もしたのだ。

しかもその後には比叡のサポートですっかり欲情し切つて半分性の獣溶かした金剛の相手までしたので、提督は内心腹上死を覚悟までしたのであった。

「し……正直……比叡の相手は遠慮……いや、まあ軽めならいいが体力が今より付くまではまともにしたくないな……」ゼエゼエ

「比叡……恐ろしい子……。ワタシもあそこまへは思つてませんでシタ」ピト

「金剛、股が当たつてる……。もう……。もう無理だぞ？」

「当てたいノ！ ついでに胸もネ。ね、大佐無理なのは分かつてるから大佐の体で……」

「ゴニョゴニョ」

「……何もしくなくていいなら勝手にしてくれ」

「！ 大佐愛してるワ！ ありがと……んっ」ピクッ

（女の性的欲求は……恐ろしいものがあるな……本当に……）

第24話 「お疲れ様」

コンコン

『武蔵です』

「入れ」

ガチャ

「失礼しま——」

武蔵は息をのんだ。

というのも部屋に入った瞬間自分の視界にあるものが飛び込んできたからだ。

いつも通りといった風に椅子に座る大将の傍らに二人の艦娘と思しき女性が二人控えていた。

（見た感じ二人とも戦艦なのは間違いない。だが、誰だ？ あんな二人、私は知らない。大和型……ではないな）

「どうした？」

「あ、いえ！」 ビシッ

「ああ、後ろのこいつらか」

「……は、はい」

「初顔合わせだったか。まあ基本的に表に出ることは殆どないから知らないのも無理はないな。二人とも、名乗れ」

大将に言われてこれまで無言だった二人が無表情のまま口を開いた。

「……駿河」

「近江です」

機嫌でも悪いのか何処となく仏頂面をした駿河と近江は、挨拶もなく文字通りただ名乗っただけだった。

「なんだ、それで終わりか？」

「……申し訳ないです。今日はちよつと……」

「虫の居所が悪いんだ……」

「……ほう？」 ギロツ

3人「!!」ビクッ

大将がきつい眼光で駿河と近江を睨む。

その鋭さと威圧感に、不可抗力で武蔵も委縮して思わず背筋を正した。

「こいつにはぼ付きっ切りで訓練に付き合ってたから嫉妬したのか？」

「う……」タジ

「あ……う……」タジ

どうやら凶星のようで、二人は言葉が出ない様子だった。

「……まあ今回は大目に見てやる。せっかくの武蔵の門出だからな」

「……す、みません」

「失礼しました！」

「え？ あ……ありがとうございます！」

「武蔵はそう硬くならなくていいぞ。別にお前まで叱ってはいなかっただろう？」

「あ……はい」

「だがお前達は次は無いと思えよ？ 自分より立場が下の者でも決して礼は失する様な

真似はするな。分かったな？」

駿河・近江「はっ！」

（やっぱりこの人怖い……）

「うむ。というわけで武蔵よ、せっかく自分の家に帰れるという日に呼び出して悪かつ

たな」

「あ、いえ！ とんでもございません！」

「ふっ、そう畏まるな」

「あ、はい……すみません」（この人も笑うのか）

「ん？　なんだ、俺が笑うのがそんなに珍しいか？」

大将は武蔵の僅かな視線だけでその意を悟ったようで訓練の時とは想像もできない程の碎けた表情で訊いてきた。

「え!?　あ、あ……」ブルブル

「おいおい、そう怖がるな。今は訓練をしているわけじゃないんだ。ああいう顔は必要な時だけにしかせんぞ」

「駿河……？」ヒソ

「うん。大体いつも眉間に皺よつてるよな……」ヒソ

「……ん？」

駿河・近江「!!」ビシッ

「まあそういうわけだ。別に怒ってはいない。俺が今日お前を呼んだのは。単純にこの訓練を耐え抜いたのを褒める為だ」

「あ、ありがとうございます！　勿体ないお言葉です！」

「大袈裟だな……いや、実際に受けた者からしたらそれくらいの気にもなるか。まあいい、頑張ったな」

「はい！　ありがとうございます！」

「言いたかったのはそれだけだ。あとは大手振って堂々と家に凱旋するといい。きつとお前の成長ぶりに基地の仲間も驚くだろう。よし、話は以上だ達者でな」

「頑張ってね」フリフリ

「さつきはごめん」フリフリ

大将の話が終わると共に駿河と近江が謝罪と激励の言葉を贈った。

「本当にお世話になりました！ では、これで失礼致します！」

バタン

「……………ふう」

ようやく緊張を解き、安どの息を吐いていると。

「お話終わった？」

と、武蔵に声を掛ける者がいた。

「大和……………」

話が終わるのを扉の外で待っていたのだろう、大和が微笑みながら佇んでいた。

「ああ、終わった。やつとこれ……………鍛えてもらってやつとはないな。これで堂々と自信をもって大佐の所に帰れる」

「頑張ったわね、本当に」

「ああ、ありがとうな」

「あら？ 私は別に何もしてないわよ？」

「いや、疲れて挫けそうになっている私を見る度に励ましてくれたじゃないか。あれには結構助けられたぞ」

「……本当に素直な『武蔵』ね。そんなに真正面から感謝されたら照れちゃうじゃない」「ふつ、『この武蔵』はそんなに素直じゃないのか？」

「どうかしら。大体は同じだと思うけど……でもこっちの武蔵の方があなたと比べて少し意地っ張りかな」

大和はワザと意地悪い顔で武蔵を見つめながらそんなことを言った。

「おいおい、それじゃ私も意地っ張りみたいじゃないか」

武蔵もそんな大和の誘いに乗って苦笑混じりといった顔で応じた。

「ふふつ、別に違わなくもないんじゃない？ だって訓練を耐えたのはプライドを守る為でもあったんでしょ？」

「……それは否定できないな。だがそれだけじゃないぞ」

「大佐の為？」

「当たり前だ」

「彼を守りたいのね」

「ああ」

武蔵はこの言葉にも恥じらつたりせず、堂々と応じた。

そんな彼女を見て大和も真面目な表情になると、真つ直ぐに武蔵を見つめながらこう言った。

「……大丈夫。この訓練に耐えた成果は必ずあなたの役に立つわ」

「私もそう確信している」

二人はそう言つて暫くお互いに偽りのない答えと視線を交らせ合つた。

「……」

「……」

「……よし、激励の言葉はこんなものかな」

「ああ。世話になつたな」

「基地まで送つていくわ」

「いいのか？」

これでお別れだと思つていた武蔵は、予想外の言葉に意外そうな顔をした。

「そのつもりでここで待つていたんだもの。中将にも許可は取り付け済みよ」

「ありがとう、本当にな」

「どう致しまして。さ、最後にのんびりと二人で海を散歩しましょうか」

「あ
あ！」

第25話 「酒宴」

「ひゃつはー！ 改二だあ!!」

「いいなあ」プクー

「おめでとー!!」

既に改二になっている龍驤が祝辞を贈る隣で、少し不機嫌そうな顔をした飛鷹が頬を膨らませていた。

「あはは、むくれないむくれない！ あたしがなれたんだから飛鷹だってその内だって」
「だったらいんだけどねえ」

「軽空母の中じやあ龍驤の次かあ。ま、練度はあたしの方が上なんだけどねえ」

「むつ、ちよつと自分が上やからつて調子のらんといてや！ 上つちゅーても大した差やないやろ！」

「へっへえ、それは、どうかなあ？」ムニユ

何が明確に負けているのか、隼鷹は露出の多い肌着の状態を利用して前屈みとなりあ
るモノを強調して見せた。

「なあっ！」

「隼鷹さんそれ反則……」

今までずっと黙っていた瑞鳳が龍驤に加勢する。

(あ、無いもの同士か)

「……飛鷹さん？」ムツ

「何かしら？」シレッ

「ま、改二以上の改造の噂もあるし、お嬢ちゃんコンビもまだ希望があるんじゃない？」

「お、お嬢ちゃん……」

龍驤はその言葉に絶句した。

瑞鳳は自分の胸に一瞬手を当てて隼鷹の言った言葉の意味を理解すると、顔を真っ赤にして吠えた。

「お嬢ちゃん言うなあ!!」ガー

「そういえば改造で逆に小さくなることなんてあるのかしら」

酒が多少入った所為だろう、冗談のつもりで飛鷹がふとそんな事を言った。

「え」

本人にしては何気ない言葉だったが、その一言に龍驤と瑞鳳は凍り付く。

「いやあ、それは流石に無いんじゃない？ 多分」

カラカラ笑いながら飛鷹の冗談をウける隼鷹、こちらはすっかりデキあがつており周りに気を使う余裕がそもそも無かった。

だがその冗談を冗談とは到底受け止めることができないう龍驤と瑞鳳は、今度は部屋の隅で二人して青くなつて震えていた。

(こ、これ以上小さく……!?) スカスカ

(考えられない!) ペタペタ

「まあ流石にあり得ないか」

「そうだよー……て、あれ?」

「だ、大丈夫や。う、うちは新境地を開拓するつて決めたんやもん。怖くなんかない!

こ、怖くなんか……」 ブツブツ

「大佐はロリコン……じゃないけど駆逐艦みたいな子も好いてくれるつて言つてた……。だから大丈夫……大丈夫。例え改造でそんなことになつたとしても……わ、わたしだつて……」 ブツブツ

「二人とも深刻な顔しちゃつてどうしたのかしら?」

「飛鷹が変な事言うからじゃーん」

「え? 私何か言つた?」

「ああ? んー……何か言つたつけ?」

トントン

「んあ？」

「はーい」

『隼鷹、いるか？』

「え、大佐？」

「はーい、いるよー？ 入っていいよー」

「邪魔する。夜分に悪いな隼鷹、飛鷹……と、龍驤？ 瑞鳳？ あいつらどうかしたのか？」ガチャ

提督が部屋に入ってもその事に気付かず未だに部屋の隅でブツブツ呟いている龍驤と瑞鳳。

提督の方が先に気付いて二人の様子を心配した。

「あー、ちよつとねー？」

「何かあったみたいよ、よ？」

「なんで一緒にいたお前達が分からないんだ……」

「まま、取り敢えず座って座って」

「何か用？」

「ん、お前改造を受けたら？ その祝いに、な」チャプン
「おー♪」

提督の土産に喜びの色を浮かべる隼鷹は浮かべた。

「気が利くわねえ。勿論私も貰っていいのよね？」

「うちも！」「わたしも！」

「あ、復活した」

提督の声に気付いたのかいつの間にか我に返った龍驤と瑞鳳も後に続いた。

「頭数が居た方が賑やかで良い。勿論隼鷹が構わないならだが」

「あたしが断るわけじゃないじゃん！ もちろんいいよ！」

「流石隼鷹や！ 話分かるでえ♪」

「おねーちゃん大好きー♪」

「や、お姉ちゃんって誰よ？」

「あははー。おねーちゃんかあ」

まんざらでもなさそうな顔で隼鷹は瑞鳳の言葉に頬を緩めた。

「まんざらでもなさそうね」

「うちは言っていないで！」

「何をムキになつてゐるんだ？」

「さあ？」

「元々はおんたが原因やろ！」

（やっぱりか）

「まあまあ、せつかくのめでたい席なんだからさあ。今はそ・う・い・うのは無しにしよーよー」

「ぐぬぬ……」

「大佐、わたし注いであげる！」

「ん？ ああ、ありがとう。……瑞鳳、そう言えばお前、酒が飲めるのか？」

「……それってどういう意味？」

瑞鳳は酌をしていた手を不意に止めて提督はジトつと睨んだ。

「……飲めるみたいだな。すまん他意はない」（しっかり酔つてゐるな）

「ほんとー？」ジー

「うちも飲めるで！」

「いや、何かお前は最初からそう見えているから気にはしていないぞ」

「それこそどういふ意味や!？」ガーン

「隼鷹、ん」

「とと……サンキュー♪」

それから一時間ほど後。

「すー……すー……」

「ん、む……にゃ……」

提督や隼鷹達のペースに着いていけなかったら龍驤と瑞鳳は程なくして静かな寝息を立てていた。

「くすす……やっぱり見た目通りって事かしら。二人して丸くなっちゃって」

「ただそんなに酒に強くなかっただけじゃないのか？」

「まあ確かに駆逐艦でもお酒飲む子いるからねえ」グビツ

「お前は飲み過ぎだ」

「これでも自重してるとって」

「あんたは飲まれているのか飲んでいられるのか分かり難いのよ」

「ふっ、それは言ってるかもな」

「そりや気分良く酔いたいときは飲まれるけどさあ……んぐ……つぶはあ」

「焼酎だからって調子に乗っちゃダメよ？　大佐が来る前はビールとかも飲んでたんだから」

「チャンポンか」

「気持ちよく酔えるんだけどな……なんであれすると寝起き最悪なんだろう。納得いかない！」

「あんたみたいなのを反省させる為じゃない？」

「自然の摂理ってやつだろう。諦めて享受しろ」

「自然にまであたしは束縛されていたのかあ、世の中無常だねえ……」

「改二になっても酒癖は改善されないみたいだな」

「それくらいの効果あってもいいのにな」

第26話 「旧交」

「改二おめでどう」

叢雲が笑顔で初春の改造を祝福した。

「ありがとう。叢雲、先に悪いの」

「別に気にしなくていいわよ。私だって、まだ許可がおりてない子だってその内になれるわよ」

「で、あるな」

「で？」

「ん？」

「大佐に見せないの？」

「ああ、う……むむ」

初春は叢雲にそう言われた途端、少し居心地が悪そうに視線を下に落として悩むそぶりを見せた。

「どうしたの？」

叢雲が突然の親友の態度を心配する。

「いや……らしくないとは思うのじゃが……」

「？」

初春はモジモジしながらこんな事を言った。

「改造前の方が好みとかだったら、と思うと……の」

余のも予想外の答に叢雲は一瞬目を丸くしたかと思うと、次の瞬間には手で口を押えて笑うまいと我慢する素振りをした。

「……………」

「あ、こらっ。吹き出すことなからう」カア

「だって、ふ……………ふふふ。ごめん、確かにらしくない……………わ……………く、ふふふ」

目尻に涙を貯めて何とか笑いを堪えるのに苦労しながら叢雲は苦笑交じりに謝る。

そんな彼女の態度に初春は拗ねたような視線で抗議をした。

「むう、いくらなんでも笑い過ぎじゃないかえ？」

「あ、ごめんごめん。でも……………別に今も悪くないと思うわよ？」

「そうか……………の？」

「初春は気に入っていないの？」

「ん……………そうでもないが……………」

少し長くなった髪を弄りながら視線を泳がせる初春。

その様子は改造の結果にまんざらでもない満足を感じているように見えた。

「なら大丈夫よ。初春が気に入っているなら大佐だつて気に入るはずよ」

「うむ……」

「本当に初春らしくないわね。大丈夫つて言つてるでしょ」ポン

叢雲はそう言つて親友の肩を軽く叩いた。

「……ん、む」

「もう大丈夫？」

「うむ。問題ない」

「ま、考えてみれば最古参の割にはずっと改造がなかったものね、待ち侘びた分緊張するのも解るわよ」

「だからこそお主に対して後ろめたい気持ちもあるのじゃがな」

「私とあなたの仲じゃない。気にしないで、つて言つたら本当に気にしないでいいのよ」

「叢雲……うむ、面倒を掛けてしまったの。すまなんだ」

「いいつて。ほら、早く行きなさいよ」ヒラヒラ

「相、分かった。初春、推して参る」

叢雲のおかげで何とか迷いを振り切ることができた初春は、スッキリした顔でそう宣言した。

「……改二、かあ……」

親友の後ろ姿が見えなくなった後、叢雲ほつりと呟いた。

(羨ましくないと言ったら嘘だけど……でも……)。親友の嬉しい顔見たら祝福せずになんかいられないじゃない)

「まっ、楽しみが後になつたつて思えばいいか」

少し溜息を吐いて気を取り直した時だった。

叢雲は服の袖を軽く引つ張られる感触に気付いた。

クイクイ

「?」クル

退かれた方をくるりと振り向くとそこには叢雲を励ますように微笑む電がいた。

「フアイトなのですよ!」

「電……そうね。そういうえば最初は駆逐艦は、あなたと初春と私だけだったわよね」

提督の鎮守府に最初からいた駆逐艦は叢雲と初春だったが、提督の着任から程なくして配属となった電との時間の差はそれ程ではなかった。

その事もあつてこの3人は自他共に認められる古参であり親友同士だった。

「電も早く上位改造を受けたいと思つていますよ」

「……まったく、気を遣っちゃって」ペチ

電の気持ちを楽ししく思いながらまるで生意気だぞ、と言うように軽くデコピンを見舞う叢雲。

「あうっ、えへへ……」

「ふふっ……よしっ」

「叢雲、元氣出ましたか？」

「ええ。だからちよつと飲みに行きましょう」

「えっ」

電は叢雲の言葉に一瞬固まった。

「私知ってるのよ、あなたが大佐に憧れてお酒や煙草真似事をしようとしてるの」

「あ、あわわ……み、皆には内緒なのですよ!?! 特に暁ちゃんや雷ちゃんにはお願いしたいのです」

余程自分にとって重大な秘密なのか、叢雲に事実を述べられて焦る電。

「ふふ、バレたらどうなるのかしらねえ?」

「……きつと焦って電と同じ事しようと思います」

「でしようね」

「……」

「無茶、させたくないんだ？」

「……なのです」コク

電は真面目な顔で頷いた。

姿こそ幼子だったが、その顔は可愛らしいながらもしつかりとした意志が感じれる真面目な顔だった。

「意外よね。駆逐艦の中で一番優しくて幼そうなのに実は中身は結構大人だなんて、ね」

「……叢雲には言われたくないのです」パイ

「言うじゃない。じゃ、付き合ってくれるわね？」

「仕方ないですね」クス

電は苦笑して叢雲の誘いを快諾した。

コンコン

「初春じゃ」

『初春？ いいぞ、入れ』

ガチャ

「邪魔をする」

「ああ。どうし……そうか」

初春の姿を見るなり、提督はすべてを察した様子で暫く彼女を注視した。

「うむ」

「……」

「どう……かえ？」

視線に耐えかねたのか少し頬を紅く染めた初春が感想を聞いてきた。

「ん？」

意外そうな顔で聞き返す提督。

「いや……その、見た目……とか、の？」

「特に感想はないな」

「っ……………」

ぶつきらばうな言い方に初春はショックで黙り込む。

が、暫くして。

「……」

「……………」

初春は何かに気付いたのか、小さな声をあげた。

「ん？」

「大佐、ちよつと意地悪くないかの？」

ジト目で提督を睨む初春。

その顔は不機嫌そうにも悪戯に興じる子供のような顔にも見えた。

「ん？ 何がだ？」

「特に感想がないという事は今までと同じという事じゃろう？」

「まあな」

「妾が一番望むものがそれだと分かかってて敢えて突き放すような言い方をするのは意地が悪くないかの？」

初春はそう言つてズバリと自分の願望と提督の意地悪の真意を重ね当てた。

「それなりの付き合いだからな、ちよつと試してみたくなつた」

「ほほう？ では、そんな質の悪い冗談に付き合つた礼としてそれなりの褒美は期待していいのじゃろうな？」ニツ

「何がいい？」

「それこそ当てるみるがいい」

初春は腕組みをして挑発するような顔をしながら微笑む。

「ほう？」

「言つておくがヒントは無しじゃぞ」

「……ふむ」

「……」

提督は少し考えるような仕草をした後、やがて真つ直ぐに初春の方を向き直るとゆつくりとした足取りで彼女に近づいて来た。

コツコツ

「……ん」

チユ

「……どうだ?」

「ふっ、大佐にしては満点じゃ」ニコ

どうやら提督の出した答は正解だったらしい。

満面の笑顔で嬉しそうな顔を初春はした。

「良かった。てつきりもつと慎みを持ってとか言われて叱られるのかと思つたぞ」

「なんと? ふっ、見ず知らずの男ならともかく、大佐でそれはないわ」

「身に余る評価だ」ペコ

そう言つて提督は大袈裟に初春に頭を下げた。

そんな提督の演技に初春も乗り、笑いながらこう言つた。

「苦しゆうない。だから、の?」

「ああ」

「んむ……」

チユ

2度目の口づけ、今度は少し深く、時間を掛けて行つた。

「……ふ……う。仕事中に接吻を贈るとは俺もだらしなくなつたものだな」

キスを終えて少し複雑そうな顔で提督は言つた。

「そうかえ？ 妾は大佐の成長ぶりに感心して更に今は幸せ一杯なのじゃが」

「墮落が成長、か。ふっ……」

「大佐、まさかこれで丸くなつたとか思つてないじゃろうな？ じゃつたらまだまだじゃぞ？ この初春が時間を掛けて大佐をもつと真人間にしてみせよう」

「斬新なフォローだな」

「ふふふ。確かにこんなフォロー、大佐にか適用できないの」

提督と初春はお互いに意地が悪い顔をしながら笑い合い、共に改二の改造を祝つた。

第27話 「独占欲」

「もう11月ですね」

「ああ」

「季節はもう秋なんですねえ」

鳳翔はそう沁み沁みと語るが、二人の前に広がっている光景はというと……。

ザザーン……サア……。

穏やかな風と波の音、そして眩しい程の太陽の光が海面に反射して輝く南国の光景が相変わらずそこにあつた。

「……」

「……日本ではな」

提督はそうポツリとそう呟いた。

「こゝ、紅葉の代わりに夕暮れでも楽しみませんか？」（しまった。上手く誘つたつもりが……！）

「秋は夕暮れ、か。だが此処では夕暮れというより夕日という言葉の方が合っている気がするな」

「ゆ、夕日だつて夕暮れにしか見えないのですから同じですよ！　ね？　大佐？」
「ん、ああすまん。気を遣わせてしまったか」

「いえ、いいんですよ！　せつかくの非番の日に私にお付き合い頂いているんですから」
その日鳳翔は非番だった。

基地の敷地内で運営している喫茶店で使う食材の買い出しに出かけようとしたところ、それを偶然見かけた同じく非番だった提督が自分から荷物持ちを買つて出たのだつた。

正直、人間より優れた身体能力を艦娘である鳳翔にとつて多少の荷物は平気という自覚はあつたが、それでもこの好機は逃す事はできなかつた。

こうして上手く軽いデート気分を味わう事に成功した鳳翔は、その雰囲気をより楽しむ為に買い物物の帰りに浜辺の散歩を提案したのだつた。

「荷物を持ちを買つて出たのは俺の意思だ。そう気にするな。それより」

「はい？」

「夕日を楽しむのは良いとしても、このまま夕暮れまで待つつもりじゃないだろうか？」

「あつ……」

確かに今の時刻はまだ正午過ぎ。

夕暮れを楽しむにはまだ少し時間があつた。

「そ、そうで……すね」

二人きりの散歩に浮かれて当たり前のことに気付けなかった恥ずかしさと、楽しい時間がもう直ぐ終わってしまうという残念な気持ちも相まって鳳翔から出る声も自然と気落ちしたものとなっていた。

「荷物を置いたらまた来ればいい」

「え？」

鳳翔はハツとして顔を上げて提督を見た。

「確か今日の仕込みは大淀だっただろう？　時間ならあるじゃないか」

「基地に戻ってもお付き合ひ頂けるのですか？」

嬉しさに僅かに震える声で提督に確認する鳳翔。

「お互い非番なんだ。今日はお前と散歩でもしながらゆっくりしようと思っていたところだ」

「大佐……」　ペアツ

「それにこう日差しに当たっては手持ちの食料も傷むかもし——」

ガシッ

提督は不意に腕を掴まれる感触に振り向いた。

するとそこには期待と喜びから顔を紅潮させた鳳翔の顔があった。

「ん？」

「帰りましょう」

「は？」

「帰りましょう。直ぐに。そしてまた直ぐに散歩に行きましょう」

「あ？ ああ……」

（あの鳳翔が……いかな。女性を見た目から性格を判断するのは悪い癖だな）

提督は鳳翔の積極性に意外に思いつつも内心自分の先入観を反省するのだった。

——それから2時間後。

「いい、気持ちですねえ♪」

「そうだな。ワンピース着てきて良かったじゃないか」

「ええ。最初に大佐に勧められた時は実はちよつと迷いましたけど、でも実際に着てみるとこれにして良かったと思います♪」

鳳翔はそう言つて微笑むと、着物姿では味わえない心地よい潮風と暖かな日差しを全身に感じて楽しんだ。

鳳翔は、基地を出る前に提督からどうせプライベートで外に出るのだから、こういう時くらい服装もより外の環境を楽しめるものが良いのではないかと勧められたのだった。

一応私服も持つてはいたが、提督と仲良くなるまでは基本的に私服を親しい仲間以外の前では使うことのなかった鳳翔は、最初提督のその勧めに気恥ずかしさから逡巡した。

だが今この時がそうある機会でないことも事実だったので、思い切つて提督の勧めを受けたのだつた。

「似合っているぞ。そういう服も持つていたんだな」

「あまり着ることはないんですけどね。流石に此処の氣候だと少しは……つて」

「確かにな」

「大佐はなんで私服を着てこなかったんです？」

「俺もあるにはあるがお前と同じで少なくてな。その上その服をクリーニングに出してから取りに行くのを忘れてしまつてな」

「ああ、だから……」

鳳翔は納得といった表情で提督の姿を改めて見た。

軍服こそ来ていなかったが、その出で立ちは上着を脱いで上半身がシャツだけとなつたラフな格好だつた。

「大佐」ソツ

「ん、いいのか？」

鳳翔はポケットからマッチを取り出して提督に喫煙を促した。

「ふふ、そのつもりで後ろのポケットに煙草を忍ばせたのではないのですか？」

「……まあ、こう気持ち良いとついな」

「遠慮されなくていいですよ。健康を害してしまうほどお窘めにならないければ私からは

何も言うつもりはありません」ニコ

「ありがとう。ん……」

「どうぞ」シュツ……ポ……ジジ

「……ふう」

「美味し……気持ち良い？ ですか？」

「どっちも正解だ。情けない事にな」

提督は苦笑しながら答えた。

「つ……ふう……」

提督が二口目を含んだ時だった。

(あら?)

鳳翔は提督の胸元に首飾りのような物を確認した。

「大佐、それは？」

何となく気になって鳳翔は提督の胸元を指さしながら訊く。

「ん？ ああ、これか」ジヤラ

「あ、認識票ですか。え、二つ……？」

鳳翔が言った通り提督は認識票を二つ下げていた。

一つはおそらく自分のものだろう。

ではもう一つは……。

「ああ、もう一つは俺の友人のだ」

「え、それって……」

悪い事を聞いてしまったと、鳳翔は申し訳なさそうな顔をした。

「いや、気にしなくていいぞ。これの持ち主はちゃんと生きてる」

「え？」

「陸軍の友人だが、少し前に軍を辞めてな。送別会の時に一緒に飲んだ時に記念にと

言ってくれたんだ」

「認識票をですか？ 殉職されない限りは普通は軍に回収されるはずじゃ」

「これはレプリカだ」

「レプリカ？」

「ああ、わざわざ俺にくれる為に作ってくれたらしい。勿論バレたら厳罰ものだ」

「レプリカ……厳罰……大佐、それちよつと見せてもらつても？」

「ああ、いいぞ」ヒヨイ

「ありがとうございます。あ……」ジャラ

提督から認識票を受け取つた鳳翔はあることに気付いた。

「これの持ち主の方つて女性の方だつたんですか」

鳳翔の言葉を聞いて提督は軽く驚いた顔をした。

「よく分かつたな。一応俺以外は分からないように友人が予め名前や認識番号の一部を削り取つていたはずなんだが」

「あ、いえ。勘です」(裏に住所と電話番号が手書きで……)

「大佐」

「ん？」

「もし、もしよろしければ」(もし大佐が妙な鈍感を發揮してこれを見ていなかったら……)

「なんだ？」

何か後ろめたい事でもあるかのようにモジモジしながらなかなか出だせないでいる鳳翔を提督は不思議に思つた。

「(このご友人の認識票、私に……)(上手くすれば……)」

「何?」

今度こそ提督は意外そうな顔をした。

流石に鳳翔がそんな要求をしてくるとは予想外だったからだ。

「あ、いえ! ただちよつと珍しくて本当に大佐さえよければいいんです! へ、変な事をお願いしてしまつてすいません! や、やつぱりいいで……」

「ふむ……」

提督は慌てて自分の希望を取り下げようとする鳳翔を見ながら友人からこれを貰つた時の事を思い出した。

『これは?』

『見りや分かるじゃん。認識票』

『いや、お前軍を辞めたんだろ。これは』

『複製したんだよ』

『レプリカか? おいおい、もしバレたら……』

『提督君だつたら言わないっしょ? 大丈夫だつて一応名前とか認識番号の一部は削つてあるから』

『だからつてな……。あと、提督君はやめてくれ』

『お別れの記念だと思つてよ。ねっ』

『ふむ……分かつた。じゃあせつかくだから』

『良かった！ まああくまで記念だしレプリカだから適当に扱つていいからさ！』

『まるで俺が失くす前提のような言い方だな』ムッ

『あはは。それは、どーかなー？ ま、とにかく貰つてくれてありがとね！』

「……」

「大佐？」

「ああ、いいぞ」

「え？ ほ、本当ですか!？」

提督の言葉に心の底から驚いたような声をあげると、程なくして何故か何かに安心したような穏やかな表情をした。

「ああ、友人も適当に使つてくれとか言つていたしな。勿論そんなつもりはないが、お前なら大事に扱つてくれるだろう」

「あ、ありがとうございます！」

「そんなに嬉しいか？」（随分大袈裟に感謝するんだな）

「あ、貰えるとは思つてなかつたので」

「まあそこはお前を信用してる証だとも思ってくれればいいさ」
「大佐……ありがとうございます。本当に」

鳳翔は内心自分の行動を卑劣だと嫌悪しつつも少し安心していた。

提督が誰とでも付き合ってくれるとは言ってくれたとはいえ、やはり人間の女性には強い優位性があると思う。

だからなるべくは、そう言った強敵は、できれば少なくあつて欲しいという鳳翔なりの秘めたる独占欲だった。

流石にこれを廃棄したりなどは間違つてもするつもりはないので、敢えて隠したりもせず大事に保管するつもりだが。

できれば本人にはこの事は気付かないでいて欲しい。

鳳翔は提督に感謝しながらもそんな事を複雑な気持ちで考えていた。

第28話 「確執」

「失礼、中将殿はいらっしゃいますか？」

「中将なら今はお手洗いに行つてますが」

「ん？」

将校が声が見た方を見ると、女性が一人いた。

（中将の補佐官か？）

「そうですか。では補佐官、この資料を中将殿に」

「補佐官？」

将校に補佐官と呼ばれた女性は眉をひそめて聞き返してきた。

「ん？ 君は補佐官だろう？ だからこれを中将殿に——」

「私、補佐官じゃありませんが？」

「なに？」

「中将専属の艦娘、信濃です」

「は？」

自分が補佐官と呼んだ女性がそれを否定し、更には自分が艦娘であると答えた人物を

将校は少し不審そうな目で見た。

（艦娘？　こいつが？　何故艦娘が海軍の軍服を着ている？　それに艦娘であるにも関わらず秘書艦ならまだしも、司令官の補佐官の真似事とは……。少々人間に対して驕っているではないか？）

「あの……何か？」

将校の視線に何かを感じたのだろう、信濃もどことなく不快そうな顔で彼を見つめ返してきた。

「む……その目。君は艦娘なのに何で補佐官の真似事などしている？　艦娘なら艦娘用に支給された服を来て秘書艦をしているべきじゃないのか？」

「恐れながら、ここには秘書艦はおりません。そして当然補佐官もおりません。司令には全て自分でできることは自分で行って頂いてますので」

「なんだと？　じゃあ君は何だといふのかね？」

「同僚ですが何か？」

「はっ……」

将校は今度は隠す事もなく怒りの感情を露わにした。

（とんでもない侮辱だ。思い上がりだ。人間ではない兵器の艦娘が補佐官や秘書でさえおこがましいというのに、人間の、それも司令官の同僚だと？　こいつ調子に乗って

るな)

「き……いや、お前……」

怒りに震える将校がそれ以上口を開いていれば二人の間で日悶着があつたのは間違
いなかつただろう。

中将がトイレから戻つてきたのはそんな一触即発になろうとしていた瞬間だつた。

「どうしたの?」

「司令」

「中将殿つ」

「どうしたの?」

「なんでもありません」

信濃は何事もなかつたのような顔で即答した。

その顔は、さつきまで将校と剣呑な雰囲気であつたことなど気にするどころか認識さ
えてなかつたようといつたように無表情だつた。

「そんなわけあるか! 中将殿、この艦隊娘は少将問題が有ると私は思います」

流石に将校の方はそうはいかなかつた。

自分に失礼な(単に気に入らない受け応えをされたただけだが)態度を取られた事、そ
して艦娘でありながら人間と同等と思つている思い上がりなど、洗いざらいをその場で

中将に訴えて信濃を糾弾しようとした。

「へえ」

対する中将は眠そうな顔をして適当に聞き流している様子だった。

「中将殿、お聞き下さい！ こいつは……！」

「同僚だよ」

「は？」

中将の予想だにしない答に将校は固まった。

それに対して中将は氣になる事もなく矢継ぎ早に続けた。

「パートナー」

「え？」

「こいび——」

ビシユッ

「ひっ」

「おうっ!!」

二人の顔の間を高速で何かが通り過ぎた。

「……はい？」

見ると、無表情ながら明らかに怒っている信濃がそこにいた。

「げめんなさい」

中将は速攻で謝った。

その姿は艦娘の指揮官である提督としての威厳も何もあつたものではなく、頭の上がない妻の尻に敷かれる夫そのものだった。

「……なっ!？」

まだ何が起こつたか分からないでいた中将は壁を見て驚きの声を上げた。

そこには紙飛行機が刺さっていた。

ただの『紙』で折られた飛行機が壁に刺さる速度とは一体以下ほどの威力であろうか。

もし、それが自分に当たっていたら……。

「……っ!」ゾッ

中将はその結果を想像して青くなつた。

「き、きや……」

「まあまあ」

流星にそれ以上は事態が収まらなくなると思った中将が今度は信濃と中将の間に割り込むように入つて、彼に囁いた。

「なおこちゃん」

「あ?」

急にわけのわからない言葉を言われて将校は目を白黒させた。

「シヨートヘアーの童顔の」

「!!」

将校は今度は青から白くなった。

どうやら彼にとつてかなり重要なキーワードらしかった。

「ちゆ、中将殿そ、それは……」

「?」

対する信濃は中将の話が理解できず遠目に二人を見て首を傾げるばかりだった。

「確か君は結婚してたよね? それに子供も」

「あ……あ……」

「いや、解る。解るよ? 君はそういうお店に行っただけだもんね。男っていうのはそ

ういうもんだよ。女がアレしちゃうようにどうしても遊びたくなるもんだよ」

「……」

将校は俯き完全に沈黙していた。

「ま、脅しみたいになっちゃって悪いけどこの事は内密に頼むよ」

「は、はい……」

将校は肩を落として力なく返事をするしかなかった。

そんな将校に、今度は中将は明らかに今までとは違う少し真面目な表情で彼の肩に手を置きながら言った。

「君、ここに配属になって日が浅いかな？」

「え？ あ、はい。3日前に支部からここに着任して参りました……」

「そつか。うん、先ずは栄転おめでとう」ポン

「は……ありがとうございます」

秘密に触れられて意気消沈しているところに今度は突然の祝辞。

状況が整理できずに動揺する将校は、うなだれたままだお礼を述べるしかなかった。

「さつき信濃が言った事はね。まあ大体本当だよ。俺は大体自分でできることは自分でやってるんだ。だけど全部俺一人でやってるわけじゃないよ」

「彼女にもちゃんと仕事は割り当てて二人で分担してやってるんだ」

「そ、それでは秘書艦の艦娘としての意義が……」

「うん。まあそういう考えはね先ずは何でも自分でできるようになってから持った方がいっしょ」

「何でも自分で……？」

「そう。艦隊の指揮、執務は勿論。艦娘自体に対する理解。こういう事を全て一人で理解し実行できる自信」

「しかし中将殿、私は通信将校なので提督とは……」

「君は通信将校だろう？　ならそれこそ情報に携わる機会が俺よりたくさんあるはずじゃないか。何も全部実際にしろとは言わないよ。できないのなら知識を蓄えたらいい」

「知識……」

「何でも一方的な見方で決めつけたらいけないよ。せつかく此処に来れたんだ。先ずは俺や他の司令官と関わってもう一度君の、軍人としての有り方を考え直してみるのいいと思うよ」

「中将殿……」

将校は顔を上げた。

ただ脅されて叱責されるだけだと思っていたら、逆にいろいろ励まされて薫陶まで受けたのだ。

彼の折れた心は中将への感謝から立ち直りつつあった。

「まあ何が言いたいのかというと、秘密は守るよ」ニッ

「中将殿!!」

将校は再び青くなって悲鳴のような声をあげた。

それから十数分後、中将の取り成しで何とかその場は収まり将校とも和解するという最良の結果で事態は収束した。

指令室には再び中将と信濃、そして掃除から戻ってきて彼らの手伝いをする朝日の3人だけとなっていた。

「いい加減機嫌直してくれないかなー？」

「……なんの事かしら？」

書類から目を離さずに信濃は口だけで答えた。

「怒ってるじゃん」

「は？」ピキ

「信濃さん美人！」

「そんなので機嫌を取れる女性なんていないわよ」

「……そうね」

「司令官」

中将の隣で執務を手伝っていた朝日が彼に声を掛けた。

「ん、どした？」

「信濃、怒ってるのですか？」

「どーかなー？」チラ

朝日の言葉を受けて中将は再び信濃に訴えるような視線を送った。

「つ……。全く……」

「お？」

「今回は私も悪かったわ。久しぶりにあんな態度を取られたから癪に障ったのね」

「はは。まあ新人だからちよつとあれだったけど、彼は有能だと思うよ」

「……どうしてそう思うのかしら？」

「女遊びが好きな男に悪い奴はいな——」

ヒュッ

「すみません」

「ごめんなさい？」ペコ

「なんかあなたの所為で朝日がドンドンおかしくなっている気がするのだけど」

「感情豊かになってきていいじゃない」

「せめて変な知識は身に付けない様に気を付けて貰いたいものね」

「善処します」

「頑張ります？」

「……つ、ふふ」

「はは」

「？」

相変わらず妙な受け応えをする朝日に中将と信濃は笑いを零した。
そんな二人を見ながら何が可笑しかったのか小首を傾げて真剣に考える朝日。
少しピリピリしていた職場の雰囲気はいつの間にか元に戻っていた。

第29話 「ゲーム4」

「た・い・さ・く♪」

「愛宕どうした？」

「ゲームしましょう！」

「いいぞ。誰か呼ぶか？」

「ん〜……」

「どうした考え込むような顔をして」

「えっとね、これ確かに皆でやった方が盛り上がりかと思うんですけどお……」

「？」

「初めてやるから最初は人が少ない方が……大佐と二人だけの方が遊び易い気がするんです」

「どんなゲームだ？」

「これです！」

そう言うとき愛宕は提督の顔の前にあるゲームソフトのパッケージを突き出した。

「……なるほどな」

パッケージを見て提督は愛宕が言っていたことを全て理解した。

「ね？」

「確かにこれなら外で遊ぶのとは雰囲気が違うだろうな」

「うん。外だと平気だけど何か自分の家でやるのって変な気がするか、違和感ありませんよ？」

「まあ一般的な家庭ではこういうのを使うしか基本的に遊ぶことができないからな」

「まずは私達で遊んでみて、それで慣れたら皆を呼びましょうよ！」

「そうなるよ、俺達だけが有利になるのが必然じゃないか？」

「だからいいんじゃない！」ニツ

「ふっ……悪い顔だ」

「お待たせしました♪」

一度解散してから数分後、再び提督を愛宕が訪ねてきた。

「なかなか気合が入っているみたいだな」

ゲームをする為に提督の部屋に来た愛宕は、着替えてきていた。

髪の毛をポニテールに結び、視力の嬌声にも力を入れているのか眼鏡をかけ、上は腕まくりをしたTシャツ、下はジャージといった出で立ちだった。

「ふふつ、汗かいちやうと思えますからねえ。ちよつと気合い入れてみましたあ♪」
「これは、こちらもそれなりに真剣に望まないとな」

提督はそう言つて上着を脱ぎ、愛宕と同じくシャツのみとなつた。

「わあ、やる気满满ですなあ♪ それじゃいきますしよう！」

「ああ」

提督はそう言つと、テレビに既に設置してあつたゲーム機の電源を入れ、ソフトを挿入した。

夜、提督の部屋で賑やかな曲が流れていた。

よく聴くとその曲に混じつて人の声も聞こえる。

その人の声とは……。

「く♪ ……ふうっ！ どうぞ？」

額に滲んだ汗を拭いながらスッキリした顔で愛宕は提督を見る。

「上手いじゃないか。これなら別に俺達だけで遊ばなくても良かったんじゃないか？」

「そういう大佐だつて中々だつたじゃないですか？」

「そうか？」

「ええ。何で歌つたのが外国語のものばかりだつたのかが気になるけど……」

「軍歌とか交響曲が好きでな」

「前に誰かから洋楽のロックとかも好きって聞いた気がするんですけど」

「あれは聴くのは好きなんだが、何分歌おうにも舌がな」

「ああ……」

「でもだからっていきなり第九なんて歌います？ 軍歌も好きなら日本語の歌だってあるじゃないですか」

提督が何を歌うのか楽しみにしていた愛宕は、テレビからいきなり重厚なオーケストラの音楽が流れた時に軽く混乱した。

自分はカラオケをしている筈なのになぜ交響曲が？

そう思っていると、直ぐそばで提督の流暢なドイツ語の歌声が響き始めたのだった。

「ん？ 一応日本語の歌も歌っただろ？」

「ええ。何故か軍歌じゃなくて箱根八里でしたけど……」

「滝廉太郎も好きなんだ」

「いくらなんでも偏り過ぎですよ……」

「むう……」

（それでいて採点結果はどれも良いのよねえ。本当になんなんだか……）

「じゃあ大佐これ、これ歌ってみて！」

「ん？ 知らない曲なんだが」

愛宕がリクエストした曲のタイトルを見て提督は眉を寄せた。

「これデュエット曲なんです。私も一緒に歌うからこれ歌いましょう！」

「ほう？」

「歌詞は違つても歌い方は同じだから私が歌つたように歌えば大丈夫ですよ！」

「分かった。やつてみよう」

「そこなくつちや♪」

「冗談混じりの♪」

（む、曲の調子は問題無いがなかなかこれは歌詞が流れるのが……）

「さ、散々躓いたダンスを〜♪」

「大佐、無理に声を出そうとしないで！ そう、まずは歌詞を——」

——数分後。

ド〜ン♪

「はあ……はあ……♪」

「ふう……これは、なかなか疲れな」

「ふふ、頑張つて着いてきましたね」

「着いて行くので精いっぱいだった。流石に一回ではまともに歌えないな」

「大佐」

「ん？」

「try again?」ニツ

「……いいだろう。今日はこの歌だけは攻略してみせる」

「わお♪ 頑張つて下さいね♪」

——3時間後。

「こ、声が……ヒ……はあ……」

「すまん、俺の所為で……」

「ふ……あははは。まさか、自分が納得するまで同じ歌を3時間も歌うとはお、思つて……ケホツ」

提督と愛宕は歌の歌い過ぎで疲れ果て、力が入らない体をだらしなく床に横たえていた。

「つくづく申し訳ない」

「い……ですよ。でも疲れたあ……。汗だくです……」

「そう……だな」ゼエゼエ

「のど………渴いたあ………」

「………ちよつと待つてろ」ムク

「大佐？」

提督は達があると飲み物が入っている冷蔵庫がある方ではなく、洗面所へと姿を消した。

そして暫く後。

「愛宕」ポイ

「はい？ わっわぶっ………っ！ 冷たっ」ペシヤツ

「先ずはそれで熱が籠った体を冷やせ。飲み物はその後だ」

親切にも濡れたタオルの中に小さなアイスノンまで入っていた。

これほど火照った体に瞬間的な心地よさを与えてくれるものはないだろう。

愛宕はそれを体中に押し付けながら夢心地のような幸せそうな顔をした。

「ふ………ふああ〜い♪」ヒンヤリ

コトツ

頭上から音がしたので頭だけヒョコリと上げてみると傍に置いてったテーブルにティーカップに注がれた紅茶が置かれていた。

「え、紅茶？」（それもホット）

「前に金剛に貰ったのがまだ余ってたんだ。熱くはないぬるい程度だ」

「え、冷たいのがいいなあ」

「今の状態で冷たいのを飲むと逆にもっと声が出し辛くなるぞ。今は体を冷やすのと、これを飲んで喉に優しくしてやれ」

「は、はい」ズズ

「甘いっ♪」

愛宕は予想外の紅茶の甘さに最初は驚いたものの、その甘さが体の中を巡り疲れを癒していくのを感じた。

「砂糖を少し多めにしたからな」

「普段はあまり紅茶は甘くないのを好むんだけど、場合によっては美味しく感じるものなんですわねえ♪」ズズ

「口に合ったようで良かった」ズ

「ええ、文句なしよ♪」

「ほら」コト

提督次にお菓子を置いた。

だが、それは定番であるクッキーのような洋菓子ではなく……。

「え……わ、和菓子？　なんですかこれ？」

「もち米を水飴で固めてきな粉をまぶしたやつだ。意外に合うぞ？」

「あ……美味しい」カリ

「だろ？」

その後、お菓子を食べ終えた二人は流石にその日は直ぐに部屋に戻った。

提督は問題なく直ぐ床に就くことができたが、部屋に同居人である妹である高雄がいる愛宕はそうはいかなかつたという。

何故ならその高雄に散々提督と何をしていたのか明け方近くまで問い質されたからだ。

第30話 「婚約」 R—15

「……………っ！ ……………っ！」

薄闇の中で誰かが喘いでいた。

男の上で華奢な体を一心不乱に揺らしていたのは磯風だった。

休みなく彼女を下から突き上げているのは丁督。

彼が突き上げる度に磯風の小さな体は跳ね上がり、磯風は長く艶やかな黒髪を振り乱して嬌声をあげた。

「あ……………はっ……………て……………とく！ い、いい！ んっ……………もつと、もつとお！」

「……………全く、少し前までは身持ちが固い奴だと思つてりや、いざ蓋を開けてみれば大した乱れよう……………っだ！」

「ああっ！ ん……………つく……………だ、だつてえ……………こ、こん……………はにきもひ……………良いなんて思わ……………つたんだもん……………！」ハアハア

「このムツツリが。俺と長門たちがやつてるところをこつそり見て発情すんだから世話ねえよ……………なっ！」

「にやあ!？」　ん…………ふう…………ふう…………ご、ごめんにや…………さい。でもあんな大きな音を立ててたらふ…………ふつう…………んやあつ!!」

「だったら最初から自分の部屋に居ればいだろうが…………ふつ!」

「あああああああつ…………!」

—
—

「…………ねえ」

「ん?」

「いつになったら私も艦隊に加えてくれる?」

磯風は裸でベッドに寝そべって足をパタパタさせながら提督に訊いた。

「もう入ってるだろ」

「でもまだ実戦には参加した事ない」

「ああ、そういう事か」

「私、もうレベル80なんだけど。練度としては十分ではないの?」

第二次AL/MI作戦の折に丁督に拾われた磯風は、荒くれ者にして精鋭揃いの彼らに鍛えられ、僅か一週間足らずで見違える程に成長していた。

元々構成員が少ない事もあつて艦隊には直ぐに編入されたが、それでも未だに彼女は実戦の参加は許可されていなかった。

「まだまだ……お前はまだ弱くなくなつただけだ」

磯風を撫でながら丁督は言つた。

「ん……そ、それどういう事？」ピクツ

「俺の部隊は少数精鋭、数が少ないからこそ絶対に敵に負けない程に強くないといけないんだ」

「80じゃ……まだまだだつて事？」

「最低でも100だ」

「100つて、それ……」

「そうだ。ここの艦娘は全員俺とケツコンしている」

「……」

「勿論形だけのつもりはない。ケツコンしてできた絆は絶対だ」

「提督……」

「磯風、お前、俺の女になるか？」

撫でていた手を止めて真面目な表情で丁督は磯風を見つめる。

「……それは」

「ん？」

「ケツコンは単に自分の艦隊の強さを維持する為？」

「そう思うか？」

丁督は磯風の質問に敢えて答えず疑問で返してきた。

その顔ははわざわざ答える必要あるのか？ と含み笑いと共にそれを語っていた。

「俺は言ったぞ？ 絆は絶対。それに俺の女になるか？ って」

「……」

磯風は上体を起こして提督と向き合うと一度下を見た。

そうだ、自分はさつきまで提督と繋がっていたんだ。

心も体も……まだ余韻も感じる。

それは、やっぱり幸せな感触だった。

これを今こういう風な時じゃなくて、日常でも絆として感じる事ができるようになるのなら……。

「……なる」

磯風は顔を上げて迷いのない眼で丁督を正面から見つめながら言った。

「私はなる。提督の、貴女の女に、嫁になるぞ！」

「そうか」ニッ

「丁督は磯風の答を聞いて短く笑って手を差し出した。

「改めてよろしくな」

「……」

しかし磯風は差し出された手を何故か見つめるばかりだった。

「どうした？」

「丁督も磯風の反応が予想外だったのか不思議そうに尋ねた。

「もう一回」

「は？」

「握手の代わりにもう一回シて」

「おいおい……」

提督は呆れ顔で磯風を眺めた。

「別にそんな事しなくてもまだ夜は長いし、いくらでも……」

「違う！ この一回は心に刻んで絶対に消えない思い出にしたいんだ」

「……ん」

「だから提督もう一回、握手の代わりに私に刻み付けてくれ」

「なるほど、そういう事なら……」

「丁督は磯風の要求を理解すると深く抱き締めた。

そして……。

「……っ！ あっ……つらと……く……ん。」

第31話 「張り合い」

「ねえレイスー」

「何？」

「暇ねー」

「暇のはいいから私の上からどいてくれないかしらマリア。重いのよ」

ビスマルクに上から抱き付かれているZ3が迷惑そうな顔で言った。

「嫌よ。抱き心地がいいんだもん」

「あなたね……」

こいつは自分の事を抱き枕か何かとと思っているのではないだろうか。

だとしたら寝具扱いなど絶対にお断りである。

三人の中でも特に大人びてプライドの高いZ3は据わった目でビスマルクを睨んだ。

（あれ多分重いのが嫌じゃなくてやっぱりマリアの胸だよな。いいなあ僕もあれくらい

までとは言わないけど……）

Z1はベッドに寝転びながら二人のそんな様子を自分の願望も混えて観察していた。

「何？ レイスも抱かれないの？」

Z1の視線に気づいたビスマルクが彼女の方を向いて言った。
突然自分がターゲットにされZ1は狼狽える。

「えっ?」

「いいじゃないレイス。マリアとても暖かいわよ。抱いてもらったら?」

これ幸いとばかりにZ3はビスマルクをZ1に押し付ける事によって自身の、現在の状況からの脱出作戦を執行した。

「じゃ、ジエーン!」

「もうそうならそうと早く言ってくればいいのに!」ギュー

上手く誘導されたビスマルクはZ1が寝ているベッドへと這い上がり、まだ動揺して動けないでいる彼女を今度はZ3の時とは違い正面から抱き締めた。

その様子はまるで子供が可愛いヌイグルミを抱きしめている様であった。

「わ、わぶぶ……」ムニユ（や、柔らかい……!）

「あー、レイスもなかなか良いわねー♪」スリスリ

「……冷房、切ったらどうなるのかしらね」

相棒を犠牲にしてしまったのが事に早くも罪悪感を感じてきたのだろう。

Z3がポツリとそんな事を言った。

「え?」

「むぐぐぐ?」

その言葉にビスマルクもギョツとした顔をし、抱き締められてまともに話せない状態のZ1も彼女の胸の中で驚きの声をあげて自分のこれから予測される危機に焦った。

(あ、それは割とやめて欲しいかも。この状態でそんな事されたら僕、暑さと息苦しきできつと気絶しちゃう)

「全く納得いかないわ。海外艦だからって駆逐艦と戦艦が同じ部屋だなんて」

ビスマルクにいいように弄られて多少ストレスが溜まっていた所為もあつたのだから、Z3は追撃のつもりでそんな事を言った。

「え? そう? 私は別にいいんだけど」

「んむ、むぐむぐ」(僕も)

片や迷惑を掛ける側故に不自由を感じた事がない者。

片や基本的人にお人好しだが、最初から親しい友人と一緒に暮らせる事を嬉しく思っている者。

立場こそ違えど、意外にもこの二人の意見は一致していた。

「でもこのままじゃ特定の事しか仲良くできないコミュ障みたいに見られるかもしれないわよ?」

「コミュ……？　大佐なりに気を遣つてくれただけだと思ふけどね。それに別に私は他の子とも仲良くしてゐるわよ？」

「むぐむつ……」（僕も！）

「それはそうだけど……」

ビスマルクはともかく、どうやらこの件に関してはZ1も基本的には彼女に同意らしい。

元々ちよつとビスマルクにお灸を据える事だけが目的だっただけに、旗色が悪くなつてきたところでZ3はこの問を自分の負けで早々に切り上げようと考え始めた。

そんな時だった。

「他に部屋がないんじゃない……て事もないか。あ、でも一人だけ自分だけで部屋を使つてゐる人がいるわね」

ビスマルクが不意にそんなことを言つた。

「え？」

意表を突かれて目を丸くするZ3。

ビスマルクはそれには気付かず、自身の発言が素晴らしい名案だと確信した顔で更に嬉しそうに言葉を続けた。

「皆平等にするならその人も相部屋にすべきよね！」

「一体誰の事を言っているのかしら？」

「むぐー？」（誰ー？）

何となく嫌な予感がしてZ3はビスマルクに尋ねた。

Z1も件の問題とされる人物が誰か気になっている様子だった。

「大佐よ」

ビスマルクは少し顔を紅くしてハッキリと言った。

「え？」

「むっ？」

「大佐も一人じゃなくて二人以上と部屋を使うべきだわ！」

「駄目よ」

「むっ！」（ダメ！）

大佐と自分は一緒の部屋に住むべきである。

そう自信満々に主張するビスマルクにZ3とZ1は速攻で反対の意を示した。

「え？」

「それだと大佐に迷惑が掛けちゃうじゃない。大佐は風紀を大切にしているのよ？」

「そ、それは……」

正論である。

このままビスマルクを説き伏せるものかと思われたZ3は更にこう続けて――
「だから私が行くわ」

話を終わらせるどころか寧ろ捻じ曲げて更に厄介な問題へと発展させ始めた。

「え？」

「むっ!？」

「駆逐艦の私なら大佐も手を出さないだろうし、何よりマリアみたいに大きくないから部屋も一人の時の様に快適に使えるはずよ」

「い、いやそういう問題……あつ、ちよ……レイスくすぐった……んっ」ピク

予想だにしないZ3の発言に今までビスマルクの胸の中で大人しくしていたZ1がついにもがき始めた。

「むぐぐぐぐぐぐ……つぶは！ それなら僕でもいいじゃないか！」

「お子様は駄目よ」

「え？」

「なっ……!？」

衝撃的な言葉に固まる二人。

「見た目は幼くても考え方はそれなりに成熟してる私の方が絶対に向いている筈よ。その……その方が……大佐の、お世話……とかもできる……し、ね」

「ちよつと待つて！ それだと私はどうなるのよ!? 私は大人よ！」

「いえ、マリアは子供よ。金剛さんや比叡さんと同じ」

Z3は死刑執行人の様な冷たい眼で即座にビスマルクの抗議を否定した。

「えつ」

「あー、なるほど……」

「レイス!?!」

「という事で文句ないわね。私が——」

「ちよつと待つてよ。僕は!?!」

このまま相手にされないで終わるわけにはいかないZ1が今度は抗議してきた。

それに対してZ3はそんな彼女にも容赦ない態度でこう言い放った。

「自分の事を女なのに『僕』だなんて言っちゃうのは、ウケ狙いのお子様だと私は思うわ」

「う、ウケ……!?!」 ガーン

「ジェーン待ちなさい！ 私のどこが子供だつていうのよ!? 私、これでも金剛や比叡

よりもずつと大人よ！」

「本当に大人だったら部屋の中だからつてパンツ丸見えで胡坐かいたりしないと思うん

だけど?」

軽蔑するような目でビスマルクを見ながらZ3は言った。

「えっ……いい、いやそれはちよつと違うと思うわよ。それは単にだらしないだけで子供とは関係な——」

「だらしない大人には余計に大佐は任せられないわね」

「な……」(このジェーン無敵!?)

「ウケ狙い……」ズーン

「……それで俺の所に来たのか」

「そう! どっちが大人か教えてあげて!」

「全く、そんなの聞くまでもないと言ったのに……」

「大佐、僕は『僕』って言ったら変!?!」

深夜、提督の前には三人の、自分は子供ではないと言い張る海外娘がいた。

睡眠中に叩き起こされた事もあって、多少思考に余裕がなかつた提督はそんな三人に對してこう判決を下した。

「結論から言おう。俺からすれば全員子供だ」

「」

三人揃つて固まる海外娘達。

余程予想外だったのか言葉も出ない様子だった。

「そんな事で言い争って俺に意見を求めるに來るなんて、親に泣きつく子供みたいだとは思わないか？」

提督の言葉に氷結から解けた三人はそれぞれたじろいだ反応を見せる。

「……………」

「そ、それは……………」

「あ、全員子供なんだ。良かったあ」ホッ

「大人の女性を目指すなら。そうだな……………雲龍とか叢雲、それに長門とかがいるだろう。そいつらに訊いてみる事だな」

「雲龍……………叢雲……………」

「勿論それだけじゃない。他にも神通や足柄とか艦種に限らずたくさんいるはずだ。先ずはそういうった奴らを手本に——」

「待つてください」

不意にビスマルク達の後ろから声がした。

「加賀……………」

提督は眉間に手を当てながらその名前を言った。

その顔にはこれから起こるであろう面倒事に対する苦慮の表情が浮かんでいた。

「大人の女性として代表者を絞って言うのはいいのですが、何故そこで私ではなく雲龍

なのですか？」

「どうやら加賀は大人の女性として提督に言われた空母の代表が雲龍だった事が気に入らない様子だ。」

「加賀、いいか？　そういう風に対抗しようとするのがそもそも——」

「胸じゃない？」

Z1がふとそんなことを言った。

「え？」

「」

Z1の言葉に俯いて反省していたビスマルクが顔を上げる。

それに対して加賀は何を予想したのか言葉を失って発言の主であるZ1を見た。

「雲龍さん胸凄く大きいじゃない。加賀さんよりも」

「おい……」（これ以上は勘弁してくれ）

「大佐は胸の大きさ判断したんじゃないかな？」

Z1は決定的な止めの一言で更なる混沌への扉を開いた。

「ちが——」

提督は何とか止めようとしたが時すでに遅く、案の定、復活したビスマルクがまた訴えてきた。

「なら私だって大人よね！　だって雲龍ほどは無いにしても加賀よりかはあるし！」
「はい？」　ピキ

正に売り言葉に買い言葉。

加賀が無表情ながら視線で全てを射殺せるような顔でビスマルクを睨んだ。

「あら？　加賀つてもしかして着痩せするタイプだったのかしら？」

流石はドイツ最後の最強の戦艦である。

そんな加賀の視線などものともしないといった顔で更に挑発した。

「マリアさん……あなたたちよつと何を言っているのか解っていますか？」

「事実だけど？」　フンス

「……頭にきました」　ピキピキ

両者一触即発。

お互いに艦装こそ装備していなかったが、二人は睨み合い合いながら身構えた。
そして――。

「お前らいい加減にしろっ」

ポカカナンツ

「きゅっ」

「……っ」

ついに提督の拳骨が彼女達を降り注いだ。

「そういう風に直ぐに張り合うのが子供だと言うんだ」

「ご、ゴメン……なさい」グス

「……申し訳ございません」ペコ

提督に説教され流石に我に返って反省するビスマルクと加賀だったが、その後ろでは……。

「む、胸……」ペタペタ

恐らく今日一番絶望的な顔をして意気消沈するZ3と――

「なんだ、やっぱり全員子供なんだ♪」

自分の発言が招いた結果に一人満足そうに天使のような顔を浮かべてホツとしているZ1が居た。

第32話 「勇氣」

「……ふう」

提督は電気を消した部屋の中で月明かりだけを唯一の明かりにして一人煙草を吸っていた。

空けた窓から吹いてくる風と波の音が心地よい。

日中は暑くてきついが夜は流石に幾分マシなので、こうやって冷房や照明を消して窓から覗く風景を楽しみながら吸っているのだ。

机の上には一杯の酒、正に至福の時を提督は過ごしていた。

(ここに來てからもうどれくらいになるだろう。最初は叢雲・初春・電しかいなかったこの基地も、今では複数の艦隊を構成できる程の人員と規模を誇っている)

「月日が経つのは……早いな……」

提督は誰にともなくそう呟いた。

その時、

コトツ

後ろで音がした。

「？」

提督が後ろを振り向くとそこには開けた扉の前で棒立ちしている名取がいた。

「大佐、それ……」

名取は震える声で提督が吸っている煙草を指差した。

「ん？」（なんだ？ 名取を見ると何か忘れている気がする。何か約束をしたような……？）

「煙草がどうかしたか？」

「タバコ……」

「名取？」

「ふえ……」ブワツ

急に顔をくしゃくしゃにして泣き出す名取を見て瞬時に提督は思い出した。

名取とした約束を。（*第二部 第7話 「ゆとり」参照）

「名取、待て」

提督は煙草をもみ消して足早に名取のもとへ行き、廊下に誰もいない事を確かめて扉を閉めると少し屈んで彼女と同じ視線になって言った。

「約束は覚えている。これは偶々だ。毎日吸っているわけじゃないぞ」

「ぐす……ほ、本当ですか？」

「ああ。こんなの一本二本くらいじゃ俺は死なない」

「つく……すん」

「お前との約束はちゃんと守って煙草を吸う数量も減らしている。体調は今のところ至って快調。健康そのものだ」

提督はそう言つて名取が安心するように努めて笑つてみせた。

あまり子供をあやすような笑い方には慣れていなかったので若干ひくついた笑みになつていたが、名取はそんな提督の顔を見てようやくやく安心して泣くのを止めた。

「ごめんさい……わたし本当に泣き虫で……。大佐の健康の事考えたら凄く不安になつちやつて……」

「いい、気にするな。お前は優しい子だな」ポン

「ん……大佐あ」

提督に撫でられて名取は嬉しそうに目を細める。

「それで、どうしたんだ？ こんな夜分に」

「あ、ドアに執心中の札が下がっていたのに執務室の中で音がしたので……気になつて」
「ん、もしかしてノックとかしたか？」

名取は提督の質問にフルフルと頭を振つて否定するところ答えた。

「……大佐はもう部屋で寝てると思つてたから」

「ああ、そうか。俺が執務室にいない時は自由に出入りして良い事になっているからな」
「……」コク

名取は黙って頷いた。

俯いて顔を伏せている彼女の態度からは、勝手に部屋に入ろうとした事に対して罪の意識を名取が感じているのを見て取れた。

提督はそれを察してまた名取の頭を撫でながらこう言った。

「一応、それも基地の警備上気になってやったんだよな？」

「……」コク

名取は再び俯きながら頷いた。

「なら気にする事はない。お前は基地の仲間として当たり前のことをしただけだ」

「ほ、本当ですか？」

「本当も何も、もしお前がその事で後ろめたさを感じているのならそれは見当違いだぞ？ 寧ろ俺はお前のその行動をよくやったと思っっている」

「……大佐！」ギユッ

「……ん」(しまった少々甘やかし過ぎたか。軽巡の中でも特に名取は繊細だから扱いが難しいんだよな)

「名取は良い子だな。だからもう安心して眠ってもいいぞ」

提督はそう言つて名取を何とか寝かしつけようとした。

夜はまだ長い、できる事ならもう少し至福の時を楽しみたかった。

「……また吸うんですか？」

「ああ。吸いたいと思つている。許して貰えるか？」

「ここで嘘をつく事はできなかった。

この後も吸うなら今ここで名取の同意を受けておいた方がいいのは間違ひなかつた。

「分かりました。ちゃんと気を付けているならいいと思います」

「ありがとうございます——」

「でもお願いがあります」

提督がお礼を言い終わらない内に名取は思い切つて切り出した。

「お、おタバコを吸い終わるまで……そ、その……大佐……と一緒……」

そう言つて名取は少し恥ずかしそうに顔を赤らめながら提督の服の裾を握つた。

「勿論構わない。寧ろ願つたり叶つたりだ。名取、今日は俺の話し相手なつてくれるか？」

「……はい——」

名取はその言葉に本当に嬉しそうに満面の笑顔を見せた。

「名取、そういえばお前もこの基地の中では古参の方だったよな。確か電の次にここへ着任したのがお前だった気がする」

ソフアーを窓側に動かして二人揃って腰かけた提督は、名取にそんな質問をした。

「あ……そう、だったと思います。確かに私の前に居たのが電ちゃんでした」

提督の肩にもたれてその腕を抱きながら名取は答えた。

「やっぱりそうか。その、他にもお前が来る前にいた奴らを憶えているか？」

「電ちゃん以外にですか？」

「ああ。いや、それに叢雲と初春も含めてそれ以外に、だ」

「そうですね……」

名取は指に手を当てて考え始めた。

「あ、北上さんと川内さんですね」

「ほう」

「大佐が言った三人を覗けばその二人が確かに私が来る前に先に基地にいたと思います」

（この自信がありそうな顔、どうやら間違いなさそうだな）

「北上と川内か……。あまり表に叢雲達はともかく、お前やあいつらはそういうのを表に出さないからつい忘れがちになってしまっただよな」

「大佐はその人たちに何かご用なんですか？」

「いや、昔の事をここで思い出していてな。俺がここに着任したばかりの頃は誰がいたかな、って」

「そうだったんですか……」

名取は提督の言葉に自分も昔を思い出したのか、懐かしそうな顔をした。

自分がこの鎮守府に着任した時はまだ自分を含めて艦娘は6人しかいなかった。

丁度一艦隊の編成分だ。

あの頃、あの場所にいた6人が『主力』という意味ではなく、『最初』といういみでの第一艦隊……。

(あの頃は鎮守府近海の任務をこなすだけでも精一杯だったなあ……)

名取は今では余裕をもってこなせる任務も昔は未熟だったこともあつて苦労していた事を思い出してた。

「大佐」

「うん？」

「あの頃、まだわたしが来たばかりの頃って艦隊の旗艦って誰でしたっけ？」

「旗艦か、そうだな……強さだけで言えばお前達軽巡組の3人の内誰かだったと思うが……」

「ふふ、軽巡は正解です」

「答を知っているのか？」

提督は意外そうな顔で名取を見た。

それに対して名取は少し自慢げに

「はい」

と元気に返事をした。

「ふむ……もしかして名取、お前か？」

「正解です！」

名取はそう言つて嬉しそうにより強く提督の腕を抱きしめた。

「そうかお前だったか……」

「今は流石に他の子たちの練度の差とかもあつて務める事は殆どないですけど、あの時のわたし、頑張っていたんですよ」

「そうだな。泣き虫の割にはよく頑張っていたと思うぞ」

「た、大佐っ」

名取が顔を赤くして抗議した。

「はは、悪い。だがお前はよくやっていたと思うぞ？」ポーン

「ん……その言葉、あの頃に聞ければもっと頑張れたのにな……」

名取は嬉しそうにしつつも、少し複雑そうな表情で提督の手の温もりを喜びながらそんなことをポツリと言った。

「名取……待たせたな」

提督は今と違って自分と艦娘との間に心の壁を作っていた頃を思い出しながら言った。

（そういえばあの頃の名取は今ほど俺に懐いてはいなかった気がする。何か指示を出す度にビクビクして、俺はその度に何か気に障る事をしてしまったのかと悩んでいたっけな）

「大佐……」

名取が不意に提督の事と呼んだ。

声が明らかに緊張していた。

「ん？」

「す、好き……」フルフル

「……ありがとう」

提督は顔を真っ赤にしながらも勇氣を出して告白した名取を優しく撫でながらそう

言
つ
た。
。

第33話 「内緒」

「閣下」

「ん？」

「お茶です」

「おお、悪いな」ズズ

元帥は紀伊が差し出したお茶を飲んだ。

温度が若干温めで暫く飲み物を飲んでなくて微妙に喉が渴いていた元帥にはちょうど良かった。

「如何です」

「ああ、悪くない」

「そうですか」

「ああ……」カリカリ

元帥の言葉を素っ気ない態度で紀伊は受け取った。

対する元帥も特に気にもしない様子で再び書類へと目を通し始めた。

「……」

「紀伊」

「はい」

「確認を頼む」ペラ

「承知いたしました」

元帥から書類を渡され訂正すべき点がないか確認する紀伊。

その顔は無表情ながら伶俐で、ただ黙って書類を確認しているだけだというのに凜とした雰囲気常にあつた。

「……」

「どうだ？」

「はい。問題はないかと」

「そうか。ではそれを届けておいてくれ。私は総帥府に報告に行ってくる」

「了解です。護衛は誰を付けましよう？」

「天龍を。彼女一人で十分だろう」

「……」

紀伊は元帥の言葉を聞いて黙って彼を見つめた。

異議さえ唱えなかったがその目は明らかに反対していた。

「ふむ。『十分』では充分ではない、か？」

「はい」

「では、矢矧と妙高も付けてくれ。これでいいだろうか？」

「はい。万全かと思えます」

今度は紀伊も太鼓判を押した。

その構成なら大丈夫だろうと判断できる人員と数だった。

「うむ。では手配を」

「畏まりました」

「あ、それと悪いがもう一つ。雑用を頼めるか？」

「はい。何でしょう」

元帥は少し申し訳なさそうな顔をして紀伊にある物を手渡した。

「これを……使えなくなつたのでな。悪いが処分しておいてくれ」

「……司令ー？」

「ん？ どうしたの陽炎」

第4司令部の女司令官、少将の膝に乗った陽炎が足をパタパタさせながら、直ぐ上にある彼女の顔に尋ねた。

「元帥と紀伊さんってさあ、なんかいつも淡々としていますよねー」

「元帥と紀伊？ ああ……」

「わたしたちや他の司令官と比べてなーんか専属艦にしてはあまり親しさを感じないというか……」

「プロ意識ってやつじゃない？ 本来の上司と部下の関係はあんなものじゃないかしらね」

「っ！ わたしは司令とはこのままがいです！」

何気ない一言だったが陽炎はその言葉に何か危機感を感じたのだろう。

ハツとした表情で自分はまだ少将の膝の上にいたいと訴えた。

「こら、膝の上であまり動かないの。分かってるから」 ナゲナゲ

「えへへ♪」

（陽炎、なーんか武蔵がいない時によく甘えるようになったわね）

コンコン

ノック音が聞こえた。

「……」

「あ、不知火」

扉を閉め忘れたのだろう、振り向くといつの間にか扉の前に不知火がいつもと変わら

ない無表情で立っていた。

トコトコ

「司令、定時報告書です」

「ありがとう。ご苦労様」

「……」

不知火は報告書を少将に渡した後も、何故かそこを去らずその場に立つたまま何か言いたげな様子で少将と陽炎を見つめていた。

そんな不知火の様子に気付いた少将が訊いた。

「不知火？ どうしたの？」

少将に声を掛けられるまで無意識の内に見つめていたのだろう。

彼女の声を聞くとピクリと少しだけ肩を震わせて不知火は訊いた。

「いえ、差支えなければお教え頂きたいのですが……」

「何？」

「先程から陽炎は司令の上で何をやっているのですか？」

「司令の膝の上でご飯食べてるのよ。見ての通りでしょ？」

少将の代わりに陽炎が答えた。

その顔に邪気はなく、あくまで質問に答えただけといった様子だ。

それに対して不知火は小刻みに震えながら、何かを我慢する様にさらに質問をした。「……何故、部下である艦娘があろうことか上司である司令の膝の上なんかで食事を摂っているのかしら……」

「それだけわたしと司令が仲良しって事よ」

その質問に対しても陽炎はあっさりとその答えた。

「仲良し……」

陽炎はその言葉に何故か俯いてしまった。

「不知火？」

陽炎はその様子に流石に心配になって今度は氣遣うような声調で不知火に声を掛ける。

「司令」

ポツリと不知火は言った。

「うん？」

「私と司令は仲が良く……ありませんか？」

「えっ」

突然の質問に意外な内容に陽炎は驚きの声をあげたが、少将は先程からずっと二人のやりとりを見ていて何かを察したのか落ち着いた態度でこう答えた。

「いえ、決してそんな事はないと思うけど」

「あの、それではその……」

不知火は提督の言葉に明らかな喜色の色を浮かべながら何やら話し難そうにモジモジし始めた。

「……陽炎」

「なんですか？」

「ちよつといいかしら」

少将はそんな不知火の様子を眺めながら陽炎にある提案をした。

「えへへー、司令の膝枕ー♪」

「司令……司令……ん……♪」 スリスリ

少将はソファーに座りながら左右か陽炎と不知火に膝枕をしていた。

更におまけに彼女達の頭を撫でながら少将は言った。

「はいはい、お昼の間だけだからね。武蔵が戻ってくる前にはちゃんと戻るのよ？」 ナゲ
ナゲ

「はい♪」 「分かりました……」

（ほんと、武蔵が演習の指揮に出ててよかったわ）

武蔵がダダをこねる姿を想像しながら少将はしみじみとそう思った。

——とところ変わって本部のとある廊下。

「あ、紀伊姉！」

「紀伊お姉さん」

一人食堂へと歩いていった紀伊に後ろから聞き覚えのある声が掛けられた。

「駿河、近江……」

「紀伊姉もこれから食事？」

「ええ」

「では、ご一緒しても？」

「ええ。構わないわ」

「よしっ」

「やった♪」

二人は揃って嬉しそうな顔をしたが、その時駿河が紀伊が持っているある物に気付いた。

「ん？」

「どうしたの？ 駿河」

「紀伊姉そのペンどうしたの？」

「……ちよつとね」

駿河に訊かれても明確な答えをしなかった紀伊は、彼女が指摘したペンを大事そうに両手で握りしめ直した。

「あら」（随分使い込まれた古いペンね）

「きつたないペンだね。捨てるの？」

「……」

駿河の何気ない一言で紀伊の空気が一変した。

その一瞬の変化で駿河より心の機微に聡い近江は全てを悟り、心の中で駿河を止めた。

（あ、もしかして……ダメ！ 駿河！）

「え？」

駿河も紀伊の変化に遅れて気付き始めたがもう遅かった。

「駿河、あなたは今何て言ったのかしら？」ゴゴゴゴ

いつもと変わらない声だった。

だがその声は明らかに威圧が込められており、聞くだけで駿河は背筋が冷たくなり、冷汗が流れた。

「あ……えつと……」ガタガタ

あまりの威圧感に恐怖で言葉が出ない駿河。

そんな彼女に近江は必死の形相で助け舟を出した。

「と、とても古くて時代を感じるペンです。ね姉さん！　ね、ねえ駿河！」

「あ……う、うん！　そう！　あたしもそう思ったんだ！　だ、だからその……言い方は悪かったけど……そういう意味で……」

近江の助け舟に駿河はすかさず乗り、何とか釈明をしようとした。

そんな二人の態度に紀伊も機嫌を直したのか、先程まで醸し出していた威圧感をあっさりと言引つ込めた。

「……そう。ならいいの」

「……つ、ふう……」

肩で息をする駿河。

ダメだ、姉だけは絶対に怒らせてはいけない。

そう心から駿河は痛感した。

そんな恐ろしい姉に近江は純粹な興味からある質問をした。

「姉さん」

「ん？」

「そのペン……閣下から？」

「……想像に任せるわ」

紀伊は僅かに紅に染まった顔でそっぽを向いてそう言った。

第34話 「偶然2」 (挿絵あり)

「大淀」

朝、提督にその日の予定を伝えるために執務室に向つていた大淀に、珍しく提督の方から声を掛けてきた。

既に部屋の前にはいたところを見ると彼女が来るのを待つていたようだ。

「あ、大佐。どうしたんですか？」

「ちよつと来てくれ」

「……………？ はい」

提督の様子が変だ。

大淀を手招くいて部屋に入れると周囲に人がいないか確認して扉を閉めた。

「……………大佐？」

今まで見た事がない提督の不自然な態度に大淀も不安になった。

「一応鍵も閉めておいてくれ」

「え？ 鍵もですか？」 (え、それって……………)

ついさつきまで不安だった気持ちはどこえへやら、大淀はその一言で何かを思いつい

たようだ。

ガチャ

「閉めましたよ。それであの……なんでしょう？ いえ、分かつてはいるんですけどこ
ういきなりだと個人的にも心の準備というか……」

大淀は床と提督に視線を交互に変えながら頬を紅くして言った。

「流石大淀だな。そこまで予想できて心の準備の事まで考えているなんてな」

「そ、そんなに褒めたつてすんなりと受け入れるとは思わないで下さいね。確かに私も
大佐の事が好きですけどいきなり……なんてもうちよつとムードというか段階的なも
のを考えて欲しかったというか……」

「大淀？」(舞い上がっている……？ 何か勘違いさせているようだ)

「で、でも大佐！ あ、朝からなんてその……やっぱり仕事もありますから、今は……き、
キスだ——」

「大和です。宜しくお願いします！」

全く予想だにしない方向から声がした。

それも提督の声ではなく、彼女がこの基地で初めて聞く女性の声だった。

「……」

すっかり言葉を失って首だけを声が出た方に向けてみるとそこには……。

「え」

「？」

驚いて固まっている大淀を不思議そうな顔で見ている大和がいた。

「あの、大佐……？」

驚いた表情のまま大淀は提督に訊いた。

「ああ」

「なんですかこれ」

「（これ!）」

「大和だ」

「なんで？」

「分からん」

「は？」

「怒るな。本当だ。俺にもさっぱりでな」

提督も何と言ったらいいか分からないと言った顔をしていた。

その顔は若干緊張で引きつっており、僅かに脂汗のようなものも滲ませていた。

「えーと……今朝は建造は？」

「建造はもう大分行つていない。勿論お前をここに招くまでもな」

「彼女が此処に来たのは？」

「俺が身だしなみを整えて部屋に入ったら既に……」

「……」

大淀は考える表情をして大和の方を向いた。

「あの」

「は、はい？」

今までずつと蚊帳の外扱いで戸惑っていた大和は緊張した声で応えた。

(わ、私何かしたのかしら?)

「失礼ですがどのような経緯でこちらに？」

「私ですか？ そちらの提督に仕える為に『建造』されて此処に着任したんですが……」

彼女からしたら当たり前のことだったのだろう、大淀の質問に驚きと不安が織り交ざったような表情でそう答えた。

「大佐？」 ジト

「分かん。本当だ」

大淀の視線に焦る提督。

だが、本当に心当たりはないようで弁明する口調も真剣そのものだった。「そうですね。では記録を見てみますね」

取り敢えず提督を信じた大淀は前日の工廠の使用記録を調べ始めた。

今朝着任したばかりで建造されたというのなら前日の記録を調べれば分かるはずだ。

「あ……」

大淀はあつさり思い当たる節を見つけたらしく、記録を調べ始めてものの数分で小さな驚きの声をあげた。

「どうした？」

提督は大淀の持つ記録書を覗き込む。

「あのこれ……。投入する資材桁全部間違ってますね？ その割には指示内容は開発のままですけど……」

「なに？」

「これ……」

大淀が指を指した個所を確認すると確かに彼女の言う通りの内容が記録されていた。

「……これは」

「昨日開発を指示したのは誰です？」

「雪風だな」

「……なるほど」

「つまりこういう事か」

「ここまで来て真相が想像できてきたのか提督が説明を始めた。

「俺が誤って資材の投入量を指示してしまい、その指示書を見た雪風が気を利かせて俺が開発ではなく建造を指示したんだろうと判断した結果……というところだろうか」

「恐らく。私もそう思います」

「ふむ……」

「これは……あはは。まあ結果オーライというか、幸運を呼んでしまいましたね」

「雪風を責める事はできんしな。元々の原因は俺なんだし」

「ですなぁ」

「あ、あのお」

着任してから挨拶も返されず、歓迎もされないまま更に放置されていた大和が二人に話し掛けてきた。

「わ、私……来て……良かったんですよね……?」

さんざん放置された結果痛く自尊心が傷つけられたのか大和は震える声でそう言った。

その目尻には僅かに涙の粒も滲んでいた。

「え？ も、勿論です！ というかごめんなさい！ 歓迎しますよ！ ね？ 大佐」

「ああ、大淀の言う通りだ。放置するような真似してすまない。ようこそわが鎮守府へ」
「……っ！ あ、ありがとうございます！ や、大和……大和頑張ります！」

自分が歓迎されている事が余程嬉しかったのか、泣きそうだった顔から打って変わって輝くような笑みに変わった大和は本当に嬉しそうにそう言った。

「……ところで、大佐」

「うん」

「桁を間違った結果資材は？」

「いつも通りだ。弾薬がマズイ」

「はあ……またこれで節約生活ですね……」

「弾を消費しない分平和という考え方もできるが……」

「反省してください。開き直りは許しません」ムッ

「……申し訳ない」

大和が喜ぶ裏でそんなやり取りを提督と大淀は行い、密かに揃って溜息を付くのだった。

第35話 「不機嫌」

「西村艦隊の再現、か……」

「はい」

提督の言葉に扶桑は淡々とした態度で肯定した。

「あまりこういうのは好きじゃないんだがな……」

「閣下は喜ばれないと?」

「そうではないが、軍人として戦死されたんだ。偲ぶだけなら黙祷や墓前に赴くとか他にやりようがあると思うんだがな」

「大佐……」

「ん、悪い。俺一人がこんな事を言っても始まらないよな」

提督は居住まいを正すと艦隊の編成に必要な艦娘に召集をかけた。

「皆集まったな。ではこれより、西村閣下の艦隊をここに再現し、これによってかの英霊の鎮魂を祈るものとする」

（えっ）

集まった仲間達を見て扶桑はハツとして提督を見た。

「お姉様……」コシヨ

「山城、あなたも気付いた？」ヒソ

「はい。大佐、凄いミスをされてますよね……」コシヨ

（うーん……、これは僕もフォローできないなあ）

扶桑と山城の会話を肩越しに聞いた時雨は困った顔で提督を見ていた。

（時雨や扶桑さん達も気付いてるみたいね。大佐……これは、ダメよ……）

一緒に並んでいた満潮も何かに気付いている様子だった。

隣にいた時雨と目が合うと、互いに気付いている事が同じだという事を言葉を交わさずに確認した。

「姉さん？」ヒソ

「んー？ ふふ」

一人周りの状況が理解できていなかった筑摩が密かに姉に聞いた。

声を掛けられた利根は皆と同じようにある事に気付いているらしく、その顔は他のメンバーと違って悪戯をする子供のように面白そうに笑っていた。

「皆何を困った顔をしているの？」ヒソ

「んー？ それはな。ほれ、あそこを見てみる」コシヨ

「…………？」

尚も面白そうに笑う利根を不審に思いながらも、筑摩は彼女が指差す方向を見た。
そこには――

（最上？）

筑摩の視線の先には執務室の扉の隙間からこそつと様子を覗く最上の姿があった。

（最上、どうしたのかしら？　なんだか凄く拗ねてる顔をしている…………？）

「気付いたか？　筑摩」ヒソ

「ええ、あそこに最上がいるのは…………」コシヨ

最上の存在に気付きはしたものの、それでもまだ筑摩は事の真相は理解していない様子だった。

「ああ、そうか。筑摩は追加要員として後から呼ばれたから聞いておらんかったのか」ヒソ

「姉さん？」コシヨ

「実はな、今回のこの艦隊の編成は…………」コシヨコシヨ

「!!」

利根の話を聞いて筑摩の顔は青くなった。

「ね、姉さんそれ…………！」ヒソ

「の？ 大佐の奴いつ気付くかの。くふふ……」

「姉さん……」

筑摩はまだ愉快そうに笑う姉の顔を呆れた顔で見つめた。

「——話は以上だ。それではしゅ……」

「た、大佐！」

突然何かいたたまれなくなった様子で困った顔をした扶桑が提督に発言をしてきた。

「どうした扶桑急に」

「ちよ、ちよつとお話が」

「帰還してからじゃダメか？ 今日あまり予定に余裕もな……」

バンツ

「いいえ……。今直ぐにです。直ぐに、済みますから」

「……分かった」

出撃を促そうとした提督を、机を叩いて沈黙させるといふ扶桑らしからぬ手荒な方法に、流石に提督は言いかけた言葉を飲み込んで了解した。

「ありがとうございます。では少々こちらに」

「ああ」

——数分後

「待機」

突然提督は招集した艦娘達に待機命令を出した。

「命令あるまで各自部屋で待機するように」

だが、そんな突然の待機命令にも拘らずその場にいた艦娘達は、扶桑から何を聞いたのか脂汗をかく提督に対して、利根を除き、同情とも憐みともつかない視線を送るだけだった。

そして、彼女達は部屋を退出する時にその去り際に「がんばって」や「今回ばかりは仕方ない」といった激励や少し責めるような言葉を提督に残していくのだった。

そうして部屋に提督が残って暫くして、提督は扉の向こうにいるであろうある艦娘に扉越しに声を掛けた。

「最上いるんだろう？ 入って来い」

提督の呼びかけに対して特に反応のない扉だったが、やがて暫くしてギギ、と開く音と共に明らかに不機嫌そうな顔をした最上が現れた。

「……何？」プク

「すまん」

提督は開口一番頭を下げて最上に謝った。

「何を謝ってるの？ 大佐何か悪い事したのかな？」ツーン

お互いに原因は分かっているはずだが、流石に当の被害者である最上は自分から言うつもりはない様だった。

「悪かった。お前の事を忘れていた」

「利根姉妹がいたじゃん」

「いや、西村艦隊を構成していた航巡はお前だ。だというのに俺は……本当にすまない」
「べつつにー。どうせ利根姉妹の方が練度も上だしー、大佐の考えは間違いないなかつたと思うけどねー」

最上はまだ許してくれそうになかった。

「最上すまん。本当にワザとではないんだ」

「わざとだったら僕本当に泣いてるから」

「ああ」

「反省してる？」

「してない様に見えるなら、更に反省して見せよう」

「……」ジー

「……」

「お願いがあるんだけど」

提督の顔をジッと見つめながら最上が言った。

「なんだ？」

「それしてくれたら許してあげる」

「聞こう」

「先ず、二度と僕を忘れないって誓って」

「分かった」

「キスで誓って」

「……ああ」

「……」

最上は提督の返事を確認すると、提督の正面に立って目を瞑り、少し背伸びをして彼からの接吻を待った。

チュッ

「……ん」

「……どうだ？」

「……まだ。抱き締めて」

「ああ」ギユッ

「……最後に質問に答えて」

「なんだ？」

「さつきまで僕がしたお願い、こんな事がなければ聞いてくれなかった？」

提督は最上を見た。

最上は少し不安そうに視線を揺らしながら提督の答を待っていた。

そんな彼女に対して提督が取った行動は

ギユッ

「あ……」

再び最上を強く出し締め直し、そして

チュッ

「……う……ふ……」

「……これが答だ」

「合格つ、許してあげる♪」

最上は少し紅潮した顔に満面の笑みをたたえながら提督にそう言った。

第36話 「妬きもち」

「け、ケツコンですか？」

「ああ、お前も成長限界に達したしな。お前さえよければ、だが」

「あ……え、えーと……。そう言われましても、まだ比叡姉様もケツコンしてないのに私
がなんて……」モジモジ

「ケツコンする順番については姉妹で相談すればいい。が、ケツコン自体はお前が決め
る事だ。俺は……する以上は特別扱いとは言わないが、した事を後悔させないくらいの
事はしてやるつもりだ」

「大佐……。で、でも私ってメガネだし、地味だし……」

（確かに、霧島は姉妹の中で一番理知的で常識がありそうだよな。だが、実はこいつが姉
妹の中で一番武闘派でもあるんだよな）

提督は恥ずかしがる霧島を見ながらそんなちよつと失礼な事を考えていた。

「そ、それに……」

（何か無理に悩んでいるように見えるな。これはあれか、俺の押しが足りない？ 求め
ているのか？）

「霧島……」

提督が霧島に近づく。

顔と顔が触れ合いそうな距離だ。

じつと彼女を見つめる提督の目は霧島に、ケツコンのプロポーズの代わりにある行為をしてもいいかと訴えていた。

「あ……大佐……」

霧島も提督の目を見つめてそれを理解した。

二人は徐々に顔を近づけ合いそして……。

「大佐、失礼します！」バンツ

「」

「……っ!!」バツ

「あ、霧島。来てたんだ。大佐に用事？」

見計らったかのようなタイミングで比叡が元氣よく部屋に入って来た。

今は昼休みで、仕事中の時間意外は出入り自由なのでノックもなしの突然の急襲だった。

「え……ま、まあ……」

顔を赤くして視線を逸らす霧島。

対して提督は瞬時に態度を切り替え、平静を装って比叡に聞いた。

「比叡、お前こそ何か用なのか？」

「そうでした！ 大佐、これ！」

提督に部屋に來た目的を聞かれた比叡は、後ろ手に持っていたある物を提督の前に突き出した。

「鍋……料理か。お前が？」

「はい！ 作りました！」

「お前料理作れたのか」

「あつ、ひどい！ それ偏見ですよ！ わたしだつて料理くらい作れます！」 プク

提督の意外そうな反応に比叡はちよつと拗ねた顔で抗議をした。

それに対しては霧島も、元々比叡が料理を作るのを知っていたようで、姉のフォローをしてきた。

「大佐、比叡姉様は本当に料理を作れますよ。というか、上手いです。榛名と同じくらい」

「ほう」

「ふふー♪ 解ってもらえました？ という事で如何ですか？」

「いや、今俺は霧島とな……」

提督はさつきまでの霧島とのやり取りを思い出し、こちらを優先する事が大事だと考えた結果、比叡の誘いを断ろうとしたが……。

「私は別に構いませんよ」

流石姉想いの金剛姉妹にして頭脳派（普段の生活では）の霧島である。

私心押し隠し、姉の希望を優先してきた。

「霧島ありがとう！　ね、大佐どうですか？　勿論霧島も一緒ね！」

そんな妹の健気な心遣いを知ってか知らずか、比叡は嬉しそうな顔で霧島にお礼を言い、食卓に食器を用意し始めた。

「……まあ霧島がいいなら。カレーか？」

霧島が同意するならこれ以上は何も言えない。

提督は食事の用意をしている比叡に鍋の中身を訪ねた。

「いい予想です！　海軍と言ったらカレーですものね！　でも残念ながら違います。正解は……」

カパッ

「シチューか」

「わあ」

比叡が明けた鍋の中身は白い液体から香ばしい牛乳独特の甘い匂いを放つシチューだった。

「えへへ、作り方はカレーとあまり変わりませんけどね。ちよつと意表を突いてみましたー！」

「ふむ、確かにこれは意外だが美味そうだ」

「ホントですか!?! やつたあ♪」

「比叡姉様、まだ大佐が実際に食べる前にそんなに喜んでしまうと、後の楽しみがなくなってしまうよ」

「あ、それもそうね！ さ、食べましょう大佐！」

食器を並べ終わった比叡が会食を促す。

「ああ。ご相伴に預からせてもらおうか」

「戴きます比叡姉様」

「比叡、俺の匙がないんだが」

食事が始まったのはいいものの、提督の前にはシチューが入った皿だけが置いてあり、スープを掬う為の匙が無かった。

「大佐には私が食べさせてあげます！」

「えっ」

目をキラキラさせてそんな事を言い出す比叡に、予想外の発言だったのか霧島は意表を突かれた顔をした。

「いや、そこまでしなくてもいい。おい、それお前が使つてた匙だろう。そ……」
「はいっ」

頬を染めた比叡が明らかに関節キスを意識しているのは間違いなかったが、元々それも狙いの一つであつたらしく、真剣な顔をして提督にシチューを掬つた匙を向けた。

「……」
提督は口を一文字にして拒否の意を表した。

「あーん」

「……」

「あーんです。大佐」

「……」

「あーん！」

「……」

「あ……あ……」ジワ

「……」パク

「……………」 パアッ

「どうですか？」

「……………」 まあ美味しい

比叡の涙に負けた提督は自分を不甲斐なく思いながらも、味に関しては正直に意見を述べた。

「本当!?! 良かったたあ」

「はい!」

気分を良くした比叡は更に提督に勧める。

「いや、もう……………」

「お願いです!」

「……………」 パク

「……………」 パアッ

「……………」

霧島は突然新婚の様な（提督は明らかに半強制的だが）食事を始めた二人をモヤモヤしながら見つめるしかなかった。

気のせいか、シチューもあまり味がしなかった。

「ふう、ご馳走様」

「……ごちそう様です」

「お粗末さまでした♪」

「さてこれで……」

（食事も終わったことだし、これで比叡には取り敢えず帰ってもらい、霧島との話の続きを……）

提督がどうやった比叡を上手く部屋に返すか掛ける言葉を練っていた時だった。

「大佐、食後にこれをどうぞ」

「ん……スムージー？」

比叡は次にピッチャーに収められた緑色の液体を出してきた。

「はい、比叡特製の栄養ドリンクです！」

「ほう」

「……」（早く大佐と話の続きがしたいな……）

流星にこの時点で霧島は、これ以上姉の甘い雰囲気味わされる事に対して若干不満に思い始めていた。

しかし当の比叡は持ち前のマイペースで、残酷にも霧島の思いに気付かずに話を続ける。

「まあ特製という程そんなに凝ったレシピではありませんけどね。材料は小松菜・レタス・バナナ・リンゴです」

「やっぱり緑が強いんだな。色からは果物が入っている事が判らない」

提督はグラスに注がれた液体を見ながら、比叡のレシピを聞いて少し興味がありそうな顔をした。

「でも味は果物が濃いので見た目よりずっと甘くてフルーティですよ！」

「ほほう」

「どうぞ！」

「戴こう……おい、比叡」

「はい？」

「なんでグラスにストローが2つ……」

提督の言った通り今度はグラスが2つしか置かれていなかった。

1つは比叡、もう一つは自分か比叡かと思いきや、自分の前に置かれたそれにはストローが2つ。

「！」

霧島は比叡の更なる攻めの大胆さにショックを受けた顔をした。

「もうっ、それを聞きますか？」

「……」

「んっ」パク

「いや、それは流石に……」

提督は流石に横に霧島が居る状態でその誘いに乗るのは気が引けた。

さつきまで霧島と話していた内容を思い出せば余計にだった。

「んっっ！」

それでも子供の様に顔を膨らませて催促する比叡に、結局提督は根負けしたのだつた。

「……」パク、チュロロ

「く♪」ズズ……

「大佐、今日はありがとうございます！」

全てをやりきって満足したのかとても晴れやかな顔で比叡は提督と霧島にお礼をいった。

心なしか比叡が輝いて（絶好調に）見えた。

「いや、礼を言うのは俺だ。」
「馳走様」

本心ではあったものの、心労のせいかな少し疲れた顔で提督は比叡にお礼を返した。

「気にしないでください！ 美味しく頂いてもらえたらそれで満足ですから！」

「……そうか」

「あの」

「ん？」

「また持つてきてもいいですか？」

「……まあ頻繁でなければな」

「そうですか、ありがとうございます！ それじゃ、わたしはこれで失礼しますね！

島、今日はお邪魔しちやっつてごめんね！」

「いえ……」

「それは失礼致しました！」

バタンツ

「……」

「……」

「大佐？」

「ん」

「ケツコンしましょう」

ポツリと霧島が言った。

「え？」

「ケツコンです直ぐに」

「おい、霧島？」

改めて話の続きをするつもりがいきなり結果を突き付けられて、霧島の急変に提督は動揺した。

「指輪ありますよね？ 早く契約しましょう」

「急にどうし——」

「早く」ズイ

「……分かった」

女の嫉妬は怖い。

そう思った提督だった。

第37話 「駄々っ子」

「ビスマ……マリア、新たな改造を受けて今戻ったわ！」

「別にビスマルクでもいいだろう。それが本当の名前なんだから」

「いや！ マリアがいいの！」

「……そうか」

ビスマルクは最近、ようやく実装の第一段階として許可が出された上位改造以降の更なる強化の改造を受けたのだった。

「そんな事より大佐！ どう？ 私、艦隊の中でついに唯一の改三実装者になったのよ！」

「ああそうだな。俺もまさか海外艦が先にその改造を受ける事になるとは意外だった」

「もうっ、そうじゃないでしょ？ 改造を受けて更に優れた艦として戻って来た私の魅力はどう？ って訊いてるの！」プクー

「ん……魚雷を撃てるようになったのか。ますます器用になったなお前」

「でしょ？ 観測機も積めて魚雷も撃てるなんて、これでまた私の死角はなくなっただわね！」

「ああ、後は潜水艦にも対応できるようになったら完璧だな」

「任せて！　いつか対応できるようになってみせるわ！」

「そうか、頑張れ」（本気の目だな。それくらい浮かれてるって事か）

半分冗談で言ったつもり提督のその言葉にもビスマルクはキラキラと輝く目で自信満々に宣言した。

「ああ早く出撃か演習を試してみたいわね♪」

「悪いが、ケツコンの練度に達した艦娘は基本、それ以外の艦娘の成長を促すために出撃の出番は減る。お前や金剛たちの出番は本気で挑まないと危ういと判断した時というのは変わらないぞ」

「それは分かってるわ。あーでも、でもなあ……♪」

頭でも体の制御ができていない好例だった。

ビスマルクは提督に釘を刺されても、いつ勢いで出撃するかわわからなくらい子供のようにウキウキしていた。

「もうレイスやマックス達には自慢したのか？」

「ちよつと、自慢ってなによ！　……まあ結果的にはそうだけど」

「したのか」

「う……うん」カア

「はは、照れるな。浮かれる気持ちは分かる。それでどうだった？」

「それがね。ふふ、レイスは自分の事の様に祝ってくれたんだけど、ジエーンは……」

「拗ねたか？」

「あ、やつぱり分かる？ そうなの。一人だけそつぽを向いちゃってね『別に、そのうち

私もなるし』とか言っちゃってもー。ふふふふ♪」

(ちよほど逆の立場だったらマリアがそう言っただけだ)

提督はビスマルクを見ながらその様子をまざまざと想像することができた。

「大佐？」

「ん？」

「今何か思った？」ジト

「いや？」

「そう？ ふーん……」

「……」

「まあいいわ。それでね、それからジエーンの機嫌を直すのに苦労してね……」

「あまりやりすぎるなよ。その所為でヘソを曲げられたらそれはそれで厄介な気がするからな」

「だからなんで私を見ながらそう言うのよ!」

「なんだ気付いていたんじゃないか」

「私はそんなに子供じゃないわよ!」

「そうか。じゃあ偶に一緒に寝てくれと言ってきても断つてもいいんだな?」

「Nein! (ナイン)」

母国語で即答するビスマルク、その反応に提督は呆れ顔で溜息を付きながら言った。

「お前、戦艦なんだからもう少し大人らしく振舞えよ」

「それとこれとは話は別だもん!」

「そうは思わないが……」

「と、とにかく嫌なものは嫌なの!」

「だからといってあまり頻繁に来るのは遠慮しろよ? 風紀は守りたいからな」

「う……じゃあ週4くらいで……」

「それだと一日減っただけじゃないか。月1だ」

「そ、それはいや!」

「毎週駄々をこねるお前をあやして部屋に返す俺の労力を考えろ」

ビスマルクは自身が言う様に頻繁に夜中に実は提督のもとを訪れていたがそこは軍人の提督、その度に睡眠時間を削って律儀に彼女を部屋に帰していた。

「ちゃ、ちゃんと皆が寝静まった頃に来てるんだからいいじゃない！」

「俺には迷惑を掛けていいような答だぞそれ」

「お、お嫁さんだからそれくらい甘えて当然なの！」

「ドイツ出身の規律正しい軍人ならもう少し質実剛健に震えよ……」

「う……ど、ドイツ人は頑固なところもあるんだもん！」

「それは頑固ではなくただの我儘だ」

「……っ！」ジワア

「む」(泣くか、だがここで厳しくでなくてはいつまで経つても……)

泣いて帰るかと思われたビスマルクだったが、提督の予想に反して意外にも泣く寸前で我慢する表情をすると、俯きながら彼に近づきそつと服の裾を握つたてきた。

トテトテ、ギユツ

「んっ」

「お、お願いします。甘えさせて……下さい」

上目遣いで瞳を潤ませてせがむビスマルク、その姿は正に大きな子供だった。

「……だからこんな時間にわざわざ遅れて改造の話をしに来たんだろう？」

「……」コク

「……まあ改造初日だしな。一緒に寝るくらいなら」

「！ ほ、本当!？」

「その代わりに月1だ」

「そ、それは……………や」

「頑固だな」

「交渉しましょう!」

「頼むから寝かせてくれ……………」

提督は折れそうな心を何とか保ちながらそう愚痴るのであった。

第38話 「ネコ女」

「龍田、か」

「あらあ大佐。釣りですかあ？」

「まあな」

「そ」

龍田は海を見つめながら髪が潮風になびくのに任せて、提督の方を見ずに気怠げに返事をした。

「……ねえ」

「ん？」

「何処行くの？」

龍田は先程言葉を交わしたばかりの提督が自分を通り過ぎて何処かへ行こうとしているのを呼び止めた。

「いや、邪魔したら悪いと思ったから別の場所をな」

「……座って」

「え？」

「座って、いいから」

「いいのか？」

「邪魔じゃないし」

龍田は提督の判断が気に入らなかつたのか、若干拗ねたような据わった目をして提督にそこで釣りをするように促した。

「……そうか」 ドカ

「乙女心に相変わらず妙に鈍感よねえ大佐って」

「耳に痛い言葉だな、自覚しているだけに」

「なんで私がここにいたか分からなかつたの？」

「……俺を待っていたのか？」

「正解」

「俺がいつ釣りに来るのかわからないのか？」

「そればかりは勘、かな」

「今日みたいに天気曇りで雨が降りそうなの？」

「ここ暑いから、少しでも涼しい方が良くない？」

「ふむ……」

「はい」

龍田はおもむろにポケットからライターを取り出して火を着け、提督の前にそれを差し出した。

「お」

「待ってたのよ？」 シュボツ

「……すまん」 ジジ……

提督も龍田の厚意を受け入れて胸ポケットから煙草を一本取り出して啜えると、その火をもらった。

「ふう……」

「ふふ、美味しい？」

「ん、まあ」

「私も吸おうかなあ」

「止めはしないが、うちで吸ってる奴見た事ないからな。お前が吸ったら第一号になるかと思うと少し勿体ない気がするな」

「あはは、なにそれ？」

「なんだろうな。ふー……」

「ね、大佐」

「うん？」

「私も早くレベル99になりたいなあ」

不意の申し出だった。

相変わらず気ままなで予想できない龍田の言葉に提督は内心意外に思いながらも申し訳なさそうな顔をしてこう言った。

「今は駆逐艦を中心に育てているからな」

「全員平均65だっけ？ 時間かかりそうねえ」

「まあ、それでも既に何人かはクリアしている。精度が求められる遠征にいつでも行けるようにしたいんだ」

「ぶう……」

本気で気を悪くしたわけではないのは明らかだったが、それでも龍田はわざとそんな不満そうな声をあげて提督の気を揉もうとした。

「まあ駆逐艦が済んだら次はお前たちのつもりだ。それまではお前は……60だったか？ それで我慢してくれ」

「大淀や夕張は育ててる癖に」

「それでもまだお前には及んでないだろう？」

「私じゃないのが気になるの」

「ん？ はは、珍しく我儘だな。まあ、あいつらは軽巡の中で装備できる艦装の数が唯一他の奴らより多い二人だからな。少し鍛えていざという時に神通達に代われる戦力にしておきたいんだ」

「装備が適わなくなつて私だつてそれなりにやるのよ？」

龍田は今度は本当に少し不満そうな顔と声だった。

自分が戦力外のように聞こえたのだろう。

「分かつてる」

「分かつてないわよ」ブス

「解つてる、さ」ポン

「あ……」

「……すまないとは思つてる」ナデナデ

「うん……」

龍田は提督に頭を撫でられながら嬉しそうに目を伏せてその心地を楽しんだ。

「機嫌を直してくれたか？」

「まあだ。今度は寄りかからせて」

「俺は竿を握つてるんだが」

「じゃあ大佐の竿を私が……」

「帰るぞ」

「嘘、嘘よ」

「全く……」

「じゃあ膝で寝かせて」

「……」ジユツ

（あ、煙草……）

提督は携帯用の灰皿を取り出すと何食わぬ顔でまだ大分残っていた煙草をその中に入れた。

「灰が落ちるから？」

「お前の希望を受け入れた証だ。ほら」スツ

「やん♪」

「大佐あ」

「ん？」

「曇ってるわねえ……」

「そうだな……」

空は未だに曇天。

普段燦燦と降り注いでいる日差しも今はなく、代わりに厚い雲のカーテンの向こうから少しだけ温い鈍い光を送っていた。

「でも涼しいわよねえ……」

「そうだな……」

「……風、少し強くなってきたくない？」

「うん？ そうか？」

「うん。ほら風でスカートが」ピラッ

「抑えてろよ」

提督は風で黒い下着が丸見えとなった龍田の方をなるべく見ないように意識しながら渋い顔をしてそう言った。

「いいじゃない二人きりなんだから。それにいちいち抑えてたら寝難いし」

「目のやり場に困る」

「え？ 見てくれるの？」

「おい、痴女」

「違うわよ。それだけ親しい仲ってだけでしょ？」

「慎みを持って欲しいんだが……」

「だ・か・ら、お互いこれくらいは気にならない仲なら問題ないじゃない」

「下半身が冷えると風邪をひくかも」

「ひいたら大佐に看病してもらうから大丈夫」

「俺が看病するのは確定なのか」

「風が吹きすさぶ中女性を下着丸出しで放置した結果と思えば……」

「酷いな」

あまり表情を変えない提督にしては珍しく、彼はジトつとした目で龍田を見つめながらそう言った。

「大佐が？」

「いや、お前だ」

「ふふ、何のことかしらあ？」

「……もういい。好きにしろ」

「……うん♪」ゴロン

（多摩とは別の意味で猫らしいな）

第39話 「差し入れ」

「隴さーん、いきますよー!」

「大潮! あんまり強く投げちゃだめだからねー!!」

「分かってまーす! せー……の、よっ!」

「あ……」

「大潮選手振りかぶって投げました。これは……凄い! 手加減して投げたつもりなのでしょうが、大潮選手の投げたボールは隴ちゃんを遥かに越えて基地の二階に……あ、あそここの窓って……」

「青葉、あんた何してんの?」

「あ、衣笠。てへへ、暇だったのでつい実況を。というかあのボールが飛んでいった方って……」

「え?」

大潮がボールを投げる数分前の執務室。

「大佐、これ作ってみたんですけど……」

昼間、大和と長門が提督に差し入れがあると彼を訪ねてきた。

部屋に入るなり大和はちよつと恥ずかしそうにしながらも、提督にあるお菓子を彼の前に出した。

「ケーキ……。大和、お前が？」

「私も一緒に作ったんだがな」

自分を忘れてもらっては困ると言いたげな目で長門が口を挟む。

「長門と一緒に作ったのか？」

「なんでそんな意外そうな顔で見る？」

「ああいや……。悪い」

「まあ分からなくもないけどな。でもな、私はこれでも意外に器用なんだぞ？」

「そうですよ大佐。これ、確かに一緒に作りましたけど、作り方は殆ど長門が……」

ガシャーーン！

窓ガラスを割って突如何かが部屋に侵入してきた。

長門は一瞬で警戒態勢に移るも間に合わず、彼女の反応を嘲笑うかのように侵入物はその横を通り過ぎてそして……。

グシャツ

ケーキがボールの直撃を受けて四散した。

「

「あ、ケーキ……」

「……ボール」

目の前で起きた事が信じられず言葉を失って硬直する大和。

ボールによって粉々になったケーキを唾然とした顔で見る長門。

ケーキを壊した後後に力を失って足もとに転がって来たボールを見て全てを理解し、渋い顔をする提督。

三人とも反応はそれぞれだったが、全員共通してその場に不運な事故が起こったことは無意識に自覚をしていた。

「ごめんなさい」「申し訳ございません」

時は昼過ぎ、提督の目の前にはボールが割った窓がある場所を特定して青い顔をして訪ねてきた大潮と臆が深く彼に頭を下げていた。

「まあ悪気はないのは分かるからあまり責めるつもりはないが。だが……な」チラ

提督がふと視線を向けた先には、ケーキを破壊されたショックで部屋の隅でしゃがみ込んで落ち込んでいる大和と、

「すん……」

それを励ます長門の姿があった

「まあそう落ち込むなよ。また教えてやるから」

「まず謝るのならあいづらにだろう」

「は、はい！」

「そ、その通りです！」

「大和さんごめんなさい！」

「わたしが加減しなかったばかりにごめんなさい！」

「ぐす……いい、いいの……二人とも気にしないで。私もそんなに……うつ……」

（も、もの凄く気にしてる……）

（わ、わたしは何という事を……）

（大和ってこんなに打たれ弱かったか？）

（少なくとも私の認識では違うな）

（勝手に人の心に入って来るな）

（ふふん♪）

提督と長門はともかく、当事者の二人は予想以上の大和の悲観に暮れている様子にタジタジするしかなかった。

ちょうどそんな時に長門が提督を肘で小突いてきた。

「大佐、出番だぞ」 ヒソ

「慰めろと？」 ヒソ

「当事者が謝って立ち直らなかつたんだ。それしかないだろう？」 ヒソ

「……むう」

長門の押しに提督は負け、取り敢えず声を掛ける。

「大和」

「……ぐす、はあい……」

「まあそのなんだ。俺はどちらかというと言葉より和菓子の方が好きだからそう落ち

込まなくてもいいぞ」

「……っ！」

大和は提督の言葉にその日一番に目を大きく開いて更に涙を溢れさせた。

「そこでそう言うか……」

対して長門はかなり呆れた顔をして溜息を吐く。

（や、大和さんが……！）

（た、大佐何をしたの!?!）

（なん……だと……）

「た、大佐ごめんなさい……。わ、私……大佐が和菓子が好きなのにケーキなんか……」
(ああ、そういう事か)

提督はようやくそこで自分の発言の不味さを理解した。

「いや、大和さつきのはそういう意味ではない。お前を励まそうとして返って傷つけてしまった俺の無神経さに非がある」

「そんな……」

「俺は別にケーキが嫌いなわけじゃない。ただ、比べるとというだけの話だ。今回はこんなことになって残念だが、またお前が作ってきてくれるのなら喜んで食べさせてもらうぞ」

「大佐、それは私達が大佐に食べさせ——」

「お前は黙ってろ」

「ふっ……」

「え、なんでそこで笑うの？ 大潮？」ヒソ

「ごめんなさい。わたしも分からないです……」ヒソ

ギョッ

「ん？」

「大佐」

「うん？」

「それ、本当ですか？」

提督は何だか凄く嫌な予感がした。

「大和、本当とは？」

「私が大佐に食べさせても……？」 ジッ

（そんな期待する目で見ると……長門、さっきの笑いはそういう事か）

「大佐……？」 ジッ

「……まあそれでお前の気が済むのなら……」

「!! ありがとうございます！ 私今度は今日よりもっと頑張りますね！」

「あ、ああ……」

「え？ え？ どういう事？」

「ふ、ふえくん長門さあん」

混乱する臆と訳が分からず理由が気になって半泣きになる大潮に、長門は半ば呆然としている提督を面白そうに眺めながら優しい声で答えた。

「まあ大人になれば分かるさ」

第40話 「実力」

「第一艦隊帰投しました」

「制圧、ならずか」

主力艦隊の出撃からの帰還を加賀から聞いた提督は、事前に受けていた結果報告に目を通しながら淡々とした声で言った。

「はい。後一步のということですが、まだ決定打には及んでいないようです」

「ふむ、できればあそこにはあまり出撃させたくないんだが、こうやって定期的に叩かないと危ないしな。飛龍達は大丈夫か？ 再出撃は可能か？」

どうやら作戦実行中の海域はなかなか難度が高いようで、出撃も複数回及んでいる所為か提督は艦隊の娘たちの状態が気になるようだった。

「……飛龍以外は高速修復によって出撃可能です」

「む、疲労か？」

提督は加賀の言葉に、唯一入渠を必要としない被害を受けつつも彼女が出撃可能メンバーから外された理由を即座に察知した。

「はい。被弾こそしていませんでしたが、精神的にはそろそろ限界がきていたみたいで

す」

「そうか……」

バン！

「第一艦隊帰投したぞ！ 大佐、もう一度！ もう一度じゃ！ 今度こそ決めてくる！」
余程悔しいのか、ノックも無しに利根がイライラした様子で勢いよく作戦司令室に入ってきた。

提督も普段なら嗜めるところだったが、彼女たちの苦労を思うと敢えてそこは注意せずに彼女の帰還を目認するだけに留めた。

「ね、姉さん落ち着いて」

「利根、焦ってはダメよ」

筑摩と妙高が二人して気が立っている利根を宥める。

「疲れたあ……でもまだいけるよ？ ね、飛龍？」

「ふあ……ええ？ も、勿論！」

「……」（飛龍？）

蒼龍と雲龍は疲れている様子でこそあったものの、それでもリベンジする気は満々やうでその目からは闘志の燃える炎が滾っていた。

だが、そんな彼女達に対して飛龍だけは、大佐の懸念通り疲労が溜っていると見え、蒼龍の問いにも一歩遅れた反応を見せた。

「皆、度重なる出撃にも拘らず意気軒昂で結構だ。それでは準備が整い次第再度出撃、と言いたいところだが……飛龍」

「は、はい？」

唐突に自分の名前だけ呼ばれた飛龍は何か嫌な予感を感じた。

「お前は此処に残って休憩しろ」

予感的中した。

そして当然の如く飛龍は自身の万全を訴える。

「っ！ 大佐！ わたしまだやれます！」

「やる気があるのは分かる。体力もまだ大丈夫そうだしな」

「なら……！」

「だが、心の方はそうもいかんだろう。お前、個人の戦果データが段々落ちてきているぞ」

「そ、それは！」

提督の私的に飛龍は動揺した顔をした。

それでも無理に虚勢を張らずに言い募るだけにしようとしたのは、彼女自身もその事

を自覚していた証拠と言えた。

「別に責めてはいない。それだけお前の精神的疲労が限界に近くなっていただけだ」

「う……………で……………くうつ……………」ポロポロ

ついに効果的な言い訳が思いつかなかった飛龍は悔し泣きをする。

そんな彼女の頭に手を乗せて、提督はなるべく温かく聞こえるように優しい声で言った。

「飛龍よく頑張ったな、大丈夫だ。お前の働きのお蔭でここまで来れたんじゃないか。

後は任せろ」ポン

「……………」

「いいな?」

「……………了解です。皆ごめんなさい!後は……………」

提督の指示を素直に受け入れた飛龍はまだその目に涙を浮かべつつも、努めて明るい顔をして蒼龍達の方を振り返るとすまなそうに言った。

そんな彼女に仲間たちも頼もしい顔で応える。

「任せるがよい!」

「飛龍さん、お疲れ様です。後は姉さんと私達で何とかしてみせます」

「筑摩の言う通りです。あなたは安心してゆっくり休んでくださいね」

「うん、絶対大丈夫だから」

「皆……」

飛龍はその言葉に感動して再び涙を流しそうになったが、雲龍の続いて出た言葉にそれは止められた。

「で、飛龍が抜けた穴は誰が塞ぐのかしら？」

当然の疑問である。

そしてその疑問に答える為に、提督は傍らに先程から佇んでいたある女性に声を掛けた。

「……加賀」

「!!」

名前を呼ばれた女性にその場にいた全員の視線が集中した。

「はい」

「頼めるか？」

「……二ヶ月ぶりの出撃ですか、了解です」

提督の鎮守府では、ケツコンまでに到達した艦娘は他の仲間の成長を促すために一時的に遠征以外の表に出る任務から身を引く決まりとなっていた。

それは一見怠惰にも思えるが、そこまで到達すること自体が艦娘にとって一種の栄誉とも言えた。

勿論そのままだらしく過ごしているわけではなく、その分基地の内務に身を置き、対象となった艦娘はしつかり仕事はしていた。

「赤城にも入ってもらおうか？」

「いえ、ここまでやってくれていたら十分です、交代は私だけです。飛龍達はよくやってくれました」

「加賀……」

てつきりいつもの無愛想な顔で憎まれ口を叩かれると予想していた飛龍は、加賀の意外な思いやりのこもったそんな言葉に感動した顔をする。

「飛龍、お疲れ様です。あなたの成果は成ります。安心して」

「……うん。お願い」

ここは自分も素直に礼を言わなければ、飛龍がそう判断して続いて加賀に礼を述べようとした時だった。

「あら、随分しおらしくて聞き分けが良いのね。ま、二航戦だからそんなものかしら」

なんともひどいタイミングでいつもの加賀がそこにいた。

「なあ!？」

「ちよつ、なんですつて!？」

思いがけないカチンと来る言葉に真つ先に飛龍だけでなく、蒼龍も反応する。

「元氣じゃない」

加賀はポツリと言った。

加賀に抗議をしようとした矢先に更に予想外な事を言われ飛龍と蒼龍は目を点にする。

「……え?」

「は……?」

「……出撃します」クス

「ああ、行って——」

提督は加賀のそんな悪戯めいた励ましにの行動を内心微笑ましく思いながら出撃の許可を出そうとした。

しかし、

「大佐」

不意に加賀は大佐の方を振り返つてを呼んだ。

「もしかしてこの出撃って前の時の罪h」

「いや違う、公私混同はしない。必要だと判断したからお前を頼んだだけだ」

加賀が言おうとしたことを察した提督は彼女がそれを皆の前で言い切る前に、誤解を解いた。

「……なら、いいんですけど。では、行って参ります。第一艦隊出撃」

「んん？ 加賀？ 大佐？ あ、ちよ……引つ張るでない！」

「で、では大佐行つてきますね！」

「朗報をご期待ください」（大佐と加賀さん、何かあったわね）

「え、何よちよつとー!? 気になるじゃない！ あ、大佐行つてきまーす！」

「……むう。了解」（なんか面白くない）

——そして出撃から間もない頃。

○AL海域北方、第一目標地点付近。

「何この空気……。一人変わっただけで緊張感が……」

蒼龍が強張った顔でぼつりとお漏らす。

飛龍に代わり加賀が新たに入ったその艦隊の仲間達は、場を支配する空気に言いようのない緊張感を感じていた。

「飛龍さんと蒼龍さんの賑やかな空気も好きなんですけどね。でもこれはこれで身が引き締まりますね」

「うむ、そこは流石は加賀と言ったところじゃな」

「姉さんは基本誰と一緒にでも変わらないですよね……あはは」

「……」

「雲龍、どうかしたの？」

一人だけ先程から無言だった雲龍に加賀は声を掛ける。

「……別に」ブス

「気になる事があるなら今言った方がいいわ。作戦行動中に気が散ったら困るもの」

明らかに機嫌が悪そうな雲龍に、加賀は部隊の士気を保つために彼女に不満を吐露させようとした。

「別に大丈夫。へい……あれ？ 加賀？」

尚も雲龍が理由を話すのを拒否しようとした時だった、彼女は加賀のある点に気がつき不思議な顔をして逆に訪ねてきた。

「何かしら？」

「それ、あなたが装備してるの。いつも装備してる烈風改じゃないのね」

「……」

加賀の肩がピクリと動く。

戦闘機烈風改は今のところ提督の基地には一つしかない最強の戦闘機で、装備するの

は大体空母の中で一番の実力のある加賀であった。

このような理由もあって烈風改は半ば加賀の専用の装備となっており、その事については加賀自身は勿論、他の仲間たちも暗黙の内に認めるところとなっていた。

専用装備、本人は態度には出してないつもりだったが、加賀はこの戦闘機をとてても大切にしており、その整備自体も自ら整備妖精に整備の仕方を習う事によって常に自分で行っていた。

故にその装備を加賀が持っていない事は不可解であり、雲龍の疑問も当然と言えた。

「ちよつと……ね」

表情こそいつもの通りだったが、加賀は雲龍の質問に答えたくないのか視線を僅かに泳がせる。

「あ、本当だ、珍しい。あんなに大切にしていた戦闘機なのに持っていないなんて……もしかしてさつき提督と話してた事とかんげ……もが!？」

雲龍の指摘に気付いた蒼龍が興味がありそうな顔で更に加賀を問い詰めようとするも、その口は唐突に妙高によって背後から塞がれた。

「蒼龍さん、ダメ。これ以上は」

「もがが?」(妙高?)

「私も妙高さんに同意です。蒼龍さんここは大人しくしてま……」

「む、何やら気になるぞ！ 加賀よ！ 一体なにが……もがあ！」

筑摩の想像以上にやはり筑摩だった彼女が蒼龍に続いて加賀を追及しようとしが、意外にもその口は事の発端である雲龍にふさがれた。

「雲龍さん……」ペア

「……任せて」

雲龍は気付いていた。

皆から質問をされそうになっている間、加賀が俯き僅かに肩を震わせていたことに。

これは触れない方がいい。

雲龍は即座にそう判断したのであった。

「……取り敢えず行くわよ。皆着いて来て」

肩を震わせていた加賀はいつの間にか元に戻っており、いつもの落ち着いた声で進軍を促す。

だが心なしか彼女の目つきはついさき程の時と比べて険しくなっており、何を思い出したのかその身からは怒りとも恨みともつかぬ黒いオーラが湧き出していた。

そしてその感情の矛先は理不尽にもこれから敵である深海棲艦たちに向けられようしていたのであった。

第41話 「アクシデント」

「攻撃機（五十二型丙）の改造ですか」

「そうだ。代償として烈風二機のパーツを使ってしまいが、それを補って余りあるくらいの性能は期待できるらしい」

「それで私の艦載機を？」

「悪い。確かに格納庫には他にも烈風があつたが、丁度近くにお前がいてな
「いえ」

加賀は言葉こそ普段通りで落ち着いていたが、微妙にそわそわした態度をしていた。

「どうやら提督に装備を渡す時に航空甲板ごと預けたので配備したままだった『ある機体』の事が気になっているようだ。」

「大丈夫だ。使った機体の代わりはちゃんと……」

提督が少し読みが違う気遣いの言葉を加賀に掛けよとした時だった。

執務室の扉がノックもなしに勢いよく開かれ、緊張した顔の青葉が入って来た。

「どうやら何かトラブルでもあったらしい。」

「大佐！」

「どうした？」

「あ、あの……失敗です」

「ん？ なにが？」

「戦闘機……烈風を使った新しい機体の開発です」

「何か問題でもあったか？ 改造に回す前に機体のチェックはちゃんとしたはずだが」

「機体の状態自体は確かに全く問題ありませんでした。でも問題は状態ではなく機体自体にあったんです」

「……どういう事だ？」

「ここにきて流石に提督も原因が予測できなくなったのか、若干強張った顔で訊いた。

「開発に使った一機が烈風じゃなかったんです」

「なに？」

「その……ほら、今回使ったのは加賀さんが装備してた烈風だったじゃないですか？」

「ああ。演習前に装備させたところで開発の事を思い出したついでに……」

「それ、烈風改だったんです……」

「恐る恐るといった口調で青葉は衝撃の事実を口にする。

「なに……？」

提督はその事実を聞いた瞬間、全身から血の気が引くのを感じた。別に貴重な艦装が消失した為ではない。

確かにそれもシヨックといえればシヨックだったが、理由は他にあった。

それは……。

「……っ!!」ブアッ

提督の後ろで加賀が目を見開いて大粒の涙を流していた。

(うわ、あの加賀さんが……)

青葉はここでようやく自分の予想以上の事態の深刻さに気付く。

「か……」

提督は一瞬で乾いてしまった口腔から言葉を絞り出すことができず、言葉にならない掠れた声だけが出た。

(大佐が加賀さんを見て真っ青になってる……)

青葉は迅速に行動した。

この場にはマズい。

早くここから立ち去るべきだ。

「あ、あの取り敢えず失礼しました！ し、暫く誰も入らない様に貼り紙しておきますから！」

ボタンツ

執務室には再び提督と加賀だけとなった。

ただ前と違うのは、場に立ち込める雰囲気加賀が提督がかつて感じた事がない程重苦しいという事だ。

「……加賀」

提督はその雰囲気の中、なんとか気合で全身に力を送り、気力を振り絞ってようやく言葉、加賀の名前を呼ぶことができた。

「……ひぐつ、ぐす……。」プルプル

加賀は提督が言葉を掛けた瞬間とうとうその場に膝を付き、子供の様に声を我慢して泣き始めた。

「か……」

その、絶対に見る事がないであろう加賀のあまりにも悲壮感漂う様子に提督は再び言葉を失う。

「加賀……」

だがそれでも今は、何をおいても先ず謝らなければ。

提督は再びその身を気合で奮い立たせ、鉄の意志でそれを敢行しようとしたが、

「…………っ」フイツ

自分と目が合った瞬間に加賀にそっぽを向かれてしまった。

(…………そりやそうだよな)

「加賀、謝って済むことではない事は重々承知している。だが、謝らせてくれ。悪かった。本当に」

「…………」

「あれはお前専用の装備だったからな。本当に悪い事をしたと思っている」

「…………」

「月並みな台詞だが何でも言ってくれ。償いはする」

確かに月並みのセリフだったが提督は本気だった。

贖罪の為なら自分のできる限りのことは何でも応える所存であった。

その誠意が伝わったのか、『何でも…………』という提督の言葉の辺りで加賀はピクリと肩を反応させてようやく提督の方を振り向く。

「…………ほ…………っとう…………っ」チラ

「ああ」(泣きはらした目が赤い…………ぐっ…………)

普段見る事のない純心な加賀の顔に、提督の胸は再び締め付けられるような罪悪感を感じた。

それに対して加賀は提督のその答を聞くと無言で近付き、彼の目の前に立つとジツ見つめてきた。

トコトコ

「……」ジツ

あくまで無言。

だが、お互い付き合いの長い間柄である。

提督はその無言のメッセージを理解すると彼女を優しく自らの胸に抱き寄せた。

「……」ギユッ

どうやら正解だったようで、加賀は俯いたまま提督の胸に顔を埋める。

「……暫く、この……まま」スン

「分かった」ナデナデ

提督は空いた片手で加賀の頭を撫でながら静かに時の流れに身を任せた。

1時間後。

「落ち着いたか？」

「……」コク

まだ胸に顔を埋めたまま加賀はコクリと頷く。

「本当に悪かったな」

「もう……いいです」

「俺はそうは思っていない。いつかまた手に入れることができたなら、必ずお前に配備する。それまでは六〇一の方の烈風で我慢してくれ」

「……六〇一でも十分です。大佐、ありがとうございます……」

「礼は言わなくていい。ここは俺の謝罪だけ受け入れておいてくれ」

「……はい」

「……ところで、もう離れないか？」

加賀に対する贖罪の気持ちは本当だったが、それでも些か抱き締めてから時間が経っているように感じた提督は、確認するような口調で聞く。

「さつき何でもするって言いました」

「ちよつとだけ顔を上げ、視線だけを提督に向けて子供の様に拗ねた顔で加賀は言った。」

「ああ、言ったな」

「じゃあ、まだこのまま……」

「ずつと立ったまま抱き締めてたらいいのか？」

提督の細やかなこの疑問に暫し黙考する様子を見せた加賀は、先程のより明らかに少

し顔を赤らめてこう言った。

「……じゃあ、座って膝に載せて……それでまた胸に抱いて下さい」

「……分かった」

ギシッ

「ほら」

ソファアに腰かけた提督は両手を広げて加賀にそこに来るように促す。

「……ん」

加賀は自分の希望通りに抱かれると、また無言になった。

提督はそんな彼女をあやしながらちらりと横目で見た。

「……」 チラ

「……すん」 グス

(まだ完全には立ち直ってなかったのか。これは本当にとんでもない事を俺はしたな)

ナデナデ

提督が再び頭を撫でるとそれに反応して加賀も強く抱き付いてきた。

「……」 ギュー

「……良い子だ」

「……！」 カアッ

自分の行動を振り返って恥ずかしくなったのだろう、加賀は座って抱き締める事を提案した時より更に顔を赤くして、より深く提督の胸に顔を埋めた。

「今は恥ずかしさは忘れる。誰もいない」

「……………はい」

（……………良い匂いだな……………）

更に1時間後。

「すう……………ん……………む……………すう……………」スリスリ

提督の膝には丸くなってすっかり安らかな寝息を立てている加賀がいた。

（寝たか）

（さて、どうするか。確かに六〇一でも問題はないくらいに性能だが、ずっとあれを愛機として大事にしていたからこそあの動揺だ）

「……………い……………さ……………き……………」zzzz

「何とかしてやりたいな」ナデナデ

提督は彼女の頭を撫でながら解決策を模索するのであった。

第42話 「悩み事」

「……はあ」

「どうした大和、浮かない顔だな」

「武蔵……」

体操座りをして俯いていた大和が顔を上げた。

「何かあったのか？」

「うん、まあ……」

「どうした？」

「……私って」

「うん」

「私の練度なんだけど……」

「ああ」

「他の戦艦の人たちがレベル75以上なのに、どうして私だけ60で止まっているのかなあって」

「ん？ そうなのか？」

「ええ、改造を受けてからずっとこのままなの」

「へえ……」

「私、一応大和だから、自惚れのつもりはないけど戦力にはなるでしょう?」

「そうだな」

「なのに、なんで60から育てて頂けないのかなあつて……」

「ふむ……」

大和がこの鎮守府に来てまだ間もない事は事実であった。

しかし、大和型はその火力が示す通り艦隊の切り札とも言える貴重な戦力、その彼女が自分のレベルが高くないことを気にしているのはある意味当然のことと言えた。

「燃費の事は理解しているつもりよ? だから活躍の場は演習だけだったとしても不満はないの。でもそれもない……」

「大佐の事だからお前が懇願すれば育ててくれるとは思うが……」

「何か意図があつてそうしているのなら私からそんな事をするのはちよつと気が引けるかな……」

「……ふむ」

「なんでだと思つて?」

ちよつと泣きそうな顔で大和は武蔵に聞く。

そこまで思い詰めていたのか、顔には出さなかったが武蔵は大和の意外なナイーブさに内心驚いていた。

「そうだな、単純に」

「うん」

「取り敢えずお前を最低でも改造の域には達しておきたかったただけなんじゃないか？」

「最低でも……まあそう考えるとちよつとは気が楽になるけど……」

武蔵の言葉に大和は少し考えるような顔をする。

「私が推測するに、大佐の今の育成優先度は駆逐艦の全体的な練度の底上げと、次いで成長限界に近い艦娘、つまり戦艦の育成だと思う」

「なる……ほど。それなら確かに駆逐艦は別としても私以外の戦艦の人たちが演習に加わっているのは説明が付くわね」

「空母とかも軽空母じゃなくて正規空母を優先しているのは、今はこれ以上改造できる艦がないからであって、結局は練度の差と戦術的な意味合いも含めて演習に参加させているだけだろう」

「……」

「ま、あくまでこれは私の推測だがな。個人的にはこんなところだと思っている。納得できたか？」

「……うん。武蔵の説明を聞いて改めて自分で考えてみるとそれが自然というか、納得できるわね」

大和は今度は明らかに前と比べて表情が柔らかくなっていた。

「どうやら武蔵の説明にかなり納得がいったようだった。」

「ん、そうか。まあ理解してもらえたのならなによりだ」

「武蔵、大佐の事よく見ているのね」

「はは、一応お前よりは先にこつちにいるからな。それに……」

「それに？」

「愛しているからだ」

「愛……」 カア

迷いのない武蔵のハッキリとした言葉に大和は顔を赤くする。

「まあ艦娘だから提督に惚れ易いようにできているのかもしれないがな。でも私はこの気持ちには偽りでないと信じている」

「そう……」

「……お前は本部の大和とは随分違うな」

「え？」

「ああ、いや。海軍の本部の方にも大和がいるんだが、そいつとお前とは随分違うんだ

なあつてな」

「それは……当然じゃない。見た目は同じでも育つ環境によつては性格だつて多少は変わるわよ。ましてや本部となればそれなりにしつかりして当然よ」

「ん？ 私はまだ本部の大和の性格までは説明していいぞ？」

「でもしつかりしてるんでしょ？」

「まあ……な」

「やっぱり」

「その、すまん」

「え？ あつ……別に謝らなくていいわよ。大丈夫、私だつて大和だもん」

「そうか……」

「うん……」

「あ」

「なに？」

「そういえばお前、この前大佐にケーキを作つたらしいな？」

「あ……ま、まあね」

何か嫌な事を思い出したのか、大和は一瞬顔をひきつらせたかと思うと目を逸らしながら答えた。

「喜んでくれたか？」

「え……ええ、いろいろあったけど結果的には丸く収まったわ」

「は？ 丸く？」

「う……ちよつと事故があつて作り直したのよ」

「へえ」

「結果的には最初より更に上手くできたし、大佐もちやんと食べてくれたから万事問題なしよ」

「そうか」

「うん」

「……」

「……」

「さて、戻るか」

「そうね、お腹も空いたし武蔵のお蔭で悩み事も晴れたし」

「それは良かった」

「うん、ありがとうね」

「いいさ、気にするな。あ、そういえば今日は大佐が飯を作ってくれるらしいぞ」
「え？」

武蔵の言葉に大和は目を丸くする。

「食堂に行ってみろ。大佐が厨房に立っているはずだ」

「な、なんで大佐が……」

「料理が好きなんだそうだ」

「そ、そうなんだ……」

「これは大佐の好みの味とか知る好機だと思うぞ？」

「……！ なるほど！」

「次はケーキ以外も作ってみるがいいさ」

「そう、ね。……ん？」

「どうした？」

「武蔵は何か作ったりはしないの？」

「え？ いやあ、はははは。私は食べる専門だからな」

「そ、そう」（料理作れないのかしら……？）

「まあいいじゃないか。行こう」

「そうね」クス

第43話 「迂闊」

「……」カチャカチャ

「大佐ー、何してるのー？」ピヨン

「つと、おい」

後ろから飛びついて来た川内に提督は何か焦った様子の声を出す。

「え？」ビクッ

「危うく失敗するところだったぞ」

「ご、ごめんなさい……。何してたの？」

「これだ」

「……艦？ 玩具？」

川内が机の方を見ると、そこには作りかけの軍艦の模型と切除されたプラスチックのパーツが散らばっていた。

「ま、厳密にいうと模型だ」

「うん。ミニカーみたいなものよね」

「そうだな。こっちは自分で組み立てて完成させないといけないやつだが」

「何作ってるの？」

「その箱を見てみる」

箱には川内達の間でも珍しい存在である水上機母艦の瑞穂の絵が描かれていた。

「んー？ 瑞穂……ね」

「ああ」

「なんで瑞穂なの？」

「なんでと訊かれると困るが、まあ強いて言うとな水上機母艦だからだな」

「え？」

「ほら、うちにいるのは、意図的に止めている結果ではあるが千歳と千代田しか水上機母艦はいないだろう？」

「うん」

「何となく玩具屋の模型コーナーを立ち寄った時にふとその事を思い出したらつい、な」

「へえ〜」

「水上機母艦は確かに強力とは言えないが、通常の空母では対応できない夜戦もこなせるし装備によつては砲撃や雷撃も可能な器用な艦だ」

「そだね。私も昔は千歳さん達に……あつ」

「分かったか？」

「うん！ 練度が低い子たちの育成と護衛も兼ねてるのね」

「そうだ。器用な上に燃費も良い。お前たちはもうあまり世話にならなくなったから忘れがちかもしれないが、こいつらによる貢献は大きいぞ」

「そうだね！ 初心は忘れちゃだめって事よね」

「その通りだ」

「ふくん、そう考えると確かに千歳さん達以外の水上機空母がいたらなあって思うよね」
「残念なことだけど今のところうちでは発見には至っていないがな。だがいつかは見つけた
いものだ」

「そうだねえ。ねえ大佐って艦の模型が好きなの？」

「ん？」

「やっぱり海軍の提督だもんね。それも仕方な——」

「いや、どちらかというと俺は戦車の方が好みだな」

「え」

提督の言葉に川内は固まる。

「軍艦もいいが戦車の方が個人的に惹かれるところがある」

「そ、そうなの……？ でも大佐は海軍の人だよな？ なのにどうして陸の物が好きなの……？」 プルプル

「確かに、俺も士官学校に入学したての頃は戦車にはさほど興味はなかった」

「そ、そうだよね！」　ペアツ

「だがな、当時、今はもういないがその頃の友人に陸軍の人間がいてな」

「あ……？」

せつかく風が自分に向いて来たと思っていた矢先、川内はまた不穏な予感を感じた。

「そいつは女性なんだが、それはもうそこら辺の男の兵士なんか比較にならない程優秀な奴だったんだ。所謂女傑というやつだな」

「は、はあ」

「俺は彼女とよく飲みに行ったりしてたんだが、その時にいろいろ陸軍の面白い話を聞かされている内に特に戦車に惹かれたんだ」

「……そう。で、でも戦車な……戦車より軍艦の方が種類や数が多いじゃん！　わ、わたしは軍艦の方がいいと思うなあ」

川内は動揺して焦りつつも何とか自分、陸から海へ風向きを戻そうと努力する。

「いや、海と陸、活躍する場所が根本的に違う物を比較して優劣を決めるのは俺は間違いだと思う」

「……う」

「俺はあくまでどちらが好きかという事なら戦車の方が魅力を感じると言っただけで

あつて、軍艦は軍艦でそれにしかない魅力があるだろう？」

「そ、そうだけとお……」 ジワ

「川内？」

「で、でもわたしはあ……大佐は提督なんだから……ぐ、軍艦の方が好きつて……ひつく……言つて……」 グス

皆が慕っている提督である。

そんな彼が、例え一部だけであつても海より陸に思いを馳せているのが川内は悔しくてならなかった。

「おいおい、泣く程のことか」

「う……ご、ごめんなさい」

「いや、俺もちよつとお前の前で無神経だった」ペコ

「そ、そんな」

「お前にちよつと見て欲しいものがある」

「え？」

「ほら、あそこの戸棚あれをみてください」

「棚……？ あつ」

そこには提督が今まで作つたと思われるいくつもの軍艦の模型が並べられていた。

「あの模型の中に戦車はあるか？」

「ううん……ない」

「恥ずかしい話だが、艦の模型を作っている内にそれに慣れてしまつてな。戦車が好きなのは本当だが、いざ作るとなるとどうしても作り慣れたものになしか手がいなくなつたんだ」

「あ……軽巡もある！」

「ん？ 『川内型』も作つてあつたと思う」

「本当だあ……♪ 神通もある！ あ、こつちは那珂ね！ ……あれ？」

川内はそこである重大な事実気付く。

それは……。

「ん？ どうした？」

「大佐、確かに『川内型』はあるけど肝心の、ネームシップの……わたしが……」

「ああ、川内か。店を訪れる度に確認はしてるんだが、なかなか店頭に並んでなくてな」

「……作つて」ポツ

俯いて表情が窺えない状態で川内がポツリと言つた。

「え？」

「作つて！ わたしも作つて！」

「おい、せんだ」

「妹達だけあってわたしだけ無いなんてやだ！」

「いや、そうは言っても店に在庫が無いんだから仕方ないだろう」

「注文は？」

「ここが日本からどれだけ離れているかと思っっているんだ。定期的に入荷する荷物の中にそれがあつてのを期待するしかないだろ」

「ね、ネット！ ア○ゾ○使えばいいじゃん！」

「俺はネット通販は使ったことが無くてな。だからアカウントもない」

「あ、じゃあわたしが代わりに注文してあげる！」

「川内が川内を注文するのか？ なんだかシユールだな」

「この際妙な事は気にしないで！ はい、注文するよ！ パソコン貸して！」

「今からか？ まあいいが……」

「……」カタカタ

川内が提督のパソコンを使って自分の通販サイトのアカウント情報を打ち込むと、画面に川内のそのサイトを利用記録を反映したオススメ商品の情報も表示された。

提督はその情報を見て顔をしかめる。

「ん？ 川内、お前何を買ってるんだ……」

「!?　こ、これは……ち、ちが……見ないで!」

提督に指摘されて川内が画面を確認すると、そこには提督はもちろん妹達にも言えなような物が群れを成して表示されていた。

川内は顔を一瞬で沸騰させたように真っ赤になると、素早くパソコンの前に回り込み半泣きで必死に提督から画面を隠す。

「別に追及する気はないから安心しろ」

「いやああああ!　大佐忘れてええええ!!」

「無理を言うなよ……」

第44話 「提案2」

「赤城」

「あ、長門さん」

「これから昼か？」

「ええ」

「そうか。なら一緒にいいか？」

「ええ、構わないですよ」

「そうか。良かったなお前達」

「え？」

長門一人しか認識していなかった赤城は、この言葉に疑問の声を上げる。

後ろを振り返った時は彼女しか見えなかった。

つまり『お前達』というのは彼女の後ろにいる人の事なのだろう。

赤城が少し視線をずらして彼女の後ろを覗いてみると……。

レ級「やったー！」

ヲ級「ご飯♪ ご飯♪」 キヤツキヤ

ル級「はあ……またあのお味噌汁飲めるんだあ」キラキラ
夕級「……」

すっかりお馴染みになった深海棲艦四人組が、一人を除いてにこやかな顔でそこにいた。

「……」

「ん？ どうした赤城」

黙り込んだ赤城に気に掛けるような声色で声を掛ける長門。

「え、あの……」

「ん？」

「なんで……」

「ああ」

「なんですかこの人達」

「レ級達だ」

赤城の疑問に長門はこともなげに答える。

それに呼応するようにレ級達もタイミングを合わせてきた。

レ級「だあ！」

ヲ級「だー！」

ル級「え、えつと……」オロオロ

タ級「……」ハア

訂正、レ級とヲ級のみがノリ良く合わせてきた。

「そんな事分かつてるわよ!!」

赤城の悲鳴に似た怒声が廊下に木霊した。

「……」ブス

レ級「ねー長門」

「うん？」

レ級「なんで赤城怒ってるの？」

「分からないか？」

レ級「分からない！」

ヲ級「わからない」

ル級「いや、ヲ級は分かかってるよね？」

タ級「……わざとに決まってるでしょ」

「……」ビキビキ

「落ち着け赤城、別に無断で来たわけじゃない。一応私に断ってはあ

「長門さん……でも……」

長門の言葉に赤城はなんとか苛立ちを収め落ち着きを取り戻そうするが……。

レ級「ねえ赤城、何が気に入らないの？」

ヲ級「のー？」

タ級「ヲ級、いい加減にしないと怒られるわよ」

ル級「そ、そうだよ」

能天気なレ級とヲ級の言葉に再び機嫌を損ねて、ムスつとした顔のまま答えた。

「……っ、不戦の協定を結んでいるとはいえ所詮は公式なものではない口約束だし、それになによりつい最近まで敵同士だったあなた達といきなり仲良くできるわけないでしょ!？」

レ級「えー、でも僕赤城たちとは戦った事ないよ？」

ヲ級「ちよつと前までやってた競争はいつも大佐たち時間守ってたしね」

「直接的に敵対してなくても勢力的には未だに深海棲艦は海軍の、世界の敵でしょ!」

レ級「でも、僕たちの一派はもう暴れるのやめて大人しくしてるもん」

ル級「うん……おかげで楽……じゃなかった、のんびりできて嬉しい♪」

タ級「二人とも、赤城はそういう事言ってるんじゃないの……」

タ級は呆れ顔で新たに能天気組に加わったル級も含めて注意する。

「そうですねー！夕級さ……夕、夕……」

夕級「別に呼び捨てで構わないわよ？」

「う……た、夕級……サンが言ったとお……」ゴニヨゴニヨ

レ級「え？ なに？」

ヲ級「聞こえない」

「う……う……」プルプル

「赤城、もういいだろう」ポン

「な、長門さあん、でも……」グス

慣れ合いを受け入れきれぬ事が出来ず、言葉をなかなか紡ぐことができないでいた赤城に長門が苦笑しながら彼女の肩に手を置く。

レ級「ね、なんで赤城泣いてるのかな？」ヒソ

ヲ級「わ、分かんない。な、何かしたのかなわたし達……」ヒソ

夕級「取り敢えずあなた達はこっちで大人しくしてさい」グイッ

レ級「あつ、ちよ……むー、むうー！」

ヲ級「ひやわっ!?! んー、んんう!?!」

夕級「ル級、ちよつと頼んだわよ。あの事も伝えておいて」ズルズル

ル級「う、うん……」

そう言うとタ級は二人の口を両腕でそれぞれ塞いだまま、何処かへ連れて行った。

「それで、話というのは？」

「あ、はい。今日はちよつと……急に来て悪いとは思ってるんだけど……」チヲ

「……もう気にしなくていいです。どうぞ続けて」

自分を気にする目に、レ級達とは違ってル級が気遣いができる性格だと判断した赤城は、軽く溜息をつけて長門と同じく先を促した。

「は、はい。え、えつとね」

「ああ」

「私たちがまだ海軍とは正式に不戦協定結んでないけど、あくまで私たちの間だけの認識にはなるけど、大佐とは一度ちゃんと皆の前で約束がしたくて……」

「ほう」

ル級の提案に興味深そうな顔をする長門、対して赤城は僅かに警戒する雰囲気だ。

「……それで？」

「え、えつとだから……わたしたちの上司……姫に会ってくれないかなあって」

「姫……」

「えつ」

「……姫は一応大佐が承諾してくれたら会うつもりはあるみたいなの」

「待て、姫というと姫級の深海棲艦の事か？」

珍しく少し動揺して強張った顔で長門はル級に質問した。

「姫は……一応海軍の人たちからは鬼姫級に分けられてるって言ってた気がするけど……」

「鬼姫……！」

「え、それって……」

長門は今度は明らかに驚きの表情する。

赤城も信じられないといった顔だ。

「確認例が少なく公式のデータには詳細は記録されていないが、未確認要注意事項に警告を促す形で存在をほめかす程度だが載っている。鬼級や姫級を凌ぐ化け物だ」

「え、でもそれって大分昔に本部の中将が討伐したんじゃない……」

「一体じゃなかったただけだろう。まあそれから暫く海が穏やかになったのは、それだけ配下の連中に及ぼしていた影響力が大きかったという事だろうが」

「あ、あの、一応断っておきますけど、その姫と私たちの姫は別です。私たちの姫は生まれたのはそんなに昔じゃない筈だから……」

「ふむ」

「でも危険な存在には変わりないのよね。そんなのと大佐を安易に会わせるわけには……」

警戒と緊張を明確に表に出した赤城がここでル級の提案に異議を唱える。

そんな様子にル級は慌てた様子でこう言ってきた。

「あ、ちゃんと武装は解除します！　それでも確かに人間よりかは強いけど……な、長門さ……んたち総出なら抑える事はできると……思います。多分だけど……」

「……でもねえ」

「……確かに危険だ」

「っ、お願い姫を信じて！　姫はあなた達が危害さえ加える気がないなら彼女も何もしないからー」

「でも確約は？　保証はできないでしょう？」

「……」

「そ、それは……」

「保証する」

返答に困って俯くル級に背後から援護する声があった。

「む」

「夕級！」　パアッ

「あなた……」

「保証する。その証拠として私は私の命をあなた達に預ける」

「えっ」

「……」

「ちよつとタ級!？」

予想外の提案に赤城と長門とル級は三者三様の反応を示す。

だが三人ともタ級のその提案が彼女の覚悟の程を示すものである事は理解している様だった。

「これぐらいはしないと信じてもらえないでしょう?」

「でも、でもそんな事レ級は……!」

「勿論、内緒。いい?」

「あ……う……ん」コク

ル級は諭すような懇願するような、そんな目でタ級に見つめられ、やがて困った顔をしながらも小さく頷いた。

それを確認したタ級は満足そうに微笑んで、今度は赤城達の意味を確認する為に再び彼女たちの方を向く。

「どうかしら?」

「どうかしらって言われても、いきなり過ぎて……」

「……もし仮にお前たちが約束を破ってその代償として私たちが夕級を葬ることがあれば、姫はともかくレ級や他の仲間たちが黙っていないだろうな？」

長門が無表情で半ば確信のこもった声で夕級に訊く。

「……その時はル級が全力で止めるわ」

「ええ!? わ、私!？」

「何驚いているのよ? 私達四人の中でレ級の次に強いのはあなたじゃない」

「で、でもお……」

「大丈夫、私を、長門たちを信じなさい」

「えっ」

「ほほう?」

夕級の言葉に赤城は目を丸くして驚き、長門は面白そうにやりと笑った。

夕級は背後のそんな彼女達の顔を知ってか知らずか、夕級自身もまた微笑みながらル級を安心させるように言った。

「ね?」ニッ

「……信じていいの?」ジッ

ル級の心配そうな視線に赤城はしどろもどろする。

「え？ あ…………え？ ああ、いや…………ええ…………」

「ははは、赤城も面白いじゃないか。信じよう」

そんな赤城達の様子が可笑しくてついに堪え切れなくなって声高く笑いだした長門が赤城に言った。

「長門さん…………」

「ここまで言ってきたんだ、私たちとて相応の態度で示すべきだろう」

「…………はあ、分かりました」

「ホント!?」 パアツ

赤城の言葉にル級は心から嬉しそうな顔をする。

「ありがとう。信じて…………いいの、ね？」

夕級もル級ほどではないが、どこか安心した声で改めて念を押すように赤城に聞いた。

「大佐には私から伝えます。恐らくあの人の事だから了承するとは思いますが…………返事はまたあなた達が来た時にでも。もし了承なら、その時に改めて日取りをこちらから伝えるわ。それでいいですか？ 長門さん」

「ああ、異論ない」

「だそうです。そちらは？」

「文句なしよ。ね？　ル級」

「う、うん！」

「じゃあそろそろ……」

お開きにしたかったのだろう。

赤城が解散の合図を取ろうとした時、最後に夕級から衝撃の事実が告げられた。

「そうね、レ級達そろそろ連れてこないと食堂の食材がなくなるかも」

「え？」　「は？」

この言葉には赤城だけでなく長門も目を丸くした。

「夕級、レ級とヲ級何処に連れて行ったの？」

「食堂よ。元々ご飯を頂くつもりだったんでしょ？　連れて行ってる途中で自分から目

をキラキラさせて食堂に走って行ったわ」

「おい、あか……早いな」

長門が赤城に警告しようとした時には既に彼女がいた場所には姿がなかった。

「……っ!!」　ダッ

（鳳翔さんにお情けでご飯だけでも追加で貰っていたのに、あの二人の所為でそれがなくなるかもしれないなんて、私は絶対に……防ぐ!!）

「……騒がしくてすまん」

「いえ、何処にも似たような人がいるのね」

「いや、赤城とレ級は大分違うと思うぞ？ まあそれでも今あいつが必死なのは間違いないが」

「そ、そうなんだ……」

赤城が残していった気迫を感じたのだろう、ル級は少し怯えていた。

「なあ」

「うん？」

「飯、食って行くんだろう？」

「ふっ……そう、ね。せっかくだし私も頂いて行こうかしら」

「う、うん！ お腹空いた！」

「はは、じゃあ行こうか」

長門は、まるで気心のしれた友人をもてなすように夕級とル級を笑顔で食堂へと促した。

第45話 「改造3」

『大佐見てください！ 潮、改二になりました！』

『お、そうか。お前もついに改二か』

『そうなんです！ ねえ、どうですか？ 新しい潮は！』クルーリ

『うん……まあなんだ、龍驤が騒がなくてよかった』

自分の晴れ姿を見てもらいたくて目の前ではしゃぐ潮の姿に、提督は何故か何とも言えない表情で見つめながらぼつりとそんな事を言った。

『え？』

『いや、なんでもない。良い感じだぞ』ナデナデ

『あ……えへへ、ありがとうございます♪』

『……』ジーン

そんな提督と潮のやり取りを僅かに開いた扉の隙間から覗く一つの影があった。

『……まあ、アレなら別に……』

龍驤は扉から目を離すと小さな溜息を吐いた。

『あら龍驤、どうしたの？ そんなところで』

気付いたら矢矧が直ぐ近くにいた。

ここまで接近されて気付かなかったとは、どうやら様子見に集中し過ぎていたようだ。

『ヤハギン……』

龍驤はチラッと横目で見た。

だが、ほんの少し視野に入れただけのつもりだったのに龍驤の目に飛び込んできたのは……。

『ん？』 バインツ

『……っ』

程よく張って服を内側から押して自己主張している豊かな胸だった。

『え？ なに？』

『な、なんでもない！』

『そうは見えないけど……』

『大丈夫や。ちよーろーつと気になることがあっただけや』

『それ、大分気になってない？』

『……別に』 プイ

龍驤はなるべく自分の視界にアレが入らないように努めながら不機嫌そうに顔を横に振る。

矢矧は、そんな彼女を不思議に思いながらも気を遣った言葉を掛ける。

『……………？ まああまり思い詰めない方がいいわよ？ 一人で抱え込んで負担に潰される前に大佐や他の子に相談するのを勧めするわ』

『ふつ……………、寧ろ潰せる程のモノすらないんやけどな……………』

『え？』

『……………なんでもない』

『……………？』

「という事があつたの」

とところ変わって再び執務室。

矢矧は用事で提督を訪ねた際にその時に抱いた疑問を提督に律儀に相談していた。

「そうか、聞かなければよかつた」

「え」

「冗談だ」

「いや、その顔冗談に見えないんだけど……………」

「ま、どつちにしてもあいつの悩みに対して相談に乗れる奴は限られている。残念ながら矢矧、お前では無理なのは確かだが、そこはまあ気にするな。本当にどうしようもないからな」

「一体なんだっていうの……」

仲間が何か思い悩んでいるというのに提督はそれに対してかなり達観した様子だった。

矢矧はそれを疑問にこそ思ったが、それ以上に提督の言葉に確信が籠った何かを感じ、それ以上は追及する気にはならなかった。

「気にしても仕方のない事だ。取り敢えず龍驤を呼んできてくれ」
「分かったわ」

それからまた暫くして――

コンコン

『大佐、ウチヤ』

「入れ」

ガチャ

「呼んだ？」

「ああ、新境地の開拓の方はどうだ？」

「」

部屋に入るなり齒に衣を着せぬ革新を突く提督の言葉に龍驤は固まる。

「ん？」

「い、いきなり何を言いよるん!？」カア

「矢矧から聞いたぞ。お前、潮の改造後の姿を見て安心してたらしいな。何だかんだ言っつてまだ気になっているんだろ」トントン

提督はそう言っつて自分の胸を辺りを指で軽く叩く。

「う……」

「俺も仕組みは分からないが、改造を受けても変わらない奴だっているさ。それが偶々お前もそうだったというだけだ」

「……」

龍驤は俯いたまま答ええない。

提督はそんな彼女を眺めながら自分もまた何も言わず、ポケットから煙草を出して火を着けた。

シユボツ

「ふう……」

「大佐」

「ん？」

「でも、でもな？」

「ああ」

「ウチ思うんやけど、やつぱり艦娘ん中で一番ないのウチちゃう？」

提督は龍驤の質問に少し目を瞑って考えるような表情をしたが、直ぐに目を開いてこう言った。

「……いや、そう言われてもな。流石に全員の大きさ何て俺は分からないし元々そんなに意識もしていないしな」

「その言葉ホンマやと思いたいわ……」

「お前、本当に気にし過ぎだぞ。誰かに執拗に揶揄されているのならまだ考えようがあるが、傍から見てると自分で追い込んでいるだけだぞ？」

「せやけど……っ、はあ……」 ドヨーン

「……」 ポリポリ

（あかん、呆れられた!?) ビクッ

眉間に皺を寄せて何か悩むような顔をした提督を見て龍驤はとっさに自分の態度が彼を不快にさせたのではないかと焦る。

「あ、あの……う、ウチ……、ゴメしつこか……」

「龍驤」

「はい!」ビクン

「……」ポンポン

「え……? 膝?」

龍驤は軽く膝を叩いて自分を見る提督にどうという反応をしたらいいのか判断しかねている様子だ。

「ま……座れ」

「……っ、大佐!」ダッ

滅多にない提督自らの慰めに、龍驤は歓喜して即座に彼の元へと走った。

「……まあこういう事だ。とにかく俺は気にしていない」ナデナデ

「うん……」

龍驤は提督の膝の上で足をぶらつかせて彼の手の撫で心地を幸せそうに楽しんでいた。

「一人しかいない男の俺が言うんだ。これで少しは気楽になれ」

「はあ……大佐、ホンマに甘くなったなあ……」

「甘いと言われるとアレだな」

提督はちよつと複雑そうな顔で苦笑した。

「んじや柔らかくなつた？」

「そつちの方ががいいな」

「ふふっ♪」

「大佐」

「ん？」

「ウチも早く嫁さんにして大きくして欲しいわあ」

龍驤の言いたい事を察した提督は、一瞬考えるような表情をしてやがてこう言った。

「……意外にソレ根拠が薄いらしいぞ」

「えっ、そうなん？」

「女性ホルモンとかいろいろと納得そうな要素もあるが、根拠に欠ける点もあるみたいだ」

「そうなんや〜」

「ああ。前にも言わなかつたか？」

「んー、言われてみれば……？ まあええわ。なあ大佐、大佐は何が一番効くと思うん？」

「うん？　そう……だな……」

「……」　ジ―

経験からくる大人の案に期待しているのか、龍驤はジツと提督を見つめる。

「やっぱり身体に気を遣うのが一番なんじゃないか？」

「気を遣う？」

「ああ。しっかりと睡眠をとって、栄養もバランス良く摂るのは身体に良い影響を与える

筈だ」

「堅実やなあ」

期待とはやや違ったが、如何にも提督らしい答に龍驤はカラカラ笑う。

「しかしこれはこれで説得力があるだろう？」

「まあ確かに」

「即効性のあるのを知りたいのか？」

「あればね」

「あるのか？」

「どやろ？」

「俺は手術くらいしか思いつかん」

「それは嫌や」

龍驤は即答した。

それは逃げだ、そして自分の身体を性能向上の改造目的以外で提督以外の人間に弄られるのは想像できなかつた。

「ああ、俺もそこまでするのは行き過ぎだと思う」

「やっぱ高望みなんかなあ」

「不相応何て事はないだろうが、望んだところで直ぐ叶うものでもないしな。開き直るのが一番だ」

「えー」

あんまりと言え言えなくもない結論だった。

それでは結局いつもの自分と変わらないではないか。

「得意だろう?」

「ちよ、それどういう意味?」

自分の心を読まれたような気がして提督の言葉に龍驤は焦る。

だが、焦りつつも彼女は……。

「顔がニヤけてるぞ。笑うのを我慢してるんじゃないか?」

「ふ……っ、あははは。ホンマ大佐には適わんわあ」

龍驤は、降参したように手を上げながら、窓から覗く晴れた空によく響きそうな声で

笑つた。

第4 6話 「災難」

「休暇?」

『そう、ただの休暇じゃないわよ。帰国の許可までである一週間の連休。今度の作戦終わったらあなた、それを貰えるみたいよ』

ただの休暇でも珍しいのに帰国の許可までである連続した休暇など、提督にとっては本当に予想外の話だった。

「……」

『どうしたの?』

電話口で何か息をのんで考えている雰囲気を感じた彼女が提督に訊く。

「休暇の件は取り敢えず置いておくにしても、作戦の事を携帯で伝えるなんて君らしくないじゃないか」

そう、名実ともに優秀な軍人である彼女が軍の通信を使わずに、直接このような方法で自分に連絡を取って来た事が提督はどうも腑に落ちなかった。

だが彼女は、それを予測していたように特に気にもしていない声色でこう言った。

『別に公私混同はしてないわよ。休暇の件は上の人たちの特別な取り計らいなの』

「上の？ 親父たちか？」

『まあ、そんなとこ。だから公式の手段で伝えるのも気が引けるでしょ？』

「ふむ……」

『そういうワケなの。だからありがたく受け取りなさい』

「まあそういう理由なら、作戦が終わった時にありがたく頂戴しよう」

親父絡みなら十分に考えられる事だ。

特に何をしたわけでもないが、自分にこのような処遇を与するという事は何か考えあつての事だろう。

これは帰郷は必ずしなければならぬし、帰つた際は本部にも顔を出すべきだ、提督はそう考えて納得した。

『ええ、そうしなさい』

それに対して電話口の向こうにいる彼女は、どこか安心したような声でそう言った。

「しかし急だな。特に今は故郷に帰る用もないから、帰つたとしてもどう過ごしたらいいものか」

『なにー？ 作戦開始する前からもう完遂した気でいるわけ？ やるわねえ』

「ん？ はは、まあやる気があるのは良い事だろう？」

『ふふ、そうね』

「よし、作戦の件、休暇の件は分かった。作戦の詳細は近い内に通達があるんだろう？」

『ええ、翌朝までには来るわ』

「了解した。じゃあこれで……」

『あ、待って』

提督が話を切り上げようとした時彼女がそれを止める。

「うん？」

『休暇、取るつもりなのよね？』

先程とは打って変わってどことなく緊張しているような真剣な声だった。

「ん？ それはまあ、せつかくの厚意だしな」

『そう。なら……さ、あなたが休暇の間の何日か私の休みも被ってるの。帰郷するって事は私が居る所に来るって事でしょ？ だから都合がつけば久しぶりにちよつとデ……』

彼女が提督に自分の真の目的を告げようとした時、彼の近くで大きな声があった。

タイサアー！

『え？』

その声は電話口の向こうの彼女にも聞こえたらしく、久しぶりに二人きりで会話をしていた穏やかな雰囲気破る大きな声に驚いた声をあげた。

タイサアー!!

また聞こえた。

しかも今度は先程より明らかに近い距離だ。

どうやら自分を呼んでいるらしい。

提督は声の主と状況を確認するために一度、携帯を置いてその場を離れることとした。

「ん? 悪い、ちよつと待ってくれ」

『あ、ちよつと——』

彼女は彼女で何があつたのか確認しようとしたが間に合わず、代わりに提督が置いた携帯を通して少し声が遠いがこんなやりとりが聞こえた。

ドウシタ? トキツカ?

タイサー! リユウホウチャンガハダカデオフロカラ!

ナニ?

『え?』

彼女はまた驚いた。

裸?

リユウホウって、あの軽空母の龍鳳?

状況が掴めず混乱する彼女に少し焦った様子の提督が電話に再び出てこう告げてきた。

「少将、悪い。今日はこれで」

「あ、待って！ 少しだけd」

ピッ、ツッ、ツッ、ツッ……

呼び止めようとしたが駄目だった。

電話は一方的に切られ、彼女の耳には虚しくも不通を告げる音のみが響いていた。

「……」

「……」プルプル

「……っ」

彼女は呆然とした様子で暫く立っていたが、やがて小さく肩を震わせると口惜しそうな顔をして心の中に不満を漏らし始めた。

（もう！ なんなのよ！ 後ちよつとくらいいいじゃない！ せっかく私が中将たちに口添えをしてあいつの休み用意したつてのに、これじゃ私の休みをあいつに合わせた意味がないじゃない!!）

「……」（もう一度電話を……）

彼女が提督に再度電話を掛けようとした時、執務室に入つて来た武蔵が彼女に声を掛

けてきた。

「おい少将、そろそろ行かないと」

「待って、ちよつと電話して要件を済ますから」

「いや、今日は遅れるのはマズイだろ。何しろ作戦の成功を祈った総帥主催の晩餐会だ」
そうだった。

今日は新しく発令される作戦の成功を祈って、総帥自ら本部の提督たちの士気向上と忠勤に対する労いを兼ねて軽い晩餐会を開くのだった。

「……そう、ね」

彼女は何か落ち着き払って視線を落とすと携帯を持った手を下げた。

「何かあったのか?」

武蔵が彼女の異変に気づいて声を掛ける。

「……別に」ファイ

「ふーん」ニヤ（大佐と何かあったな）

「なに?」

「ん、いや?」

「……行くわよ」

「ああ」

(……あいつ、携帯で話してる時くらい私の事名前で呼んでくれたっていいのに……。そういうところも堅物なんだから、これは絶対に休暇に入ったら逃がさないわよ)

彼女の珍しい痴態を面白く思っただけで含み笑いをしている武蔵を尻目に、少将は今回の失敗の挽回を早くも心の中で誓うのだった。

——とところ変わって提督の鎮守府。

「お父さん！」

バンッ

パタパタ、ダキッ

恐らく入渠所からそのまま来たのだろう。

素っ裸で勢いよく執務室に入って来た龍鳳は大佐を見つめるや、そのまま彼に抱き付く。

提督はそんな彼女に少し呆れた顔をしてこう言った。

「龍鳳お前、軽空母になつたら一人で風呂に入るって言つたら」

「やっぱり嫌です！ 時々は一緒に入って下さい！」ギュー

少し前に潜水母艦から軽空母に生まれ変わっていた大鯨もとい龍鳳は、その際に提督に改造と共に自分の人間的な成長を約束し、その証に風呂は彼とは一緒に入らないと約

束していた。

龍鳳の提督に対する依存体質に困っていた彼にとって、その申し出はとてもありがたいものだった。

「取り敢えず風呂に戻るか服を着ろ」

「一緒に入る約束をしてくれたら戻りますよ！」

「いや、お前……」

「あ、龍鳳ちゃん発見！」バツ

「」

龍鳳を追って来たと思われる時津風が現れた。

提督は彼女に龍鳳を何とかする為に協力してもらおうと考えていたが、その考えは時津風の部屋に現れた際の姿を見た瞬間に霧散した。

「あ、大佐」

「なんでお前まで服を着てないんだ」

提督の言う通り時津風は龍鳳と同じく素っ裸だった。

しかもたちが悪い事に彼女も龍鳳と同じく、裸を見られることに対して羞恥心を感じていないようだった。

何故だ？ やっぱり見た目通り精神状態が幼子とそう変わらないからか？

提督は呆れ返った頭でそんな事を考えていた。

「んう？ あ、直ぐにお風呂に戻るから大丈夫だよ」

「……もういい。早く龍鳳を連れて行ってやれ」

「はい。さ、龍鳳ちゃんいこー」

「嫌っ！」

「いこー！」

「やつ！」

「頼むから執務室で裸で騒がないでくれ」

「約束してくれたら行きます！」

「約束？ なんの約束？」

龍鳳の言葉に興味を惹かれた時津風が彼女の手を握って引っ張っていた力を緩めて訊く。

「お父さんとお風呂に入るんです」

（あ、何か嫌な予感が）

提督は全身に寒気が走るのを感じた。

「大佐！ 時津風も一緒に入りたい！」

「だめだ」（やっぱりか）

提督は当然却下した。

「なんで!？」

「俺は子供と風呂に入る趣味はない」

「親子なら問題ないです!」

「お前も面白い年だろ」

「生まれてから経っている時間はそんなに長くないです!」

「それを言うなら時津風もだよ!」

(埒が明かん)

子供の屁理屈ほど論すのに苦勞する問題はない。

提督はウンザリした顔でどう收拾を着けたらいいものか考えていた。

そんな時――

「……何をやってるんだ」

凜とした大人の声があった。

三人が振り向くと開きっぱなしとなっていた扉の向こうから那智が険しい顔で提督達を見ていた。

「あ、那智さん」

「那智おねーちゃん」

「……」

「大佐……」

那智の冷たい視線に、既に言い訳する気も失せる程にこの混沌した状況に精神的に打ちのめされていた提督は、それでも何とか言葉を絞り出してこう言った。

「信じろとは言わん。ただ、何とかしてくれ」

言い訳もしないで自分に助けを求めてきた提督に何か感じるものがあつたのだろう。

那智は黙って彼の視線と言葉を受けると龍鳳と時津風に向き直って言った。

「……ほら、二人とも風呂に戻れ」

「えー」

「嫌ですー!」

「大佐はそんな風に駄々をこねる子が一番嫌いなんだぞ?」

「「え」」

『嫌い』という言葉に龍鳳と時津風は固まる。

那智はその機を逃さず更にこう続けた。

「大佐は人前では滅多にそういう事は言わないが、この人も人間だ。自分の主張ばかりして人の話には聞く耳を持たない、そんな我儘な子を疎ましく思うのは普通じゃないか

「？」

那智の追撃に今度は二人は沈鬱な表情で下を向いて黙った。

子供を躡けている親のように見えなくもないが、残念ながらその怒られている二人が幼い外見と言つても小学校高学年以上の身体でしかも全裸、加えてすぐ近くに成人の男性（提督）がいるという状況の所為で些かしまらない雰囲気となつていた。

「……………」

「お前達は方法が間違つていただけだ。私は今は大佐の言う事をちゃんと聞いて改めてきちんとした姿勢でお願いした方がいいと思うぞ？」

「……………」

「…………龍鳳ちゃん行こ」

時津風がポツリと言つた。

「…………トキツちゃん」

「わたし大佐に嫌われたくないもん。だからここは大佐の言う事を聞いて良い子にしよう」

「…………分かりました。大佐、後でまたお願いに来てもいいですか？」

時津風の言葉に反省し、思い直した龍鳳は、すっかり落ち着いた真面目な顔に戻つていた。

「ああ。今度はちゃんとした格好でな」

「はい！」

「りよーかーい！」

「よし、良い子だ二人とも。じゃあ大佐に挨拶して早く風呂に行け」

「はい！ 大佐失礼しました」

「大佐、ばいばーい」

バタン

こうして事態是那智の活躍によってなんとか収拾した。

だが、部屋に残った二人に立ち込める雰囲気は何処か重かった。

提督と那智は暫く何も喋らずお互い無言だった。

「……」

「……」

「那智、助かった。礼を言う」

沈黙に耐えかねたのか提督から切り出す。

「なに、このくらい」

「いや、本当にたすか……那智、なんだその目は？」

「ん？ いや……もしかしたら邪魔をしてしまったのか、とな」

「頼むからそんな目で見るな。徐々に離れるな」

態度こそ普段通りだが、間合いを取るようにじりじりと自分から距離を取る那智を提督は悲痛な思いで止める。

「あ、ああ……」ジリジリ

（一体どうしたら）

「証拠」

提督が新たな局面を乗り切る策を考えていた時だった、那智の方から彼に提案をしてきた。

「ん？」

「大佐が変質者でない証拠を提示してもらいたい」

「変質……どうすればいい？」

那智の言葉に内心ショックを受けるも提督は何とか平静を装って条件の詳細を求めた。

すると那智は少し頬を染めてもじもじしながらこう言った。

「わ、私を女として扱ってくれ」

「は？」

予想だにしなかった言葉に抵当は目を丸くする。

「な、なんだその顔は？」

「いや、俺はお前の事を女としか思ったことがないんだが……。今更女として扱えと言われてもな」

どこか見当違いな提督の答に今度は那智が目を丸くする。

「え？」

「ん？」

「……」

「……」

二人はお互いの言葉に混乱し、真意を探る為に暫し見つめ合っていたが、やがて那智の方から何かを堪え切れなくなったように笑い始めた。

「……ふつ、はははは。やっぱり大佐は大佐だったな。申し訳ない、今の言葉は忘れてくれ」

「……？」

提督はただただ那智の言葉の意味が理解できず顔をしかめるだけだった。

「そんな顔をしないでくれ。全部私の誤解だと認める」

「ならいいんだが」

「腑に落ちないという顔だな。ならちよつと大佐のお酌でもさせてもらおうか。それで私はいいい」

「酌をしたいのか？ 普通逆じゃないのか？」

「私はそれでいいんだ。大佐、私を女として見てくれているのは嬉しいが、まだ私個人の事は解っていないようだな」

「……む」

「ほら、いい加減そんな顔はよしてくれ。今夜は飲もう」

「ああ、分かった。お前の話、いろいろ聞かせてもらおう」

こうして意外な展開で二人の晩酌が始まった。

きつかけこそ良かったとは言えないが、それでも二人が交わした酒は話に花が咲いたこともあり美味しかったという。

第47話 「頼り」

「それではこれより第二次渾作戦のおおまかな概要について説明を行う」

「総員、傾注」

バツ!!

秘書艦の矢矧の合図で全員が姿勢を正して提督の方を向く。

皆の視線が自分に十分に集まっているのを確認して、提督は軽く咳払いをして説明を始めた。

「本作戦は前回の第二次A.L.M.I作戦と同じように第一、第二艦隊を合わせた連合艦隊で臨む。以前との違いは今回は道中、敵主力との会戦時に支援攻撃がある点だ」

「それは前の作戦でもありましたか?」

その時の作戦にも参加していた神通が早くも疑問点に気付き、提督に質問をした。

「あの時は半分中佐に手伝ってもらっていたからな。今回は全て自力で行う。つまり本当の意味で総力戦だ」

「なるほど」

「作戦は三段階に分けて行う。まず第一段階は水雷戦隊を中心に編成した連合艦隊で敵

の前哨部隊を叩き、後半の第二、第三段階で戦艦を中心にした重火力編成の連合艦隊で主力を含め残りの敵勢力を殲滅する」

「第一段階は誰が行くの?」

伊勢が早速艦隊の編成を聞いてきた。

彼女の目はやる気に満ち、久しぶりの出撃に気分が高揚している様だった。

「龍田、大淀、長月、菊月、白雪、初雪、伊勢、日向、那智、三隈、木曾、名取だ」

「ああ、久しぶりに私たちの出番? やったあ♪」

艦隊のメンバーに自分が入っていた事を心から嬉しそうに、龍田は薄く笑う。

だがその笑みにはどこなく酷薄な雰囲気がい、いつも以上に凄味があった。

「第二、第三段階は?」

那智が次の出撃メンバーの構成を聞く。

彼女も何となく自分が選ばれる気がしているのだろう、その顔はいつも以上に凛々しく意気軒昂な様子だった。

「金剛、武蔵、長門、加賀、利根、筑摩、大井、神通、響、時雨、夕立、ジェーンで行つてもらう」

「ほう……? 大和型の本格的な実戦参加か。ふっ……昂ぶるな♪」

武蔵が初めての实戦、それも本格的な作戦への参加に嬉しそうな声をあげる。

まだ艦装を装備していないというのに、彼女の手は早くもまるでそこに自分の砲があるかのように何も無い中空を撫でる仕草をした。

「赤城、飛龍、龍驤、隼鷹、比叡、霧島、扶桑、山城、早霜、春雨、天津風、時津風にはそれぞれ艦隊の支援をしてもらう」

「加賀さんに続いて私も久しぶりの実戦ですね。ふふ、腕が鳴りますよ」
残念ながら加賀とは同じ艦隊ではないが、赤城もまた久しぶりの出撃で嬉しそうだった。

これは演習に参加できなかった時も自己鍛錬に励んでいた成果を見せるときね、赤城は心の中で熱く闘志を燃やす。

「以上のメンバーで本作戦に臨む次第だ。何か質問は？」
「作戦の遂行時間は？」

既に艦隊のメンバーに選ばれていた時雨が作戦にかける時間を聞いてきた。

「一日だ」

「え？」

提督の返答に目を丸くして驚く顔をする比叡。

流石に一日とは思っていなかったらしく、隣にいた姉の金剛も比叡と同じく驚いた顔をしていた。

「今回の作戦に向けて多少ではあるが資材の備蓄に努めてきた。それを今回は全て使い潰すつもりで臨んで欲しい」

「だから一日？」

夕立がやる気に満ちた顔で提督に確認する。

資材使いたい放題で支援もある進軍なんてまるで祭りの様だ。

こんな艦娘冥利に尽きる事はない。

夕立は燃えに燃えまくっていた。

「そうだ。勿論それ以上かかる事も想定している。が、早く終わらせる事ができればそれに越した事はないしな」

「大佐、今回はやる気ありますね」

扶桑が微笑みながら提督に話しかける。

傍らにいた山城も頼もしく笑みを浮かべており、今回の作戦にかける意気込みが窺えた。

「おいおい、俺は仕事に対しては常に真摯な態度で臨んでいるつもりだ。ただ今回は久しぶりに本当の意味で全力だからな。多少気分が高揚しているのは否定しない」

「あはは、これは失礼しました」

飛龍が提督の皮肉っぽい答に面白そうに笑う。

「ふっ……いや構わない。憎まれ口を叩く余裕があるのは良い事だ」

「はぁ……」

「長月、大丈夫か？」

「ん……何せ私たち駆逐艦の腕の見せ所だからな。少しは緊張する」

「お前たちは基本遠征にばかり行かせていたからな。こういう時に緊張するのは仕方ないだろう。長月、行けそうか？」

「問題ない。伊達に古参のつもりはないからな。期待してくれ」ニツ

「そうか。頼んだぞ」

「ん」

長月は提督の言葉に頼もしい笑顔で親指を立てて見せた。

ギユツ

「んっ」

服を引っ張られる感覚に提督が後ろを向くと、何か不満そうな顔で彼の服の裾を掴んでいる菊月がいた。

「大佐、長月に声を掛けておいて私には掛けてくれないのか？」ムスツ

「いや、別にそんなつもりは……。ただ全員に声を掛けているとそれはそれで時間が掛かるしな」

「……そうか」 シュン

「……」

ポン

「！」

あからさまに落ち込んだ表情をする菊月を見て提督は彼女の頭に手を置いた。

作戦開始前に士気を下げるわけにはいかない。

それも、落ち込んでいるのが自分を慕う部下なら尚の事だ。

「頑張れ」

「あ、ああ！ 任せておけ！」

提督に励まされて菊月は先程までの落ち込んだ顔はどこへやら、一転して輝くような笑顔を見せた。

「む、大佐。菊月の頭は撫でて私はないのか？」

菊月が頭を撫でられるのを見て早速長月も口を挟んできた。

「いや、それを言うなら俺だって」

何故か天龍もその流れに乗る、明らかに条件反射的な行動だった。

「まあ天龍ちゃんかわいい♪」

「なあ!？」 カア

「大佐、吾輩も当たを撫でてもらいたいぞ！ 所望する！」

顔を真っ赤にした天龍を押ししのけ利根も撫でてもらう権利を主張してきた。

「まさか私を撫でないとは言わないわですよね。た・い・さ？」 ニコオ

大井も明らかに不機嫌なような笑顔で提督に迫って来る。

ギャーギャー、ワーワー

「……」

緊張感が満ちたブリーフィングだったはずなのに、いつの間か提督に撫でてもらう権利の争奪戦となってしまうたその有り様を提督は呆れた顔をして眺めていた。

そんな彼に長門が面白そうに笑いながら話しかける。

「ふっ、頼もしいじゃないか。一応それなりの規模の作戦だということにこうもリラックスできるとは」

「そうだな。そしてお前も何気に腕に胸を押し付けてアピールしてこなければ、そのセリフも様になっていたんだがな」

「ふふ、私は強かなんだ」 ニッ

（俺はこいつらの中で一番油断ならないのはお前だと思っているぞ……）

「分かった。全員個別に激励してやるから並べ。ただしそんなに時間は掛けないから

な

ヤッター♪

提督の提案に艦娘たちは争いを直ぐにやめ、一斉に歓喜の声を上げた。

第48話 「自尊心」

「で、お前達は何をしているんだ？」

「べ、べつつにー？」

「……」 プイ

提督が振り向いた先には部屋に設えたソファーに困った顔で座っている足柄と、何故か不機嫌そうな顔をして彼女に宥められる様に頭を撫でられている大和がいた。

「足柄、大和、お前達は待機中だろ？ なんでここにしているんだ？」

「部屋にいるのも退屈だったのよ」

「……」 コクコク

「だからってここに来ることはないだろう」

「執務の手伝いくらいするわよ？」

「……」 プイ

「それ、今は私の仕事なので」

足柄の提案に自分の立場を脅かされると思ったのか、矢矧がそれを妨げるように目の前に立つ。

「まあそれもそうだが、それより大和はどうしたんだ？ さっきから」

提督は先程から足柄の反応に無言で相槌ばかりうつっている大和の様子が気になるよ
うだ。

彼女はふくれ面をして時折何かを訴えるような目でこちらを見ている。

「あー……それがね」

「……」　　「フイ」

「大和さん、そろそろいいんじゃない？」　　「コシヨ」

「……」　　「フルフル」

足柄が声を潜めて大和の機嫌を窺うように聞いたが、大和は子供の様に首を振るだけ
だった。

「大和？」

「どうしたの？　大和さん」

「えつとね……大和さん？」

「……」　　「コク」

恐らく自分が大和の代弁をする許可を確認したのだろう、足柄の言葉に大和は小さく
頷いた。

「……なんだ？」　　（大方、足柄は大和を慮って残った感じか）

「さあ……」

提督は提督で不可解な大和の様子に戸惑うばかりの様だ。

傍らにいた矢矧も意見を求める提督の視線に困惑した顔をするしかなかった。

「大和さん今度の作戦に出れなくてちよつと……」

「ん？ 拗ねてるのか？」

「……っ」

「あ」（うわ、直球）

「え？」（大和さんの様子が……）

「ん？」

「…………っ」ジワッ

提督に歯に衣を着せぬ指摘を受けて、大和は自分の行為に対する情けなさから悔し涙を滲ませた。

「……ふう、武蔵が出撃しているから余計に悔しいんだろう」

「……ふ……う……つく……」ポロポロ

「あ、だ、大丈夫ですか？」アセアセ

「……」（『大和型の誇』というのも時には重荷になるものだな）

「大佐……」

「分かっている」

泣き出した大和がいたたまれなくなつた矢矧が提督に事態の改善を求めてきた。

提督も流石に放置する気はなかつたので、彼女の求めに応じて大和になるべく柔らかい声で話し掛けた。

「大和」

「……っ」ピクツ

「お前の気持ちは解らないでもない。武蔵も最初はそうだつたからな」

「……」

「最もあいつの場合はお前と違って、出撃していない間は暇潰しと称して任務に関係のない事をして遊ぶこともあつたから、真面目な分お前の方がマシとも言えるが」

「……」

「大和、お前ももつと肩の力を抜けばいいと俺は思う。出撃できなかつたり練度が低くてもお前は大和だ。強力な、この基地でも指折りの頼りになる存在なのは間違いないだぞ?」

「ぐす……大佐あ……」

大和はようやくやくそこで、子供のようになしくりあげながら提督を見上げ口をきき始めた。

「悪いな。お前の自信、誇り、脆さを把握できていなかったのは俺の落ち度だ。だから今回は俺の謝罪で機嫌を直してくれないか」

「そ、そんな！　悪いのは私です！　戦艦なのに大人げない事しちゃって……！」

「ま、そういうのを含めてお前たちを管理するのが提督だ、指揮官というものだ。……ん？」

「大佐？」

自分を慰めている提督が急に何かを考えるような顔をしたので、大和は気になって声を掛けた。

（私の態度が悪かったから……）

やがて、話しかけてもまだ上の空な様子の提督を見て大和は、口をつぐんでしまった原因が自分にあるかもしれないと考え焦る。

だが、当の提督は実はそんな事は関係なく、こんな事を考えていた。

（戦艦なのに……か）

「ねえ、どうしたの？」

「大佐？」

足柄と矢矧も異変に気づき、提督に声を掛けるが依然として彼は黙ったままだった。

提督の頭の中には大和のその言葉に引つかかる戦艦の艦娘が二人ほどいた。

(金剛と比叡……：そういうえばどうしてあの二人に限っては、なんかこう子供っぽいとい
うか、アレなんだろうな。やはり他の奴らと違って4姉妹と数が多いから性格にも差が
……)

「大佐！」

「……ん」

足柄の大きな声に提督は我に返った。

「大佐どうかされたのですか？」

「体調が悪いなら指示さえしてくれば横になつてもいいのよ？」

「ん？ ああ、いや悪い。ちよつと考え事をな」

「そうですか……あの、私の無礼の事でしたら改めてお詫びを……」

提督の言葉に安心した大和は、再び居住まいを正し彼に詫びをいれようとする。

だが提督はそれをバツの悪そうな顔で軽く笑いながら止めた。

「いや、そうじゃない。ああ、このくらいあいづらのおてんばと比べたらなに、可愛いも
のだ」

「え？」

「あいづら？」

「おてんば？」

不意を突く意外な提督の返答に大和、矢矧、足柄は疑問の声をあげる。

「気にするな。おてんばなのもいいが、お前達はお前達であいつらと比べて手が掛からない分、それはそれで可愛いという事だ」

「そ、そんな可愛いなんて……♪」

「可愛い……。ね、もう一度言ってくれるかしら？ できれば今度は『矢矧』って明確に

私に向けて」キラキラ

「なんか気になるのよね……。誰と比較したの？ でも私ももう一度言つて欲しいかしら」

一気に和やかな雰囲気になったと思いきや、今度は自分に甘え始めるといふ切り替えの早さを見せる大和達に、提督は呆気にとられた顔をして溜息を着きながらも、最後は苦笑してこう言うのだった。

「作戦中だぞ。元気なのは良いが、そういうのは後だ」

第49話 「甲斐」

「大佐！ 作戦、無事本日をもって全てを完了したぞ！」バンッ

「武蔵……まあ今日はノックなしは見逃してやるか」

「ああ、見逃せ！ それとな、大佐……分かってるだろう？」ジッ

「ん？ ああ、そうかお前」

何かを待ち焦がれたような顔で期待が籠った視線を向ける武蔵に、提督は彼女の胸の裡を悟る。

「そうだ。だから、な？ くれるのだろうか？」

「それでそんな勇み足でここへ来たのか」

「ああ、楽しみだったからな。だから早く、な？」

「そうがつつくな。ちゃんと用意はある」

「うむ、そうでなくては！ あ、畏まらなくていいぞ。投げてくれ」

武蔵はそう言うのと両手を胸の前に出してちやうどキャッチボールで相手の投げるボールを待つ姿勢を取る。

「おい、流石に投げてよこすのは……」

「私は構わない。これはこれで親しい仲というか、私らしい感じがするだろう?」

「お前は……分かった。ほら」ピン

提督は呆れた顔をしながらも苦笑すると、武蔵に向って何か小さな物を指で弾いてよこした。

「ん」パシッ

武蔵はそれを流石の反射神経で難なくキャッチする。

彼女が捕まえたその手に握られていたのは、指輪だった。

「ああ、これだ……」

恍惚とした目で手にした指輪を見上げる武蔵。

「武蔵、ご苦労だったな」

「なんの。今までの苦労、たった今これを貰った瞬間に吹き飛んださ」

「そうか、それはお前にあげた甲斐があったというもんだ」

「ふふ、私も頑張った甲斐があった♪ な、嵌めていいか?」

「指を与えておいて嵌めるなどは流石に言えない。それはもうお前の物だ。好きにしろ」

「うむ」スッ

武蔵は提督の承諾を確認してまるで至宝を扱うかのような所作で、ゆっくりとその瞬

間を味わうように片手の薬指へと嵌めた。

「……」

「……」

武蔵は指を嵌めた後暫く、感無量と言った様子で目を閉じていた。

提督もそんな武蔵の様子を若干こそばゆく思いながらも、暖かい目で見守る。

「……これで」

「ん？」

「これで私は、もう身も心も余すことなく大佐のものだな」

「所有物のような言い方は抵抗を感じるな」

「いいんだ。私が『大佐のもの』になったという実感が何よりも大切なんだ」

「その理屈でいくと俺はお前のものになるな」

「いや、それはない。私はあなたに仕える側だ。だからその逆になるような事は決して

ない」

「……」

「こう言つてはなんだが、私はこの立場が凄く心地よく感じるんだ。凄くあなたに独占されている感じがする。これが絆なんだな……」

「なんか言葉の端々に背徳感を感じるんだが」

「いつその事首輪をつけても構わないぞ？」

「俺にそういう趣味はない」

「そうか」

「あからさまに残念そうな顔をするなよ」

「いや、もう嬉し過ぎて大佐にならどんな事をでもされたくてな」

「暴走し過ぎだ。他の奴らが聞いたらまた面倒な事になりそうだから少しは遠慮しろ」

「ならん！ 今この時は止められない。この瞬間は今しかないんだ。だから楽しむ事しか考えられない」

「……程ほどにな」

提督はついに根負けして武蔵の細やかな暴走を認める。

「恩に切るぞ。な、キスしてくれ」

「いきなりだな。だが駄目だ。まだ仕事中的いうのもあるし、なにより今のお前とそれをしたらそれ以上の行為に及ばれそうな気がするからな」

「もう直ぐ残りの連中が来るかもしれないというのにそんな事はしないさ。だから、な？ お願いだ大佐」ズイ

ガシッ

「……がっちり人の頭をロックしておいてよく言う」

「逃がしたくないからな」ジツ

「……」

「……」

「……分かった。一回だ」

「大佐……！」

チユ

「……なるほど。理由は分かりました」

「分かったなら、明らかに嫉妬で震えているその手で矢を番えるのをやめろよ」

提督と武蔵の前には、見計らったようなタイミングで見事に提督と武蔵の逢引の場を目の当たりにして、表情こそいつも通りの鉄面皮だが目には明確な不満の色を湛えた加賀が仁王立ちでで弓を構えんとしていた。

「……すいません。ちよつと頭に……血が上っているもので」

（血が上っている割には滑らかな動きだな）

「ふふん、嫉妬か」

「おい、武蔵」

「あなた、今の立場を解っているのかしら？」　ギリ

「ああ、ようやくお前と同じ立場になったぞ」

「……」　キツ

「……」　フフン

「……ふう、分かりました。もういいです」

「なんだ、許してくれるのか？」

「他の人の大佐への愛を許さない程私は狭量ではないつもりなので」

「そうか。やっぱり加賀だな。話がわか——」

「ですが、誰よりも大佐を愛しているのは私ですけどね。これは覆りようのない普遍不動の事実です」

「……ああ？」

加賀の言葉に武蔵は暖かい笑顔を途中でやめ、愛想笑いへと移行した笑顔で威圧を籠めた声を出した。

「なにか？」

加賀も負けじと武蔵の威圧などものともしないと云った風の冷やかな目で見つめ返す。

「いやいや、なにか今古株ぶった空母殿があまりにも稚拙な理論を展開した気がしてな

「？」

「おや、あなたにはさつき完璧な論理で構成された理屈が解らなかつたのですか。これはしたり、どちらが幼稚なのかしら、ね？」

（どっちも論理の『ろ』の字もない感情論だろ）

「大佐、なにか？」

「ん、なんだ？ 大佐」

「いや、なんでも。というか、俺は何も言っていないんだが」

「……武蔵さん、ちよつとそこで話しましょうか」

「ん？ トイレか？ 格納庫裏か？ 何処でも私は構わないぞ」

「いい覚悟です。ではこちらに……」

「臨むところだ」

「あ、あのお……大佐？」

二人が出ていった後、加賀に次いで部屋に入っていた筑摩が、先程までの焼けるような緊張感に当てられて戸惑った様子で提督に声を掛けてきた。

「筑摩、結果報告を頼む。あと、矢矧を呼んできてくれ。喉が渴いた茶を飲みたい」

「あ、はい」

提督のいつも通りの様子に安心した筑摩は、パタパタと矢矧を呼びに行った。

第50話 「ようこそ」

「能代です。よろしくお願ひします！」

「朝雲よ。よろしくね！」

「野分です。よろしくお願ひします」

「浦風じゃ、よろしゅーの！」

「初めまして、秋月です！」

「プリンツ・オイゲンです。よろしくお願ひしますね！」

「……」

提督は、新たに発見され部下に加わることになった艦娘達を眺めながらもその口からは歓迎の言葉が出る事はなかった。

彼の呆然とした胸中をよぎった考えはただ一つ。

（また増えた……しかも多い）

「あ、あの大佐……？」

黙ったまま中々喋らない提督が心配になって矢矧が声を掛ける。

「ん、ああ悪い。ちよつと新入りの数が多かったから驚いていただけだ」

「ああ、確かに結構揃った数ですよね」

(そうだよな。多いよな……)

浦風「あのー、うちら何かした？」

提督が人数だけに驚いていないことを何となく悟ったのだろう、新メンバーの一人、浦風が申し訳なさそうな顔で彼に聞いてきた。

秋月・野分・能代・pri「え？」

浦風の言葉に秋月達が驚いた顔をする。

だがそんな彼女達に対して朝雲は、浦風と同じく提督の心の機微に気付いたようで、彼女の意見に同意する様にこんな事を言った。

朝雲「あ、やつぱり浦風もそう思った？ なーんか提督さん、私達を見る目がそんな感じじゃなかったよね」

「え？ 大佐？」

二人の意見を受けて矢矧も提督に様子を窺うような目で見た。

「……」

提督はそんな彼女達の問いかけに渋い顔をしていたが、やがて軽く息を吐くと観念したようにこう言った。

「分かった正直に言う。なんだ、ほら……また女性が増えたな、そう思ったただけだ」

浦風「そのの何がいけんの？」

「ああ」

そこで矢矧がようやく納得したといった顔で声をあげた。

pri「え？ なに？ どういう事です？」

野分「矢矧さん？」

秋月・能代「？」

首を傾げるプリンツ達に矢矧はちよつと困ったような顔で苦笑しながら説明をした。

「大佐、つまり提督はね、女ばかりに囲まれたこの環境にまだ違和感を感じているのよ」

朝雲「違和感？」

「そう。艦娘の提督である以上それは必然的な事なんだけど、この人はその……真面目

だから……。ね？ そういう事でしょう？ 大佐」

「ま……概ね矢矧の言う通りだ。こう一氣に増え所為で不甲斐ない事に動揺してしまっ

たんだ」

秋月「なるほど……あの、それで提督の事を階級で呼ぶのは？」

「それは単なる俺の要望だ。ここの基地の者は皆俺のことをそう呼ぶから、お前達も同

じように呼んでもらえると仲間としても馴染み易くなるんじゃないかとな」

朝雲「へえ。ん、いいよ！ て……大佐がそう望むのならわたしは呼んであげる！」

野分「私も異論はありません。寧ろそっちの方が好ましいかも」

能代「わたしもりよーかい。改めてよろしくね、大佐！」

秋月「そういう事なら。私も了解しました、大佐」

浦風「うちもじゃ！ 仲良うしてね！」

pri「……」

皆が口々に同意する中、プリンツだけは発言をせず黙考して提督をジッと見ていた。

「プリンツさん、どうかしたの？」

pri「え？ あ……あはは」

秋月「プリンツさん？」

pri「えつとね、ちよつと考えてたんだけど、もしここでわたしが提督の事をそう

呼ばずに違う呼び方をしたら、この基地での私の存在ってどうなるのかあって」

野分「自分だけ違う呼び方……？」

プリンツの意外な発言に野分は考えるような表情をする。

pri「うん。まあわたしにはビスマルク姉さんがいるから、それをやつちやうと浮

気……になつちやうのかな？ えへへ」テレ

朝雲「いや、流石に呼び方が一人だけ違うだけで新参者のわたし達の立場がいきなり

変わることはないんじゃないかな」

秋月「同意です。それに私はそんな凶々しい真似はしたくないですね」

浦風「凶々しいつちゆう言葉が気になるけど、うちもそういうのは正々堂々したいね」
野分（ん……やっぱりそうよね。いけないわね、私つたらなにを）カア

能代「二人とも積極的なのね。まあ……私も……あれ？ 矢矧？」

「……」

能代が矢矧の方を見ると、彼女は野分と同じく何か真剣な顔で考えるような表情をしていた。

「矢矧？ どうした？」

「えっ、ああえっと……な、なんでもないの。ごめんなさい」アセアセ

能代（あ、もしかして矢矧……）

「そうか？ まあ他に報告があれば後で聞こう。というわけで皆、改めて我が基地へようこそ。これからの事についていろいろ説明もあるが……取り敢えず交流の時間だったな？ 矢矧」

「はい。皆には……そうですね。二人一組、3グループに分かれてもらって少し時間を掛けて大佐と交流してもらいます」

能代「じゃあ駆逐艦の子は駆逐艦同士で組んでもらって、わたしはプリンツさんと組

むといのはどう?」

p r i 「いいよ!」

野分 「異議なしです」

朝雲 「じゃ、わたしは野分と」

秋月 「なら私は……」

浦風 「うちとじゃね」

「決まったか? なら一度ここで解散とする」

「一同、気をつけ」

バツ

「よし、解散」

第51話 「交流⑤」

コンコン

「朝雲です！」

「野分です。参りました」

『入れ』

ガチャ

「失礼します」

「お邪魔します」

「ん、来たな。ま、楽にしろ」コト

提督はそう言つて二人の前に紅茶と菓子を出した。

「わ、お菓子。もしかして大佐が？」

「まあな」

「……いいのですか？」

「何を遠慮しているんだ。先ずはこれは親睦を深めるのが目的なんだぞ？ 遠慮するな」

「そうですか、なら……」

「ありがとう！ いったきまーす♪」

パクッ

「美味しいー♪」

「……おいし」

「そうか、良かった。茶も飲め。金剛の影響で紅茶だが、その菓子には合っていると思う」

「そうなの？ どれどれー？」

「頂きます……」

ズズ……

「んっ、いいわね。確かに合ってるわ」

「……は……ふ……」

「野分？ どうした？ お前には合わなかったか？」

「あ、いえそんなことは。ただこのお菓子といいお茶といい、美味しい上に待遇が良すぎて心地が……。すいませんちよつと上の空になっていました」

「はは、そう畏まらなくていい。この場では楽にしてくれて構わない」

（朝潮や不知火と同じ真面目なタイプだな。まだ着任したばかりだから若干固くなって

いる感じか)

「そうだよ野分！ 大佐凄くいい人じゃない！ ここは厚意に甘えるのも礼つてやつよ」

(こいつは秋雲と陽炎を足した感じか。賑やかで場の雰囲気をつ張る元気な奴だ)

「そうだな。ま、朝雲ほど遠慮がないのも時には考え物だが、ここはこいつの言う通り寛いでくれ」

「ちよつと、大佐それつてないんじゃない!?」

「やかましい。俺はもうお前には遠慮しないと決めたんだ」

「ええつ、何それー」

「食べながら喋るんじゃない。ほら、口にカスが」

「……っ！」 バツ

「これを使え」 スツ

提督はそう言つてポケットからハンカチを取り出すと朝雲に差し出した。

「まだ一度も使つていないから綺麗だ。ほら」

「……」 チラ

朝雲はそのハンカチを前にして手で口を押えながら恥ずかしさで赤くなつた顔で、提督に本当にそれを借りていいのかと目で訊いてきた。

「遠慮するなど言つたら？ いいから、ほら」

「……………」ゴシゴシ

「大佐、優しいんですね」

そんな様子を横で見えていたお蔭か、野分もすっかりリラックスした様子で柔らかく笑い掛ける。

「甘い、の間違いじゃないか？」

「いえ、これは大佐の優しさです。私はそう思います。だから居心地が良い……」

「そうか。まあ少しは気に入ってもらえたようなら何よりだ」

「はい。私は今とても楽しんでます」ニコ

「んっ、ありがと！ 大佐、それは私もよ！ こんなに良くしてもらえるなんて思つてもみなかったわ」

「あまり逆上せ上るなよ？ いざ演習や出撃の時になつて腑抜けになつてもらつては困るからな」

「それは大丈夫よ。これでも艦娘だもの。良い提督、良い上司には相応の活躍で応えてみせるわ！」

「同じく、私も大佐の事が気に入り……失礼しました。その……こ、好ましい方だと思えました。だから、私も朝雲と同じくあなたの期待には全力で応えようと思えます」

二人の頼もしくも初々しい反応に、提督も久しぶりに新しい風の様を受けた時の様な心地良さを感じ、笑顔で応える。

「そうか。その言葉しつかりと胸に刻ませてもらう。朝雲、野分、これで何度目かになるが、よろしくな」

「はい、宜しくお願ひします」

「こちらこそ！」

「ふむ、それでは後は二人で寛ぐといい。俺は次の奴らが来るまで執務でもしていよう」
「えー、大佐もいてよ」

「朝雲、大佐のお邪魔をしてはダメよ」

「う……で、でも一応これ親睦会みたいなものでしょ？ だからできたなら大佐にも、さ」

「大佐、気にしないで下さい。二人でも会話は楽しめます」

「……いや、偶には俺もゆつくりさせてもらおう」ドカッ

提督はそう言つて再び朝雲達の前のソファーに座り直すと、残っていた茶菓子を摘まむと口に含んだ。

「ん……うん、美味しいな」モグモグ

「大佐、いいんですか？」

「ああ。執務と言つても今日は作戦の指揮が殆ど仕事みたいなものだったからな。実は

事務の方はそう多くない」

「じゃ、最後まで話し相手になってくれるのね？」

「お前達の時間が終わるまではな」

「やったあ♪」

「恐縮です」ペコ

「いいんだ。それで、話すと言ってもな。俺に何か質問でもあるのか？」

「あ、それいいわね！」

「質問……大佐にですか……」

「こんな繋げ方で悪いな。どっちかというと受け答えの方が性にあっているんだ」

「じゃあさじゃあさ、わたしが訊いてもいい？」

朝雲が一人しかない回答者に向かって「元氣よく手を挙げながら訊いてきた。

「ああ、いいぞ」

「大佐って彼女いるの？」

「っ……けほ、あ、朝雲!？」

「彼女？」

「そう、付き合っている人とか」

「……一応仲間の中には何人かケツコンしている奴がいるな」

「そうなの？ それって誰？」

「戦艦では武蔵、長門、陸奥、金剛、霧島、マリア。正規空母では赤城、と加賀の合わせで八人だ」

「マリア？」

「ビスマルクの事だ。ここではあいつはそれで通っている」

「へえ……」

「戦艦と空母しかいないのね……。ね、駆逐艦とはケツコンする気はないの？」

「ないとは……言わないが、何分こちらの育成方針の関係上、どうしても戦艦と空母以外は練度が上がり難くてな。まあそれでもケツコンできる練度に達して、かつそいつに俺と一緒にいる意思があればするのも齊かではない」

「そっか、じゃあ私達でも脈有りなのね！」

「ごふっ……、わ、私達!? ねえ、それって私も入ってるの？」カア

野分は再び朝雲の不意を突く発言に、飲みかけの紅茶にむせながら顔を真っ赤にする。

「何照れてるのよー？ 野分だって結構大佐の事気に入ってたみたいじゃん？」ニマニ

マ

「そ、それは……」

「……いつも思うがお前達の好意というのは本当に突拍子もない嵐のようなものだ。そんなに簡単に判断していいのか？」

「いいの！ 私は大佐が気に入った、だから好き！ だからケツコンしたい！」

「あ、あまりにも単純で性急過ぎない!？」

「……同感だ」

朝雲の息つく間もない思考の展開に目を白黒させる野分に、提督は呆れた顔で頷いた。

第52話 「交流⑥」

コンコン

「浦風、来たよ」

「秋月、参りました」

『いいぞ、入れ』

ガチャ

「失礼しま——」

「……」

「大佐、どうかしたん？ 何か凄く疲れた顔してるよ？」

部屋に入った瞬間にソファーにうなだれて座っている提督を見て浦風が驚いた顔をして心配そうに言う。

「……なに、ちよつと元気がいい奴の相手をしていただけだ」

（朝雲かな）

（朝雲じやろな）

「まあ気にするな。取り敢えず座れ。ほら、茶菓子」コトツ

「わあ、気が利くんね大佐」

「……………！ ど、どうもありがとうございます！」キラキラ

「ん？ 秋月は甘いものが好きなのか？」

「え？」

「何だか目が凄く輝いているように見えるが」

「あ、ホントじゃ。秋月、結構可愛いところあるねー」

「あ、や……………」カア

「別に隠す必要はないと思うが」

「うう……………」

「そうよ？ 女の子が甘いもの好くんは普通やうちも思うよ？」

「ですけど、防空駆逐艦として隙を見せるわけには……………」

（どういう理屈だ……………）

（甘味くらいで突かれる戦術的隙ってなんなん……………）

「……………」

「……………」

「え、あの……………」

「まあ取り敢えずここでは気にするな。お互いの親睦を深める場なんだからな」
「そうよー」

「そ、そうですか？　なら……」

「うちも頂くね」

「ああ、遠慮するな」

パクッ

「はあ……美味しい……」キラキラ

「ん、確かに美味しいね♪」（けど……）

「……」

「んんん♪」パクッ

（秋月ちよつと喜び過ぎ？）

（一体どれだけ自分を抑制してたんだ……）

——数分後

「失礼しました」ペコ

「いや、別に謝る必要は……」

「そうよ？　お菓子食べてただけじゃけん」

(秋月はある意味、真面目さでは朝潮や野分を上回るな)

「菓子ならまだあるぞ。お代わりいるか？」

「あ、うん。もらお——」

「はい！」キラキラ

「……」

「……」

「あ」

「大佐」

「ん？」

「どうするつもりじゃ？」

「何をだ？」

「いや、あれ……」

浦風が指を指した方向には自分のはしやぎ様に羞恥で部屋の隅でうづくまっている秋月がいた。

「どうすると言われてもな……」

「大佐の所為じゃないとは判ってるよ？ でも、ここは男として、提督としてバシツと決

めて欲しいな？」

「浦風、お前、単に面倒だから俺に押し付けようとしてないか？」

「ぜんっぜん！ そんな事ないよ？」 ニコ

「……」（凶星だな）

「もー、ほらほら早く何とかする！」 グイグイ

「分かった。分かったから押す……おい、胸が当たってるぞ。体全体で押すな」

「サービスじゃ」

「そんなものはいらん」

「お堅いのお。ほれ、いいから早く！」 ポン

「秋月」

「……」

「別に慰めるつもりで言うわけじゃないが、この基地にはお前と同じくらい真面目で自尊心が強い奴が何人かいる」

「……」 ピク

「それすらも最初はお前と同じように体面を気にしてな。人から見れば何でもないが、お前の様な個人的嗜好を際だと考えてなかなか素直になれなかったんだ」

「……」

「だが、そいつらは今どうしていると思う?」

「……どう、してるんですか?」

秋月は体操座りをして俯いていた状態から、顔を僅かに上げて目だけ提督に合わせてきた。

「自分からある程度素直にならないと、相手に誤解や不快感、そして……まあ、慕っている相手にも気に入ってもらえないと自分で気付き、今は大分素直になっている」

「素直……ですか」

「そうだ」

「でも私、いきなりそうなる事は……」

「それは当然だ。今言ったそいつらだって直ぐに直せたわけじゃない。時間を掛けて徐々に良くなっていったんだからな」

「……」

「秋月、お前はまだここに来たばかりだ。第一印象を大事に思う気持ちも解るが、無理にそれを通してで自尊心に自分自身が潰されては意味がないぞ?」

「大佐……」

「そう硬くなるな。力を抜け。此処には素のお前を見て幻滅する奴なんていない。何故なら無理して体面を取り繕っているお前を知っている奴は、今日仲間になつたあいつらと此処にいる俺達だけなんだから」ポン

提督はそう言うと、秋月の目の前で屈み、彼女の頭に手を置いて優しく撫でた。

「あ……」

「あ、悪い。駆逐艦だからといって気軽に頭を触ってしまったな」

提督は馴れ馴れしい事をしてしまったと手を引こうとしたが、その手を少し頬を紅く染めた秋月が握って引き止める。

「ん、秋月？」

「大佐……分かりました。私、この暖かさに触れて、素直になることがどれだけ大切なのかを」

「……」

「だから謝らせてください。先程の事、申し訳ございませんでした。これからは大佐や仲間の前ではもう少し自分を偽らずに行こうと思います」

「そうか。なら、よかつた」ニッ

「……っ」（大佐、こんな風に優しく笑えんだ）

「? どうした？」

「あつ、いえ！ な、なんでもありません」

「そうか？ じゃあまあ仕切り直しといこうか。まだ時間も菓子も残っているしな」

「あ、はい。頂けるな……いえ、是非」

「ああ。遠慮するな。浦風はどうする？」

「……」

提督がようやく秋月を説得できた事に安堵して浦風の方を振り向くと、そこには何か真剣な顔してこちらを黙つままこちらを見ている彼女の顔があった。

「浦風？」

「あ？ ああ、うん。うちも貰うよー」

「どうかしたのか？」

「……何でもない」（確かに秋月を何とかしてつて言っただけど、あそこまで優しくしてるのみたら……ちよつと妬けるよ）

（浦風……？ つ！ もしかして……いや、そうならここは私が素直になつた事を二人に示す絶好の好機！）

ギユツ

「ん？」

「え？」

提督が腕を圧迫される感触に、そこを見ると秋月が彼の手を両腕で抱き締めていた。

「秋月、どうした？」

「いえ……ダメですか？」

「駄目とは言わないが、このままだと茶屋菓子を用意ができないんだが」

「……今はこれでいいので」

「？ ああ、まあそれがいいなら」（何だ？）

（浦風、見ましたか。私の成長！）

（いくらなんでもそれはズルイ！　ちゅーか反則じゃあ！）

ギュー

「あっ」

「浦風、お前まで何だ？　　とうかちよつと痛い」

「うちも！」

「は？」

「うちもしたいんじゃない！」

「……！　　浦風、負けませんよ」

ギユッ

「……っ。　　秋風お前も少しいた……」

「うちも負けんけんね！」グツ
「お前ら、なんなんだ？ 痛い、加減しろ」（どうしてこうなった？）

第53話 「交流⑦」

コンコン

「プリンツ・オイゲン来ました！」

「能代です。大佐、いますか？」

『いるぞ、入れ』

ガチャ

「失礼っ」

「しま……ええ？」

「……」

プリンツと能代が部屋に入ると、そこにはやや憔悴して疲労の色が見える提督がいた。

「……ん？」

「いや、その……」

「大佐、疲れてる？」

「ん？ ああ、ちよつと前の面談で体力を使ったただけだ。気にするな」

「はあ……」

「え？ ただの面談よね？ どうしてそんなに体力を……」

プリンツは提督の様子を見ると何かよからぬ想像をしたらしく、両腕を胸を守るように組んだ。

「プリンツ、なんでそんな警戒する様な態勢を取るんだ。やめろ、いらん誤解をされる」

「え？ 誤解って、あつ……」カア

一人会話に着いていけないでいた能代が、そこで誤解の意味を理解して顔を赤くする。

「違うからな？」

「本当にい？」ジツ

「本当だ」

「ふくん……ならいいいよ、信じてあげる！ 今回はね」

「今回も次回もそういう事はない。それはさっきの矢矧の説明で俺の人となりを理解してくれ」

「そ、そうよね。だめじゃないオイゲンさん。大佐を疑っちゃ」

「能代さんも疑ってたように見えただけどー？」

「そ、そんな事……」アセ

「……二人とも取り敢えず座れ。その事も含めてこれからお互い親睦を深めるとしよう」

「はい」

「分かりました」

「茶と菓子だ」コトツ

「あ、わざわざありがとうございます」

「わあ、ありがとう！ 大佐っていい人ね♪」

（何だか凄く単純な性格をしてそうだな……）

（プリンツさんって凄く解り易いな）

提督が用意した茶菓子を目にして早速「機嫌になったプリンツを見て、彼と能代は心の中でそんな事を思った。

「ふむ、能代は……矢矧の姉なんだな」

「あ、はい。矢矧が先に来ていたようで、妹がお世話になってます」ペコ

「ん、いや。あいつは出来た奴だよ」

「そう言ってもらえるとわたしも嬉しいです」ニコツ

「プリンツは……ああ、マリア以来の海外艦だなそういえば」

「マリア？」

プリンツが耳慣れない言葉に反応する。

「ビスマルクの渾名だ。此処ではそれで通っている」

「へえ、ビスマルク姉さんここではマリアって呼ばれてるんだ！ なんかいいですね。可愛い感じで！」

「はは、まあそう言ってもらえると名前を付けた身としても嬉しいな」

「え？ 大佐が付けたんですか？」

名付た人物が提督だと知ってプリンツは今度は目を丸くする。

それは能代も同じようで、食べかけていた菓子を口元で止めて提督を見ていた。

「へえ……なんか意外ですね」

「そうか？」

「あつ、別に悪い意味じゃないんですけど、大佐ってやっぱり真面目そうだから」

「確かに自分でもある程度は真面目なつもりではあるが、それと名前を付ける行為はあまり関係ないと思うけどな」

「ね、どういう風に姉さんに名前付けたの？」

「ん？ ああ、それはな……」

——数分後

「とうわけだ」

「へえ、結構自分の知識？　　とうか教養から付けたんですねえ」

「良いセンスだと思えます。ネーミングじゃなくて、そういう風に幅広い知識から考え出すというのは」

「はは、そう褒めるな。買い被りだ」

「ううん、わたしも姉様のマリアって名前凄く良いと思います！　　……あ、もしかしてレーベやマックスにも？」

「まあな」

「聞かせて聞かせて！」

「あ、わたしも聞きたいです」

「ああ、いいぞ。あいつらはな……」

——更に数分後

「へえ、レーベ、レイスちゃんはともかく、マックス、ジエーンちゃんはなかなか思いつかないですね」

「いや、レイスはギリギリ余地があるとしても、マリアとジエーンに関しては、普通は名

前の音を聞いたただけではその過程なんて連想できないと思うぞ。自分で言うのもなんだが、かなり無理やりだしな」

「ふふ、マリアさんはともかく、ジェーンちゃんは確かにそうですね」

「へえ、いいなあ。ね、大佐」

「うん？」

「わたしにも渾名、ここでの名前付けてよ！」

自分以外の仲間が独自の名前を持つてる事を羨ましく思ったプリンツが身を乗り出して提督をお願いしてきた。

提督はそれに対して特に考える間もなく一言言った。

「……お前はプリンでいいんじゃないか？」

「ぷっ。あ、ごめんなさい。でも、ちよつと何かかわい……」クス

「えー、何それー？　なんか甘そうでドイツっぽくないー！」

「マリアだつてそうじゃないか？」

「姉さんはまだちゃんと人の名前だし、マリアっていう名前も姉さんの容姿のおかげもあつて凛々しい感じするじゃないですかあ」

「ふむ……？」

「だから、わたしもプリンなんて名前じゃなくて全く違うコレー！　つて名前がいいで

すー！」

「ふ……む、そう言われてもな。ちよつと待て」

「うん、考えて考えて！」

（どんなのを思いつくんだろ）ワクワク

——また数分後

「よし」

「決まった!？」

「教えてください」

「うん。フランソワ、なんてどうだ？」

「フランソワ……!？」

名前の音の響きにプリンツは目を輝かせる。

「は……あ、良い感じだと思えます」（本当に予測できない。どうやって考えたんだろ）

「うん！ 凄く良いと思えます！ ね、ね！ 一体何から付けてくれたの？」

「ん、今回はそう複雑じゃない。お前の名前、プリンツ・オイゲンというのは実在した昔の軍人に因んで付けられたんだろ？」

「ええ、そうよ」

「その軍人の名前はドイツ語読みだが、それをフランス語にするとウジエーヌⅡフランソワ・ド・サヴォワⅡカリニヨンとなる。そこから取ったんだ」

「ながつ」

「あれ？ でも名前の中にプリンっぽい響きが無いよ？」

「プリンツというのは公子という称号の事なんだ。だから本名は別にあつてフルネームはこんな長い名前なんだ。それをフランス語読みにするとうなるというわけだ」

「へえ。わたしプリンツも名前だと思つてた」

「ドイツ生まれならドイツの単語くらい知つてもいいんじゃない……」

あつげらんかとさり気なく爆弾発言をするプリンツに、能代は少し呆れたように笑いながら言った。

「え？ あはは。に、日本で見つかったからかな」

「ははは、かもな。で、どうだ？ もし、受け入れてくれるのなら、フランソワと毎度呼ぶのもアレだから、普段はフラン、と愛称で呼びたいんだが」

「フランかあ……んっ、いいよ！ たつた今からわたしはフランソワ！ フランって呼んでね！」

「ああ、分かった」

「分かったわ。じゃあ改めてよろしくね、フランさん」

「うん！ 大佐、良い名前を付けてくれて本当にありがとう！」

「いや、俺もそう喜んでもらえて何よりだ」

「うんうん、お菓子も紅茶も美味しいし、もう言う事無しだよ」

「そうね。わたしも凄く心地よい雰囲気だと思います」

「そうか、それは良かった」（今までの面談の中で一番楽だ）

提督は今までの面談を思い出しながら考え深げにそう思った。

「流石重巡と軽巡、と言ったところか」ボソ

「え？」

「んっ？」

「いや、何でもない。それよりまだ時間はある。今日はゆっくりしていくとい

「はーい、ありがとう大佐！」

「ありがとうございます。お言葉に甘えちやいますね」

第54話 「おねだり」 R—15

「ふう……」

カラ……

「大佐、今日はお疲れ様でした。お背中お流ししましょうか？」

提督が湯船に浸かって良い心地でいると、軽く戸を開く音と共に浴室に赤城が入って来た。

タオルも携えずに入って来た彼女は、一糸纏わぬ姿だった。

「赤城……」

「あれ？ あまり驚かれないんですね？」

てつきり真つ先に苦言を貰うことになると思っていた赤城は、提督の落ち着いた反応に意外な顔をする。

「ここまで入って来た女性を裸のまま追い出す気には、流石になれないんでな」

「あ、じゃあご一緒してもいいんですね？」

「今更……だが、こんな風に頻繁に不意に入って来るのは自粛しろよ？ 次からはちゃんと事前に承諾を……」

「分かってますよ。もう……少しくらい雰囲気を意識してくれてもいいのに」

「一般的な男性なら喜ぶところなんだろうがな。生憎俺は真面目で堅物で通ってる枯れた男なんでな」

「え？ た、大佐？」

一瞬顔に影がさしたかと思うと、それと一緒に愚痴のような事を言い始めた提督に赤城は動揺する。

「……何でもない忘れてくれ」

(新しく仲間になった子が多かった事を素直に喜べなかったのを気にしているのかしら……?)

「あ、お背中流しますよ」

「……俺はもう湯船に入ってるんだが」

「洗いつこしません？」

「今はしない。湯が気持ち良い」フウ

「むう、じゃ、私を洗って下さい」

「断る。さつきも言ったが今はそういう気分じゃない」

「ええ。……あ」

尚も断る提督に赤城は子供の様に残念そうな顔をするが、ちょうどその時に彼のある部分の反応を見て、何となく納得したような顔をした。

「なんだ？」

「大佐、元氣じゃないですね」

「……そういう気分じゃないって言ったろ？ 今は湯が気持ち良いんだ」

「殿方に柔肌を晒しているというのに反応を全くして頂けないというのは、これはこれで複雑ですね」

「ま、こういう事もあるさ」

「はあ、いいです。自分で洗います」プク

「そうしてくれ」

「(しし)し、(しし)し」

赤城は身体を洗いながら横目で提督を見る。

「……」チラ

「……」フウ

わしやわしや、むにゆむにゆ

「……」チラ

「……」ハア

(本当に全く反応してない。なんか女としての自信に危機感を抱くなあ……。あ、次は……)

提督が全く興味を示さないことに軽くシヨックを覚えながらも、赤城は次に体を洗う場所に気付いてちよつと恥ずかしそうな顔をした。

「大佐」

「……ん？」

「あの……お願いなんですけど、今から少しの間だけ私がいって言うまでそのまま目を閉じて頂くか、後ろを向いてもらえますか？」

「……？ 別に意識して裸を見た覚えはないが？」

現にさつきまで本当にその通りだったので提督は下心なしに赤城にそう答えた。

それに対して赤城は言い辛そうにモジモジして彼と視線を合わせないように意識しながら恥ずかしそうに言った。

「あの……を洗うので」

「うん？」

「あ、あの、だから……そのお……」カア

(ああ……)

「悪い、無神経だった。目を瞑ってる」

提督は直ぐに納得した。

それは確かに入浴するうえで当たり前の行為だが、男と違って女性のそれは何故か背徳的な感じがする。

ましてやそれを人前で何て恥ずかしく思つて当然だろう。

「はい、お願いしますね」

赤城は提督の言葉に安心しながらも、敢えて最後に念を押すように少し強く言つた。

にゆ、にゆっ

「……」

「……」

こしこし

「……」 チラッ

「……」

赤城は隣に提督がいる影響で顔を赤くしながらも、時折横目で彼の様子を確認しながら着実に洗つていた。

（見て、ないわね。早く洗っちゃ……あ）

その時赤城の脳裏にある考え、突拍子もない思い付きが過つた。
(見ていない、という事は……) ゾクツ

「……」

にゆつ、にゆつ……

「ん……んっ……」ピクツ

「……？」(何だ？ 洗つてる音がやけに大きく……いや、近く感じる?)

「……っ」(声を出しちや……ダメっ)

「……」(赤城の奴……)

ザバツ

「あつ、た、大佐!」

「全く、こんなになるまで……」

「やつ、は……ああああんっ」

提督の不意の攻勢に赤城は最早隠さずに悦楽に喘ぐ嬌声を響かせる。

「大佐……あつ……♪」

提督に攻められながらも赤城は、彼の身体のある変化に喜びの色をその目に浮かべる。

「……流石にここまでしてならないわけがないだろう」

「大佐……もう、もういで……すか……ら、あつ。だから、お願い……」

「湯船から出るぞ。中ではしたくないからな」

「はい♪」

「いくぞ」ズツ

「はい。あ、ん……ふつ……」ピクツ

「声が響くからあまり大きな声はなるべく我慢しろ……よ。ふつ」

「は……あんつ、は……つ」

「そのまま支えてろ。もつといくぞ……ふ……つ」

「きやつ、あ……あはっ♪ 好き、これ……すきで……あつ」

「くつ……これは……」

「いい……ですよ。私も今……ちようどいっしゅ……ん……てくださいっ」

「ふう……いくぞっ」

「は……あ……ああつ!!」

「……洗い流すのに随分時間が掛かったな」

「ふふ、そうですね。大佐だったら凄いですもの。どれだけ洗ったか忘れてしまいました」

提督は再び湯船に浸かり、彼の膝の上には赤城が抱きかかえられるようにして一緒に湯に入っていた。

「そりゃ、4回もやればそのくらいにはなるだろう」

「だって……ん」

「こら、もう我慢しろ」

「そうですか……ふふ、残念」

「これ以上望むのなら、続きは上がってからだ」

「あ……はい♪」

久しぶりに提督を肌で感じられる機会が増えた事に赤城は心から嬉しそうな顔をした。

第55話 「悪夢3」

『え……あ、あなたは誰?』

『何だ聞いてないのか、新しい提督だ。此処のな』

『……え?』

秋月は愕然とした。

目の前の見知らぬ男がこの基地の、私の新しい提督?

せつかくこれから仲良くなれる、あの人の為なら頑張れると思っていたのに、そんな期待に満ちた日々への希望がもう覆るといふの……?』

『あ、あの……』

『?』

秋月は、動揺を悟られまいと必死に我慢しながらも、震える唇は隠し切れずにたどたどしい言葉使いで新しい提督だという目の前の見知らぬ男の聞いた。

『あ、あの人は……。前任者の大佐は何処へ行ったのでしょうか?』

その言葉を聞いた瞬間男の表情が急変した。

不機嫌に顔を歪ませながら眉間に皺を寄せると、足早に秋月に近づくと彼女の小さな

頬を平手打ちする。

パンツ！

『あ……きやつ』

『貴様なんだその言いようは?! 前の提督は階級が准将だったというのにそれを下げて呼ぶとは……。いやそれは置いておくとしても、新たな提督である私を前にして早速前任者の事を気にするとは無礼であろうが!!』

パン！

『……っ。し、失礼しました……』

再び頬を叩かれた秋月は突然の体罰に混乱するも、氣力を振り絞って恐怖を抑え自分の無礼を新しい提督に詫びた。

『……ふん』

新しい提督はその言葉に一応は振りかざした手を引いたものの、未だにその顔は不機嫌なままで、表情は険しかった。

『服を脱げ』

『え?』

予想だにしない言葉に秋月はまたも愕然とする。

今、この人はなんて言ったの……? ?

『服を脱げと言ったんだ。これは司令官を軽んじた罰だ。今日からお前は私が許すまで常に裸でここに來い。なに、女としての尊嚴など気にする事はない。お前はただの兵器なのだからな』

『そ……そんな……』フルフル

秋月は今度こそ泣き出した。

少し、少し前まではあんなに楽しかったのに、心地よかったのに……。

こんな……こんな……。

「めそめそと泣いて鬱陶しい……さつきと脱がんか!!」

「……っ」ビクッ

秋月は、怒声と共に飛んできた明らかに命令の範疇を逸脱したこの提督の暴言に、抵抗する氣力を完全に奪われてしまった。

耐えがたい羞恥心を感じながら震える手をその服に掛ける。

そしてついに……。

「!!」バツ

「……はあ……はあ」

信じられない悪夢から目を覚ました秋月は、自分の荒い息に驚きながらも直ぐに周囲

を確認する。

「……」

自室だ。

自分の部屋が決まるまで一時的に割り当てられた仮の部屋だった。

「すう……すう……」

ふと、横を見ると先に部屋が決まった能代とプリンツを除いて一緒になった野分達が静かな寝息を立てていた。

「……」

秋月はその穏やかな顔を見て安堵から顔を綻ばせる。

そうだ、あれは夢だったんだ。

だから気にする事はない、提督は……大佐は、あの人のままだ。

「そう……その、はず……」

秋月はそういう自分に言い聞かせて安心しようとしたが、悪夢にうなされた所為で掻いたべつとりとした汗を掌から確認する内にどうしてもある事が確認したくなった。

それも今直ぐに。

(確かめたい……直ぐにでも……！)

パタン、トテテ……

秋月は皆を起こさないように静かに部屋を出ると、足早に提督の部屋へと向かった。
キィ……。

静かに執務室の扉を開ける。

提督の私室はこの部屋の隣なので、今は執務室には誰もいない。

「……」

部屋の内装は提督の趣味で無造作に置かれて異彩を放っている調理台を除いて夢で見た通りだった。

「……っ」ブルッ

秋月は再び悪夢を思い出して震え、考え直す事も浮かばずにそのまま執務室に入ると提督の部屋の扉の前まで走った。

コンコン

「……？」

僅かな音だったが提督は目を覚ました。

「誰だ……？」

「……！」

聞き慣れた、聞き望んだその声に、秋月の目は安心と嬉しさから輝く。

『大佐……秋月です』

「秋月？」

提督は意外な訪問者に内心驚いた。

（なんで秋月が。何かあったのか？）

『はい、そうです。あの、お願いがあります。部屋に……部屋にまずは入れてもらえませんか？』

親睦会の時とは明らかに異なる彼女の緊張した声に、提督はにべもなく許可をした。

「ああ、いいぞ。入って来い」

ガチャ……

「失礼、します……」

「秋月、お前どうした？」

彼女自身も気付いていなかったらしい。

提督は安堵の涙を流した所為で目を赤くした秋月を見て、ベッドから降りると彼女の傍まで行った。

「え……？」

秋月は最初提督の言葉が理解できずに、心配した表情で近づいて来た彼に驚いた顔を

する。

「泣いているぞ。何かあったのか？」

提督にそう言われて自分の頬を触り、秋月は初めてそこで自分が泣いていた事に気付いた。

「あ……………」

「……………悪い夢でも見たか？」

秋月の様子を見て提督は直感でそう判断して訊いた。

「……………はい。恥ずかしい事ですが、本当に……………本当に怖い、夢を見ました」

「……………そうか」

「その夢はこの基地での出来事で……………それが……………」ガタガタツ

秋月はそこで再び夢の内容を思い出し、恐怖と絶望から小さく震え始めた。

「……………寝るか？」

「え？」

提督の言葉に秋月はハッと顔を上げる。

「内容は確認するつもりはないが、その悪夢はどうやら俺に関係しているみたいだ。なら、それが本当にただの夢だと確認する為に一緒に寝るか？」

「い……………いんですか……………？」

提督の申し出に嬉しさを感じながらも秋月はそこまでしてもらっていいものか考えあぐねている様子だ。

「流石にそこまで怯えているお前を見ると、な。まあお前がそうしたいならだが」

「お、お願いします！ 今日……今日は秋月と……提督と一緒に寝かせてください！」
「分かった。じゃあ俺はベッドの隣にソファアを……」

「え？」

「この流れで何故そういう考えになるのか、秋月は執務室に戻ってソファアを持って来ようとする彼の服を急いで握って引き止めた。

「ん？」

「どう……して」

「ん、なんだ？」

「どうしてそうなるんですか!？」

「え？」

基地に来て初めて見て、聞いた秋月の怒った顔とその声に提督は驚いた顔をする。

「普通は……普通はここでベッドで一緒になって添い寝をしてくれるところじゃないんですか……?？」

「……悪い。他の駆逐艦ならまだしも、お前はまだ来たばかりだし性格の事もあったか

らついでそう判断してしまった」

秋月の言う事を理解した提督は申し訳なきように言った。

「私は大佐と面談した時から素直になると決心しました。なのに大佐がいきなりそれで
は……」

「ああ、悪い。本当にすまなかつた」

提督はそう言つて秋月をそつと抱き寄せ安心させるように頭から背中を撫でた。

「……一緒に寝てくれますか？」ジッ

「ああ」

「本当に？」

「本当だ。ついでに約束もしよう。この事は皆には秘密にする」

「……大佐！」ダキッ

「……つと」

秋月はやつと心から不安が消えていくのを感じながら、幸せ一杯といった風に提督に
抱き付いた。

第56話 「可能性」

「秋月、まだ怖いのか？」

秋月まだ先程見た悪夢が忘れられないようで、提督にしがみつく形で寝ていながらも、その身体は小さく震えていた。

「あ……そ、その……申し訳ございません……」

「謝る事はない。だがまだ気になるか」

「はい。少し印象に残ってしまっていて……」

「……なあ」

「？」

「よかつたら。夢の内容を話してくれないか？」

「え……」

提督の頼みに秋月は戸惑った顔をする。

悪夢の内容が内容なだけに、それを思い出すというのも気が重かったし、何より提督に話すのが躊躇われた。

「あ、あんまりいい内容ではないので……」

「悪夢なのだからそれはそうだろう。秋月、俺が言いたいのはな、悪夢を自分だけ抱え込まない方がいいという事なんだ」

「え？」

「人は自分にとつて不快な事は忘れようと努めるものだが、逆にそれが自分の中で印象が強が残つてしまう事がしばしばある。今のお前がそれだ。ここまで解るな？」

「……はい」

「ん………忘れたい故に口に出さないと、結果的に自分だけで悪夢を処理する事になる。しかし、そこで結局忘れる事ができなければ、それは一生のトラウマになってしまういかねないだろうか？」

「そう………かもしれないね」

「ならその悪夢を信用できる人と共有すればいい。内容を理解してくれる人が自分以外に一人でもいれば、それは自分の負担の軽減になる。そうは思わないか？」

「………」

秋月は提督の話を考えてた。

確かに未だに悪夢は忘れられずに自分を苛んでいる。

忘れようと必死になればなるほど、二度と見たくないという思いの所為でかえつて眠るのが怖くなっている始末だ。

提督の話は一理ある。

秋月はそう思った。

「……怒らないでくれますか?」

秋月は消え入りそうな声で不安気に訊いた。

「夢の内容か? ……この夢か?」

「はい。大佐は出てきませんが、それでも艦娘が提督を拒む内容なので……嫌われたくないんです」

「その夢の中に出てくる提督はひどい奴だったのか?」

「……少なくとも私には耐え難い性格でした」

「……そうか、なら心配ない。その提督より恐らく俺はマシな奴だと思っからな」
「え……」

秋月はちよつと意外そうな顔で提督を見た。

彼なりに自分を安心させるための軽口のもりだったのだろう。

提督は秋月に優しく微笑んでいた。

「大丈夫だ。決して怒りはしない」

「大佐……分かりました。お話します」

秋月は提督の笑顔に安心し、拙いながらも少しずつ話し始めた。

「こんな夢でした……」

「……なるほどな」

話を聞き終えて提督は考えるように天井を見つめていた。

「私はその提督が怖くて……そ、その……い、嫌な人だと思いました……。そして二度と大佐に会えないと思うと、もう……」グス

「……」ナデナデ

「大佐っ」ギョッ

夢の内容を話した事によってその内容を鮮明に思い出したのだろう、秋月は自分を撫でる提督の手を抱きしめた。

「秋月、俺が思うにな」

「はい」

「お前を不安がらせるつもりはないが、現実を教える為に敢えて言うが」

「はい」

「恐らくお前が話したような提督がいる可能性はあると思う」

「……っ」

認めたくはなかったが可能性の上では否定できない現実を指摘する提督の言葉に、秋

月は言葉にできない恐怖を感じ、再び彼の手を強く抱き締めた。

「提督にもいろいろいるだろうからな、シヨックかもしれないがまずはこれを理解してもらったうえで続けるが、いいか？」

「……」コク

「お前が夢で見たような提督が実際にいたとする。だが、何故かその提督が居る基地に限って意外にもそこで艦娘の目立った反抗は見られず、本部もそんなに問題視しなかったりする。何故か分かるか？」

「……」

秋月は提督の質問に悩んだ。

艦娘にとって提督との絆は任務は勿論、基地での日々を送るうえで絶対に疎かにできないものだ。

だが、自分が見た夢に出てきた提督は、彼女が考える限りその絆を到底維持できる人物には思えなかった。

では何故そんな提督がいる基地で問題が起こらないのか。

秋月はいろいろ考えてみたが、結局分からなかった。

「分かりません……何故ですか？」

「ん、それはな。そういう提督に限って性格に難はあるものの、任務を遂行する手腕に掛

けては有能ないし、優秀だったりするからだ」

「……どういう事ですか？」

提督の答えを聞いて、秋月は余計に分からなくなった。

いくら優秀でもそれだけで艦娘との絆は維持できない、そう考えたからだ。

「秋月、艦娘というものはまあ言ってはなんだが、戦闘が主な仕事だ。そんな彼女たちは日々戦いの中で任務をこなしながら徐々にその心の中にあるものを育んでいく。それは何分かるか？」

「……自尊心……誇り？」

今度の質問は秋月にも何となく予想ができた。

それは間違いなく自分の中にもあったからだ。

「そうだ、誇りだ。艦娘もそうだが、軍人というものはその職務柄名誉や誇りに重きを置き易いものだ。さて、ここでまた質問だが」

「はい」

「そんなお前達を指揮する提督が、性格が悪くてもその指揮能力は抜群で、バンバン成果を上げる優秀な指揮官だったとする。そんな提督をその人の下で働いてきた艦娘達はどう思うか？」

「……従います。この指揮官ならと」

秋月は今度も迷いなく答える事が出来た。

彼女には段々と提督が言いたい事が解つてきた。

「そうだな、俺もそう思う。恐らく余程の事が無い限りお前達はその提督の下で数々の名誉を授かる内に、性格の事は気にしないまでとは言わないが、自主的にあまり深く考えなくなるだろう」

「……だから反抗もなく本部も問題視しない、あるいは深刻な問題があつたとしても気付かない……?」

「そうだ。お前が見た悪夢は、お前が知らない基地の艦娘達にとつては案外慣れた日常だったりするのかもしれない」

「……」

秋月は再び考える顔をした。

まだ完全とまではいつてなかつたが、その顔からは最初と比べれば大分恐怖感は減つているようだった。

「……優しく慰めてやれなくて悪いな。だが、俺はお前ならこう話した方が一番いいと思つた」

そう口にする提督の顔は言葉の通り、彼女に対して申し訳なさそうな顔をしていた。

「大佐」

「うん？」

「ありがとうございます。おかげで大分最初と比べれば気分は楽になりました」

「……そうか」

「でも」

「ん？」

「私はそれでも、この基地が、大佐がいいと思います。初めて来たのが此処だったというのもあるかもしれませんが……。もう、私は大佐の、あなたの艦娘になってしまったから……。多分他の提督では……」

秋月はまるで告白する様に顔を赤くして俯きながらただどしく言葉を紡いでそう言った。

そんな彼女に、提督は微笑みながら優しくその頭に手を置いた。

ポン

「あ……」

「その決心、確かに受け取った」

「大佐……！」 ギュッ

「改めてよろしくな秋月」

「はい……！ よろしくお願います！」

提督の身体に抱き付きながら秋月は本当に嬉しそうにそう言った。

第57話 「協定」

「秋月、おはようございます」

「あ、不知火。ええ、おはよう」

秋月は自分と同じく朝早くに目覚めている不知火と廊下で出会った。

それはなんの変哲もない挨拶のしあいだったが、不知火は挨拶を交わして彼女とすれ違った瞬間、何かに気付いたのかピタリと足を止めて秋月の肩を掴んだ。

「……」

「なに？」

クンクン

「えっ!?! ちよ、な、なに!?!」

「……大佐の匂いがしますね」

「」

「ちよつとこつちに来てくれませんか？」

「え」

「来てください」

「い、いきなりそんなこと言われても……」

「早く」

「だ、だから」

「来い」

「……っ!?!」ゾクツ

ガシッ

「え、やつ……ちよつ、離してー!!」ズルズル

秋月は不知火に引きずられるような形で捕獲され、まだ誰もいない入渠ドッグに連れてこられた。

「さて、先ずは単刀直入に訊きます」

「……」

「大佐とやりましたか？」

「え……!?!」

「秋月には少々直球過ぎましたか。では、少し表現を和らげましょう。大佐と寝ましたか？」

「ね……あの、それって……」カア

「意味は流石に解りますよね？ どうなんですか？」ズイ

「寝たかどうかという事なら、それは……」

「別に私はあなたが提督の名誉を傷つけるような後ろめたい事をしてとは思っていません。だからこの質問には、ただはつきりと事実だけを答えて頂けてたら結構です」

「……寝たわ。いえ、寝てもらいました。ただ、本当に寝ただけよ」

「……何故か訊いても？」

「寝て貰った理由？ そ、それは……」

「笑いません」

「……怖い、夢を見たの」

「……なるほど。理解しました」

「不知火、あなたは私たちと私たちがその……そういう関係になるのが気になるのですか？」

「嫉妬ですか？ まあそれに近いものだと思いますが、それでもお互いに相思相愛かケツコン済みの関係なら流石にそれに水を差すような事はしません。私があなたに伝えたいのは……」

「……」

「この駆逐艦同盟に加入してもらい、誓約を遵守して欲しいという事です」スツ

「え？」

不知火はそういうと秋月に一冊の小冊子を渡した。

『駆逐艦同盟』

冊子の表紙には達筆な文字でそう書かれていた。

「あの、これは……？」

予想外な展開過ぎて秋月は戸惑うばかりだ。

「この同盟は駆逐艦のみを対象とし、かつ大佐に特に好意を持っている事が加入条件です」

「は、はあ……え？　こ、好意って……」　カア

「そうですよね？」　ジツ

「は、はい」

「素直ですね。良い事です」

「あ、ありがとう……」

「この同盟の目的は単純に本人、大佐の意思に反してあの人を籠絡しようとしないうこと、そしてそういった抜け駆け行為の自粛を促す為です」

「な、なるほど。だからケツコンや相思相愛は……」

「そういう事です。だからこの同盟の加入者の中には、叢雲さんや初春さんといった方

もいます」

「叢雲、はつは——」

「さん」

「え？」

二人の名前を挙げようとしたところで唐突に不知火が口を挟んできた。

「その二人には『さん』と、敬称を付けるように」

「え、な、何故？」

「その二人は大佐との付き合いが最も古いからです。そして誰よりも最初にあの人に好意を持っていたからです」

「なるほど」

「まあ私も古参と言えなくもない頃からここにいますが、それでも私の前には十人以上の『先輩』方がいます。ですからその人たちに關しては、艦種に關係なくこの基地では特別な存在だと思つて下さい」

「……了解」

「勿論その先輩方は自分からその事を主張するなんて事は基本的にありませんから、仲間としての接し方には変わりはありませんけどね」

「配慮、ね？」

「そうですね。あからさまに行く必要はありませんが、その人達と大佐が触れ合っているときは少し気を遣って欲しいという程度です」

「分かったわ。でも、気付けない時は仕方ないわよね」

「ふふ、そうですね。こちらもそこまで厳しくするつもりはありません。ですが……」

「解るものなんですよ意外に」

「そうなの？」

「ええ、何となくですが、雰囲気的に」

「そう……」

「それで」コホン

「あ、うん」

「加入してもらえますか？」

「ええ、加入するわ。こういう仲間意識も悪くない、ものね」

「理解が早くて嬉しいです」

「ううん、話を聞いていてこういうのもいいなって思えたから」

「そうですか。では、ここに署名を」

「ここ？ 血判とかいる？」

「え？ 血判ですか？ そこまではやってないのではありませんが、やりたいのなら」
「そう？ じゃ、せっかくだしやろうかな。何かこれはこれで特別な感じがするし」
「……なるほど」

グツ

「……と、これでいいわね」

グツ

「え、不知火？」

秋月が署名と血判を終えると、その隣で不知火も自分の名前の下に彼女と同じく血判を押してきた。

「……なんかそれを見てたら私もしたくなったので」

「え？ ふふ、そうなんだ」

「……ふむ、確かにこう見ると私達だけ何か特別な感じがしますね」

「なら私と不知火は特別な仲間という事ね」

「そう、ですね」クス

「あ、それじゃあもう用が済んだのなら私は行くけど」

「あ、待ってください」

「？」

「一つだけ訊きたい事があるのですが」

不知火は、少し頬を染めながら真剣な表情で戻ろうとした秋月を呼び止めた。

「何？」

「その……あなたが大佐に添い寝をしてもらった時、どうやってお願いしたか教えてくださいませんか？」

「え？」

第58話 「強化」

「扶桑、山城、新たな改造を受けて参りました」

「大佐、これが改造後の参考数値になります」 スッ

「ああ。ふむ……」

提督は山城から結果通知書を受け取り目を通す。

扶桑と山城は彼が書類に目を通すのを緊張した様子で見守っていた。

「……」 ドキドキ（大佐喜んでくれるかしら……）

「……」 ドキドキ（もう不幸じゃない不幸じゃない……）

「……凄いな、これは」

提督は一言そう言った。

「……！」 パアッ

「本当ですか!?!」

その言葉に扶桑は顔を輝かせ、山城は提督の机に身を乗り出してその感想が本当か確

認してきた。

「本当も何もまさか……までとはな」

提督は素直に心から感嘆していた。

扶桑達は、航空戦艦として戦術に富んだ戦いが可能なのが長所だったが、しかしそこには航空戦艦故の火力不足という、戦艦として一番と言ってもいい程の手痛い悩みが常に付きまとっていた。

しかしその悩みも、今回の改造で火力が一気に長門型に匹敵するほどに強力になったうえ、更に艦載機の搭載数まで得たのだ。

これは驚くべき成果であり、まごうことなき改良であった。

「姉様やりましたねー！」

「ええ……ええ……こんな……こんな日が来るなんて……っ」

山城は扶桑と手を取り合って喜びはしやぎ、そんな妹に対して姉はは感極まって言葉も出ない様子だった。

「そんなに凄いのか？」

秘書艦の長門が提督の後ろから改造結果の数値を覗こうとしながら言う。

「ああ、本当だ。ほら」ピラッ

提督から通知書を受け取った長門はその内容を実際に自らの目で確認すると、感心するような顔で言った。

「……ほう。そうだな、これは本当に……ふふ、負けてはられないな♪」

「嬉しそうだな長門」

「ん？ まあな。扶桑達の悩みは私も知るところだったし、理解もできたからな。同じ戦艦として悩みが解決して喜ぶ姿を見れたのは、やっぱり仲間として嬉しいものだよ」

「ああ、そうだな」

「長門……」ウル

「長門さん……」

「よかつたな。二人とも」

「ええ♪」

「大佐、長門さん。これからの私達の活躍期待してくださいね！」

「ああ、そうさせてもらおう」

「良いやる気だな。だが、私も負けないからな？」

それから数分後、短い祝福と報告を終えて扶桑達は退出し、部屋は提督と長門の二人だけとなっていた。

「……」

長門は提督の隣で黙って執務の手伝いをしていたが、提督はそんな彼女の様子に僅かな違和感を感じていた。

「長門」

「ん？」

「どうかしたか？」

「え？」

「いや、気のせいならいいんだがな。何となく……いや、やっぱり気のせいかな」

「……何が気になった？」

「黙って仕事を手伝ってくれているお前の様子が何か普段と違う気がしてな」

「どう？」

「はつきりと言うのは難しいが……こう、焦っているような……というか、な？」

「……」

長門は提督の答えを聞いて彼の目を真剣に見つめながら考えるように口に手を当てた。

「どうした？」

「……当たり前だ。流石大佐、もとい提督と言ったところか」

「やっぱり扶桑達の改造のその効果か？」

「ああ。あの時にも言ったが、改めて本当に凄いと思っっているよ。それこそ大佐が言うように焦る程に、な」

「……ふむ」

「私と陸奥は大和に次いでこの大佐を支える重要な火力だと、自惚れではないがまあ自負みたいなのはあった。が、それが今、私達に匹敵する火力を得た上に航空能力まで強力になった扶桑達に脅かされている……。ふふ、情けない事だが本当にそう思つたよ」

「……」

「誤解はしないでくれよ？ 例え能力で劣ることになろうが私は長門型だ。そのくらいの差、これまで培ってきた経験による的確な行動で埋めるくらいの自信はある」

「ああ、それは俺も信頼している」

「ふふ、ありがとう。……だが、まあ確かに今こうして抱えている嫉妬とも脅迫感ともつかないモヤモヤした気持ちには気分がいいものではないな」

「お前も新たな改造を受けられるようになるといいな」

「まあそれに越した事はないが、だがそうなると……」

「なんだ？」

何か不敵な顔で答えを出し渋るような態度を取る長門に提督は訊いた。

「もしそんな改造を受けたとすると私達は大和達に匹敵する戦艦になるかもしれないな」

「その可能性は十分になるだろうな」

「ま、それも大和達が同じように新たな改造を受けてしまえば、差なんてまた開いてしま
うだろうがな」

「自分でそれを言うか」

「十分に考え得る可能性だろ？」

「まあな」

「なら、私はただ認めるだけだ。あり得ないなんて逃げないぞ」

「こんなところまでお前は誇り高いんだな」

「いや、単に負けず嫌いなのを悟られまいと取り繕っているだけだ」ニツ

提督は何とも言えない顔で長門を見る。

すると彼女も同じ顔で見つめ返すが、やがて堪え切れない様に……。

「……………ふっ」

「つ……………く、はは……………」

「はははははは」

「あはははははっ」

「ははは。全く、お前という奴は……………」

「良い女だろう？」

「異論の余地もない」

提督は、そんな風にわざと自惚れてみせる長門に改めて頼もしさを感じたのでった。

第59話 「大人」

「どう？ どうつ？ 羨ましいでしょう？」

「う……うう……」 プルプル

「……暁」

「なに？ 大佐」

「飛龍は何を蒼龍に自慢してるんだ？ どうか何故ここにいる？」

「やっぱり本人の前で自慢したかったじゃないかしら」

「本人？」

「そうよ。飛龍さんが自慢しているのはね大佐。ゆ——」

「指輪よ」 ヌツ

「ひっ!？」

「雲龍、どうした？」

「呼ばれた気がしたの」

「呼んでないわ！」

「そうだな。呼んでない」

「……二人とも冷たいのね」

提督と暁の冷静な返しに雲龍は不貞腐れた顔をする。

「機嫌が悪そうだな」

「……別に」プイッ

「指輪でしょう？ 雲龍さん」

「……」ピクッ

「ん？ ああ、飛龍もこいつももしかしてそれで？」

暁の言葉で事態を察した提督は手をポンと叩いた。

「そうだと思うわ」

「……別に。私はまだ練度が足りない事くらい分かるもの。気にしてない」

「雲龍さん、だったらなんで大佐の目をちゃんと見て言わないのかしら？」

「……」ジト

「……っ」ダキ

暁は半目の雲龍の視線を受け、そのプレッシャーに耐えかねて提督に抱き付く。

「雲龍、大人げないぞ」

「……だ、大丈夫。暁は平気よ」ブルブル

「震えながら言うな」 ナデナデ

「ごめんなさい、暁の言う通りよ。やっぱり自分以外の誰かが、それも近くで指輪を自慢しているのを見ると嫉妬しちゃうものね」

「そうか？」

「そうよ。どうしてそんな事を改めて訊くの？ 私を見て解らないかしら？」

提督が意外そうな顔で訊き返してきたので雲龍は少し怒ったような声を出した。

今までの会話を聞けば誰だつて、ましてや提督くらいの人間なら察する事はできるといふのにどうしてそんな事を言うんだらう？

雲龍は自分を突き放すような提督の言葉が気にいらなかった。

「いや、機嫌を損ねてるのは分かる。が、お前の言う通りそれが指輪が原因なら、何故お前と同じで指輪をもらえていない暁はこんなに落ち着いているんだ？」

「ん……」

雲龍はその問いに考えるように口に手を当てる。

「大佐……」

暁は自分を褒めるような事を言う提督を見上げ、感激した様な顔をする。

提督はそんな暁の頭に手を置いてこう言った。

「暁、雲龍に説明してやれ。レディ……淑女らしく、な？」 ポン

「……………！ 任せて！」 パアッ

「雲龍さん」

「うん」

「わたしたち駆逐艦は、雲龍さんたちとは違って夜戦以外ではあまり目立った活躍を見せる事が少ないわ。演習も大佐の方針故にあまり出る事が無いしね」

「……………」 (さり気なく俺への皮肉も混ぜてきたか。上手いな)

「……………」

「だから練度も上がり難しいし、結果として同じくケツコンしている人が一人もいない軽巡や重巡回、潜水艦の人たちよりも更に指輪への道のりが遠いの」

「……………」 (耳に痛いな。ここで自分以外の艦種のやつらへのフォローも忘れないとは)

「……………」

「ならどうしてわたしたちは平然としているのか。別に平気なんかじゃないのよ？ わたしや他の子だって早く大佐とケツコンしたいって思ってるもの」

「……………なら、どうして？」

雲龍は依然として駆逐艦らしからぬ毅然とした態度で論じる暁を興味深そうな顔で見る。

そんな彼女に対して暁は自信に満ちた声で断言した。

「いつか必ずできるって信じてるからよ。大佐を信じているから」

「……」

「……」

「今は戦艦や空母優先だけど、その人たちが全員ケツコンまで到達すれば、次は重巡、軽巡……そしてやつとわたしたち駆逐艦の出番じゃない！」

「……随分気が長いのね。よく待てるなって思う」

「んー、これでも遠征の主力だしね。ゆっくりだけど今まで何回も遠征に行ってきた結果、わたしたち駆逐艦の平均レベルは実は重巡や軽巡の人たちを上回ってるの」

「だから自分たちの番が来た時はある程度ケツコンへの道も近づいていると？」

「希望的観測だけだね。その頃には全員70くらいにはいつてるんじゃないかしらって思うわ」

「……」

雲龍はここまで語って聞かせた暁を前にして素直に感心していた。

彼女たちを甘く見てはいけない。

駆逐艦だからと言って、自分たちより能力が劣るからといって、決してその存在を軽んじてはいけない。

彼女たちは自分たちの力を把握した上でその役割を理解し、文句も言う事なく今までずっと大佐や基地、自分たちを支えてきてくれたのだ。

「……偉いのね暁は」 ナデナデ

「わ……………ん……………ありがとう……………♪」

暁は雲龍の柔らかい手で頭を撫でられて気持ちよさそうに目を細める。

「意外ね。撫でられるのは嫌がられると思ったんだけど」

「昔はね。嫌というより恥ずかしかったんだけど。でも今はそうじゃないわ。だって褒めてくれるのにそれを嫌がるなんておかしいじゃない」

「今は恥ずかしくないの？」

「恥ずかしくて褒めてもらえない事の方が損だって考えられるようになったもの。レディは『大人』の女なのよ？ だから暁は損得勘定もしっかりしてるの」 フンス

「……………」 (それはある意味開き直りとも思うんだがな)

「暁……………」 (可愛い……………) ホワア

「ね」

「っ、なに？」

暁はいつの間にか目の前まで近づいていた雲龍に小さく驚く。

「ぎゅってしていい？」

「え？」

「暁が可愛いから抱きしめたいの」

「え、いや……褒めてくれるならいいけど……か、可愛いからっていうのはちよつと……」

「褒めるわ」ズイ

「え、ちよ……」

ポフ

「くっ」スリスリ

「んっ！ んー……！」ジタバタ

ムニユウ

「!!」（や、やわらかい……）

雲龍に抱き締められて若干抵抗していた暁はその時、自分にはない圧倒的なポリユームと言葉にできない感触を感じた。

「……」

「……？」（大人しくなった？ なんで？ ……まあいいか）ギュー

（いいなあおつきくて。わたしなんて……）ペタペタ

「……」（さて、仕事するか）

提督はそんな二人の和やかな雰囲気満足し、手を止めていた執務の続きに向かうこととした。

ところがその時……。

「あれえ？ 雲龍、暁を抱きしめて何やってるんですか？」ヒヨイ

「大佐！ 早くわたしともケツコンしてよ！ 飛龍に負けたままなのが悔しいの！」

「ダメダメ。次はレベル的には比叡だから。蒼龍はその後よ」

「いや！ 次はわたし！ ね、お願い大佐あ！」

「……」（忘れていたこいつらがいた）

提督は仕事が遅れそうな予感に溜息を付きながら、蒼龍をどう説得したものか考え始めた。

第60話 「対面」

「……レ級」

提督は眉間を指で摘みながら苦渋の表情で、当然のように執務室にいるレ級に声を掛けた。

「ん？ なーに？」

「対面の時は事前に連絡する約束じゃなかったか？」

「連絡したじゃん」

「今日な。そしてその日の内に来るなんて流石に予想できるわけないだろう」

提督はそう言つて今度はちゃんと顔をあげてレ級達を見ながら言った。

レ級はそれに対して相変わず自分の行動を特に気にしていない様子でのほほんとしていたが、夕級がすぐ横から申し訳なきような顔で謝罪してきた。

「ごめんなさい大佐。一応注意したんですけど……」

「姫もさつさと済ませたいって聞かなくて……」

「早く済んだ方がいいんじゃないの？」

夕級に同調してル級も謝ろうとしたが、レ級に負けないくらい能天気なヲ級は不思議

そんな顔でそんな事を言う。

「そうだよねヲ級。皆なんでそんなに困った顔してるのかな？」

「んー……分かんない！」

「僕も！」

「あははははははは」

心から可笑しそうに無邪気に笑うレ級とヲ級を前にして、提督を守るように立ちはだかつていた赤城は顔をひきつらせながら見ていた。

「……」ピクピク

「落ち着け赤城」

「分かってますよ。分かってますけど、でも……」チラ

キヤツキヤツ

「……」イラ

「赤城さん落ち着いて」

加賀も弓に手を伸ばそうとする震える手をなんとか我慢している赤城を宥める。

壁側には長門、叢雲、初春が立っており、その様子を苦笑交じりに見守っていた。

「ま、今回は仕方ないだろう」

「はあ……姫や鬼にも楽な戦いはした事ないのでいきなり敵の本大将だもんね。そりや緊張もするわよ」

「まあよいではないか。今回は和解の場なのであろう？　なればそう構える事もないじゃろ」

それぞれ落ち着いた様子で冷静な意見をする長門達に、提督はいつも通りの固い表情で油断を感じさせない声で言った。

「和解ができれば、な。最悪でも和睦にまで持つていかなければ本部との交渉は到底無理だろう」

「む、姫はそんなに分からず屋なんかじゃないよ！　前とは違うんだから」

「どうやら会話が聞こえていたようだったレ級が頬を膨らませて提督の言葉に抗議する。」

「前はそうだったのか？」

「ちよつとね」

「直ぐ怒るから怖かったよね」

提督の問いにヲ級とル級はあつさりと自分たちの上司を擁護する事なく、反対に下手をすれば疑心感を与えそうな事を言った。

「あなた達……レ級がああ言つてたんだから少しは姫をフォローしなさいよ……」
夕級は呆れた顔で溜め息を吐いた。

——それから一時間程した頃。

「大佐、来たよ！」

レ級が元気の良い声でドアを開けてその日最大にして最重要と言える不意の来訪者を連れてきた。

コツコツ……

「……レ級、こちらが？」

「うん！ そうだよ！」

提督の前に静かに一人の女性が部屋に入ってきた。

女性は艶やかで長い銀髪をまるで昔の日本の姫の髪型のようにし、少し乱れた前髪から覗く切れ長の目は非常に落ちていた光を宿していた。

深海棲艦特有の特徴的な青白い肌を包む服装は意外にもワイシャツにジーパンと言つた非常にラフな格好であり、先の印象も合わせて高貴さを醸し出しながらもそれあまり意識させない不思議な雰囲気纏っていた。

「初めまして提督。それとも大佐と呼んだ方がいいのかしら？ 私がこのレ級達の首

領、深海棲艦日本攻撃群南方群司令の鬼姫だ。角とかは隠したから人間に見えるだろう？」

提督はその雰囲気に飲まれて動揺すまいと努めながら、一応平静を装って応えた。

「こちらこそ初めまして。本日はよく来てくださいました。私がこの基地の提督の大佐です。早速ですが南方群司令……？ 深海棲艦はそんな具体的で明確な軍組織を構成していたのですか？」

「当たらずとも遠からずと言ったところだ。私たちに明確な指揮系統は存在しない。基本的に誰かに従うかは自由意志だ」

「では群司令というのは？」

「少なくとも日本を攻撃する仲間の群れは私を含めて大きく4つ存在する。私はその内の一つの首領のようなものだから、軍人を相手にする話をするには理解し易い肩書だと思つたのよ」

「なるほど。では東と西と北にも鬼姫……貴女のような者が？」

「ミナミ」

鬼姫は唐突に言った。

「は？」

「鬼姫という響きはあまり好きではないし、敬称も腹を割って話す場には相応しくなく

感じる。だからミナミと呼んで欲しい。どうしてミナミなのかは解るな？」

「いや、流石に初体面でありますし。しかも今の段階では不戦の約定を結んだに過ぎない関係ですから……」

「ならん。レ級達だけ個体名で呼んで私だけそうでないというのは気に入らん」

「……ではおに——」

「はっ。」

鬼姫の目が不機嫌に赤く光る。

髪がざわつくように揺らぎ、それだけで部屋の室温がまるで灼熱にまで上昇するのはないかと思わせる程、圧倒的な威圧感をその部屋にいた者は感じた。

「……ミナミさん」

提督は危機を察知した自らの本能に即座に従い、鬼姫の要求を飲んだ。

「あ、それと言葉遣いは敬語じゃなくていい。なんかレ級達と違って差別されているようで嫌だ。私ももう少し話し方を柔らかくするから。あと、さん、もいらぬい」

「……」

「分かった？」

「……分かった、ミナミ」

「よし。それで？ ああ、他の首領についてだったわね」

「……ああ」

「いる、とは思う。だけど実際に会った事はないからね。断言はできない」

「? 会った事はないのにどうして仲間の群れについて知っているんだ?」

「うちには流れ者、元々別の所にいた子も結構いるの。その子たちから話を聞いてきた結果、他にも大きな群れがさつき言った通り3つある事が判ったのよ」

「そうか。ではあ……ミナミの群団の規模についてだが……」

「……総力で動けば国一つ動かすことになる規模だとは思うけど、それでも他の首領には会った事がないからな。他の群れの規模を知らない以上明確にどれ程のものかは答えるのは難しい」

「……なるほど」

「言っておくけど別に庇いだてはしてないからね? 本当に知らないのよ」

「……分かった。実際に本部の面々に顔合わせしてもらう前に確認しておきたかった事は以上だ」

「そう。じゃあ次は個人的、か?」

「ここまで提督の一挙手一投足をまるで品定めをするかのように面白そうに眺めていた鬼姫は、彼の心の裡を見透かしたかの如く薄く笑いながらそう訊いた。

提督はそれに対して主導権を握られている事を悔しく思いながらも、確信を突いてき

た鬼姫の視線から目を逸らすことなく落ち着いて肯定した。

「そうだな……。何故急に和平を結ぼうと？」

「疲れたのよ」

「え？」

あまりにも短い答えに提督は虚を突かれた顔をする。

「疲れたんだ。もう、何かを憎みながら戦うのは」

「……憎み、か」

提督は鬼姫の言葉に何かを察したようだった。

彼は深刻に何かを考えている表情になると、顔の前で手を組んだ。

「大佐たちはもう何となく察しがついているかもしれないけど、私たちは元艦娘よ」

「……」

提督の周りの艦娘達が息を飲む様子が伝わったが、誰一人としてその事実にも動揺する者が出なかった。

「ここもやはり鬼姫の言う通り、知らされずともとも無意識にその答えに辿り着いている者が何人かいるようであった。」

「戦いで沈んだ艦娘がどうして私たちのような存在になるのかは解らないが、生前に軍や司令に対して憎しみや悲しみと言った深い負の感情を持っていた者ほど変わり易い

のは確かだ」

「負の……」チラツ

鬼姫の言葉聞いて提督は無意識に直ぐ近くにいた気になる存在をチラリと見た。

それに対してレ級は何故提督がこちらを見てきたのか解らず不思議そうな顔をし、ル級は反対に恥ずかしそうに眼を逸らした。

「え？ なに？」キョトン

「きやつ。な、なに？」（見つめられちゃった）ポツ

そしてヲ級とタ級に至っては……。

「えっちー♪」

「ヲ級！」

「……」

その負の感情とはあまりにも遠いものを感じさせるレ級達を見て、何とも言えないと言った顔でその様子を見つめる提督に、鬼姫は面白そうに笑いながら言った。

「……ああ、あいつらの事は私もよく分からない。何しろ初めて会った時からあんな感じだったからね。まあ恐らくそういった感情以外にもどうしても成就したい目的があったりすると変わるのかもね」

「なるほど……。因みに何故疲れたのか訊いていいか？」

「あいつらの所為」

鬼姫はにべもなく即答した。

「……」（やはりか）

「その顔、予想は着いているみたいね。そう、レ級達よ」

「え？ 僕達？」

「あなた、自分で姫にいろいろ頼んでたの忘れたの？」

ヲ級を叱っていた夕級が今回のこの機会を作った立役者たるにも関わらず、自覚が全くない顔をするレ級に呆れながら言った。

「夕級、それはちよつと違う。確かにそれもあるけど、一番の理由は普段からお前達の姿を見ていたからよ」

「え？」

「わたし達？」

ル級とヲ級も不思議そうな顔をする。

「そうよ。大多数の仲間が人間、特に海軍に強い敵意を持っていたのに対してレ級達は何故か最初からそういうものを全く持っていなかった」

「ああー」

レ級が鬼姫の言いたい事を理解したらしく、軽く手をポンと叩く。

「だというのにいざ行動するとなるとこいつらは全く迷いがなく、何かこう仕事と割り切つて淡々とこなしていた様子が他の子たちは明らかに違う気がしてたの」

「ねえ、それつて褒めてくれてるの?」

ヲ級が期待するような目で鬼姫を見る。

「ん? まあ少なくとも今日こうして私がここに来るまでに至つたのは、あなた達のおかげだとは思っている」

「そっか。えへへ、なんか嬉しいなあ♪」

「……」

「変わった奴でしよう?」

「確かに。反論する気は起らないな」

「それから私はレ級達が元々海軍本部の、しかもまだ生きている提督の配下だったかもしれないという事を聞いて。しかも、やっぱりその人間に対して全く負の感情を見せない事に……。何て言つたらいいのかしら、可能性のようなものを感じたのよ」

「なるほど」

「曖昧だけどこれが今日ここに来る決断に至つた動機よ」

「分かった。流石にいきなり納得はできないが南の言いたい事は何となく理解できた

「よ」

「そう。堅物そうな顔してるのに意外に柔軟なのね」

「ふっ、よく言われる」

「それじゃ、一応これで和解成立という事でいいのかしら？」

「少なくとも今の時点ではこの基地のみという範囲に限られるが、実際に成立するとどうなる？」

「取り敢えず今の時点から私の一派は全て生息する海域での敵対行為を停止し、危害を加えられない限り静観に徹する。残念ながら大佐の基地は私が幅を利かせている海域じゃないからその恩恵には預かれないけどね」

「いや、十分だ。それだけで直ぐに本部は先ず異変に気付くだろう」

「それを本番への足掛かりに？」

「そういう事だ」

「分かったわ。じゃあこれ以降の段取りについては大佐に任せる。私の出番が必要なきはまた適当にレ級達に言っ」

「言っ」

「言っ」

「い、い……い！」

「ル級、無理しないの」

「……了解した。では」スッ

鬼姫は提督が差し出してきた手を最初不思議そうに見ていたが、その意図を理解すると初めて温かい笑顔を彼に向けてその手を握った。

「……ふふ、頼んだわよ」

第61話 「指名」

「大佐、どうして荷物をまとめてるんですか？」

「ん？ ああ、国に帰るからその準備をしてるんだ」

「え？」

「ああ、そういえば話してなかったか。前の作戦が終わったらちよつと国に帰る予定でな」

「国……日本に、ですか？」

「ああ。急で悪いが叢雲たちには言っておく。基地の事は頼んだぞ」

『国に帰る』『基地の事は頼んだ』

何気ない一言だったが、提督のその言葉は秋月にある結論を連想させて激しく動揺させるのに十分な効果があった。

「基地の事って……。そ……。あ……。それは……。もしか……。その……。」ジワ

「秋月？」

提督は背後で異変を感じ、振り返るとそこには目に涙を溜めて今にも泣きださんとしている秋月がいた。

「……っ」ダッ

「……？」

状況が理解できずに戸惑った表情をする提督に、秋月はついにその場にいる事が堪え切れなくなりその場を走り去ってしまった。

提督はその背中を呆然と見つめる事しかできなかつた。

「長門さん！ 加賀さん！ あ、良かった金剛さんも！」

基地内の喫茶店で軽食を食みながら憩いのひと時を過ごしていた長門達は、酷く狼狽した秋月の声に一齐に振り向く。

「ん？ どうしたんだ秋月。血相を変えて」

「大丈夫？ 落ち着いて」

「Oh どーしたノ？ 何かあツタ？」

「大佐が……大佐が……」フルフル

「大佐が？」

「どうかしたのですか？」

「n？」

「大佐が国に……日本に帰っちゃうんです!!」

「は？」

「え？」

「What？」

「大佐が……大佐が……いい、いなく……う……え……っ」

突然の報告に長門達は目に点にする。

そして、そんな一同の前で秋月は、今度こそ自分が知った事実には耐え切れなくなつてその場に泣き崩れた。

「まあ落ち着け。ほら」ヨシヨシ

「大佐が日本に？ 本部に立ち寄る用でもできたのかしら？」

「う……ぐす。ちが……違ふと思います。き……基地のこと……は、頼んだつて」

「H A A A A A A !？」

「何ですつて……？」

「ほう？」

新たな事実には金剛と加賀が動揺の声を上げる。

幸いに長門はまだ普段通りだった。

「多分大佐は本部に着任になるのではないでしょうか……。だから新しい提督が来るまで基地の事は……」

「それは聞き捨てならないネ!! ちよつと大佐を search してくるヨ!」
「私も付き合います。可及的速やかに、即刻真実を確認する必要があります。最優先事項です最優先事項ですき……」

「おい、待てお前達まで動揺してどうする。おちつ……」

「私も行きます!」

「G o o o o o o o o d ! 行くヨ!」

「了解」

「はい!」

「おい、ま……」

バタンツ

「……行つてしまった」

「長門さん?」

「龍鳳」

一人残された状況に啞然としている長門が声にした方を向くと、そこは喫茶店の入り口からひよこりと顔を出して不安そうにこちらの様子を窺っている龍鳳がいた。

「どうかしたんですか? 加賀さん達。何だか凄い勢いでしたけど」

「んー……」（これはまだ広める段階ではないな）

「長門さん？」

「ん？ ああ、悪い。何でもないよ。ちよつとゲームでつい熱くなつてしまっただけだ」

「ゲーム？」

「連想ゲームだ。出題者がヒントを出してそれを当てるのがルールでな。金剛が言った

ヒントがどうしても納得できないとか言つて実際に本人も含めて確認しに行つたんだ」

「はあ……なるほど」

「はは、まあ金剛はともかく、加賀や秋月のあんな姿を見れば驚くのも仕方ないな。あい

つらも根は無邪気という事なんだろうな私みたいに」フンス

「え？」

「ん？ なんだあ？ 龍鳳。私は無邪気には見えないか？」

つい反射的に疑問の声を上げてしまった龍鳳に長門は面白そうに笑い掛ける。

「あ、いえ、そんな事は！」アセ

「ふふ、気にするな。ちよつとからかっただけだ」

「ええ……もう、驚きました。でも正直に言うとなつたしは長門さんは、無邪気というより

カッコイイと大人という感じがします」

「ほほう？ それはそれで光栄だな。だがな龍鳳、私だつて結構無邪気で純情な乙女

「なんだぞ?」

「え?」

「私はカワイイものが大好きなんだ。だから部屋にはヌイグルミやハニワがだな」

「え? は、ハニワですか? ハニワってあの埴輪ですか? ヌイグルミは分かります

けど、ハニワ……」

「ん? 可愛くないか? あのつぶらな瞳とか」

「ん、ん……」(瞳何て無いよ。空洞だよ……)

「ふむ……龍鳳には一度、可愛らしさについてじっくり……」

「えっ」

「ふふ、冗談だ」

「は、はあ……」(長門さん……この人だけは本当によく分からないなあ)

「ま、そんな事よりだ。龍鳳、ちよつと訊きたいんだが?」

「あ、はい。なんででしょう?」

「大佐が何処にいるか知っているか?」

「大佐、出立の準備完了しましたよ」

堤防の上で釣りをしている提督に大和が後ろから声を掛けてきた。

「ああ、すなまないな大和」

「いえ、このくらい。それで、どのくらい滞在される予定なんですか？」

「ああ、その事なんだがな。実は今度の休暇は艦娘の随伴も何人特別に許可もされているんだ」

「え？」

「どうだ？ お前さえよければ一緒に来るか？」

「そ……いい、いいんですか!？」ズイ

大和は不意の誘いに目を丸くしたかと思うと、今度は真剣な顔をして提督に迫る。

「予め連れて行く奴が決まっていれば前と違って騒ぎも大きくならないだろうしな」

「あ、なるほど。でも、そのお誘い……いえ、好機逃すわけにはいきませぬね！」

「ん、それじゃあ？」

「はい！ 是非ご一緒させてください！」

「よかったここにいたか」

「おとーさん！」

自分達に掛かってきた新たな声に大和と提督は振り向く。

するとそこには、長門と龍鳳堤防の下から彼らを見上げていた。

「ん？」

「あ、長門。それに龍鳳ちゃん」

「いや、ここにいて良かった。今頃基地の中は凄い騒ぎだろうからな」

「何かあったのか？」

「ま、それは後で話す。それより大佐ちよつと小耳に挟んだんだが、帰国するのか？」

「え？」（何それ。聞いてない！）

長門に着いて来ていた龍鳳は思わぬ事実に驚いた顔をする。

もしかして加賀達が血相を変えていたのはそれが理由だったのでは？

龍鳳はここに来てようやく長門が自分に教えた連想ゲームが彼女なりの方だった可能性に気付いた。

「耳が早いな。秋月に聞いたか？」

「まあな。だが、ふむ……二人が話していた感じから察するに今回の帰国は本部に用事があるわけではなさそうだな」

「ああ。なんでも親父たちに特別に用意された特別な機会らしい。つまり純粋な休暇だ」

「なるほどな……理解した。前の作戦の成功報酬みたいなものか？」

「勘が良いな。そう聞いている」

「ふーん……」

「長門？」

「あ、すまない。大佐、大和も一緒でいい。ちよつと話が……」

「——というわけだ」

「……なるほど」

「あー……」

「……」ヒシッ

長門から話を聞き終えた提督は腕を組んで考え込む沈鬱な顔をしていた。

その傍らでは大和が何かいろいろと納得した様子で半笑いを浮かべ、そして何故か龍鳳は彼の足にまるで親から離れる事を拒む子供の様ひしりとしがみついていた。

「秋月の誤解が広まっていくわけか。いや、俺も断片的に情報を与えるような話し方をしたのが悪かったな。それと龍鳳離れろ」

「やー」

「……まああいつらの誤解は俺が直接解く。長門、報告ありがとう」

「ああ、気にするな。私は最初からなんとなく予想してたしな。それよりだ」ズイ

話し終えた長門は屈託なく笑いながら提督に近づく。

「ん？」

「他に誰を連れて行くつもりなんだ？ 後何人くらい？」

「確か3人だったかな。丁度いい、長門おま……」

「わたしも！ お父さんわたしも連れて行って下さい！」

提督が目の前の女性を誘う前に龍鳳が置いて行かれまいと声を上げる。

「分かった。連れて行ってやるから離れる」

「……本当ですか？」 ジツ

「ああ」

「……っ」 パアツ

ヒシツ

「~~~~♪」

「……」

「あはは、結局何も変わらなかったな」

「……」（可愛い……）

自分も連れて行ってもらえる事に安心した龍鳳は、歡喜の笑顔を浮かべると更に今度

は提督の腕に嬉しそうに抱き付いた。

その屈託のない無邪気な反応に母性をくすぐられた大和はほんわりとした顔でその光景を眺めていた。

「で、長門どうだ？」

「お？ 最後の一人に私を誘ってくれるのか。そいつは嬉しいな。だが、ふむ……」

提督は流石に長門が即答で快諾するとは予想していなかったが、真剣に悩む様子の彼女を意外に思った。

「どうした？」

「ああ、悪い。大佐、せっかくだがその誘い、今回は辞退させてもらおう」

「え？」

提督と違って恐らく長門が二つ返事で快諾すると予想していたのだろう。

大和と龍鳳は心から驚いた声を同時に出した。

「ん、そうか」

「ああ。誤解しないでくれよ？ 別に嫌なわけじゃない。ただ、大佐が不在の間の基地

の方も気になってな」

「ふむ、なるほど」

「う……」

「あ……」

長門の答えに大和と龍鳳は恥じる顔をする。

どうやら自分の欲求に素直に従った自分を恥ずかしく思っている様だった。

「はは、二人ともそんな顔してくれるな。私だつて最初に誘われていたら行つていたかもしれない」

「長門……」

「長門さん……」

「替わりと言つては何だが大佐、私から随伴を推したい奴がいるんだがいいか？」

「勿論だ。誰だ？」

「ああ、それはな……」

「え!? わ、私ですか!？」

堤防での一件から暫く後の事、既に提督から直接話もあり、誤解が解かれた基地は普段の落ち着きを取り戻していた。

その時に秋月は提督から一緒に帰国の際に随伴しないかと誘われたのであった。

騒ぎの原因といえれば言い方が悪いが、そんな自分を提督が誘つてきた事に秋月は心底驚いた。

「ああ。なが……んんっ」

「？」

「秋月、耳を貸せ」ボソ

「え？ あ、は、はい」

「この前の夢の件からまだお前のことが気になっていな」ヒソ

「あ……」カア

「それで、どうだ？ お前さえ良かったら、だが」

「あ、はい。私でよろしければ！」

金剛「ウう、く、悔しいデス」

秋月が顔を輝かせて嬉しそうに提督と話している様子を、何とも言えないといった微妙な雰囲気で見守る一団がいた。

加賀「でも、大佐の直接の指名なら仕方ないですね。それに今回は1週間の留守。用心の為に戦力は残すという長門さんの考えは理解できます」

金剛「hm…… まあ、そうネ。確かにそれは間違つてはいないワ」

提督「皆、納得してくれて助かる。なに、お土産はちゃんと買ってきてやるから」
背後で囁かれる声に気付きたいのだろう。

提督は声が聞こえた方を振り返り、彼女たちのご機嫌を取ることにした。

隼鷹「大佐、お酒！ 内地のお酒頼むよ！」

深雪「んー、あたしは美味しいのならなんでもいいけど……でも別に食べ物以外でもいいよ！」

敷波「食べ物以外かあ……じゃ、ゲーム、とか？」

愛宕「いいわね！ それ！」

川内「あたしもなんでもいいよ！ でもなるべくなら可愛いのかな」

加古「わたしは元気なのがいいなあ」

あきつ「二人ともあまりにも希望するものが抽象的過ぎるのであります。大佐が困っていますよ」

ハチ「本、お願いできるかしら？」

明石「大佐、私は工具がいいです！ このリストに載っているものをです……あ、これ自作の衛星電話です。ちゃんと2つ用意したので追加をお願いしたい時はこれに掛けます」

提督「分かった分かった。お前たちも他にも欲しいのがあったらこれを使え」

ハニー

提督「じゃあ、行ってくる」

飛龍「はあ、行っちゃったなあ」

提督を載せた高速艇が消えた方の海を眺めながら飛龍がぼつりと言った。

神通「寂しいですけどお土産を楽しみにしましょう」

長門「そうだな。ま、久しぶりに実家に帰るんだ。両親とも積もる話もあるだろう。偶には大佐もゆくりさせてやろうじゃないか」

金剛「エ？」

不知火「は？」

ざわざわ……

長門の言葉に一部の娘たちがピクリと反応する。

その反応はやがてざわめきとなり、さざ波の様に広がっていった。

長門「ん？ 皆、どうしたんだ？」

榛名「あの一、長門さん」

榛名がおずおずと手を挙げながら質問してきた。

長門「ん？」

榛名「大佐は実家へお帰りになるんですか？」

長門「そりやそうだろう。1週間時間あるんだぞ？ そりや実家にも帰るだろうし親

にだって会うだろ」

まるゆ「……………！ 確かに、考えてみれば！」

榛名「大佐の……………」

不知火「ご両親……………」

加賀「不覚でした……………」

武蔵「……………お、おい長門」

場の雰囲気にも不安なものを感じた武蔵が長門を小突いて異常を知らせる。

長門「むう……………これはしまったかもな」

加賀「追います。直ぐに準備を」

鳳翔「え？」

金剛「大佐の p a r e n t s……………！ s h i t！ s h i l l i l l i l l i t！！」

陸奥「あらあら……………」

長門「……………叢雲さん、初春さん」

暴走しようとする金剛達を自分たちで止めるのは些か部が悪いと考えただろう。

長門は助けを求めるように叢雲と初春を呼んだ。

さん付けで呼ばれた叢雲と初春が面倒そうな顔で振り返る。

二人は古参ではあるが基本的に他の駆逐艦と同じ扱いを本人達の意味で望んで受け

ている為、榛名の様に大人しくて真面目な性格の娘を除いて普段は長門たちからも呼び捨て呼ばれている。

だが、そんな戦艦たちからさん付けで呼ばれる時、それは立場を明確に意識した彼女たちへの本当の意味でのヘルプだった。

叢雲「はあ、仕方ないわねえ……」

初春「ふふふ、ほんにの。ま、ここは凶々しく先輩面をしようか、の？」

叢雲と初春は、駆逐艦とは思えない頼もしい雰囲気醸しながら苦笑交じりに暴走の根源へとしっかりとした足取りで向かっていった。

第六章 「提督の帰郷」

第1話 「失念」

「しまった……」

ビュゴアアア!!

凍てつく冬の風が吹きすさいでいた。

その冷たさは軍服のままだった提督は勿論、基地にいた時からそのままの服装だった大和達を容赦なく襲った。

「さ……寒……い！」

「う……」

「二人とも私に身を寄せて。た、大佐もよろしければ……」ポツ

「いや、俺はいい」

「そうですか……」 シュン

（しまった。日本は今冬だった。加えて大和達をあいっらの薄着の制服のままに来させ

てしまった。寒いどうのこうの以前に艦娘の存在はまだ機密扱いなのにこれでは……」

「お、お父さん寒いよ……」

「……っ」

「もつとひつついて」

（本部に立ち寄るのを後にしたのは失敗だったな。まさか鹿児島までこんなに寒いとはな。これなら素直に伊丹から直行便に乗ればよかった）

「……」 ジツ

三人「？」

（この中で一番幼く見えるのはやっぱり秋月だな。こいつなら一緒に居ても親子か……歳の離れた妹くらいには見えるだろう。龍鳳は見た目が中学生くらいだから三十路の俺が連れて歩くには世間の目がきになる。大和は上着を貸してやっても足が出てしまうからな）

「秋月」

「あ、はい」

「悪いが船の中で二人の服のサイズを大凡でいいから計ってきてくれ。服を買って来る。秋月は計り終わったら俺に同行をして欲しい。俺の上着を羽織れ、足は少し出でしまうがお前からしたら十分に大きいからある程度寒さを凌げるはずだ」 バサッ

「あ……は、はいっ」

「……え」

「あう……」

「さ、皆さん船の中に行きましょう！」

「え、ええ……」（うう……いいなあ）

「はあい……」（秋月さんいいなあ……）

「なるべく早く頼むな。俺も正直この寒さは堪える」

「分かりました！直ぐに！」

——数分後

「お待たせしました」

「寸法は大丈夫か？」

「はい。大丈夫です」

「よし、行くか」

「はい！」

く 港近辺の街服屋

「わあ……いろんな服がありますねえ……」

「服屋なんだからこれくらいはな。まあ俺もあつちでは殆ど制服しか着ていないから偶にこういうのを見ると何とも言えない気になるな」

「あの、大佐」

「ん？」

「私が選んでいいんでしょうか？ その、センスにはあまり自信は……」

「大丈夫だ。少なくとも男である俺よりかはあるさ。そうだな、ここは敢えてデザインには拘らずにお前から見て防寒性がありそうなを選んでみてはどうだ？」

「機能重視ですか」

「そうだ。それならセンスの事も少しは言い訳がたつだろう」

「なるほど分かりました。それでは……このコートとこのマフラーと……。あ、同じ物は流石に駄目ね。デザインが違う物で同じくらい暖かそうなのは……」

「……」（やつぱり女だな。服を選ぶのが楽しそうだ）

——三十分後

「4万680円になります」

「えっ」

「じゃあこれで」スツ

「4万1千円頂戴します」

「ありがとうございます」

「……」

「……どうした？」

船へと戻る道の途中で提督は秋月が先程から落ち込んだ様子で口数が少ない事に気付いた。

「あ、いえ。お金を使い過ぎてしまったと……」

「ん？ ああ、大丈夫だ。最初から俺が払うつもりだったからな」

「い、いえそういうわけには……!」

「これは強がりでも見栄でもない。単に俺が普段から金を使わないからこれくらい出費する余裕は十分にあるんだ。だから気にするな」

「で、でも」

「今はいくら安く買おうとしても需要がある時期だからな。そう簡単にはいかないものだ。ならここは開き直って質を重視するのも選択肢の一つだ」

「は、はい……」

「……とここで」

「はい？」

「まだ寒いかな？ 俺の服……」

「あつ」

「……服が大きいから歩き難いと思ったんだが、大丈夫かな？」

「あ、はい。大丈夫です！ これ全然邪魔じゃありません！」フリフリ

「そうか。ま、俺も今は着替えたしな。使わなくなったら袋に入れておいてくれればいい」

「分かりました。ありがとうございます！」

「ああ」

く港

「悪い、待たせた。服を買ってきたぞ」

「お待たせしました」

「あ、おかえりなさい。わざわざありがとうございます」（あ、まだ大佐の服着てる……）

「わあ、これわたしの服ですか。暖かそ〜♪」（いいなあ、お父さんの服……）

「それじゃ、俺は外で待っているから。準備ができたら出てきてくれ」

「「分かりました」」

↳ 船内

「秋月ちゃん」

「はい？」

「その……もし良かったらなんだけど」

「？　なんででしょう？」

「その大佐の服、私にもちよつとだけ貸してくれない？」

「っ！　あ、秋月さん！　わ、わたしも！　龍鳳にもお願いします！」

「え？　これですか？」

「うん。私もそれを着ればより大佐を身近に感じられる気がして……」　ポツ

「わ、わたしも！　わたしもお父さんの服着てみたいです！」

「ふふっ、勿論いいですよ」

「ありがとうございます！」　ペアッ

「ありがとうございます！」　ペアッ

—— 数分後

「大佐、お待たせしました」

「お待たせして申し訳ございません。これ暖かいですね。ありがとうございます♪」

「似合いますか？」クルリ

「ああ、似合ってるぞ。ん？ 秋月、もう服はいいのか？」

「あ、はい。ありがとうございます。服はもうこの袋に大佐のズボンと一緒に入れてあります」

「そうか」（気のせいとか大和と龍鳳の顔が少し赤い……？ 服が暖かくて嬉しいんだろうな）

「よし、それでは行くか」

「ここが大佐の故郷ですか」

「いや、違う」

「「え？」」

「俺の故郷はここから更にフェリーに乗る」

「フェリー……鹿児島本島ではないのですね」

「そうだ。実は大阪で飛行機に乗れば直行だったんだが、今の日本の気候の事をすっかり忘れて旅行気分を重視してしまっただけな」

「ああ、それで港に着いた時あんなに驚かれていたんですね」

「まあそもそも最初から本部に寄る予定もなかったというのに、俺はともかくお前達に私服に着替えさせてなかった事自体が間違いだったんだがな」

「んー、でも結局私服でも服はあつちの氣候に合わせて夏用だったから寒さは変わらなかったかも？」

「あ、それは言えてますね」

「とは言ってもあつちでは冬物の服は買えなかっただろうな。結局ここで買う事になるのは変わらなかつただろう」

「お父さんの故郷はなんていう所なんですか？」

「ああ、俺の実家があるところはな。ん？ 実家……」

提督は実家と言う言葉に何やら言いようのない不安を覚えた。

自分は何かを忘れている。

まとまった日数の休暇だ。

それを帰郷に使うこと自体は間違いではない。

問題なのは……。

「……」(こいつらを親にどう紹介すればいいんだ?)

「大佐？」

深刻な顔で悩む顔をし始めた提督を大和達は不思議そうな顔で見つめていた。

第2話 「注意」

「ん？ 携帯？ 衛星の方じゃない。普通の方か。もしもし？」ピツ

『あ、出たわね。もう着いたの？』

スピーカーからは聞き覚えのある声が聞こえた。

「ああ、君か。着いた。今鹿兒島だ」

『……は？』

一瞬張りつめた緊張を伝える沈黙の後、啞然とした彼女の声が返ってきた。

「今、船でようやく鹿兒島に着いたところだ」

『……え？ なんで？ なんでもう鹿兒島にいるの？ だって本部には来てないじゃない』

「い」

「ああ、本部に寄るのは後にしようと思ってな」

『……！』(しまった！ こいつ……こいつは……ああ、もう！ そうよ！ こいつはそこ

ういう奴だったわ！)

本部の執務室で彼女は口に手を当てて自分の迂闊さを恨んだ。

『……？』

その後ろで餅を食べていた武蔵は彼女の動揺ぶりを不思議そうな目で見ていた。

「……? どうかしたか?」

『……迂闊だった』

「え?」

『油断した……』

「おい、どうした?」

聞き慣れない彼女の恨めしそうな声に、何故か波乱を予感した提督は僅かに戦慄した。た。

『……なんでもない。はあ……えーと、今鹿児島にいるってことはそのまま田舎に行くのね?』

「ん? ああ、そうだが」

『そ、私も行くから』

「は?」

『前に一回行った事あるから実家の場所は覚えてるわ。そこで間違いないでしょ?』

「いや、そうだが……別にわざわざ来なくていいぞ? 後の方にはなるが、本部には寄る

わけだ」

『行くから?』

有無を言わさぬ迫力があつた。

これは断れない、止めてはいけない。

提督はそう直感した。

「……分かつた」

『じゃ、着いたらまた連絡するから』ピツ

「……」

先程とは違う雰囲気です再び沈思する表情を浮かべる提督に大和達は心配そうに声を掛ける。

「大佐?」

「お父さんどうしたの?」

「大佐……?」

「いや、なんでもない。……それより、そうだ。どうしようか」

思い付きとはいえこれも重要な事だ。

提督は自分の不安を彼女達に悟らせない為に話題を変えることにした。

「どうしたの?」

「いや、実家に帰る以上親にお前達の事を説明しなければならぬ。それをどう言つたものかと思つてな……」

「ご両親に紹介……!」

提督の言葉をまるで衝撃的な事実を知つたかのような顔で目を見開く秋月。

「いや、説明だ。まあ意味は同じ……か?」

「大佐の……お義父様とお義母様……!」

「大和……?」(なんだ? なんかあの表情を見ると言葉の意味が違つて聞こえる……?)

「別に悩む必要はないと思います。だつてお父さんは龍鳳のお父さんですから」

「……」(これが一番の問題かもな)

「取り敢えずその事はフェリーの中で考えよう。そうだな、それじゃあ親に会う前に注意し無ければならない事があるからそれを伝える」

「注意、ですか?」

「わ、私大佐のよ、よ……えととして恥ずかしくないように頑張ります!」

「わ、わたしも! 龍鳳も大佐の娘として……!」

「二人とも落ち着け。そういう事じゃない。俺が伝えたいのは父親の性格の事だ」

「大佐のお父さん?」

「そうだ。俺の親はな。母親は問題ないんだが、父親の方はなんと言うかこう……かなり昔気質でな」

「厳格、ということでしょうか」

秋月がおずおずと聞く。

「良く言えばな。悪く言えば頑固……いや、偏屈か？ まあともかく難しい性格なんだ」
「どのような性格なのですか？」

提督の父親という貴重な情報をより詳細に確かめる為に大和が真剣な表情で秋月の後に続いて質問してきた。

「特徴を伝える良い例を挙げるとすれば……。そうだな……大和、襖の溝、鴨井と言うんだが。それと敷居を含めた木の部分があるだろう？」

「え？ ええ、はい」

「それを踏むとな、凄く怒る」

「えっ」

「そ、それだけで……？」

秋月と龍鳳はその一言で一瞬で不安そうな顔になった。

「ああ、流石に家族以外の、女性にはしらないと思うが、俺が子供頃それをついしてしまおうと物がよく飛んできた。硯や茶碗とかな」

「も、物が……」

秋月は、自分の目の前に硯や茶碗といった、当たれば痛いだけじゃ済なそうな固い物が飛んでくる様を想像して冷や汗を垂らした。

「あと、元々無口なんだが、食事中は完全に無言だ。話し掛けられるのは勿論、食事中に会話が混ざるのも嫌う」

「無言の……食事……」

いつも提督や仲間と食事を摂る時は楽しい雰囲気なのが当たり前であった龍鳳にとつて、会話がなない食卓の風景はとても想像が難しかった。

「と、まあこんな気難しい性格をしているわけだ。そんな親父にどうお前達をどう説明するか……。ああ、これはフェリーで考えるんだったな。取り敢えず行こう」

「は、はい」（提督のお義父様……かなりの難敵みたいね）

「硯……茶碗……」（ちゃ、ちゃんとご挨拶できるかな……）

「こ、怖そう……」（お父さんのお父さんなのに凄く怖そう……）

提督の説明を聞き終わった大和達はまだ見ぬその父親に言いようのない不安を感じるのであった。

第3話 「自己責任」

「ただいま」

言えの前で花の世話をしていた女性は、提督の声が特に大きかったわけでもなかったにも関わらず、その言葉に直ぐに反応を示し、玄関先に佇んでいる提督を見て目を丸くして驚きの声をあげた。

それは、その女性が提督と親子の絆を持つている事の何よりの証拠に他ならなかった。

「え？ あらー忠哲！ はあ……どうしたのー？ 連絡もせんでー」

「ただてつ？」

秋月は見知らぬ女性が提督の事を聞き慣れない言葉で呼ぶのを不思議そうな顔をした。

提督は特に表情を変える事無く正面を向いたままポツリと答えた。

「俺の名だ」

「えっ、大佐の……」

「名前……」

秋月と大和はそれを初めて知ったようだった。

龍鳳も目を丸くして提督を見上げていた。

「お父さんの、名前……」

秋月達はその言葉に何か重大な事を知ったかというようにハツとした顔をした。

それには理由があつた。

海軍にはある規則があつた。

それは公式な物ではなかつたが、提督と艦娘との間に暗黙的なものとして海軍が艦娘を兵器として使い始めた当初から存在していた。

『艦娘は、提督に本名を訊く事これ禁ず。故にこれ、知る事も不能ず。また、例え知つたとしても、その名で提督を呼ぶべからず』

これは提督と艦娘が例え深い絆で結ばれていたとしても、時として必要とあらば私情を捨て、兵器として扱う事を徹する為の信条のようなものだった。

良く言えば軍人としての心構え、悪く言えば人間と艦娘を同列の存在として意識しないための差別的線引きと言えた。

だが提督は、艦娘達に自分の本名を知られ、また声に出して言われてもここでは特に注意する事はなかつた。

「気にする事はない。というか寧ろここでは大佐ではなく、名前で呼んでくれ」

「大佐を名前で……!」

秋月が目を輝かせて再度確認する様に提督を見た。

「そ、それはまだ早くないですか?」

続いて大和が何故か照れながらそんな事を言う。

「龍鳳はお父さんはお父さんなので……」

「お父さん?」

提督の母（*以下母親）がその言葉を聞き逃す筈が無かった。

彼女は耳聴く反応し、そこで初めて提督が連れてきた少女達に注意を向けた。

「……っ」

提督はハっとした。

しまった、散々対処せねばならない事だと解っていた筈なのにここにきて完全に失念
てしまっていた。

提督は自らの油断を地獄に落ちる思いになりながら呪った。

「忠哲、お父さんって?」

「……ただの呼び名だよ母さん。だからどうか悪い誤解はしないで欲しい」

「ふくん……」

母親はそう言いながら改めて大和達を見た。

(背の高い娘は20代か手前くらい？ 他の子は……どうみても中学生か小学生よねえ……)

「……」

「忠哲」

「ああ」

「取り敢えず疲れたでしょ。入りなさい。お連れの娘達もどうぞ遠慮しないでいいよ」

母親は取り敢えずその場はそれ以上追及することなく笑顔になると、提督と大和達を笑顔で出迎えてくれた。

その優しさと、彼女が提督の母親だという事実には、大和が緊張しながら挨拶をしようとする。

「あ、ありがとうございます。お、おか……」

「あつ、ズルいです大和さん！ お、義母様わ、私秋月って言います。どうか末永……」
大和にイニシアティブを握られまいと秋月が負けじと大和が挨拶を言い終わる前に横から入って来た。

「ちよ、ちよつと何を言ってるの秋月ちゃん!？」

そして、自分より秋からかに踏み込んだ発言をしようとした秋月に大和は慌て、ここに帝国最高クラスの防空駆逐艦と最強クラスの戦艦との提督争奪戦もとい、痴話喧嘩が

発生した。

ギャー、ワー！

「……おとーさん？」 キョトン

呆然と立ち尽くして普段より多く汗を掻く提督に、一人だけ大和達の話に着いて行けず不思議そうな顔をしていた龍鳳が提督の袖を引っ張って事の状況の説明を求めた。

「……」

だが提督はそれに対して言葉を返すことができず、頭を巡る言い訳の嵐から最適な言葉を探しながら龍鳳の気を紛らわせるために彼女の頭を撫でる事しかできなかつた。

母親はその様子を見て愉快そうに笑い、改めて提督達に家に入る様に促してきた。

「つ、あははは。賑やかな娘達だねえ！ ほらほら、早くあがつて。おかえんなさい」
「あ……ああ……。ただいま……」

提督はそんな暖かい母の言葉に感謝しながらも、これから自分を待つであろう絶望的な状況にどう対処するか考えるので精一杯だった。

この時点で彼は、既に帰郷できた事に対しての喜びを霧散してしまっており、代わりに言葉にできない程の精神的な疲労に襲われていた。

そう、地獄は今始まったばかりなのだ。

ピシッ

提督の実家のとある一室で一人将棋の駒を指して詰め将棋をしている初老の男性がいた。

「……」

男性は玄関の方から聞こえてくる賑やかな声に一瞬眉間に皺を寄せてその方を向いたが、直ぐに盤上に目を戻し続きをやろうとした。

だがどこで間違ったか遊戯はそこで詰んでしまっていた。

「……っ」

ポイツ

男性は小さく舌打ちして歩の駒を投げると、傍らに置いてあつた酒が入つた一升瓶を片手に掴んで声のする方向に投げた駒の代わりに自ら『歩』を進めた。

第4話 「緊急事態」

「……っ、この……!!」

「あんたダメ！」ガシツ

「放せお前っ、放さんかああああつ!!」クワツ

秋月・龍鳳「ひっ」ダキツ

大和「大丈夫よ」

凄まじい剣幕でこちらに迫ろうとした提督の父親に、秋月と龍鳳は恐怖に震え、思わず近くにいた大和に抱き付いた。

対して提督は、顔を真っ赤にして理解できない言葉を喚き散らす自分の父親を疲れた目で見ていた。

「!@%#!」

「……」(やつぱりこうなったか)

大和「あの、た……だてっ、様……あ、さん？ こ、これは？」

「まあ、大方予想通りだ」

「と言うと？」

「俺が連れて来たのが女ばかりだったから何か勘違いしたんだろう」

「え？ 勘違い…………？」

「忠哲！ 貴様！ お前ナア！ 自分が今なにを…………！ つ、放せと言っているだろお！」

父親は未だに怒り狂っていた。

母親が必死にしがみついて止めていなければ直ぐにでも提督に飛びつかんばかりの勢いだ。

提督は努めて冷静に静かな口調で父親に語り掛けた。

「父さん、はつきり言わせてもうけど父さんは誤解しているだけだ」

「ああ!？」クワツ

秋月・龍鳳「ふえっ」ダキツ

大和「よしよし」

「誤解ってなんだこら!？ こんな若い女連れてきてこぶつ付きみたいなのも二人もよお!？ 子供なんて言い訳きかんぞ！ 明らかに歳合わないだろうが！」

「…………本当に落ち着いてくれ。俺が娼婦に手を出したと思ってるんだろ？ やめてくれ、本当に。俺はともかく、この子達に失礼だろ」

「…………つ、失礼…………？」

「そうだ。さつきも言った通り誤解しているだけだ。目の前の息子をどうか信じて欲しい」フカブカ

「……」

父親はそこでようやく少し静かになり、土下座をして弁明する息子を冷めつつある頭で見る。

母親もそのタイミングを逃さず、すかさずフォローに回った。

「ほら、忠哲もああ言ってるじゃない。あたしらの子があんたが思ってるような事するわけないでしょ……?」

「……もし本当にしてたら腹を切ってる」ボソ

提督の呻くような呟きが聞こえたのか、父親はやつと落ち着いて怒っていた肩を下げた。

「……まあ……。いい、取り敢えずはまあ……」

「……説明していいか?」

「……悪かった。座れ」

「まず連れてきた彼女達だけど、こちらは大和さん、俺の仕事仲間だよ」

提督は大和達を自分の後ろに座らせて、改めて説明を始めた。

母親はそれに合わせて相槌を打つかのようにポンと手を叩く。

「あら、やっぱり」

「随分若いな……。事務の……お仕事ですか？」

まだ疑念が晴れない父親は、訝しむ目で大和に質問した。

大和は初めて父親に話し掛けられて、驚きつつも何とか受け応える。

大和「え？ あ、は、はい！」

「そうですか。あ……さつきは申し訳ない」

大和「いい、いえ。だ、大丈夫ですから！」

「……それで」

今度は大和の横に並んでいた秋月と龍鳳の方を見る父親に提督は説明を続けた。

「ああ、この二人は大和さんの妹だよ」

「……なるほど」

「思った通りだわあ。あなた達、さつきは怖がらせちゃってごめんなさいね。お名前、聞いていいかしら？」

秋月「あ、秋月と言います！ 初めまして！ よろしくお願いします！」

龍鳳「龍鳳……です。あの……よろしくお願いします」

秋月と龍鳳はそれぞれ挨拶をしたが、龍鳳の方はまだ恐怖で身体が固くなっている様

だった。

自己紹介する口ぶりもどこかたどたどしい感じが拭えない。

提督の母親はそんな彼女を安心させるように優しい笑顔で言った。

「秋月ちゃんはさつき聞いたわね。龍鳳ちゃん……？ カッコイイお名前ね」

「あ、ありがとうございます！」 パアツ

「ん？ おい、苗字は？」

名前だけしか聞いてなかったのが気になった父親が、当然のことを聞いて来た。

提督は苗字の事までは叶えていなかったので焦る。

「苗字？ あ……苗字な。苗字は、あ……」

大和「クレです」

不意に大和が発言した。

父親は聞き慣れない苗字に眉を潜める。

「クレ？」

大和「はい。日暮れの『暮れ』という感じ一文字で暮です。お義父様、お義母様、改めて自己紹介致します。お初にお目にかかります。暮大和と申します」

（なるほど。呉工廠から取ったのか。……なんか親父たちの呼び方に違和感を感じるな）

「暮さんか……」

「はっ」

最初こそ訝しむ気持ちがあつたものの、父親は丁寧な大和の態度に警戒心を解くことにした。

居住まいを正すと、改めて大和の方に向き直り母親と一緒にお辞儀をしてきた。

「忠哲の父、哲刻です。こっちは妻のはなえです。皆さん先程は本当に失礼しました」ペ
コ

「ごめんなさいね」ペコ

大和「いい、いえ。本当に気にしないでください！」

秋月「そうです。私達はもう大丈夫ですから！」

龍鳳「……！」コクコク

「ありがとうございます。……で、忠哲よ」

「ん」

「今日はどうした？」

当然の質問である。

だが、それには容易に答えられる。

提督は落ち着きを取り戻した態度でゆっくりと答えた。

「まあ、久しぶりの帰郷なんだけど、大和……さん達に仕事でお世話になってるからちよつとお礼の代わりに連れてきたんだ」

「ふむ……」

「本当にただのお礼だよ。誘ったんだから経費は全部俺持ちだ」

大和（ただの……）シユン

秋月（お礼……）シユン

龍鳳「？」キョトン

「ま、そういう事なら問題ないか。なあ」

「ええ、そうね。一時はどうなるかと思っただけど、波風立たなくて良かったわあ」

「問題？ 波風……？」

提督は何故か明らかに違う事で安堵の表所をする自分の両親が気になり、探るような顔をする。

「丁度良い。その内話すつもりだったからこの際に言うがな」

「……ああ」（凄く嫌な予感が）

「忠哲、あんたもう30でしょ？ 軍人さんの仕事ばかりやってたら良い人探すのも難しいと思っただけ」

「……」（まさか）

「そうだ。見合いだ。相手を探しておいた」

大和・秋月「!?」

龍鳳「おみあい?」

「……まあ、うん」

キョトンとした顔で提督にその意味を乞う龍鳳だったが、残念なことに提督はそれに答えてやるほどの余裕が既になかった。

「いや、俺も無理矢理とは思ってない。だけどな、探した相手は全く問題ないと思うんだ」

「そうなの。あ、別に本当に無理矢理じゃないのよ? でもお父さんが言っていた通り本当にピッタリだと思うから!」

「ピッタリって……どうしてまた、妙に自信があるような?」

「そう、それだ。その相手な。お前の知り合いだ」

「え?」

「前に陸軍で働いていた人なんだけど。覚えてない? あの子、あなたと顔馴染って言うってたわよ」

「陸軍の……顔馴染……。もしかして」

提督の脳裏にある人物の顔が浮かんだ。

まだ士官学校を卒業して晴れて軍人となつて間もない頃だ。

「思い出したか？ 信条要さんだ」

「あ、ああ……確かに覚えてる。しかしまたなんで、彼女なんだ？」

「え？ なんてつてお前、あの子はお前に言伝してあるからその気になつたら必ずここに帰つて来るはずだつて言つてたんだぞ？」

「言伝？ いや、覚えが」

「ええ？ 忘れてるだけじゃないの？ 要ちゃん、ちゃんと言伝の代わりに大事な物あなたにあげたつて言つてたわよ？ ほら、なんでしたつけお父さん、えつと……」

「認識票だ。裏にこつちの住所を書いておいたつて」

「認識票……裏……」

提督は更に思い出した。

彼女が軍を辞める時に自分と話した時の事を。

「やあ、まさか生まれの土地が一緒だったとはな。ここに來たつていう事はもうあの子には会つてきたんだろ？」

「……」

提督はかつてない程焦りの汗を流していた。

まさかこんな展開など予想などしていなかつたから。

大和・秋月・龍鳳「……」

後ろの三人はそれぞれ何か言いたそうにこちらを見ていた。

龍鳳は単純に状況が理解できていないようなだけみたいだったが、他の二人は違った。

大和と秋月は今にも泣きだしそうな顔でこちらを見ていた。

(切り抜けなければ、どうする……)

提督は心中、頭をフル回転させる。

様々な方法を模索はしてみるものの、その過程で彼女もここに来ることを思い出した。

「……」

目の前が真つ暗になりそうだった。

災難というレベルではない、これは自分の名誉の大事に繋がりがねない。

考えなければ何か、何かを……。

提督がそうして死にそうな顔で五里霧中の中を模索していると、災難の一つが早速自ずから彼に寄って来た。

「ごめんください……って、おい！ おま……来てくれたんだ！」

明るい声に感動で滲み出た涙で僅かに震えも感じた。

提督がその声に反応して、後ろを見ると、そこには見覚えがある褐色の肌に相変わらずのはねっ毛が特徴的な、陸軍のかつての知り合いがいた。

第5話 「一時撤退」

「忠哲、来てくれたんだね！」

ギユツ

「……」

大和・秋月・龍鳳「」

「ふ……」

「あらあ、はははは」

元日本帝国陸軍「准将」信条要（しんじょう かなめ）は歡喜の笑顔に涙を浮かべながら人目も気にせずに目の前の提督に抱き付いた。

彼女が軍を辞めてからまだ1年ほどしか経っていないので、見た目は軍に籍を置いていた時と比べて髪が伸びているくらいしか違いはなかった。

活発そうな雰囲気、明るい笑顔、引き締まった身体はどれも過去の彼女と何一つ変わっていないかった。

まだ20代前半の彼女が若くして周りから將軍と呼ばれるまでの地位に着けたのは、親類縁者にその軍関係者が多かった事、生まれが旧家で家柄に恵まれていた事などが理

由にある。

だがそれは彼女にとつては不本意以外の何ものでもなかった。

勤勉と努力を美德とする彼女は不本意ながら明らかに回りより早く准将まで昇進すると、そのまま幹部コースに進むとお思いきや、なんと周りの予想を裏切つて前線の指揮官となる事を選んだ。

その結果、出世コースを歩んでいた頃は親の七光りなど仕方のない誹謗中傷を時折受けていたが、現場に自ら出るようになってからは元々持っていた優れたセンスを開化させた。

そしてめきめきと頭角を表し、気付いた頃には最良の前線指揮官のひとりと周りから認められるまでになっていた。

そんな彼女はある日突然軍を辞めた。

理由は、今本人が抱き付いている男にあった。

何がきっかけで惚れたかはよく覚えていないが、彼に好意を抱くようになってからは、軍人としてではなく女として彼に好かれたいと希望を抱くようになり、その結果、軍を辞めて女を磨く” という極端な答えに辿り着いたのだった。

だが、ただ辞めて彼から離れただけでは意味が無い。

自分が離れた結果彼が誰かと恋添い遂げる可能性は否定できなかった。

故に彼女は保険を掛けることにしたので。

認識票を使い、自分の気持ちを贈るといふ行為を。

その結果はどうやら功を奏し、今日の前に来てくれた。

正直言つて、一年程度で自分の前に現れるとは思つていなかったもので、花嫁修業はまだ完全とは言えない状態だったが、それでも要は彼が自分に会いに来てくれた事が本当に嬉しかった。

だが肝心の抱き付かれていた提督は、どうやら彼女の突然のこの行動に意表を突かれてどう反応したらいいのか困っている様子だった。

抱き付いた腕に力を入れて揺らすたびに力なく彼の顔はふらふらと揺れていた。

それも仕方のない事だ。

要は一旦その昂ぶる感情を落ち着かせると、まだ目尻に残る涙を拭いながら話し掛けた。

「忠哲、お前本当に来てくれたんだね……。お前変なところで針の穴に糸を通すような鈍感見せるからさ。正直、あたしに会いに来てくれるか不安だったんだけどさ、嬉しいよ……。認識票見てくれたんだな」

「………准将………」

提督は、何故か青ざめた顔で、そして更に生氣のない眼で彼女を見て、やっこの思い

で喉の奥から言葉を発した。

その様子には要は心配半分不満半分と言った顔でちよつとむくれながら言葉を返した。

「ちよつと、准将何て堅苦しい言い方よしてよ。もう軍人じゃないんだからさ。名前で呼んでよ。それに、大丈夫？　なんか調子悪そうだね」

「……」

提督はただ黙る事しかできなかつた。

「長旅で疲れたんでしょ。ね、こつちで休んだら家に来なよ。色々話したいし、紹介し……」

早速提督に猛アピールを始めようとしたところで要はようやく気付いた。

彼が連れてきていた大和達に。

「あれ……？　えつと、あれ、は失礼だね。えつと、あの子達つて……」

軍に身を置いていた彼女は当然ながら艦娘の事は知っていた。

自分の回りにも兵器を模した似た存在がいたから尚更だ。

私服を着ていたとは言え、過去に関連の資料や実物を見た事があつた為、彼女には一目で大和達が艦娘だと判つた。

だがそれはまだ現時点では軍事機密だつた。

提督は枯渴し掛けていた気力を振り絞つて、なんとか正気を保つと、彼女にそれ以上

言わせない様に口を抑えた。

「んぐつ？」カアツ

「じゅ……信条さん」

「……」ジトツ

要が不満そうな半目で提督を見た。

どうやらまだ呼び方に問題があるらしい。

ここは彼女を不機嫌にさせてはいけない。

即座にそれを悟った提督は速やかに呼び方を改めて言った。

「要、悪い。ちよつと外で話そうか」

「ん……♪」

要は直ぐにほんのりと顔を赤らめて嬉しそうな顔になり、口を抑えている提督の手を握って小さくコクリと頷いた。

「というわけで、父さん母さん、ちよつと出かけ来る。直ぐ戻るから」

「おう」

「はいはい♪」

大和「……た……」

暗い表情で大和が途切れそうな顔で提督を呼ぼうとしていた。

「大和、悪い。ちょっと皆をみていてくれ。……直ぐに戻るから」

提督はそう言つて、さつと何かメモに書くとそれを大和に渡した。

ソツ

大和「……?」

大和は提督が見知らぬ女性を連れて家を出ていく後姿を、悲しみに暮れた顔で見送つていたが、その際に渡されたメモを思い出し、手を開いてそれを見た。

そこには……。

『心配するな』

と一言だけが書いてあつた。

「た……さ」

そんな素つ気ない言葉だったが、大和は少し安心した。

だから横で泣いていた秋月と、まだ状況がつかめずポカンとしている龍鳳を優しく抱き締めて安心させる事ができた。

その様子を微妙な表情で提督の両親は見ていた。

「なあ、どう思う?」

「んー、寂しいとはちよつと……うーん」

哲刻の疑問に対して妻のはなえは何となく波乱の予感を覚えながらも、少し楽しそう

に笑っていた。

第6話 「謝罪」

「なるほどねー」

「……本当に申し訳ない」

提督は要の前で深々と土下座をしていた。

時刻は昼過ぎ、場所は公園。

元々町の住民の数が少ないという事と平日という事もあり、この一見舞台のワンシーンのような様子に気付く者は幸いにも誰もいなかった。

「……」

要は何とも言えないというような複雑な表情で頭を下げる提督を見ていた。

公園に連れてこられた時はこれから甘い時間を過ごせるものかと彼女は期待していたが、待っていたのは衝撃の事実と提督の心からの謝罪だった。

彼女は彼から今は過去に別れた元恋人と復縁している事、加えて艦娘の何人かとケツコンを行っており、既にその内の幾人とは情事も交わしている事など、赤裸々な事実を包み隠さず伝えられた。

(はあ、まあ、らしいと言えばらしいけどね)

正直失望の気持ちは大きかったが、要は目の前で頭を下げ続ける男にそれでも強く責める気は起きなかった。

それは提督に好意を抱いたその日から彼の率直で真面目な性格を理解しており、今回このような事実を既に行っていたとしても決して軽率な気持ちからきたものではないと信じる事ができたからであつた。

「……それで、て・い・と・く君は一年もの間、あたしがあげた認識票の裏の事に普通に気付かなかつたんだ？」

重い雰囲気の中、ようやく彼女から掛けられた問い掛けに、提督は尚も頭を下げたまま真摯に答えていった。

「……はい」

「で、更にあの認識票、部下の艦娘にあげちやつたんだよね？」

「……そうです。君からあの時間いた言葉を考慮した結果、彼女ならぞんざいには扱わないだろうと判断して、その希望を叶える形で譲りました」

「ふーん……」

要は腕組みをしながらジトつとした目で提督を見ていた。

その顔は、表情こそ不機嫌そうだったがその内心は、実際は彼に対する憤りではなく別の事を考えていた。

（その認識票が欲しいって言った子、本当に純粹に欲しかったただけって感じはしないな。やっぱり……アレよね。ま、それだけ慕われているとも言えるけど）

「それで、そのあたしの前に置いてある物はどういうつもりなの？」

「それは……」

要の言う通り、提督と彼女の間には、何処に忍ばせていたのか懐刀と拳銃が並べて地面に置かれていた。

提督はそれを見ながら説明した。

「俺は君に本当にひどい事をしてしまったと心から思っている。それは君が希望するなら死をも受け入れると言う意志表示だ」

「し、死って……」

「だが俺は出来る事なら君を殺人犯にはしたくないから、もし希望をされればそれを使って自決するつもりだ」

「じ、自害するつもりなの？ それで？」

「ああ、それで腹を切って、介錯の代わりに自分の胸を撃つ」

「……」

とんでもない事を目の前で言い切る提督に要は割とドン引きしていた。

真面目だとは思っていたが、ここまで自分に厳しい人間が現代にどれだけいるだろう

か？

彼はもしかしたら生まれ変わる時代を間違つたのではないだろうか？

彼女はそんな事を考えながら、短いため息を一つ吐いた。

「はあ……」

「……」ゴツン

「あ、ちよつと」

溜めわ息を聞いて額を地面に打ち付けた提督に要は慌てた様子で声を掛ける。

「もう、やめてよ。怒ってないからさ。顔、上げてよ、ね？」

「だめだ。例え許しを貰つてもまだ俺は自分を許せない」

「いや、確かにいろいろシヨックだったけどさ、でもまあ……うん。忠哲は忠哲のまま

だったわけだしさ。まずは、それが嬉しかったよ」

「……」

「ケツコンや元カノと寄りを戻してたのはまあ……」

「……」

「や、やっぱり今も付き合ってるの？」

「俺はそのつもりだ」

「……それって結婚が前提？」

「……」

その問いにかなり重要なものを感じ取ったのだろう。

提督はどう答えたらしいものか考えた。

この問いには慎重に慎重を重ねた上で答えねば。

「変に気を遣わないで事実だけを言つて。彼女の気持ちじゃない。忠哲はそのつもりだったの？」

「……ハツキリ言つて、そこまでは考えていなかった」

「……そう。彼女からは？」

「ない。が、自分から復縁を申し出てきたんだ、その考えがある可能性は十分に有ると考えている」

「……もうそのお願いされた？」

「……いや」

「……そっか」

「……」

「いゝよ」

「……？」

提督は上から掛けられた短い言葉に僅かに顔をあげた。

『いい』とはどういう事だろうか？

その言葉だけでは肯定とも否定とも取れる。

ましてや自分が犯した罪をそんな短い言葉で決着が付けられるもんどろあうか？

そんな事を考えてい彼に、要は更に続けてこう言った。

「許す」

「……いい、のか？」

「うん。もう怒ってないし、許すよ」

「しかし……」

「そんな顔しないでいいって。もう大丈夫だから」

「……」

「まっ、まだあたしにもチャンスはあるみたいだしね」

「は？」

自分の罪に未だに苦悩していた提督はそこで、ハツとした顔になって要を見た。

そんな彼を見返す彼女の顔はいつも通りの元気な笑顔を既に称えていた。

提督はその笑顔を見て何故か全身に凄まじい悪寒が走った。

(なにか……とんでもなく、嫌な予感が……)

「確かに寄りを戻して付き合っても、結婚が決まっていなければまだあたしにも忠哲を

奪えるチャンスはあるよね。せつかくだから今日はこの機会を利用して彼女との締めさせてもらうよ！」

「待て、し……要。それはうわ……」

「違う。これは鬨い、女のね。ついでに艦娘の事も決着つけるからね！ あの背が高い子凄く忠哲好きそうだったもんね。ケツコンはまあそういう仕組みだから仕方ないけど、でも好意はあたしが一番つてのは伝えないと、だしね！」

「要、それだと俺の尊厳が地に落ちて欠片も残らないんだがそれは」

「大丈夫。彼女が来たときはあたしが前に出て堂々とあたしも忠哲が好きだから、つて宣言するから」

「いや、だからこそには俺の意思が……」

「だから今日は会えなかった分差を詰めるからね？」

「……」（その差を詰めている間に当の本人が来るかもしれないんだ）

「大丈夫心配しないで！ 忠哲はあたしが守るから！」

（死にたい……）

頼もしい笑顔でそう宣言する彼女の顔を見ながら提督は、自分が招きつつある更なる混沌に絶望感から心が折れそうになるのだった。

丁度その頃、提督の実家では……。

「すみません、ごめんください」

若干疲弊した様子のもう一人の彼女が提督を追って、早々に目的地に着いたところだった。

第7話 「真・災難」

「……」

黒いワンピース姿に滑らかな長髪をなびかせながら不機嫌そうに腕を組んで要と対峙しているのは、最近提督と復縁した元彼女、もとい現彼女。

日本帝国海軍本部第4司令部司令官、上級少将の周防鐸（すおう さなき）だった。

「……」

二人は提督が実家に戻ってきたところで偶然出会い、そして今、彼を間に挟んでらみ合うという事態になっていた。

「……」 ダラダラ

「ねえ」

目はしっかりと要を見据えたまま、鐸が提督に話し掛ける。

「はい」

「「こちらは？」」

「……知り合いです」

「ちよつと」

要が直ぐに割り込んできた。

紹介の仕方が気に入らないらしい。

提督はここは気を遣って謙虚になつて欲しかったが、直ぐに諦めて改めて言い直した。

「……元陸軍の……」

「そうじゃないでしょ？」

「……信条さんです」

「……」ジツ

「要。元陸軍将校の俺のしり……極めて親しい友人だ」

「よしっ」

「待つて。今のは誘導じゃないかしら？ 彼に自分の名前を言わせて親しく見せる為

の」

「元々あたし達は親しいわよ？」

「え？」

「はい？」

秋月・龍鳳（怖い……）ブルブル

「ねえ、どういう事？」

冷たい目で鐸が提督を睨む。

提督は要との馴れ初めと今のような関係に至るまでの事の発端を話していいか、許可を求めるように彼女をチラリと見た。

「……」 チラ

「いいよ、話して」

「実は……」

了承を得た提督は肅々と話し始めた。

「……なるほど」

話を聞き終えた鐸は神妙な顔でまだ腕組みをしたままそう一言呟く。

その顔は当初の険悪な雰囲気の時と比べれば、幾分柔らかくなってる様な気がした。

要はその場にいた人間に大体の話が行き渡った事を確認すると、半歩前に出て今度は鐸だけでなく、その場にいる自分以外の全ての人間に聞こえる様に大きな声で言った。

「そういうわけ。で、丁度ど良いからちよつと宣言させてもらうね」

「え？」

「……」（胃が……悪寒が……） キリキリ

「皆聞いてください。あたしも忠哲の恋人の候補になります！ 勿論、結婚前提で！」

大和・秋月・龍鳳「!!」

「あらあらあ♪」

「……」 ミシミッシ

大和達が驚きに目を見開き、母親がどことなく楽しそうに笑顔で、そして父親が手握ったグラスにヒビを入れる中、鐸も焦った様子で直ぐに抗議してきた。

「な、こ、恋人つて……。聞かなかつたんですか？ 彼は私と……」

「復縁したんでしょう？ 知ってるわ。でもあたしが見た限りまだ昔付き合っていた時ほど寄り戻ってはいないんじゃない？」

「それは……」

鐸は口ごもる。

それは仕方のない事だ、同じ職業とはいえお互いの勤務地は大分離れている。

士官学校時代とは違ってお互いの時間などそう簡単に取れないのだ。

「ね？ あたしにもチャンスあるよね？」

「……」（不純異性交遊を理由に否定はできないわね。だってもう艦娘の提督をシてるといふ時点で彼も例に漏れず……） チラッ

鐸の視線で何かを察した提督は、まるでその場にだけ見えない重力があるかのようにうなだれていた。

彼は今、この状況を招いた罪とお互い同意の上だったとは言え、基地での部下の艦娘との情事を思い出し、激しい自責の念に襲われていた。

「……」ズーン

対して要は要で、ライバル宣言をしたものの自分の現在の状況を冷静に分析して、次なる手を思案していた。

「……」（このまま一対一でもいいけど、やっぱり元彼女という立場は有利よね。とすれば敢えてこの場はより状況の混迷を図るのも一興、かな？）チラ

大和「え？」ドキン

予想外の視線を要から感じた大和は驚いて身を震わせた。

鐸は彼女が自分から視線を外している事に気付き、軽く咳払いをして再び自分に傾注させて色々考えた末、要を見ながら言った。

「こほん、どこを見てるんですか？ まあ、いいでしょう。その勝負受けて立ちます」（相對する恋敵はぶつかって勝つに限るわ。その方が後腐れないもの。それに、復縁、職業が一緒という点ではやはり私が有利なのは変わらないし）

「あ、ごめん。一個だけお願いいいかな？」

「？ なんです？」

この期に及んで更にお願いととはなんだろう？

鐸は不審そうに眉を寄せながらも、その答えを促す。

「どうも忠哲が好きなのはあたし達だけじゃない気がするの。だからここは、よりその機会を公平に与える為に彼女にもこの鬭いに参加してもらうかなって思うんだけど？」
ピッ

そう言つて要は今度は視線だけでなく指で直接大和を指した。

いきなりそんな指名を受けた彼女は当然慌てふためく。

大和「わ、私ですか!？」

「え? 大和……?」(あの子も彼が好きなのは何となく解る。でも、この人の提案はその意を汲んでるとは思えない。とすれば……)

「ね、大和さん。君も忠哲の事が好きだよね?」

自分より背が高い大和に「上目使いの様な視線」で圧力を掛けて答えを促すと言う器用な真似で迫る要に、大和はまんざらでもなさそうな様子で頬を染める。

「えっ、えっ、わ、私は……」カァ

パリンッ

何かが割れる音がした。

「……!」ビクッ

音がした方を提督質が見ると、そこには顔を真っ赤にして青筋を立てている提督の父親、刻哲がいた。

割れたグラスの欠片の幾つかが手に刺さって血が流れているが、彼は怒りで気にならない様子だった。

「……」ピクピク

秋月・龍鳳「ふ、ふえええん！」

その圧倒的な気迫に、その場にいた人間の中では見た目が一番幼い二人が、遂に恐怖に耐えられず泣き出した。

母親のはなえが直ぐにそれをあやすように笑いながら優しく二人に言葉を掛ける。

「はいはい、ホント怖い人達よねえ？ ほら、おばさんと一緒に台所にいきましょ。ふていもちあるよ」

秋月「ふ、ふてい……?」

「甘くて美味しいのよー。食べんね?」

龍鳳「甘い……? うん……食べたい……ぐす」

秋月「わ、私も……ぐす」

「ほな行こうね。ほらほら、怖い人達がなんか騒ぎ出したからねえ」

「……」

提督は、はなえが二人を台所に連れて避難する背中を見送りながら、今から起ころうとしてゐる地獄に自らの死を確信するのだった。

第8話 「理解」

「……経緯？」ギロツ

「……そ、そうです」（相変わらず怒るとうちの大将くらい怖いわね）

日本帝国海軍第4司令部司令官周防鐸少将は今、怒りで顔を真っ赤にした提督の父親である刻哲の形相と気迫にやや気圧されながらも必死に説得して宥めようとしていた。

「……」

対して怒りの対象である提督は、罰を潔く受ける罪人よろしく土下座をして額を畳に着けたまま黙っていた。

刻哲は大和に後ろから羽交い絞めにされていた。

要が提督争奪戦（景品には最早抗議する気力無し）に参戦を表明し、自身の立場的不利を緩和する為に大和の提督に対する想いを看破し、彼女にも争奪戦の参戦を提案した辺りで刻哲が激怒して息子（提督）に殴りかかろうとしたからだ。

刻哲が怒った理由は提督の不純異性交遊ひとつのみ。

邪まな動機ではなく、加えてお互い同意の上での関係とはいえ、鐸や要との関係はともかく刻哲が海軍の機密事項である艦娘の存在など知ってるわけもなく、ましてや提督

と艦娘との間にケツコン（仮）などといったシステムがあるなど予想も着く筈が無かつたので、一人の子の父親として彼が怒るのも当然の反応と言えた。

「俺の息子がやった事に何か納得できる事情があるつてのかわ？」クワツ

「ひっ……」ビクツ

「そ、それを今から忠哲に代わって私が説明しよう……」

「……」（へえ、提督君のお父さんって怒るとこんな感じなんだ。うちの父さんと似てるなあ）

刻哲の怒りを前に、提督の艦隊の最高戦力である大和はすっかり怯えていた。

彼女も女性である。

戦場の恐怖には慣れていても異性の怒りに触れる機会など提督の部下をしていてあるわけがなかった。

そしてそんな刻哲を必死に宥めようとしている隣で提督に片想いを寄せる元陸軍將軍の信条要は、流石に男と交って実戦を想定した訓練や教育を受けてきた事と元々の豪胆な性格もあり、ケロつとした顔で彼の父親が怒る様を眺めていた。

「お願いですから少しだけ話を聞いてえ！」

「……」スクツ

とうとう鐸が刻哲の暴走に根負けして半泣きで自分の訴えを叫んだ時だった。

要が不意に達が上がりポン、と彼女の肩に手置いた。

「え……………」

涙を滲ませた目で要を見る鐸、そして力では余裕で勝ってホールドをかけながらも刻哲の怒りの迫力に半ベそをかいていた大和もまた、要が立ち上がった事に気付いて驚いた顔をした。

「あたしに任せて」ボソッ

要は鐸の耳元で小さな声でそう言った。

「……………ん？」

羽交い絞めにされていた刻哲が自分の前に立ちはだかるようにして立った要に気付いて見上げる。

対して要はその睨むような視線に怯む事もなく、どことなく自信に満ちた笑顔を浮かべながら刻哲の両肩に手を置いた。

ギユッ

「……………」ピクッ

軍を辞めても鍛える事を怠っていない要の腕の筋肉が僅かに膨らむ。

刻哲はその自分の肩を掴む力に、本気ではないとはいえ女性には似つかわしくない頼

もしさを感じた。

要は刻哲が自分の力に反応して気を取られた好機を見逃さずしつかりした口調で話し掛けた。

「聞いてください」

「……む」

刻哲は焼けた褐色の顔から覗く要のくつきりとした大きい目に何か強い意志を感じ、取り敢えず落ち着いた様子を見せた。

「色々思う事はあると思います。だけど断言します。忠哲はお義父さんが思っている人じゃないです」

「……」ピクッ

「お義父さん」という響きに未だに伏せたままの提督がピクリと反応する。

音こそそれは『おとうさん』だが、何故かそこに彼は違うニュアンスを感じたのだ。だが今この場においては自分はやかく言える立場でも気力もない。

色々気になる事はあつたが取り敢えず提督はその場はそのまま黙っている事にした。

目敏くその事に気付いていた要は内心くすりと笑うと、尚も刻哲から目を逸らさずに続けた。

「あたしは周防さんほど彼と長く付き合った事はありませんが、それでも所属が違うと

はいえ同じ軍属として短い時間でも彼と関わって解った事があります」

「……なに、かな？」

刻哲は喉から絞り出し様な声で訊いた。

「彼は愚直です」ニツ

「……」

「意味、解りますよね？ あの人は理由や責任、考えもなく女性と付き合つて不幸するよ
うな事は決してしません。その動機には思わず笑つちやいそうなくらい愚かしくも真
面目な彼の性格故の理由が必ずあります」

「……やけに自信ありげに言いますね。周防さんより過ごした時間が短いのに何故そこ
まで言えるんですか？」

「明らかな感情押しという事は自分でも判つていた。」

だがそれでも相手の目を見て誠意を伝えるという行為に自信を持っていた要の思
いが刻哲に伝わり、彼の心に疑惑はまだあつたものの、怒りの熱が下がった事を確信した
彼女はこう答えた。

「今ここにいる人、そして今日連れてきた子達を思い出して、見てください。彼女達がそ
んな不純な動機に同意するような濁つた子に見えますか？」

「……」

刻哲はそう言われて目の前の要と鐸、そして今時分を捕えている大和を見上げた。

「……っ」ビクッ

「……」

大和はまだ怯えていたが頑張つて涙が出るのを堪えて努めて真剣な表情をしようとした。

要は完全に落ち着きを取り戻し、凜とした空気まで纏つて彼の視線から目を逸らさずに真剣な目でそれに応えた。

「……」

そして刻哲は目を瞑つて考える。

今は妻が避難させた幼い二人の事を。

(……流石にそれはない。でなければ、あんな歳の子が息子にあれほど慕つた様子を見せるわけもない、か)

「解つた」

刻哲はポツリと言つた。

その言葉に彼を除いた4人は揃つて反応して彼を見る。

「話は解かりました信条さん。まあ……あれだ根拠はまあ、アレだが言いたい事は解つ

た。だから信じる事にしますよ、愚息を」

「お義父さん……」

要はそこでやつと表情を綻ばせて柔らかい笑みを浮かべた。

刻哲は少し体裁が悪そうにこめかみを掻きながら居住まいを正すと、手に着いていた血を着物の袖で軽く拭ってこう言った。

「取り敢えず酒だ。せつかくこんな息子を慕って5人もうちに来てくれたんだ。ちよつと祝い事くらいいししないと何も始まらない」

「父さん……」

ようやく額を少し上げて自分を見る息子に対して刻哲はまだ僅かに複雑そうな表情をしながら言った。

「まあ、多少は脚色してもいいから少しくらいは話、聞かせろよ？」

第9話 「続・災難」

「つぶあ……はっはっは！」

ビールを口に運んで、その唇に付いた泡を拭わずに上機嫌な顔で刻哲は大きな声で笑った。

大和・龍鳳・秋月「……」

その様子を見て少し前まで怒りの形相をしてとんでもなく怖かった時との落差に大和達は唾然とした顔をしていた。

反対に鐸と要は慣れた様子で彼に接待をする様に愛想良く肩を揉んだり、酌をしたりした。

「ふふ……相変わらず良い飲みっぷりですね。はい、飲みます?」(ホント、この人お酒飲むと人が変わるわよね。アイツは違うのに)

「んつと……。つし……。つと、どうですかお義父さん気持ち良い?」(酒が入ると機嫌が良くなるとうちの父親に似てるなあ。ふふ、なんか良いなあ)グツグツ

大和「……」

「ふふつ、凄いでしょ? うちの人。お酒飲むとこんなに変わるんよ」

まだ呆然としていた大和にはなえが面白そうに笑いながら彼の癖を教える。

秋月「お、お酒つて凄いですね。たい……あ、えつと、た、ただ……てつさんもこんな変わるんですか？」

「……いや、俺は酔いはしてもあそこまでは。多分」

「そうね、この子のはあの人よりお酒は強いものね。あの人特別お酒に弱いだよ」

龍鳳「あ、でも酔いはするんですよね？」

「ん？ まあ、それはな」

お酒に酔った提督を一度見てみたい、そんな事を思いながら自分を見る龍鳳に提督がその意図が読めずに不思議そうな顔をしたときだった。

ガシツ

「んぶっ……」

「おーああああ、飲んでるか？ おい、馬鹿よ！ 息子よお！」

完全に酔っぱらった彼の父親が真っ赤な顔で提督の首に腕を回して絡んできた。

提督は危うくグラスを落としそうになるのを何とか堪え、彼にしては滅多に見る事が無い嫌気がさした顔をした。

「父さん、酒に飲まれる癖いい加減に直せよ。他の人にもめいわ……」

「ああ、うっせいなあ！ お前、お前よお忠哲よ？ 今日、俺……嬉しいんだぞお」

「……………」

突然絡んできたと思つたら今度は泣きそうな顔をして自分は嬉しいという父親に提督は不可解そうな目を向ける。

「あーっだあ！ わかんねーか？ おれああん時怒つたけどよお……………まさか、久しぶりに返つてきたお前が……………」

「俺が？」

「はあ……………お・ま・え・が！ あんなにできたべつぴんさんをよお！ お前が……………ひつく……………ぐす……………」

「だ、大丈夫か？」

「うっせえよお！ だ、だがらなあ？ あんなに良い娘を……………お前んこと好きだつっー娘をよお……………まさか3人も連れ……………」

もう最後は言葉にならず、男泣きをして震え始めた刻哲に提督はその時何故か心に不安が過つた。

3人、父は確かに3人と言つた。

自分の事を慕う娘が3人と。

それは常識的に考えれば成人した女性の事を言うだろう。

つまり、要と鐸と大和だ。

「……」チラッ

提督はさり気なくその三人の様子を気付かれない様にちら見した。

「……♪」ポオ

「……っ」グッ

すると先ず確認できたのは一人凄く嬉しそうに下を向いて頬を染めてる鐸と、刻哲に公認の仲と言われた事に小さくガッツポーズを取る要がいた。

そして自分の横では……。

大和「……っ」ジワッ

感動に瞳を潤ませて声にならない嗚咽を口で押えている大和がいた。

「……」ゾッ

これは不味いと提督は思った。

何故ならその3人が彼女達なら当然無意識に除外されたのは……。

「……」チラッ

秋月「……」ズーン

龍鳳「……」プクー

提督が視線を変えた先には青い顔で一人俯いている秋月と、凄く不機嫌そうな顔で頬を膨らまし、自分の袖を握っている龍鳳がいた。

「あららあ♪」

その様子を見てはなえが愉快そうに笑う。

どうやら提督と同じく彼が不安そうな顔をしている原因に気付いたようだった。

しかし彼女は息子と違って彼にもう直ぐ訪れるであろう面倒な事態を予測して楽しみにしているようだ。

龍鳳「お、お嫁さんならりゆ、龍鳳だつてなれます！」

案の定先ず龍鳳が爆発した。

彼女は提督の袖を掴んでいた状態から今度はその腕にしがみ付き、決して彼を誰にも渡さないとも言ふようなアピールをする。

秋月「……」ズーン

一方秋月はまだシヨックから立ち直れず俯いたままだった。

「あつはつはつは」

その可愛らしくも純粋な嫉妬の様にはなえがついに堪え切れず笑いだし、笑いすぎて出た涙を拭いながら龍鳳の頭に撫でながら言った。

「そーねっ、龍鳳ちゃんも可愛いもんね！ 龍鳳ちゃん達だけ仲間外れにするのはいかんよねー」

秋月「……………」(達? 今、達って言った!)ピクッ

はなえの言葉に、仲間外れにするのは良くないという対象に自分が含まれていると確信した秋月は耳聴く反応する。

秋月「お、おか……………あ……………お、おば様。そ、それって私も……………秋月も入っているんですか?」

「もちろんよー。秋月ちゃんも可愛いもんねー」ナデナデ

秋月「……………つ、おば……………お義母様!」パアッ

龍鳳「む……………」プクー

「二人ともホント可愛いねえ。おばちゃん何だか急に娘が2人できた気分よー♪」

龍鳳・秋月(娘……………!)

大和(な……………!?)ガーン

「へえ……………ふふ」(あの娘達面白っ)

「……………まあ」(何か負けた気分ね。でも大和、なんであなたまで子供みたいな反応してるのよ……………)

はなえの発言に秋月と龍鳳は満更でもない反応を示し、大和は大人げなくショックを受けた顔をしていた。

対して鐸と要は流石に然程気にした風もなく余裕がある様子だったが、鐸だけは同型

の艦娘が自分の職場の近くにいる事もあり、一人微妙な表情をしていた。

そしてはなえが最後にこんなとんでもない発言をしてきた。

「さつて、時間ももう良い感じだしお風呂入って来なさい。忠哲、あんたこの子達入れてあげなさい」

「……………ふっ」

「え……………」

「は？」

「娘じゃない……………」ズーン

「ぐーがー……………」zzz

きつとはなえ自身は半分冗談のつもりだったのだろう。

だがその気持ちも流石に心から提督に心を寄せるその場の娘達には質の悪い本音に聞こえた。

その時、落ち込んで彼女の言葉には気付いていない大和と酔いつぶれて寝てしまった刻哲は蚊帳の外だった。

だが、一緒に風呂に入ってきて来いと言われて満更でもない顔をしていた龍鳳と秋月以外は、青い顔をした提督にそれぞれ微妙な視線を注いでいた。

そう、災難はまだ続いていたのだ。

第10話 「選択」

「いやー！ 離してくださいー！ 龍鳳は、龍鳳は大佐とお風呂にー！」ジタバタ

「はい、大人しくてね」

際どい所で独り落ち込んでいた大和は正気に戻り、龍鳳を担いで外に出て行く。

「あ、秋月はその……。べ、別にたい……。忠哲さんとならあ、あの……。ー」

「この事については一度落ち着いて考えた方がいいわ。だから秋月、いらっしやい」

「あ、あの本当に私はだいじ」

「秋月」ジツ

「はっ！ 失礼致しました！ 同行致します！」ピシツ

秋月は何か自分は理性的に振舞って目の前の鐸の説得を試みようとしたが、やはり直接の配下でなくとも彼女は「提督」だった。

鋭い視線で見つめられ、命令するようなはつきりとした声に秋月は無意識に否応なく艦娘としての反応をしてしまった。

「……」

「……」

果たして不測の事態はあつという間に収束し、はなえも酔い潰れて寝てしまった刻哲に無理矢理肩を貸す形で連れて行つて、その後後付や就寝前の準備に取り掛かつてしまった為、その場には危機を脱してホツと息を着く提督と思わぬ好機に僅かに口元を緩めて笑う要だけが残された。

「……申し訳ないな、騒がしくて」

落ち着くために二人で縁側に移動していた提督が何ともすまなそうな声で言った。

その言葉の中には今に至るまでに彼女自身に対して犯してしまった過ちに対する謝罪の気持ちも含まれていた。

「いいよ。気にしてない。賑やかで凄く楽しかった」

要は本当に気にしていないような明るい笑顔でそう答える。

「ねえ提督君」

「う……やっぱりまだ怒ってるか」

「え？ ああ、ごめん！ 呼び方つい引つ張っちゃった。ううん、もう気にしていないから」

「……それで？」

「あ、うん。それでね忠哲」

「ああ」

「私さ、君の事が好きじゃん？」

「いや、俺に疑問形で言われてもな」

「ふふつ、まあまあ。それで好きなんだけどさ」

「……ああ」

「君、周防さんとの付き合いもあるし、その……艦娘の子たちとの『カンケイ』もあるでしょ？ だから今この場では私も君にあたしの気持ちに応えてもらえるとは思ってないから」

「……」

「艦娘の子たちとのカンケイ」という言葉に僅かに提督は痛い所に触れられたように気まずそうな顔をする。

艦娘の提督である以上、彼女たちと成り行きや恋愛で情事を経るのは不思議ではない事だが、それでもそれを実際に自分以外、それも自分を慕ってくれている異性に指摘されると提督は何とも言えない罪悪感居た堪れない気持ちになった。

「そんな顔しないでいいよ。大丈夫、私も所属する軍は違ってもその辺の事情は解っていたから。ほら、陸軍にもあの娘たちみたいないし」

「……すまない。ん……陸軍にも、か。あきつ丸みたいなの？」

「うん、そう。陸軍にはね、戦車の娘ともいたんだよ」

「戦車……か。それ、侮辱するつもりはないが、戦力としては問題はなかったのか？」

「あ、つぶふ。やっぱり気になるよね？ 旧軍の日本の戦車は世界のと比べると性能がアレだったからねえ。その疑問も解るよ」

世界大戦の折、旧日本軍が使っていた戦車の能力の足りなさは現代でも有名だった。

日本が海洋国家である為戦車の発達が遅かったのは仕方ないとは言っても、その性能の低さを愛くるしいとさえ思う人がいる始末である。

提督の心配もある意味当然と言えた。

「その笑い、俺が思っているほど実態は悪くないみたいだな？」

「正解。陸軍はねー、旧兵器の性能が海軍のと比べて大分劣っていた事は解っていたからねー。だから陸軍だけは特別に海軍とは一線を画す強化法を実行する許可を取り付けたの」

「一線を画す？」

提督は要の言葉に興味ありげな視線を向ける。

「うん。勿論、チハやあきつ丸も通常の戦力としてはいるよ？ だけどそのままだと能力的に劣るのは解り切ったことだから海軍の艦娘と違って陸軍の娘は『最初から』強化された状態で生まれてくるの」

「……最初から、強化?」

「うん、そう。今陸軍が人用の戦車として正式に採用してる戦車があるでしょ? 実はアレを抛り所にした娘もいるんだけど、強化されたチハとかはその娘と能力を比べてもそんなに見劣りしないくらい強いんだよ?」

「……それは、凄いな」

要の話を聞いて提督は心から驚いた顔をする。

現在軍が採用している人用の戦車はそれこそコンピュータなどを搭載し、砲撃の際の砲塔の照準も自動で行うようなハイテクのものだ。

そんな戦車の艦娘が既に存在するというのに、更にその娘と比較して見劣りしない力を持つチハとは最早チハとは名ばかりの別物ではないか。

一体どれほどの強化が施されたチハなのか、提督には全く想像がつかなかった。

「ふふ、良い顔ね。だからねー、当然海軍に派遣されているあきつ丸とかも陸軍に所属しているあきつ丸と比べたら大分違うのよ」

「ほう……。じゃあ陸軍のあきつ丸もチハ同様に?」

「そう、海軍に派遣してるあきつ丸は実はアレ、かなり能力落とした状態なんだよね。勿論あきつ丸はその事に対して一切文句も言わないし、不満も感じない。何故ならあの子たちはあくまで“海軍のあきつ丸”として忠哲君たち提督を手伝いに来たという自覚

を持つてるから」

「……真面目なんだな。彼女たちは」

「そうね。元が兵器だからというのものもあるかもしれないけど、あの娘たちにとっては姿は違つてももう一度武器として軍の役に立てることが何よりの、至上の喜びであり誉なのよ」

「……」

自分が今も艦娘達に対して持つている複雑な思いを陸軍の娘たちに対しても持つたのだろう。

提督は目を瞑つて苦悩するような顔をする。

要はそんな提督の肩をそつと抱き寄せて優しい声で言った。

「勿論、そんなあの娘たちの固定価値観を変化させて人間と兵器の垣根を越えた絆を芽生えさせるのも、指揮官である提督の力量とも言えるんだけどね」

「……要s」

「さん、は付けて欲しくないな」

「……要」

「うん。やっぱりね、あたし。忠哲君の事が大好きだよ」

チュツ

要は満面の笑顔で頬を染めてそんな事を言ったかと思うと、おもむろにそのまま自然のような動作で提督にキスをした。

「……」

提督はそれを黙って受け入れ、またキスをした要もその時、彼と唇を交わした喜びを感じながらも別のある別の事を考えていた。

(……やっぱり諦められないよ。軍に、戻ろうかな……。今度は海軍に……)

第11話 「寝起き」

モゾツ

「……」ピクツ

早朝、提督は布団の中に違和感を感じて早々に目を覚ました。
自分の腰に何かが引っ付いている。

「……」ムクツ

起き上がってみてみると、ちょうど腰から下の辺りの掛布団が不自然に盛り上がって
いました。

「……」

半ば予想は着いていたが、一応念の為状況を確認する為に提督は布団をめくった。

そこには……。

「すー……う……に……」

案の定、丸くなった龍鳳が自分の腰に抱き付いて寝ていた。

「……」

提督は軽く溜息を付くと、龍鳳を起こさない様にゆっくりとした動作で彼女を自分の

体から引き剥がそうとした。

だがその時――

ぐっ

「？」

布団をめくつたのとは別の腕が何か重りが着いたように動かない事に提督は気付いた。

「……」

提督は恐る恐るといった様子で動かない腕の方を見た。
するとそこには……。

「ん……たいさ……」

「……」

自分の腕に抱き付くようにして寝ている秋月がいた。

「あら、おはよう」

一番見られたくないところを見られてしまった。

通常なら焦るところだが、提督が状況を把握する前に掛けられたその声は、幸運な事に彼の母親だった。

「母さん……」

「龍鳳ちゃんも秋月ちゃんもね、あんたが起きる前のずっと早い朝に布団に潜り込んだみたいよ」

「潜り込んだみたいって、母さんはじゃあ二人が動いた事に気付いたのか」

「まあねー」

「……確かに二人ともまだ子供だけだし、だけど俺の年齢も考えれば普通はそこで止めるところじゃ?」

「あんたがそんな事するわけないでしょー」

「……」

「ほおら、起きたんならさっさと顔洗わんね。龍鳳ちゃんは起きるまでそのままでもいいから」

「ああ。……あ?」

母の言葉に提督は疑問を覚えた。

何故母は自分に絡んで寝ている二人の内龍鳳の事だけを言ったのだろうか。

その答えは、提督が再び秋月が抱き付いている腕の方を見ると直ぐに解った。

「……………」

秋月が真つ赤な顔で腕に抱き付いたまま自分を見つめていた。

あまりにも動揺して恥ずかしさから提督の腕から離れる事にすら気が回らないようだった。

「秋月、落ち着け。俺はどうもおm」

「忠哲っ」

母の注意に提督は直ぐに言い掛けた言葉を途中で飲み込んだ。

「どうやら今のはデリカシーに欠けるところだったみたいだ。」

「秋月……………おはよう」

提督は努めて冷静に、秋月をそれ以上動揺させない様に彼女の頭に手を置いて撫でながら朝の挨拶をした。

「あ……………あの、た……………い……………。あ、ちが、た、ただて……………てっ」

「大丈夫落ち着け。俺は怒ってないから。だからほら、先ずは挨拶だ」

「あ、は、はい！ お、おはよ……………」プシュー

「……………」

羞恥と動揺でついに挨拶の途中で顔を赤くしたまま気絶してしまった秋月を見ながら、提督は何故こんなにウブなのに彼女がこんな大胆な行動をとれたのか不思議に思っ

た。

「あはは」

その様子を一通り眺めていたはなえは堪え切れず笑った。

「……なるほど。龍鳳が布団から出るのに気付いて着いて行ったら」

「自分も退けに退けなくなんだね」

「……はい」

朝食の場、話を聞いて事情を理解した鐸と要の確認に、龍鳳はご飯を運ぶ箸の動きもぎこちない様子でシヨンボリと頷いた。

因みに今この場に提督はいない。

起き上がろうとした時に腰に抱き付いていた龍鳳がどうしても離れなかった為、抱き上げる事もできずに手だてなく項垂れていたところを運悪く父親に見つかり、また謂れない罪で説教を受けている。

「龍鳳もそうだけど秋月、あなたも意外に大胆なのね」

「……っ」カア

鐸の指摘に再び真っ赤になる秋月を面白そうに見ていた要がふとある事に気付いて

誰にともなく訊いた。

「あれ？　そういえば大和さんは？」

「大和なら二人に先手を取られたシヨックで……ほら、その庭の隅でいじけているわ」
「え？」

鐸の言葉が一瞬理解できず、要は啞然とした顔をしたが、彼女が指した方向を見ると確かに大和が暗い雰囲気纏って庭の隅にしゃがみ込んでいた。

雨も降っていないのに何故か傘までさして地面ののじを搔きながら蟻と戯れているようだ。

「……ねえ」

大和を見たまま呆然とした声で要は鐸に訊いた。

「うん？」

「あの人……あの子って『戦艦大和』なんだよね？」

「まあ……ね」

「いや、陸軍の子も例外じゃないと思うけどさ。艦娘ってそんなに指揮下に入る提督によつて元の気性って変わるものなの？」

「それはもう。例えば、本部の総副司令、名誉中將の中老なんて言われてる人の専属艦も大和なんだけど、あの子と比べたらこつちの子は大分子供っぽ……柔軟な感じかしら」

「へえ……」

「第二司令官の上級大将、この人も大老なんて呼ばれてるけど。その人の麾下の艦娘ともなると、戦艦から駆逐艦に至るまで全員質実剛健って感じよ」

「そうなんだ。本当に司令官によつて大分変わるんだね」

「まあね」

「ね」

「うん?」

「周防さんの艦娘はどうなの? 専属の子とか」

「私の……?」

要の問い掛けに鐸は口元に手を当てて本部に置いてきた武蔵の事を思い出した。

「……」

「? どうかした?」

なかなか答えずに考える顔をしていた鐸に要が不味い事を聞いたのではと、申し訳なさそうな声で言った。

その声に我に返つた鐸は、苦笑して手を振りながらこう答えた。

「ああ、ごめんなさい。なんか私のところの武蔵も気性はちよつとあの子に似ていたよ
うな気がしたから」

く日本帝国海軍軍令部（海軍本部）

「ぶえつつくしゆ!!」

「きやあ! ちよつと何をするんですか武蔵!」

「ああ、悪い悪い何か急に……」

「もお……気を付つけてよお……」（閣下に会う前に着替えないと）

「いや、本当に申し訳ない。ん……」ジッ

「……? な、何ですか? なに……?」タジッ

武蔵が急に黙って自分を見つめてきたので大和は怪訝な顔をする。

心なしか何故か嫌な予感がした。

「いや、うちの提督が留守でちよつと寂しくてな。お前の胸を見てたら……」

「撃ちますよ!」

自分の貞操は絶対に閣下に捧げると決めていた大和は、胸を守るように抱き締めながら久しぶりに焦った声を出した。

第12話 「クリスマス①」

「じーんべーじーんぐべー♪ すーながーる♪」

「すーずのりーむずーにひかーりわーがまー♪」

キヤツキヤツ

レ級とヲ級が何やら妙な歌詞を口ずさみながらはしゃいでいた。

その様子を冷めた目で見ていた夕級の傍らで、鬼姫は逆に興味深そうに眺めながら言った。

「……レ級達は何を歌っている？」

「どうもクリスマスとかいう人間の祭日を祝う歌らしいわ」

「良い音色……私も楽しくなるなあ」ニコニコ

歌詞は元々崩壊していたので意味は解らなかつたが、その音色からは楽しい雰囲気は伝わるらしい。

ル級はレ級達の歌を嬉しそうに聴いていた。

「クリスマスね……。そういえば去年も歌っていたような気がするわね」

「ええ。あの時はレ級がサンなんかをやるって言って聞かなくて……」

「私、トナカイとかいう動物をやらされたの……。ただレ級にお馬さんにされたただけだったけど……」ク

「姫、夕級にル級！ 皆も歌おうよ！」

「レ級、今年は誰がサンタするの？」

「わ、わた……！」

今年もトナカイにされそうな予感がしたのだろう。

危機を回避する為にル級は自らサンタに立候補したようとしたが……。

「あ、ル級は今年もトナカイお願いね！」

「え……ふええ……？」グス

「ル級哀れな……」

「今年は姫がサンタやって！」

「えっ」

「……」（あーあ、余裕ぶってるから……）

「夕級でもいいよ！」

「嫌よ」キツパリ

「「えー」」ブーブー

「レ級、私今年もトナカイは……」

「私もだ。何故私がサンタなんてわけの分からないものを……」

「でももうタ級いななし」

「代わりいななしもんねー」

「えっ」

ヒュー……

二人が振り向いた先には既にタ級の影はなかった。

「……」

「さあクリスマスだー♪」

「やっほー、サンタサンタあ♪」

「ふええ……もう私トナカイ嫌だよお……」

「あ、ちよつ、何をするの!? え、髭? これ付けるの? なんで?」

ヒョコッ

「……」(暫く戻らない方がよさそうね。……大佐の所でもいこうかな)

一方その頃、大佐不在の基地は……。

赤城「さあ、大佐が留守の間は私たちがしつかりここを守りますよ!」

金剛「イエース! ちよつと残念だけど、christamasは大佐が帰ってか

らね。それまでは皆で力を合わせて頑張りましょーお！」

電「が、がんばるのです！」

麻耶「応っ！ 任せとけ！」（大佐、頼んだアレちゃんと買ってきてくれるかな……）

ハチ「了解しました。ハっちゃん腕の見せ所ですね」

長良「まつかせといええ！ さあやるわよー！」

日向「やる気になるのもいいが、空回りしないようにな」

熊野「安心してくださいまし！ この熊野が皆さんの気を常に引き締めて見せますわ
！」

明石「一人だけジャージ姿な上に寝癖だらけで言われても信じられないんですが

……」

天龍「ああ、昨日徹夜で一緒に麻雀してたから寝坊したんだろ」

曙「な、なんか早速不安なだけ……」

ワーワー

と、まあこんな感じで提督不在の間その責務を果たしてみせようと皆、意気軒昂の様子だった。

「ふう……」

「あら？ 今日は大佐はいないの？」

一人離れて海を見つめていた加賀に誰かが声を掛けてきた。

振り向いた加賀は声の主を確認すると、僅かに目を細めて声低く応えた。

「夕級さん……」

「大丈夫。約束はちゃんと守るわ」

夕級の問いには答えず目で警戒する加賀に、夕級は両手を上げてわざと大袈裟に敵対の意思が無い事を改めて示した。

当然、ここに姿を現した時点で武装も解除していた。

「……ん、ごめんなさいね。まだ堂々とあなたたちと話すのには慣れてないの」

「気にする事ないわ。それは当然よ」

「……大佐に会いに来たのですか？」

「えっ」

「大佐に会いたいからここに来たのでは？」

予想外の問いかけに夕級は珍しくしどろもどろになる。

「あ……ちが……違うわ。ちよつとうちが騒がしかったからここに逃げてきただけで、別に大佐個人に会いに来たわけじゃないわ」

「……本当に？」 ジツ

「え、ええ」

「じゃあタ級さんは大佐に別に特別な好意を持つてはいないと判断していいんですね？」

「えっ」

「え？」

「なんでそれだけでそうな……。あ、いえ、うん。そうよ」

「……大佐は優しい方です。好意を寄せる相手が例え深海棲艦だったとしても、それが純粋な思いなら無碍に拒否はしないでしよう」

「それ、ほんも……。あっ」

「……」 ジー

「……」（参った。これ絶対レ級達を見てきたせいで私も当てられた）

「好き、なんですすよね？」

「……分からないわ。でも嫌いじゃないのは確か」

「……まあいいです」 ファイ

「どれくらい大佐留守なの？」

「……そんなに長くはないです」

「そう」（口ぶりから察するに一週間くらいかしら）

「寂しいのね」

「……凄く」ポツリ

「えっ」

「何ですか？」

意外な顔で驚く夕級に加賀が即座に反応する。

「あ、いえ。その、凄くストレートなのね」

「良い事を教えてあげましょう。ここでは恋に対して奥手だと置いて行かれるだけです

」よ」

「そ、そう……」

夕級は視線を逸らしながら考えるそぶりをする。

その様子は加賀の言葉に対して満更でもない反応に見えた。

「……ふう」

「早く帰って来るといいわね」

「ええ、そうね。本当にそう思うわ」

この基地の中ではかなり冷静な性格の方に見えるが、実は根は案外一番子供みたくに純粹じやなのでは。

短く溜息を吐く加賀の横顔を見ながら夕級はそんな事を思うのであった。

第13話 「クリスマス②」

「むっらつくもー今日はクツリスマツスだよー♪」スリスリ

提督は叢雲を見るなり幸せが溢れんばかりの笑顔で叢雲を後ろから抱き締めて頬ずりをしてきた。

「もう、分かってるわよ。でも今は執務中なんだから楽しむのは後だからね」ギョツ

一応宥めるようなことを言いながらも明らかに嬉しそうな顔で叢雲は抱き締めている提督の手を胸の前で握り返す。

「あ、ごめんね。年に一回しかないクリスマスだからさ。早く君と楽しみたくて」ニギニギ、フニ

「提督……。あつ、ん……。だつ、ダメだからね。後なんだから」

「ああ、本当にごめんね。急かすつもりはなかったんだ。あーでも楽しみだなあ」

「私も楽しみよ。その……。プレゼント、もね」

「え？」

「あ、ううん」(ちよつと凶々しかったかな)

「なんてね。勿論用意してるよ」

提督はそう言うのと軽く自分の胸を叩いて見せた

「あ……私もよ」

叢雲は背後からその振動を感じ、提督への感謝と愛情からより深く彼の手を握り締め
た。

自分の胸の前で提督の手を握っている為、当然彼は胸の感触を感じているわけだが、
そのくらいの事は彼らにとってはお互いの愛を確認し合うための軽いスキンシップで
しかなかった。

故にその時の二人には淫らな感情が沸上がる事など皆無であり、幸せそうお互い見つ
め合うだけに終始するのであった。

「ありがとう。期待してるよ」

「私も、期待してるから……ね」

キラキラ

「……」

榛名「相変わらずですね……」

瑞鳳「ズルい……」

伊勢「いつもこんなの見せつけられてたら嫉妬するのも仕方ないよね……」

龍田「そうねえ……今日はクリスマス마스だしねえ。特に夜の事なんて考えるとなんかもう、いろいろと殺りたくなるわよねえ……」ギラッ

望月「龍田さん殺気立ち過ぎー。でもムカつくー、提督かまえー。叢雲ちよつと譲れー」

那智「……ふん」プイ

龍驤「まあ、一応提督さんからはプレゼントもろてるんやけどなあ。しかも全員が欲しい物を個別に」

扶桑「でも、それだけじゃ……。いえ、形ではない物が欲しいのよね……」

名取「む、無理ですよ。だって提督さん本当に叢雲さんしか基本見ないし……」

磯風「……任せておけ」

青葉「え？ あ、磯風さん何をする気です!？」

トコトコ

「提督!」

「ん？ ああ、磯風どうしたんだい?」

「磯風?」

「提督、そして叢雲に一つ頼みがある」

「頼み？ 何かな？」

「言つて御覧なさい」

「今日はクリスマスだ。だから、な。んんっ、平等にとは言わない。だけど今日くらい少しは私達に構つて欲しい！」ドーン

黒潮「い、言いおつたあ!!」

磯風の宣言のようなお願いに提督と叢雲はきよとんとして黙つて彼女を暫く見つめていた。

気まずい沈黙が磯風とその成り行きを見守つていた者たちを包む。

「……」

磯風は黙つて平然を装つてはいたものの、内心はかなり緊張していた。

果たして彼らは自分の願いに対してどう応えるのか。

「……」

提督と叢雲はまだ黙つて磯風をみつめていたが、やがて顔を見合わせると……。

「叢雲」

「ん?」

「今日はクリスマスだね」

「そうね」

「なら、一日中とまで言わなければ今日くらいは……?」

「ふふふ、遠慮はする必要はないわ。こういう時くらい皆で楽しまないと損じゃない」

「……!　　そ、それでは!」

機体に満ちた目で磯風は提督と叢雲を見る。

「ああ、分かったよ。叢雲も許してくれたし、提督としても僕は君たちの期待に応えた
「い」

オオオ!

「皆でクリスマスを楽しもう!　それとええつと……す、スキンシップもあまり過剰な
やつじゃなければ特別に許可するよ!」

キヤー♪

「……妬げるけど、許すわ。あと、聞いてね。別に今日だけじゃない。これからは、さつ
き提督が言った通り目に余る程じゃなければ私の目を気にしなくていいわ」

金剛「そ、それは本当デスカ!」

信じられない宣言に色めく群衆の中から早速金剛が顔を紅潮させて聞いてきた。

「二言はないわ。ね、提督?」

「叢雲がそれでいいなら。僕としても皆に喜んでもらえるのは嬉しいしね」

テイトクー!!

歓喜の声が木霊し、幸福が満ち溢れようとしている部屋の中で提督は改めて自分を今まで支えてきてくれた部方たちを眺めながら言った。

「さあ皆、パーティーをしよう!」

そんな微笑ましい光景が広がらんとしていた鎮守府の一方、丁督の鎮守府では……。

長門「提督、今日はクリスマスだな」ヌギ

「ん? ああ、そうだな。うーさぶつ。……つーか、寒いのによく脱ぐな」

既に上着を脱ぎかけている長門の前に、提督はどこか気だるげな様子だった。

加賀「子供を……こほん、体が火照って仕方がないのです」ヌギ

「それは年中じゃねーか」

大井「ねえ、提督う……。し・ま・しよ?」ヌギ

発情真つ最中の加賀と大井を前にしても提督の態度は特に変わる事もなく、すまし顔でこう言ってきた。

「何も外で全員ですることはないんじゃないか？」

翔鶴「今日はクリスマスじゃないですか。寒空の下で性夜を楽しむのも悪くないと思いますよ？」ヌギ

「字、なんか間違つてねーか？」

金剛「テ・イ・ト・ク、イジワルしないデ？」ハラリ

「お前もう全裸かよ。っーかな……」

磯風「どうした？」フニフニ

半裸から全裸、それどころか既に露出した肌を彼に押し付けている者がいる中、それでもやはり提督の態度は変わる事なく、更にこう続けてきた。

「磯風、ちよつと胸から手え離せ。……あのな。この際だから一つお前達に教えておくが」

日向「まさかここまできてお預けとか言わないよな？」シユルツ

「いや、それはないけどな。ただな。一つ教えてやりたいのはなんでクリスマスだからつてそう熱くなるんだよ？」

加賀「熱くなるのがいけないのですか？」プニプニ

「まだ話してる途中だ。押し付けんな。だからな？ クリスマスつて言ったらアレだろ？ 神の生誕祭だろ？ そんな日にこんな気分になっちゃうなんてアジアの中でも日

本とかくらしいしかないんじゃないか？」

長門「ふむ……つまり提督は本来の意味を知っているからそういう気分になれないと？」

「クリスマスっていう言葉さえなげりやな。俺からすれば愛し合うのにいちいちそれを理由にするのが滑稽なんだよ。俺、宗教は仏教とか神道とか、そっちの方がだから」

雷「仏教と神道は全然違うわよ司令官」チュツ

「……ちゆ、分かつてるって。だから俺が言いたいののはな。そんなの理由いらねーから欲しいときははつきり言ってくれて話だ」

潮「え、えーと……でも、なんていうかその……。ん、ペろっ」

対照的な身体の幼女に両サイドから責められながら、提督は雷の接吻に応えると同時に潮のつたない奉仕の裏に隠れた彼女の考えを見抜いた。

「んあ？ プレゼントか？ それならちゃんと毎年やるよ。ほれっ」ポイー

翔鶴「わあ♪」

「プレゼントはクリスマスでもいいが、愛情は求めるのにいちいち理由つけんな」

金剛「提督うー♪」

「で、プレゼントと俺からの愛情、どっちが欲しい？」ニツ

第×1話 「ワンコ」

「大佐！ ケツコンありがとうございます！」

「いや、なんかケツコンしてもらってお礼を言われるのは男として複雑な気持ちなんだが……」

「だってだって、やっと大佐とケツコンできたんだもん。最初は金剛お姉様だったのは当然として、でもやっぱり妹の霧島に先を越されてしまったのは正直きになっていましたから」

「そういうものか？」

「はい！」

「ふむ」

「これでわたしは身も心も大佐の……えへへ、大佐のものですからね」テレ

「俺はもの扱いする気はないぞ」

「分かってます。わたしがそう言いたいだけですから。……ふふふ、えへへえ♪」

「……」（犬だったら尻尾が切れそうなくらい振ってそうだな）

「ねえ、大佐」

「ん？」

「撫でてください」ズイ

「ん？ ああ……」ナデナデ

「ん……んく♪」スリスリ

「……金剛にベツタリだったお前とは思えないな」

「お姉様はお姉様、大佐は大佐です！」

「そういうものか？」

「はい！」

「そうか……」

「手」

「ん？」

「今度は頭だけじゃなくてその……いい、犬を可愛がるように全体的に撫でて欲しいで

す……」カア

「……ほら、膝に乗れ」ポン

提督は仕事用の椅子からソファアに座り直すと膝をポンと叩いた。

「は、はい！」

比叡はそれを見て嬉しそうにソファアへと駆け寄りその上に乗ると、横になりながら

上半身を提督の膝に預けた。

「……」 ナデナデ

「んん、んふふ♪」 スリスリ

「大佐あ……」

「うん？」

「わたし、大佐とケツコンできて本当に嬉しいです」

「そうか？ 俺はお前以外の奴ともケツコンしてる甲斐性なしだぞ？」

「そんな事ありませんよ！ これは皆が同意して望んだ事ですから」

「……まあそう言ってもらえると俺も多少は罪悪感が軽くなって気が楽になるが」

「罪悪感なんて感じなくていいんですよ。大佐は、こうしてわたしたちを迎えてくれるだけで、十分にわたしたちの期待に応え、満たしてくれていますから」

「比叡……。ありがとうな」

「お礼なんて！ あ、でもそういう気持ちがあるならもう少し甘えさせてください……
なんて。えへへ」

「ふっ……」 ナデナデ

「〜♪」

「……」

「榛名、何してるネ？」

執務室の前でじつと動かずに何かを覗いている様子の榛名を目にとめた金剛が声を掛ける。

それに対して榛名はそっけない態度でこう返した。

「別に……」

「っ！ お、お姉様ダメです！」ヒソ

金剛と一緒にいた霧島が榛名の発言から何かを察したのか焦った様子で姉に注意を促す。

「エ？」

「榛名は今とても黒い状態です！」ヒソ

「あ……」

「……わ、私だってもう直ぐ、もう直ぐだもん……」ブツブツ

榛名は執務室を除きながら周りが見えないかのように独り言を言っていた。

「は、榛名。そう気にする事ないネ！ だって榛名は今レベルは98！ もう直ぐじゃナイ！」

「……」（お姉様ダメ！ そのくらいのフォロオーじゃ……）

「……でも、霧島に先を越されてしまいました……」

「フアツ？ い、イヤ！ 姉妹同士でそういう事気にしちやダメよ！ jealous

y は姉妹以外にすべきネー！」

「お姉様、それはそれでひどい論理です……」（でも、榛名の嫉妬の矛先を変えようとし

てくれた事には感謝です）

「……姉妹以外ならいいんですか……？」

「え？ あ……」

「姉妹以外なら嫉妬しても……いいって言いましたよね？」

「え、や、ちよつ……そういう意味じゃ……」アセアセ

「は、榛名。こう考えるのよ。楽しみが先に延びただけだって」

「……先に？」

「そう。姉妹の中で最後にケツコンした分、自分は思いつきり大佐に甘えるんだって」

「最後に……我慢した分……」

（我慢とは言つてなかったような……）

（最早、願望が欲望となつて漏れている……。これは早々に大佐に榛名とケツコンして

もらわないと……！）

「そうですね。お姉様、ごめんなさい。榛名、ちよつと大人げなかつたです」ニコ

「榛名……！ うウン、いいのよ。お姉ちゃんの話を知つてくれれば、それでい——」

「それじゃあ、榛名が大佐と結婚したら、その日はお姉様達や霧島は絶対に榛名の視界に入らないで下さいね！」

「」

「え？」

「榛名、我慢した分、思いつきり大佐に甘えたいんです。だから、その間は余計な事を……余計なものを……感じたくないんです」ニコ

「か、感じ？ feel もだめナノ？」

「はい。完全に大佐と二人つきりがいいです！ だから気配とかもできれば……」テレ

「あ……アハ、あはは……。う、ウン。お姉ちゃん頑張るヨ！ ま、任せておいてー！」

「え？ ま、任せてつてお姉様何を……？」

金剛の突然動揺した声で何かを請け負った発言をしたので、霧島はその真意を確かめようとした。

「霧島、榛名がケツコンしたらその間は、全力でここに誰も近づかないように防衛するワ

ヨー！」

「お姉様!!」 パアツ

「は、はあ!? そんな無茶な!? だ、だってもし非常事態とかで直ぐに報告しないけない事があつたら……」

「お姉様達でなんとかしてください」ニコ

「」

「お、オツケーヨ! お、お姉ちゃん達に任せておいて!」ナキワライ

「霧島、そう心配しなくても大丈夫よ。だって、もしお姉様達の手にも終えなくて、敵が大佐と私の邪魔をするような事があれば、その時は……」

「は、榛名?」

「……」ゴク

「そんな不貞な人はぜつ………たいに許しませんから♪」ニコ

「ヒイ!?」(榛名怖いよお!) ブアツ

「……!」(大佐助けて……) グス

「……? 何か外が騒がしいな」

「そうですか? わたしは別に気になりませんけど? ふにやあ……♪」スリスリ

第×2話 「心待ち」(R-15)

「……」ソワソワ

「足柄、どうした？」

グラスに入った酒を飲むでもなく何かを気にしている様でそわそわする足柄に提督は氣付いた。

「えっ、う、うん……。あの、ね」ソワソワ

「？」

「ど、どう？」ジツ

「ん？ 何がだ？」

「えっと、ほら、私改二になったじゃない。だから、さ？」

「……ああ、悪い。お前だと自分から自慢してきそうな印象があるから言われるまで氣付かなかった」

「や、やつぱり？ い、一応言おうとしたのよ？ でも、ほら、なんかそういうのって恥ずかしいじゃない？ 大人げないっていうか……」

足柄はそう言って照れくさそうに眼を逸らした。

「足柄……ふっ、ははは」

「な、なに？」

「いや、お前は本当に初めて会った頃と比べて大人しく、いや落ち着いたか？ そんな感じになったな」

「あ……。や、やめてよ。自分で言うのもなんだけどその時の自分を思い出すのは結構恥ずかしいんだから」

「そうか？ でも他の所にいるお前は大抵ああいう感じで自信に満ちているか、好戦的みたいだが？」

「それは私でも知ってるわよ。でもこの、『私』は違うの！ この私はその……お、大人なんだから……」

「足柄……。ふっ、本当にお前は……」

「もう、いいじゃないその事は。で、さ。どう？」 ジッ

「ん？ ああ、そうだな……」

「……」 ドキドキ

「うん。性能抜きにしてもその、月並みな言い方だが素敵だ。魅力的になったぞ」

「ほ、本当!？」 パアッ

「ああ、本当だ」

「そ、そう。そう……ふふ♪」

「……」(嬉しそうだな)

「ねえ」

「ん？」

「どの辺が魅力的になった？」

「ん？ それはもう全体的にだ。お前が自分から何も言わなくても全身から自信と頼もしさが伝わってくるぞ」

「……それだけ？」

「ん？ 足柄……？」

自分なりに心から褒めたつもりだったので、それに対してあまり満足そうな顔をせず、に詰め寄る足柄に提督は不思議そうな顔をする。

「ねえ、大佐。それだけ？」ジツ

「……きれいになった」

「っ！ ありがとう！」ダキッ

「つと」

「その言葉、待ってたのよ♪」スリスリ

「……やれやれ、俺もまだ女の扱いがなかってなかったな。すまなかった」

「ううん。気付けただけ全然マシ！ 合格よ」

「そうか。それは良かった」

「……ね」

「ん？」

「記念」

「……」

「記念、欲しいな？」ジツ

提督の胸から顔をあげた足柄の瞳は濡れており、その目は女として提督を求めている。提督は時計を見た。

提督は時計を見た。

時刻はタイミングを見ていたかのように深夜を既に回っており、基地は少なくとも自分が感じる限り夜の静けさを提督に伝えていた。

「……分かった。ちゅっ」

「あ……♪ん……ちゅ……」

承諾のキスに足柄は喜びと安堵のキスを返す。

「……どうする？」

足柄の服に手をかけながら提督は彼女に自分でするかを聞いてきた。

「……今日は、大佐にお願いしよう、かな」

「分かった」スルツ

自分が愛する男に肌を晒されていく過程を足柄は何とも言えない、幸福感と、羞恥に快感を憶え、恍惚とした表情をする。

「ん……。はあ……」

「ねえ」

「うん？」

「上は、ズラすだけにして欲しい……」

「外さない方がいいのか？」

「その内に外れると思うから。だからそれまではその方がなんか……」カア

「……お前、本当に良い女に、魅力的になつたな」スツ

「あつ……ん」

足柄の意図を理解した提督は彼女に言われた通りにした。

「はあ……」(ちよつと久しぶりだから……すごく敏感かも……)

提督によつて晒された肌に、まだ触れさえされていないにも関わらずえも言えぬ快感を足柄は感じ、性感は高まる一方だった。

「もう感じているのか……」

「やっ……言わ、ない……ああんっ」

「……ん」ムニ

「んっ、ああっ、あっ。はあ……」

快感に喘ぎながら足柄は片手をそつと提督へ向けた。

ギユツ

「あ……。大佐も……感じ……あっ、るじゃない……」ピクツ

「お前の様な女を抱いて感じない男はいないだろう。ちゅ……」

「はあ……はあ……。大佐、たい……ああっ……」ピクピクツ

「……」

提督は足柄のある変化に気付き、刺激が十分にいきわたっている事を確認した。

（かなり感じているな。もうこれは……）

「下も、脱がすか？」

「あ、待って」

「？」

「下は今……から自分で脱ぐから。今日はそのま……前にあなたのをしたいの……」

「分かった。頼む」

欲情した目で自分を見上げる足柄が何をしたいの理解した提督は、彼女の胸から一旦

離れるとベッドに腰を下ろした。

「ん……ちよつと待つてね」スルツ

足柄は跪くと腰を下ろした提督にゆっくりと近づいて行った。

そして……。

「きやつ、は……はああ……♪」(凄い……)

「……っ」

「それじゃ……始めるね? ん……ちゅ」

「……あ……しが……ら……。ふう……く……あ」

「ひもひいい?」

「ああ……」

「ん……よはつあ……ふう……んぐ、ちゅう……」

……ッ、……ック

(……ん?)

いつの間にか足柄によるもの意外に別の音が響いていた。

提督が快感に耐えながら音のありかを確かめると、それは足柄が無意識に起こしていたものだった。

「足柄……もう、いい……」

「つぶあ……はあ……。もう、いいの？ 私、まだやれるわよ？ ううん、やり……たい、かも」

顔を赤くしながらそんなげな事を言う足柄に提督は指摘をした。

「いや、大丈夫だ。それより自分の手を見る」

「手？ あ……」

提督に言われて自分の手を見た足柄は特にその指の部分を見て一気に顔を赤くさせた。

「無意識にするくらいもう我慢できなくなっていたみたいだな。今のお礼とは言わんが、そろそろ、いいか？」

「うん。来て大佐……。あつ……」

それから数時間後。

「ん……」モゾ

「……」

あれから幾多に及び行為に及んだ提督は、今は自分の腕の中で静かに寝息を立てる足柄寝顔を、その頭を優しく撫でながら静かに見つめていた。

(こいつもそうだが、重巡と軽巡の育成にもう少し力をいれてやりたいものだな)

提督がそんな事を考えていたときだった。

ぎゅっ

「ん？」

提督が手を握られる感覚に目を向けると、そこには足柄が自分の手をそつと握りながらある寝言を言っている光景があつた。

「す……き……ゆび……」……わ

「……ふ、はは」(ケツコンの前に指輪を渡したらどんな顔をこいつはするだんろうな)
足柄のそんな愛らしい様子を見て微笑んだ提督はそんな事を考えたのであつた。

第×3話 「改めて」

「大佐、古鷹改二になってきました！ どうですか？」クルリ

「……ああ、古鷹か」

「え？」（え？ なに？ 今の間？）

「ああ、悪い。ちよつとボーつとしてただけだ」（言えるわけがない。一瞬古鷹の事を完全に忘れていたなんて）

「……」

「……」（え、なにこれ？ 何だか凄く気まずい？）

何とも言えない雰囲気に含まれる中、古鷹は突如訪れた沈黙に早速混乱した。

（あ、そういえば私つて大佐とあんまりちゃんと話した事がなかったかも。それで緊張しちやつてるのかも。あ、改めて考えると何を話せばいんだろう？ 今日の良い天気ですわね、とか？）

「……」（古鷹の奴、もしかして俺の失礼に気付いたか？ なんか話難そうにしているし、やっぱりそうか？）

古鷹が混乱する一方で提督は提督で一人こんな感じの空回りをしていた。

「……」（取り敢えず煙草でも吸うか）

気分を取り直す為に提督が煙草に手を掛けようとした時だった。

それに気づいた古鷹が気を遣って火を付けようと彼に近寄ってきた。

「あ、タバコですか？ 火、お着けますよ」（これはチャンス！ これを機に大佐と親しく……）

ゴトツ、バシヤツ……

「あ」

「む」

焦って近づいた行動が祟ってしまい、古鷹は提督の机にあったサボテンの鉢を倒してしまった。

鉢に上の部分に敷き詰められていた小石が、勢いよく毀れて執務の途中だった書類の上に広がる。

「ご、ごめんなさい！ す、直ぐに片付けますから！」

自分の不手際に青くなって謝罪しながら古鷹は急いで手で小石を集めて、机の上を掃除しようとする。

ビリッ

「あっ」

「……………」
今度は勢い余って小石と一緒に書類も引きずってしまい隅の方を少し破ってしまった。

「……………」

「古鷹き——」

『気にするな』と提督が言おうとした時だった。

「ふえ……………ぐす……………」

提督と目が合った古鷹は目から涙を溢れさせて自分の不甲斐なさに今にも泣き出さんとしていた。

「いや、待て。大丈夫だ。大丈夫だから、な？」

「た……………うわああああん。ごめ……………ふええええん」

急いで宥めようとした努力もむなしく古鷹の涙腺にあったダムは決壊し、案の定大泣きしてしまった。

ガチャ

「何かありましたか？」

声を聞きつけた鳳翔が心配そうな顔で部屋に駆けつけてきた。

「鳳翔……」

「ふええええん」

「ああ、これは……」

部屋に入ってきた鳳翔の目には、困った顔で立ち尽くす提督と同じく立ったまま小さな紙の切れ端を握り締めて泣いている古鷹といった光景が飛び込んできた。

「鳳翔これはな……」

なんと説明したらいいのか考えあぐねていると言った様子子の提督。

そんな彼の姿を見て鳳翔は、艦隊の母の異名に相応しい判断力で一瞬で状況を把握した。

「あ、大丈夫ですよ大佐。はい、古鷹さんも泣かないで。大佐は怒ってませんよ」ナデナデ

「う……ぐす……で……。えぐつ、でもお……」

「大丈夫。大丈夫ですよ。ね？ 大佐？」

鳳翔の助け舟に心の中で最大の感謝を送りながら提督は即答した。

「勿論だ。古鷹、そんなに気にするな。確かにお前はミスをしてしまったが、机は掃除すれば済むし、この書類だってコピーをすれば済む程度なものだ」

「……ひぐ……うっ……ぐす」

「ほら、古鷹さん。大佐もああ言ってますから。大丈夫ですよ？」ナデナデ

「鳳翔の言う通りだ。俺は全く気にしていない。いや、今はお前が泣き止んでくれることの方がきになる。だから、な？　もう安心しろ」

「……」コク

未だに目には涙が滲むものの、古鷹は俯いて表情を見せない様にしながらも、小さく頷いた。

「……大丈夫そうですね。大佐、後はお任せしても？」

「ああ、大丈夫だ。鳳翔、本当に助かった」

「いえ、このくらい。それでは」

パタン

「……」

「……」

部屋にまた沈黙が訪れた。

しかし今度は、お互いに理由が分かっている沈黙だった。

「大佐……」

意外にも先程まで泣いていた古鷹から口を開いた。

「ん？」

「ごめんなさい……」

「ああ。分かった」

「本当に……」

「大丈夫だ、本当に。お前はこれ以上心配する事はない」

「……はい」

目に見えて落ち込んでいる古鷹をどう励ましたらいいのか。

少し悩んだ末に提督は結局は結局は始りに戻る事にした。

「古鷹」

「……っ、はい」

「改二おめでどう。良かったな」

「……大佐」

「こんな事くらいお前の活躍であつという間に忘れさせてくれ。期待しているぞ」ポン

「……はい！」（大佐、やっぱり良い人だ。うん……頑張ろう！）

こうしてその日起こったちよつとした事件は、何とかお互いの親交を温めるだけに落ち着いたのであつた。

そしてその日の晩――

「たーいーさ、しっつれいしまーす！」

元氣のよい声と共に古鷹の妹の加古が提督を訪ねてきた。

「なんだ加古、用か？　もしかして姉の件か？　あれはな——」

「ああ、いいよ。その事は分かっているから。今日来たのは別件、とは言わないけど直接関係はないよ」

「そうか。で、なんだ？」

「いやー、今まで大佐と古鷹ってほら、なんかすれ違いつか多かつた所為かちよつと壁、みたいなものがあつたじゃない？　今日の事でそれが完全になくなつて良かったなあつて事を大佐に直接言いたくなつてさ」

「……そう、か」

突然と言えば突然の申し出に提督は戸惑つた声を出すばかりだった。

「あー、もうそんな顔しないでよ。妹として姉が提督と仲良くなつたのが嬉しいつてことを伝えたかつただけなんだから」

「……姉思いなんだな」

「まあね！」

「それ以外は姉の方がしっつかりしてる印象があるな」

「まあん——つてちよつと！」

「はは、冗談だ」

「嘘だ」

「そう思うか？」

「うん」

「まあ半分だな。もう半分は元気が良くて一緒にいると楽しい奴だと思っているぞ」

「え？ むう……そんなんで懐柔されないんだからね」

「ほう、懐柔とは難しい言葉を知ってるんだな。偉いぞ」

「え？ えへへ、ありが——つて、ちよつとお！」

「ははは。まあノリが良くて楽しい奴だとは思っている。これは本当だ」

「むう……じゃ、さ」

「うん？」

「撫でてよっ」

「は？」

急な申し出に提督は戸惑った声を発した。

「この基地では艦娘と提督が仲直りする時にその印に艦娘からは握手、提督からは頭を撫でて貰える決まりがあるんだよ」

「なんだそれは。俺はこの提督なのにそんな決まり初めて知ったぞ」

「そりゃ仕方ないよ。だって今思いついたんだもん」

「……」

「……」

「……なあ」

「ん、なに？」

「その決まり。いや噂、広めるなよ？」

「じゃ、撫でて」

「……」

「……」

「……分かった。ほら」ポン、ナデナデ

「えへへー♪」ニコニコ

（なんか重巡にしては感じが駆逐艦に似てるな。フランと似たタイプなのかもな）

「うん、決めた」

「ん？ 何をだ？」

過去は不意に宣言するような口調で言いだした。

「私も重巡同盟に加入しよう」と

「重巡同盟？　なんだそれは？」

「大佐が好きな子の組合？　みたいなやつ。別に重巡だけじゃないよ。艦種ごとに同盟があるんだ」

「なんだそれは……そんなもの知らなかったぞ」

「そりゃ本人を前にして堂々と言うものでもないしね」

「……まあ、確かに。で、お前は口ぶりから察するにそれに入ってなかったようだが？」
「うん、そうだよ。別にわたしは大佐の事嫌ってはなかったけど、敷いて皆ほど強い好意を持ってたわけじゃなかったしね」

「なら入らなくていいだろ」

「ちよ、自分に好意を寄せる女の子の同盟に目の前でわたしが入るって言うてるのにそんな事普通言っちゃう!？」

「なんかあれだ。そういうのの人数が増えると疲れる気がする」

「理由があまりにもあんまりだあ!？」

「……」

「……」

「……で、入るのか？」

「まあね。わたしもなんかさつきまでのやりとりも含めて大佐の事気に入っちゃった

し」

（それでいいのか？　あまりにも安直じゃないか？）

「……そうか」

「え？　なんでそんな残念そうな顔をするの？」

「いや、なんだかお前に悪い道に引き入れてしまった気がしてな」

「だからなんでそういう事を本人の前で言うの!？」

第×4話 「要求」

「ふう……」

「あら、大佐」

「熊野」

「おタバコですの？」

「ん、まあな。吸うか？」

「なんで自然に勧められるの!? 吸うわけないじゃないですか!」

「そうなのか？」

「寧ろ何で疑問形なのかお聞きしたいのですが……」

「いや、なんかお前やさぐれてる時に吸ってそうないメージがな」

「理由があまりにも失礼じゃありませんか!?!」

「……そうだな」フウー

「どうかされたんですの？」

「ん？」

「大佐、いつもと違う感じがしますよ？」

「……ん」

熊野の指摘が的を射ていたのだろう。

提督は彼女の指摘にちよつと気まずそうに視線を逸らした。

「日本で何かありました？」

「まあ、いろいろと、な……。疲れた」

「え？」

「……ふう」

「……そこ、よろしいですか？」

「ん？ ああ、かまわ——」

トス

「……おい」

「はい？」

「何で膝の上に座るんだ？」

「これで煙草が吸えないでしょう？」

「ああ」

「私は大佐にタバコを吸ってほしくありませんの」

「……今ここで吸うのを止めたらどいてくれるか？」

「嫌ですわ」キツパリ

「何故……」

「レデイにそんな事聞くなんて失礼ですわ。セクハラです」

「お前、セクハラの意味解っているか？」

「馬鹿にしないでくださいまし。ちゃんと鈴谷に聞いて知ってますわ」

「鈴谷に……。因みに何て教えてもらった？」

「レデイを機嫌を損なわせる行為がセクハラと聞きましたわ」

「……」（あながち間違っていないのが質が悪いな。更に教えた相手が熊野だというのがその厄介さの度合いを上げている）

「何か間違ってます？」

「いや、全部間違いと言うわけじゃないが。熊野、ちよつといいか？」

「何です？」

「セクハラと言うのはな。一応今こうやってお前がやっている事も該当するんだぞ？」

「？　どういう事ですか？　私は今特に機嫌は悪くありませんわ」ポヨポヨ

「跳ねるな。だからそれだ。異性が特に理由もなく過剰なスキンシップを強要したり、しかけるのも該当するんだ」

「過剰？　これが？」フニフニ

「だから膝の上で座ったまま動くな。お前は今、俺の膝の上で自分の尻を乗せていて何も感じないのか？」

「お、尻だんなんて。大佐、ちよつとはしたくないですよ！」カア

(そこに反応するか)

「そうか。じゃあそれを服越しとは言え今密着させているのははしたないとは思わないか？」

「? どうしてですか？」

「……」(こいつ、鈴谷や最上に弄られて価値観がちよつとズレたな)

基本的にお嬢様のイメージで通っている筈の、わかには信じられない熊野のズレ方に提督は嘆息した。

「大佐？」キョトン

「……何でもない。もう好きにしろ」

「ほ、ほんとですか?!」

「前言撤回だ。何をする気だ？」

「殿方が前言展開するだなんて情けないとは思いませんか？」

「それはお前が何をするかによるだろう。自分に害が及ぶ可能性を事前に回避するのは純然たる正当防衛だ」

「が、害なんかじゃないもん！」

「おい、言葉使いがちよつと幼くなつたぞ」

「つ、コホン。が、害だなんてあまりにも失礼ですわ」

「じゃあ実行する前にそれが有害でない事を口頭で証明しろ」

「……」
「プイ」

「……さて、基地に戻るか」

「だ、だめ！」

「何をするつもりだった？」

「き……」

「ん？」

「き、キス……とか」

「そうか。そういうのは好きな奴とするといい。鈴谷とかとな」

「ちよつと、自然に人を同性愛者にしないでください！」

「む……」（意外にこれは勘が外れたみたいだな）

「わ、私だって理由もなくキスとかしたりしませんわ。大佐が、そのす……だから」
「ゴ

ニョ」
「ニョ

「……お前も同盟に入ってるのか？ なんだったか、ああそうだ。重巡同盟ってやつに」

「っ！ 何故それを!？」

「凶星か。因みに訊くが、他には誰が入ってるんだ？」

「え？ 全員ですけど？」

「……全員？」

衝撃の事実にて提督は唾然とする。

「はい」

「那智もか？」

「ええ」

「妙高に、麻耶達……高雄型も奴らもか？」

「勿論ですわ」

「……」(全員を愛する、ケツコンの対象にすると宣言したのはいつだったか。そうだ、確かあの時だ。水泳大会の閉会式だったか。あの時は、まさか宣言したとは全員が俺に好意を寄せるなんて思いもしなかったが……) チラ

「大佐？」キョトン

「……」(何故だ)

「どうかいたしました？」

「いや、取り敢えず今日はキスはしない」

「えええ!! そ、そんな……!!?」(せっかく同盟の中では足柄さんの次に一歩リードできると思ったのに!)

「悪いが。俺にも一応は矜持と言うものがある。今回はそれを保たせてくれ。そうでないと俺はこのままではただの……」ズーン

「た、大佐?」(お、落ち込んでる? 何で? どうして?)

「替わりと言っては何だが、キス以外でそれ以上に過剰なスキンシップでなければ応えてやる」

「ええ……そんなあ……。うーん……。あつ」

「何か思いついたか?」

「抱っこ! お姫様みたいに抱いてくださいまし! そして今日はそのままお昼寝したいですわ!」

「抱っこ……まあ、それなら」

「ありがとうございます!」ペアツ

「座ったままでいいか?」

「はい!」

「そうか。そじゃあ流石に両腕ですつとお前を支えるできないから……そうだ。うん、上半身は俺の胸に預ける形にしろ。そう……それで……」

それから十数分後、堤防にはすやすやと寝息を立てる熊野を抱きかかえる提督がいた。

「すう……すう……すう……」

「……はあ」

提督が意味深いなため息を吐いた時だった。

「おつ、いー事してるじゃーん」

「……」

ギギ……と音がしそうな鈍い動きで声が出た背後を見る提督。

そこにはいたのは……。

「鈴谷……」

「次、熊野が起きたら鈴谷ね！」

「却下だ。お前は海で泳いでろ」

「なんで!?! ひーきだひーきいー」ブーブー

「うるさい。ちゃんと日本語を覚え」

「ちゃんと使ったらやつてくれる?」

「だめだ」

「ひーきだー!!」ブーブー

(戦いときは頼もしいのに何故非番の時はこうも普通の女子高生みたいなんだ……)

「大佐っ、鈴谷も！ すーずーやあもー！」グイグイ

「やめろ、引つ張るな。熊野が起きる」

「熊野が起きたら交代できるじゃん」

「それは熊野が許さないだろうな」

「ふふん、鈴谷これでもこーしよーとか得意なんだからね。熊野ならちよつとこう

しよーすればすぐオツケーくれるもん」

「……交渉？」

「そ、こーしよー！ 熊野にこの大佐の寝てる写真渡させば……」

「長門」

「呼んだか？」

「えっ!？」

「こいつを連行しろ。そして写真を全部回収しろ」

「ふむ……その写真証拠品としてこちらで預かっても構わないよな？」

「……悪用するなよ？ 信じているからな？」

「任せておけ！ それでは行こうか鈴谷」ガシツ

「えっ、や……ちよ、なに!! はーなーしーてえ!」ジタバタ

「なに、心配するな。ちよつと島風達と一緒に鬼ごっこしてもうらだけだ。直ぐに開放する」

「島風達と!? なにそれ死ぬ、死んじやう! やだやだ!」

「大丈夫だ。私も付き合つてやるから」

「そういう問題じゃ……え?」

尚も鈴谷が抵抗しようとした時、長門がそつと彼女に耳打ちをしてきた。

「大佐は今回全部の写真を回収しろとは言つたが、発生元まで対処しろとは言つていない。今回は写真の回収だけで見逃してやる」ボソ

「う……はあ……。たーすーけーてー」

「はっはっは。堪忍したか。それじゃいくぞー」

「……静かになつたな」(なんか最後二人とも話し方が棒読みのようだった気がしたが、気のせいか……?)

第×5話 「感謝」

「あー！ たーいーさーあ!!」

タタタツ

「なんだ阿賀野声が……ふく……つ」ドム

「えへへ、大佐みーっけ♪」スリスリ

「ど……あ……ぐう、し……ぜえ……た？ あ、阿賀野……」

「大佐を見つけたのが嬉しくてつい♪」

「そ……うか」ゼエゼエ

「？ 大佐、どうしたの？」

阿賀野的には単純に甘えただけのつもりだったので、彼女は提督の調子が悪そうな様子にキョトンとした顔をしていた。

「お前に奇襲を受けたんだ」

「えっ!? あ、阿賀野大佐にそんな事絶対にしないもん！」

「……いいか？ 阿賀野」

「え？」

「お前は女性である前に艦娘だな？」

「ううん！ 阿賀野は大佐のものだもん！」

「……まあ、なんでもいい。取り敢えずお前は艦m」

「だめ！ 阿賀野は大佐のもの！」

「人の話を聞け」

ゴン

「きやうつ」

「……いいか？ お前は艦娘だな？」

「……」 フイ

あくまで自分は大佐のものだという事を主張したいのだろう、阿賀野は拗ねたように横を向いて脹れっ面をする。

提督はそんな彼女に対して子供をしかる親の様に噛んで含めた言い方で改めてもう一度言った。

「か・ん・む・す・だ・な？」

「……」

「阿賀野」

「っ、うん……」 シュン

「よし、いいか？ 艦娘であるお前は普通の人間と比べていろいろ身体能力が優れているんだ。当然力もな？」

「だ、だから阿賀野は別に大佐に悪きなんか……！」

「加減抜きに抱き着かれたら俺とて苦しいんだ」

「え？ あ……」

「さつき息も絶え絶えだったのはお前の特攻に俺の体力が削られたからだ」

「ご、ごめ……」グス

「まだ泣くな。取り敢えず聞け。いいか？ 阿賀野。この基地ではな、全ての艦娘に俺とスキんシップを取る時は加減するように言っている」

「うん……」

「力の加減が大事なのも勿論だが、さつきから言っているがお前達は俺の部下でもある。部下が上司に対してある程度敬意をもって接するのは普通だろ？」

「す、捨てないで……！」ブアツ

「話を飛躍させるな、誤解するな、曲解するな。そして落ち着け」

会話の流れから何を想像したのか、阿賀野は急に両目から涙を溢れさせて泣きじやくりそうになる。

「……ぜったい、ぜったい阿賀野は大佐と離れたくない……！ 大佐と離れるなんて絶

対に嫌……………」

「……………」

「……………う……………ぐす……………」プルプル

「……………阿賀野」ポン

「……………つ」ビクツ

「俺はお前を捨てたりはしない」

「ほ、ほんと!？」

「最初からそんなこと言ってなかったろ? 俺はただお前に他の奴らと同じように触れ

合うときに加減をして欲しいだけだ」

「加減……………うん、わかった!」

「……………お前があつちでいろいろ辛い思いをしたのは知ってる。だがここでは必要以上に

怖がるな。誰もお前を傷付けたら捨てたりしない。いいな?」

「うん。ありがと……………。好き、大佐」

大佐の言葉に心から安堵したらしい阿賀野は再び甘えるような顔になると、また唐突に愛情を表現し始めた。

その顔を見て先程までのやり取りの繰り返しの可能性を恐れた提督は、そこで一度彼女を躡ける事にした。

「……あと、あんまりベタベタするな」

「え!？」

「シヨックを受け過ぎだ。好意を寄せてくれるのは嫌ではないけどな、だがあまりにもこう過剰だとその、周りの奴らが、な?」

「だ、だって阿賀野大佐の事が本当に……!」

「俺は節度を守る奴が好きだ」

「阿賀野これからあんまり大佐にベタベタしません! 大佐を見つけても急に抱き付いたり思いつき抱き締めたりしません!」

正に提督の事を本当に好いている者の反応と言えた。

阿賀野は提督の好みを瞬時に理解すると、即座にその好みに沿う選択肢を取った。

「よし、いいぞ」

「あ……えへへ♪」

「じゃあ俺は仕事があるからちよつと外れてくれ。時間がある時はちゃんと相手をしてやるから」

「うん、分かった! 阿賀野いい子にするね!」

「ああ、頼んだぞ」

「任せといて! それじゃまたね。大佐っ」

ボタン

「……」

「能代」

一人になった提督は誰もいない空間に不意に阿賀野の妹の名を呼んだ。

その声に机の下でガタツ、という音と共に誰かが反応する。

「！」ビクッ

「いつまで机の下にいるつもりだ」

「あ、もう阿賀野姉出ていきました？ あ、あはは、ごめんなさい。ちよつと姉に気を付

かちやつて」

机の下から遠慮しがちに出てきたのは阿賀野の妹の能代だった。

「どうやら阿賀野が部屋に入る前にその気配を察して、咄嗟に机の下に隠れていたらしい。」

「姉想いなのはいいけどな、でも机の下に隠れる事はないだろ？ 俺の部屋に行つてい

ればよかつたじゃないか」

「ごめんなさい。ちよつと焦ってしまいました」

「まあいい。ふう……」

「お疲れ様、大佐」

「ん」

「阿賀野姉ったら本当に大佐にべったりですね」

「そうだな。だが流石に疲れる」

「ご、ごめんなさい……」

「お前が謝る事じゃないさ。まだ落ち着くまで時間がかかるだけだろう」

「うん……」

「やっぱり気になるか？」

「え？ あ、そ、そうですね。ただ姉を出撃中に発見しただけだったらここまでは気になる事はなかったかもしれません。だけど流石にここに来た経緯がちよつと……アレだったので……」

「俺も偶然見つけただけだったからな。運が良かった」

阿賀野は提督が基地に居る時に発見されたのではなく、少し前に日本に帰った時に彼の目に留まり、とある事情からそのままその身柄を保護する形で此処に連れて来られたのだった。

「大佐……本当にありがとう……」グス

姉が初めてここに来た時の事を思い出したのか、能代は少し涙目になりながら提督に

お礼を言い始めた。

「わたし、実際に姉と再会するまで自分の中で姉のイメージがなんとなく決まっていたから、初めて会った時は本当にショックだったんです。あんな、あんなに小さくなって震えていたから……」

「……そうだな。ここに迎えてからまだそんなに日にちは経ってないが、それでも大分マシになったよな」

「大分どころじゃないわ。本当に元気になったと思います」

「ああ、そうだな」

「大佐、本当に感謝しているんですよ？ もちろん矢矧も」

「俺は自分の気持ちに素直に従っただけだ。お前も俺と同じ立場だったらそうしていたらどう？」

「勿論です」

「ならもう気にするな。これからは自然に接してやるのが阿賀野にとっては一番な筈だしな」

「うん、そうね……そうします」

「よし、じゃあこの話はこれで終いだ。さて、仕事を……」

「ねえ大佐」

「うん？」

「わたしも……わたしも好きですからね？ 阿賀野姉と張り合うつもりないけど、この気持ちだけは負けてないつもりです」

能代は恥ずかしそうに眼を逸らしながら仄かに赤く染まった顔でそう言った。

「……そうか」

「うん……」

「ね」

「ん？」

「ぎゅっと、して欲しいな？」

「……したら仕事しろよ？」

「うん！」

第×6話 「刺激」 R—15

「山雲です。よろしくお願いしまゝす」

「こちらこそよろしく頼む。ようこそ我が基地に。俺の事は大佐とでも呼んでくれ」

「ふふふ、丁寧なご挨拶ありがとうございます。提督の事は大佐とお呼びすればいいですね。分かりました」

「ああ、できればそう呼んでくれると嬉しい。愛称のようなものだ」

「准将さんなのに低い階級でお呼びするのはそういう理由なんですねえ。納得です」
（良い人そうね。この人なら信じて着いていっても大丈夫そう……かな？）

「ああ、気軽に呼んでくれて構わない」（龍田だ。駆逐艦の姿をした龍田のような感じがする）

パキッ

「ああっ!? 龍田なにしゃがる!? 俺の船底にヒビが入ったぞー!」

『天龍』の模型を持った龍田はつい力を入れ過ぎてひび割れてしまったそれを見て薄く笑いながら言った。

「あ、ごめんねえ？ なにかとくつても気になる事言われてるきがしてつい力が入っちゃったあ」

「何わけの解らない事言つてやがる！ お前の貸せ！ それもヒビを入れてやる！」

「あ？」

「……………」

「私に、なに〜？」

龍田の圧倒的な威圧感に天龍は言葉が出ずに口をパクパクさせる事しかできなかつた。

「あ……………」

「なんてね、冗談よ。割っちゃったのは本当にごめんね？ ちゃんと直すから、ね？」

「……………しょ、しょうがねえな」

「えーと、接着剤でひつつけて隙間にパテをちよびつと……………あれ？ 天龍ちゃん何処に行くの？」

「ちよつとトイレ」

「あ、おしっこね？」

「つ、いちいち具体的に言う必要ねえだろ！」 カア

「赤くなつちやつてかくわい〜♪」

「うっせえ！　ちゃんと直しておけよ！」

「おっけー。天龍ちゃんもちゃんと拭いて……」

「やかましい！」

バタン！

「……」（まったく龍田のやろう……ん？）

「あ……」

「……おめえ、新入りか？」

「はい。山雲です。軽巡天龍さんですね。よろしくお願ひします」

「……ああ。よろしく、な」

「？　どうかしました？」

「ああ、いや。悪い、なんでもねえ」（龍田だ。ちっちゃい龍田だ）

バキッ

「……あれえ？」（なんでかな。凄く胸がもやもやする……？）

（……トイレの前に、ちよつと大佐のそこ寄って行くかな）

山雲との遭遇にちよつとした驚きを受けた後、特に何事もなく挨拶を済ませ廊下を歩いてきた天龍は執務室にへと足を向けていた。

コンコン

「大佐、いるか？」

『天龍か。どうした？ 入っていいぞ』

ガチャ

「ちつす」

「よつ、どうした？」

「いや、別に用とかはないんだけどよ」

「ん？ ……まあいい。ちよつとお茶でも飲んでいくか？」

「え？ いいのか？ じゃ、ちよつと貰おうかな」（トイレに行く前に茶を飲むのはちよつとアレだけど、せっかくの機会だしな、見逃せないよな）

「緑茶しかないが、いいか？」

「ん？ ああ」

「口の寂しさはこれで紛らわせてくれ」スツ

「沢庵かよ」

「ちよつと菓子が無くてな。悪い」

「いや、気にすんな。別に嫌いじゃないわーし」ポリポリ

「それは良かった」ズズ

「……あちち」ズズ

「そういうえば」

お茶を飲み始めてから暫くして提督がふと口を開いた。

「ん？」

「お前とこうして二人で茶を飲むのは随分久しぶりな気がするな」

「……そんな事判るのか？」

天龍は、提督が自分と過ごした時間を憶えてくれていた事に密かに胸が暖かくなる喜びを少し感じた。

「それでも一応提督だ。何気なしにお前たちと過ごしているわけじゃない、と大見えを切らせてもらおうか」

「つく、なんだよそれ。ははは」

「お前はそういう性格だから昔から気兼ねなく話せているよな。それが俺にとっては結構ありがたかったな」

「はあ？ 男勝りなら良いって事か？ だったら麻耶の姉貴や木曾でもいいだろ？」

「性格のみに限ればな。だが、お前とはそれなりに長い付き合いだ。時間が長い分、お前の方が接し易いところもあるという事だ」

「……なんだよそれ」ズズ

「む、悪い。機嫌を損なわせたか」

「えっ、いや別に」(なんか俺の方が良いみたいなさ言われて嫌なわけないだろ)

「そうか。んむ」ポリポリ

「……」

「なあ」

「ん？」

「隣、行つていいか？」

「うん？ ……ああ、構わないぞ」

「え、本当か？」

「なんでそこで驚くんだ」

「いや、なんか大佐ならいろいろ気にして断りそうな気がしてさ」

「……確かに昔の俺なら断ったかもな。だが、いろいろあったら。俺もなるべく頑なにならないようにしたのさ」

「……そっか。なら」

トス

「へへ……♪」

「……」（意外だな。いや、今の方が気が楽なのかもな）ズズ

「なあ」

「今度はなんだ？」

「……」

「? どうした？」

先程とは違い、今度は明らかに躊躇いとも遠慮とも取れる天龍の奥ゆかしい態度を提督は不審に思った。

「あ……」

「うん？」

「ちよつと……甘えたい」ジツ

彼女なりにあらゆる条件から判断し、決断したんだろう。

恥ずかしさで頬を染めながらも気丈にも目は逸らさずにまっすぐに自分を見つめて
そう言ってきた天龍に、提督は躊躇うことなくこう言った。

「……肩を貸すか？」

「……膝、それに乗りたい……」

肩ではなく、いきなり膝を希望してきたのは提督にとつては予想外だった。

「……」（こいつもか。なんだ？　そういうブームなのか？）

「あ、駄目なら……」

「いいぞ。乗れ」

「っ！　さ、さんきゅ」

ポス

「……！」

「ん？　どうした？」

「あ……。い、いや」（忘れてた。トイレ我慢してたんだ。あ……直接パンツで乗っちゃまったから振動が……。こういう時にスカートは……！）モジモジ

「おい、本当に大丈夫か？」（下着で直接乗っている事を注意しようかと思ったが、後にするか）

「だ、大丈夫。大丈夫だからあまり動かないでくれ。す、座り心地を楽しみたいんだ」

「？　分かった。疲れたら適当にもたれかかれ。俺はこのまま少し仮眠を取る」（不本意だがこいつの温もりが心地よいから眠い。天龍には悪いがここは寝て過ごすか）

「あ、ああ構わないぜ。俺も少ししたら部屋に戻るから」

「そうか。悪いな。それじゃ……」

十数分後

「……………」 z z

「……………」 (ね、寝たよな) チラ

「……………」 z z

「……………」 (よし) モゾ

「……………」 つ、はあ……………」 (これ、あ……………いいかも) ピクッ

「はあ、は……………あ。はあ……………」 (これ以上はマズイな。どうせトイレに行くし、後は自分で処理すつか)

スッ

「……………」 チラ

「……………」 z z

「……………」 続きは、また今度な」 ボソ

バタン

「……………」 (あ……………。だ、大丈夫。ちよつと、ちよつとだけだ。ば、バレない……………よな?)

「天龍さん遅いですね〜」

「そうねえ。ところで山雲ちやあん？」

「はい。なんでしょ？」

「私達、ちよつと似てると思わない？」

第×7話 「予想外2」

「嬉しそうだな」

「そりやあもう！ だってずっと待ってたんだもん！」

「飛龍より後になったのは気にしていないのか？」

「え？ んー、まあ全く気にならないと言ったら嘘になるけど、でも今はそれくらい些細な事に思えるくらいには気分いいよ！」

「そうか」

「うん！ だってこれでさらに強くなれるんだもん！」

「ん？ 蒼龍、お前もしかして成長限界が伸びるからケツコンが嬉しいのか？」

「うん、そうだよ？ それがどうかした？」

「ああ、いや。俺はてつきり……」

「あれー？ もしかして大佐、わたしが大佐の事が好きだから喜んでいると思ったあ？」

ニヤニヤ

「自惚れを肯定する様で恥ずかしいが、正直言つてそうだ。だが、そうかお前はそれが理由だったっか……」

蒼龍にケツコンの理由を聞いた提督はそう言うのと、考え事をするように俯いた。

「あ、ごめん。傷ついた？ いや、私も大佐は嫌いじゃないよ？ 寧ろ好きな方だけど、でもちよつとわたしは恋愛とかそういうのとは違うかなーって感じなだけだから」

悪戯っぽい笑みを浮かべながらそんな提督をからかうような事を言う蒼龍。

だが実はその内心は言葉とは裏腹にこんなことを思っていた。

（なーんてね。こう言った後に実は好きって言った方がインパクトあるもんね）

そう、全ては蒼龍の悪戯も兼ねたムード作りだったのだ。

だがそんな計画のことなど露ほども知るわけがない提督は、顔を上げあると蒼龍に言った。

「いや、別に傷ついてはいないさ」

「え？」

「正直な、目から鱗な気分だった……。ああ、考えさせられたよ」

「えっ、そ、それってどういう……」

「お前みたいにケツコンを自分を高めるための目的に考える奴もちゃんといるんだなという事だ」

「」

「いや、改めて考えてみればそれが一人の軍人、兵士として当たり前とも言えるのかも

な。勿論、金剛や加賀のように俺への好意故にというのも否定する気はないけどな。だが、これはこれでいいものだな」

「あ……えつと……」（これはヤバイ……!）

「蒼龍、俺はお前の事を侮っていた。単に飛龍より少しおてんばな奴だと思っていたが、実はこういう事も真面目に考えていたんだな」

そう言つて提督は蒼龍に温かい笑みを見せた。

その笑顔は、親が子供に見せるような愛情からくるものとは明らかに違った信頼する部下に何かを諭された事に感銘を受けたような、そんな眩しい笑顔だった。

基本的に真面目なこの提督は、その実直な性格ゆえか日常に置いてあまり目に見えて明るく笑つたりはしない。

故に今彼が蒼龍に見せている表情は理由こそ違えど、非常にレアなものだと言えた。

だがそれは、その場に置いては蒼龍にとつてありがたいものではなくまるで死の宣告のようなものであった。

「あ……ちが……て……ね……?」（あれ? 不安で言葉が上手く出ない……）

「蒼龍、これからも俺の部下としてよろしく頼む。期待しているぞ」

「!!」

この一言が決め手となった。

蒼龍は自身の取り返しをつかない過ちからついにその場で我慢ができなくなり大泣きし始めた。

「ふ……………うええええええん!! うああああああん!!」

「は……………? お、おいどうした蒼龍?」

突然の事態に提督は心底動揺した声を出す。

「ちが……………ちが……………うの。ちよつと……………ぐす。ちよつといたうわしただけなのー!!
うわああああああん!!」

「……………なに?」

それから十数分後。

「う……………ぐす……………」

「なるほどな……………」

蒼龍は事の真相を知った提督の胸にソファアの上で体を預けていた。

まだしゃくりあげてはいるが、提督に頭も撫でて貰っている事もあって大分落ち着いた様子だ。

「ごめんなさい……………」グス

「いや、まあお前らしいと言えばお前らしい」

「……ねえ」

「ん？」

「失望した？」

「？ 何にだ？」

「……わたしがちゃんと真面目じゃなかったから……」

「お前は自分は真面目じゃないと思っっているのか？」

「そんなことない！ いつもはこんなんだけど、任務の時は真面目だもん！」

「ふ……よく分かってるじゃないか。そうだな、その通りだ。俺もそう思っているよ」

「ほ、本当？」

「本当だ。信頼している」

「大佐あ……」ジワ

「……やっぱりお前はこっちの方が合っているな」

「ぐす……ふ……え？」

「普段はおてんばだがやる時はやる、そういうイメージが合っていると思っただ」

「じゃ、じゃあわたしは今のままでいいの？ わたしも大佐を好きでいいの？」

「心配し過ぎだ。俺は自分の部下を、それもケツコンまで頑張った奴を無碍に拒否した

りしない」

「大佐……」

「改めて、これからもよろしく頼むぞ蒼龍」ポン

「……っ」ギョツ

「おっと……ん」ナデナデ

「大佐……好き！ 大好きだから！」

「ああ」ナデナデ

「本当だからね？ これは嘘じゃないんだから！」

「ああ」

「わたし大佐とケツコンできて本当に良かった……そう思ってるのよ？」

「分かっている。十分伝わっている」

「ホント？ じゃあさ……」

「うん？」

蒼龍は今まで流していた涙とは違う潤んだ瞳で提督を見上げてきた。

「キス……してよ。ケツコンの記念にさ。大佐の言葉が本当だってわたしに信じさせ
て」

「……全く、手のかかる奴だ」

「ん……」

チ
ユ
ツ

第×8話 「切望」

「榛名……榛名……」プルプル

ケツコン指輪を握りしめて榛名は感激に身を震わせていた。

『……………』

その様子を執務室の扉の隙間から彼女の三人の姉妹が息を潜めて覗き、見守っていた。

「大佐、ありがとうございます。榛名……榛名は今、本当に感激しています……！」

「あ、ああ」

感激に未だに震える榛名を前にして、提督はその狂喜ぶりに若干引いていた。

（これはこいつを姉妹の中でケツコンを最後にしたのは失敗だったか？）

「あの、大佐」

「あ、うん。なんだ？」

「ケツコンを記念して榛名から厚かましいんですけど、お願いがあるんです……」

「聞こう。言ってみろ」

「あの、これ……」

そう言つて榛名は服のポケットから何かを取り出した。

『お姉様、あれなんだと思います？』

『h m…… 榛名は今 happy ゲージが振り切れているワ。そんな状態で逆に榛名から大佐に贈り物……。と言え……』

『私なりに分析した結果、アレは恐らく何かの誓約書の類かもしれません』

『誓約書？ 霧島、それどういう事？』

『Oh 分かったワ！ 榛名はあれで独占欲が強いカラ……』

『その通りです。まあ、それでもあからさまな独り占めは流石にしないとは思いますが、それでも二人きりの時はこうして欲しいとかそういう希望を書いた紙を用意したのかも』

『へえ……榛名が……。あ、大佐に渡すよ！』

扉の向こうでこんな事を生暖かく妹を見守りながら議論していた姉妹達であつたが、果たして榛名が提督に渡したものはそんなやや現実的な物とは程遠い、ある意味普段の彼女のイメージからは到底予想できない物だつた。

ジャラッ

「

提督の手には首輪と、それに繋がれた鎖が渡されていた。

『『』』

それを見て提督は勿論、扉の向こうの三人も絶句していた。

「榛名……これは……」

「あう……お、お恥ずかしい話ですが。榛名、大佐とのケツコンを夢見てずっと待っていたらなんかこう……いろいろな溢れてきちゃいまして……」ポツ

「そ……その感情とこれとどういう関係が？」

「あ、はい。それであるの、大佐とのケツコンを待っている間、榛名は早く大佐のものになりたいと思うようになったんです」

「それがこれとどう繋がるんだ……？」

「榛名、大佐の為なら何でもします！ なんでも応えます！ あ、勿論本当に悪い事はしませんけど。というか大佐がそんな事言うわけないですよね」

「落ち着け、落ち着け頼むから。いや、だからこの首輪と鎖で俺の要望に応えたいと、そういう事か？」

「はい！ 大佐、は、榛名を……榛名をメチャメチャにし……きやつ」ポツ
「」

「……」

『お、お姉様……』

『わ、私は榛名はや、やればできる子だと思っていたわ……』

『わ、ワタシは……』

『お姉様？』

『ワタシはどこで榛名の教育を miss して……うっ……い！』ジワ

『お姉様、比叡もです！ 比叡もどうしてこうなっちゃったのか……い！』グス

『……』（まあ普通はこうなるわよね。榛名……頑張つて下さい大佐……い！）

そんな金剛達の期待と不安をよそに、提督は手に握ったそれを見ながらぽつりと
言つた。

「……なんでもするのか？」

「はい♪」

『大佐あああああ!?!』

『ノオ! NOよオオオオオ!?!』

『お姉様達落ち着いて』

「……そうか。なら一つさっそくお願いがある」

「命令してください♪ しろ! とかそんなキツイ感じでもいいですよ」ポツ

「……なら命令する。榛名」

「はい!」

「まともに、いや。俺は真面目でしっかり者で、努力家で、謙虚なそんな可愛らしい榛名が好きだ」

「え……?」

「演じろとは言わん。だが、そんな俺の好きな榛名が俺は本来のお前だと思っている。だから今からでいい、俺と一緒にそんなお前に近づいて言ってくれないか?」

「大佐……大佐はこんな榛名はお嫌いですか?」プルプル

「嫌いという言葉で拒否する気はない。だが、俺は初めて出会った頃のお前が好きだ。」

だからどうか……命令だ。俺と初心に戻ったつもりでケツコンしてくれ」
「っ、大佐……！」ダキッ

『Ye a h a a a a a a a a a a!!』

『ブラボー！ ブラボーです大佐！ 比叡は、比叡は大佐に惚れ直しました……！』グス
『……ふう、流石大佐です。信じていました……』

「榛名、良い子になります！ もう何回言ったか分かりませんが、こうしてちゃんとケツコンしてくれた大佐に約束します！ 榛名、大佐の為に良い子になります！」スリ
スリ

「ありがとう……榛名。俺も嬉しい」（これで、最悪の事態は回避できたか……）

「あ、でも……」
「うん？」

「大佐の要望に何でも応えるというのは本当ですから……ね？ 今でも有効です」ポツ
「……なるべくそんな展開にならないように努力しよう」

恥じらいながらそんな事を言う榛名に、提督は心の底からその事態だけは避けようと心に誓ったのでった。

第×9話 「痴話喧嘩」

「ねー大佐ー。大佐って何か苦手な物とかってないの?」

「なんだ川内、藪から棒に」

「いや、だつてさー。大佐って怒ったり笑ったりしても基本静かじゃん? だからなんかもつとこう、ワーってなる苦手なものとかないのかなーって」

「別にリアクションを求めているのなら苦手なものじゃなくてもいいだろ。感動するものとか」

「そんなのわたしがつまらないもん!」

「……遠征メンバーからお前を外すぞ」

「えっ!? ダメダメダメそれはダメ! ただでさえ最近は夜戦に出る機会も少ないのに遠征の出番まで少なくなっちゃったらわたしストレスでどうにかなちやうよ!」

「ならもう少し慎みを持て。偶に本当にお前は神通の姉かと疑問に思うときがあるぞ」

「ちよ、それってどういう意味!? わたしってそんなにおねーちゃんに見えない!?」

「どちらかというと神通が姉でお前と那珂は双子の姉妹だな」

「ひどっ!」

「なら、偶に夜中に忍者ごっこと称して俺の部屋に忍び込んで悪戯をしようとするのをやめろ」

川内だけではないが、提督の基地では常夏の暑さの所為で寝付けずに偶に夜中に起きて騒ぐ輩が何名かいる。

その殆どが駆逐艦なのだが、彼女たちのまとめ役（首謀者）が川内であった。

「あれはわたしの制服がいけないの！ あれじゃあ忍者しろって言っているようなもんじゃーん！」

「夜は寝間着姿だろ？ その癖にそれで忍者とは片腹痛いぞ？」

「うっ……」 タジ

「ま、もう少し大人しく、な？」 ポン

「う、うう……」 コク

「よし、それでなんだったか。苦手な物か？」

「教えてくれるの!？」

「……」 () は敢えて自分の生活の安静を優先してみるか)

「大佐？」

「ああ、悪い。俺が苦手なものはない」

「うん！」 キラキラ

「じよせ……」

「あ、女性とかいうのは無しね。絶対ダメ。許さないから」

川内が提督が言いかけた答えを遮り問答無用といった様子でそれ以上言わせなかつた。

「……一応聞くが、何故だ？」

「同盟が意味なくなるから。それに嘘だつていうの分かるし」プクー

「……そうか」（軽巡にも同盟はあるんだな）

「で、苦手なものって何？」

「そうだな。せんだ……」

「川内とか言ったら泣くからね」

「……せんだ」

「つ、ふえ……」グス

本当に言われるとは思っていなかったのだろう。

自分の名前が出かけて川内の目に涙が浮かんだ。

「冗談だ」

「本当に言い掛けないでよ馬鹿あ!!」グス

「すまん。だけどな、急に言われても改めて考えると思いつかないもんだぞ？ ふしだ

らな女性関係とかじゃダメか？」

「それだとわたしたちの関係がふしだらみたいだからダメ」

「別にそういうつもりはないんだが……」

「じゃあ所構わず大佐にじやれたり甘えたりしてもいいの？」

「駄目だ」

「じゃあ無し」

「……」

「仕方ないなー。じゃあわたしが苦手なものを教えてあげるよ」

「どうしてそうなる？ 俺はお前が苦手な物を知ったところでなんの得もないぞ」

「わたしが言いたいんだからいいの！ えっとねーわたしが苦手なのは……」

「今から考えるのか」

「ちよ、ちよつと忘れちやつただけだもん！」

「……それで何だ？」

「お菓子！」

「……そうか。今度からお前だけ食事は三食沢庵だけにしてやろう」

「なんでそうなるの!？」

「魂胆がまる分かりだ馬鹿」スカンツ

「いたつ。うう……」

「もういい。俺が当ててやろう」

「え、分かるの？」

「そうだな。半年間待機任務だ」

「それってただの拘留じゃん！ 軟禁じゃん！ しかも何も悪い事してないのに！」

「拘留は日本の刑法上30日未満のはずだからこの場合は軟禁が意味合いとしては近いな。でも嫌だろ？ 退屈は」

「うぐ……」

「勝負ありだな」

「えー！ ねえ大佐、本当に大佐が苦手な物ってないの？」グイグイ

「俺は本当に思いつかないんだ」

「むう、ならこれでどうだっ」

そう言うのと川内は提督の手を取り、勢いよく自分の胸に押し付けた。

フニツ

「……」パコン

「きやあつ!!」

「あまりそういう事を軽々しくするな」

「いったああ……。ぬふふ、でも苦手だったでしょ？」

「これは苦手とかじゃないだろ。節操の無さを不快に思っただけだ」

「ふふふー、大佐もわたしのこの慎ましい胸でそう感じるなんて結構意識してるんだー？」

「嬉しそうに何を言っているんだ。しかもそれで慎ましいとか、龍驤に言うぞ？」

「ごめんなさい。すいませんでした本当に」

「……それはそれで傷つくだろうなアイツ」

「はああー、結局大佐の苦手なの分からなかったよー」

「……いや、あるぞ。今分かった」

「え、なに？」

「お前たちだ」

「えっ？」

まさか自分たちが提督にとって苦手な存在とは思わなかったが、それでも第一声がそれだった事に川内は心底驚いた顔をした。

「提督としてお前たちを失うのが何より俺は苦手だ」

「……なにそれ。それ苦手っていうより怖がってるじゃん」

「はは、そうだな。だが、本当にそれは苦手でもある。だから可能な限りお前たちには提

督として気を遣ってるつもりだぞ?」

「……ま、それでいいって事にしてあげる」

「そうか、ありがとう」

「……ねえ」

「うん?」

「おんぶしてよ」

「基地までか?」

「うん」

「ほら、乗れ」

「やったー♪」ピヨン

「つと……軽いな」

「忍者だもん♪」

「今はただのワンピースだろ。おい、ちゃんと裾を抑えてから乗れよ。風で捲れるぞ」

「大丈夫だよ。この道基地にしか行かないから人いないし、捲れても大佐見えないじゃん」

「恥ずかしいとは思わないのか?」

「大佐にはね」

「なんだか男として複雑な気持ちになるな」

「これだけ胸押し付けられてるのに平然としててよく言うよ。どっちかというとなんな気持ちになるのはわたしの方だと思っけどな」

「……慣れだなこれは完全に」

「あ、でもわたしが雲龍さんくらい大きかったらどう？」

「それはないな絶対に」

「ちよつと、それってどういう意味!？」

「ははは、さあ行くか」

「こらー!! 答えろー!!」

心地よい潮風が吹く基地への一本道を、明るい太陽に照らされながら親子とも兄妹とも取れるそんな二人が和やかな雰囲気です歩いてた。

第×10話 「由来」

「おつねっえっさまー♪ お久しぶりでーす！」

バンツ

「うるさいわ。帰ってちょうだい」

「」

「ちよつと、ジエーン！」

「え？ もしかしてプリンツ？」

部屋には先客のZ1とZ3がおり、ノリ良く現れたプリンツを様々な形で早速出迎えてくれた。

「……はっ。あつ、お姉様♪」ダツ

「ちよつと、部屋の中で走らないで」

「まあまあ」

「ジエーンごめんね。わっ……と、久しぶりねプリンツ」ナデナデ

「ん、おね……マリアお姉様♪」スリスリ

「もう、相変わらず甘えん坊なんだからプリンツは」

「あ、フランです」

「え？」

「はい？」

「ん？」

「わたしも大佐に名前を貰ったんです。マリアお姉様、今日からわたしのことはプリンツではなく、フランソワかフランでお願いします！」

「あ、そうなんだ。あなたも大佐に……良かったわね」ナデナデ
「うん！」

豊満な身体に似合わず子供の様な無邪気な笑顔で嬉しそうに撫でられるプリンツに對して、それを何となく冷めた目で見ていたZ3がポツリと言った。

「……まあ、ジェーンの名前の方が可愛いけどね」ボソ

「えっ」

「え？」

「じゃえ、ジェーンてば！」

「あの……さつきから妙に冷たい態度のジェーンちゃんは一体何を言ってるのかわかなく？」ヒクヒク

「ちゃん付けはよしてフランさん、呼び捨てで構いません。私、一応これでもFr・u・l
ein（フロイライン）なのだから」

「え？ フロ……なに？」

「あーもう、ジェーンさつきからどうしたの？」

「……丁度いい機会だと思ったのよ。ここにいる4人、大佐に名前を貰った者として誰
が優れているかを決めるのに」

「優れた名前？ ジェーン、それってどう意味なの？ 良かったらもう少し詳しく教え
てくれないかしら？」

プリンツを撫でていたマリアがその言葉に興味を持ち、訊いてきた。

「分かりました。いいですか？ 私達は、大佐に名前を付けて貰ったけど、その名付けら
れ方にそれぞれ微妙に違いがあるの」

「違い？」

「そう。その違いの結果、私の名前の方が優れているという事よ」

「いやいやいや、全然説明になつたないじゃん！ なんでフランよりジェーンの方が優
れているの？ 可愛いのに!？」

Z3の説明に納得できず、今までビスマルクに撫でられていたプリンツが早速噛みつ
く。

「ジェーン、せめてそこは説明した方がいいと思うよ。皆納得できていないもん……」
「……そうね。私としたことが気が利かなかったわ。謝ります」

「いいのよ。それで、名付け方にどういう違いがあるの?」

「はい。それでは順番に説明していきます。まず一つ言っておかなければならないのは、大佐のこの名前の付け方には大きく2種類あるという事です」

「2種類?」

「そう。一つは元の名前から由来や同じ音を持つものを探す方法」

「私とフランね」

「そうです。そしてもう一つは元の名前を元に、その音や使われている文字から全く新しい名前を考える方法よ」

「僕とジェーンだね?」

「そうよ。この名前の付け方において、明確なアドバンテージがあるのは後者だと私は考えます。何故なら元の名前から連想する方法より、無から付けられている私たちの方がもつと考えられているからよ」ビシッ

「なっ!」ガーン

「ええ!?!」ガーン

衝撃の断言にビスマルクとプリンツが固まる。

「えっ、僕の名前ってマリアさん達より良いの？」

「誤解しないでください。別に私はマリアさん達の名前を批判してるわけじゃないです。ただ、どちらが優れているかという点においては私達の方だという事を理解してほしいだけです」

「そ、そんなの納得いかない！」

「こら、フラン。……でもそうね、私もその説明ではちよつと納得できない、かな」

プリンツほど動揺はしていないものの、明らかに何かの火が着いた目でビスマルクが異議を唱える。

「そうですか？ 私なりに理解し易く説明したつもりですが？」

「名前の付け方についてはね。まあそれは百歩譲って納得したとするわ。でもねジェーン、あなたは一つ大事な事を失念しているのよ？」

「何でしょうか？」

「本当に大事なのはやつぱり名前の響きじゃないかしら？ 確かにどうやって付けたかも大事だと思うけど、でも結局はそれを人が聞いて聞こえが良い方が最終的に私は優れていると思うの」

「……なるほど。つまりマリアさんは自分の名前の方が響きが女性らしくて可愛いと」

「そういうことになるかしら」

「流石お姉様！ どう？ ジェーン！ その理由ならわたしとお姉様の方がすぐれ」

「残念ですが、それは間違いよ」

ビスマルクの反論に活力を取り戻したプリンツが牽制しよとしたが、あっさりとはZ3に途中で遮られた。

駆逐艦を相手にまともイニシアティブを取れなかったシヨックでプリンツはその場で再び固まる。

「」

「……何故かしら？」

妹分の悲壮さを見かねたビスマルクが更に議論する為理由を訊く。

「確かに私とレイスの名前は『マリア』と『フラン』という名前と聞き比べると多少女性らしさが弱いのもかもしれない」

「そ、そうよ！ だからわたし達の方g」

「プリンさんはちよつと黙っていてください」

「ぷ、プリン……」 ガーン

「ちよ、ジェーン！」 アセアセ

「こほん、続けます。確かに聞こえはマリアさん達の方が優れているかもしれない。で

もその結果は、最終的な名前と本人とのギャップによって覆ります」

「? どういう事?」

「ジェーン、この名前は女性らしさを感じさせながらもどこか凛とした大人の雰囲気があります。でもそのイメージに対して実際に名前を持つ私は見た目が幼い」

「それはジェーンにとって不利ということじゃないの?」

「いえ、違います。先程言いましたが重要なのはギャップです。大人の雰囲気がある名前に対して幼い姿の私は、見た目は子供なのに名前に負けない大人らしさ持つ女性という事になるわ」

「……ねえ、あまりにもそれには無理矢理なこじつけじゃないかな?」

「そんな事ないわ。レイスだって立派よ」

「えっ、ぼ、僕も?」

「『レイス』この名前は私の名前以上に男か女か判り難い……。でも実際の本人は可憐な少女で、更に一人称が不器用にも『僕』だなんて男性のものを使っている。ほら、もうこのギャップで私たちは二人に勝っているわ」

「ひ、鼻頂だ! そ、それはただの鼻頂よ!」

「ムキになるようで恥ずかしいけどそれには私も同意だわ。そんな単純なギャップで元から女性らしい私達が劣っているとは思えないもの」バイーン

「そうよー!」プリン

「うっ……。じゃ、ジェーン、悔しいけど僕もそう思う……」タジ

圧倒的な肉感的な魅力を持つ二人の身体に一瞬で気圧されたZーが旗色の悪さを認める。

だがそんな状況においてもZ3の凛として自信に満ちた態度は変わらなかった。

「レイス諦めないで。……嘆かわしいわねマリアさん」

「なんですって?」

「そんなの私から言わせれば、名前の通り過ぎて単純であまりにもありきたり。つまり地味なだけです」ビシッ

「なっ!?!」ガーン

「ふにゃあ!?!」ガビーン

(あ、心折れた)

どうやらそれで勝負は決したようだった。

ビスマルクとプリンツはそれ以上は何も言わなくなり、暫く何も喋らなくなつた。

「……」

「う……ぐす、ふえ……」プルプル

(き、気まずい)

「ジェーン」

悔し泣きをするプリンツに対して一人静かに沈思していたビスマルクが顔を上げてジェーンに話し掛けてきた。

「はい」

「この勝負、この場においては貴女の勝ちを譲るわ。でもまだ納得していないからね」
「構いません。私を納得させる事ができる説明ができるのならいつでも相手になりま
す」

「いい度胸ね。……それじゃちよつと」

「あ、何処に行くんですか？ マリアさん」

「……ちよつと、ね。直ぐ戻るから。それまでの間プリ……フランをお願いね」

バタン

「うわああああああん、レイスちゃん!!」 ガバツ

「わわ!？」

(ふっ……勝った)

「……なるほどな。それでここに来たのか」

「う…………ぐす…………」

部屋を出てから直ぐに大佐のもとを訪ねたビスマルクは、部屋に入って彼の顔を見るなり、半泣きになって彼に飛びついた。

そして今に至る。

「まあそんなに気にすることはないと俺は思うぞ。マリアという名前だつて俺はちゃんと考えて付けたし、お前に似合っていると思う」

「で、でもお…………」グス

「ジェーンは元々勝気な性格だからな。だからここは、勝負に負けたにも関わらずそれを感じさせない普段通りの態度で接した方が、お前の大人として余裕を逆に見せつける良い機会だと思うぞ?」

「…………なる…………ほど」グス

「解ったか? というわけで俺は大人なお前が好きだからそろそろ大人らしく立ち直つて部屋に戻つてもいいと思うぞ」

「やつ!」ダキ

「つと、おい」

「大佐の前では子供でいたい! 大佐の前では泣きべそかく女の子でいいの!」

「…………とんだ甘えん坊だな」

「ねえ、もつと撫でて……抱き締めてよ」

「そうしたら落ち着いてくれるか？」

「わ、わたしが眠るまでお願い……」カア

「手の掛かる Fr・ulein だな」

「……っ」（今更だけど実際に言われてみると、死語でも嬉しいな……♪）ギユツ

第× 1 1 話 「応援」

「ふっ、ふっ、ふっ……！」

「那智」

「あ、大佐」

「精が出るな」

「……いや。ふう……」

「ほら」 チャプツ

提督是那智にスポーツ飲料を差し出す。

「ありがとう。……つく、ん……っはあ」ゴキユゴキユ

「喉が渴いていただろう。ちゃんと水分は取れ」

「ん……」

「それを忘れるくらい余裕が無かったか？」

「……やっぱり解るか？」

「取り敢えず俺はな。改装の件か？」

「……ああ。後は私一人だからな」

「焦っているか？ 羽黒達が先に改装を受けて」

提督のその言葉に那智は特に気分を害した風もなく、逆に自嘲気味な笑みを浮かべながら答えた。

「……全くないということはないが、どちらかという妹達より自分も早く強くなりた
いという方向での焦り、か」

「なるほどな、お前らしい」

「ふっ……自分らしくもない。これでは大佐以外の誰かにもこの焦りが伝わっているだ
ろうな」

「否定はしない。なにせ、この鈍い俺でも解るからな」

「ええ？ はは、なんだそれ自虐か。ふふふふ」

「はは、これでも自覚している分マシだろう？」

「そうだな。だが、やはり女としては気付いて欲しいときには気付いて欲しいものだけ
らな。できる事ならそれも徐々に直っていく事を期待するぞ」

「身に余る期待に戦々恐々といった思いだ」

「……なあ」

「うん？」

「今日はやっぱり私の様子が気になって来たんだよな？」

「ああ」

「うん。なら事のついでで試すようで悪いが、私の……その、な」

「ん？」

「いや、やっぱりやめておこう！　なんか本当に事のついでに機会を利用しているようではしたくない感じがするからな」

「……まあそこは無理はしないでお前のペースでいいと思うぞ」

『そこは』という提督の言葉に那智はピクリと反応する。

やはり提督は自分の考えを察していたと。

だから彼女は背中を向けたまま意を決して言った。

「……やめた」

「ん？」

「好きだ」

「……ああ」

「艦娘としてではない。女としてだぞ？」

「解っている」

「……そうか。なら」クル

那智は提督の方を向いてその目を見ながら言った。

「私も大佐の女になりたい」

「……俺でいいなら」

「本当か……!?!」

「この期に及んで嘘は俺は言わない。だがな、俺は……な?」

「ああ、何人とケツコンしていようが私もそれに立候補した以上承知しているさ。だが、もうあなたへの好意を我慢しないと決めた以上これからは積極的にいかせてもらうつもりだ」

「……そうか」

「そんな困った顔しないでくれ。私は今、自分の気持ちに従って率直に行動できて晴れがましい気持ちなんだぞ?」

「ああ、悪い。ありがとう、那智」

「あ……う、うん」ポツ

「……」

「……抱き締めてくれるか?」

「汗とかいいのか?」

「こんな事言つてはなんだが、大佐なら気にしないと思つて、な?」

「その通りだ。俺はお前さえよければ拒んだりはしないさ」ギョツ

「あ……。うん……。いいな。うん……。♪」ダキッ

「……」

夕暮れに映えるその二人を、静かに見守る人影が建物の陰に3つ程あった。

「那智姉さん……。良かったわね」

妙高型4姉妹の三女、足柄が那智の想いの成就に優しい笑みを浮かべる。

「う、うん……。良かったあ」

その様子に感動して涙を浮かべていた羽黒が続いた。

「流石大佐です。那智もやっと自分から動いてくれたし」

一人和らかな表情をしながらも、凜とした雰囲気はそのままに発言したのは長女の妙高。

「……。あとは妙高姉さんだけね？」

「え？」

「あ、そういえば……」

「私……。？ ふふ、そうね。私は那智以上に素直じゃないからちよつと時間掛かってしまいかもね」

「ええー？ 素直じゃないというか、姉さんの場合はどちらかという……。ね？ 羽黒」

「うん……。素直に告白しても態度が普段と変わらないから逆に大佐に想いが伝わらないのを不安に思ってる……。？」

足柄の問いかけに羽黒は感動していた顔から瞬時に真面目な表情になると、冷静な声で妙高の恋愛事情をそう評した。

「は、羽黒……。」（なんかこの子、恋愛が絡むと凄く饒舌ね）アセアセ

「あ、姉さん凶星？」

「もう、知りませんっ」

「お姉ちゃん、私力になるよ？」

「え？」

「お、羽黒積極的じゃない」

「や、やめてよ足柄お姉ちゃん……。私はただ皆で大佐の事好きになりたいだけだよ

……」

「もう、この子つたら……」

「仕方ないわね。羽黒がこう言ってるんだから私も力にならないわけにはいかないわね」

「足柄も……。はあ、そうね。それじゃちよつと助けてもらおうかしら」

「そこなくつちや。まずは服のコーディネートからね！」

「え？　そ、そこからなの？　皆は制服のままだったじゃない？」

「お姉ちゃん、意外性は大事なな。そうすれば大佐も印象に残るし、その後もスムーズだと思おうよ？」

「そ、そうなの……？」（す、凄い自信……）

「羽黒解つてるじゃない！　じゃあ先ずは何にする？　メイド？　警察官？」

「足柄お姉ちゃんそれ違う……」

羽黒の冷めた声に妙高は笑いながら補足する。

「ふふ、羽黒、これはワザとよ。足柄も変に緊張を解そうとしなくていいから、ね？」

「あはは、やっぱり適わないわね姉さんには。それじゃ姉さん、頑張りましょうか？　ね

？羽黒」

「うん。妙高お姉ちゃん私達に任せてね！」

「ほ、程ほどにお願いね？」

何やらかつてない妹達のやる気若干気圧された妙高は、不安半分感謝半分と言った様子で苦笑するのだった。

第×12話 「ごめんなさい」

「ねー電あ」

ベッドに横になった雷が電に話し掛ける。

「ん？ なーに？」

「暇あ」ゴロゴロ

「あつ、だ、だめだよその上でゴロゴロしちゃ！ 暁ちゃんのヌイグルミが……」

雷が寝そべっていたのは暁のベッドだった。

そのベッドには彼女のお気に入りクマのヌイグルミも乗っており、雷はそれを転が
るのに任せて……。

ぐにゆう……プチツ

ガチャツ

「あつ」

「……」

食堂から遅れて戻って来た暁がドアを開いて固まっていた。

その視線の先には雷に轢かれてその圧力によって無残な姿になった彼女のヌイグル

ミがあつた。

「あ、暁ちゃん……」

「お、暁ーおあえいー」

「……なにしてるのよ!!」

廊下に暁の怒声が短く響いた。

「ごめんね、痛かつた？」 ナデナデ

暁は雷に潰されたヌイグルミを腕に抱き、看病する様に撫でる。

「暁ー、ヌイグルミなんか抱いちやってさあ。レディらしくないわよー？」

「うっさい！ ヌイグルミもレディの嗜みななの！」

「はわわ、ご、ごめんね暁ちゃん……」

「電はいいのよ。悪いのは雷だもん」

「えー？ ただゴロゴロしてヌイグルミを轢いちやっただけじゃなーい」

「そのせいでクマちゃんの目が飛び出ちやっただけでしょうが！」

反省の色を見せない雷に我慢できなくなった暁は、そう言つて彼女の前に雷に潰された拍子にその圧力で、目の部分が解れて半分外れてしまったヌイグルミを突き出した。

その無残な姿に電は小さな悲鳴をあげる。

「ひっ」

「うわ、わりとグロ……。ぷっくく……。フルフル

「笑うなあ！」

「お、落ち着いて暁ちゃん」

「むぐぐ……。はあ、どうしようこれ……」

「暁ちゃん直せないの？」

「さ、裁縫は苦手で……」

「誰かできそうな人に頼むしかないわね」フンス

「元凶が偉そうに正論言うんじゃないわよ！」

「できそうな人……。結構誰でも出来そうだけど……」

「ここはやっぱり鳳翔さんなのです！」

「ほうひよーはんはひよーはえんへーひひっへふはほ」（*鳳翔さんは今日遠征に行つて
るわよ）

「物を食べながら喋るじゃないわよはしたくない！」

「そうなのですか。鳳翔さんは今はいないのですか……」

「じゃあお友達繋がりで夕雲は？」

同じ駆逐艦で何となく器用そうなイメージが浮かんだ暁は次の候補を挙げる。

だがその可能性も、その日の遠征メンバーを把握していた雷の言葉によって断たれる事になる。

「夕雲も遠征に行ってるわよ」

「えー!」

「アテがどんどんなくなるのです……」

「わたしが良い人知ってるわよ!」

「え?」

「……誰よ?」

何故か不安を感じつつも、半信半疑といった顔で暁は雷に訊いた。

「……俺に? これを……?」

提督は暁達の突然の願いに戸惑った声をつい出した。

電と暁もそれを察したのか、どこなく申し訳な顔をしている。

「あ……その、出来たらでいいのですけど……」

「そ、そう! 別に無理はしなくていいから!」(ちよつと雷!) ヒソ

「できないなら仕方ないもんね!」(ん? なに?) コシヨ

(なんで大佐なのよ!?)

(だって面白そーじゃない?) ニカッ

(あ、あなた……覚えておきなさいよー!)

「……雷と暁は何を話しているんだ?」

「き、気にしなくても大丈夫だと思うのです!」

「そうか? つと、これだったな。ふむ……」

提督は暁から受け取ったヌイグルミを確かめるように見る。

電はそんな提督に対して恐縮しきった様子で謝ろうとした。

「あ、あの……出来ないの分かってて訊いてしまつてごめん」

「いや、できるぞ?」

「「え?」」

予想外の返事に三人は固まった。

「た、大佐できるの……? 裁縫を……?」

言い争うのをやめた暁が驚いた顔で提督を見る。

同じく雷も目を丸くしていた。

「え、嘘……」

「す、凄いです! 流石大佐は提督なのです!」

そんな二人とは対照的に電は、少し興奮した様子で提督のこの意外なスキルに感心し

て目をキラキラさせていた。

「まあこれくらいならな。これでも士官学校時代で一人暮らしをしていた頃は服の解れとかは自分で直していたものでな」

「い、意外ね。彼女さんがしてくれたんじゃないの？」

尚も信じられないと言った様子の雷が事の真偽を確かめようとする。

「彼女と同棲していたのは短い間だけでな。その頃の俺はすでにそれなりに裁縫の腕が板に付いていたから全部自分でやっていった」

「大佐は紳士の鑑ね！流石はこの暁の提督さんよ！」

「へ、へえ……」

「ん？ 雷、お前はまだ俺が裁縫ができるのが信じられないか？」

「い、いやそういうわけじゃないんだけど……何かイメージと違って……」

「はは、そうか。それは仕方ないな。改めて考えると自分でもそう思う」

「そんな事ないのです！ 電は大佐ができてても変とは思わないのです！」

「暁もよ！ 大佐、このクマちゃんを直して雷の鼻をあかしてやって！」

「え……雷は別にそこまで疑ってなんか……」

どことなく批判の風向きが自分に向いてきて雷は動揺して目を泳がせる。

「ふふん、雷、今更開き直つても遅いんだから！」

「雷ちゃん大佐を信じてあげて欲しいのです」

「いや、だから雷は……」

「雷、見苦しいわよ！」

「だ、だから雷は……」ジワッ

誤解であるのに二人の勢いからそれが言いだせず、気圧され気味となった雷は不安と罪悪感から二人に見えない様に俯くと泣きそうな顔をした。

それを見た提督は取り敢えずこの場を収めるべく行動した。

「……暁、取り敢えずこれを預かるぞ。電と一緒に部屋で待っている」

「分かったわ」

「雷ちゃんは？」

「これは雷がやってしまったんだらう？ だったら直ったらこいつに持って行かせる。

雷、お前はこれが直るまでここに居ろ」

「……」コク

提督の言葉に俯いたまま黙って頷く。

「それじゃ大佐、お願いね」

「お願いしますなのです」（あ、あと雷ちゃんの事も……）

「ああ、分かった」

「失礼しました」なのです」

バタン

「……さて」

「……っ」ビクッ

雷は提督に話し掛けられてびくりと肩を震わせる。

「できたら一緒に届けに行こう。その時にちゃんと謝ればいい」

「……！」

「な？」ポン

「大佐あ……」ジワッ

頭に置かれた提督の手を見て雷は安心感から涙を溢れさせた。

「縫い方教えてやろうか？ 今度はお前が直してやるといい。そうしたら暁もお前の事を見直すぞ」

「……っ、うん！ 教えて！」

「よし、じゃあ俺の手をよく見ておけよ。まずは……」

第×13話 「疲労」

「た、大佐大丈夫ですか？」

「ん……ああ。単に寝不足なだけだ」

「一体どうしたんですか？」

「いや、なに。偶にある本部からの訓練指示に二一駆逐隊を編成したものがあってな」

「二一……えーと……」

「初春、子曰、初霜、若葉だ」

「ああ、はい」

「訓練の代わりにで警備任務を兼ねた出撃をさせたんだ」

「ええ、それで？」

「あいつらも突出して練度が高いというわけではないが、お前と同じように定期的に遠征や警備に長く従事してきたこともあって特に練度が低いということもない。だろう？」

「私はもう88ですけど、確かに駆逐隊の子たちは平均で50以上はいつてますからね」
「そうだ。だからちよつと警備は警備だがここの近海ではなく、あいつらの練度に丁度

よさそうな海域に行かせたんだ」

「北方海域、モーレイ海だ」

「モーレイ……」

大井はその海の名前を聞いて少し考えた。

確かにあそこは練度の低い艦娘には確実にキツイ所だが、少し前に改二にもなった初春が率いる二二隊なら、容易とは言わないまでも攻略は数をこなせば可能な気もした。

「その顔、出撃させる前の俺と同じ事をかんがえているみたいだな」

「えっ、そ、そうですか？」 アセアセ

「そう、俺も数をこなせばあそこの目標の最終ラインまでは行けると思っていた。だが実際は……」

「上手くいかなかったんですね？」

提督は大井の言葉に少し苦い顔をしながら肯定した。

「ん……まあな」

「被害が大きかったんですか？」

「被害はまあ、毎回中破が2人出るくらいの程度だった。問題だったのは……」

「だったのは？」

「初春以外のメンバーがちよつとな……」

「え？ 子曰ちゃん達に何か問題か？」

大井はそこで心底驚いた顔をする。

提督がまるで自分の部下を批判するような事を言ったように聞こえたからだ。

たしかに上司である以上、それも軍属である以上、その関係において指導的立場からキツイことを言う事もあるだろう。

だが自分たちの提督はどちらかというと、功を焦らず時間をかけて確実な成果を目指す堅実な戦略を取るタイプだ。

そんな彼がそんな事を言うのは大井にとつては本当に意外だった。

「ん、誤解するなよ。別にあいつらが何か失敗をしたとかいうわけじゃないんだ」

「と言いますと？」

「出撃した時な、あの時に限ってあそこの海域が結構荒れていたんだ」

「はあ」

「おかげで進路通り向かおうとしても気付いたらコースから外れていたり、順調だと思っていたら途中で敵に遭遇して相手をしている内に進路を見失ったりして結構大変だったんだ」

「なるほど」

「そういうわけもあつてなかなか目標地点まで辿り着けずに出撃と撤退を繰り返してい

たんだが」

「ええ」

「途中で初春が何となく今回は不調に終わりそうだと予感したんだろうな。あいつが出撃はもうこれで終わりにしないかと進言してきたんだ」

「初春さんが……」

「あいつらに原因が無い事は俺も分かっていたし、初春自身も単に運が悪かった程度にしか思ってたかっただけだと思う。そんなに悔しそうに顔をしていなかったからな」

「そうですね、私もそう思います。初春さんならあまり無理はしないでしよう」

「だから俺もあいつの進言を受け入れて出撃を終わらせようとしたんだ。訓練の名目は既に十分果たしていたしな」

「そうですね」

「だがそうしようとしたら……」

「あ、もしかしてその時に……?」

大井は提督の声が微妙に低くなつた事に気付いた。

「そうだ。子日達が異議を唱えてきたんだ」

「子日ちゃんが……。やっぱり悔しかったから……?」

「そんな感じだった。あと、艦隊のリーダーだった初春に多少申し訳ない思いもあった

みたいだ。初霜と若葉も直ぐに子日に賛同してきたからな」

「あ、何となく想像できます」（あの2人は子日ちゃんと比較するわけじゃないけど真面目なタイプだもんね）

「初春も最初は三人を説得しようとしていたんだがな、子日達があまりにも熱く挑戦を訴えるものだから途中でその熱意に圧されてしまったんだ」

「ああ、折れちゃいましたか」

「ああ。……それが長い戦いの始まりだった」

「え？」

そこまで話した提督は、今度は声だけでなくその表情も明らかに沈鬱になった。

重苦しい雰囲気を持ち始めた提督に大井は動揺した声をつい出してしまった。

「艦隊が駆逐艦のみで編成されている関係上、今回は被害は中破のみで納まっていたが大破の被害を受けたとしても修復に消費する資材は知れているだろう？」

「ええ、まあ……。あっ」

大井はそこで提督が言いたい事が理解できた気がした。

被害が出てそんなに資材を消費しない駆逐艦たち。

という事は後は修復に掛かる時間だけ……。

「あの、結果的に何回くらい出撃したんですか？」

「気付いたか。ああ、出撃した数は44回だ」

「よ、よんじゆう……」

「そう。つまり消費した高速修復剤は176個」

「ひゃ、ひゃく……!」

「結局その犠牲のお蔭で何とか目標地点には到達できたが、その達成に湧く子日達はともかく初春がな……」

「疲労、じゃないですよ。やっぱり責任感……?」

「ああ。出撃しながら消費した修復剤を数えていたんだろうな。任務を終えた後は一人だけ暗い顔をして部屋に戻って行った」

「うわあ……」

「そしてそれに付き合った俺はこの通り寝不足だ」

提督は苦笑交じりにワザとらしく大きく腕を広げて見せた。

大井はその姿からはを見て、提督から哀愁も漂っているよな気がした。

「少しくらい大佐も休んだらどうです? 私、加賀さん達に代行をお願いしてきますよ?」

「……気持ちは有り難いが、初春の奴が立ち直るまではここを堅持しておきたいんだ」

「大佐……」

自分の進言を聞き入れず、あくまで仕事に従事しようとする提督に大井は心配した顔をする。

「そんな顔をするな。確かに寝不足だが俺はあいつらほど過酷な事はしていない。ずっと部屋で指示をしていただけだな」

「でもだからって、私たちと大佐は体力が……」

「分かつている。けどまあこれは俺の我儘だ。悪いが今は通させてくれ」

「無茶よ……」

「大井、ありがとう。だが大丈夫だ心配するな」

「月並みなセリフですね。お蔭で信憑性が薄いですよ？」

「耳に痛い」

「……分かりました。何か困ったことがあったら言って下さいね？ 私もできるだけサ

ポートしますから」

「悪い」

「いいえ♪」

「……」

「な、なんですか？」

「ここまで言い終えた大井だったが、ふと気づくとそんな自分を微妙に眉を寄せて見つめる提督に気付いた。

「いや、お前って意外に優しいんだな」

「……は？」

『優しい』という言葉が自分にとって意外だと言われ、大井はその言葉が提督から出た事に身体が衝撃に襲われた。

「いや、俺はお前は何となく男には淡々としたイメージがあつたんだ」

「な、何を……」

「お前と北上は特に仲が良いだろ？ その仲の良さを見ていたらいつの間にか俺の中でお前のイメージができあがっていてな」

「だから私が女にしか興味が無いと……？」

提督が言いたい事を何となく理解した大井が冷めた声でじろりと提督を睨む。

「そこまでは言わないが、北上とあそこまで仲が良いから男よりかは女とつるむ方が性が合っているんだろうな、てな」

「……」

「大井？」

「大佐」

先程とは打って変わり満面の笑顔で大井は提督に言った。

その眩しい程の笑顔に、提督はその代わり様に心中に何故かざわめきを覚えた。

「ん？」

「あなたはひとつ誤解をしています」

「誤解……？」

「ええ、そうです。私は確かに北上さんは大好きですよ？ それはもう親友だから。北上さんとならそれ以上の関係でも構わないくらい」

「ああ」

「でもだからって……」

「うん？」

満面の顔から一転、一瞬俯いたと思つた大井は今度はかなり不機嫌そうな顔でこう提督に一喝した。

「私が男（大佐）に興味が無いと結論付けられるのはすつ……ごく遺憾です！」

「……」

「大佐、私が一度でも大佐を毛嫌いした事がありましたか？」

「……ないな、多分」

「多分じゃなくて絶対にはいはずです！」

「……そうだな」

「ええ、そうですよ。だから、ね？ 分かりましたか？」

「……？ 何をだ？」

「……っ」ピキ

提督のタイミングの悪い鈍感ぶりに再び笑顔となった大井のこめかみに青筋が立つ。

これはもうしつかり説明してやらねば。

その何とも言えない威圧感を放つ大井の笑顔に提督は自身の失言を理解し、冷汗を垂らしながら言った。

「俺はまた何か……？」

「大ありです！」

その日、大井が自身について提督に持たれた誤解を解くのに説教と怒りのコンボが夜明け近くまで炸裂した。

おかげで彼女の話が終わる頃には初春も気を取り直し元気な姿で執務室に現れたのだが、その訪れた先には心身ともに疲弊しきつて机に突っ伏している提督の姿があったという。

第×14話 「無用」

「艦娘の回収？」

『はい。本部の指示で今各拠点で不要な艦娘を微量ではありますが、資材と交換にその回収を行っております』

「不要の……」

その言葉に提督は穏やかでないものを感じた。

今の海軍では艦娘の人権の保護について一定のものを認めている筈だ。

その環境において『不要』というその言葉は、今の軍規の内容に抵触しているのではないか？

『ああ、別に回収した艦娘は無碍に扱いはしません。回収した艦娘は本人の意志を確認して同意を貰えたモノのみを対象とし、新しい装備と既存の艦娘の性能向上の為の素材にします』

「素材……。それは、海軍が保障している艦娘の人権として問題は？」

『はい。こちらとしては確実に同意を受けたモノのみとしていますので。それに素材とは言いましたが、実際は解体と一緒にです。還元機によって再び意識の無いエネルギー体

に戻るだけですよ』

「……」（他から回収して転用を必要とするほどの規模の何かを進めているという事か）

『はは、期待して頂いて大丈夫ですよ』

電話口に出ている相手もそれなりの切れ者らしい。

お互い顔は見えていないというのに提督のその一瞬の沈思の間から彼の考えを察したらしく、そんなことを言ってきた。

「……因みに同意しなかった艦娘はどうなるのですか？」

『ああ、その場合は厳格に選定した結果、問題ないと判断した新人の提督に本部からの補充要員として提供して再び活躍の場を与えています』

「……なるほど」

『他に気になる事がありますか？』

「この話が書面ではなく、基地の電話に直接というのはやはり……」

『はい、お察しの通りです。配下の艦娘に情報が漏れて不要な混乱を避けるためです』

「やはりそうでしたか」

『他にはもうありませんか？ 私としては貴方はなかなか優秀な方の様ですので、回収できてもできなかったとしてもその判断には、個人的に一定の評価と理解ができると思います』

「はは、買い被りですよ。ご用件は分かりました」

『そうですか。では、また提供頂ける際は、こちらの直通までお願いします』

「了解しました。ご苦勞様です」

『いえ、こちらこそ。それでは失礼致します』

ガチャツ、ツ、ツ……。

「大佐、お話長かったですね。どういったご用件だったんですか？」

提督が電話している様子を見守っていた三隈が彼が受話器を置くと同時に訊いてきた。

提督はそんな三隈の姿をチラリと横目で見た後暫く目を瞑り、そして再び目を開けると彼女の方を向いて面と向かって話し始めた。

「……今本部で他の基地で持て余している艦娘を回収しているようだ」

「持て余している……ですか」

「ああ。どうもその目的は新しい研究か何かのエネルギーとして転用する為らしいが

……」

「……わざわざお電話でお話されるといふ事は、もしかして強制ですか？」

「いや、単に変にお前達にこの話が漏れて不要な混乱が起るのをを避ける為だ」

「では、本部に提供するかどうかは提督の任意なのですわね」

「そうだ。回収された後もちろんと本部で同意を受ける事ができた奴だけを利用していいわらうかい」

「拒んだ方は？」

「厳しく選定した新しい提督に助っ人として送っているらしい」

「そうなんですか。良かった……」

緊張している様子はなかったが、真剣な顔で提督の話聞いていた三隈はそこでやっと安心したように表情を柔らかくした。

「三隈」

「はい？」

「もし、俺がお前に本部に行けと言ったらお前は大人しく行くか？」

三隈は提督のこの、聞く相手によつては失望を与えかねない問い掛けに、特に動揺も見せず、彼の方をしっかりと向きながらきっぱりと言った。

「はい。それが大佐のご命令でしたら。余程理不尽な命令でない限り艦娘として、軍人として三隈は最後まで大佐に従いますわ」

「そうか……」

「大佐？」

「じゃあ訊き方を変えよう。お前は行きたいか？」

「嫌です♪」

三隈はこの質問にも、今度は満面の笑顔でまたきっぱりと答えた。

「ふっ……そうか」

「はい。それに三隈は大佐が自分を持って余していると思うほど、役立たずのつもりはありませんもの」

「……そうだな。お前は頼りになるしっかり者だよな」

「はい、その通りですわ♪ それで大佐？」

「うん？」

今度は三隈の方から彼の機嫌を窺うように前屈みになって、下から覗くように上目遣いで質問してきた。

「大佐は誰かを本部に行かせるつもりなんですか？」

「……お前の考えている通りだ」ポーン

提督はその質問に敢えて明確に回答はせず、優しく三隈の頭に艇を置いた。

三隈はその答えと行為を受けて今まで隠していた不安と恐怖が安心と喜びに転じ、その感情が爆発するのを抑え切れなくなって提督に飛びついた。

「……っ、やっぱり！ 大佐、やっぱり大佐は三隈の提督です！」ダキッ

「つと……恰好を付けて良い顔をしてるだけかもしれないぞ？」

「大佐は嫌な事は嫌、不正も隠さず堂々とする方です。決してそんなうわべだけの事なんかしない方だと三隈は知っていますわ」スリスリ

「おい、前者はともかく後者は軍人云々以前に一組織人としてどうなんだ」

「ただの例えです。ふふふっ♪」ギュー

「分かった分かった、だからもう離れる。仕事するぞ」

「はい。あ、お茶ここに置いておきますね」コトツ

「ああ、ありがとう」

「さあ、今日もやりますわよ！」

こうして三隈の日常が、その日も始まった。

第×15話 「運」

「大型建造を？」

「せや。久しぶりにやらへん？」

黒潮の問い掛けに大佐はちよつと苦い顔をしながら言った。

「いや、建造は、特に大型はいろいろあつて気が進まなくてな……」

「それ、大佐が間違つて指示出したり、無い資材で遊び感覚で運試しした所為やろ」

「……まあ、な。実際行つた回数は数えるくらいしかないが」

「相変わらず弾薬がないからなあ」

「全くだ」

「いや、そこ何とかしよ？ いつも同じ遠征ばかりやからやん、それ」

「だがおかげで弾薬以外は困つた事がないぞ？」

「せやな。とりわけ、空母や戦艦に至つてはいつでも修理可能つちゆう感じやな」

「まあそれも今は高速修復剤の数が心許ないから単純に保有している量しか誇れないがな」

「明石さんも頑張つてくれる思うけど、流石に戦艦や空母の修理ばかりやと疲労で倒

れてしまうやろなあ」

「ふむ、というわけでうちは現在弾薬はいつもの事だが、バケツも足りない。よつて大型建造は無理して行わない方がいいと思うんだが？」

「うーん……やつぱさうかなあ」

提督の結論に黒潮は納得した様にも見えたが、それでもまだ何か言いたい事があるように、彼の膝の上で未練がましくズボンの生地を掴んで離さなかった。

「一体どうしたんだ？」

「や、うちつてさつき大佐も言つてたけど大型建造自体はあんまりしてへんやん？」

「ああ」

「せやから、せやからなあ？　うちも……うちも一回やつてみたいなあ、なんてえ……えへへ」

黒潮はそう言つて照れながら言い難そうに本当の理由を正直に言つた。

提督はそれを聞いて考えるように顎に手を当てながら呟いた。

「確かに駆逐艦にはまだあまりやらせた事がなかつたな」

「やろ!?　せやろ!?　せやから……なつ？　ねつ、お願いや大佐」

提督の言葉に確かな希望を感じた黒潮は、勢いよく半身を起すと今度は彼の服を握つて期待に満ちた目でせがんだ。

「ふむ……。建造機の使い方は解るか？」

「ばつちしや！ 投入する資材決めて建造イメージを本部に送ればいいんやろ？」

「そうだ。だが言っておくがイメージ通りにいくとは……」

「わかってるって。練度や艦種も影響するんやろ？」

「ああ、なにぶんまだシステムの不安定らしくてな」

「ええて、ええて。ちよつちやつてみてその事を皆に自慢したいだけやし」

「……建造の理由が不純だが、まあ確かに最近やつてなかったしな。分かった、だが一回だけだからな？」

「ホンマおおきに大佐！ ほな、やってくるね」

「ああ」

——そして次の日。

「本日着任となりました大鳳です。よろしくお願いします」

装甲空母大鳳が新規着任艦として提督の執務室を訪れていた。

「……」

「はあく……」キラキラ

大鳳は自分の着任の挨拶に対して鈍い反応を見せる二人に戸惑った顔をした。

「え、あの……ど、どうかしましたか？」

「いや、ちよつとこいつの引きの良さに放心してただけだ。よろしくな大鳳。そしてようこそ我が基地へ」

「あ、はい！ 早速の歓迎のお言葉、ありがとうございます提督！」

「ああ、俺の事はできたら大佐と呼んでくれ。ここでの愛称みたいなものだ。心さえちゃんと意識していれば、そう硬く考えなくていい」

「大佐……ですか。了解しました。では改めてよろしくお願いします大佐！」

「ああ、よろしく頼む」

「黒潮さんもよろしくお願いしますね」

「へ？ あつ、ひゃ、はいな！」

大鳳に声を掛けられ我に返った黒潮は、ビクリと身体を震わせるとその場を取り繕うように慌てて返事をした。

大鳳はその様子にキョトンとする。

「え？」

「……悪い。こいつもちよつとお前が来たことに気が動転してたみたいだ」ポン

「あ……う……」カア

「あら、それは。ふふふ」

「大鳳、実はな。今回のお前が生まれたきつかけを作ったのはこいつなんだ」

「え？ そうなのですか？ では黒潮さんが建造を？」

「そうだ。うちもお前は初めて迎える艦だ。そういう意味でもこいつは動揺してたんだろうな」ポンポン

「う……堪忍や。うちも初めての大型建造やったから大鳳さん見た時は正直現実が信じられなくてビビってん……」

黒潮は提督に頭を撫でられながらそのフォローを有り難く思いつつ、恥ずかしそうに大鳳に釈明した。

大鳳はそんな黒潮に特に気を悪くした様子もなく、微笑み、彼女の頭を撫でながら言った。

「いえ、そんな。私があそこに来るきつかけを作ってくれたのが黒潮さんという事なら、私はそれに感謝するだけですよ」ナデナデ

「あう……さ、『さん』は流石にちよつとアレやから、呼び捨てで構わへんから、そう言うてくれへん？」

「え？ ー、そうですね……。なら黒潮ちゃんでもいいですか？」

「あ……う、うん」コク

「では黒潮ちゃん、私を導いてくれてありがとうございます。これからよろしくお願い

しますね」スツ

「……っ、うん！　うちこそよろしゆうに！」ギユツ

大鳳が差し出した手を黒潮は満面の笑みを浮かべて嬉しそうに握り返した。

それから暫くして、提督は定例となつてゐる交流の場を時間を設けて作り、改めて大鳳を呼んだ。

「騒がしくてすまないな」

「いえ、寧ろ初めての出会いが賑やかで心に残りました」

「そうか、それなら良かった」

「……大佐？」

「うん？」

提督が振り向くと、そこには最初の挨拶をした時よりも明らかに凛とした雰囲気である。提督が振り向くと、そこには最初の挨拶をした時よりも明らかに凛とした雰囲気である。面目な表情をして佇む大鳳がいた。

「私、大鳳は艦隊唯一の装甲空母として奮戦、奮闘し、国に、海軍に、提督に、貢献する事を約束します。だからどうぞご期待ください」

「ふ……頼もしいな。ああ、期待させてもらおう」

厳かにそう言って一礼し、自身の決意を表明する大鳳を提督は心から歓迎した。

「はい、失望はさせません！ ……ところであのお」

しかし、そんな凜とした雰囲気だった大鳳であったが、その意志を伝え終わると何やら言い難そうにしながらも何か困った顔をして提督に質問をした。

「ん？ どうした？」

「先程から気になっていまして、可能ならお教え頂きたいのですが……」

「？」

「何故、執務室に調理台があるんでしょう？」

大鳳の視線の先には、相変わらず無造作に置かれている提督愛用の調理台が何とも言えない存在感を放っていた。

「ああ、俺の趣味だ。何か食べるか？ 歓迎祝いで何か作るぞ」

「え？」

予想外の誘いに大鳳は目を丸くした。

第×16話 「望み」

「装甲空母、か……」

「大鳳さんの事ですか？」

傍らで書類の確認をしていた翔鶴が提督の呟きを耳にして顔を上げた。

「ああ」

「彼女いいですよね。装甲の防御力のおかげで耐久性もありますし」

「中破以上の被害を受けたら攻撃能力を維持し難いお前達にとっては羨望の的か？」

「え？ んー、そうですね。憧れではありますが、でも私たちは装甲が無い分機動力はありますからね。一長一短ですよ」

「確かに」

「赤城さん達強いでしょう？」

「なんだ、そこで自分を出さないのは一航戦に遠慮でもしているのか？」

翔鶴はその問いにあくまで答えず、わざと微笑むだけにとどめた。

「どうでしょう？」ニコ

「お前も瑞鶴も立派に戦っているさ。ん……」ゴソゴソ

「あ、どうぞ」 シュボツ

提督が口に煙草をくわえた時点で、火種の用意をしていた翔鶴が手早くそれを彼の前に差し出す。

「ん、すまない。……ふう」 ジジ……

「……最近、煙草の数が増えてませんか？」

「ん……」

「お仕事の最中に吸うのは、大佐の場合は大体心労からくるものだとは捉えていますけど……。大丈夫ですか？」

「よく見ているな」

「あつ、ご、ごめんなさい……」

「別に誤る事じゃないさ。ふう……そうだな」

「？」

「前にな、日本に帰つただろ？ 俺」

「あ、はい」

「その時にな、大和達を連れて行つただろう？」

「ええそうですね。確か大和さんと……大鯨ちゃんと秋月ちゃんでしたよね」

「そうだ。そいつらを連れて実家に帰つてからな」

「?」

「まあいろいろあつて、結果だけ端的に言えば親は俺の近くに女性がいる事に安心したんだ」

「え?」

「まあ親も若いとは言えない歳だからな。あのくらいの年代になると子の結婚とか孫の事とか気になるんだろうな」

「え? あ……はい……。え?」

「それからというもの、よく親から俺に結婚の話とか軍を辞めて落ち着いた生活をしないかとか、そういう話がかかるようになってな」

「……」

「勿論真剣に考えていないわけじゃないが、それでも今はその事に専心する気にはなれないわけで……ん? 翔鶴? どうした?」

提督がふと翔鶴の方を向くと、彼女は何やら深い悩みでも抱えている様に俯いていた。

提督の言葉で我に返った翔鶴は慌てて反応するも、その動揺ぶりは提督が訝しむのに十分なものだった。

「え? ああ、いえ!」

「…………… まあ俺ももう30過ぎだからな。親にその話をされるようになってから最近
はよくその事が頭にチラつくようになってたんだ」

「なるほど……………」

「流石にここでは何人かと既にケツコンしているとは言えなかったな」

「…………… 大佐は」

何やら真剣な表情をした翔鶴が提督に訊いてきた。

「ん？」

「艦娘と本当に結婚できるとしたらどうします？」

「…………… お前たちに生殖能力が備わってれば、俺はもうその時点で艦装を外してさえい
れば普通の人間と変わらないと俺は思う。だから……………」

「だから？」

「もしさつき言った点がクリアされていけば、軍からある程度の制約はあるだろうが、お
前が言う本当の結婚というのも十分にありだと思う」

「そうですか……………」 パアッ

艦娘でも本当に結婚する事ができる可能性がある。

本部による正式な回答ではなかったが、翔鶴はその答えが提督の口から出たことに何
とも言えない喜びを感じ、その感情が笑みとなって顔に表れた。

「……しかも幸か不幸か今の日本政府は戦後の人口減の問題もあつてかなり厳しい条件付きだが、結婚に対する考えを緩和させる為に一夫多妻制も一妻多夫制も認めているしな。提督が艦娘と本当に結婚できるようになれば、それはそれでいいことなんじゃないか?」

「じゃああとは私たちが子を授けられるようになれさえすれば……」

「確かにそうだが、それにはいろいろな技術的な問題以外にも倫理的な問題もあるからなあ……」

「倫理、ですか」

「そうだ。お前たちは人間と違って生物本来の方法より容易にその存在を創る事が可能だ。そんなお前たちと結婚して子供ができるようになればその時点でもう人口減の問題は表面上は解決したも同じだ。だが……」

「人の価値観がそれを許さない?」

「大部分は懐疑か嫌悪の目で見えるだろうな。またそれが当たり前になれば国民どころか人間としてのモラルの低下にも繋がりがかねないし」

「……確かに」

翔鶴は提督のいう事を十分に理解できた。

確かに見た目は人間でもその実態がそうでないと判れば、人は混乱し、生物の特性と

してそれを忌諱するだろう。

「異端」なものとして。

人との結婚の可能性が暗礁に乗り上げたように感じた翔鶴は暗い顔をした。

その様子が気になった提督は、彼女に希望はある事を示すようにその肩に優しく手を置き、笑いながら言った。

「……そんな顔をするな。途中で論点が混ざってしまったが、艦娘との結婚を軍関係者に限った上でそれを政府の監視下に置くとかすれば、さつきも言ったが本当に結婚できる可能性は十分になると思う」

「は、はい……！」

「……結婚したいのか？」

「はい。あ、ケツコンじゃないですよ？ いや、ここでならそれでもいいですけど」

「……俺とか？」

「……」コクコク

「……節操の無い人間だと思われたくないんだが、それだと俺はこの奴らと全員そういう関係になる事にならないか？」

「嫌ですか？」

「嫌とかそんな次元じゃなくないか？ それを受け入れた時点で多分世界一妻を持つこ

とができる国になるぞ」

「そこは愛ですよ。私たちは誰か心に決めた人にとことん尽くすと言った特性がりますから。人間関係の崩壊は普通の人間と比べてそう心配するほどでもないと思いますよ？」

「……なかなか攻めるな。珍しい」

「真剣に必死ですから♪」ニコツ

「……ま、子を授かれるかという問題をクリアできれば真剣に考えよう」

「本当ですか?! ちよつと明石さんに相談してきます!」

「待て、なんで明石なんだ? というかやめろ、今はその話題を広めるな。頼む、後生だ」

踵を返して部屋を出て行こうとした翔鶴を提督は慌てて止めた。

「あ、そうか……そうですね。相談するなら本部でしたね」

どうも翔鶴の暴走を止める事は難しそうだ。

そう判断した提督は彼女に魔法の言葉を使う事にした。

「……なんでも言う事を聞いてやる。だから今は俺のいう事を聞いて大人しくしてくれ」

「!」

その言葉の効果はどうやら絶大だったようで、翔鶴はそれを耳にするなり直ぐに暴走

を自肅した。

第×17話 「散歩2」 R—15

「響搬送完了です」

抑揚のない落ち着いた声で響の回収を大淀が伝える。

「了解。入渠による修復は後回しにしろ。先ずは延命を最優先に」

「了解しました」

——それから30分程が経ち、提督は張りつめていた緊張を解すかのように深く息を吐いて改めて椅子に座り直した。

「……ふう」

「危ないところでしたね」

「まだ安心はできないな、意識を回復していないし」

「そうでした……。申し訳ございません」

「お前が謝る事じゃない。だがまあ……」

「？」

「もし助からなかったとしても轟沈ではなく、ここで看取る事ができるからな。最悪そ

れだけでも響にしてやれるのは幸いだ」

「大佐……」

「悪い。不謹慎だった」

「いえ、私も叶うなら最期はここで迎えたいです」

大淀は少し笑いながらそう言った。

提督はそんな大淀の顔を眺めながら自身のポケットに手を伸ばす。緊張が解れたので煙草を吸って更に落ち着こうという算段らしい。

「……ん」ゴソゴソ

「あ、どうぞ」シュボッ

「悪い。……ふー。……不味いな」

「でしようね」

「……あ」

白い天井が見えた。

意識を回復した響はベッドから身を起こして辺りを見回す。

「……」キョロキョロ

最後に戦った記憶が蘇る。

「……」
「どうやら自分は助かったらしい。」

自分の両掌を見ながらボンヤリとそんな事を実感していた時だった。

ガチャツ

「目が覚めたか」

「大佐……」

「良かったな、助かって」

「……」 プイツ

「どうした？」

「……悔しい」

「そうか。あのまま沈んだ方が良かったか？」

「……意地悪。それは絶対に嫌」

「そうか」

「……」

「……」 ジツ

「ん？」

脹れっ面をしてそっぽを向いていた響が不意に提督の方を向いて、彼をじっと見つめ

る。

そして、見つめていると思っていると彼女の両目から涙が滲んできた。

「……………」ジワツ

「響?」

「良かった……。また大佐に会えた……。」グス

「……………ほら」ヒョイ

そんな安堵の涙を流す響を提督は優しくその胸に抱き上げて安心させようとした。

「……………んっ」ギユツ

「おかえり」

「うん……………」スリスリ

「もう大丈夫か?」

「……………まだ1分も経ってないんだけど」

間髪入れない言葉に不機嫌な顔をする響。

もう少し空気を呼んでくれてもいいのではないかと、彼女はそう思った。

「仕事があるからな」

「意地悪……………。じゃあわたしも手伝う」

「駄目だ。お前はこの後修復剤を使わない安静（リラックス）入渠だ」

「じゃあ上がったら手伝う」

「それまで仕事が残ってたらな」

「残しておいて」

「いいのか？ もし早く終わって時間が空いたら今度こそお前の為に時間を作ろうと思っていたのに」

「上がるまでに全部終わらせておいてね。今日は寝るまで遊んでもらいたいから」

「は？ 寝るまで？ おい、無茶言う——」

聞き流せない要求に提督が慌てて響を呼び止めようとしようとしたが……。

「お風呂行つて来る」 テテッ

バタン

「……」

意識を回復したばかりとは思えない流れるような動作で素早く提督の腕から降りた響は、一瞬の間で彼が言葉を言い終わらない内に扉を開け、医務室から姿を消したのだった。

ガチャ

「あ」

提督が医務室から出るとそこには、大潮が心配そうな顔で佇んでいた。

「響なら風呂に行つたぞ」

「え？ そうなんですか。という事は元気になったんですね！ よかつたあ」

提督の言葉に大潮は心から安心したようで、満面に笑顔を浮かべる。

「あの時お前が懸命に頑張つてくれたおかげだ。だからあいつも轟沈せずにここまで連れてくる事ができた。よくやったな」ナデナデ

「あ……はう……。あ、ありがとうございます。でもわたし一人の力じゃないですよ？ 他の人も皆必死になつて響ちゃんを守つてくれました」

「そうだったな。皆良くやった。皆に会つたらよろしく言つておいてくれ『大佐がよくやった』と褒めていたぞ、とな」

「はい！ お任せ下さい！」

「頼んだぞ。後で直接俺からも健闘を称えに行くとも伝えておいてくれ」

「はい。了解しました！」

早速大潮の健闘を称えた提督は、そう言つてその場を後にした。

ガチャ

「あ、大佐。響ちゃんどうでした？」

「問題ないようだ。さつき自力で浴場に走って行った」

「え？ 走って？ もう？」

提督の報告に大淀は目をパチクリさせる。

「そうだ。凄いだろう？」

「ふ……く、ふふふふ。そうですね、響ちゃんらしいと思います」

「全くだ。よし、大淀執務を再開しよう」

「畏まりました。こちらに整理してあります」

「ああ、ありがとう」

結局その日、響は夕方になっても何故か現れなかった。

提督がその事を不思議に思っているながら寝支度をしていると……。

ガチャ

「遊びに来た」

「もう夜だぞ？」

「そうだね。夜だね。風が気持ちよさそうだね。と、言えば？」

「散歩か」

「正解。久しぶりに散歩したい」

「分かった。いいぞ」

「ありがとう。肩車ね」

「分かった」

「それつと——」ヒョイ

ピトツ

提督が軽々と響を持ち上げてその肩に乗せた時、彼の首筋に何か妙に生暖かくてやたら柔らかいモノが触れた。

その感触に提督は一瞬黙り込む。

「……」

「? どうしたの? 大佐」

「響、お前下着どうした?」

「あ、お風呂あがった時に履くの忘れてた。あ、大丈夫だよ? 綺麗だから」

「そういう問題じゃないだろ。おり——」

ギュー

響はそれ以上提督に発言させず、彼の頭を抱きしめて拒否の意を表す。

「おい」

「大佐は駆逐艦の力には適わない。つまり下ろせない。つまり響は気にしていない。このまま行く?」

「三段論法のもりか? ……夜道じゃなかったら変態扱いされるな。恐らくされるのは俺だけだろうが」

「大丈夫、その時はちゃんとわたしが弁護するから」

「せめて擁護してくれ。まあいい。他の奴らには言うなよ?」

「うんっ」ギョツ

「あと、あまりひつつくな」

「? なんぞ?」

「……行くぞ」

「?」

不思議そうな顔をする響に、提督は天然の厄介さを痛感しながら彼女疑問には答えず黙って歩を進めた。

「夜風が気持ち良いね」

「そうだな。お腹壊すなよ」

「履いてないから?」

「そうだ」

「大丈夫。今暖かいし」ギユツ

「……何故か俺の心は冷える一方だな」

「シベリアの様に？」

「ヴェールヌイと呼んでやろうか？」

「やだ」

「ふむ、相変わらずロシア関係の話題は嫌か」

「ロシアが嫌なわけじゃないんだけどね。でもやっぱり日本の艦なのに自分だけ外国の名前で呼ばれるのは寂しいから」

「Da (ダー)」

「ちよつと」ツネツ

突然の提督のロシア語に響は拗ねた顔をして彼の頬をつねる。

「つつ、はは、悪い悪い」

「使うのはわたしが使った時だけにして」

「了解した」

第×18話 「尻取り2」

「第二回金剛姉妹歴史上の人物尻取り大会デース！」

「いいわね、面白そうじゃない。負けないわよ」

「今回はマリアも参加するんだな」

「あ、はい。マリアさんは霧島の代わりなんです。彼女、今日は扶桑さんと飲んでまして」

「大佐！ 遅ればせながら扶桑さんとのケツコンおめでとーございます！ 第11夫人としてわたし、大佐にお祝辞を申し上げます！」

「ん、ありがとう。扶桑の奴指輪を握って飛び出していったと思つたら……そうだったのか」

「ケツコン当日に飲みに行くなんて……」

扶桑の事を聞いてビスマルクは啞然としていた。

「扶桑、よつぽど嬉しかったんデスネ」

「フランも大佐に懐いているみたいだし、大佐、練度に達したらあの子ともケツコンしてあげてね」

「本人にその意思があればな」

「え、フランちゃんもうそんなに大佐に懐いているんですか？ 流石ですね大佐あ。このこのー」

「榛名、フランさんを応援しますよ！」

「ワタシもよ。マリア、フランが advice で困っていたらワタシも力になるからネー！」

「みんな……Danke schon！ フランに伝えておくわ」

「……フランシスコ・ザビエル」

「」 「」 「」

唐突なゲーム開始に4人は言葉を失う。

だが提督はそんなことを気にしている様子もなく、榛名の方を向くと続きを促してきた。

「榛名、お前だ。今度は歳下から上がってマリアの順にしよう」

「えっ、わ、私ですか？ え、えーと……る、ルドルフ・シュタイナー！」

「誰それ!? むう、大佐、無理矢理話題変えましたね？ いいですけど……あ、浅井長政

！」

「シユタイナーは昔の思想家か哲学者だったはずネ。浅井はえーと……侍だったわよネ？ さ……さ、佐々木小次郎！」

「へえ、流石四姉妹の長女、よく知ってるわね。宇田川玄随！」

「マリア、お前の方こそそんな人物どうやって知ったんだ……？ 金剛も勉強したんだな。いや、元々知っていたのか？ だとしたら知識の幅が解らんな」

「フフーン、ワタシだってあの後マリアに負けない様につて頑張ったのヨ！」

金剛は依然最初の尻取り大会で辛酸を舐めた後、知識を蓄える為にマリアと歴史の勉強をしたのだった。

今回はその勉強の成果が出たようだった。

提督はそんな彼女に感心しながらゲームを続ける。

「やるじゃないか……伊藤博文」

「いとうひろふみ？」

金剛の不思議そうな言い方に場の空気が凍った。

「えっ」

「金剛お姉様……？」

比叡がびっくりした様に、榛名は口に手を当てて信じられないといった顔で金剛を見た。

ビスマルクも何処か険しい顔をしながら言った。

「え？ 金剛、その人知らないの？ 日本の軍艦でしょ？ あなた」

「金剛……」

自分を見つめる冷めた視線に提督のものも加わったことよって金剛は不安に目を震わせる。

「え？ え？ わ、ワタシまた何力……？」

「金剛お姉様、その方はですね。日本の初代総理大臣ですよ」

「え!? p…… p r i m m i n i s t e r (*首相)…… t h e f i r s t !?」

自国の初代総理大臣を知らなかったという事実衝撃を受ける金剛に慌てた様子で比叡がフォローを入れる。

「け、結構今の世の中若い子だと知らない子もいるみたいですし。そんなに気にする事ないですよ!」

「……じゃあなんで比叡や榛名は知ってたノ？」

「えっ」

「そ、それは……」

金剛の当たり前の指摘に比叡と榛名は狼狽え、ビスマルクは自分だけ無視されたと誤

解して慌てて吠える。

「ちよつと、私も知つてたわよ!」

「マリアさんちよつと黙つてて!! えつと……わ、わたし達が初めて建造された当時からしたらそんなに昔の人じゃなかった……から、かな? ね? 榛名」

「え? あ……え、ええそうです! 榛名達が知つていた理由はその程度ですよ金剛お姉様! だからそんなに気にする事はないですよ!」

「どうかその当時の人たちからしたら江戸に代わる新しい時代の象徴みたいな人だからな。寧ろ知らない方がおかしいと思うぞ」

「た、大佐!?!」

「同感ね。今の日本の国父と言つても差支えない人だもの、一般人ならともかく国防が使命である軍人がそれを知らないのはどうかと思うわ」

「マリアさん!?!」

空気を読まない容赦のない二人の指摘に比叡と榛名が真っ青になる。

「差支えか、マリア、お前もしかして他に国父の本命が?」

「ヤー。個人的に実績的には大久保利通だと思つているの。彼、暗殺さえされてなかったら間違いなくあの人が最初の chance llo (*首相【独】) になつてた筈だもの」

「なるほどな、確かにそれは解る。が、俺としては彼の政治手法が少し気になるところがある。だから俺は完全にあの人が総理大臣になっていけばとは思えないな」
「性格の事ね？ それには私も同意よ。でも当時の日本が列強の支配……」

「た、大佐、マリアさん！」

「そ、それくらいにした方が……」

何やら議論を始めた二人に比叡と榛名が半泣きで口を挟んできた。

見ると彼女達の後ろで金剛がしやがみ込んで泣いていた。

「……ひつく、ぐす……」プルプル

「む……」

「えっ、ど、どうして泣いてるの？ 金剛」

「っ……」ブアッ

「マリアさん!？」

「駄目えええ!!」

ビスマルクの鈍感な発言に二人は絶望の悲鳴をあげるが、意外にも守られていた本人がその雰囲気壊してきた。

「わ……」

「ん？」

「え？」

「ワタシだつて最初の人は分からなくても二代目なら知つてるモン！」

「え……」（初代知らなくても二代目は知ってるから大丈夫つてこと……？）コシヨ

「こ、金剛お姉様？」（た、多分……。個人的にはどうかと思ひますが……）ヒソ

「へえ、それはそれで良いことだわ。人間つてどうしても一番初めと最後に目が行きがちで、二番目とか結構疎かにしがちなもの。二代目だつて初代から引き継いだ実績や構想をより確かなものにして地盤を固めないといけないから結構大変なのよ」

「そ、そーデス！ 確かに初代を知らなかったのは not impressed（*感心できない）な事だと思ふケド、二代目だつて大事ネ！」

金剛はビスマルクの予想外な援護に気を取り直し、未だに涙を滲ませながらも強気な笑顔に戻つていた。

「その意見にはかねがね賛成だ。で、二代目は誰なんだ？ 言つてみる」

「オツケイよ！ それはトーマス・ジェファソンね！」

「え……？」

「は？」

「なに？」

「……」

再び場が凍り付いた。

「……エ？」

「金剛、それは三代目だ」

「えっ!？」

「お姉様……それアメリカの大統領です。しかも当時の敵国……」

「ふあっ!？」

「英国ですらないですね……」

「因みに二代目は黒田清隆よ。アメリカの方はジョン・アダムズ。英国の方は1700年代と800年代のどっちの連合法を起点にするかで変わるわね」

「ふわあっ!？」

「金剛……」

数々の指摘と最後の提督の冷めた視線を再び受けて、金剛はついに羞恥に耐えきれず棒立ちのまま泣き出した。

「ふ……うええええ……」ジワッ

「はいストップ! ゲーム一回ストップです!」

「そ、そうですね! きゅ、休憩にしましょう! 榛名ちよつとお腹空いちゃいました」

「え、ええそうね」（まだ5分も経ってないけどね……）

「大佐、わたし達ちよつとお茶の用意してきます。その間お姉様のお相手をお願いしますね。いこつ榛名、マリアさん」

「はい、分かりました！」ビシッ

「えっ、私も？ 私も大佐と一緒にいた……あ、ちよつと。ねえ、待つてよ！ やだあつ」
ジタバタ

「一番頭良さそうだった癖になんでこんな時は子供っぽいんですか！ ほら、行きますよー」グイ

「マリアさんごめんなさい。比叡お姉様お手伝いします」

「いやああああ……」ズルズル

バタン

「……」

「……」グス

「こんg」

「大佐」

「ん？」

「ワタシ、頭悪くないネ……」

「ああ」

「本当ヨ？ 偶々なんだかカラ……」グス

「……金剛」

「ホントよ!？」

「いや、別に疑っているわけじゃない。ほら、ちよつと来い」グイ

「やあ……。ホントだモン」

「だから疑っていないと言っているだろう、こいつは」ポン

「まだ提督の信用を取り戻せてないと駄々をこねる金剛の頭に、提督は手を乗せて撫でながら言った。

「うう……」

「俺はな、お前は知識の幅はあると思っている。だがその使い方がただ少し不器用なだけだ」

「大佐、ワタシ不器用う……?」ジワツ

「だから泣くな。別に頭が悪いと言っているわけじゃない。知識の引き出し方がちゃんとできればお前だつてマリアに負けないさ」

「……ホント? それができればワタシもマリアに負けナイ?」

「ああ、本当だ。だから次は弁論の勉強でもするといひ」

「弁論……？ talking？」

「そうだ。口の使い方が上手くなれば相手と話をする時にミスも減るし、自分の立場を優位に保つことだつてできるぞ」

「ゆーい……！」キラキラ

「優位だ」

「大佐、ワタシ頑張るワ！　そして今度こそ皆の……特にマリアの頭を明かしてみせるワ！」

「鼻だ。まあ頑張れ」

——そして数日後。

「Hello my lord. 今日も良い天気デスネ。ん……ちゆ」

「……」(マイロード？　英国風の言い回しのつもりか？)

「あ sorry. ちよつと朝の挨拶をしまいマシタ。お許しください」

「いや、それよりも……」

「あつ、今日の予定を申し上げますネ。今日の予定は……」

口調こそ丁寧に、落ち着いていたが、合わせて話し掛ける態度や雰囲気も妙に色つぽ

くなっていた事に提督は違和感を感じた。

それは金剛の勉強の成果を確認しに来た彼女の妹達とビスマルクも同じで、その変わり様を呆然とした顔で見つめていた。

「「「……」」」

「あ、4人ともいたんデスカ？ どうデス？ ワタシの喋り方。喋り方だけじゃないデスヨ？ 今は heart を落ち着けて冷静な talk も……」

「「「こんな落ち着いたお姉様、お姉様じゃない！」」です」「ちよつと、大佐を独り占めしないで！」

「ええ!？」ガーン

「……」（まあそうなるよな）

第×19話 「差別化」

「ん……」

「あ」

「……」

「……? どうした? 大佐」

木曾は軽く挨拶を交わしてすれ違うだけだと思っていたが、自分を見たまま動かない提督に、居心地の悪さを感じて取り敢えず木曾の方から声を掛ける事にした。

「ああ、木曾か。いや、なんでもない」スタスタ

「ちよつと待て! ちよつと待て! 今の何だ? 今の間は何だ!」

「いや、別に」

「俺の目を見て言えよ! 俺が判らなかつたんだよな!? そうだよな!」

「……何を言っているんだ? ちゃんと名前を言っただろ?」

木曾に問い詰められている提督は一見平静を装っていたが、その目は明らかに動揺し、泳いでいた。

「じゃあ何で言うまでに時間掛かつたんだ? 明らかにさっきの間思い出そうとしてた

よな!？」

「……悪い」

「俺の名前を忘れるくらいボケてたのかよ!？」

確かに自分は提督とあまり話した事はなかったが、それでも戦闘ではそれなりに役に立ってきたつもりだし、その度に彼から褒められたりもしてきた。

全く接点がなかったわけではないのに、不意に受けたこの扱いに納得ができなかった木曾は尚も提督に詰め寄った。

「いや、ちよつと人違いをな」

「は?」

「一瞬、お前が天龍に見えたんだ」

「え」

「あくまで個人的な感覚なんだけどな。俺にはお前と天龍がよく似ているように感じるんだ」

「……なるほどな」

提督の答えを聞いて木曾は少し大人しくなった。

あまり自覚こそしていなかったが、改めてそう言われると分からなくもない事だったからだ。

「その男勝りの口調と眼帯。服や髪型をちゃんと見れば分かるんだが、どうしてもパツと見だと一瞬混乱してしまいがなんだ」

「……つまり差別化が必要って事だな」

「いや、そこまでする必要はないと思うぞ。さつきも言った通りちゃんと見れば俺も分かるし」

「でも俺は大佐に間違えられたくないし名前も忘れられたくない」

「それについては努力、いや、以降は間違いないようにする」

「本当かあ？　じゃあ訊くが、俺と天龍の違いって何だ？」

「艦種だ」

「そこじゃねえよ！　そんなの見なくたって名前聞きや誰だつて判るだろ!？」

「……つまり身体的な特徴とか性格の事か」

「そうだ」

木曾は若干呆れ顔で提督の答えを肯定する。

「……性格は天龍より冷静だな。いや、比較対象にする程性格は近くはないか。戦闘自体は好きな方だが、それより周りの状況を見て判断し行動する冷静な性格だよな」

「……まあ悪くないな」ポリポリ

「次に身体的な特徴か。ふむ……む」

「ん？ どうした？」

「いや、別に」

「おい、なんで目を逸らす？ 何考えた？ 言えよ」

「すまないが拒否する。どうかあまり言いたくない」

提督は再び詰め寄る木曾にバツが悪そうな顔でかぶりを振るばかりだった。

そんな彼を訝しみながらも木曾は彼の視線が一瞬自分のある部分に向いていた事に鋭く気付いた。

「…………… つ、まさ…………… いや……………」カア

（気付いたか？）

「そっだよな……………。パツと見て判るくらい俺って天龍に負けてるよな……………」

「だから言いたくなかったんだ」

「大佐は……………」

木曾は視線を胸元にお歳ながらぼつりと何かを提督に訊こうとした。

提督はそんな彼女に敢えて最後までは言わせず、即答した。

「俺はどつちでもいい。愛おしければ取り敢えず問題にはしない」

「…………… 本当？」 ジッ

「本当だ」（口調が……………。もしかしてこれが素か？）

「なら、いいけど……な」

「気が済んだか？ ならもうこの話はよそう。俺は今後お前と天龍を間違わないし、今までもそうだったがその……大ききで好みが分かれたりもしない。いいな？」

「ああ……」

「なんだ？ まだ気になる事があるのか？」

「いや、別に……」

「……話し方変えてみるか？」

「え？」

意外そうな目で提督を見る木曾。

その顔はまだ提督が何を言いたいのか解らず混乱しているようだった。

「さつき差別化をしたいとか言ってただろ？ なら俺と二人の時にだけ話し方を素にしてみてもどうだ？」

「話し方を素に……？ よく分からないな。どうしたらいいんだ？」

「どうするもなにも、その男っぽい口調をやめて自然な感じの喋り方にしたらいいだけだ」

「自然に……」

「そうすれば、少なくとも俺の前では天龍との違いが判るようになる」

「……なるほど」

木曾は提督の提案を静かに考える。

自分には全くなかった考えだった。

「さつき俺に大ききの事で真偽を訊いただろ？ その時のお前は口調は自然だったぞ」

「大ききの事を訊いた時？ あつ……」カア

「勿論今の口調が慣れてて楽なら無理に変える必要はないだろう。これは単純に『差別化』に対する俺の提案だ」

「……分かった」

「ん？」

「大佐の前ではその……しおらしくする」

「しおらしく……無理はするなよ？ 話し方を変えて負担になるだけなら意味がないからな」

「いや、大丈夫だ……あ、大丈夫。その、こういうのも何か大佐だけ特別みたいな感じで悪くないし……な。あ、悪くない……し」

「まあお前がそう思うならいいが」

「うん……」

提督の提案を飲んだ木曾は、少し顔を赤らめながらもこの新たな試みによつて自分の

心が妙に温められる感じがした。

この感覚、悪くないな。

木曾はそう思った。

「……木曾、ちよつと付き合わないか？」

「え？」

「予行練習だ。茶でも飲みながら慣らそう」

「……っ。ああ！ あ、いや、うん！」。パアッ

「……本当、無理はするなよ？」

提督は木曾の変化に戸惑いながらも、少し心配そうな顔で彼女を自室へと導いた。

第×20話 「酔っ払い」 R-15

アアアア……

「？」

やああああ……

「いやああああああ!!」

バンツ

「大佐つ、た、助けてください!!」

「なんだ霧島、夜中にこん……な……」

夜中、突如前触れもなく半泣きの霧島が執務室に駆け込んできた。

提督は先ずその失礼を問ひ質そうとしたのだが、入って来た霧島の顔と、その彼女に絡みつくように覆いかぶさっている一人の人物を確認すると、その有様に途中で言葉を失った。

「扶桑……？ 何をやっているんだ」

「ふふふ……。霧島さん逃がしませんよお……」

助けを求めてきた霧島の顔は、半泣きでありながら顔は紅潮し、涎を口の端から垂らしているというだらしない表情をしていた。

その原因は明らかに霧島に絡みついている扶桑のようであった。

彼女は霧島にのしかかる様にして片腕でその身体を逃さない様に首元をがっちりと腕で固め、そして空いたいた片手で……。

「ふふ、どうですか？ 気持ち良いでしょう？」 チュクチュク

「どうやら霧島はケツコン祝いに扶桑の酒に付き合った結果、絡まれてしまったらしい。

「んっ、いやあああ！ だめっ、やめてください！ それ以上はだめ！」

「あ、霧島さんもまだだったんですね。もしかして大佐の為に……？」

「そうっ……そうです！ まだケツコンしてから一度もシてな……。あつ、おねが……やめ……！」 グス

抵抗の言葉を吐きながらも体を襲う快感の波に力が入らない霧島は、ただ泣く事しか出来ず、口で扶桑に慈悲を、目で大佐に助けを求めていた。

提督は流石にいろいろと見過ごすことができなかつたので、取り敢えず扶桑を止めにはいった。

「……扶桑やめてやれ。霧島が可哀想だろ」

「え…………？ あれ、大佐…………？ え、何で私執務室に？」キヨロキヨロ

「場所が変わった事に気付かない程酔っているのか…………。とにかくやめてやれ」

「あん…………や！ 嫌です！ せっかくケツコンしたのに途中でやめるなんて」

「俺は霧島を開放してやれと言っているんだ。ほら、腕を解いてやれ」

「ええ…………？ 霧島さん…………？」

呆けた顔で若干目の焦点が合ってきた扶桑が、再び霧島を見る。

そこには普段のきびきびとした態度からは想像ができないほど、子供の様に泣きじやくっている霧島の顔があった。

「う…………ぐす…………。もう、やめてえ…………」

「…………え」

「正気に戻ったか？」

「っ！ ご、ごめんなさい！ 私ったら！」パッ

「っ、大佐あ!!」ダッ

正気に戻った扶桑に解放された途端、霧島は泣き顔のまま提督に飛びついた。

霧島は完全に動揺して力の加減をする余裕が無かったので、その衝撃は彼女の感情も含めてきれいに提督に伝わった。

ドスッ

「つ……う……ぐ……だ、大丈夫だ……大丈夫……もう心配ない」ポンポン

一体どっちが大丈夫なのか分からない絵面であつたが、提督は健気にも冷汗を垂らしながらも霧島を優しく抱き締めてやった。

「う……もう、もうダメかと思いましたが。扶桑さんに……ハジメテ取られちゃうかと……ぐす」

「ごめんなさい、ごめんなさい……。本当にごめんなさい」

震えて安堵の声を漏らす霧島の裏で扶桑は土下座しながら念仏の様にひたすら謝罪の言葉を唱えていた。

「扶桑ももういい。結局はケツコンの事で舞い上がってただけなんだろう？ なら今度からは酒に飲まれない様に自制を心掛ける。霧島も少し甘く感じるかもしれないが、あいつに悪気はなかったんだ。許しれやれ」

「大佐……。いえ、私は別に分かつてましたから……。扶桑さんが酔っぱらっていた事は……。それに謝つて反省もしてくれてるみたいですし、私としてはもう……」

「そうか、すまないな。扶桑もそれでいいな？ 霧島はお前の態度を見て許してくれるそうだな。これで一応蟠りが出来ない事を俺に確約しろ」

「は、はい！……霧島さん本当にごめんなさいね」

「い、いえ。もう大丈夫ですから……。大佐、私も約束します」

「ん、ならこれで一件落着だな。二人とももう部屋に戻っていいぞ」

「え?」

「え…………?」

提督はこれで万事解決とばかりに手を振って二人に解散を言い渡したのだが、それに対して霧島と扶桑は意外そうな声を出した。

「あの…………大佐…………。仰っている事も分かりますけど、でも…………ここで解散というのはそのお…………」

先程まで霧島を襲っていた手を恥ずかしそうに見ながら扶桑は言った。

「私も扶桑さんに同意です…………。大佐、こんな状態なんですからせめてこのまま…………」

霧島も、はだけた服を恥じながらも目を逸らしがちに言った。

提督はそんな二人に自身の配慮の足りなさを感じ、ふと時計を見た。

「二人一緒でいいのか? こんな時に不躰なのは承知で言うが、明日は早いから俺としては助かるが…………」

その言葉に扶桑と霧島は顔を輝かせて同時に返事をした。

「はい…………! 感謝します、大佐!」

「お願いします。不束者ですが…………」

「扶桑、先ずはお前からだ」

「はい……。お願いします。ん……」

行為に及ぶと決まる前から霧島のを弄って興奮していたのだろう。

扶桑は既に準備が整っている様だった。

「……これはもう前座は必要なさそうだな」

「はい……。準備はもうできています……。というか、ずっと前から身体が疼きだしてもいろいろなと限界で……。お願いです大佐、きて……」

「分かった。いくぞ」

「ああ……。それが大佐の……。素敵ですう……。はあ、はあ……。早く……。どうぞ……。扶桑をお召し上がりください……」

「……」グツ

ズツ……。

「あ……はあっ♪」

「……狭いな。くっ……」

「っ……んく、あ……。いま……。あ……♪」

その途中で一瞬鋭い痛みが扶桑を襲った。

痛みはそれなりにくるものがあつたが、それでもそれが自分が提督の女になったとい

う事、大佐にハジメテを捧げる事が出来たと事だと考えると、言葉にできない幸福感が扶桑を包み、精神的に痛みを緩和させた。

「扶桑、大丈夫か？ 痛くないか？」

提督は扶桑を気遣ってうつくり動き、彼女に苦痛がないか確認した。

そんな提督に扶桑は目に涙を溜めながらも幸福と快楽に満ちた顔で嬉しそうに言った。

「あ……はあ……だいじよう……ぶです……。痛みはさほどでも……。だ……ああつ。だは……らっ、もつと激しく……どう……ぞ」

「そうか。なら今から少し早くいくぞ。……ふっ」

「あああつ、あ……はあっ♪」

「はあ……大佐、扶桑さん……凄い……」

霧島はそんな提督と扶桑が愛の営みにふける様子をベッドに腰掛けながら恍惚とした顔で眺めていた。

「ん……んっ……」ピクッ

彼女も扶桑が服を脱ぐのに合わせて自分も脱ぎ終わっており、二人の淫行を見ている内に無意識に手が大事な所に触れていた。

「霧島、お前も来い」

悶々としている霧島を見て不憫に感じたのだろう。

提督がに彼女に声を掛けた。

「えつ。で、でも大佐は今扶桑さんに……」

「このままでも別にお前を相手にする事はできる。扶桑がいいならだが」

「あつ……いひ……。いいです……！ たい……あつ♪ 大佐……どうか霧島さんも……い……イっ！……いっしょにい……」

「だそうだ。俺も構わない、霧島、来い」

「あ、でも、私はどうしたら……？」

「扶桑を組み敷くように四つん這いになれ。そうだ。ああ、そして……」

「えつ、こ、この格好た、大佐に……」カアツ

思考が蕩けて考えが追い付かなかつたのだろう、霧島が気付いた時には既に態勢は整っており、彼女の全てが提督の目の前に晒されていた。

「霧島も準備はできているみたいだな。だが今は扶桑の番だからな。今はこれで我慢してくれ。ちゅ……」

「っ!?! ひやつ……ふああつ」

提督に見られていることですら恥ずかしいのに、それどころかソコを彼の口で攻めら

れた霧島は今まで感じた事が無い感触に悲鳴の様な嬌声をあげる。

「大佐駄目で……んふっ！ そ、それはもうしわ……けっ……い！」ピクン

「はあ……霧島さん……可愛い……。あつ」

自身も提督に攻められながらも霧島の痴態に母性を擦られた扶桑は、目の前に自分程ではないが、形がよく美味しそうなモノが二つ揺れている事に気付いた。

「美味しそう……んっ。霧島さん……いただきま……あつ……すね。んちゅ……」

「ふああああ!!? ふ、扶桑さ……む……それ私のむ……ああっん」

「ん、ちゅう……べろっ。はあ……あつ、あああ！ はあ、はあ……ふふ、霧島さん美味しいですよ？」

「は……だ、だめ……。そ、そんな二人同時に……な……んてっ。ああっ」

「くっ……」

「あ……。んん……あああっ♪ た……いさ……イツてしまわれました……か？」

「……すまん。お前はまだだったか……」

「いいえ、いまちよう……。ん……。お腹……あつたかくて良い感じですよ……♪」

「……そう……。か。それなら良かった……」

「はい、ありがとうございます。じゃあ次は……」

「霧島、準備はいいか？」

「はい……私は大丈夫です。ですから、遠慮なく今度は私、霧島に……」

「わかった……いくぞ」グツ

「つく……うう」

扶桑より霧島は隙間が少ないらしい。

最初こそ平気だったが、提督が問題の部分に触れると霧島は痛みを耐えかねてつい声を漏らしてしまった。

「やめるか……？」

その表情を見て提督も行為の中断を提案したが……。

「う……ぐす……だいたいじょうぶ……とは言いませんが……はあ、はあ。でもお願いです。最後まで……」

「……」

扶桑は、涙を滲ませながら痛々しい表情でそうお願いする霧島を見かねて、彼女をそつとその豊かな胸に抱き締めた。

「……霧島さん」ギユッ

「っ!? ふ、扶桑さん？」

「ん……安心して。気を楽に……。私がついていきますから……」

「扶桑さん……」

霧島は、扶桑のその柔らかく温かい胸に包まれて何とも言えない安心感を感じた。

(女の胸でこんな気持ちになるなんて……。提督の胸も安心するけど、そっか、これが女性ならではの包容力なのかもな……)

「大丈夫ですか？」

「あ……はい。ありがとうございます。でも、できればその……」カア

「ふふ♪ いいですよ、このままで。大佐？」

「ん、霧島大丈夫か？ このまま進めていいか？」

「あ、はい。もう大丈夫です。今だったら……お願いします」

「わかった。いくぞ……っ」ズン

「くっつ、あつ、は……あああああ！」

「霧島さん、落ち着いて。大丈夫よ」ギユツ

「はあ、はあ……大佐……？ もう最後まで……？」

「ああ」

「良かった……。んっ……」

「痛いかな？」

「はい。ジンジンします……」

「暫く動かないでいる。少し慣れろ」

「はい。ありがとうございます……ふう……」

「ふふ、霧島さん本当に可愛い……」 ナデナデ

「む……」

優しい表情で自分を撫でる扶桑に霧島は何となく負けた気がした。

彼女には感謝しているし、この状況も悪くはなかったが、だがこのまま彼女の世話になりっぱなしというのもちよつと悔しく思った。

だから霧島は細やかな反撃に出る事にした。

「……」 チユウ

「つ、き、霧島さんっ?」

「扶桑さん本当に胸大きいですね……。ふふ、自分が言うのもなんですけど、龍驤が胸のある人に嫉妬するのも分かる気がします。ん……ぺろ」

「きやうつ、ああ……んっ」ピクン

「はあ、はあ……それに柔らかい……」

「ん、ふっ……もう……霧島さ……んんっ」

キユウツ

霧島と扶桑が交わっている様子を見て小休止していた提督は下半身に僅かに違和感

を感じた。

(ん?)

キュン、キュウウ

「むう……」

快感からか余裕によるものかは判らなかつたが、最初の時より明らかに霧島の感度が良くなつており、彼を痛いほどの快感が襲つた。

(これならいけそうだな)

「霧島」

「ん……ちゅっ……。はい?」

「今なら行けるんじゃないか?」

「え? あ……はい、そうですね。動いてください大佐」

「了解した。そのまま扶桑の奴も可愛がつてやれ」

「ふふ、了解しました!」

「え? 別に私は……ああんっ。き、霧島さ……」

「さあ、扶桑さん。今までお世話になつた分今度は私がお返ししますね。覚悟してくだ

さい。ん……」

「あ……はあ……。もう、こんな顔大佐と山城だけにと思っていたのに……。ふふ、それ

では改めてよろしくおねが……ああっ、もう♪」

「ふふふ、よ……はあああ、ふう……。余裕は……あたえ……ませんか……ら……っ」

(本当に余裕がないのはこっちかもな)

提督は自分を霧島が自分を締め付ける力が更に強くなつたのを感じ、腰を動かしながら密かにそう考えていた。

第×21話 「嫉妬」

「……山城」

「なんですか？ 大佐」

「机に座ったままだと仕事ができない。下りろ」

「……」フイツ

その日の秘書艦であつた山城は何故か、その時に限つては提督の傍らで執務の手伝いをするのではなく、彼の机の上に座つてその仕事を邪魔していた。

邪魔をしている山城は少し頬を膨らませ、何故か不機嫌な様子だつた。

「邪魔するなら邪魔するで、せめて後ろを向いてくれないか」

「大佐はわたしのお尻が見たいんですか？ セクハラですね」

「堂々と前を向いて俺に下着を丸見えにしているお前に言われたくはない。だからせめて後ろを向けと言っているんだ」

提督の言う通り山城は提督の方を向いて机に座つていた。

だが、その座り方が体育座りであつた為に、彼女の淡いピンク色の下着は提督に丸見えとなつていた。

山城はその事に提督に指摘されて初めて気づいたらしく、顔を真っ赤にした。

「……！」カアッ

「恥ずかしいだろ？」

「……」フイ

（子供じみた強がりだな。後ろを向かなければ、座り方も変えないとは）

提督は溜息を吐きながら若干あきれ気味に訊いた。

「あれか。俺が扶桑とケツコンしたから機嫌が悪いのか？」

「……」

山城はその質問には答えず、横を向いたままだ。

「言っておくが俺にお前から姉を奪ったという考えはないからな。あくまでお互い同意の上だ」

「……そんな事解つてますよ」

「なんだ。それで拗ねたんじやないのか？」

「拗ねてつて……。別に違います」

「なら何故機嫌が悪いんだ？ 原因がそれじゃなかったら俺には皆目見当がつかないんだが」

「……別に」

「…………？」

（言えるわけないじゃない。姉様が先にケツコンしたのがちよつと悔しくて機嫌が悪いなんて）

「…………取り敢えず仕事をしたい。いい加減下りろ。そのままずっと俺に下着をみせているつもりか？」

「…………見ていればいいじゃないですか」

「なに？」

「…………っ」（わたししたら何を…………）カア

「おい、強がりもそのくらいにしておけよ」

「強がりなんかじゃないです」

「強がりじゃなかったらお前それ、ただの痴女だぞ」

「ち…………！」カアッ

（よく赤くなるな。まるで瞬間湯沸かし器だ）

「くくくっ」クルッ

（やつと後ろを向いたか）

「もういい。私室で仕事をして来る。やる気のない秘書艦はそこで反省している」

後ろこそ向いたものの、それでも机の上から意地を張って動こうとしない山城に、提督は本気か演技か相当呆れた様子で席を立ち、書類を纏めてその場を立ち去ろうとした。

山城はそこにきてやつと慌て、焦った様子で彼の服の裾を掴んだ。

「あ……」

ギユツ

「ん?」

提督が振り返った先には叱られた子供の様に自分の行動を後悔している山城の泣き顔があった。

「ご、ごめ……待って……」ジワツ

「……却下だ。子供の我儘に構うつもりはない」

「あ……。……つ、あや……。……まります。ごめ……。……えぐ……。……なさ……。……い」

「なら理由を言え。それで納得すれば取り敢えず仲直りという事にしてやる」

「……。……しくて」

「ん?」

「くや……。……しくて」

提督は山城の言葉を聞いて、たった一つだけ思いついた理由を意外そうな顔で尋ね

た。

「……扶桑にケツコンで先を越されたから？」

「……お、お姉様には内緒にして……」

「……悪い、それは本当に分からなかった。意外過ぎて」

「……」

「お前は完全に姉っ子だと思っていたからな」

「……お姉様は大好きです。……でもわたしは大佐も好きだから、その……。ごめんなさい。こういう気持ち初めてでどうしたらいいか考えてたらつい機嫌が……」

「なるほどな」

「……」 シュン

「分かった。大方理解した。取り敢えず先ず仲直りだ」 スツ

提督は下を向いて俯いている山城に手を差し出した。

表情こそいつもの通り不愛想だったが、それでもその顔は彼女を叱っていた時より明らかにどこか柔らかく見えた。

山城はその顔を見て安心が小さな息となって口から洩れるのを感じた。

「あ……」

「握手だ」

「う、うん……」

ギョツ

「よし、それじゃ仕事を始めるか」

「!? ちよ、ちよつと待ってよ!」

むず痒い反省の雰囲気も、ほろ苦い恋の雰囲気も微塵もない唐突の展開に山城は信じられないという様な声で叫んだ。

「ん?」

「え? なに? これで終わり? 終わりですか!」

「ん? ああ、そうだな。お前も早くケツコンできるように頑張れ。応援しているぞ」

「え……あう……ええ……? あまりにもあつさりし過ぎてないですかあ……?」

「そう言われてもな。俺はお前の気持ちを知って光榮に思うくらいしか……」

「人のパンツまで見たのにそれだけ!」

「あれはお前が見せたんだろ。それに、別に俺はそれによって劣情は抱いたりはしていない」

「興奮しなかったっていうの!」

「おい、人を年中発情しているような獣の様な言い方するな」

「だって、ねえ？ 人ってそうじゃない？ 違うんですか？」

「発情というよりかは『常に興奮できる』だろ。さっきの場合は、日中、工作中、この二つの環境下で俺が性的興奮を覚える可能性は皆無だったという事だ」

「そんな……」

山城はそれを聞いて今まで感じていた羞恥が、言いようのない虚脱感へと転じるを感じた。

何か恥ずかしさを我慢して一瞬でも意地を張った自分が凄く馬鹿に思えた。

「こんなことで女のプライドの無駄遣いするなよ……。良識の範囲内で行動すれば済む話だろ」

「う……」

「どれだけ余裕が無かったんだ」

「あ、改めて考えてみれば凄く子供っぽい事してた……」カア

「今更か」

「はあ……もう嫌あ……。不幸だわ……」

「自分で墓穴を掘っただけなのに、それを運の所為にするな。ほら仕事しろ」

「せめて慰めて欲しいんですけど……」ジトツ

「……昼休みになつたら構ってやる」

「つ、本当？　本当ですね？　お、お姉様みたいに優しくしてくれます？」

「……どう優しくしろって言うんだ」

「ひ、膝に乗せてくれたり、そのままあ、頭……撫でて、くれたり……とか……」

「ああ、分かった分かった。ついでに飯もたべさせてや……」

「口移しで!?　い、いきなり大胆ね……」

「話を勝手に捻じ曲げるな。何もしないぞ」

「あ、嘘、嘘だから！　山城頑張ります！　先ずは何が食べたいですか？」

「今日の献立は決まっていただろう。鳳翔に迷惑掛けるな。あと仕事しろ」

提督は頭痛を覚えつつ溜息を着きながら言った。

第×22話 「強がり」

「ご飯、まだなの？」

提督の机に顔を乗せた初風が暇そうな声で提督に訊く。

「初風、何故俺に言う？ 飯の準備なら鳳翔や間宮がしてるだろ？ あいつらに訊け」

「むう、いいじゃない。大佐はここのさいこー責任者でしょ？ それくらい把握しててよ」

「悪いが飯時にまで関心はないんだ」

「……」プクー

「なんだ？ 初風は空腹で機嫌が悪いのか？ ならこの長門お姉さんが何か作ってやろうか？」

提督と初風のやり取りを後ろで楽しそうに見ていたその日の秘書艦の長門がここで話に入ってきた。

「……遠慮するわ。だって長門さんにご馳走されたらなんかわたしまで食べられそうだもの」

提督の基地の長門は一般的に知られている“長門”の性格とは大分変っていた。

一般的に認知されている長門の性格と云えば、誇り高く、口数が少なく、それでいて強情が祟つて素直になれない面を持つ、そんな「凛々しい大和撫子」を体現したような高潔で頼りになる艦娘となっている。

ところがこの長門は、誇り高くて頼りになる、までは合っているが、他は、よく喋り、自分を偽らず、可愛いものは有象無象を問わず好きと豪語し、その上人懐っこいときている。

故に初風はそんな彼女だったからこそ冗談のつもりで言ったのだろう。

しかしそれを単なる冗談として流さず逆に相手を弄る為の材料として使うのが「この長門」であつた。

「ん〜？ まあ、今日は節分だしな。可愛いお前の『マメ』を食べるのもいいかもな」
「マニマ」

「わたしの、「豆？」キョトン」

「長門」

「はは、冗談だ」

「大佐、長門さんが言った意味解るの？ どういう意味？ 確かに今日は節分だけどわたし豆なんて持つてないわよ？」

「気にするな。大方お前がもし豆を持つていたら取り上げて、それを涙目で取り返そう

と見るのを見て楽しもうつてとこだらう」

「おいおい、私はそんなに性格は悪くないぞ?」

「わ、わたし豆なんて持ってないからね! それに取られたって泣かないんだから!」プンスカ

「む、大佐の所為ですっかり私が悪者になってしまったじゃないか。この責任は追及させてもらうぞ」

「元々お前がタチの悪い冗談を言ったのが原因だろうが……」

「そーよ! 大佐は何も悪くないわよ! それに責任って何よ? 長門さんが大佐にどうやってそれを請求するっていうの?」

「ああ? そりやお前決まっているじゃないか。ベッドの上で、だよ」

「ベッド?」

「おい……」

「伽だ伽。よ・と・ぎ」

「よと……? ……!」カアツ

「ははは、やつと解ったか? 真つ赤になって、あーもう可愛いなあ」スリスリ

「ひゃ!?! ちよ、ちよつとひやめ……」ジタバタ

「おー、これは良く伸びるほつべだ」グニーン

「みゆひー!？」

「……」（仕事ができん）

提督が呆れている中、長門に玩具にされていた初風は必死に暴れる事で何とか彼女の腕から脱出した。

バツ

「お?」

「う、うう……。お、覚えておきなさいよ！ ぜったい仕返ししてやるんだからあ！」
テテテツ、バタンツ

「……涙目だったな」

「ああ」

「可愛かったな」

「お前、歪み過ぎだぞ」

「ふふ、冗談だよ。ちゃんと後で謝るさ」

「……全く、なんでお前はこうなったのか」

「ん？ なんだ？ 私の性格の事か？」

「初めて会った頃からは想像ができない程変貌してると思うんだが」

「ああ、だって、なあ？」ニヤニヤ

「……なんだ？」

長門は提督の思いを聞くと、何やら悪戯つぽく笑いながら机の正面に回り、身を乗り出してきた。

前屈みになる事によつて彼女の「谷間」が提督の目の前にきた。

提督は最初それを彼女が故意にやっているのだと思つたが、それに対して長門は特に意識している風には見えなかつた。

恐らく提督と初めて会つた頃を思い出しているのだろう。

最初こそからかう様な顔をしていたが、今では昔を懐かしんで柔らかい表情をしていた。

「私も最初は確かに大佐の言う通り、なんていうか……優等生だつた。……そうだったよな？」

「なんで改めて確認するんだ。まあそれくらい変わったという自覚はあるつて事か」

「ふふ、まあな。まあ確かに今でも仕事の上では優等生なのは変わらないつもりだが、性格がそうでなくなつたのは仲間の影響だよ」

「ふむ？」

「この奴らは大体大佐に好意を寄せているからな。そんな中で私は「自分を保ち続け

る。事に段々不安になって来たんだ」

「不安？」

「そうだ。まあ私は優秀だから？　大佐の役に立つことによつて信頼は得る事は難しくないだろう。だがそんな中私は、他の奴らと比べて差が付けられてしまつてゐる事に私は氣付いたんだ」

「ふむ」

「距離だよ、単純に。大佐との距離。親しさだ」

自分から問い掛けるように語つておきながらあつさりと自ら答えた長門の顔は優しかった。

「……」

「最初の私のままでもそりや時間を掛ければ親しくなれただろうが、だがそれだと他の奴らは持つてゐるのに、私だけが持つてゐない。大佐との仲ができてしまふそうだな」

「……」

「結論、私はそれを損だと考えた」

「もしかして」

長門の話の静かに聴いていた提督は呟いた。

「うん？」

「最初のお前の一番の敵は駆逐艦たちだったか？」

「ふふ、正解だ」

「なるほどな」

「大体理解できてきたか？ なら褒美に私の頭を撫でさせてやろう」ズイ

「何故褒められる側が上から目線なんだ」

「なんだ不満か？ ならむ……にいい？」

長門はそう言うのと差し出していた頭を引っ込めて徐に胸元に手を掛けた。

提督はそれ以上はさせず、彼女の顔を掴んで引き寄せると、やや強引な形だったが黙って頭を撫でてやった。

「よしよし」 ナゲナゲ

若干棒読み気味の声だったが、長門はその撫で心地を気持ちよさそうに受け止め、目を細めた。

「ん……。まあいい♪」

第×23話 「大物」

「……」

丸くて赤い瞳が提督を見つめていた。

海面から頭を出していた人ならざる白い肌をした物体は、明らかに深海棲艦だった。

それもレ級以上に幼い外見から察するに、提督の頭の中の敵資料から導き出された答えは……。

(北方棲姫……) *以下『北方』

基本的に鬼クラス以上の実力を持つとされる姫級は深海棲艦の中でも特に警戒すべき存在。

そんな敵が何故基地の警戒網にひっかからず自分の目の前まで来れたのか提督には解らなかつたが、一つだけ確かだつたのは今彼が命の危機に直面しているという事だつた。

少なくとも彼はそう考えていた。

(突然の死、か……。いざ直面するといろいろと心残りが浮かぶものだな)

レ級の仲間かどうかかわからない以上、攻撃されないとは限らない。

提督は敵の手にかかるならせめて自決しようと、釣り糸を切る為のハサミに手を掛けながらそんな思考を巡らせていた。

「……」

対する北方は未だに提督を見つめたままその場にいたが、やがて彼が身じろぎをせず、その場を緊張と警戒から動かないでいると、なんと自分からゆっくりと近づいてきた。

ちやぶぶ……。

「……」

水面を漂いながら堤防のへりまで北方は来た。

しかしそこからまた動かずに真上にある提督の顔をじつと見つめる。

(まさか……)

提督はその時ある考えが浮かんだ。

彼は一旦ハサミから手を放すと、片手に持ったままとなっていた釣竿のリールを巻いて、その糸を北方の近くまで近づけた。

「……」

北方は釣り糸に繋がれて水面に浮かんでいた重りが自分の近くに来た事に気付くと、装備だか服なのかは解らなかったが、それっぽい物にそっと釣り針にひっかけたよう

だった。

それを確認して提督は半信半疑の思いでリールを巻き上げる。

キリキリ……。

驚くことに少女一人を釣り針一つで引き揚げているというのに、提督はその時重さと言うものを全く感じなかった。

おかげで北方のサルベージは難なく進み、数秒足らずで彼女を自分が立つ堤防の上まで引き上げることができた。

「……」

提督の間近に引き上げられた北方は、釣り上げられたことよって宙に浮いた状態のまままだというのに器用に釣り針を外すと、落ち着いた様子でコンクリートで出来た堤防の上而降り立った。

トンツ

その時初めて提督は彼女から重さを感じるような音を聞いた。
どうやら彼女には重力をある程度操る能力があるらしかった。

「……」

北方は提督の横に立ったかと思うとまたそのまま動かずに提督の事を見つめていた。

「……」

何をしたらいいのか考えあぐねた提督は、取り敢えず最初していたようにその場に座り直すことにした。

「……んっ♪」ギョッ

すると北方は提督が座ると同時に彼の腰に嬉しそうに抱き着いてきた。それは提督がその時初めて見た北方の感情が感じられる表情だった。

「大佐……」

夕刻、いつも通り執務を行う提督の横で、秘書艦の赤城は顔をひくつかせながら彼に訊いた。

「ああ」

「訊いていいですか？」

「こいつの事か？」

「はい」

「くっ♪」スリスリ

提督の膝の上では北方が子供のようにはしゃぎ、彼にじゃれついていた。

「どうしたんですか？ それ……」

「……釣れた」

「は？」

「……」

「……え？」

「嘘じゃない。本当にそれしか言いようがないんだ」

「そんな……」

「敵意がないところを見るとレ級の仲間なのかもな」

「そんな安易に……」

心配そうな表情をする赤城を、提督の膝からその様子を見ていた北方は、何を思ったのかふわりと飛んで今度は彼女の胸に抱き着いた。

「ひっ……」

突然の行動に赤城は短い悲鳴をあげる。

自分にとっては宿敵とも言える種類の敵が、今彼女の胸に嬉しそうに抱き着いていた。

「赤城落ち着け」

「でも、でもお……」ジワッ

涙目で無防備の状態で敵を抱える恐怖に震える赤城だったが、北方はそれを全く気にしていない様子で尚も純真そうな瞳で彼女を見つめながらこんなことを言ってきた。

「おかあ……さんっ♪」

「え？」

「……」

不意の言葉に赤城と提督は固まる。

「今……え？ これ、この……子？ なんて……」

「えへへっ♪ あかぎおかーさんー♪」スリスリ

「ちよ!!? だ、誰がお母さんよ!!」

愛しの提督の前で突然一児の母親にされた赤城は半泣きで否定する。

北方はそれも気にする事もなく不思議そうな表情で更にこう言ってきた。

「んっ? あかぎ、ほっぽのおかーさんになつてくれない? たいさはおとうさんなの

に?」

「えっ」

その言葉に赤城は顔を赤らめて一瞬提督を流し見た。

提督はその視線に気づき、冷や汗を一筋流した。

(嫌な予感が……)

「大佐、この子飼いましょう」

「おい」

間髪入れずとんでもない事を言いだした赤城を提督は珍しく焦った様子でツツコミを兼ねた制止を敢行するのだった。

一方その頃、レ級たちの棲みかでは……。

「ねえ姫ー」

「ん？」

「ほっぽちゃん知らない？」

「北方ノ？ いや、見てないけど……」

「んー、そっかー。どこか遊びに行っちゃったのかな」

「あいつはお前と違って本当に根っからの子供だからな。ちよつと目を離すとこれだ」

「んー……もしかして大佐の所にいったのかな」

「だったら迎えに行つて来るか？ 大佐も困っているだろう」

「迎えに行くのは賛成だけど、その心配はないかな」

「ん？ 何故？」

「ほっぽちゃんには困ったら先ず男をお父さん、女をお母さんつて言つて頼りなさいつて言つてあるからねー！」

「……」

鬼姫はその言葉を聞き絶句した。

そして僅かの間で気を取り直すとすぐさまレ級にこう言った。

「レ級」

「ん？」

「すぐ行け」

「え？ 何処に？」

「迎えにだ」

「え？ なんだ」

「いいから行け。おい、ル級」

レ級のすぐ近くで昼寝をしていたル級は鬼姫の一言で直ぐに起きた。

「……ふえ？ あ、は、はい！ なに？ 姫」

「お前の大好きな大佐が北方ノに取られようとしている。直ぐに行って連れ戻して来い」

「だ、大好きってそ……え？ ええ!？」

「レ級があいつに大佐の事を父と呼ぶように教えたそうだ」

「!?! い、行く！ わたし行きます！ 行こ、レ級!」

「え？ え？ 皆どうしたの？」

片や真剣な表情で指示を出す上司、片や真剣な表情で焦燥を見せる親友。
レ級は自分が蒔いた種が起こそうとする事態をまだ予想ができず、戸惑うばかりだっ
た。

第×24話 「バレンタイン」

「叢雲……ちよつと訊きたい事があるのだけど……」

「ん？ どうしたの早霜？ 改まって」

「うん……。ちよつと、ね……」

「？」

早霜が自分から誰かを訪ねるのも珍しいのに、この時に限っては更に彼女はどこか言い難そうに口ごもる様子まで見せていた。

叢雲は内心その事に驚いていた。

暫くして早霜はようやく決心したように顔を上げると、口を開いた。

「もうすぐ……」

「うん」

「もうすぐ、バレンタインよね……」

「ああ、そういうええそうね。もうそんな時期になっていたわね」

「……」ジツ

早霜は、自分の質問に事も無げに応じる叢雲をどこか注意深く窺う様子で見つめた。

「? なに?」

「ううん……。それでね……」

「ええ」

「……やっぱり言うわ。さつきね、叢雲を見ても思ったんだけど……」

「私? ええ」

「バレンティンが近いのに、なんか皆……大人しい気がして……」

「ああ」

「理由を知っているの……?」

「そうね。少なくともあなたの疑問には答えることができるわ」

「なら教えてくれるかしら……?」

「その前に一応確認するわね。早霜、あなたが気になっているのは皆が大佐に好意を向けている筈なのに、何故かチヨコの話題をあまり聞かないから。それを疑問に思っているのよね?」

「完璧よ……。そんな中で自分だけ行動するのって、なんだか私だけ間違った事をしてる様な気分になるでしょ……? それが居心地が悪くて……」

「なるほどね。それは当然だわ」

「どうしてかしら……?」

「ま、答えは簡単よ。この基地ではね、バレンタインにチョコ、いえ、それも含めて大佐に贈り物をするという習慣があまりないからよ」

「え……？ そうなの……？ 何故……？」 キョトン

早霜はその答えに目を丸くして本当に意外そうな顔をした。

「最初の頃はね、私も含めてだけど大佐にチョコを贈る話題で盛り上がってたりしてたわ。でもね」

「でも？」

「そんな折に大佐がこう言ってきたの」

『日本ではバレンタインは女性が男性にチョコを贈るのが風習になっていてるみたいだが、実際は恋人同士の間を深めるのが本来の目的だ。だからそんなにお前達が一方的に贈り物に執心する必要はない』

「——って言ったの」

「」

「ふふ、あなたもそんな顔をするのね。ま、確かにちよつと冷たい突き放すような言い方だとは思わうわ」

「そう、ね……」

「まあそれも、私たちが大佐と今ほど親しくなかつた頃だったから、仕方ないと言えば仕

方なかったけど。とにかく、それがきつかけで取り敢えず私たちの間でバレンタインの日にチョコの話題が上る事はあまりなくなつたの」

「それじゃあ叢雲も大佐に何もしてあげないの……？」

恐らく駆逐艦の中でもいろいろ考え抜き、結果として相談相手として彼女を選んだのだろう。

早霜は今後の自分の行動の指針になるヒントがもしかしたら得られないのではないかと言う不安に駆られていた。

叢雲はそんな早霜の心内を察しているかのように小さく笑いながらこう答えた。

「少なくとも贈り物に傾倒する事はそうないわね。でも」

「でもっ……」

「さっき言ったけど、バレンタインの本来の目的は恋人同士がお互いの仲を深め合う事なの。だからその日が近くなれば、自然と大佐に甘えるようになるわね」

「甘え……」

「ちよつと表現が間違っていたかしら。まあ自分から大佐に近づいて多少ひつついちゃつたりなんかしても、結構多めに見てくれるのよ」

「ふむ……」

「流石に人数が多いからその日だけってことはないわ。少なくともその前後の間は大佐

のガードはそんなに硬くないわよ」

「そう……?」

「ええ」

「そう……」

「ふふ、頑張つてみる?」

「え……?」 カア

「その調子だと例えチョコをあげたとしても、土壇場で恥ずかしがって義理とか言つてたかもね」

「……悔しいけど、否定しきる自信は、ないわね……。私、素直に感情を表現するのつてちよつと苦手だから……」

「贈り物だつて立派な手段だから、別に無理してそれを諦める事も無いのよ? 例えばチョコじゃなくても軽く食事を作つてあげたりして誘うのもいいんじゃない?」

「! なるほど……」

早霜は叢雲の提案にその手があつたかとはかりに目を見開く。

「ちよつとはやる気が出た?」

「ええ……。叢雲、ありがとうね……」

「気にしないで」 ニコ

そして時は流れ、場所は所変わって提督私室。

「……それで、おでんという事か」

提督は目の前でぐつぐつと美味しそうな匂いを湯気とともに上げるおでんを見ながら言った。

「そう……。あ、熱燗もあるわよ……？」

「酒か……」チラツ

提督は壁に掛けられた時計を見た。

時刻はもう直ぐ日付が変わるといった頃合いだった。

「い、一応時間にも気を遣ったつもりよ……？」

「ああ、すまん。一応な。早霜」

「っ、は、はい」

「その誘い有り難く受けよう」

「……っ」パアッ

「では、先ずは一献」スツ

「え？　そ、そんな私からなんて……」アセアセ

「遠慮するな。お互い楽しむのが目的なんだから」

トクトクッ

「あ、あ……」ササッ

「……よしっ」

「……」チラッ

「飲んでいいぞ」

「ん……」コクコク

「どうだ？」

「……ふう……。美味しい、です……」ポ

「はは、そうか。お？」

「大佐、次は私が……」

「ありがとう」スッ

トクトク……

「はい、どうぞ……」

「ん……ぐ、ごく……」

（あ、良い飲みっぷり……）

「……ふう」

「どうでした？」

「ああ、美味しい」

「良かった……」ニコ

「さて、それじゃあ早速だからおでんも頂こうか。いいか？」

「ええ、勿論です……。あ、取りますよ」

「ありがとう」

第×25話 「憂慮」 R—15

「……」

「なんじゃ加賀ぼーつとして」

「利根さん……」

「お主らしくないではないか。覇気を感じぬぞ？」

「ちよつと……」

「ん？」

「ちよつと暇をしてみました」

「はあ？」ズルツ

「……そんなに驚かなくてもいいではないですか」

「あ、いや、すまぬ。意外だな」

「そうですか？ 手が空いてい暇なときは割と私はこんな感じですよ？」

「そ、そうなのか？」

「はい」

「そうか」

「はい」

「……」

「……」

（か、会話が続かん！）

「？」

「あ」

「な、なんじゃ？」

「利根さん、ちよつと」

「ん？」

「ちよつと私の前に。そう、そこ」

利根は加賀の手招きに応じて彼女の目の前にまで近づいた。

すると、それを確認した加賀は……。

「んん？ 内密のはにやああ!？」グニーン

自分の間合いに入った瞬間、素早い動作で利根の頬を両手で摘まむと、いつか加賀が初風にしたように左右に伸ばした。

「ふふ、やっぱりよく伸びますね。可愛い」グニグニ

「にや、にやにをしゅりゅのじゃあ!？」

「長門さんの真似になります、なるほど。これは確かに癖になりますね」グニグニ
「ひや、ひやめりゆのじゃ！」ジタバタ

「無駄ですよ。例え利根さんでもこの基地最強の空母である私の力には適いません」ガ
シッ

「によわあああ!!」

——30分後

「う……ぐす……ひつく……」

「ふう……」キラキラ

「いや、そこは謝るところであろう!? 何を満たされ切った表情をしているのじゃ!」

「え? ああ、どうもありがとうございます。お蔭で満たされました」ニコッ

「違ああああ!!」

「利根さんは私に弄られたのが不満で怒っているの?」

「それ以外に何かあると言うのじゃ!!」

「それは確かに。ふむ……」

「……っ」(また何を言い出すか分からぬ。ここは警戒じゃ!) ササッ

加賀を警戒して間合いを離す利根だったが、それに対して加賀はそんな彼女の警戒心

からは予想が着かない事を言ってきた。

「じゃあ私にもしていいですよ」

「いいわけないであろう！　またな……へ？」

「私の頬も伸ばしていいですよ」

「え？」

「ですから私の頬も」ガシツ

「あ、ちよ……」

「こうつかんで……」グニツ

加賀は利根が油断している瞬間に間合いを再び詰め、彼女の手を掴むと手を添えて自分の頬を掴ませた。

「や、なにを……」

グニーン

「……ひょうれす？」

加賀は、頬を伸ばされた状態でも特に変わる事なく、いつもの落ち着いた雰囲気と半目で利根にそう訊いた。

「……え？　あ……」(や、柔らかい……)

「こへではたりはへんは？」

「い、いやそういうわけではないが……」

「？」

「……っ」（なんで頬を伸ばされたままでもいつもの通りなのじゃ！　なんか逆に可愛く

おも……）

「あ」

「どうしました？」

「あ、いや……」フイツ

「ふう、これでお相子でいいですか？」

それから暫くして、加賀によつて半ば無理やり彼女に報復をする事に成功した利根は、腑に落ちない気持ちながらもそれ以上は文句は言わなくなっていた。

「な、なんか納得がいかが。まあ……いいっ」

「そうですか」

ムニツ

「ひよわっ!?　こ、今度は何をするのだ!?!」

「あ、すいません。そこも柔らかかそうだったので」

「ここは女人であれば、誰であろうと柔らかいであろう!?!」

「いけません」バツ

「むぐっ!？」

「その言葉、人によつては限りなく該当しなかつたりするんですよ。どこでそれを聞いてその人を傷付けてしまうか分かりません」ムニユムニユ

「むぐぐー!？」（そう言いながら揉むなー!!）

「あ、すいません。私のも触りますか？ はい」ムニユ

「ふぐー!!」（そういう事じゃなーい!!）

——それからまた30分後

「う……はあ、はあ……」グテー

「大分いい感じに仕上がってきましたね」

「だ……だへほ……へえはと……」

クチュツ

「にやうっ!？」

「ここも大分良い塩梅みたいですね」

「や、そこは……だめなのじゃ……!」

「もしかしてまだ大佐とは……?」

「くくくつ」コクツ

加賀の問いに利根は首下まで肌を赤くして照れ、小さくこくりと頷いた。

「そうでしたか。それではいけませんね。ごめんなさい」スツ

加賀はそれを確認して利根を惑わせていた手を大人しく引いた。

すると利根は、それをどこか名残惜しそうな目で見つめながら小さく声を漏らした。

「あ……」

「？」

「あ、いや……」カア

「……利根、そこに座って足を開け」

「えっ!？」(た、大佐!?)

「……」ニツ

「……つ」カアツ

「大佐に思えましたか？」

「ふ、不思議なものじゃの。声は違うのに雰囲気が大佐だった……」

「それは光栄ですね」

「でも……」

「はい？」

「誠に残念というか複雑なのじゃが、大佐は自分からそういう事はあまり言わない、気がする……」

「……確かに。誘いには乗ってくれても自分から誘ってくれた事はありませんね」

「であろう？ さつきみたいなセリフも吾輩たちの感情が昂っている時にそれを補助する時くらいではないか？ 大佐はあんなノリノリな感じでは言ってくれないであろう」

「そうですね……」（まだ未体験だということによく解っているわね。それだけ大佐がアレ、という事かしら）

「そうであろう？」

「……」

「はあ……」

「……なんか興が冷めてしまいましたね。私は大丈夫ですけど、利根さんは大丈夫ですか？ 希望なら手伝ってあげますが」

「……心誘われるが、遠慮しておこう。なんか部屋に戻って一人で勤しむ気も失せてしまったからのう」

戯れもそれまでというかのように利根が立ち上がると、加賀はそのまま立ち去ろうとする彼女にある物を手渡した。

「そうですか。あ、これを」

「ん？」

パサッ

「

「よかつたらどうぞ」

「え、これ……」（冷た、もしかして……）

「私のです。一応感じていましたので」

「え？ だ、だから……？」

「交換しません？ あなたの」と

「なんで!？」

「何となく？」

それから暫くして、利根は廊下を一人歩いていた。

「……」（はあ、なんで受け取ってしまったんじやろう……）

恥ずかしそうに俯きながら利根は、ポケットから小さな布きれを少しだけ引き出してそれを見つめた。

「……」（加賀の、か……）スッ

「ふう……まあいいか」

利根は誰にもともなくそう呟くと、それから特になにかを気にしている様子もなく自分の部屋へと戻って行った。

「……」（どうやら計画は成功したようね）

その様子を廊下の曲がり角の陰から密かに確認する加賀の影があった。

その彼女の肩を後ろから叩く者が更に一人。

トントン

「……時間通りね」

「はい。勿論です」

「……どうぞ」スツ

「わあ、ありがとうございます♪」（姉さんの……!）

筑摩は加賀から渡された物を嬉しそうに抱きしめる。

加賀はその様子を少し呆れた顔で観ながら言った。

「……姉妹なのでですから面と向かってお願いすれば良かったのでは?」

「それでは意味がありません! この背徳感がいいんです!」

「……そうですか。私にはちよつと理解が難しいですが。でも私はそれを得る為に自分を犠牲にしたのですが」

「え？ そうだったんですか!? それは申し訳ございません。え、えーと……」ジツ
「？ なんです？」

恥じらうような上目づかいで自分を見る筑摩に加賀は眉を寄せる。

「私の、いります？」ポツ

「……私が言うのもなんですが、この基地の風紀がちよつと心配です。大佐には何とか
全員を女にして頂かないといけないわね」

「あ、や、やっぱりその所為なんでしょうか。最近ケツコンしている方が増えてきたから
……」

「せめて駆逐艦の子たちにはこの空気が及ばない様に努力しないといけないわね」

「そう、ですね」

「……」

「はあ……」

加賀と筑摩は先程加賀が利根とした様にお互い顔を見合わせると、再び共通の悩みに
対して溜め息を吐いた。

第×26話 「本気」

隼鷹「大佐、帰ったよー！」

利根「戻ったのじゃ！」

大淀「戻りました」

加賀「帰投です」

扶桑「只今戻りました」

山城「ただいまあ」

基地に帰投した艦娘の格好は一働きした事を表すように、ところどころ傷つき、汚れていた。

提督はそんな彼女達の帰還を労いながら迎えたのだが……。

「ご苦労。……なかなか苦労してるみたいだな」

利根「……」ムスッ

扶桑「そうですね。敵の本体がいる地点は補足できていますが、守りがまだ……」
「ふむ……」

返ってきた艦娘達の表情は一部を除けばお世辞にも明るいとは言えず、どこことなく浮

かない顔をしていた。

「どうやら戦果自体は出しているものの、作戦の目的を達成するという本懐は遂げる事ができてないようだった。」

大淀「個々の働きは問題はないと断言します。しかしそれに対して敵の勢力が……」
隼鷹「役に立ってないつもりはないけど、ありやあちよつと分が悪いかもねえ。後一步攻めきれない感じなんだよ」

加賀「流石に悔しくて頭にきてます」

「……なるほど。仕方ない少し編成を変えてみるか」

利根「む、吾輩はまだやれるぞ！」

山城「私もよ！」

艦隊を代表する子供組が早速吠えた。

ただちよつと残念だったのは、その吠えている子供の様な艦娘が戦艦と航巡という、艦種の印象からは少々想像し難い大人げなさだった。

「分かっている。お前達を責めているわけじゃない。ただ、儉約重視の守編成から重消費を前提とした攻編成に切り替えるだけだ」

大淀「資材、大丈夫でしょうか？」

「短期必勝を願うしかないな。勿論攻撃に転じるからには完遂するつもりだが」

扶桑「力及ばず申し訳ございません……」

加賀「……」プクー

隼鷹「まあまあ加賀、別に悪い事をしたわけじゃないんだから」

「その通りだ。これ以上お前たちを出撃させるのも返って疲労をだけが蓄積してしまう事にもなりかねないからな。ここは戦略的一時撤退と思っておけ。敗退ではない」

利根「……了解じゃ、ちよつと寝る！」

「いや、先ずは風呂に入つて来い」

汚れて破損した服の所為で半裸に近い恰好となつていた利根が、執務室のソファアーに横になろうとしたのを提督がさかさず注意した。

山城「お風呂！ 姉様お背中流します！」

扶桑「そう言いながら胸揉まないで。怒るわよ？」

大淀「分かりました。では申し訳ないですが、入渠の後、待機任務に入りますね」

「ああ、皆ゆつくり休んでくれ」

隼鷹「やつほー！ おつふるー♪」

加賀「……まあいいでしょう」

「ああ、お前達二人は修復剤使つてシャワー浴びたら直ぐに戻つて来い。次の出撃にもお前達にはそのまま参加してもらおう」

隼鷹・加賀「」

山城（あ、二人とも固まった。隼鷹はともかく、加賀もお風呂が嬉しかったのね）
利根（二人ともご愁傷様じゃ。そして申し訳ない）

「大淀」

大淀「え、あつ、わ、私も……？」

「いや、その二人をシャワー室に連れて行つてやつてくれ。扶桑も頼む」

大淀「あ、そういう事ですか。分かりました」（よかつたあ）

扶桑「分かりました。お任せ下さい」

——それから三十分後。

陸奥「それで、私達が呼ばれたのね」

武蔵「ふふー、久しぶりの実戦だな。楽しみだなあ♪」

提督の前に基地の重火力を代表する戦艦達と航空戦術のエキスパートが集まった。

陸奥と武蔵は久しぶりの出撃に目をキラキラさせ、長門は興奮で疼く体を抑えるよう

に腕を組みながら嬉しそうに言った。

長門「右に同じだ。偶には動かないと太ってしまふからな」

赤城「長門さん、私太ってないですよ？」

何故か名指しもされていないのに赤城が直ぐに長門の言葉に反応した。

提督は早速緊張感が崩れる場の雰囲気にも内心苦笑しながら目の前の頼もしい部下たちと言った。

「誰もそんな事言っていないだろ。長門、そこで白くなっている加賀と隼鷹を艦隊に編入して準備が出来次第出撃しろ」

長門「了解だ。任せてくれ。赤貧基地が火を起こすとどれだけ恐ろしいか敵に刻み込んでみせよう。ところであいつらに色が着くまで遊んでいいか？ 私は隼鷹がいいのだが」

「駄目に決まっているだろ。いい加減にしろ」

武蔵「あー、楽しみだなー♪ 46cm全然撃ってなかったからなあ♪」

陸奥「武蔵、やり過ぎちゃダメよ？ ムダな消費は避けるのは絶対なんだからね？」

赤城「今回は加賀さんと隼鷹さんまで一緒なんですね。これなら敵に“空は無い”様なものです。期待してて下さい大佐♪」

「ああ、頼んだぞ」

こうして利根達の代わりに新たに編成された艦隊は、彼女たちの奮闘と提督の期待に応えるかのようにもの見事に出撃してから一刻も経たない内に敵本隊を撃破し、目的を達した。

提督の基地は、普段演習で勝つ事より試合を経験させ育成を重視しているので偶に外から甘くみられがちだが、このように本当の主力と呼べる火力はちゃんと保持している。

今回はその事を内外に示す良い機会になったようで、戦闘後の残り火によって赤く染まった空を背景に帰還する彼女たちを見た敵はそれを恐れ、また偶然近くを通った味方はそれを見て頼もしく感じたという。

第×27話 「お酒2」

「51cm……砲……！ た、大佐こ、これ……い、一体？」

大和は目を輝かせて提督から貰った装備を使用するためのパスカードを見ながら言った。

「前の任務で達成の功績に貰ったんだ。受け取ったのは武蔵だから、これはあいつからお前への贈り物という事になるな」

「武蔵が……？ どうして私に……」

「お前偶に戦艦の中で一番自分が練度が低い事を気にしていじけていただろう？ 壁を向いてしゃがみこみながら傘をさしている様が見えられなっただと」

「」

「武蔵に感謝し……おい？」

「……ぐすん」

「……」（結局いじけてるぞ……）

提督は大和を慰める言葉を見つけることができず、取り敢えず自分が部屋を出て彼女を一人にしてやることにした。

「大佐、大和の様子はどうか？ あいつ喜んでいたか？」

廊下で贈呈の提案をした本人に出会った。

その顔は大和が喜ぶのを確信しているからか、提督と話す顔も既に綻んでいた。

「……いや、いじけている」

「はあ!？」

「なに、それは本当か!？」ヒョコ

「むう、なんだ長門?」

「決まっている。見に行くんだ。写真撮るぞ。いじけているならスカートを捲つても気

付かないかもしれん!」キラキラ

「お前は何を言っているんだ!？」

「取り敢えず行くぞ!」ビューン

「おい、待てよ!？」クソ、阻止しないと。大佐また後でな。待て長門!」ダダッ

「……」

提督は長門の奇行を武蔵が止められる事を心から願いつつその場を後にした。

「あらあ、大佐どうしたのお?」

基地の出入り口近くで龍田と出会った。

お互い進行方向が逆なところから察するに、彼女は遠征からの帰りのようだった。

「龍田、いや別にちよつと部屋に居辛くてな」

「あらあ、そうなのお？ なら私たちの部屋に来る？ 歓迎するわよお」

「せつかくだが遠慮しておこう。堤防で煙草でも吸つてくる」

「あら、さんねくん。でも煙草も程々にねえ？ また後でね」ヒラヒラ

意外にあつさり自分を解放した龍田に珍しさを憶えつつ、提督は本来の目的を達する為に喫煙の定スポットである堤防へと向かった。

「……ふう」

「ああつ！ 大佐タバコ吸つてるー！ ダメよあまり吸つちや！ 身体に悪いんだから

！」

堤防の下から声がした。

見ると曙が下から提督を見上げ自分を指差していた。

「曙、解つてるさ。2、3本でやめるつもりだ」

「本当ね?! それ以上吸つたら許さないわよ！」

「なんなら横に居て確かめるか？」

「え……う……そ、そうしたいのはやまやまなんだけど、わたし今日の遠征の出撃メンバーだから……」

「そうか、なら仕方ないな」

「あ、でも今日くらい誰かと代わっても！」

「ダメだ。行け」

仕事に関してはある程度真面目な提督は、ここでは曙を甘やかさずしつかりと遠征に行くように促した。

曙も頭から許しを貰えるとは思っていなかったようで、特に提督の命令に残念そうな顔もする事なく苦笑いしながら言った。

「ああ……ま、そうよね。でもちゃんと約束守つてよね。それじゃ行つてきますー！」

「……」 シュボツ

「戴きだ」 パシツ

ようやく落ち着いて喫煙できると二本目に火を点けた瞬間誰かに横からそれを奪われた。

その方向を向くと、いつの間に自分の横に並んでいたのか日向が小さく笑いながら

座っていた。

「日向」

「火が欲しいな」

「お前吸うのか？」

「大佐の前でだけな。ん、ふい」ピョコピョコ

「ほら」シュボツ

「ん……すう……つ、う、げほっ」

「おい」

「こ、こんなものよく吸えるな。海に落としてしまった」

「……勿体ない」

「取ってこようか？」

「いや、いい」

「ふふ、冗談だよ。すまなかつた。お礼にこれを」ゴトツ

日向は懐から紙で栓をした徳利を出した。

どうやらここですぐ軽く一杯やるつもりらしい。

「流石に昼間から酒は……」

「徳利一本だからそんな大した量でもないさ。二人で猪口でチビチビやればあつという

間だろう」

「……」ジッ

「ん？ どうした？」

「お前、酒は飲めるのか？」

「……だいじょうぶ」

提督の質問に日向は目を逸らして答えた。

その態度は明らかに彼女が酒が苦手、あるいは飲めないと語っていた。

「おい」

「ほ、本当だぞ？ 飲むからこれを隼鷹から借りてきたんだ」

「それ、お前が元々飲めない証拠のように思えるんだが」

「だから飲めると言っているだろう。見てろ」

トクッ

「……」

日向は自分で注いだ酒を見るばかりで飲もうとしなかった。

見れば緊張で指が僅かに震えていた。

「飲まないのか？」

「ん？ いや、飲むさ」

「……」

「どれだけ苦手なんだ」

「そんな事は無い。大丈夫だ。う……」

「別に酒も煙草もしなくても俺は話し相手くらいにならなるぞ」

「えっ？」

提督の言葉に日向は意外な顔をして振り向いた。

その時点である事実が確定した。

「やっぱり飲めないのか」

「あ、いや。その……飲めないと言うか、飲んだことがなくてな。酔った隼鷹とかを見て

るとあまり良い印象はなくて」

「煙草は良いのか？」

「それは大佐が吸ってるから」

「善悪の判断を俺を基準にするな。俺もそんな責任は持てん」

「む、私は大佐を信じているんだ。部下に慕われて大佐は嬉しくないのか？」

「さっきの答えは慕うというより、信奉に近い気がするんだが……。まああまり篤く信

頼されても俺は困る」

「いけずだな」

「そういうのじゃない」

「……」

「どうした？」

「いや、共通の趣味がないとなんかこう、な」

「なら俺から話題を振ってやろう。日向、猪口を貸せ」

「ん？ ああ」スツ

提督は日向から酒が注がれたままとなっていた猪口を受け取ると、その場で直ぐに一口で飲み干した。

「ありがとう。ごくつ……さて、お代り、注いでくれるか？」

「あ……。ああ、分かった」パアツ

トクツ

「ん、……ごく」クイツ

自分が注いだ酒を美味いと言われただけなのに何故かそれに対して言いようのない嬉しさを感じていた日向は、提督が酒を飲む様を彼女らしくもなく惚けた顔で見つめていた。

「はあ……。どう、だ？」

「美味しい」

「そうか……」ポツ

「……日向、ほら」

「え？ 私に？」

自分に向けられた猪口に日向は小さく驚き、ピクリと肩を震わせた。

その彼女に対して提督は猪口を差し出しながら言った。

「今なら飲めるような気がする」

「何故？」

「俺が飲んだのを見て嬉しそうだったからだ。その気持ちなら大丈夫だと思う」

「そう、かな……？」

「ま、猪口一杯だ。どうする？」

「……もらおう。大佐」

提督の言葉を信じた日向は猪口を受け取ると提督に注がれるのを待った。

提督もそれを確認して徳利を傾ける。

「ん、ほら」

「あ……」

トクッ

「……んっ」ゴクッ

「どうだ？」

「……はあ、あ……。なんか、喉が熱い……な」

「味は解らないか」

「ん、正直美味いかどうかはまだ。でも、気分は悪くないな」

猪口一杯だと言うのに日向は胸を押しえながら少し火照った顔でそう答えた。

明らかに酔いは感じていようだったが、悪い方にはいつてないようだ。

提督はそれを確信するとそれ以上は彼女の意思に任せる事にした。

「それが酒を楽しむというものだ。飲み過ぎて酔うのはまた違う」

「なるほど……大佐」

「ん？」

「もう一杯」

「大丈夫か？」

「今なら」

「ふ、そうか」スツ

自分から猪口を差し出してきた日向に仄かな愛らしさを感じた提督は、再び徳利を彼女の猪口に傾けた。

第×28話 「自己」

山城「姉様！ 支援砲撃来ました！」

利根「良いタイミングなのじゃ！」

扶桑「そうね。これならいけそう。皆、まだいけますか？」

加賀「……お風呂……」ボソ

赤城「あ、大丈夫だそうです」

筑摩「え？ あ、はい。私は大丈夫です。第二艦隊の方はどうですか？」

筑摩の声に僅かな間の後、ノイズ混じりの声が返ってきた。

ゴージャ『大丈夫でち！』

初春『余裕じゃ♪』

潮『任せてください！』

吹雪『右に同じく！ 初霜ちゃん？』

初霜『任せて！ 大丈夫よ！』

神通『絶対に負けません。心配はしないでください』

扶桑は彼女達の声を聞いて決断した。

敵目標への最終攻撃を。

扶桑「……皆、頼もしいですね。では……征きます！ 全艦突撃！」
ドツ！！

深海棲艦達「……！」

それから数十分後、扶桑達の連合艦隊は、支援砲撃の助けもあつて被害らしい被害も受ける事無く、完勝と言つても差支えが無い程の圧倒的な勝利を収める事ができた。

利根「ふう、完勝じゃな♪」

山城「姉様、やりましたね！」

神通『目標の沈黙を確認しました。任務完了です』

加賀「お風呂、お風呂……」ヌギツ

赤城「加賀さん、ここで海に入っちゃうと傷に沁みるわよ」

筑摩「ふう……。やりました♪」ニコツ

初春『ふむ、上々じゃ。ようやくたのう潮』

潮『あう……。え、えへへ。ありがとうございます』テレツ

吹雪『何とかなりましたね』

初霜『お疲れ様あ♪』

皆が口々に勝利の結果に安堵し、喜びの声をあげるなかで旗艦の扶桑の声が無線から聞こえていない事に気付いたゴーヤは気付いた。

彼女はその事が気になり扶桑に呼びかける。

ゴーヤ『扶桑さんどうかしたの？ さつきから静かね』

扶桑「あ、ゴーヤちゃん。あなたの位置からならここよりよく見えないかしら。あそこ、私達が戦っていた場所に何か見えない？ 何か動いているような……」

扶桑の言葉を聞いて直ぐに緊張感のある顔に戻ったゴーヤは、先程の戦いでまだ残り火が消えずに残っている場所を注視した。

ゴーヤ「んん……？」

確かに何かが見えた。

火が燃える海の上で何かの黒い影が動いているのが。

ゴーヤ「……」

討ち損ねた敵かもしれない。

ゴーヤは静かにその身を海に浸けると、音を立てずに静かに影が見えた個所へと近づ

いて行った。

??? 「……っ、……っ！」

段々影の主の声が聞こえてきた。

どうやら何か焦っているらしい。

これは好機かもしれない。

仲間が敗北したことに動揺して混乱しているのかも。

ゴージャ「……」カチャツ

ゴージャは魚雷の発射装置を構えつつその影を撃沈するか追い払うか、危険度を判断する為に更に近付く。

影の主の声が今度は明瞭に聞こえた。

??? 「あちっ、熱っ！」ゴロゴロ

ゴージャ「……ん？ あれはあ……」

ゴージャは影の正体を確認して驚いた顔をした。

「初めまして！ 呂500です！ ロウと呼んでもらえると嬉しいですよっ！」

「……」

提督の前に白い肌に銀色の長髪といった出で立ちの大人しそうな少女がいた。

だがその少女は大人しそうなその様な外見をしていたものの、意外にも活発そうな笑顔と明るい声で自己紹介をした。

自分の自己紹介に特に何も言わずに鈍い反応を見せる提督に、呂500と名乗った少女は困惑した顔をする。

「あの、提督？ わたし、何か気になる事でも？」

「ああ、いや……。すまない、少し待っててもらえるか？」

「はい、分かりました！」

ようやく自分の声に反応してくれた提督に呂500は安心した様に再び明るい顔に戻り、元氣よくそう答えた。

「扶桑」

提督の後ろで成り行きを見守っていた扶桑を提督は声を潜めて呼んだ。

「はい」

「言いたい事は解るな？ どういう事だ？」

「はい、ユウちゃんの事ですよね」

「ユウ……。やはりドイツの、潜水艦なんだな？」

「ええ、まあ……」

「自分の名を日本式に言っているが、どういう事なんだ？ 改修を受けて最終的にそうなるとしても、あの姿でそれを名乗るとは……」

「私達も最初は驚いたんですが、本人によると……」

『なんだか凄い衝撃で目が覚めたんです。そしたら文字通り海面は火の海で……。熱くて転げまわっていて気付きたい時には自分をそう認識していましたって！』

「……という事らしいです」

「……龍鳳の時と似たような既視感を感じるな」

提督の脳裏に初体面でいきなり自分の事をお父さんと呼んだ大鯨の頃の龍鳳の姿が浮かんだ。

彼女は自分を移送していた船が敵の攻撃を受け、運よく無事だったものの機能停止中に受けた衝撃が原因で提督を自分の主人として認識する為の機能にエラーが生じてしまったのであった。

今回の呂号の件もシチュエーションは違えど、受けた衝撃によって艦娘の自己認識機能に影響が出てしまったという点で龍鳳の件と類似していると言えた。

「あの時の戦いはまさしく完勝でしたが、それも支援砲撃のタイミングとピンポイント

の着弾、それと私達の奮闘があつてこそでした。ですが当然それを可能にした攻撃の激しきは相応のものでして……」

「結果、お前達が倒した深海棲艦の一人が交戦中に艦娘に戻る際にその衝撃を受けてしまったという事か」

「恐らくは」

「大体把握した。まあ問題はないだろうが、一応記録はしておけ」

「分かりました」

「待たせて悪かったな。……口ウ？」

「いえ、大丈夫ですって、なんですか？ 提督」

呂500は提督の様子を窺うような声にも相変わらう元気な声で応じた。

「ん、そうだな。まずは俺の事は提督でもいいが、ここでは大佐と主に呼ばれている。だからできればお前にもそう読んで欲しい。階級は気にするな。お互いの信頼を表すための愛称でも思ってくれ」

「大佐ですか？ 分かりました！ じゃあわたしもこれからは提督をそう呼びますねって！」

「ああ、ありがとう。それとな」

「はい?」

「お前の名前なんだが、自分でも分かっているとは思いますが今の姿は……」

「あ、はい。ドイツの艦である事は解っています。本当は改修を受ける事によつて段階的に自己認識も変化するんじゃないかなって思いますすつて!」

「ああ、いや。その事は解っている。まあ気にするな。その事じゃなくてな」(改修で性格も変わるのか? だとしたらドイツ艦の時はどういう性格だったんだ?)

提督は呂500の本来の性格が少しだけ気になった。

やはり見た目通りの大人しい性格だったのであろうか。

それに対して呂500は提督のそんな思いなど知る由もなく、話の続きを促した。

「はい、なんですか?」

「お前の呼び方だが、ロウよりユウと呼びたいんだが」

「え? ユウですか? それつてドイツ艦の方ですよね? 確かに今はその姿をしているけど、どうせ呂号になるのならこつち方が……」

呂500は提督の提案に不思議そうな顔をした。

どうも自分が日本の艦だという意識が強いようで、海外艦の方の名前に若干抵抗があるようだった。

「いや、そういう効率的な理由ではないんだ。その、なんだ。ユウの方が女らしくて良く

ないか？ 俺もその方が呼び易いと思うし」

「え？ お、女らしい？ だからそうわたしを……う？」

呂500は提督の言葉を聞いて目をパチクリとさせた。

「そうだ。お前さえ良ければだが」

「……大佐は」

「ん？」

「大佐は、わたしを艦娘としてじゃなくて、女の子と意識してくれるのって？」キラキラ

呂500の提督を見る目が輝いていた。

その反応は明らかに提督の提案を彼女が喜んでいるのを表しているようであった。

「……一応兵器という認識は持っている。だが軍人としては甘いとは思いますが、少なくとも俺はお前たちの事は人と同じように接したいと思っている」

「……っ」プルプル

「？ どうしたユ——」

「うきやー!!」ダキッ

「つと……。ぐ……。ど、どうした……。う？」ギリギリ

妙な奇声と共にいきなり抱き付いていた呂500を何とか抱き留め、提督は締め付けられる感触に耐えつつ彼女に訊いた。

「大佐！ わたし今とつっても嬉しいって！ なんかもそう言ってもらえて何とかなんか……う……えへへ♪」 スリスリ

「そうか、じゃあ呼び方は？」

「はい！ どうぞユウと呼んでください！ わたしもその名前がいいって！」

「そうか、じゃあよろしくなユウ」

「はい！ よろしくお願ひします！」

こうして見た目はドイツでも既に中身は日本という奇妙な艦娘がその日、新たに提督の基地の仲間になった。

第×29話 「カレー①」

「マイクの音量いいですか？ チェック……チェック、あー、アー？ あ、ワン、ワン
ツー、ワン……はいっ！ 皆な様お待たせしましたカレーの味勝負大会の始まりです
！」

ワアアアアアアア！

「解説は私、霧島が行います！ 実況是那珂さんになります！ 那珂さん、よろしくお願
いします！」

「はい！ 那珂ちゃんです！ 今日頑張つて実況するから皆よろしくねー！」

「おっと、今日は珍しくアイドル発言はないですね。どうしたんですか？」

「ぶっちゃけアイドル言うの飽きただけ！ 別にアイドルに拘らなくても目立って可愛
いければ満足かなって！」

「なるほど、今更その結論に辿り着いたわけですね。無駄な回り道ご苦労様です！
「ちよつと！ いくらなんでもそれひどくない!？」

「さて、今回勝負に参加するチームを紹介します。まず最初は私の姉、金剛がいる金剛チームです！」ムシ

「イエーイ！ 大佐ア！ 今日頑張るから期待しててネ！」

「フオローは任せてください！ ちゃんと食べられるものを作ります！」

「ちよ、ちよつと比叡!?!」

「はい、是非お願いしますね、お姉様。では続いては加賀さんと赤城さんによる一航戦チームです！」

「ブイツ」ビシツ

「加賀さん、まだ勝利宣言は早いわよ。まあやる気があるのは良い事だけど。あ、がんばりますねー」フリフリ

「おお、そこはかたなく感じる危なげが何か良いですね。ご活躍に期待します！ では次は翔鶴さん率いる五航戦チームです！」

「なんか出番があまりないので、今日は凄く頑張ります♪」

「右に同じく！ 美味しいの作って優勝して、大佐と一緒に出番獲得よ！」

「はい！ 限りなくメタな発言ありがとうございます！ さて次は、規格外駆逐艦コンビ、雪風&島風チームです！」

「ちよつと！ なんで島風の名前が先じゃないの!？」キーツ

「ちよ、ちよつと島風ちゃんいきなり熱くなっちゃダメだよ」アセアセ

「はい、相変わらず元気いっぱいですね！ そしてお次は先に紹介したチームと比べて能力に差があるという事で唯一の4人チームになります！ 暁型、雷電響（らいでんきょう）チームです！」

暁「ちよつと！ なんで暁の名前だけ外したのよ!？」

響「多分、暁の漢字の音読みが『ギョウ』だからじゃない？ わたしの『キョウ』と音が似てるし、横に並べても離して読んでも語呂が悪いから……」

雷「あー、それで濁音がある方を敢えて使わなかったのね。『ギョウ』より『キョウ』の方が耳に優しい感じするものね」

電「納得なのです。暁ちゃん、気持ちちは分かりますけどここは我慢なのです」

暁「うゝ、ぜつつたい勝って皆の鼻を明かしてやるんだから!」

「響ちゃん雷ちゃん、解説ありがとうございます。そして電ちゃん、フォロー感謝しま

す。暁ちゃんの奮闘に期待しましょう！ では最後のチームになります！ 最後は足柄、羽黒姉妹による妙高型下妹チームです！」

「下妹って……まあ出るからには勝つつもりでやるけど」

「足柄お姉ちゃん頑張ろうね」ニコツ

「はい、凄く安定感のあるチームに思えます。それでは最後に紹介するのは試食によって判定をする審査員の方二名になります！ 長門さん、大佐、よろしくお願いします！」

「カレーは大好物だよ」

「……」

「あ、あれ大佐……？ どうしました？」ヒソツ

いつも通りの長門に対してどこか沈鬱そうな表情をする提督に、霧島は心配そうな顔で話し掛けた。

「いや、こういう催し物は久しぶりでな。そして何故か頭が痛い」

「だ、大丈夫ですか？ お願いしますね。それでは勝負を開始といきましょう！ 那珂さん、合図をよろしくお願いします！」

「おっけー！ それじゃあいくよー、第一回カレー勝負大会……はっじつめー！」
パーン！

ワアアアアアアア!

○金剛チーム

「……」ドゲザ

「お姉様……」

「お願いヨ、比叡。ワタシ実は *cooking* 全然できないノ……。助けテ……」グ
ス

「はい、分かりました。この比叡にお任せ下さい。先ずは野菜を切りましょうね。火が
通り難いのでからにしましょう」

「んー…… *carrot?*」

「正解です! 流石ですお姉様!」ナデナデ

「えへへく♪」

那珂「だ、大丈夫なのかなこのチーム……」

○五航戦チーム

「翔鶴姉、パイナップル使うの?」

「うん。これ、缶詰のものを使わないところがポイントなのよ?」

「んー……甘み？」

「正解、缶詰だと実に詰まった甘みが果汁と一緒に殆ど出ちやつてるの。だから直ぐ使うのならないべく、パックに入った物がいいのよ」

「なるほどねー、どれくらい入れるの？」

「お鍋一つくらいなら輪切り一個で十分よ。これ、結構酸味あるからあまり入れ過ぎると、甘さもそうだけど匂いも結構キツくなっちゃうから」

「ふーん、そうなんだ。分かったわ！ あ、お肉切るね」

那珂「はあ、美味しそうなのが出来そう……。これは期待だね！」

○一航戦チーム

「加賀さん、その葉っぱなに？」

「シナモンよ」

「え」

「なに？」

「なんで葉っぱのままなの……？」

「？ このままじゃいけないの？」

「生のままだと防臭や防虫くらいしか使い道が……。それでも多少は乾燥させないとダ

メなんだけど……」

「……」ハムッ

「ちよつと、加賀さん!？」

「……」ジワッ

「だ、大丈夫？ もう普通のカレー作りましょう。ね？」

那珂「……」（見なかったことにしよう）

○規格外チーム

「カレーといったらゴールデンよね！」

「んー、わたしはどっちかというとバーモンドかなあ」

「そうなの？ じゃあ一緒に入れる？」

「こっちは辛口だよ？ 島風ちゃんは何口？」

「んーつとねえ、甘口！」

「二つ合わせれば中辛になるのかな……？ うん、そうしよ！」

「オツケイ！ それじゃ入れるねー！」ドボドボ

「あ、もう入れて大丈夫なの？ 具とかは？」

「もう切ったよ」

「流石、早いね。じゃあ雪風はお水に浸けた鶏肉切ってくね。あ、フライパンの用意してもらっていい?」

「もうできてるよー。そのお水ちゃんと砂糖とか塩入ってる?」

「大丈夫、ちゃんと入れたよ。ほら、お肉ぼよぼよ」

那珂「な、なんか意外に凄く手馴れててテキパキしてる……。これが規格外の駆逐艦の力……?」

○雷電響＋１チーム

雷「人参切ったわよ!」

暁「意外に手際いいわね……。普段は悪戯ばかりする癖に。電、油敷いた? もう炒めてる?」

電「バツチリなのです! 玉ねぎもお肉も良い感じなのです。人参、どうぞ!」

響「あ、人参入れるならこれも入れて。入れるの忘れてた」

雷「ん? なあにこれ?」

響「クミンシード。一応香辛料だよ。香り良いの」

暁「へえ、いいじゃない! これは出来が期待できるわね!」

雷「美味しそうね、早く食べたい!」

暁「審査してもらうまでダメよ！」

那珂「あ、こっちはこっちで結構良い感じ。これも美味しそうなのができそうだなあ」

○下妹チーム

「あ、姉さんチョコ使うんだ。それ、ダーク？」

「ええ、カカオ90%の苦ーいやつよ。これなら入れてもまろやかさが増すだけで変に甘くなったりしないものね」

「……ふふ」

「な、なに……？」

「やっぱりバレンタインだから？」

「……まあ、ね」カア

「うん、良いと思う！ あれ、このお肉……」

「ああ、マトンよ」

「マトン……羊？ 癖とか大丈夫かな？」

「相性がいい香辛料探しておいたから大丈夫よ。まあ今回はチョコも入れるから結構調整しいけど」

「……足柄姉さん、私頑張る！」

「いいじゃない。その意気をお願いね」ニコツ

那珂「おー、ここはここであらゆる凝つてる。どんなカレーができるか一番楽しみなのはここかもー！」

「なかなか良い感じに料理が進んでいる様ですね！ それではここで審査員の方にこの大会に対するメッセージを頂こうかと思えます。まずは長門さんお願いします！」

「うむ、皆がどんなカレーを作っても私は平らげて見せる。味は二の次だ！」キリツ

「ちゃんと審査員してくださいよ!? あ、えつと……つ、次は大佐、お願いします！」

「まあ頑張れ」ヒラヒラ

「……あ、ありがとうございます」（な、なんなのこの審査員の不安定さ……）

片ややる気はあるもの真面目に審査する気があるのか疑わしい者、片や真面目なのは間違いないがやる気があまり感じられない者。

霧島はそんな審査員二人の様子を見て大会の成り行きを不安に思うのだった。

第×30話 「カレー②」

「霧島さーん！ 皆料理できたみたいだよー！ 那珂ちゃん確認しましたー！」
「あ、そうですか。ありがとうございます。それでは試食といきましょう！各チーム、順番にここに運んできてください。まずは金剛チームからですね」

コトツ

「頑張って作りました！ 味は保証しますよ！」

「ほ、ホントよ？ ワタシも頑張って作りマシタ！ だから食べてミテ！」

「そうか、では頂くか」

「うむ！」

パクッ

「ん……美味しい」

「ほ、本当デスカ!?」 パアツ

「ああ、だが点数としては50点くらいだ。本当に普通のカレーだからな」

「エツ」 ガクッ

「……」（まあ本当に普通に作ったただけだしね。でも意外に厳しい採点だなあ。次の機会は本気で頑張ろう！）

がくりと項垂れる金剛に申し訳なきような顔をしながら、比叡は既にこの時今回の結果の挽回に静かに心の中で燃えていた。

「おかわりっ！」

「あなたはしっかり審査してください！ はい、金剛チームありがとうございました。次、一航戦チームお願いします！」

コトツ

「どうぞ」ニコツ

「……」ズーン

「頂きます」（加賀……？）

「いただきます！ もぐ……辛っ!？」

「……」ヒリヒリ

口に入れた瞬間、思わず水の入ったコップに手を伸ばしたくなる様な衝動に駆られる辛さに提督と長門は襲われた。

赤城はそれを予想していたらしく、辛さに口ごもる提督と長門を見て苦笑しながら

言った。

「あ、やっぱり？」 テヘッ

「……っ」 ビクッ

「赤城、これは？」

「えつと、ちよつとカレーの味で失敗してしまって、それを隠すために香辛料を沢山使い

まして……」

「なるほどな」

「……」 プルプル

「取り敢えず、30点といったところだ」

「……っ」 ジワッ

「まあ、同感だな。おかわり！」 ガツガツ

「ほんと、何でも食べますね」

「……」 グス

涙を滲ませて落ち込む加賀に提督は声を掛けた。

「加賀」

「……はい」

「一航戦のプライドに拘らずよく料理を出したな。立派だと思うぞ」 ナゲ

「た……いさ……。はい、次は本当に美味しいものを作ってみせます」
(そういう慰め方もあるのね。流石大佐)

赤城はそう提督が加賀を慰めるのを見て、彼の気の回し方に感心していた。

「はい、一航戦チームの方ありがとうございました。次の奮闘に期待ですね！ では次、

五航戦チーム尾根がします！」

コトツ

「どうぞ♪」ニコツ

「おお、これは……」ジュルツ

「美味しい、筈よ。うん、絶対に大丈夫よ！」

「ふむ、頂きます」

「美味しい！」

「挨拶くらいしてください」

食事の挨拶もせずいきなり歓喜の声をあげる長門に霧島は鋭く注意をした。

「うん、これは美味しいな」モグモグ

「本当ですか？ やったあ♪」ペアッ

「良かったあ……」ホッ

提督の言葉を聞いて翔鶴と瑞鶴は嬉しそうに胸を撫でおろした。

「パイナップルを入れたんだな。うん、まろやかな酸味が良い感じだ」

「うまいうまい！」ガツガツ

「……もういいです」

「ああ、これは80点くらいでもいいな」

「……それでも80点なのね。大佐、厳しくない？」

出来にそれなりに自信があつたのだろう。

提督の採点を聞いて瑞鶴は少し不満そうな顔をした。

「瑞鶴っ」

「翔鶴、いいんだ。まあ美味しいのは間違いない。だけど簡単に高い点数をあげてもお前達の後にもっと美味しいのがきたら採点の時に困るだろう？」

「……なあるほど。つまり80点以上は無いという事ね」ニヤツ

「良い自信だ」ニツ

「ず、瑞鶴……」アセアセ

「翔鶴、美味かつたぞ。機会があつたらまた食べたいくらいだ」

「え？ あ……よ、喜んで！」パアツ

「その時は私も呼んでくれないと嫌よ？ お願いね」

それは姉を独り占めされるかもしれないという焦りからか、それとも提督への恋心故か。

はつきりとは分からなかったが、瑞鶴は翔鶴の後に直ぐにそう続いて提督に言った。

「はい、五航戦チームの方ありがとうございます。はい、次は規格外チームの方です。どうぞー！」

コトツ

「もう！ 島風達が先に出したかったのに！」

「まあまあ」

「頂きます。ん……これは肉が凄く柔らかいんだな。うん、味も文句ない」モグモグ

「はあ、こんなにカレーが食べられるなんて幸せだなあ♪」モグモグ

「……長門さん、さり気なく何処かの空母のポジションも食べようとしてませんか？」

「どう？ 美味しかった？」

「ああ、美味かったぞ。70点だ」

「えー！?! 100点じゃないのー?! 頑張ったのにー！」

提督の採点に明らかに不満そうな声をあげる島風。

それに対して雪風は先程の翔鶴のカレーを見ていて思うところがあつたのか、そう気

にしてもいい様子だった。

「んー、まあこれくらいだよ島風ちゃん。翔鶴さん達の方が味は美味しそうだったし」

「ぶう、悔しい！」ムスツ

「島風ちゃん……」

「……だが、確かに料理ができたのはお前が一番早かったな」

「！ でしょ!? 島風と雪風ちゃん凄く頑張ったもん！」パアツ

（ええ？ そんなのでいいの!?!）

島風の態度の急変に雪風は危うくこけそうになった。

「今度は味も一番を目指せばいい。期待しているぞ島風」

「うん！ 任せておいて！」

「雪風、美味しかったぞ。今度はもっと美味しいのを頼む」

「は、はい！ 雪風頑張ります！ ありがとうございます、大佐！」パアツ

「はい、規格外チームの方がありがとうございます。残すところ後2組となりましたね
！ では、雷電響十一チームの方どうぞ！」

コトツ

暁「ぶ、ぶら……」ヒクツ

電「暁ちゃん、我慢なのです！」

響「興奮しちゃだめ」

雷「はい！ 雷達のカレーよ！ 食べてみて！」

「ん、頂きます。……ほう」

「おお、これは！」

暁達のカレーを口に含んで提督と長門はお互いに驚いたような表情をした。

暁「美味しいでしょ？」

雷「当然だわ！」

電「頑張ったのです！」

響「優勝は間違いないね」

「うん、これは本当に美味しいな。香辛料が良い感じだ。肉も柔らかい」

「お前達、凄いいじゃないか。お姉さん感動でおかわりしてしまうぞ」

「さつきから他のものもしてるじゃないですか」

「うん、点数は79点だな」

暁・雷「えー!?!」

電「はわわ……」

響「なんと」

翔鶴達のカレーに勝っている自身があつたらしい。

暁達は目に見えて残念そうな顔をした

「悪いな。カレーとしての出来は翔鶴達に匹敵するのは間違いないが、如何せん先に食べた翔鶴達の物の方が俺の好みだったんだ」

暁「そ、そんなあ」

雷「むう、これは痛いわね。そういえば大佐の好みを考えてなかったわ」

「ん？ 私好みは？」

「あなたはなんでも食べるじゃないですか」

響「だね」

電気「なのです！」

「む、これは手厳しいな。はは」

「そういう事だ。だが事実上は同格だと思っている。誇つていいぞ」

暁「むう……ちよつと納得いかないけど、まあいいわ。今度は大佐好みのカレーを作つてあげるね！」

「ああ、期待してるぞ」

「はい、暁ちゃん達ありがとうございます。さて、次で最後ですね……下妹チームどう

ぞー」

コトツ

「だから、その下妹ってやめてくれないかしら」

「はい。大佐どうぞ」

「ありがとうございます。頂きます」モグ

「お？ 何か匂いが翔鶴達の時と様に独特の……もぐ、ほほう」

「これは……美味しい」

「ほ、本当ですか!？」パアツ

今までも美味しいという言葉を提督は言ってきたが、今度のそれは他のものとは違う感じだった。

口に含んだ後、その美味しさからか少し口元が緩んでいるように見えた。

その言葉に羽黒は泣き出しそうな笑顔をし、足柄は素っ気ないながらも髪をかき上げながら恥ずかしそうにその賛辞を受けた。

「……そー ホツ

「具や辛さ、匂いもさることながら、このまろやかさ……チョコカ」

「まあね。でも甘くはないでしょ？ 普段はあまり使わないんだけど、今回は香辛料

も使ったの。調整に苦労しけど、その甲斐あったみたいね」

「90点」

「え？」

提督の突然の採点に霧島は驚いた顔をした。

だが一緒に並んで座っていた長門はその決定に異論はないようで、目を閉じて座りながら落ち着いた態度で言った。

「ん、まあ文句ない」

「90……？ え、それって大佐……！ ね、姉さん！」ウルツ

「……いいの？ 私達で？」

「先に頑張った奴らには悪いが、これは正直な気持ちだ。美味しいぞ」

「……そう。ありがとう」ニコツ

「おおっと、これは最後の最後で勝負が決まったようですね！ 優勝は下妹チーム、足柄さん達です！」

出場した選手の控え場所では、各々がその結果を感慨深げな様子で見つめていた。

翔鶴「ふう……残念。でも仕方ないわね」

瑞鶴「翔鶴姉、ちよつとあのカレー食べてみようよ。大佐好みの味見逃せないもの」

暁「むぐぐ……最後の最後で……」

響「薄々には感じてたけど、やっぱり足柄さんが一番の強敵だったね」

雷「やるわねー！ あ、作ったカレー皆に配り始めたわよ！」

電「研究なのです！ 皆行こう！」

加賀「……」モグモグ

赤城「加賀さん美味しい？ え？ 美味しいのが逆に辛い？ そう。ふふふっ」

島風「もぐもぐ……。はあ、こんな美味しいの早く作れるかなあ」

雪風「島風ちゃん早く作る必要はないよ。こういうのは『一番』を目指せばいいんだよ」

金剛「Oh！ delicious ネ！ こんないつか自分で作りたいなあ……」

比叡「お手伝いしますよ。お姉様！」（でもこれ本当に美味しい。これは研鑽に励まないといけないわね！）

第×31話 「断念」

「皆集まったか? ……よし、皆にひとつ報告がある」

突然の召集令に艦娘たちは緊張して固唾を飲んで提督の言葉を待った。

「今回の作戦は、我が基地においては誠に遺憾ながら現時点を以て降りる事となった」
艦娘達に動揺の声が広がる。

作戦は決して容易な内容ではなかったが、それでもその推移は順調だったはずだ。

作戦を降りる理由が思い当たらない者は多いらしく、動揺の波の後に続いて不満そうな声が上がりに始めた。

夕立「ちよ!? それってどういう事!? 夕立はまだやれるよ!」

不知火「不知火もです。まだ音を上げるには早いかと」

駆逐艦の中でも負けん気の強い二人が早速異議を唱えたところで、状況を落ち着いて見守っていた足柄と那智が口を開いた。

足柄「皆落ち着きなさい。別に大佐は私たちの力不足の所為とは言っていないじゃない」
那智「」

那智「足柄の言う通りだ。皆、ここは大佐の話の続きを聞くんだ。大佐、続きを」

「すまん。皆、さつき足柄が言ったように作戦を降りるのはお前たちの所為ではない。理由は別にある」

加賀「理由とは？」

「……正直言つて、資材がない」

ざわめきは一瞬で静まり返り、重い沈黙に包まれた。

その中で果敢にも多摩が原因の詳細を訊いてきた。

多摩「えと、それって……？」

「……弾薬が尽きた。0だ」

提督は苦渋に満ちた顔で本当に申し訳なきように答えた。

赤城「え……」

龍驤「全くないん？」

「そうだ。故に事実上作戦の続行は無理だと内外共に判断された」

再び重い沈黙に包まれた。

もう誰も声をあげる者はいなかった。

「皆、本当に申し訳ない。弾薬の不足には作戦開始前から対処に努めていたが、先日の作戦で全て消費し尽くしてしまつたんだ」

武蔵「ああ、もしかして前の支援砲撃か？」

「ああ。おかげであの作戦に関しては文句の付けようが無いほどの戦果を以て完遂できたが、俺たちの仕事もある意味完遂してしまったわけだ」

秋雲「結果的にはリタイアだけどねえ。まあ、復帰ができないくらい敵にやられちゃった所為とかよりはマシなんだけども」

「……重ね重ね申し訳ない」フカブカ

天龍「えちよ、や、やめろよ！ 大佐だつて頑張つたんだろ。そんなに頭下げる事ないつてー！」

麻耶「そうだぜ。大佐頭上げてくれよ。あたしはあんたを責める気なんて全くないぜ」

「……皆悪い。そういわけだから我が基地は暫く資材の備蓄に努める事になる。それまでは最低限演習と基地近海の警備は行うが、それ以外については、命令あるまで待機とする。以上、解散」

真つ先に不服の態度を取りそうな武闘派の意外な気遣いを有り難く思いつつ、提督はひとまず召集令の解除をし、解散を告げた。

「……」

秘書艦の望月を除き、全員が退出した後、提督は暫く皆が出て行つた扉を見つめてい

たと思つたら力が抜けた人形のようにソファーに倒れ込んだ。

バタン

「ちよ、ちよつと大丈夫なの？」

望月が珍しく慌てた様子で。パタパタと提督に駆け寄る。

「望月、すまん。本当にすまん……。暫くね……」

「え？ たい……あ……」

「……」 z z z

「あー、無くなつてたのは弾薬だけじゃなかつたんだね」

「……」

「……んしょつと」

提督が完睡を確認するとその頭を優しく持ち上げて自らの膝に乗せた。

「お疲れ様、大佐」 ナデナデ

「……」

「本当に誰も大佐の事を責めてる人なんていないからさ。今はゆっくり休んでよ。残りの仕事とかは皆と協力して片付けるからさ」

「ぐ……この書類は……今日ま……」

「夢の中でまで仕事すんなよ」 ペシッ

「……む……ぐ……」

「貧相な身体で悪いけどさ、これで我慢してね。ほら、」ナデナデ

コトツ

「んー?」

僅かな物音に気付いた望月が音がした方を見ると、そこにはこつそり残つて隠れていたらしい初雪の姿があつた。

「あ……」

「初雪、どしたの?」

初雪は見つかった事を気まずそうにしていたが、特に気にも留めない様子で声を掛け てきた望月の態度に安心した顔で聞いてきた。

「ん……気になつて……」

「そ、勘いいね。ドンピシャだよ」

「大佐、大丈夫?」

「寝てるけど、まあかなり無理してたつぽいね。これ暫く起きないよ」

「そうなの? じゃ、わたしも撫でも大丈夫?」

「大丈夫大丈夫。寧ろ撫でて悪い事ないって」

「そう? じゃあいい?」

「ん、大佐の代わりに許可するよー。ほらおいでよ」

「うん……」 テテツ

「わたしの隣に来るといいよ。そう、うん、背中に膝入れて……」

「……本当に寝てるね」

「だよ。ほら、起きない」 ペシペシ

「あ……だ、だめ……だ……じゃない？」

提督の額を軽く叩く望月に初雪は慌てる。

「殆ど力入れていないって。ほら初雪も撫でてみなよ」

「ん……」 ナデナデ

「ね？ 起きないでしょ？」

「うん……。凄く疲れてるみたい」

「まあね。多分皆の前で話してた時も結構キツかったんじゃない？」

「がんばり過ぎ……。っ……ひぐ」

「別に初雪が泣く事ないって。どっちかっていうと大佐が一人で頑張り過ぎた所為だよ」

「頼られなかった……。わたしたちの所為じゃない？」

「あー、なるほどねえ。そう考えるとちよつち悔しいかもねえ」

「悔しい?」

「うん。もうちよつと気が利いていれば大佐の助けになれたかもしれないしね。それに気付けなかつた事がちよつと悔しいかな」

「……」

「ま、次がんばろ?」

「……うん、絶対、やる」コク

初雪は、望月の言葉に貴重な真面目な顔でそう言つて頷いた。

ガチャ

「おーつす、大佐あ元氣ー?」

提作戦の続行断念の話の直後にも拘らず、相変わらずの明るい声で秋雲が提督を訪ねてきた。

「どうやら彼を慰めに来たらしい。」

「秋雲……」

「アッキー何しに来たの?」

「何しにっつてそりや愛しのダ……あー」

秋雲は望月達の膝で寝る提督を見て一瞬目を丸くした。

「そ、ダウン」

「大佐、疲れてたみたい……」

「寝てんの？ 落書きしても平気？」

「するの？ ダメだよ」

初雪は、秋雲の言葉を警戒して半身で提督の顔を覆って守るような格好をする。

「冗談だって、悪気はないよ。ん、ほら何もしないから秋雲さんも仲間に入れてー？」

「……じゃ、秋雲は大佐の腰のとこ……」

「さんきゆうつ、モツチーいい？」

「いいよ。あ……ダメかも」

快く承諾するかと思った望月は何かを思い出しように秋雲をジト目で見た。

秋雲はその意図が解らずパチパチと瞬きをする。

「へ？ なんで？」

「だって、アツキー大佐の腰でしょ？ なんか悪戯しそうじゃん」

「ええ？ 悪戯って……ああ、なるほど」ニヤリ

「？」キョトン

「ん、初雪は解らなくていいんだよ」ナデナデ

「え……なに……？」

「今度わたしの本見せてあげるよ」

「ちよつとー、あんまり刺激の強いのはダメだよー?」

「大丈夫だつてそこは秋雲さんちゃんと選ぶから。それに悪戯もしないから入れてつ」
「はいはい。どうぞ」

「ありー。よつと……ん」モゾモゾ

「大佐も幸せ者だねえ。女の子3人に膝布団してもらつてるんだからさあ」

「膝布団? おお、それは斬新だね。なんか閃きそう!」

「……さつきから秋雲は何を言つてるの……?」

「気にしなくていいよ。寧ろ知つたらダルいよ?」

「……じゃあいい」

「ああ、それつてちよつとひどくなーい?」

「どこがさ。さり気に基地で一番ある意味オトナな癖にー」

「え? 秋雲つて大人なの? 見た目あまりわたし達と変わらないのに?」

「やだなーユキユキそんな事信じちやだめだよー。望月も、わたしはちよつと耳年増
なだけだつてえ」

「どーだか。あ、さつきアツキー大佐のお尻触らなかつた?」

「え……」カア

「触ってないよ？ ん、なに、触りたいの？」

「無防備な人に手を出す程趣味悪くないです」

「……」カア

「ユキユキは可愛いなあもー♪」ギユツ

「んわ!?! ちよ、やめ……」

「ちよつと、あんまり騒いで大佐起こしちやだめだよ？」

「……」(寝れん……)

第×31話 「新人教師」

「練習巡洋艦香取です。提督、よろしくお願い致します」ペコリ

「練習巡洋艦……」

「はい、何分教練に重きを置いた艦なので、性能は残念ながら他の方々には劣ると思ひます。ですが、この香取、〃導くこと〃には殊の外自信があります。ですので、艦隊の指揮、作戦の補助の際にはどうぞご期待ください」

「成程、了解した。こちらこそ宜しく頼む。俺の事は大佐と、経緯や理由については他のやつらに訊いてくれ」

「准将殿でいらつしやるのに大佐ですか……。成程、敬愛からくる親愛の標のようなものですね。了解いたしました、大佐殿」

「理解が早くて助かる。君に割り当てた部屋へは後ほど案内する。それまでは基地の中を見学でもしていてくれ」

「お心遣い感謝致します。あの、大佐殿。早速で恐縮なのですがおひとつ伺いしたい事が……」

「ん？」

「あちらの、窓に寄りかかっているお三方はどうされたのですか？」

「ああ……」

提督は香取が気にした方向を少しバツが悪そうな顔で見た。

提督と香取のその視線の先には、利根と龍驤とビスマルクが揃って窓枠にもたれて気だるげに外を眺めていた。

利根「……ふあ」

龍驤「ふに……ああ……」

B i s 「……」プク

「あまり気にしないでいい。あいつらはその、何とか君を見つckerきつかけとなつた作戦の折にちよつと、な」

「え？ それでは、あの方たちがあのように無気力な様子なのは私にも原因が？」

「どうやら香取は提督の話を悪い様に受け取つたらしい。」

先程落ち着いた態度で丁寧に挨拶した時と変わって、眼鏡ごしに悲しそうな目をした。

「いや、違うんだ。あいつらがああなのは……」

提督は香取に説明した。

利根達があの様な状態になった理由を。

提督は疲労の眠りから覚めた後、部下たちの気遣いによって一度断念した作戦への復帰を決定した。

その甲斐あつて作戦は成功し、今日の前にいる香取の発見の成果まで挙げるといふ行幸を提督の基地にもたらした。

作戦の成功と新たな仲間を迎え入れた事によつて喜びに沸く艦娘たちであつたが、この時点である結末を完全に迎えた事を彼女たちはまだ知らなかつた。

そう、この成功によつて基地の弾薬を再び完全に消費し尽くし、その後控えていた最後の作戦に完全に参加できなくなつたのだ。

最後の作戦に参加できなかったのは、資材だけの問題ではなく時間の問題もあつた。

先の作戦が成功した時点で実は最後の作戦はその進行が最終段階に既に入っており、提督の基地の資材に再び余裕ができる頃には終わつてしまつていたのだ。

事実を知つた利根達は先の作戦の成功によつて戦意も高揚していただけあつて、その落胆ぶりは目に余るものであつた。

勿論、作戦に参加した皆が皆落胆したわけではなかつたが、艦隊の中でもとりわけ「精神年齢が若干幼い」者たちがこの様な状態になつたのである。

「……………とういうわけだ」

「成程……………。資材もそうですが、時間は本当にどうにもなりませんからね。仕方ない事だとは思いますが……………」チラ

「……………ふむ、早速〃導いて〃みるか?」

「お任せ頂けますか?では」ニコツ

香取は提督から下された初任務を笑顔で了解した。

「ぶう、納得いかないのじゃ。資材があれば吾輩達だって活躍して、作戦だつてもーっと早く終わつていのじゃっ」

「せやけなあ作戦に参加してた他の基地の人見たやろ? あの人もごつつまたかあ、みたいな顔しとつたで? ちゅーことはあ……………」

「それだけ危険で攻略が難しい戦場だつたつて事でしょ? 解つてるわよでも、でもさあ……………」

「あの、少し宜しいですか?」

「おお、これは香取殿。もう大佐への挨拶はよいのか?」

「ええ、おかげさまで。ここの基地は良いところみたいですね。ていと……………大佐殿の影響力がよく解ります」ニコツ

「なんや香取さん先生みたいやなあ。うち香取さんの事先生って言いたくなるわ」カラ
カラ

「そんな、私のような若輩が貴女方のような古強者を前にしていきなり先生だなんて……恐縮してしまいます。どうかそれはご容赦ください」

龍驤の言葉に恐縮する香取だったが、その様子を眺めていたビスマルクが彼女を励ます様にフオローをしてきた。

「経験と人格は別よ。龍驤の言いたい事、私も少し解るわ。香取さん、そこは素直に褒め言葉として受け取っても問題はないと思うわよ」

「ビスマルクさんまで……ありがとうございます」

「気にしないで。あ、それと私の事はここではマリアって呼んでもらえるかしら。理由は後で話すわ」

「あらビスマ……いえ、マリアさんも？ はい、ふふ、分かりました」

「ほう……香取さんには何やら底知れぬ包容力を感じるの。吾輩達の気だるさが幾分緩和された気がするぞで」

「あ、それなんか解るわー。なんかこう、ほわわーってなるー」

「ふむ、抽象的過ぎる表現なのに私も何となく理解できるわ。凄いわね香取さん」

「いえいえい、私なんて……。あ、これお近づきのしるしにどうぞ」

ドンツ

『清酒鬼〇ろし』

「」 「」

突如出された思わぬ歓迎の贈り物に利根達は揃って言葉を失ってその場に固まった。

「あら？ どうされました？」

「い、いや……そのお……。あ、あははあ、香取さん先生みたいやのに結構パンチ効いた冗談言うんやねえ」

「？ 冗談？」

「ふふ、そうね。まさか昼間に、それも大佐の執務室でお酒を出すなんて、なかなか考え付かないジョークだわ」

「ふむ、そうじゃの。この、時に和ませ、時に意表を突いて相手のペースを崩し自分の流れにする行動力、流石じゃ」

「いえ、冗談ではありませんよ。大佐には許可を頂いてますし」
「えっ」

香取の言葉に龍驤は驚きの声をあげた。

それはビスマルクも同じようで、龍驤ほどではないが彼女もどこか疑いの眼差しで香

取を見ながら言った。

「ほ、本当……？　だつて一応待機中つて言つても非番じゃないし、真昼間よ？」

「大佐が取り敢えず貴方方は今の段階では出撃する余裕はないから大丈夫と仰つていました」ニコツツ

「なんと……」

利根が意外な提督の判断に目を丸くして彼の方を見た。

それに対して提督は少し居心地が悪そうに軽く咳払いをしただけだった。

「……コホン」

「た、大佐も偶に思い切つた事やりよるな」

「でもお酒はねえ。私日本のお酒飲んだことないし」

「これは日本酒ですがドイツの方でも結構愛飲してる方はいるみたいですよ」

「え？　そうなの？　じゃあちよつと飲んでみようかしら……」

「はい、どうぞ。あ、龍驤さん達も飲みます？」トクトク

「酒に逃げてる気がせんでもないけど、まあ嫌いでもないなあ。もらうわっ」

「はい♪」トクトク

「むう、じゃあ吾輩も……」

「どうぞ。それじゃあ私も……」 トクトク

「杯は皆さんに行き渡りましたか？ それでは僭越ながら私が、この場を借りて皆さんと私の出合いを祝して……」

「「かんぱーい！」」

「ん……あ、美味しい」

ビスマルクは初めて飲んだ日本酒の柔らかな味と喉越しに感心した顔をした。

龍驤は幾分飲みなれた様子で杯をあおりながらビスマルクが羽目を外さない様に注意をする。

「ん……ふう、まあこれそんなに高い酒でもないしなあ。飲みやすいかもしれへんけど、でもあんまり飲むと悪酔いするで」

「ふふ、ごめんなさい。これ、隼鷹さんから飲みかけの物を譲ってもらったものでして」
そんな感じで皆が和気藹々とする中、利根は何故か一人だけ杯を持ったまま黙り込んでいた。

「……」

「ん？ 利根さんどうしたん？」

「利根にはこれ合わなかったのかしら？」

「……ない」

利根はぼつりと言った。

龍驤がそれを僅かに漏れ聞き、聞き返す。

「え？」

「……のじゃ」

「なに？」

「なんか甘いのじゃ！」

「「え？」」

龍驤とビスマルクは意外な利根の訴えに揃って驚いた。

「なんかこれ甘い、というかジュースっぽい気がするのだ」

「はあ？ 何言つてどれ……あ」チビ

「ん……あれ、これ」

「どうじゃ？」

「利根さんのこれ、なんかアレやろ。水に果物の果汁が入ったやつ」

「ああ、なんとかの天然水ってやつ？ 確かに、それっぽいわね」

「……香取殿？」

龍驤質の推理に利根は疑問に満ちた顔で香取を見る。

それに対して香取は特に気にする風もなく、落ち着いた様子で答えた。

「え？ あ、はい。それジューズですよ？」

「なんで吾輩だけ!？」

「ごめんなさい。何故か利根さんはお酒は飲んじやいけないような気がして」

「何故じゃ!？」 子供っぽいと言うなら龍驤の方がそうであろう!？」

「えと……龍驤さんは何と言うか……」

「んー？」 グビ

「妙に様になつてゐるわね……」

「ちよ、ちよつと待つのはじや！ な、なら胸はどうじや!？ 胸なら吾輩の方が大きいし大

人に見えるであろう!？」

予想外のところで自分と龍驤の間に看過できない差が作られそうなことに利根は

焦った。

龍驤はそれを面白そうモノを見つけたとばかりにニヤつきながら利根に話し掛けて

きた。

「ふっふっふー、と・ね・さあん」

「な、なんじや?」

「大人の価値つてのは別に胸だけで決まるものじやないんやでえ?」

「な、なんと!？」

「確かにうちは胸では殆どの娘に負けとるかもしれない。せやけどその品格は少なくとも利根さんよりかは大人つちゅーことや!」

「そ、そんな!」ガーン

「なるほど。つまり利根は私よりも下なのね」

龍驤だけでもその事実は受け入れ難いというのに、ここで更にビスマルクが参戦してきた。

「何故そうなるのじゃ! 龍驤には負けておるかもしれないぬがマリアは明らかに吾輩より下であろう!」

「なんですすつて!」

「なんじゃあ!」

ギャーワー

「あー、エライことになつてもーたな」

「そうですねえ。これは気だるげにしているわけにはいけませんね」

「え? あ……香取さんもしかして……?」

「ふふ、なんですか?」

柔らかに笑い返す香取に龍驤は、笑いは笑いでも乾いた笑顔でしか返す事できなかった。

「ああ……あはははあ、なんでもないです！」

「そうですか？ 何か気になりましたら遠慮なく仰つて下さいね。……そういうわけで大佐殿、任務完了しました」

「……なかなかの力技だったな」

提督は笑顔で任務の完了を伝える香取に、若干気圧されながらその功績を称えた。

第×32話 「雰囲気」

「山城」

「ん？ なーに」

「指輪だ。 いるか？」

「え？」

提督は引き出しから指輪が納められていると思われる小箱を出した。

「お前もう練度が最高になっただろう。 一応用意はしておいた」

「あ……（そっか、 もう私そこまで来てたんだ）」

「あくまでお前にその気があるなら、だ。 俺はお前が姉を慕っている事を知っている。 能力を上げる為と割り切るのも方法の一つだが……」

「……ん」 スツ

山城は恥ずかしそうに提督と視線を合わせない様にながら手を突き出した。

「ん？」

「……いい。 ちようだい」

「いいのか？」

「もう、何度も確認するほど信用できないんですか？」

「いや、そうじゃないが。なんか意外だな」

「……じゃあいい」ムスツ

山城は内心凄く舞い上がっていたがそれを悟られるのも癪なので少し突き放してみることにした。

勿論それは本心からの行動ではなく、あくまで提督を動揺させてその様を楽しもうと言う僅かな悪戯心だった。

だが……。

「ん、そうか。まあ気が向いたらいつでも言ってくれ」

「!？」

提督は動揺するどころかあっさりと言葉を落とす視線を落とし執務の続きを始めた。

山城は予想外過ぎるこの反応に言葉を出す事も出来ず目を白黒させる。

「ん？ どうした？」

「え……あ……」

「無理に受け取らなくていいと言ったろ？ これくらい想定してたさ」

「あう……」

「これと同じように艦娘同士がより絆を深め合う事によつて能力を向上させる仕組みが開発されればいいのだが。今度それとなく親父に伺つてみるか……」

「あ……………」

「山城、その書類取つてくれ。ん？ 山城？」

「……」

「どうしたんだ黙りこくつて」

「……………」

「……………」

俯いて黙りこくつていた山城が突如唇を震わせて涙を滲ませたので提督は慌てた。

その様こそ山城が見たかった提督の姿だったのだが、残念なことに今の彼女のにその余裕は無いようだった。

山城は視線を床に落としたまままるで悪戯をした子供が親にその事を謝るような態度でぼそぼそと話し始めた。

「嘘です……………」

「え？」

「嘘です。指輪欲しいです。ちようだい……………」

「……………俺はまた……………すまん」

とうとう涙を零しながらそう懇願してきた山城に、提督は自身の浅慮と気の効かなさを痛烈に反省しながら言った。

「ううん、私もさっきので自分のそういう所が凄く嫌になった……から」

「指輪、貰ってくれるか？」

「うん……ちようだい」コク

「ほら」スツ

「……あ、きれい……」ペアツ

少し回り道をしてしまったが、山城は掌に置かれた指輪の箱を開けて顔を輝かせた。

「一応、渡した指輪には全て名前を刻印してある」

「え？」

「知らなかったか？」

「え、どこ……ないですよ？」

「内側だ」

「内側？ 内側って……あ」

「な？」

確かに指輪の内側に文字が刻印してあった。

それは大抵の女性なら嬉しくもこそばゆく思える演出だった筈だが、提督のそれは一般的なケースからややズレていたようだった。

その証拠に文字を見つけた時の山城の目は一瞬喜色に染まったが、その後直ぐに「何だこれは？」という疑問に満ちた目が変わっていた。

「……ねえ」

「うん？」

「なんで漢字なんですか？」

指輪の内側には『山城』と、達筆な行書体でそう刻印されていた。

なまじその字が綺麗なせいで力強さすら感じた。

その雰囲気は明らかにケツコン指輪が本来放つ温かなものとは異なっている様に山城は感じた。

「その方がより自分の物だという気がしてな。それに内側だからこそ目立たないから良いと思ったんだ」

「妙な心遣いね……。というかこんな所に掘った職人も凄いですね。凄く字も綺麗」

「流石に掘るのは無理なんじゃないか？ 熱か何かを利用したんだろう」

「へえ……。だとしたら綺麗にできるものですねえ」

「そうだな」

「ね、はめてもいい？」

「その為の物だろう。いちいち許可を取る必要はない」

「……もうちよつと雰囲気考慮してくれてもいいじゃ……あ」

山城は提督のその素っ気ない態度と相変わらぬ妙なセンスに苦笑しながら指輪をはめようとしたが、何かを思いついたのかその手は指輪を摘まんだまま途中で止まった。

「ん？ どうした？」

「……」 スッ

「うん？」

先程と同じように手を突き出してきた山城を提督はその意図が解らず見返す。

すると山城は右手で指輪を持って提督に差し出してきた。

「はめて」

「俺が？」

「うん」

「なるほど……。分かった」

山城の意図を理解した提督は彼女から指輪を受け取り、その細い指に手を取りながら

そつとはめた。

スツ……。

「ん……ふふ♪」

「どうだ？」

「うん、良い感じよ♪」

「そうか」

「うん！」

「仕事しろよ」

「ちよつと眺めてからでいいですか？」

「ああ」

「ありがとう大佐。……本当に、ね」

子供のような純粋な笑顔で山城は本当に嬉しそうに提督にそう言った。

第×33話 「18禁」

「アダルトビデオ？」

『ああ、そう。そっちに届いたか？』

「お前から送り物なんて珍しいと思っただらなんてまたそんなものを……」

提督は荷封筒から取り出したコピーされたと思われるDVDディスクを見ながら呆れた声で言った。

『いやあ、正直言うとな。ただの興味本位だ。お前に見せたら面白そうだなってな』

「別にこの歳でそんなもの珍しいとも思わないが……」

『いやな？ ちよつとそれが内容が特殊なやつなんだよ』

「特殊？ ……俺はそっち方面の性癖はないぞ」

『何を想像したかは何となく判るから聞かないが、そういうんじゃない。どっちかというとなあ……うーん、ネタ系か』

「ネタ？ ……一応タイトルを教えてもらってもいいか？ ネットで情報を調べてみる。それで興味を持つ内容なら観るよ」

『ああ、いいぞ。別に隠すつもりはなかったしな。タイトルは……』

「ふむ……」

「大佐、どうしたんですか？」

「……ちよつと、な。友人にビデオを貰ったんが」

「え？ ビデオですか？ なんですか？ どんなビデオですか？」ワクワク

「訊いて後悔するなよ。アダルトビデオだ」

「えっ」

「……」

「え？」

青葉の二度の確認に、提督は居心地が悪そうに目を逸らしながら再び肯定した。

「本当だ」

「な、なんでまた……」

「何でもネタ的な意味で面白いと思つたから俺にも観て欲しいと思つたんだそうだ」

「アダルトビデオでネタって……。あ、もしかして人気のアニメのイメージ崩壊レベル

のパロディものとか？」

「俺も最初はそういうのやもつとアレなのは想像したんだがな」

「もつとアレ？」

「お前は知らなくてもいい。それで一応気になってタイトルを教えてもらって、それを調べてみたんだが」

「うんうん」

「……そこから先は秘密だ」

「えー！ なんですかそれ！ 青葉教えて欲しいです！」

「ダメだ。自己責任にしても俺は個人的に見せたいとは思えないものだったからだ」

「そこまで言っておいてそれはないですよ。ねえ教えて大佐！」

「ダメだ」

「教えて！」

「ダメだ」

「おし——」

「ダメだ」

「……むう」プクー

「拗ねてもダメだぞ」

「じゃあタイトルだけ教えて下さい！ それで自分で調べて観るかどうかは自分で判断

しますから！」

「ダメだ。逆に興味を持って結局観た所為でトラウマにでもなったら申し訳ないから

な」

「青葉は重巡ですからちよつとくらいの衝撃は大丈夫です！」

「それは物理的な衝撃の事だろう。精神的な衝撃にも強いとは限らない」

「青葉は心の装甲も頑丈です！ だから教えてくださいよ大佐あ」グイグイ

「やめろ、服を引つ張るな」

「おーしーえーてー！」グイグイ

「……じゃあさわりだけ見せてやる。それでダメそうならそれまでだ」

「やた！ て、大佐も一緒に観るんですか？ あ、アダルトビ……なのに？」ポツ

「まあ一応な」

「？」キョトン

そして数分後、提督は私室に青葉を連れて再生機の電源を入れた。

時刻はまだ昼頃。

成人向けの動画を見るには幾分場違いな時間帯に思えた。

「さて観るか」

「え、部屋は暗くしないんですか？」

「確かに人目は忍びたいところだが、これの場合な。まあ観れば解る」

「？」

提督が言っている意味が解らずキョトンとする青葉を尻目に彼は再生機の再生ボタンを押した。

「さて……」ポチツ

「わくわく♪」

一分後

「きやあああああ!!」

ガバツ

「っ……ぐ……」

「と、止めて下さい大佐あああ！ いやあああ」

「止める。止めるから離せ」

ピッ

「……ひっ、うえ……」ガタガタ

「だからダメだと言ったんだ」

「い、一体……なんなんですかアレ。アレのどこが……どこが……うえええん」

「……」ポンポン

「……大佐」

「ん？」

「人間って怖いですね……」

「……そうだな」

「あんなので興奮するなんて信じられません」

「中佐の奴も俺が軍人だから耐性があると判断した上で送ったんだろうな。まあ、確かに観れない事はなかったが、流石に気分は良くなかった」

「……作り物ですよね？」

「そこは俺が保証する。経験と医学的見地からある程度説明もしてやれる」

「そうですか……」 ホッ

「さて、もう昼休みも終わりだな。青葉、お前は飯とかもう済ませたのか？」

「あ、はい。大丈夫です。お仕事のお手伝いはできま……あ」

「？ どうした？」

「大佐あの……」 モジモジ

青葉は何に気付いたのか急にもじもじし始めた。

「うん？」

「と、トレイに行きたいです……」

「行つてくれればいいだろう」

「ひ、一人が怖い……」ガタガタ

「まだ昼間だぞ」

「で、でもお……」ジワツ

「俺じゃなくても他の奴に頼めばいいだろう。せめて同性にしろ」

「あ……」カア

（正常な思考ができない程動揺していたか）

「日向でも呼ぶか？」

「……」コクコク

「分かった」ピッ

「日向、いるか？ ああ、悪いが頼みが……」

「……全く。大佐も可哀そうな事をするな」

夜、青葉の面倒を見た日向は、その労を労う為に提督に晩酌に呼ばれていた。

ソファに腰掛けた日向はどことなく呆れ顔をして酒をゆつくりと喉に通しつつ言った。

「一応何回も止めたんだがな。相手が青葉ならある程度先に情報を出した上で判断させ

「の方が良かったと、今になって反省してる」

「確かにな。それで、私も青葉から聞いて調べたがまた随分趣味が悪い内容のアレだな」
「まあな」

「アレでは青葉もトラウマになっても仕方ないだろう」

「ああ、それに関しては本当に申し訳ないと思ってる」

「うん、そこは反省してもらわないとな。ん……それでな大佐」ジツ
グラスを口に運ぶ手を不意に止めて日向は提督を見つめた。

彼女の顔は酒が回った所為か少し赤くなっていたが、その目は焦点はハッキリとしており、提督をちゃんと捉えていた。

その態度はどことなく昼間の青葉のものと似ていた。

提督はそれを見て何となく予想を着きながらも敢えて確認した。

「どうした？」

「あ、いや……夜、だな」

「ん？ ああそうだな。それが？」

「……その……」

「お前、観たのか？」

「まあ……戦艦だし、大人っていうところを示したくてな」

「伊勢と一緒に観たのか？」

「うんまあ……伊勢は冒頭で泣きながら直ぐに出て行ったよ……」

「そうか、じゃあ殆ど一人で最後まで？」

「あ、ああ……」

「……大佐」

「……ん」

「そ、その頼みが……」

「……まあ夜中だしな。前で待つてるだけでいいか？」

「あ、ありがとう」

日向は青くなった顔で心から安心した顔で弱く笑った。

第×34話 「妹」

「少将殿の部下の方ですね。此の度はこちらから取引をお願いしたというのに、わざわざお越し頂き恐縮です。あなたは……」

提督は基地を訪ねてきた艦娘が初めて見る姿だったので、にその名前が分らなかつた。

「雲龍型航空母艦二番艦、天城でございます。准将殿、そのように畏まらないで下さい。こちらの提督の命令で貴方をお訪ねたとはいえ、私は艦娘ですから。敬語などは不要ですよ」

「いえ、そうはいきませんよ。例え艦娘であつたとしても貴方は私の部下ではありませんし、何よりこの基地の窮状を救つて頂けるのですから。この程度の敬意、当然ですよ。少なくとも私はそう思います」（雲龍型……。雲龍の妹か）

「あ……そ、そうですか。その……そういうこと、でしたら。えと、きよ、恐縮です」

天城は、気を遣わない様に申し出たにも関わらず、それでも敬意を払い、自分の事を大切な客人としてもてなす提督に、戸惑いながらもその気持ちを有り難く思った。

（この人が提督が慕う准将……。階級はこちらの提督が上だけ、彼がこの人の事を先

輩って呼ぶ理由が何となく解るな……」

「どうかされましたか？」

「あつ、い、いえ！ なんでもありません。失礼しました！」

「はは、こちらの基地は僻地ですからね。少将殿の所と比べれば見劣りしてしまうのは否めません。いや、お恥ずかしい」

「そ、そんな事！ 別にきにしてませんから。う、海が綺麗だし暖かくて良い所だと思いますよ！」アセアセ

「お氣遣い感謝します。それでは早速ですが取引を始めましょうか。先ずは交換する資材の確認をしましょう」

「あ、はい。えつと……こちらからは弾薬2万でしたによね」コトツ

天城は懐からナノ資材化した弾薬が入った小瓶を出し目の前のテーブルに置いた。

「確かに。ではこちらからは……」スツ

提督は天城が出した資材を確認すると、元々机の上に置いてあつた天城が出した物と同じ形をした瓶を彼女の前に差し出した。

「どうぞ、鋼材とボーキ、各2万です」

「……あの」

天城は、差し出された資材を直ぐに受け取ろうとはせずに、どこか窺いを立てるよう

な様子で提督に訊いた。

「本当にいいんですか？　こちらは弾薬2万だけなのにそれに対して2つも資材を交換して頂けるなんて。割に合わないのでは？」

「いえ、大丈夫です。本当に弾薬以外ではうちは困っていませんから。このくらいは余裕の内にも入らないくらいなんです。ですからどうぞ遠慮なく」

「そ、そうですか。では、その……ありがたく」（なんかこの基地、敵の襲撃があつても鋼材とボーキだけで艦娘の壁で凌げそうね……）

「もうお戻りになるんですか？　お茶くらいご馳走したかったんですが」

取引が終わつて間もなく自分の鎮守府に帰ろうとする天城に提督は港で声を掛けた。

「はい、慌ただしくてすいません。実は遠征の途中でこちらに寄つたものですから」

「ああ、なるほど」

「ご厚意は今回はお気持ちだけ頂きますね。ありがとうございます」

「いえ、お礼を言うのはこちらですよ。また機会がある時に都合が付けば、その時はゆっくりしていつて下さい」

「あ、ありがとうございます」（本当に礼儀正しい人。うちの提督もそうじゃないわけじゃないけど、どちらかというとあの人は『優しい人』って感じよね）

「それでは准将殿、これで失礼しますね」

「はい。少将殿によりしくお伝えください」

「了解しました。それでは……」

「……」ジーン

「ん？ どうしたんだ雲龍？」

取引が済んで部屋で一息着いていた提督は、扉の隙間からこちらを見つめていた雲龍の視線に気付いた。

「……もう、行った？」

「ん？ 行ったって、もしかしてさっきの天城か？」

「うん」コクッ

「ああ、さっき帰ったところだ。どうした？」

「……入っていい？」

「ん？ ああ、いいぞ」

「ありがとうございます。失礼します」

ガチャッ、トト……ポス

雲龍は入室の許可を貰うとそそくさとした仕草で提督が座るソファアの隣に座った。「どうした？」

「ちよつと、遊びに来たら彼女がいたから……」

「なんだ遠慮してたのか？ 妹分なら話したい事もあつただろうに」

「うんまあ……。でも彼女別の鎮守府の子でしょ？ だからあまり親しくなるのもちよつと、つて思つたの」

「そう気にする事か？」

「……何れうちにも天城が来たらちよつと気まずいじゃない？」

「それは……ふむ」

「ねえ」クイ

「ん？」

「期待して、待つてもいい？」

「ん？ ああ……そうだな。何れ、な。逢わせてみせる」

「そ……。ならいいの」ニコッ

ギユッ

「ん……」

提督はさり気なく自分の腕に抱き着いてきた雲龍に少し戸惑った顔を見せた。

雲龍はそんな彼を不思議そうな顔で見る。

「どうしたの？」

「いや、胸がな」

「抱き着きく過程で当たるとは仕方ないじゃない。それとも大佐は嫌？」

「お前が気にならないならいいが。その、やっぱり寂しかったか？」

「ここで天城を見た時はちよつとね。でも周りを見れば皆がいるし。それに」

「それに？」

「貴方もいるし」ギユッ

「……身に余る光栄だ」

提督は幸せそうに抱き着く雲龍に苦笑しながら言った。

第×35話 「発見」

「武蔵、あなたの船体が見つかったってニュースになってるわよ」

「なに？」

「フィリピンの方で見つかったんだって。ほら今丁度ニュースでやってるわよ」

「ほええ、頼みもしないのによく見つけるもんじゃのお」

「あ、中将殿」

「武蔵が見つかったって？」

「はい。それを今丁度テレビで放送しているようなので……あ、武蔵、出たわよ」

「ほう、傷だらけの私の体を見てさぞや当時の私の勇士に驚いているだろうな。どれ……」

武蔵はまんざらでもない顔でその事を放映中と思われるテレビの音に耳を傾け、映像を覗き込んだ。

『このバルブは何ですか？』

女性リポーターが一緒に出演してる専門家に、海底の船体の一部の画像を見ながら質

問した。

『船内にあつたと思われる物ですね。これが外に出てるといふ事は受けた攻撃の凄まじい衝撃がよく解りますね』

武蔵はテレビに映つた無残に放り出されたかつての自分の一部を見て言葉を失つた。

「」

『なるほどお。あ、この大きな穴は……?』

『それは第一主砲があつたと思われる個所だと思われます。これはその跡ですね』

『あ、これは船首ですね。菊花紋は……』

『外れてますね』

「……」 ヒクヒク

立て続けに流れる残骸の映像とそのリポートに武蔵は顔を引きつらせて黙って眺めていた。

「あ、何処に行くの?」

放送が終わつて間もなく、踵を返して部屋を出て行こうとした武蔵に彼女が気付いた。

「……ちよつと元帥殿の所に」 ムスッ

「あなたが？ 珍しいわね」

「……ちよつとな。すぐ戻る」

コンコン

「ん？ 誰だね？」

『武蔵です。元帥殿、今宜しいでしょうか？』

「武蔵？ ああ、構わないよ。入りなさい」

ガチャ

「失礼します」

「おや？ 君一人なのか、珍しいね。何か用かな？」

珍しそうにしながらも柔らかい笑顔で自分を迎えた元帥に、武蔵は真面目な顔で切り出した。

「単刀直入に申し上げます。一つ元帥殿にお願いしたい儀があつて参りました」

「ふむ？ 何かな？」

「総帥殿に会わせてください」

「……」 スツ

武蔵の申し出を不躰だと判断した紀伊が厳しい顔をして武蔵の前に出ようとしたが、

元帥がそれをやんわりと止めた。

「紀伊、いい、大丈夫だ。こほん、悪いね。それで、総帥に？ それはまた急だね。理由は何かかな？」

「元帥殿は最近、海外で私の当時の船体が見つかったという情報をご存知ですか？」

「ああ、知ってるよ。いやあ、今になって見つかるとはね。それも戦後70年の節目に……。何か感じ入るものがあるね」

「確かにそれは私も思います。ですが私は、その事で少し気になった事がありました」

「ふむ？」

「先程私はテレビでその様を見たのですが」

「うん」

「発見者が公開した動画に悪意を感じました」

「えっ」

「……」

予想もしない武蔵の言葉に元帥は目を丸くして彼女を見つめる。

対する武蔵は真面目な表情のままだ。

あくまで本気らしい。

そして先程元帥に止められた紀伊は一層武蔵を見る視線を厳しくした。

「何なのですかあの動画は。艦の全体像を移さずにあんな局所的な損傷個所ばかり映しては、帝国海軍の威信を傷つけているのと同じです。映すなら傷だらけの雄々しい艦全体にすべきです」

「え、いや。君は当時相当な規模の攻撃を受けて沈没したのだろうか？　なら艦だつてもな状態でないのは仕方ないんじゃないかな」

武蔵のそんな持論に元帥は少し動揺しながらも律儀に応対する。

「だとしたら文字だけでそれを伝えて、当時の映像資料を使うなりして感動的な演出を図れば良かったではありませんか」

「いや、それは流石にねつ造になりかねないから無理だろう……。大体発見したのは我々ではないし、軍事国家ではないのだからその発見に君の様な観点から口を出すわけにもいかんだろう」

「それは承知しています。ですから今回は、その……。こ、個人的なレベルで総帥殿には、発見した国に対して苦情とか……」

自分の最終的な願いの無謀さに気付いたのだろう。

話が核心に近づくにつれて言葉がどんどん尻すぼみになる。

「それはアメリカ政府に直接、という事かね」

「武蔵、貴女いい加減にしてください。自分が何を言っているのか解っているのですか

？ 子供じゃないのだから身をちゃんと弁えてください」

武蔵の無謀な訴えについてに我慢できなくなった紀伊が、珍しく怒りの感情を顔に出して彼女を注意する。

「き、紀伊！ と、年上に対してその言い方はなんだ！」

「紀伊、いい。私から言うから」

「閣下……」

「紀伊」

「……はい」

優しくもはつきりとした元帥の窘める言葉に、紀伊は不詳不詳といった態度で大人しく引き下がる。

彼はそれを確認すると佇まいを正して改めて武蔵の方を見ながら口を開いた。

「君の気持ちは解るよ？ でもね、先ず君が総帥に面会したいと願ひ出た事だが、それが容易ではない事くらい判るだろう？」

「そ、それは……ですから元帥殿にお願ひを……」

「うん、それは間違つてはないね。でもね、そういう重要なお願ひなら君の司令官である少将に先ず願ひ出るのが筋というものじゃないのかね？」

「う……」

「例え本部の司令官直属の部下とはいえ、艦娘である君の一存で総帥に会おうなどという願いは先ず叶わない。それは解っているね？」

「はい……」

「まあそこは、元帥である私にまでは君を含めて一部の専属艦にのみ、直接意見する権利を認められているという優遇で我慢してもらおうとして」

「はい……」

「だけどね、あんまり感情だけで動いては君の上司である少将に迷惑が掛かってしまうぞ？ 彼女に迷惑は掛けたくはないだろう？」

「う……は、はい……」

「うん、分かってくれたかな。では、今回の件については」

「はい、すいませんでした」

武蔵は元帥に諭されて反省したようで、シユンとした顔ですごすごとその場を立ち去ろうとした。

元帥はまだ話の続きがあるのか、後ろを向き始めた彼女を慌てた様子で止めた。

「ああいや、まあ総帥に会わせることは無理だが、その願い、一部だけが叶えてあげよう」

「え!？」

「閣下……?」

武蔵と紀伊は揃って目を丸くして驚いた顔をする。

しかしその心境は二人とも違うので紀伊は元帥の言葉に不安そうな顔をする。

対して武蔵は目を輝かせて元帥の前に進み出る。

「そ、それは本当ですか!?!」

「うん、まあ。取り敢えず君は発見者か、その彼の国であるアメリカに文句が言いたいのだろう?」

「は、はい!」

「ならその点だけ私になりて叶えてあげよう。幸いあつちの軍関係者に私の親しい知り合いがいてね。彼にちよつと連絡を取ってみよう」

「ぜ、是非お願いします!」

「あの……本当に大丈夫ですか?」ヒソ

「なに、心配はいらんよ。まあその結果が彼女の満足いくものになるものかは分からないがね」ヒソ

「え……?」

「あー、君かな? あ、 sorry. eng…… え? 日本語で? ああ、あり

がとう。実は君にちよつと頼みが……」

元帥は武蔵に提案してから直ぐにその知り合いに電話を掛け、軽く挨拶を済ませると早速本題に入り始めた。

「……武蔵、待たせたね。電話に出てくれるかな?」

「あ、はい! あの、電話の相手は? 私英語はあまり……」

「それは大丈夫だよ。彼女は一時期ここに研修に来てた事があつてね。その事もあつて日本語はそれなりに堪能だよ」

「彼女?」

「まあ出てみれば分かるよ」

「は、はあ……。ああ、もしも——」

『f a a a a a a a a a a a c k!!』

「!?!」

武蔵が電話に出た瞬間、電話口からいきなり英語の暴言が響く。

彼女はわけがわからずその大声から耳を咄嗟に守る事しか出来なかつた。

だが、電話口の相手はそんな事をお構いなしに立て続けに喋ってきた。

『てめえがムサシか!』 今日はまだ随分図々しい話があるみたいだな!』

「な、なんだ貴様は!? 初対面から失礼な!」

『顔なんて見えてねーじゃねーか! まあどんな顔してるかは簡単に想像付くけどよ。きつとキャンキャン吠えてやかましい犬っころみたいな面してるんだろーな』

「い、犬だと!? 貴様今私の事を犬だと言ったか!」

『どう聞いたって犬っころじゃねーか。キャンキャン喚いてうるせーんだよチワワが!』

「ち、チワ……」プルプル

どっちかというと大型犬が好きなのは武蔵は、自分の事を室内犬で可愛らしい外見のチワワと形容する相手に怒り、受話器を持つ手を震わせる。

『お? 傷ついたか? 泣くか?』ニヤニヤ

「大人しく聞いていれば貴様……お前は何者だ!? 先ず名を名乗らないか!」

『ああ? そういえば名前言ってなかったな。俺は戦艦ニュージャージーだ』
「なっ……なに?」

聞き覚えのある名前に武蔵はハツとした顔をする。

『アメリカの艦娘だよ。戦艦ニュージャージー、分かるか? 分かるよな? だってあんなとき俺もお前もいたんだからな』

「き、貴様……よくもぬけぬけと」

『もう戦争してねえのにいちいちつせえ事言うんじゃねーよ。だからチワワなんだよ
おめーは』

「ああ！ ま、またチワワと言ったな!？」

『うつせーなあ、えーとなんだっけ。ああ、うちがお前をボコボコにした事に文句がある
んだっけ?』

「な、なんだと！ 私はお前なんかに負けていない!」

『はあ？ 負けただろうが、俺たちに』

「私は認めん!」

『まあその気持ちも解るけどよ。つーか、その事についてはこっちも文句あるんだぜ?』
「何……? 勝ったお前たちが私に何の文句があるんと言うんだ。寄ってたかって私に
集中攻撃したくせに」

『それだよ。あの時な、おめー沈めるのに俺たちがどれだけ苦労したと思ってるんだ。あ
れだけボコボコにしてやったのにちんたら沈みやがってよ。おまけにその状態で反撃
までしてきやがって化物かよ』

「はあ!? 攻撃に対して反撃するのは当然だろう！ 大体沈むのが遅かったと言うが、
あれはお前たちの攻撃が稚拙だっただけだろう!」

『何言ってるんだよ、普通あれだけ蜂の巣にされりゃ機関部が爆発するか、浸水で直ぐに沈

むつつーの。なのに浸水してもなんか沈むのがおせーし、装甲は馬鹿の一つ覚えみたい
に厚いしょ。全くこっちの苦労も考えやがれ!」

「それは我が国の技術が優れていた証拠だろうが! 大体あの時に大和型がもつと揃っ
ていればお前たちになぞ負けなかつたわ!」

『資源貧国がナマ言つてんじゃねーよ! 大体航空火力も重視されていたあの時にまだ
大艦巨砲とか時代遅れだつーの』

「それは輸出を止めたお前の所為だろうが!」

『敵国に資源輸出する馬鹿がいるかよ! 馬鹿だろおめー、馬鹿だろ!』

ギャーギャー!

「……」

電話で喧嘩を始めた武蔵の様子を元帥は苦笑して見ていた。

部屋にその大音声に紀伊は溜息を付きながら、同じく苦笑しながら元帥を見て言っ
た。

「閣下、お見事です」

「ん? はは、まあこれで武蔵も少しは気が晴れるんじゃないかな」

元帥は時を超えてかつての敵と闘いを始めた武蔵を面白そうに見つめながら言った。

第×36話 「発見2（大佐のときの武蔵の場合）」

「武蔵、お前の当時の船体が見つかったら嬉しいぞ」

「んむ？」

「米国の資産家がフィリピン沖で見つけたらしい」

「へえ……」

自分の船体が見つかったという割には武蔵は気のない返事をした。

その顔もどこか他人事のように真顔だ。

提督はその反応を意外に思い彼女に訊いた。

「意外に反応が薄いんだな。特に感じ入る事はないか？」

「んー……確かに半世紀以上の時を経てまた世に知られる事は感慨深いとは思うんだが」

「どうした？」

「いや、何分昔の事だからな。それに当時私に乗艦していた幾千もの将兵たちの事を思うと、その船体は墓標の様なものだろう？ 彼らの鎮魂の為にもそのまま触れずに置いてくれた方がいいかな、とな」

「……なるほどな、至極理解できる」

「今はどういう状況なんだ？」

「発見後の動向についてか？ フィリピンと日本の政府が協議するかもしれないな」

「まさか引き上げ……いや、それは流石にないか」

「艦にまだ無傷の重油が残っていないとも言切れないからな。環境や遺族の意向なども考えると引き上げはまずないだろう」

「そっか、ならいいんだ」

「……」

「ん？ どうした？」

武蔵は自分事を見つめる提督の視線に気付いた。

「いや、さつき抱いた印象と重複するが、意外に大人しいんだな、とな」

「おいおい、私はそんなに感情的に見えるか？」

「そうは言わないが」

「ふふつ、まあ或いは他の基地や鎮守府の私なら違った反応があったかもしれないが、ここでの私はこの通りだ。それにな、一応さつき言った事以外にも大人しい理由はあるんだぞ」

「なんだ？」

「私がこの基地の仲間と大佐の事を滅法好いているからだ。この心地良さ、当時の記憶を思い出して感傷に浸るに勝る」

「ん……」

「なあ大佐」

自分の言葉に口をつぐんで納得した顔をする提督に、武蔵はそつと身を乗り出して甘えるような声で言った。

「うん？」

「撫でてくれ」

「どうした急に」

「いや、さつき自分で心地良いとか言ったら大佐に甘えて……構って欲しくなった」スリスリ

「……」

突然自分の胸に頬ずりを始めた武蔵を、提督は注意するでもなく何やら微妙な表情をして眺める。

その生暖かとも言える視線に武蔵は悪戯っぽく笑いながら訊く。

「もしかして今ちよつと犬っぽいとか思ったか？」

「いや……」

「いいんだ。大佐の前では、私は従順で大人しい女であり、犬で構わない」

「……」（それってメス犬……）

「お？ もしかして野生に還ってもいいの？」

上着を抜いて上半身をさらしただけの格好になろうとする武蔵を提督は直ぐに止めた。

「人の思考を読むな。いいわけないだろう、仕事 중이다」

「じゃ、撫でてくれ。まだしてもらってない」

「……ほら」 ナデナデ

「んー……♪」

「もういいか？」

「いや、今度は頬とか顎を撫でて」

「おい、それももう犬みたいじゃなくて犬と同じ扱いだぞ」

「今はそういう気分なんだ。そう扱われても悪い気はしない。なあ早く」

「いや、だから仕事……」

「私が見つかつた記念日という事でひとつ」

「そうきたか。よく口が回る」

「……舌も回したいな」

武蔵はそう言って小さな舌をチロリと出した。

どうやら目の前の犬はスキンシップとして接吻を求めている様だった。

「駄目だ」

「むう、ケチ」

「だらしのない顔してるぞ。自制できないならこれ以上はしてやらん」

「む、それは困る。分かったこれで最後でいいから早く頬とか顎も」ズイ

「……ちゃんと仕事しろよ」ナゲナゲ

「ふ……あう……んん……♪」ポー

「……これでいいか？」

「え？ ああ、うん」

「後は昼まで我慢しろ」

「なにつ、昼になったら続きをしてくれるのか？」

「飯まで我慢しろって事だ。飯を食ったら眠くなるだろう？ 特別にそのソファで

寝る事を許可してやる」

「待て、食ったら寝るってそれ犬だぞ？ 猫だぞ？ 豚だぞ？」

「豚と言うほど太つてもいないし、猫と言うほど小さくもないじゃないか。ならやつぱ

り……」

「私はシェパードかハスキーがいいな」

犬として扱われるなら自分好みの犬種で、という事なのだろう。

武蔵は自分から希望の犬種を提案した。

だが提督は、そこで敢えて彼女のその希望を逆手に取り、心理戦に持ち込むことによつて仕事を進める計画に出た。

「……ここは間を取つてチワワだな」

「なんでそうなる!?! それ、間を取るところか完全に通り過ぎて小型じゃないか!?!」

「仕事中にこんな甘い犬が軍用犬や狼犬なわけないだろう。明らかに室内犬だ」

「なあ!?!」

「勘に障つたか? ならそうじゃない事を今から証明してもらおうか」

「む……上手く誘導するものだ。ふふ、いいだろう、武蔵の力とくと見せてやろうじゃないか」

「何海の方を見ながら言っているんだ。お前が力を見せるのは白い海だ。ほら、早くこの紙の波を何とかしろ」

「はあ、書類仕事は苦手だ……」

「なら大和に代わるか?」

「やる!」

「その意気だ。頼むぞ」

提督は犬の様に態度をコロコロ変える武蔵を内心面白く思いながら、仕事に集中し始めた彼女に期待の言葉を掛けた。

第×37話 「故障」

「どうだ？ やつぱりどこか故障しているか？」

「ええ、正確には給湯器の故障です、ねこれは」

基地の外から戻ってきた明石は工具をしまいながら、提督に検査の結果を報告する。

最初は浴室を調べようと思ったが、提督に症状を聞いて直ぐに原因は外にあると予想したのが正解だったようだ。

「給湯器……」

「この土地はシャワーは浴びても湯に浸かる習慣はありませんからね。元々設えている給湯器もジャンクショップから見つけた様な物を急ごしらえで設置した物だったみたいです」

「なるほど」

「あ、因みに私たちの大浴場の物は流石にちゃんと日本から取り寄せたものみたいですね。元々基地の設備として計画されていたんでしよう」

「ふむ、俺の風呂は完全に個人的に用意してもらったものだったからな。元々はシャワー室だったものを無理を言っただけで変更してもらったんだ」

「あ、そうだったんですか。大佐お風呂好きなんですね」

「まあな」

「……となると暫くは風呂は使えそうもないな。業者を呼ぶか?」

「いえ、それには及びません。大佐に買ってきてもらった新しい工具もありますし、この程度私でも直せますよ。伊達に工作艦を名乗っていません」

「そいつは頼もしい、流石だな」

「ふふ、ありがとうございます。あ、それで大佐は直るまでの間お風呂はどうします?」

「これくらいなら……そうですね完璧に直すなら2日頂けたら大丈夫ですけど」

「3日で直せるのか?」

提督は思ったよりも早い復旧までに掛かる時間に驚いた。

「はい。復旧だけが目的なら今日中でOKですけど、今後も使用するのはただの修理じゃなくて改修しちゃった方が良いと思います。それなら3日ですね」

「今より良くなるのか?」

「ふふ、給湯器だけが良くなると思わないで下さいよ? 浴槽にバブルジェットも付け

て、断熱材もマシにして、浴室には……専用の水式乾燥機も付けちゃいますよ」

「そこまで……? 大丈夫なのか? 現地でそこまで器材用意できるとは思えないが」

「あ、大丈夫です。全部私が造りますから」

明石はあつけらかなと言いつつ切った。

そこまでの設備を充実させるといふのに、器材を用意するどころか一から造ってみせると断言する彼女の自信に提督は畏敬の念を覚えた。

「……そう、か」

「はい！」

「本当に頼もしいな。それで費用はどれくらい必要だ？ 報酬も含めた金額を提示してくれ」

「あ、費用についてはこの様子をもうちよつと調べてから後で書面で提出します。でも報酬はいらないですよ。これも仕事の内です」

「そももいかないだろう。元々俺の我儘で設えた物であるわけだし。それにこれは個人的依頼だ」

「そんなに気にしなくてもいいのに……。あ、じゃあ一つだけいいですか？」

「ああ、何でも言ってくれ」

提督の心遣いに少し困った顔で顎に手を当てて暫し考えた明石は、何か思いつたようだ。

浴槽を撫でながらこんな事を提案した。

「完成したら私もこのお風呂に入ってもいいですか？ 自分の腕を疑うわけじゃないん

ですけどテストはしておきたいんで」

「そんなのでいいのか？ 他にも飯や金銭とかでも」

「大丈夫ですって、それで構いません。大佐専用のお風呂を部下の私を使うという体験もなかなかできる事じゃないですから」

「……そうか。まあお前がそれでいいなら」（実は何人か既にいるんだよな。内容が内容だけに流石に言えないが）

「はい、それで結構です。あ、それでお風呂どうします？」

「そうだったな。まあ……海で」

「えっ」

提督の答えに明石は驚いて目を丸くする。

だが提督はそんな自分の考えに特に問題があるとは考えていないようで、明石の顔も気にする風もなく続けた。

「3日だろう？ それくらいなら汗を流すだけなら海でいいだろう」

「そんな！ それじゃあ髪とかバトバトになっちゃいますよ！」

「頭は後で水道水でも……」

「私たちがちゃんとしたお風呂に入ってるのに大佐にそんな真似させるわけにはいきませんよ！」

「しかし流石にここ土地には風呂はないしな。かと言って民家のシャワーを借りるわけにもいかないし」

「大浴場を使えばいいじゃないですか。入っている間『大佐入浴中』とか看板でも立てて」

「ふむ……」

「入渠設備も使おうと思えば使えると思いますが、大佐用にちよつと換装する必要もありますし。その手間を考えたら浴場を使ってもらうのが一番だと思いますよ」

「……なら、深夜寝る前に使わせてもらおうか」

「そうして下さい。その時間帯なら誰も入る人はいないと思います。立て看板何て直ぐにご用意しますよ」

「本当に悪いな。看板に貼る紙くらいはこっちで用意しておく」

「分かりました」

「では、頼むな」

「はい！ お任せください！」

それから数時間後、時刻は23時を回った辺り、執務室にとある駆逐艦が三人、提督に呼び出され部屋に揃っていた。

「若葉、朝潮、野分。こんな夜遅くに来てもらって悪いな。実は三人に頼みたい事があるんだ」

「大佐、遠慮何て無用だ。いつでもこんな風に呼んでくれて構わない」

「私もです！　朝潮、大佐の命令ならいつでも応える覚悟があります！」

「み、皆凄い気合いね……。あ、大佐私も、遠慮しなくていいですから」

「お前たち、悪いな。お前たちに頼みたいのは簡単な事だ。俺が風呂に入っている間、誰も入らない様に見張っていて欲しい」

「……え？」

「はい？」

「え……」

予想外の提督の命令に三人は揃って鳩が豆鉄砲を食らったような顔をする。

提督はその反応を予め予想していたかのように、ちよつと申し訳なさそうに苦笑しながら続けた。

「まあそういう顔をするような。だが念の為だ。立て看板も用意した、これを使つてく

れ」 トンツ

『何人の立ち入りを禁ず』

「ず、随分物々しい……？」

「普通に『大佐入浴中』でも良かったのではなないでしょうか？」

「な、なんか凄く拒絶の雰囲気を感じますね」

「間違っても誰かが入らないようにする為だ。こうしてハッキリと示しておけば多少危ない連中も諦めるだろう。加えてお前たちに見張りをしてもらえばもう万全と言える」

「……なるほど、了解した。大佐、この若葉に任せてくれ」

「朝潮も了解です。しっかりと勤めを果たしてみせます」

「同じく。ちゃんと注意して見ておきますね」

「悪いな。この仕事は俺の個人的な依頼になる。果たしてくれば後でお礼をしよう」

「お礼など不要だ。大佐、私はそんな物がなくてもちゃんと任務を果たせるぞ」

「私事です。お礼何て気を遣わないで下さい」

「まあ……うん、大丈夫よ」

「はは、そんなに大したものじゃないからそう気を張るな。礼と言うのは明日にでも菓子を用意してお前達をお茶に招待するくらいだ」

「お菓子……？ やる気……でた。頑張る！」

「お茶なんて……でも、光栄です！ 楽しみですよ！」

「お茶ですか……うん、私も楽しみ」

「味は約束する。それじゃあ頼むな」

「了解した!」「はい!」「分かりました」

一見真面目な三人だが、お菓子に反応するという駆逐艦らしい子供つばさを可愛く感じながら提督は、浴室へと向かっていった。

第×38話 「脅威」

「ああ、摩耶さんお風呂に行ったんじやなかったの？」

「おう、龍田。やな、行ったんだけど丁度大佐が入ってさ」

「……大佐が？」

「ん？ おめー知らなかったのか。大佐、今、自分の部屋の風呂が壊れててあたしらの浴場使ってるんだぜ。ま、大佐も不便だよな。このくらいの時間しか落ち着いて入れないし」

「……ふーん……」

スタスタ

聞くが早いか、龍田は摩耶の話に軽く理解を示すと彼女が戻ってきた浴場がある道へ足早に進んで行こうする。

摩耶はなんとなくそんな龍田が纏っていた雰囲気になり、それを止めた。

「ん？ おい、どこに行くんだ？」

「え？ 何ってお風呂ですけど？」

「え、はあ!? いやいや、お前確か夕方くらいに入ってたよな？ ていうか大佐が今風呂

に入ってるって言ったろ？」

「……部下として提督のお背中を流しにいくだけですよお。ご・ほ・う・しです」

「ご、ご奉仕って、お、お前なあ……」カア

「大丈夫です。なにもやましいことなんてしないでですよお♪」

(その割には上気気味で目が楽しそうじゃねーか……)

「まあ待てよ。行っても無駄だぜ。入り口には大佐に見張り頼まれた野分達がいるからよ」

「……見張りだなんて、大佐は私達のこと信用してないのかしら」

「警戒してるから立ててるんだろが、ていうかお前だけだ。あたしも含めるな」

「……まあいいです。野分ちゃん達だったらちゃんと丁寧に「お願い」すれば解つてくれると思いますしい」

「脅す気か？」

「ふふ、お願いですよ。お・ね・が・い♪ それじゃ、麻耶さん、失礼しますねえ」ヒラヒラ

「……」(行つちまった。……アイツに頼んでみるか。アイツなら真つ向から龍田に素で向かい合えるだろ)

摩耶は去りゆく龍田の背中を眺めながらある人物に野分達の救援と援護をお願いする事にした。

くその頃の大佐

「……」(……流石に広いな。そして誰もいないから解放感が堪らない)

提督は湯気が漂う広い浴場に一人立ちながら、一通りその様子を眺めていた。

そしてその浴場の雰囲気は彼にある考えを思い付かせる。

「……」(これはあまりにも気持ち良くて浴槽で寝てしま……いや、寝てみるのもいいか。若葉達には待たせた分、なにかお礼をしよう)

く見張りサイド

野分「摩耶さんに悪い事したかな」

朝潮「今回は仕方ないよ。それに、ここが使えなくても入渠用の浴槽使えば個人ならゆつくりできると思うから、摩耶さんならそれくらい納得すると思うよ」

若葉「うん、私もそう思う。摩耶さんなら大丈夫だ」

野分達は三人可愛く浴場の入り口の壁に並んで座り、提督が用意した看板と一緒にちゃんと見張りを続けていた。

野分「うん、そうね。それにしても、結構人断ったね」

朝潮「それは同意ね。この時間帯でも結構入りに来る人いたね」

野分「まあ、隼鷹さんや長門さんがお酒持ちながら来たのは意外でもなかったけどね」

若葉「ああまあ、あれは……」

若葉はどこか呆れたような心配するような顔をする。

野分「意外だったのはその後ろに神通さんも楽しそうに着いてきてた事じゃない？
あれは本当に意外だったよ」

朝潮「ああ、うん。隼鷹さん達は別に気にならなかったけど、神通さんには悪い事した気がしたよね。ちよつと残念そうにも見えたし」

野分「……大佐がお風呂からあがったら教えてあげない？」

若葉「うむ、それは良い考えだ。私は賛成だ」

朝潮「私も。……一応、長門さん達にも教えないといけないよね」

若葉「それはまあ……攫われないように注意しなければ、な」

野分「えっ、攫われるの!？」

野分は物騒な言葉に驚いた顔をする。

朝潮「あ、野分は知らなかった？ 結構油断したらヌイグルミ代わりにされるのよ？」

野分「ぬ、ヌイグルミ……」

若葉「因みに隼鷹さんも油断ならない。私は前に晩酌中に尋ねた為にあの人の酒気だけで頭がクラクラしてしまった」

朝潮の注意喚起に続いて、若葉がその時を思い出した所為か冷汗を垂らしながら、更に隼鷹についても注意を促す。

野分「え、若葉お酒飲めないの？」

若葉「……酎ハイなら。ジューズみたいだし……」

若葉はお酒に強くない事を気にしているのか、俯き加減で恥ずかしそうに答えた。

朝潮「あ、それ解る。私も初めは酎ハイだったよ」

若葉「初めは？　じゃあ今は？」

朝潮「ん、今も基本酎ハイよ。それ以外のは付き合いで飲むときだけ」

若葉「そうか……」ホッ

自分と一緒にのお酒を好む人がいる。

その事実だけで若葉は少し安心した気持ちになった。

朝潮「野分は飲めるの？」

野分「ん？　私？　私は飲めるよ。基本的に朝潮と一緒に酎ハイしか飲まないけど、

私の場合は付き合いでないとお酒はあまり飲まないかな」

若葉「なるほど。では野分は私と同じで酎ハイしか飲まないんだな」

野分「そうよ。仲間ね」ニコッ

若葉「……うん！」パアッ

朝潮「……あの、私も一応お酒は酎ハイ派だからね？」

若葉「解っている。朝潮も勿論私たちの仲間だ」

野分「ね、今度飲み会しない？ あわよくば大佐とか誘ってさ」

若葉「ほう、いいな」

朝潮「大佐付き合ってくれるかな」

若葉「2月から3月の間はバレンタインとホワイトデーの期間とされているから、大

佐もきつと付き合ってくれる。間違いない」

朝潮「そう？ なら、うん。いいかもね」

野分「だね。大佐がお風呂から出たら早速訊いてみようよ」

キャツキャツ、ワイワイ

「……目標かくにん。さて、どう攻め……お願いしようかなあ」

ワイワイとささやかな楽しみに湧く駆逐艦たちに、とある脅威が静かに忍び寄ろうと
していた。

第×39話 「対峙2」

「あらあ、あなた達、こんな所でこんな時間に何をしているの？」

朝潮 「あ、龍田さん」

野分 「大佐が入浴している間誰かが間違つて入らな用に番をしているんです」

若葉 「そういう事だ……です。龍田さんもお風呂？　なら今は入れないですよ」

「へえ、そうなんだあ。それじゃ仕方ないわねえ」

スタスタ

野分 「えつ、えつ。ちよ、ちよつと待つてください！　大佐が入っているからダメですよ！」

野分は自分達の話聞いた直後に浴場へと歩を進める龍田を慌てて止める。

だが龍田は特に気にもしてない様子でこう答えた。

「大丈夫よお。別に入りに行くわけじゃないからあ」

若葉 「入らないのなら何をしに……？」

「大佐のお背中を流しによお。部下として大佐の労を労いに行くの。ご奉仕よ、ご・ほ・う・し」

朝潮「ご奉仕……」

「そう、だから問題ないでしょう？ 通っていいわよねえ？」ニコオ

若葉「つ……。だ、だけど……大佐は男なので……」

朝潮「そ、そうですよ。龍田さんは恥ずかしくないんですか？」

「ん？ そうねえ」

スルツ

野分・朝潮・若葉「!？」

朝潮「な、なにこんな所で脱ぎ始めてるんですか!？」

今度は朝潮が目の前でパジャマのボタンを外して上の服を脱ぎ始めた龍田を慌てて止める。

しかしそれでも龍田はいつも変わらない調子でやんわりと答える。

「命を預ける上司だもの。私は大佐になら裸を見られても他の人よりかは気にしないわあ。これはそのしよ・う・こ」

朝潮「証拠って……」

「あなた達にはできないでしょお？ だから私が代わりに、ね？」

若葉「あ、あ……」

朝潮（ど、どうしよう……!）

野分（私たちじゃ断り切れない……!）

「龍田さん」

朝潮達が龍田の迫力に押し負ける瞬間、突如として凜とした声が救いの声となって響いた。

彼女達はそのよく澄んで通った声にハツとなって声が聞こえた方を振り向く。

野分・朝潮・若葉「!」

「……香取さん?」

龍田は朝潮達を気圧していた笑顔を収め、一転して真面目な顔になった。

細めた目の彼女の視線の先には、柔かい笑みを浮かべながら腕を組んで立っている香取の姿あった。

朝潮はその頼もしい救いの主の姿を見て安心感から顔を輝かせる。

若葉と野分もそれに続くようにホツとした表情を見せていた。

「失礼、偶然見かけたものですから」

朝潮（香取さん……!）パアッ

「……偶然、ねえ……。それで、何かしらあ?」

「んっ、いえ、対した事ではありませんが、ご奉仕とは言え“今”大佐の下に行くのは如

何と思うのですか？」

「大丈夫よお。大佐にはちゃんと了解を得るからあ」

「そういう問題ではありませんよ」

「……どういふ事かしらあ？」

野分・朝潮・若葉「……！」ゾツ

香取の問い掛けをのらりくらりといった態度で躲す龍田だったが、それに対抗する様に一歩も引かずに尚も彼女を質そうとする香取の態度に龍田は初めて少し険のある顔で冷たい一瞥をくれた。

その迫力に駆逐艦の三人は揃って縮こまる。

「誤解しないでくださいね。貴女の、大佐に対する敬愛の念に関しては私も敬意を表しています。ですが、今この場においてはその示し方に問題があると思うのです」

「何が、かしら？」

「如何に大佐のお背中をお流しするだけとはいえ、このような時間にこの子達の前で、そのような内容の言動を発するというのは、風紀を重んじる大佐のこの基地に置いて、その意に反しかねない些か問題のある行為ではないでしょうか？」

「……」

香取の率直な指摘に、龍田はいよいよ無表情になつて無言のまま香取を見返す。

その様子からは怒っているのか香取の言葉を考慮しているのかは判断がつかなかったが、少なくともその場にいた朝潮達には冗談でも彼女の機嫌が良さそうには見えなかった。

香取はそんな龍田の雰囲気にも臆することなく、先程と変わらない穏やかな調子で更に続けた。

「重ねて申し上げますが、誤解しないでください。大佐も殿方、私達が身をもつて……艶のある奉仕をするというのも一興。私は貴方にそれができないなどは微塵も思っておりませんし、必要とあらば私とて所望頂ければそれにお応えする用意はできております」

「……『用意』ね。もし、そこで『覚悟』とか言つてたら、ちよつと怒つてたかもねえ。大佐はそんな人じゃないもの」

「愚問です。それくらいのこと、私もこの基地に迎え入れて頂いた日から理解しております」

「……そ」

「龍田さん」

「なあに？」

「いろいろ回りくどい言い方をしてしまいましたが、率直に申します。ここは、私の顔を立てて頂けないでしょうか？」

「ん……………」

「……………」

野分・朝潮・若葉「……………」ハラハラ

笑顔の香取、そして龍田ももういつもの顔に戻っていたが、それでも二人が対峙しているその場の雰囲気は朝潮達にとってはまだピリピリしたものを感じた。

「……………」ふふ、分かったわ。貴女にそこまで言われると、ね。私もつまらない事で貴女との間に波風なんて立てたくないもの」

張りつめた雰囲気解いてきた龍田の方からだった。

「ご承知頂きありがとうございます」ペコッ

「やだあ、頭なんて下げなくていいわよ。香取さんは何も悪くないわあ。むしろ、気を遣ってくれてありがとう、ね？」

「いえ、とんでもございません。こちらこそ不躰な物言い失礼致しました」

「……………」ジッ

「……………」ジッ

「……………」

「それじゃ、私は戻るわね。野分ちゃん達もごめんなさいね？ 怖かったでしょ？」

野分 「い、いえー！」ブンブン

朝潮 「わ、私は大丈夫です！」

若葉 「若葉も……！」

「ふふ、そう？ お勤めご苦労様ね。それじゃあ、ね。バイバイ」フリフリ

野分・朝潮・若葉 「……」

去りゆく龍田の背中がようやく見えなくなると三人は揃って脱力する様にその場へへたりこむ。

そんな彼女達に香取が笑いながら声を掛けた。

野分・朝潮・若葉 「……はあ〜」グテー

「ふふ、三人ともよく頑張ったわね」ニコッ

野分 「香取さん……助かりましたあ……」

朝潮 「本当に……ありがとうございます！」

若葉 「礼を言います！」

「大したことはしてないわ。丁寧をお願いしただけよ」

朝潮 「それでも、あの龍田さんにあんなふうにならなくていいです！」

若葉 「間違いない。香取さんは凄いなと思う」

野分「確かにね。流石香取さんです」

「まあ、ふふ……。この子達は……。でもね」ジツ

口々に自分を称賛する三人の言葉に嬉しそうな顔をする香取だったが、ふと真面目な顔になるとメガネの奥から鋭い視線を向けた。

朝潮達はその視線にビクリと反応し、思わず姿勢を正して揃って直立の態勢をとる。

朝潮・若葉・野分「！」ビクッ

「いくら怖いと言つても最初からそんな風に身構えていては相手も気を悪くするのよ？ さつき見ていたから解ると思うけど、龍田さんだつてちゃんと説明すれば解つてくれます。だからあなた達も筋が通つた事ならちゃんと頭から怖がらずに言うのよ？」

朝潮・若葉・野分「は、はい！」

「うん、良い返事ね。それじゃ、私も戻るけど、あなた達もお勤めを追えたら直ぐに部屋に戻るのよ？」

朝潮「はい、分かりました！」

若葉「了解！」

野分「はい！」

「ふふ、おやすみなさい」

カツカツカツ……

香取を見送り、ようやく再び三人だけに戻った事によって緊張が解けた朝潮と野分はお互いに苦笑いをしながら息を吐いた。

朝潮「……はあ」

野分「はは、ちよつと疲れたね」

若葉「……」

朝潮「？ 若葉、どうしたの？」

平穩を噛み締めていた自分達に対して先程から固い雰囲気を変えずに、一人黙っていた若葉に朝潮は気付いた。

若葉「いや、大佐、お風呂に入ってからちよつと時間経つてないか？」

野分「え？ んー……そうね、30分くらいに……なる、かな？」

野分は浴場の入り口の真上の壁に駆けられた時計を見て大凡の経過時間を計算した。

朝潮はその言葉に然程心配していない様子でこう言った。

朝潮「それくらい？ 大佐って風呂好きだから長風呂なんじゃ？」

若葉「……少し、様子を見てくる」

若葉はそんなやや樂觀的な二人より事態を深刻に考えている様だった。

その意外な言葉に朝潮と野分は驚きの声をあげる。

朝潮・野分「えっ」

若葉「大丈夫だ、もんだ……こういう時は気にする事じゃない」

野分「それはそうだけど……」

朝潮「なら、私が」

野分・若葉「えっ」

若葉に続いて様子見に立候補した朝潮に今度は若葉と野分が揃って驚きの声をあげる。

それに対して朝潮は少し顔を赤らめて恥ずかしそうにしながらも聞き返してきた。

朝潮「……何か？」

野分「あ、いや……それなら私でもいいんじゃない？」

朝潮・若葉「えっ」

野分「……なに？」

今度は野分が意外な事を言ってきた。

彼女も少し恥ずかしそうにしながらも、その役目には並々ならぬ関心があるようだ。た。

朝潮・野分・若葉「……」

若葉「一緒に行こうか」

若葉がポツリと言った。

朝潮「そうね」

野分「それが一番ね」

三人は気まずい沈黙の下で、結局考え得る最善の選択を導き出したようだった。

若葉「……」ゴソゴソ

野分「え、ふ、服脱ぐの？」

脱衣所で服を脱ぎ始めた若葉に野分がぎよつとして言った。

だが若葉は特に気にした様子もなく寧ろ野分の言葉に不思議そうな顔で答えた。

若葉「上だけだ。濡れたら困るだろ？」

朝潮「あ、うん……」（若葉、素だ）

野分「……そう……ね」ゴソゴソ

若葉「では、行こうか」

朝潮「うん！」

野分「いいわよ！」

三人揃って下着姿となった幼い少女達が、決意を込めた顔で浴室の扉へと向かった。

第×40話 「張り合い」 R—15

「大佐……いるか？」ガラッ

野分「うわっ、湯気が多くてあまり見えない」

朝潮「足元気を付けてね。あ……あれ」

若葉「ん？」

朝潮「あれ、湯船よね。人影みたいなのが見える。ほら」

朝潮が言った通り、彼女が指を指した方向に湯気の中に薄らと人の影が見えた。

野分「あ、本当だ。あの……た、大佐ー！」

若葉「申し訳ない、少々入浴が長く思えたので様子を見に……。問題なら直ぐにもど
……ん？」

野分「ねえ、あれ……」

湯気をかき分けて浴槽に近寄った時、若葉は異変に気付いた。

湯船に浸かっていた提督が彼女達の声に反応せず、ぐったりしていたのだ。

朝潮「……！ 大佐！」タッ

野分「ねえ、大丈夫!? 大佐どうかしたの!？」

若葉「待て、焦っちゃだめだ。……ん、大丈夫脈は、ある」

朝潮「寝てる……？ ううん、これだけ私達の声近くにあるのに、反応もないし……」

野分「のぼせた？」

若葉「多分」

野分「取り敢えず上げよう。このままじゃ危ないよ」

朝潮「そうだね。若葉、そっちの腕持って。野分は身体が出たら腰を支えて」

若葉「了解した」

野分「分かったわ」

ざばあつ

幼い外見とは言え、駆逐艦でも艦娘。

それも三人も揃えば大の男を浴槽から引き上げる事など簡単だった。

「……」

朝潮「大佐！」

若葉「脱衣所に運ぼう。ひとまず身体を冷まさないと」

野分「そうね」

「……」

脱衣所のベンチに寝かされても提督はまだ意識を失ったままだった。

本人は睡眠中に意識を失ったので苦悶の表情こそなかったが、その身体はのぼせたことによつてすっかり火照っていた。

朝潮は提督の体温を下げる為に野分と若葉に水タオルなどを用意させて持つて来させる。

朝潮「タオルを身体にかけて。手足は出して、足は水面気に水を張つて、そう、浸けてあげて」

野分「水タオルはおでこと……首？」

朝潮「脇の辺りも良いはず。足は……水に浸かつてるから腿の辺りでいいんじゃない？」

野分「分かった。……あつ」

提督の脚にタオルを乗せようとした野分だったが、その時にあるモノに気付いて真っ赤になつて顔を伏せた。

若葉「どうした？」

野分「あ、いや……うう……」カア

朝潮「どうし……あ……」カア

野分が見たモノに朝潮も気付き、揃って真つ赤になる。

若葉は二人ほど動揺していなかったが気まずそうに視線を逸らしていた。

若葉「……」（夢中で気付かなかった。これが大佐の……）カアア

野分「……あ、ごめん。取り敢えず」

野分が何とか気を取り直してなるべく目を逸らしながらタオルを置こうとしたが、それを何故か若葉が突然止めた。

若葉「待て」

野分「え？」

若葉「そ、そこは私がやろうか？」

野分「え」

朝潮「……む」

野分「い、いや、いいよ。これくらいは私が」

朝潮「顔真つ赤だよ？ 恥ずかしいなら代わるって」

朝潮の気遣いの言葉に何故か野分は言葉にできない対抗心が湧いた。

それを自覚すると今度はそれが何とか自分がその役目を担いたいという欲求へと心の中で変わった。

野分「大丈夫よ。やれるわ」

若葉「その割には視線を逸らしがちだ。それでは上手く置けないだろう。私なら平気だ。ちゃんと見れる」

野分「み、見れるって……。わ、私だって平気よ！」

若葉「見るだけじゃだめだ。触れても平気じゃないと」

朝潮「ふ、触れ……!?!」

若葉「私は握れる」

ギユツ

野分・朝潮「!?!」

若葉「……」（お、思ったより柔らかい）カア

野分（つ、掴んでる……）

朝潮（んなにしっかり……）

若葉「さ、さて……。これでタオルも置いたからここもタオルで覆……」

多少無理をした事によりまだ手に残る生々しい感覚に顔を真っ赤にした若葉は、陰茎を握っていた手を放すと、なんとか平静を装うと努めながら当初の目的通りタオルを置こうとした。

しかし……。

朝潮「待って」

今度は朝潮が間に入って来た。

若葉「え？」

朝潮「そ、その私も触る……りたい」

若葉「!? な、なにを」

『触りたい』最早看護とは離れた率直な朝潮の欲求に若葉は驚きと共に羞恥の色に染まる。

それは野分も同じで、若葉の時以上にゆでだこの様に顔を赤くして朝潮を非難した。

野分「そ、そうだよ。もうタオル置いたからいいじゃない」

朝潮「なんか若葉だけリードしてるみたいでズルイよ……。わ、私だってできるもん」

若葉「そ、そういう問題じゃ……」

朝潮「じゃ、野分はいいんだよね」

野分「えっ」

朝潮「私と若葉にリードされても、気にしないという事よね？」

野分「え、いや、それは……」

若葉「あの、私はあくまで看護をする上であれくらいはできという事を示したかっただけなんだけど……」

自分は覚悟を示すためにあのような行動をとつたに過ぎない。

それを変に曲解されている感じた若葉は焦つた様子で取り繕おうとした。

朝潮「なら私も同じことをしても問題はなによね？ 私だつて大佐の事慕つてるもん。あれくらいできるつて示す事くらいいいよね？」

若葉「む……ま、まあ……」

野分「ちよ、ちよつと」アセ

朝潮「ということ……！」

ニギツ

野分・若葉「！」

朝潮「……！……！……！」（何これ、柔らかい柔らかい！ こ、こんなにぐにやぐにやしたものだつたの!?!）カアアツ

それから数分後。

朝潮「……」ニギニギ

野分「ね、ねえ。もうそろそろ離しても……」

野分の言葉で正気に戻つた朝潮はその時にやっと自分の行いに気付いて真つ赤になつて手を離した。

朝潮「え？ あ、うん。そ、そうね。あつ……」バツ

若葉「どうした？」

朝潮「せ、せつかくだからここも……」

否、やはりまだ正気には戻ってなかつた。

ポヨッ

若葉「な!？」

野分「え、ちよ!？」

朝潮「……あ」(こ、ここも柔らかい。ぐにやぐにやというよりふわふわ？ あ、固い

のが、これが……)ポー

野分「……つ、ズ、ズルいよ!」

野分は過剰になつていく朝潮の大胆な行動についてに我慢できなくなつたようだ。

完全に自分が置いて行かれたような敗北感に焦つた彼女は、やや強引に朝潮の横に割つて入りそして……。

ニギッ

朝潮「あ、ちよつと!」

野分「つ、あ……」(な、なにこれ……これが……)カアアッ

若葉(何この状況……)

三人の中で一番まともだった若葉は一人、この状況に困惑して呆然と立ち尽くしていた。

朝潮「……」ニギニギ

野分「……」ムニユムニユ

若葉「ね、ねえもうそろそろよさないか？」

朝潮・野分「えっ」

若葉「私が言えたことではないが、気を失ってる人にその……手を出すのはよくない……」

若葉の恥じらいながらも的確な指摘に朝潮と小野は慌てて提督の身体から離れた。

朝潮「つ、そ、そうね！」バツ

野分「う、うん！」バツ

若葉「取り敢えず体も乾いてるみたいだし、服を着せよう」

朝潮「わ、分かったわ。じゃあ私が持つて」スクツ

ネチヨツ

朝潮「あ……」

朝潮は何か水に濡れた様な凄く冷たい感触はお尻に感じた。

野分「？ どうしたの朝潮？ なんなら私が持つてこようか？」スクツ

ニチャツ

野分「あ……う……」

朝潮に気を遣つて自分が代わろうと立ち上がった野分もその瞬間に、顔を真っ赤にする。

どうやら彼女も朝潮と同じ状況の様だった。

若葉はそんな二人の様子を不思議そうに見ていた。

若葉「二人ともどうした？」（立ち上がったと思つたら直ぐに座り込んだ？）

朝潮「あ、えつと……ふ、服を取りに来る前に私達も服を着ない？ ね、野分？」（も

しかして野分も？）

野分「そ、そうだね。着よ！ 大佐もいつ目を覚ますか分らないし！」（朝潮……分

かったわ！）

若葉「あ、それもそうだな。迂闊だった。それじゃ私も……」

最もな意見に若葉もその場を立ち上がつて二人に着いて着替えようとするが、何故かそれを朝潮が止めた。

朝潮「わ、若葉はちよつと大佐の看病をお願いできる？」

若葉「え？」

野分「そ、そうね！ 先に私達が服を着るついでに大佐の服も持つてくるからそれまでの間お願い！」

若葉「それは構わないが……」

朝潮「ありがとう！ それじゃ行こう、野分！」

野分「う、うん！ じゃ、若葉悪いけどもう少しだけそのままで大佐の事お願いね！」

若葉「？ あ、ああ、了解だ」（なに……？）

一人残された若葉はキョトンとした顔で二人の行動を疑問に思いながら、その後姿を見送った。

朝潮「……ねえ」

脱衣所の若葉から見えないロッカーの前まで来たところで朝潮は野分に静かに声を掛ける。

野分はその声の雰囲気から彼女が言いたい事を一瞬で理解した。

野分「ん……？」

朝潮「野分、も……？」

野分「あ……うん、凄いくつしより……。朝潮も……？」

朝潮「うん、ちよつとこのままじゃ……ね」

スルツ……

朝潮・野分「うわあ……」

二人は凄い事になった物を見て、羞恥の声を漏らすのだった。

一方その頃若葉は……。

若葉「……二人とも遅いな。なあ、大佐……♪」ナデナデ

小さな膝にちよこんと提督の頭を載せて幸せそうにそれを撫でていた。

第×41話 「自慢2」

「大佐、お風呂でのぼせたって本当？」

「ああ、情けない話だがそうみたいだ」

「ちよつと、気を付けてよね。朝潮から話を聞いた時は凄く心配したんだから」

「そうか、すまないな。気を付ける」（問題は自分が目を覚ました時は既にベッドの上で一人だけだったという事だ。恐らくは朝潮達が助けてくれたんだろうが、それまでの記憶が全くないから実際にどういいう状況だったのか今の時点で把握できていない。服も着せてもらっていたし……）

「もう……さ、最初から私を誘ってくれたらのぼせる事なんかなかったのに……」カア
ビスマルクは恥じらい頬を仄かに朱に染めながらそんな事を言った。

対して提督はそんな彼女にあきれ気味な顔でツツコム。

「何でお前と一緒にいる前提なんだ。異性と一緒に入るのが当たり前と言う時点でおかしいだろ」（それにその様だと結局はこいつがのぼせていた気がする）

「ケツコンしてるんだからそんなの気にしなくていいじゃない」

「全く気にしないというのも司令官の体裁として問題あるだろう。公私混同はしない。

「加えて互いの合意も必須だ」

「むう……」ブスー

「どうしたんださつきから。何かあったのか？」

「別に……。久しぶりに二人きりなのに大佐があまり構ってくれないから……」

「二人きりなのはお前が秘書艦だからだろ」

「でも！ それでも私が秘書艦をするのって久しぶりじゃない！」

「……そうだったか？」

「Ja！（ヤー）」

「そっか」

「え、それだけ？」

「まだ仕事があるしな」

「ええ……」シユン

「お前、一応優秀なんだからこういう時くらい手伝ってくれ」

「手伝ったらご褒美くれる？」

身を乗り出してそんな事を訊いてくるビスマルク。

その目は子供の様に輝き、明らかに褒美を貰えることを確信していた。

「仕事に見返りを求めるな」

「Nein! (ナイン)」

「……」(ドイツ語が多いな。拗ねてるのか)

「ねえ、ご・ほ・う・び!」グイグイ

「引つ張るな。……そうだな」

「くれるの!? キスね!」

「いや、ウドンだ」

「」

「なんだ?」

「え、いや……。う、ウドン? 何それ?」

「なんだ、食べた事なかったのか?」

「食べ……。? 食べ物なの?」

「知識自体がなかったのか。なら余計にウドンだな。仕事が終わったら昼に作ってやる」

「……私、食べ物より大佐とイチヤイチャしたいな」

「なら、俺が作ったウドンが不味かったらそうしろ」

「美味しくなかったら構ってくれるの!? 本当!? ホントね!」

「おい、失礼だぞ。最初から不味い前提で話をするな」

それから暫くのち、提督は約束通り手作りのウドンをビスマルクに振舞った。

彼女は最初こそあまり美味しそうな目で見ていなかったが、箸の代わりにフォークを使つてその麺を口に含んだ瞬間、その顔は喜びに満ちた。

「……！ 美味しい♪」 チュルルツ

「ほら」

「？ なあにそれ？」

「七味だ。まあ掛けてみる」 シュツシュツ

「しちみ……？ ん……！」 ズズツ

「どうだ？」

「んく……！」 ズツズズツ

（返事をしないくらい気に入ったか）

「……はあ、美味しかったあ♪」 ゴロン

「食べ難い。離れろ」

「ん〜……ふふふ〜♪ やっ♪」 スリスリ

「時々お前が本当にあのビスマルクなのかと疑うぞ」

「私はマリアだもん。他の真面目な子と一緒にしないで♪」

「まるで真面目が悪徳のような言い方をするなよ……」

「そうは言っていないわ。でも損なのは確かね」

「損って、お前……」

「私は大佐に甘えられれるならこっちの方がいいの!」

「はあ……」(これで総合的な能力は改造を受けた扶桑に匹敵する上に、艦隊唯一改三だからな。実力に裏付けられた自信と自負もある分、ここぞという時は期待に応える活躍を見せるから扱いが難しい)

「ん〜♪ ね、抱き締めてよ」

「飯を食ってる」

「あ、じゃあ私が食べてあげる!」

「お前が食べるのか……」

「あ、食べさせて欲しかった?」

あわよくば自分が望む展開へと運べると思ったのだろう、期待に満ちた顔でそんな事を言うビスマルクだったが、提督は特に気にした様子もなく素っ気なく返すだけだった。

「いや、別に。だけど普通はそういう思考になるんじゃないか?」

「だって本当に美味しかったんだもん」

「それは光栄だが、ウドンでそんなに感動したのか……」

「日本って本当に美味しい食べ物だけはたくさんあるわよね」

「まるで日本の良いところは食べ物だけみたいない方だな」

「あ、別にそういう意味じゃないんだけど、でも美味しいのは確かじゃない？」

「そうだな。本当は基地の食事も現地に馴染んだ料理になるところを国の計らいで日本の飯にしてもらってるからな。可能な限り食材に関しては現地の物を利用して、それでも必要な物は国から直接送ってもらっている。その事に感謝しないとな」

「その影響かはハッキリとは判らないけど、町にも日本風の食事ができるお店が増えてきたわよね」

「基地の建設は防衛と誘致の効果もあるからな。地元住民の同意は得られているとは言え、外国の軍施設に対する印象は普通は良くない。それにも拘わらずここに関してはそれなりに理解も得られてるみたいだ。これは本当に彼らに感謝すべきところだな」

「私たちマナー良いもの。問題なんて起こさないわ」フンス

「そういう主張を自分からしないのも奥ゆかしい印象を相手に与える為に必要なんだぞ？」

「う……で、でもあまりに大人しくても受け身に取られて、場所によつてはたかられたり

するじゃない」

「その辺りのバランスのとり方は難しいところだな。土地柄による理由が大きいから互いに馴染むことによつて緩和するのに期待するしかないんじゃないか？」

「私、この前タクシーに乗った時ぼつたくられそうになつたの。でも一銭たりとも負けなかつたわ！」フンス

「だからそういう事を自慢げに言うなよ……」

提督は子供の様な態度でそんな事を自慢するビスマルクに苦笑しながら食事を楽しんだ。

第×42話 「ゲーム5」

「う、ぐす……」

「どう？ いいでしょう？」

「う、うう……。こ、こんな……。こんなの……。プルプル

「愛宕、一体どうしたんだ秋月は？」

部屋を訪れた時から秋月は感涙して咽っていた。

提督はその様子を怪訝で見ながら愛宕に訊く。

「大佐がいらっしゃる前にちよつと他のゲームを見せてたんです」

「他の？ 秋月が泣いて……。感動するようなの？」

「正直言つてアレはどつちかかというところなんですけど、予想通り

凛々しい秋月ちゃんにはツボだったみたいですよ」

「一体何を見せたんだ？」

「RPGのワンシーンですよ。えと、名前はですね……」

「うわあああああん！ 大佐ああああ！」ダキッ

『ワンシーン』と聞いて何かを思い出したのだろう。

突然秋月は立ち上がると涙でぐしょぐしょになった顔のまま提督に抱き着いた。

「ん？」

「大佐……私、私……」プルプル

提督の胸に埋めた顔を上げて、秋月はまだ涙を滲ませながら赤くなつた目で何かを言おうとしていた。

提督は内心戸惑いながらも努めて優しい声で訊く。

「どうした？」

「私、きつとサイラスに顔向けしても恥ずかしくなくらいの立派な騎士になってみせますうううう！」ブワツ

「……は？」

「……つ、秋月ちゃん……！」グツ

「ふえええええん、グレンカツコよかつたですうう……！ 特に魔王との決戦の時なんて……時なんて……はあああ……」ジワツ

「おい……本当に大丈夫か？」

提督は秋月の言っている意味がまるで解らず、いよいよ彼女の異常な様子に不安を感じ始めた。

だがそれに対して愛宕は実に嬉しそうな様子でノリ良く秋月に言葉を掛ける。

「秋月ちゃんいいのよ泣いても。泣いちゃうのは当然だもの」

「愛宕さん……」グス

「私は信じてるわよ。秋月ちゃんならきつとカエルに負けない騎士になれるわ!」

「っ、愛宕さん……!」ダキッ

「うんうん」ギユッ

「……一体なんなんだ」

一人置いてけぼりを食らう形となっていた提督は呆然と立ち尽くすしかなかった。

「……なるほどな」

「すー……すー……」

泣き疲れて寝ている秋月を見ながら提督は複雑な表情をしていた。

愛宕から聞かされた理由が意外過ぎて反応に困っているのだ。

「まさかあそこまで感動しちゃうなんて思わなかったですよ。うふ♪」

「あの感じだと朝潮とかに見せても同じことになりそうだな」

「あ、それ解ります」

「それにしても懐かしいゲームを見せてたんだな」

提督は愛宕に訊いたゲームのタイトルに懐かしそうな顔で言った。

「やった事あるんですか？」

「子供の頃少しな。最後まではやった事無い筈だが、それでもそのキャラクターと専用のBGMは覚えてるくらいには強い印象が記憶に残っている」

「大佐も忘れないでいるなんて、本当にこのキャラは愛されてるんですね……。流石世界一カッコイイ両生類です♪」

「最後だけ聞けば意味が解らないな」

「だからいいんですよ♪」

「なるほど」

「ですです♪」

「しかし、あれだな。今日は三人で遊ぶつもりだったのか？　だが、秋月があの状態じやな。ゲームを変えるか？」

「ん〜……：そうですねえ。ボ○バ○ンにしようと思ってたんですけど、二人なら……。あ、これにします？」 スツ

「カセットタイプか。また懐かしいな」

愛宕が取り出したゲームを見た提督は納得した様子だ。

「どうやら彼も良く知っているゲームらしい。」

「流石に大分時間が経っているので記録維持の電池は切れてると思いますけど、格闘ゲー

ムならあまり関係ないと思ひまして」

「なるほど。しかしそれ、俺の記憶通りなら大分バランスが悪かったと思うが」

「だから面白いんじゃないですか。何を特にやってはいけなかったか覚えてますか？」

「ん……確か、相手が飛び道具を撃った時に突進系の技を使ってはいけない」

「ピンポンです♪ ダメージ倍になっちゃいますものね。他には？」

「……投げられてはいけない」

「そうですね。このゲーム投げが異常に強いですものね」

「……十字キー一回転の技は無理に出そうとしない」

「つぶ、くす……ふふふ。そうですね、私も未だに失敗する時があります」

「連打技をL・Rボタンで入力するのは難しい。こんなところか？」

「凄い、大体私と一緒にです♪」

「他にどういふのがあったっけな」

「他には特定のキャラの弱パンチの連撃や足技のクリーンヒットを受けてはいけないと

かありますね」

「ああ、確か行動不能になり易いんだったか」

「です。後は、うーん……極偶に勝手に必殺技やガードが発生するとか、かな」

「極偶に？ どれくらいの頻度だ？」

「確か500回に一回くらいだったはずです」

「流石にそんな事にまで注意を払って遊ぶのは俺にはできないな」

「あ、3強キャラ使ってもいいですよ?」

コントローラを握って準備が整った提督に愛宕はふと言った。

提督は3強と聞いて直感であるキャラクターを選んだ。

それはゲームの主人公的位置のキャラクターで、飛び道具と対空技を持つ所謂オーソドックスなタイプだ。

「3強? これか?」

「あ、それ最弱ですよ」

「なに? じゃあこのライバルもか? 同性能だから」

提督が指したキャラを見て愛宕はそれをあつさりとは否定した。

「いえ、実はこのキャラの方が微妙に立ち直りがそのキャラより立ち直りが早いです。だから最弱は大佐のキャラですね」

「……飛び道具と対空を完備した主人公キャラが最弱なのか……? このプロレス技を使う奴じゃないのか?」

「飛び道具を出した時の硬直時間が長いんですよ。対空技も地上にいる相手に当てても

ダウンしないから反撃受けちゃうし。そのおヒゲさんは、まあ特定のキャラとの組み合わせがなければ」

「……」

「あ、でも対抗手段はあるんですよ。しゃがんで弱攻撃を連打すれば動きを止めれます」
「そんな戦法考えた事もないな。それに今したとしても活かせられる自信がないな」

「まあそんな事言わずにやってみましょうよ。私だってやるのは結構久しぶりなんですから」

「お前、そういうえば生まれてからどれくらい経ってたるんだったか」

「え？ うーん……3年くらいでしょうか」

「……」（たった3年程度でレトロゲームまで含めてここまでゲーマーになった奴に勝てる気がしないんだが……）

「あ、ハンデも付けていいですよ。私は星一個でいいですから」

「……」（対戦前からこの自信、もう無理だろ）

『ファイツ！』

「んー……やっぱり家庭用はアーケード版と比べてアニメーションが少ないのがあるからちよつと見栄えが気になりますね」

「……なに？」

「あ、余所見だめですよ」

ドグ、ゲシ！ ピヨピ……ビシッ！

『ヨウウイン！』

提督の操作キャラは一瞬で愛宕にサンドバックにされた。

提督は愛宕のテクニクに言葉を失う。

「……」

「まだ諦めるのは早いですよ。さ、第二ラウンドです！」

『ラウンター、ファイッ！』

それから1時間後

「……なあ他のゲームにしないか？」

ついにゲームを初めてから勝利どころかラウンド勝利すら一回もできなかった提督は、少し疲れた顔で提案した。

それに対して愛宕は提督に勝った事より、ゲーム自体を楽しんでいるので凄く機嫌が良さそうだった。

「あ……ごめんなさい。つい」キラキラ

「今度はこれにしようシユミレーションだ」 スツ

提督が箱から取り出したゲームを見て愛宕は、別に気にする様子もなくあっさりとその提案を受け入れた。

「あ、街作るのですか、いいですよ。じゃあ1時間で人口が多い方が勝ちでどうです？」
「分かった」

「じゃ、私はパソコンのエミュレーターを使うので大佐はどうぞテレビの方を使って下さい。つ、しよつと……」

「おい、道路全部剥すのか？ え、維持費0？ 消防と民家を潰すのか？」

提督は横で自分の街の方針を決めている愛宕の選択内容を見て顔をしかめる。

「無い方が公害起こりませんかからね。住民の意見なんて無視でOKですよ。短期決戦が目的なら維持費もそんなに気にする必要ないんです。地価の低い場所は公園にした方がまだ有意義ですし、警察と消防何て無駄ですよ」

「……」

またそれから一時間後。

「私の勝ちですね♪」

「まさか火事が起こってる街に負けるとは思わなかったぞ」

「生活圏広げましたからねえ。一部が燃えても直ぐそっちに人が集まるので」

「なるほど……」（「どういうプレイの仕方だ」）

「んむ……あれ……大佐？ 愛宕さん？」 コシコシ

「あ、秋月ちゃんおはよう」

「二人とも何をしてるんです……？」

「大佐とちよつとゲームで勝負してたの。秋月ちゃんもやる？ 三人で遊べるの出すわ」

「あ、はい。パズルゲームとかあります？ それなら私も出来そうです」

「なるほどね。じゃあ、王道のこれをやりましょう！」 バツ

愛宕が取り出したのはソ連が作った有名なゲームの比較的新しいものだった。

決して自信がなかったわけではなかったが、提督は何故かこの時あらゆるゲームを愛する愛宕と、ゲームが不得意そうでありながらパズルは出来そうと言う秋月の言葉に言わぬ言わず不安を感じるのであった。

そして実際に提督はこの一時間後今度は二人にそのゲームで完敗するるのであった。

第×43話 「予想」

「那智、吹雪、改造工程を終えて只今帰投した」

「大佐、ただいまです！」

「了解、ご苦労。どうだ二人とも、改造の具合は」

「バツチリです！ 正直、ここまで変わるとは思ってませんでした♪」

「……」

「ん？ どうした？ 那智」

はしやぐ吹雪に対して、那智はじつとして目を閉じて物思いに耽っている様子だった。

提督に続いてその様子に気付いた吹雪も不思議そうに声を掛ける。

「那智さん？」

「ん……ああ、すまない。ちよつと心境が感無量でな」

「ああ、お前は……そうだな。だろうな」

那智は妙高型重巡姉妹の次女でありながらその改二の改造の番が最後まで回ってこなかった。

表にこそ目立って出していなかったが、真面目で責任感の強い彼女が自分より先になつていく妹達の姿をどのような心境で見ているかは想像に難くない。

きつと喜ぶ妹達の姿を愛おしく思いながらも、自身は姉としての立ち位置に複雑な思いを抱いていただろう。

それだけに今回の改造は那智にとつて特別な思いがあつた。

「那智さんおめでとうございます！」

「ありがとう。だが吹雪、それを言うなら私もだ。改二の改造おめでとう吹雪」ポン

「あ……えへへ♪ ありがとうございます！」

「二人とも良かったな。今日は特別に休みをやろう。その新しい身体をよく慣らすとい
い」

「はい！ ありがとうございます！」

「感謝する、大佐」

「気にするな。それじゃあ下がっていいぞ」

「はい！ 失礼しました」

「ん……」ピクッ

「あれ？ 那智さん出ないんですか？」

部屋を出ようとした時、那智がその場を動かなかつたので吹雪が訊いた。

「ああ、悪い。ちよつと大佐に用がな」

「そうですか。それじゃあ私はお先に失礼しますね。大佐、失礼しました」
バタン

「……」

「なんだ？ どうした？」

一人残つた那智に間をおいて提督は声を掛けた。

だが那智はそれには答えず、無言で静かに提督へと近づいた。

「……」ツカツカ

「ん？」

「その……な？」ジツ

ちよつと困つた顔をして恥じらう様子で、那智は言い難そうに口ごもりながら言つた。

「……？」（なんだ？）

「……。さ、さつき、私がした事をだな……」

「お前がした事？」

「吹雪を……褒めただろ？ その……だから、だな……」カア

「ん…………」（ああ、そういう事か）

ポン

「あ…………」

那智は提督の掌を頭を感じた。

体温が温かく、まだ撫でられてもないのに言葉にできない幸福感が全身を緩やかに包んでいくのを那智は感じた。

「おめでとう、那智。新しいお前の力、期待しているぞ」ナデナデ

「……………は……………あ……………」ウツトリ

「……………そんなに嬉しいか？」

「ああ、なんというか、本当に……………。ふふふ、良いものだな♪」

「そうか」

「ん、もういい。大佐、ありがとう。おかげでなんだかここに来た直後より更に充実した気分だ」

「このくらいでか、恐縮だな」

「そんな事ない。本当に嬉しかったんだ。……………ふ、素直になるというのは良いものだな」

「まあ無理して偽るよりかはいいかもな」

「その通りだ。では大佐、私もこれで失礼する」

「ああ」

「……また」 チラッ

ドアノブに手を掛けたと思つた時、那智はそれから動きを止めて顔だけ小さく動かして提督の方を見た。

「ん？」

「また何か成果を挙げたら褒めてくれるか？」 ジッ

「そんな事いちいち確認する事はない。希望されなくても俺からするさ」

「そうか……ふふ、ではな」

那智は提督の答えに満足すると、今度こそ足取り軽く、部屋を出ていった。

ボタン

「ふむ……」

提督はその後姿を見送って暫く経つた後、ふと机の電話の内線のボタンを押した。

ピッ

「叢雲か？ ああ、そうだ。もう来ていいぞ。例の資料も頼む」

ガチャ

「失礼します。持ってきたわよ、大佐」

「ああ、ありがとう。渡してくれ」

「はい」

「ん、どれ……ふむ……」

提督は叢雲が持つてきたレジユメの束を受け取り、早速目を通し始めた。

それは、まだ叢雲を含む一部の者にしか伝えていない今朝本部から通達があつたばかりのある資料だった。

「次の改二予定？」

まだ内容を見てもいないというのに、提督のレジユメに目を通す雰囲気から何となくそれを察した叢雲が訊く。

その予想は正解だったようで、提督は特に驚いた様子もなくあっさりと肯定した。

「ああ、そうだ」

「このところ多いわよね」

「まあ今までのペースと比べたらな。だが、本来なら戦力の充実を考えるならもう少しペースが速くても問題はないと思うんだがな」

「……本部が出し惜しみをしているとでも？」

提督の発言から叢雲は更に予想した、彼の考えを。

聞きようによっては本部に対して不信感を持つているともとれるこの叢雲の予想は、またしても提督の考えと一緒だったらしい。

彼は先程と同じように特に焦る事もなくそのまま受け止めて自分の考えを話し始めた。

「未だに艦娘の改造には対象となる娘の史実や縁に沿った内容のものばかりだからな」

「それを重視するのは寧ろ普通じゃない？ ただでさえ私たちは自然からかけ離れた存在なんだから。強化に超常的な力が必要ならそうなるのは必然だと思うけど。理屈じゃないのよ」

「結果を見て納得するしかないと言いたいのか？ まあそれもそうだが……」

「何が気になるの？」

「今の世の中『人間の兵器』に至っては既に様々な物がコンピュータによって機能の自動化が図られている。戦車しかり、航空機しかり、潜水艦、艦艇しかりだ」

「それは、まあ……」

「特に航空機に至っては今では単葉機からジェット機、武器も熱源感知ミサイルといった具合に大戦時からは想像できない程進化しているわけだ」

「……」

「その技術が艦娘にも使われていないと言い切れるか？」

提督のこの問い掛けに、叢雲は彼の目を真つ直ぐ見ながら、今までの話を聞いている間に自分の中である程度まとめた見解を述べ始めた。

「もし大佐の言う通りなら。本部の戦力は別次元ね。そして私達は必要に迫られない限り、未だに移動手段に至るまで近代化改修を施した旧式装備の使用を強いられている……」

「その意味するところは？」

「悪い意味ならいくらでも浮かぶけど、敢えて難しい良い方の可能性を考えるなら……」
「なら？」

「……… 困？」

叢雲の素直な答えに、提督は満足げに微笑む。

「流石だな。俺もそう思ってた。良い意味で敵にとって俺たちが困という事だ。それはつまり……」

「主に私たちとしかぶつかっていない深海棲艦は私たちの戦力こそが海軍の基本レベルだと判断する……。つまり、本部にとってそれは敵が形骸に等しい戦力になるという事……」

「敢えて勢力の均衡を保ち、無理に攻め入らない態度をとっている本部の意向も領けるだけ。絶対に負けないのなら下手に刺激して厄介になる可能性を高める事もない」

「私たちの戦力強化がゆつくりなのは敵を欺く為でもあり、勢力の均衡を保つ為に微妙に調整しているってわけね」

「あくまで予想だがな」

そう、あくまで仮説。

あまり本気にとられても困るので、提督は大げさに肩をすくめて見せる。

だが叢雲は提督のその予想からなんだか嫌な事を知ったという風がちよつと不機嫌そうな顔で溜息を付きながら言った。

「はあ、私達は知らず知らずに間接的に本部に鍛え上げられているわけね」

「皮肉が効いてるな。だが、それは本部もだ」

「どういう事?」

「過去に何回か本部に直接攻撃を仕掛けた勢力もあるが、それを撃退した戦力は恐らく本気ではない」

「ああ、私たちが相手をしている敵のレベルが極端に上がってないものね」

「そういう事だ。必要に迫られれば本気を出すだろうが、それはその時点で必勝は確定。敵にとつては回避できない死の宣告も同じだから、情報が洩れないという結果は変わらないだろうな」

「……なるほどね。理解はできるけど趣味が悪いわね」

「あくまで俺の個人的な見解だからな？」

「分かってるわよ。でも」

「ん？」

「もし、大佐の予想が当たっているなら、例えば本部の大和とかが本気を出したらどれくらい強いのかしらね」

叢雲のこの疑問に、大佐は笑いながら答えた。

「それはちよつと俺も想像ができないな。それに、多分大和を引き合いに出す必要もないくらい、駆逐艦も俺たちの想像を超えるくらい強いだろう。レールガンを撃つたりするかもしれないぞ」

「……なんか嫌な駆逐艦ね。古臭いのが好きみたい聞こえるかもしれないけど、私の趣味じゃないわね」

「そうか？ 俺はお前がレールガンを撃っている様を結構簡単に想像できるぞっ。」

「……それどういう意味？」ジトツ

「怒ると怖いという事だ」

「ちよつと……」

「はは、冗談だ」

「目はそう言っただけでなかったように見えたけどね？」

「ん……」スッ

提督は叢雲のそれ以上の追及には敢えて答えず、その代わりに黙ってテーブルにある物をだした。

それはどこに忍ばせていたのか、食べかけのチョコレートだった。

叢雲はその交渉材料としては一見魅力が乏しいそれを見て、悪戯っぽく笑いながら言った。

彼女は気付いていたか定かではなかったが、もうその時点で叢雲の顔からは不機嫌そうな表情は消えていた。

「……買収？」

「いらないか？」

「……っ、ふふっ、仕方ないわね」

叢雲は敢えて誰かの食べかけの所から口を着け、美味しそうにチョコをかじった。

第×44話 「嫉妬2」

「艦隊が帰ってきた。全艦健在だといいな」

「……なんだ不意に不吉な。そう難しくない遠征任務だったろ？ 伊勢達なら問題ないだろう」

帰還報告には違いないが、提督は後の言葉が余計にな感じがした。
日向を見るとどこことなく不機嫌そうにむくれているように見えた。

「……」ムス

「どうした？」

「……伊勢が」

「ん？」

「伊勢が、成長限界に達した。レベルは99だ」

「ああ」

「するののか？ 伊勢と？」

「ケツコンか？ 本人が望めば、その意思を示せばな」

「……そう」

提督の答えを聞いて伊勢は少し寂しそうに視線を下げる。

それを見た提督は気遣うように日向に言った。

「心配か？」

「え？」

「いや、妹として姉が俺とケツコンする事が」

「あ、いやそうじゃなくてな」（なんでそう考えるかな……）

「それじゃあどうしたんだ？」（姉に先を越されるのに嫉妬……？ いや、それは日向らしくないよな）

「……恥ずかしい話だが、伊勢が大佐と先にk」

日向が視線を逸らして恥ずかしそうにその真意を告げようとした時だった。

不意にノックも無しにドアが開けられ、そこから遠征から帰って来た満面の笑顔の伊勢が現われた。

ガチャ！

「大佐あ！ ねえ、なったよ99、きゅーじゅーきゅー！ これでケツコンできるよね？

ね？ 早くしよ！」

「……」

「パクパク

「ん？ どうしたの大佐？ 何かあ……て、日向。いたんだ」

「……今日の秘書艦は私だからな」ムスツ

「あ、そうだったよね。ごめんごめん、ちよつと浮かれちゃつて」テヘ

「……」（これが天然だから恐ろしい）

「……むう」ムスー

提督は呆れ、日向は明らかに嫉妬により不機嫌そうに眼を細める。

伊勢もそのちよつと気まずい雰囲気、流石に気づき、場を取り繕う様に頭を掻きながら聞いた。

「え？ 二人ともどうしたの……？」

「あー、なるほどねー」

「そうだったのか」

提督と伊勢は、日向から胸の裡を聞き、それぞれお異なる態度でその理由を理解した。それに対して日向は、明らかに提督ではなく日向の今までの態度にまだ機嫌を損ねているようで、彼女と視線を合いそうになると直ぐに横を向くと言った仕草をしていた。

「……」プイツ

「ちよ、そんなにへソ曲げないでよ。悪気はなかったんだからあ、ごめんね？」

「……別に」

「まあ、お前もはしやぎ過ぎだったな。それで、伊勢。その態度から察するにケツコン、するんだな？」

「え？ あ、うん！」

提督の問いに伊勢は直ぐに即答し、日向はその様子を半目で見つめる。

「……」ジーン

「……なあ」

日向の視線を感じていた提督は、伊勢にある提案をする事にした。

「うん？」

「日向と同じレベルになるまでケツコンは待つてやったらどうだ？」

「え？」

「……っ」ピクン

「仲良くケツコン……あ、悪い。日向、お前がケツコンを望んでいる前提で話してしまっ
た」

「い、いやそれは別にいいんだ。私もどちらかというところk」

「あ、もしかして日向は大佐とのケツコンはあまり考えていない感じ？ なら、私が先に

しても問題ないよね？」

「え」

「……」（ワザと言っているなこいつ）

顔を凍りつかせる日向にそんな事を言う伊勢を提督は呆れた目で見て思った。

明らかに目が笑っている。

普段クールで感情的なところを見せない妹が動揺するのを可愛さ半分でからかっているようだった。

「ね？ 日向？」

「いや、だから私は別に考えてないというわけじゃ」

「あ、別に」っていう事はそう乗り気でもないって事じゃない？」

「」

日向は今度は目を見開き、口を一文字にして黙り込む。

こころなしに瞳が潤んでいるようだ。

「……」（日向のあんな顔初めて見たぞ。追い詰められて泣きそうだ）

「ねー？」（恥ずかしくてハッキリ言えないのは姉としてちよつとマイナスよ、日向。自分らしくもいいけど、ここは素直なあなたが見たいの）

「……っ」ジワッ

「おい」

「大佐、めっ」

流石に見ていられなくなった提督を、まだ悪戯気分が抜けない言葉で伊勢は諫めようとする。

だが、悪戯タイムはゲンコツによって早々に終わりを告げられた。

「……調子に乗るな」

スコンッ

「あうっ!？」

そして数分ほど経った執務室には、ソファに座った提督に子供の様に抱き着いてその胸で泣く日向と、その様子を床で正座しながら羨ましそうに見る伊勢、という構図ができあがっていた。

「……ぐす」 ヒシッ

「……はあ」 ナデナデ

「ごめんなさい……調子に乗り過ぎました」(日向いいなあ……)

「本当に反省するか？」

「してる! あ、ちが、してます!」 ビシッ

「だ、そうだが日向。どうする？」

「……伊勢なんて嫌いだ」プレイツ

「がーん！ えー、そんなあ。ねー日向許してよー」

「……」ヒシッ

「……まだ機嫌が悪いようだな。というか日向、お前らしくないぞ。もういいだろ、はな

r」

「……拒否する」ヒシッ

「えー！」（そんな時に素直になってどうするのよ日向ー!?）

「……離れないと伊勢と先にケツコンするぞ」（汚い手だが、ここは利用してもいいだろ

う）

「日向離れちゃだめ！」

「おい」

態度を豹変させて事態を悪化させる事を言う伊勢に提督がツツコミを入れていると

ころで、日向がボソリと言った。

「……別にしたらいい」

「え」

「なに？」

「……確かに先を越されるのは悔しと思つた。でも後からケツコンすれば先に知つた伊勢の味より良いものを準備できるというメリツトがあるからな」

日向の「味」という言葉に顔を赤くしながら伊勢は直ぐに反論する。

「わ、私の味つて……。て、ちよつと日向？ あなた、私よりあなたの方が大佐に好いてもらえる自信があるつて言うの？」

「伊勢が普段からちよつとそそつかしい分、私は落ち着いていたからな。私はその間、大佐を観察していろいろ考えていたのさ」

「……」（観察されていたのか俺は）

「ちよ、なによそれ！ズルイじゃない！」

「別にズルくはないさ。私は落ち着いて大佐の仕事を手伝いながら常にその事を頭の中で計画してただけなんだし。むしろ用意周到と褒められるべきだろう」

「そういうのを口に出さずに一人で進めちゃうのがズルイつて言つてるの！姉の私にくらい教えてくれたつてよかつたじゃん！で、なに？どんな情報を持つてるの？」

「伊勢には言わない」プイツ

「えー！」

「伊勢うるさいぞ」

「でも、大佐！その話が本当なら日向は大佐のどんな秘密を知つてるか分らないのよ

「？」

「秘密って……。伊勢、人聞きの悪い事言わないでよ」

伊勢の言葉に気分を害した顔で日向はそれを否定する。

そして提督も少しうんざりした顔で彼女の言葉を補足した。

「俺は別にお前たちに知られて困る秘密なんて今のところない。日向が言っているのは日々の人間観察の上でどう行動したら良いかを研究していたという事だろう」

「……流石大佐だな」ギョツ

「ちよ！ け、ケツコンでできるのは私なのよ！ なに今日向が甘えちゃってるのさあー！」
「知らん。どうせケツコンするんだろう？ なら先に甘えさせてもらってもいいじゃないか」

「えー！」ブーブー

「……」（煩い……。こいつら、二人揃うとこんなに煩かったのか……）

伊勢は元より、日向の意外な一面に新鮮な驚きを感じながら提督はそんな事を思うのであった。

第×45話 「エイプリルフール」

「大佐、四月だな」

「ん？ ああそうだな」

「四月と言えば？」

「うん？ ……エイプリルフールとでも言いたいのか？」

「正解だ。珍しく西洋文化に気付いたな」

「いくら俺でもそれくらい分かるぞ。単にそういうイベントに淡白なだけだ」

「まあそういう事においてやろう」フフン

「何でそんなに偉そうなんだ。で、なんだ？ 馬鹿し合いでもしたいのか？」

「そんなところだ。ちよつとゲームでもしないか？」

「休み時間だから構わないが、具体的にどんな？」

「お互い嘘や冗談を言つて相手を驚かせたりウケさせた方が勝ちだ」

「冗談はともかく、嘘をつくの前提を対戦相手に言っている時点でそのゲームは成立し
ないと思うが」

「まあ細かい事言うな。先ずは私からいくぞ」

「杜撰だな……。いいぞ、こい」

「……こほん、提督、長門だ」キリッ

「ほう……」（出会ったばかりの、今よりずっと真面目に見えた頃の真似か）

「貴方の艦隊に迎えて頂いた事に感謝する。我が忠義と誇りに懸けて、この基地を守り抜いてみせよう」

「……」

「……どうだ？」

「ああ、本当に……。どうしてこうなった」

「おい」

「冗談だ」

「そう思っていないだろう」

「鋭いな」

「むう……。まあ、一応ウケたと思ってよさそうだな」

「ああ、割と良かったぞ」

「ふふ、先ずは一步リードと言ったところか。では次は大佐の番だな」

「分かった。そうだな……。よし、長門」

「なんだ？」

「俺は近く、違う基地へ異動が決まった」

「はは、そうかそれは急だな」（ベタ過ぎだな。まあ大佐ならこんなものか）

「ああ、何分本当に急でな。話すのが遅れてすまない」

「うんうん、達者でな。大佐がいなくなっても私たちは新しい提督に誠心誠意仕えて平和を守っていくから安心してくれ」

「長門……。頼もしい言葉だな。それなら俺も安心してここを去れるというものだ」

「ああ、安心して行くがいい……。って、いい加減芝居もこれくらいにしな……」

長門がそう言って提督との芝居を切り上げようとした時だった。

提督はおもむろに引き出しから封筒を一つ取り出し、それを机の上に置いた。

ポスツ

「ん？　なんだそれ？」

「本部からの辞令書だ。今朝届いてな」

「」

「いや、本当に急で俺も驚いてな。本当なら朝礼の時点で皆には話さないといけなかったんだが」

驚きで言葉を失った長門は気付いた。

提督が出した封筒に開け口を封をしていたとあるモノに。

それは既に開封する際に切られていたが、赤い塊にとっても見覚えのある紋章だった。それは……長門が目を見開く。

「……あ」（封筒に海軍の封蝋が……これは本物だ……！）

「長門、これからこの基地の事をたの——」

「私も行く」

「え？」

「私も行くからな。絶対」

「いや、待て長門。一緒に行くってそれは……」（ん？ 茶番に乗ってくれてるのか？
にしては目が……）

提督の思っていた通りそれは長門のゲームに乗った彼の茶番だった。

提督が出した封筒は、彼が提督としてこの基地への赴任の指令を下された時にもらった初めての辞令書だった。

彼はそれを軍人としての一步を踏み出した思い出の品として大事にとっており、常にそれを机の引き出しに閉まって身近に置いていたのだ。

それは理由が無い限り特に人に見せる物でもなかったもので、今この時点においてその辞令書の存在を知っている者は基地には皆無であった。

そしてそれが理由で今、提督との思惑と長門の気持ちとの差となつて、彼女が本当に提督の嘘を信じてしまつていゝという事を彼はまだ気付いていゝなかつた。

「やだ。絶対に、絶対に行くからな！」 ドンツ

「……長門？」（これは演技ではない……？）

「その辞令書には大佐一人で来いとは書いてないだらう？ なら、気心の知れた秘書艦となり得る私が同伴するのは至極当然であり、必要な事だ」

「おい……ま——」

「待たない。これは絶対だ」

「……」

提督を見つめるその顔は、普段おちやらけた態度を取る長門が久しぶりに見せた本当に真面目なものだった。

提督はその瞳に見つめられながらこれはマズイとようやくその時になつて思い、なんとか誤解を解く事にした。

「長門、いいか。ちよつと話を聞け。これはなじよ——」

「連れて行つてくれるなら何でもする。いや、今までも大佐の為なら何でもするつもりだったが、今私が言つてゐる意味はそれより重いぞ？ 悪行は絶対にしないが、背徳的な淫行も、大佐が望むなら何時如何なる時も応えてみせる」

「……」

長門は静かに暴走している。

実力行使に出ずにそれを意志として示している分、言葉によつて誤解を解くのは容易ではない。

そう判断した提督は、チラリと窓から差し込む日の光を見た。

白昼、自分からこういう事するのは好まざることだが、致し方あるまい。

「長門……」

「ん、なんだ？ 私は意志は変えないぞつて……え？」

チュ

提督は言葉少なく長門の頭を自分の顔へ近付けると、そのまま優しく口づけをした。

「ん……ふ……。たい……？」

突然の提督らしからぬ行為に長門は珍しく動揺し、仄かに赤く染まった顔で提督を見る。

「長門……お前に言わなければならぬ事がある」

提督はその気を逃さずに静かに語り掛ける。

対する長門はキスの効果もあつて、すっかり女の顔で提督の顔を見つめながら続く言葉を待っていた。

「……」

「いいか？ あれはな、冗談だ」

「……」

「……」

「……え？」

ゆうに一分は時が止まったような顔をしていた。

提督の言葉を理解した長門は、ポカンとした顔で聞き返す。

「冗談だったんだ。封筒の中身も確認せずにお前がああ嘘を信じるとは俺の予想外だったんだ」

「……な」

提督の話聞いてようやくそこで長門の目に理性が戻って来た。

最初は動揺してぼかんとした顔をしていただけだったが、提督のその言葉の後には直ぐに恥ずかしそうな顔になり、彼女は思わず顔を伏せた。

「その……悪い」

提督はバツが悪そうにそう謝るしかなかった。

「……恥ずかしい」

顔を手で隠しながら長門はぼつりと言った。

「……すまん」

「いや、恥ずかしいのはな大佐」

「ん？」

「大佐の嘘を信じてしまったのもそうだが、久しぶりに情を交え合う行為以外で、素を見
せてしまった事だ」

「……お前」

提督はその答えに少し呆れた顔をした。

「ああ……恥ずかしい……」プルプル

「じゃあ今までのおちやらけた態度は演技だったのか」

「いや、そういうわけじゃないが。あれはあれで楽しんでいたし」

「……なるほど」

「自分の意思で切り返していた時ならともかく、こういう不意打ちは効くものだな」

「……そうか」

「……なんか、癖になりそうだ」ボソ

「おい」

「……ふふ、冗談だ」

そこでやっと顔を上げた長門の顔は、僅かに涙が滲んでいたが、もういつもの顔で本

当に心から面白そうに笑っていた。

第×46話 「不安」

「叢雲お！叢雲どうしたのじゃ!？」ドンドン

「どうしたんだ？」

「おお、大佐。その、叢雲が、の……」

「あいつがどうした？」

「改造を受けて基地に帰ってきてから部屋から出てこなくなっちゃったんです」

「なに？」

「今日の遠征は叢雲も一緒に行くはずだったんじゃが……」

「体調が優れないとかで初春が代わってくれたんですが……」

「妾達が遠征に出ている間も部屋から出ていないと聞いての。心配になったのじゃ」

「遠征の交代の報告は受けている。が……叢雲の改造に何か問題でも？」

改造後に部屋から出なくなつた、この報告から提督は彼女の改造に何か問題があつた可能性を見出した。

だが、それに対して初春と綾波は、それは否とかぶりを振る。

「その様な電文はまだ確認しておらぬな」

「私も大佐は見落としてないと思います」

「ふむ……」

「これ、叢雲。いい加減に出てこないか。体調は優れないのも解るが、床に伏せ続けるのも身体に障るぞ？」

事態の拉致が開かない事に少々呆れた叢雲が再び叢雲の部屋と扉を叩く。

すると扉に隔たれた部屋の奥からやつとそれに反応した彼女の声が返ってきた。

『心配しないで！ ただちよつと……。えつと……。と、とにかく大丈夫だから一人にして！』

「ふむ……」

「らしくないな」

「私もそう思います」

「改造を受けて早々閉じ籠ったと聞く。解せんのか」

「あいつにとつては今回の改二の改造は単なる改造じゃなかったはずだ。なのにあの状態とは……単純に何か気に入らなかったか？」

「妾の時はそうでもなかったが。結構気に入っておるが」

「綾波もです。特に不満とかはないのですが……」

「ふむ……」

「話は聞いたで！」

叢雲の悩みが理解できず、困りはてっていた提督達の背後で不意に声が出た。

三人が声が出した方を振り向くとそこには……。

「む？」 「ん？」 「え？」

「お待ちせ！ 龍驤や！」

「……………」

「さて、どうするか」

「困ったのお」

「そうですねえ……」

「ちよっ!?」 ガーン

ガシッ

「ん？」

提督が袖を掴まれる感覚に視線を下げると、そこには無視されたことにショックを受けて半分涙目となった龍驤の顔があつた。

「無視せんといてえ！」 ブワアッ

「……ややこしくするなよ？」

「うち見ただけでそれはちよつと酷いんちゃう!？」

「主には申し訳ないが、それは仕方のない事だと妾は思うがの」

「あ、あはは……」（日頃の行いって大切なんだな……）

「3人とも堪忍してえな！　うち、やるときはやるで！　時と場合くらいちゃんを選ぶわー！」

「分かった、だから騒ぐな。で、どうするつもりだ？」

「成功したら褒めてくれる？」

「うん？」

「褒めてえな？」

「……言われなくても役に立てば褒める。大丈夫なんだな？」

「もちや！」　パアツ

「ふふ、お手並み拝見といこうかの」

「……」（餅？）

「んー……こほん。あー、叢雲？　ちよつと聞いてえな」

三人の信任を得た龍驤は早速叢雲の扉の前に立ち、自身に見た顔で穏やかに話し掛け

始めた。

『……何よ?』

「うちは叢雲が何を気にしてるのかめっちゃ解るで?」

『……』

「性能やない、武装でもない。ほんなら改造受けて気になるのは一つや」

『……』

「姿やろ?」

『……』

「ふむ……なるほど、の」

「えっ」

龍驤の推測を聞いた後ろの三人は、提督は特に表情は変えず、初春は感心したように顎をなぞり、綾波は純粹に驚いた顔をした。

『……』

「正解?」

『……まあね』

「やっぱなあ、叢雲『さん』この基地で一番の古株やもんね。大佐と過ごした時間が長い分、その姿が変われば、そりや気にもなるわ」

『……』

「恥ずかしいのやのうて、自信？ んや、不安なんやろ？」

『……』

「新しく変わった自分の姿、大佐が受け入れてくれるか不安なんやな？」

『……ちよつとだけよ。ただ……ね、踏ん切りがつ——』

龍驤の的を射た推測に、それを肯定し自分の気持ちを吐露しようとした叢雲だった。が、それは続いて出てきた龍驤の言葉に途中で遮られた。

「うんうん解るで！ そりや改造受ければ期待してまうもんね」

『え？』

「改造受けたら、誰だつて前より大きなるつて期待するもんや。それがいざ受けてみて変わつてなかつたら、そりや不安にもなるわ」

『え、ちよ……なにを……？』

「恥かしがらんでええよ？ うちも仲間やから！ 不安なんやろ？ 改造受けても乳が大きな——」

バン！

「つ、ちっ……がうわよ!!」

的を射ていたと思われた推測だったが、実は見事に外れていた龍驤が導き出していた答えに、叢雲は堪らずに断定される前に自分から扉を開いてその姿を現した。

「あ」「ほう」「……」

「ちよつと龍驤さんあなたねえ！ 私はあなたが思ってるほど自分の身体にコンプレックス……あ……」

「なかなか華やかでないかえ？」

「可愛いです！」

「悪くないと思うぞ？ それを気にしてたのか？」

「……っ」ポツ

姿を皆に見られた叢雲は羞恥で顔を一瞬で真っ赤にするとその場にしゃがみこむ。

「あっ」

「恥かしかることはないと思うがお」

「そんなに気になるか？」

「……だ、だつて変じゃない!? か、髪だつてなんか前より伸びたつていうか。か、身体だつてところどころに、肉が……」

「ええ？」

「む？！」

「髪、肉？ ん……？？」

「しゃがんだ自分の身体に確認するような提督の視線を叢雲は感じて、悲鳴じみた羞恥の声をあげながら更に丸くなるうとする。

「み、見ないで！」カアツ

「いや、普通じゃないか？」

「そうじゃの。寧ろ前が少々華奢に思えるくらじゃが？」

「そうですよ！ 叢雲凄く可愛いよ！」

「ええ……？？ でも初春達と比べると……！」

「んん？ なんじゃあ？ 妾達の体軀が貧相じゃと言うのかえ？」ニヤニヤ

「え、ええ！？ そ、そんな……あ、あう」シヨボン

「あ、そ、そういう意味じゃ……」アセアセ

「ふふ、そうじゃのお。まあ少なくとも胸はあまり妾達は変わらんと思うが……。どう

かのの？ た・い・さ・殿？」

「俺に振るな。とにかく俺はこれといってお前にそこまで違和感を感じていない」

「あ……ほ、本当？」

「嘘を言っていると思うか？」

「ううん」フルフル

「なら言つた通りだ。良い感じ……いや、可愛いぞ」

「大佐……。ありがとつ」ギユッ

ようやく不安を払拭し、その嬉しさから自分に抱きついてきた叢雲を、提督は優しく抱き返しながら片手でその頭を撫でる。

「長い間よく待つたな」

「あ、あのー、お取り込みのところ悪いんやけどうちは？　なんか忘れられてへん？」

穏やかな雰囲気の中、龍驤が遠慮しがちに入ってきた。

自分の存在が半ば忘れられている事に焦つた彼女は、提督に約束してもらつた報酬をまだ貰っていないかったのだ。

「まあ予測とは違つたとは言え、実際に結果を出したしな。良くやつたぞ」

「そいだけ……う？」

物欲しそうに自分を見る龍驤に提督は少々困つた顔をした。

「……」(今日は叢雲を優先した方が良いと思うところだが)

クイツ

「ん？」

本日2回めの袖を引かれる感覚に提督が目を向けると、そこには優しい目をして微笑む叢雲の顔があつた。

彼女はそつと耳打ちするように提督の耳元に顔を寄せると周囲に聞こえないように小さな声でこう言った。

「私は構わないわよ。もう十分満たさされたから」コシヨ

「ふむ……龍驤」

「な、なに？」

「……」スツ

「あつ」

龍驤は愛用の帽子を提督に脱がされたと思つたその時、次の瞬間には何も遮る物がなくなつた頭を直接彼に優しく撫でられていた。

「ありがとう。助かつた」

「う、うん！」

頭全体に感じる提督の手のひらの感触と暖かさに、龍驤は心から嬉しそうな顔をした。

「いいなあ……」

「ま、ここは我慢じゃ

「ふふ、そうね」

第×47話 「淫酒」 R—15

「ん……………ふう……………はあ、おいし……………」

「大丈夫か？ 飲むペースが大分早い気がするが」

「だって美味しいんだもの」

グラスをかたむけながら酒気によってほんのり染まって嬉しそうな顔をする雲龍に、提督はその様子から確認する様に言った。

「……………それは同意と見ていいんだな？」

「流石に察してるのね。うん、そう……………。私、大佐とケツコンしたい」

「分かった。それが嬉しくて酒が美味しい？」

「勿論よ。でもこのお酒も本当に美味しいわよ」コクコク

「チョコレートトリキュールなんだが、かなり気に入ったみたいだな」

「甘いお酒は特に好きじゃなかったけど、こういうお菓子みたいなのもあるのね。ん

……………うん、これ、大好き」

「そうか、それは良かった」ゴクツ

「大佐は何を飲んでるの？」

「ん？ ああ、これはウオツカだ」

提督は片手に持っていた雲龍より小さなグラスを軽く揺らした。

透明の容器の中で同じく透明の液体がちやぶんと音を立てる。

雲龍はそれを興味がありそうな目で見ながら訊いた。

「美味しい？」

「酒自体は悪くない代物のはずだが、実は飲むのは初めてなんだ」

「え？ 試し飲みしてるの？」

「知り合いに慣れれば美味いと聞いてな」

「ふうん……そう。でもその様子だとまだイマイチって感じね？」

「ん……ふう、まあそうだな。まだ味よりアルコールを強く感じる」

「……慣れないお酒を無理に飲むのはあまり良くないわよ。私の……飲む？」

「ん？ それじゃあ口直しに貰おうか。グラスを」

「……」プチツ

プルンツ

雲龍はおもむろに服の前をはだけかと思うと、普段から服の上からでも十分存在感を放っていたものを晒け出した。

「……グラスより、こっちで飲んで欲しい、かな」

雲龍はそう言うと、グラスに入った酒をとろりと下に垂らす。

それを見て彼女が何を求めているのか解らない程、提督は流星に鈍くはなかつた。

「……飲んで」

「……では」

カブツ

「んあっ」ピクン

「ちゆう、ペろ……」

「ん……あ……はっ……。あ、んっ」ピクツ

「っあは、ふう……」

僅かな時間でそれを舐め取った提督に雲龍は潤んだ瞳で聴いた。

「美味しかった？」

「ああ」

「そう、良かった。ねえ、今度は大佐のを飲みたいな……」

「これか？」

雲龍の要望に提督は自分が持ったウオッカが入った自分のグラスを揺らす。

だがどうやらそれは違ったようで、雲龍が小さく笑いながらチョコレートリキュール

が入っている自分の方のグラスを揺らしながら言った。

「ううん、あまり強いのは今この場で飲んでも楽しめる自信ないから、やっぱりこれで
チャップン

「分かった。……という事は」

「うん……。私も、大佐の……。私も味わってみたい……」

「ちゅう……。んむ、ぺろ……」

程なくして二人はベッドの上で身体を重ねていた。

元々それなりに感じる質だったのか、それとも雲龍の技術が優れていたのかは定かではなかったが、提督はその刺激に小さく息を漏らす。

「っ……」

「んむう……。っはあ……。ふう……。ね、どう？」

「……まさか男でもここまで感じるとはな」

「うふふ、そうね。ここを愛されて気持ち良いのは女だけじゃないのよ。ん、ちゅう

……」

「っ、おい……。もう無いぞ」

「あ、本当ね。……。じゃあ次行きましょうか？」

「……………ああ」

スルツ……………。

「ちよつと、恥ずかしい……………わね」

「ちよつとか？」

「好きな人に見られてるんだから嬉しさもあるの」

「そうか……………」

「ね、たくさん愛して……………」

雲龍はそう言うのと再びベッドに仰向けになると提督を迎えるように手を広げた。

「……………普段からは想像も付かない格好だな」

「んっ……………恥ずかし……………けど、大佐になら見られて嬉しいかも……………」

「酒の勢いというのものもある。素面に戻ったら恥ずかしさで暫く立ち直れないかもしれないな
ごめん……………」

「ええ……………？ ふふ、そう……………ね。じゃあちよつと私がそこまでお酒の力に頼ってな
いってところ見せてあげましょうか」

雲龍はそう言うのと、傍に置いてあつたまだ酒が残っているグラスを持ち上げた。

提督は彼女の行動を半ば予測できていたが、それでも念の為確かめるように一応効いた。

「雲龍？ 何を……？」

「ふふ、見てて……」

トロロー……。

「……」

「ふ……ああ……つ。く……やっぱりこれもお酒ね、何か沁みる感じ……」

「基本的に口以外の内部機関にアルコールは触れさせない方がいい。それ以上はやめておけ」

「はあ……ああ、そう……ね。なんかあ……つい、し……チョコレートこれ、入ってるからこのままじゃいろいろ問題かも……」

「……これは完全に取り除かないとな」

提督の言葉を聞いて雲龍は彼が自分の誘いを理解して乗った事を理解した。

その瞬間、快感と歓喜が入り混じった何とも言えない感情がゾクリとした感覚と共に彼女の身体を走り抜け、感電した様にぶるつと震えた。

「！ そう、そうね。だからお願い……。私を大佐のにする前にもう一度私で……」

「……これが酒の勢いに飲まれてない証拠か？ どう見ても逆だと思いが……ペロ」

「……………っ！ ああ……………っ♪ ん……………ち、違うわよ。さ、流星にここま……………ではっ、お酒の力借り……………ても、あ！」

「うん？ ちゆるっ」

「ふああああ！ はあ、はあ、はあ……………じ、自分のい……………ひいが無いと……………て、出来ないと思わ……………ない？」 ビクンビクツ

「……………まあ」（これだと、逆に酒に飲まれたらどこまでエスカレートするのか少し怖いな）
提督はそんな事を考えながら雲龍の誘いに乗り、できる限り彼女を悦ばせようと努めた。

そんな調子で暫くの間彼女を攻め、もう何回か絶頂へと導いた思われる頃、雲龍が焦点の合わない目で息も切れ切れに提督を見つめながら言ってきた。

「ね……………はあ……………はあ、待って」

「……………ちゅ……………ん、すまんやりすぎたか」

「ふっ……………っああ！ ち、違うの……………そ……………その、もう、準備は……………いいんだけど、そのま……………えに、大佐のを……………」

そう言う雲龍の目は提督のとある個所に熱い視線を注いでいた。

そこはもう十分に自己主張と言えるまでに大勢が整っており、提督に可愛がられながらさり気にとそれを意識していた雲龍はある事を考えていた。

「私も提督にしてあげたい」

「お願い、本番のま……えに、大佐のお……」

「分かった。それ以上言うな」

何故かそれ以上雲龍の言葉を聞く事に言いようのない危うさを感じた提督は、彼女の口を塞ぐ替わりに態勢を変えて彼女の要望が通り易い恰好をした。

「あ……これが、た……の……。……んんっ」

「んく……」……はっ……」ビクッ

そのあまりにも強いがつつき様から来る快感の波は半端ではなく、提督は本能のままに攻める雲龍の技に意識を危うく持つて行かれそうになる。

「はあ、はあ……あ……んむっ……ぺろっ。大佐……たいさあ……」

雲龍の愛情は爆発しており、その行為の広がりはとどまる事を知らない様子だった。

これはいけない。

このままでは本番を迎える前に何もできなくなってしまう。

そう感じた提督は半ば強引に態勢を変える事にした。

「あ……」

「すまないが、あのままでは果てそうだな。だが最初に果てるなら……」

ズ……。

一瞬残念そうな顔をしていた雲龍だったが、提督のその意図を理解すると再び嬉しうに手を広げて更に彼の身体が自分に近付くのを迎えんとした。

「うん、来て……。私の……。最初になって……。大佐……！」

「雲龍……いくぞ」

ズン！

「あ……♪」

既に暴走しそうなどの快感で痛覚が半ば麻痺していた雲龍には、初めてを捧げた痛みは殆ど感じられず、その替わりに自分の中に提督を迎える事ができたという至上の喜びのみが広がって行った。

第×48話 「姫遊び」 R—15

「暑いー」

「暑いねー」

「何でクーラーつけないなのー？」

「鈴谷が直ぐ寒くなるからってつけななかつたんじゃないか」

「えー、そうだっけー？」

「そうだよ」

「そっかー、じゃあつけようかなあ、暑いし」

「つけるの？」

「んー……。やっぱやめたー」

「なにそれ」

「モガミンはつけなくて平気ー？」

「そんなに動かなければ大丈夫だよ」

「そんなもんなあ」

「そんどもんだよ」

「……」

「……」

「だー、もうあつつい！ パンツ脱ごつ、蒸れる！」ポイツ

「また大佐に怒られるよ？」

「今日は自分で直接演習の指揮をするとか言つてたから、そうそう顔を合わす事ないよー」

「そうだっけ？ んー、確かにそれなら会う可能性は少ないかも」

「最上も脱ぐ？」

「んー……そうだね。確かにそれなら今日会う可能性はそんなにかもしいしね」

「やったーなつかまー♪ ね、脱がせていい？」

「別に自分で脱げるんだけど……」

「なんか、ぬ・が・せ・た・い・の♪ ね、お願い」

「……はあ、好きにすればいいじゃん」

「やつほーう。モガミン超サンキュー♪」

「はいはい。ん、早くしてね」

そう言うのと最上はシヨーツを脱がし易いように曲げていた足を前に伸ばした。

「はいはい、それじゃ鈴谷がエスコートしちやいまーす♪」

「パンツを脱がせるエスコートなんて聞いた事ないよ……」

鈴谷は嬉しそうに最上のスカートの中に手を入れると、シヨーツの端を掴んでするりとそれを脱がした。

「はい、脱げましたー！」

「おめでとー」

「お、モガミン今日は青かぁ」

「まあね」

「へえ、特に汚れてないんだね」

「ちよつと……何見てるの」

脱がしたばかりの淡いブルーのシヨーツを広げてクロツチの部分を見る鈴谷に、最上は流石にちよつと嫌そうな顔をした。

「いや、汚れとかないかなあって」

「一応かなり気を遣ってるつもりだからね。そうそう無い筈だよ」

「流石モガミン」

「そういう鈴谷はどうなのさ」

「え？ わたしー？」

「さつき脱いだやつ見せてよ」

「やーん、モガミンのエッチー」

「人のパンツ見ていてよく言うよ。早く」

「えっ、ほ、ホントに見るの……？」

鈴谷は最上がその要求を直ぐに撮り下げると思っていたらしく、予想に反してあくまで自分の下着を見せるように求めてきた事に幾分動揺した顔を見せた。

「何？ もしかして汚れ……」

「ちよ、ちよつと待って……！」

ゴソゴソ

「……ふう」

「……」(これは油断してる時はあるって事かな)

「はいっ」

暫くして鈴谷は脱いだばかりの下着を最上に手渡してきた。

最上はそれを受け取り彼女がしていたにそれをジツと眺める。

「ん、ふーん……」ジ

「な、ないっしょ？」

「……あ」

「！ な、なに!？」ビクッ

「……鈴谷はピンクかあ」

「つ……ちよ、ちよつとお！ そういうのやめてよねー!」

「なに？ 自信なかったの？」

「そ、そういうわけじゃないけどさ。普段はあまり意識してないからちよつと心配で

……」

「ふーん」

ビローン

「ちよつ!」（そんなに広げたらもしかしたら……!）

最上が手にしていた下着を引き伸ばして確認し始めたので、鈴谷は予想外の行動に完全慌てる。

「……ないね」

「……つ、はあ」ガクッ

「ま、女の下着は特に目立ち易いから普通は気を遣うよね」

「まあそうなんだけどさ。なんか改めてそう言われると鈴谷が普段気を遣ってないよう

に聞こえるんですけどー?」

「そんなつもりはないよ? 気を付けているつもりでも実は、って事なんてざらだしね。そういう意味で鈴谷はちゃんとしてるって事が証明されたじゃないか」

「……それ、モガミンも当てはまってるよね」

「当然」

「はあ、何か嬉しくないなあ勝ったわけでもないしー」

「逆に負けてたら汚れてるって事じゃないか。そんな事態、断じて僕は招くつもりはないね」

「す、凄い女子力」

「鈴谷は一つ誤解している」

「え?」

「もしかして鈴谷は世間一般的に男性から『女はきれいな身体をしている』という幻想を抱かれています知らないのかな?」

「え……げ、幻想?」

「僕や鈴谷みたいに普段から何気に細かい所を気にしている人には関係がない話なんだけどね」

「う、うん」

「でも女も基本人間、一般的な男性の様に外見にあまり気を遣わないでいると、予想以上に粗が目立つものなのさ」

「あ、粗？」

「うん。まあ、粗というのはちよつと言ひ過ぎなところもあると思うけど、女は基本外見が重視される分それが例え男性と同程度の粗でも、それが男性と比べて異常に目立って見えてしまうものなんだよ？」

「……はあ」

鈴谷は想像した。

外見がお淑やかに見える代表の一人である扶桑に、もし男性によくあるような鼻毛の処理漏れが彼女に認められた場合を。

「……っ」

危うく笑いそうになったのを何とか止めた。

例え想像でもそれを笑ったりすると、超常的な力でそれを知覚した妹の山城に肅清される気がしたからだ。

滅多にある事ではないが、最上の言う事は実によく解った。

「ま、ある意味世の女性はそんな男の妄想の被害者とも言えるかもね。勿論、そのお蔭で大多数の女性が気を遣って、見栄えだけは良く見える様になっているという結果に繋がっ

てるとも言えると思うけど」

「……」ピクツ

違う部屋で扶桑と一緒に提督に頼まれた資料を探していた山城は、ふと探していたその手を止めた。

「山城？」

「あ、いえごめんなさい。何か空が曇って見えた気がして……」

「？ 今日晴天よ」

「そうですね、ごめんなさい。ちょっと呆けてたみたいです」

そう、窓から覗く眼前の空は蒼鮮やかな晴天。

それはまるで自分の姉の心の様に晴れやかできれいだった。

そんな青空が曇って汚れたように見えた気がしたのは、きっと何かの間違いだろう。

空を眺めながら山城は、そんな自分の気のせいだという思いが実は少し離れた場所

的中している事など流石に知る由もなかった。

「……」

「んー……、ひまー」ゴロゴロ

「……」

「……あ」ピコーン

ゴソゴソ……

「……ねえ」

「うん？」

「何してるの？」

「モガミンのスカートの中覗いてるー」

鈴谷の言う通り彼女は最上のスカートの中にすっぱりと頭を入れてその中身を覗いていた。

「何で？」

「暇だから」

「暇だから鈴谷は人のスカートの中を覗くの？」

「んー、別に暇だから必ずってわけでもないしー。別にいいじゃん減るもんじゃないし」
「自尊心が削られてる気もするけど」

「前にクマノンとかにも見せてたでしょ？」

「あれは見せてたのであって、今は故意に覗かれてるんだけど。しかも至近距離で」

「えー、だめー？」

「別に見たって面白くないでしょ。鈴谷と同じモノなんだし」

「いやまあ見た目は確かにね。モガミンもわたしと同じでツルツルだし」

「……ん、ちよつと見ながら話さないでよ。息が当たってこそばゆい」

「あ、ごめん。ちよつと匂い嗅いでた」

「……は？」

「だからあ、モガミンの匂いを——」

「そんな事一言聞けば分かるよ。なんでそんな事するの。汗臭いでしょ」

珍しく目に見えて赤面して恥ずかしそうにする最上だったが、鈴谷は彼女の言葉を気にする事もなく更に顔を近づけてその匂いを嗅ぐ。

「んー……すー」

「……っ、ちよつ……と」

「確かに汗の臭いはするけど、モガミン本当にきれいにしているからそれ以外の匂いは何もしないよー？」

「だからってそんなとこ……。普通しないよ？」

「モガミンはきれいだからいいのー、普通ふつー」スーハー

「……」プルッ

「ね」

「……なに？」

「触っていい？」

「なんで？」

「なんかプニプニして凄く触ってみたい！」

「それもこの前熊野でやってなかったっけ？」

「ん？ そうだっけ？」

「どうだったかな」

「ねー、おねがーい」

「だから目の前で話さ……あーもう、いいよ」

「やったー！ モガミンマジ天使ー♪」

「何が面白くてそんな事するかな……」

「まあまあ気にしないでーって、さてえ……」

ぷいっ

「ん……」ピクッ

人差し指と親指で敏感な場所を挟まれて最上は思わず小さな声を漏らす。

鈴谷はその感触が大層気に入ったようで、その後何度もプニプニと掴んでは離しを繰

り返してその感触を楽しむ。

「ほーほー、これは良い触り心地ー♪」プニプニ

「……」（本に集中し難い……）

「ねー？」

「今度は何？」

「何か指に冷たい感触が？」

「何で疑問形なの。そんなの触ってる本人が一番判るでしょ？」

「んー、湿って……あ、凄い、糸みたい♪」クチュツ

「あ……ん……」

「モガミン感じてるー？」

「そこまでして感じない女はいないでしょ。判り切った事聞かないでよ」

「えへへ、モガミンのそういうドライなところわたし大好きー♪ えいえいつ」クチュ

「は……あ……。んう……」

「あ、モガミンこれってアレじゃない？ 真つ赤あ」

「ちよつと、それは本当に触らないでよ。本に集中できなくなるから」

「あ、うんそれ解る。これ気持ち良いけど刺激も凄いもんね」

「できればそれ以外も触るのをやめて欲しいんだけどね」

「うん、それ無理ー。てりやつ」チュプン

「あつ……もう……て、え？　もしかして鈴谷今……」

「あ……ごめん？」

今まで聞いた中で明らかに違う少し冷めた最上の声に鈴谷はびくりと反応して慌てた様子でスカートから手を引いた。

その手の指は僅かに濡れて外の光を反射して光っていた。

「絶対に破らないでね？」

「あ、うん。それは絶対にしない」

「……じゃあいいよ」

操を大佐の為に立てるなど確認するだけ野暮というものだった。

それより中途半端な状態でやめられるのも消化不良でもやもやしてしまう。

そんな気分になるくらいならと、最上は続いて弄るのを鈴谷に許した。

「ほんとごめんね？　ちよつと軽くだから」チュク

「ん……ふ……」

「〜♪」

ペロンッ

「あっ」

「どうしたの?」

「モガミンどうしてわたしのスカート捲ったの? お尻丸見えなんだけど」

寝そべって最上に悪戯していい鈴谷のスカートは背中まで捲り上げられ、下着は穿いていなかったなので女の小振りで色白い可愛らしい尻は当然丸見えだった。

「もし破ったら、一突きで鈴谷のも破る為だよ?」

「なにそれ、怖っ」

「……鈴谷気付いてないみたいだけど君も結構濡れてるから、これなら一瞬で破れるからね」

「あ……いやあ……。うん、はい、気を付けます。だからマジでやらないでね?」

「約束を守るならね」

「うん、それはマジで分かってるって」

「おー」

「ん……?」

「モガミン凄いな、ほら、こんなに……」

「それは鈴谷が弄ってるからでしょ」

「えーでもこれはー、うわあ♪」ニチャ

「人のであまり遊ばないでよ」

「いやー、なんか自分のテクでここまで濡れてくれると嬉しくて」

「いや、それ単に鈴谷が弄り過ぎなだけだから」

「えー？ ちよつとそれ心外だなー」プクー

「心外も何も事実だし」

「むー……あ」ピコーン

「今度はなにを……」

ペロツ

「くくつ、ちよ」

生暖かくぬめつとした感触を最上は感じた。

ビリつとした刺激が身体を貫き、最上はそれが鈴谷によるものだと瞬時に理解した。

スカートから顔を出した鈴谷は小さな舌をべろつと出して悪戯っぽく笑っていた。

「えへへ。やっちやった」

「やっちやったつて……鈴谷あ」

「もうここまで来たらこれくらいいいじゃない」

「何でしたの？ そんなところじゃないでしょ？」

「そう？ やる時は結構すると思うよ？」

「処女が何言ってるのさ」

「む、モガミンだってちよつとは想像してみなよ。もし大佐とそういう事することに
なつて実際にこんなことをされたらつて」

「そんな……大佐にそんな事……。汚いよ」

「だから汚くないつて鈴谷言ってるじゃん。きつと大佐だつてモガミンのここを見れば
こうやつて可愛がりたくなると思うなあ」

「……可愛がるのがそれと繋がるの？」

「今のももさつきまでのも全部含めて愛情表現みたいなものだよ」

「ふ、ふーん……」

「というわけでもつとしていい？」

「改めて率直に願ひされると凄く恥ずかしいんだけど……。美味しいの？」

「んにや、ちよつとしよっぱい感じはするけど、殆ど味はしなかつたよ。ネットで見た事
あるけど、無味無臭はその人が健康な証拠なんだつて」

「でも美味しくな……ああ、愛情表現だつて」

「そ、だからモガミンも今のうちに鈴谷で慣れておきなよ？」

「まあ、そういう事なら」

「流石モガミン話が分かるう！ それじゃ許可も貰った事だし改めて……ん」ペロ
「あ……」ピクン

部屋の扉の隙間からその光景を眺める二つの瞳があつた。

覗いていたのは三隈と熊野、二人は顔を真っ赤にしてその様子を固唾をのんで今まで見ていたのだ。

「……」

気付かれない様に静かに扉を閉めて少し離れた廊下まで二人は来ると、先ず熊野が頭を抱えてしやがみながら言った。

それに続いて三隈が心配そうな口調で彼女に話し掛ける。

「な、何をしていますのー!? あの二人はー!」

「く、熊野さんこれは由々しき事態ですわよ!」

「え?」

「もしこのまま私達があの部屋に住み続けたら、知らない間に大佐の為に後生大事に守り通してきたしよ、処女を……あの方たちに奪われてしまうかもしれないわ!」

「そ、そんな大佐の為に守りしてきた操が!」

熊野は三隈の懸念を聞いて赤いんだか青いんだかよく分からない顔色で身を守る様

に自分の身体を抱きしめる。

「熊野さん、ここは一時身の安全が期待できる場所に避難した方が賢明ではないでしょうか？」

「た、確かに。で、でも私にそんな安全な場所なんて心当たりが……」

「大丈夫ですわ。この私に一つだけ心当たりがありますの！」

「そ、それは本当ですか？」 パアッ

「……なるほどな。それであたしらのとこに来たつてワケか」

「はい！ その辺の殿方より殿方らしい麻耶さんなら頼りになると思いましたの！」

「三隈さんこれは名案ですわ！ 雄々しい麻耶さんと同じ部屋なら確かに私達の貞操に危険が及ぶ可能性はありませんわ！」

「……よく分かった。取り敢えずてめー達はそこに正座な？」

摩耶は目を輝かせて自分を頼つて来た二人に対して、額に青筋を立たせながら隣で苦笑する鳥海から彼女の慈悲によつて釘バッドからハリセンに変わったお仕置き様の道具を受け取るのだった。

第×49話 「ハグ」

「ユーちゃん改めローちゃんです！ はい！」

「やつと見た目と中身が一致するようになったな」

「ふふつ、ホント。見た目はもう完全にこっちの艦になったわよね」

「むう……瑞鶴さん、ロウちゃんそんなに前はおかしかったですか？」

「ええ？ あはは、そうね。わたしは前の方も良かったと思うな。なんか大人しそうに

見えて凄く人懐っこいところのギャップが良かったし」

「それ本当ですか？ えへへ、それは嬉しいです！ danke ですつて♪」ダキッ

「きやつ、もう甘えん坊さんねえ♪」ナデナデ

「え、そうですか？ Knuddle（クヌドエツ）おかしいですか？」

「え？ クヌ、何？ 大佐……？」

「俺に聞くなよ。多分雰囲気から抱擁の事だと思うが、俺もその言葉は聞いたことない

な。ロー、抱擁は Uarmung（ウムアルン）じゃないのか？」

「……」（あ、ドイツ語が全く解らないわけじゃないんだ。でもよくそんな単語知ってる

わね）

「あつ、えつとね。ドイツの人達はアメリカの人達みたいにあんまり人の前でえつと……は、ハグ？ はしないの。でも手紙やチャットとかでは結構愛情表現みたいな言葉は使われてて、さっきのはその時に使うんだよつて」

「ほう、スラングのようなものなのかもしれないな。あつちでは常用されててもこつちでは殆ど知らない辺り、辞書にも載つてはなさそうだ」

「うん、そうかも。というわけで大佐にもクスドエーツ！」ダキツ

「……」ポスツ

「ふあ？」

（あ、キヤツチされた）

「あ、あれ？ 大佐、どうしてローちゃんを高い高いするんですか？」

「あまりにも勢いがあったからついな。軽くて助かった」ヒヨイ

「きやつ……わあ、あはは♪」

（なにあれ、もう完全に父親に遊んでもらつてる子供みたいじゃん）

「ま、挨拶はこんなもんでいいだろう。これからも宜しくなロー」

そう言うのと提督は抱え上げていたローをゆっくり下ろすと、その頭を撫でながら改めて彼女に歓迎の言葉を贈つた。

ローは嬉しそうに撫でられながら笑顔で直ぐに言葉を返す。

「はい！ ローちゃんをこれからよろしくです！ ローちゃん、たつくさん頑張つて大佐のお役に立つてみせますつて♪」

「ああ、期待しているぞ」

「本当に明るくて元気な子よね」

「そうだな。元氣過ぎてこつちが疲れるくらいだ」

「ぶつ、なにそれえ、あはは。大佐まだそんな歳じやないでしょ？」

「ふつ、まあな。さて、仕事を……ん？ どうした瑞鶴？」

提督がふと先程まで普通に話していた瑞鶴が何か意味ありげにこちらを見つめている事に気付いた。

その様子は特に緊張感があるような張りつめたものではなく、何か行動をするのを迷っているような感じで、彼女は何やら口元に手を当ててそわそわしていた。

「……手洗いかな？」

「えつ、ちよ、ち、違うわよ！ えつと、何て言うかえーと……」（ローがハグしてるの見たらわたしもしてみたくなくなっちゃった、なんて恥ずかしくて言い難いようお……）

「？ まあ、準備ができたら手伝つてくれよ。俺は先に手を……」

ギョツ

「……」

「!？」

不意に後ろから現れて提督を抱きしめる加賀に、提督は慣れた様子で沈黙し、逆に瑞鶴はあまりにも突然の事にギョツとした。

「……何してる加賀?」

「ふふ、隙ありです」

「そういう事言ってるんじゃない。一体いつの間……いや、それはもういい。考えるだけ無駄な気がするしな」

「では続きをして構わないという事ですね?」

加賀はそう言うのと後ろから抱き付いている姿勢から提督の前に回って更に接吻ができそうな態勢をとろうとする。

が、当然提督は止めた。

「やめろ。お前を暫く秘書艦の候補から外すぞ」

「それは絶対嫌です。ごめんなさい、失礼しました」

「瑞鶴さん、これくらいどうって事ないですよ」ヒソ

「!」ビクッ

加賀は去り際に瑞鶴にそう耳打ちすると意外にもすんなり部屋を出ていった。

「……なんだったんだ」

提督は呆れた顔で溜息をつくが、彼女の不意打ち的な行動は既に珍しいものではなかった。軽やかぶりだけ振って気を取り直すと再び執務を再開する為に筆を執った。

瑞鶴がそんな提督の袖を掴んだのは、ちょうどその時だった。

ギユツ

「ん？」

「……あ」

「なんだ？」

「あ、えつと……」

「ああ、さっきの事か。どうした？ 結局俺に用だったのか？」

「あ、うん。え、えつとね」

「ああ」

「わ、わたしもその……大佐にギユツとして欲しい、な？」

「……」

（やった！ 言えた！）ドキドキ

「してやったら満足して仕事に専念できるな？」

最早理屈を言つてはぐらかす気も起らない辺り、俺も甘くなつたな。

提督は瑞鶴の願いを受け入れながら胸の裡で自分の事をそう考えていた。

「う、うん！ ただちよつとわたしもやつてみたかっただけだから！ それしてもらつたらもう凄く満足よ！」 パアッ

「分かった。じゃあ軽く……で、胸当てまで外すのか？」

「え？ あ、うん。なんかせつかくだし、駄目？」

「いや、そうしたいなら別にいいが」

「ありがとう♪」

スル……トスッ

「よしっ！」

瑞鶴は上半身に着けていた胸当てを外して着物だけになると、気合を入れる様に力の入った目で軽く自分に声を掛ける。

提督はその様子を珍しものを見る様な目で見ていた。

「……」（ただのハグでここまで気合を入れる奴は初めて見たな）

「じゃ、じゃあいい？」

「ああ」

「それじゃ……」

ギョツ

「ん……」

「……瑞鶴」

それは正確にはハグではなかった。

ハグは挨拶代わりに軽く抱き合うのが一般的に認知されているものだが、瑞鶴のそれは抱き合う姿勢ではなく、彼を自分の胸元に抱き締めるものだった。

それはどちらかという愛情の籠った抱擁に近く、提督は瑞鶴の胸の柔らかさと仄かに甘く感じる匂いに包まれながら、その雰囲気になれない様に気を入れ直さなければならなかった。

「あ……なに大佐？ あんまり喋らないでよくすぐいたい……」

瑞鶴は嬉しそうに顔をほんのり朱に染めながら提督の言葉に反応する。

「そう感じるのには自分の所為だろ。これはハグじゃないぞ」

「ん……ごめん、どっちかというところだったの」

「……」

提督はその言葉を聞くと、それ以上は何も言わず大人しくなった。

彼女がその事をちゃんと認識して、これが自分の望みだとはつきり言う以上、苦言を

呈するのも野暮に感じたからだ。

「あー、早くわたしも大佐とケツコンしたいなー」

「少なくとも翔鶴よりかは先にできるだろ……んぐ」

「こらっ、そういう結果だけ求めてるわけじゃないのよ。えいつ」

瑞鶴はそんな雰囲気を考えない事をいう提督を懲らしめるように更に窒息しない程度に自分の胸に彼の頭を抱きしめるのだった。

第×50話 「衣装」

「僕さ、大佐にずーっと前から聞きたかった事があるんだ」

「ん？ なんだ改めて」

「大佐ってさあ、僕の格好見て何か思うところない？」

「思うところ？」

「うん」

「……」ジツ

提督は最上に問われて彼女の姿を眺めた。

だが特に変わったところは見つけられず、提督は暫く見ている内に思案気に顎と撫でる。

最上はそんな提督の様子を見て何を思ったのか彼の目の前でスカートを両手でたくし上げた。

淡い緑色の清楚な下着が提督の目に飛び込む。

「はい」バサツ

「何故スカートを捲る」

「ヒント」

「それが？」

提督は鳩が豆鉄砲を食らったような目で最上を見ながら訊いた。

「うん」

「その行為が？ それとも下着が？」

「どっちも」

「どっちも？」

「うん」

「……取り敢えずもうスカートは元に戻せ」

「はーい」 スツ

「……」

「そんなに悩む？」

暫くして最上は10分ほど経つても未だに答えが思いつかないらしい提督に痺れを切らしたのか、少々不満げに腕を組みながら彼に訊いてきた。

提督はバツが悪そうにこう答えるしかなかった。

「悪いが全く見当が付かないんだが」

「ええ、うつそお」

「さっきのはそんなに大きなヒントだったのか？」

「うん。もうかなり核心だったよ」

「ふむ……もしかして」

ようやく正解を聞けそうだ。

最上は内心そんなに期待していなかったが、やっと彼から答らしい言葉を貰える事に少し嬉しそうな顔をする。

が、提督の答えはやはりというか彼女の予想通り少々方向違いのものだった。

「あ、分かった？」

「恥じらいを持っていない？」

「……どうしてそういう答えになるかな」

最上は提督の答えを聞いてついに明らかに顔も不満げな表情をする。

「事実だろ」

「いや、持つてるし。流石に僕だってパンツまで脱いだら恥ずかしいし」

「俺はさっきの行為の事を言ってるんだがな。というかそこまでいかないと羞恥心を感じないと言う方が異常だろ」

「そう？？」

「ああ」

「ふーん、まあいいや。で、結局分からない？ 降参？」

「降参する前に一つ確認したいんだが」

「なに？」

「降参したらペナルティなんかないだろうな」

「あつ」（その考え良いね！）

「……」（しまった墓穴を掘ったか）

「えつとね、それはあるよ」

「……遊びの範囲を出ない程度だろうな？」

「そうだね……うーん」

「元々決まっていなかったのならない方向で頼む」

「あ、ちよつと待ってよ。ある、あるから。えつとね、えつとー」

「やはりないようだな」

珍しく焦る様子を見せる最上に提督は立場的優位を確信する。

ならばこのまま押し切るべし。

そう行動を決定した彼はそのまま攻勢に転じようとするが、最上はそれを悟ったらしく、提督を押し止める様に手を前に突き出しながら言った。

「あるって！ あ、うん。じゃ、降参したら僕の言う事何でも聞く」

「応用が効きすぎて遊びの範囲を超えるか否かも本人の差配次第だぞそれ。ダメだ却下だ」

「そんなに無理言わないから、お願い！」

「……思いついてないんだな？」

「ん……認めたらこの案を受け入れてくれる？」

本当に最上にしては珍しい、貴重なともいえる顔だった。

彼女は本当に困った顔で、それでいてこのまま引き下がりがりたくないという女心と童心が一緒になったような、端的言えば凄く魅力的な顔をしていた。

恐らく無意識なのは間違いないと思われたが、更にそう言う格好が自然と上目使いだった事でその魅力は倍増しとなっていた。

「先に提示した俺の条件を順守するならな」

提督はそんな最上の様子に何故か自分が彼女を苛めているような居心地の悪さを感じて、態度を少し軟化させることにした。

彼女を愛らしく思うより前に、それに対して自分を責めるような考えになるところが実に彼らしいと言えた。

「約束する、絶対」

最上は真面目な表情でハッキリした口調で断言する。

「……ならいい、降参だ。で、結局正解は？」

「これ」ピラッ

「だから捲るなど」

再びスカートと捲る最上を提督は即座に注意するが、彼女は尚もスカートを上げながらその生地を揺らして何やらアピールしているようだった。

「だからこれだって」

「ん？ これって……スカートか？ 下着か？」

「スカート」

「……それを見てどう思う事があると」

「僕ってさ、最初は下はショーツ。パンツだったの覚えてない？」

「……そう、だったか？」

正解を聞いて提督は考える顔をしたが覚えていないようだ。

「ま、期待はしていなかったけどね。流石に」

「悪い、本当に全く覚えてない」

「いいよ。大佐なら仕方ないと思うし」

「なんか微妙に皮肉を感じるな」

「ふ……つく、まあね」

「それで？」

「ん？」

「スカートとショートパンツどっちが似合うかという事か？」

正解こそ言えなかったものの、提督は最上が一番聞きたかった事を何と自分から訊いてきた。

ここのところが鈍感そうで微妙にそうではない、場合によつては提督の質が悪い所と言えたが、少なくともその場では最上にとっては最良の言葉だった。

「え？ あー、おー、自分からその結論に辿り着いてくれたんだ。そうだね、結局はそれを聞きたいかも？」

「ふむ」

「どう？」

「正直……」

「うん」

「どっちもそう印象は変わらない」

「ま、そう言うとは思った。じゃ、どっちが女の子らしい衣服だと思う？」

本当に予想通りの答えだった。

だが、故に最上はそんな答えでも苦笑する事ができた。

実に提督らしいと。

「それは簡単だスカートだな」

これは誰が訊いてもそうだろうという自信の下に提督は即答した。

「じゃ、スカートね」

「ん？ 何がだ」

「これからもこれを穿き続ける事に決定したの」

「はあ……」

「……はい」ピラッ

「やめろ」

「うん、ふふ……やっぱりこれにしよつと♪」

最上はその日3度目の注意を提督から受けながらも嬉しそうな顔をしてこれからもスカートをはき続ける事を決めたようだった。

提督はそんな彼女をなんとなく手玉に取られたような微妙な気持ちで見ている。

「……」(相変わらず掴めないな)

第×51話 「温度差」

「え!? またですか!？」

大和は驚きに満ちた声を上げた。

彼女の前にはある装備の使用パスカードが置いてあった。

試製51cm砲、前回の任務に置いて収めた戦果が認められ、本部にその褒賞として配備された現状最強の主砲だ。

大和は以前それを提督より拝領したが、今回もそれを彼女に賜るのだという。

大和は提督の傍にいた姉妹艦の武蔵を見た。

「で、でも……流石にこれを私だけが二門も頂くわけには……」

51cm砲はその火力故にまた、その設えも非常に重厚で、長門型でさえ装備は出来ても完璧に使いこなすのは難しい代物だった。

つまりは大和型専用と言っても良い艦装なのだ。

そんな貴重な艦装を自分だけ二つも所有する事に大和は、武蔵に対して負い目を感じたのだった。

「ああ、私の事なら気にしなくていいぞ」

「え？」

軽い声でそう答えた武蔵を大和は意外そうな目で見た。

武蔵はからからと笑いながら特に気にした様子もなく続けてこう言った。

「私は使い慣れた46cmでいいんだ。勿論それを使いこなす自信がないわけじゃないが、どっちかを選べという事なら今はまだこれでも良いという程度だ」

「武蔵……」

「はは、だから、な？ 気にするな。それを使って大佐の役に立てばいい」

「武蔵……。うん、分ったわ。そういう事ならありがたく頂戴するわね。本当にありがとうm」

武蔵、と大和が心から感謝の言葉を彼女に送ろうとした時だった。

その感謝と喜びに満ちた気持ちは彼女がお礼を述べる前に武蔵がつい零してしまつたセリフによつて霧散したのである。

「まあなんだ。大和はやつぱりそういう大きくて使い辛いのを子供みたいに喜びながら使つてる様子が愛くるしいと思うからな。そういう純心で無垢な愛らしさも大佐にみせつけ……。おい」

「ぐす……」

武蔵が壁の隅に目を向けると、そこには大和が受け取つたカードを胸に抱き締めなが

らまた独りいじける様にしゃがみ込んで泣いていた。

武蔵は戸惑った顔で提督の方を見る。

「大佐？ 私は何か悪い事を言ったか？」

提督は軽く溜息を付きながら苦笑いをして言った。

「まあお前もある意味純粹だという事だ」

ポンツ

「つ……ん♪ ええ？」

不意に頭に手を置かれた武蔵は疑問の目を提督に向けながらも嬉しそうにするのだった。

「大佐、今回の作戦、調子はどうだ？」

ある日、秘書艦の那智が訊いた。

現在提督の基地は、本部より発令された何度目かの大きな作戦の任務に参加中で、序盤は難なくこなしているところだった。

その初期段階の作戦で挙げた戦果を認められ、先日本部よりその褒賞として試製51cm砲を拝領したばかりだ。

提督是那智の問いに普段通りの落ち着いた雰囲気ですええ。

「今のところは問題は……まあ相変わらず弾薬はアレだが、消費は許容範囲で進んでい
る。順調と言つて差支えないと思う」

その答えに那智は少し顔を綻ばせて微笑みながら言った。

「そうか、それは何よりだ。……そういえば新しく迎えた仲間がいると聞いたが？」

「ああ、葛城の事か。あいつは……」

提督が任務遂行中に見つけた新しい空母の話をしようとした時だった。

不意に執務室の扉がノックもなしに勢いよく開かれ、ちようど話のネタになりつつ
あつた本人が何やら焦つた様子で入つて来たのだった。

バンツ

「大佐あー！」

「葛城さん失礼ではないか。もつと落ち着いて行動してほしいと何度言えば……」

葛城の無礼を那智は厳しくも呆れた様子で窘めた。

葛城は雲龍型空母の三番艦で、雲龍の妹にあたる。

発見した当初こそ出会う前まで提督は、特に根拠もなく姉に似て少し冷めてるか大人
しい性格かと予想していたが、実際に彼女に会つてみてそのイメージは全く違つていた
と即理解した。

『葛城よ！ 言つておきますけど正規空母ですからね、正規空母！ そのところ間違

えちや嫌よ!」

初見にして上司である提督に会つて早々こんな態度を彼女は取つてしまつたが故に、葛城は妹が見つかった報告を受けて特別な配慮でその日秘書艦を務めさせてもらつていた雲龍に早速怒られる羽目になつたのだつた。

『葛城……ちよつとこつち……』

葛城はまさか雲龍が目の前に現れると予想していなかつたのか、冷めた目でこちらを見る彼女に殊の外驚いたようだつた。

そしてさつきとは打つて変わつて後悔に染まつた青い顔で大人しくなり、そのままズルズルと彼女に引きずられて何処かへ連れて行かれたのだつた。

その時雲龍からどんな説教をされたのかは定かではないが、葛城は取り敢えずその日は大人しくなつたのであつた。

だが……。

「え、いやごめん! だけどちよつと聞いてよ!」

やはり根本的な騒がしきは直つてはいなかつたようだ。

「どうした葛城」

更に厳しい顔で歩み寄ろうとした那智を手で制しながら提督はもう慣れたといつた

様子で部屋を訪れた葛城に聞いた。

「ねえ、大佐！……これ本当に私が使っているの!? だってこれ烈風とか流星改とか……凄く強い艦載機ばつかじやない！」

葛城はそう言つて興奮冷め止まないといつた顔で目をキラキラさせながら提督の前に両手に持つた艦装のパスカードを突き出した。

その手には確かに彼女が言つた様に、艦載機の中では強力で貴重な部類に入るものが入つてもあつた。

提督はそんな葛城に対して別段慎重な口調でもなく、こう言つた。

「ああ、構わないぞ。お前は正規空母だしこれくらいの装備でもいいだろう。それに別に艦載機はそれだけというわけじゃないしな。余裕はあるんだ」

提督の言う通り彼の基地は特別艦娘用の装備に関してはかなり余裕があつた。

というのも一時期最低限の任務のみをこなしながら艦装を充実させる為に開発に集中した時期があり、その関係でこの基地の兵器庫には艦載機は勿論、電探から主砲、装甲などに至るまで割とあらゆる艦装が充実していた。

「本当!? 本当なのね!? 大佐ありがとう！」

葛城は勿論自分が正規空母だという自覚と自負はあつたが、それでも実際の記録では戦果も無くその役目を終えた当時の自分に軽いコンプレックスを持っていた。

故に一番良い艦載機が欲しいと普段から主張しながらも、加賀や飛龍といった戦歴のある空母との性能や経験の差も実はしっかり自覚しており、結果的に流星や紫電といったワンランク下の艦載機が回されても仕方なしと思っていた。

だがその予想に反して本当に一線級の艦載機を提督からその所持を認められ、葛城はその嬉しさから顔を輝かせて飛び着くように机の前から彼に抱き付いた。

ギユツ

「……っぐ」

「お、おい!?!」

久しぶりに感じる強力な圧力と締め付ける力に小さな呻き声を漏らす提督、そしてその横では那智が明らかに注意ではなく嫉妬するような顔で怒った顔をするのだった。

第×52話 「役割」

「秋津洲です！ よろしくお願いするかも！」

「宜しくな。歓迎する」

「加賀です。よろしくね、秋津洲さん」

「はいー！」

「大佐、こちらを」 スッ

秋津洲の元気な挨拶に場の雰囲気緩和、提督は加賀からある書類を受け取った。

それは目の前の秋津洲に関する能力表通達書だった。

提督はそれを確認して少し怪訝そうな顔をする。

新しく迎えた艦娘の能力は大凡、本部からデータとして基地のコンピュータに送られてくるからだ。

なのに今回秋津洲に関してはデータとは別に紙面にてその能力について通達が来た。

これは極めて珍しい事だった。

「……………」

提督は足された通達書の紙面を見て眉を寄せる。

(なるほど、別に彼女に関しての通達書が来たのはこういうわけだったのか)

提督は通達書の内容を確認して全てを理解した。

その内容を単純に言くと、秋津洲の運用上の注意のようなものだった。

水上機母艦ではあるが、現状装備できる艦装がかなり限られていて、加えて秋津洲本人の対空能力が前述と一部被るが、水上機母艦としては明らかに低い事。

『故に彼女の運用は本部による調整が完了するまでは、危険性の低い任務で偵察にのみ従事させるべし』

簡単に言うとそんな事が書かれていた。

「……」 チラッ

提督は書類の端からちらりと目の前にいる秋津洲を覗き見た。

「……」 ジワッ

見ると秋津洲は提督が見ている書類の内容を予想していたのか、彼女のみが現状唯一装備できる「二式大型飛行艇」、通称「二式大艇」のパスコードをぎゅつと胸の前で抱き締めて悔しき泣きを我慢するような顔をしていた。

「……」 (なるほど、自覚はあるのか)

提督は少し難しそうな顔で目を瞑って頭を搔くと、ふと秋津洲にこう言った。

「秋津洲、そのカードを俺に渡しなさい」

「!!」ブワッ

その言葉を受けた瞬間ついに秋津洲は目を見開いて無言で大粒の涙を流し始めた。

「ふ……………うう……………うええええ」

「……………ギユッ

その様子を見ていた加賀が静かに彼女に近寄り優しく抱き締める。

「大丈夫、落ち着いて。大佐は何もあなたが不必要だとは言っていないわ。ちゃんとあの人を見て、話の続きを待つよ」

「う……………ぐす……………ひっ……………ぐす……………」

加賀にあやされ、母親の如く優しい言葉に少しは落ち着いたのか、秋津洲はまだ流れる涙を止められずに拭いながらも、再び提督の方を真っ直ぐに向き直った。

提督はそれを確認して小さく咳払いをして続ける。

「んっ、秋津洲、まあシヨックだとは思うが安心しろ。俺は別にお前から大事な装備を取り上げるつもりはない」

「う、うん……………」グス

「俺はただ、お前に遠征や通常の警備任務にも出て貰って活躍の場を提供したいだけな

んだ」

「え……？　かつや……く……？　わたしが……？」

「そうだ。先ずお前は我が基地で貴重な3人目の水上機母艦だ。遠征任務にはお前の艦種でしかこなせないものもある。だから先ずはそこに活躍の場がある」

「う、うん……！」　ゴシゴシ

「先に着任している先輩の千歳姉妹がいる。遠征の事についてはあいつらに訊くといいだろう。きつと歓迎してくれるはずだ」

「は、はい！　了解したかも！」

秋津洲は此処まで来て大分持ち直していた。

自分が決して不必要な存在ではなく、逆に必要で貴重な存在だと提督に言われて、折れかけていた自信を取り戻していた。

秋津洲はもう涙を完全に拭い切り、少し充血した目で真っ直ぐに提督の目を見て元気に返事をした。

提督はその顔を見て僅かに微笑みながら続けた。

「良い意気込みだ。あと遠征の後に言った警備任務についてだが」

「はい！」

「お前は、あくまで今のところは対空能力に不安要素がある、だからちゃんとその点が改

善されるまでは飛行艇以外の武器を使って砲撃艦として任務に当たってほしい」

「砲撃艦……？」キョトン

「ああ、そうだ。ちょうど15.5の副砲がまだ余っていたはずだ。加賀？」

「はい問題ありません。配備可能です」

「ん、お前にはそれを幾つか装備して貰って他の練度が低い駆逐艦との警備に、そして何れ練度が上がったなら今度はお前自身がその子らを引率する旗艦として活躍して欲しいんだ」

「旗艦……！ わ、わたしが!？」

「旗艦は何も強さだけが求められるわけじゃない。経験を積んで、それを活かして皆を導く。これが何よりも重要なんだ」

「う、うん……。でも……わたしにできる、かなあ……」

「不安なのは当然だ。だからこれから遠征で、任務でお前は経験を積んでいくんだ」ポン
温かい言葉と共に方に置かれた手の感触に、秋津洲は提督を見上げる。

提督はそんな彼女を厳しくも優しい目で見ながら訊いた。

「努力できるか？」

「……うん！ わたし頑張るか……頑張る！」

「期待しているぞ……ん？」

ギョツ

提督は不意に腕を秋津洲に抱き締められた。

秋津洲は嬉しそうにその腕を抱きながら満面の笑顔で言った。

「大佐、大好き！」パアッ

メインストーリー（第七章）

第1話 「命名」

トントン

扉を叩く音に提督は読んでいた本から顔を上げある。

「誰だ？ いいぞ、入れ」

「失礼します」ガチャ

「失礼します大佐」

提督の許可と共に部屋に入ってきたのは先日仲間に迎えたばかりの戦艦リットリオとローマだった。

提督は着任して間もない二人が自分を訪ねてきた事を軽く驚きながらも、本を読むために掛けていたメガネを外して彼女達を迎えた。

「ん？ どうした二人して」

「夜分に申し訳ございません。あの、不躰で申し訳ないのですが実は大佐にお願いがあります」

言葉通り申し訳なきような顔をしたリットリオが口を開いた。後ろに控えているローマは相変わらず不愛想にツンとした顔をしている。

「ふむ、で、改まってなんだ？」

「そのお少々小耳に挟んだのですが、大佐は海外艦に、この基地でのみ通じる愛称、みたいなものをお付けになっていると聞きました……」

「ああ、マリア達の事か」

「マリア……」

提督の口から洩れた言葉に微かにローマが反応する。

一方リットリオはそれを聞くと明らかに明るく、期待に満ちた顔で提督を見ながら言った。

「そう、それです！ えつとだからそのお……。私達も一応立場的には……と申しますか、そのお……」

「名前を付けなさい大佐」

「ローマっ」

願いを通り越して命令口調で切り出したローマをリットリオがすかさず叱る。

本人に他意はなく、これはローマの素の性格のようだが、上官である提督を前でも例外なくこの態度はやや問題と言えた。

叱られたローマは姉にだけは頭が上がらないのか、一瞬首をすくめると拗ねたような顔で視線を逸らしながら提督に詫びた。

「つ……ごめんなさい。失礼しました」

「いや、まあいい。ふむ、そうか名前、か」

「はい！ できましたら私達にも！」

「私は別にいいんですk」

「ロ・オ・マ？」

「……ごめんなさい」

「……ふむ。少し時間をくれるか？」

リットリオとローマのやり取りを苦笑いしながら見ていた提督はそこで少し咳払いをして椅子に少し深く座り直すと、顎に手を当てて暫く天井を見上げて考え始めた。

「ええ、どうぞ遠慮なく！」

「早くしなさいよ」

「ローマ！」

「ひっ……ごめ……」

「……」（何と云うか見てて飽きないな）

10分程経った頃、提督は上を見ていた顔を元に戻すと再びリットリオの方を向いた。

「どうやら名前が決まったらしい。

リットリオは待つてましたとばかりにワクワクした様子で、一方ローマは態度は平静を装っていたものの、時折視線をチラチラと提督に向け、気になる様子は隠せないようだった。

「よし、一応考えた。まずはリットリオからだ」

「は、はい!」

先に声を掛けられてたリットリオが目を輝かせて提督を見る。

「お前には候補が2つある」

「え、2つも!」

「ああ。マリーアとローザだ」

「マリーア、ローザ……。あの、因みに何かから思い付かれたのかお聞きしても?」

思ったより女性らしい名前の響きにどちらの名前も気に入ったらしいリットリオは、早速その由来を提督に尋ねた。

興味に満ちた目で自分を見るリットリオの視線にややプレッシャーのようなものを感じながら、提督はなるべく彼女の期待に応えられることを願いつつ説明を始めた。

「ん……世にイタリアという国名が初めて出た時のな、イタリア王国国王ヴィットーリオ妃の名前だ」

「イタリアの王妃……！」

リットトリオはそれを聞いて、まるで子供が劇でヒロインの役を貰った時のような嬉しそうな顔した。

「まあ王妃と言ったが、実はこれには少し語弊があるんだがな」

「え？」

「実はな、この二人はどちらも生きている内に正式にイタリア国王の王妃にはなっていない」

「え、それはどういう……？」

「まずマリーアだが、彼女は正式な国王の妃ではあったが、国がイタリア王国に統一される前に亡くなったんだ。つまり国王の妃ではあったものの、“イタリア王国の王妃”にはなれなかったんだ」

「ああ、なるほど。それではもう一人のローザという方は？」

別にそれなら王妃として記録されなくても仕方がない、だが結果的には似たようなものだ。

リットトリオは提督の説明を聞いて特にその事を気にすることもなく納得した様子で、

続いてもう一つの候補『ローザ』の由来を訊いてきた。

すると提督は何故か慎重な態度でやや衝撃的な話を始めた。

「うん、彼女はな……。その、立場的には国王の愛人だったんだ」

「あ、愛人……？」

予想外な言葉にリットリオは驚きで目を丸くする。

そしてその傍らにいたローマは、提督が姉に不名誉な名前を付けようとしていると判断したらしく、厳しい顔で彼を見る。

「ちよつと大佐……」

「あつ、い、いいのローマ。すいません大佐。その方のお話の続きをお願いして宜しいですか？」

「姉さん？」

「大丈夫よ。大佐も何のお考えもなくその名前を選ばれたわけではない筈だもの。そうですね？ 大佐」

「ああ、一応思い至つたちゃんと理由はある」

「……お聞かせ頂きましょうか」

「ローマ……もう……。大佐、お願いします」

あくまでまだローマは提督を疑っているようだ。

冷めた目でこちらを睨むように見ている。

提督はそんな妹を宥めながら困った顔で話の続きを催促するリットリオの為に、一度軽く咳払いをすると再び話し始めた。

「ん、この人物はな。確かに国王が抱えた幾人もの愛人の一人ではあったが、その中でも特に彼の寵愛を受けたと見られる女性なんだ」

「まあ」

「……寵愛、と申しますとどの程度の?」

「国王の部下に過ぎない父親を持つローザだったが、彼はあまり身分の差を気にしなかつたらしい。ローザは彼の愛人になつて直ぐに彼の子を身籠るくらいには好かれていたようだ」

「何て節操がない……」

ローマは呆れ切つた顔をしていた。

そんな人物が例え自分が人の姿を得る前に仕えていた祖国に直接関係ないとはいえ、その前身となる国の王だつた事は認めたくなかつた。

リットリオも流石に少々焦つた様子で、先程の話から自分なりに美談と感ぜられる箇所を妹に理解してもらおうとした。

「え、でも直ぐに子供を授かるくらい好かれるなんて何だか凄く愛を感じない?」

「私は余りにも尻軽が過ぎると思うのですが」

「そ、そうかしら？」

「……まだ続きがあるんだが」

提督は旗色が悪そうなりリットリオに助け船出すべく続きを話す事にした。

リットリオはこれ幸いとばかりにホッと顔で先を促す。

「そ、そうよ！ まだ話は終わってないのだから続きを聞きましょうローマ」

「これ以上自堕落な陛下の話が続くのですか？」ジト

「まあ聞け。確かに彼女は国王の寵愛を受けたとは言え、愛人の一人に過ぎなかったのは事実だ。だがな」

「なんです？」

「……」ドキドキ

「ある時国王が大病を患い非常に危なかった事があったそうだ。そんな折彼は自分の死期を予感してある行動を取った」

「ある行動……？」

「後継者の指名でしようか。常識的に考えて」

「違う、それはな。ローザと死ぬ前に結婚をしようとしたんだ」

「まあ……！」

「……」

予想外の答えにリットリオは顔を輝かせ、ローマも姉程ではないにしろ言葉が出ないくらいには意外そうな顔で驚いているようだった。

提督はここが畳み掛けどころだと判断し、更に話を続けた。

「国王は式を急ぐ余り教皇の到着を待たずに祝福を電報で求めたりもしたようだな」

「そんな……それほど亡くなられる前に彼女を……」ウルツ

「……しかし身分の差と言う如何ともし難い壁があります。それについてはどう決着したのでしょう?」

「国王はローザに爵位を与えて優遇もしたようだが、これは多分他の愛人との差を示すためだったかもしれないな」

「……あまりその配慮は功を奏しなかつみたいですね」

ローマがメガネのブリッジを上げながら勘の良い指摘をする。

「まあな。式を挙げる際のわだかまりも緩和させる目的もあつただろうが、結局公式な式とは認められなかつたみたいだ」

「貴賤結婚……ですか?」

「そうだ。当然彼女の子には王位継承権は認められなかつた」

「結局身分の差は最後まで残ってしまったのですね」

「可哀そう……」

二人は目に見えて沈んだ顔をした。

リットリオはともかく、ローマも同じ顔する辺り、やはり彼女も近付き難い雰囲気纏っているとはいえ、乙女である事には変わりなさそうだった。

提督はそんな彼女達まだ話が終わっていない事を告げた。

「まあそう悲しい顔をするな。まだオチが終わってない」

「え？」

「結果が分かってしまっていると言うのにこれ以上何が？」

「確かに身分の差自体は埋まらずに終わった。だがな、この結婚式いつしたと思う？」

「え、それは……国王陛下が危篤の時ですよ、ね？」

「そうです姉さん。大佐はそう言っていました」

「いや、違う。俺はあくまでその時国王はそうしようとした、と言っただけだ」

「え？ ああ、そういえ……ば？」

「……確かに」

「実はな、国王とローザの結婚式はその時にはしなかったんだ」

「え、そうなんですか？」

意外な事実のリットリオは再び目を丸くして驚く。

ローマも合点がいかなそうな表情をしながら、何故式を挙げなかったのか早速推理を始めた。

「ですが、式自体は挙げたんですよね？ 時期をずらした……？ いや、陛下は事を急いでいた筈……。という事はまさか……」

「そうだ。国王はその時持ち直したんだ」

「えっ」

「やはり」

「正式にローザが国王と式を挙げたのは実はその時から8年後だ」

「8年……」

「そんな後に」

「例え貴賤結婚であろうと、一度目は死期を予感して焦り、二度目は満を持して改めてした辺り、国王の彼女に対する愛情の深さがよく解るとは思わないか？」

「確かに……そうですね！」

「……ふむ」

「まあ流石に二人は一緒の墓に入れなかったが、だかそれでも俺は正式に認められなかったとはいえ、マリーアの死後数十年に渡って彼女が国王の傍に在り続けたのは相応の愛があった証だと思っぞ」

「そうですね。私、納得しました。大佐が彼女の名前を候補に挙げた理由」
「……まあ悪くは無いと思います」

提督の話を最後まで聞いて、二人はどうやら納得した様子だった。

リットリオに至っては感動したのか目に涙を浮かべていた。

「そうか、良かった。じゃあ理解を得られたという事で改めて訊こうか。リットリオ、お前の名前はどっちがいい？」

「……」

リットリオは提督にの問いに対して僅かな沈黙の後、やがて顔をあげると彼の顔を見て言った。

「ローザ」

「本当にそれでいいんだな？」

「はい！ マリーアでも良いとは思いますが、それだとマリアさんと似てしまいますからね。でしたら、先程のお話を気に入ったの事もありますし、私はローザを選びたいと思います」

「そうか、分かった。ならこれからはお前はそう呼ぶことにしよう。宜しく頼むぞローザ」

「はい！ 素敵なお名前ありがとうございます。大佐」

「それじゃ次はお前だな」

姉の命名の流れを見て、実は少し前から内心ワクワクしていたローマが提督に声を掛けられてピクリと反応する。

自分にはどんな名前が付けられるのか、姉の時同様期待に満ちた目をローマは提督に向けた。

「……」

「お前の名前は一つだが、これも一応よく考えたつもりだ」

「……拝聴します」

「。パスタだ」

「」

「え」

言葉に言い表せない衝撃がローマの体の中を走った。

そのあまりにもぞんざいに思える名前に彼女は言葉を失い、ついでの思考も止まった。

だが提督は無慈悲にもそんな彼女を気にかける事なく名前の決定を告げる。

「お前はパスタでいいだろう」

「」

「え、ちよつと大佐それはあの……」（あ、もしかして）

流石に見ていられなくなったリットリオが何とかして妹を救おうと試みるも、内心は彼女は何故提督がこんな裁定をしたのか何となく予想できていた。

「とやかに言うつもりはなかったが、姉が再三の注意したにも関わらず直らなかつた上官に対する態度。これはある程度反省をしてもらう必要があるだろう。それまではお前はパスタだ」

「パ……ス……」（この私がパスタ？ 栄えあるローマ帝国の『Roma』の名を冠する私が……国を代表する食材とはいえ、まさかの乾燥した麺……？）

「誤解するなよ？ 俺は規律さえ守っていたらそこまで厳しくはしない。だがお前の場合は根本的に性格に問題があるようだ。故に軍と言う組織の中で生きてもらう以上それを反省を促す意味でもこの名前を……」

「（めんなさい）」

提督が説教を言い終える前に目の前でローマが深々と頭を垂れていた。

だが提督は黙ってそれを見ている。

「……」

「Mi dispia ce molt o……」（ミディスピアアーチェモールト）」

*大変申し訳ございません

「反省したか？」

「はい」

「もう姉に迷惑を掛けないか？ 規律を守るか？」

「誓って」

「そうか……」

「名前を……」

涙を溢れさせ、すぐるような目で提督を見るローマ。

もはやそこにはついさつきまで高慢な態度をとっていた女の姿はなく、叱られた子供のように小さく反省した女子の姿があった。

提督はそれを見て考えるように腕を組む。

「ん……」

「厚かましいのは承知でお願い致します。私にも素敵な心満たされる名前を……」

「……いいだろう。じゃありウィアかユリアから選べ」

「あ……それって……」

名前を聞いただけでローマにはその由来が分かったようだ。

彼女は提督の口からそれを聞いて喜色に満ちた顔をする。

「流石、ローマの名を冠する戦艦だけあるな。もう分かったか」

「はい、勿論です。リウイアは古代ローマの初代皇帝の妻、そしてユリアは皇帝の死後に同じ人物が名乗った名前ですよね」

「その通りだ。彼女は権勢欲が強かった人物とも言われるが、やはり俺は権力者でありながらその時代にしては珍しい良き妻、良き母としての面を評価したいと思うところだ」

「私もかねがね同意します。同じ女として尊敬し、学ぶべき点の多くはやはりその面にあると思うので」

「ふむ、そうか。ではローマ、選べ。お前はどの名前がいい？」

「……」

ローマはリットリオの時と同じく俯いて暫く黙考し、やがて顔をあげると提督を見て言った。

「では私はリウイアを拝命したく存じます」

「そうか、お前は姉と違って先を取るか」

「はい。ユリアも捨て難いのですが、やはり自分としては皇帝が死して尚威光を保ち続けた頃よりかは、妻として皇帝を支えた頃の彼女に魅力を感じますので」

「なるほどな。そういう意味でなら二人とも選んだ理由は似ているとも言えるな」

「ふふ、そうね」

「ふっ……言われてみれば」

「……ではローザ、リウイア」

「はい！」

新たな名で呼ばれた二人は揃って姿勢を正すと張りのある声で返事をした。

「改めて宜しく頼む。これから俺を、この基地を支えてくれ」

「了解しました！」「了解です！」

第2話 「花見」

「よお、大佐じゃねーか」

「ん、天龍」

「何してんだ？ どっか行くのか？」

天龍は私服の姿をした提督を見て、それが気になって訊いた。手には少ないながらも何かが入ったリュックを持っている。

「ああ、花見だ」

「は？ 花見？」

「ああ、そうだ。春だしな」

「春だしって……けどよ……」

天龍は窓から常夏の日差しと穏やかな波が寄せている砂浜を見た。

いくら日本が今季節は春だと言っても、ここは常に夏真っ盛り。

窓から覗く風景からは桜の一本も確認できず、加えて春の雰囲気など微塵もなかった。

こんな場所で花見とは……。

天龍は不可解な顔をするしかなかった。

「言いたい事は解るぞ。だけど花見くらいいいじゃないか。気分だけでも」

「気分、ね。まあやりたい気持ちには解らなくもないけどよ。何処でするつもりなんだ？

誰かと行くのか？」

「いや、一人でふらりと行くつもりだった。場所は、何処か郊外の人気のない公園でも」

「え、一人か」

「ん？ ああ」

「いくら治安を委託されているとは言っても、他国の軍の指揮官が一人で人気のない所に行くのはちよつと不用心じゃないか？」

「……まあ、絶対に安全とは確かに言えないと思うが」

「……連れてけよ」

「ん……？」

「……」ジツ

不意に一緒に花見に連れて行けと言う天龍を提督は意外そうな顔で見た。

天龍は恥ずかしそうに手を後ろで組みながらも目は真っ直ぐに提督を見つめ、やはり

一緒に連れていけとしつかりその意思を訴えていた。

「護衛を言い訳とかにはしないんだな」

「勿論護衛もやる気だ。けどほらまあ……だな？　一緒にいきたい」

「いいぞ。行こう。服替えて来るか？」

「おう！　ちよつと待ってろよ！」

提督に動向を受け入れても貰い、天龍は子供みたいに嬉しそうな目をして着替える為に意気揚々と部屋を出て行った。

それから十数分後。

「よつ、お待ちせー！」

「お、来たか」

元気な返事と共に現われた天龍は普段と大分違う印象を与える格好をしていた。

上は上着だけ脱いでボタンを1つ多く外したワイシャツだけとなり、袖は捲っていた。

そして下だけはスカートからジーパンに履き替えていた。

「下だけ変えたのか」

「ん？　ああ、郊外とかだと蚊とか多そうだからな。刺れたくないし」

「なるほど」

「……」ジッ

「ん、なんだ？」

提督は天龍の服装を見るなり何か思う所があるように顎に手を当てる。

「天龍」

「うん？」

「花見に行く前にちよつと寄り道していいか？」

「ああ？ ああ、別にいいけど」

「た、大佐ここつて……」

天龍が居心地が悪そうに身を縮める。

提督が寄り道すると言い、彼女が連れてこられたのはとあるデパートの若者向けの物を主に取り扱っている装飾店だった。

「別にいかがわしい意味じゃないけどな。普段よりボタンを外したシャツを見たら、着けてたら何となく似合う気がしてな」

「だ、だからって別に俺なんかに」

「珍しく俺が気が利くような事を思いついたんだ。ここは受け入れてくれると嬉しいんだが」

「……まあそれなら」

「悪いな。……」

「どうした？」

「いや、自分から連れてきておいてなんだが、やっぱり女性の好みとかは自信がなくてな。どれが良いか選んでくれないか？」

「え？ そんなの大佐の好みなら何でもいいぜ？」

「本当か？」

「ああ！」（せっかく大佐からのプレゼントだしな。何を貰っても記念になるし）

「ふむ……じゃあ、これは？」

「え？ どれ？ あ……」

提督が指した物を見て天竜の目が留まる。

彼が選んだのは天然の翡翠の小粒をペンダントに加工した非常にシンプルなものだった。

それは並んでいた物の中でも安い方ではあったが、彼が値段で判断したとも思えない。

故に天龍は逆にそれが提督らしくて彼が本当に自分の勘で選んだものだと確信できた。

「お、いいじゃねえか。それでいいぜ」

「……本当にいいのか？ 安いぞ？」

「大佐は値段で選んだんじゃないだろ？ 俺に似合うと思ったんだよな？」

「まあそうだが……」

「ならこれでいい。俺も気に入ったし♪」

「そう、か？ なら……すいませんこれを——」

「つくう……！ 天気良いなあ、こんな所に公園なんてあつたんだな！」

提督が気持ちよさそうに伸びをする天龍を連れてきたのは本当に人気のない郊外の自然公園だった。

自然公園と言えど、都心部と違って人工的に草木を植えずに天然に生えたものをそのまま使用し、申し訳ない程度に整えられた順路のみが唯一の人工物と言えた。

「花は野花くらいしかないが、代わりに大きな木がたくさんあるだろう？ そこで寛ぎながらちらほら目に映る野花を着に酒を楽しもうと思つたんだ」

「なるほどなあ……。確かにこういうのも悪くないな」

「あの木の所に行こう。木陰も大きいから涼しいだろう」

「ん、分かった」

「…………ふう、風が気持ち良いなあ」

「…………そうだな」

提督が指した一帯の中でも特に大きい木の下で、天龍は腰を下ろして気持ち良さそうに全身に風を浴びる。

後ろ手に手を付いて更に風を浴びる為に状態を前に突き出す天龍の胸元で、先程提督に貰った翡翠のペンダントが小さく輝いていた。

「酒、持ってきたのか？」

「ビールを2本だけだ。後はツマミとして現地で買った豆がある」

「いいじゃねえか。別に酔いたいわけじゃないし、これくらいで丁度良いと思うぜ」

「ほら」

「ん、サンキュ」プシッ

天龍は提督からビールの缶を受け取ると早速蓋を開ける。

提督もそれに続いて缶を開け、懐から懐紙を取り出すとそれを芝生の上に敷いて豆を置いた。

「いろんな豆があるな」

「どれも生で食べれるぞ。酒に合うのも確認済みだ」

「さすが大佐だな。んじゃ、頂きます……」パクッ

「どうだ？」

「んー……んまいつ」ポリポリ

「それは良かった」ゴクツ

「あれ？ 大佐が飲んだビール俺のと違うね？」

天龍は提督が手に持っているビールの缶の色が自分のと違う事に気付いた。

提督は天龍の指摘にビールを口に運んでいた手を止めて、そのビールの銘柄を見ながら答えた。

「生憎店に並んでたビールが在庫が入荷がまだで売り切れる寸前だったんだ」

「あー、なるほどなあ。……なあ」

「うん？」

「そっちのビールも味見したい」

「味はそんなに変わらないぞ？」

「いいじゃん。これしかないんだしさ」

「まあいいが。ほら」

「さんきゅー♪ ん……」

提督に手渡されたビールを見て何故かそれを飲まずに見続ける天龍。

提督はそれを不思議そうに見ながら訊いた。

「どうした？ 飲まないのか？」

「ああ、いや飲むよ、飲む！」ゴクツ

「……」

「どうだ？」

「……美味しい。へへっ♪」

「……？ そう、か」

「んっ」サツ

何故か嬉しそうな顔をする天龍が不意に彼に自分が元々飲んでいたビールを差し出してきた。

「ん？」

「大佐も、俺の飲んでいいぜ」

「あ？ ああ、じゃあせっかくだから……」ゴクツ

提督が自分が飲んでいたビールを飲む様子を見て、天龍がどこか真剣な顔をして訊いた。

「美味しいか？」

「まあ……。やっぱりあんまり味は変わらない気がするが」

「んっ、そっか♪」

素っ気ない答えだったが、それでも天龍は何故か妙に嬉しそうな笑顔でそう言った。

第3話 「不一致」

「暁改二おめでとー！」

「おめでとうなのですー！」

「おめでとう……！」

「えっ」

パーンツ

暁が部屋に入るなり突然、雷・電・響（ヴェールヌイ）といった自分の妹分達が祝福を出迎えてくれた。

準備良く雷などは準備良くクラッカーまで用意していたようで、部屋に入ってきた暁を見るや待つてましたとばかりにその紐を引いた。

「……」

乾いたクラッカーの音と僅かな火薬の臭いが立ち込める中、果たして祝福された当事者である暁は何故か心ここに非ずといった顔でポカンとしていた。

「あ、あれ暁どうしたの？」

「クラッカーに驚いたんじゃないのかな？」

「電びつくりしたのです。やっぱりいきなり鳴らしちゃうよくなかったんじゃ……」

雷達は暁の予想外の反応に動揺して祝福ムードから一転して心配そうな顔をする。

だがそれでも暁は特に何を話すでもなく、心配する彼女達を前にして微かに唸るような声を漏らす程度の鈍い反応しか示さなかった。

「……」

「ね、ねえ本当にどうしたの？」

「暁ちゃん？」

「らしくないな。何かあった？」

「……ない」

やっと何か言葉らしい音が聞こえたがまだ何を言ったのか判らない。

雷はもう一度お願いする様に耳に手を当てて訊いた。

「え？ なに？」

「レディになつてな——い！」

「——」

暁の絶叫に、今度は3人が言葉を失ってポカンとした顔で暁を見た。

「なに？」

提督は怪訝な顔で暁に聞き直した。

「だ・か・ら！ 暁、せつかく改二になったのにあんまり前と変わってないのよ！」

「……いや？ 少なくとも改造結果を見る限りは能力は飛躍的に……」

「そうじゃないの！」

「？」

成長していると言うのにしてないという暁。

提督は彼女が何を言いたいのか解らず困っていた。

「だから、能力は上がったかもしれないけど見た目が前とあんまり変わってないじゃない

いー！」

「ああ……」

そこでようやく提督は納得したと言った顔をした。

つまりは彼女も龍驤と同じなのだ。

「……もつと大人に近い外見になりたかったのか？」

「そう！ そうなの！」

「……具体的にはどんな風になりたかったんだ？」

「え？ そうねえ……やっぱり神通さんみたいなお淑やかで大人なレディになりたい

わ」

「お前が神通のような……」

提督はふと天井を見上げ、暁の口調で喋る神通を想像した。

神通『お子様言うな!』

「……無理だろう。絶対」

「何で!?!」 ガーン

あまりにもハッキリと否定されショックを隠し切れず涙目で叫ぶ暁。

だが、無情にも提督はその様を見ても容赦なく続けた。

「改造は基本的に対象の能力を向上させる為に行うものだ。その過程で五十鈴の様に副次的効果が身体的特徴として表れる事があっても、ベースとなっている艦娘の体つきが変わるなどという事は先ず有り得ないだろう」

「そ、そんなあ……」 ジワッ

「素直に前より強くなつた事を喜んだらどうだ?」

「ええ……でもお……」

「じゃあ考えるんだ。今の姿のままでも得をしていると言える事を」

「今の姿でも……?」

提督の提案に滲んだ涙を拭って何とか止めた暁はふと考える。

(今の姿でも得を……。駆逐艦じゃないとできない……。してもらえない体験……。?)

「……」 キョロキョロ

「？」

何を思いついたのか暁は、その時自分の周りに提督と自分以外の気配がないか確かめるように辺りを見回した。

そして気配がない事を確信すると今度は提督をジッと見上げてきた。

「……」 ジツ

「？ どうした？」

「だっ！」

「ん？」

「抱っこ、して」

「……」

意外なお願いについて真顔になって暁を見返す提督。

だが暁は恥ずかしそうにしながらも目は逸らさずに提督を見つめたままだ。

やがてもっとねだる様に両手まで上げてきた。

「抱っこ」

「……レディじゃなかったのか？」

「私は、レディの誇り高さも持つ、駆逐艦暁なの。だからレディの高貴さを大衆に自慢する事もできれば、こうやって駆逐艦の特権を行使する事もできるのよ」

「それただの屁理屈じゃないか？」

「レディは感情で物を考える生き物なのよ？ だから大佐からしたらただの屁理屈かもしれないけど、レディからしたら当然の思考から導き出された真つ当な理屈なんだから」

「……なんか改造を受けて口が上手くというか、開き直った感じがするな」

「もーいいじゃない！ 抱っこしてよ！」

「それでお前の気は済むのか？」

「うん」

「……」 スツ

「わっ」

暁は軽々と提督に抱き上げられ、そのまま彼の膝に乗せられた。

「これでいいか？」

「んー……なかなかの座り心地ね。あ、でももう少しこのままがいいかしら？」

「……まあ改造祝いだ。今日は暫くお前のオーダーに応えてやろうか」

「流石大佐。レデイの扱いを心得ているわね♪」
暁は提督の膝の上で本当に嬉しそうに笑った。

第4話 「感激」

「……」 カリカリ

「大佐、お茶お持ちしました。緑茶ですけど良いですか？」

「ん？ ああ構わない。ありがとう」

「いえ」

「……」 カリカリ

「〜♪」

秘書艦としてはごく極普通の、当たり障りのない気遣いだったが、久しぶりの秘書艦で提督の傍にいられる事に榛名は無上の喜びを感じていた。

ケツコン艦や新規着任の娘が増えていく状況の中で、自分が提督と疎遠になっていくような不安を榛名は感じていた。

故に最近では表に出さないが、姉の金剛に劣らない程実は提督に対する恋慕の感情が強い彼女は、今こうして再び秘書艦を任された事に提督に対する信頼を改めて強く認識するのであった。

「機嫌が良さそうだな」

「えっ」

不意に話し掛けられて半分浮かれていた榛名はつい驚いた声を出す。

提督の声に我に返り声が出た方を向くと提督が苦笑してこちらを見ていた。

「あつ、ご、ごめ……あ、申し訳ございません！ 榛名、ちよつと浮かれていました！」

「いや、別に謝る事はしていない。何かミスをしたわけでもないし」

「で、でも榛名、秘書艦ですのに大佐のお傍に居ながらポーつと……！」

「だからそれによって俺が実害を被ったわけでもないし、今はそれほど規律を重んじている状態でもないから謝らなくてもいい。俺はただお前が何を嬉しそうにしているのか気になっただけだ」

「す、すいません……」

「大丈夫だ問題ない。で、何か良い事でも？」

「え？」

「ん？」

提督の質問を改めて受けた榛名はようやくそこで彼が自分に対して細やかながらも疑問を持っている事を認識する。

答えなければ。

提督自身から自分に興味を持つてくれることなどそう無い事だ。

榛名は内心歓喜の荒波の飛沫を感じながら、努めて真面目な顔で答えた。

「いえ、その。久しぶりに大佐の秘書艦を……お、お傍にお仕えできて凄く嬉しくて……」

「……」

「榛名、それで浮かれてしまって大佐の声にも反応が遅れてしまったんです」

「……そうか」

「は、はい……」カア

「ふむ」カリカリ

「ええ!？」ガーン

恥を忍んで、かつ何か別の反応を密かに期待していた榛名は、答えを確認するなりあつさりと執務に戻る提督に対して思わず驚愕の声を漏らした。

提督もその声に流石に反応して、しまったというような顔で榛名を見る。

「ん? ああ、すまん」

「あ、あの大佐……」

「ん、ああ……」

「失礼を承知で申し上げますが、い、一応榛名は大佐とケツコンしています……よね？」
榛名から少し重い空気が出た始めているのを感じた提督は真面目な表情でそれに応じる。

「そうだな」

「榛名……そんなに魅力ない……で……つく、うええ……」

榛名はついに無念の感極まって言葉途中で泣き出してしまった。

提督はすぐに椅子から立ち上がり彼女の頭を撫でて落ち着かせようとした。

「いや、すまん。……本当に俺はダメだな。こういうところを直さないと」

「い、いえ……。途中で泣いてしまったは……ぐす……がわる……ひぐ」

「お前は姉妹の中でも本当に感受性が強いな。俺もそれを理解した上でお前に接するべきだった」

「そんな……！ 榛名はそんなお氣遣いで大佐に迷惑を掛けたくないです！」

「……そう、だな。まあ落ち着け。ここはお互い様という事にしよう。気が利かない俺も悪いが、その、感情的になりがちなお前もこれから自制心を鍛えるという事で」

「そんな榛名が明らかに悪いのにお互い様だなんて……。でも分りました。榛名、これから自分自身の心を鍛えて心が強い子になります！」

「そうだその意気だ。俺ももつと気が回る男になってお前を失望させない様にしよう」
「はい！ 大佐、本当にありがとうございませう！」

「い、いや。まあ気にするな」（凄いな、感情もそうだが今は気合いの入りようも比叡以上のものを感じる）

提督は、自分にとっては些細な事で何やら強い決意を新たにしている榛名を見て、実は覚醒すると金剛型の中で最も強いのは彼女なんじゃないかと思つた。

「ところで榛名」

「はい？」

「この仕事が終わったら昼でも食いに行くか」

「食堂に行かれるのですね？ 了解しました。お供致します」

「いや、そうじゃない」

「？ あ、やつぱりこちらにお持ちしますか？」

「いや、そうでもなくてな」

「？」

提督が言いたい事が理解できず、榛名は不思議そうな顔をする。

そんな榛名に提督はなるべく優しい表情するように意識しながらこう言った。

「外に食べに行くか」

「えっ」

「二人だけがいいんだが。良いか？」

「は、はい……！ 喜んで！ 榛名お供致します！」 パアツ

「供とか堅苦しい事言わなくていい。これはアレだ」

「はい？ アレ？」

「……」

提督は何やら気難しそうな顔をしていた。

頭では理解していてもあまり口にしなない言葉なので、自分からは言い難いのだ。

「デートだ」

「デ………！」

「やはりあまり口に出さない言葉は様にならないな。悪い、恥ずかしい所をm」

「はい！ 榛名、感激です！」

「………そうか」

恐らく彼女とケツコンした時以来と思われるキラキラした瞳をした榛名を見て、提督は若干その勢いに気圧されながら自分の選択が間違っていない事、心の中で安堵

の息を吐くのだった。

第5話 「イニシアティブ」 R—15

コンコン

「うん？」

『大佐、日向だ。夜分に申し訳ない』

「日向？ 待ってる」

日向の声を聞いた提督は執務室で応対する為に寝間着の上から羽織る物を取ろうとする。

だが、それを見越していたらしい日向が提督が羽織を着る前に扉の向こうから呼び止めた。

『あ、いや。執務室じゃなくてできればその……大佐の部屋で……』

「どこで？ 分った、入れ」

ガチャツ

「失礼……」

「……」

提督は部屋に入って来た日向の姿を見てなんとなく彼女の要件を予想ができた。

日向は白色の寝間着を身に付けており、一目で判る程に体のラインが良く出ていた。恐らく下着類は着けていないだろう。

「……」

日向は暫く顔を赤くして提督の前に座って正座していたが、やがて意を決した様に深呼吸をして気を落ち着かせると真面目な目で彼を見ながら言った。

「報告でもう知っていると思けど、その……演習で練度が最高になった」

「ああ」

「前に言ったと思うけど、私も大佐と……ケツコン、したい」

「……ん、それは勿論構わないがその恰好は？」

「ほら、前に言っただろ？ 伊勢より満足させて見せるやるって」

「別にそんな方法を取らなくても……」

「何らかのイニシアティブが欲しかったんだ」

「恥を我慢してまでか？」

「恥……まあ、確かに恥ずかしいけど……」モジモジ

「うん？」

「大佐とは何れこういう関係になりたかったんだ。だから恥ずかしく思いつつも心では

……な？」

「……」 スクツ

「えっ？ た、大佐？」

日向はつい驚いた声を出した。

とういのも提督が不意にベッドから下りると、彼女と向き合うようにその直ぐ近くに、自らも腰を下ろして正座をしたからだ。

提督は、驚いた顔のまま日向が反射的にこちらに向き直るのを確認すると、真面目な顔をして頭を下げながら言った。

「その想い光栄に存ず。こちらこそよろしく頼む。指輪を、貰ってくれるか？ 日向」

「大佐……！」

日向は提督の意外なプロポーズのような言葉に、嬉しさの余り涙を溢れさせてその逞し身体に抱き付いた。

「ん……ちゅ……ちゅっ……」

日向はベッドの上で提督に抱かれるようにしてキスを貰っていた。

背中に回した手で優しく自分を抱き留めている彼の手が温かくてなども心地良く感じた。

「大佐……………あ……………ん」

「……………」

提督はキスをしながらおもむろに日向の肩を掴む。

「あ……………」

日向は潤んだ瞳で提督を見る。

提督はその目を見つめ返しながら訊いた。

「……………いいか？」

「……………」コク

日向が頬染めて頷くのを確認し、提督はそのままより近くに彼女を抱きしめる。

「……………」カアア

「きれいだ」

「あつ……………あつ……………ん……………」ピクッ

提督の優しい触れ方に日向は顔を羞恥に染めながらも、不思議な心地良さと幸せを感じて可愛く小さな声を漏らす。

「日向、どうだ？」

「うん……………良い……………はあ……………。ね……………」

「ん？」

「もつと……もつと、大佐の好きにして欲しい。もつと優しくしてほし……いい」
「分かった」スツ

「んあつ……！」ピクンツ

より強い刺激に日向は思わず我慢できずに声をあげる。

「……大丈夫か？」（これはかなり敏感なようだな……比叡くらいか？）

気遣う声を掛ける提督に日向は新たな刺激に震えながらも、濡れた瞳でこんな願いを言った。

「だい……じよ……ぶ。ふう……はあ……。だい、じょうぶだから……お願い、もつと

……シて」

「……」

「んっ……♪」

提督は日向の期待に応えるように再びキスをし、他の身体への愛撫も継続した。

「た……っ、はあ……たいさあ……。あ……」

快感に喘ぎ、甘い声を漏らす中、日向はあるものを発見する。

「……」

日向は興奮と恥ずかしさから焦点の合わない目をしながらもそれに釘付けとなり、提

督の愛撫もそっちのけに自然とそれに向かって体を移動させた。

「日向……………」

日向の不意の動きに提督は不思議に思つて彼女に声を掛けるが、日向はそれが耳に入っていないようで、ついにそのまま今自分が最も興味を持っている場所に辿り着いた。

提督が思わず止めようとしたが、それより早く日向はそこに手を掛ける。

「ひゅ……………」

「……………」

日向は初めてそれを間近に見て、すっかり興奮して見入ってしまった。

「……………」

「お……………」

「んっむ……………」

またも提督が止めるより先に日向は行動し、提督は彼女の新たな攻めに言葉を詰まらせる。

「んっ…………んっ…………んん……………」

「く、ひゅう……………」

意外に大胆な日向の攻めに提督は表情を歪ませて快感になんとか耐える。

「このままではいけない。」

このままでは彼女に対して何もできずに果ててしまう。

焦った提督は自分も反撃と言うつもりはなかったが、日向をより攻める事にした。

提督は四つん這いになっていた日向の寝間着の裾に手を掛けた。

ペロツ

だが日向は気付かない。

自分の行為に夢中になって周りが見えていないようだ。

「……」

提督はそれを確認して更に攻める事にした。

日向はようやくそこで自分の身体に加えられた刺激に気付く。

サワツ

「!! ……つああ!?! た、たい……?」

「………いいか?」

提督は日向の羞恥心を考慮して敢えて主語のない問いかけを彼女にした。

日向は恥ずかしくて涙を流しながらも、提督に自分の一番大切なものを捧げられる喜びからくる幸せに心が満たされるのを感じて小さく頷いた。

「んっ……………きて……………」

「……………ああ」

ズツ

「く……………っ……………。あ、あああ……………！」

「日向、大丈夫か？」

「だい……………じょう……………ぶ。あ……………あっ……………！ だからっづ……………うれし……………いんだ」

「苦しいなら言えよ……………」グツ

「あつ、あああああ、ん！ すきっ好きだ、大佐！」

腹の中に今まで感じた事が無い熱を感じ、日向は嬌声をあげて提督と共に果てた。

——それから1時間程のち

時間も既に深夜2時、伊勢が自身の不在に気付く前に身繕いをして部屋に戻る準備をしていた日向に提督が声を掛けた。

「日向」

「うん？」

「お前、その寝間着のまま帰ったら目立つだろう。いや、ここに来る時も良く気付かれなかつたもんだが」

「あ……。やっぱりそうかな？　確かに、改めて自分の格好を見ると自分でもよくこんな格好でここまで来たと思う」

「いくら暖かくてもそのままだと風邪をひくかもしれないし、目立つだろう。これを着て行け」

「え…………？」

提督はクローゼットから替えのシャツを出して日向に手渡した。

それを受け取った日向はちよつと驚いた顔をしてそれを受け取る。

「いいの？」

「それを上から着て行け。あと、それはやる。返さなくていい」

「ほ、ほんと？」

「シャツくらいならいくらであるしな」

「あ、ああ…………そうだな」

提督はそう言つて確かに同じシャツばかりしか並んでないクローゼットを日向の前で開けて見せ、一着くらいあげても問題が無い事を彼女に証明してみせた。

日向はそれを見て提督が気を利かせて自分にシャツをくれたわけでない事に、内心彼らしいと苦笑した。

日向が部屋に戻って暫くして、提督もようやく就寝しようとした時部屋の外で小さな音がした。

コトツ

「うん……?」

提督が音に反応して扉の方を見る。

すると彼が確認するより扉の方が先に開き、そこから意外な人物が姿を現した。

「金剛……?」

「大佐ア。やっと終わったノオ?」

『終わった』提督はこの言葉に何故か嫌な予感がした。

「金剛お前もしかして……」

「あつ、べ、別に覗くつもりはなかったんだヨ? ただ、日向が先に来てただけデ……」

ジツ

「悪いが相手ならまた次の機会に。時間ももう遅いしな」

提督がそう言つて金剛を締め出すように扉を閉めようとした時、更に別の声が聞こえた。

彼はその声を聞いてびたりと体の動きを止める。

「あのく、大佐あ……」

「……比叡？」ピタッ

「大佐、私もいます！」

「榛名……？」

「あの……すいません……」

「ぎりし……？」

まさか姉妹揃って夜這いを……？

提督は衝撃の展開に迂闊にも動揺して扉から後ずさりをしてしまい、結果、当然の如く彼女達の進入を許してしまった。

「ワタシ達も日向が大佐の room に入った後直ぐ帰ったらよかったんだけどネ。でもオ……」

「聞いている内にエンジンがかつちやいまして……えへへ」

「榛名は……榛名は我慢しようとしたんですが……」ジリジリ

「申し訳ございません大佐。私の力が及ばずに……」ポー

唯一の頼みの綱の霧島までもが理性の限界らしいという絶望的な状況の中で、提督はいつの間にか元いたベッドの所にまで彼女達に追い込められていた。

「ま、待て……」

「とういわけで大佐ア」

「よろしくお願いします！」

「大佐……♪」

「申し訳ございませぬ……。よろしくお願いします」

姉妹に精を絞り取り尽くされ、果てには彼女達が満足するまで4人分の相手を要求された提督は、翌朝抜け殻のようにぐったりした状態で机に突っ伏していた。

そのあまりもの脱力様を足柄が見かね、長門や叢雲に召集を掛けたのはまた別の話である。

第6話 「我が、まま」

「朝霜だよ！ 宜しくねえ！」

「ああ、よろしくな」

元気一杯に挨拶をする少女を提督はいつもと変わらぬ落ち着いた態度で迎えた。

彼女は朝霜。

つい最近、基地の警備任務中に遭遇した敵との戦闘の際に発見した新しい仲間だ。

「なんだよう、ていと……あ、大佐か！ そんな堅苦しい態度取らなくてもあたいはいいぜ？」

朝霜は夕雲のかなり下の妹に当たり、早霜の姉でもある。

そんな彼女は夕雲型の中でも長波以上に明るく、かつ、人懐っこさも今のところ姉妹一と言えた。

そんな見ているだけで元気が溢れていると思ってしまうような彼女を、何故か早霜は、その日の秘書艦だったのにいじけた様子で執務机の横に体半分身を隠し、様子を窺う様な目でこちらを見ていた。

「朝霜姉さんズルい……」ボソ

「おっ、おっ？　なんだあ早霜お、嫉妬ってやつう？　拗ねてんのお？」

「……」ススツ

面白そうにからかってくる姉から逃げるように早霜は視線を逸らすと、今度は提督の後ろに隠れてしまった。

「ん？　どうした？」

「大佐……今日は、早霜が大佐の秘書艦ですよ……ね？」

「ああ」

「姉にそう言ってやってください……」

「こんな間近で俺が代弁する必要ないだろ……」

「私、朝霜姉さんは元氣過ぎてちよつと苦手なんです……」

「ええ!?　それってちよつと酷くね!?　ねえ、なんでよ早霜ちゃん！　お姉ちゃんに

言ってみ？」

シヨックを受けたように振舞う朝霜だったが、その様子は大袈裟で面白半分にかかっているのは明白だった。

「早霜……ちゃん……。もう、だから姉さんは嫌いなんです」プイ

「くあー、あいつ変わらず可愛い妹だねえ！　ほら、おいでー♪」

「え、や……やめて。私は今日は秘書艦なの。大佐から離れちゃいけない……やあ……」
まるで猫みたいにじやれあっている（少なくとも早霜は嫌がつているが）二人を見ながら提督は、これはもう敢えて親交を深める場は作らなくてもよさそうだなと思うのだった。

時は夕暮れ、窓からオレンジ色の光が差し込み、そろそろ証明を点けるべきかと提督が思っているところに、ノックと同時に返事を確認せずに扉を開けて誰かが入って来た。

コンコン

「ん？ 誰だ」

ガチャツ

「大佐あいるー？」

「……朝霜か」

「おー、いんじやーん」

大佐を見るなりニコニコと悪びれる様子もなく部屋に入ってきた朝霜を、提督は少し呆れた顔で迎えた。

「お前、相手の返事くらい待てよ」

「えっ、あ、もしかして返事してなかった？」

「途中だったか？」

「あー……ごめんなさい！」

「……」

提督に注意をされて、朝霜は直ぐに手を合わせ謝る。

失礼をしてしまった事に關しては故意ではなく、またそれが良くない事だと解ると素直に直ぐに謝る。

提督はそんな朝霜の忙しく変わる態度に、ある意味純粹さを感じ、取り敢えずその場はそれ以上言及しない事にした。

「まあ、いい。次からは気をつけろよ。ここは軍の基地で俺もお前も軍属だ。勤務中は最低限の礼節は意識するようにな」

「うん、分った！」

「……」（本当に分ったのか……？）ジツ

「な、なんだようその目は……？ ほ、本当に分ったって！」

反省の色を確認する前に即答した所為だろう。

やや疑問を含む視線を提督から感じて、朝霜は慌てた様子で直ぐに弁明した。

「……まあいい。それで、どうした？」

「んえ？」

「用があつたから来たんだらう?」

「あつ、そうそう! なあ大佐」

「うん?」

「暇だからさ、遊んでよ!」

「……」ズルツ

提督はその一言で力が抜けてしまい、重くなつた頭を慌てて手が額のところで覆つて支えた。

朝霜もその様に驚いて提督の傍に駆け寄る。

「うわつ、大丈夫かよ」

「……お前は」

「え?」

「お前は暇だからここに来たのか」

「うんつ。長波姉と今まで遊んでただけどき、姉ちゃん途中でバテちやつて」

「それで俺に代わりを?」

「うんつ、ほら、これも親睦を深めるつてやつじやね? 今日だけ特別でいいからさ!」

「親睦を……。俺からならともかく、自分でそれを言うか」

「元々そのつもりだったんだろ? それならあたいからでも良いじゃん?」

「悪くはない。だが、俺はまだ仕事 중이다」

提督は自分の机に厚さ5cm程に積まれた書類を指さした。

束はこれだけが、たしかにまだ仕事は残っている様だった。

「えっ、まだ終わってないの?」

「もう後1時間というところか」

「ふーん……じゃっさ、あたいが手伝ってやんよ」

「お前が?」

「うん! だって何か秘書艦今いないみたいだし?」

「いない理由はお前にあるんだがな……」

「へ?」

秘書艦だった早霜は、朝霜が長波と遊ぶより前に実は最初の提督との初対面の後に更に弄られ、とうとう完全に拗ねてしまい……提督の机の下、直ぐ足元で膝を抱えて座っていた。

「……」 ジツ

足元から提督を見る早霜の目は明らかに『姉に構わないで』と言っていた。

「なんでもない。朝霜、気持ちは嬉しいが書類の量もそう多くはないしな……」

早霜の意を受けて提督が朝霜の申し出をやんわりと断ろうとした時だった。

「遠慮すんなって！」

ポスツ

「お……………」

「……………」

提督に断りもせず朝霜が強引に彼の膝に座つて来た。

早霜の目の前には朝霜の下着が正面に見える形となり、彼女は事態の急展開に恥じらつたらしいのか嫉妬したらしいのか思考がそれを処理し切れずに混乱した。

「おい」

「んう？」

「俺の膝に座る必要があるのか？」

「お？ それを確認するつて事はあたいが手伝う事にはもう文句はないんだな？」

「自分でもさつき言っていただろ……………今日だけは特別だ」（早霜すまん。お前の姉は想像以上に天真爛漫だ）

「おおつ、やっぱり大佐はあたいが思つた通り話が分る男だな！ 膝に座つたのはあたいが座りたかつたからさ！」

「……………そうか」

「あ、大佐は今まで通り書類手に取つてくれよ。あたいは大佐が書いてない所を書くか

「らきー」

「……そんな器用な事ができるのか」

「ふふん、任せな！ あたいの器用さは秋雲姉譲りだかんね！」

「……秋雲は陽炎型じゃなかったか？」

「でも服同じじゃん！ あたいは秋雲姉好きだから姉さんでいいの！」

「そういうものか？」

「うん！ ニコッ」

提督は朝霜の裏表のない純粹な子供らしい笑顔に苦笑するしかなかった。

一方机の下では……。

「あれはただの布、ただの布……大佐の裏切者……」ブツブツ

早霜がどす黒いオーラを放ちながら以前、半泣きで膝を抱えたままの状態で、自分だけに聞こえる声で誰にともなく怨嗟じみた呟き漏らし続けていた。

第7話 「くま」

「うわつ、凄い隈。大佐大丈夫？」

朝、執務室に入つて提督に挨拶をしようとしたところ、秋雲は彼の顔を見てそれを飲み込んで開口一番そう言った。

「……」

秋雲が言った通り確かに彼は酷い顔をしていた。

髪はいつも以上にボサボサであつたし、何よりその目の下には不眠までとは言わずとも明らかに快眠は得られなかつたと判る程の濃い隈ができていたのだ。

提督はいつも以上に低い声で声を出すのも苦勞する感じでゆつくりと言つた。

「体調は問題ない。体調はな」

「そうは見えないけど？」

「睡眠はちゃんと取つてある。だがどうも目覚めがな……」

「うん、すつごい隈だよ？」

秋雲は本当に心配そうな顔をして提督に近寄る。

そして身長差から届かない腕をつま先立ちまでして目いっぱい上げて提督の額の熱

を計らせて欲しいと目で訴えた。

提督もこの時は、体調に問題は無いと秋雲の素直な気遣いを無碍に断る事も無く、屈んでその手を受け入れた。

「……うん、確かに熱はないね」

「だろう？」

「でも顔は凄く調子悪そうだよ？」

「寝起きの調子がちよつとな。体が鈍つて動き難い感じなんだが時間が経つごとに段々解れていく様に調子は戻ってきてはいる」

「へえ」

「正直俺も心当たりがない。そうだな……強いて言うなら寝過ぎた所為で身体が怠い感覚と言ったところか」

「ちゃんと寝れたんだよね？」

「ああ」

「遅くまで一人で仕事もしてないよね？」

「ああ」

「じゃあ何で限が……」

「分らん」

秋雲の問診に答える提督の態度に偽りは無いようだった。

回答こそ普段と変わらない素っ気無さだったが、その短い受け応えには秋雲が先程提督に見せた気遣いと同じ素直さを感じられた。

「大佐低血圧だっけ？」

「いや、どちらかというやや高い方だったような」

「え？ そうだったの？」

「ああ」

「へえ、意外」

「生活習慣に問題は無い筈だからこれは親の遺伝だと思う」

「なるほど」

「まあ仕事をして時間が経てばもつとマシになるだろう。大丈夫だ」

「ふーむ……」

提督はそう言ったが、原因が判らない故に秋雲はまだ彼の調子が気になる様子だ。故に彼女はその場で閃いた最も無難な方法を取る事にした。

「あつ、そうだ」

「？」

「大佐、まだ執務始めるまで時間があるよね？」

「ん？ ああ」

提督は部屋の時計を見ながらそう言った。

確かに秋雲が言った通り、当然と言えば当然だが、余裕をもって毎朝起きるよう習慣付けているので、執務開始まではまだ30分以上時間があつた。

「朝食、まだ食べてないよね？」

「うん？ ああ、今朝はまだだな」

「じゃあ、あたしちよつと食堂に行つて特別に少しスタミナが付くやつ貰つてくるよ」
「なに？ いや、そこまでしなくてもいいぞ」

「大丈夫だつて。別に手の込んだものをお願いしに行くわけじゃないから。ここは体力と食欲に自信があるある御方にちよつと、アドバイスを貰つてだね」

「なに？」

「まあとにかくちよつと待つてよ。すぐ戻るからさ」

「……分つた。だが、本当に大丈夫だからな？」

「はいはい、分つてゐるつて。そいじゃ、ちよつと失礼しまーす」

バタン

果たして提督の言葉を聞いているのかいないのか、秋雲は手を軽く振りながらそう言つて部屋から出て行つた。

それから程なくして、本当に5分程で誰かが扉を叩く音がした。

コンコン

「大佐、いらつしやいますか？ 赤城です」

「ん？」

「あ、秋雲もいるよー」

「ああ、入れ」

「失礼します」

「お待ちせー」

「……？」

提督はこの時はつきりと疑問を感じていた。

何故気付付け薬を取りに行ったような様子だった秋雲が赤城を伴ってきたのか。

提督にはそれが判らなかつた。

そして、秋雲に呼ばれたらしい赤城は、そんな彼の疑問に答える様に一步前に出て来て真面目な顔をして言った。

「大佐、体調が優れないそうですね」

「ん、まあ寝起きがちよつとな」

「そうですか。秋雲ちゃんが言った通りですね」

「でしょ?」

「ところで何故お前が?」

「あれ? 秋雲ちゃんが言つてなかつたですか? こういう時は体力と食欲に自信がある人に助言を貰うつて」

「それでお前か」

提督はここでやつと納得した。

納得はしたが、同時に秋雲の判断をやや不審にも思つた。

見たところ彼女に呼ばれた赤城は何も持つている様には見えない。

とすると本当に助言だけを貰つてきたのだろうか。

だがだとすると間接的に伝えたらいいだけなのに何故本人を直接連れてきたのか。

提督はその疑問を秋雲に確認しようとして目で訴えが、なんとその事に関してには秋雲もよく判つて無い様だった。

見ると秋雲は彼に向つて拝むように手を差し出して自分も理由が判らない事を仕事で伝えていた。

「私、確かに食欲や体力には自信はある方ですが、別にそれを自慢にはしていません。ですが、今回に限つてはそのアドバンテージを有効に使わせて頂くかと思ひます」

「? あ、ああ」

「?」

そして更に前に出る赤城とその行動の予測ができずに不思議そうな顔で見守るだけの秋雲。

提督も大体は秋雲と同じ心持だったが、何故かこの時、彼はその疑問と一緒に僅かだが嫌な予感を感じていた。

そして、その予感（あくまで個人的な価値観によるもの）は的中した。

「失礼します」

「っ?!」

「えっ」

秋雲は驚きの声を上げた。

そして提督はその声も上げる事が出来なかつた。

それもその筈、彼は更に急接近した赤城に頭を抱かれ、やや強引な形で熱い接吻をされたからだ。

「……」

「えー……」

「ん……♪」

事態が理解できずただされるがままに固まる提督とご機嫌な様子の子の赤城。

そして秋雲はそのあまりにもアバウトで直情的な行動に若干呆れた顔をしていた。

「……ふう、これで元気になりました？ それではありが……いえ、失礼しますね♪」

バタン

『〜♪』

「……」

「……」

扉の向こうから遠ざかる楽しそうな鼻唄を聞こえる中、部屋に残された二人はただお互いに気まずそうに沈黙していた。

そしてそれから1分ほどした後提督の方から口を開いた。

「……食事にするか」

「あ、うん」

「あ、そのさ」

「気にするな。別に害意があつたわけじゃないしな」

「うん……」

「どうした？」

「あ、ううん。何でもないよ」（これならあたしがやっても良かったじゃん？）
秋雲の密かな後悔にも似た疑問に提督が気付くはずもなかった。

第8話 「邂逅」

「グラーフツエツペリン、瑞穂、ザラ、鹿島、嵐、萩風、風雲、沖波、清霜、照月、初月、リペツチオ、伊401。以上が海風が研修先の提督の基地で見かけた艦娘の中でこちらにいないと思われる艦娘です」

「……」

提督は目の前で研修の報告をする海風の最後の内容をやや渋い顔をして聞いていた。

というのも海風と今は自室で休んでいる江風とはあまり良好と言える関係が気付いていない為だった。

それはどちらかに原因があるというように単純なものではなく、少々特殊な事情によるものであった。

「大佐、聞いてますか？」

「……ああ」

ややトゲを感じさせる声で海風は提督に声を掛けた。

態度こそ真面目で表情も真顔だったが、彼女が醸し出していた雰囲気ははつきりと分かるほど険悪だった。

海風と江風が提督の基地に着任したのは今から何年か前の事で、年数だけで言えば実
は一般的に古株と認識されている金剛ら初期に着任した戦艦の娘より長い。

そんな彼女達が何故今まで長期の研修へと赴き1年も帰ってこれなかったのか、それ
は提督の意思ではどうにもならない軍上層部の意向によるものだった。

研修自体はそれほど珍しいものではなく、行われる理由は艦娘の見識の拡大と能力の
向上など至って真面目なもので、機会と提督同士の了解さえ合致すれば割と頻繁に行わ
れているものだった。

期間自体も所属する艦娘が元いた場所が恋しくならない程度に短いもので、今回の海
風達のようにその期間が1年にも及ぶ事は稀も稀、先ずあり得ない長さだった。

「大佐、海風は正直言つて失望しました。1年振りに帰つて来たというのにあちらには
いた艦娘がこんなにこちらにはいないなんて。いくら大佐があまり強硬な作戦を好ま
ない方と言つてもこの戦力差はちよつと慢心が過ぎるのではないでしょうか？」

「……」

「いえ、別に海風は怒つていませんよ？ 別に着任して殆ど時間もたつていないのにい
きなり他所の基地に研修に行かされて、その上その期間が1年まで伸びた事なんてちつ
とも気にしていませんから。その恨みつらみを今ぶつけているわけではないですよ？」
しつかり恨んで、もといいいじけている様子だった。

当初比較的ゆるやかに基地の戦力を整えていた提督の基地は、その影響からか当時、戦力と言える艦娘は低コストで揃える事が出来る駆逐艦をメインとしていた。

当然それ故にその数は多く、その事に目を付けた提督が所属しているエリアの統括責任者は、提督よりまだ若く経験も浅い新人の提督を助ける要員として研修の名目で駆逐艦を派遣する事を指示してきたのだ。

提督はまだ少なかった貴重な火力要因である戦艦を代わりに出す事もできず、かといつてメインの戦力である駆逐艦をその分多く出す事も厳しかったので、なんとか責任者と交渉して派遣人数を二人だけにまで絞ってもらい、その了承を得て二人を派遣したのだった。

「……」（そういえばあの時は海風も今より大人しめで基地を出る時も「すぐ帰ってきますね」とか言っていたか）

提督は改めて目の前の不機嫌そうな顔をした海風を見た。

その結果がこれである。

基地に帰るなり江風はふてくされた顔をして1年留守にしていた自室に閉じこもつて不貞寝し、そんな妹の代わりに同じ事をしたい思いを我慢して海風はこうして彼の前にいるのだ。

「大佐、話を聞いていますか？」

「ん、ああ、悪い」

「……」

海風はまだ恨みがましそうな目で提督を見ていた。

報告が済んだというのに退室の許可も求めず、まだ何か言いたそうに、言いて貰いたそうな顔をしてそこに居た。

提督は気を取り直すように一度咳払いをすると海風を真つ直ぐ見ながら言った。

「ご苦労だった」

「……それだけですか？ その言葉は私にだけですか？ 江風には？」

「勿論あいつにもだ。この場に居れば一緒に掛けてやるつもりだった」

「……私が何を言いたいのか解りますか？」

「1年——」

「そう1年です。私、江風と一緒にあちらの提督に引き抜かれそうになったんですけど」

「……そうか」

「それでも江風とここに戻ってきた理由、解りますか？」

見ると海風は目に涙を浮かべ、顔を紅潮させて泣くのを我慢していた。

提督はそれを見て全てを理解した。

彼は帽子を脱いで彼女の前に正座した。

その行動は海風にとっては予想外だったらしい。

提督の突然の行動に驚いて思わず半歩後ずさった。

「え？　え？」

「やむを得ない理由だったとはいえお前の憤りはよく解る。そしてそんな思いを我慢して研修先の提督の勧誘にも応じずこうして帰ってきてくれたお前達の忠義心には頭が下がる思いだ」

「た、大佐……？」

「今は上司も部下も関係ない。そのうつ憤を思いつきり俺にぶつけるといい」
「え」

「抵抗などしない。だが流石に一方的に殴ったりすると責任問題を問われた時お前が窮地に立たされるからな。だからここはどうか3発のみで何とか憂さを晴らしてくれ」

「ちよ」

「ああ、江風か？　そうだなあいつも連れてくるといい。それでもやはり二人で3発くらいい方がいいか」

「いや、だから……」

「？　どうした？」

提督はそこでようやく海風が若干引いて自分を見ている事に気付いた。

どうやら何か対応を誤つたらしい。

自分なりに誠意を表わす形として責任を取ろうとした筈なのだが……。

「あ、あの大佐。もう、もういいですから」

「なに？ いや、そういうわけにもいかんだろう？」

「いや、私が求めていたのはそういう事じゃなくてですな」

「もつと怒声を吐きだしたいか？ なら場所を考えねば……」

「いや、そうじゃなくてね?!」

「？」

海風は彼女の考えが解らずキョトンとする提督にこれでは埒が明かないと取り敢えずその場は一時撤退する事を決めた。

少し無理をしてキツイ態度を取れば反省して優しく迎えてくれると思つたのにこれはとんだ計算違いであつた。

だが海風は良くも悪くもこの結果に少し安心もしていた。

あまり話こそできなかつたが提督から受けた朴卒とも愚直とも取れる人柄はあの時から変わつていなかつたようだ。

1年待たされ世話になつた提督からの誘いを断つて戻つてきた甲斐を海風はその時感じていた。

当時と変わらない人柄と印象、だからこそやはり自分の最初の提督は信頼できると思っただのだ。

やはり自分の提督は彼だけだと。

(これは江風を連れて一回無茶な我侷言つたつて罰は当たらないよね。見たところ今なら何でもお願い聞いてくれそうだし。この期を逃す手は無いよね！)

海風は自室に向かいながら、そこでいじけているであろう江風をどう説得して部屋から連れ出し、提督に思いつきり甘えてやろうかと考えながら、真面目な性格からは珍しく悪戯っぽい笑みを樂しそうに浮かべるのだった。

第9話 「余裕」

「……」

「大佐、どうかしたか？」

「ん、ああ、ちよつとな」

「磯風でよければ力になるぞ？」

「いや、特に困っているわけじゃない」

「そうか」

「ああ」

「……」

「ふむ……」

提督はそう短く答えて再び手元のバインダーに挟まれた書類に目を通し始めた。

磯風はそれ以上どうすることもできず、ただ横で提督を見ていたのだが……。

「ん？」

提督はふと服を引っ張られる感覚に気付き下を見ると、そこには磯風が口にこそ出さなかつたが子供っぽい顔で何か教えて欲しいと目で訴えていた。

「……知りたいのか？」

「……うん」

「この紙の内容が？」

「……うん」

磯風は歳相応の少女の様な仕草で二度可愛く提督の問いにそうこくりと頷いた。

提督も別に書類の内容を隠していたわけではないので磯風のことを確認するとすんなりと彼女にバインダーを向けてやった。

「ん？ これは資料のデータか？」

「ああ」

「これを見て何を考えていたのだ？ 見たところどれも枯渇しているとは思えないが」

「まあそうだな」

「？ 何か問題が？ 困窮しているのか？」

「いや」

「……」

「……おしえ……て……」

今度は目に涙を浮かばせ始めた磯風に提督は流石に焦った。

磯風は普段の言葉遣いと凛とした態度から性格は男勝りだと思っていただけに、こう

意外に素直な面を見せられると対応に困るのだ。

「分った。分ったから、な？」（これは俺を信用しているという事でいいんだよな？）

「うん……」

磯風はまるで親にあやされる子供よろしく目尻に浮かんだ涙を拭うと、いつもの凜とした真面目な顔に戻って紙を見ながら提督の言葉を待った。

「磯風、確かにこの資材の保有量に特に問題はない」

「だろう？」

「だが全体に見るとどうだ？」

「うん？」

「各資材の全体的な割合だ」

「ん……なるほど、そうか」

「分ったか？」

「勿論だ」

磯風はようやく提督が考えていた事が解ったようで、誇らしげながらもどこかやはり子供らしく自信ありげに頷いた。

そして自身の小さな手である資材の一つを指しながら言った。

「資材全体の量から見て弾薬の量が少ないんだな？」

「その通りだ」

「ふむ」

磯風の言った通り資材自体はどれも量的には基地の運営に困る程の量というわけではなかった。

だが個々の数値に注目して見てみると、弾薬以外の資材が保有を許されている限界の量に近いのに対して、弾薬だけが7万程と、他の資材の3分の1以下の数値だったのだ。磯風はそれを表す個所に注目しながら提督に訊いた。

「大佐、これはどうした事だ？」

「これは昔からのこの基地の弱点だ」

「弱点？」

「ああ、うちはどうも攻勢より守勢に重きを置いた作戦を取る所為か、重要視する資材もそれを維持するものを意識しがちなんだ」

「ふむ、なるほど。油はスタミナ、鋼材とボーキは艦の耐久力の維持、守勢を得意とする大佐の先方には必要なものだな」

「ああ、おかげで弾薬もそれほど消費する事無く……まあ時間は多少かかるが堅実な成果も得てくれたわけだ」

「だがその成果が戦果として地味でばかりでは上の覚えもあまり良くないのではないか

「？」

「そうだな。だが何か問題を起こしているわけではない。いざという時に迎撃できる力を常に保持していること自体はそう責められる事でもないしな」

「上からしたら扱い難くて厄介だな」

「まあな」

提督は磯風の皮肉に苦笑すると自分の机に戻り深く腰掛けた。

磯風もそれに倣うように自分の事務机へと戻る。

「だが別に命令自体には背いているわけではないし、大規模な作戦遂行時には、その時に限ってはうちもできる限りの事はやっているつもりだ」

「うむ」

磯風はその言葉は否定する事も冷やかす事も無く厳かに頷いて、提督の机の近くの壁に掛けられたいくつかの勲章を見た。

それは決して多くは無かったが、確かに提督が軍人として海軍の為に貢献し、それが評価された証拠だった。

「だが大佐よ」

「ん？」

「そんなに常日頃から気になるなら、一度大規模に弾薬だけを貰える遠征に集中しては

「どうだ？」

「勿論それは考えた事はある」

「え？ では何故実行しない？」

「……磯風、遠征で主に活躍する艦種はなんだ？」

「勿論、私たち駆逐艦だな」

「そうだ。そしてここが肝心な部分なんだが、その資材の差を完全に埋めるのにかかる時間は総じてどれくらいだと思う？」

「ん？ それは、そうだな……ふむ……。ひとつ、いや三ヶ月くらいか？」

「1年だ」

「えっ」

「それも主力艦隊以外の全艦隊を間断なく入れ替えて遠征に行かせてそのくらいだ」
「……」

「駆逐艦の数は艦隊の多くを占めるからな。全力で回せばそのくらいで済む、とも言える」

「うむ……」

「この問答に磯風は何か厭な予感を感じていた。

1年、軽く言うが行うは難し、だ。

遠征だけに集中するならばそう負担にもならないだろうが、それに合わせて通常の基地の仕事もするとなると……。

「さて磯風、その作戦を実行した場合基地でのお前たち駆逐艦の私的な時間はどれくらいにな——」

「大佐、この話はここままでだ」

いつもより素早く、物を言わさぬ迫力で磯風は提督の言葉を遮り、話の中断を宣した。提督もそれを予測して多様で再び苦笑するとそれ以上は何も言わなかった。

「大佐」

「うん？」

「その、あれだ」

「私はどちらかというと遠征より任務を遂行出来たら直ぐ帰投できる実戦が好きだな」

「……そうか。まあそこは、皆平等にな」

「ああ、分っておる」

そう言つて少し顔を赤くして俯きながらいう磯風の頭を、提督は優しく撫でてやった。

第10話 「トイレ」 R—15

夜、基地は窓を叩く暴雨と雷の音以外何の音もなく静まり返っていた。

時間自体はまだそれほど遅い時刻とは言えなかったが、天候の所為か敢えて部屋から出る者も殆どなく、皆は自室で思い思いの時を過ごしている様だった。

出撃任務が出来ない事もあってその日は執務に集中でき、いつもより早く仕事を終える事ができた提督は、基地の外を警戒している艦娘の事を気に掛けて、自らは内部の見回りをしていた。

そんな時に彼の向かい側から歩いて出来る者がいた。

「大佐、こんばんは」

「明石か、どうした？」

「ええ、ちよつと」

明石は提督の問いには性格に応えず少し言いよどむ態度を見せた。

提督はそれを見てなんとなく彼女の用を察した。

女性が直接言うには躊躇してしまう、奥ゆかしい日本らしさから導かれる答はそう多くは無かった。

つまりはそういう事だろう。

「そうか、じゃあな」

「あ、はい」

何の問題もなければその時お互いは軽い挨拶を交わしてすれ違うだけで事なきを終えるはずだった。

だがその時……。

ピシヤツ、ゴロロ……！

ブツツ

「ひっ」

眩しきで思はず目を瞑ってしまうほどの雷が鳴ったかと思うと、同時に基地の照明が全て消えた。

明石はもわず小さな悲鳴をあげた。

「停電か。今日は荒れてるからな」

「て、停電ですか」

「ああ、だが大丈夫だ。ここは一応軍事施設だからな。電気の動力源は他にもある。少し待てば復旧するはずだ」

「あ、そうでしたね。うん、大丈夫な筈、うん……」

薄暗闇の中何か心細そうにしていた明石だったが、提督は特には気にしなかった。突然暗闇に襲われれば誰でも多少は動揺するものだろう。

ならここは敢えてその事に気付かないふりをするというのも気遣いというものだと考えたのだ。

だが何故か直ぐに復旧するはずの電気は二人が暫くその場に佇んでいても復旧する様子がなかった。

「ん？ 〃〃〃だけ電気がきていないみたいだな」

「えっ」

明石がショックを受けたような小さな声を出すなか、提督が窓から他の建物を見ると、今自分達が居る場所以外の個所は明かりが点いているのが確認できた。

「送電線に何か異常があったのかもしれない。少し様子を見てく——」

「あ、あの！」

「ん？ ああ、そうか。こういうのはお前に行ってもらった方が良さそうだからな」

「え?!」

「悪いが、頼む」

提督がそう言つて明石の肩を叩きその場を去ろうとすると、予想外にも逆にその肩を明石に掴まれて歩みを止められた。

その力は思いの外強く、提督は危うく彼女の力に逆らった影響で転びそうになった。
「明石？」

「……」

提督が後ろを振り向くとそこには薄暗闇の所為でよくは判らなかつたが、肩を震わせていつもより心なしか小さく見える明石の姿があつた。

明石は何かを恥じらうように目を逸らしているような素振りを見せながら、提督に小さく言つた。

「あ、あの、笑わないで下さいね？」

「？ ああ」

「私、暗いのが、私、苦手で……」

「なに？ そうなのか？」

「は、はい。だ、だから……一人でトイレまで行くのが怖くて……」

「……」

意外であつた。

誰しもがそうというわけではなからうが、工務に強く、それ以外でも結構頼りになる事が多い明石に対して、提督はその関係から明石に頼もしい印象を持っていたのだ。

故に彼女に意外にもこんな苦手があるとは小さな驚きだつた。

「夜戦とかするだろう？ 暗闇にもある程度慣れてるんじゃないのか？」

「い、今は艦装何も持っていないので……」

「なるほど、戦闘とは根本的に比べられないか。元々暗闇が苦手だったんだな」

「は、はい……情けない話ですが。あと、それとかみな——」

ピカッゴロゴロゴロ！

「ひあうっ！」

「……雷も苦手か」

「ご、ごめんなさい……」

「謝る事はない。しかしトイレか……誰か起きてるの奴をよん……」

「いやー！ 一人にしないで！」

今度は肩ではなく服の裾を掴まれた。

先程より幼さを感じる仕草から明石の余裕の無さがよく分った。

「む……」

「あ……ご、ごめんなさいっ」

「分った、行こう」

「ほ、本当にすいません……」

「いや、俺もここまでとは苦手だとは思わなかった。気にするな」

「は、はい。ありがとうございます……」

「手ではだめか？」

「え？」

明石は提督の言葉を一瞬理解できてい無い様だった。

提督はキョトンとする明石が掴んでいる自分の服を指しながら空いている方の手を彼女に差し出した。

「このままでと少し歩き難いしな、それに手を握った方が安心すると思うが？」

「あつ、そ、それでいいです！ お願ひします！」

「よし、行こう」

程なくして二人はトイレの前に着いた。

ここでは運が良いのか悪いのか、人がいる気配はなく、その所為か暗所で見るとトイレは思いの外その手の雰囲気があるように見えた。

これには提督も少し寒気を覚え、明石に至ってはもう言葉すら出無い様だった。

「……」（見事に真つ暗だな。状況が状況なだけにこう言つてはなんだが雰囲気も割とあるな）

「あ……あ……」

「一人では行けないな?」

明石の恐怖に震える様を見て提督は気を利かせて訊いた。

明石はそれに対して即答。

無言ながら必死の形相で何度もコクコクと頷いた。

「……!」

「仕方ない。見えないようにするからドアの隙間から俺の服を掴んでろ」

「あ、ありがとうございます……」

「それじゃあ行くぞ。一番奥だ」

「お、奥ですか?! もう暗くて何も見えませんよ?!」

明石の言う通り、提督が行こうとしている行き先は暗闇に閉ざされており、窓もない事もあってかなり不気味な雰囲気だった。

「手前のだと和式なんだ。この基地は古い施設を一部改装したものだから、トイレとかまだ一部、新しくできてない所あってな」

「でもだからってなにもわざわざ一番奥になんて……」

「一番奥にはお前が独自に設備したバッテリーで駆動するウォシユレットがあつただろう?」

「あつ」

「まだ停電して時間が間もないから、今なら使えると思うが」

提督の言葉で明石は何かを思い出したらしく小さな声を漏らす。

基地のトイレはごく一部を除き、殆ど様式で、ウオシユレットタイプになっているのだが、その唯一つだけ、明石自身の趣味も兼ねてバッテリーでも駆動する様に改造したものがあつたのだ。

勿論防水加工もバッチリ、それに暗所でも便座の位置と周囲が判る様に小型の点灯パネルまで設けてある。

自動感知式なので無駄に電気を使う事は無いが、それでも機能維持の為に電気は常に消費されている。

早く利用した方が良いと示唆する提督の判断は間違いではなかつた。

「怖いだろうが、あそこまで辿り着ければ何とかなるだろう。お前だつて男が近くにいらる状態で和式を使うのは流石に嫌だろう？」

提督の言う事はもつともである。

だがしかし……。

「……」

明石は再び奥が全く見えない暗闇を見た。

「……！」

やはりダメだった。

いくらウオシユレットがバッテリーで動くと言っても、それを使う為にああそこまで行くとなると、かなりの勇気の必要を迫られた。

距離にして僅か10メートル足らずだったのだが、それでも彼女には奥に続く暗闇が暗黒の世界と同じに見えたのだ。

故に彼女は決断した。

羞恥で真つ赤な顔をしながらも信頼している提督だからこそ頼めるのだと自分を納得させて。

「わ、和式……で、いいです」

蚊の鳴くような細かい声で明石はぼつりと言った。

声は小さかったが、薄闇に包まれた静かな場所にいた事もあってその言葉ははっきりと提督に聞こえた。

流石に提督は困った顔をしていた。

「だが、それだと服は持てないぞ」

「え、ええ、だから……し、シてもらえ……ますか？」

「……おい、まさか」

「お願いします……もう結構我慢して……」

「いや、それは流石にな……」

「大佐だからお願いして……るんです。ほん……と、おね……がい……」

羞恥に震えながら懇願する明石の様子は確かに真に迫ったものが感じられた。

内股になり、耐える様に太ももを擦り合わせている様から察するに、今見せている震えは羞恥以外にもあるだろう。

提督は観念した。

これ以上彼女に負担を掛けて最悪の事態を避けるのを優先する為に。

「……分った。後悔するなどは言わない。だが耐えてくれよう。」

「は……はいっ」

提督の承諾に明石は窮地を救われたような顔を見せた。

提督もその顔を見て彼女が本当に限界が近かった事を悟った。

「脱いでいる間は後ろを向いている。脱ぎ終わったら合図を」

「はい……」

ゴソゴソ、パサ……

静かな薄闇の中で、ドアこそ半開きだが空間が狭い事もあって明石がその準備をしている音が明確に響いた。

「お願いします……」

「わかった」

明石の合図を受けて提督は振り向くと、後ろから明石の膝の裏に手を射し込んで持ち上げた。

親が子にアレを促す格好であった。

「悪いが音が聞こえるのだけは我慢してくれ。あと、位置はこれでいいか？」

「はい、分かっています……。あ、もうちよつと低く、そう……。それで少し前へ……。あ、それでいいです」

「大丈夫か？ よし……」

「……………」

提督の合図で明石は我慢していたものを解放した。

第11話 「欲求」 R—15

「ん……」

気だるい疲労感を僅かに感じながら足柄は目を覚ました。

「……」

彼女のすぐ横には静かに寢息を立てている愛しの上官がいた。

足柄は彼の顔を見て眠気から覚めると、幸せそうなほほ笑みを浮かべて上体を起こした。

上半身を覆っていた布が滑り落ちて足柄の白い裸体が露わとなつたが、足柄は気にした様子も無くそのまま四つん這いでそつと提督の胸元に近付いていった。

その時に下半身も膝をついて起こした事で腰元を覆っていた布も滑り落ち、上半身に続いてついに足柄の全ての裸体が露わとなつた。

桃のような丸い尻を揺らして足柄は提督を起こさないように細心の注意を払って屈むと、提督の胸に顔をそつと置いて頬ずりをした。

「ん……ん」

すりすりと犬や猫が主人に甘えるように眠っている提督の胸に足柄は頬を擦りつけ

て、その温もりと心地良さを満喫する。

「……」

外からは僅かに顔を出し始めた太陽の朝日が差し込もうとしていたのに、しかしそれでも提督は目を覚ます気配がなかった。

足柄はその穏やかな寝顔を見て『あつ』と小さく声を漏らして何かを思い出した顔をした。

そういえば昨日は提督は仕事で大分疲れていた様子だった。

だがそれでも甘えたくなくて自分を求めてきた足柄の求愛に嫌な顔一つせず応じてくれた。

その時にもう少し優しく微笑んでくれたり甘い言葉を掛けてくれればより気分が蕩けていただろうが、そこはそういう柔軟さを上手く出せない提督だった。

まあそんな事は前から分かっていたし、それこそ提督らしいというものだったので足柄はちっとも気にはならなかったが。

寧ろ床ではそんな事気にならないくらいに情熱的に、愛情いっぱい自分に愛と快感を与えてくれた。

「……ん」

昨夜の事を思い出して提督に引っ付いていた足柄は今起きたばかりだというのに身

体に熱い波が走るのを感じた。

提督の胸に手を置いてその鼓動と温もりを感じていた足柄は彼の身体を覆っている布の下の方を見る。

「……」

体の向きを変えて目的の個所に辿り着いた足柄はその部分の布をそつと捲くつた。

提督も自分と同じく裸だったので直ぐに期待していたモノが彼女の目の前に現れた。

足柄はそれに慎重に手を伸ばしてやがて顔も近付けた。

「ん……ぺろ」

当然だが寝ているので提督のソレは通常の状態なのであり、だったが逆にその事が足柄には新鮮で面白くも感じた。

そして可愛らしさも込み上げて来て足柄はソレに対する『ご奉仕』はより情熱的なものとなっていった。

「ん……む……。は……ちゅっ」

昨夜自分をあれほど乱して愛してくれた提督。

足柄は夢中でご奉仕をしている内に今行動を実行している個所とは“違う所”にも無意識に手を伸ばしていた。

「あ……♪」

無意識でも生き物、提督も例外ではなく気持ち良く感じているらしい。

足柄はその変化に喜びの色を目に浮かべた。

(嬉しい。大佐、感じてくれてるんだ。今、どんな夢見てるんだろ……)

自分の奉仕という名の愛撫で提督が感じてくれている。

その事によつて提督がどんな夢を見ているのか。

それを想像した足柄は気恥かしい期待と嬉しさに心が温かくなるのを感じてより愛撫に力を入れ始めた。

「んっ……んっ……ちゅっ、ちゅっ……」

提督の変化に足柄の奉仕を更に過激なものとなり、彼女は半ば我を忘れて一心不乱に行為に没頭した。

そしてそれから十数分後……。

「はぁ……はぁ……」

そこには裸で大の字になって体力を使ったことによる疲労で熱い息を漏らしている足柄の姿があった。

あれからかなり頑張ったが提督は果てる事は無かった。

それが個人的に少し残念というか悔しかった。

現に提督自身は足柄の努力余韻が抜けていないのか彼女の横で元気なままだ。まあこれはきつと提督は夢では果て難い質なのだろう。

そう自分を無理やり納得させて開き直った足柄は、再び提督と自分を横に除けられたいた布団で覆うとまたびつたりと彼に抱きついた。

「……………」

その時提督の足に絡めていた辺りでひんやりとした感触を感じて、足柄は小さな驚きの声を漏らした。

感触を感じた所は直ぐに予想ができた。

足柄が恐る恐るその部分に手を伸ばしてみると……………。

「あ……………」

足柄はそれを見てやや自嘲気味な声を漏らした。

提督に奉仕しているうちに自分も感じていたらしい。

布団から抜いた彼女の手にははつきりとその証拠が付いていた。

(私つたら……………)

足柄は顔を真っ赤にして恐る恐る提督の顔を見る。

「ほ……………」

提督はまだ熟睡しているようだった。

まあ、起きたら起きたでそれを口実に甘えるつもりだったのだが。

(無抵抗な人に悪戯して私ったら何感じてたんだろ……)

その時、心の中で反省してた足柄の脳裏にある想像が浮かんだ。

(これももし逆に私だったら……?)

足柄は熟睡して無抵抗な自分が提督に好きに愛される様を想像した。

それはもう吸ったり揉んだりいろいろと、力が入っていない自分の身体を好きに弄られる様を。

「……………」

足柄は三度身体に鋭い快感の波が走るのを感じた。

しかもそれは今日今までの中で一番のものであった。

(しまった……想像するんじゃないやなかった……)

そんな事を想像してしまって後悔した足柄だったがもう遅かった。

彼女には既に新たなスイッチが入ってしまった証拠とばかりに身体に明確な変化が起きていた。

それもさつき自分でその変化を確認した時の比ではない程のものだった。

「はっ……………はっ……………」

足柄の熱い視線が再び提督へと向く。

もう駄目だ。

もう我慢できない。

快感に身体が暴走しがちなながらも、それでも提督を起こすまいと静かに再び身体を起こした足柄は、愛欲に濡れた目で熱い息を吐きながら提督に覆い被さった。

そして今度は直接、お互いが愛を感じられる行為に行動を移すことにしたのである。

足柄は自分の中に直接感じる変化に身悶えした。

「あ……大佐……大佐……！」

それから1時間ほどのち……。

「……」

「大佐どうしたの？」

朝起きてから提督はどこか睡眠が不足しているように気だるげな顔をしていた。

足柄に声を掛けられた提督は鈍い疲労感にまどろむ顔を掻いて答えた。

「いや、昨夜は少し無茶し過ぎたかな、ってな」

「えっ？」

それを聞いて足柄は顔を真っ赤にしてコーヒーを入れようとしてたカップを危うく取り落としそうになる。

だがすんでのところでキャッチして事なきを得てホツつと安堵の息を漏らす。

「きゅ、急なに？ どうしたの？」

「いや、悪い。確かに昨日は手を抜いたつもりは無かったんだが……」

「そ、そうよ。な、何も問題なかったし、私も凄く……」

「まだ30なんだが。これが歳ってやつなんだろうか」

「えっ」

思いもよらない処で思いもよらない結論を導き出そうとしてる提督に、足柄はその時本当にどうフォローしたらいいか悩んだ。

まさか彼が寝ている時に無抵抗な提督の身体に手を出してお互いに慰めたのが原因と言えるわけもなく。

「そ、そう言う事もあるわよ。でも絶対多分歳なんてことはないと思うわー」

「ん？」

何故か顔を赤くして焦る素振りですらという足柄に提督は不思議そうな顔をした。

第12話 「来訪」

「元帥が視察に来る？」

朝、満潮の一方に提督は眉をピクリと上げた。

「そうよ。今日の昼には来るみたい」

「また急だな」

「そうね。でもこの人前からそういう感じみたいよ？」

呆れ顔の満潮に怪訝な顔をする提督。

そんな二人が言う『元帥』とは、海軍本部の元帥とは別の人物の事だった。

彼らが今言っている元帥とは、提督が所属している基地を含めた一定のエリアを統括している責任者の事を指す。

これらの責任者は一様に階級は大将で、かつ元帥の称号を与えられていた。

因みに本部では彼らは『○○次帥』と呼ばれ、本部の元帥と被らないようにするなど配慮がなされている。

「やあ、こんにちは！」

予定通り元帥は昼頃に来た。

風貌はかなり若く、好青年然としていた。

20歳前半より下には見えず、三十路の渋い提督とはかなり歳が離れている様に見えた。

(それなりに優秀な証拠なんだろうか。にしては……)

提督は元帥と言う肩書に似つかわしくない程軽い挨拶と共に自分の基地を訪れた彼に違和感を覚えていた。

だがそんな事表に出すわけもなく、提督は軍人らしく上官に対する礼節を示して元帥を迎えたのだった。

「ご足労痛み入ります。本日はよくお越しくございました」

「ああ、君がここの司令官かい？ そんなに畏まらなくていいよ。何も問題が無ければ視察なんて直ぐ終わるからね」

「は」

どうやら元帥はエリア責任者として基地の視察に来たらしい。

視察と言えば彼の親友である特務中佐も行っているが、彼の場合は基本事前通告なしの抜き打ちである事が多いので、今回の元帥のそれは予定に沿った正しい仕事の内のようだった。

元帥は自分が氣を楽にしてもよいと言ったにも関わらず、あくまで礼儀正しい部下としての態度を崩さない提督に苦笑しながら言った。

「はは、君は真面目だね。ああ、いや、僕が軽過ぎるのかな？」

「は、申し訳ございません」

「いいって、いいって。真面目なのは良い事だよ。一見それは本当みたいだしね」

元帥はそう言つて基地施設周辺を一瞥して目を細めた。

「……」

その時の眼は至つて真剣で、その眼のまま再び提督の方を向く。

提督はその顔を見て元帥も見た目で結論付けられるほど根から軽薄な人物でない事を確信した。

たったそれだけの事だったが、そんな僅かな時間に見せた少ない所作で相手にそれを悟らせるほどの実力を、彼からは感じるのだった。

「さて、それじゃあ基地の中を案内してもらおうか。あ、これは一応全部ね。艦娘の子たちの部屋もドアから見ただけでいいから雰囲気だけでも感じさせてほしい」

「了解しました。こちらへ……」

結果として視察は何の問題も無く進み、最後に帰投前に執務室での世間話をするにま

で至った。

「いや、ここは良い所だね。施設はよく掃除されていて清潔だし、艦娘たちも皆健康そう
だ」

「恐れ入ります」

出されたお茶を機嫌良く飲んで好評する元帥に提督は会釈をした。

「ん、このお茶もお茶菓子も美味しい。これは間宮が作ったのではないね？」

「は、何分急な起こしで時間が無かったのですが、せめてもの意外な驚きをと思いまし
て」

「かと言って高級なお菓子でもないな。もしかして誰かの手作りかな？」

「その通りです。これは加賀作りました」

「お口に合ったようで何よりです」

傍に控えていた加賀その時初めて前に出て元帥に口を開いた。

「ほう……」

元帥はそんな加賀を感心した目で見つめた。

「秘書艦の加賀です。本日はよくお越しくございました元帥閣下」

「いや、うん……。君のところは秘書艦は専属かな？」

何故か加賀の挨拶に曖昧に相槌を打っただけで、続けて出てきた元帥の問い掛けに、

提督はその時初めて何か嫌な予感がした。

「いえ、こちらでは能力に応じた者で交代制です」

「そうか。どれくらいそれはいるのかな？」

「二応……初期から私を支えてくれている者は全員です。個人的に過大評価はしていないつもりです」

「いや、そこは謙遜するところではないと思うよ。うん、自分の部下を信じられるのは良い事だ。良い事だようん」

「は、ありがとうございます——」

提督がお礼を言おうとした時だった。

元帥は提督がそれを言い終わらない内にその場にいた誰もが予想だにしない事を訊いてきた。

「ところでだ、ものは相談なんだけど」

「は」

「この加賀僕にくないないかだろうか？」

ピシッ

と、空気が張りつめる音がした。

それは元帥の発言に驚いた提督が発したものでなかった。

その雰囲気を発したのは言うまでも無く……。

「……」

「明らかな」凍り付いているような無表情をした加賀だった。

その顔からは感情が窺えず、僅かに震えているように見える握りしめた拳が彼女の中で渦巻いている劇場を提督に語っていた。

提督は内心驚きながらも冷静な態度で元帥に問い返した。

「それはまた急ですね。どうしました？」

「いや、単に僕が君の所の加賀を凄く気に入ったんだよ。彼女良いね凄く良い」

「ありが……と……」

褒められたことに対して素直にお礼が言えない程加賀はまだ固まったままだった。

だがそんな彼女の様子に元帥は気付いているのかいないのか、更にこう続けた。

「はは、僕が元帥だから緊張してるのかい？ なに、心配らないよ。僕のところに来ても必ず君は大切に扱うから」

「は……」

もはや加賀はまともに言葉も出無い様だった。

元帥の言葉にもただ俯いてついには言葉途中で黙り込んでしまった。

その様子を流石に見かねた提督が助け舟を出そうとしたが……。

「あの閣下……」

「いやあ、いいねえ君！ 本当に良いよ！ 可愛い！ 綺麗だ！ 正に艦娘だからこそ身近で見つける事が出来る大和撫子という感じだね！」

そう言うと元帥は軽く加賀のお尻をポンと叩いた。

完全なセクハラだったが、なんの遠慮も無く悪気も無い様子でそんな事をしたところを見ると、元帥は根からのプレイボーイであることが提督には見て取れた。

きつと基地でもそんな感じで誰に対しても同じように接し、また部下からは一切の苦情もないのだろう。

その予測からも元帥自身が艦娘を大切にする人物であるのは間違い無い様だった。

だが……。

「え?!」

元帥は突如大粒の涙を浮かべて泣き出した加賀に驚愕した。

「か………が………?」

それは提督も同じだった。

てつきりついに激高した加賀が何らかの粗相を元帥にしてしまうかもしれないと身構えていたのだが、これは本当に予想外の外だった。

「……………」

加賀はその場に泣き崩れしやがんで泣き顔を見られまいと顔を手で覆い隠した。

「え…………え…………」

元帥はその場でおろおろするのみだった。

一応彼には一言も発さずに静かに付き従ってきていた秘書艦の長門もいたのだが、彼女は元帥の様子を見てただ額に手を当てて悩ましげな顔をするのみだった。

提督は取り敢えず直ぐに加賀に駆け寄り、彼女を落ち着かせまいと肩を抱いて話し掛けた。

「おい、大丈夫か？ どうした」

すると加賀はかろうじて聞き取れる小さな声でこう言ったのだった。

「…………た」

「え？」

「た……………に……………」

「すまん。耳元で構わないから俺に判るように言ってくれるか」

「たいさ……………以外に……………」

「以外？ ああ」

「大佐以外に……………お尻、触られてしまいました……………た……………」

「……………」

あまりに予想外の答えに提督は閉口して戸惑うしかなかった

そしてそんな大佐にししか聞こえないような小さな声であったが、艦娘の身体能力で話の内容を間接的に長門から聞いた元帥は……。

「たいつつへん、申し訳ございませんでしたあああ!!」

基地中に聞こえたのではないかと思うくらいの大音声でその場に土下座したのだつた。

「げ、元帥殿?」

新たな予想外の展開に提督の頭は珍しく混乱しそうだった。

だが元帥はそんな提督に立ち直る間を与えずに続けざまにこう叫んだ。

「ほんと、本当に申し訳ない。ごめんなさい。本当にごめんなさい加賀」

「……」

加賀はまだ顔を覆ったままだった。

いや、いつの間にか駆け寄った提督に抱き付いてその胸に顔を埋めていた。

元帥は尚も続ける。

「いや、本当にごめんね? 月並みな言い方だけど悪気はなかったんだ。君を欲しいと言ったのも、お尻にタッチしちやったのも。全部素だったんだ」

ゴソツ

元帥は額を再び床に打ち付けた。

「元帥殿もう……」

流石にこのままでいるわけにはいかなかったので提督が元帥に土下座をやめさせようとして動こうとした時だった。

ガシッ

「え？」

それを元帥の秘書艦の長門が止めた。

「いいから、准将殿はそのままそいつを抱いてろ」

「ほんとおおおに、すいませんでしたああああ!!」

「悪い男ではないんだがな……。まあこの通り純粹で誠実でもある」

まだ謝り続ける元帥を見ながら長門は苦笑していた。

「ねえ、何かあったの？ 何か凄い大声したし。加賀さんもなんか……くっ」

元帥が乗る船を見送りながら提督の隣にいた満潮がどこか悔しそうな顔で彼に訊いた。

因みに彼女の視線の先には提督ではなく加賀がいた。

その加賀は提督に抱っこされまだその胸に顔を埋めていた。

更に彼女は時折頭を動かし自分の頭を撫でる様に甘えていた。

提督は仕方ないと言った様子で加賀の頭を撫でながらこう呟くしかなかった。
「分らん……。大変だったのは確かだ」

「……………やりました」

ぼそりと何か声が聞こえた気がした。

第13話 「不安②」

大佐

「ん？」

「その……ちよつと訊きたい事があるのだがな」

「なんだ？」

「その……だな」

「ああ」

「……」

「？」

提督は怪訝な顔をして書類から目を離して顔を上げて那智を見た。

那智は彼女らしくも無く、何か言い難そうに目を逸らしながら中々言葉が出ない様子だった。

「た、大佐はその……」

「ああ」

「む、むねえ！」

「ん?」

「あ……………う……………えつと……………」

気合いを込め過ぎたのだろう。

つい出してしまった大声を直ぐに抑えようとして、返って緊張で声が裏返ってしまつたようだった。

那智は顔を真っ赤にして必死に取り繕うとしていた。

「どうした?」

「つ……………。大佐はー。お……………女の胸はどれ位の大きさが好みだ?!」

「胸……………?」

「……………」

再び怪訝な顔をして那智の言葉を反芻する提督に那智は羞恥に染まった顔でコクコクと頷いた。

提督は一瞬困惑したが、那智突然問い掛けられた意表を突く内容にも無碍にあしらうこともなく、真面目な顔をして答え始めた。

それは普段から真面目で硬派な彼女だからこそ、それなりの理由があるのだろうと提督が判断した結果だった。

「……………好みを訊かれると実際にはどちらというのは断言はし難いな。そりゃ、服の上か

らでも判るくらいに強調されているとかなら目も引くだろうが」

「と、という事はどちらかというとき大きい方が好みという事か?!」

「なんでそんなに必死なんだ。大きければ目を引くのは自然だと言っただけだぞ?」

「つ、た、頼む! 曖昧な答は嫌なんだ」

「那智……。お前それ、例えば胸が平均より小さい恋人が彼氏である男にそんな事訊いてきたらどう答えると思う?」

「そ、それは……」

提督の言葉に乗り出し欠けようとしていた姿勢を那智は控えた。

その答は簡単だった。

純愛で結ばれた恋仲ならきつと彼はこういう事を言うだろう。

それは……。

「その二人の思いがお互い通じ合っている仲ならきつと男は彼女だけで十分と言うだろう」

「う……。つ、つまり大佐は慕う心に偽りがなければ、身体的特徴は好みの判断基準にはならない?」

「取り敢えず俺は胸が小さい、大きい、だけで人が嫌いになる事は無いな」

「な、なるほど……」

「一体どうしたんだ？」

「う……。じ、実はな」

「ああ」

那智は申し訳なさそうな顔をしてぽつぽつと話し始めた。

胸の話をした直後である所為か、または自分なりにそこに自信を持っていたからだつた所為か、少しその部分を腕で覆いながら恥ずかしそうにしていた。

「わ、私は姉妹の中で一番練度が低いだろ？」

「妙高型でか。ん……。そう、だな。だが改二にまでなっているし、作戦でも活躍しない事は無いから弱い事はないと思うが」

「ま、まあな。だけどその……。なんだ。ほら、私は『姉』だろう？」

「そうだな。足柄と羽黒の姉だな」（競う対象を妙高から外しているのが那智らしいな）

「妹達より練度が低いのはまあいいにしても、出撃の回数にその、ちよつと開きがあると思うんだが……」

「うん？ 統計は直ぐには判らんが……。もしかしてお前、その事で俺から疎遠になつていると？」

「わ、私は嫌いかな？」

「……」

自分でも不躰な事を訊いてしまったと思つたのだろう。

那智はその問いに対して黙って自分を見つめる提督に直ぐに謝つた。

その様子は普通の彼女とは大分違って、幼い娘らしい反応だった。

「! (っ、っ)め……!」

「……那智」

「は、はい!」

「俺は女性を胸の大ききで好きになる事は無い。だから那智は那智で良いと思つて
る」

「ああ……あ、いや、はい」

「あと妹と出撃の回数で開きがあつてもそれは特に俺は意識していない。が、それを
前に意識させてしまった事には悪いと思つている。すまない」

「そ、そんな、やめてくれ! 私が全面的に悪いと思つたこれは! だから大佐は謝らな
いでくれ!」

まさ自分が謝られるとは思つてみなかつた那智は不意の提督の謝罪に完全にしど
ろもどろだった。

だが提督はそんな彼女に構わず続けた。

「そして最後にもう一つ」

「……っ」

やや鋭さが増さした真剣な声に那智はビクリと体を震わせた。

怒られると思つたからだ。

だがそれも仕方がない事だし当然の事だと思つたので彼女は黙つて肅々とそれを受け止めようとしたのだが……。

「今晚一緒に達磨でもどうだ？」

「……え？」

掛けられた言葉はその予想とは程遠いものだった。

呆けた顔をする那智に提督は微笑みながら続けた。

「と言いつつ酒は洋酒なんだがな。が、日本産だ」

「大佐……」

那智は自分の瞳が潤んでいるのを自覚していた。

だが止めようがなかった。

その表情ははまるで悪戯をして怒られた子供がその後で親に慰められた時のそれに似ていた。

提督はどこか柔らかく感じる声で話を続けた。

「俺はお前を疎んではない。こうして酒を飲むひと時も楽しみだし、実戦でも勿論頼

りにしている」

「……」

「が、やっぱり俺は、軍人としてこれはどうかと思うが。国を守る務めよりこのひと時の方がかけがい無く感じるから好きだな」

「大佐……あ……」

ついに那智は大粒の涙を零して泣き始めた。

提督はそれに少し驚いたように焦った様子を見せた。

「泣く程のような事を言ったか……?」

「っ、すまん」

「いや、気にする事は無い。それで、どうだ?」

「勿論、御相伴に預かろうではないか! あ、けどな。できれば今回は……」

那智は直ぐに涙をグシグシと手の甲で拭うと、一つだけ我儘をお願いしようとした。

だがその願いを予想していた提督は彼女より先にこう言った。

「二人だけで飲もう。ツマミも俺が作って……。まあ、多少の無礼講は許可だ」

「大佐……!」

最後の『無礼講』は提督なりのサービスだったが、どうやらその配慮は大当たりのようだった。

那智は最初の時とは打って変わって明るい顔をして提督に感謝の意を笑顔で伝えた。

第14話 「過去」

提督の基地に居る妙高型姉妹は最初から専属としていたわけではない。

実は彼女達は提督の基地に来る前は別の司令官の下にいた。

彼女達が今の提督の下に来る事になった理由はその以前いた場所であるとある問題が起こった為だ。

その問題とは……。

妙高達が以前所属していた基地の提督は、一般的な評価では優秀な部類に入る司令官だった。

実際、部下の艦娘たちの評判も良く、特に妙高型の末っ子羽黒に目を掛けていた事で認知されていた。

羽黒はこの上官を心から慕っていた。

提督もそんな羽黒の恋慕に応えるように彼女だけは特に篤く扱い、そして少ない暇のひとつ時はなるべく彼女を傍に置き、仲睦まじく交際しているように見えた。

だが……。

その提督の性根はサディスティックな下衆であった。

表面上は羽黒を愛している様に見せて、彼女を傷つけない事を条件に那智を脅して身体の関係を強要し、歪んだ征服欲に悦びを見出していたのだ。

ここで脅迫の対象として那智を選んだその提督の判断は妥当と言えた。

長女の妙高は姉妹の長と相応しい器量を持ち、普段柔和な態度を見せつつも、どんな状況にも動揺する事は滅多になく常にその場で適切な判断ができる女だった。

これは脅迫する対象としては提督にとつてはリスクがあった。

そうしようものなら彼女は表面上では従う振りを見せつつも、その裏では早々に状況の打破の計画を立てて速やかに本部に報告するか、或いは直接肅清に出る事も考えられた。

そう、彼女は怒らせると本当に怖い女だったのだ。

次は足柄。

彼女は見た目通り直情的な性格だった。

羽黒の件を出して脅そうものなら激高して自分の身に危険が及ぶ可能性が大いにあった。

故に事実を知らない羽黒は提督を唯純粹に提督を慕い続け、那智は実直な性格から事実がバレて羽黒を傷つけない為に誰にも相談せずに提督に従い続けるという構図が出来上がったのだ。

だがこの提督の帝国は唐突に終わりを告げた。

一応提督は二人との情事の最中は誰も執務室に來ない時間帯を選んでいた。

だがいつ誰に見つかからないとも分らないスリルにも快感を見出していた彼は部屋の扉に鍵を掛けないでいた。

その選択が終わりを招いた。

その日に限って羽黒が編入されていた艦隊だけ、遠征からの帰投時間を誤って覚えていたのだ。

艦隊は提督の予想より早く帰投し、旗艦だった羽黒は帰投報告をする時に提督に会えるので嬉しそうに廊下を進んでいた。

そして彼女が入室の挨拶と共に扉を開けた先に広がっていた光景とは……。

結果、羽黒は悲愴の余りにその場で自殺未遂を起こし、それを目にした那智は情事の跡がまだ残っている事の認識も忘れて半裸のまま直ぐに羽黒を医務室に連れて行った。

そして自分は最低限の居住まいだけ正すと一人独断で遠洋に出て羽黒を傷つけてしまった責任から自沈しようとしたのだった。

だがこの那智の自沈は密かに提督の不徳を感じ取って警戒していた妙高によって防ぐ事ができた。

異変を察知した妙高は羽黒を見守る事を足柄に任すと、自身は全力で那智の跡を追っ

て、彼女が行こうとしているポイントを予測して勘だけで先回りしたのだった。

予測という博打的な行動ではあったが、妙高は自身の妹に対する勘は絶対の自信を持っていた。

そしてそれは完璧に当たったのである。

提督は妙高の肅清を心底恐れた。

何とか彼女が戻る前に上手く話を作って自分から本部に報告して身を守る案を考えねばならなかった。

だが提督の焦りも虚しく、この時も妙高は那智を救って彼の予想より早く帰投し、そして執務室へ彼を訪ねてきたのだった。

提督は最早恐怖で言葉も出なかった。

部下が、ましてや兵器でもある艦娘が指揮官である提督に反逆するなど決してあつてはならない事だったが、人間と比較して遜色ない感情を持つ彼女たちが激高してもおかしくない所業を自分が行ったのだ。

故に妙高はやるだろう。

そして自分は彼女に何一つ有効な弁解もできぬまま命乞いをしながら葬られるだろう。

だが、恐怖に震えて脂汗を流す提督に妙高が掛けた一言は、彼が全く予想だにしない

ものだった。

『提督、羽黒が……那智が……！ 一体何があつたんでしよう?!』

提督はこの言葉を聞いた時、頭が真っ白になつて気が抜けそうになつた。

だが妙高のセリフから彼女が妹達の救命に頭が一杯で真実に気付いてない事を予測すると、直ぐ焦燥に駆られていた様子を取り繕つてあたかも彼女を慮っている様に立ち回つたのだった。

妙高が事実を知らないという事はきつと足柄もまだしらないだろう。

那智はどうやら勝手に自沈したようだし、羽黒に至つてはあの性格だ。

きつと自分が上手く言えば姉達には真実を打ち明けずに済ますことができるだろう。

提督はそんな事を考えながら早速今後の自身の保身の算段を立てるのだった。

しかし、それこそが妙高の狙いであつた。

先ず提督が那智が自沈したと決めつけている事を察した彼女は、その事実を敢えて知らさずに彼女を保護して密かにその身を隠した。

そして敢えて真実を一番直情的な足柄に打ち明ける事によつて、彼女の怒りをこれらの自分の計画に協力させる推進剤とし、自身の計画の機密性を保持したのだ。

那智は妙高に助けられた時点で既に全て彼女に任せていたし、羽黒はあの様子だ。

暫くは塞ぎ込むだろうが、自分か足柄が傍について安心させてやればきつと大丈夫だ

ろう。

提督は真実が羽黒から発覚する事を恐れるだろうが、そこは自分が彼女の見舞いに毎回訪れその度にその様子を適当に報告すれば疑われることは決してない。

足柄には敢えて羽黒自傷の件でイラついている様子を演じさせておけば、これも見舞いに行かせても提督は疑う事は無いだろう。

妙高はここまでの事を事件が起きて那智を救いに行くまでの間で全て考えた。

唯一つ後悔しているのは羽黒の事だった。

彼女がよもや自殺という勇気を要する行動まで起こすとは妙高も信じ切れなかったのだ。

妹達を傷つけてしまった。

提督は勿論許す気などなかったが、羽黒が自殺未遂起こしてしまった事は大きく彼女の姉としての自信に傷を付け、改めて肅清計画に闘志を燃やすのだった。

そして羽黒の事件から三日後、たった三日後、妙高の計画は電撃的に実行された。

『目的と所属の艦隊、そして指揮官の名を言え！』

海軍本部の警戒域の防壁の真正面に二つの人影があった。

それは妙高型一番艦妙高と三番艦の足柄だった。

なんと彼女達は密かに提督の基地を無断で抜け出し、海軍本部に直接自ら現状を訴えに行つたのだ。

事前の通達も無しに訪れた彼女達を本部は当然厳警戒態勢で迎えた。

直接的にも間接的（識別コード）でも味方である事が確認できたから勧告無しの迎撃はされずに済んだものの、それでも妙高のこの行動は非常に大胆かつ非常識なものだった。

『次は無い！ 最後の通告である！ 目的と所属を……』

「海軍本部に直接訴えたき儀がございます！ どうかお気届け頂きたく……！」

妙高はあらん限りの力を振り絞り大声で言った。

妙高は先ず本部の第二司令官である上級大将に大喝を貰った。

しかしそれは、彼女達の非常識な行動によって警戒網に一時でも支障をきたしてしまつた事に対してであつて、訴えそのものを無碍に拒否したりはしなかつた。

艦娘すら畏怖させる上級大将の大喝に足柄はすっかり縮こまってしまい、妙高も平靜こそ装っていたが内心かなり恐怖を感じていた。

次に元帥が彼女達を安心させるように柔らかい微笑みを称えながら現れ、なんと後ろから名譽中将まで一緒に現れた。

しかし後者の方は安心させようとかそういう気遣いは見られず、まるで面白い物見たさに来たという様な自然な雰囲気を感じさせていた。

妙高は本部に訴えに来るまでは計画していたものの、まさかいきなり海軍の上位3人に迎えられるとは思っていなかったので流石にこの状況には緊張した。

『話は解った。直ちに調査隊を派遣する故同行するように』

行動の大胆さと妙高の真剣な態度もあつて、本部は彼女の訴えに偽りの可能性は薄いと判断して直ぐに問題を調査する一団を派遣する事を決定した。

そして妙高達が密かに出ていた事に未だに気付かないでいた提督は、実際に本部の調査団が間近に迫るまで、ついに己の非道がバレている事にも気付かずに終わった。

事實は速やかに確認され、提督は速やかに軍法会議に掛けられた。

判決は極刑もありえたのだが、一時でも恋していた提督の命だけは助けたいという羽黒の訴えが最終的に認められる形となり、一生監視付きの懲戒免職処分となった。

判決は軽く見えそうだが、実際は軍人としての生命は完全に断たれ、次に問題を起こした場合はその時こそ極刑以外無いというかなり重いものだった。

そして、提督がいた基地には新たな提督が配置される事になったが、妙高達4人については同じ場所には居たくないという一致した希望もあつて別の提督の元に配属される事になった。

その提督と言うのが……今那智の前で酒の相手をしている提督こと、大佐だった。

第15話 「頓挫」

上官には朴念仁のお前だから信頼できる、なんて心境的には正直複雑な事を言われたが、命令である以上従うしかなかった。

それに重巡が最初から、妙高型が全て揃って艦隊に加わるというのだから基地の戦力的には悪い話ではなかった。

「そろそろか」

提督は通達を受けた着任の予定時間を確認して呟いた。

4人とも重巡なので今回は自分達だけで直接くるとのことだった。

『大佐、来たみたいよ』

執務室に叢雲から内線が入った。

「分った、通してくれ」

提督が応答して数分後、「失礼致します」という言葉と共に4人が入って来た。

「初めまして提督。この度は私達を受け入れて頂きありがとうございます」

「……がるる」

「……ふん」

「……っ」

妙高以外は明らかに提督に好意的な態度には見えなかった。

提督は事前に彼女達の経歴を確認していたので、何故そんな態度を取るのか既にその時点で大凡の予想はできていた。

(ま、最初から人間に不信感を持っているならある意味こちらもやり易いか)

この頃の提督はまだ艦娘たちと打ち解けてなく、その接し方も今より大分素っ気無い感じだった。

故に艦娘の方から自分に近付かない事は、まだ彼女たちに苦手意識を持っていた彼からしたらありがたかったのだ。

「よく来てくれた。俺がここの司令官だ。これからよろしく頼む」

「はい、宜しくお願い致します」

「……」

「……」

「……」

「貴女達っ」

妙高のお叱りの声が飛んでようやく残りの3人は頭を下げて着任の挨拶を始めた。

「……よろしく」

「よろしく頼む……」

「お、おねが……お願いします……」

(これは大分重症だな)

自分には都合の良い状況だったが、思った以上に妙高以外の態度が硬い事に提督はこれから仕事に影響を懸念するのだった。

「お食事、ですか？」

ある日、妙高は提督の執務を手伝っている時にそんな話を持ち掛けられた。

提督は妙高の意外そうな顔に気付く事も無く書類に目を走らせながら続けた。

「まあその、一応お前達の経歴は知っているから妹達がああなのも理解している」

「はい」

妙高は少し目を細めて真剣な眼差しを提督に向けた。

「だがあのままだと少し仕事にも影響が出かねないと思つてな」

「だから親睦を深める為に？」

「そういう事だ。と言つても外に食へに行くわけじゃない」

「え？」

「俺が用意する」

「え？」

妙高にしては珍しく同じ反応を2回してしまった。

提督の提案がどれも彼女にとつて意外で適した瞬時に反応が浮かばなかったのだ。

妙高はなるべく動揺を悟られない様に注意しながら提督に訊いた。

「提督がお作りになるのですか？」

「そうだ」

「お料理ができるのですか？」

「いや、正直に言えば食べられるものなら作れる、と言った程度だ」

「え」

「一応一人暮らしをしていたから作れることは作れる。でも味は保証しないという事だ」

「あ、ああなるほど。でも、でしたらわざわざ提督がお作りにならなくても……」

「手料理で迎えた方がこちらに害意は無いというくらい伝えられると思つてな」

「あ……」

妙高はこの時やつと提督の心遣いを理解した。

そしてたつたこれだけの事だったが彼の事を少し信用できると思つた。

だからこのお誘いには快く応じる事にした。

「……分りました。そういう事ならば是非御相伴にお預かりさせて頂きますね」
「誘いを受けてくれて感謝する。明日の朝でいいか？」

「あ、朝食ですか」

「ああ、まだ直ぐに予定は作れないから朝くらいならと思つてな」

「分りました。妹達に伝えておきます」

「ああ、あとそれから」

「はい？」

「俺の事はこれからできたら大佐と呼んでくれ」

そして次の日の朝、妙高達姉妹は伝えられた時間に執務室に臨時で設けられたテーブルに揃つていた。

流石にまだ妙高以外は神妙な面持ちだった。

特に羽黒は執務室にいるだけで泣きそうな様子だった。

姉達がいなければ一人でここに居続ける事ができるかも怪しかった。

「待たせた」

扉が開く音と共に料理が出来たらしい提督がそれを運んできた。

テーブルに着いていた4人は提督の方を向き、彼が持つて来た料理を見て一様にポカ
ンとした顔をした。

「なにそれ、オムレツ?」

まず足柄がテーブルに置かれた料理を指して意外そうに言った。

わざわざ食事に誘われたのもう少し豪華な料理が出てくると思っていたのだ。

だが出されたのはそんな予想反してシンプル過ぎるくらいシンプルな卵料理だった。

皿に乗っているのは黄色く焼かれたそれだけで、申し訳程度にパセリが一つ添えられ
ている程度だった。

「これはオムレツではない。スクランブルエッグだ」

「オムレツもスクランブルエッグも同じ様なものだろう何が違うというんだ」

足柄の誤りを訂正した提督に食って掛かるように那智が言った。

確かにオムレツもスクランブルエッグも見た目はあまり違いが無いように見えた。

彼女の隣に座る羽黒もこの時はその事が気になったのか純真そうな瞳で提督の言葉
を待つていた。

「明確に違う。オムレツの方がどちらかというところちゃんと技術がいるんだ」

「まあ、そうなんですか」

場をとりなす為とは自分でも理解していたが、提督の話に興味を持った妙高が先を促

した。

「オムレツは先ず作つて皿に乗せるまで一切味付けをしない。そしてその出来上がりもふんわりしたものになるように技術がいるんだ」

「ああ、そういえばオムレツはケチャップを掛けて食べるわね」

「そうだ。そしてオムレツは形もなるべく木の葉になるように焼かないといけないんだ」

「あ、そう言えば形も今まで見てきたのは大体同じですね」

「ではスクランブルエッグは何だと言うんだ」

まだ那智は食つて掛かっている感じだった。

自分以外が提督に友好的な態度を取っている雰囲気か気に食わない様子だった。

「スクランブルエッグは卵を混ぜる段階で塩コショウで味を付けるんだ。そして焼くときも多少かき混ぜながら仕上がりを柔らかくする」

「あ、だから形は木の葉ではないんですね」

「そうだ。寧ろスクランブルエッグの方が形に拘らなくていい分、半熟にしたりじっくり焼いたり、自分なりの好みに仕上げられる」

「で、なんでわざわざ招待までして出した料理が唯の卵料理なんだ」

「那智！」

流石に妙高もきつめに叱った。

那智は少しビクツすると目を伏せながら呟くように言った。

「……すまん」

「いや、いいんだ。これを出したのはスクランブルエッグが俺が作ってきた料理で一番自信をもつて出せるからだ」

「え？ 一番自信を持つて出せるのが卵焼きなわけ？」

足柄が初めて面白そうに笑いながら提督に訊いた。

だがその顔は明らかに敵意といったものは感じさせず、どちらかというと思戯つばい無邪気なものだった。

そして足柄のツツコミがウケたのか、彼女の隣で羽黒も笑いを堪える様に口に手を当てて俯いていた。

「基本的に出来た料理は焼くものだけだったからな。ウインナーとか他にも焼くものはあったが、卵が一番これは人に出せると思ったんだ」

「……話は解った。だが肝心なのは味だ。そこまで言うのだから余程美味しいのだろうな」

「卵が苦手でなければ、少なくとも不味くはないと思う」

「そうなんですか。ではせっかくご用意頂いた事ですし……大佐？」

(大佐?)

羽黒が妙この提督の呼び方にその時ピクリと反応した。

提督はその事には気付かず妙高に向つて頷いて言った。

「ああ、では食べてみてくれ」

『頂きます』

食事の挨拶と共に皆が料理を口に運んだ。

「! これ、イケるわね!」

「まあ、美味しい」

「く……まあ、悪くないな」

足柄の素直な表に妙高も続き、那智も少し悔しそうにしながらもそれを認めた。

そして羽黒は……。

「……っ」

「羽黒?」

「ちよ、どうしたの?」

「おい、大丈夫か?」

料理を食べるなり泣き出す羽黒に3人が声を掛ける。

声を掛けられた羽黒はそんな姉達の心配を否定する様にかぶりを振つて震えた小さ

な声で言った。

「わ……………」

「ん？」

提督が羽黒の様子に注意を向けながら訊いた。

「私……………提督にこんな美味しい料理ごちそうしてもらったの……………初めてです。こんなに……………こんな風に優しくして貰った、初めて……………です」

「羽黒……………」

妙高が慈愛に満ちた目で羽黒の所に来て彼女を抱き締めた。

那智、足柄もそれに続くように羽黒の近くまで行くと、彼女の頭をそれぞれ撫でた。

「ぐず……………」

羽黒の脳裏には以前の提督との思い出が浮かんでいた。

思い返してみれば確かにあの男には恋していたが、優しくして貰った時は誰から見ても気を遣われているというのが判るような鼻屑に近いものだった。

羽黒も改めて考えればそれはあからさまな機嫌取りだという事が判ったが、その時は提督への恋慕がそれを盲目にさせていた。

ましてや食事に誘われた事なんてそう言えば無かった。

無論、外出に、デートに誘われた時もそう言えば無かった。

誘ってきたのは身体を重ねた時だけだった。

そんな不自然な愛の形を羽黒は疑う事を無意識に放棄していたのだ。

その事を思い出して、そして今こうして新たな提督に出された料理を食べていると、羽黒は今この瞬間が言葉にできない程に大きな幸せに感じた。

「提督……ありがとうございます……。ございます。お料理……卵焼きとても美味しいです。ぐす……」

「ん、ああ、気に入ってくれて良かった」

素っ気無い返しだったが、何処か少し柔らかい声に聞こえた。

羽黒は一口一口その美味しさを噛み締め、ふと何が気になったのか口に運ぼうとしていた手を途中で止めて提督に訊いた。

「あの提督……」

「お姉ちゃんが提督の事を大佐と呼ぶ理由……教えてもらえませんか？ できたら私も……提督を、大佐って呼びたいです」

「ん……」

「どうした？」

グラスを傾けていた手を少々長く止めていたらしい。

明後日の方向を見たまま物思いに耽っていた那智にようやく提督の声が届いた。

「ああ、悪い。ちよつと昔を思い出してな」

「昔？」

「ああ、大佐に会つて間もない頃の事をな」

「ああ、結構前だな」

「そうだな……。早いものだ……。ん？」

ようやくグラスを仰ぎ始めた那智は提督の視線に気付いた。

「ん？ なんだ？」

「いや、そういえばお前、寝るときはその恰好なのか」

「うん？」

提督の指摘されて那智は自分の格好を見た。

彼女は淡い青色の可憐なネグリジエを着ていた。

「なんだ、変か？ 一応もうこんな時間だろう？」

那智はどこか演技っぽい仕草で提督の疑問に答える。

「いや、そうだが。俺のイメーজだとお前は寝るときは効率を重視してそうだと思つていてな」

「ジャージとかか？」

「そうだ」

提督の答えに那智は大袈裟にかくりと肩を落として見せた。

「おいおい、それはいくら何でも女性に対してあまりにも不躰じゃないか？」

「そうだな、悪い」

「いや、いいんだ。だが聞いてくれ。寧ろな、ジャージなのは妙高姉さんと足柄なんだぞ」

「なに？」

那智の話がかなり意外だったのか、今度は提督がグラスを運んでいた手を途中で止めて驚いた顔をした。

那智はその顔を見て面白そうに笑いながら続けた。

「意外だろうか？ 実は私の方が女らしいんだぞ」

実はそれは嘘だった。

提督の予想通り実は那智は寝るときは殆どジャージだった。

この服はこの時の為に意を決して彼女が今日の為に用意したものだだったのだ。

そしてつまり、妙高も足柄も寝るときはジャージではなく前からネグリジエを着ていた。

もし彼女達が那智のこの些細な見栄（嘘）聞いたらどんな顔をして抗議してくるだらう

う。

那智はそれを想像すると何とも言えない背徳感を感じた。

と、那智がそんな事を想像していた時だった。

「あー！」

ガチャリと扉が開く音と共に足柄が驚いた顔をしてこちらを見ていた。

那智は足柄の突然の訪問に動揺して、思わずグラスを取り零しそうになる。

「あ、足柄?! お前、なんで?!」

(ん? 足柄もネグリジエを着ているな。偶然か?)

「いや、大佐と一緒にお酒を飲もうと思つて。相手をお願いしようと思つたら那智姉さ

んいないし。ていうか……」

「っ」

那智は足柄の視線に気付いて思わず己の身を抱く。

「姉さん……へえ……」

「こ、これはだな」

「?」

足柄はニヤリとからかう様な目で那智を見る。

姉妹のやり取りの意味が飲み込めず、提督は一人キョトンとしていた。

その時だった。

再びガチャリという音と共に新たな訪問者が来た。

「ああ！ お姉ちゃん達！」

「あ、羽黒」

「なんでお前も?!」

「私もいますよ」

「羽黒、妙高お前達どうしたんだ」

その場にいた人間の中で平静としていた二人の内の一人だった提督が妙高達を見て言った。

何故か不機嫌そうに頬を膨らませる羽黒を他所に、妙高は足柄と同じ様な悪戯っぽい笑みを浮かべながら言った。

「いえ、ちよつと那智がいない事が気になりました。予想は当たっていたみたいですけど……いふいふっ」

「那智お姉ちゃん、足柄お姉ちゃんズルイ！ 私も大佐と一緒に飲みたい！」

「いや、別に黙っていたわけでは……その、な？」

「あー、気を遣ってここは退こうかなあと思っていたんだけどなあ」

「これは仕方ないですよねえ♪」

「お姉ちゃん！ 私もお！」

残念ながら那智が楽しみにしていた飲み会は次回の機会になりそうだった。だが続いて賑やかな新たな飲み会が幕を開こうとしていた。

第16話 「演技」

「鈍感系主人公をやってみませんか？」

「は？」

突拍子のない事を偶にいう加賀の態度には提督は慣れていたが、しかしその内容には流石に慣れなかった。

今度はまたどういう事なのだろう。

提督は取り敢えず話を訊く事にした。

「それは何だ？」

「大佐はゲームやアニメのラブコメの主人公がよくそういう設定なのが多い事はご存知ですか？」

「ん？ いや……」

「この手のジャンルは、大体主人公が自分の周りの女子に好意を持たれる展開が多く、そして主人公は物語の終盤までそれに気付かない鈍感の設定もまた多いんです」

「はあ……」

やっぱり言っている意味が解らなかった。

いや、言葉自体は判るが、意図が全く解らなかつた。

この困った自分の基地最強の空母はまた何を言いたいのだろう。

「私はこういつた主人公を見る度に思うのです。いい加減食傷気味であると」

「うん、つまり飽きてきたんだな？」

「作品自体は面白くても主人公の根本の設定がそれだと似た展開は常にありますからね。そこがちよつと……」

「ああまあ、なるほどな。それでなんだ、お前はそんな主人公を俺に演じろと？」

「そんな主人公現実にそういるわけないじゃないですか」

「それは女でもか？」

「女より男の方が圧倒的に多いんです」

「ふむ。で、何故そんないそうもない性質の人間を演じて欲しいんだ？」

「二次元の世界を体験してみたくて……」

加賀はそう言って少し頬を染めた。

表情自体はあまり変わっていないが、目は何処となく泳いでいるように見えた。

「仕事に支障がない程度なら多少は応えてやってもいいがな。しかしどうしたら良いか全く判らないんだが」

「自分に向けられる行為に対して素っ気なくして頂ければ良いのです。私はそれに対し

てヤキモキを……してみたい……」

「お前大丈夫か？」

どうも目の前の加賀は自分に好意を持つてから、それもケツコンを経てから性格が付き抜けつつあるように思えた。

だがそれでも優秀で頼りになる部下である事は変わりなかつたし、加賀自身がそういった戯れで自分や仲間迷惑を掛けた事も無かつたので、提督は敢えて今回も彼女の遊びに付き合つてやる事にした。

「分かつた。素っ気なくしたらいいんだな？」

「冷たくはしないで下さいね？」

「ん？ まあ……ああ、分かつた。何とかしてみよう」

「お願いします」

加賀は提督の承諾に嬉しそうにほほ笑んだ。

加賀にとってそれは単なる遊びのつもりだった。

いや、それは提督にとつても全く同じ感覚の筈だった。

だが彼女は予想できなかつた。

自分がこれから体験する事になる事態を。

「大佐、お昼お持ちしますか？」

昼休み、加賀はいつも通り提督に昼食はどうするか訊いた。

それは彼女にとっていつもの光景で、彼の答えにいつも通り応えるだけだった。

だがその日だけは違った。

提督は彼女の問いに対して言った。

「いや、今日はいい」

「では食堂で皆さんと一緒に？」

「いや」

「では外ですか。お待ちください。準備をしてくま——」

「いや、俺一人で行く」

「え？」

「別に無理に付き合う必要はないぞ」

「え？ いえ、別に無理なんて……」

「気遣いは嬉しく思う。だが大丈夫だ。30分程で戻るから少し頼むぞ」

「あ……」

加賀が急な展開に動揺して上手く言葉を紡ぐのに手間取っている間に提督は部屋から出て行った。

「……」

加賀は無意識に提督を追って上げてい手を見る。

そこには当然彼の姿は無く、指を動かしても虚しく空を切るだけだった。

(これは予想以上の衝撃ね。早く今朝の話を無しにしないと)

加賀は自分で言い出した事によって始まった事態だと直ぐに察した。

そして早々に提督に素っ気なくされた事に心が折れた彼女は、戯れを終える事を即決意したのであった。

「大佐、お疲れ様です」

「ああ」

夜、加賀は提督にその日の職務の終了を告げた。

あとは引き継ぎの内容や当直などを確認して休むだけだった。

(まさか今に至るまで話しかける機会が無かったなんて……)

加賀は仕事に就いている間、僅かな暇を探しては提督に声を掛ける機会を窺っていた。

だがその日に限って提督と加賀は絶妙なタイミングの入れ違い続き、ついには仕事が終わるこの時まで声を掛ける事ができなかつた。

それはまるで提督が彼女の動きを予想して敢えて避けているようにも思えた。

(……まさかね)

加賀は胸の裡に浮かんだ不安を振り払うように軽く首を振って息を着くと、やっと訪れた機会を無駄にしまいと決意のこもった目で提督に顔を向けた。

「たい——」

パタンッ

一瞬目を離れた隙であつた。

時間にして5秒あつたかないか。

その間に提督はさっさと退出して自室に入ってしまった。

「……」

加賀は今朝と同じように提督が去つた扉をじつと見て佇むのだった。

コンコンッ

「ん？」

仕事を終えて椅子で読書をして寛いでいた提督は扉を叩く音に気付いて顔を向けた。

提督はその日気分が良かった。

加賀が提案した遊びに自分なりにかなり上手く乗つてやれたと、自分の行動に満足し

ていたのだ。

(これなら加賀も不満はなだいろう)

だが頼まれた遊びとはいえないままでも続けるつもりはなかった。

提督は今日の結果に満足している事を明日にでも彼女に確認してこの遊びをスムーズに終わるつもりだった。

提督はそんな事を考えながら今自分を訪ねてきた相手の事を寝つけずに遊び相手を求めてきた駆逐艦だろうと予想していた。

ガチャツ

「おっ！」

だが意外にもその時はそうではなかった。

訪ねてきた相手は遊びを提案した本人である加賀だった。

「……」

「なんだ？」

いつもなら『どうした？』と言うところだが、そこはまだ律儀にも遊びに乗っているつもりだった提督は敢えてぶっきら棒な言い方を選んだ。

それがいけなかった。

「っ……っ……！」

加賀はその言葉を掛けられるなり口に手を当ててその場にしゃがみ込んだのだ。

「え？」

不意の流れに提督は慌てた。

しゃがみ込んだ加賀はそのまま俯いて肩を震わせ始めた。

(まさか泣いている?)

そう予想はできたものの何故加賀が突然そうなってしまったのかは予想できなかった提督は、困った顔で取り敢えず彼女に声を掛けた。

「加賀？」

「！」

加賀はその言葉にピクリと全身を震わせて反応した。

「初めて……」

蚊が鳴いているようなか細い声だった。

提督は声を聞き逃さないように加賀と同じ目線になるよに自分もしゃがんだ。

「ん？」

「初めて……今朝以降名前を呼んでくれた……」

「え？」

「大佐あ……」

顔を上げた加賀の顔は涙で濡れていた。

珍しく感情が昂った影響か頬も紅潮しているように見えた。

そんな加賀の顔を見るのは提督は床の間以外ではかなり久しぶりな気がした。

(これは何か失態を犯していたか)

「まあ、入れ。来るか？」

「……」

返事こそしなかったものの、加賀は俯いたままコクリと頷いて頭を動かした。

途中から半ば提督が予想した通り、加賀の気落ちの原因は彼女自身が始めた遊びが原因だった。

提督が加賀が思った以上に遊びに上手く応じた事で遊びの提案者本人が動揺して上手く立ち回れず、最終的にこうしてなりふり構わず構って貰いに来たとの事だった。

「……」

今加賀は、提督にしつかり抱きついて先程泣き崩れていたのが嘘のように穏やかな顔をして寝息を立てている。

提督はそんな彼女の顔を撫でながら、現実にはなかなか存在しないのではないかと加賀が言っていた鈍感設定の主人公の気が、自分にも多少あるのではと微妙に反省するの

だ
っ
た。
。

第17話 「駆逐艦一番」

「え？ 響、練度が最高になったの？」

「うん」

「おめでどう！ これでしれーかんとケツコンできるわね！」

「ありがと。早速行つてくるよ」

「頑張るのよ！」

提督麾下の駆逐艦の中でも最古参に近い響ことヴェールヌイ（本人の希望により以下は響）はこの日念願だった最高練度に達した。

提督は特に駆逐艦を冷遇したりはしていないが、普段は遠征か敵潜水艦の警官任務くらいしか割り当てられる事がない駆逐艦が彼の下でこの域に達するのは容易ではなかった。

提督からしたら単に効率を優先しての事、だが駆逐艦達にとつては少々歯痒い環境と言えた。

まあそのお陰で駆逐艦たちは基地内での仕事に関しては大抵をこなせるようになり、艦隊のお留守番にして基地の顔になったわけだが。

そんな中で響がここまでこれたのは駆逐艦の中でも対潜能力に長けていたからであつた。

元々対潜能力が高い者が多い軽巡に混じつて敵潜水艦の警戒任務をよくこなし、半ばレギュラーといえるほど常にこの任務には率先して立候補したのである。

そんな地道な努力の積み重ねでやつと今、こうして“ここ”にたどり着いた。

同じ特対潜駆逐艦として朝霜という妹分のライバルもいたが、なんとか彼女より先にここまで来れた。

そして響は意気揚々と提督が居る執務室の扉を叩いたのだつた。

コンコンツ

「入っていいぞ」

「失礼します」

提督の承諾を受けて馴染みのある少女が部屋に入つて来た。

提督はそれを認めると手に持っていた筆を置き、彼女を迎えた。

「ん、響か」

「うん」

「どうした？」

「なんだと思う?」

「ん?」

なにやら響らからぬ返しだった。

彼女はいつも青い真つ直ぐな瞳で言いたい事はハッキリ言う事が常だった。

だがこの時に限つては少々違うようだった。

この時の彼女は何かを期待しているような、喜んでるように僅かに頬を紅潮させ、気分が高揚しているようだった。

どうやら今は自分から要件を言うよりそれを当てて欲しいらしい。

提督はそんな響の子供らしさを内心ほほえましく思いながら、少し間を置いて考えて口を開いた。

「ケツコンか」

「正解。流石だね」

「何となくな。本当に」

「でも解つたね」

「ああ、何故かな」

「してくれる?」

「……」

意外にも提督は即答をしなかった。

響はそれを見ると途端に耳を垂れる犬のように落ち込み、それでも諦めることなく健気に提督をじつと見つめて待つ事を選んだ。

提督が響の問いに即答しなかったのには彼なりの理由があった。

艦娘には年齢という概念がない。

故に一見少女にしか見えない駆逐艦にもその定義は一応当たらず、例えケツコンしたとしても現代の日本の法的に違法というわけでもなかった。

だがそれでも見た目が幼女なのは歴然とした事実である。

要は提督はそこに道徳的な背徳感を感じ、即答ができなかったのである。

彼は過去に希望する者には全てケツコンには応じると艦娘たちの前で公言した事があつた。

それは勿論駆逐艦も対象であつたが、それでもまだその時は彼の中で彼女たちに対してだけは応える決意ができないでいた。

そして今、ついにそれに対して態度を示す時が来たのである。

「……」

提督は重苦しい雰囲気のまま口を開こうとしたがなかなか言葉が出ない。

内心は既に響の気持ちに應えるつもりであつたが、行動に移すのが難しかった。

「大佐」

そうこうしている内に響の方から話掛けてきた。

「ん……」

「叢雲や初春とは良くて。私とはダメなの？ あの二人とはケツコンしてないのに抱く事はあるのに響では、ダメなの？」

「む……」

痛いところを疲れて呻き似た声が提督の口から漏れた。

確かに彼女の言う通りだった。

響と同じ駆逐艦にして最古参の中の最古参、最初部下のその二人に対しては、提督はこれまでの付き合ひもあつてケツコンこそまだできていなかったが、身体を重ねる事があつた。

勿論お互い同意の上で。

響はその例を出した上で時部ではいけないのかと懇願してきたのだ。

(これ以上洩ると不味いな)

元より断るつもりで洩っていたわけではなかったが、女としてここまで真摯に好意を伝えてきた響の想いを提督はそれ以上無碍にする事はできなかった。

提督は引き出しから紙を一枚出して机の上に、正面にいる響に見える位置に置いた。

響はそれを見て目を輝かして走り寄る距離でもなかったのに本当に嬉しそうに小走りで近付き、その紙に見入った。

「ケツコン最初の駆逐艦はお前だな」

「叢雲や初春には今まで負けてたけど、これで勝ったね。ありがとう大佐！」

そう言うと響は紙を握りしめて机を乗り越え、勢いそのまま提督に抱きついた。

その目尻には涙の雫が浮かび、彼女の喜びの大きさを表していた。

第18話 「我が意」

「大佐！ 響とケツコンしたって本当?!」

島風が鼻息荒く勢いよく執務室に駆け込み、次いで後ろから雪風も着いてきた。

「待ってよ島風ちゃん！」

「なんだ、そんなに焦って」

「駆逐艦で一番に響がケツコンしたんでしょ?! うう……負けたああ!!」

「あ、やっぱりそれ……」

何でも一番を好む性質の島風は提督が自分より先に響とケツコンしたのが悔しかったのだ。

彼の前で地団太を踏んでやり場のないもどかしさに悶えている様だった。

「島風ちゃん落ち着いて。仕方ないよ響ちゃんは対潜能力高かったからわたし達より出撃する事が多かったし……」

親友の雪風がフォローになつてないようなフォローをして島風を慰める。

慰められた島風はそこでようやく落ち着いた、と思つたら今度はその場に座り込んで「次は絶対島風！」と駄々をこね始めた。

提督はどう接したのか思案しながら目の前の困った娘の対応を始めた。

「悪いがそれは保証できない。というかもう2番でも良いのか?」

「だって……せめて次は……」

「島風ちゃん、無理矢理自分を納得させちゃうと逆に後でまたモヤモヤしちゃうよ? もうちよつと考えよ?」

「雪風の言う通りだ。ここは焦らず次に自分がケツコンする理由でも考えたら良い」

雪風のナイスなフォローを提督はアシストした。

これは島風にそれなりに効果があつたようで、彼女は提督の『理由』という言葉にハツとした顔で反応した。

「理由……?」

「1番じゃなかったらそれ以外にケツコンしたい理由を考えてみる。それが決まったら順番を気にせずに頑張れないか?」

「1番以外の理由、かあ……うーん」

(こいつ、結婚という言葉の意味を考えた事なかったな)

提督は内心呆れ半分苦笑半分の気持ちになった。

「島風ちゃん、先ずケツコンは好きな人とするのが大事なんだよ?」

「え? じゃあ大佐で良いよね!」

「うん、でもね？ ケツコンはえーつと……もうちよつと強い好きになってからした方が良いかなって……」

雪風なりに考えて説明しようとしたのだろう。

しかし自分でも結婚という言葉が持つ意味を把握しきれずについ曖昧な説明になってしまった。

「強い好き？」

「えーつと、つまり……あ！ 一番の好きだよ！」

「一番の好き……！」

雪風が確信を得た言葉に島風は目を見開く。

「一番の好きっていうのは、その人の事が一番大事で、一番言う事を聞いてあげたいくらいの好きだと思よ！」

「ん……」

子ども特有の結論優先の話し方に提督はちよつとついていけず唸るしかなかった。

だがそれが島風には大当たりだったらしい。

彼女は雪風の言葉に再度目を見開き息を飲むと、座り込んだまま下から提督を見上げた。

「ん？」

「……」

島風の提督を見るその瞳は、敢えて例を挙げるなら動物の赤子が生まれた直後に見た物に最も愛と依存を覚える刷り込みのような感情が籠ったものだった。

「……っ」

提督は本能で微細な危機感に似た焦りを覚えて思わず椅子に座ったまま後ろに下がりたい衝動に駆られた。

だがそんな提督の焦りを他所に、島風は我が意を得たりと言わんばかりに勢いよく立ち上がると、提督の顔を真っ直ぐ見据えてそのまま彼に飛び掛かって抱き付いた。

「じゃ、島風の一番の大佐の為に島風はケツコンしたい！ 島風はそこまで絶対に頑張る！」

「島風ちゃん……！」

雪風は親友の答を見つけた姿に思わず感動して涙を滲ませた。

「……ああ」

一方提督は、相変わらず急な展開を見せる元気な駆逐艦達に今回も翻弄されてしまったと、若干混乱する頭の中で思わずため息をつくのだった。

第19話 「インターバル」

「資材が足りないんですよ？」

足柄はそんな提督の姿を見ただけで直ぐに彼の悩みを察した。

長い付き合いである以上に自他ともに提督の事を理解している彼女ならではの直感だった。

提督は足柄の声に重い声で答えた。

「ああ、やはり弾薬が致命的だ。後に控える作戦の為に火力を抑えた後方支援を選択したのも誤りだったようだ」

「支援の部隊に気を遣って少し挽回の機会を多く与えてしまったみたいね」

「前線の奴らもそいつらに気を遣って進んで具申をしてきたからな」

「結果、結局成果は上げられず、この前段階の作戦の時点で完遂できない可能性が出てきたわね」

「力を注げば達成は可能だろう。だが、その後の作戦については恐らくは……」

「そうね。今回は離脱を決意する必要があるかもね」

提督は足柄の結論に黙って頷いた。

今回の作戦はそれほど上手く推移していなかったのだ。

別にそれが珍しいという程彼が優秀というわけではなかったが、それでもこれまで堅実に職務を全うしてきた提督からしたら軍人として、指揮官として重く責任を感じる状態だった。

「……」

言葉が出なかった。

いや、口を開けば自分の責を認める言葉が出た。

しかしそれを敢えて提督はしなかった。

今彼の目の前にいる彼女が、そして彼に従う全ての部下がそれを望んでいなかったから。

もしそんな事を言えば、直ぐに皆は提督の謝罪を否定して責は自分たちにこそあると言ってくるだろう。

だが、それでは駄目なのだ。

お互いが納得し、同じ答に至らなければ今後の彼らの関係にしこりとなつて残るかもしれない。

別に完璧な関係を求めているわけではない。

だが対処できるならしたかった。

そう、提督は単に性格がやや度を越して律儀だったのだ。

「そんなに悩まないで。少し止んで、心と体を解きましょう」

足柄はそう言つて慣れた様子で苦笑しながら椅子に座つた提督を後ろから優しく抱き締めてきた。

背もたれ越しではあつたが、彼女が屈んできたのでお互い顔は間近にあり、温もりは十分に感じる事ができた。

「……すまん」

提督はただ一言そう言つた。

その短い言葉は彼のいろいろな思いが込められた一言であり、足柄は当然それを理解してこう応じる事ができた。

「ごめんね」

これも提督に負けないくらい短い言葉だったが、彼にはそれだけで十分だった。

それからただ黙つて目を閉じ、顔を寄せ、温かく自分を包んでくれた彼女の腕を握りながら、提督は十分に癒された。

(この作戦だけでも満足のいく結果にしよう)

提督は足柄に感謝しながらそう決意した。

転勤

「大佐、それは？」

「転勤の辞令だ」

「え……」

春風は思わず絶句してしまった。

ここに来てから今まで彼女は充実した日々を送って来た。

決して楽しい仕事とは言えなかったし、命の危険もあった。

しかしそれは兵器である艦娘には当然の事であったし、寧ろ名誉であった。

それだけでも彼女にとっては生まれてきた甲斐を感じるものであったが、それ以上に生きる喜びというものを与えてくれたのが、共に暮らす仲間と指揮官である提督の存在だった。

辛い実戦の任務も仲間たちがいれば奮闘できた。

そして基地に還れば戦いで疲れた自分たちを待機していた他の仲間たちが温かく迎えてくれ、戦功を称えてくれた。

それは春風にとって今いる場所に配属されてから予想だにできなかった幸福だった。

訊けば、殆どの艦娘も最初はそれを感じるらしい。

故に春風は感謝し恋慕し、忠誠を心に決めた。

艦娘の運用を滞りなく行い、作戦の指揮も無難にこなす提督という存在に。

提督は春風のこの評価を過大だと謙遜した。

だが彼女にとってはそれは譲れない事実であり、気持ちだった。

提督は一見不愛想だが真面目で寛大な人物だった。

作戦が失敗した時があつてもその原因が明確にこちらに非があるものでなければ、理不尽な叱責などは行わず、挽回の機会を与える事で更なる奮起を促し、こちらの矜持を保ってくれた。

逆に任務以外の非番の時は自分からあまり艦娘に話し掛けたりすることはなかった。なので、個人的に関わる事は少なかつたのだが、春風がそんな提督に他の多くの艦娘と同じく好意を持つのに時間はかからなかつた。

そんな提督が今、本部から転勤の辞令を受けていた。

春風にはショック以外の何ものでもなかつた。

彼女は思わず提督の袖を引いて言った。

「行かないで下さいませ。絶対に……」

「……」

提督はそんな春風に是の態度を取ってやる事はできなかった。

軍人という国に仕える職に就いている以上、上からの指示は絶対というのは常識だったからだ。

だから涙ぐみ彼女の頭の上に優しく手を置いてやる事しかできなかった。

「大佐……！」

提督を見上げた春風はどうとうそこで泣き出してしまった。

(自分はそれなりに『提督』をしてきたんだな)

抱き付いてしゃくりあげながら自分の転勤の留意を促す春風を見て提督はそう思った。

故にこうして自分を慕ってくれている彼女の気持ちに純粹に嬉しかった。

(なんとか応えてやりたいが……。それに比較的新人の春風でこれだから古参の奴に言うとうとうなるか……)

提督はこれから起こると予測される騒動に事前に手を打つ為にも自ら動く事を決めた。

「あまり期待するなよ」

困った顔でそう言う提督の胸に、春風は縋るように無言で顔を埋めた。

転勤騒動①

「聞いたか筑摩！ 大佐が転勤なんじゃと！ 吾輩を置いてだぞ?! そんなの嫌じゃ?!」

「ね、姉さん落ち着いて……」

何処からどういう風に広がったのか、提督の転勤の噂が広がるのは波が広がるようにどころか空に雷が轟くかの如く早かった。

早速ショックで駄々をこねはじめたのは駆逐でも海防でもなく、なんと航巡部隊のエースであり、隊長だった利根だった。

利根は自室で筑摩と二人きりになるなり、我慢していた胸の裡をぶちまけ始めた。

元々部屋に着く前から何処かで知ったようで、無邪気な子供の様な部分がある彼女が部屋の外で動揺を見せなかつた事は大した忍耐と言えた。

が、その平静も、唯一人の妹の前では装ったりしなかつた。

今は枕に顔を埋めて泣き顔を見られまいとしながら足をバタバタしている。

それによつて下着が見えてしまう事などお構いなした。

いや、元々それに関しては何にした素振りを見せた事はなかつたが。

「嫌じゃ嫌じゃ!」 のう筑摩、何ぞ妙案はないか? 大佐が転勤を思い留まってくれような妙案は?!

「姉さん……いくら大佐が思い留まっても、これは辞令だから……。上からの命令なの。軍で個人の意見を通すのは流石に無理よ……」

「それ・で・も! お前はそれで良いのか?! 大佐が行ってしまったても良いのか?!」
「……………嫌です……………」

涙でぐしよぐしよになった顔で振り返った利根にそう問いつめられ、筑摩もついにそかで瓦解した。

彼女は顔を手で覆ったかと思うと、そのまま姉の胸に飛び込み涙声でそう言った。

利根はそんな妹の頭を、まだ泣いたことによつて目を赤くしながらも、そこは姉らしい気丈な優しい笑みを浮かべて撫でるのであった。

「そうじゃろ。そうじゃよな……………」

そして利根もまた筑摩の頭に顔を埋めて泣き始めるのだった。

しかしそんな励まし合いも1時間もすれば、流石に二人は落ち着いて今はベッドの上で壁を背にして揃つて体操座りをしていた。

「のう筑摩、どうしようかの……………」

「それは大佐がいなくなつた後の話?」

「うん……」

「新し提督の下でもしつかり務めを果たす……のみ、かな……」

「そう……じゃよな……うん」

「新しい提督か……」

「……一応叢雲さんと初春さんに相談してみる？」

「……」

特にそれで提督の転勤がなくなるなど考えられなかったが、筑摩はこの基地で最古参にして裏のまとめ役である二人に相談する事を提案した。

あの二人なら相談する事で、少なくとも今よりはもつと前向きな気持ちになれる気が利根はした。

「そうじゃの。二人の今日の勤務予定は把握しておるか？」

「うん、今日の夜なら空いている筈よ」

「うむ、では訪ねるにあたって何か土産を用意せねばな。内容が内容じゃしな。やはりお酒かの？」

「まだ明けていない一升瓶が幾つかあるからそれにしましょう。後は軽くオツマミでも作っていいかない？」

「そうじゃな」

二人はここでやっと前向きな笑顔になる事が出来た。

料理にしろ相談にしろ、行動する事で今の悲しい気持ちは少しは紛れそうだったからだ。

「ツマミを作る材料は足りておるか？」

「特に大丈夫だけど……卵が余裕欲しいかしら？」

「うむ、心得た。吾輩が購買で調達してこよう」

「ありがとう姉さん。お願いね」

「うむ」

利根は行ってきますと部屋を出た。

その時だった。

「ん？」

「あ……」

タイミングが悪い(?)事に利根はちょうどそこで提督と鉢合わせてしまった。

「買い物か？」

いつもと変わらない提督の声だった。

利根はそんな普段の提督の声ももう直ぐ聴けなくなると思うと居た堪れない気持ちになり、再び目に涙が浮かび始めた。

だから震える声でなんとか返事を返す事しかできなかつた。

気丈に振舞おうとしたのだが、そうしようとする必らず失敗する。

何故かそう確信できた。

「うん……」

俯いて元気のない利根らしくない態度だつた。

提督は流石に気になって大丈夫かと声を掛けようとしたが、その前に急に自分に抱き付いてきた彼女に止められた。

「……」

「……」

提督も利根もそのまま無言だつた。

しかし暫くして利根の方から身を引き、今度は自然な笑顔でこう言つたのだつた。

「突然すまなかつたの。ちよつと卵を買いに行つて来るのじゃ」

「そうか」

「うむ、またの大佐」

そのまま普段と変わらない足取りで立ち去つていく利根を提督は複雑な表情で見送つた。

姉の想い

「大佐、武蔵さんに新しい大規模な改装が入るって本当ですか？」

ノックも無しに入ってくるなり青葉は興奮に肩を揺らし、まるで問い詰める様な勢いで提督に聞いてきた。

自分が改装を受けるわけではなないので何故彼女がここまで興奮しているのか、正直提督は解らなかつたが一応その問いには首肯した。

「そうだ。本部のみで用いられていた技術の一部が俺たちにも開放されるらしい」

「それは大ニュースですね！ 早速武蔵さんに教えてあげないと！」

「大丈夫だ。そこについては今朝方本人の方から確認があつたからな。皆耳が早い。俺から伝える前に何処で知つたのか」

「まあ艦娘独自のネットワークくらい現代ならありますからね。私もそれで知つたクチです」

「ラ〇ンのコミュニケーションみたいなものか？」

「そんな感じですよ」

提督も携帯端末を使って上司や部下と連絡を取る事はある。

しかしそれでも提督の場合は連絡くらいにしかあまり使わず、ゲームといった娯楽は勿論、コミュニケーションアプリもそんなに進んで使う事は無かった。

(俺も偶には暇潰しに弄るくらいは必要だな)

提督はポケットから取り出した自分のスマホを見て苦笑した。

「それで、何かお祝いとかはするんですか？」

「ん？ 武蔵の改装のか？」

「勿論ですよ」

提督の言葉に青葉は当然ですと言った態度で肯定する。

だが意外にも提督は、それに対してやや逡巡するような様子を見せた。

青葉は怪訝な顔をして聞いた。

「どうしたんです？」

「いや、祝おうとする考え自体は俺も悪くないと思う。だがな」

「？ はい」

「今回改装を受けれるのは武蔵だけだろ？ つまり先行して妹の方が受けるわけだ。そ

れを安易に祝うべきだと思うか？」

「ああ」

青葉はしまったという表情で口元に手を当てた。

(そうか。そうだよね。大和さんの気持ちも考えてあげないと)

「まああの大和が妹の強化を喜ぶより強く嫉妬するなんて考え難いが。それでもあいつの様子を窺うくらいはした方が良いと思うんだ」

「そうですね。それは賢明だと思います」

「という事で大和をちよつと呼んで来てくれないか。仲間から口頭で伝えてくれた方が個人的な要件だと理解してくれるだろう」

「承知致しました。もう今からでいいんですか?」

「ああ」

「畏まりました。では青葉ちよつと行つて参ります!」

そんな元気な返事をして青葉は大和を呼びに行った。

大和が提督の元を訪れたのはそれから程なくしてからであった。

「大佐、失礼致します。お呼びでしょうか?」

「ああ、うん」

「何でしょう」

「……率直に訊かせてくれ。武蔵の改装を祝つてやろうかと思うんだが……」

「え?」

大和はそこで不思議そうな顔をした。

それは何故その事で自分を呼んだのだろうと言う純粹な疑問からくる表情だった。

提督はそれを見て自分が抱いていた懸念が杞憂だと確信した。

「すまん、不要な気遣いだったような」

「あ……そう言う事ですか」

流石は大和といったところか。

彼女は提督のそんな様子を見ただけで彼の真意を何となく察した。

「妹を祝つてくださるんですもの。それは姉としても純粹に嬉しく思います」

「うん、ありがとう」

「え？ つ、ふふ。大佐、そのお言葉はちよつとおかしいですよ？ お礼を言うのは寧ろ

私の方じゃないですか」

「……そうだな。いや、まあそれでも、なんというか、な」

「……ありがとうございます」

大和はそんな提督に心から感謝と好意を込めた目で見つめてお礼の言葉を返した。

やはり彼は良い人だ。

軍人としてしつかり厳しい所もあるが、それでも私たちに對する人と同じ気遣いや態

度はずっと変わらない。

だから自分も他の仲間たちと同様彼を慕うようになったのだ。

(……好きになつて良かった)

「? どうした?」

何やら黙つて見つめられていた事をむず痒く感じた提督はそれが気になつて大和に聞いた。

大和はそれに対して微笑みを称えながら静かに提督に歩み寄つた。

「いえ、大した……いいえ、とても大事なことですけど、いいんです。でも——」

「ん?」

「よろしければちよつとお膝をお借りさせて頂けませんか?」
そう言うと大和はその場で跪いて椅子に座つていた提督の腕と顔に乗せた。
その顔はとても幸せそうな笑顔に満ちていた。

閑話

「大佐が酔っているですって？」

その日は泊地の総力を上げての花見の日だった。

提督が勤務している国には桜はなかったが、どうしてもやりたいとう一部の酒好きの艦娘による訴えが実ったのである。

花見は当初大盛り上がりで肝心の桜が無いにも関わらず、参加した娘全員の心の中には懐かしい故郷の桜が咲き誇っていた。

つまり雰囲気と気分が重視されていたのだ。

加賀が提督の異変を知ったのはそんな最中。

宴もたけなわ、皆の盛り上がり様も最高潮から心地良い余韻や酔いが冷めてきた頃。

提督が酒に酔って不安定な状態であるという報告を大和から受けて加賀は外面こそ冷静を保っていたが、その実、心中では意外な驚きの感情に満ちていた。

「それで、今大佐はどうしているのかしら？」

「何か……その、急に甘え癖が生まれたようで、今は神通さんの膝枕の感触に凄く酔いしれた顔を……」

「は？」

その一言で加賀の機嫌は一気に悪くなった。

「大佐、何をしているのです？」

「……放っておいてくれ。今俺は神通の太腿の感触を楽しんでいるんだ」

「た、大佐……」

言葉では拒否のニュアンスを醸し出していたが、明らかに神通の表情は幸福に満ちているように見えた。

加賀はそれを察した上で提督を彼女から引き剥がそうと試みる。

「大佐、貴方は酔っているわ。感触を楽しみたいなら私のを楽しみなさい」

「……加賀さん？」

てつきり加賀に提督を譲るものと思われたが、予想外にも神通は提督が自分から引き離されようとしている事を明らかに不満を感じているようだ。

いつもの謙虚で大人しい性格からは驚くほどハッキリと内心の不満を言葉で表し、提督を加賀に奪われまいとしている。

「神通、無理はしなくていいのよ」

「いえ、神通は大丈夫です」

「……………」

ビクン、と何処かで酔い潰れていた金剛姉妹の誰かが無意識に神通の言葉に反応した気がしたが加賀は気にしないことにした。

「神通、提督は酔っているわ。私が休ませるから彼を私に預けてくれない?」

「お言葉ですが加賀さん。大佐は今極めて心穏やかな様子です。提督に仕える艦娘としてはこの状態を維持することが何よりの忠誠心の証明だと考えるのですが」

「でしたら私が責任を持つて大佐の安らぎを維持することを誓います。だから大佐を

「……………」

「……………」

神通はその言葉に反して提督を加賀預けるどころかより渡すまいと彼を抱きしめる。

その目は加賀に挑戦しようとする意志がありありと見て取れた。

「……………」
「……分かりました。じゃあ取り敢えず部屋までお運びして。そこから先はお互い話し合つて妥当な落とし所を見つつけましょう。それでどうですか?」

「……………」
「……異論はありません。それで良いと思います」

普段は落ち着いて頼りになる二人だが、その時の姿は提督に恋慕する女だった。

この様子を傍から固唾を飲んで見守っていたそれぞれの親しい者はあわや修羅場に

なるのではと恐れていたのだが、どうやらそこまでに至ることも無く落ち着いたようだったので安堵を息を吐いていた。

「いやあ、神通も女になったねえ」

「いや、あれ割と危なかったよ？ 下手をしたら私達の生活にも影響がでるような勝負事になっていたかも……」

「というやつぱり……食糧難？」

「うんまあ、でも神通が自分に不利な勝負に乗るとも思えないしなあ」

「安心して二人共。その時は私が代理になるわ」

「なるほど！ ……と言いたいけど、神通真面目だしね。真剣勝負に代理を頼む事は多分ないんじゃないかな？」

「那珂もそう思う」

「むう……確かに」

「あはは、残念だったね」

という会話の一部始終が本人達は声を抑えて話しているつもりのようにだったが、二人はその内容をバツチリと耳聴く捉えていた。

「……」

「……」

「な、何かごめんなさい」

「……いえ、気にしないで。私も今のでちよつと頭が冷えたわ」

「と、取り敢えず大佐を運びましょうか。加賀さんは大佐の左腕を」

「いいの？」

「元々一人でお運びするつもりはありませんでした……というのは実は嘘ですけどね。私もさっきの会話で落ち着きました」

「ふ……ありがとう」

「じゃあ大佐を寝かした後もお互い平等に、お互いがなつと……得をする方法を話し合
いましょう」

「いいでしょう」

先程までピリピリしていた雰囲気はすっかりなりを潜め、加賀と神通は小さく笑い合
うと二人で提督を支えて彼を部屋に運び始めた。

そんな中で提督が途中から意識を回復し、同時に泥酔していた時の醜態を思い出して
羞恥心に悶えていた事は幸運にも二人に気付かれずに済んだのであった。

(……これは何処まで意識を失った振りができるかだな)

提督はこれから待ち受けているであろうある意味での苦行に気合を入れるのでった。

待っていた夕立

「大和、夕立の練度が99になったって？」

「はい。旗艦を務めた午前の演習の折に達したようです」

「そうか……思えばあいつは古参だから、本人は『やつとか』と思われたりしたかもな」

「ふふつ、そうですね。でしたらその想いに報いてあげるのが宜しいかと」

「……うん、まあ呼んでくれ、夕立を」

夕立は提督麾下の駆逐艦の中でも古参の存在である。

加えて彼女の戦闘力とこれまでの実績はエースと呼ぶに相応しいものであり、そんな彼女が何故ケツコンでできるレベルに達するまでここまで時間がかかったのかは不思議とも言えた。

それは提督が特別夕立を大事にしたいくてあまり戦闘に出さなかったとかそういうわけではない。

単純に最も在籍数の多い駆逐艦の均一的な育成で時間がかかった故というだけであった。

その目的の目処が大体立ったので、今度は対潜能力において優秀な娘のそれを伸ばす育成の段階に移ったところ、その対象に夕立もふくまれており、おかげでようやくこの機会が訪れたのだった。

「提督っ！ 夕立を呼んだっばい?!」

駆逐艦の中でも元気な子供という性格の向きが強い夕立だが、執務室に入る時はちゃんとノックをするくらいは礼儀はちゃんとしていた。

だがこの時ばかりは提督に『何か』を期待する気持ちが強い所為か興奮した様子で鼻息荒く勢いよく入ってきたのだった。

「夕立、ノック」

「あつ……ご、ごめんなさい……入り直すね？」

「いや、まあいいさ。さて、ところで夕立」

「したい!」

「……ん」

「夕立、大佐とケツコンしたいっばい!」

「ただ能力が向上した優秀な艦娘が欲しいかもしれないぞ?」

「それでも構わない! それに夕立知ってるもん!」

「うん?」

「大佐は私たちの気持ちを大事にして指輪を贈ってくれてる事っ。だから夕立は大佐から指輪を貰って、ついでに今よりもっと強くなれるのが凄く嬉しいの!」

「なるほど、そこまで心待ちにしていたのならこれ以上無駄に確認する必要はないな」
「!!」

提督が机から小さな箱を取り出すと、夕立の特徴的な跳ねた髪が犬用の尻尾が喜びを表すように一瞬ピコンと跳ねたように見えた気がした。

夕立はキラキラした瞳でその箱を見つめ、早く欲しいと無言で犬の『待て』をしているようだった。

「よく頑張ったな夕立。お前にこれを贈る」

「っ……………! ありがとう大佐! 夕立、夕立……………凄く嬉しいっばい!!」

いつもは天真爛漫としているが、実は密かに自分は古参であるという自覚があった。

それは決して後輩たちにそれを誇示する類のものではなかったが、やはりその自覚はあっただけに自分より後にやって来た艦娘が先に提督とケツコンしていく姿を目にした時は、その度に彼女は焦りと不安を覚えた。

(大佐は鼻肩とかっはしない人っていうのは解ってる。でも、でも……………やっぱり早く夕立もしたいよ……………)

そんな中でやつと巡つてきた機会だ。

それに対する夕立の嬉しきは果たして如何ばかりのものであったか。

彼女は指輪が入った箱をギュツと胸に抱きしめ、箱の重みからその存在を十分に堪能すると、いつもの子供っぽさは潜めて少女らしいしおらしい態度でそつと左手を提督に差し出してきた。

提督は夕立の意外な仕草に内心驚くも、解つたと言ふ言葉の代わりに小さく頷いて夕立から箱を受け取ると、そこから指輪を取り出してゆつくりと彼女の左手の薬指にはめていた。

「はあー……っ、ふふっ♪」

指輪がはまつた指を改めて感慨深げな表情で嬉しそうに見つめる夕立。

その微笑ましい姿に提督もつい頬が緩み、自分も笑顔で見つめているのを提督は感じた。

「夕立、これからも宜しく頼む」

「うん、任せて！ 夕立、きつと今まで以上に大佐の頼りになる艦娘になるよ！」

先程までの少女らしい雰囲気は何処へやら、今はすっかり子供のようピョンピョンと小さく跳ねて嬉しさを表現する夕立。

「ああ、頼りにしてるぞ。よし、要件はそれだけだからもう部屋に戻ってよし」

「はい。あ……」

提督の許可を得て部屋を出て行きかけた夕立は唐突に止まって振り返る。

彼女の姿を見送る前に机の上の書類に視線を戻しかけていた提督はそれに気付きどうしかしたかと尋ねると、夕立はまたさつき見たような少女らしい雰囲気ですし恥ずかしそうに提督に訊いた。

「ね、ね……大佐？」

「ん？」

「い、一応ケツコンしたんだから……夕立も嫌じゃないから、ソレっぽい事したいな……？」

「……今、か？」

「ううん、今やり難い事」

「……ソレは誰かに教えてもらった事か？」

「う、うん。加賀さんとか金剛さんに……」

心の何処かでキスクらいのソフトな愛情表現で済むことを期待していた提督は、夕立の口から出た二人の名前を聞いてそうもいかないだろう事を確信した。

決して夕立のことを疎んでいたというわけではなかったが、『そう』いう事を駆逐艦にする事がどうしても最初に抵抗を覚えてしまうのだ。

だが本人が心から望んでいるのなら仕方なし。

お互い同意済みとはちよつとズレがあるが、提督も今までに何人かはその上で駆逐艦との経験はあつたので下手を打つてしまいそうな不安はなかつた。

「解つた。夜、なるべく遅くならないようにするから、俺が向かいに来るまで待つていてくれ」

「えつ、大佐が迎えに来てくれるの?」

「うん、まあな」(呼び出すのは何か後ろめたさを感じるんだよな)

「分かつた! じゃあ夕立待つてる……あ……えつと、待つてます」

自分が提督の求めていることに対して普段と同じ調子で喜んでいる自分に恥じらいを感じたのか、夕立の言葉は最後は耳を済ませないと聞こえない小さな声でそう言つた。

構って

足柄の練度は現在提督の艦隊の中では第五位。

そして重巡の中ではトップである。

皆が提督の事を慕っているのは事実であるが、足柄はその中でも彼に対する思いが特に強いと自覚する艦娘の一人であった為、自然と提督のために奮戦した結果、今のような強さの域にまで来れたのだった。

彼女の同一個体はよく男に飢えている、婚期に焦りを覚えている残念美人といった風評を耳にするのだが、提督の基地における足柄については少なくともその風評に当てはまる性格ではなかった。

（全く失礼しちゃうわ。そりや原型は飢えた狼とか評されたけど、それだって無骨な軍艦に相応しい精悍さとも言えるじゃない。だってのにそれが今度は恋欲に飢えた狼だなんて……）

足柄はチラリ自分の横で机に向かって黙々と執務に励む提督を見る。

今日は足柄が秘書の日。

彼女は真面目に仕事をする提督の顔を改めて認識して自然と微笑む。

(ま、いいけど)

いろいろ言いたいことは確かにあるが、少なくとも自分がある今の環境については全く無い。

文句や不満などあろうはずがない。

何故ならかたわらの提督はそんな自分の想いに優しく応えてくれるし、艦娘としても満足の行く働きの場を常に与えてくれる。

足柄はそんな提督の下で尽くすことができている今の自分の人生にとっても満足していた。

「あつ、ねえ、ハイ」

「んっ」

提督を見た時に偶然同時に捉えた書類の誤字に気付いた足柄はその部分を指差す。

提督は指摘された部分に目を凝らして一瞬考え込んだ後「ああ」と指で小さく机を叩いた。

「この漢字線が一本足らなかつたな？」

「ふふっ、正解♪」

「ありがとう」

「まあこの程度本部だつて見落とすかもしれないし、仮に見つけたとしても態々再提出

の指示なんてしてこないでしょうけど」

「そう樂觀できたらいいんだけどな。だが軍で扱う正式な書類だから注意するに越したことはないさ」

「そうね」

「ふむ……」

提督は徐に自分の腕時計を確認した。

時刻はもう直ぐ23時を回ろうかとする頃。

今行っていた作業もあと数分で終わるところだったので仕事の進捗は悪くはなかった。

故に彼は足柄の方を向いて言った。

「足柄、もうお前は部屋に戻っていいぞ。添削もさつきなので大丈夫だろう」

「そう?」

「ああ、これももう直ぐに終わる。だから後は……」

「じゃ、待ってるわ」

「ん?」

「終わるまで待ってる」

「……」

「いいでしょ？」

部下を労つて早く勤務から開放しようとしたのだが、提督に任務の完了を告げられて自由に行動をする事を許された足柄は、執務室のソファに座つて笑顔でそう言う。

提督もそんな幸せそうな笑顔の彼女にそう言われたら「分かった」と答えるしかなかった。

「ありがとう♪」

かくして提督は喜色に満ちた足洗の声を耳で確認して再び書類視線を落とす。

そして……ほどなくしてその日の提督の任務もようやく終わりを迎えた。

「お疲れ様」

いつの間にか自分の後ろに回っていた足柄がそつともたれかかつて提督を抱きしめるようにして腕を伸ばしてきた。

「ねえこの後はどうする？　少しは私が甘えられる時間ある？」

提督は頬をほんのり紅潮させた足柄の声を耳元で感じながら、回された彼女の片手にそつと自分の手も重ねて言った。

「そうだな……。取り敢えず今日はお前も頑張ってくれたしそれに感謝する意味も込めて明日の出勤時間は多少遅くしてやろうか」

「ええっ?!」

どうやら彼女が欲しかった言葉とは大分違つたらしい。

目に見えて失望した声を上げた足柄はシヨックでつい力を緩めてしまい、そのタイミングで提督が立ち上がった為について彼を些細な拘束から逃してしまった。

「あつ……」

「さて、明日も早いから俺も軽く一杯だけやって寝るか。だからお前も……」

ギユツと自分の腕を抱く柔らかい感触がした。

提督が感触を感じた方を向くとそこには彼に甘えた子犬のように縋るちよつと涙目の足柄がいた。

「うう……私も一緒に飲みたいいい」

「酒か？　なら一本くらい譲つても……」

「だーかーらーっ」

提督の意地悪につい堪えきれなくなった童心が足柄はそれ以上言わせないとばかりに今度は彼の胸元に顔を埋めて子供がダダをこねるようにイヤイヤと頭を振った。

提督もそこまで来てようやく軽く吹き出すと、すまなかつたと言うように足柄の頭を撫でて言うのだった。

「はは、悪かつた。じゃあグラスを二人分揃えてくれるか？」

「……お酒だけ？」

尚も何かを期待しているのかまだ若干子供のように拗ねた上目遣いでそう尋ねる足柄。

その真意を察した提督は「そうだな」と呟くと彼女の頬に触れて答えた。

「そこから先はお互いの雰囲気次第だな」

「！ 任せて！ ゼーったいにそういう気分させてあげある！」

目に見えそうなくらい幸せオーラを発してグラスとツمامミの用意を始めた足柄の背中を提督は見て、その時彼女にピンと張った犬の耳と嬉しきで激しく振っている尻尾も見えた気がした。

作戦終了

「今回の作戦も無事完了した。皆ご苦勞だった、暫くゆつくり休んでくれ！」

『ワアアアアア♪』

深海棲艦に対する作戦も最近は人間側が優勢になつてきたのか攻勢の色が強くなつてきた気がする。

そんな事を提督は考えながら、彼は階下の艦娘たちに今回の作戦の完了を宣言した。未だに戦闘の興奮が冷めずにその余韻に震える者。

今回も無事に作戦が完了してホツと安心の息を吐く者。

皆反応は様々であつたが、その心には共通して喜びあり、彼女たちの表情からもそれは容易に見て取れた。

提督はそんな艦娘たちを眺めて満足そうに一度頷くと踵を返して一人静かに執務室へと戻つた。

「お疲れ様」

「ああ」

部屋で待機命令を受けていたのか部屋に入ってきた提督を叢雲が落ち着いた声で迎

えた。

その時の部屋は晴れた日差しで電気がなくても明るく暖かな雰囲気だったのだが、何か二人を取り巻く雰囲気はそれに反して冷めていた。

「さて……一番逼迫しているのは？」

「燃料。過去最低の備蓄量よ」

「……そうか。他は？」

「全て最大備蓄可能な量の半分以下。その中でも鋼材は燃料に次いで少ないけどそれでもまだマシと思えるくらい燃料がマズイわ」

「やはり友軍の搜索に費やしたのが原因か」

「それ以外ないわねえ」

「ふむ……」

作戦遂行中提督の艦隊は友軍の救難信号を受信した。

しかしその時に限って激しい敵の攻撃と悪天候が重なり、信号の発信源の特定は困難を極めた。

提督本人は艦娘たちに負担をかけない為にも非情な決断を下すつもりであったのだが、逆に彼女たちから強い搜索の嘆願を受け、結局提督が折れる形で作戦の遂行と並行して友軍の搜索を行うことになったのだった。

しかしてそれは功を奏し、作戦遂行中に合流した艦娘以外にも波間に浮かんでいた小さな影2つ（石垣とフレッチャー）を発見して救助に成功するという奇跡的な成果を挙げることに繋がった。

その上今回の作戦も最後まで全うできたとあつては正に非の打ち所がない結果に誰もが満足するところ……であつたのだが、結果として凄まじい物資の消費を招いてしまい、現在二人はこうして頭を悩ませることになってしまったのである。

「通常任務には支障はないと、判断するが？」

「肯定ではあるけど、それは明日から即資材の補充に極力努めるのが当然の条件ね」

「我が基地の稼働が始まって以来の危機だな」

「敵襲を受けているわけでもないのに最大の危機つてところが泣けるところねえ」

悩ましげに大袈裟な動作で頭を振る叢雲。

しかしその顔には提督への不満は一つも浮かんでおらず、寧ろ口元には小さな笑みが浮かんでいた。

「なんか楽しそうだな？」

「あ、ふふつ、ごめんなさい。なんか昔を思い出してね」

「さつき言った基地が稼働した頃か」

「ええ、あの時は何もかも手探りだったからいろいろと苦労したわよね」

「……そうだな」

提督は背もたれに深く背中を預け、過ぎた過去を思い出す。

あの時は基地近海の哨戒が主な任務で、まだその時にいた艦娘は叢雲と……。

「おお、何処にいるかと思えばこんな時にまで仕事かえ？」

提督が思い出に浸りかけたところでノックをせずに部屋に入ってきたのは最古参の

一人の初春だった。

普段だったら入室する時に必ずノックをする彼女がそうしなかったのは、その時は無

礼講だと理解していたからだ。

「ちよつとお、せつかく二人で良い雰囲気になろうとしていたのに水をささないでくれ

るかしらあ？」

唇を尖らせてそういう叢雲だったが、決して気分は害してなく、目は明らかに笑って

いた。

「それは悪いことをしたのお。されど妾とて其処に御わす殿方を好く身。此処はお互い

同じ気持ちを持つ者同士、仲良うするわけにはいかんかえ？」

「仕方ないわね。でも、仕事の話もするからちゃんと言葉に乗ってよね」

「ん、やはり備蓄の事かえ？」

「そういう事だ。早速で悪いが明日からお前にも力を貸して欲しい」

「何のことはありません。貴方が助けを求めるのなら、妾は当然それに……いえ、それ以上の成果を携えて応えてみせましょう」

「遠征隊の編成と指揮に関しては私たち二人に任せて頂戴。時間の配分は任せても良いわよね」

「当然だ」

「では、悩ましい問題に光明を差す手段の予定が組めたところで、いい加減妾達も祝杯の一つでも上げようぞ♪」

初春はそう言う waited 待ちましたとばかりに背中に手を回して隠していた一升瓶を机の上に置いた。

叢雲はそれを見て呆れかけるが既に提督が酒を注ぐためのグラスを持ってこようとしていたので、呆れるのを通り越してつい笑ってしまった。

「あはは、何よそれ。大佐ったら」

「まあせっかくだ。こういう時くらい、な？」

「そうそう♪」

「もう、仕方なわいわね。それじゃ……」

『乾杯』

酒が注がれた3つのグラスがカチリとぶつかる音と三人の祝杯を挙げる声が同時に

部屋に響いた。

転勤騒動②

「大佐の転勤？」

「うむ、そうじゃ！ 叢雲は知っておるじやろ？」

「まあね」

「どうにかする方法はないでしょうか？」

「どうにかとは……また漠然とした相談じゃな」

利根と筑摩は叢雲と初春という基地の最古参の中でも始まりの二人とされる筆頭格に提督の転勤について相談に来ていた。

二人とも提督とは長い付き合い合いなだけにその話は既に把握しており、利根達の話にも特に驚いた様子は見せなかつた。

「どうにかというと署名でも募つて嘆願書にでもするつもり？」

「それだと基地にいる者の分しかできぬからほぼ意味は無いと思うの」

「いえ、署名はありなんじゃないですか？ 艦娘の支えあつてこそその基地、艦娘の支持があつてこそその提督ではないですか？」

「うむ、例えば数に不足があると言っても大佐麾下の全員の揺るぎのない意志が示せれば

効果は望めるのではないか？」

「解らなくはないが、悪いが妾はそれだけで本部が動くとは正直思えぬな」

「私達だつて転勤されるのは嫌よ？ あれだけ付き合っているとね？ これが普通の会社とかならどうにかなつたかもしれないけど……」

「どちらにしても署名は用意する。そしてそれを持つて本部に上申しに行くのじゃー」

「艦娘^{わたし}たちだけで本部に赴くつての？」

「そうです。本部に來たのに提督の姿がなければ、本部の方々も状況を異様に思つて注意を向ける筈です」

「確かに注意は引けるかもしれないが、それだと大佐の監督能力としての評価に影響があるのではないか？」

議論は一昼夜続いた。

結果として有力な方法は導き出せず、取り敢えず艦娘の総意として署名だけは募ろうという結論に一先ず落ち着くのだつた。

「……という事があつてね」

「……そうか。悪いな、何だか間者のようなことをさせて」

「なに、気にするでない。必要と考えた故に報せたまでよ」

「混乱自体はそんなに大きくならないはずよ。転勤の話は敢えて私達から各所に伝え伝えてきたから」

「ふふつ、いきなりそんな話が出てはそれこそ皆混乱するじやろうから、の」
「確かにな」

夜、叢雲と初春は提督の下に彼の転勤の話が今現在基地にどれほど影響が出ているかについて報告に来ていた。

部屋はランプの灯りのみが使われ、優しい光が三人を照らし包み込んでいた。

「それで？」

「ん……」

叢雲の言葉に提督が彼女の方を向くと、そこには叢雲と一緒に自分を真っ直ぐ見つめる初春の顔もあった。

二人は黙って提督を見つめるのみであったが、それだけで彼には二人が何を問いたいのか用意に解った。

「できれば、と言うつもりだ」

「そう」

「うむ」

提督の言葉に二人は満足げに頷いた。

ここで「大丈夫だ」とか、「心配するな」と言う方が返って無責任で全員を傷つけることになるかと解っていたからだ。

だから二人は提督の自分の意思は示すという答に満足した。

それだけ自分たちの事を想って行動してくれるのなら十分に幸せだった。

「なんかごめんね？ 追い詰めるような状況になつていて」

「気にするな。その所為で確かに俺達は心苦しい思いをしているが、それでもこの状況自体が俺たちが歩んできた今までの結果によるものだと考えれば提督として誇れることだ」

「うん……」

「そう、じゃの……」

「俺は正直、これからお前たちの提督でありたい。残念ながらそれが叶わなかったとしてもお前たちならこれからも前に進んでいけると信じているし、もし万が一のことがあったとしたら……」

「したら？」

「なんじゃ？」

「必ず報せに来てくれ」

「……!!」

その一言は二人の瞳を潤ませ、提督の胸に飛び込ませるには十分なものだった。配属先が変われば提督の独力で以前の配属先の状況を知るのは難しい。

故に彼は万が一の事があれば、自分の名を使ってでも窮状を本部に訴えろ、そう暗に言っただのだ。

独断で秘密裏にこのような指示を出すのは当然思い規則違反である。

だが提督はをそれを理解した上で、何かあれば自分に責任が及んでも彼女たちの助けになりたいと願った。

五月雨の思わぬ幸運

「本部から作戦完了の通達が来ました。大佐、お疲れ様です」

「了解。お前もご苦労だったな。放送は？」

「はい、今マイクスイッチ入れました」

「ありがとう。んんっ、皆、既に直感している者もいるだろうが、その通りだ。本作戰は終了だ。皆、ご苦労だった」

提督の短い労いと作戦終了の通達の放送が終わると、彼がいる部屋まで段々大きくなってくる艦娘たちの歓声が聴こえてきた。

提督はその声に暫く耳を傾けると、通信機器の前に居た大淀の肩を解すように軽く、一度叩いた。

「二回目だがご苦労。お前ももう休んでいいぞ」

「いえ、まだ後処理の仕事が……」

「それは俺がこれから少し仮眠をとってすませるから大丈夫だ」

「そういうわけにはいきません。決して少ない量ではなかったはずですし」

「別に無理をしてやるとは言っていない。『ゆっくり』やるから大丈夫だ」

「……」

大淀は提督の言葉に込められた意味を頭の中で考えた。

作戦行動中は常に気を張って余裕があるとは言い難い状況なのだが、そうなっていた根本の原因がなくなれば多少の量の仕事でも腰を据えて望めるからそれほど苦ではないということなのだろう。

そう結論した大淀はそれでも提督の力になりたくて何か彼に提案できること事はないかと考えていたのだが……。

コンコンと扉を叩く音にその思考は中断させられた。

『大佐、香取です。新しく迎えました同盟国の艦娘が面会を希望しております』

「そうか、分かった。入れ」

提督は入室の許可を出すと香取達が入ってくる前に大淀に目配せをして小さな声で彼女に言った。

「そういうわけだ。必要なときは呼ぶからお前も早く休め」

「……了解です」

本当は仕事を手伝いたい以外にも提督と二人で居たいという密かな狙いがあったのだが、こう言われては仕方がない。

大淀は少し不満げに頬を膨らませながら提督に従った。

「アブルツツイにグレカーレにジェーナス、だな？ ようこそ我が基地へ歓迎する」

「ええよろしくね！ 私、ここに来る前は日本の艦娘ばかりだと思っていたけど、意外に海外の子もたくさんいてちよつと安心したわ！」

「そうですね。妹も居ましたしリットリオさん達までいたのには驚きました」

「あたしなんでもつとビックリよ。まさかいきなり姉と妹に挟まれるなんて思ってもみなかったわ」

「はは、此処も大分日本以外の国の艦が増えていたからな。おかげで君等を迎えやすい環境になっていたというわけだ」

「あなた良い提督^人そうね。いいわ、アドミラルつて呼んである！」

「ありがとう。だが、君等が良ければ俺のことは大佐と呼んでくれ。此処での共通の俺の呼び方、愛称みたいなものだ」

「准将の閣下を敢えて下の階級で呼ぶくらいですから余程こちらでは親しみが込められているのでしようね。了解しました。大佐」

「あたしもオーケーよ」

「ジェーナスも！ そういう事なら no problem よ！」

「……ふう、元気が良いやつらだったな」

挨拶も兼ねた面会を終え、彼女たちが退室したことによって部屋に一人となった提督は椅子に深く座り直して呟いた。

（慕ってくれるのは素直に嬉しい。円滑な関係が築けそうなものによりだ。だからこそ……）

提督は軽く首を曲げて小さな音を鳴らすとやる気に満ちた眼をして再び呟いた。

「あいつらと国の為に頑張れるというものだな」

それから数時間ほど経った時の事。

時刻は深夜の2時過ぎ。

確かに腰を据えて余裕を持って臨むことはできたが、それだけに相応の時間がかかったことで仕事からの開放感と疲労を解すために提督が腕を伸ばしていると、徐に目の前の扉がノックもなく小さく開こうとしているのに彼は気付いた。

「誰だ？」

「っ！」

扉の向こうに居た者は提督に声を掛けられた事に純粹に驚いているようで、かといって立場を弁えているのか無言で逃げ去るということもなかった。

「怒らないから入って来ていいぞ。誰だ？」

「すみません……」

「す（す）と縮こむように部屋に入ってきたのは五月雨だった。

「気にするな。時間が時間だからそんなに礼儀を注意するつもりもない。まあそれでも音もなく扉が開いたことには正直ちよつとヒヤリとしたがな」

「！、（（））ごめんなさい！ わ、わたしそんなつもりじゃ！ 決して大佐を驚かすつもりなんかじゃ！」

「だろうな。お前がそんな事したことは多分今までなかったからな。廊下を歩いていた扉の隙間の光に興味を引かれたんだらう？」

そこで駆逐艦とはいえトイレに行くところだったと言わないところが提督の紳士的な気遣いと言えた。

提督の予想は的中していたようで五月雨は彼の言葉にぶんぶんと何度も頷いて肯定した。

「（（））ももう少し密閉に関して考えてみるか。とはいえ、お前の夢心地を晴らしてしまつて悪かった。ちよつと俺も今仕事が終わつて寝ようと思つていたところなんだ」

「（（））、こんな遅い時間までお疲れ様です！」

ペコリペコリと申し訳無さそうに今度は何度も頭を下げる五月雨の可愛らしい仕草

に提督は精神的な癒やしを感じた。

彼はその事に密かに感謝しつつ頭をかいて立ち上がると、五月雨の前まで歩いてきた。

「……………」

提督は少々のことでは強く叱つたりしない人物であるとは解つていても、自分の上司が目の前まで歩いてきたら流石に緊張と若干の恐怖心で五月雨は身を竦ませた。

ぎゅつと目を瞑つて提督の次の行動に対して待機していた五月雨は、何か頭に心地の良い重さと暖かさを感じて閉じていた目を開けて上を見た。

「あ……………」

そこには自分の頭の上に置かれた提督の手があつた。

それをしてしている提督の眼は若干疲労の色が見えていたものの優しいことに変わりはなく、彼は何処か困つていような笑顔をして言った。

「大丈夫だ。明日……………まあ今日は特別に本部から全提督に休暇が出されているからな。その休みをゆつくり過ごす為にちよつと頑張つていて、それがちよつと終わったところだったというだけだ」

「そ、そうなんですか。良かったです」

「ああ。さて、五月雨。良かったら部屋まで送つてやろうか？」

「えっ」

予想外の提督の提案に五月雨は目を白黒させて焦る。

「そ、そんな悪いです。せつかくこれからお休みになろうとしていたところなのに」
「気にすることは無い。お前の部屋に行く途中に手洗い場があっただろう？ お前を送った後に丁度そこで顔を洗うのも良いなと思いついたんだ」

「あ、なるほど……。あ、はい。そ、そういうことでしたら大佐さえ宜しければ……」
「了解だ。じゃあ行こうか」

「あ」

五月雨は自分に差し出された掌を見て思わず提督を見た。

どうやら彼は部屋に戻るまで手まで握ってくれるらしい。

彼女は嬉しさと提督に対する申し訳ない気持ちで軽く1分ほど悩んだが、その末に手を握る方を選び、嬉しさと緩む笑顔が暫く続くことになるのだった。

「ん？」

「え？」

提督が五月雨を彼女の部屋まで送ろうとした方向とは逆の方向に五月雨が行こうとした事で二人の疑問の声が重なった。

しかし提督の方は直ぐにその疑問に対して解を導き出したようで、部屋で見せたあの困った笑顔で彼女に言った。

「あー……用が済むまで表で待たれるのは流石に恥ずかしいよな？」

「……っっ」

自分がどうして夜中に廊下を歩いていたかの、その本来の目的を思い出して顔を真っ赤にした五月雨は、それでも目的の場所から自分の部屋までエスコートを結局提督にお願いすることを選んだのだった。

ガングートとクリスマス

「メリークリスマス！」

『メリークリスマス！』

提督の合図に応じて大勢の嬉しそうな声が空間に響く。

提督の基地は今、その年最後のおお仕事と言えるある重大な作戦遂行の任務を無事終える事ができ、艦娘たちのへの労いの意も込めてちよつとしたパーティーが開かれていた。

「メリークリスマスねテートクウ！」

提督が律儀に艦娘一人ひとりに声をかけて挨拶していると聞き慣れた元気な声が後ろからした。

声の主は彼が振り返る前から判っていたが、実際に振り返る前に後ろから抱きつかれるのは予想外だった。

「金剛、できあがるのが早くないか？」

「ノンノン！ ワタシはまだぜんぜん！ 酔ってなんかないワヨ〜？」

すわりかけた目でそう言う金剛の姿には全く説得力がなかったが、せつかくの良い気

分になっているというのにそこに水を差すような無粋な事を言う気も提督にはなかった。

ただ彼は苦笑して片手に持っていた杯を金剛に向けて掲げ、彼女もそれを見て嬉しそうに既に空になっていたグラスを掲げてカチンと乾杯をした。

「気持ちは解るが次の日に響かないように注意くらいはしろよ」

「オーウ、テートク何処行くですか？ 一緒に飲みましょ〜ヨ〜」

腕に縋り付いて絡む……もとい甘えてくる金剛の頭を撫でてあやししながら提督は、まだ一通り挨拶ができていないから、終わったら必ず顔を出すからと約束してその場を先ず離れる。

後ろから「ゼツタイだからネ〜」という声を聴きつつ、提督はその事をすっかり頭の中の隅に留めて、挨拶回りを再開するのだった。

「慰労の言葉掛けも一段落したか？」

金剛の所へ行く前に自分自身への褒美として一服だけ煙草を吸う為に外へ出ようとしていたところにガングートが提督に話しかけてきた。

提督はポケットから出しかけた煙草をしまいガングートの方を見て何か言おうとしたが、その前に彼女に肩へ腕を掛けられて「取り敢えず付き合え」とそのまま外へ連れ

出された。

「気にすることはないさ」

「ん？」

「Табакだろ？ 私も多嗜むのでな」

「た？」

「たばあつくだ」

「煙草？」

「そうだ。面白いな、文字は全く違うのに言葉の音は似ている」

「確かに、そうだな。たあばつくか」

「お、上手いな」

「通じたか？」

「うん、なかなか良い発音だ」

「はは、そうか」

提督は笑いながらポケットから煙草の箱を出してそこから一本抜いた。

そしてそれを口に咥えて火を付けようとしたのだが……。

「おっと待った」

火が煙草に触れる前にガングートの手がその間に割って入って提督の喫煙を止めた。

「ん？」

「火を付けるならちよつとお願いしたいことがある」

「？　なんだ？」

「ん……ほら」

ガングートは懐から黒色に吸口は金の紙が巻かれた高級そうな少し細い煙草を取り出すと、それを口に咥えて火を付ける。

何故自分が先に火を付けることに拘つたのか、不思議そうに提督がその様子を見てみると、彼女が煙草を咥えたままこちらを向く。

「ほは」

「？」

「ほ・はっ！」

「??？」

咥えた煙草をピコピコと上下に揺らして何かを要求するガングート。

だが提督はその意図が全く掴めず申し訳無さそうな顔をして眉を寄せるだけだった。

「……っ、もう……おい大佐！　煙草を咥えろ！」

「ん？　あ、ああ」

わけが分からず火が付いていない煙草を咥える提督。

ガングートはそれを認めると待つてましたとばかりにキスをするように彼の顔の間近まで自分の顔を近づけた。

そこまでできて漸く提督も理解した。

(ああ、そういう事か)

「……ふう、全く。あまり恥をかかせないでくれよ」

「ふー……すまん」

お互いに紫煙を吐きながら言葉交わす二人。

ガングートから煙草の火を『分けて』もらつた提督は少し目深に帽子を被つて、恥じらう顔を見せまいとしていた彼女を見て言った。

「そういえば」

「ん？」

「お前が俺のことを貴様と呼ばないようになって結構経つな、とな」

「え？ あ、ああ……」

ガングートはかつての提督に対する自分の態度を思い出してそれを誤魔化すように引きつった笑みを浮かべる。

提督の麾下に加わつたばかりの彼女は今と比べると少々態度に棘がある感じで、特にそれは彼のことを「貴様」呼びしていた事に現れていた。

非番の時ならまだしも流石に公の場でそう呼ばれることには立場上看過できなかった提督は、それから幾度か注意はしていた。

しかしその度に「なら貴様の有能さを私に示してみせるのだな」などと、まるで簡単には懐柔されないと言わんばかりに妙な警戒心を見せ、提督を困惑させたのだった。

「あの時は、その……すまなかつたな」

「はは、なかなか苦労させられた」

「わ、分つてる、それは……。だからこうして謝罪をだな」

「いや、こちらですまない。ついからかつてしまった。これまでお前の奮闘に救われた事もあつたからな。これでお互い——」

提督が最後まで言う前にガングートが彼の胸に軽く拳を当てて言葉を止めた。

その振るわれた拳は左手で、更にその手の薬指にはケツコンの証である指輪が光っていた。

「分つている。それ以上は、必要ない」

「……分つた」

「ところで、何故私がこうもあからさまにここで指輪を見せたのか、大佐は解っているか？」

「……記憶に自信がないから半分勘なのが申し訳ないが、確かお前とケツコンしたのが

クリスマスだったから……」

「そうだ。記念日というやつだな。まあ、なにしろ部下が多いからな一人ひとり覚えるのも難しいのは解っているつもりだ。だからうん、例え半分勘だったとしても当ててくれたのは正直嬉しく思っている」

「すまない」

「H e T」

「……ありがとう」（にえ……：確か『いいえ』だったか）

「ああ、それでいい」

二人は暫く無言で煙草を吸いながら海を眺めた。

時折灰が落ちそうになった時は提督の方から私物の携帯灰皿を彼女に無言で貸すなどのやり取りのみが穏やかな雰囲気の中行われた。

「さて、あまり大佐を独占すると他の奴に恨みを買いかねないな。名残惜しいがもう戻るとするか」

「ああ、ちよつと待ってくれ」

「ん？ もしかしてプレゼントか？ 私にくれるという事は全員分用意したのだろう。なんとも大変な……」

提督に呼び止められて渡されたのは確かにガングートが予想した通りプレゼントら

しき包装物だった。

ただ少し彼女の予想と違ったのはそのプレゼントが2つあった事だった。

一つはいかにもクリスマスらしい柄とりリボンが使われた物。

そしてもう一つはいかにも提督らしい白い紙と赤いリボンだけが使われたシンプルな物だった。

「おいおい、まさか……」

声は平常心を維持しているつもりだったが、嬉しさと潤む目は堪えがたかった。

それを見られるのが恥ずかしかった彼女はいつものように帽子を目深にかぶり直し、それでも心配だったのか今回はツバを指で弾きながら念入りに目元を隠しながら言った。

「これ、そうなのか？ 私が想像した通りの物なのか？」

「これでも記録はしっかり付けているんでね。渡すタイミングも考えていたから、ちょうど良かった。だが、中身はあまり期待されると——」

ガングートがまた提督が言い終わる前に彼の言葉を止めた。

今度は拳ではなく指が提督の口を塞ぐのに使われた。

「Нет проблем」

「……問題なし？」

「ダー」

一番聞き慣れたロシア語だった。

そう提督が認識するのと同時にガングートが彼の頬を手で覆ってキスをしてきたのはほぼ同時だった。

お互いを包む僅かに残った煙草の香りと直接口から感じる煙草の味。

少しヤニ臭い恋愛の風景がそこにはあった。

正直な気持ち

「ふう……」

「煙草ですか？　って思ったら吸っていませんね」

「ん？　ああ、最近は何故か特に吸いたい気分にもならなくてな」

「それは良いことです。榛名も嬉しいです」

「ん……」

「隣、宜しいですか？」

「何処でも」

「ありがとうございます」

「……」

「……」

二人してやる事がなかったので石の階段に座っているだけだったが、それだけでも目の前に広がる海の風景が二人の気分を癒やした。

「……なんか」

「はい？」

「いや、こうしてのんびりするのが久しぶりな気がするな」

「そうですね。お休み自体はちゃんと貰っている筈ですが、こうして落ち着いてみると何かそういう気分になりそうですね」

「ふつ、やる事がなくて心に余裕があると人はこういう気分になり易いのかもな」

「ふふ、そうですね」

「……………」

「……………」

再び耳に心地良い漣の音が二人を優しく包む。

雰囲気の流れされて何となく喋り難い空間となっていたが、別にそれさえ気にしなれば居心地はとても良かった。

そんな時ではあったのだが、榛名は丁度思い出したとある事を確かめたくて提督に話しかけた。

「大佐……………」

「うん？」

「不躰なことをお訊きして申し訳なく思うのですが……………」

「いい、なんだ？」

「転勤、されるのですか……………」

「……一応辞令は来ているが、俺はできれば現在の配置のままを願ひ出してみるつもりだ」
「えっ、それは本当ですか？」

「今回は俺個人の意思を示すくらいはしないとどうにも承服しかねくてな。軍人にはあるまじき身勝手だが」

「そんな……！　そうして頂けるだけでも榛名は嬉しいです！」

「ありがとう」

「それもこちらの台詞です」

「……」

「……」

再び気不味い沈黙が間が訪れたのだが、今度もその雰囲気破つたのは榛名だった。

「……差し支えなければ」

「ん？」

「差し支えなければ、そうして大佐が残りたいたいと思われたのかお教え頂けますか？」

「……自分にもお前たちにも解り易く言ってしまうば、俺が去つた後の此処がただただ気にかかったからだ」

「……なるほどですね」

それは提督の偽りのない答だったのだが、それを聞いた榛名は何処となくそれ以外に

も他の言葉を求めてそんな瞳で提督を見る。

提督も彼女たちは長い付き合いである。

彼はその時彼女にどういった事を言えば良いのかくらいには気を利かせられるようになっていた。

「勿論、お前たちへの好意もある」

「むう……そこは、今だけでも『たち』は外して欲しかったです」

「え？ つ、ははっ。すまん」

「ふふふ、いいえ。でも惜しかったですね」

「次はぬからないようにしよう」

「期待してますね」

それから更に小一時間ほど二人は取り留めのない会話をした。

そして提督がそろそろお暇しようかと立ち上がり、榛名に手を貸そうとした時だった。

「大佐」と俯き目を伏せながら遠慮がちに発せられた榛名のか細い声を提督は聞き逃さなかつた。

「なんだ？」

「できれば……」

「ああ」

「もしできれば、いよいよ転勤せざるを得なくなった時は……」

「……」

「榛名も貴方に着いて行きたいと思えます」

それは無理だと、叶わない事とは二人は解っていた。

それでも言葉に出さずにはいられなかつた榛名の気持ちを理解した提督は、ただただ鼻をすすつてぐずる彼女の柔な肩を黙つて抱きしめるのだった。